スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～

北洋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スパロボ学院　～　ＯＧだよ、全員集合！　～

【Ｎコード】
Ｎ５２６１Ｏ

【作者名】
北洋

【あらすじ】
ここは高校がなぜか密集する地域『エリア』。
「ＯＧ高等学院」「影鏡高校」「スクール」「ゼ・バルマリィ学院」……ｅｔｃ．このお話は、そこに通う学生たちが巻き起こす、愛あり、涙あり、笑いありの学園コメディーである！
コメディー編は各スパロボのキャラの短編！　シリアス編はＡＴＸチームのキョウスケ・ナンブが主人公の長編です！　現在第３部「俺たちの未来」を一時完結。９／３０メディー編更新しました。

鋼鉄の駄狼　～　分の悪い賭けは嫌いじゃない　～（前書き）

短編です。短い、ＳＳです。
注：この作品はスパロボを題材にした２次小説、学園コメディーものです。
　キャラが激しく崩壊している危険があります。
　キャラのイメージを崩したくない方は閲覧しない方がよいかもしれません。

鋼鉄の駄狼　～　分の悪い賭けは嫌いじゃない　～

俺の名前はキョウスケ・ナンブ。
ＯＧ高等学院（オリジナルジェネレーション）――通称、ジェネ高とよばれる高校に通っている３年だ。
俺の通うジェネ高の周りには多くの高校が軒を連ねている。
「影鏡高校（えいきょう）」「スクール」「ゼ・バルマリィ学院」……名前を上げたらきりがない。
なぜか高校が密集するこの地域のことを、俺たちは『エリア』と呼んでいた。
その『エリア』の中でもジェネ高は、最大の生徒数を誇り、エスカレーター式で大学まで上がれるというマンモス校だ。
しかも理事長のダイテツ・ミナセ氏の

『若者よ、若いうちに多くを学び、体を鍛えておくのだ！！』

という粋な計らいで、授業料はなんとタダ。
俺のような一人暮らしの学生にはありがたいこと、この上ない。

「おらッ、フォーカードだぜ！」

俺の目の前で、屋上の床に手札を叩きつけながらタスク・シングウジが叫んでいた。
安物のトランプカードを確認する。
Ｋが４枚そこに確かに並んでいた（ちなみに残り１枚はＡ）。
俺とタスクと一緒に円陣を組んで、カードをしていたアラド・バランガが嘆いていた。

「げっ、マジかよ。俺は２ペアなのに……タスク、お前なんかズル

してねえか？」
「そんなことしねえよー。はは、ラッキーラッキー、今日は超ラッキーだぜ」

タスクが勝利を確信して笑う。
それもそうだろう、今の奴の手札に勝つにはストレートフラッシュかロイヤルストレートフラッシュしかない。
ちなみに、俺の手札はというと、

「ブタだ」
「キョウスケさん、またっすか？　今日はついてないですね」

なんとでも言うがいい。
ブタ……要するにノーペア、役に絡む手札が入らなかったことを意味する。
これで5回連続だ。
そろそろ勝ちを拾わなければ俺の身が危ない。

「フォーカードだから3回分な」

タスクが手元の紙切れに、鉛筆で正の字で数を記入する。
内訳はタスクが３０、アラドが１５、俺が5だった。
今更ながら、俺たちが今なにをしているのか説明しておくことにしよう。
俺たちは授業を抜け出して、屋上にて3人でポーカーをしている。
無論、賭けポーカーだ。
賭け金は昼食1回分。
上がりでポイントが1増え、その上がりの手によってはポイントに色が付いてくる。
フラッシュ・フルハウスが2ポイント、フォーカードで3ポイン

トと言った風にだ。
当然、ジョーカー＝ワイルドカードはあり。
切り札がカードの中に仕込まれていないなんて興醒めも良いところだからな。
……まぁしかし、俺は今負けている。
ポイントは相殺されるので、このままだとタスクに２５回分の昼食、アラドには１０回分の昼食を奢らなければいけない羽目になる。
ちなみにアラドは「スクール」の生徒で、賭けポーカーが開催されると決まると「スクール」を抜け出してジェネ高にやってくる。
ただ飯に惹かれてやってくる、という訳だ。
しかし他校のアラドに昼食を振る舞う機会は少ないので、金額に換算されるのが俺たちの中のルールだった。
１食＝５００円。
５００円×１０食分＝５０００円……一人暮らしの学生には大金である。

「そろそろ昼休みだなぁ、キョウスケさん」
「ひひひ、御馳になりやす！」

タスクとアラドの目が、時代劇ドラマの悪代官と越後屋のようにいやらしいものになっていた。
ふん、いい度胸だ。
ギャンブルというのは、崖っぷち……踏み外したら即絶命な状況を、たったの一撃でひっくり返すからこそ面白いのだ。
俺は右手の腕時計を見た。
時間は１２時を回っている、時間的に勝負できるのはあと１，２回。
２５食分の差をひっくり返すには、禁断の‘あの手’を使わねばなるまい。

「2人に話がある」
「なんすか？」

勝ち誇ったタスクが応えた。
見てろ、その顔を歪ませてやる。

「賭けレートを3倍にしてもらいたい」
「「なんだって！？」」

2人の顔は一瞬驚きに染まるが、すぐにキョウスケを嘲笑うような視線を向けた。

「キョウスケさん、本気で言ってるんスか？　あなたの今日のツキは最低ですよ、俺たちに喰い物にされるだけですぜ」
「さらに御馳になります、キョウスケさん」

2人とも、好き放題言ってくれる。
確かに今日の俺のツキは最悪だ。
配られる手札は全てブタ、完成する役は1ペアや2ペアが関の山だった。
上がりは全て普通の役だったため、俺の今日のポイントはたったの5ポイント。
はっきり言おう。
俺の今日の運勢は最悪だ。
しかし俺の中で静かに、熱く燃えるモノがあった。
頭が、体が、心が熱を持つ。
それは俺に言っている、行け！　行くんだ、ナンブ・キョウスケ！

「分の悪い賭けは嫌いじゃない」

そう、俺はいつも逆境をものにしてきた。
一発逆転、それが俺のギャンブルだ！

「どうなっても知らないっすよ」

親役を務めるタスクはそう言うと、散らばったカードを集めてシャッフルし始める。
公正を規して念入りに数回シャッフルを繰り返し、シャッフルしたタスクではなく俺がカードの配布を行う。
俺はカードの中身を見ていない。
タスクがなにか仕込んでいても、配るのが俺だから不正はできない。
正真正銘の１発勝負、勝敗は全て自分たちの運が決するのだ。

「これがラストバトルだ」

札を配り終えた俺が言い放ち、残ったカードを伏せて３人の中央に置いた。
タスク、アラドも配られた手札を確認する。
ポーカーフェイス ――― 顔色一つ変えずに、彼らは不要なカードを切り捨て、山から取ったカードで役作りを始めた。
ワンテンポ遅れ、俺は祈りを込めながらカードの表を確認した。

――― 僥倖ッ！！

俺は声に出しそうになったのを必死で堪え、平静を保っていた。
どうやら、ギャンブルの神は俺に微笑んでくれたようだ。
俺に見えている手札の種類を紹介しよう。
ハートの１０、ハートのＪ、ハートのＱ、ハートのＫ……そして、ハートのＡ。

つまりこういうことだ。
ロイヤルストレートフラッシュ！！
出現確立１０万分の１越え、必勝の役だ！！
跪けバカどもめ、これで俺の勝ちは不動のものとなった。
この手に勝てる役などほぼ存在しない。
そして、俺たちの賭けポーカーにおけるこの役のポイントは２０ポイントだ。
さらに、賭けレートは３倍……２０ポイント×３＝６０ポイント、タスクの２５ポイントをひっくり返してお釣りがくる。
これだから、ギャンブルは止められない。
やはり俺は、分の悪い賭けには滅法強いな。
俺はこみ上げてくる笑いを必死に抑えつけながら、タスクたちに言った。

「さあ、ショーダウンといこうか？」

俺の確信を気配で感じ取ったのか２人の表情が変わる。
苦虫を噛み潰したような表情をして、アラドは手札を床に放り出した。

「畜生、これじゃあ、ただ飯は無理だぜ」
「８のスリーカードか……相手がブタなら勝機は十分だったな」
「ちっ……キョウスケさん、あんたはどうなんだよ？」

アラドが手札の開示を求めてくる。
いいだろう、そのドングリまなこにしっかりと焼きつけるといい。

「これが俺の手だ」

ロイヤルストレートフラッシュ。

なんだこりゃあ、綺麗に並べられたカードにアラドは声を上げ、がっくりと項垂れる。
ざわざわざわ、と観衆がいれば間違いなくザワメキが立つだろう俺の役に、馬鹿が1人撃沈した。
さて、次は、

「タスク、お前の番だ」
「……」

どうやらあまりの出来ごとに声を失っている様だった。
しばらくしてタスクはため息をついた後、自分の手札を見て口端を釣り上げて言った。

「やるなあキョウスケさん、最後の最後にこんな手を引いてくるとは……正直、驚きだぜ」
「ふっ、その言い草、どうやら俺の勝ちのようだな」

勝ちを確信した俺はポイント表を手に取ろうとした。
だが、タスクそれを横からかすめ取る。

「言ったっしょ、今日の俺は超ラッキーだって」
「なに……？」
「切り札は我にあり！」

タスクが手札を屋上に叩きつけた。
瞬間、どばーん、と衝撃波が聞こえてきそうな程の衝撃が俺の中を駆け抜ける。
ハートの7。
ダイヤの7。
クラブの7。

スペードの7。
そして、切り札 ――ワイルドカードのジョーカー！
ファイブカード、それが俺たちの賭けポーカーでは最強の役の名前だった。
ポイントは３０……２５＋９０＝１１５……１ポイント５００円と考えれば、５７５００円……

「巨星、堕つ！」
「御馳になりやす！」

俺の中からなーにかが抜けるのを、俺は確かに感じていた ――

―― 昼休み、俺は自分のクラス3年A組にふら付きながら辿りつき、

「エクセレン」

救いの女神に救いの手を借りようと、自分でも気づかぬうちに名前を呼んでいた。
金髪の美女、エクセレン・ブロウニング……俺の、彼女だ。

「金を、貸してくれ……」
「あらー、キョウスケったらどったの？　また賭け事でもして負けちゃったのかしらん？」

自分の机でお弁当を頬張るエクセレンに、俺は片手で顔を隠しながら小さく、うん、と答えた。

「エクセ姉様、こんな馬鹿旦那のためにお金を出す必要は、ないと私は思うのでござりまする」
「まーまーラミアちゃん、こんなギャンブル依存症でも、私の彼氏なんだから……お金ぐらい貸してあげるのは当然のことよ」
「そうなのでありんすか？」
「そうよー、相変わらず変な敬語ねぇ」

ケラケラ笑いながら、エクセレンは一緒に食事していたラミアに諭していた。
というか、「影鏡高校（えいきょう）」のお前がここでなぜ飯を食っている？
いつも見かけるのだが、影高の方は大丈夫なのだろうか……などと、突っ込む気力も今はもうない。
エクセレンに金額を伝えると、彼女はポンっと即金で払ってくれ、こう言った。

「これで借金総額３４５５００円ね★　ちゃんと、体で返してねん♪」
「……はい」

俺が金を返せる日はくるのだろうか？
きっと一生、彼女の尻には敷かれたままなのだろう。
それはそれで、いいのかもしれないが……もしかしたら、俺はＭ気質なのかもしれないな。

そう、分の悪い賭けは嫌いじゃない。
俺はいつも追い込まれている。
次の勝負こそ、必ず、必ず勝ってみせる……！

ここはＯＧ（オリジナルジェネレーション）高等学院。
『エリア』にある地域最大のマンモス高校だ。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない。

鋼鉄の駄狼　～　分の悪い賭けは嫌いじゃない　～（後書き）

≪次・回・予・告≫

エクセレン「さぁキョウスケ、約束通り体で働いて返してもらうわよ」

キョウスケ「……仕方あるまい……！」

エクセレン「次回予告を、あつーく言ってみよぉー！」

キョウスケ

「俺の名前はキョウスケ・ナンブ、ジェネ高の3年だ。

突然だが、俺の愛機（バイク）のアルトアイゼンが何者かによって盗まれてしまった！

犯人は分かっている、影高の蒼い戦鬼『アクセル・アルマー』だ！

敵に取り囲まれる俺、そんな俺を奴は見下ろしてこう言った『ベーちゃん』と！

次回『ガッカリベーちゃんとうっかりアー君』、どんな相手だろうと、打ち貫くのみ！！」

エクセレン「この次回予告はフィクションです。実在の人物・団体・企業とはなんの関係もございません。予告と次回の話が違ってても怒らないでねん♪」

大感謝！

ネタを提供してくれた「コンペイトウ」さん、ありがとうございました！

ネタは随時募集中！

スパロボ限定で短編ですが、できる限り実現していこうかと思っています！

鋼鉄の駄狼　～ガッカリベーちゃんとうっかりアー君～（前書き）

＜注意事項＞
絶賛キャラ崩壊中です！
キョウスケとアクセルのイメージを崩したくという方は閲覧しない方がいいかもしれません。
それでも良いという方はどうぞ！

鋼鉄の駄狼　～ガッカリベーちゃんとうっかりアー君～

俺の名前はキョウスケ・ナンブ。
なぜか高校が密集する地域『エリア』１のマンモス校「ＯＧ（オリジナルジェネレーション）高等学院」、通称ジェネ高の３年をしている、ごく普通の１人暮らしの１生徒だ。
そんな俺にも実は趣味がある。
ギャンブル……ではない。賭け事を趣味だとは公言はしたくない。断じて違うと言わせてもらおう。
では、俺の趣味がなんなのかと言うと……

「キョウスケさん、今日もかなりキテますね！」

夜の峠にて、俺の隣をバイクで追走する後輩ブルックリン・ラックフィールドが、ヘルメットに装着されたマイク越しに叫んでいた。
そう、俺のひそかな趣味、それはバイクだ。
夜の峠のヘアピンカーブを直線で限界まで加速し、ガードレールに接触寸前に車体を傾けてコーナリングする。
コーナーを抜けてまた加速、そしてヘアピン。
背筋を、ぞくり、と冷たいものが奔るがそれがまた良い。コーナーを曲がりきったときの快感は、崖っぷちのギャンブルに勝ったときの快感に似ているし。
今日も赤い愛機アルトアイゼン号は絶好調である。

「コーナーなら私も負けないわよん！」

コーナーで減速する俺の横を、白いバイク　――　ヴァイスリッター号に跨ったエクセレンが走り抜けていく。
コーナーリングはエクセレンの十八（おはこ）番だ。

「だが、直線なら負けん！」
「うふふー、捕まえてごらんなさーい、おほほほ」
「待ってくださいよ、２人共ー！」

直線で加速し並ぶ俺とエクセレンの後ろを、ブリットが黒いバイク――ヒュッケバイン号に乗って追いかける。
そう、バイクは俺の密かな趣味だ。
風を切って駆け抜ける快感とコーナーギリギリの限界感が堪らない。
俺たち「ベーオウルブズ」は峠をシマにしている走り屋集団だ。
人数はたったの３人だがな。

●

俺の名前はアクセル・アルマー。
なぜか高校の密集する地域『エリア』で恐怖の代名詞になっている悪の巣窟、影鏡（えいきょう）高校に通う極悪な３年生だ。
自分で言うのもアレだが、俺は相当の悪だ。
影高を仕切る番長「ヴィンデル・マウザー」の右腕をしており、暴走族グループ「シャドウミラー」では特攻隊長をしている。付近の奥様方を震え上がらせている程の悪だ。
喧嘩にだって自信はある。
昔から「蒼髭流格闘術（ソウシリュウ）」を習っており、腕前は免許皆伝。
誰も腕っぷしでは勝てないんだな、これが。

「……」

しかしこんな俺だが一度も勝ったことない相手がいる。

ジェネ高の三年生キョウスケ・ナンブ、走り屋集団「ベーオウルブズ」のリーダーで異名は鋼鉄の孤狼（ベーオウルフ）だ。

奴の走りは恐ろしい。

壁に激突する寸前まで加速を続ける様に、俺と俺の愛機「ソウルゲイン」は白旗を上げっぱなしだ。

無論、喧嘩においても勝ったことは一度もない。

しかしそろそろ白星をあげておかないと不味いんだな、これが。

「ん……」

ポケットに捩じりこんでいた携帯が鳴っていた、着信音は「ＤＡＲＫ　ＫＮＩＧＨＴ」、渋いだろう？

「メール……エーちゃんか」

メル友のエーちゃんから、ベーオウルフの誘い出し方がメールで送られてきた。

えー、なになに、奴を誘き出すには奴の大切なモノをさらってあげるとよい。

ふむふむなるほど、いつも的確なアドバイスで非常に助かるぜ、エーちゃん。

「待ってろよ、べーちゃん」

俺は悪だから誘拐や窃盗など、なんとも思わないぜ。

待ってろよベーオウルフ、今度こそ貴様に引導を渡してやるんだな、これが。

スパロボ学院　OGだよ全員集合！
その2　鋼鉄の駄狼　～ガッカリベーちゃんとうっかりアー君～

俺の名前はキョウスケ・ナンブ、朝のトーストとコーヒーを誰よりも愛する男だ。
コーヒーはやはりブラックに限る。ごくり、うむ旨い。
朝食を取り血糖が上がった俺は、覚醒し始めた頭で目前の問題に取り組むことにした。

「またか……」

1枚の手紙を手に俺は深いため息をついた。
朝起きて新聞を取りに行くと、入り口のドアに貼りつけられていたモノだ。
昨日は夜遅くまで走っていたので非常に眠い。
それに帰って来たときにこんな手紙は張られていなかった。
つまり下手人は、俺が帰って来て寝ている間にこの紙を張り付けたことになる。
下手くそな字で文句が書かれていた。

「なになに、『お前の大切なモノは預かった。返してほしくば○○工場跡地に来い。もちろん一人でだ』だって」

気が重くなる文面だ、正直、ウンザリする。
まあ、いつものことだ。
差出人の名前など見るまでもあるまい。

「アクセル・アルマー、また貴様か」

念のために名前を確認しておいた。
ああ、予想通りだ。影高の「蒼い戦鬼」、アクセル・アルマー。
悪名ばかり先行する、なんて言おうか、一応俺の幼馴染だ。
男の幼馴染など欲しくもなかったがな。
俺は携帯を操作してメモリーを呼び出し、電話をかける。

『はいはーい、アクセルでーす。今頃お目覚めかい、べーちゃん』
「……貴様、その呼び方は止めろと言ってるだろう。今度はなんだ？」

まったく馴れ馴れしい。
以前聞いたときには、俺の異名が鋼鉄の孤狼（ベーオウルフ）だからべーちゃん、だと奴は答えていたな。
けしからん、まったくけしからん。俺の名前はキョウスケ・ナンブだ。

「下らん用だったら切るぞ」
『まーまー、待てって、せっかちだなぁべーちゃんは』

電話の向こうのアクセルの陽気な声が一転して重くなる。
なんというか、こう悪そうな感じに。

『貴様の大切なものは預かった。返して欲しくば○○工場まで　――』

――ピッ！

付き合いきれん。

俺は迷うことなく携帯を切った。

そして新聞を広げる。さて、今日はどの馬にしようか？

そろそろ家計が厳しく……俺の壮大な思考を携帯の着信音が妨げる。

相手は言わなくても分かると思う。

「なんだ？」

『幾らなんでもいきなり切るのはねえんじゃねえの？』

立腹したアクセルが俺に抗議してくる。

『人には最低限守らないといけない礼儀ってもんがあるんだぜ、分かるだろう、これがな』

どの口がほざく。普段悪ぶってるくせに、変な所で律義な奴だ。

「なんの用だ、手短に話せ（オッ、３レースのトロンベはいけるな）」

俺が赤鉛筆で線を引くのに忙しいというのに、アクセルはアホな発言を続ける。

『だから早く○○工場跡地に来いって。ボコってやっから』

「断る」

『おっと、電話切るなよ。テレフォンだ』

「意味が分からん」

仕方がないので話ぐらい聞いてやることにする。
しばらく電話の向こう側でガタガタと言う音が聞こえていたが、再びアクセルの陽気な声が俺の耳に届く。

『ジャーン、今日は特別ゲストに来てもらっていまーす』
『ああーん、キョウスケー助けてー。私、捕まっちゃたの。愛しのお姫様を助　――』
――ピッ！

俺は携帯を切った。無論、迷いなどあろうはずもない。
さてと、今日はやはり単勝狙いで手堅くトロンベに賭けるとするか。流石にこの間タスクにオケラにされたせいで資金は残り少ないからな。
俺は耳に赤鉛筆をかけ、財布に金を入れて新聞片手に外に出た。
駐輪場に止めている愛機アルトアイゼンの元に向かう。
昨日のアルトアイゼンの調子は最高だった。
古鉄などとは呼ばせないし、俺の前は誰も走らせはしない。

「ん？」

おかしいな、確かこの辺りに置いておいたはずだが？
しっかりとチェーンを2個もかけたはずだ。
しかし見当たらない。
アルトアイゼンがあるはずの場所に、切られたチェーンが2つ転がっているのが、俺の不安に拍車をかける。
ピピピピ、そのとき携帯に再び着信音、相手は言う必要はないだろう。

『ハロハロ、あなたのアクセルちゃんですよ』

「……アクセル、貴様、まさか……！」

俺の不安が確信に変わる。

俺の握った拳が振るう相手がいないためプルプルと振るえており、嫌な汗が止まらない。

この野郎、やりやがった！

『ピンポーンッ、愛しの古鉄はここにあるぜ。早く来ないと解体しちゃうんだな、これが』

「貴様あああああああぁっ！　待ってろ、3分で行ってやる！首を洗って待っていろ！」

携帯を切ると、俺は血相を変えて走り出した。

アルトアイゼンのチューンに幾ら掛かったと思っている！？

装甲値、運動性はＭＡＸ、軽く2ケタは余裕で超えている愛機に、手垢の一つでも付けてみろ！

絶対に許さん！

俺は○○工場に急ぐのだった。

●

「べーちゃん、来るってさー」

「ああん、キョウスケったら、私のために危険を冒さないでー！キャー、私ったら本当に捕らわれのお姫様みたいじゃない？」

○○工場の天井の鉄骨から、ロープで吊るされたままのエクセレ

ンのテンションが高まっていた。
Mか？　Mなんだな、こいつは？
しかしどちらかと言えば、鞭を持たせれば「お嬢様とお呼び！」と鞭を走らせそうな外見をしているが、きっとMなんだなこいつは、ということにしておく。
俺は奪ってきたアルトアイゼン号を品定めするように見た。
良い品だ。
できれば、ばらしてパーツをソウルゲイン号に組み込みたいが、ベーオウルフがこの餌に釣られてやって来ている以上弄るわけにはいかない。

「ねーねー、アー君ってさー、なんでキョウスケにそんな突っかかるの？」

宙づりのエクセレンが友人に声でも駆ける様に聞いてきた。
このベーオウルフの女、今まで何回かさらっていたら、馴れ馴れしく俺のことを「アー君」と呼ぶようになりやがった。
こんなの全然悪っぽくないじゃないか。
まあいい、俺とアイツの馴れ初めぐらい話してやらんこともない、これがな。

「最初に負けたのは6歳の頃だった」

俺の語り出しをエクセレンは興味津津といった具合に聞いている。

「同じ蒼髭流格闘術（ソウシリュウ）の道場に通っていた俺たちは良きライバルだった。
しかしある日あいつは人が変わったように暴れまわり、俺をボコボコにしやがった。そして道場を辞めた。勝ち逃げなんて俺は絶対許せないんだな」

「で、再戦するたびに黒星増やしてるのねー、大変ねー、アー君も」
「……うっせ」

まったく話すんじゃなかった。
勝負が始まる前から気落ちしてしまうじゃないか。

「アクセルーー！！」

息を切らせたベーオウルフが向上の入り口に立っていた。
本当にきっかり3分で来やがった。
ここまで結構遠いのに御苦労なことだ。

「待ってぜ、べーちゃん」

俺の口の端は自然に上がっていた。

●

アクセルの奴が不敵な笑みを浮かべている。
工場の中にはアクセルの他には誰もいない、1人だ。まあタイマン好きな奴のことだから、いつものことだ。

「キャー、キョウスケー、助けに来てくれたのねー」

宙刷りにされたエクセレンが叫んでいるが、とにかく今はバイクを探すのが先決だ。

工場内を見渡すと隅に停められていた。
よかったまだ無傷だ。

「待ってたぜぇ、べーちゃん」

悪党よろしく、悪そうな雰囲気を醸し出すアクセル。
奴のことだ、気分は主役を追い詰めたライバルキャラといったところだろう。
しかしバイクが無事だったとしても、俺の中に煮えたぎる炎がその程度のことで消えることはない。

「貴様……よくもやってくれたな」
「ククク、ここまで走って来て御苦労なことだ。ま、どうぜバイクがあったら競馬にでも行ってただろうから、健康的な運動ができたことにむしろ感謝してもらいたいな」
「むぅ……」

これだから幼馴染は嫌なのだ。
不必要なところでも勘が鋭くて非常に困る。

「さあ、大切なモノを取り返したいなら、俺を倒してみるんだな」
「断る」
「なに！？」

当たり前だ。
アクセルは「蒼髭流格闘術（ソウシリュウ）」の免許皆伝持ち、対して俺は、ごく普通の一般的な貧乏学生だ。
分の悪い賭けは嫌いじゃないが、勝ち目のない勝負は嫌いである。
やってもボコボコにされてＫＯされるのがオチだしな。

「アクセル……お前が幾ら悪ぶってても法律の前じゃ無力なんだぞ」
取り合えず、国家権力を盾にしてみることにする。
「俺たちももう高校3年だ。物を取ったり、人に危害を加えたりすれば、それなりに罰せられる歳なんだぞ」
「……」
「それにいつまでも高校生でいられる訳じゃないんだ」
「……」
「いつまでも悪ぶってなんていられないんだぞ」
「……チィッ！」
俺の説教にアクセルが悪党丸出しの舌打ちをする。チィッって…。
とにかく、これで丸めこめただろうか？
俺の言ってること間違えてないし、正義は我にありだ。
「じゃあ、バイクは返してもらう」
「ちょっとキョウスケー、私よりもバイクの方が大切なの？　ああ、悲しーわー、可愛そうなエクセレンちゃん、めそめそ」
空中のエクセレンが、俺の同情を引こうとなにか喚いてるが聞こえない振りをした。
どうせ彼女の頭の中では、「助けに来たぞ、我が愛しのエクセレン」「ああキョウスケ、やっぱりあなたは私を愛してくれていたのね、うれぴー？」なんて、三流恋愛ドラマのような情景が展開されているに違いからだ。
放っておけば、その内飽きて降りてくるだろう。
そんな事より我が愛機は無事なようだ。
手垢が付いている気がするな、後でアクセルは殴っておこう。

今はトロンベの応援に行くのが先決だ……

「待てや、コラ」

喧嘩上等、を売り文句にしているチンピラのように、アクセルが俺にメンチを切っていた。

顔が近い、モジャモジャのワカメヘアーが鬱陶しいことこの上なかった。

「なんだアクセル。まるで不良みたいな顔してどうした？」

「みたいじゃなくて、俺は不良なんだよ。それも札付きなのさ、これがな」

アクセルが俺の襟首をねじあげ、片手で俺の体を持ち上げた。

凄い力だ、これでも俺は筋肉質で結構重いはずなのだが……あ、耳に挟んでいた赤鉛筆を落としてしまった。

ベギャア！

アクセルが赤鉛筆を踏み折りながら凄む。

「俺っちよー、べーちゃんと違って頭悪いからよー、あんま難しいこと言われてもよく分かんないんだよなー」

「おい、アクセル」

「だから俺ってさ、こういうときは取り合えずこうすることに決めてるんだ ――」

あ、ヤバイ。

眼が座っているアクセルに恐怖を感じる俺を無視して、アクセルは大声で叫んでいた。

「―― 難しいことは、取り合えずぶん殴ってから考えるんだな、

これが！！」
「ちょっと待て、アクセ　――　ゴフゥ！」
アクセルの強烈なボディブローが俺の腹に決まり、背中まで打ちぬけるような衝撃が俺を襲った。
痛い、非常に痛い。
俺は今アクセルに持ちあげられているが、地に足を付けていたら膝が笑っていたことだろう。
なんなら地面をもんどりうって転げ回ってもいいが、アクセルが俺を離してくれなかった。
はっきり言おう。
俺は一般人だ、格闘家の拳の1撃に耐えただけでも褒めてもらいたい。
「早く本気だせよ、べーちゃん」
殺気の込められた双眸が俺に向けられていた。
本気を出すもなにも、これが俺の精いっぱいだ。
くそう、なぜ折角の休日にこんな目に合わなくてはいけないのだ。
俺の今日の予定は、動物園でトロンベを愛でて、平和に入場チケットを金に変えるはずだったのに。
確か騎手の名前は、レーツェル・ファインシュメッカーだったか？
胡散臭いグラサン野郎だ……しかしなぜ、俺はこんなことを考えている？
激痛で思考が回らなかった。
「出さねえんなら、遠慮しないぜ」
アクセルが右を大きく構えた。
なんだか闘気的なものが拳で燃え上がっているように見える。

マジですか、勘弁してもらいたい。

「玄武剛弾（ゲンブゴウダン）ッ！！」

「いやー、キョウスケー！」

エクセレンの黄色い悲鳴が聞こえた刹那、俺の頭は強烈な打撃でシェイクされていた。

「ゲフウッ！！」

痛い、どころではない。

もう訳が分からない。

アクセルの拳に吹き飛ばされた俺は、愛機アルトアイゼンを巻き込みながら、工場の端まで吹き飛ばされていた。

衝撃音が大きく工場内に響く。

――ア、アルトアイゼン……！

俺の隣に横たわる愛機に俺は手を伸ばした。

バイクを取り返しに来ただけで、なぜこんな目に逢わなければいけないんだ！

「ッ！？」

そのとき、俺は眼を疑った。

傷が、俺のアルトアイゼンに傷が、擦り傷が付いているではないか。

俺が巻き込んでしまったときに付けてしまったのか！

装甲値ＭＡＸ、運動性ＭＡＸ、改造費は軽く２ケタ超えの俺の愛機が！

俺の愛機が！

――　ブチンッ

なにかが俺の中で確かにキレた。

俺の意識は闇の中に沈んでいく　――

●

「やっと、おいでなすったぜ」

玄武剛弾（ゲンブゴウダン）で殴り飛ばしたベーオウルフが立ち上がるのを確認し、俺は呟いた。

奴の気配は明らかに変貌していた。

蒼髭流格闘術免許皆伝（ソウシリュウ）の俺には分かる。

今、奴からは黒いオーラが立ち上っていた。

眼はランランと輝き、口は三日月のような形に歪ませて笑っている。

眼の下にはなぜか赤い水玉のようなタトゥーが浮かんでいるし、異様な、なにか人外の者のような雰囲気すら感じ取ってしまいそうだった。

そう、こいつはベーちゃんじゃない。

「久しぶりだな、ベーオウルフ」

「アクセルか……なんの用だ？」

6歳のとき、道場で大暴れして大人まで病院送りにし、俺のトラウマになった悪魔が俺の目の前にいる。
俺に黒星を付け続けたこの化け物に勝つために、俺は日々鍛錬してきたのだ。

「ベーオウルフ、今日こそ貴様を倒す！」
「あん？」

奴の返事を待つ前に俺は行動していた。
俺は闘気を全て開放し全身に纏う。
蒼髭流格闘術（ソウシリュウ）の極意は肘にあり！
人体の中でもっとも凶器となる部位に渾身の闘気を込めて俺は叫んだ。

「奥義、麒麟（キリン）ッ！！」

必ず殺すと書いて、必殺！
確実にぶっ殺してやるという意思を込めて、俺はベーオウルフの体に奥義を叩きこむ。

――グガグシャア！！

なにかが砕けるような音が響き、

「ギャーーーーッッ！！」

直後、この世のものとは思えない断末魔が捻り出されていた……
俺の口から。
ベーオウルフの野郎、片手でアルトアイゼン号持ち上げて、俺に叩き付けてきやがった。

幾ら鍛えても、人体が金属の塊に勝てるはずがない。
それも異常にチューンされたエンジンのせいで、ものすごい重量とかしたアルトアイゼン号……俺の肘はものの見事に敗北し、俺はバイクの下敷きにされてしまっていた。

「ペッ」

野郎、唾吐きやがった。
畜生、意識が遠のく……このままじゃ、また黒星追加だ。
立て、立つんだ、アクセル・アルマー！
奮起しようとする俺の耳に、ベーオウルフの声が聞こえてきた。

「おい、大丈夫かエクセレン？」
「キャー、流石キョウスケ、強いわねー。惚れ直しちゃうん」
「ふ、当然だ。それよりどうだ、これから俺の部屋に来ねえか？」

ちょっと待て、コラ！
人のこと無視してなんてことほざいてやがるんだ、この駄狼！
エクセレン、断れ！　断っちまえ！

「いやん、こんな真昼間からなのー、キョウスケのけ・だ・も・の♪」
「ふふ、可愛いやつめ　――　ん、なんだテメエ、なに見てやがんだ！」

エクセレンをお姫様だっこしたベーオウルフと眼が合うと、奴は俺に向かってそう吐き捨て、思い切り俺の頭を踏みつけてきた。
悲鳴を上げる暇もなく、俺は脳を激しく揺らされ、意識が遠のいていく……

「ぺっ！」

……野郎、また唾吐き付けやがった……

覚えてろ、この野郎……！

俺は薄れゆく意識の中で、ベーオウルフに復讐を誓うのだった……

しかし次の作戦はどうしよう……また、エーちゃんにでも聞いてみるとしよう、これがな……

●

「うおおおおっ！！」

次に俺が目覚めたのは自室の布団の中だった。

悲鳴を上げて起き上がった俺の体は汗だくで、なぜか着ているのは下着1枚だった。

「あらん、キョウスケ起きたの？」

なぜかエプロンを付けて台所に立っていたエクセレンが俺に気付いた。

「待ってて、もうすぐエクセレン特製の夕食ができあがるからね」

「夕食……ということは俺はそんなに長い間気を失っていたのか？」

「ん？　なーに言ってるのよ。1時間ぐらい横になってただけじゃないの。変なキョウスケー」

コロコロと笑うエクセレンに、俺は「そうなのか？」と答えた。
時計で時間を確認すると１８時を回っており、既に外はうす暗い。

「エクセ姉様の手料理、楽しみなのでございまする」
「うふふふ、もうすぐ特製のスープができあがるから待っててね、ラミアちゃん」

食卓には変な敬語を吐くセクシーダイナマイツこと、ラミア・ラブレスが既についており、両手にフォークとナイフを持ち料理を待っていた。
なぜ、影高のお前が俺の部屋にいる？
お前の所の特攻隊長に、俺はひどい目に遭わされたというのに。
それとスープ飲むのに必要なのはスプーンだ。

「むッ」

心で突っ込みを入れていると、俺は非常に大事なことを失念していたことを思い出す。
俺の愛機、アルトアイゼンはどうなった？

「それなら外に停めてるわよ。チェーンはつけてないから」

エクセレンの返事を聞いた俺は、すぐさま外へと飛び出した。
駐輪場には確かに俺の愛機は存在した。
ボロボロの傷まみれになって。

「おのれ、アクセル・アルマー！　この借りは必ず返すぞ！」

俺はわなわな震える手を振り上げながら、夜空に浮かぶ満月に向かって吠えていた。

涙で満月が歪んでいたのは俺だけの秘密だ。

●

一方、キョウスケ宅にて夕食を作るエクセレンはというと。
携帯の着信を受けて、片手間でスープの作成に勤しんでいた。ちなみに着信音は「白銀の堕天使」だ。

「あら、アー君からメールね」

文面を確認する。

『拝啓エーちゃんへ、今日もまたベーオウルフに負けてしまいました。

とても悔しいです。
つきましては、またあいつを陥れる妙案を教えてくれないでしょうか（＾－＾）／』

絵文字まで使って可愛らしいことと、エクセレンは微笑を浮かべる。
高速の指使いで文章を入力し、すぐに返信した。

『拝啓アー君へ。
今日の大切な人を誘拐するというのは、今後もとても効果的だと思います。
今後もドンドン恋人を誘拐して、ベーオウルフを誘き出しましょう。
しかしバイクまで盗むのは良くなかったですね。
大切なを盗るのは1回に1個にしましょう（‘－＾＊）／』

送信してから30秒ほどで返信が返って来た。

『いやー、うっかりうっかり（・ε・）／』

「エクセ姉様、誰とメールしているのでやんす？」

ラミアが携帯をしまったエクセレンに質問した。

「ひ・み・つ♪」

台所には美味しそうなスープの匂いが立ち込めていた。
項垂れたキョウスケが部屋に戻ってくる。
夜も更け、3人は食事を楽しみながら時間を過ごすのだった。

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。
『エリア』には個性豊かな学生が沢山いる。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない。

鋼鉄の駄狼　～ガッカリベーちゃんとうっかりアー君～（後書き）

＜次・回・予・告＞

エクセレン「さーて、次回のスパロボ学院はー、キョウスケちん、借金返済のために今日も次回予告、よろしくねん！」
キョウスケ「仕方あるまい、ではいくぞ！」

キョウスケ
「俺の名前はキョウスケ・ナンブ、ジェネ高に通う3年だ！
……おい、エクセレン、俺はなにを言えばいい？」

エクセレン「そういえば、作者が次回のネタがまだ思いついてないって言ってたわね」
キョウスケ「では予告もできんな（笑）」
エクセレン「なんでそんなに嬉しそうなのよ。ネタがなくても予告はしてもらうわよ！」
キョウスケ「そんな無茶な……」
エクセレン「チラッ（借金の明細）」

キョウスケ
「次回、『絶賛ネタ募集中』！　どんな相手だろうと、打ち貫くのみ！」

エクセレン「この次回予告はフィクションです。実在の人物・団体・企業とはなんの関係もございません。予告と次回の話が違ってても怒らないでねん♪」

キョウスケ「……予告にはなっていないがな」

エクセレン「あん、キョウスケのいけずー」

ＯＧ日本昔話シリーズ　～ＳＲＸ団とモモ太郎～（前書き）

＜注意事項＞
絶賛、キャラ崩壊中です！
ＳＲＸチームのイメージを崩したく方は、閲覧しない方がよいかもしれません。
ちなみ作者は桃太郎の話は別に嫌いじゃないです。

OG日本昔話シリーズ　～SRX団とモモ太郎～

むかしむかし、ある所にイングラムお爺さんとヴィレッタお婆さんが住んでいました。

ある日、イングラムお爺さんは街にナンパに繰り出し、ヴィレッタお婆さんは川に釣りへと出かけました。

もちろん、ヴィレッタお婆さんが釣りに来た理由はその日の食糧を調達をするため、ではなく、自分のお気に入りの武器を綺麗に手入れするためです。

お婆さんの愛銃の名前は「ベレッタM９２」。

イングラムお爺さんは日頃から浮気が酷いのです。

ヴィレッタお婆さんは、お爺さんが返ってきたらこれでお仕置きをしてやろうと思っていました。

「ん？」

なんということでしょう。

川で銃を分解して綺麗にしていたお婆さんの前に、どんぶらこっこどんぶらこっこと、大きなモモが流れてきたではありませんか。

大きさはおよそ１m程、成人男性が体を小さくすれば入れる大きさです。

「なんだ、モモか」

銃の整備に忙しいヴィレッタお婆さんの目の前を、大きなモモが流れていきました。

川縁の大きな岩に、ガツンガツンとぶつかりながら下流へと流されて行きました。
めでたし、めでたし。

「ちょっと、待てー！！」

するとどうでしょう、大きなモモの中から男の子の声が聞こえてきました。
不審に思ったお婆さんが声のする方に向くと、大きなモモから人間の手と足が生え、河原を歩いてお婆さんの方に向かってくるではありませんか。
しかも酷く立腹している様子です、軽くホラーです。

「なんで流すんだよ！　拾ってくれよ、話が始まんないじゃ　――」

――　パンッ！！

「ギャッ！！」

歩くモモはホラーなので、ヴィレッタお婆さんは懐に隠し持っていた「ベレッタＭ９３Ｒ」でとりあえず撃っておくことにしました。

「ベレッタＭ９３Ｒ」はセミオートと3点バーストの切り替えができる、なんともお得な銃です。

銃弾を受けたモモはその場に血飛沫を撒き散らしがら倒れました。

ピクピクと痙攣しています。

「デザートはモモにするか」

ヴィレッタお婆さんは、イングラムお爺さんを懲らしめた後の夕食の食後のデザートはモモが良いなと思いました。

これだけ大きなモモです。

残った分はゼリーに固めて冷蔵庫に保存しておこうと思いました。

喜んだヴィレッタお婆さんは、その大きなモモを引きずりながら帰って行きました。

帰り道で木や岩にモモをぶつけてしまいましたが、中から悲鳴などは決して聞こえてきませんでした、本当です。

「やあ、これは大きなモモだ」

街から帰って来て、お婆さんに折檻されたイングラムお爺さんが感心して言いました。

あちこち撃たれて銃創ができていますが、お爺さんはお婆さんのことを愛しているのでなんの問題もありません。

さっそく2人でモモを食べることにしました。
包丁をモモに思いっきり突き立てます。

「痛えッ！！」

中から悲鳴と共に大きな男の子が飛び出してきました。
生まれたままの姿の、どう見ても１８歳ぐらいの茶髪の青年でした。

お爺さんとお婆さんには子どもがいませんでしたので、２人は大いに喜びました。
その男の子は、モモから生まれたのでモモ太郎と名付け、られませんでした。
２、３日一緒に生活しただけで、その男の子が生粋のロボットオタクだと分かったからでした。
男の子はモモから生まれたのに、ロボ太郎と名付けられ、元々大きかったため１ヵ月程で立派な労働力（農作業）となりました。
こうしてお爺さんとお婆さんは楽ができ、末永く平和に過ごしましたとさ。
めでたしめでたし。

「めでたくねえ！！」

ロボ太郎は鍬を振り下ろさずに、地面に叩きつけて叫んでいました。

「俺は奴隷じゃねえ！　ロボットアニメの主人公みたいにヒーローになりたいんだ！」

ロボ太郎は胸の中に燃える、熱い思いの丈を2人にぶつけました。

するとどうでしょう。

イングラムお爺さんとヴィレッタお婆さんが「立派になったわね、ロボ太郎」と感激の涙を流しているではありませんか。

やあ、これはどうしたことだ？

理由の分からないロボ太郎は、2人に尋ねてみることにしました。

「ロボ太郎や、まさかお前が鬼が島に住む悪い鬼を退治しましょうと言ってくれるなんて、私は夢にも思っていなかったぞ」

イングラムお爺さんがとても嘘くさい涙を流しながら答えました。

もちろん、ロボ太郎はそんなことを一言も言っていません。
過大解釈もいいところです。

「待っていろロボ太郎、私が今、宇宙一旨いキビダンゴを作ってやろう」

もはや涙すら流していないヴィレッタお婆さんはそう言うと、傍にあった引き出しの中から、キビダンゴの袋を取り出しました。
ヴィレッタお婆さんは腰にその袋と刀、ロボ太郎の懐になにかを忍ばせてきます。
鬼退治をするなど一言も言っていないロボ太郎ですが、お爺さんとお婆さんに半ば無理やり旅に出されました。

「まぁ、適当に頑張れ」
は、イングラムお爺さんの言葉。

「宝を奪うまで帰ってくるな」
は、ヴィレッタお婆さんが送ってくれた言葉です。

優しい両親に、いつか目にモノ見せてやると心に誓いながら、ロボ太郎は鬼退治の旅に出発したのでした。

しかし、そこは生まれてまだ1ヵ月のロボ太郎、鬼が島が何処にあるのかもハッキリ言って分かりません。

お爺さんがくれた地図は明らかに手書きで、目的地らしき所に「

ココ」と矢印は振ってありました。
それを頼りに冒険を続けていたら、２－３日迷ってしまいました。
ロボ太郎は超人ではありません、お腹も空きます。

「おほ、このキビダンゴ旨っえー」

少し乾燥していましたが、そこは空腹が最高のスパイスとなり、キビダンゴはこの世の物とは思えない美味しさでした。
１個食べ、２個食べ、３個食べ……気が付くと袋の中身は空になっていました。
空になった袋をどうしようか、とロボ太郎が考えていたその時、

「ロボ太郎、その袋の中にはなにが入っている？」

犬耳を付けた金髪の青年が尋ねてきました。

「ライ、じゃなかった犬さん、この中に入っていたのは宇宙一のキビダンゴさ」
「ほう、そいつは茶とも良く合いそうで、とても旨そうだ。
俺に一つ分けてくれれば、ひじょーーに不本意だが、家来になってやらんこともないぞ」
「残念だけど、さっき全部喰っちまった」

袋の口を逆さにして振り、中身がないことを示すロボ太郎。
しかしそのとき、袋の皮に張り付き奇跡的に残っていた最後のキビダンゴが、コロコロリンと地面に落ちてしまいました。
もう、砂だらけです。

「……いる？」
「犬（ワン）ダーチョップッ！！」

「モモッ！？」

犬さんの左手がロボ太郎の頭に炸裂しました。
なぜか犬さんの左手はとても丈夫でしたので、涙目になりながらロボ太郎は地面を転げ回ります。
すっかり呆れてしまった犬さんが言いました。

「いいかロボ太郎。お前非常にアホだ。
おそらくお前一人では、何日歩こうが確実に鬼が島まで辿り着けないだろう。
だから俺が鬼が島まで連れて行き、正しい人の生き方を説いてやろう。
一つ言っておくぞ、決してお前のためではないからな」

「おお、ありがとう」、ロボ太郎は素直に礼を言いました。
犬はキビダンゴももらわず、なんの見返りもなく仲間になってくれました。
素晴らしい人格犬です。
もうキビダンゴ袋は用なしなので、ロボ太郎はここで捨てていくことにしました。
こうして犬さんはロボ太郎の人生の先輩として、一緒に鬼が島に向かうことになりました。
ロボ太郎と犬さんがしばらく歩いていると、今度はサルの耳を付けたピンク髪の女の子が現れました。

「ロ、ロボ太郎さんロボ太郎さん、日本一美味しいキビダンゴ、私にも一つ下さいな」
「あ、わりマイ、じゃなかったサルさん、さっき袋捨てちまった」
「……う」

待ち伏せして、意を決して飛び出したのに……サルさんは慟哭のように呟きました。
衝撃の事実に、サルさんは思わず涙目になってしまったようです。
あーあー、泣ーかした泣ーかした、ロボ太郎が泣ーかした。

「うるせぇ！」

ロボ太郎は誰に出なく、天に向かって叫んでいました。
涙目のサルさんに理由を聞いてみると、キビダンゴを貰えないとロボ太郎の仲間にはなってはいけないルールらしいです。
誰が決めたのでしょうか？　おそらく天が決めたのでしょう。
ロボ太郎は、下らないルールに縛られる現代社会の大人のように、サルさんにはなってもらいたくありませんでした。

「いいか、サルさん、ルールは破るためにあるんだぜ」
「え、そうなのか、リュ……ロボ太郎さん？」
「ルールを守ることは大事さ。でもな、そのルールの意味を考えるんだ。
無意味なルールに縛られて、その先にある素晴らしい景色を見られないのはとても悲しいことじゃないか！」
「そうか……そうだね、ロボ太郎さん！」

サルさんはルールを破って、ロボ太郎の仲間に加わりました。
しかしルールを破ると法律で罰せられることがあります。
良い子の皆さんは、きちんとルールを守りましょう。
こうしてサルさんはロボ太郎の仲間になり、ロボ太郎一行は人・犬・サルの３人パーティーになりました。
とても心強いです。
ＲＰＧでは１人だとすぐに死んでしまいますが、３人ならそうそうやられることもありません。

きっと、鬼とも渡り合うことができるでしょう。
ですが、ここはやはり回復役が1人は欲しいところです。
そんなことを考えながらロボ太郎が歩いていると、キジの帽子を被った緑髪の女性が近づいてきました。

「ロボ太郎、袋に入った……って袋ないじゃない。どうしたの？」
「アヤ、じゃなくてキジさん、もう面倒臭いからこれで手を打たねえか？」

流石に3回目となる慣れたもので、ロボ太郎は懐からあるものを取り出してキジさんに渡してあげました。
それはイングラムお爺さんの、とても人に見せられないような格好の写真集でした。
浮気するたびに、ヴィレッタお婆さんが撮りためていたものらしいです。
キジさんは顔を真っ赤に上気させ、無言のまま首を縦に何回も振りました。
こうしてキジさんはロボ太郎一行に加わることになりました。
これを買収といいます。
良い子は決して真似してはいけませんよ。

「誰に言ってんのかはともかく、いざ鬼が島へ出発だぜ！」
「「「おーー」」」

ロボ太郎、犬、サル、キジ……合計4人のパーティーは一路鬼が島を目指して歩き始めました。
その道筋は並大抵のものではなく、とても言葉では表せません。
カクカクしかじか（またの機会にゆっくりお話することにいたしましょう）で、ロボ太郎たちは海まで辿り着きました。
対岸に鬼が島が見えます。

しかし船は見当たりません。

「ロボ太郎さん、どうやって海を渡るの？」

サルさんが純粋な瞳で尋ねてきました。

「うーん……」

ロボ太郎は非常に困りました。

なにも考えていなかったからです。

ですが、河原には防風用の松の木が何本も植えられているを見つけ、ポン、と手を叩きました。

「よし、あれで船を作ろう」

「「えーー」」

サルとキジから非難の声が上がりました。

なるほど、サルはまだ体が小さいし、キジは写真集を見て悦っているのでこの仕事は無理でしょう。

ここは力のある自分が人肌脱ぐことにしました。

松の木に向かって歩き、スラリと、腰に携えた日本刀を抜きました。

波紋がとても美しい、間違いなく業物に入る一品です。

ロボ太郎は上段に日本刀を構え、

「天上天下、無敵切りいぃっ！！」

気合一閃、それを振るいました。

――パキーンッ！！

ものの見事に日本刀は真っ二つに折れました。
いくら業物でも、使い手がナマクラではどうしようもありません。
松の木に空しく刺さった刃先を見つめて、ロボ太郎は途方に暮れてしまいました。

「どけ、ロボ太郎」

犬さんでした。
犬さんが袖をまくると、そこには金属製の腕が覗いていました。
義手です。

「いいか、ロボ太郎。なにごとも簡単に諦めてはいかん。刀がダメなら、次だ。
最良の方法で努力し、それを形に残すのだ」
「犬さん」
「いいか、これが俺の手だ！」

犬さんはそう言うと、電光一閃、本当に稲妻でも落ちたのではと錯覚するほどの光を見せて、手刀を放っていました。

――ズズーン！！

松の木が根元で真っ二つに切られて、倒れました。
顔が映りそうな程綺麗な断面でした。

「よし、船を作るか」

犬さんはそう言うと義手をいじりました。
すると、なんだがドリルだがチェンソーのようなものが義手から

出てきたような気がしたので、ロボ太郎は目を背けました。
世界には見てはいけないモノが沢山あります。
皆さんも気をつけましょう。
小1時間程、ロボ太郎はサルさんと一緒に砂遊びをして過ごしました。
キジさんはまだ写真集を食い入るようにして凝視しています。
サルさんがキジさんの方を向こうとする度に、ロボ太郎はサルさんの目を隠して「見ちゃいけません」と諭しました。
知らない方がいいことも世の中にはたくさんあります。
それを子どもに取捨選択してあげるのも、大人の大切な仕事なのです。

「できたぞ」

達成感に満ち溢れた顔で、犬さんが言いました。
木製とは思えない綺麗な小型のボートに、なぜかモーターエンジンが付いていました。
これで鬼が島まであっという間です。

「村人に悪逆非道な嫌がらせをする極悪非道な鬼め！
この天上天下一撃必殺のロボ太郎様が退治してくれるわ！　さあ、行くぞ、皆の者！」
「「「おー」」」

ロボ太郎の啖呵に3匹はやる気なく応えました。
いざ、鬼が島へ。
一行は悪の城へと突入していきました。

「やあやあ、ここが鬼が島か。お邪魔します」

鬼が島へ突入したロボ太郎一行は、実に堂々と正面の門から、鬼の城の中へと侵入していました。

島には鬼っ子1人いませんでした。

無暗に広いだけの城の中に、1匹だけ奇妙な仮面を被った鬼がいました。

他に誰もいないので、あの鬼がこの島のボスなのだろうと、ロボ太郎は思いました。

「ククク、待っていたぞ。ここまで良くぞ辿り着いたものだ、モモ太郎よ！」

「はぁ？　俺の名前はロボ太郎だぜ？」

「なにっ、いや、しかし台本には『モモ太郎』と書いてあるぞ」

三つ目の仮面を被った鬼が懐から本を取り出して読みだしました。

しかしロボ太郎一行がそんな鬼に冷たい、白けた視線を送っていることに気付いた鬼は慌てて本を放り捨てました。

「こ、この際、細かい事はどうでもよいわ」

ひどく狼狽した様子の鬼はそう言うと、とうっ、と大きくジャンプして玉座から飛び降りました。

ロボ太郎の真正面、対峙するように構えた鬼が高らかに笑います。

「愚か者め、人間風情がこのユーゼ　――　んんっ、この鬼が島の鬼に叶うと本気で思っているのか？」

「へへ、やってみなくちゃわからねえだろ！」

ロボ太郎は意を決して、腰の日本刀に手を伸ばしました。

「あ」

先ほどポッキリ折ってしまったのをロボ太郎は思い出しました。
キビダンゴも食べてしまったし、体力を回復する術もありませんでした。
さて、どうしたものでしょう？
丸腰のロボ太郎に向かって、鬼は勝利を確信したように笑います。

「ふはははは、この鬼を前に考え事か？　青い、青いぞ、ロボ太郎！
貴様なぞ私が相手をするまでもない。
我が一の眷属、白き死十字架（ホワイトデスクロス）ジュデッカよ、今ここに　――」
――　パンッ！！
「ギャ！」

考えるのが面倒臭くなったロボ太郎は、ヴィレッタお婆さんが懐に忍ばせてくれた「レベッタＭ９２」を発砲しました。
ガインッ、と銃弾は鬼の鉄仮面に命中し、鬼はもんどり打って倒れました。
言い忘れていましたが、ロボ太郎は実はすごい銃の名手です。

「ひ、卑怯だぞ、銃を使うなんて　――　ギャーー！！」

元気そうでしたので、ロボ太郎は全弾を顔面に叩きこむことにしました。
ガインッガインッ、とても痛そうな音が城内に木霊します。
鬼は鉄仮面の隙間から白い泡を吹いて気を失ってしまいました。

「天誅」

「アホか、貴様は」

犬さんがどこからか取り出したハリセンで、ロボ太郎の頭を叩きました。

「お前はそれでもヒーローか？」

「なんだよー、悪は滅んだんだからいいじゃねえかよー。おい、それより宝は何処だ？

早く持って帰らねえとお婆さんに撃ち殺されちまうぜ」

「ロボ太郎さん、あっちにすごい宝物があったぞ！」

サルさんが奥の部屋からなにか持って駆け出してきました。

手には「バーンブレイド３　劇場版」と書かれたＤＶＤディスクを持っていました。

ロボ太郎の目が見開かれます。

「おおー、それは今や幻の作品と言われる『バーンブレイド３　燃え上がれ、俺の魂（ソウル）！』じゃねえか！

サルさん、よくやった！　他にはなにかあったか！？」

「他にもフィギアとかゲームソフトとか沢山あったよ！　あと、宝石も」

「なんだって！　いやっほーい、やっぱり悪党退治にはこういった役得がないとやってられねえよな！　行こうぜ、サルさん！」

「うん、ロボ太郎さん！」

「私も宝石欲しいわ！」

血走った目でロボ太郎、サルさん、キジさんが奥の部屋へと突撃していきました。

中にはレアなロボットアニメのＤＶＤやフィギア、宝石や貴金属類が、これでもかというぐらいに貯め込まれていました。

ロボ太郎たちはその宝物に埋もれて、笑いが止まりません。
ロボ太郎はＤＶＤディスクとフィギアを両手に持ち切れないので、風呂敷にも包んで背負いました。
サルさんは「バーンブレイド３」のＤＶＤＢＯＸ４期分を両手に持ちました。
キジさんは目がくらむ程の貴金属類に身を包み、それには飽き足らず、ロボ太郎と同じ風呂敷に大量の貴金属を詰め込んで背負いました。

「おい、持って来すぎだぞ」

外で船番をしていた犬さんが言いました。

「いいじゃんいいじゃん！　これぐらい許されるって！
なんたって俺たちは鬼を倒したヒーローだかんな！」
「「そーだーそーだー」」

ロボ太郎に賛同した、サルさんとキジさんが声を合わせて言います。
多数決に負けた犬さんは、しぶしぶ重い荷物を載せて船を岸から出発させます。
モーターエンジン搭載の船だから、スイスイ荒波を越え、あっという間に鬼が島小さくなって行きました。

「さらば鬼が島、また宝取りにくるからなー！！」
「くるからなー！！」

ロボ太郎とサルさんが名残惜しそうに叫んでいました。
残ったフィギアたちを迎えに来ることを心に誓ったロボ太郎。
異変が起きたのはまさにそのときでした。

「……ん、おい浸水してるぞ！」

船頭の犬さんが叫びました。

小さな船にあまりにも多くの荷物を乗せたため船底にヒビが入っていました。

「ヤバい、みんなヒビを塞げ、手で塞げ！」

「馬鹿！　そんなことより荷物を捨てるんだ！」

「「「やだッ！！」」」

異口同音に1人と2匹が絶叫します。

しかし船底が限界に達したのも、その叫びと同時でした。

――バリッ、ザバァン！！

1人と3匹は宝物と一緒に冷たい海の中に放り出されてしまったのです。

ここは鬼が島が遠く見える、かなりの沖合で、流れもとても早いのでした。

「ゴボゴボゴボボボッボー！！（お、俺のフィギアがーー）」

「ゴボボボーボ、ボッボ！！（だから言ったろうが、この馬鹿）」

「ゴボボボボーッ！！（助けてー）」

「ボ、ボウゴボ！！（ほ、宝石）」

冷たい海の水ですぐに体力を奪われて、一行は暗い暗い海の底に沈んでいきました。

かくして鬼は退治され、村には平和が戻ったのでした。

めでたしめでたし。

●

完

俺の名前はキョウスケ・ナンブ。
俺の心には今、猛烈な感動のさざ波が押し寄せている。
それはなぜか、今から説明することにしようと思う。
なぜか高校の密集する地域『エリア』における1番のマンモス高校――OG（オリジナルジェレーション）高等学院、通称ジェネ高の体育館。
そこに俺は、恋人のエクセレンとなぜかついてきたラミアと共に、先ほどの映像を見ていた。
あの映像は、ジェネ高の映研「SRX団」が作成したものだ。
昔話をモチーフにした、まったくをもって、とても素晴らしい作品だったと思う。

実にいい話だ、因果応報（いんがおうほう）、まさにその言葉が相応しい。

「欲に溺れる者は、結局自分の身を滅ぼす……実にためになる良い話だった」
「その言葉、キョウスケにだけは言われたくなわよねー」

隣の席にいつエクセレンがいやらしい笑顔を向けていた。
むぅ、それはどういう意味だ。

「このギャンブル狂いは、一度死ななければ治りそうにないと思いますのことよ、エクセ姉様」
「そうねえ、いっそ、コンクリ詰めにして海に落としてやろうかしら」

お前たち、爽やかに恐ろしい事を口走るのは止めてくれ。
それよりラミア、何度も思うが、お前は影鏡（えいきょう）高校の生徒だろう。

影高は大丈夫なのか？
ほら、出席日数とか、その他色々、な……今日も、俺たちの楽しい日々は過ぎていく。

ここはＯＧ高等学院。
『エリア』にある地域最大のマンモス高校だ。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない。

OG日本昔話シリーズ　～SRX団とモモ太郎～（後書き）

＜キャスト＞
ロボ太郎　リュウセイ・ダテ
犬　　ライディース・F・ブランシュタイン
サル　　マイ・コバヤシ
キジ　　アヤ・コバヤシ
お爺さん　イングラム・プリスケン教諭　（ゲスト）
お婆さん　ヴィレッタ・パディム教諭　（ゲスト）
鬼　　ユーゼス・ゴッツォ（マダオ）
ナレーター　作者

でお送りしました。
シリーズって書いてあるけど、シリーズ化するか不明です。あしからず。

＜次・回・予・告＞

エクセレン「ほら、キョウスケ、熱い予告しないとコンクリに詰めて海に沈めちゃうぞ？」
キョウスケ「……頼むエクセレン、笑顔でさらりと殺し文句言うのは止めてくれ……では行くぞ！」

キョウスケ
「俺の名前はキョウスケ・ナンブ、OG高等　――　以下略　――だ！
次回は今回登場したお爺さん役の人のお話だ！
教師、そんなの関係ない、俺が目指すのはハーレムだ！
しかしそんな俺にも家庭がある、実は最近弟が反抗期なんだ！

次回スパロボ学院『Ｔｉｍｅ　Ｄｉｖｅｒ　～プリスケン家の日常～』、どんな相手だろうと、打ち貫くのみ！」

エクセレン「この次回予告はフィクションです。実在の人物・団体・企業とはなんの関係もございません。予告と次回の話が違ってても怒らないでねん♪」

感想と要望くれているｓｉｂｕｇａｋｉさん、平野　綾さん、ロボッツさんありがとうございます！
凄く励みなり、ネタもいくつか思いつきました。
これからも、よかったら読んでくださいね。

Ｔｉｍｅ　Ｄｉｖｅｒ　～プリスケン家の日常～（前書き）

＜注・意・事・項＞
絶賛キャラ崩壊中。
この話のキャラ崩壊ＬＶ５（ＭＡＸ）！
あれ？　イングラムとヴィレッタが気持ち悪い？
イングラム・ヴィレッタ・クォヴレーのイメージを崩したくない方は閲覧しない方がいいかもしれません。

Ｔｉｍｅ　Ｄｉｖｅｒ　～プリスケン家の日常～

俺の名前はイングラム・プリスケン。

なぜか高校が密集する地域『エリア』１のマンモス高校、ＯＧ高（オリジナルジェネレーション）等学院の教師をしている

そんな俺にも夢がある。

俺の夢……それを説明する前に俺を取り囲んでいた状況を説明したいと思う。

かつての俺は、枷を嵌められた、まさに人生の奴隷のような存在だった。

俺の親父の名前は「ユーゼス・ゴッツォ」。

息子の生き先まで自分の物と言い切るような自己中心主義な男だった。

奴は秘密結社「エアロゲイター」を運営し、日本政府どころか世界の経済にまで口を出せる巨悪となっていた。

要するに、世界は俺の親父の手中にあった。

そう言い切れる時代が確かにあったのだ。

そして分かりやすく言えば、世界など自分のモノだと言い切る腐った自信過剰な父親……それが俺の親父ユーゼス・ゴッツォだった。

確かに、俺たちもその恩恵をふんだんに受けて成長したさ。

だがそれは同時に俺たちが奴の手の上で踊っていることに他ならない。

――そう、枷さ。

長男である俺は特にその枷から逃げづらい立場にあったと、言える。

しかしこの世に悪の栄えた試しなし。

栄枯盛衰、盛者必衰の断りを表す、とでも言うのだろうか親父の悪行はある日に終えることになる。

『エリア』に存在する1高校……その生徒の一人に組織の全てが瓦解されたのだ。

名前は知らないし、どうでもいい。

なんでも、仮面を被って物凄く巨大な大剣を担いだ学生だったらしいが、俺は親父の話をまったく信じていない。

刀一本で、世界を牛耳る悪の組織の首領を仕留めれるなんてことを、誰が信じられるだろうか？

だがこうして、俺は親父の糞ったれな野望から解放された。

世界を掌握するという、親父の糞ったれな野望は潰えたのだ。

だが俺には夢がある……それは野望、と言ってもいいだろう。

俺の夢……それは健全なる男子全てが夢見るものである。

ちなみに俺はジェネ高の教員をしている。

だがそれは野望の結実になんの不具合も生じないだろう。

俺の野望、それは即ち――

――ハーレム！！

教員だろうが、生徒だろうが関係ない。

現在は、目下落としやすそうな女生徒「アヤ・コバヤシ」を攻略中だ。

しかしそんな俺にも、家庭というものは存在する。

おっと勘違いするなよ、俺に妻なんてキーパーソンはいなし恋人もいない。

ただ家族がいるだけだ。

双子の妹、ヴィレッタ ――― そして弟のクォヴレー。

俺の大切な家族だ。

しかし最近、クォヴレーが俺と話をしてくれないんだ。

反抗期!?

これが言わゆる、反抗期と言うモノなのだろうか!

お兄ちゃんは悲しいぞ、クォヴレー!

そんな訳で今日はヴィレッタに頼んで、弟の好きなシチューを作って貰うことにした。

これで弟も頑なな心を開いてくれるはずだ。

俺は、そう信じている……

スパロボ学院 ～OGだよ全員集合!～

Ｔｉｍｅ Ｄｉｖｅｒ ～プリスケン家(ち)の日常～

なぜか高校が密集する地域『エリア』にある古い激安賃貸アパー

トが俺たちの家だ。

「どうだ、旨いかクォグレー？」

俺は努めて優しく、目の前でシチューを頬張る弟に声をかけた。

クォヴレー……外見は銀髪をした少年で、年も若く今年からＯＧ高等学院に通い始めたばかりの俺の弟だ。

弟は黙々とシチューを食し、俺の問いには答えない。

「美味しい、クォヴレー？」

今度はこのシチューの製作者、俺の双子の妹ヴィレッタがクォヴレーに尋ねた。

指には絆創膏がいくつも巻かれている。

普段は家政婦に「任せるわ」と料理などしない妹だが、今日のシチューは教えを請いながら作った努力の結晶だった。

味は悪くない。

姉がここまで頑張っているんだ、なにか答えてやれクォヴレー……

「……」

だが弟は答えることはなく、ただ食事を続けるばかりだ。

俺たちが今いるのは６畳ほどの小さな畳張りの居間で、丸いちゃぶ台に兄弟三人で囲んでいた。

なんというかレトロだ。

俺たちも親父が「エアロゲイター」の首領をしていた頃は、それ相応のセレブな生活をしていたものだが、今ではその名残は一欠けらも残っていない。

まあ、汚い金で築いた汚い生活だったしな。

今の方が自分で稼いだ金で生活している訳だし、全うな生活とい

う実感はある。

しかし今はそれよりもクォヴレーだ。

弟も高1、反抗期真っ盛りなのだろうか、俺たちとめっきりコミュニケーションを取ってくれなくなってしまった。

昔は「お兄ちゃん」と俺の後ろを小さな体でちょこちょこと付いてきたものだ。

ふふふ、あの頃のクォヴレーの可愛いことったら……おっと、いかんいかん。

とにかく最近弟が話をしてくれません。

お兄ちゃんは寂しいです。

「なにか言ったらどうだ、クォヴレー？」

「……ウザイ」

ボソリと、実にボソリと弟が呟いてくれました。

なんだか久しぶりに弟の声を聞いた気がするなぁ……内容はともかくとして。

あーあー、眉間にしわを寄せて可愛いたらありゃしない、ふふふ。

『坊っちゃん、お兄さんにそんな口を聞いてはいけませんよ』

「……ナナコさん」

炊事場から仮面を付けた女性が現れ、弟を諫めていた。

仮面を付けているので素顔は見たことがないし、俺も知らない。

彼女は『バルシェム』という、昔の親父の組織「エアロゲイター」の戦闘員をしていた怪人だ。

今でこそ残ったのはナナコさん（確か7番目だった気がするからそう呼んでいるだけ）だけだが、昔は１００人近い『バルシェム』が俺たちの身の回りの世話をしてくれていたものだ。

ナナコさんは組織崩壊後も、俺たちの傍に残り家政婦として働いていてくれた。
ナナコさんには本当に感謝している。
地味にスタイルもいいしな、その内俺のハーレムの末席に加えてやろうと思う、ふふふ。
しかし、実は弟はナナコさんにだけは逆らえない。
注意され口先をくちばしのように尖らせている、ふふふ、可愛いことだ。

「……でも」
『でももへチマもありません。お姉さんが頑張って作ってくれたんですよ。
感謝の気持ちを込めて御馳走様でした、ぐらい言えないのですか？』

おお、ナナコさんがひどくまともな説教をしている。
俺の周りには変な奴が多いからな、こういうやりとりは逆に新鮮にすら感じた。

「ご……御馳走様でした」
「ああん？」

俺の周りの変人リストその1、俺の妹「ヴィレッタ」だ。
クォヴレーから礼を言われたのが余程嬉しかったのか、恍惚とした表情を浮かべていた。
ヴィレッタはショタコンで可愛いモノが大好き、スパイ活動と称しては中等部で目を付けた学生をストーキングして写真を集めている変態だ。
さらに極度のブラコン。
加えて懐には愛銃「レベッタＭ９２」を常に隠し持ち、気に入らないことがあると ――

――パンッ！

……この様に撃ちまくる悪癖がある、実に始末に悪い。
俺は背後の壁にできた真新しい弾痕を見て、妹に聞いた。

「なにをする？」
「イングラム、貴様、今失礼なことを考えていただろう？」
「そんなことはない」

ひどく当たり前の事実を説明していただけに過ぎない、俺はリアリストだからな。

『お粗末様でした』
「……お休みなさい、ナナコさん」

とても家庭的な会話を交わして、弟は食器を流しにまで持っていき自室へとひっこんでしまった。
うーん、新鮮だ。
周囲が変人だらけだと、こういう日常風景を見ていると心が洗われ――

――パンッ！

……俺の背後にまた1つ弾痕が増えた。
まったく家の妹は凶暴です。
そして弟よ、お兄ちゃんにも「お休み」ぐらい言ってくれないのかな？
寂しい、お兄ちゃんは実に寂しい。

「いつも済まないな、ナナコさん」
『いえいえ、私なんてこんなことぐらいしかできませんから。あと出来るのは暗殺ぐらいなもので』

うーん、実に平和だ。
やはりナナコさんは俺のハーレムに加えてやることにしよう。
さっさと今攻略中のアヤ・コバヤシを落として、2番目に登録をしてやろうと思う。
俺たちもシチューを平らげると、ナナコさんは食器を持って炊事場で片づけを始めた。
テレビをつけて食後のお茶を飲むが、内容はそっちのけで俺はヴィレッタに聞いてみることにした。

「おい、クォヴレーのことどう思う？」
「可愛いわ」
「いや、そうでなくてね……最近、少し反抗期気味なんじゃないかと思ってな」
「仕方ないわ、そういう年頃だもの」

うむ、実にクールだな妹よ。
それを言っちゃあお終いですぜ、中二病も更年期も全てその言葉で説明できてしまうではないか。
俺が言いたいのは、昔のように兄弟3人仲良く平和に過ごすにはどうすればいいのか、ということなのだ。

「イングラムはいらないわ」

Ｏｈ、クールビューティー。
そんなにばっさり切り捨てないでくれ、俺のガラスのハートは繊細なんだ。砕けて元に戻らなくなったらどう責任取ってくれるんだ。

『私が坊っちゃんの様子を見てきましょうか？』
――パンッ！
気を利かせてくれたナナコさんに対して、ヴィレッタが躊躇なく発砲した。
本日3個目の弾痕が壁に出来上がる。まったく、修繕費がいくら掛かると思っているのだ。
ヴィレッタは銃口をナナコさんに向けたまま狙いを外さない。
「ナナコさん、不必要に弟に近づかないでくれないかしら？　弟に近づく女は、誰だろうとＤｅａｄ（デット）　Ｅｎｄ（エンド）よ」
『ひ、ひい、失礼しました！』
慌てて炊事場に引き籠るナナコさん、とても可哀想です。
「クォヴレーは一生結婚なんてさせないわ」
これはヴィレッタの言葉である。
妹よ、お前はクォヴレーを溺愛している父親かなにかか？
良かったなクォヴレー、お前は姉に愛されているぞ……愛されすぎなぐらいにな。
末恐ろしきは女の情念、と言った所だろうか。ああ、恐ろしや恐ろしや。
とにかく、これが俺の家の日常風景である。
実に平和で庶民的な生活であったと思う。
しかし家族間のコミュニケーションが不足しているように感じるな、特にクォヴレーとの。
なんとかして、昔のように仲良くなれるようにしてみたいと俺は

思っている。
そのための作戦を練るために俺は「クォヴレー観察日記」をつけることにした。

●

［クォヴレー観察日記　○月×日］

今日もクォヴレーは俺と話してくれない。
食事が済むと自室に引っこんでしまう。
試しに食後の熱いお茶とお茶菓子を差し入れに持って行ってみた。
それは食べてくれた。
会話は交わしてくれなかったが、お兄ちゃんは嬉しい。

［クォヴレー観察日記　○月○日］

今日は休日、俺も部活動の顧問はやっていないので家でくつろいでいる。
クォヴレーはと言うと、朝起きると既に外出していた。
両手に一杯の洋服を買いこんで帰って来た。
それはなにか、と俺が尋ねても答えてくれない、お兄ちゃんは寂しい。

［クォヴレー観察日記　○月△日］

そろそろ書くのも飽きてきた、今日あたりでお終いしようかと思う。

しかしこの日記もあながち無意味ではなかった。

クォヴレーの行動パターンが見えてきたからだ。

平日、家に帰ってきたら食事を済ませて自室へ、とにかくなにかを読んでいる。

休日、買い込んだ服で着飾って外出、そして何食わぬ顔で帰宅する。

うーん、これといって特徴のない実に普通の行動パターンだ。

しかし俺の目は誤魔化せんぞ。

毎週末の外出にはきっと意味があるはずだ。

将を落とさんとすればまずは馬を射よ……少し意味が違うか。

要するに弟と仲良くしたいなら、弟が休日になにをしているか知る必要がある。

なに、プライバシーの侵害？

失敬な、俺はクォヴレーの保護者だから、弟のことを知る義務があるのだ。

とにかく日記はこれでお終いにする。

クォヴレー、お兄ちゃんは頑張るぞ。

●

「という訳だ。我々2人でクォヴレーをつけてみようと思う」

「イングラム、誰に言っているの？」

俺とヴィレッタは朝早くに家を出たクォヴレーの後をつけていた。
茶色いコートに帽子、マスク、サングラスと完璧な尾行スタイルで、2人仲良く電信柱に隠れながらクォヴレーを追う。
妹にこの話を打ち明けた時は断られるかと思っていたのだが、案外この妹はノリが良く、というかクォヴレー絡みだからだろうがホイホイ付いてきた。
妹はストーキングの達人だ。
いくらクォヴレーの勘が鋭くとも早々発見、などという事態にはならなかった。
クォヴレーは人気のない住宅街を歩いていき、とある公園の前で足を停めた。

「ん、なんだ？」

クォヴレーは公園の中に視線を向けるとため息をつき、また歩き出した。
あの公園になにかあるのだろうか？
俺たちは尾行しながら、公園の中にふと目をやった。

「……あれは」

公園の中では凄惨な殺戮劇が繰り広げられた訳でもなく、沢山の親子連れで活気が溢れていた訳でもなかった。
公園内は閑散としている。
ただ一つ、ブランコをキィキィと揺らす影が一つあるだけだ。

「……うわ」

ブランコに乗っていたのは子どもではなかった。
というより若者ですらなかった。

憔悴しきった様子、まるで周囲の空気が重く歪む重力場を形成しているかのような、そんな雰囲気を出した中年男性だった。
ゴテゴテとした服装に、見覚えのある仮面をつけている。
三つ目のような模様のついた仮面の男……

「……親父」
「なんだマダオか」

ヴィレッタが冷たく吐き捨てた。
そう、公園でブランコに揺られている仮面をつけた中年男性。別に腹が出ている訳ではないし、スラリとした痩身で客観的には若く見えた。
ユーゼス・ゴッツォ ―― 悪の組織「エアロゲイター」の元大首領、俺の親父だ。
大剣の男に組織を潰され、今は無職である。
まるで、だめな、おっさん……どこぞの誰かの迷言をヴィレッタが借りて言った。

「家にも帰らず、あんな所でなにしてるのかしら?」
「とにかく、行ってみるか」

俺たちは公園内に入り、項垂れる親父 ―― ユーゼス・ゴッツォに近づいた。
接近して分かったが、片手にワンカップを持ちブランコに揺られていた。
傍には空ビンが沢山散乱していて、かなり酒臭い。
野郎、朝から泥酔か、無職なのにいい身分じゃないか。
まさに、だめな、親父……略してマダオは俺たちの影に気付いたようで、

「おや……お前たち」
「親父、こんな所でなにしてる？　就職活動はどうした？」

生きていれば悪者だって腹がすくのだ。
そして飯を食うには金がいる。金を得るには働かねばならぬ、世知辛い世の中だね。
元悪の組織の大首領だろうが世界を救ったヒーローだろうが、職を得るためには就活をしなければならないのだ。

「落ちたよ」

はっきりと重い言葉が返って来た。

「昨日、面接前に落とされた……私はもうダメだ……恥ずかしくてもう仮面を取れないよ……」
「いやそれは仮面取らないから落とされたんだろ。ていうか昨日？　朝までここで飲んだくれてたのか？」

まさに、だめな、大人……略してマダオは俺の言葉に小さく頷いた。
呆れたものだ、残り少ない蓄えをこんな悲しい使い方をするなんて……。
親父　――　ユーゼス・ゴッツォは小さく呟いた。

「やはり職歴に『秘密結社大首領』と書いたのがまずかったのかなぁ……」

それは落とされて当然だろう。
だめだコイツ、早くなんとかしないと。
親父は呆けていた視線を隣のブランコへと向けた。

「……もう、私の味方はオータムちゃんだけだよ……」
「なに？」
そう言われて、俺は始めて隣に人がいたことに気付いた。
これは気づけなくても当然だと思う。
――小っさ！　なに、こいつ？
それが俺の第一印象。
全高３０ｃｍ程の２頭身の人間がブランコに座って、親父の酒の抓みの「チーカマ」を頬張っていた。
ハムハム、一生懸命食べてる姿はなんとも可愛らしい。
お持ち帰りしたくなる愛らしい生物の存在に、妹が反応しない理由などなく、
「おお、これは可愛い！」
ひょい、とヴィレッタが謎生物を持ち上げる。
おい危ないぞ、と俺が声をかけるよりも早く謎生物が声を上げた。
「ワタチのなまえはおーたむ・ふぉー」
この謎生物はオータム・フォーというらしい。
「このせかいの神にょ」
「ああーん、可愛いわー？　ねえ、イングラムこの子家で飼いましょう？」
「駄目です」
――パンッ！！

俺の足元に新しい弾痕ができた。
銃で脅したって駄目なものは駄目です。
「はなしぇーこのでっどこぴーめー」とか言ってる謎生物など飼えるはずがない。変な菌持っていそうだし、なにより家計が許してくれないのだ。

「チィ！」

ヴィレッタが親父譲りの悪党丸出しの舌打ちをする。
しぶしぶヴィレッタはオータムという謎生物を手放し、親父の膝の上に置いた。
チーカマを食べきったオータムが親父の顔を見上げる。

「ユーさん、おなかすいたー」
「よしよし……まだあるからドンドンお食べ」

コンビニ袋から新しいチーカマを取り出し、包装を取ってオータムに与える。
オータムは目を輝かせてチーカマに齧り付いた。
良く見るとコンビニ袋の中身は全てチーカマである。
だからもっとましな金の使い方をしろと……まあ、いい。
すっかり忘れていたが、俺はクォヴレーを追っている最中だった。

「親父、いつまでも飲んだ暮れてるんじゃないぞ」
「……ああ……」

このマダオ、本当に大丈夫だろうか？
しかしクォヴレーから大分離されてしまったな。目の前のマダオが俺たちの動きを止めるための策略だとしたら、弟は大物の軍師に

なれるかもしれない。
マダオと謎生物オータムを置いて俺たちは公園を出る。
だが大分時間を喰ってしまった俺たちの視界に、クォヴレーの姿は影すら映らない。
あーしまった……完全に見失ってしまったようだ。

「大丈夫よ」

ヴィレッタが言った。
今から探しても、俺たちはおそらくクォヴレーは見つけられないだろう。
なのに、この妹はなにを持って大丈夫だと言い張るのだろうか？
すると、ヴィレッタは懐から携帯電話サイズの小さな液晶画面を取り出した。
俺が覗きこむとこの『エリア』の地図に小さな点が2つ明滅している。

「これは受信機よ。こんなこともあろうかと、クォヴレーの靴に発信器を仕込んでおいたの」

流石はストーキングの達人、いやあ、お見それ致しました！
まさかその毒牙を身内までかけていようとは……ヴィレッタには悪いが、帰ったら発信器は人知れず処理しておくことにします。
だがこの状況で発信器があるのは非常に助かった。
ヴィレッタの発信器を見る。中心にある点が俺たちで、それから離れている点がおそらくクォヴレーで間違いないだろう。
距離はそう離されていないように見える。
そしてクォヴレーの点は繁華街のある地点で停止していた。

「こっちのようね」

「では行くか」
「ええ」

待っていろよクォヴレー、お兄ちゃんが今行くからな！
俺たちは短い会話を済まし、ヴィレッタの先導で繁華街へと向かった。

●

「いたぞ、クォヴレーだ」

ヴィレッタに導かれるまま辿り着いた繁華街で、俺たちはクォヴレーの姿を発見した。
それにしてもヴィレッタの発信器は本当に正確で、探し人の位置も一撃だった。
なんと言うか気持ち悪いな……む、もしや俺にも取り付けられていないだろうな？

「イングラムには付けないわ」

だから頼むから妹よ、頼むから兄をそんなにあっさり切り捨てないでくれ。
……まあいい、それよりも今はクォヴレーだ。
クォヴレーは家を出た時のままの姿で、喫茶店の前の電信柱に背を預けていた。

携帯電話を弄りながら周囲を気にしている。
なんと言えばいいのだろうか、待ち合わせ場所で待ち人を待っているように、俺には見えた。

「クォヴレーったら、なにをしているのかしら？」

ヴィレッタが興味津々に電信柱から体を乗り出し、クォヴレーの事を観察していた。
クォヴレーはまだ電信柱から移動しようとしない。

キョロキョロと周りを確認する姿は、俺の背中に冷たい脂汗を流させ始めた。
嫌な予感が稲妻となって俺の中を駆け抜ける。

若い男子が着飾って街で誰かを待っているという、このシュチュエーション。
ハーレムを目指すを俺にはクォヴレーの心情が非常に良く理解できた。
弟は今、不安と緊張と高揚感で胸が満たされているに違いなかった。
よかったな弟よ、お兄ちゃんは嬉しいぞ。
しかしここで問題が発生する。

――当然、待ち人が男であるはずがないだろう

「クォヴレーの私服姿はやっぱり可愛いわ？」

そしてこの変態の妹――ヴィレッタである。
まずい、ひじょーにまずい。
ヴィレッタはクォヴレーに異常なまでの偏愛を向けている。

ショタコンで可愛いモノが大好き、趣味はストーキングで美少年の写真を収集すること。
しかし妹が一番好きなモノは、愛する弟であるクォヴレーだった。
しかも気に入らないことがあると愛銃の「レベッタＭ９２」を撃ち回す悪癖がある。

「……」

ヴィレッタはクォヴレーの姿を見ながら、それは素晴らしい笑みを顔に浮かべていた。
天使のような笑顔……それが悪魔に豹変しないことを、俺は切に願いながらクォヴレーを見守る。
弟よ、お前がお兄ちゃんの期待を裏切ってくれることを、俺は痛切に望んでいるぞ。

「お待たせしました、待ちましたか？」
「い、いや、俺も今来たばかりだ」

俺の愛する弟は、俺の期待を決して裏切らなかった。
甘酸っぱい、ともすれば青臭い会話が現れた金髪の女性とクォヴレーの間で交わされる。
金髪を短く切りそろえた、間違いなく美人の部類に入るこの女性がクォヴレーの待ち人だったようだ。
よかったなクォヴレー、お兄ちゃんはお前を祝福しよう。
しかし――

「じゃ、じゃあ――子さん、どこに行こうか？」
「お任せしますわ――さん」

二人は手を繋いで歩きだす。

距離が遠すぎたためクォヴレーの相手の名前は聞き取れなかったが――

――ジャキンッ！！

耳元で響いた、乱暴に弾丸を装填する音だけは、聞きたくなくても耳に入ってくる。

俺は恐る恐るヴィレッタの方を振り向いた。

どす黒い色の覇気を身に纏った、青髪の鬼がそこにいた。

眉間にしわが寄り、こめかみに血管が走り、サングラスの上からでも目がイっちゃってるのが分かる。

「クォヴレーに近づく女は――」

ふらり、とまるで幽鬼のようにヴィレッタが一歩目を踏み出す。

ジャキン、と銃を構えた。

狙いは勿論、金髪女の後頭部だろう……弾がジャムって、手元で暴発したりしないかな？

多分、しないのだろう。ヴィレッタの整備はいつも完璧だからな。

血の雨の予感。

「――皆、Ｄｅａｄ（デッド）　Ｅｎｄ（エンド）よ！！」

「逃げろおおぉおっ、クォヴレーー！！」

思わず叫んでいた俺は、勢いに任せてヴィレッタの体に飛びついた。

ヴィレッタは体勢を崩し、俺に押し倒される形で後ろ向きに転倒する。

――パンッ！

その拍子にヴィレッタの銃が空中に向かって発射されていた。
繁華街の人たちの視線が俺たちに集中し、クォヴレーたちも当然のように気づく。

「に、兄さん!?」
「逃げろクォヴレー！　俺のことはいい、お前だけでも生き延びろ！」

俺たちが揉み合っている姿に驚愕しているクォヴレーの隣で、金髪女性は青ざめた表情になっていた。
街中での発砲、女性が恐怖するのも無理はない。

「どけえ、イングラム！」
「離さんぞ、ヴィレッタ！　クォヴレーを守るのは俺だ！」
「クォヴレーを守るのは私よ！
ああ、可哀想なクォヴレー、その害虫に騙されてるのね。すぐ駆除してあげるから！」

――パン、パン、パンッ！

ヴィレッタが続けざまに「レベッタＭ９２」を3連射する。
街の人から悲鳴が漏れるが、運よく誰にも命中しなかったようだ。
ええい、早くしろクォヴレー！
この変態妹を押さえつけておけるのにも限界がある！

「済まない兄さん、恩に着る！」

クォヴレーはそう言うと、金髪女性の手を引いて人混みの中に紛れて消えて行った。

兄さん、か……ふふふ、いい響きだ。
達者で生きるんだぞクォヴレー……なんて、

「死ねぇ、イングラム！」
――パンッ！

感傷に浸っている余裕は俺にはなかった。

「いい加減にしろ、ヴィレッタ！」

ハーレムどころではない、このままでは俺の命が危うい。
このままヴィレッタを放置して逃げ出すのが生命保護の最良の手だが、それだとヴィレッタが発信器を辿ってクォヴレーたちを発見してしまう。
それでは元の木網だ。
なんとかしなくては……ええい、こうなっては仕方ない！
俺は片手で銃を抑えつけヴィレッタの拳に必死に耐えながら、空いた手をヴィレッタの懐に侵入させ、乱暴に弄った。

「あっ！」

ヴィレッタが一瞬艶っぽい声を上げたが、すぐに殺意しか籠らない目で俺を射ぬいてきた。
ああ駄目だなこれは、後で帰って遺書でも書こう。

「貴様、公衆の面前でなにをする、気でも狂ったか！！」
「ええい、なんとでも言え！　それにそれはこっちの台詞だ　――げふう！！」

ヴィレッタの強烈な蹴りが腹に浴びせられ、俺はとうとうヴィレ

ッタから引き剥がされてしまう。
まずい、撃たれる！
俺は思わず身構えるが、

「クォヴレー！」

ヴィレッタは倒れている俺には目もくれず、クォヴレーの後を追って駆け出していた。
人混みに隠れ逃げるクォヴレーを、普通に探しても見つけられるはずがない。
そう、普通に探していてはな。

「まったく、手間を取らせる奴らだ」

俺の手には、クォヴレーの位置を知るための例の受信機が握られていた。

先ほどヴィレッタの懐からかすめ取ったものだった。
なんの目的もなく、俺が妹に乱暴を働くと思ったか？
俺の野望はハーレムだ。
ハーレムを目指す男は女性に乱暴を働いてはいかん、常に優しく紳士的に接してやらねば女はなびいてこないのだ。
まぁ、今回は緊急時だったから、少しばかりヤンチャをしてしまったがな。
だが、これで愚かな妹は愛する弟を追うことは敵わないだろう。
俺は立ち上がると、受信機を地面に投げ捨て踏みつけた。
嫌な音を響かせて受信機は壊れた。

「さて、警察が来る前に退散するとしよう」

逃げ足の速さは悪党の基本スキルの一つである。
俺はすたこらさっさと、繁華街から姿を消したのだった。

●

日は傾き、既に夕暮れ。

「まったく、とんだ災難だった」

自宅に帰った俺は街でヴィレッタに付けられた傷の手当てをしていた。
打撲だけでなく、なんだかんだで擦り傷も結構負ってしまった。
取り合えず消毒して、必要な所に絆創膏を貼る、それだけの簡単な処置ぐらいしか俺はしない。
一方ヴィレッタはというと、

「クォヴレー……」

まるでうわ言のように独り言を呟きながら帰宅し、自室のベットに突っ伏してしまった。
おそらくクォヴレーを発見できなかったのだろう。
いい気味だ。しかし俺を射殺しようとしたことに関する謝罪は一つもない。これは如何なものだろう。
まあいい、はっきりと言ってしまえば、いつものことだ。

「兄さん」

気が付くと玄関口にクォヴレーが立っていた。
その後ろには寄り添うようにして仮面の女性――バルシェムのナナコさんがいる。
兄さんか……ふふふ、いい響きだ。
クォヴレーがそう呼んでくれるだけで、今回の負傷は無駄なものではないと俺は実感できる。

「今日は助かった、ありがとう」
「なに、気にすることはない」

クォヴレーの感謝の言葉。
本当は嬉しくて大声を出したかった俺だが、そこは努めて平静に返事をした。

「それよりもクォヴレー、今日の女性は一体誰だ？　見覚えのない女性だったが……」
「う……そ、それは」

俺の意地の悪い質問にクォヴレーの言葉が詰まる。
困った顔のクォヴレーもまた可愛い。
今日一日振り回されたのだ、このくらいの報酬があっても罰は当たらないだろう。

『いいですよ坊っちゃん、そこからは私が説明しますから』
「ナナコさん……でも」

兄妹の会話になぜかナナコさんが口を挟んできた。
渋るクォヴレーを、いいんです、とナナコさんは諭して俺の方を向いた。

『イングラム様』
「なんだ、ナナコさん？」
『実は今日の女性なのですが　――』

ナナコさんはそう言うと自分の仮面に手をかけた。
ぷしゅーという排気音と共に止め具が外れ、仮面の下から美しいショートの金髪が現れる。
俺の目の前にいるナナコさんの顔は、繁華街で見た金髪の女性そのものであった。

「――　実は私なんですよ」
「……マジですか？」
「すいません、本当なんです」

開いた口が塞がらないとはこのことだ。
ナナコさん＝街にいた金髪の女性、完全に俺の予想範囲外の事実だった。
ナナコさんがクォヴレーの逢引の相手だったとは……するとなにか？　俺たちが仕事で家を空けている間にも、あーんなことやこーんなことしているというのかこの２人は！？

「そんなことしてません！」

ナナコさんがきっぱり否定する。

「今回は坊っちゃんたってのお願いだったものですから……」
「うっ……」

ナナコさんの言葉にクォヴレーは赤面し、口を詰むんでしまった。

しかし事情を説明せずこの場を乗り切ることができないこと悟ると、クォヴレーは重い口をやがてゆっくりと開いた。

「よ、予行演習なんだ」

「予行演習？」

俺は首を傾げておうむ返しする。

「実は、今度『ゼ・バルマリィ学院』のアルマナさんをデートに誘おうと思ってたんだ。

それで最近は部屋でデートスポットを本で探したり、バイトの金で服を買ったり、一人でスポットに行ってみたりしていた」

俺が観察日記をつけているときに読んでいた本はそういうものだったのか。

服までバイトして買うとは殊勝なことだ。

俺に言えばいくらでも買ってやるのに……と、それが嫌だからクォヴレーは俺に黙っていたのだろう。

我が弟ながら素晴らしい、後で新しい靴でも買ってやろうと思う。

その靴発信器ついてるしな。

少しはあのマダオも見習ってもらいたいものだと、俺が思っていると、

「でもそれだけだと不安で……」

クォヴレーは金髪の美女、ナナコさんを向いて言った。

「ナナコさんに協力してもらってデートの練習を……」

「という次第でございます、イングラム様。お二人を謀っていたことお詫び申し上げます」

ナナコさんは俺に頭を下げて謝罪していた。

「頭を上げてくれナナコさん」

俺の心は感謝の気持ちで一杯なのだから。

いつも弟と俺たちの世話をしてくれてありがとう。

感謝の気持ちを忘れてはいけない。俺は、昔の親父のような悪党にはなりたくはないのだ。

「それよりも　――」

でもね、今はそれよりもとーっても、とーっても大切なことがあるのだ。

「――　2人共早く逃げてくれないかな？」

「「えっ？」」

――　ジャキンッ！！

俺の背後に、暗黒の魔闘気を持つ青髪の鬼神が降臨していた。

忘れたくても忘れられない、弾倉に弾を送る動作のスムーズなこと。

ヴィレッタが目をカッと見開いて叫んだ。

「クォヴレーに近づく女なんて、全てＤｅａｄ（デッド）　Ｅｎｄ（エンド）よ！」

「逃げろおおおおっ、クォヴレーと謎の女性！！」

「に、兄さん、恩に着る！」

俺は再びヴィレッタを押し倒し、ヴィレッタは発砲して壁に穴を空け、クォヴレーとナナコさんは急いで逃げ出した。

これが俺の家の日常。
始末の悪い変態妹と、可愛い俺の弟と、ナナコさん。
俺たちは４人で家族なのだ。
親父の悪の組織で、枷にはめられたまま人生を終えるはずだった俺が、まっとうに働いてやっと掴んだ大切な家族なのだ。
例えそれが、銃弾飛び交う家庭だとしても俺は満足だ。
俺はこれからも守っていきたいと思う。
俺　――　イングラム・プリスケン家（ち）の日常を。

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。
『エリア』には個性豊かな人間が沢山いる。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない

おまけ

「クォヴレー観察日記　△月×日」

最近、クォヴレーが俺と以前より話してくれるようになった。

アルマナ、という子とどうなったのかは知らない。

今は聞かない方がいいのだろう。
話すべきときに話してくれると俺は信じている。

［ヴィレッタ観察日記　△月×日］
最近、ヴィレッタのブラコン具合はさらに悪化しているようだ。
またクォヴレーの靴に発信器をつけようとしていた所を発見した。
しかし、目撃しただけなのに発砲するのは止めてもらいたい。
俺はこの妹をどう扱えばいいのか、俺は皆目見当もつかない

［ナナコさん観察日記　△月×日］
最近、ナナコさんはヴィレッタの視線に怯えている。
仮面を外せば即発砲されるだろうに、律義に家政婦を続けてくれている。
ありがとうございます。
その内、またお礼をせねばなるまい。

［マダオ観察日記　△月×日］
今日も、マダオは公園でブランコに乗っています。
昨日もまた就活に失敗したようです。
なんでも刃物工場の面接に合格したものの、
工場に入った途端に「刃物怖い！」と気絶してしまったとのこと。
親父、大刀の男が完全にトラウマになっているようだな。
就職して自分の食いぶちを稼げるようになったら、我が家に迎え入れてやらんこともないと思う。
頑張れ、マダオ。

Ｔｉｍｅ　Ｄｉｖｅｒ　～プリスケン家の日常～（後書き）

＜キャラ紹介＞
イングラム：ブラコン。ジェネ高数学教師。
ヴィレッタ：ブラコン、ショタコン、可愛いもの大好きな変態。ジェネ高国語教師。
クォヴレー：アルマナに恋するジェネ高1年生。少し反抗期。
ナナコさん：バルシェム（7号）だからナナコさん。中身は作者オリジナル。
オータム・フォー：
公園に住む『エリア』の神様。いつもおなかを空かせており、信者の持ってくる貢物（餌付け）で生活している。チーカマ大好き？
ユーゼス　：マダオ。

＜次・回・予・告＞
エクセレン「あ、終わり？　じゃあキョウスケ、打ち合わせ通りよろしく！」
キョウスケ「……しかたあるまい」

キョウスケ
「うなれリボルビングステェェク！　そして克目せよ！　吹き荒れるロマンスの嵐！
次回、スパロボ学院！　俺のアルトが愛と悲しみの空を切り裂く！！」

エクセレン
「はい、嘘っぴょーん♪　次回は、みんな大好き、あの男が帰って

くる！？

次回、スパロボ学院「仮面〇〇　お呼びとあらば即参上！」、どんな相手だろうと、撃ち落とすのみ！」

キョウスケ「……借金、あと幾らだ？」

エクセレン「３０３５００円よーん」

キョウスケ「……」

仮面善我　～お呼びとあらば即参上！～（前書き）

＜注意事項＞
絶賛、キャラ崩壊中です。
キャラ崩壊レベル４（ＭＡＸ５）。
「シャドウミラー」勢のイメージを崩したくない方は閲覧しない方が良いかもしれません。
それでも良いという方は、どうぞお読み下さい！

仮面善我　～お呼びとあらば即参上！～

俺は改造人間である。

む、いきなりこんなことを言っても意味が通じないかもしれんな。
ではまず、自己紹介をしておこう。
俺は巨大暴走族「シャドウミラー」の１５番隊の隊長をしている走り屋だ。
いつも仮面をつけているので、仮面ライ○ーなんて呼ばれてたり、呼ばれてなかったりする華の高校３年生である。

いつも仮面をつけており、若干老け顔なので学生に見られないことが多いのだが、断固言わせてもらおう。
俺は高校３年生である。
誰がなんと言おうと３年生である……と思っている。
何故こんな事を言うのかというと、俺には過去の記憶がない。
具体的に言うと、高校３年より前の記憶が一切なかったりする。
まぁ、それは別に瑣末な問題なので捨て置こう。

せっかくなので、俺が通う高校も紹介しておこうと思う。
なぜか高校が密集する地域『エリア』。
その土地で悪の巣窟と忌み嫌われる影鏡高校には、様々な奇人変人が集まって来る。
危険な部活も山のように存在するが、中でも最も危険なのが影鏡高校第２科学部……そしてその部長である「レモン・ブロウニング」である。

毎日、妙な実験をして部室を爆破していたり、奇妙な発明品を生徒で人体実験していたりする。

また、一部生徒（アクセル特攻隊長など）に自分のことを姉さんと呼ばせていたり、番長格の人間（ヴィンデル総隊長）を顎で使ったり、とにかく悪い噂に事欠かない素晴らしい人間です。
かく言う俺も、レモンの姉御には頭が上がりません。
なぜだろう？　理由は良く分からない。
レモンの姉御の事を聞かれると、パブロフの犬のように次のフレーズが口から出てくる。
とにかくレモンの姉御はとても素晴らしく、美しいお方です、と。
だがそんなレモンの姉御に、昔一度言われて忘れられない言葉があった

記憶のない俺だが、その言葉だけは今でもしっかり覚えている。

そう、俺こと　――　ウォーダン・ユミルはレモン・ブロウニングの造った改造人間である……らしい。

スパロボ学院　～OGだよ、全員集合～
仮面善我（ゼンガー）　～お呼びとあらば、即参上！～

なぜか高校が密集する地域『エリア』にある影鏡高校の校舎裏、

「――　でよ、俺っちはやっぱりレモン姉さんがいいと思う訳さ、これがな」

そこでアクセル・アルマー隊長が熱弁を振るっていた。
赤い癖のあるワカメヘアーと眠そうにも見える垂れがちの目が特

徴だ。
なんでも『蒼髭流格闘術（ソウシリュウ）』免許皆伝らしく俺たちのチーム「シャドウミラー」で特攻隊長を張っている、チーム屈指のステゴロ実力者である。

「やっぱ女はミステリアスなのに限るよなー、その点レモン姉さんは言う事なしなんだな」
「レモン様を、そんな汚らわしい目で見るなでございますのことよ、アクセル隊長」

アクセル隊長の言葉を、変な敬語を吐く巨乳美人 ―― ラミア・ラブレスが咎めた。
ラミアは「シャドウミラー」で17番隊隊長を張っている俺の同僚だ。
冷静沈着なドライビングテクニックを持ち、ミス一つない完璧な走りをいつも見せてくれる。
しかしこの所はジェネ高に頻繁に遊び行っているらしく、こうして顔を合わせるのも実は久しぶりである。

「貴様のようなワカメはレモン様に相応しくないと思いますわ」
「なんだとう、この鉄面皮女め。
ワカメサラダだって、隠し味でレモンを絞れば意外と美味しいかもしれんだろうが、なぁ、ウォーちん？」
「はあ……」

アクセル隊長が俺に話を振って来た。
俺たちは今校舎裏でたむろしながら話に華を咲かせていた（主にアクセル隊長がだが）。
人目には良く映らないが、よくコンビニなどで中坊が座って駄弁っているような感じで、俺たちはお互いに向きあい意見を交換して

いた。
議題は「恋人にしたい女性」……要するに恋バナである。
「……そういうものでしょうか」
「そうだってばよー。一見まったく不釣り合いな2つが合わさった時、あれ、意外とこれいけるんじゃね？　なんてのは良くあることなんだぜー、ウォーちん」
「……隊長、その、ウォーちんというのは止めてくれませんか？」
俺の名前はウォーダン・ユミル。
そのためかアクセル隊長は俺のことをウォーちんと呼ぶ。
ラミアに至っては俺のことを「15番」扱いだ、名前すら覚えてくれてないのかもしれない。
アクセル隊長は俺の訴えを無視して、
「あー、でもアルフィミィーちゃんも捨てがたいんだよなー。あれ、お前ら知らねえの？
ジェネ高の1年にアルフィミィーちゃんっていう可愛い娘がいるんだよ。
これがツルペタ寸胴のロリータ体型だけど、神秘的な雰囲気っていうか不思議ちゃん的なところがあって、そこがまた堪らん、これがな」
「色魔め」
ラミアがボソリと呟いた。
「なんだとラミア、もういっぺん言ってみろ」
「色狂いのボケ」
ピシャリと言い切るラミアにアクセル隊長の顔色が変わった。

この2人に喧嘩されると正直洒落にならない。
影高にどれだけ甚大な被害がもたらされるか……

「ああーん、なんならテメエから昇天させたろうかい、コラァ」

アクセル隊長の拳に闘気が集まる前に、俺は仲裁に入ることにした。

「落ち着いてください、アクセル隊長。
ラミア、貴様も上官に対してなんと言う口をきくのだ。早く謝罪しないか」
「すまんこってす」

謝っているのか馬鹿にしてるのか分からないラミアの詫びが飛ぶ。
この娘はなぜだか、敬語が上手く話せないのだ。
来日したての外人ではあるまいに……しかし、その事実は俺たちの間では周知の事実だ。
「しゃあねえなあ」、そう言ってアクセル隊長は拳を収めてくれた。

「それよりよぉ、ウォーちんの方はどうなんよ?」

どうとは、何の事だろうか?
アクセル隊長の話は時々要領を得ない時があるので困る。
俺が逡巡していると、痺れを切らしたアクセル隊長が訊いてきた。

「前に『気になる女性ならいる』って言っていただろ?」
「うっ……それは……」

アクセル隊長の嫌らしい笑みに俺の言葉は詰まる。

確かに以前にも「シャドウミラー」内でこうして恋バナをしたことがある。
夜の峠に繰り出す前の集会で、特攻隊長のアクセル隊長がその他大勢の構成員たちと盛り上がっていた。
そこになぜか俺が引き込まれる羽目になり、そんなことを言わされた記憶はある。
アクセル隊長が俺に、マイクを押しつけるように拳を押しつけてきた。

「近況報告をお願いします」
「ほほう、それは気になることでございますでしょうなぁ、アクセルプロディーサー」
「まったくその通りだぜ、ラミアアナ。
さあウォーちん、潔く観念して吐いちまいな」

なんですかそのキャラは？
テレビ局の局員なのか尋問する刑事なのか、どっちかはっきりしてもらいたい。
それにラミア、なんだ貴様まで一緒になりおって！
この2人から逃げ出すのは不可能だ。
俺は逃走も考えたがここは校舎裏だし、日の当たる所まで逃げ出しても、すぐにこの暗がりに引きずり込まれるのが目に見えていたので止めた。

●

そう……俺こと、ウォーダン・ユミルは恋をしていた。

「じゃあここの答えを答えてください」

彼女が教壇に立ち、黒板に数式を書く。

緑色の髪の毛をなびかせて生徒を指名し、問題の回答を求めていた。

綺麗に化粧をしてスーツを華麗に着こなしている。

目に美しく映るその数学教員に、俺は恋をしていた。

いや、これが恋なのだと思う。

俺には記憶が無い。

なので初恋というのも知らないし、誰かを思い胸を焦がした経験もなかった。

だが俺が今感じている感情はまさしくソレなのだと俺は思っている。

「○○君、この解はどうなるのか答えてくれないかしら？」

「はぁ？　なんでそんなことしなきゃなんねえの？　アンタが自分で答えてろよ、ソフィア先生よ」

指名された生徒はそう言うと、ゲラゲラと大声を上げて笑いだした。

周りにもそれは反響して、教室は下衆な笑い声で一杯になる。

ソフィア・ネート先生……それが俺の気になる女性の名前だった。

それにしてもこの教室の生徒たちは品が無い。

この際だからはっきり言っておこう。

『エリア』における影鏡高校の品位は最低と言っていいだろう。

それこそ悪の巣窟と言われる程度には、腐った馬鹿どもが集まるため、この様な授業風景は日常茶飯事だった。

それに頭を悩ませて辞めていく教員は後を絶たない。

影高において教員など舐められて当然の存在と化していた。

「でもソフィア先生が『お願い答えて』って、涙目で言ってくれれば答えてやるぜ。
答え分かんねえけどな、ギャハハハ」
「なにそれ、馬鹿じゃねえのおめえ、ははは――」

――バガンッ!!

生徒たちの笑い声は突然の破砕音で途切れることとなった。

俺が立ち上がり、拳を振るっていたからだ。
俺が拳を叩きつけた机は木製部分を真っ二つに粉砕され、金属部分は大きく歪んで二度と使い物になら、なくなっている。
シン……という沈黙、それと共に集まる視線を前に俺は叫んでいた。

「貴様ら！　教官は今講義中だ、黙って聞かんか!!」

ソフィア先生が真面目に授業をしているというのに、貴様らときたらどうだ?
そんなことだから、悪の巣窟だとか、社会のゴミだとか言われるんだぞ。

「へっ、バカじゃねえの」

教室の一角からそんな声が聞こえてきた。
漏れた呟きに隠れた本音に、俺の頭は灼熱する。
バカ、だと?
なんの努力もせず、目指すものもない貴様らになにが分かる?

ソフィア先生は貴様らに真っ当になってもらいたい、そう思っているのに！

「もう一度言ってみろ、貴様ぁ！！」

「ひ、ヒイ！」

呟いた生徒の胸倉を掴んで持ち上げた。

生徒は呆れるほどに軽く、３m程の高さに俺は吊るし上げてやった。

「ご、ごめんよ、ウォーダン君！　今のは冗談さ、冗談なんだよ！」

なにが冗談なものか、本気で思っていたくせに。

きっと仮面の下の俺の表情は歪んでいることだろう。

いっそ殴ってやろうか……そんな思考が俺の中を駆けていった。

が、

「暴力は止めなさい！」

ソフィア先生の声に俺は我に返った。

「暴力はなにも解決しないわ、あなたなら分かるでしょうウォーダン君」

「きょ、教官……申し訳ありません」

ソフィア先生の言うとおりだった。

俺がここでこの生徒を殴り倒した所でなにも変わりはしない……

「机を破壊した罰として廊下に立っています」

俺は自主的に罰を受けることにした。
俺が破壊したことは学校の備品だ。
廊下で立ったぐらいでそれが補完されるとは思わないが、こうでもしなければ俺の気もちは収まらない。
俺は教壇に立つソフィア先生の前を横切り、廊下へと向かう。
そのとき、ソフィア先生の呟きが聞こえた。

「私のためにしてくれたのよね、ありがとう」

おそらく、その呟きは俺にしか聞こえていなかっただろう。
だが俺は思った。
ソフィア先生、貴女は俺の天使だ！　見ていられるだけで満足だ！
授業中になにかあろうと、貴女は俺が必ず守ってるせる！

その誓いに嘘はない。
……しかし最大の失敗は、このことをアクセル隊長に話してしまったことだった。

●

「じゃあラブレター書こうか」

俺の話を聞いたアクセル隊長の開口一番の言葉だ。

決死の想いで告白した俺の恋心、アクセル隊長はそれに見事に喰いついた。

俺の意志は無視し、ラブレターを書いて帰宅中のソフィア先生に渡してしまおうという作戦に、アクセル隊長の発案により俺たちは行動していた。

ソフィア先生は仕事を終え、自宅へと歩いて帰っている最中だ。その後ろを俺とアクセル隊長が忍び足で追っている。それが今の状況だった。

ちなみにラミアはジェネ高に遊びに行ってしまったので、ここにはいない。

「おいウォーちん、いつ渡すんだよ？」

「そ、それは……」

アクセル隊長の言葉に俺は言い淀む。

俺には記憶がない。

ラブレターを手渡した経験など当然ないし、相手は学生ですらなく教師だ。

一応俺も勉強したが、俺の読んだ本に教員へのラブレター渡し方など書かれていなかった。

渡すタイミングが分からない、それにかける言葉もだ。

どうすればいい？　自宅に着いてから訪ねて渡すべきか？

頼みの綱のアクセル隊長を俺が見と、ちょうど誰からか電話がかかって来た所のようだった。

「ハロハロ、あなたのアクセルちゃんですよ。

……ああ、アルフィミィーちゃん、わざわざ電話くれたのー、悪いねーこれがさ」

電話の相手は先ほど言っていたアルフィミィという娘らしかった。

「今週のデートの約束？　もちろん覚えてるってー、土曜日にコン

パチワールドだったよな？
……分かってるって、遅れないさ、これがな」

アクセル隊長は携帯電話にそう言って、電話を切った、

「悪いウォーちん、先生にバレテねえかな？」
「……大丈夫のようです」

天下の歩道で携帯電話で会話していても不自然ではない。
ソフィア先生は俺たちに全く気が付くことなく、すたすたと自宅への帰路を急いでいるようだ。
ラブレターを渡すなら今か？
そんな俺の心情を無視して、またアクセル隊長に着信が入る。着信音は「ＤＡＲＫ　ＫＮＩＧＨＴ」。

「ハロハロ、あなたのアクセルちゃんですよ。
……あっ、レモン姉さん。連絡してくれるなんて嬉しいなぁ。なんか用？
俺、体なら余裕で空いてるけど」

空いてないでしょうが！
隊長、あなたは俺のラブレター作戦の発案者なのだから、最後まで付き合ってもらう義務がある。
その自覚があるから、俺について来てくれたのではないのですか？
そのとき、

「あっ」

ソフィア先生の悲鳴が聞こえた。
「なにごと？」と俺がソフィア先生に目を向けると、仮面をつけ

た悪の組織の戦闘員のような奴らがソフィア先生を取り囲んでいた。

「ソフィア・ネート先生だな？」

「な、なんですか、あなたたちは？」

「我が組織『エアロゲイター』のボスがお前を所望だ。一緒に来てもらうぞ！」

「むーむー！」

仮面の人たちがソフィア先生の口をふさいで、どこかに連れ去ろうとしていた。

……なんだ、この状況は！？

俺のラブレター作戦を妨害する誰かの作戦なのだろうか？

俺はどうすればいいんのか分からず、アクセル隊長の方を向いてみた。

「え、二股なんてしてないって、本当だって。俺っち、レモン姉さん一筋だもん！

……信じてほしかったら今すぐ部室まで来いって……そんなの楽勝だぜ。

……え、今の間はなんだって？　ははは、気のせいだって、今すぐそっち行くってば、これがな」

なんて会話を交わしてアクセル隊長は電話を切り、俺の方を向いて言った。

「ごめんウォーちん、そう言う訳だから！」

アクセル隊長、あんた煽るだけ煽っトンズラなんて、いくらなんでもないですよね？

なんですか、そのむやみに優しい笑顔は？

「ちょっと待って！」
「すまん！」

アクセル隊長は疾走し、俺を置いてどこかに行ってしまった。
アクセル隊長の走力は並ではない。
オリンピック選手顔負けの速度で一瞬で俺の視界から姿を消した。
くそう、こうなっては仕方ない、俺はソフィア先生の方を振り返るが、そこには既に人影１つ見当たらなかった。

「なんてこった！」

ソフィア先生が誘拐された！
俺は急いでソフィア先生の探索に当たった。

●

俺は地域住民に聞き込みをしながら、ソフィア先生をさらった連中を追った。
すると意外とその姿を見ていた者がいて、足取りを掴むことができた。

「〇〇工場跡地の方に走って行ったよ」

俺はその言葉を頼りに疾走し、〇〇工場跡地に辿り着く。
そこには猿ぐつわをされたソフィア先生と、彼女をさらった仮面

の人が3人いた。
なんだか、隠し通路のような地下へとの入り口へを空けているところだった。

「待て、貴様ら！」

俺の声に仮面の人たちが振り返った。
俺に気付いたソフィア先生は涙を流しながら、俺の顔を見ていた。
ソフィア先生を泣かせるとは！
絶対に許さんぞ、仮面の者たち！

「貴様ら、教官を返してもらおうか！」
「なんだアイツ？　ナナコさん、あの野郎どうします？」

痩せ細った方の仮面の男が、リーダー格らしい仮面の女に尋ねていた。
仮面の女は、ふん、と俺のことを鼻で笑う。

「なんだいなんだい、学生には見えないけど、学生服着てるからこの女の関係者みたいだねぇ。
アンタたち、ユーゼス様の邪魔になる者は皆殺しだよ！　やぁっておしまい！」
「「あらほいさっさ！」」

女の掛け声に、痩せ細った仮面の男だけでなく、ソフィア先生の傍にいた大柄の仮面の男も応じた。
2人して俺に向かって飛びかかってくる。
その早さは人間のモノとは思えぬほどの俊敏さであった。

「舐めるな！」

2人の仮面の男は確かに早い。
だがはっきり言っておこう、俺は強い。
遠慮なしで戦えば、アクセル隊長に匹敵すると言われたことさえあるほどだ。
相手は早く、俺の攻撃はそう簡単には当たらないだろう。
仮面の男たちが一撃で俺を仕留めようと、人体の急所である水月やこめかみに打撃を放つ。
しかし俺は頑丈だ、異常なほどにな。
この程度では揺らぎもしない！

「ぬうぉりゃあ！」

俺に打撃を入れ隙ができた男たちを掴み、俺は奴らを地面に叩きつけた。
轟音が工場内に響き、床のアスファルトを砕いて男たちは地面に突っ伏した。
いい気味だ。
ソフィア先生を誘拐した罪がこの程度で済むと思っているのか。
そして、次は仮面の女、貴様だ！

「覚悟し――」
――パンッ！
「ぐは！？」

もの凄い衝撃が俺の頭を襲った。
そしてかつて無いほどの強烈な痛み、俺はそれに耐え仮面の女に向き直った。
女の手には銃が握られていた。

「き、貴様、銃とは卑怯だぞ！」
「なんだい、頑丈な奴だねえ」

女は俺に銃口を向け、そして連射した。
3発の銃弾が俺の顔の仮面に直撃する。

「ぐはっ！？」

俺は頑丈だ。
しかし銃撃があるなんて聞いてない。
命中した数など数える余裕はなかったが、俺の意識をもぎ取るに十分すぎる衝撃だったのは確かだ……

「なにやってんだいアンタたち。相手が強くたってチャカ使えばいいだけでしょうが、まったく」
「す、すいませんナナコさん」

途切れ行く意識の中で、声が聞こえた……
大切な人の……声が……

「ウォーダン君！　しっかりして　――　ウォーダン君　――」

ソフィア……先生……
俺の意識は一度そこで途絶えた……

●

以前、アクセル隊長が言っていた。

「欲しい物や勝ちたい相手がいるなら、決して諦めたりしちゃ駄目だぜウォーちん」

『蒼髭流格闘術（ソウシリュウ）』免許皆伝にして、巨大暴走族「シャドウミラー」の特攻隊長を勤める男、アクセル・アルマー。

一度だけ俺に話してくれたことがある。

アクセル隊長が一度も勝てたことのない強い男がいる。

俺は正直耳を疑った。

あのアクセル隊長が勝てない男など、この世に存在するとは思えなかったからだ。

「勝てなくても、死ななきゃ次がある。生きてれば、次は勝てるかもしれない。

だから俺は努力するのさ。

次こそ勝つためにってな、似合わないかもしれないがな、これがさ」

そんなことはない……アクセル隊長、あなたは光り輝いている……

それに比べて俺は……

「だからウォーちん」

アクセル隊長……

「本当に譲れないモノができたときには、決して引いちゃいけないぜ　――」

なぜだ……なぜ、あのときのアクセル隊長の言葉が蘇る？

俺には高3以前の記憶がない。
譲れないモノなんか、ありはしない……しかし、そういったモノが欲しくないと思ったことはない。
譲れないモノがある、のかは分からない。
だがアクセル隊長……俺は、俺は……今、引きたくはない。

「――俺たちは漢なんだからな」

ソフィア……先生……！
ソフィア、先生！

「うおおおおおおおおおっ！！！」

こんな所で倒れていられるか！
熱い想いを胸に抱き、俺は立ち上がった――

●

広大な敷地、そこを全て見下ろせる玉座に私はいる。

「ようこそ、ソフィア・ネート先生」

私の名前はユーゼス・ゴッツォ。
世界の有数企業を牛耳る秘密結社「エアロゲイター」の大幹部である。
私の組織は強大だ。

組織の命には日本政府はおろか、世界中の国々が従わざるをえない。
それほどまでに協力な組織が私の手の中にあるのだ。

そして眼下に広がる光景。
今、私の眼下には仮面の戦闘員「バルシェム」たちが無数に控えている。
1人1人が超人的な身体能力を持ち、様々な機密行動を行う私のコマたちだ。

そんな中、私の命を受けた3体のバルシェムが、目当てだった女を私の前に献上しにきていた。

「なぜですか!?」

女、ソフィア・ネートが吠えていた。

「なぜこんなことを……!? なぜ、ウォーダン君を殺したんですか!?」
「ふふふ……なぜ、だと?」

ソフィアの問いに私は答えてやることにした。

「意味などないよ」
「っ!?」
「ただの気まぐれだ」

彼女の想いを振り払うような私の言葉に、彼女は涙を浮かべて項垂れてしまった。
あーあー、可愛いったらありゃしない。

まあ彼女を追ってきた学生を殺したことには意味はないが、彼女を拉致したことには意味がある。
これは私の新たな野望の第一歩なのだ。
正直なところ、私の組織「エアロゲイター」は強力になりすぎ、その命令に背くことのできる組織や政府はもはや存在しない。
不満はない。
だがつまらんだろう？
世界中が自分の意のままになるのはいいが、それだけでは人生の暇を持て余す。
だから、私は決心したのだ。

「ソフィア先生……貴様には私のハーレムの第1号になってもらう」
「はあ？」

生意気にもソフィアが呆れた声を上げた気がしたが……まあいい。
退屈だから私は決めたのだ。男の夢「ハーレム」を実現してやろうと。
しかし実現するだけなら容易だろう。
各国の政府から美女を寄こす様に養成するだけで完遂する夢には意味はない。
だからこの『エリア』で美人教師だけ集めるというの縛りをつけて楽しむのだ。
ソフィアは落ちた。
次は、ジェネ高の古文教師「安西　エリ」あたりにでもするか……

「待てえいッ！！」

ズドンッ、と鋼鉄の扉を吹き飛ばす音とその主の声が、私の尊大な思考を妨げた。
玉座の入り口には、学生服を着た仮面の男が息を切らして立って

いた。

「行く手に危険が待ち受けようとも、心に守るものあるならば――」

ウォーダン君、と眼下のソフィアが驚いていた。

ほう、あれがバルシェムを追ってきたという学生か？

「例え、己の命尽きるとも、体を張って護りとおす――」

ガタイはいいな。

正義の味方気どりか？　下らん。

我々に挑んで散って行った自称正義の味方がどれだけいると思っている。

「人、それを漢という！」

「ふふ、いいだろう、名乗ってみよ」

こんな雑魚は吐いて捨てればいい。

気まぐれに名ぐらい聞いてやらんこともない。

だがその瞬間、仮面の学生の雰囲気が一変した。

全てを切り裂く巨大な刀……そんな抜き身の鋭さが彼の眼光には宿っていた。

「我はウォーダン・ユミル！　ソフィアを護る剣なり！！」

正義の味方？

違うな。奴は力だ。純粋な力だ……武器もなにも持たない学生服の仮面男。

私は初めて正義の味方とやらに恐怖を覚えていた。

●

「やれえい、バルシェム共！　奴を八つ裂きにしろ！」
「「「イイィーーーッ！！」」」

壇上に居座る、３つ目の仮面男の命で整然と並んでいた敵が俺に飛びかかって来た。
地上の工場で見た奴らと同じ仮面をつけており、全員が人外の早さで俺を襲ってくる。
殺すつもりだろう。
だが俺は、今の俺は、負ける気など一欠けらも感じていない。

「しゃらくさい！！」

必殺の正拳突き６連発が、跳びかかって来た奴らを全て一撃の元に沈める。
アクセル隊長に教わった技だ。
多少威力が落ちようと、例え相手が人外だろうと目ではない！
その光景に仮面の軍勢は驚愕したようで、皆揃って一気に俺から距離を取る。
そして銃器を取り出した。
拳銃、機関銃、グレネード……数えていたら切りがない。
それにしても卑怯な奴らだ、接近戦で勝ち前がないと分かるとすぐに銃撃か？
俺の中の怒りが大きく膨れ上がり、顔を覆う仮面にヒビが入って

いた。

「いいか、貴様らに一つ教えてやる」

仮面の軍勢が一斉に俺に銃口を向ける。

「貴様らの敗因はたった一つ……たった一つの単純な答えだ　――」

逃げてウォーダン君、ソフィア先生の声が聞こえた刹那、仮面の軍勢は引き金を引いた。

一斉に様々な銃弾が俺に向けて打ち出される。

命を奪う、凶悪な兵器たちだった。

……このままでは俺は死ぬだろう、そうこのままでは。

「――　貴様らは、俺を怒らせた！！」

瞬間、俺の仮面が弾け飛んだ。

銀髪の多少老けている俺の素顔が露わになる。

しかし俺の仮面は顔を隠すためのモノではない……能力を封印するためのモノだ。

俺の咆哮と同時に、俺の命を奪うはずだった銃弾は全て弾け飛んだ。

いや、粉々に分解されるようにして消し飛んだ。

「変身！！」

光が俺の体を包む。

体中に力が漲り、分解された銃弾の粒子が俺の体に渦を巻いて吸いついてきた。

粒子が俺の体を巨大化させ、西洋風の甲冑に身を纏った巨人へと

変化させる。赤、黒、白のカラーリングが全身を色どり、背後には巨大な2対のドリルが生えてきた。

「仮面善我（ゼンガー）――戦闘形態（バトルフォーム）、スレードゲルミル！
正義は我にあり、悪党ども、死にたい奴からかかって来い！！」

俺――ウォーダン・ユミルは改造人間である。

内包する怒りが頂点に達した時、周囲の物質を分解・再構成して鎧と変え、敵を討ち滅ぼす……レモン・ブロウニングによって改造された化け物だ。

3m程の巨人に変貌した俺を見て、ソフィア先生は愕然としていた。

当然だ。

目の前で機人に変化する自分の生徒……目を疑うのは当たり前……いや、恐怖するのが当たり前。

だが俺はレモンの姉御を恨んではいません。

峠で事故って瀕死だった俺を救ってくれたレモンの姉御……その結果がこの体であるのだから……だから今、俺は感謝している。

この力でソフィア先生を救うことができるのだから！

『ドリル・ブーストナックル！！』

俺は2対のドリルを手に持ち打ち出した。

螺旋を描く鉄拳が仮面の軍勢の大半を吹き飛ばし、天上をぶち抜いてお空の星に変える。

「お、おのれー！」

傍観を決め込んでいた仮面の軍勢の大将が絶叫した。

「撃ち殺せえ！！」

「「「イイィーーーッ！！」」」

再び銃口がスコールとなって俺に襲いかかる。

しかし俺の装甲に弾かれて中身まで傷つけることは敵わない。

『出でよ、斬艦刀ッ！！』

撃ち続けられる銃弾を、俺は全て分解　・　再構成した。

俺の手に、巨大な巨大な両刃刀（りょうばとう）が顕現した。

……例え嫌われも構わない。例え、怖がられても構わない……貴女だけは絶対に護る！

斬艦刀の柄を握る俺の手の力が増して行く。

「お、おのれー！　なにをしているバルシェム共ッ、奴を私に近づけるでない！！」

「「「イ、イイーーーッ！！」」」

銃弾の勢いがさらに強くなるが、そんなモノは俺の耳には届かなかった。

分解された弾が斬艦刀の刃をさらに強大なモノに変えていく。

長さ？　そんなものは知らん。

俺はただ、斬艦刀を振り抜くのみ！

『うおおおおおおおぉっ！！』

俺は敵に向かって駆け出した。

そして斬艦刀を大きく構え、気合い一閃でそれを振るっていた。

『斬艦刀ッ　――』

無数の銃弾を浴び伸び続けた斬艦刀はおそらく１００ｍをゆうに超えていただろう。

重い……だが、そんなことは関係ない！

俺は譲れないモノのために刀を振るうのだ！

『――　星薙（ほしな）ぎの太刀イイイィッ！！』

「うおおおおぉっ！？」

俺の渾身の横切りが、仮面の軍勢を次々と薙ぎ払い星に変える。

３つ目の仮面男が座っていた玉座もお構いなくぶち壊す。

「お、おのれーー！！」

３つ目の仮面男も空高く飛んでいき、星となった。

役目を終えた斬艦刀は微粒子となって大気中に流れて、消えて行った。

終わった……この悪の組織も……

「ウォ、ウォーダン・ユミル君？」

……そして俺も。

ソフィア先生から声がかかり、俺は自分の初恋が終わったことを悟る。

だってそうだろう？

こんな化け物を誰が愛してくれるというのだろうか……沈んだ俺の心に、ソフィア先生の声は重すぎる。

「本当にウォーダン君なのね？」
「はい、教官……」

……もう話しかけるのは止めてもらいたい。
この悪党のアジトは、先ほどの俺の一撃で崩壊を始めていた。
崩壊まで時間が無い。
多少強引にでもソフィア先生を連れて地上へ ――

「ありがとう」

俺の思考はそこで中断された。
ありがとう？
俺は感謝の言葉を述べられたのか、ソフィア先生に。
ソフィア先生は屈託のない笑顔を浮かべて言った。

「ウォーダン君のおかげで先生助かっちゃった」
「教官……」

ありがとう、か……それはこちらの台詞だな。
ソフィア先生、貴女はやはり俺の天使だ。
今の言葉で俺は救われた気がします。

こうしている間にも、アジトの崩壊は進んでいた。
急がなければ、俺はソフィア先生を抱き上げる。

「しっかり掴っていてください！」
「はい、お願いねウォーダン君」
「承知！」

俺たちがアジトを脱出したとほぼ同時に、アジト上の○○工場跡地は地盤沈下に巻き込まれて崩壊した。
俺はソフィア先生を安全な場所まで運び、そして別れた。
変身解除の瞬間を見られてはいけない、それがこの世のマナーだそうだからな。

かくしてソフィア先生を誘拐した悪の組織「エアロゲイター」は壊滅し、『エリア』はまた1つ平和になりましたとさ。

めでたし、めでたし。

ここは『エリア』の一般的な路地、そこをソフィア先生が歩いていた。

「当初の目的を忘れる所であった」

誘拐騒動ですっかり忘れていたが、俺はソフィア先生に告白するために後をつけていたのだ。

アクセル隊長は既に離脱し、手元に残っている武器は愛を綴ったレター1枚のみ。

あの騒動の後、ソフィア先生は何事もなかったかのように帰路についていた。

彼女が自宅に着くまでの間に勝負を決せねばな……先ほどの事件で俺の株が上がっているのか下がっているのか分からないが、男子たるもの初志貫徹！

俺は渡す！

この手紙を渡す！

ラブレターを渡すのだ！

ちなみに仮面は物質を再構築して再生しておいた。

「教官……俺の想いを、受け取ってくれ」

俺は意を決して、ソフィア先生の前に飛び出そうとした。

俺とは別の声がソフィア先生にかけられたのは、まさしくその時だった。

「ソフィア」

銀髪の男だった。

渋めの顔つきをしている。俺が言うのもなんだが、中々にいい男だと思う。

銀髪の男の声にソフィア先生は満面の笑みで振りかえっていた。

「あら、あなた。高校はもう終わったの？」

「うむ。今日もたくさん悪党を懲らしめてやったぞ」

む、今、ソフィア先生はなんと言った？

あ・な・た……ＡＮＡＴＡ？

何の略語だか良く分からんが、あの銀髪の伊達男は俺の敵であることは間違いない。

決して、嫁さんが自分の旦那に向かって言う言葉では、絶対にないはずだ。

仲むつまじく話をしおってからに、もっと離れないかこの野郎！

「実はあなたに報告があるの」

ソフィア先生が顔を赤らめながら銀髪男に言った言葉に、俺は耳を疑った。

「私、あなたの子どもができちゃった？」

「おお、本当か！？　でかしたぞソフィア！！」

む、よく聞こえんな。

こ・ど・も……KODOMO？
ほうほう、子どもか。それはおめでたいことですね、ソフィア先生。
……ってちょっと待て！？

「女の子ならイルイ、男の子ならナシムと名付けよう！」
「まぁまぁゼンガーったら」
「こうしてはおれん、ベビー用品を買いに行かねばな！　行くぞ、ソフィア！」
「もうゼンガーったら、生まれるのはまだ半年以上先なのよ」
「おっとそうだったな。では今日は祝杯を上げようか」
「ふふ下戸のくせに祝杯だなんて、ゼンガーったら、本当にうれしいのね」

なんて会話を交わしながら、ソフィア先生は俺の視界から消えていった。
あなた、子ども……つまりソフィア先生にはそういった関係の男がいたということだ。
ああ……ソフィア先生が一気に遠くなった気がする。
ああ、この怒りをどうしてくれよう？

「手近な悪の組織でも潰すか……」

ラブレターをビリビリと破って、俺はトボトボと歩き出した。
そう、俺の初恋は終わったのだ……

この日、『エリア』外にある悪の組織が2，3個瓦解したらしい。
下手人は大剣を担いだ仮面の学生だった。
そんな噂が広まっていたというのは実は秘密である。

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。
『エリア』には個性豊かな人間が沢山いる。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない

おまけ

「おら新入り、今日からチャキチャキ働けよ！」
「は、はい、宜しくおねがいします」

私の名前はユーゼス・ゴッツォ。
悪の組織「エアロゲイター」の元大首領である。
組織が潰され無職になり、娘たちにマダオ扱いを受けていた私だが、それももう今日までだ。

私は就職した。
木端な下請け刃物工場だが、無職よりはいい。
ここで金を貯め、息子たちと一緒に暮らすのだ。

「おら、ここが現場だぜ！」

声の大きい現場主任に導かれて、私は工場内に足を踏み入れた。
ギュイイイイ、という刃物を研ぐ音と共に、キラリと輝く家庭用の包丁が目に入る。
……あれ？
なんだろう、刃物……刃物刃物刃物刃物刃物刃物刃物ッ！

「いやあああああ、刃物怖いいいいいいいいっ！！」
「お、おい、どうした新入り！？」
そこで私の意識はプツリと途切れた。

気が付くと、私はまた公園のブランコの上。
クビになりました。
ふふふ、私の明日はどっちだろう……？

仮面善我　～お呼びとあらば即参上！～（後書き）

＜キャラ紹介＞
ウォーダン・ユミル：影高3年生。恋する改造人間。
アクセル・アルマー：影高3年生。キョウスケに闘志を抱きながらも、現在2又中。
ラミア・ラブレス：影高3年生。ほとんど影高にいない。
ソフィア・ネート：影高数学教師。ゼンガーとは夫婦。
ゼンガー・ゾンボルト：ソフィアの旦那。親ばかになるゼンガーを見てみたい。

＜次・回・予・告＞

エクセレン「イェーイ、最近出番がない分、ここで頑張っちゃう♪　キョウスケ・ナンブ、いざ参る！」

キョウスケ「参らんぞ、俺は」

エクセレン「せっかくの親分回なんだし、我がリボルビングバンカーに貫けぬモノなし！　とか言ったりしないの？」

キョウスケ「誰がするか。それに主役は別人だろうが」

エクセレン「そうよねー、どうしてあんなに雰囲気と顔にてるんだろう。いっそ親分2号に任命して、DZ（ダブルゼンガー）とかやればいいのにー」

キョウスケ「いや、あの人は絶対にやらんだろう……埒が明かんので次回予告にでもいくか」

キョウスケ
「俺の名前はキョウスケ・ナンブ　――　以下略　――　だ！
次回の主役はアンドー・マサキ！
リューネとのデートの現場までかれは無事にたどり着けるのか？
次回スパロボ学院『アンドー君漫遊記　～現場探して行く千里？～』、
どんな相手だろうと打ち貫くのみ！」

エクセレン
「この次回予告はフィクションです。実在の人物・団体・企業とはなんの関係もございません。
スパロボＴＯＰもよろしくねん♪」

読者様といつも感想くださっている方々に感謝！
結構ネタができてきた感じです。
次回は掲示板に書き込んでくれた「三国同盟」さんから頂いたネタでお送りいたします。
ま、キャラは崩壊するでしょうけどね。

では次回もよろしくお願いします。

アンドー君漫遊記　～デート目指して行く千里？～（前書き）

＜注意事項＞
絶賛キャラ崩壊中です。
キャラ崩壊レベル５（ＭＡＸ５）。
戦う漢たちのイメージを崩したくない方は、閲覧しない方がよいかもしれません。

本当に注意：お酒は１８歳になってから。

「ねえマサキ、デートしよ」

それがリューネの言葉だった。

俺は、なぜか高校が密集地域『エリア』一のマンモス高校、ＯＧ学園に通っている高校２年生だ。

リューネは俺と同じクラスの女子で、明るく誰にでも親しく接することのできる、クラスでも一番人気の女子だった。

その女子　――　リューネ・ゾルダークが俺、マサキ・アンドーに向かって言った。

デートしようと。

「今日の夜、シュ　――――　ら　――　バーで２０時に待ってるから、絶対来てよね！」

リューネはそう言うと、俺に待ち合わせ場所を書いた紙を渡して去ってしまった。

俺は手元に残された紙を見る。

そこには半ば強引に渡された待ち合わせ場所の住所が書かれていた。

この際だからはっきり言っておこう、俺はリューネが嫌いじゃない。

可愛いし、活発で俺に好意的に接してくれるし、俺が彼女を嫌う理由なんて１つもありはしないだろう。

だが俺には淡い恋心を抱いている女性がいた。

それはリューネではない。

彼女の名はウェンディ……ジェネ高の3年の女生徒だ。
はっきり言っておこう。
俺はリューネの誘いに乗って一日デートをしたいと思っている。
しかしそうすることが、別に付き合ったりしていないのだが、俺が想いを寄せるウェンディに対する裏切りになるのではないかとも思っている。
ここでリューネの誘いを受けるのは、いささかよろしくないと思っていた。
でもやっぱり、俺はデートには行きたい。

「シュ・ラ・バーか……バーかな？」

バーと付く以上はお酒が出てくるには違いない。
お酒か……。
18歳未満は飲酒禁止なんて法律は確かにあるが、今時そんなものを護っている未成年なんて皆無と言っていいだろう。
俺も既に仲間内の飲み会で飲んだことはあるし、下戸というレベルで酒が弱い訳でもない。
リューネが選んで誘ったぐらいだから、それなりに雰囲気の良いお店なのだろう。
だが俺には、お酒などより甚大な問題があった。
俺は「ゼオルート流剣術　師範代」で、それなりに容姿も淡麗、運動神経・成績もそれなりのものを修めている。

しかし俺にはそれらを帳消しにして余りある、致命的と言える欠陥があった。

――俺は、超絶的なまでにの、方向音痴なんだ！

自慢ではない、これは間違いなく自慢ではないのだが……

――生まれてこの方、何事もなく目的地に着いたことは一切ない！

だから俺は手に入れた。

俺の致命的な欠点を補う、俺の人生における相棒を！

「頼んだぜ、クロ、シロ」

俺はついこの間購入した黒い携帯端末型ＧＰＳ――クロと、ナビを音声ガイドする白いイヤホン――シロに向かって言った。

頼んだぞ、俺の相棒たち。

今回のデートの成否はお前たちにかかっている。

スパロボ学院～ＯＧだよ全員集合！～

アンドー君漫遊記～デート目指して行く千里？～

「行ってらっしゃい、お兄ちゃん！　早く帰って来てね！」

妹――プレシア・ゼノサキスに見送られ、俺は自宅を後にした。

俺が住んでいるのは『エリア』にあるごく普通の一件家で、義父であるゼオルート・ゼノサキスの世話になりながら生活している。

俺は幼いころに義父のゼオルートに拾われて育てられた。

生みの親の記憶はない。

血の繋がらない子であるのに、義父のゼオルートは愛情を一身に注いでくれた。

プレシアとは本当の兄弟のようにして育ち、毎日を幸せに過ごせている。
俺は、本当に義父のゼオルートには感謝している。

「さあ頼むぜ、クロにシロ」

家を出てしばらくしてから、俺はＧＰＳのクロに目的の住所を入力した。
なぜ家で入力しなかったかというと、実はクロとシロを購入したのは義父とプレシアには内緒だからだった。
実はクロとシロは結構な値を払って手に入れたのだ。
バイトして貯めた真っ当な金で買ったのだが、財布の紐を握っているプレシアにバレれば大目玉を食らうことになるに違いないはずだからなぁ。
データを入力したクロに地図が表示される。
しかし地図を見たぐらいで解決される程、俺の方向音痴は軽いものじゃない。
クロにナビを務めるイヤホンのシロを繋ぎ、俺は耳に装着した。

『初めましてマサキ、ナビを開始しますニャ』
「おう、頼んだぜシロ、それにクロ」

俺の声にシロとクロが反応することはなかったが、クロのＧＰＳに２つの明滅する点が現れた。
真ん中が俺、その先にある点が目的地の「シュ・ラ・バー」だろう。
なるほどなるほど、地図に目的地が示されるだけで位置関係の分かりやすさが、天と地ほどの差があるな。
地図に従いながら直進すると、左右に道が分かれるＴ字路に差し掛かった。

『１０Ｍ先を右に曲がってくださいニャ』
「おう、右だな、右右……と」

俺はシロのナビに従い、Ｔ字路を右に曲がった。
しかしその直後、シロからまるで俺を非難するような声が上がった。

『なにやってるニャ、マサキ！　そっちは左ニャよ、この道は右に曲がるんだニャ！』
「おっとすまねえ。ありがとうよ、シロ、右だな、右右……と」

俺は歩いてきた道を引き返し、今度こそＴ字路のを右に曲がった。
右手はお箸を持つ方だ、間違えようがなく俺は右折する。

『マサキ、そこを右に曲がると元来た道に戻るだけにゃ！
ここは真っ直ぐ進めば、元来た道に対して右折することになるニャ！』
「えっ、そうだっけ？」
『そうだニャ！　しっかりして欲しいニャ！』

イヤホンからシロがキンキンと高い声で俺を怒鳴りつけてきた。
たくっ、うるせえなぁ……そんなに言われなくたって、自分の方向音痴具合は俺が一番分かってるってえの！

「ここ左だっけ？」
『右だって言ってるでしょうニャ！』

俺はシロのシゴキに似た指導を受けながら、目的地へと足を運んだのだった。

●

シロに進路訂正をされること十数回……俺は、目的地である「シュ・ラ・バー」の前に立っていた。
時刻表示機能も持つクロを確認すると、まだ１９時３０分だった。
少し早めに家を出たからな、約束の時間よりまだ３０分も早いじゃないか。
これは快挙だ。
俺にしてみれば、このような出来事は前代未聞の空前絶後だった。
クロにシロ、ふふふ、この相棒がある限りもう誰も俺を方向音痴などとは呼ばせはしないぞ。

「とにかく、中に入って待ってるとすっか」

俺はシロとクロをポケットにしまって「シュ・ラ・バー」のへと足を踏みこんだ。
うす暗い店内にマスターらしき見目麗しい美男子と、ピアニストらしき美女が居るのみで他に客はいなかった。
時間になってもいないので、リューネの姿も見えない。
店内にはピアニストの美女が弾く和やかな旋律が響き、えも言えぬ良い雰囲気を醸し出していた。

「へえ、リューネの奴やるじゃねえか。こんないい店知ってるなんてよ」

時刻はまだ２０時前、世間一般には夜であるがこう言った酒場にしてはまだまだ宵の口である。
客もいないし入り口に立っていても仕方ないので、俺はカウンターに座りなにか飲み物を頼むことにした。

「なにになさいますか？」

銀髪の秀麗の美男子がメニューを指し出し、注文を聞いてきた。
様々なカクテルの名がメニューに書き記されていた。
スクリュードライバー、シントニック、ソルティードッグ、カシスオレンジ……種類が多すぎて、俺はどのカクテルが美味しいのかはっきり言って分からない。
確かに仲間内で飲んだ事はあるが、お酒の名前を覚える程に種類を飲んだことはない。
だが折角こういったバーに来たのだから、ここはカッコいいドリンクをオーダーしたいではないか。
マスターに奇妙な視線を向けられても構わず、俺は真剣にメニューを凝視した。
……んっ、するとある品名が俺の目に留まる。
うーん、なんだかこのカクテルの名前、カッコいいな。

「なあマスター、このＸ（エックスワイズィー）・Ｙ・Ｚってのくれよ」
「かしこまりました、少々お待ち下さい」

俺が注文するとマスターはすぐに数種のお酒をブレンドし、シェイカーでシェイクしてグラスに注ぎ、コトンッと俺の前のカウンターに差し出してくれた。
おおー、なんだかカッコいいなぁ、まるでドラマの中にでもいるみたいだ。
Ｘ・Ｙ・Ｚ……どこかで聞いたことがありそうな名前のカクテル

を、俺は少しカッコ良さそうに思えるポーズでグラスを持ち、これまたやはりカッコ良く一息に口に運んだ。

「ッ！？」

その瞬間、強烈な灼熱感と強烈な刺激が俺の口内を埋め尽くした。

なんだこのカクテル！？

アルコール度数が絶対に半端じゃないぞ！　俺がキツイと思っていたブラッディーマリーが甘く感じてしまう程に辛い、辛すぎる！

の、呑み込めない……でも、このままではつらすぎる！

どうしよう、なに食わない顔でトイレに行き、そこで出してしまおうか　――

「メイシスゥゥゥッ！！」

――　バコーーンッ！

「ッ　――　ゴクンッ！！」

何者かがバーの入り口の扉を蹴り開けて侵入して来て、俺はその音に体を跳ね上げてしまうほど驚いた。

そして……口の中のモノを飲んでしまった。

飲んじゃった……やばいよなあ、これ絶対アルコール度数１０％以上はあるって……。

そんな事を考えている内に、俺の頭は心地よいような気持ち悪いような浮遊感に包まれていく。

店内に飛び込んできた若い男が、ピアニストの美女に向かって叫んでいた。

「メイシス、好きだ、結婚してくれ！」

「ア、アリオン、また貴方なの！？」

メイシスと呼ばれたピアニストの彫像のようだった表情が、アリオンと呼ばれた青年の登場で激しく崩れ去っていた。
アリオンは頭から抱きつくようにしてメイシスに飛びついたが、メイシスは手敏な動きでそれを躱す。
アリオンは頭から壁に突っ込んだが、すぐに立ち上がって来た。

「なぜだメイシス！？　なぜ、この自由戦士アリオンの想いを受け止めてくれない！？」
「そんなの、貴方がプーだからに決まってるでしょ！」

俺は、揺れる視界と頼りなくなった耳でその様子を見る。

「いい歳して、定職にもつかずにいつまで遊び回ってるのよ！女に求婚したいんだったら、せめて年収言えるぐらいになってから来なさい！」
「分かってないなぁ、メイシス」

アリオンが言う。

「俺を例えるなら、雲。雲を掴むことは誰もできぬ。どんな大企業だろうと、俺を一か所に留めておくことなどできはしないのさ。
そうメイシス、君を除いて俺を掴める者などいない」
「失せろ、プー！」
「止めろアリオン、それにメイ」

俺の目の前で、美男子のマスターが2人を止めた。

「お客の前ではしたないぞ」
「ご、ごめんなさい、アル」

メイシスは反省したように項垂れる。

「アリオン、お前も営業の邪魔だから帰るんだ。話なら営業終了後に聞いてやる」

「なんだとアルティス、貴様、一端に言ってくれるじゃねえか？」

アルティスと呼ばれた美形のマスターをアリオンが睨みつけた。

頭がボーとしていても分かる。

両者の間に一触即発の空気が流れていることが、それも俺を挟んで。

「メイシスの想いに気付いていながら、それに答えてやらぬ薄情者……いいや、貴様は腰抜けだ！

貴様は女1人の気持ちも受け止めてやる覚悟もない、腰抜けだ！」

「……」

「アル……」

メイシスが少女のような瞳をアルティスに向けていた。

うーん、なんだろうこの状況？

俺はここになにしに来たんだっけ？　なんだか酷く場違いな気がする。

アリオンの罵声を浴びたアルティスはしばらく黙っていたが、やがて口を開く。

「愛するが故に、見守る愛もある」

「アル……」

メイシスの表情がパアっと明らんだが、逆にアリオンの顔が怒りに歪んでいた。

「だからそれが生温いというのだ！
いいかアルティス、俺たちは修羅だ！　修羅は力こそが全て、欲しい物は腕ずくで奪うのが掟だ！
アルティス、貴様はメイシスを護り抜くことができるのか！？」
「……問答はそれでしまいか、アリオン」

その一言の後、アルティスの雰囲気が変わった。
なんて言うのだろう？　熱い。
展開が熱いとか、お酒を飲んで頭が熱いとかそういうのではなくて、空気が熱い。
よく見たら握りしめたアルティスの拳が燃えているような気がした。
アルティスが構える。

「貴様も修羅なら拳で語れ」
「いい度胸だ『閃光のアルティス』、自由戦士アリオンの真の力を見せてやろう」

アリオンも構えた。
カウンターに居る俺を挟んで、そして俺を無視して2人に体にオーラのようなものが溢れてくる。

「止めて2人共、私のために争わないで！」

悲壮感を漂わせたメイシスの目には涙が浮かんでいた。
……えーと、なんなのだろうな、この状況。
さっきのカクテルのせいなのだろうか、頭がボーッとするがこの状況をなんと言うかは知っている。
そう、修羅場だ。

「魔朧百裂拳（まろうひゃくれつけん）！」

先手をとったアリオンが拳を放った。
人知を超えた速度の拳は百の手のように見え、俺の頭の上で風切り音を唸らせる。

「激流を制するは静水」

アルティスは緩やかな手の動きでアリオンの攻撃を全て弾き落とし、

「紅蓮衝撃波（ぐれんしょうげきは）」

掌から爆炎の衝撃波が放たれた。
熱い！
マジで手から炎出てやがる！　俺の自慢の緑髪がチリチリに焦げてしまうではないか！？

「ぐわっ！」

衝撃波をまともに受けたアリオンは吹き飛ばされ、机と椅子を巻き込みながら倒れた。
しかしすぐに起き上がる。
血が滴る口元を歪めて言った。

「や、やるじゃなーい」

カウンターに小さくうずくまって俺は思っていた。
なんだこいつらは！？　そして、なんだここは！？

俺は魔界にでも迷い込んでしまったのだろうか？
クロにシロ、なんて所に案内してくれやがるんだこの野郎！

「我の店でなにをしている貴様ら！」

再び酒場の入り口の扉が蹴り開けられ、異様に巨大な漢が乱入してきた。
よく見ると普通に筋骨隆々なだけの大男なのだが、身に纏う強烈な存在感のため必要以上に巨大に見えてしまう。

「「「修羅王（オーナー）ナー、アルカイド・ナアシュ！！」」」

オーナー？　良かった……店主が出てくれれば、この奇怪な状況も収まるはずだ。
俺はそう思った。

「むう、久しいなメイシス」
「お、お久しぶりでございます、修羅王（オーナー）ナー様」

修羅王ナーと呼ばれた漢はメイシスに目をやり、にやりと笑った。

「ふふふメイシス、やはりうぬは美しい。我の嫁に相応しいのは、やはりうぬ以外にはおらぬようだな」
「お、お戯れを……修羅王（オーナー）ナー様」
「我は冗談など言わぬ」

修羅王ナーがずしんずしん、と巨体を動かしメイシスに近づいていく。
しかし修羅王ナーってのも言いにくな、もう修羅王でいいや。
一方メイシスは完全に怯えきった目をしていた。

まあそうだろう。俺が女だとしても、あんな怪物に嫁ぎたくなどないし。

それにしても、ここはなんだか現実離れしているなぁ。

もしかして、目の前で展開されている光景は、実は客向けのアトラクションなのかもしれない。

それなら、お酒を飲みながら観戦した方が楽しいというものだ。

「マスター、X・Y・Zもう一杯」

「は、分かりました、少々お待ちを」

なんだか楽しくなってきて、頭が回り始めた気がするぞ。

そんな頭で結論した言葉に、マスターのアルティスは答えてカクテルを作り、俺に差し出してくれた。

ほらやっぱり、これはアトラクションなんだなぁー、素晴らしい酒場じゃないかここは。

修羅バー、ってか？　あははは。

ごくりッ、と俺はX・Y・Zを一口飲んだ。

「待ちな、アルカイド・ナアシュ」

アリオンがメイシスと修羅王の前に飛び出した。

「むぅ、うぬはアリオン・ルガダか。小物がこの修羅王になんの用だ？」

「メイシスの幸せのために、修羅王、貴様は俺が倒す！」

いいぞ、やれやれ！

愛する者のために巨悪に立ち向かう男、くぅぅ、いいねー、漢だねー。

俺は心の中でアリオンにエールを送った。

「魔朧背撃掌（まろうはいげきしょう）！」

アリオンは渾身の覇気を込めた両手発剄を放つ。
しかし修羅王はアリオンの一撃を片手で振り払い、

「覇皇剛掌波（はおうごうしょうは）！！」

空いた片手で覇気の衝撃波をアリオンの全身に浴びせた。
爆ぜる様にしてアリオンの体は弾き飛ばされて壁に激突、そのままずるずると崩れ落ちてしまう。
凄いなぁ、一体どうやって出しているのだろう？
また一口、俺はＸ・Ｙ・Ｚを飲んだ。

「やりおるわアリオン、この修羅王に技を使わせるとはな」
「ち……最後の種明かしも見破られちまったか……」

悪態をついてアリオンは気を失った。

「待たせたなメイシス」
「待ってない！」
「早速、式でも上げるか」
「話を聞いてください、修羅王ナー様！」

修羅王はメイシスの話など意に介していないようだった。
女をないがしろにする男は許せんな……なにか、大切なことを忘れているような気がするが……ま、いいか。
それにしても、この修羅王という男の傍若無人ぶりには目が余る。
嫌がる女の手を引いて結婚だと？　ふざけやがって。
俺は一気にＸ・Ｙ・Ｚを飲みほした。

「待てよ」

俺は思わず声を上げていた。

「嫌がってんじゃねえか、離してやんな」

「なんだ、うぬは？」

「テメエの店の客だよ」

俺はカウンターから立ち上がる。

おっと、なんだか足がふらつくな。

だがそんなことは気にしない。

今の俺は誰にも負ける気がしないぜ。

今なら俺は風にだってなれる気がするぜ。

しかしX・Y・Zって飲みなれるとウメエなぁ……最高だぜ。

「マスター、もう一杯」

「き、君、もうよしといた方が……」

「もう一杯」

俺の一声に、マスターのアルティスはしぶしぶカクテルをつくって俺に出してきた。

俺はそれを一息に煽る。

口の中にカーッとするような辛さが通り抜けたあとに、一瞬甘さが残った。

うーん、ウメエなあ、癖になりそうだぜX・Y・Z。

今なら〇ティーハンターだって呼べそうだ。

「なんだうぬは？　酔拳の使い手か？」

「すいけんーー？」

なに言ってんだこのデカブツは？

「俺は世界最強の剣法『ゼオルート流剣術』の師範代だぜ！
すいけんってなんじゃー！？　喧嘩売ってんのか、コラア！！」
「ふん、変な輩だ。まあよい、剣術だろうがなんだろうが、かかって来るがいい」
「上等だぜぇ！」

修羅王の言い草に俺は頭に血が上っていた。
客に喧嘩売るとはふざけた店主だ！　俺の秘剣「エーテルちゃぶ台返し」で懲らしめてやるぜ！

「ん」

剣はどこだ？
さすがに真剣は落ちてないよなぁ、竹刀持ってきてなかったっけ？　持ってなかったか。
うーん、どうしよう。

「マスター、剣ないか？」
「あいにく果物ナイフしか置いていない」

おお、なんてこったい。
刃渡り２０ｃｍ程度の武器なんてリーチの足しにもなりやしない。
こうなりゃ素手でやってやるぜ。
「ゼオルート流剣術」の極意は、プラーナを爆発させて全身を武器に変えること……だった気がする。
修羅王なんてコン畜生は目じゃないね。

「マサキ・アンドー、最終秘奥義！！」

体内のプラーナを燃え上がらせ、地下に眠るマグマのように貯め込んだ。

俺はカウンターを蹴って、空中高く飛び上がる。

力が漲る。やはりX・Y・Zは最高だぜ、今なら○ティーハンターにだって勝てそうだった。

風の精霊たちよ、俺に力を！

俺はあらん限りのプラーナを両手に込めて振り下ろす。

「熱風！　疾風！　サイ　・　バス　・　ター！！」

「ふん！」

修羅王の拳が俺に炸裂した。

「ひでぶッ！？」

超必殺技は修羅王のパンチ一発で防がれてしまった俺は、成すすべなく壁際まで叩き飛ばされた。

あれ、痛い……めっちゃ痛いんですけど？

マスターのアルティスが呆れた表情で俺の方を見ていた。

ん、よく見ると、メイシスは気配を消して裏口から逃げだそうとしているではないか。

「なんだうぬは？　話ならぬ程弱いな」

ずううぅん、そんな感じで俺の眼前に立ちふさがる修羅王。

畜生、剣さえあればお前なんてイチコロなのに！

くそう、早く早く○ティーハンターを呼ばなくては（混乱）！

マスター、X・Y・Zですよ、もう後がありませんよ！

「マスター、X・Y・Zくれ」
「帰れ」

アルティスに見放されてしまった。
メイシスはもういない。アリオンは気絶中。

「去ね、下郎」
「ちょまっ　――　あべしッ！？」

修羅王の前蹴りが俺に炸裂し、俺の体は軽々と空中に浮き上げられた。
ああ……今、俺は空を飛んでるよ、プレシア。
なんだか花畑が見えるような気がするなぁ……痛みも通り過ぎると、なにも感じなくなるんだね、プレシア。
なんだいプレシア、お兄ちゃんを迎えに来てくれたのかい？
あれ、どうしたんだプレシア、背中に羽が生えてるじゃないか？

「全て忘れ去ってしまうがよい」

修羅王の声が聞こえた。
そう言えば、なんで俺はこんな所来たんだっけ？
そうだ、リューネと待ち合わせしてたんだった……今、リューネいないけど。
その瞬間、眼下の修羅王の覇気が一気に膨れ上がり、

「覇皇新血愁（はおうしんけっしゅう）ッ！！」

修羅王の指が俺の腹に刺さったような気がした。
頭が真っ白になり、俺の意識はそこで途切れた　――

目が覚めると、俺はゴミ捨て場で横になっていた。
周囲は完全に夜真っ盛りの深夜というやつで、ゴミ捨て場周辺に人気はない。

「俺、なんでこんな所で寝てるんだ？」

自問するが答えは出てこない。
体と頭に鐘の音でも響いているようにガンガン痛むが、なにも思い出せない。
確か今日はジェネ高の学食でリューネと昼飯食った。
しかしその後からの記憶がまったくない。
一体どうしてしまったのだろうか、俺は？

「……考えても仕方ねえ。家に帰るか」

体にまとわりついていたゴミを払いのけ、俺は帰路についた。
夜の街は煌々と明かりが照らされ明るいが、光の届かない路地は暗闇に覆われている。
この暗闇になにか恐ろしいものが潜んでいるような気がした。
俺は駆け足で自宅を目指した。

●

深夜2時。
客もほとんど居なくなったバーの中で、リューネは一人黄昏れていた。

「マサキ、来ませんね」

バーを経営しているマスターのシュウ・シラカワがリューネに声を駆けてきた。

「本当に、私がはたらいているバーに来てと言ったのですか？」
「言ったわよ。シュウがはたらいているバーに来て、言ったもん」

リューネは口を尖らせて呟いた。
その顔は真っ赤に染まっている。

周囲には酒瓶の山……マサキに約束をすっぽかされたためにできた空ビンたちである。
要するに、リューネはやけ酒を飲んで不貞腐れているのだった。

「言っときますが、ツケは利きませんよ」
「いいもーん、私の親父、大企業のトップだもーん」

それだけ言うと、リューネはカウンターに頭を預け寝息を立て始めた。
シュウはその様子を見て、まったく、と呆れていたが、風邪を引かないように毛布を被せてやっていた。

「……マサキの……バカ……」

誰もいなくなった店内にリューネの呟きが溶けていったのだった。

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。
『エリア』には個性豊かな人間が沢山いる。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない

ちなみにマサキが自宅にたどり着いたのは3日後だったという……

アンドー君漫遊記　～デート目指して行く千里？～（後書き）

＜キャラ紹介＞
マサキ・アンドー：ジェネ高2年の生粋の方向音痴。やや酒乱ぎみ？
リューネ。ゾルダーク：マサキに恋するジェネ高2年生。大企業の社長令嬢。
アルティス・タール：シュラバーマスターで修羅。メイの事が実は好き。
アリオン・ルガダ：メイシス大好きなプータローの修羅。雲が好きな自由戦士。
メイシス・マルク：シュラバーで働くピアニストで修羅。アルの事が実は好き。
アルカイド・ナアシュ：シュラバーオーナーで修羅王。嫁さんと強敵募集中。

＜次・回・予・告＞

エクセレン「やっほー、完全に軒下の住人になっているナンブ＆ブロウニングでーす。みんな、私のこと忘れてないわよねん？」

キョウスケ「おい、エクセレン、今回は予告はなしだ」

エクセレン「なになに、どったのキョウスケ？」

キョウスケ「なんでも作者がこの話書いてて気に入ったらしくてな、マサキをもっと修羅場へ案内してやりたいらしい」

エクセレン「ワーオ、マーサも大変ねぇー、ということは？」

キョウスケ「次回も『アンドー君漫遊記』、どんな相手だろうと、とりあえず打ち貫くのみ」

エクセレン「ワーオ、やる気ナッシング！」

感謝！

ネタをくれた三国同盟さんありがとうございます！

ｓｕｂｕｇａｋｉさん、ｄｉｓさんも感想ありがとうございます。

「アンドー君漫遊記」まだ続きます、どうぞよろしくお願いします。

続・アンドー君漫遊記　～デート目指して行く、2千里?～（前書き）

＜注・意・事・項＞
絶賛キャラ崩壊中です！
ＯＧ外伝味方勢のイメージが崩れるのが嫌な方は閲覧しない方がよいかもしれません。
それでもよい、という方はどうぞ！

本当に注意：飲酒は１８歳になってから（嘘）

「なんでデートすっぽかしたのよ!?」

それがリューネの言葉だった。

俺の名前はマサキ・アンドー、なぜか高校の密集する地域『エリア』1のマンモス校　――　OG高等学院、通称ジェネ高に通う高校2年生だ。

目の前で激怒している金髪の美少女の名前はリューネ・ゾルダーク。

俺と同じクラスに所属し、その活発で人当たりの良い性格からクラスで一番人気の女子である。

「私、ずっと待ってたんだからね!」

「す、すまねえリューネ……しかしなんの事だかァ　――　ゲフウ!?」

俺の言葉に、体育5のリューネの鉄拳が顔面に炸裂した。

グーであるので当然痛い。

しかしリューネにデートに誘われた記憶が、まるで文字を修正液で振り潰したかのように、まったくと言っていいほど覚えがなかった。

だがリューネは俺をデートに誘ったらしい。

そして俺はそれをすっぽかしたらしい。

ならば待ちぼうけにされたリューネが怒るのも無理からぬことだと、俺も思う。

殴られてガンガン痛む頭に、リューネが大声でわめき散らした。

「シュ　――――　ら　――――　バーだからね!　はい、これ店

の名前と住所！
今日こそ２０時に待ってるから、絶対に来てよね！」

リューネが乱暴にメモ用紙を俺に押し付けると、そのまま大股歩きで下校してしまった。
リューネは店の名前はなんと言った？
俺は彼女に殴られた痛みで店名を聞き逃してしまっていた。
しかし手元にはリューネが渡した虎の巻であるメモ張がある。
これを先日購入した黒いＧＰＳ――クロに入力すれば、白いイヤホン――シロが目的地に間違いなくナビゲートしてくれるはずだ。
なにを隠そう、俺は超が着くほどの方向音痴なのだ。

――自慢ではないが、目的地に無事に着いた試しなど……一度もない！

だがそんなコンプレックスとも今日でオサラバだ。
ちょちょぃ、と店名と住所を入力すれば、ひょひょぃ、と目的地まで案内してくれるだろう。ああ、素晴らしきは文明の利器かな。

「さーて、店の名前でも確認して――ヘェクションッ！！」

先日は気がつくとなぜか真夜中のゴミ捨て場で目覚めたため、風邪を引いてしまったようだ。

「あ」

広げたメモ用紙に、まるで狙ったかのように見事に鼻水が飛び散っていた。
あ、やばい、文字が消えるかも……慌てて俺はティッシュで拭き

とったのだが不幸な事に店の名前がかすれてしまい、読み取ることができなくなってしまっていた。

「シュ……ラ……バー……なんだかデジャブがするのは気のせいか？」

読み取れる文字を繋げた言葉に、なぜか俺は背筋に寒気を覚えた。
しかし幸いにも住所の方は無傷だった。
これなら無事に待ち合わせ場所に辿り着けるだろう。

「頼んだぜクロ、シロ。デート現場にいざ行かん！」

本当に頼りにしているぜ、小さな俺の相棒たち。
今回のデートの成否は、お前たちの双肩に掛かっていると言っても過言ではない。
俺は浮かれていた。だってそうだろう？
美少女とのデートに心踊らない男がいると言うのなら是非紹介してもらいたい。
メモ用紙片手に意気揚々と下校した。

スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～
続・アンドー君漫遊記　～デート目指して行く、２千里？～

「行ってらっしゃい、お兄ちゃん！　今日こそ、本当に早く帰ってきてね！」
「分かってるって、プレシア」

俺は義理の妹のプレシア・ゼノサキスの声を背中に受けて、俺は自宅を出発した。
時刻は夕方17時、待ち合わせの時間まではかなり余裕を持っての出陣である。

しかしそれでも、プレシアの表情には「大丈夫？」という疑問がありありと浮かび上がっていたな。
無理もないか……今まで待ち合わせの時間に間に合ったことはないし、通学路でも時々迷って夕飯の時刻を大きくオーバーしまったことも多々ある。

ラップされた夕食に「チンして食べてね？」という書き置きをなんど目にした事か……。
ちなみに家の家事全般は全てプレシアがやってくれている。
まったく、出来すぎた可愛い妹だ。
俺やゼオルートのおっさんにはもったいない家族だと思う。
もしプレシアに悪い虫でも付いた日にゃあ、俺はその虫を「ゼオルート流剣術」で八つ裂きにしてしまうかもしれない。

「さてと、頼んだぜクロにシロ」
『それはこちらの台詞だニャ』

住所をクロに入力すると、シロの嫌み混じりの音声ガイドが始まった。
失礼なナビだ。ついさっきもナビを使って、真っ直ぐ自宅まで帰って来れたというのに。
目的地と俺の現在位置が赤い明滅する点としてクロに表示される。
地図を見ながら住宅街をしばらく進んでいると、家の塀で出来たT字路が見えてきた。

『１０Ｍ先、突き当りを左折するニャ』
「おう、左だな……左左と……」
俺はシロの指示に従い、Ｔ字路を左に曲がる。
直後、シロの金切り声が俺の頭を揺らした。
『なにやってるニャ、マサキ！　そっちは右でしょうがニャ、左に曲がるんニャよ！』
「おっとすまねえ、左だな……左左、と」
俺は振りかえると、再びＴ字路に侵入した。
左は茶碗を持つ方だ、間違えようがない。
俺は間違えることなく、Ｔ字路を左折する。
『マサキ、そこを左に曲がると元来た道に戻るだけニャ！
ここは真っ直ぐ進めば、元来た道に対して左に進む事になるでしょうがニャ！』
「そうだっけ？」
喧しいシロのナビに耐えながら、俺は３度目の正直でＴ字路を左に曲がる。
しかしこのやり取り……なんだか初めてでないような気がする。
既視感（デジャブ）、だろうか？
「なあ、この会話前にも　――」
『マサキはなにも考えずに、黙って指示に従っていればいいのニャ！』
俺の質問にシロは取り合ってくれなかった。

なんというナビだろう。大枚はたいて手に入れたのに、この対応は流石にないと思う。
だが今はデート現場に向かう方が先決だ。
シロたちへの文句は胸の奥に隠し、俺は目的地を目指した。

●

小姑のようなシロの小言に耐えること1時間……俺は『エリア』内の繁華街にある1件の店の前に辿り着いていた。

「シュ・ラバー……どこかで聞いたことがあるような気がするな……」

どうにも今日は既視感を感じることが多いな。
それにしても「シュ・ラバー」か、ラバーというくらいなのだから、恋人たちが愛を語らうにはきっとぴったりの店なのに違いない。
それにあのリューネが指定したのだから、おそらく店内の雰囲気もいいのだろう。
右手の腕時計を確認すると時刻はまだ午後18時だった。
俺にとっては空前絶後の快挙と言っていいだろう。
時間はまだまだ残っているが、繁華街をブラブラして時間を潰すのは超方向音痴の俺にはリスクが高すぎる。
ここは大人しく店内で待っているが吉だろう。

――カランカラーン

扉を開けて店内に入ると、ドアに付けられた鈴が鳴り俺の来客を店内に知らせた。

「いらっしゃいませ」

グラスを拭きながら、変な仮面を被ったマスターが俺を迎え入れてくれた。

三つ目の模様が描かれた仮面の、公園でブランコに揺られてそうな、そんな男性だ。

酒場の例に漏れず店内はうす暗く、客はまだ3人しかいない。

栗毛の少女と青髪の若者、その間に挟まれるようにして紅い髪の若者が座っている。

18時という時間は、酒場にしては開店直後のように早すぎる時間帯なのだ。

カウンターに座る3人の客を横目に席に着いた。

「なんにしますか？」

「んー、そうだなー……」

仮面のマスターがメニューを出して来る。

俺は未成年なので法律で飲酒してはいけないことになっているが、ジェネ高でそんなもの護っている連中は皆無である。

特に3年のエクセレン・ブロウニングなど、若い身空で酒豪と呼ばれる程の飲みっぷりらしいしな。

俺が待ち合わせの時間まで、1杯ぐらいカクテルを飲んでも罰は当たらないだろう。

正直カクテルの味など覚えられる程飲んでいないので、俺は目に付いたメニューをオーダーすることにした。

「じゃあ、このＸＹＺ（エックスワイズィー）ってのくれよ」

「分かりました、少しお待ちください」

俺の注文にマスターが答える。

胸ポケットからメモ張を取り出して覗きながら、数種のお酒を取り出し、たどたどしい手つきでシェイカーで混ぜ始めた。

この仕事について日が浅いのか、どうもまだ慣れていない様子だ。

しかし出来上がったカクテルをそっと俺に差し出してくれる仕草を見れば、しっかりとマスターをしているんじゃないかと思える。

「サンキュー」

俺はマスターに礼を述べ、カクテル ―― XYZを持ち、口に運んだ。

「ッ!!?」

しかしそこで俺は、この日最大の既視感を覚えることとなる。

口の中が熱い！　鼻の奥が辛く、目じりには反射的に涙が浮かんでくる。

なんだこのカクテルは！　アルコール度数が半端じゃないぞ！

これを飲むとマズイ……どうするトイレに行って吐いてしまうか？　あれ？　前にもこんなこと考えなかったか俺？

俺は怪訝なマスターの視線を受けながらも席を立つことにした。

椅子をカウンターから引き立ち上がろうとした、まさにその時だった。

「てやんでえっ！　べらぼうめ!!」

―― ドンッ!!

「ッ ―― ゴクン」

突然隣の客が発した大声に、反射的に俺の喉が含んでいた物を嚥下した。
飲んじゃった……途端に俺の頭が火照り出す。
まずいなあ……このカクテル、間違いなくアルコール度数は２０％あるぞ……。
リューネが来たときに、デート相手の俺が既に泥酔状態なんて……見っともなさすぎる。
早くもボヤケ出す思考。
文句を言ってやろうと隣の３人組の方を向くと、机を叩いた青髪の少年が顔面を上気させて立ち上がり、隣の紅い髪の男性を睨みつけていた。

「落ち着いてくれ、お兄さん」

紅い髪の男性の言葉に、青髪少年のこめかみに青筋が奔る。

「なんだとぉ、テメエに兄貴呼ばわりされる筋合いはねえんでい！」
「止めてよお兄ちゃん、他にお客さんもいるのに恥ずかしいでしょ！」

紅い髪の男性の右隣りに座っていた栗毛の少女が叫んだ。

「ショウコが誰と付き合おうとショウコの勝手じゃない！　ねえ、フォルカ？」
「う、うむ」
「うがあああッ、この泥棒修羅が！　テメエ、いけしゃあしゃあと答えてんじゃねえ！」

ショウコという栗毛の少女が、フォルカという紅い髪の男性の逞しい右腕に手をまわして抱きつく光景に、青い髪の少年はさらに激

昂していた。

「テメエがショウコと付き合うなんざ百万年早えぜ！
例えお天とさんが許しても、この俺　――　コウタ・アズマ様が許さねえぜ！」

「もうお兄ちゃん、過保護なのも大概にしてよね！」

ショウコの反論にコウタは首を振る。

「いんや、お前はまだ男と付き合うなんて早すぎる！
こんな優男に騙されずに、今は俺の分まで学校でしっかり勉強するんだ！」

「止めてよね、そんな娘に煙たがられる親父みたいなこと言うの！
折角フォルカと仲良くなって貰おうと思って飲み会セッティングしたのに、これじゃあ台無しじゃないの！　お兄ちゃんのバカ！」

「バ、バカ……ショウコが俺の事をバカって言った！？」

ショウコの言葉に衝撃を受けるコウタ。

「俺はショウコを学校に通わせるために毎日働いているのに、そんなお兄ちゃんに向かってバカはねえだろう、ショウコよぉ！」

「お、落ちつくんだ、お兄さん」

「テメエにお兄さん呼ばわりされる筋合いはねえってんだろ、このすっとこどっこいが！！」

兄&妹&妹の恋人による、壮絶な三角関係デスマッチが勃発していた。

俺は彼らに文句を言うのも忘れて、不躾ながらつい聞き耳を立ててしまっていた。

どうも紅い髪の男性フォルカ（格闘技でもやっているのか、かな

り体が引き締まっている）と、栗毛の少女ショウコは交際しているようだ。
だがそれが気に食わないショウコの兄コウタは、おそらくフォルカの事が大嫌いなのだろう。
一方的に険悪な両者の関係を改善しようとショウコがこのバーに誘ったが、コウタにスイッチが入ってしまい、醜い兄妹喧嘩に発展してしまったようだな。

……いやー、面白い。
こういうのをなんと言っただろうか……そう、修羅場だ。
自分が三角関係に巻き込まれるのは勘弁願いたいが、他人のそれを観察するのは実に楽しい。
本当に、下世話な話ではあるのだが。
しかしＸＹＺ１口で酔ってしまったようだ。
俺の体はポーっと熱くなっていて、３人の光景を傍観しながらなぜかＸＹＺに手を伸ばし、無意識の内に１口含んでしまっていた。
しまった――と思うのも一瞬。

「ショウコー、俺のこと嫌いになっちまったのか！？」

涙ながらなコウタの悲痛な叫びが俺の耳に木霊する。
俺のこと嫌いになったのか、か……俺にもプレシアという義妹がいるので、コウタの気持ちは痛いほど良く分かった。
プレシアはまだ幼く、俺のことを「お兄ちゃん」と慕ってくれている。
家事も全てパーフェクトにこなす自慢の妹だ。
だがそんなプレシアにもいつか彼氏が出来たりするのだろうか？
そして俺のことを煙たがり始めるのだろうか？
そんなの嫌だ、悲しすぎる……俺は思わずＸＹＺを飲みほして、立ち上がっていた。

「そうだぞショウコー、もっとお兄ちゃんのことを大切しろー！」
「えっ、ちょっと、あなた何なんですか！？」

会話に乱入した俺に驚いたのか、ショウコがたじろいだ。

「お兄ちゃんを大切にしない妹は死刑！　この法律があるのを知らないのかショウコー！」
「し、知らないです！　な、なんなのこの酔っ払い、フォルカ助けて！」
「ああ、ショウコ、俺の後ろに隠れるんだ」

フォルカがカウンターから立ち上がり、ショウコは彼の裾を掴んで背中に隠れた。
なんと言うことだ！？
俺の教えも聞かずにそんな男にすがるとは、まったくもって嘆かわしい！
フォルカは無言で俺を凝視し、威圧してきた。
白い衣服の下には、鍛え抜かれた鋭角なボディーラインが若干浮き上がって見える。
明らかに一般人の体つきではなかった。

「ショウコー、そんなに修羅野郎の方がいいのかー？」

涙目になりながらコウタも立ち上がった。
コウタの息は心なしか酒臭い、かなり飲んでいるようだ。

「修羅野郎、テメエもそんなにショウコがいいのかー？」
「お兄さん」
「るせえ！　そんなにショウコが欲しいんなら、この俺を倒してみ

やがれってんだ！！」

コウタがボロボロの学ランのような上着を脱ぎ捨てると、フォルカとはまた違う太い二の腕の筋肉が披露された。
学生生活の部活では身に付きそうにない、力仕事を生業にしている者の持つ筋肉だ。

「いいぞ、やれやれー、ぶっ殺せコウタ！」
「任せとけ、緑髪のアンちゃん！」

バキバキ、と拳を鳴らしながらコウタが構える。
ただ力任せに拳を作り、腕で顔周辺をガードするだけの格闘技の素人の構えだった。

「もうお兄ちゃんの分からず屋！　フォルカ、やっちゃえ！」
「……これも修羅の宿命か」

フォルカが流れるような手の動きで、コウタを迎撃するために構えを取った。
体から紅い闘気のようなモノが立ち上がり、酒場内の空気が打ち震えていく。
コウタの構えとは対照的に、完成された一つの芸術品のような型を取るフォルカに、俺は思わず恐怖を覚えた。
あれ……なんだろうこれ？　体が震える？
以前にもこんな感覚を味わったことがあるような気がする……俺は恐怖を打ち消すために、再びＸＹＺを注文してそれを一気に煽った。
両者の間には一触即発の空気が流れる。

「話し合いの余地はないのか、お兄さん？」

「テメエが俺を兄と呼ぶ限り、俺はテメエを許さねえ。そんなにショウコと付き合いたけりゃ、拳で俺から奪い取ってみやがれってんだ！」

「是非もなし、か。やむおえん　――」

フォルカの闘気が膨れ上がり、棚に陳列されたグラス類がカタカタと唸り始める。

軽く指を立てた手の型を向け、フォルカが吠える。

「機神拳、奥義　――　ッ！！」

貯め込んだ空気が爆ぜる、まさに瞬間、

「フォルカアァァァッッ！！」

――　ドバーーン！！

酒場の入り口のドアを蹴り破って、１人の男が店内に飛び込んできた。

目つきの鋭い、水色の髪をした男だった。

チッ、これからが本番だと言うのに。

俺も、コウタもフォルカも、空気を読まない乱入者の方に目をやる。

「探したぞフォルカ！　貴様、俺と言うものがありながら、そんな小娘になびくとは一体どういう了簡だ！？」

「フェルナンドか。なんの用だ？」

フェルナンドというその乱入者は、どうもフォルカの知り合いのようだった。

フェルナンドはフォルカに近づくと、胸倉を掴んで叫んだ。

「その乳臭い小娘と俺のどちらを取るかと訊いてるんだ！」
「ちょっ、乳臭いってどういう　――」
「娘、貴様は引っこんでいろ！！」

フェルナンドの暴言にショウコが異を述べようとしたが、フェルナンドの射抜くような眼光に言葉を詰まらせた。
フォルカとは対照的に、青い湯気のようなモノ（闘気）が背中から立ち上がっている。
なんだこいつ等は？　感情的になると体から煙が上がる人種なのだろうか？
突然のフェルナンドの登場にコウタもキツネにつままれたような表情を浮かべている。
雲行きが怪しくなってきたなあ……俺は取り合えず、ＸＹＺを再注文して口に運んだ。

「この泥棒猫め！！」

なんだか、恋人を寝とられた女のようなフェルナンドの言葉に、俺は違和感しか覚えることができない。
フェルナンドが女性なら、おおっ昼ドラじゃんっ、と俺も感銘を受けたであろうに……残念ながら彼は見事なまでに漢である。
フォルカに負けず劣らずの筋肉が服の下から浮き上がって見えている。

「意味が分からんぞ、フェルナンド」

まったくもってその通り、俺はフォルカの言葉に頷いた。
だがフォルカの言葉を聞いた途端に、フェルナンドの青い闘気がどす黒い暗黒のような色に変わる。

フェルナンドは耳まで真っ赤にしており、激怒しているのが目に見えて明らかだった。

「フォルカ、俺と過ごした暑い夏の思い出を忘れたのか!?」
「覚えているとも。夏に山籠りし、共に修業した頃のことだな?」
「忘れたのか!?　２人きりで、海に一緒にでかけたことを!?」
「覚えているとも。水中戦の鍛錬のため、２人で人喰いザメを退治した時のことだな?」
「忘れたのかフォルカ　――――――!?」

フェルナンドの叫びが店内に木霊する。
俺は彼の主張には主観が入りすぎている気がしていた。要するに脳内で美化しまくっているのだ。しかも男との思い出を、である。
理解しがたいフェルナンドの主張は続くが、フォルカは客観的事実を述べて対応していた。

「いい加減にしろ、アンちゃん」
「そうだぜ、その男には俺たちが用があるんだからよ」

俺とコウタは、延々続きそうなフェルナンドとフォルカの押し問答に痺れを切らした。
２人同時にフェルナンドの肩に手を置く。
すると、フェルナンドは俺たち手を払い除け、

「機神双衝撃(きしんそうしょうげき)ッ!!」
「あべしっ!?」「ひでぶっ!?」

両手から青い光弾のようなモノを放ってきた。
至近距離だったのでまともに当たり、俺とコウタは壁際まで吹っ飛ばされた。

かなり痛い。激痛が俺の中を駆け巡る。
しかし俺よりタフなのか、コウタは血の混じった唾を吐き捨てながら立ち上がった。

「おい、アンちゃん、なにしやがんでえ!?」
「俺の体に触っていいのはフォルカだけだ!!」
「あんま訳の分からねえこと言ってると、変身してぶっ殺すぞコラァ!!」

変身……確かにそう言ったコウタの体には、薄くぼんやりと光る紅い膜のようなものが纏われ始めていた。

「いいだろう、この俺の機神拳で葬ってくれる!!」

フェルナンドも黒いオーラを立ち昇らせて、フォルカと同じ構えをコウタに向けた。

……やばい。

フェルナンドに受けた痛みで酔いが醒めた俺は思った。
以前にもこんな光景を見たことがある。
既視感……なんかじゃなく、確かにこんな光景を見たはずだ!
そして酷い目に遭った!
まずい、逃げなくては……俺は痛む体を無理やり起き上がらせるが、

「ねえ、フォルカ」

ショウコがフォルカに言った。

「やっちゃえ?」
「承知した」

コオォォォ、と空手の息吹のような呼吸法で、フォルカが力をため始めた。
真っ赤な闘気……いや、思い出した。あれは確か覇気と言うものだ。
爆炎のようにフォルカの体から噴き出し、双頭の龍のようなシルエットが彼の背後には浮かび上がっていた。

「や、やばい！！」

俺は急いで、ドアの壊れた出口に向かって駆け出した。
フォルカの変化に気付いたコウタとフェルナンドが背後で叫んでいた。

「てやんでぇ！　やんのかテメエら！？」
「俺の機神拳で目を覚まさせてやるぞ、フォルカ！」

２人の言葉を受けたフォルカは、

「機神拳の力……その身で思い知るがいい！！」

さらに覇気を強大に高めているのが、背中越しにでも俺には分かった。
だって背後から物凄いプレッシャーがビンビン伝わって来るんだもの。
早く、早くここから逃げなければ、俺の身が危うい。
ここは「シュ・ラバー」……恋人たちが愛の語らいをする酒場、そう思っていた。
しかし違った。
ここは本当の修羅場だ！

「真覇猛撃裂破(しんはもうげきれっぱ)ァァッ！！！」

空気が爆ぜた　――　では生ぬるい、爆弾が炸裂したような衝撃が体を包む。

そのフォルカの咆哮と共に放たれた閃光に、

「「「ギャアアア　――――　ッ！！」」」

俺、コウタ、フェルナンドの悲鳴はかき消され、俺の意識はそこでプッツリと途絶えることになる……

目が覚めると俺たちは、ゴミ捨て場で横になっていた。

周囲は完全に深夜真っ盛りの暗闇で、冷めきった冷たい風が吹きすさぶ。

なぜか俺の隣にはコウタとフェルナンドが気絶していた。

「俺、なんでこんな所で寝てるんだ？」

俺の隣で気絶している連中の名前は分かるのだが、なぜ自分がゴミ捨て場で寝ていたのかが思い出せない。
それに頭がガンガンする。
鈍器かなにかで頭を強打されたみたいに痛む。
つい先ほどの事を思い出そうとすると、痛みがさらに酷くなり、吐き気まで催してきたので考えるのは止めることにした。

「……なにか大切なことを忘れてる気がするが……気分も悪いし、帰るか」

俺はコウタとフェルナンドを放置して帰路に付いた。
夜の街は煌々と明かりが照らされ明るいが、光の届かない路地は暗闇に覆われている。
この暗闇になにか恐ろしいものが潜んでいるような気がした。
俺は駆け足で自宅を目指した

●

深夜2時。
客のほとんど居なくなったバーでの中で、リューネは1人項垂れていた。
理由？　説明しなければいけないだろうか？

「マサキ、やはり来ませんね」

グラスを拭きながら、閉店の準備を進めるシュウが呟いた。
彼の目の前のカウンターには顔を赤く染めたリューネと、空の酒瓶が大量に転がっている。

「ちゃんと、私が働いているバーの名前と、住所のメモを渡したんですか？」
「……」
「リューネ？」

シュウの問いかけに、リューネは答えなかった。
代わりに無言で携帯電話を取り出し、座った目でメモリーを眺め、不確かな指の動きで通話ボタンを押した。
しばらくして、電話をかけた相手から声が帰って来た。

『リューネよ、こんな夜中にどうしたのだ？』
「あ、親父―、ちょっとお願いがあるんだけどさぁー」

どうやらリューネは自分の父親、大企業「ディバインクルセイダーズ」のトップであるビアン・ゾルダークに電話しているようだ。

「首輪作ってよ、首輪！　発信器付きのヤツね！」
……犬？　違うわよー、人の首に付けるヤツ　――――」
「ふぅ……やれやれ」

シュウのため息は、客の居なくなった店内に空しく溶けていくのだった。

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。
『エリア』には個性豊かな人間が沢山いる。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない

おまけ

『エリア』内にある小さな公園のブランコ。
真夜中にそれをキイキイと揺らす影が一つあった。３つ目の仮面をつけた中年男性だった。

「……また、クビになってしまった……」

「シュ・ラバー」のマスターとして雇われて１日目にして解雇。
耐えようのない絶望感が仮面の中年 ―― ユーゼス・ゴッツォに圧しかかる。

「がんばれ、ゆーさん」
「ありがとう、オータムちゃん。はい、チーかま」
「わーい、ありがとー」

傷心のユーゼスはチーかまの包装を剥ぎ、謎生物オータム・フォーに渡してあげた……ユーゼスの明日はどっちだろう？
頑張れ、マダオ。

続・アンドー君漫遊記　～デート目指して行く、2千里?～（後書き）

＜登場キャラ紹介＞

マサキ・アンドー：ジェネ高2年生。超がつくほどの方向音痴、次はどこへいくのやら。

リューネ・ゾルダーク：ジェネ高2年生、マサキと同じクラス。マサキが好き。

フォルカ・アルバーク：修羅。ショウコの彼氏らしいが職業不明。あまり暴力はすきではない。

フェルナンド・アルドゥク：修羅。フォルカの親友だが、気持ちが時々暴走する。

コウタ・アズマ：学校に通わず、肉体労働で生活費を稼いでいる。ショウコ命！

ショウコ・アズマ：ジェネ高1年生。フォルカと交際している。

＜次・回・予・告＞

エクセレン「ワーオ、お久しぶり！　実に1週間ぶりの更新よーん！」

キョウスケ「作者は最近仕事が忙しいと言い訳をしていたな」

エクセレン「小説の更新なんて趣味みたいなもんなんだからそんなの関係ないでしょ。それにしても、そろそろ忘年会の場所も決めないとまずいわねー」

キョウスケ「その内、忘年会ネタでもやるか……では次回予告にいくとしよう」

キョウスケ
「俺は　――　以下略　――　だ！
次回は久しぶりに劇でもやってみるとしよう！
だが日本昔話ではなく、世界名作劇場だ！
次回、スパロボ学院『ＯＧ世界名作劇場　～蛸とシンデレラ～』！
どんな相手だろうと、打ち貫くのみ！」

本当は2，3日中に更新するつもりでしたが、仕事で疲れてやる気が出ず、ここまで遅くなってしまいました。
待っててくれた人は本当にごめんなさい。

感想くれたｓｉｂｕｇａｋｉさん、Ｄｉｓさん、三国同盟さん、ありがとうございます！
皆さんの感想を励みに頑張っていこうと思います。
また、随時ネタ募集中なので、気軽にネタを投稿していただければ助かります。
では、また次回でお会いしましょう！

OG世界名作劇場　～蛸とシンデレラ～（前書き）

＜注・意・事・項＞
絶賛、キャラ崩壊中！
ヒリュウ改クルーのイメージとシンデレラのストーリーが好きな人は、イメージが大きく損なわれる可能性があります。
見ない方がいいかもしれません。
それでもいい、という方はどうぞ！

OG世界名作劇場　～蛸とシンデレラ～

それはもう遠い昔のこと、レオナという美しくツンデレな女の子が、それはそれは立派なお屋敷に住んでいました。

レオナは裕福な貴族の一人娘でした。
幼いころから大切に育てられたレオナでしたが、人と接することが得意ではなく、常にツンツンした態度をとってしまう、そんな子どもでした。

しかしある日、レオナの母親は病に倒れて返らぬ人となってしまいました。
レオナはこのときも、ツンツンしていて涙を見せなかったと言います。
レオナがあまりにもツンツンするため父親は寂しさに耐えきれなくなってしまいました。

新しい人生の再出発を誓い、新しい女性に愛を誓いました。
父親の新しい結婚相手は、レフィーナ・エンフィールドと言いました。
とても聡明で美しく、レオナはすぐに継母のことが大好きになりました。
しかし、レオナはついツンツンしてしまいます。
継母レフィーナは自分が嫌われているのではないかと心配しながら共に生活していたある日、今度はレオナの父親がポックリ逝ってしまいました。

こうして一人残されたレオナは継母レフィーナと、2人の義理の姉カチーナ・タラクスとユン・ヒジョウと生きていくこととなりました。

継母に不満はありませんでした。

しかし問題なのは2人の姉たちでした。

長女のカチーナはとてもガサツで乱暴者、事あるごとにレオナに殴る蹴るの暴行を加えてきます。

綺麗だった髪の毛もストレスで枝毛が目立ちだし、お気に入りの服も徐々に汚れてボロボロになっていきました。

次女のヤンはと言うと、状況を確認　・　空に向かって報告しているだけの電波娘で、DVの解決に一切役に立ちそうにありません。

継母のレフィーナはというと、

「まぁまぁ、カチーナとレオナは、いつもじゃれ合ってて本当に仲がいいわねえ」

と本気で思っていました。

継母のフィルターを通してしまうと、残酷な事実もマイルドに脚色されてしまうようです。役に立ちません。

一方、カチーナは家のお手伝いを全てレオナに押し付けてきます。

ある日、暖炉の掃除をしているとき転んでしまい、レオナは灰まみれになってしまいました。

その様子を見てカチーナは言いました。

「灰だらけになっちまってみっともねえなあ」

これだけならまだいいのです。

この後、カチーナはとんでもない事を言い始めました。

「そうだ、お前にあだ名を付けてやろう」

レオナはとても嫌な予感がしました。

すぐにその場を逃げ出そうとしましたが、カチーナが鍛え抜かれた上腕二頭筋でレオナの首を挟んで離してくれませんでした。

「今日からお前は灰かぶり姫（シンデレラ）――いや、いつもツンツンしてるから、ツンデレラな」

それからというもの、カチーナがツンデレラツンデレラとあまりに呼ぶので、優しい継母も愛称で呼んだ方が懐いてくれると思ったようで、

「お母さんも、レオナのことツンデレラって呼んでいいかしら？」

「べ、別によろしくってよ！」

本当は嫌なのに、大好きな継母にそう言われたため、ついツンツンとそう答えてしまいましたとさ。

こうしてツンデレラは久しく本名を呼ばれることはなくなり、無事に１８歳を迎えることができましたとさ。

めでたしめでたし。

「めでたくないでしょう！」

ツンデレラは誰にではなく、空に向かって吠えました。

居間で作務衣を着てまるで召使のように暖炉を掃除するツンデレラ。

その様子を空と交信しながら見ていたユンが話しかけてきました。

「どうしたのツンデレラ？」

「な、なんでもありませんわ！」

もしかして自分のことを心配してくれた？　そんな淡い感動を覚えたツンデレラはついツンツンと答えてしまいました。

すると途端にユンは怪訝な顔を浮かべました。

機嫌を損ねてしまったかもしれない、そう思ったツンデレラが弁解するよりも先にユンが口を開いていました。

「……もしかして、ツンデレラも交信してる？」

「誰とですか！？　私が誰と交信してるって言うの、お姉様！？」

「お空」

ツンデレラは電波なことを言うユンにどう対応していいのか分かりません。

苦慮している内に、今度は2階からバタバタと品なく階段を駆け下りてくる音が聞こえてきました。

大きな音を響かせて、居間のドアを開きカチーナが現れました。

「おい、聞いたかツンデレラ！」

「な、なにをですか、カチーナお姉様？」

カチーナは今日も愛用の竹刀を片手に登場したため、ツンデレラは思わず体を震わせながら答えました。

最近カチーナは殴る蹴るの暴行は加えなくなった代わりに、竹刀をビシバシと振るってくるようになりました。

竹刀は通販で購入した名品らしいです。

竹刀で脅されるため、悲しい事にツンレデラの家事レベルは軒並み上昇中でした（料理以外）。

料理だけはツンデレラにやらせないカチーナは、もしかしたら本当は優しいのかもしれません。

カチーナが竹刀をブンブン振り回しながら言いました。

「なんでも、今日お城で舞踏会が開かれるらしいぜ！　しかも、そこでタスク王子の花嫁を決めるそうだ！」

「本当ですか、カチーナお姉様！」

ツンデレラは思わず大声を上げてしまいました。

王子の花嫁ともなれば完全に玉の輿　――　ツンデレラならぬシンデレラストーリーです。

白馬に乗った王子様、女の子が誰でも見る夢をツンデレラも当然見ていました。

「大変、急いで準備しなくちゃ！」
「なに言ってんだツンデレラ！」

カチーナが竹刀をピシィと走らせました。
ツンデレラの肩がビクンと揺れました。

「分かってると思うけど、お前はお留守番だよ」
「そんなお姉様、殺生な。お願いですから、私も連れて行ってください」
「そんなこと言っても、家に送られてきた招待券は2枚しかねえんだよ」

カチーナは懐から2枚の紙切れを取り出すと、ヒラヒラとツンデレラに見せびらかしました。

「保護者同伴じゃないと駄目らしいから、レフィーナお母様と私とユン、舞踏会に行くメンバーはこれで決まりだぜ！」

ガッハッハ、と豪快にカチーナ笑いました。
なんと言うことでしょう。
舞踏会には誰でも参加できるものだと思っていたツンデレラは衝撃を受けてしまいました。
しかし少し考えてみれば当たり前のことです。
大事な王子の御身になにかあっては一大事、身元不明な人間を不特定多数城内に招くなど危険極まりない冒険でしょう。
ですがなぜ招待券が2枚なのでしょうか？
なにか巨大な悪意が渦巻いているようにしか、ツンデレラには思えません。

「ごめんね、ツンデレラ」

綺麗に着飾った継母のレフィーナが居間に現れました。
優雅なドレスに身を纏い、柔和な笑みを浮かべています。
王子だろうが王様だろうが関係なく、男なら誰でもイチコロで悩殺できそうな程の美貌でした。
もっとも、レフィーナは玉の輿なんて考えていないでしょうが。

「本当は連れて行ってあげたいけど、招待券が2枚しかないの。だから今日はお留守番しててもらえないかしら？」
「そ、そんなにお願いされては仕方ありませんわね！」

大好きなレフィーナにお願いされたツンデレラは、顔を真っ赤に染め上げて言いました。

「勘違いなさらないで！　べ、別にお母様のためじゃありませんからね！」
「ありがとうツンデレラ。やっぱり、あなたは優しい子ですね」

気品溢れる礼をするレフィーナにツンデレラは思わず見とれてしまいました。
ツンデレラは自分の美しさにそれなりの自信を持っていしたが、この継母には敵わないなと感じていました。
長女のカチーナも次女のユンも人間性を除けば、それなりに美しいですし、ツンデレラの家族はみんな美人ぞろいです。
いつの間にか真っ赤なドレスに着替えたカチーナが言いました。

「おっしゃあ、赤いドレス着て3倍美しくなったし、しっかり玉の輿狙うぜえ！！」

気合十分、舞踏会をプロレスの試合かなにかと勘違いしているようです。

「行ってくるから」

ユンは地味なドレスに着替えて地味に言いました。

４人の中でツンデレラだけが作務衣です。

悲しいです。自分だって着飾れば美しいのに。

悔しいです。そんなツンデレラの想いを余所に、レフィーナたちは舞踏会に出かけて行きました。

「私だって舞踏会に行きたいのに……」

ツンデレラの寂しげな独白が、誰もいない居間に静かに浸み渡りました。

別に泣いてなんかいません。

泣いたって仕方ないことだと分かっているツンデレラは、黙々と残っている家事を続けましたとさ。

めでたしめでたし。

そのときでした。

――　コンコン

誰かが玄関の扉をノックしたのです。

「誰かしら？」

ツンデレラは家事をする手を一旦止め、来客の対応をするため玄関を開けました。

そこに立っていたのは、顔まですっぽり覆い隠せる黒いローブを着た体格のいい男性で、

「ハァハァ、じ、自分の名前はラッセル・バーグマン。見ての通りの魔法使い　――」

――　バタンッ！

どうやら変態のようでした。

ツンデレラは勢い良く玄関の扉を閉めました。

人の家の軒先で息を切らして待ち構えているなんて、気味が悪いことこの上ない奴だととツンデレラは思いました。

しっかり戸締りをしておかなくては……ツンデレラが玄関の扉に伸ばしました。

しかし荒い、というよりは弱々しい黒ローブの男 ――― ラッセル・バーグマンの声が聞こえてきました。

「す、すいません……3日間飲まず食わずなもので……よかったら水を一杯、一杯だけで構いませんから……どうか後生ですから、水を……」

「まったく、仕方ありませんわね！」

軒先でくたばられても困るので、ツンデレラはラッセルを家の中に入れてやることにしました。

言葉の通りラッセルは弱りきっていて、水一杯を与えただけでは回復しませんでした。

可哀想になったツンデレラは、ラッセルにおかゆを作ってあげることにしました。

弱った胃腸にはおかゆなどの消火の良いモノが一番です。

しかし出来上がったおかゆは塩しか入れていないはずなのに、なぜか赤い色をしていました。

「べ、別に貴方のためではありませんが、おかゆを作ったので、良かったらお食べなさいな」

「あ、ありがとうございます、ツンデレラさん」

ラッセルは震える手でおかゆを掬い、口に運びました。

するとまるで電撃が体に奔ったかのように跳び上がり、口を押さえて涙目を浮かべ始めました。

3日ぶりの食事の味に感動しているようでした。

「お味はどうかしら？」

「き、き付けとしては最高かと……（とても言えない……この世のモノと思えない不味さだなんて……）」

「良かった」

ツンデレラはラッセルにパアッと笑顔を向けました。

あまりに眩しい笑顔にラッセルは思わず顔を背けてしまいました。

罪悪感に駆られた訳では、決してありません。

「どんどんお代りしてくださいね」

――ドンッ！

ツンデレラは鍋一杯に作ったおかゆをラッセルに差し出しました。

ラッセルは引きつった笑顔を浮かべます。

「あ、ありがとうございます（頑張れ自分！　ここで食べねば男が廃る！）」

「どういたしまして」

小1時間経過し、なんとかおかゆを食べきったラッセルの表情は、どこか魂が抜けたようだったと、ツンデレラは言っていました。

家に来た時とは別の意味で弱々しくなったラッセルが言いました。

「あ、ありがとうございます……できたらお礼がしたいのですが」

「別にいいですわ」

「そ、そう言わないで……（でなければ、なんのために毒を食べたのか分からない！）」

ラッセルはそう言うと、黒いローブの中から一枚の券を取り出しました。

それはなんと、お城の舞踏会の招待券ではありませんか。

ツンデレラの目の色が変わりました。

「それ、どうなさったの!?」
「つ、つい先ほど道端で拾いまして……良かったら要りますか?」
「ありがとう、魔法使いさん!」

半ば強引に奪い取るように、ツンデレラはラッセルから招待券を受け取りました。
これで王子様に会える、ツンデレラの胸は高鳴ります。
綺麗な服があまりないツンデレラは、継母のドレスとガラスの靴を勝手に借りて行くことにしました。
しかしサイズが合いません。それも悲しいことに主に胸でした。

「魔法使いさん、胸を大きくしてくださいな」
「そ、そういうのはちょっと……代わりに服と靴のサイズを合わせて差し上げます」

ラッセルは懐から小さな木の棒を出して振りました。
するとどうでしょう、少し大きかったドレスも靴も、ツンデレラに丁度よいサイズに早変わりです。

「ありがとう魔法使いさん! お留守番もよろしくね!」
「え? かぼちゃの馬車とかのオプションは? というか自分がお留守番ですか?」
「そんなことより、お城までワープさせて下さらない?」
「は、はい、分かりました」

ラッセルの魔法のステッキから光が迸りました。
ツンデレラはお留守番をラッセルに任せて、お城まで瞬間移動で跳んで行きましたとさ。
しかし視界から居間が消える直前に、ラッセルのこんな言葉聞こえてきました。

「２４時になると魔法は解けちゃんで、それまでには帰って来てくださいね　――」
「分かりました　――」
ツンデレラはそれを肝に銘じて、舞踏会へと向かいます。

●

一方、舞踏会場では……
「ショーン爺よ、中々に可愛い子が集まっているじゃねえか、わはは」
「まったく眼福でございますな、タスク王子様」
舞踏会場を見下ろせる玉座に座っているタスク王子は、眼下で会食を楽しんでいる来客たちに目を馳せていました。
自分の花嫁候補になりたいと集まって来た娘たちを、隣で待機するショーン・ウェブリーと共にまるで舐めまわすかのように観察しています。
「お、あの娘なんて地味だけど結構可愛いと思わないか、爺？」
「ユン様ですな。しかし私としては、その母親のレフィーナ様などが一押しですな。２児の親とは思えぬ若々しさ、さながら１９歳のようです」
「おお、確かにいいねー。流石はショーン、お目が高けぇ！」

「恐れ入ります」
「しかもボインちゃんじゃねえか。俺、ボイン大好きなんだよ」
「恥ずかしながら、私もでございます」
「ショーン、いつもの特技見せてくれよ」

タスク王子の一言に、ショーン爺の目つきが変わりました。
まるで熟練された狩人のような視線でした。
しばらくしてショーン爺は目を閉じて言いました。

「レフェーナ様のサイズは上から８２、５４、８８ですな」
「ひゅー、流石ショーン！　いつも思うけど、それってもうほとんど神業の域だぜ！」
「恐れ入ります」

慇懃無礼にショーン爺は、特に頭も下げることなく答えました。
しかし完全にセクハラです。視姦です。

「タスク王子、あの活発そうな娘などはいかかですかな？」
「え、あの娘？　パス、絶対にパス！」

ショーン爺が指差した先にいるのは、竹刀片手に飯を食べ続けていたカチーナでした。
タスク王子は首をブンブン横に振りながら、答えました。

「あんなのと結婚したら、毎日タコナグリにされそうだぜ」
「同感でございますな。
では、タスク王子の嫁候補Ｎｏ．１はレフィーナ様ということで……」
「うむ。やはりボインは男のロマンだな！」
「同感でございますな」

「わははは、さーて、そろそろ踊ってやるとするかな　――　あっ」

舞踏会はその名の通り、会食後はダンスパーティーを行う予定であったため、タスク王子はそのために玉座から立ち上がりました。

しかし同時、愛用の緑のバンダナが解けて、階下に落ちて行ってしまいました。

「おっと、いけねえいけねえ」

タスク王子は階段を下りて、バンダナを拾いに行きました。

子どもの頃から使っている愛用の大切なバンダナです。

慌てて取りに行ったタスク王子でしたが、それを先に拾い上げてくれた人がいました。

その人は無言のまま、タスク王子にバンダナを手渡してくれました。

「おっ、ありがとな」

タスク王子は礼を行ってバンダナを受け取りました。

そしてタスク王子は顔を上げて、バンダナを拾ってくれた人の顔を見上げたのでした。

――　き、綺麗だ……！

タスク王子は思わず見とれてしまいました。

その人は美しい金髪をなびかせて、優雅にドレスを着こなし、ガラスの靴を履いていました。

ボインではありませんでしたが、タスク王子の好みど真ん中の美女でした。

「べ、別に　――」

金髪の女性が口を開きました。

「あ、貴方のために拾った訳ではありませんからね！」

――　ズキューーン！！

「はうっ！！」

彼女のツンツンした態度に胸を打たれて、タスク王子は倒れてしまいました。

城内がザワメキ立ちました。

それは世に言う、一目ぼれというものでした。

●

憧れの王子様にバンダナを渡せたツンデレラ。

しかし次の瞬間、王子様は胸を押さえて倒れてしまいました。

城内がザワメキだします。

「お、王子様が倒れられたぞ」

衛兵その１が叫びます。

「胸を撃たれたようだ」

衛兵その2が吠えます。

「探せー、下手人を探せー！」

衛兵隊長の咆哮が城内に木霊しました。

「ま、待つんだ皆！」

城内が騒然とし始めた時、タスク王子は立ち上がりました。

胸を押さえながらも、騒ぎを止める為に歯を食いしばり声を上げました。

その様子に、ツンデレラは見とれてしまいます。

なんて立派なお方なのだろう、と。

「だ、大丈夫ですか　――」

と口を開きかけた所で急に恥ずかしくなり、やはりいつも通りのツンツンした態度を取ってしまいます。

「――　か、勘違いしないでよ……別に、貴方の心配なんてしてないんだから！」

――　ズバキューーン！！

「ぐはあっ！！」

少し、上目使いで放たれたツンデレラの言葉に、タスク王子は再び倒れてしまいました。

鼻血で綺麗な放物線を描きながら、タスク王子は床に後頭部を打ちつけ、白眼を剥いて気絶してしまいました。

もはや、誰がタスク王子を討ち取ったのかは一目瞭然でした。

「奴が下手人だ！」

玉座からショーン爺が衛兵に指示を出しました。

「ひっ捕まえて、服を剥ぎ取って、タスク王子のベットに運びこめ！」

「ひぃ！？」

一瞬で周囲を取り囲まれしまったツンデレラ。

彼女が上げた悲鳴に、ショーン爺が悪党丸出しの悪い笑みを浮かべました。

「ふふふ、実に良い。そこのツンツンした貴女、実にタスク王子にお似合いですね」

ショーン爺の目がキラリと光りました。

その瞬間、ツンデレラは悪寒を感じたので、胸とある部分を手で隠しました。

それを見たショーン爺はにやりと笑みを浮かべます。

「私の特技を見破るとは……やはり貴女こそ、タスク王子に相応しい！

衛兵たち、早くタスク王子のベッドに運び込みなさい！」

「な、なにをなさるんですか！？」

衛兵に拘束されてしまったツンデレラの問いに、ショーン爺はやはり悪い笑顔を浮かべながらこう答えました。

「なーに、ただの婚前交渉という奴ですよ」

「いやーーー！！」

城内にツンデレラの悲鳴が響き渡ります。
しかし誰も助けの手を差し伸べようとはしてくれませんでした。
当たり前でしょう、相手は国家権力のトップです。
手を出せば、例え貴族であろうとも潰されてしまうのがオチでした。
継母のレフィーナも次女のユンも、驚きのあまりか固まってしまっていました。
もはや状況は絶望的でした。
これからツンデレラはベッドに連れ込まれて、あーんなことやこーんなことをされてしまうのだと……覚悟決めた、そのときでした。

「待ちやがれ！」

長女のカチーナでした。
竹刀を振り回しながら、真剣持ちの衛兵をバッタバッタとなぎ倒しながら近づいてきます。

「カチーナお姉様！」
「大丈夫か、ツンデレラ！」

真っ赤なドレスをなびかせて、カチーナの剣技が冴えわたります。
ツンデレラを庇って闘うカチーナの姿は女性なのにとても男前でした。
全ての衛兵をなぎ倒し、カチーナは竹刀をショーン爺に付き付けて言いました。

「やい、シングウジ王国の王子タスクに、その爺やのショーン・ウェブリー！」

驚いているツンデレラを余所に、カチーナは胸元から真っ赤な手帳を取り出しました。
なんだか〇オンの国旗のような紋章のついたそれを、まるでどこかの老人の印籠のようにショーンに付き付けます。
手帳を見たショーンは驚愕の表情を浮かべました。

「そ、それは国際警察の紋章 ――」
「そう！　国際警察『ヒリュウ・カスタムズ』の潜入捜査員、それが私、カチーナ・タラスクさ！」

国際警察……なんだろうそれは？　とツンデレラは思いました。
しかしショーン爺たちは震えあがっていました。
本当に悪いことをしている人たちが警察に見つかった時にする顔です。
ドバーン、と押し寄せる津波を背景に召喚しながら、カチーナが吠えました。

「周辺諸国および自国内での、美女拉致監禁事件の現行犯で逮捕する！」
「くっ、なんということだ！　タスク王子が見境ないから……こうなれば、貴様を消して ――　！」
「いいぞいいぞ、そこから一歩でも動いてみやがれ！　タコナグリにしてやるど！！」

竹刀を構えるカチーナにショーン爺は、ひいっ、と震え上がりました。
こうして、タスク王子とショーン爺一味はひっ捕えられました。
女性の敵が、また一つ世界から消えた瞬間でした。

めでたしめでたし。

「ちょっと、私のシンデレラストーリーはどうなるの！？」
「少し黙ろうかツンデレラ」
納得できずに叫ぶツンデレラに、カチーナは愛用の竹刀をチラつかせました。
「そんなことより、お前家事はどうしたんだ、アアーン！？」
「ひ、ひぃーー！」
ブンブン竹刀を振り回すカチーナに追われながら、ツンデレラは家へと走って行きました。
ツンデレラを追い掛けるカチーナの表情はとても活き活きとしていました。
「あらあら、やっぱりカチーナとツンデレラは仲がいいわねえ」
継母のレフィーナがにこやかに言います。

そんな訳ないだろう！
反論をする暇も与えないカチーナの猛追に、ツンデレラは猛スピードで家へと急ぐのでした。
果たして、ツンデレラに平穏の日々は訪れるのでしょうか？
本名も忘れられたツンデレラの苦悩の日々は続く。

めでたしめでたし。

「めでたくない！」

一方、ツンデレラ宅に放置されたラッセルはと言うと……

「うーんうーん、痛いよー苦しいよー」

お腹を押さえて、トイレから出れなくなっていましたとさ。
哀れ。
頑張れラッセル、負けるなラッセル。
明るい未来がきっと君を待っている、はず……。

俺の名前はキョウスケ・ナンブ。
俺の心には強烈な感動の荒波が押し寄せていた。
それはなぜか、今から説明することにしようと思う。
なぜか高校の密集する地域、『エリア』一のマンモス高校――
OG高等学院（オリジナルジェネレーション）、通称ジェネ高の映写室に今俺たちはいる。
もしかして、ジェネ高の存在は忘れ去られはいないだろうか？
まさかな。
いくらなんでもそれはないと、俺は思っている。

「欲に走ったとしても、結局は権力により押しつぶされる――
うむ、欲をかいたり、玉の輿など狙わずに毎日を堅実に過ごしなさい、というテーマが込められているな」
「ギャンブラーの台詞ではないでござりんす」
「それに、シンデレラってこんなお話だったかしらん？」

両隣りの席にいる、エクセレンとラミアが好き勝手に言ってくれている。
先ほどまで俺たちが見ていた映像は、ジェネ高の第2映像研究部『ヒリュウ・カスタムズ』の作った作品であった。
しかしシンデレラがどんな話かと訊かれると、俺も答えることはできない、
他力本願な少女が、動物や人外の力を借りて、運と美貌だけで成功するタナボタストーリーだったきがする……少し、いや大分違うか？
しかしラミアよ、なぜお前はまたジェネ高にいる？
お前は影鏡高校の生徒のはずだろう。

いつもジェネ高にいるのなら、もういっそのこと、こちらに転校してくればよいものを。

「私の姉は灰かぶりだったのでやんす」
「意味が分からん」
「女の子は皆シンデレラってことよん♪」

今日も俺たちの楽しい一日は過ぎていく　――

ここはＯＧ高等学院。
『エリア』にある地域最大のマンモス高校だ。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない。

OG世界名作劇場　～蛸とシンデレラ～（後書き）

＜キャスト＞
ツンデレラ：レオナ・ガーシュタイン
継母：レフィーナ・エンフィールド
長女：カチーナ・タラスク
次女：ユン・ヒジョウ
王子：タスク・シングウジ
爺や：ショーン・ウェブリー
ナレーション：作者

でお送りしました。

＜次・回・予・告＞

エクセレン「イェーイ、久しぶりに本文に登場のエクセレンちゃんでーす！」

キョウスケ「主役のキョウスケ・ナンブだ」

エクセレン「なんでも今回の話は、レオナをツンデレラって言ってみたかったから書いただけみたいよん」

キョウスケ「……どうしようもない作者だな」

エクセレン「しかも、途中でオチ考えるのが面倒になったんで、カチーナさんに始末をお願いしたそうよ」

キョウスケ「……本当にどうしようもないな。まぁ、いい。次回予告にいくか」

キョウスケ
「俺の名前は　――　以下略　――　だ！
次回もまたしても学園に関係ないぞ！
その男、バイトの達人にして蹴りの達人！
次回、スパロボ学院、「史上最強のフリーター」
どんな相手だろうと、打ち貫くのみ！！」

エクセレン「スパロボＴＯＰもよろしく！」

ｓｉｂｕｇａｋｉさん、ｄｉｓさん感想ありがとうございます！
こんな思いつきのみの小説読んでくれてありがとう。
これからもチビチビ書いていくので、良かったら読んでくださいね。

これ書いてて、レオナの口調が分からなくなりました。

史上最強のフリーター　～あの子のハートをゲットせよ！～（前書き）

＜注・意・事・項＞
絶賛、キャラ崩壊中です。
バイト君のイメージが崩れるのが嫌な方は、見ない方がいいかもしれません。
それでも良いというかたは、どうぞ！

史上最強のフリーター　～あの子のハートをゲットせよ！～

――好きな人が出来ました。

俺の名前はトウマ・カノウ。
去年、ＯＧ高等学院を卒業したばかりのピチピチの１９歳だ。
俺の夢はごく普通。
ごく普通に恋をして、ごく普通に家庭を築き、ごく普通に死んでいく。
特別なものなんていらないね。
人間、普通が一番さ。

そんな俺にも好きな人が出来ました。
俺は定職には付かずフリーターをしています。
今までに１０８のバイトを経験し、「バイトの達人」の異名を取る俺はその日宅配便のバイトをしていました。
大型トラックの免許も持っているので、バイト先ではそれなりに重宝され得意先への配達も任されるぐらいです。
その日、俺は宅配先のパン屋「ヒカワ屋」で彼女に出会ったのです。

「いらっしゃいませ！」

栗色の毛を纏めた可愛らしい女の子だった。

「あ、注文してた小麦だ。ありがとうございます、運送屋さん」
「あ、あの……」

店の奥から印鑑を持ってきた彼女に見とれていた俺だったが、受

け取りの印を受け取るときに、勇気を振り絞って聞いた。

「お、お名前は……？」

「え？　ミナキ、ミナキ・トオミネです」

天使のような笑顔で女性　――　ミナキさんは応えてくれた。

それは、もしかしたらただの営業スマイルだったのかもしれない。

だが俺はその笑顔に両手を上げて降参してしまっていた。

――　ミナキさん、貴女のためなら死ねる！！

配達が終了したら、俺はバイトを辞めた。

俺のもう一つの異名、それは「転職の達人」だ。

目指すは「ヒカワ屋」、待っていてくれミナキさん！

スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～

史上最強のフリーター　～あの子のハートをゲットせよ！～

なぜか高校が密集する地域『エリア』。

そんな地域にも商店街はあり、手作りの焼き立てパンを売り物にしている小さなパン屋はどこにでもあるものだろう。

「太陽のパン　ヒカワ屋」はそんな個人経営の小さなパン屋だった。

「お願いします、雇ってください！」

俺は三つ指ついて、店長のリョウト・ヒカワに願い出た。
場所は店の奥にある応接室だ。
リョウト店長は腕を組みながら、困ったなあ、と呟いていた。

「雇ってあげたいのは山々なんだけど、うちの店も経営が苦しいんだ。
看板娘のミナキさん一人で精いっぱいなんですよ」
「そこをなんとかお願いします、店長！」

俺は応接室の机に額をぶつける勢いで頭を下げた。
伊達に「転職の達人」と呼ばれている訳ではない。
今までリョウト店長よりも態度が頑なだったオーナーにも、自分を売り込むことに成功してきた俺だ。
それに今回は、ミナキさんと一緒に居られる権利が掛かっている。
相手に自分が魅力的だと思わせなければ……

「給料なんて雀の涙程で構いません！
俺、パン職人になりたいんです！　店長の元で修業出来れば、それで俺は本望です！！」

別にパン職人になんてなりたくない。
取り合えず嘘八百を並べて、リョウトの人情に訴えかけてみた。
リョウトはお人よしそうだから、これで簡単に折れるはずだ。
案の定、

「そこまで言われては仕方ないですね」

とリョウトはあっさり答えた。
よし、やった！　言質を得て、俺は心の中でガッツポーズを取る。
ミナキさんのハートをゲットするための第一関門突破ぁ！

「でも、僕の指導は厳しいですよ」

まだリョウトは、少し踏ん切りが付いていないような表情を浮かべていた。

ここはリョウトを持ち上げて、いい気分にさせておかなくては。

俺は目を輝かせながら言った。

「望むところです、先生！」

「せ、先生か」

イヤー照れるなー、とリョウトは頭を掻きながら頬を染めていた。

よし、これで店員には確実になれるはずだ。

あとは地道に修業して技術を身につけ、その過程でミナキさんと親密になってやるぞ。

そう俺が考えていた矢先だった。

「きゃあああああっ！！」

――ガシャーーーン！

店内の方からミナキさんの悲鳴と、なにかが割れる音が響いてきた。

「な、なんだ！？」

「くそッ、またあいつらか！　トウマ君はそこで待っていてくれ」

リョウトが血相を変えて応接室から飛び出して行った。

待っていろ、と言われたからにはここで待機しているべきだろう。

就職前から店のトップの指示に逆らっていては悪い印象が定着してしまうからな。

そう、いつもの俺なら、そうしていただろう。

「ミナキさん！」

だがミナキさんの悲鳴が聞こえてきた以上、素直に待機してなんかいられない。

俺はソファから立ち上がり、取り合えず応接室の扉から店内の様子を窺うことにした。

そこにはショーケースを破壊して、焼き立てのケーキ類を数個まとめて口に頬り込んでいる漢がいた。

超肥満体 ――― そう言って差し支えない程、腹が前と横に飛び出している。

「ぐふふふ、いい加減に店を『ミザル組』に明け渡せ、店長よ！」

肥満体の男がリョウトに脅しをかける。

その横にいた痩身の男が舌を出して吼えた。

「ひゃっはー、『ミザル組』に逆らってタダで済むと思ってんのか？　この変震のアルコと ――」

「――　重震のマグナス様に敵うと思っているのか、ぐふふふ」

痩身の男、アルコはショーケースをさらに蹴り砕き、肥満体の男、マグナスは店内のケーキとパンを喰い荒している。

「お願いだ、止めてくれ！」

店長のリョウトの悲鳴が店内に木霊するが、２人の暴徒は店内を荒らし回る。

ミナキさんは店の隅でうずくまり、震えていた。

――野郎、許せねえ！！

外道どもめ、ミナキさんを怖がらせるとは神が許しても、俺が許さん！

学生時代に空手部で鳴らした腕をここで披露してやろうか。

そうも思ったが、俺は今はまだ店員ではない。

店員でもない俺が、店のゴタゴタに手を出すわけにはいかなかった。

ものの数分で、店内のパンを全て喰らい尽くしたマグナスが高笑いを上げる。

「ぐふふふ、これに懲りたらさっさと『土地の権利書』を差し出すんだな」

土地の権利書……どうやら、マグナスたちは地上げ屋のようだ。

地上げとはなにか、分かりやすく説明しようと思う。

もしある地域に巨大なデパートを作る計画が立ち上がったとしよう。

資金も施行業者決定し、あとは工事に着工するのみ。

そう言った時に邪魔になるのが、「ヒカワ屋」のような小規模経営の店が着工予定地に店や家を構えていることだ。

工事はしたいが、店が邪魔。

ならばその店の権利書を取り上げて、潰してしまえばいい……それが地上げだ。

つまりマグナスたちは地上げを請け負っている業者、否、組と言っていた以上はヤクザなのだろう。

巨大な暴力にリョウトは顔をうつ向け、拳を震わして耐えていた。

「んーー、その拳はなにかなー、リョウトちゃーーん」

マグナスがぎょろりと眼を見開き、リョウトを見た。

「殴りたかったら殴っていいんだぜぇー。
ただし、俺たち修羅に手を上げることがどういう意味を持つかは分かってるよねぇーー？」

「うう……」

巨大なタラコ唇を醜く歪ませて、マグナスがリョウトに顔を近づける。

リョウトは目を閉じて、それに耐えていた。

「……ちっ、つまらん」

マグナスが舌うちした。

「こんな店、俺様の巨霊奔烈（きょれいほんれつ）で一撃だってのによ！　殴ってくれなきゃ正当防衛になりゃしねえぜ、ぐふふふ」

「根性無しめ！」

取り巻きのアルコまで吐き捨てるように言った。

……外道め、許せねえ……！

しかし俺がここで出て行っても奴らに直接的な暴力を振るう切っ掛けを与えるだけだ。

歯を噛みしめて耐えると、歯の擦れる音が俺の頭に響いてくる。

できることなら俺の空手で殴り倒してやりたい。

「次のときまでに権利書を用意しておくんだぞ、ぐふふふ」

マグナスはそう言って、アルコと共にドアを蹴り開けて去って行った。

後に残されたのは、無惨に破壊されたショーケースとマグナスが喰い尽くしたパンの残りカスぐらいだった。

「リョウト店長……」

「ああ、よかった、無事だったんだねミナキさん」

リョウトが店の隅にへたり込んでいたミナキさんを助け起こした。

「ごめんよ、怖い思いをさせて……」

「いいえ、私は大丈夫です。悪いのは皆、あいつら『ミザル組』です！」

「その通りだ！」

ミナキさんの声に俺は思わず応接室から店内に飛び出していた。

突然の俺の登場にミナキさんは、

「貴方は……」

と驚いた表情を浮かべていた。

そして俺のことを、

「誰、だったかしら？」

「ズコッ！」

覚えていなかった。

俺はドリフよろしく、盛大にずっこけてしまったがすぐに気を持ち直した。

まあ、覚えていなくて当然だろう。
以前に会った時、俺はただの運送屋の兄ちゃんだった訳だからな。
これからだ、これから俺の事を知っていってもらえばいいのだ！

「初めまして、俺の名前はトウマ・カノウと言います！　今日からここで働かせてもらいます、以後よろしく！」
「あートウマ君、そのことなんだけど……」

店長のリョウトが言いにくそうに口を開いた。

「見ての通り、僕の店はヤクザの地上げのターゲットにされているんだ……小さいながら、一生懸命頑張って来たつもりなんだけど、最近嫌がらせが酷くなってきてね……」

それは先ほど見ていたので知っている。
確かにあれは酷い。
店長やミナキさんに直接的暴力は加えていないが、店の営業が立ちかなく程の妨害を加えている。
おそらく今日見たものなど氷山の一角だろう。
リョートの顔色がそれを証明していた。

「いいんだよ、別に。やっぱり働くのを辞めたいと言うんなら、僕は止めはしないよ……ミナキさんも、辞めるのなら今が辞め時かもしれないよ……」
「店長……」
「なに言ってるんですか！！」

弱気なリョートの言葉に俺は思わず声を荒げた。
ここをミナキさんが辞めてしまったら、働く意味が無くなってしまうじゃないか！

あ、勿論、悪党の嫌がらせに屈してはいけないという意味も込めての言葉である。

「店長、俺を雇ってください！
俺、学生時代に空手やってました！　全国経験者です！」
「トウマ君……」
「今度、あいつらが来たら俺が返り討ちにしてやりますよ！」

俺の言葉に感銘を受けたのか、リョウトは目頭を押さえてしまった。
……しかし、学生時代に空手をやっていたのは本当だが、全国に行ったというのは嘘だ。
嘘も方便ではないが、こう言っておけば店長やミナキさんも少しは安心するだろう。
ま、俺は普通の１９歳だからな。
普通に空手やっているだけ全国行けたら苦労しない。
リョウトは目じりを拭いながら顔を上げた。

「ありがとうトウマ君、僕に○パンマンを焼ける技術があれば……」
「店長、それは言わない約束ですよ」

約束なんてしてないけど、調子よく俺は言った。

「これからは俺が、この店も、ミナキも護ってみせます！」
「ありがとう、これからよろしく頼むよトウマ君」

リョウトが差し出してきた手を俺は握り返した。
しかしそんな事は余所に、俺は横目でミナキさんの様子を窺う。
ミナキさんは笑っていてくれた。
どさくさに紛れて名前を呼び捨てにしたが、気づいていないのか、

それとも気にしていないのか……とにかく作戦の第二段階、彼女の名前を呼び捨てにするは成功だな。
これからミナキと呼び捨てで関わり、親密度上げていくことにしよう。

「よろしくね、トウマ」
「こちらこそ、ミナキ！」

名前で呼ばれた俺は満面の笑みでミナキに答えた。
実に問題なく、二人の仲を深めていけてる気がするぞ。
我が人生、順風満帆かな。
普通の恋人同士になれるよう普通に頑張っていこうと思う。

●

俺が「ヒカワ屋」雇われて3日が過ぎた。
マグナスたちは他にも地上げ中の店でもあるのか、それとも単に忘れているだけなのか、「ヒカワ屋」にはやって来なかった。
その間、俺がやっていたことと言えば、リョウトの手伝いである。
要するにパン焼き。やってみるとこれが意外と難しいんだ。

「材料を計量して、しっかり手で捏ねるんだ」
「はい、先生」

小麦粉に水と塩、それにイースト菌と無塩バターを混ぜ合わせて捏ねる。

この捏ねる時間の長さによってパンの固さが変わって来るそうだ。
軟らかくしたいときは長く、固くしたいときは短く。
小麦粉に含まれるタンパク質のグリアジン・グルテニンが水分を加えてこねることによって粘りと弾力に富む物質になり、これをグルテンとなるそうだ。
グルテンの膜がイーストの発生する炭酸ガスを包み込むことでパン生地はふくらむ……。
……まあ、要するに気合いをこめてパンを練れって言うことだな。
努力と根性も加えて練りまくってやろうと、足を使おうとしたら怒られた。
うどんは足で練るのになにが違うというのだろうか？
ちなみに隠し調味料はミナキへの愛さ。

「そしたら一次発酵させて、その後ガス抜きだ」
「はい、先生」

ガス抜きとは、パンの中に発生した炭酸ガスを抜く作業のことらしい。
ガス抜きした生地を成形し、あとは焼けば完成だ。
ホントはベンチタイムっていう時間を置かないと生地が扱いにくくなるそうだが、どうせ俺は素人だから関係ないね。
普通に気合いを込めて、食パンを焼く型に生地を入れて焼成した。

――チーンッ

オーブンのタイマーが鳴り、中から茶色の食パンが誕生する。
一つ千切って食べてみる。
市販の物とは歯ごたえも、香りも違う。それに自分で作れば思い入れもあって美味しい。
こんな素晴らしい店を潰そうとは、許せんな「ミザル組」！

「トウマ君筋がいいよ！
もっと練習すれば、一人前のパン職人になる日も遠くないね！」
「ありがとうございます、先生」

リョウトには申し訳ないが、俺はパン職人になる気などさらさらない。

ミナキと交際できれば、それでいいのだ。

俺とリョウトは焼きあげた食パンたちを店先に並べるためにトレイへと並べ始めた。

そのときだった。

「きゃあああっ！！」
「ミナキ！？」

店先から耳を劈くような悲鳴が聞こえてきたのは。

俺とリョウトは急いで店内の様子を見に行くと、そこにはマグナスとアルコがおり、店内のパンに暴食の限りを尽くしていた。

「ぐふふふ、やはりここのパンは旨いのう。権利書を見ながら喰えば、さぞかしもっと旨いことだろう」
「げへへ、その通りですなマグナス様」

下衆な笑みを浮かべ、パンを握り潰しながら口に運ぶマグナスに俺は怒りを覚えた。

焼いてみて分かる。

パン焼きは大変だ。苦労して作ったパンをあんな風に食べられては、パンたちが可哀想だ！

「待て、外道！！」

「ああーん」

巨漢マグナスが俺の方を向き直った。

「なんだ小憎？」

「ミナキとパン、あとリョウトの店に悪さをする悪党め！
このバイトの達人、トウマ・カノウが成敗してくれる！！」

俺は厨房から店内に飛び出し、マグナスの真正面に立った。
ジェネ高時代に俺が修業した空手、その必殺の正拳突きを俺は放った。
下手な小細工などない、ただ相手をぶっ飛ばすためだけの技だ。

――ズブゥゥゥッ

俺の正拳はマグナスの腹に命中し、見事な快音を……響かせなかった。
それどころか手ごたえがない。
まるで軟らかいクッションの中に拳を突き込んだみたいに衝撃が分散され、マグナスの体に拳が到達することは叶わなかった。
マグナスはさも当然と言った表情でパンを一口含み、そのまま呑み込んで俺を見下ろしていた。

「ぐふふふ、このマグナス様は拳法殺しの体ぁー」

「なにを！？」

俺は慌てて拳を引き抜いて、連続で正拳突きをお見舞いしたがマグナスは顔色一つ変えなかった。
ならば、と胴回し回転蹴りを放つ。

――ポヨンッ

しかし弾力のあるマグナスの腹の肉に、俺の攻撃は全て無効化されてしまった。

拳法殺しの体……肥え太った贅肉で拳撃の威力を全て殺してしまうのか！

そんな、俺は空手しかやっていなかったのに……どうすりゃいい!?

「ぐふふ小憎、修羅に歯向かった以上、覚悟はできているんだろうな？」

「うっ、ぐ――ッ！！」

マグナスが張り手をかましてきた。

もの凄い衝撃と共に俺は弾き飛ばされ、受け身も取れずに壁に激突した。

声にならない悲鳴が俺の肺から絞り出され、壁に陳列されていたパンが俺の上になだれ落ちてくる。

リョウトと一緒に焼いたパンが……畜生……！

「トウマ！」

「ミ、ミナキ……！」

倒れた俺にミナキが駆け寄って来てくれる。

こんな状況でなければ、諸手を上げて喜んでいるのに……。

張り手一発で体仲が痛んで動けない。

くそ情けない、俺は……無力だ……。

「ぐふふふ、俺様に手を上げた以上この店もお終いだ。

小憎、まずは貴様から血祭りにあげてやろう」

「止めて！」

ノッシノッシ、と俺に近づいてくるマグナスの前にミナキが立ちふさがった。

「トウマはやらせないわ！」

「や、止めろ、ミナキ……！」

危ないぞ、と声を出そうとした瞬間に俺はむせ込んでしまう。

駄目だ、マグナスは相手が女の子でも情けを掛けたりするような男じゃない。

このままでは、

「ならば小娘、貴様から始末してやるわ、ぐふふ」

「やめろおおおおぉっっ！！」

ミナキが危ない！

動け俺の体よ、今動かないでいつ動く！？

痛みがなんだ！　敵の強さがなんだ！　俺はミナキを護ると決めたんだ！

こんな馬鹿げた非日常的な存在はさっさと倒して、俺は普通にミナキと恋愛をするんだ……しかし、俺の想いも空しく、膝が笑っていて立つこともままならない。

「くそお！」

なんて無力なんだ、俺は。

力が……敵を倒す力が欲しい！

もう普通でなくったっていい。ミナキさえ護れればそれでいい！

「あ、そぉーれ」
「やめろおおおお！！」

マグナスが巨大な掌を振り上げた。
ミナキの頭めがけてそれが打ちおろされそうになった、そのときだった。

――カラーン、カラーン……

店の入り口の扉についた鐘がなった。
誰か店に来たようだ。
銀髪の厳つい表情をした男性だった。
銀髪男が言う。

「すまんが、栄養価の高いパンは置いているか？
妻が妊娠中でな、栄養があって旨いパンを土産に買って帰りたいのだ」
「ゼンガーさん！！」

マグナスの前に立っていたミナキが、まるで救世主でも現れたかのような視線を銀髪男に向けていた。
ゼンガー……そう呼ばれた男がミナキを見る。

「おお、ミナキ、バイトしているパン屋とはここだったのか？
そうだ、乳の出が良くなるパンなどはこの店に置いてないだろうか？」
「ゼンガーさん、お子さんまだ生まれてないでしょう！？」
「む、そうだった」

ミナキの言葉に頭をポリポリと掻くゼンガー。

なんだ、このゼンガーという男は……平和なご時世に腰に帯刀し、まるでタイムスリップして来た侍のように見える。

「なんだー、貴様は？　俺様を無視して話をしてんじゃあねえぞ」

マグナスがゼンガーの方を振り向いた。

ゼンガーがマグナスを一目見て、呟いた。

「なんだ、このデブは？」

「デッ……！」

マグナスの声が詰まり、表情に影が注した。

こめかみのピクつくマグナスを尻目にゼンガーは、

「それよりミナキ、栄養価のあるパンをだな……」

「ゼンガーさん、危ない！」

――ズバゴォォン！！

ミナキの忠告とほぼ同時に、マグナスの強烈な張り手がゼンガーを叩き飛ばしていた。

俺と同様に壁に衝突し、パンが散乱する。

空手経験者の俺が立ち上がれないぐらいだから、この男ももう動くこともできないはずだ。

一方、マグナスは顔をタコのようにして怒っていた。

「俺様はデブじゃねえ！　ポッチャリ系だ！」

「痛いではないか」

マグナスの一撃を受けたはずのゼンガーは肩の埃を払い除けると、

何事もなかったかのようにパンを拾い集めだした。
ウソだろ……あの張り手を受けてケロっとしてやがる。
こいつ、本当に人間か？
そう思っていたのはマグナスも同じだったようで、
「なんだ、テメエは！？」
狭い店内に響き渡る声で吼えた。
「こうなれば、俺様の奥義巨霊奔烈（きょれいほんれつ）をお見舞いしてくれるわ！」
マグナスの周囲にピンク色の煙のようなモノが立ち上がり始める。
同時に元々の巨体がさらに大きく見える程に、威圧感が俺にも分かる程に膨れ上がっていった。
「ゼンガーさん！」
「ん？」
落ちたパンをトレイの載せているゼンガーにミナキが言った。
「あの人、悪者です！」
「悪、だと？」
なににも動じなかったゼンガーの目つきが変わった。
「悪は斬る」
マグナスとは別の刃のような威圧感が俺の背中をすり抜けた。
ゼンガー……こいつ、何者だ……そんな、俺の思考の隅に、

――チンッ

と言う、鍔鳴り音がわずかに耳に残った。

「それよりミナキ、母体に良いような健康素材を使ったパンはないか？」

「俺様を無視してんじゃねえ！！」

自分を無視して、健康談議を始めようとするゼンガーにマグナスが激怒した。

もはや苦笑いを浮かべているミナキに話しかけるゼンガー、彼は振り返りもせずに言った。

「ふむ、気づぬか。見かけどおり鈍い奴のようだ」

「なんだ、と――」

突然マグナスの語気が途絶えた。

なにごと、と俺がマグナスの体を見ると左肩と右腰骨を繋ぐようなラインで、マグナスの肉に一本の線が奔っていた。

文字通り目にも留らぬ神速の抜刀、そして逆袈裟切り。

マグナスは目を大きく開いて、小刻みに震えていた。

「テ、テメエ、いつの間に……！？」

「安心しろ、竹光だ」

「お、オ　・　ノーレ！」

妙な断末魔を上げ、マグナスは白眼を剥いて気絶した。

ひい、とアルコは悲鳴を上げ、マグナスを引きずって退却していった。

「生まれてくる子どもが可愛らしくなるようなパンはないか？」
「ありません！」

しつこいゼンガーにミナキが声を荒げていた。
なんなんだ、コイツ、等……普通じゃねえ……そこで俺の意識は遠のいていく。

「トウマ！」

ミナキの声が聞こえた気がした。

●

結局あの後、俺は「ヒカワ屋」の営業時間終了まで気絶していた。
既にゼンガーの姿はなく、その場に居づらくなった俺は早々に店を引け、『エリア』にある公園の滑り台で空を見上げて黄昏ていた。
青髪の小さい謎生物と3つ目の仮面をつけた変なおっさんがいたが、特に話しかけられることはなかった。

「あー、俺って駄目だなー」

本当にそう思う。
俺の夢は普通に恋愛して、普通に家庭を持って、普通に死ぬことだ。
特別なことなど必要ない。
そう思っていた。

でも大切な人を護れない普通になんの意味があるだろうか？
あの時自分は力を求めていた。
結局、普通のままじゃ大切な人を護る力なんて手に入らないのかもしれない。

「トウマ」
「ミナキ？」

声に誘われて視線を下げると、滑り台の下にミナキがいた。

「今日はありがとうございました」
「え、なにを……？」

俺はミナキの言葉に耳を疑った。
自分は礼を言われたのか？　なにもできなかった自分が？
俺が目を白黒させていると、ミナキが笑って答えてくれた。

「今日、必死に戦ってくれたじゃない。勇気あったし、カッコよかったよ」
「ありがとう……ミナキ」

君にそう言ってもらえるだけで、俺は救われるよ。

――好きな人ができました。

眼下で笑みを浮かべている栗毛の女性です。
今日は無理だったけど、これからは俺がミナキを護っていきたいと思う。

でもそれには力が必要で、俺は普通でいたいけど、ミナキを護るために普通を捨てなきゃダメだと言うのなら……。
俺は喜んで普通を捨てようと思う。
俺は思わず呟いていた。

「力、かぁ……」
「あら、短期間で強くなる方法なら、私知ってるわよ」

なんとミナキから予想外の言葉が飛び出してきた。

「ただし、生き残れればですけどね」

不吉なことをミナキが言う。
正直俺は普通に生きたい。
だからそう言った厄介事には関わりたくない。
だが「ミザル組」の奴らはまた「ヒカワ屋」にやって来るだろう。
……ミナキを護るためには強さが要る。
ならば俺は行こう、イバラの道を。

「俺行くよ、ミナキ」
「ふふ、それでこそ私の見込んだ男よ」

ミナキが笑ってくれた。
俺は滑り台を滑り降りる。

「こっちよ」
「ああ！」

ミナキは俺の手を取ってくれた。
彼女の温もりが俺に伝わって来る。

俺は君と一緒ならどこへだって行けそうだ。
君と一緒なら、自分の限界だって超える事ができそうだ。

俺たちは手を繋いで駆け出した。
一体何処へ行くのだろう？
それは彼女だけが知っている……ま、いいか、今幸せだし。

しかし世の中そんなに甘くない。
俺が地獄を見るのは、まさにこれからであった。

――　つづく　――

＜登場キャラ紹介＞

トウマ・カノウ：去年ジェネ高を卒業した１９歳のバイトの達人。普通の一般人。虚言癖あり。惚れた女のために今日も頑張れ、トウマ君！

ミナキ・トオミネ：パン屋でバイトする女性。トウマの思い人。実家に秘密がある？

リョウト・ヒカワ：「太陽のパン　ヒカワ屋」の店長。学校には行っていない。太陽の手を持つ。

ゼンガー・ゾンボルト：悪・即・斬の銀髪いぶし銀。何をしている人かは不明。愛妻家で嫁さんに良いものを探しては買ってきている。

マグナス：デブ修羅。拳法殺しの肉体を持つがかませ犬。

アルコ：雑子Ａ。

＜次・回・予・告＞

エクセレン「イエーイ、とうとうＯＧｓにまだ出ていないキャラまで出しちゃったわよん♪」

キョウスケ「むう、大丈夫なのか作者？」

エクセレン「大丈夫でしょ！　その内ＯＧ３とかで登場するだろうし！」

キョウスケ「ならいいが……しかし俺たちの出番が全然ないな」

エクセレン「あらーキョウスケ、それは仕方ナッシングよん。スパロボってキャラが多いんだもん。もっとアニメで活躍すれば出番も増えるわよ」

キョウスケ「そういうものか？」

エクセレン「そういうもんなの。じゃあ、張り切って次回予告行ってみよう！」

キョウスケ

「俺の名前は　――　以下略　――　だ！

ミナキに連れられたトウマはある所に案内された！

なんと、そこはミナキの実家であった！　まだ付き合ってもないのに、親に紹介なんて恥ずかしいといい気になるトウマ！

ところがどっこい、そうは問屋が卸さない！

次回、スパロボ学園「史上最強のフリーター　～その名は○○○、達人の集う場所！～」！

どんな相手だろうと、打ち貫くのみ！！」

エクセレン「焼き立て○ャパンもよろしく！」

ホントはマグナスを○斗奥義でトドメを刺したかった、北洋です。

ｓｉｂｕｇａｋｉさん、暗黒ミカンさん、三国同盟さん、Ｄｉｓさん感想ありがとうございます！

次回もスパロボ史上一普通の一般人の話が続きます。

トウマの熱さはヤバいですね。

早くＯＧ３に登場してほしいです！

それにしてマグナスの元ネタはどう考えてハート様ですね。

ではでは。

史上最強のフリーター　～ここは○○○、達人の集う場所～（前書き）

＜注・意・事・項＞
絶賛、キャラ崩壊中です！
キャラ崩壊ＬＶ５（ＭＡＸＬＶ５）
親分と愉快な仲間たちのイメージが崩れるのが嫌な方は、見ない方がいいかもしれません。
それでも構わないという方はどうぞ！

――好きな人が出来ました。

俺の名前はトウマ・カノウ。
俺の惚れた女性は、パン屋「ヒカワ屋」でバイトをしていたひと、ミナキ・トオミネ。
俺は彼女を護ろうと誓った。
しかし巨大な暴力の前に成すすべなく敗れ、結局は他人の力を借りてその局面を乗り切る事となってしまった。

夏の巨人……いや、その超人の名はゼンガー・ゾンボルト。

俺は彼のような力を欲した。
そのとき、ミナキが言った言葉がこれだ。

「短期間で強くなる方法なら知っているわ」

俺は強くなりたかった、ミナキを護るために。
今は大丈夫でも、いつかまた奴らは「ヒカワ屋」にやって来るだろう。
そのとき、ミナキを護るのは俺しかいない。
俺は迷いなく答えたさ。

「俺行くよ、ミナキ」
「ふふ、それでこそ私の見込んだ男よ」

ミナキは笑いながら答えてくれた。
そして手を取り、俺を導いてくれた。

俺は思った。
ミナキ、君のために俺は強くなるよ、と。

……だがすぐに後悔することになる。
ミナキが俺を案内した場所……それは地獄という名のミナキの実家だった――

スパロボ学院　～OGだよ、全員集合!～
史上最強のフリーター　～ここは○○○、達人の集う場所～

ミナキに案内されて辿り着いた場所、そこは少し山に登った所にある神社のような所だった
俺の目の前には、あまりにも巨大な木製の門が立ちふさがっている。
見るからに分かる程分厚い木の壁、俺はそれを試しそれを押してみたがビクともしなかった。

「なあ、ミナキ」

俺はミナキに質問した。

「ここが本当に、短期間で強くなれる所なのか？」
「そうよ。ただし生き延びられればの話だけどね」

真顔でミナキは答えた。
この神社のような所に来る前にミナキが言っていたことを、俺は

思い出した。

――生き残れれば、短期間で強くなることができる……！

不穏な話だ。

この平和な時代に生き残れれば、だって……？

はっきり言おう、普通じゃない。

しかし俺にはミナキを護るためには力が必要だった。

俺がバイトする「ヒカワ屋」に目をつけている地上げ屋「ミザル組」、奴らを追い返すためには普通の力じゃ足りないんだ。

俺とミナキの平穏な日常と、その延長線上にある幸せな恋人生活のためには奴らを追い払わなければならない。

そのためには力が必要だ。

「隊……導……教……、これがこの道場の名前か？」

「さあ、入りましょうトウマ」

「え、しかし……」

先ほど俺が押してビクともしなかった大扉に向かって、ミナキはごく普通にそう言った。

いや、それは無理だろう。

男の俺が開けられない重量なのに、華奢なミナキに開けられるはずがない。

そんな俺の考えを無視し、ミナキは巨大な門に手を添えた。

そして、コンコン、と叩く。

「お爺様、只今帰りました」

「え……お爺様？」

ミナキは確かにそう言った。

お爺様ということは、つまりここはミナキの祖父の家ということになるのだろうか……？

そんな俺の思考を余所に、門の内側からは地響きが聞こえてきた。

ズシンズシン、と大地を揺らせながらなにかが門に近づく。

重い門の隙間から褐色の大きな指が見えた。

その手が門を内側へと軽々と明けてしまった。

すると、化け物のような巨体が俺の視界に入って来た。

「ひい！」

もしやマグナス！？

そんな印象を受ける程の巨体に腰が引け、俺は本能的にその場から逃げだそうと足を一歩下げた。

しかし、その瞬間には俺は背後になかった巨大な壁にぶつかった。

なにもなかった空間に壁となる者が立っていた。

「待たんか」

「は？　あ、あれ……いつの間に！」

先ほど門を空けたばかりの巨人が俺の背中を押さえていた。

明けっぱなしの門は中への道を開けたまま、人影が無くなっている。

見えなかった。それはまったく……と言っていいレベルで見えなかった。

俺は思わず訪ねていた。

「もしや貴方は、なにかの武術の達人では！？」

俺の言葉に巨人は口元に蓄えた髭を撫でながら答える。

「む、達人という程ではないが、この歳になるまで負けた事は一度もないぞ」
「お爺様！」

ミナキがその髭の巨人 ―― 良く見ると大柄な老人 ―― に大きな声で言うと、老人は豪快な笑みを浮かべてミナキに応えた。

「おお、ミナキ。帰ったか！」
「まったく……人の客人を驚かすのは止めてください、バラン・ドバンお爺様」
「わっははは、すまんすまん」

戦場で着込むような甲冑を身につけ、口周りに白い髭を蓄えた筋骨隆々の老人が、そこに立っていた。
鋭い目つきで俺を見下ろしている。
平和な現代社会に似合わない、異世界の住民みたいな老人だった。

「ミナキよ、この坊主はなんじゃの？」
「トウマさん、私のバイト先の同僚です」

ミナキの答えにバラン・ドバンと呼ばれた老人は口髭をさすりながら言った。

「そうか、ミナキの友人か。
いやー、こんなヘンピな所までよくぞ参った。どうぞ遠慮なく、くつろいでいくがよい」
「はあ、ありがとうございます」

ガッハッハ、と老人は笑う。
あまりにもミナキに似ていないその老人に俺は礼をしながら、そ

の神社内へと案内された。
だから気づかなかった。
その神社の玄関の看板にはこう、名前が書かれていた。
神社……いや、あとになって気づくが、俺はこの道場の看板の名前を俺は読み違えていた。
隊導教、いやそれは逆読みだった。
「教導隊」――それが道場の名前だった。

●

この道場はミナキの実家らしく、彼女は一度自分の部屋に戻ると言って一度別れることとなった。
俺はこのバラン・ドバン老人に連れられて道場の中を案内されることになる。
しかし広い。
畳みが轢かれた鍛錬場らしき空間以外にも、広大な庭、そして裏山にそのまま庭が繋がっていた。
ここは『エリア』、なぜか高校が密集する地域。
そのため学校とそこに通う学生たちの住処が密集しているため、土地代は法外なほどに高かったりする。
『エリア』の端とは言え、これだけの屋敷を持っているとはこのバラン・ドバン老人は只者ではないのかもしれない。

「時に、トウマ・カノウ君」

バラン・ドバンが俺に尋ねてきた。

「あ、呼び捨てでトウマで結構です」
「うむ、ではトウマ。
お主はここに、なにを求めてやって来たのかね？」

いきなり核心をつくバラン・ドバンの質問。
俺がこの道場に来た理由はたった一つのシンプルな理由だ。
力が欲しい。
だがそれは暴力ではなく、理想を貫くための力。

――そう、世界は矛盾している……

暴力を持って達成した理想など無意味だ……しかし、力なき者が掲げる理想などただの夢想である。
理想を実現するには力がいるのだ。
それは時として腕力であり、知力や権力であったりもする。

――……自分が正しいと思ったことをしようと思ったら……力がいるんだ……

今の俺に必要なのは、信じた正義を貫き徹すための力が必要なんだ。

「俺は　――」

「ミザル組」のような、誰も見て見ぬふりをする悪。
ミナキとリョウトの努力を踏みにじり、愚弄する「ミザル組」……
……奴らが、誰もが耐えて泣くしかないような悪だとしても、俺は……
……許せない。

「――　俺は、誰かが泣くのを見たくない。だから強くなろうと決めたんです」
「ふむ、良い目じゃ。若い頃を思い出すのう」
口端を釣り上げて、バラン・ドバンはやはり豪快に声を上げて笑った。
しかし不快感はない。
この笑いはきっと自分を認めてくれた笑いなのだと、俺は思う。
「あの、この道場では空手は教えてますか？」
「うむ、空手も教えとるよ」
良かった。もし空手が教えてなかったら、また新しく武術を一から学ばなければならない所だった。
俺がバラン・ドバンの大きな背中に付いて歩いていると
――　パシッパシッ
と、可愛らしくサンドバックを叩く音が聞こえてきた。
音のする方に俺が向くと、眼鏡をかけた紫色の髪をした美少女が道着を着て蹴りを繰り出していた。
蹴りの当たるサンドバックには写真が貼られている。
なんか桃色の髪の毛をした少女の写真がクシャクシャになっていた。
「な、なんすかあれー？」
「ん、ああ、彼女はラトゥーニ・スゥボータ、１４歳」
バラン・ドバンがラトゥーニと呼んだ少女は、俺と眼が合うとサンドバックの後ろに隠れてしまった。

気配を消したのか、その場から消えたように感じてしまう。
「すまんの、恥ずかしがり屋でな。こらーラトゥーニ、挨拶せんか！」
バラン・ドバンが手でメガホンを作って空に向かって叫んだ。
しかし返事はない。
1，2，3，4，5……10秒が経った時、俺は自分の背後に気配を感じて振り返った。
「……よろし、く」
「きゃーー！」
俺は思わず女の子みたいな悲鳴を上げてしまった。
だって眼鏡をかけた美少女が、いつの間にか背後に立っているんだもの。
え？　美少女なら別にいいじゃん、だって？
失敬な、急に背後を取られるのは怖いんだぞ！
そう俺が心の中で独白していると、ラトゥーニはスタスタとどこかに歩いて行ってしまった。
バラン・ドバンがため息をつく。
「滅多に来ない客なんで、少々緊張しているようじゃ」
「はあはあ、ここの住民は客の背後を取るのが特技なんですか？」
「がっはっは、そんなことはないぞ」
笑いながらバラン・ドバンは歩を進めた。
しかし……あんな小さな女の子が通っているのか……ここの道場大丈夫か？
ラトゥーニという子の蹴りも大したことなさそうだったし、本当

にここで強くなれるんだろうか？
そんなことを俺が考えていると、また庭に人影が見えた。
見覚えのある銀髪……上半身の服をはだけて鋭角に盛り上がった筋肉が実に漢らしい。

「あれは……ゼンガーさん！？」
「おお、トウマはゼンガーを知っておるのかね？」

バラン・ドバンが言った。
忘れられるはずもない。
「ヒカワ屋」でマグナスに叩きのめされた俺を救ってくれた人だ。
ゼンガーは身の丈程ある大剣を肩に担いで、片手で支えている。
目の前にあるのは３ｍ程ある巨大な丸い岩石の塊だ。

「コハァァァ……」

ゼンガーはゆっくり息を吐きだすと、その大剣を両手で持ち切っ先を天に向け、上段に構えた。
……ちょっと待て、なにをするつもりだ？
ゼンガーは瞑想のように閉じていた目をカッと見開くと、大剣を振り上げながら飛翔した。
そして気合い一閃、

「チェエエエエエエストオオォォォッ　――――！！！」
――　ズバアアアッ！！

縦一文字に大剣を振り下ろした。
ズンとゼンガーが大剣を地面に突き刺すと同時に、轟音を響かせて岩石が真っ二つになった。

「嘘ぉん!?」
「彼は『剣と兵器の申し子』ゼンガー・ゾンボルト、うちで剣術を教えとる」

別段、驚く様子もなくバラン・ドバンが言った。
いやいや３ｍの岩石が真っ二つですよ？
バランさん、なんで驚いてないの！
嫌な予感がしてきた……ここは普通じゃないぞ！
眼前の光景に目を疑う俺を余所に、ゼンガーの腰のポケットから携帯の着信音が聞こえてきた。着信音は「乾・坤・一・擲」だ。
ゼンガーが電話に出る。

「――　おお、ソフィアか。どうした？　……なんだと!?」

ゼンガーの表情が一変した。
眉間を一筋の汗がタラリと流れるが、それを拭きとるどころではないようだ。

「今、赤ちゃんがお腹を蹴っただって!?
なんと言う事だ！　俺にも触らせてくれソフィア！
あと胎教セットを買って今すぐ帰るからな、待っていろソフィアアアッ!!」

腹の底から捻りだしたような咆哮を響かせて、ゼンガーは疾風のように去って行った。
残されたのは真っ二つの岩石と地面に刺さった大剣だけだった。
バラン・ドランは「うんうん」と感心したように頷いている。

「夫婦、仲睦まじき事は素晴らしきかな」
「そ、そういうもんすか？」

俺の呆れ声に誰かが応えた。しかしそれはバラン・ドバンではなく……

「そういうものだ」

「うわっ、また気配ねえよ！」

また俺の背後で、壁に体を預けた紫色の髪の男だった。

長い前髪で片目が完全に覆い隠されており、前見難くないですかと心配になる外見をしていた。

しかしこの道場は心臓に悪い。だって皆気配ないんだもの。

静かに暴れる俺の心臓、その鼓動の原因を作った男にバラン・ドバンが言った。

「彼は『あらゆる盗撮盗聴の達人』、ギリアム・イェーガー君じゃ」

「ふっ、ミナキの写真、買うかいトウマ君？」

ギリアムが一枚の写真を俺に見せてくれた。

それはなんと、ミナキの生着替え写真……！

買う買う、絶対に買います！　俺は全身全霊を懸けて首を縦に振った。

「１枚１万円ね」

「うわ、超ボッタ！」

でも買ってしまう俺。

悲しいね、男の性は、悲しいね……５・７・５、字余りなし。

心は温かくなったけど、懐は寒くなりました。

「それよりもギリアムよ、『喧嘩１００段の異名を持つ空手家』は

どこにおる？」

孫娘の生写真の受け渡しにも動じないバラン・ドバンが訊いた。

「ああ、彼ですか。先ほど変身して、特訓をしていましたよ」

「へ、変身？」

聞きなれない単語が俺の耳に飛び込んできた。

変身……確かにそうギリアムは言ったよな？

それに喧嘩に段数なんてないだろうに。

それなら俺だってバイト１００段だ。

「なら道場の方かね」

「でしょうね。あ、長老、これから買い物行きますが、なにか要りますか？」

「要らん。だがついでに競馬場に行って、レーツェルに勝ち金を早く入れろ、と伝えてくれ」

「分かりました。私はついでにフィルムを買いに行きます」

ギリアムはバラン・ドバンとの短い会話を終えると、一瞬で消えてしまった。

「実は所用での、道場を一人留守にしておってな」

「け、競馬場ですか……一体なにをしてらっしゃるんですか？」

「ジョッキーじゃ」

「ジョッ……！」

バラン・ドバンは自分の言葉に一部の疑いも持っていないようだった。

ここは確か強くなるための道場で……なのに、何故「変身」やら

「ジョッキー」という単語が出てくるのだろうか？
なんだか頭痛がしてきたな。
ミナキには悪いが、この道場は駄目かもしれない。
俺はバラン・ドバンに付いて、ある部屋の前に辿り着いた。
障子をあけて、バラン・ドバンが中の人物に声をかけた。

「おーい、入るぞー」
「てやんでーべらぼうめ！」

江戸っ子のような口調で、

「え、なんぞ!?」

中から聞こえてきた気合いなのだろうか、力を込めた怒声に俺は驚いてしまった。
バラン・ドバンの巨体の影から、俺は部屋の中を覗き込んだ。
するとそこには、

――全身を真っ赤な鎧のようなもので固めた漢が燃えていた。

比喩や、文法表現ではない。
赤い鎧の周りに炎が上がっており、その炎が龍を形作っているではないか。
およそ皮膚と思われるものが一切露出していない、赤い漢にバラン・ドバンが声をかけた。

「のう、コウタ君、ものは相談なんじゃが……」

バラン・ドバンはコウタと呼ばれた赤い鎧の漢に事情を説明していた。

よかった、名前は普通だ。
これで名前がシュレンとかだったらどうしようかと　――

「バーロー（馬鹿野郎の意）！」

俺の思考はコウタの大声で中断された。

「てやんでー、俺は弟子は取らねえ主義なんでい！！」
「のう？」

バラン・ドバンが少々困惑したような表情を浮かべていた。

――じゃあ、先生じゃないじゃん……！

俺が心の中でつっ込みを入れていると、コウタは俺の方を品定めするように見てきた。
俺と対して背丈が変わらないのに、眼光が鋭くて、俺は思わず顔を背けてしまった。

「だいたいよー、じじい」

コウタが呟くと、全身に滾っていた炎が消え失せ、彼の右拳に集まって行く。
彼の目の前には新品のサンドバック。

「俺なんかに弟子入りしたら、３日で死んじまうぜ」

コウタはサンドバックに向けて拳を、

「真っ赤砂塵爆（まっかさじんばく）ッ！！」

勢い良く叩き付けた。
拳が触れた刹那、右手の炎は消滅する。
しかしサンドバッグはぴくりとも動かなかった。
大方、サンドバッグを吊ってある天井まで跳ね上がるのかと思っていた。
ゼンガーみたいに鬼神のように強いのかと思っていたので拍子抜けだった。

「なーんだ、見かけ倒しじゃないすか　――」
――ズバゴオオオンッ！！

俺がバラン・ドバンに言おうとした瞬間、サンドバックが爆音と共に爆ぜた。
しかも爆炎を巻き上げて、内側から破裂したのだ。
熱くなった砂が部屋に撒き散らされた。
俺の口から驚愕の声が上がる。

「な、なんじゃ、こりゃあ！！？」
「ふ、必殺技の完成だぜ」

必殺技……必ず殺す技、と書いて必殺技。
こんな技を叩きこんだら、体の中から焼き肉になって木端微塵の肉片になってしまう！
「喧嘩１００段の異名を持つ空手家」……いや、違う！
こんなの俺が知っている空手じゃない、断じて違う！
こいつは普通じゃない！
コウタは、くっくっく、と笑い声を殺して、握り拳を作っていた。

「この技でフォルカの野郎をぶっ殺す！！

待っていろショウコ、お兄ちゃんが、今、お前の目を覚まさせてやるぜ！！」

「お前が目を覚まさんか」

また気配も感じていないのに、聞き覚えのない声が聞こえてきた。

俺の前を一条の影が奔る。その直後だった。

道場の外に駆け出そうとしていたコウタの体が、急に浮き上がり道場の畳みに叩きつけられていたのだ。

コウタを投げた髭の漢は、コウタの手を握ったままさらに数回投げ飛ばした。

俺なら受け身も取れそうにない程の速さだった。

「なにすんでえ！」

目が回りそうな速度で投げられたコウタは、下手人の名前を叫んでいた。

「カイさん、痛えじゃねえか！？」

「そこに正座ァ！！」

「ひっ！！」

カイと呼ばれた髭の漢は、コウタの異論に耳を貸す事なく怒鳴った。

まるで教師に叱られた子どもみたいに、コウタはしぶしぶその場に正座していた。

「まったくお前と言う奴は何歳になったと思っているんだ！

いい歳して、ショウコショウショウコショウコと、恥ずかしくないのか！？　しかも妹の彼氏に逆恨みして、夜襲して、その度に黒星を増やしおってからに、情けないと思わないのかコウタ！！　少し

は妹の幸せを考えてやれないのかお前は!!　それに武術を人殺しのために使おうとするとは言語道断!!　必殺技などに憧れずに、不殺の技を考えろ!!　見てみろ、必殺技など考えるから今日もこの有様だ!!　部屋中砂だらけにしおってからに、お前は砂遊びが好きな幼稚園児か!!　聞いとるのか、コウタ　――」

「許してくれー、カイさん!!」

カイという柔道着を着た中年男性は、現れて早々コウタに説教を始めてしまった。

しかも終わりそうな気配はまるでない。コウタは逃げ出せばいいのに、律義に頭を押さえながら怒られていた。

バラン・ドバンがカイの紹介をしてくれた。

「紹介しておこう。彼は『説教する柔術家』、カイ・キタムラ君だ」

「い、イヤ過ぎる……おっと」

俺は慌てて口を塞いだ。

カイの目がまるで獲物でもみるような目で俺を見ていた気がしたからだ。

しかし心配は杞憂だったようで、カイはコウタに説教を続けている。これはしばらく終わりそうにないな、コウタ可哀想に。

しかし問題は、俺が師事する空手家の先生がいないことだった。

「困ったのう。コウタ君が駄目となると……どうしようかのう?」

「いや、俺に聞かないで下さいよ」

自分の道場の事なのに、俺に聞いてくるバラン・ドバンに俺はため息をついた。

やっぱりこの道場……駄目だ。

ミナキには悪いけど他を当たろうか……と思っていた時だった。

気配もないのに、俺の袖を引くものがいた。
「わっ、ラ、ラトゥーニさん！」
「……」
ハッキリ言おう。無言で背後に立たれても困る。それが美少女でもだ。
ラトゥーニは上目使いで俺を見上げていた。
「うぐ……！」
可愛い！
いかんいかん、いかんぞトウマ・カノウ！
俺にはミナキという護るべき女性がいるんだから。
頭をブンブン横に振る俺にラトゥーニが言った。
「私……教えようか？」
「え……？」
意外過ぎるラトゥーニの言葉に俺は耳を疑った。
なるほどその手があったか、とバラン・ドバンは手太鼓を打つ。
「ラトゥーニに教えてもらえれば万事解決じゃ。な、トウマ君！」
「ええー……」
俺は目を泳がせながら、バラン・ドバンの言葉に異を唱えた。
だってそうだろう？
俺が教わりたいのは空手、彼女は一体なんの武術をやっているのだろうか？
それに、ラトゥーニの外見をもう一度説明しておこうと思う。

年齢は１４らしいが、それ相応に幼く胸も身長も控えめで、隠れ筋肉なんてないだろうと思える程の撫で肩、さらに近眼らしく眼鏡を着用している。

……ふ、俺だって、指先一つでダウンをとれらあ。

俺の相手はマグナスという巨漢だ、こんな小姓に教わる事など――

そこで、バラン・ドバンの一言が入る。

「彼女は蹴りの達人じゃよ」

「蹴り、だって？」

そういえば、俺がこの道場に来た時もサンドバックに蹴りの練習をしていたな。

蹴りか……俺もジェネ高時代の空手では、蹴り技の方が得意だったんだ。

せっかくミナキに誘われて来たんだし、一手ぐらい教わっておかないと、それはそれで失礼にあたるだろう。

俺はラトゥーニに教えを請う事にした。

「ご指導お願いします、先生！」

「……」

ラトゥーニは無言だったが、頬を染めて頭をポリポリ掻いていた。

可愛い、先生と呼ばれて照れているようだ。

まあ、５歳も下の女の子に教えを乞う大人の図は、こちらとしてもかなり恥ずかしいモノがある。

はやく済ませて帰ろう。

「まず……模範、演技」

ラトゥーニがボソリと呟いた。

俺たちは道場の中央に移動し、ラトゥーニと対面する形に対峙する。
実際に蹴りを見せてくれるだけでなく、体験させてくれるつもりらしい。
中々に優しく気のきいた女の子のようだ。

「まずは……気を、ためる」

しかしそこは異常人ばかり集まっている道場。
ラトゥーニも例に漏れず、「気」という意味不明な単語を口走っていた。
彼女が、はぁぁぁ、と静かに息を吐くのに比例して空気がピリ付いてきた。
そして紫色のモヤが彼女の周りに現れる。

「これが、気」

ラトゥーニが丁寧に説明してくれた。
気か……これが気なら、俺も以前に見た事があった。
マグナスだ。奴もゼンガーに相対している時に、桃色の気を体に纏っていた。
ということは、俺もこの気の使い方を覚えておいた方がいいってことだな。

「そして気合いと共に叫んで……技を、発動させる……」

技が来るか。
しかしラトゥーニのような女の子の攻撃一発ぐらいなら、俺のような空手経験者なら耐えられるはずだ。
が、そこで俺はあることを思い出した。

そのことを道場の隅で俺たちを見守っていたバラン・ドバンに問うてみた。

「ラトゥーニの異名ってなんすか？」

「知りたい？」

俺がこくりと首を振ると、バラン・ドバンは笑顔で応えてくれた。

「『裏キック界の死神』じゃよ」

「はっ？　死……！」

「はあああぁぁっ！！」

猛烈に嫌な予感が俺の中を駆け抜ける。

それとほぼ同時に、寡黙だったラトゥーニから咆哮が上がり、紫の気が一気に膨れ上がった。

彼女は叫ぶ。

「リュウセイみたいにやってみる！！！」

なにそれ、気合いのつもり？

俺の感想を余所に、彼女は空中高く跳び上がった。

その高さ約５ｍ、うそーん……俺はその時、これまで生きてきた１９年の思い出が脳裏にフラッシュバックしていた。

運送屋もやったし出前もやった……あれ、バイトの思い出ばっかりだ？

もしかしてこれ　――　走馬燈ってやつ？

「スゥゥゥパァァァッ、ウルトラアアアアアッ　――」

「ちょ、待っ　――」

俺の声はラトゥーニの熱い叫びにかき消された。

「――　流星、キイイイイイイイィィィクッ！！！！」

「ぎゃーーーーーーー！！」

それは見事に、俺の意識は刈り取られました　――

●

「お、目を覚ましたぞ！」

目を覚ますと、青い髪をして学ランをきた少年が俺の視界に入って来た。

道場の外を見てみると、すでに夕焼けに美しく染まっていた。

相当長い時間気を失っていたようだ。

「よかったトウマ……ごめんね、家の人たちがやりすぎちゃって……」

エプロンをつけたミナキが謝って来た。

彼女の後ろにはバラン・ドバン、ゼンガー・ゾンボルト、ギリアム・イェーガー、カイ・キタムラ、ラトゥーニ・スゥーボータが立っていた。

「いやあ、やはりレーツェルの作ったクスハ汁はよく効くな」

「なんでも、実際に飲んでレシピを盗んだらしいからな」

あっはっは、とカイとギリアムが談笑していた。
クスハ汁？　なんだそりゃ？　そういえば、口の中がなんだか苦いんだけど……。

「この人たち、加減を知らないけど基本的にはいい人なのよ」
「そ、そうなんだ」

ミナキの言葉に俺は、苦笑いしか浮かべる事しかできなかった。
臨死体験、一回。
ここの人たちの普通じゃない加減は、身を持って体験したばかりだからだ。
この道場の異常者たちのリーダー格らしきバラン・ドバンが、俺の前に出てきた。

「改めて、自己紹介しておこうかの」

バラン・ドバンの言葉に従い、後ろに待機していた面々が口々に声を上げる。
口火を切ったのは青髪の少年だった。

「『喧嘩１００段の異名を持つ空手家』、コウタ　アズマ！！」

あの赤い鎧の漢がこの少年？　と驚く俺を尻目に、他の者たちも続く。

「『裏キック界の死神』……ラトゥーニ・スゥボータ」
「『あらゆる盗撮盗聴の達人』、ギリアム・イェーガー！！」
「『説教する柔術家』、カイ・キタムラ！！」
「『剣と兵器の申し子』、ゼンガー・ゾンボルト！！」

「そして長老のわし、『鉄球超人』、バラン・ドバン！！」

勢ぞろいする６人の異常者たち。

バラン・ドバンが説明を続けた。

「ここはスポーツ化した武術に馴染めない達人や、あまり凄さにその世界から遠ざけられてしまった達人が集う場所！！　所用で１名出ておるが、集まるモノの意思は皆同じ！！

ここは君のような、迷える子羊を真っ当に育て上げるための場所である！！

わしらは自分たちのことをこう呼んでおる！！」

バラン・ドバンの目がライトの様に光る。

「わし等は教導隊（＋α）！！

ようこそ、トウマ・カノウ君！！　わし等は君を歓迎するよ！！」

「いやー！　俺、帰る！！」

冗談じゃない！

こんな所で修業するなんて普通じゃない。

ミナキは生き残れば強くなれると言っていたが、ここは普通の俺が生き残れるような場所じゃない。

普通に、他の道場で強くなろうと、俺はその場を逃げ出した。

「逃がすかぁ！！」

しかしゼンガーの放った鎖鎌に俺は足を取られてしまった。

そしてそのまま道場内に引き戻され、入り口の障子はピシャリと閉められてしまった。

達人６人に俺は取り込まれて、

「さ、修業しようか？」
「いやあああああっ！！」

俺の断末魔は、きっと道場によく木霊していたと思う。
ミナキはそそくさと去って行ってしまった。
まるでクモの巣にかかった蝶を助けようとしたら、余計大変なことになってしまったときの子どものような、そんな反応だった。

――好きな人ができました。

俺はその人を護って生きていこうと思う。
そのために、もっともっと強くなりたいと思う。
でも、その前に死んじゃうかも。
脳裏にそんな考えが過ったのは錯覚ではなかっただろう……助けて、ミナキ！！
俺の修業の日々が始まったのだった――

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。
『エリア』には個性豊かな人間が沢山いる。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない

史上最強のフリーター　～ここは○○○、達人の集う場所～（後書き）

＜キャラ紹介＞

トウマ・カノウ：ミナキ大好き１９歳。先日、マグナスにボコられて、強くなるためミナキの実家へ。頑張れ、負けるなトウマ君。

ミナキ・トオミネ：「ヒカワ屋」の看板娘で、トウマの思い人。実家の家事を全てやっている。強い訳ではない。

バラン・ドバン：褐色の巨漢老人でミナキの祖父。まったく似ていないので、ミナキは養子だろう。「鉄球超人」の異名を持つ。

ラトゥーニ・スゥボータ：ジェネ高１年生で「裏キック界の死神」の異名を持つ。リュウセイ大好き、マイ死ねと思っている。

ゼンガー・ゾンボルト：「剣と兵器の申し子」の異名を持つ銀髪いぶし銀。教導隊で剣を教えているが収入低く、ほぼソフィアのヒモ状態。

ギリアム・イェーガー：「あらゆる盗撮盗聴の達人」の異名を持つ壁際のいぶし銀。探偵のバイトをしており、盗撮写真を売る・脅すを繰り返すため教導隊一番の収入源。

コウタ・アズマ：「喧嘩１００段の異名を持つ空手家」の異名を持つ男。今日もフォルカをぶっ殺すための必殺技を開発中。

カイ・キタムラ：「説教する柔術家」の異名を持つ柔術家。どこかで私塾を開いているらしい。悩みは娘が反抗期なこと。

＜次・回・予・告＞

エクセレン「今回は次回予告はナッシング！！」

キョウスケ「なんだ、珍しいな？　一体、どうしたんだ？」

エクセレン「作者が今日で連休最後で次はいつ更新できるか分かんないし、次に書くネタをまだ決めてないからだって」

キョウスケ「そうか。ネタがない訳ではないのだな。しかしこの小説を読んでくれているそこの君、もしこんな話が読みたいと要望があったらぜひ投稿してくれ」

エクセレン「全部採用！　という訳にはいかないのよねん？」

キョウスケ「こんな小説だから、どうとでもなるだろう。では待っているぞ？」

エクセレン「史上最強の弟子　○ンイチもよろしく！」

コウタが打つ真っ赤砂塵爆の元ネタはキズポンの必殺技です。
暗黒ミカン様、ｓｉｂｕｇａｋｉ様感想ありがとうございます！
次回のネタは未定で更新期間が空くと思いますが、どうかこれからもよろしくお願いします！

我ニ敵ナシ？　～おっぱいを廻るセイセン！の巻～（前書き）

＜注・意・事・項＞

絶賛、キャラ崩壊中です！
ブリット、クスハ、アクセルのイメージを崩したくない方は見ない方がいいかもしれません。
それでもよい、という方はどうぞ！

本当に注意：誘拐は犯罪です。

我ニ敵ナシ？　～おっぱいを廻るセイセン！の巻～

俺の名前は、アクセル・アルマー。

なぜか高校の密集する地域『エリア』で悪の巣窟と揶揄される高校、影鏡高校の3年生だ。

自分で言うのもアレだが、俺は相当の悪だ。

目的のためには人さらいだって平気でやるため、近所の奥様方に恐れられるぐらいに悪だ。

そんな俺だが、悩みがある。

ベーオウルフ……生まれてこの方、喧嘩に滅法自信がある俺だが、コイツにだけは勝てた事がない。

以前も廃工場跡に呼び出したが、バイクを叩きつけられてあっさりやられてしまった。

ちなみに俺は「蒼髭流格闘術（ソウシリュウ）」免許皆伝！

そんな俺を負かし続けるベーオウルフの実力は推して知って貰いたい。

しかし負けっぱなしでは俺の腹の虫が収まらない。

次はどんな手でベーオウルフをおびき寄せてやろうか……？

そんなことを考えていた矢先だった。

俺の携帯にメール着信が入ったのだ。着信音は「限りなく遠く、果てしなく遠い世界」。え？　知らない、そんなこと知るか。

「お、エーちゃんからか」

俺の作戦参謀、メル友のエーちゃんから作戦提示のメールだった。

俺は声に出して読み上げる。

「えーと……最近、ヒロインばっかりさらってマンネリなので、彼の舎弟の彼女でもさらって彼をおびき寄せてはどうでしょうか？……」

俺は言葉を失った。

「流石、エーちゃん、冴えてるぜ！」

この作戦参謀兼メル友は、本当に頼りになる。

俺は早速作戦のためにベーオウルフの舎弟の名前を調べる事にした。

奴の関係者の写真と情報は一通り集めてある。

情報用のファイルを捲るうちに、真面目そうな顔をした金髪の少年が目に入って来た。

「ブルックリン・ラックフィールド、か……ククク、待っているがいい」

俺は悪そうな笑顔を浮かべながら作戦を開始した。

スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～

我ニ敵ナシ？　～おっぱいを廻るセイセン！の巻～

俺の名前はブルックリン・ラックフィールド。

なぜか高校が密集する地域『エリア』１のマンモス高校、ＯＧ高

等学院　――　通称ジェネ高に通う高校2年生だ。
自分で言うのもなんだが、俺は品性彷徨かつ成績優秀、しかも運動神経抜群で教師受けもよく顔もいいという中々にリアルが充実した人間だと思う。
しかし、そんな俺にも悩みがある。
俺が惚れている、同じクラスの女子の事だ。

「ねーねー、ブリットくん」

俺の名前は長ったらしいので、よくブリットと略される。
俺が惚れている女子　――　クスハ・ミズハが天真爛漫な笑みを浮かべて俺に訊いてきた。

「なんで、雲は流れていくのかな？」

水蒸気で出来てる雲だから、気流に流されているだけだろう？
なんでいつも俺にそんなことばかりを聞いてくる？
いや、話しかけてくれるのはとてもうれしいのだが、その内容がどうしてもいつもこんなに訳のわからない、というか脈絡のないどうでもいい話題なのだろう？

――　クスハ・ミズハは天然だ。

しかも超のつく天然少女だった。
当然、俺の思いに気付いてくれるはずがなかった。
傍から見ていると危なっかしい……それが、俺が彼女に抱いた最初の印象だった。
いつも失敗しそうになっている所を手助けしている内に、いつの間にか俺は彼女に惹かれていた。
天然って別に悪い事じゃない、と思う。

純粋なのだ、クスハ・ミズハは。
どんくさい、とも言うかもしれない。
だがそこがいい。そう思っているのは俺だけかもしれない。
どうも優秀すぎると、自分が求めてなくても俗物的な輩がどんどん近付いてくる。
正直、嫌になる。
でも彼女は純粋な善意と好意で俺と接してくれるのだ。

「ねーねー、ブリット君。お弁当作りすぎちゃったから食べない？」

「あ、ああ、ありがとうクスハ！」

俺たちのお決まりの場所は屋上。
時々、走り屋の先輩「キョウスケ・ナンブ」が賭けポーカーを開催しているが、いつも負けている曰く付きの場所だ。
でも俺たちにとっては、吹き抜ける風が気持ち良いお気に入りの場所である。

「気持ち良いねー」
「そ、そうだな、クスハ！」

俺はクスハの作ったお弁当の唐揚げを摘まむ。
ああ、俺は幸せだ。
これ以上の幸せがあってたまるものか！
好きな子が作ってくれた弁当を、好きな子と一緒に食べることができるのだから。
他人から見たら、俺たちは付き合っている様に見えるらしい。
しかし俺たちは付き合っていない。
多分、お互いに好き合っているとは思う。
でも俺に度胸がないばかりに、告白もせぬままなあなあの関係が

続いていた。

しかし俺はこの関係に不満を持っていない。

そのことを以前に同期である他のクラスの友人、タスク・シングウジに漏らした事がある。

そのときタスクは俺を馬鹿にするような顔でこう言った。

「おめえ、あのおっぱいを見てムラムラしねえのかよ？」

「お、おっぱい！？」

タスクはジャスチャーで胸を描きながら言った。

はっきり言おう。タスクはスケベだ。周囲にエロ仙人と呼ばれるレベルのスケベだ。

彼の大胆かつストレートすぎる言動に俺は驚きを隠すことができなかった。

「いいか、おっぱいは母性の象徴だ。男がおっぱいに惹かれても誰が咎めることができようか」

「あ、ああ……」

「お前だって惹かれてんだろぉー、揉みしだきたいんだろー、このスケベ！」

俺はその時のタスクの嫌らしいを顔を忘れることができない。

ああ、神様、嫌な記憶を忘れる事ができる能力を俺にくださいと願える程に、タスクの顔は下劣であった。

しかし……タスクの言葉が真を得ているのも事実。

俺だって男だ。

クスハの胸に興味ない訳ではない。

目測だがおそらくDは下らないだろう胸のサイズは、全ての男の目を引くには十分すぎる。

だがそれを揉め、だと！
キョウスケ先輩に代わって俺がタスクに天誅を加えてやろうか。
そう思った時、俺たちの目の前を金髪の美人、レオナ・ガーシュタインが通ったのを覚えている。
その時のタスクの行動の早い事ったらなかった。

「レオナちゃーん、今日も胸揉ませてくれよー！」
「失せなさい、下郎！」

跳びかかって来るタスクをレオナは殴り飛ばして、さっさと去ってしまった。
殴られた頬を腫らしながらタスクを悦った表情で呟いていた。

「もう、レオナちゃんったら恥ずかしがり屋なんだから」
「俺は、お前の自信が時々怖いぞ」

この2人は恋人同士という噂を耳にしたことがあるが、本当なのだろうか？
俺にはタスクが一方的に流したデマのような気がしてならない。
それにしてもおっぱいか。
おっぱいおっぱい、語源はなんだろう？
それよりも今俺の横で弁当を啄ばむおっぱいの方が問題だ。

「美味しいねー」
「あ、ああ、流石クスハの料理だ！」
「もうブリット君ったら、上手なんだからー」

にっこり微笑みながらクスハが俺の肩を叩いてきた。
全然痛くない。俺はMじゃないが、むしろ断然気持ち良い。
俺は叫びたかった。

屋上ではなく、世界の中心で。

「俺はおっぱいがすきだぁあああああっ！！」

間違えた、俺はクスハ・ミズハが好きだ。
できることなら、今すぐ告白したい。
でも断られるのが怖くて言えない自分は意気地なしだとは分かっている。

「美味しかったねー」
「ああ、最高だ！」

俺はこの関係を崩したくなかった。
こんな俺は意気地なしだろうか？

●

俺の名前は、アクセル・アルマー。
ベーオウルフ誘き出し作戦のため、現在ジェネ高に潜入中である。
ちゃんと誘き出し用の手紙も書いてきた。
あとはブルックリンの恋人を誘拐すればすべて完了だ。
当然、奴の恋人の写真もゲットしてある。
青い髪の中々の美人だ。最近、レモン姉さん構ってくれないし、ちょっと悪戯してみたくなるレベルには十分すぎるぐらいの美人だった。
その少女が、待ち受ける俺の目の前を今通り過ぎようとしていた。

しかし、そのとき俺はとんでもないモノを目にする。

「なんと言うおっぱいだ、これがな！」

俺は驚愕した。

俺のターゲットであるブルックリンの恋人のクスハ・ミズハの胸に！

なんという戦闘力を誇る胸だ！

少なく見積もってもD以上は間違いなくあるぞ、これがな。

レモン姉さんに構ってもらえず、最近はアルフィミィちゃんからも連絡がない俺には、十二分すぎる程に魅力的である。

「ベーオウルフへの撒餌（まきえ）にするだけではもったいない、これがな」

まあいい、とりあえず拉致ることにしよう。

俺は悪だから、人さらいぐらいなんともないぜ。

俺はクスハ・ミズハに話しかける。

「おっぱい……じゃなかった、お譲ちゃん。俺っちとお茶しなーい？」

「えー、でも知らない人に付いて行っちゃいけないって、ブリット君が言ってたよ」

ちっ、ブルックリンめ、妙な入れ知恵しやがって……ならば。

「ブルックリンの奴も先に行って待ってるさ」

「そうなんですかー、じゃあ行きます」

クスハ・ミズハは俺のことをあっさり信用した。

よし、おっぱいゲットだぜ！

それにしもクスハ・ミズハよ、そんなことじゃ悪い男に騙されちゃうぞ。俺みたいなな、うひひひ。

俺とクスハ・ミズハは校門から外に出る。

その際すれ違った緑色のバンダナを巻いたジェネ高生に、ベーオウルフ宛ての手紙を押しつけることにした。

「おい小憎、これをベーオウルフかブルックリンに渡しておけ」

「ブルック　――　ああ、ブリットっスか。別にいいっスよ」

緑バンダナ小憎は手紙を受け取ると、校舎の方に歩いて行った。

よしよし、これで後はベーオウルフを待ち受けるだけだ。

俺はクスハ・ミズハと一緒にジェネ高を後にした。

●

俺の名前はブルックリン・ラックフィールド。

あだ名でよくブリットと呼ばれる俺は剣道部に所属しているが、今日は部活が休みの日のため下足場でクスハと待ち合わせて、帰宅する予定であった。

しかし今日は日直だったため、クスハには先に下足場で待っていてもらうようにしている。

少し業務に手間取ったため時間を喰ってしまった。

クスハの事だから怒ってはいないと思うが、あまり待たせる訳にはいかないので急ぐ事にしよう。

だが、駆け足で到着した下足場にはクスハの姿はなかった。

もしかしたら、間違えて校門で待っているのかもしれない。よく

ある話だ。

「よーブリット」

「タスクか。どうした？」

エロ仙人こと、タスク・シングウジが俺の前に現れた。

「ほい」

タスクが俺に茶色い封筒に入った手紙を俺に押し付けてきた。

俺はそれを受け取りながら、

「なんだこの手紙は？」

「なんか、お前に渡してくれって校門で頼まれたんだよ。赤くてモジャモジャした頭の男だったぞ」

俺は強烈に嫌な予感に心を苛まれた。

赤くてモジャモジャした頭の男……もしかして、その男はアクセル・アルマーではあるまいか？

よく走り屋の先輩「キョウスケ・ナンブ」に絡んでくる、影高の蒼い戦鬼。

どうやっているのかは知らないが、毎回キョウスケ先輩はアクセルをケチョンケチョンにしてやっているという風の噂が俺の耳には届いていた。

しかし暴走族「シャドウミラー」で特攻隊長を勤めている名実ともに凶悪な男、それがアクセル・アルマーだった。

「あの赤モジャ男、クスハちゃんと一緒にいたぞ。お前と待ち合わせしてたんじゃねえの？」

「クスハと？　確かに俺はクスハとここで待ち合わせていたが……」

「……あー、じゃあクスハちゃん付いて行っちゃたんだな。ちゃんと面倒見てやらないと駄目じゃねえかブリット。クスハちゃんはおめえの彼女だろ」

何度も言うようだが、別に俺とクスハは交際などしていない。しかしこのタスクの言葉は、俺たちの関係を見た周囲が一様に見せる反応であった。

……俺は手元の茶封筒に視線を落とした。

嫌な予感がする。出来る事なら開けたくはない。

だが目を背けることは叶わないだろうと、俺は茶封筒を開け、中の手紙に目を通した。

『はいけい、べーちゃんへ。

貴様の後はいの彼女は預かりました。

返して欲しければ○○工場跡地にまで来なさい。

来ないと、クスハ・ミズハに嫌がらせをしちゃいますよ。

しんあいなるアクセル・アルマーより』

中に入っていたのはただのＡ４用紙で、ミミズが這ったような鉛筆の字で文句が書かれていた。

所々、消しゴムで誤字を消した後があり難しい漢字はひらがなだったが、「彼女に嫌がらせ」という文面は見過ごすことができない。

アクセル・アルマー、クスハになにをするつもりだ!?

手紙を持つを俺の手が小刻みに震える。

そのとき俺の目の前に、この事件の渦中の人物キョウスケ・ナンブが彼女のエクセレン・ブロウニングと連れだって、下足場に現れた。

「キョウスケさん!」

「なんだブリット？　俺は忙しいんだ」

そう言うキョウスケさんの右耳には赤鉛筆、右手にはなにやら新聞のようなモノが持たれていた。

まるで競馬場へ出陣する男の正装である。

キョウスケさんの左腕に抱きついているエクセ姉さんが言った。

「そうよブリット君。これから私たち、動物園でデートするんだから」

動物園？

まさか娘を動物園に行こうと言って、馬を見せに行く競馬スキーなお父さんじゃあるまいし……と思いつつ、俺は訊いた。

「え？　も、もしやそれはお馬さんが沢山闊歩するという……」

「ワーオ、凄いじゃない！　ブリット君が知っているなんてきっと有名な所なのね！　楽しみね、キョウスケ！」

「ああ、実に楽しみだ」

キョウスケさんの瞳は、夜空に輝く金星（一番星）のように輝いていた。

駄目だ。

この人「分の悪い賭け」をしに行くつもりだ、エクセ姉さん、あなた騙されてますよ！

だが今日は行ってもらっては困る。

クスハが誘拐された原因は全てキョウスケさんにあるんだから。

俺は手紙をバッと広げて、キョウスケさんの顔に突き付けてやった。

それを一瞥するとキョウスケさんが口を開いた。

「クスハ・ミズハ？　それは何レースに出走する馬だ？」

俺は耳を疑った。

「悪いなブリッド。今日の俺は7レースの『コテツ・リーゼ』一点張りだからな。単勝大穴、分の悪い賭けは嫌いじゃない」

「ワーオ、なになに、その動物園ってお馬さんを駆けっこさせるアトラクションやってるの？　ますます楽しみねん！」

「そういう訳だ。ではな、ブリット」

口元から覗く白い歯がキラリと輝いている。

とても爽やかな笑顔を残して、キョウスケさんとエクセ姉さんは下足場去ってしまった。

……うそーん。

嘘ですよねキョウスケさん？　他の文面全て無視して、クスハの名前にしか目が行きませんでしたってか！？

しかもクスハ・ミズハって全然馬の名前に思えないし！

なにが「コテツ・リーゼ」だ、あのギャンブル狂いめ！　二度と金なんか貸してやらないぞ！

「タスク」

「なんでい？」

俺はこの光景を見守っていた友人のタスクをすがる様に見つめた。

「一緒に来てくれるよな？」

「ヤダ」

即答。

それはとても歯切れよく、気持ちいい返答がコンマ一秒で返って来た。
タスク、俺たち友達だよな？　そういう俺の言葉にエロ仙人はこう答えた。

「俺っち、今日レオナちゃんの家にお呼ばれしてんだよね。前に『下郎』呼ばわりしたお詫びに料理作ってくれんだってさ。いやー、モテル男は辛いねー。
しかし千載一遇のこのチャンスを逃すつもりはねえ！　今日こそ、レオナちゃんのおっぱいゲットだぜ！！」

殺されてしまえ。
それが俺の率直な感想だった。

「じゃ、そういうことだから。悪いなブリット！」
「ちょっと待て！　いや、お願い待って！」
「すまん！」

俺の懇願にタスクはあっさり背を向ける。
そしてタスクは、それこそ風のように去って行ってしまった。
なんという友達がいのない奴だ。所詮はキョウスケ先輩の賭け仲間と言った所だろうか。
ギャンブル好きな奴なんか、もう皆死ねばいいと思う。
しかし困った。
クスハはアクセル・アルマーに連れて行かれたままだが、頼りのキョウスケは去ってしまったし、他に付いて来てくれるような奴はいない。
一人で、あの影高の戦鬼と一戦交えなければならないのか？
断言しよう。
確実にぶっ殺される。

暴走族「シャドウミラー」の幹部級の戦闘能力は異常だった。
風の噂には、幹部の一人は単身で悪の秘密結社に乗り込み、あっさり壊滅させてしまったという都市伝説まがいのモノまであるぐらいだ。
そんな異常人相手に、成績表の体育5とは言え、所詮は一般人の域を出ない俺が敵う訳がない。
しかし、しかし……

「クスハを見捨てる訳にはいかない！」

俺は自分の部活である、剣道部の部室へと駆け込んだ。
せめて武器を持って闘いの場に臨んでやる。
俺は愛用の木刀「斬神陸甲剣（ざんしんりっこうけん）」を手に取った。

「おっぱい！　じゃなかった、クスハは渡さないぞアクセル・アルマー！」

俺は、木刀片手に○○工場へと急いだ。

●

俺の名前は、アクセル・アルマー。
今、俺の目の前には素晴らしい光景が広がっている。

「ねーねー、なんで私は柱に括りつけられているの？」

おっぱい、じゃなくてクスハ・ミズハが訊いてきた。
工場跡地の柱に括りつけてやったクスハ・ミズハ。
両手を後ろに回して括りつけているので、その豊満な胸が強調されてズバーンと大砲の弾のように迫り出していた。
素晴らしい、実に素晴らしいおっぱいだ。

「それはね　――」

俺はクスハ・ミズハの質問に応えてやる。

「――　俺っちが、クスハちゃんを喰っちゃうためだよ」
「食べる？　私を？　変なのー、私別に食べる所なんてないよー」
「そこにスイカが2つあるじゃないか、これがな」

俺はクスハ・ミズハの双子山に視線を向けて言った。

「スイカ？　おかしいなー、スイカなんてないけどなー？」

クスハ・ミズハは本気で信じているようで、周囲の工場跡地に目を這わせていた。
くくく、いいねーこの娘、実にいい。
自分が男にとって最高の食い物だってことに一切気づいていない。
擦れてないだよねー、いいねー、逆に新鮮で。
こんな可愛い娘を拉致して、ベーオウルフを待っているだけなんて男が廃るね。
いや、逆に失礼に当たるだろう？

「さーてと」

その凶暴なまでの双竜以外にも食べるところは沢山あるんだよ、

と今日教えてやることにしよう。
最近レモン姉さんも冷たいし、アルフィミィちゃんからも？がないんだよね。
……もしかして、二股掛けてたのがばれたか？
まさかね！
俺っち頭悪いけど、その辺のカモフラージュは完璧だからな。バレル訳がない。
もしバレテたら、俺はレモン姉さんの人体実験の餌食になって、今頃ひき肉だ。

「美味しそうな前菜だぜ」
「前菜？　ねーねー、なにそれ？　美味しいの？」
「ああ、美味しいよ。とってもね」

クスハ・ミズハは、今から自分の身に降りかかる不幸に知らずに天真爛漫な笑みを浮かべていた。
俺っちは悪だからな、罪悪感なんてこれっぽっちも感じていないぜ！
レモン姉さんがメインディッシュで、アルフィミィちゃんがデザートだから、クスハ・ミズハは前菜に決定だ。
「蒼髭流格闘術（ソウシリュウ）」奥義、究極の指テク「舞朱雀（まいすざく）」で昇天させてやるぜ！
俺は指をウネウネと動かして、解しながら呟いた。

「俺の指テクで、クスハ汁を流させてあげるからね？」
「クスハ汁？」

なぜか、目の前の子羊ちゃんはクスハ汁という単語に反応した。
俺の言ってるクスハ汁がなんなのか、聡明な皆には分かると思う。
○○だよ、○○。あれ？　なんで伏字されてんの？　オカシイな。

そんな俺の思考を余所に、クスハが朗らかに笑いながら言った。

「クスハ汁なら私持ってるよ！　今日の家庭科の時間に頑張って作ったの、今かばんの中に入ってる！」

「ふーん」

別に興味ないや。

そんなことより、俺は早くドッグファイトを始めたい。

しかしクスハは俺をじっと見つめながら、

「飲んでいいよ」

「はぁ？」

「本当はブリット君のために作ったんだけど、あなたなら飲んでもいいよ」

別に飲みたくないし。

今のこの状況で飲むモノなんて「赤マムシ」くらいだろう？

しかしクスハは俺を見て、返答がないことがショックだったのか、目じりには大粒の涙が浮き上がって来た。

「飲んでくれないの？」

「うっ、ぐ……！」

や、やめろ、そんな目で俺を見るな！

クスハ・ミズハの瞳からは今にも涙が零れ落ちそうだった。

まるで、借金してでも買って欲しいと見つめてくる、某金貸しメーカーのＣＭの犬のような目だ。

卑怯だぞ！　そんな目をされては飲むしかないじゃないか！

「分かった、飲むよ」

「わーい」

俺がそう答えた瞬間、クスハ・ミズハからはケロッと涙が消えて、気持ち良く破顔していた。

あれ、涙は？

もしかして俺、騙されたんかな……と思いつつも、俺はクスハ・ミズハの学生かばんの中身を覗き込んだ。

勉強道具以外に青い水筒が１つあった。

取り出すとチャポンと中に液体が入っている感覚が伝わって来る。

「飲んでー、早く飲んでー、一気に飲んでー」

「分かった分かった」

「一気ッ、一気ッ、一気ッ」

「わーたから黙れ！」

無暗に煽って来るクスハを怒鳴りつけると、俺は水筒の中身をコップに注いだ。

深緑色の液体が俺の目の中に飛び込んできた。

なんだか青汁みたいだな。こんなのブルックリンは飲むのか？

「飲んでー、飲んで飲んで、飲んでー、飲んで飲んで」

「シャラップ！」

意味不明なテンションではしゃぐクスハ・ミズハに口止めして、俺はコップに口を付けた。

クスハ汁は見るからに不味そうだった。

不味いものって一気に飲み下すに限るよな。

こう、グイッと　――――――

●

俺の名前は、ブリット！
今まさに○○工場跡地の前に来ている。
ここにクスハとアクセル・アルマーがいるはずだ。
アクセル・アルマー、影高の蒼き戦鬼と恐れられる素手ゴロ最強の漢。
俺はその漢と喧嘩しなければならない。
愛用の木刀「斬神陸甲剣（ざんしんりっこうけん）」の柄を握る手が緊張からか汗ばんでいた。
おそらく俺は負けるだろう。
それもメッタメッタのボッコボッコにされて病院送りにされるだろう。
しかし俺は逃げる訳にはいかない！
クスハを助ける為に、俺は逃げる訳にはいかなかった。

「覚悟しろ、アクセル・アルマー！！」

俺は上段に構えて、工場内に突入した。
すぐに柱に括りつけられたクスハの姿が目に入る。
しかし近くにアクセルの姿は見えなかった。
どこかに隠れているのか！？

「卑怯だぞ、出て来いアクセル・アルマー！！」
「ブリット君」

クスハが話しかけてきた。

「そこに倒れてるよ」
「へ……？」

クスハの視線の先にソイツはいた。
この赤いモジャモジャワカメヘアーは忘れたくても忘れられない。
アクセル・アルマーが青いコップを右手に握りしめたまま倒れていた。
白眼を剥いている。外傷はないが、一体誰がアクセル程の猛者を倒したというのだろう。
しかし俺は気がついた。
アクセルの左手に握られている水筒……そしてその中身に。

「あ、あれはクスハ汁……アクセル・アルマー、愚かな」

あれを、飲んだのか？
何度も飲んで耐性のできている俺でさえ意識を持って行かれそうな毒物を、一気飲みしたようであった。
救いようのないアホである。
しかし同情する気にもなれない。
アホは放置することにして、俺は水筒とクスハの学生かばんを拾い、クスハを拘束していた紐をほどいてやる。

「無事か、クスハ」
「ありがとーブリッド君」

クスハの間延びした声からは危機感を感じる事ができなかった。

――クスハ・ミズハは天然だ。

それも『超』が付くほどのである。
おそらく、本当に恐怖は感じていなかったのだろう、素直な笑顔をクスハは浮かべていた。
だけど心配なんだ。
天然だから悪い虫でも付きやしないか、トラブルに巻き込まれたりしないかとても心配なんだ。
しかし無事でよかった、俺は胸を撫で下ろす。
こんな所からは早く去ってしまうに限る、俺はクスハの手を取った。

「か、帰ろうかクスハ！」
「うん、ブリット君」

手を引いて工場の外へとクスハを導く。
顔が熱い。
俺はクスハの前を歩いているから、赤面しているかもしれない顔を見られないのは救いであった。
恥ずかしいからな。

「そうだ、ブリット君」

急に立ち止まったクスハ、俺が振り返ると彼女は学生かばんの中から青い水筒を取り出していた。
そ、それは……クスハ汁!?
クスハはそれをコップに並々注いで俺に差し出してきた。

「家庭科の時間にブリット君のために作ったの」
「お、俺のために……！」

ありがたい。目から汗が流れおちそうな感動的な台詞である。

例え、作られたのが毒物であったとしてもだ。

「どうぞ召し上がれ」

天使のような悪魔の笑顔。

死刑宣告にも似たクスハの言葉に、俺は覚悟を決めた。

ここで飲まねば男が廃る！

好きな女の子が作ってくれたモノを飲めないなんて、そんなことをする奴は男じゃない！

俺はクスハ汁の入ったコップを受け取った。

そして一気に口に流し込む。

「――――ッ！？」

苦い、なんて表現は生ぬるい。

強烈な炭酸のような刺激が口内に、硫黄のような刺激臭が鼻を突き刺し、人間の持つ五味の内の苦みだけを極限まで進化させたような味が俺を襲った。

……要するに、この世のモノとは思えない味だった。

持って行かれそうになる意識を俺はなんとか繋ぎ止め、クスハのために笑顔を作る。

「う、うまい、もう一杯……！」

「はい、どうぞ召し上がれ♪」

クスハは容赦なく、コップにクスハ汁を注いできた。

俺はこれを煽り続けるしかないだろう……それがこの世で一番の艱難辛苦であったとしてもだ。

だって俺は好きだったから。

心の底から浮かべるクスハの笑顔が、世界中のなにより好きだっ

た。
俺は世界の中心で叫びたかった。
「俺はクスハが好きだぁあああああっ！！」
勿論、声には出せない……今の俺たちの関係が、音を立てて崩れ去ってしまいそうだったから。
俺はクスハ汁を飲む。
苦い、それでもクスハの作ってくれたと思うと飲むことができた。
クスハ汁を飲み干した俺は再びクスハの手を取って、
「か、帰ろうか、クスハ！」
「うん、ブリット君」
いつもの帰路に付いた。
繋いだ手からクスハの温もりが伝わって来る。
体だけでなく、心まで温かくなってきた。
手を繋いだ俺たちは、他人から見れば恋人同士に見えるだろう。
だが俺たちは付き合っていない。
お互い好き合っているとは思うが、俺はこの関係を崩したくはなかった。
こんな俺は意気地なしだろうか？
今日もクスハとの一日が過ぎていく　――
ここはＯＧ高等学院。
『エリア』にある地域最大のマンモス高校だ。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。

次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない。

おまけ

競馬場。
それは男の魂が交叉する闘いの場所である。
場内に熱いアナウンサーの声が響きわたる。

『――　おーとっ、ここでコテツ・リーゼ転倒!!
後続を次々と巻き込んで行きま　――　ああ、しかしここでトロンベの登場だ!!
倒れた馬群をひとっ飛びで跳びこして、一瞬でゴボウ抜きです!!
早い、まるで黒い竜巻だ　――!!!!』

レーツェル・ファインシュメッカーという騎手が駆るトロンベが1着でゲートを潜った。
紙切れとなった馬券が舞いあがり紙吹雪となって舞い散る競馬場で、エクセレン・ブロウニングの携帯にメールの着信があった。着信音は「白銀の堕天使」だ。
メール送信者はアクセル・アルマー。

『拝啓エーちゃんへ。
今日はベーオウルフが来てもくれませんでした。
しかもさらった彼女さんに毒物を飲まされて気絶してしまいました。

とても悔しいです（＾－＾）／』

文面に似合わない絵文字で書かれたメールに苦笑を浮かべ、エクセレンは神業的なタイピング速度で返信した。

『拝啓アー君へ。
マンネリ化したとは言え、
やはりヒロインをさらわないとベーオウルフは来てくれないのかもしれませんね。
それよりもアー君、敵の出した飲み物に口をつけるのはどうかと思いますよ。
次回から気をつけましょう（＾－＾＊）／』

３０秒ほどで着信音、エクセレンは開いて確認する。

『いやー、うっかりうっかり（・ε・）／』

エクセレンは携帯を閉じて、隣で固まっている男に語りかけた。

「帰るわよ、キョウスケ」
「……」

キョウスケは項垂れたまま、ピクリとも動かない。

「もう……」

まったくしょうがないな……とエクセレンはため息をつき、体をキョウスケに預けて目を瞑った。
彼が復活するまでこうしていよう、とエクセレンは微笑を浮かべる。

温かい気持ちになることができた。

ちなみに、優勝したレーツェルとかいうグラサン男が表彰台に上っていたと言う……

我ニ敵ナシ？　～おっぱいを廻るセイセン！の巻～（後書き）

＜キャラ紹介＞

ブルックリン・ラックフィールド：ジェネ高2年生のイケメン。剣道部に所属し、文武両道の成績を誇る優等生。クスハ大好き、頑張れブリット君。

クスハ・ミズハ：ジェネ高2年生の超天然娘。ブリットとは同じクラス。多分ブリットとは相思相愛のはず？

アクセル・アルマー：影高3年生、恐怖の特攻隊長。素手ゴロ最強を誇るが、スケベでアホ。現在、レモンとアルフィミィに二股中。ボインも無い胸も大好き！

キョウスケ・ナンブ：ジェネ高3年生の走り屋。ベーオウルフの異名を持ち、分の悪い賭けが大好き。借金返済できる日は来るのか？

エクセレン・ブロウニング：ジェネ高3年生でキョウスケの彼女。高校生には見えないが、誰がなんと言おうと高校生。いろんな人から姉さんと呼ばれている。

タスク・シングウジ：ジェネ高2年のラッキースケベ。エロ仙人とも呼ばれており、その知識は男子生徒の尊敬を集めている。賭けごとがものすごく強い。

＜次・回・予・告＞

キョウスケ「久しぶりの出番だと思えば、なんだこの扱いは？」

エクセレン「ねー？　でもいつも賭けごとばっかりしてるから仕方ないんじゃなーい。て言うかー、今日は幾ら負けたの？　はい、カミングアウッ！」

キョウスケ「……5万円」

エクセレン「それもぜーんぶ人から借りた金よね？」

キョウスケ「……うん」

エクセレン「テレビ（？）の前はこんな大人になっちゃダメダメよん！　じゃあ、次回予告、シャウトナウ！」

キョウスケ
「ええーい（やけくそ）！
次回のスパロボ学院はパンだ！！　でも作者はごはん派！！
次回スパロボ学院『リョウトのパン』
どんなパンだろうと、焼き上げるのみ！！」

エクセレン
「スーパーロボット大戦Lもよろしく（好評発売中）！！」

ｓｉｂｕｇａｋｉさん、暗黒ミカンさん、Ｄｉｓさん改めヴィーアスさん、感想ありがとうございます！

最近アクセルのアホセル化が酷いです。若干、クレーム来ないか少し不安ですが……書いてて楽しい。
次回の題名は「〇斗の拳」みたいな発音をイメージしてもらいたいです。
勿論、元ネタはあの作品からのつもり。
パロディってことで許してください。

では作者の北洋でした。

リョートのパン　～貴方はパン派？　ご飯派？～（前書き）

＜注・意・事・項＞
絶賛キャラ崩壊中！
ゴヒ子のキャラが激しく崩壊しています！　ゴヒ子ファンの方は注意してください。
それでもいいという方はどうぞ！

リョートのパン　～貴方はパン派？　ご飯派？～

僕の名前は氷川（ヒカワ）諒斗（リョウト）。
何故か高校の密集する地域『エリア』の寂れた商店街で小さなパン屋を経営している。
お店の名前は名字から取って「ヒカワ屋」。少し、安直だろうか？　でも店の名前よりも大切なのは商品の質でだと僕は思っている。
１つ１つのパンを丹精込めて練り上げ、焼きあげる。
それをお客さんが買ってくれる。
お客さんが美味しそうに僕の焼いたパンを頬張る姿を見るのは、何にも勝る快感だと思っている。
固定客も少ないながら出来てきた。
でもね世間という荒波の中、順風満帆という訳にはいかないんだ。

――ハッキリ言って経営は火の車なのだ。

僕の店の店員は看板娘のミナキさんと、僕に弟子入りしてきたトウマ君だけ。
２人には迷惑をかけている。特にトウマ君は雀の涙程の給料でしっかり働いてくれるので非常に助かっているんだ。
一度、大手企業「マオインダストリー」からフランチャイズ店にならないかと声を掛けられたことがある。
チェーン店になれば間違いなく売り上げは上がるし、もちろん魅力的だったよ。
でも僕は断ったんだ。
大手企業のネームバリューは商売する上で非常に有効かもしれないけど、それって結局ぬるま湯に自分から浸かりに行くようなもので、自分の腕を磨く事の助けにはならないと思うんだ。
その話を持ちかけてきた幼馴染……リオ・メイロンには悪い事を

した。
　マオインダストリー　――　通称マオ社で働く彼女の好意を無下にしたのだから。

あれから彼女には会えていない。
彼女は一体どうしているのだろう？
しかし僕にも僕の生活があり、僕のパンを待っているお客さんがいる。
だから僕は今日も焼き続けるのさ。
僕に作れる、精いっぱいに美味しいパンをね。

スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～
リョウトのパン　～貴方はパン派？　ご飯派？～

『エリア』の商店街にある小さなパン屋「ヒカワ屋」。
日が陰り、店の外は徐々に夕闇に包まれていく中、店内ではその日最後の客が商品を買い上げていた。
天然素材の味を活かして焼き上げたパンだ。
商品を手に店を出ていくお客の背中に僕と看板娘のミナキさんの声が重なった。

「お買い上げ、ありがとうございましたー」

礼を済ませ、頭を上げると時刻は１９時を回っている。
「ヒカワ屋」の営業時間は１９時までなのでドアノブに閉店の札を掛けて、僕たちは店内の掃除を始めた。

僕が焼いたパンはそれなりに好評で、今日も完売。
ありがたいことです。

「お疲れ様です、店長！」
「あ、お疲れ様トウマ君」

奥の厨房からトウマ君が元気一杯声をかけてきた。
厨房は先に火を落として方付けをするので既に掃除は完了している。なのでトウマ君も加わり、３人で店内の掃除をすることにした。

「今日も全部売れて良かったですね！」
「うん、これもトウマ君とミナキさんのおかげだよ」
「そんな謙遜しないでくださいよ！」

バシ、とトウマ君が僕の方を叩いてきた。
別に謙遜している訳じゃなく、本気で思っていることを口にしただけだ。
ミナキさんは見ての通りの器量良しで、彼女目当てで店を訪れる人もいるくらいだし。
トウマ君はトウマ君で、今までに沢山のバイトの経験があるらしく、新しいことを覚えるのが得意とのこと。始めてすぐにパン焼きの技術もめきめきと上達し、今では監督しなくてもパン焼きを任せられるレベルに成長しているし。
２人には本当に助けられている。
だからこれは僕の率直な感謝の気持ちなんだ。

「本当、２人のおかげで助かってるよ」

僕の言葉にトウマ君は照れ臭そうに頭を掻いていた。

「いやー、自分なんてまだまだですよ！　な、ミナキ！」
「ふふふ、そうねトウマ」

トウマ君の言葉にミナキさんが笑顔で応えている。
この2人は本当に仲が良い。
バイト後も同じ方向へ一緒に帰っているしね。バイト仲間同士、仲良しなのはいい事だと思う。
しかしトウマ君。
最近なんだか妙に筋肉質になり、手足に重そうなリストバンド付けているけどミナキさんと何か関係あるのだろうか？

「おつかれさまでした、店長！」
「ありがとう、また明日もよろしくね」
「はい！」

店内の掃除も終了し、僕はトウマ君たちを見送った。2人仲良く連れだって夜の闇の中に消えて行った。
さーて、今日の仕事はこれで終了だ。
僕は大きく伸びをして体のコリをほぐす。さあ、この後は明日の仕込みをして、風呂に入って夕食にしよう。
健康的で充実した毎日だ。
少しくらい経営が苦しくても不満はない。
最近はあの性質（たち）の悪い地上げ屋もやって来ないし平穏な毎日である。
しかし、

「ん？」

ふと、僕の目に飛び込んできたものがあった。
「ヒカワ屋」と道路を挟んで向かい側に見慣れない建物が出来て

いる。
この商店街は単刀直入に言えば寂れている。半分シャッター街と化しているし、店じまいをして他の土地に越して行く人も少なくはない。
確か僕の記憶では、店の対面は最近まで空き地だったはずなのに……何かのテナントのような外装をしているが……もしかして飲食店だろうか？
だとしたらいやだなぁ……ただでさえ経営苦しいのに……

「……仕込みしよ」

考えても仕方ないので、僕は店の中に引っこむ事にした。
しかし、この時に店の立て札をしっかり見ておけばよかった、と後に思う事になる。
まあ、見ていても結果は変わらなかっただろうけどね。
店の立て札にはこう書かれていた。

『信頼と実績のマオインダストリーがプロデュース！
ご飯とおにぎりの専門店「マオ屋」
近日開店！！』

だからどうしたって話なんだけどさ……。

●

それから数日したある日。

「とわぁいへんです！　店長！！」

お日様が燦燦と差し込む麗らかな昼下がりの平穏をぶち壊したのは、何であろう店員のトウマ君の叫び声であった。

この間より手足のリストバンドが巨大化している。

重くないのかね？　と思いながら僕は聞き返した。

「どうしたのトウマ君、なにが大変なの？」

「それはこっちの台詞ですよ！　今日、お客さんが少ないのに気づかないんですか！？」

むっ、そう言われてみれば今日はまだお客さんが一人もいていないな。

もう時刻は昼下がりだし、お昼ごはんを作るのが面倒になった奥様あたりがパンを買いに来てもおかしくないはずなのに。

と言うよりも、店のメインターゲットだから来てくれないと困るのだけど……余りにも穏やかに時間が過ぎていくので危機感と言うものが欠如していたようだ。

「対面の通りに新しい飲食店がオープンしてるんすよ！　お得意様のお客さんまでそっちに流れ込んでいます！」

「な、なんだって！」

それを聞いてじっとしては居られない。

僕がトウマ君と共に店外に飛び出すと、道路を挟んだ向かい側の通りに新しい店が出来ていた。つい先日みた「あの店」だ。

なるほど、「ヒカワ屋」に客が来ないのも道理である程に、その店の前には人だかりが出来ていた。

中にはお得意様の奥様方の姿がチラホラ見受けられる。軽くショックだ。

「ミガワ屋さんにノリズケさん家の奥さん……ああ、ザザエさんまで……！」

「店長、ショック受けている場合じゃありませんって」

トウマ君が相手の店の看板を指差しながら言った。

「マオインダストリープロデュース『マオ屋』……安直な店の名前なんてどうでもいいんだ！　マオインダストリー、これくらい知ってるでしょ店長！」

「当たり前だろ、それくらい知っているさ」

そりゃ、僕の店は買収されそうになったことがあるからね。

マオインダストリー　――　分かりやすく言えば、世界の経済を牛耳る巨大企業と言った所だろうか。

超巨大ベンチャー企業「ＤＣ（ディバインクルセイダーズ）」に匹敵する経済力を持ち、機械製造や人材派遣、さらには全国に様々なフランチャイズ店の展開を手掛けている会社である。

ファミリーレストランを始めとして、お弁当屋さんやハンバーガーショップなど広く手を染めており、その経営店舗の知名度は下手な芸能人よりも高かったりする。

そのマオインダストリーが「ヒカワ屋」の正面に店を構えた。

……なんてこった

「一大事じゃあーー！！」

「店長、口調変すっよ！」

い、いかんいかん、思わず地方の方便が出てしまうぐらいに驚愕

してしまった。
だがこれは疑う余地もない。
ヒカワ屋滅亡の危機だ！

「ど、どうしようトウマ君？」
「と、とにかく落ち付いてください店長！　まずは深呼吸です！」
「すーはーすーはー」
「冷静に落ちついたところで、徐（おもむろ）に武器を装備して」
「よいしょっと（パン練り用の棒［攻撃力３］を装備）」
「準備が出来たら殴りこみじゃあああ！！　いざ、鎌倉ァ！！」
「ちょっと待てぇ！！」

「マオ屋」の前に出来た人だかりに突撃しようとするトウマ君の後頭部を、僕は装備したパンの木の棒［攻撃力３］で殴打した。
めきゃあ、という快音を響かせていとも容易く棒が圧し折れる。
やばい。普通なら昏倒してもオカシクない。そのぐらい思い切りのよい不意打ちをしてしまった。
漫画みたいな大きなコブがトウマの君の頭には出来ている。

「なにするんですか店長？」

しかしケロリとした顔でトウマ君は僕の方に振り返って来た。
前々から思っていた事だけど、トウマ君は日に日に耐久力が上がって来ている気がする。今ならバットで殴打しても平然としていそうで怖い。

「いや、落ちつかせようと思って……ね」
「そっすか、ありがとうございました！　でもこの状況どうしましょうね？」

「マオ屋」を見ながら呟くトウマ君。

「このままじゃ『ヒカワ屋』が間違いなく食いつぶされますよ。俺の長年のバイトの勘がそう告げています。早いとこ対策を練った方がいいですよ」

「ト、トウマ君、そんなに僕の店の事を……ありがとう」

トウマ君には少ない給料しか渡せていないのに、そこまで親身になってくれるなんて……僕はなんて良い店員に恵まれたんだ！

目尻に涙が浮かびそうになる。

トウマ君は僕に一瞥もくれずに「マオ屋」を睨みつけながら返事を返した。

「だってミナキに会う口実がなくなるじゃないですか？」

あれ？　僕、さり気なく酷いこと言われなかった？

さっきの感動はどこ吹く風だろう。トウマ君の言葉で一瞬で冷静になることができました。取り合えず彼の給料は５％カットということにしておきます。

だが「マオ屋」に対抗する策……うーん、残念ながら思いつかないなぁ。

どうしよう？

「相手の店の様子でも見てくる？」

「おお、敵情視察ですね！　敵を知れば百戦危うからず、流石です店長！」

何気ない一言にトウマ君が僕に尊敬の眼差しを向けてきた。

自分の言葉ではあるが、対策を練るにあたって相手の手の内を知るのは重要な事だと思う。

と言う事で、僕たちは「マオ屋」の行列に並ぶ事にした。

列で待ち続ける事３０分。

僕たちはやっと「マオ屋」の中に入ることができた。店内はお客でごったがえしており、ショーウインドウの中に商品が陳列されている。客はカウンターで好きな品を注文し、代金を払って包装された商品を受け取るというスタイルの商売法のようである。

商品は、白飯を三角形に固めた携帯食――いわゆる、おにぎりであった。

そして店内に飲食スペースはなく完全にお持ち帰り専用店の様相で、客は次から次へ流れる様にして掃けていく。まるで工場のベルトコンベアに乗る部品のようだ。

「店長、あれ見てください。『縁結び』ですってさ」

小声で話しかけてきたトウマ君に視線が促された。

どうやら「縁結び」というのは目玉商品のようで大量に陳列されている。内容はおにぎり3個にパックのお茶がついて、なんと２００円！？

ぼ、暴挙だ！

マオ社のような大企業でなければできない薄利多売である。こんな事をされては僕の店では太刀打ちできない。案の定、ほとんどのお客が「縁結び」を購入していた。

なるほどね、お客さんとの縁を取り持つおにぎりってか……！

このお結び専門店は僕の店の縁まで根こそぎ奪い取るつもりのようだ！

「ひ、ヒカワ屋風前の灯……ど、どうしようトウマ君!?」
「店長、大声出さないで下さいよ!!」
僕の悲鳴にトウマ君が咆哮を上げる。
「「あ」」
店員どころか、店内中の客の視線が僕たちに釘付けとなる。
しかもよくよく考えたら、僕は「ヒカワ屋」のエプロンをつけたままであった。ジーザス！　もはや言い逃れのしようがないじゃないか！
「なにを騒いでいるの!?」
店の奥から責任者らしき女性が姿を現した。
艶やかな黒髪を後頭部で纏めた若い女性であった。キツめの眼光が意志の強さ物語っているような、そんな女性だった。
なんと言えばいいのだろう?
そっくりなんだよね、僕の知っている女性に……というか幼馴染に。
「リ、リオ?」
「あーらリョウト君じゃない。久しぶり」
僕の幼馴染リオ・メイロン本人であった。
リオはにやりと笑みを浮かべながら、白くなっているだろう僕の顔を見下しながら言った。
「あーら、もしかして敵情視察かしら?　情けない事してんじゃないわよ、このヘタレ！」

「ひぃ！」

再会を果たした幼馴染はいきなり毒を吐いてきました。
予想外の展開に全身から嫌な汗が噴き出してきた。ストレスを感じるとアポクリン汗腺から滲み出る冷や汗だ、特に手が暑くて堪らない。
どうしてだ！　どうしてリオがここにいるんだ！？

「忘れたの。私はマオ社の社員よ」

忘れていた。僕と同じモノ好きで、リオも高校に行かずにＯＬになる事を選んだモノ好きだった。
リオが就職したのは一流企業「マオインダストリー」……だから「マオ屋」に居ても不思議はないだろう。しかしなんだろう、あの責任者面した顔は？

「私はこの店の店長よ」
「な、なんだってー！」
「リョウト君がいけないんだからね。
私の言うとおりに、大人しくマオ社の傘下に入っていればこんなことにはならなかったのよ」
「で、でも……」

それでは僕の目指しているパンじゃなくなってしまう。
売り上げのためだけに大量生産されるパンなんて、僕は作りたくはないんだ。そのことは以前リオにも説明したはずなのに……なんでこんなことをするんだ？
組織力を使って個人の店を潰すような真似を……い、いけない。
僕って涙腺弱いからなぁ……涙が溢れてきそうだった。
そんな僕の様子を見たリオは、

「ああっ、いいわぁ」

頬を朱色に染めて、恍惚の表情を浮かべていた。

くねくねと身を捩じらせている。

「いいわぁリョウト君、その顔よ。その困って涙ぐんでいる顔が…

…ああん、可愛らしくって最高よ！」

「グジュ……リ、リオ、君って奴は……！」

「ああん、その鼻声もス・テ・キ」

不覚！

完全に忘れていた。

僕の幼馴染は変態です。

幼い頃からリオはぼくの事を虐めて困った顔を見るのが大好きな子でした。それは大きくなった今も変わらず、と言うか悪化して、僕の困った顔を見ると顔を赤らめて「ハァハァ！」し始める始末。

しかも小さい頃に子どもが交わしがちな約束を律義に守ろうとしているし、それを果たすためにマオ社への入社もこなしてしまう…

…なんというか、僕にとって厄介極まる変態幼馴染だった。

「はぁはぁ、初日からこんな困った顔を拝めるなんて最高だわ！

ああんっ、これからもっと攻勢をかけて行かなくっちゃね！」

「止めてくれ！　お願いだから、止めてくれリオ！」

「ああん　――　もっと、もっとよリョウト君！　店が潰れてしまうまでリョウト君を追い詰めてあげるわ！」

このドSめ！

駄目だこの娘、誰かなんとかしてくれ！

僕の懇願などリオにとっては御褒美にしかならないようで、余計

に彼女の奇行に拍車をかけるだけだった。
しかしどうすればいい？　このまま「縁結び」を２００円で売り続けられるだけで厳しいのに、キャンペーンをさらに行われたら確実に店が持たない……。
そのときだった。
「待ちな！」
傍に居たトウマ君が見ていられなくなったのか声を荒げていた。
「この変態凸娘（デコ）！　店長を困らせるのも大概しろ！」
「デ、デコ……聞き捨てならないわね！　貴方、何者なの！？」
「問われたからには名乗ってやろう！」
トウマ君が頭（かぶり）を振って叫んでいた。
「ヒカワ屋店主リョウト・ヒカワの一番弟子　――　トウマ・カノウとは俺のことよ！！」
「ト、トウマ君……」
「やい凸娘（デコ）！」
僕の感動を余所に、ビシイ、とリオに指を突き付ける。
「言っとくがな店長のパンの味は半端ないぜ！　テメエの所のおにぎりなんて相手にならないね！　どうせ組織のネームバリューだけの大したことない味なんだろう？」
「な、なんですってえ！」
安い挑発にリオが簡単に乗って来た。

「なら勝負よ！　どちらの味が上か白黒つけようじゃないの！！」
「望むところだ！！」

これまた安請け合いするトウマ君。駄目だ、完全に頭に血が上っている。止めないと。

「ちょ、ちょっとトウマ君……」
「店長は黙っててください！！」「リョウト君は黙ってて！！」
「はいぃ！」

阿修羅と化した2人の怒り面に僕は思わず腰が引けてしまっていた。
当事者を蚊帳の外にして話が進んでいく。

「店長が勝ったら、ヒカワ屋にちょっかい出すの止めてもらうぞ！　いや、この店の営業を辞めてもらう！　不味い食事が奥様方の口に入って行くのを見てられないからな！」
「あーら、結構よ！　でもそれはこちらの台詞ね！」
「なんだとぉ！」
「もしこちらが勝ったら、そっちも店を畳みなさいって言ってるのよ！」
「いい度胸だぜ！」
「受けたわね！　もうこの勝負を受けたとみなすわよ！　吠え面かかせてあげる！　あとリョウト君にも困った顔を、はぁはぁ」

もう嫌です。この変態幼馴染！
「縁結び」ならぬ「縁切り」と言うおにぎりがあるなら食べたい……そんな気分だ。
涙目になる僕を見てさらに悦りながら、リオは僕に無かって一枚の紙を投げつけてきた。

なんだか書類のように見える。

「はぁはぁ、あともし私が勝ったらリョウト君はそれにサインすること！」

「で、でも僕はまだ受けるなんて言ってないし……」

「問答無用！

勝負は3時間後、お互いにとっておきの物を用意してくること！

いいわね！」

「う、うん」

リオの剣幕に押されて頷いてしまう僕。はい、ヘタレです。もう否定なんてしませんよ。

勝負の時刻を一方的に告げられた後、僕たちは客でもないので早々に店を追いだされた。

「やりましたね店長！　これで勝てる！」

なんでだよ！　と突っ込みたくなったが止めておくことにする。

トウマ君はトウマ君で店のために取ってくれた行動だったし、なによりこの勝負はチャンスでもあったからだ。

ジリ貧で、じわじわと追い詰められて潰されるだけ……そんな未来が容易に想像できていた。

「ヒカワ屋」が閉店に追い込まれるのは時間の問題だっただろう。

だからこの勝負は一発逆転を賭けた、起死回生の一打に成りえるものであった。

無論、僕は分の悪い賭けは嫌いだ。

ふふふ、リオは僕を見くびって安請け合いしていたが、僕にだって切り札ぐらいあるのだよ。

「よーし、あの究極のパンを焼くぞー！」

「合点承知でさあ、店長！」

僕の声にトウマ君が江戸ッ子みたいな合いの手で拳を突き上げた。
もしかしたら誰かに影響を受けているのかもしれない。
しかしそこでトウマ君は、僕の手に握られている一枚の書類に視線を奪われる。
目を白黒させて、わなわなと震えだした。

「て、店長、その書類！」
「え、なに？」
「婚姻届ですよ！！」

ＷＨＡＴ？
なにを言っているのだろうトウマ君は、と僕はリオに渡された書類に目を通した。

――婚姻届

ありありと確かに大きな文字で書かれていた。
しかもリオの署名と印鑑が既に押されているじゃないか。後は僕が記入する欄を埋めて役所に出せば、僕がリオの婿になるって寸法さ……。

「はあ」

僕は重い重いため息をついた。
この勝負、本気で負ける訳にはいかなくなった。
まったくあの変態幼馴染は、小さい頃の約束をいまだ律義に守っ

ている。そこに好感はもてるよ。すごくね。でもこれじゃあ僕は被害者みたいなモノじゃないか。

あの約束をしたのは、確か5歳ぐらいのころだったか……

●

それは幼い頃、公園で交わした約束だった。

「大きくなったら、私がリョート君のことをお嫁さんにしてあげる！」

幼い頃のリオはガキ大将という言葉が良く似合う、男勝りの笑顔の可愛い少女だった。

一方、僕は引っ込み思案で女々しい男の子。

リオは僕が他の子に虐められるのを助けてくれるが、代わりに僕を虐めてくる悪ガキだった。

でも嫌いにはならなかった。幼いながらに、それが好意の裏返しだと気づいていたのかもしれない。

結婚……なんて言葉の意味知らなかった僕はきっと満面の笑みで答えていたはずだ。

「うん。僕も大きくなったらリオちゃんのお嫁さんになる！」

「約束よ！」

「うん。嘘ついたら」

「針千本のーます！」

僕とリオは互いの小指を絡ませて約束をした。
確かこの後リオに虐められるのだが、その前にこんな事を彼女は言っていた気がする。

「お金は全部私が稼ぐから、リョート君は家でゆっくりしてていいのよ。私が養ってあげるからね」
「ええー、そんなの嫌だよー」
「なによー、文句あるの！」

激昂するリオに、僕は精一杯の勇気を消費してこう言った。

「だって僕は男の子だもん！」
「なーまーいーきー！」
「いやーー！」

この後公園の端まで追い詰められてズボンを下ろされた記憶がある。
恥辱だね。思い出したくもないや。
しかし結婚ね……実感はわかないけど、リオはその一念だけで若い身空で一流企業に合格してしまった。
それだけ魅力的なのだろう。
だからと言って、勝負に負けるわけにはいかない。
男子たる者、学ならざれば死すとも帰らず。僕だってここで負ける訳にはいかなかった……

●

そんな訳で僕はトウマ君と共に厨房に引っこみ、切り札の焼き上げに成功していた。

「これが　――」

焼き上がった切り札を見てトウマ君が感嘆の声を漏らす。

僕が焼きあげたパンは一見なんの変哲もないパンだ。店頭に普通に並べても他のパンに見劣りし、買ってもらえないかもしれない。それぐらい地味なパンである。

僕は焼きあげたパンを両手で大事に持ち上げた。

これこそ僕の切り札　――

「――これが、じゃパン４４号じゃあ！！」

「店長、口調口調！」

「おっと、いけない」

興奮して、つい方便が出てしまった。

しかしこれで勝負はもらった。特殊な敷石を使い遠赤外線効果で焼き上げたこのパンは、文字通り死ぬ程美味しい。これで勝てる！

例え、リオがどんな美味しいおにぎりを用意して来ても勝てるはずだ。

「よし、行こうトウマ君！」

「はい、店長！」

僕たちはパンを持って、店の外に飛び出した。

既に店の前にはリオが待ち構えており、その手にはランチボックスを持っている。おそらく中におにぎりを詰めているのだろう。

「おーほっほっほ、とうとう年貢の納め時ねリョウト君」

リオが勝ち誇った笑い声を上げる。

「言っておきますけど、私のおにぎりは最強ですからね。もちろん、ちゃんと書類にはサインして来たのよね？」

「……してないよ」

「はぁ？　この愚図、早くペンと印鑑持って来なさいよ。書き方教えてあげるから」

書き方ぐらい知ってますー。知らなくても説明書き見ればいいしね。

リオは無言で睨みつける僕に不満剥き出しであった。

「なによその目。リョウト君のくせに生意気だわ」

「……リオ、僕たちはいつまでも子どもじゃないんだよ」

「知っているわよ。だから私はマオ社に入社したんじゃない。私がリョウト君を養っていけるようにね」

やはり、か。

リオの入社動機はなんとなく察してはいた。しかし明言されると恥ずかしいものがある。子どもの頃の約束を一途に守り続けるなんて健気なのか馬鹿なのか、僕には良く分からない。

しかし、だからこそ、僕はこの勝負に負ける訳にはいかないんだ。

僕だって、男だからね。

「リオ、サインはするよ。君が僕に勝てる事ができたらね」

「……まぁ、いいわ。どうせこの勝負は私の勝ちなんだもの」

そう言うと手元のランチボックスを開封した。

「まずは私の味噌おにぎりから食べてもらうわよ」
「味噌……でもこれは？」
「そう、蟹味噌よ」

ランチボックスの中身は、茶色く香ばしく鼻をくすぐるおにぎりがあった。熱を持っているので蟹味噌を溶いて塗り焼いてあるのだろう。焼く事で香ばしさが増しており、食欲を誘う香りとなっていた。

僕はリオ特製蟹味噌おにぎりを手に取った。

とても美味しそうだ。伊達に若いのに店舗を任されていない、というところだろか。

「いただきます」

リオとトウマ君の視線が交錯する中、僕はおにぎりに口をつけた。

焼いたことで表面はパリッとした触感で、中身はふんわりと軟らかい。良い具合で握られており、口の中で米粒が解けていく。さらにプリッとした触感の具が僕の歯で爆ぜた。こ、これは……海老か！？　しかもおそらく伊勢海老！！　それをマヨネーズで和えて蟹味噌おにぎりの具にしたのか！！

こ、これは――

「うぅぅまぁぁいぃぃぞぉぉぉおおお！！！」

リョウト・ヒカワ、心の叫び。

思わず巨大化して口からビームを発射しそうになった。いや、実際にそんなことはできないのだが、思わずそんなリアクションが出そうになる程にリオのおにぎりは美味しかった。

「お、美味しかったよ……」
「でしょう！」

リオが勝ち誇ったように笑顔を浮かべた。燦々とした太陽のような笑顔。なにもこんな時に見せなくてもいいじゃないか？
僕は今からこの笑顔を打ち砕かなければいけない。

「今度はワシのじゃパンの番じゃ！」
「あらリョウト君。方便出て、田舎っぺぽいわよ」
「うるせえ！」

あんな美味しいおにぎり食べさせられて、料理人としてテンションが上がらないわかけないじゃろが！
パンを振り上げて、叫ぶ。

「リオ！　喰らえ、ワシのじゃパン４４号の味を！」
「受けて立つわ！」

リオはパンを奪い取るとそれを食べた。
もぐもぐと咀嚼し飲み込む。
ごくん……リオからのリアクションはなかった。
それどころか身動ぎ一つしていない。
どういうことだろう？　僕のように、相手の料理の旨さを認めたくなくて「うまい」と言うのを必死に耐えているのだろうか？
しかし１０秒以上待っても声一つあげないのは、人としてどう思う？

「おーい、リオ」
「……」

「リオってば！」

返事がない、ただの変態のようだ。

流石に頭に来た僕は、軽く肩を押してやった。

するとどうだろう。リオは力なく道路に倒れてしまった。

「リ、リオ！？」

そんなに強くしたつもりはなかったのに。謝らなければと彼女を抱き起そうとした。そこで異変に気付いた。

「あれ？　息してないよね？」

「あ、本当ですね。脈もないですよ」

まさかー、確かにじゃパン４４号は死ぬほど美味しいけど、まさか本当に死んだりはしないよね？

しかしリオの胸は上下していない。手の動脈を触っているトウマ君の呟きに、僕の血の気は引いていく。

……ここは冷静になってまずは意識から確認してみよう。

「おーいリオ、聞こえる？　僕、すっごく困った顔しちゃってるんだけどなぁ」

「……」

返答なし。

口元に手をかざしてみる。吐息が手に当たる感触がない。呼吸なし。

自分とリオの首に手を添えてみる。自分はドクドクと脈打っているが、リオにはない。心拍なし。

あれ？

「なーんだ、死んでますね」
「うそおおおおおおおおおおぉぉぉっ！！！？」

トウマ君の一言に僕は腹の底から絶叫した。
どうしてだ！？　どうしてこうなった！？
僕はリオの事を少し疎ましく思っていたかもしれないが、殺したいなんて一度も思ったことはない。
どうしてこんな事態に……いや、落ちつけ！　とにかく今は人工呼吸だ！　心臓マッサージだ！　あと救急車に電話だ、ええーと１１０番だっけ１１９番だっけ！？
いかん、忘れた！
とにかく人工呼吸だ！　と思った瞬間、リオの舐めかましい唇が目に飛び込んでくる。……で、できない！　僕にはできない！　こんな形でキスなんてできないよー、僕のヘタレ！！

「落ち着いてくださいよ店長」

妙に冷静なトウマ君が懐からなにか取り出して来た。
それはＡＥＤ……ではなく、ただの水筒だった。

「こんな時はクスハ汁が一番です。お師匠様たちがいつも持たせてくれるんですよ」
「し、師匠？　クスハ汁？」

意味不明な言葉を吐くトウマ君は、ゆっくりと水筒を開けて中身の液体をコップに注いだ。
テラテラと輝く深緑色の液体……絶対に苦いと分かる、絶対に飲みたくない色だ。
それをトウマ君はリオの鼻を摘まんで無理やり口を開け、乱暴に

流し込んだ。

「ちょっとトウマ君、なにするの！？」

「まぁ、見ててくださいよ店長」

リオの口をクスハ汁が通ってから数秒の沈黙。

だが変化は訪れた。

「ぎゃあああああああああああああああああああっ！！！」

断末魔を上げてリオが跳ね起きたのだ。

リオは口元を押さえて悶えている。トウマ君は「ほらね」と言わんがばかりの得意げな顔を浮かべていたが、対照的にリオは悶絶している。

「ひいいいぃ、苦いよぉ！　助けてリョウト君ッ……あ　――」

「リ、リオ！」

あまりの味に意識を持って行かれたのか、リオの体はまた糸の切れた操り人形のように崩れ落ちる。

僕は慌ててリオの体を受け止めた。

そのときだった。僕の唇とリオの唇が重なってしまったのは。

柔らかい感触、そして苦み。

誰かがキスは蜜の味とかレモンの味とか言っていたけど、あれは嘘だね。

苦い。

それが僕のファーストキスの味だった。

僕は声にならない悲鳴を上げるが、唇が離れたときにはただただ無言となっていた。

「リオ」

返事はない、ただ寝息が聞こえるだけだ。

先ほどと違い力強い心臓の音が触れた体から伝わって来る。よかった、もう安心だ。

「まったく……敵わないや」

手の中で眠る幼馴染の頭を撫でて、僕は呟いた……

結局、今回の勝負はうやむやの内に流れてしまった。

もし審査員がいるのなら、死ぬほど旨い僕のパンの勝ちと断言してくれるかもしれないが、僕はこれでよかったのかなぁとも思っている。

リオが無事だったんだから。

最も、自分で焼いたパンが招いた事態であるのは否めないので、４４号は封印してしまおうと思う。

しかし、今回の勝負に勝てなかった事は「ヒカワ屋」を大きく追い詰めたと言っていいだろう。

――ハッキリ言って経営が火の車なのだ。

だが今回の勝負の噂を耳にして、お得意様の奥様方が戻って来てくれたのは嬉しい出来事だ。

なんとか凌いで行けそうだ。もちろん、今のところは、であるが。

このままマオ社に吸収されてしまう方が楽なのは分かりきっている。

社会と言う荒波の中で生きていく上で、それは必要不可欠なこと

なのかもしれない。
でも僕にだって夢がある。
僕の焼くパンで生計を立てて、大切な人たちを護っていけるようになりたい。
それが僕の夢だ。

「おーほっほっほ、今日から原点に帰って塩むすびキャンペーンをやるわよ！」
「い、いい加減にしろリオー！」

今日も道路を挟んで対面にある「マオ屋」で期間限定キャンペーンが行われている。
塩むすび３個＋お茶で１００円。
暴挙である。
本気で「ヒカワ屋」を潰しにかかって来る店長のリオの笑い声に、僕は思わず苦顔を呈してしまう。

「ああんっ、いいわリョウト君！　その顔よ、もっとその顔を見せて、ハァハァ！」

耳まで真っ赤にして息を荒げている。まるで好物を前にした犬のようである。
「ヒカワ屋」の扉を開けて、トウマ君が飛び出して来た。

「よーし、もう一回勝負だ、この凸娘（デコ）！」
「あ、煽るのは止めてくれトウマ君！」

こうして、騒がしくも平和な僕の日常は過ぎていく。

リオはライバル店の店長で、どうしようもない変態で、幼馴染で腐れ縁なんだけど……客観的事実のみ述べると嫌いになれる要素しかないのだけど……僕は彼女の事が好きだ。

だから、こういう毎日も悪くない、そう思う。

だから今日も僕はパンを焼く。

いつか君にあの紙を渡し、養っていけるぐらいになれるように。

精一杯の思いを込めて、今日も僕 ―― リョウト・ヒカワはパンを焼くのさ。

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。

『エリア』には個性豊かな人間が沢山いる。

今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。

次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない

リョートのパン　～貴方はパン派？　ご飯派？～（後書き）

＜キャラ紹介＞

リョウト・ヒカワ：「ヒカワ屋」店主、高校には通っていない。太陽の手を持つ。リオとは幼馴染で、いつも迷惑をかけられているが実は好き。彼女を養えるようになりたいとパン焼きにいそしむ。

リオ・メイロン：マオ社の社員、高校には通っていない。リョウトの困った顔に興奮する変態で、昔から将来はリョウトを養ってやろうと思っていた。その一念で一流企業に就職、収入はリョウトの３倍。

トウマ・カノウ：「ヒカワ屋」で働く史上最強のフリーター。教導隊で毎日しごかれているためドンドンタフになっていく。クスハ汁愛飲者、臨死体験はもはや数えきれない。

ミナキ・トオミネ：トウマの思い人で、「ヒカワ屋」の看板娘。今回出番少なし。

＜次・回・予・告＞

エクセレン「う・ま・い・ぞーーーー！！！」

キョウスケ「何がだ？」

エクセレン「ああん、そこは突っ込みナッシングよん。ちょっち言ってみたかっただけだから」

キョウスケ「そうか……しかしエクセレン、時に、俺は思うことが

あるのだが」

エクセレン「なになに？」

キョウスケ「グルメアニメだとかマンガの過剰なリアクションはどうにかならんのか？　特にミスター○っ子の爺さまが口から出す光線。あれではＵＭＡだ」

エクセレン「あははっ、そうねー。あれこそ『うますぎＷＡＶＥ！』って感じよねー」

キョウスケ「まあ、いい。言及しても仕方のないことだからな。ちなみに久しぶりの更新だが、作者のパソコンが壊れていたのが主な原因らしいぞ」

エクセレン「大学時代から使ってるノートＰＣらしいから寿命なのかもねん。しかも何回も落下させてるらしいわよ」

キョウスケ「テレビの前（？）の皆はパソコンを大切に扱ってくれ。あとちなみに今回の次回予告はなしだ」

エクセレン「あらら、どうしたの？」

キョウスケ「ネタは何個かあるのだが、どれから書こうか迷っているらしい。予告してしまうとそれを書かなければならないからな。書きたい話が決まったら次回予告を書くかもとのことだ」

エクセレン「まぁ、気の多い作者だこと。じゃーねー、みんなー、また次回で！」

キョウスケ「どんな相手だろうと、打ち貫くのみ！」

三国同盟さん、ｓｉｂｕｇａｋｉさん、暗黒ミカンさん、コンペイトウさん、ヴィーアスさん感想ありがとうございます！
今回は一人称が僕のキャラで書いてみました。
この調子で女性キャラも書いてみたいと思います。
次回はハーケンかアイビスあたりを出してみたいと思っています。
ではでは。

今日のワン子　～アイビス・ダグラスの憂鬱～（前書き）

＜注・意・事・項＞
絶賛、キャラ崩壊中！
プロジェクトＴＤのメンバーのイメージが崩れるのが嫌な方は見ない方がいいかもしれません。
特にフィリオは超元気です。
それでも良いという方はどうぞ。

今日のワン子　～アイビス・ダグラスの憂鬱～

私と彼との出会いは、まだ肌寒い初春の麗らかな日だった。

「ただの人間には興味ありません」

それが彼の初めての台詞。

なぜか高校が密集する地域『エリア』。そこで一番の生徒数を誇るマンモス高校ＯＧ高等学院、通常ジェネ高に私は通っている。

それは私がジェネ高に入学して2年目の春頃だった。

部員の引き抜き合戦を兼ねた部活動の紹介が、ジェネ高の体育館で開かれていた。ジェネ高程の巨大な学校になると同じ名目の部活が多く存在する。それこそ、第１〇〇部、といった具合だ。

入学したての新入生ではそれを把握しきれないという配慮（という建前）から、毎年この時期には体育館では全校の部活の紹介が行われている。

……らしい。

らしい、というのも実はこの取り組み強制参加ではないので、私は去年参加をしていなかった。

……見たかったんだけど、風邪を引いてしまって自宅休養してたんだ。まったく、情けない話だね。

あ、ごめんごめん、話が長くなっちゃったね。

とにかく、私にはその時の彼の台詞がとても印象に残っているんだ。

体育館の壇上で3年の先輩　――　フィリオ・プレスティは眼鏡を整えながら言い放った。

「この中に未来人、超能力者、改造人間がいたら私の元に来なさい！
私の部活、プロジェクトＴＤの末席に加えてあげましょう！！」

キチガイだ。
それもマジキチ、それが私の先輩への第一印象だった。
周囲も同じだったらしく、一様に失笑が漏れていた。
でもそんな冷遇は物ともせず、フィリオ先輩はこう宣言した。

「今なら、特製チーズケーキ食べ放題！」
「私、入る！！」

諸手を上げてプロジェクトＴＤの一員となった私でした。
あ、自己紹介が遅れたね。
私の名前はアイビス・ダグラス。ジェネ高2年、華の女子高生さ。

スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～
今日のワン子　～アイビス・ダグラスの憂鬱～

私の名前はアイビス・ダグラス。大事な事なので2回言いました。
私の容姿を一言で説明するならスレンダー、決してペチャパイなんかじゃないよ。毎日牛乳２Ｌ飲んでるんだけど全然膨らまない…
…もしかして一生このまま成長しないのでは、と不安に駆られる今日頃ごろです。

――　そんな私にも憂鬱の種が一つある。

もちろん胸のことじゃない。
私が入部した部活「プロジェクトＴＤ」のことだ。

「さぁー諸君、今日も張り切って行ってみようか！」
「「おー」」

部長のフィリオ・プレスティの声に２人の女性部員が賛同した。
ちなみに今日は土曜日で学校は休みなので彼女たちは私服だった。
フリフリした可愛らしい服を着ている女性はツグミ・タカクラ、この部活の副部長で。
青いロングヘアーをしたスタイルの良い女性はスレイ・プレスティ、部長の妹さんで部員の一人だった。
一見すると美女、と言ってもいい。
しかしこの部活。フィリオを見てもらえば分かると思うんだけど……常識人なんか存在しないだよね。
さらに補足するとプロジェクトＴＤの活動の多くは野外活動……その理由は。

「諸君、最近この界隈には改造人間が出没するという噂が立っている！」

改造人間の捜索。
それだけではなく、珍しいモノを探索し捕獲することだった。
その対象にはＵＭＡやＵＦＯも当然含まれていて、その捜索に駆りだされることもしばしば。
部長のフィリオ・プレスティは黙っていれば超絶美形なのだが、一度口を開けばマジでキチガイだった。
なにせ自称神様で、興味の対象はＵＦＯなどの未確認飛行物体に始まり、宇宙人・未来人・超能力者・異世界人・改造人間などの異

能力者たちのみ。
これで成績が悪ければただの変態なのだが、学業・武道ともにトップクラスであり体も超健康体で、無遅刻無欠席で皆勤賞を受ける程の優等生なのだ。
アンタは完璧超人か！
そんな突っ込みを私でも入れたくなる程の天才なんだ。
プロジェクトＴＤの最終目的を私は彼に聞いた事がある。そのとき返って来た答えがこれだ。

「なにを言ってるんだアイビス、そんなの宇宙人と交信して友達になることに決まってるじゃないか！」

……うーん、実にキチガイだよね。なんて言うか、発想がぶっ飛んでいる。
補足するとプロジェクトＴＤと言うのは、宇宙人と交信するための超能力者を探す計画なんだって。要するにＴＤ（テレキネシス　ドリーム）ってことだそうだ。

「さあ、二手に分かれて改造人間を探そうじゃないか！」

フィリオがメンバーの指揮を取ると、

「じゃあ私はフィリオと探すわね？」

ツグミがフィリオの腕に抱きつきながら宣言した。豊満な胸が腕に当たって……ああ、なんて破廉恥な！　恥ずかしいから、イチャつくのは余所でやってよツグミー。
折角なので紹介しておこうかと思う。
彼女の名前はツグミ・タカクラ、自称未来人の女の子である。
どの辺りが未来人っぽいのかと質問したことがあるんだけど。

「禁則事項です♪」

と返されてしまったことがある。

おそらくフィリオの気を引く嘘なのだろう。でも私には関係ないや。

私はツグミの作るチーズケーキさえ食べられれば満足なんだ。ぶっちゃっけこの部活に居続ける目的の半分近くはこれのためだし。

「ツグミ、貴様、兄さまから離れろ！」

ツグミの破廉恥に激昂しているのはフィリオの妹、スレイ・プレスティだ。

もはや説明するのも面倒なので察してもらいたい。

スレイは極度のブラコンなんだ。

それも超能力者。残念な事にこれは自称ではないんだよね……。

彼女の能力は、なんと兄に近づく女性に片頭痛を起こさせること！

非常に地味な能力なのだがこれが非常に厄介で、掛け値なしで私の頭痛の種なんだ……別に色目使ってる訳じゃないのに……。

ちなみに巨乳の女性には効果がないらしくツグミには無害。意味ないよね、ホント。

「兄さまも私よりそんな女が良いのですか！？」

「なにを言っているんだいスレイ？　そんなことより早く改造人間を探しに行こう。

なんでも巨大な剣を担いでいるらしいから気をつけるんだよ」

「じゃあねスレイ。アイビスをよろしくー」

「ああ、兄さま！　置いて行かないで、兄さま！！」

泣き崩れるスレイを放置してフィリオたちは立ち去ってしまった。

プロジェクトＴＤのメンバーは４人……必然的に私はスレイとコ

ンビを組むことになる。
でも正直な話をするとスレイのこと苦手なんだよね。
いつも私の事見下してるし、ついこの間なんて「やい屑星。お前はなんの役にも立たないからここから飛び降りて流星になり、皆の願いを叶えてきな」と私を川に掛かった橋から突き落としたし……ぶるる、思い出しただけで寒気がする。
いじめっ子気質なのだ、スレイは。
そして私はどちらかと言うといじめられっ子タイプ……うん、相性は最悪だよね。

「ス、スレイ、行こうか」

でもコンビなので渋々スレイに手を差し伸べる。

「触るな、流星」

これだもの。私の手はあっさり払われてしまった。
チッ、と舌打ちをしながら立ち上がる。なによ、舌打ちしたいのはこっちだよ。

「ああ、兄さま。兄さま兄さま兄さま　――」

スレイはうわ言のように呟きふら付きながら去って行った。
あのブラコン大丈夫かなぁ、転んで怪我しないといいけど。
結局、私は一人残されてしまった。
改造人間捜索を一人でしなければいけないことになる。
ああ……憂鬱だ。

「はぁーあ」

盛大に特大のため息が私の口から洩れた。
プロジェクトＴＤ……それが私の憂鬱の種だ。
……え？　ならさっさと辞めてしまえばいいって？
そうだね。それが賢いやり方なのかもしれない。でもね、私はみんなのことを別に嫌ってる訳じゃないんだ。
フィリオを筆頭にみんなキチガイで、何処かにネジを一本置き忘れて来ているような人たちだけど。
みんなは輝いている。
好きな事があり、好きな事をして生きているからだと思う。

「羨ましいなぁ」

本音が漏れた。あの人たちのようになりたいと思っている自分がそこにいた。キチガイにではなく、輝けるぐらい好きな事を見つけたかった。
今の私にはそれがない。
胸にポッカリ穴が開いたような感覚が私を侵食して行く。

ああ……憂鬱だ。

●

改造人間、そんな人物に当然出会える訳もなく、私はただ無為に「エリア」内を徘徊していた。
やっぱり訂正。徘徊老人みたいで嫌なので、私は「エリア」内を探索し、とある公園の前に差し掛かっていた。

なんの特徴もない公園だ。
歩き疲れてもいたので丁度いいと、私は公園内のブランコに腰かけて休憩を取ることにした。
コンビニで買ったプリンを取り出して食べる。やっぱり疲れてる時には甘いモノだよね。この浸み渡るような甘さ、あぁ、堪んない。顔がにやけてしまう。

「じぃぃぃぃ」

もの凄く見られている擬音が聞こえて来た。
表現などではなく耳に聞こえた方向に目をやると、そこには青い髪をした謎の生物がいた。
全長約２０ｃｍ、明らかに構図のオカシイ2頭身の生物がつぶらな瞳で私を見つめていた。

「そこはゆーさんのせきだにょ」

謎生物が喋った。

「すわりたければたべものよこすにょ」
「な、なにこれ……？　か、可愛い」

黒豆みたいにクリクリした目で私を見つめる謎生物は、口元をω（こんなの）にしてのたまった。

「わたちのなまえはおーちゃむふぉー、このせかいのかみにょ」
「え……か、神様？　貴方が？」
「そうだにょ。たてまつって、うやまうがいいにょ」

なにこれ？

神様を自称するには神々しさが圧倒的に足りない。構成成分は神々しさ５％、愛らしさ９５％と言ったところじゃないだろうか？

でも眺めていると、意味不明な脱力感と愛くるしさに包まれて、思わず頭を撫でてしまいたくなってきた。でもどうしよう？　この謎生物、変な病気とか持ってそうだしなぁ……

そのとき、気の抜ける擬音が私の耳に響いてくる。

ぐうううううぅっ……同時に謎生物の眉が八の字のように下がり、小さな手でお腹を押さえていた。そうだなあ、分かりやすく伝えるなら（こんな）（´・ω・、）顔してショゲてたんだ。

「もしかして……お腹空いてるの？」

「にょー……きょうまだゆーさんこない……チーカマたべたいにょ」

「チ、チーカマ？」

チーズ入りカマボコの略称だね。

チーカマかぁ……さっきコンビニでおやつを一杯買い込んだけど、だいたい甘いモノばっかりなんだよね……そもそも、そんなおっさんの酒の摘みみたいな食べ物を女子高生が買うかっての……って、あれ？　１本だけチーカマ入ってるや？

なんでだっけ？　意味分からないんだけど、なんだか無性に１本食べたくなって買ったんだったっけ。なんでだろう？　まあ、いいか。

「ちっちっち、おいでー、オータムちゃーん」

「にょー？」

私は猫を呼ぶように舌を鳴らしてみた。注意は引けたが、それだけだ。またしょぼーんと地面に視線を落としてしまった。

ふふふ、しかし我に秘策あり。伝家の宝刀、チーカマさ。

私は包装を剥いでチーカマを取り出し、オータムの目の前に差し出した。一瞬で（ムムッ、・ω・´）vと言った顔つきに豹変する。

「く、くれるのかにょ？」
「だーめ、あげなーい」
「にょ、にょー」

表情のコロコロ変わる謎生物だ。いと、可愛ゆし。
今度は再びショゲ顔で今にも涙が流れそうな程落ち込んでいる。
うーん、少し虐めすぎたかな？　私、別にいじめっ子体質じゃないけど、この子見てるとつい弄りたくなるんだよねぇ。
可哀想なので虐めるのは止めて、私は自分の足の上をポンポンと叩いて見せた。ここに登っておいで、と言う意味だ。
するとすぐに察したのかオータムちゃんは私の膝の上に上がって来る。
そして期待に満ちた眼差しで私を見て来た。あぁ、可愛いわぁ。
はいはい、今チーカマ上げましゅからねー。

「はい」
「わーい」

オータムちゃんは本当に嬉しそうな笑顔を浮かべて、ωな口（こんな）を一生懸命動かして一心不乱にチーカマを食べだした。
あぁ、いいなあこの子。お持ち帰りしたいよぉ。でも私のアパートってペット禁止なんだよね。まぁ、大概の貸し住宅がそうなんだろうけど、それぐらい許可してくれもいいと思うけどなぁ。
まぁ、愚痴ってもしょうがないよね。

「じいいいいい」

また擬音で視線を感じたので視線を下げると、オータムちゃんが私をじっと見上げていた。既にチーカマはない。喰うの早ッ！

「おまえ、いいやつだにょ」
「えー、そうかなー？」
「そうだにょ。おれいにひとつだけ、すきなねがいごとをかねてやるにょ」

ん、この謎生物は一体なにを言っているんだろう？
どこかで聞いたようなフレーズだ。球を7つ集めると出て来て、願い事の押し売りをする某爬虫類みたいな感じ。
遊んでるのかなぁ？　うふふ、可愛いなぁ。しょうがないから付き合ってやろうかな。

「じゃあ、胸を大きくしてよ」

困った顔がみたいので無理難題を申しつけてみた。うふふ、またきっとφ（しょぼーんな・ω・、）顔になるぞ。楽しみだ。

「どのぐらいがいいにょ？」
「え、ええと……１００ｃｍくらいかな？」
「わかったにょ」

あれ？　なんだかあっさり受け入れられちゃったな。
可愛らしい困った顔が見れると思ったのに、ちょっぴり残念……
もしかしてこれっていじめっ子の感性なのかな？　私って実はちょっぴりS入っているのかも。
そんな考えを余所にオータムちゃんは私の膝から、ぴょいと跳び下りる。
そしてくるくる回りながら、変な呪文を唱え始めた。

「すぷりんぐーさまーおーたむーうぃんたー」

なんだろうこれ？　子ども特有のごっこ遊びかな？　いやあ、いと可愛ゆし。

しかし、私の微笑は。

「シーズンフォーー！」

「う、うわ！？」

オータムちゃんの詠唱の終了と同時に、小さな体から発せられた光によって遮られた。

うわ、眩し！

目が眩み、思わず手で顔を覆う。

手を退けた時には、特に何事もなくオータムちゃんが私の眼前に佇んでいるだけだった。

ただ一つ、私の体の変化を除いては。

「な、なにこれえええぇっ！？」

お、重い。

体が、とうよりも胸が。視線を下げると、足元を遮る程に巨大化した胸が飛び込んできた。私の胸のサイズって確か〇〇ｃｍだったよね？　履いている靴の先なんて余裕で見る事ができたはずだ。

でも、今は見えない。

肥大化した胸に合わせて着てた服まで大きくなっているし……な、なななななにこれ！　魔法！　もしくは超能力！　これがフィリオの探し求めているＴＤなの！？

私は自分の胸に触ってみる。

軟らかい、本物だ。

「やったあああああっ！！」

ついに念願の「悩殺バディ」を手に入れたよ！　毎日牛乳２Ｌ飲み続けて苦節数年、お父さんお母さん、アイビスはやりました！　もう誰にもペタンコなんて言わせないもんね！

「ありがとう、オータムちゃん！」

「にょ。わたちは『エリア』のかみだにょ」

胡散臭さ１００％だったのに、今聞けば信頼性１００％の文句に聞こえる。人間って勝手だね。立場によって同じ台詞も良いようにも悪いようにも取っちゃうんだから。

でも嬉しいからいいや！

オータムちゃんはこれまた「じぃぃぃぃ」と私を注視してくる。

「こんなのあさめしまえだにょ。おまえはいいやつだから、チーカマくれたらもっとねがいごとかなえてやってもいいにょ」

「え！　本当！？」

オータムちゃんの言葉に、先ほどまで感じていた憂鬱は消し飛んでいた。

これって棚からぼたもちってやつじゃないのかな。

とにかくラッキー！　超レアもの、いや神様ゲットだね！

これはフィリオたちに見せないといけないや。絶対に喜んでくれるはずだ。

私はすぐにフィリオたちに携帯で連絡を取った。どうやら一度ジェネ高の部室に集合しているようだ。

「オータムちゃん。沢山チーカマ食べたくない？」
「たべたいにょ！」
「じゃあ一緒に来て！」
「いいにょ！」

私はオータムちゃんを頭に載せて駆け出した。
自慢じゃないが足には自信がある。陸上部にスカウトされたことがあるぐらいだ。でもそのときにはプロジェクトＴＤに入っていたのでお断りしたんだけどね。
私はプロジェクトＴＤの部室へと疾走した。

●

憂鬱？
もうそんな感情は私の中にありはしない。
だって、最高の相棒を私は手に入れることができたのだから。

「みんなー、お待たせ！」

チーカマを大量に買い込んだ袋を片手に私は部室の扉を開けた。
部室には既にキチガイたちが集合している。中でも一番早く声を上げたのがキチガイ・ザ・グレート（？）ことフィリオ・プレスティだった。なんて、テンション上がり過ぎて失礼な事考えてるね私。

「遅いじゃないか、アイビス」
「ごめんごめん、それよりみんな、なんで急に部室に集合なんかし

たの？」
「ああ。休憩も兼ねて、成果の報告をしようと思ってね」
直後、フィリオは大きなため息をついた。
「まあ、結局、改造人間は見つけられなかったよ。改造人間に破壊された悪の秘密結社跡地が見つかっただけだね」
「でもそれを見つける事ができるなんて、流石は兄さまです！！」
クイーン・オブ・ブラコンが息を荒げながらフィリオを褒め称えている。
ツグミからも発見報告はなかった。
いつものことだ。世にも珍しいものなんて、そう遭遇するものじゃないしね。
「うふふふ」
私を除いてはという意味でついつい微笑が浮かんでしまう。
それを見たツグミは怪訝な顔をしていた。
「なーにアイビス、気持ち悪いわよ　――　ってアイビス！　貴方、その胸いったいどうしたの！？」
「可哀想に……あまりのペチャパイぶりに、とうとうパットを詰めまくってしまったか？　ふん、とことん屑星だな」
「あははは、自分が小さいからって僻まないでよね、スレイ！」
「なんですって！？」
スレイがヒステリックな声を上げて机から立ち上がった。
眉間に皺を寄せて私を睨みつけてくる。ああ、またこのブラコンは超能力を使っているみたいだ。いつもの私なら、ここで片頭痛に

悩まされて許しを乞うていたことだろう。
だが私はアイビスであって先ほどまでのアイビスではない。そう、ハイパーアイビスさ！　……駄目だ、考えた自分で恥ずかしくなってきた。やっぱり普通のアイビスでいいです。
ともかく、ブラコンの超能力は巨乳には通用しないのだ。

「あ、あれ？」

私の胸をパットだと思っているスレイは素っ頓狂な声を上げていた。どうやら１００ｃｍオーバーの私の巨神兵の前には手も足も出ないようだ。
でも認めたくないらしく、眉間に指を置いて集中して念を送って来る。利かないけどね。

「それよりどうしたのアイビス？　そんなにはしたなく膨らんじゃって……」
「はした……って酷いよツグミ……まあ、いいや。ジャーン、実はこの子のおかげなのです！！」

私は頭の上に居るオータムちゃんを持ち上げた。
オータムちゃんがつぶらな瞳で（ｏ（にょー）・ω・ｏ）な顔しながら3人を見つめていた。
ツグミが震える指でオータムちゃんを指しながら呟いた。

「な、なんなのその子？」
「わたちはおーちゃむふぉー。この『エリア』のかみにょ」
「おおー、神様ーー！！」

フィリオが奇声を上げて机から立ち上がった。

「でかしたアイビス！
まさか改造人間ではなく神様を見つけてくるとは、君、やるね！」
「え、えへへ。
しかもオータムちゃんはチーカマあげれば願い事を叶えてくれるんだよ！」
「なんと！　それではさっそく！」

フィリオは私が下げていた袋からチーカマを取り出すと、オータムちゃんに差し出した。

「神様！　私は宇宙人に会いたいです！」
「おやすいごようだにょ」

オータムちゃんは私の手から机の上に跳び下ると、フィリオからチーカマを受け取って一口で食べ、また例のあやしい呪文を唱え始めた。
四季の名前を連ねただけの意味不明な言語の後にまばゆい閃光が部室を包み込む。
輝きが失せた後には人影が一つ、部室内に増えていた。
顔にタトゥーの入れた金髪の男性だった。服装もエリアでは見ないものだ……なんていうか異星人っぽい。

「な、なんだここは！？」
「おおーー、ようこそ星の海の友よぉ！！」

感極まったフィリオがいきなり入れ墨の男性に抱き付いた。
状況の分かっていない入れ墨男性だが、男に抱きつかれるのは嫌らしく引き剥がしにかかる。しかしフィリオの力が強いらしく離れず、苛立った声で叫んでいた。

「離せ、この眼鏡野郎！」
「ワレワレは地球人デース！
友達になりましょう！　お名前を教えてもらっていいですか！？」
「チッ……俺の名はメキボス！　急いでるんだ、離してくれ！」

メキボスと名乗った入れ墨男は、なんとかフィリオを剥がすことに成功しこう言った。

「俺は未開惑星の侵略を企むゼゼーナンを止めなきゃならねえ。
おい、お前ら！　俺のグレイターキン？が何処行ったか知らねえか！？」
「「「知らなーい」」」
「チッ、この役立たずどもめ！！」

メキボスは悪態と罵声を残して、部室から飛び出して行ってしまった。
フィリオが「ああ、マイフレンド！」と名残惜しそうに叫んでいたけど、嫌がっている相手と友達になんてなれる訳がない。
そもそも本人の意思を無視して召喚（？）したのだから、彼にとってはトバッチリもいいところだろうしね。
でもオータムちゃんは凄いなあ。
チーカマ１個で本当に宇宙人を呼び出してしまった。
がっくりと肩を落とすフィリオとは裏腹にツグミの目の色は変わっていた。

「凄い、本当に神様なのね！」
「とうぜんだにょ」
「お願い、私を未来に帰して！」

ツグミが自称未来人を強調したいのか、チーカマを差し出しなが

ら要求していた。
多分、フィリオの気を引きたいんだろうなー。それとも本当なんだろうか？　大変なんだなー、乙女心って。私が様子を眺めていると、

「むりにょ」

オータムちゃんは残酷に宣告した。

「だってあんたみらいじんじゃないにょ？」
「ちょ、シーシー！」
「なにするにょ！」

言ってはいけないことを口走るオータムちゃんの口を急いで塞ぐツグミ。しかしフィリオはメキボスに逃げられて茫然としているので、この会話は聞こえていないようだ。
でもオータムちゃんは凄い！
初対面なのに相手の嘘を見抜くなんて、なんという眼力だろう。
折角だし、私ももう一つお願い事をしようと思う。
チーカマをオータムちゃんに献上して、

「チーズケーキをお腹一杯食べたい！」
「いいにょ、わたちもたべたいにょ！」

閃光が部室を包み、目を開けた時には巨大なチーズケーキが出現していた。
うわーい、チーズケーキだー。今日は死ぬほど食べるぞー。
私とオータムちゃんはチーズケーキに齧り付き、至福の時間を過ごすのだった　――

――なんだかんだで3日が過ぎた。

この3日の間に、私たちはオータムちゃんに願い事をしまくった。
非常に充実した3日間だったと言っておく。
ちなみに願い事は2回や3回じゃない。累計50回は下らない願い事をオータムちゃんに叶えてもらっていた。チーカマ代金がつきそうになったらお金を出してもらって、そのお金でチーカマを買い占めてくる。
永遠に続く幸せのループ。
私はそれを信じて疑わなかった。
私の心に、もう憂鬱なんてないね。
憂鬱なんて、現状に不満を持っている人間だけが味わう感情だもの。
でもね……心になにか引っかかるものがあるんだ……。
このままで、いいのだろうか？
みんなみたいに輝きたい。輝ける程好きなことが……まだ私には見つかっていない。
そう。夢。
なんて言いすぎかもしれないけど、そういうものが私にも欲しい。
あはは、こればっかりはオータムちゃんにお願いできないよね？

でも楽しいからいいや。
そうして3日が過ぎた頃、私がプロジェクトTDの部室を訪れた時だった。
部室に集まったみんなの様子が変だった。

「ど、どうしたのみんな？」
「……あー……アイビスかー」

キチガイのフィリオが気だるそうに答えた。机に突っ伏して面倒くさそうに欠伸をする。それは他の2人も同じで……なんだろう、いつも元気が感じられなかった。
まぁいいか、と私はフィリオに訊いた。

「ねえねえフィリオ、今日は何をするの？　また改造人間の探索？　それとも超能力者？　あ、UMA探すのもいいかもね　――」
「うるさいよ、アイビス」
「――　え？」

フィリオの口から出た言葉を私は信じられなかった。
うるさいよ。
いやまあ、確かに私の訊き方がまくし立て過ぎたのかもしれない……けど、この言葉のニュアンスは違う。そうじゃない。
覇気のないフィリオの言葉の意味は……

「もういいよ……宇宙人も超能力者も改造人間も……どうでもいい」
「フィ、フィリオ……！」

嘘だ！
私の知っているフィリオはこんなこと言う人じゃない。
フィリオはキチガイだ。マジキチだ。自分の好きなものにしか興味がなく、それを探すことに全身全霊を賭ける……でも、だからこそ輝いている、そんな人なんだ。
そのフィリオがこんな事を口走るなんて……一体どうしたんだろう？
良く見ると目にいつもの輝きがない。他の2人もそうだ。キラキ

ラした私の好きな輝きを感じる事が出来ない。
なんていうか濁っている、嫌な目だった。
気味の悪い笑みを浮かべながら、フィリオが言った。

「だって、願い事すればなんでも叶うんだから」
「っ！？」

私は机の上にいるオータムちゃんを見た。
我関せず、チーカマを頬張っている。

「ちょっとオータムちゃん、どういうこと！？」
「どうもこうもないにょ」
「え……？」
「わたちはたのまれたから、ねがいごとをかなえてあげただけにょ」

確かにその通りだ。
オータムちゃんは私たちに言われるがままに、願い事をかなえて来たにすぎない。
その代償はチーカマ……いや、もしかするとそれ以上に大切なモノを彼女に支払っていたのではあるまいか？
生きる気力とか、やる気とか、キラキラと輝くなにかを……。
オータムちゃんは残酷に言い放った。

「そうなったのは、そいちゅらのこころのもんだいにょ」
「そ、そんな……！」

私はツグミに声をかけた。

「ね、ねえツグミは未来人だよね！　フィリオと付き合いたいんだよね！？」

「どーでもいいわよー、そんなことー」
「ス、スレイはフィリオ大好きなんだよね！
当然、それで願い事もしたんでしょう！？」
「うるさいわねー、喋んじゃないわよ流星のくせに……」

やっぱりオカシイ……スレイが、あのスレイまでがこんなに弱々しいなんて！
私を邪険に扱っているが、いつもの覇気がない。生気がない。もうどうにでもなれという雰囲気が全身から滲み出て、目が腐った魚のようだ。
なんで……？
なんでこんなことになったんだろう？
私はただみんなの好きな珍しいモノを見つけたから、みんなに喜んでもらえると思ってオータムちゃんを連れて来ただけなのに……
なんでこんなことに？
……嫌だ！
私の好きなみんなを返してよ！
キチガイで厄介だけど、本当にキラキラと輝いていたみんなを！

「オータムちゃん！　お願い、みんなを元に戻して！」
「むりにょ」

死神のカマのように鋭く、冷徹な言葉が帰って来た。
ム・リ。たった2文字だけどとても重い。どうにもならない、そんな感じ。

「そ、そんなぁ……」

私の責任だ……私がオータムちゃんを連れてきたりするから。
調子に乗って願い事ばかりするからバチが当たったんだ……なに

か欲しいものがあったとしても、そこを他人任せにしたりするからバチが当たったんだ……。

涙で目の前が滲んで見えないや。

どうすればいいのだろう……後悔に暮れていた私に、オータムちゃんが口を開いた。

「あのさんにんだけ、もとにもどすのはむりにょ」

「え……？」

「おまえがてにいれたものも、すてるならもとにはもどせるにょ」

私が手に入れたもの。オータムちゃんに頼んで手に入れたもの。

お金とか成績とか運動神経とか名誉とか……この豊満な胸とか……惜しい、ハッキリ言って捨てるには惜しい。

でも、みんなのためなら投げだせる。

「いらない！　なんにもいらないから、みんなを元に戻して！　これが最後のお願いよ、オータムちゃん！！」

「……おまえはほんとうにいいこだにょ」

食べ掛けだったチーカマを一息に食べきると、オータムちゃんは机の上から飛び降りた。

とても小さい。大きさは私の足程なんだ。その小さな神様は（´・ω・`）顔をして私を見上げながら言う。

「わたちのことはわすれるにょ。ともだちとたのしくくらすといいにょ」

「うん……ありがとう、オータムちゃん」

私の感謝の言葉に、小さな神様は少し寂しげな表情を浮かべていた。

いつもの意味不明な呪文に続いて、視力が奪われそうなくらい激しい光が放たれる。
私は目を瞑り光に呑み込まれて行きながら、ゆっくりと考えていた。
もしかして、私は最初から持っていたんじゃないだろうか？
自分が輝けるぐらい好きな事、いや好きな人たちが私の周りにさ……。
遠のく意識の中でオータムちゃんの声が聞こえてくる ――
「ばいばい、あいびす」
誰だっけ……？　もう分からない。意識は光に包まれ行く ――

●

ジェネ高校舎の屋上にて。
「諸君、今日は未来人探索だぁ！！」
大空にフィリオの声が響き、
「あら未来人ならここにいるじゃない、フィリオ？」
「なら来た年代を教えてくれたまえ！」
「禁則事項です？」
ツグミのお決まりのセリフが聞こえ、

「ほら屑星！　アンタ、ペチャパイの分際でなに兄さまに色目使ってんのよ！
罰としてここから飛び降りて流星になりなさい！！」
「い、色目なんて使ってないよー！」
「嘘おっしゃい！　まるで欲情した犬っころね、このこの！」
「いたたた、頭痛い！　超能力使うの止めてよスレイ！」

私はスレイの能力で片頭痛に悩まされる。
スレイは強靭そうなゴム製の紐を、屋上の手すりと私の体に結び付けていた。
まさか本当に飛ばす気？　嘘だよねスレイ。そんなことされたら、私、意識が飛んじゃう。
いたたた、片頭痛が。止めて、こっち来ないで、お願いだから！
スレイは嗜虐的な笑みを浮かべていた。

「ほーら、星になりなさい！」
「いやあああああああぁっ！！」

スレイに背中を蹴られて、屋上から大バンジージャンプ。
あ、気持ち良い。この浮遊感は爽快だね、空を飛ぶってこんな感じなのかもしれない。
直後の自由落下の恐怖を紛らわせるために現実逃避する私でした。

――私には憂鬱の種がある。

もう説明しなくてもいいでしょう？
これからも付き合って行くのだと思うと頭が痛くなる。
プロジェクトＴＤのメンバーは私、アイビス・ダグラスの憂鬱の

種なんだ。
でもなんで私は笑っているんだろう？
正直、分からない。
……でも、まあ、いいか……今、笑顔でいれるんだから。

「うわあああああぁぁんっ！！！」

まあ次の瞬間には、落下して恐怖で顔が引きつったんだけどね。
今日も私とみんなの日々は続く　――

ここはＯＧ高等学院。
『エリア』にある地域最大のマンモス高校だ。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない。

おまけ

一方、召喚され忘れ去られたメキボスはと言うと……

「チッ、この地域はどうなってやがる！？」

路地裏で悪態を着いていた。

彼は3日間『エリア』を彷徨い続け、外に出る事が叶わないでいる。

「外に出れそうになった途端に、急に意識が無くなりやがる！気づけばまたこの路地裏だし、神隠しにでもあってんのか俺ァ！？くそお、待ってろよゼゼーナン！！　絶対にテメエの所に辿り着いてやるかんな！！」

こうしてメキボスは、諦めずに再度脱出を試みるのだった。

合唱。

今日のワン子　～アイビス・ダグラスの憂鬱～（後書き）

＜キャラ紹介＞

アイビス・ダグラス：ジェネ高2年、夢に夢見る女の子。ジェネ高は比較的胸が大きい人が多いので、1・2を争うペチャパイぶり。いつもスレイに苛められている。でもTDのみんなは好き。

フィリオ・プレスティ：ジェネ高3年、自称神様のプロジェクトTDのキチガイ部長。体は超丈夫な健康体で、成績も優秀。今日も宇宙人などを探して街を捜索する。

ツグミ・タカクラ：ジェネ高2年、プロジェクトTDの副部長。自称未来人で口癖はあのセリフ。フィリオが好きで未来人を気取っている。

スレイ・プレスティ：ジェネ高2年、フィリオの実妹。超ブラコン。実は超能力者、しかし能力はフィリオに近づく女に片頭痛を起こさせること。しかも巨乳には効かない。今日もアイビスを苛める。

オータム・フォー：公園に住むエリアの神様。チーカマ大好き。

＜次・回・予・告＞

エクセレン「ただの人間には興味ありません！」

キョウスケ「……」

エクセレン「この中に、宇宙人、平行世界人、アンドロイドがいたら私の元に来なさい！　お姉さんがぁ、いいことしてあ・げ・る？」

キョウスケ「黙れ人外」

エクセレン「酷ッ！　ちょっとキョウスケー、恋人にそれはないじゃないのー、ぷんぷん」

キョウスケ「黙って聞いていれば調子に乗って……そんな募集では、スパロボでヒットする人材は幾らでも出てきてしまうぞ。その全員にいいことをしてやるのか？」

エクセレン「あらー、キョウスケ、もしかしてヤキモチかしらー？　可愛い？」

キョウスケ「……もういい。次回予告にいくか」

キョウスケ
「俺の名前を言ってみろ！
次回はスパロボじゃないぞ、ムゲフロだ！
あのキザ野郎が緊急参戦、どうなる無限のフロンティア！
次回スパロボ学院、「ここは……無限のフロンティア？」
どんな相手だろうと、打ち貫くのみ！！」

エクセレン「涼宮ハルヒの憂鬱もよろしく！！」

ども作者です。
休日なので調子に乗って明け方まで書いてました。
暗黒ミカンさん、ｓｉｂｕｇａｋｉさん、ヴィーアスさん、平沢唯さん感想ありがとうございます！
とても励みになっています、ありがとう。

オータムですが、キャラのイメージは「にょろーん　ちゅるやさん」のちゅるやさんです。
またネタを思いついたら、アイビスの話を書きたいです。
ではでは。

ここは……無限のフロンティア？　～閉じた地域にいらっしゃーい～（前書き）

＜注・意・事・項＞
絶賛キャラ崩壊中！
テンガロンハットのカウボーイが崩壊しています。
読む方によっては不快感を覚えるかもしれませんので注意してください！
それでも良いという方はどうぞ！

ここは……無限のフロンティア？　～閉じた地域にいらっしゃーい～

俺の名前はハーケン・ブロウニング。

かつて数多（あまた）の世界が入り混じっていた楽園　――　エンドレス・フロンティア。

その世界は例えるならカオス、色は黒だろう。しかし真っ白なキャンパスに絵の具をぶちまけたように混じり合っていた世界でも、自らの世界の輪郭を保つある一定の境界線を持っていた。

その境界線を穿ち、トンネルを作るモノ　――　それがクロスゲート。

クロスゲートを介して様々な世界が交わっていた世界。

それがエンドレス・フロンティアだった。

クロスゲートで結ばれたその世界の壁をぶち壊し、世界を一つにした男。

それが俺、ハーケン・ブロウニングさ。文字通り「世界を創り変えた男」。

ま、他意はない。

惚れた女を護るために行動した結果というだけだ、これがな。

しかし、融合したエンドレス・フロンティアはなにかと不安定でな。

つい最近も、修羅とかいう物騒な戦闘民族が越してきたりして一悶着あったんだが、それはまた別の話だ。

超イケててカッチョいい俺の手にかかれば、あんな奴ら一掃するのは朝飯食うよりも容易い事なのさ。

異世界からの協力者たちも無事に元の世界に戻る事ができたし、万事丸く収まり、めでたしめでたしの大団円。

我ながらいい仕事をしたと思っているぜ。ただ働きなのが惜しいところなのだが……。

「うーむ」

そんなイケメンの俺が、カッコいい声で何故こうやって唸っているのかというとだな。

……なんだお前ら、知りたいのか？

そうか。今なら、オッパイ一回揉ませてくれれば教えてやらん事もない。

なに？　男？

チッ、俺のパーティに男は零児以外いらんぞ。世界を救う救世主の周りは常に華がなければならん。おっと、勘違いするなよ。俺が華で好きなのはユリだけだからな、零児との関係も男の友情という奴で、決してモーホー的な意味では　――

「ハーケンさん」

近くに控えていた超絶巨乳美女　――　ナンブ・カグヤ（漢字は難しいので忘れた）が青筋を立てていた。思考が脱線していることを読まれたか？　カグヤの奴は時々勘がいいから困るぜ。

まあいい紹介も兼ねて、カグヤの容姿を一言で説明してみようと思う。

ザ・おっぱい。

これで十分だろう。あのぎっくり腰鬼と合わせて、俺のパーティーの凸凹コンビである。もちろんオッパイ的な意味でだ。

む？　胸を押さえて、顔を赤らめ始めたな。実にエロくて結構だ、目の保養には持ってこいだぜ。

「ハ、ハーケンさん、卑猥な想像してません？」

「フ、ま・さ・か」

俺は愛用のテンガロンハットを指で弾いて、愛しのカグヤにウィンクをしてやった。

決まった……近年稀に見るカッコよさだ。

「やめろ、キモキザ」

ワーオ、容赦ない毒舌が俺のガラスのハートを砕きに来やがった。

日本刀ばりの切れ味を持つ一言を放ってくれたのは、俺の部下でお付きのアンドロイド、アシェン・ブレイデル。

この全身凶器まみれのスパッツ小娘ロボは、ことあるごとに俺に毒舌を吐いてくる。一応、俺はお前の上司だよ。艦長だよ。その辺分かってる？

「理解したうえで言わしてもらうでありんす」

その前振りを止めろ。

「ウザイ。いい加減本題に入れキザカウボーイ」

「ＯＫ、ポンコツロボ。後で覚えてろ」

まったく、どいつもこいつも年長者への配慮の気持ちを持っていない。あと突っ込みメンバーが足りないな。帰って来てくれ、零児。

閑話休題。

脱線してしまったが、冒頭で俺が唸っていた理由は俺の眼前に広がっている光景にある。

――また、新しい世界が越してきました。

前述した通り、エンドレス・フロンティアは不安定なため、実に節操無く異世界を呼び込み、合体してしまう。

まったく、とんだビッチワールドだな。そうやって修羅たち呼びよせやがって、事後処理に追われた俺たちの身にもなってみろ。堪らないっての。

で、だ。

俺の眼前には、白いドーム状の光で覆われた世界が広がっている。大きさは……そうだな、街一つ分……地域1個分ぐらいだな。普通の転移者は風景が変わった事に驚き、自らエンドレス・フロンティアの探索に乗り出してくるもんだが、この世界の住民は引き籠って一向に出てくる気配がない。

そこで、だ。

中にどんな住民が住んでいるのか気になるじゃん？

友好的なら友達になればいいし、修羅みたいな戦闘民族ならとっとの頭潰して屈服させればいい。

なんにせよ、一度中の探索は必要不可欠だった。

「ハーケンさん、本当にお独りで行かれるのですか？」

「OK、カグヤ。お前が俺を心配してくれるのは分かったが、離れてみて初めて分かる愛ってあると思うぜ」

「キモ」

アシェンの言葉は一々傷つくなぁ……しかしカグヤの心配も最もだろう。

未知の世界に一人で跳びこむのは確かに危険極まりない。しかし俺の異名は「さすらいの賞金稼ぎ」。危険な地に飛び込むのは慣れっこさ。

それに危険を冒して初めて掴める者だってあるんだぜ。
例えば、女の子とかな。
いやあ、自慢じゃないが俺の周りって可愛い子が多いのさ。でもな、正直時々息が詰まるんだよね。たまにはおもっきり自由に、ガールハントしてにゃんにゃんしたりしたい訳さ、これがな。
俺の賞金稼ぎ（エロハンター）としての勘が告げている。
あの中は桃源郷に違いない、と。
ならお邪魔虫を連れていく理由なんてないだろう？

「コール、ゲシュペンスト！！」

俺は天上に手を掲げ、相棒の名前を唱えた。
すると光と共に３ｍ級の黒い巨人、ゲシュペンスト・ファントムが現れる。今までの激戦を潜り抜けて来た俺の相棒、鋼の巨人だ。

「マリオン博士に付けてもらったクロスゲートパラ……なんとかさえあれば、世界の境界なんて余裕で超えられるぜ」
「ハーケンさん……やっぱり私も……」
「ストップだカグヤ」

俺はゲシュペンストに抱きあげられて新世界に突入しようとしたが、カグヤが本当に心配で堪らないと言った弱気な表情を向けて来た。

「愛する者を危険に曝す訳にはいかない」

だってカグヤ着いてきたら桃源郷に行く意味なくなるしー。女の子とにゃんにゃんしてるところ見られたら、絶対に「悪を断つ剣ですッ！！」とか叫んで人切り包丁で斬りかかって来るだろうしー。
いい機会だから教えておいてやる（心の中で）。

世の中には知らない方がいいことだってあるんだぜ。ＯＫかい、オッパイ姫？

「だからここで待っていてくれ」

「ハーケンさん……」

頬を染めて俺に見とれるカグヤとは対照的に。

「キモ、キモ」

アシェンの奴、２回も言いやがった……終いにゃ泣くぞコラ。

とにかく、桃源郷にいざ行かん！

「行くぞ、ゲシュペンスト！」

「……」

物言わぬ相棒はブースターを吹かして飛翔し、新世界　――　光のドームへと突入する。

……そこで俺の意識は途絶えた。

スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～

ここは……無限のフロンティア？　～閉じた地域（エリア）へいらっしゃーい～

「やめろ零児、スパンキングだけは　――　ハッ！？」

次に俺が目を覚ました時、辺りは既にとっぷりと闇に包まれていた。
俺は公園に横たわっており、光源になるものは街頭の電球だけだ。
夜だからだろう、公園には誰もいない。
……それにしても零児の野郎、勝手に人様の夢に出て来たと思ったらケツ引っぱたきやがって……次にあったら覚えていやがれ。
俺は周囲を見渡した。
ゲシュペンストがいない。代わりに黒いバイクが横たわっていた。
「ゲシュペンスト……どこに行った？」
確か一緒に桃源郷に突入したはずだ。
しかしいない……なんだかあのバイクが気になるな。鋭角なフォルムで非常に頑丈そうだし、なんだが雰囲気がゲシュペンストにそっくりだ。
まあいい。取り合えずもう一度召集だ。
俺は夜天高くに手を伸ばして叫ぶ。
「コール、ゲシュペンスト！」
「Ｙｅｓ，Ｍｙ Ｍａｓｔｅｒ」
「ひぃ！」
突如聞こえた機械音声に思わず悲鳴を上げてしまった。
い、いかん、イケメン感が台無しだ。しかしあの声は一体何処から……？
なぜか俺の目の前には横たわっていたはずの黒いバイクが起き上がり、エンジンを吹かせていた。
ハンドルを押さえている訳でもないのに独りでにバランスを取り、倒れない。
まさか……俺はもう一度あの文句を唱える。

「コール、ゲシュペンスト！」
「Ｙｅｓ，Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ」
「……ＯＫ、ゲシュペンスト。理由は不明だが、お前はバイクになっちまったようだな」

どうやら目の前の黒いバイクは、俺の相棒ゲシュペンスト・ファントムで間違いないようだ。
……見知らぬ異世界だからな。多少の不具合が生じても仕方はない……ここから出れば元に戻ることを祈るしかないだろう。

「やれやれだ。しかしこの世界は一体……？」

見た所、エンドレス・フロンティアに多数存在するような奇妙な国々に比べれば、平々凡々とした住宅街しか見えない。生活臭が凄くする、そんな世界だった。
それが俺の感想。そんなとき、

「じぃぃぃぃぃ」

物凄く見られている擬音を感じて、足元を見下ろした。
すると足元に全長２０ｃｍ程で、明らかに２頭身の小人がいた。
なんだこれは？　獣羅か？
とにかく危険かもしれない。
俺は懐に隠した愛用の武器「ナイトファイル」を取り出そうとした。ナイトファウルはブラスティング・ステークにフェイクリッパーを装備した遠近両方に対応できる複合マシンガンだ。今までの戦いを共に潜り抜けて来たもう一つの相棒、それがナイトファウルさ。
俺はナイトファウルを手に謎生物から後ろ飛びで距離を取り、突き付けた。

……しかし、引き金がない。

「あ、あれ？」

しかもブラスティング・ステークもフェイクリッパーもない。
それどころかナイトファウルは手のひら大の小物に変化していた。
……ゲシュペンストに続いて、お前もか？　ん？　なにか書いてあるな。なになに？

『３徳ナイフ　ないとふぁうる』

いかん、頭痛くなってきた。
ナイトファウルが何故ナイフに？　しかも１０徳ですらないよ。

「にょ」
「ちぃ！」

謎生物が声を上げた。
まさかコイツの仕業か!？　くそ、こうなったら切り札の長銃身リボルバーキャノン「ロングトゥーム・スペシャル」で消し炭にしてくれるぜ！
俺はドラ・〇・キッドも真っ青の早さで、懐から「ロングトゥーム・スペシャル」の抜き撃ちを披露した。

――ジッポッ

あれ、擬音がオカシイな？
何時もはドカーンだとかズギャーンとか轟音を響かせてくれるはずなのに……俺は恐る恐る「ロングトゥーム・スペシャル」に目をやった。

銃口からは控え目な火柱が立っている。
銃身が短くなった愛銃にはこう書かれていた。

『拳銃型ジッポライター　ろんぐとぅーむ・すぺしゃる』

「なんじゃ、こりゃあ!?」

お、俺の切り札がライターになってしまった!
予想外だ。なんだこの世界は？　ヤバイんじゃないのか……俺の額を冷たい汗が濡らす。
くそっ、この調子では持ちこんだ回復アイテムの類も役に立ちそうにないな。「またたびエキス」とかただのまたたびになっていそうだ。どうする？　どうやってこの局面を乗り切るハーケン？

「ようこちょ」

俺の危機感を余所に、いつの間にか足元に移動してきた謎生物が言った。

「『エリア』へようこちょ」
「エリア……この世界の名前か？」
「そうだにょ」

なんだこいつは？
俺に気配を感じさせずに近づくとは……相当の使い手のようだな。
しかし殺気も敵意も感じない。
こちらに敵対する意志はなし、か。

「ＯＫだ、チビスケ。１つ質問したい。お前は何者だ？」
「わたちのなまえはおーちゃむ・ふぉー、このせかいのかみにょ！」
「……ＧＯＤ？」

「まーず」

喧(やかま)しい！

零児、すぐに帰って来てくれ！

突っ込みどころが多すぎて俺では対処不能だ。

「……ＯＫ、ゴッドガール。とにかく確認したい。どうしてエンドレス・フロンティアに来た？　そして俺たちに敵対の意志はあるのか？」

「にょ？」

「……俺たちと友好関係を築く気はあるか？」

「にょ？　チーカマくれたらかんがえてもいいにょ」

駄目だ、話にならない。

このオータムとかいう謎生物と語り合うよりも、他の人間を探して情報を収集した方が良さそうだ。

それに、どうやらこの世界の住民は攻撃的ではないようだしな。

俺の住んでいるエンドレス・フロンティアの方が数倍デンジャラスなようだぜ。武器がなくても安心して世界を廻れそうだ。

「ＯＫ、チーカマレディ。所でもう一つ訊きたいのだが、街はどっちだ」

「あっちにょ」

「サンキュー」

俺はテンガロンハットを被り直し、バイクと化してしまったゲシュペンストに跨った。

ふふふ、突然のイベントで忘れかけていたが、俺はこの世界にガールハントをしに来たのだ。この世界の女性が全て謎生物のような２頭身とは考えたくない。きっとバラの様に美しい女性がこの世界

にはいるはずである。
俺の嗅覚を甘く見るなよ。
取り合えずは街、それも酒場だな。ＲＰＧでは情報を収集しつつ、子猫ちゃんを引っ掛けるのにベストな場所だ。

「ゲシュペンスト。ピンクシティに出発だ」
「Ｙｅｓ，Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ」

俺たちは公園を後にし、謎生物のさした方向へ車を走らせた。
公園にはあの謎生物だけが残された訳だ。別にどうだっていいね。
ヾ（＊・ω・）ノ（こんな）。顔した人形みたいな奴。
だから俺は奴の呟きを聞いていなかった。

「もうだしてあげないにょ」

俺たちは闇夜を切り裂いて疾走する　――

●

――　繁華街、その一角にある店に俺は辿り着いた。
赤レンガの壁と黒い扉がいい味を出している。いいね、いい女が居そうな空気がぷんぷん漂ってくるぜ。
店の名前は「シュ・ラ・バー」か。いかにも恋人たちの憩いの場っという感じの名前だ。なんなら超カッコイイ俺が、他人の恋人を奪ってにゃんにゃんしてやってもいい気分だ。

超・解・放・感！

カグヤたちがいないだけでこんなに違うのか。
いいね。男はたまに一人で街に繰り出す必要があるな。夜の街は男にとって正にオアシスと言ってもいいね、断言する。

「ゲシュペンスト、ここで待ってろ」
「Ｙｅｓ，Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ」

お前は、さっきから同じことしか言わんな。前から思っていたがまるで忠犬だぜ。バイク形態の間は忠犬ゲッシー号とでも呼んでみようか？
俺はゲシュペンストを置いて、店内に入る。
扉に付けられた鐘の音が俺を入店を告げ、銀髪のマスターが俺に会釈をして迎え入れてくれた。
店内はうす暗く、滑らかな指使いで演奏するピアノ弾きの女性の姿が目に入って来た。金髪をセミロングに切りそろえた美女であった。
やったね、大当たり！
しかしすぐに手は出さない。
まずは酒と音楽を楽しみ、彼女の伴奏が終了したところで声をかける事にしよう。

「マスター、なんでもいい。おすすめをくれ」
「かしこまりました」

銀髪の美男子。
そう表現するに相応しいマスターがシェイカーでカクテルを作り、俺に差し出してくる。

「X（エックス）・Y（ワイ）・Z（ズィー）でございます」
「もう後がない、ね。洒落た名前だな」
「恐れ入ります」

俺は手にカクテル――X・Y・Zを愉しむことにした。
アルコール度数は20－30％というところだな。しかし俺にはこれくらいが丁度いい。薄い酒など腹が張るだけで他のモノが愉しめなくなるからな。
旨い酒に目の保養になる美女、そして音楽。
いいじゃないか。この世界にわざわざ一人で来たかいがあるというものだ。
しかし俺の幸せな時間に水を注す者がいた。

「レモンねーーさーーん」

聞き覚えのある声だ。
確か最近耳にした事がある……この声の主は赤くてモジャモジャした髪の持ち主だったはず……。

「しくしく、なんでデートすっぽかすんだよー……」
「お前はアクセル・アルマー!?」

俺が座っているのはカウンター。
そのカウンターの俺の隣の席で、机に突っ伏してその男は泣いていた。赤くてモジャモジャ髪の毛が鬱陶しい事この上ない。
だが、一緒に闘った仲間を見間違えたりするものか。
この赤いワカメヘアーの男の名前はアクセル・アルマー……つい先日、修羅の転移に端を発する事件で共に闘った仲間で、異世界から転移してきた協力者だった。
アクセルはあの事件の後、無事に自分の世界に帰ったはずだ。

ということは、ここはアクセルの世界なのか？
俺の声に気付いたアクセルが泣きはらした目を俺に向けてくる。

「誰、あんた？」
「なに……？」

アクセルは俺の事を覚えていないようだった。
……そういえばこの男、エンドレス・フロンティアに来た当初は記憶喪失になっていたな。まさか、元の世界に帰った衝撃でまた記憶が抜け落ちているのか。
ザルみたいな脳味噌の男である。

「ＯＫだ、赤ワカメ。忘れたのなら教えてやる。俺の名前はハーケン・ブロウニング。人は俺の事をこう呼ぶ、『さすらいの賞金稼ぎ』と」
「うわ、キモ。いやキモキザだな」

くぅ……！　アシェンでなく、赤ワカメに言われるとイラつき具合が３倍だ。
しかし、アクセルは自己紹介しても思い出す気配が一切ない。
駄目だなコイツ。アホだ。

「それよりよー、俺っちの話聞いてくれよーキモキザ」

うっ……酒臭い。
アクセルめ相当飲んでいやがる……それより、その呼称で俺を呼ぶな！
俺が怒鳴りつけてやるとアクセルは不快感を露わにし、代わりとばかりにこう言った。

「じゃあキザっちな！」

キザから離れるつもりはないらしい。

まあいい。キモが付かないだけ幾分か改善されている。黙って聞く俺にアクセルは続ける。

「デートの約束してたのによー、レモン姉さんがすっぽかしたんだよー。どう思うキザっちー？　俺は怒ってもいいのよなー？」

「……ああ、そこは怒っていいと思うぞ」

「だよなー。

アルフィミィーちゃんと腕組んで歩いてる所見られたぐらいで、約束してたデートすっぽかす事ねーやんなー」

……返答しかねるな。

アルフィミィ。あの時アクセルとコンビを組んでいた少女か。

ドジめ。２股は男のロマンだが、その関係は決してバレテはいけないのだ。その罪状が表面化した時、男は死よりも辛い地獄絵図の中でのた打ち回ることになる。

もし俺がバレれば、カグヤになます斬りにされるだろう……おお、怖い怖い。

しかし興味深い単語が出て来たな。俺はＸ・Ｙ・Ｚを口に含みながら考える。

レモン……たしかＷナンバーズの　――

「メイシスゥゥゥッ！！」

――　バコーーン！！

「ブフゥ！」

何者かが酒場のドアを蹴り破り侵入して来て、俺は驚いて口の中のモノを噴き出してしまった。

目の前には話を傾聴していたアクセル。
……すまん。でも水分だし、ワカメだから吸って増えるだろう。
なっ？
思いがけず口論が始まりそうだったが、そこは絶叫する青年に注意が行ったので無言の内に流れてしまう。

「好きだあああぁ、メイシス！！」
「ア、アリオン……！　また貴方なの！？」

乱入してきた青年はアリオンというらしい。メイシスというピアニストに人目も憚らずに告白する姿は実に男らしいな。あっぱれだ。
だが、メイシスは俺が目を付けていたので、もしくっ付きそうになったとしても叩きのめしてやろうと思う。
しかしこれは面白い見世物だ。
アクセルはにやにやとイヤらしい笑顔を浮かべながら見物していた。実に気持ち悪い。

「見てくれメイシス！」

アリオンは自身の服を指差した。
スーツを着ている。ピシッと新調されたスーツだ。就活にも使えそうである。

「俺はお前のために修羅を捨てた！」
「修羅？　あいつ修羅なのか？」

聞きなれた単語に俺は思わず反応してしまう。
なにせ、俺の知り合いにも修羅がいるからだ。
アレディ・ナアシュというクソ真面目な修業フェチ、要するにドMだな。修羅というのは「弱肉強食」な生き様を誇りとする戦闘民

族で、エンドレス・フロンティに転移した途端に喧嘩を吹っ掛けてくるような血の気の多い厄介な連中だ。
しかしアリオンからは修羅独特の覇気が感じられない。

「この自由戦士アリオン、君のために自由を捨てた！
今の俺は『マオインダストリー』に務める、企業戦士アリオンだ！」
「ふーん、年収は？」
「月収は１０万だ」
「帰れ！」

アホだな。
１０万という金額がどれだけの価値があるか分からんが、この様子では女１人満足に養える額ではないのだろう。ざまあ見ろ。
……やはり妙だな。覇気がない修羅など存在するのか？
俺は懐からある物を取り出した。それは某漫画の〇カウターのように見える。

「キザっち、なんだそれ？」
「これか？　これはな……」

興味ありと顔を近づけてくるアクセル、ワカメがウザイことこの上なし。

「これは覇気センサーというものだ」
「覇気センサー？」
「うむ。
実績と信頼の覇気センサーことアレディ・ナアシュが作り上げた、修羅でなくても相手の覇気の強さが計れる機械だ」

俺は〇カウターのような覇気センサーを顔に装着する。

オペラグラスのように片目だけ覆うフィルターを通して、俺にもアリオンの覇気が見えた。
揺らぎもしない。
本当に覇気の欠片もなかった。
覇気が数値化されてフィルターに表示される。確か、アレディの覇気力は1万だといっていたから……

「覇気力たったの1、ゴミか」
「好きだあああぁ、メイシス！！」

我慢できなくなったのか、辛抱溜まらんといった形相でアリオンがメイシスに飛びかかった。
しまった！　観戦モードになっていたので出遅れた。このままでは先ににゃんにゃんされてしまうではないか！
仕方ない。この際、ロングトゥーム・スペシャルでアリオンを消し炭にしてやる！

――ジッポ

銃口からささやかな火柱が上がった。
しまった！　ライターになっていたのを忘れていた！
飢えた狼のようにメイシスの胸に飛来するアリオン。やめろ、そのおっぱいは俺の物だ！

「失せなさい！」

だが俺の喪失感を杞憂とばかりにメイシスの平手打ちが炸裂する。
ズバコーン、とアリオンはいとも容易く吹き飛ばされ、酒場の壁に叩きつけられていた……え、なにこの馬鹿力？
あの細腕で大の男が軽々と弾かれた？

おかしい……このメイシスという女はなにかがおかしい。
俺は嫌な予感に駆られて覇気センサーをメイシスに向ける。

「は、覇気力２５万だと！　ええーい、化け物め！！」
「失礼なお客ね！」

可愛らしく怒って見せるメイシスだが、もはや俺は彼女を落とす気にはなれなかった。
覇気力が表示されている。ということは修羅だろ。でもってアレディの覇気力が１万だから……２５倍かぁ。ん？　このセンサー、アレディみたいに相手の性質を見抜いて表示できるみたいだな。
メイシスの覇気の性質は「触ると凍傷」だって。
こりゃあ、駄目だ。にゃんにゃんしたら殺されるな。

「なあなあキザっち、俺っちにも使わせてくれよ」

玩具をせがむガキみたいにアクセルが寄って来る。
髪が鬱陶しい……と、覇気センサーにアクセルのデータが表示された。
覇気力０、性質「エロス」。
アホみたいな笑顔にはまったく覇気がないな。
駄目だコイツ。話にならない。

「メイシスゥゥ！！」
「お、立ったぞ」

アリオンはふら付きながらも起き上がった。大したものだ。
しかし覇気力は０．５なので瀕死なのだろう。もう一度メイシスの掌打を受けると死ぬな、コイツ。
止めておけばいいのに、懲りずにアリオンはメイシスに向かって

いく。

「人はお金故に苦しまねばならぬ　――」

そうか？

エンドレス・フロンティアで金稼ぐ時に苦しむのは、大概ボコられる敵側なんだがな……ん？　覇気センサーに反応が。

数値が上昇して行く。

「――　こんなに苦しいのなら　――」

千……五千……１万、ま、まだまだ上がっているだと！？

空気が震動し、センサーなしでもアリオンの覇気が高まって行くのが分かる。

覇気の高まりと共の彼が着ていたスーツがビリビリと爆ぜていく。

最初は上着、筋肉が盛り上がって行き覇気力は１０万に達した。

次にシャツ、まるで枷を解かれる獣のように覇気力の上昇が止むことはない。

そして最後に……ズボン。

「――　俺はお金など要らぬ！　俺は愛と自由の使者、自由戦士アリオン！！」

「きゃあーーー、この変態！！」

パンツ一丁、かなりフリーダムとなった彼の格好にメイシスが黄色い悲鳴を上げる。

アリオンはふはははは、と高らかに笑いながらメイシスの腰に手を回し、力任せに引き寄せる。

メイシスは小さな悲鳴を上げて、

「離してよ、この変態！！」
「ふはははは、退かぬ、媚びぬ、省みぬ！！
俺は修羅、自由戦士アリオン！！　自由戦士に後退の二文字はない、欲しい者は力づくで手に入れるのだ！！」

抵抗するが、先ほどとは打って変わって彼女の攻撃はアリオンには通用しない。
まるで見た目通りの非力な女性のようだ。
俺が覇気センサーでアリオンを見ると、数値は３５万、性質は「雲」だった。

「その位にしておけ、アリオン」

銀髪のマスターから静かな、しかし強烈な威圧感の籠った声が上がった。
静かに燃えている。
比喩じゃなく、覇気に火が付いて彼の背景は燃えていた。
くっ、こいつも修羅か！　なんだこの酒場は！？　アインスト空間ばりの危険地帯じゃないか！！

「貴様も修羅なら拳で語れ、閃光のアルティス！」
「ならば語ろう」

アルティスと呼ばれた銀髪マスターが拳を構える。
ちなみに数値は３６万、性質は「静かなる巨人」だ。
アリオンもメイシスを離して、構えを取る。一触即発の空気が両者の間に流れたそのとき。

――　ズガアァンッ！！
という轟音と共に壁を破壊して、これまた異様な大男が現れた。

赤い鎧を付けている。

……もう分かってるさ。どうせコイツも修羅なんだろ？

数値は……5、53万だと！？　俺たち(アレディ)の修羅は1万だぞ。なんていうインフレ、まるで宇宙の帝王だ。ちなみに性質は「世紀末覇者」だった。

しかし俺、目立ってないなぁ。やはりカグヤとアシェンがいないと駄目なのかな？

赤い修羅が吼える。

「うぬら、我の店でなにを騒いでおる？」

「「修羅王(オーナー)ナー、アルカイド・ナアシュ！！」」

アリオンとアルティスが同時に叫んでいた。

メイシスの声は聞こえない。と思ったらあのアマ、裏口から逃げ出そうとしてやがる。状況の収集が不可能と判断しやがったな。

「修羅王、例え貴様と言えどメイシスは渡さん！！」

「ほう、面白い。やって見せよ、アリオン！！」

「参る……！！」

メイシスは既に裏口から逃げ出していた。

「よー、キザっち。なんかヤバくね？」

「OKだ、赤ワカメ。危機感の欠如したお前に教えてやろう、これが……修羅場というやつだ」

俺はテンガロンハットを深くかぶり直し、顔に影を作って教えてやった。

どうだ？　顔に影が注すと、重い台詞に聞こえるだろう？　俺は

台詞回しだけでなく喋るスタイルにもこだわる男なのさ。
散り際こそ美しく……
だから、俺は超カッコよく決め台詞決めるのさ。

「地獄で逢おうぜ、友よ」

次の瞬間、3人の修羅が動く。

「魔朧幻千殺(まろうげんせんさつ)！！」
「覇皇魔滅拳(はおうまめつけん)！！」
「奥義(おうぎ)ッ、紅蓮魔炎陣(ぐれんまえんじん)！！」

視界を覆う光。声にならないアクセルの悲鳴。そして俺の意識はそこで途切れた――

●

目が覚めると、俺はゴミ捨て場に横たわっていた。
夜の喧騒も消え失せ、街は静まり返っている。深夜というやつだ。

「くっ、ここは何処だ？　一体何をしている？」

思い出せない。
なぜこんな所で寝ているのか？　そして俺はなにをしていたのか、自分が何処から来たのかも思い出せない……思い出そうとすると体が震えだし止まらなくなる。
辛うじて名前だけは覚えていた。俺の名前は　――

「キザっち！」

――そう、キザっち。って違うわ！　俺の名前はハーケン・ブロウニングだ。
俺をキザっちと呼んだ赤いモジャモジャ頭の男が缶コーヒーを差し出してきた。訳も分からず俺はそれを受け取る。しかしこの男、一体何者だ……

「お前、何者だ？」
「なーにボケてんだよキザっち！　俺の名前はアクセル・アルマー！　なんだったら、極道みたく親父と呼んでもらって構わないぜ！」
「ＯＫ、親父……」

なんだろう、このアクセルと言う男には強烈な親近感を抱く。
ともかく悪い奴じゃなさそうだ。
俺はアクセルに手を引かれて起き上がった。

「じゃあ行くか、キザっち！」
「……？　どこへだ？」
「ああーん、決まってんだろ！　ガールハントだよ！」

ガールハント！
そうだ、思い出したぞ。俺は街にガールハントをしに来たんだった。いかんなぁ、当初の目的を忘れるとは。しっかりせねば。

……あれ？　俺、どこから来たんだっけ？　……まぁ、いいか。
俺とアクセルは夜空に高らかと叫ぶのだった。

「「レッツ、ガールハント！！」」

こうして、俺の毎日が始まった　――

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。
『エリア』には個性豊かな人間が沢山いる。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない

ここは無限（エンドレス）のフロンティア。
白い光の半球を前に、カグヤがぶつぶつと呟き、

「感じます。
きっとハーケンさんはあの中で困っています……いいえ、きっと私を求めているに違いないわ。……でも浮気してたらどうしましょう……そのときはハーケンさんを殺して、私も死ぬわ、うふふふ」
「ヤンデレめ」

アシェンはカグヤに毒を吐いていた。
ハーケンによる新世界への突入。あれから既に1週間が経過していた。

「いくらあのキモキザ艦長とは言え遅すぎる。なにかあったと考えるのが妥当だな」
「そんな、どうしましょうどうしましょうどうしましょう！」
「黙れ」

軽く混乱したカグヤをアシェンは制止する。
そしてしばらく考え込み、一つの結論を導き出した。

「よし、我々も中に突入するぞ」
「は、はい、行きましょう！　ハーケンさんが私を待っています！」
「コール、アーベント！」

アシェンの声に応じて夕日のような赤さを持つ機体が現れた。

「コール、ナハト！」

カグヤの呼び出しによって夜のように青いロボットが出現する。
2人はそれぞれそのロボットに抱かれて、光の半球の中へと突入していった。

……それから、彼女たちの消息を知る者はいない……。

おまけ

一方、「シュ・ラ・バー」前に置き去りにされた忠犬ゲッシー号はというと、

「わーお、いいもん見っけ」

金髪でグラマラスな女性　――　エクセレン・ブロウニングによって拾われていた。

「私の名前はエクセレン・ブロウニング、拾ったモノは私のモノよん♪」

「Ｙｅｓ，Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ」

どうやらゲッシー号が「ブロウニング」という名前だけで、エクセレンをハーケンと誤認したようだ。

「まぁまぁ、お喋りできるのー。お利口さんねー。帰ったらピカピカに磨いて上げますからね？」

「Ｔｈａｎｋ　Ｙｏｕ，Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ」

キザっぽい男より優しい美女の方がいいなあ、と思うゲッシー号であった。

ここは……無限のフロンティア？　～閉じた地域にいらっしゃーい～（後書き）

＜キャラ紹介＞

ハーケン・ブロウニング：みんなご存じカウボーイ姿のキザ野郎。女の子大好き！！　今日もカグヤの目の届かないところで、レッツガールハント！

アクセル・アルマー：影高3年、素手ゴロ最強の異名を取るアホ。女の子大好き！！　今日もレモンとアルフィミィに二股中。

アリオン・ルガダ：修羅。メイシスのことが好きで求婚するために修羅を捨て就職する。しかし自由を感じないと戦闘力激減、逆に自由になればなる程強くなる。最後の砦はパンツ。

メイシス・マルク：女修羅。修羅界の紅一点で、色んな修羅から求婚されているが、アルティス・タールのことが好き。ピアニストをしている。

アルティス・タール：修羅。寡黙だが、内には熱い情熱を秘めた男。メイシスとは幼馴染でじつはメイシスのことが好き。バーのマスターをしている。

アルカイド・ナアシュ：修羅王。バーのオーナーをしている。誰かに雰囲気が似ている。

ナンブ・カグヤ：巨乳。エンドレス・フロンティアの住民。ハーケンとは恋人関係？　ただ彼女はハーケンにゾッコンであり、ややヤンデレ気味。

アシェン・ブレイデル：毒舌。ハーケンのお付きのアンドロイドだが、彼にも容赦なく毒を吐く。下手に近づくと吐かれた毒で再起不能にされるため注意。

オータム・フォー：『エリア』の神様。チーカマ大好き。

＜次・回・予・告＞

エクセレン「さあさあ、寄ってらっしゃい見てらっしゃい！　ハーケン劇場の開幕よーん！」

キョウスケ「そんな訳で次回もムゲフロだ……とりあえずキャラは壊れるので注意しろ」

エクセレン「じゃあ、元気よくいってみよー！」

キョウスケ
「俺のはキョウスケ・ナンブ！
エリアに来てそうそう災難にあったハーケン、しかし彼は諦めない！
女の子とにゃんにゃんするんだ！　その一念で彼はジェネ高に足を運ぶ！
果たしてハーケンはガールハントを成功させられるのか！？
次回、スパロボ学院「そこが……無限のフロンティア？」
どんな相手だろうと、撃ち貫くのみ！」

エクセレン「無限のフロンティアもよろしく！」

今回はムゲフロでお送りいたしました。
作者はムゲフロ未プレイです。ネットでプレイムービーを見ただけなので、キャラの話方に自信がないです。
特にアシェン。ラミアと被って妙に書きにくい。
まあ、作中での毒舌っぷりには舌を巻き程楽しませてもらいましたが。

ｓｉｂｕｇａｋｉさん、ロボッツさん、三国同盟さん、暗黒ミカンさん、ヴィーアスさん、月光閃火さん感想ありがとうございます！
モチベーション上がって楽しく文章書かせて頂いています！
さて次回もムゲフロ回、もっとハーケンとアクセルを絡ませてやりたいです。
ではでは。

そこが……無限のフロンティア？　～気になるアイツはアインスト？～（前書き

＜注・意・事・項＞
絶賛キャラ崩壊中！
ムゲフロキャラのイメージが壊れる可能性があります！
嫌な方は閲覧しないことを推奨しています！
それでも良いという方はどうぞ！

注意：ペットやモノは大切に扱いましょう。ぞんざいに扱うと後でしっぺ返しが来るかも……いやあ、それにしても酷いオチですので注意。

俺の名前はハーケン・ブロウニング。

自分で言うのもアレだが、俺は相当のイケメンだ。
黒いロングコートにテンガロンハット。イケてる俺のファッションはさながら荒野をさすらうガンマンさ。そして俺についた異名は「さすらいの賞金稼ぎ」、どうだ？　ハードボイルド極まるとは思わないか？
そんな俺に落とせない女など存在しない。
超カッコイイ俺のテンガロンハットからの流し眼で、どんな子猫ちゃんのハートでもゲットだぜ。

そんな俺だが。
今、何故か高校の密集する地域『エリア』一のマンモス高校というＯＧ高等学院、通称ジェネ高にいる。
何故かって？
愚問だな、兄弟。
イケメンが高校でやる事なんてただ一つだろう？

「おいキザっち、早く行こうぜ！」
「ＯＫだ、赤ワカメ」

先日知り合ったばかりのアクセル・アルマーが俺を呼ぶ。
ちっ、アクセルめ、しつこくその呼称で俺を呼び続けるな。もう一度言う。俺の名はハーケン・ブロウニング、断じれキザなどではない。

まあいい、俺たちがジェネ高に潜入する理由を説明しよう。

――ガールハント！

それが俺たちの目的である。
英雄色を好むという格言を知っているか？
英雄は女の子が大好きですとカミングアウトした、実に素晴らしい漢の格言である。
なんて言っても俺は「世界を創り変えた男」だからな。英雄と言っても過言では……。
……ん？　なにか思い出しそうになったが……気のせいか。
そういえば俺は何処から来たのだろうな？　まぁ、忘れるくらいなので大したことではないのだろう。
兎も角、ガールハントだ。
それこそ俺が『エリア』に来た目的だったはずだからな。
ならばハントして、アクセルと一緒に子猫ちゃんをダブルにゃんにゃんしている内に思い出すだろう、これがな。

「レッツガールハント」

テンガロンハットを斜に構えた俺の台詞は、間違いなくカッコいいに違いない。
俺たちはジェネ高に潜入した。

スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～
そこが……無限のフロンティア？　～気になるアイツはアインスト？～

ジェネ高は『エリア』一のマンモス高校である、らしい。
何でも中高一貫、さらにエスカレーター式に大学まで進学できるそうだ。大学は分校になっておりジェネ高の敷地内にはないが、そう言ったメリットに加えて授業料はなんと無料らしく、異常な程に周辺住民の進学率が高い。
アクセルの話では、高校だけで１０００人は下らないだろう生徒数を誇るとのことだ。
それはいい。零児の言葉を借りるなら「そいつは重畳」である。
なぜか分かるか、兄弟？
分からないだろうから、まずはガールハントの極意を教えてやろう。
なに？　別にいいだと？
そう言わずに聞いて行け。なんと言っても俺は超イケメン、ハントの成功率は高いんだぜ。

「待ってよー、レオナちゅわーん」
「タスク、付いて来ないで！」

校内に潜入した俺たちの眼前に一組の男女が姿を現した。
男は緑のバンダナをしたイモ野郎だな。
しかし女の方は腰まで伸びるブロンドヘアー、そして端正な顔立ちと、間違いなく美少女だ。
ＯＫ、今日はついているぜハーケン・ブロウニング。
生徒数が多いと言う事はそれだけ美少女が多いということだからな。だから「そいつは重畳」なのさ。ま、美少女率は下がるだろうが人数が多ければ美少女の総数は上がるって寸法だ。
そしてガールハントの極意は「数撃ちゃ当たる」である。
最も、俺程のイケメンになれば成功率は限りなく１００％に近く

なってくるんだがな。女なんて単純なものさ。
俺、ハーケン・ブロウニングが考える、女が男になびく要素とは。
第1に顔。
第2に金。特にこれは実感としてとても大きい。俺の周りの女は守銭奴が多すぎるからな。
ふふ、後は俺の話術で丸めれば校内でにゃんにゃんに持ち込めるだろう。
俺は金髪美少女に声をかけた。

「お嬢さん、俺と一緒に甘い一時を過ごさないかい？」
「イヤー、不審者ですわ！」

あれ？
俺が声をかけた途端に金髪美少女は顔色を変えて、バンダナ子憎を引っ張って逃げて行った……うーむ、オカシイな？
美少女はなぜ走り去ってしまったのだろう？
別に気持ち悪い言葉をかけた訳でもないのに……俺と一緒に歩いていたアクセルが俺に向かって言った。

「おいおいキザっち、なんだよその格好は？」
「……？　俺のお気に入りのコーディネイトだが？」
アクセル、いくらカッコ良いとは褒めてもお前には貸さんぞ」
「そんなダセえ服要らねえよ」

……野郎。言うこと欠いてそれか？　ジェネ高の勝手が分からんので呼び名は大目に見てやっていたが、もう我慢ならん。
俺の超カッコイイファッションの何処がダサいと言うのだ！？

「OK、ワカメ。まずは論理的に行こうじゃないか。俺の服の何処がダサいというんだ？」

「て言うかよー、ダサい以前に、まず浮いてんぜキザっち」

この俺が浮いてる？　この完璧なファッションの何処が浮いているというんだ？

分からん。

しかし俺は周りを見渡してアクセルの言葉の意味を理解した。

「全員同じ服を着ているな」

「そりゃ学校だかんね」

比べて俺は黒いロングコートにテンガロンハット。かなりナイスガイなカウボーイファッションだ。

……うーむ、こういう画一化された服装の世界では、俺のように斬新な格好は異端なのかもしれないな。浮いている、ね。なるほどな、得心した。

御蔭で金髪美少女にも不審者呼ばわりされたのか。

いかん。ジェネ高でこの服装をしていては、ガールハントできる娘にも出来なくなってしまうではないか。

しかしそのとき、金髪でオッドアイの女が、竹刀を振り回しながら迫って来た。

「この不審者め！」

鬼気迫る表情だ。相手に暴力を振るう事に一切の躊躇のない顔に見える。

「そこで待ってな！　タコナグリにしてやるぜ！！」

「やっちまえカチーナ姉さん！」

緑バンダナのイモ野郎が発破をかけていた。

ちっ、目立ち過ぎだ。ここは一度退かねば、悪い意味で記憶に残され指名手配にされてしまう。「賞金稼ぎ」が手配されてちゃ世話ないぜ。

「退くぞ、アクセル！」

「お前のせいだかんな、キザっち！」

カチーナとかいう竹刀女を振り切るため、俺たちは廊下を駆け出した。

●

今日俺は思い知った。女子高生って怖い生き物だということを。

一匹オオカミの俺には理解できん感性だが、どうして女は群れになりたがる？

あのカチーナとかいう竹刀女の後に続いて、どんどん群れなして襲ってくる姿は……なんて言おう、まるでバッファローの群れみたいだったぜ。

こちらの言い分も聞かずに押し通るって感じがまさにそれ。

俺とアクセルはあっという間に校舎外に追いやられ、恐怖の女子高生軍団の目を巻くために逃げまどった……。

……そして辿り着いたのが体育用具用の倉庫なわけだ。

まったく、なんで俺がこんなに目に遭わなければいけないのだ。

俺はただガールハントをしに来ただけだというのに。

とにかく俺は体育用具室で一息をついた。

どうせ追われるなら、ハーケン様ーとか叫んでくれる女子がいい。
ふふ、捕まえてごらん。みたいな感じのやり取りを俺だってしたい。
……空しい。でもこの想像は男のロマンだろう？
人切り包丁を振り回されて追いかけられるより、遥かに男にとって潤いのある展開だと思わないか？
潤いか……いいね、いい言葉だ。
俺も潤いが欲しい……。
……なあ、兄弟？
俺は逃げこむ場所を間違えたのかもしれないな……だって。

「はいアイ君、ご飯ですのよ」
「キシャアアアアアアアッ」

俺の耳にこの世のモノとは思えぬ奇声が届いたんだもの。
はっきり言おう。俺が逃げこんだ場所はただの体育用具室なので、別に普通の空間と言える。
だが中に居た人物が普通かと言われると、否と言い切りたい。
その見覚えのある青髪の少女は、奇妙な植物のような物体に水をあげていたからだ。
ただの水。
しかしそれを、鉢に植えられた３０ｃｍ程度の植物が旨そうに飲んでいるではないか。それこそゴクゴクっといった感じに水分を吸い取る植物はどう見ても生物的である。多数の蔦で形勢された体の中に赤い単眼があり、そこからビームでも撃って来そうな様相を漂わせている、そんな植物だ。
……なんだコイツは？
そんな俺の思考を無視してアクセルが言う。

「あれーアルフィミィーちゃん、こんな所でなにしてるのー？」
「あらアクセルですの？　こんな所までわざわざ何しに来ましたの

？」

謎の植物に水をやっていた少女にアクセルが言った。
青いロングヘアーで、目元に泣き黒子のような赤い水玉のタトゥーが入っている。
む……俺はこの少女と何処かで会った事がある気がする……しかし何処でだろう？　思いだせなかった。
……俺とアクセルの目的を覚えているか、兄弟？
ガールハントさ。俺は子猫ちゃんとにゃんにゃんしたいのだ。

「もちろん、アルフィミィーちゃんに会いに来たのさ。それ以外ないに決まってるだろー」

しかしアクセルはいけしゃあしゃあと答えていた。

「俺はアルフィミィーちゃん一筋なんだな、これが」
「うふふ、アクセルは嬉しい事を言ってくれますですのー」

騙されているぞアルフィミィ。
しかし俺は間延びした声で嬉しそうに答える彼女になにも言う事はできなかった。
だって俺も2股したいもん。
騙す方が悪いんじゃない、騙される方が悪いのさ。
あれ？　なんだか、俺の考え方悪役っぽくないか？　いかんなぁ、昔のパーティーの暗黒成分に染められてしまってるようだぜ。
……パーティ？　……なんだっただろう。俺の周りには性悪ばかり集まっていた気がするのは、きっと気のせいだと思う。
兎に角だ。
アクセルに騙されているアルフィミィは置いといて……彼女が水をやっている植物が気になる。俺はあの植物を見た事があるような

気がする……そう、確か名前は……。

「キシャアアアッ」
「あらアイ君。もうお腹一杯ですの？」
「シャア」
「はい、お粗末様でしたの」

アインスト。
思いだした。名前はアインスト……ただし俺が言っているのはこの植物だけのことではない。確か俺の周りにはこの植物に似た雰囲気を持つ生物がいて、そいつらの総称をアインストと言ったはずだ。

俺がなぜこんな事を知っているのかは覚えていない。
しかし呼び名がアイ君ね……まさかアインストだからアイ君なんて安直な発想じゃああるまいな？

「アイ君、お手ですの」
「キシャア」

アルフィミィの指示にアイ君は応えた。本体から伸ばした蔦で彼女の掌をさすっている姿は、飼い慣らされた犬の「お手」にどこか似ていた。
しかしこのアルフィミィという少女……アインストと会話できるのか？　いや、話が理解できる気になっているだけかもな。ペットを溺愛しすぎた飼い主に見られる悪い兆候だぜ。
ＯＫ、不思議ガール。
この際、君とアイ君の関係はどうでもいい。あと既にアルフィミィはアクセルのお手付きみたいだしな。それにロリータは俺の好みの範疇に含まれていない。
俺はボインちゃんが好きなんだ。

取り合えず今は、ほとぼりが冷めるまで休ませてもらうぜ。

「アルフィミィーちゃん、その子どうしたんだい？」

「……実はこの子捨てペットですの……」

アクセルの質問にアルフィミィは沈んだ声で答える。

「森に捨てられていて、可哀想で見てられませんでしたの……でも私の家はペットは飼えませんの。だから体育用具室で隠れて飼っているんですの……」

アルフィミィは目に涙を浮かべ、アクセルの服を掴みながら上目使いで懇願していた。

「アクセル、お願いですの。私がここでアイ君を飼っていることは誰にも言わないで……ここを追われたらアイ君には行き場がないんですの……」

森で光合成して生きていくだろう。という俺の呟きを余所に、

「当たり前だろ、アルフィミィーちゃん！」

アクセルは満面の笑みで答えていた。

「俺は口の固い男だぜ、これがな！」

「アクセル……ありがとうですの」

アクセルは目尻を拭うアルフィミィの頭を優しくを撫でていた。

その光景は仲の良い兄弟に見えたかもしれないし、長年連れ添った恋人同士にも見えたかもしれない。ただ言えるのは、２人の間に心

を許し合った者同士特有の心地よい空気が流れているということ。
いいね。ガールハントによる行きずりの関係、それもいい。俺は大好きだ。
だが心を許せる相手が傍にいるのも、帰る家はあるようで心地よい。男は船、女は港ってね。正しき男女交際とはこの様にありたいものだ。
……ま、アクセルは二股してるがな。

「OK、ご両人。俺を無視しないでくれ」
「なんだ、居たのかキザっち」

どうして俺の周りの人間は、こうも俺を邪険に扱うのかね？　好意の裏返しにしたって、野郎からでは嬉しくも何ともない。

「OKだ赤ワカメ。お前の言いたいことは良く分かった。だから言っておいてやる。一人だけ抜け駆けして、美少女とにゃんにゃんなどさせんぞ」
「チィ！」

アホが。悪役丸出しの舌打ちしたって許さんぞ。
貴様には俺がにゃんにゃんする相手を見つけるまでは付き合ってもらう。

「アクセル、この方は誰ですの？」

アルフィミィがアクセルに訊いていた。
この少女の面影に俺はどこか見覚えがある……しかし思いだせない。だが相手も知らないのであれば俺の勘違いなのであろう。
嘘偽りなく純粋に俺のことを尋ねるアルフィミィにアクセルが答える。

「こいつはキザっち、ただの不審者さ」
「ＯＫ、アホワカメ。面に出ろ、女子高生の前に突き出してやる」
「冗談だってキザっち。ユーモアさユーモア、分かるだろう、これがな」
純度１００％の本音のくせに、面の皮だけは厚い奴だ。
「それよりもよー、キザっちもこっち来いよ。アイ君、可愛いぜ」
「キシャアア」
「アイ君、アクセルに遊んでもらって喜んでますの」
アクセルは指先でアイ君を撫でていた。
アイ君は本体から触手を数本だして指に絡ませている。あれは…
…もしかしてじゃれているのか？
ハッキリ言おう。
そんな鉢に入った植物か動物か分からない奇妙な生物に、俺は指一本触れたくないね。俺の指は女の子のためにあるのだ。
「そういわずに貴方も触ってみるですの。アイ君、とても軟らかくて気持ちいいですのよ」
「ノーサンキューだ、不思議ガール」
俺はガールハンター、決してモンスターハンターなどではない。
今すぐにでも飛び出してガールハントに勤しみたい。だが機は熟していない。今出ればあの竹刀女率いる女子高生軍団に八つ裂きにされるだろうからな。
まだ時間を潰さねばならない。それも事実である。
「おいおいキザっち、女の子からの誘いを無下にするのかい？」

「そうですの。軟らかくて気持ちいいから、ぜひ触ってみるですの」
「軟らかくて気持ちいい、ね　――　ハッ！？」

そのとき、俺の脳髄を雷鳴が駆け抜けた。
閃いた。
俺は閃いてしまったぞ！　俺の灰色の脳細胞が恐ろしい考えに到達してしまったぞ！
軟らかくて気持ちいい　――　あれだ……そうだ、イメージしろハーケン。
あれはアインストではない。
オッパイだ！

「OK、ボーイアンドガール。そこまで言うなら触らせてもらおうじゃないか？」
「どうぞですの」

俺の言葉に無邪気にアイ君を差し出すアルフィミィ。
俺はアインストを触りたくはない。
だがオッパイなら触れる。
だからアイ君はオッパイだ。うむ、見事な3段論法だ。
軟らかく気持ち良いモノ……すなわちオッパイをイメージすれば、俺でもアイ君に触ることができるだろう。どうせやるなら軟乳だ。
よーし、灰色の脳細胞を総動員して補完してくれる……。
……なんだ、兄弟？
なぜ汚物を見るような目で俺を見ている。
キモキザ？
ふざけるな、俺は最高にカッコいい荒野のガンマンだぜ。
だって仕方ないだろう？　まだ外には出れないし、2人ともアイ君にご執心ときている。ここで触らなければ話題が無くなり話の間が持たん、主に俺がな。

女の子との会話が続かんなど、俺のプライドが許さないぜ。
それにこの気味の悪い生物に触るのだから、これぐらい想像せねばやってられんだろう？

「カモン、アインスト」
「キシャアアアッ」

恐る恐る差し出す俺の指に、アイ君が触手を伸ばして絡みついて来た。

――ムニュウ
「ッ！？」

俺の全身を雷が駆け巡った。
や、軟らかい。
俺の人差し指を数本の触手がらせん状に絡め取り、その1本1本が軟らかい。そして適度な力で締め付けと緩めることを繰り返してくる。まるで生まれたての赤子の頬に挟まれているような感覚……
ああ、これは気持ち良い。
新しい快感だ。

「これは中々だな」
「そうでしょう。アイ君の魅力は誰もを魅了してしまいますの」

アルフィミィは嬉しそう笑っている。
確かに……俺の指先を一生懸命ニギニギしてくるアイ君の行動は愛らしい。
人は外見だが、ペットは外見よりも愛嬌だ。
やや醜悪な外見はしているが、見慣れてしまえば可愛く思えるのかもな。

「でもよかったですの。アイ君をここで飼っているのはずっと秘密で、誰にも話せませんでしたの。秘密を共有する仲間ができたみたいで嬉しいですの」
「おうよ、俺たちは仲間だぜアルフィミィーちゃん！」

アクセルが元気よく叫ぶ。
秘密の共有か……子ども時代を思い出す。昔はよく秘密基地を作ったものだった。悪友たちと結託し知恵と努力で積み上げた城……いつの間にか忘れてしまったその城は今はどうしているのだろう？
……おっと、話がそれてしまったな。
俺が思うに、きっと今アルフィミィが感じている連帯感は、俺が幼い頃に感じたモノと同じなのだろう。心強くて、楽しくて、わくわくする……そんな感じ。いいね、実に良い。
だから秘密という響きは、大人になった今でもこんなに魅力的なのだろう……。

「ＯＫ、赤ワカメに不思議ガール。
俺もこの件に関して絶対に口を割らない。そう、俺たちは仲間さ」
「じゃあさ、今日からアイ君をみんなで育てようぜ！」
「アクセル、それは良いアイデアですの。私も賛成ですの」
「キシャアア」

アクセルの提案にアルフィミィとアイ君が声を同じくする。
……ふっ、冗談じゃないな。俺の目的はガールハント。いつもの俺なら見向きもせずに断るだろう。
だが、まぁ、たまにはこういうのもいいんじゃないか？
今日のガールハントは出鼻を挫かれた訳だし、ハントはまたいつでもできる。今日のところは、新しくできた友人たちと話に華を咲かせるのも悪くない。

「よろしくな、アイ君」
「キシャアアア」
俺はその小さな友人と、触手と指先で握手を交わすのだった。

結局、アルフィミィは授業には戻らなかった。
端から学校をサボっているアクセルも合わせて、俺たちは日がな一日体育用具室で語り合っていた。
いや語り合うなんて高尚すぎるな。
他愛ない話を交わし、笑い、アイ君を愛でてその日は更けていった。
それにしてもアイ君。
慣れてしまえば中々に可愛い。
……などと考える俺の感性は変なのだろうか。
しかし一生懸命に触手で指に絡みつき水をあげれば喜ぶ様は、きっとどのペットにもある良さだと俺は思う。
ちなみに砂糖水をやると大いに喜ぶし、酢を混ぜた水をやると嫌がっていた。
水分でも好みというモノがあるらしい。
そんなこんなしている内に日が暮れて下校時刻となり、俺たちはジェネ高を後にした。
もちろん、明日の放課後に体育用具室に集合する約束をしてな。
ＯＫか、兄弟？
俺は明日ガールハントはしない。
ジュースやら青汁やら変な飲み物をアイ君にやってみて、反応を

楽しみたいと思う。
なーに、ただの気まぐれさ。他意はない。
でもいいだろう？　時にはペットと触れ合うのもいいもんだ。アイ君から伝わって来た感触に俺は不思議と温かさを覚えていたのさ。

翌日、放課後のジェネ高。
俺とアクセルは約束通りに体育用具室へと訪れた。
そこらの店で仕入れた様々な飲料水が俺の持つ袋には詰められている。アイ君がどんな反応を示すのか非常に楽しみだ。
俺が用具室の扉を開けると、

「はいアイ君、ご飯ですのよ」
「キシャアアアアアアアッ」

既視感（デジャヴ）を覚える光景が跳び込んで来た。昨日と同じくアルフィミィがアイ君に餌付けをしている。
そう、おんなじだ兄弟。
手に持たれている液体を除いてな。

「不思議ガール、その手に持っているのはなんだい？」
「あら、いらっしゃいですの。これは　――」

俺とアクセルに気付いたアルフィミィが振り返る。
その手には青い水筒と中身が並々注がれたコップが握られている。
液体の色は緑、しかもテラテラと光っており……なんて言おう。
飲んだら気絶しそうな程に苦そうだった。

俺なら飲むのは御免こうむるね。しかしアルフィミィはそれをアイ君に上げるつもりのようだ。

「――　私のお友達が家庭科の時間に作ったモノを分けて貰ったんですの。栄養満点らしいですの。いつも水ばかりで、アイ君も可哀想ですので分けてもらったんですの」

にこやかに微笑むアルフィミィ。

印象通り優しい子なのだろう。しかし俺の背後に立つアクセルの顔色が変わっていた。

「ア、アルフィミィーちゃん、それはもしかしておっぱい……じゃなくてクスハ・ミズハに貰ったんじゃ……！？」

「そうですわよ」

豹変。

それほどに青白くなったアクセルとは対照的に、アルフィミィは天真爛漫な笑顔であった。御馳走をアイ君に与えられるのが嬉しいのだろう。

アルフィミィはコップの中身をアイ君に注ごうとする。

「はいアイ君、ご飯ですのよ」

「や、止めろー、アルフィミィーちゃん！！」

俺の耳元でアクセルが絶叫する。

喧しい奴だ。耳鳴りがするほどの大声に俺が面喰らっていると。

「ギャアアアアア　――――――――！！！！！」

今度は身の毛がよだつ程の断末魔。

何事だ!?
耳を切り裂いた絶叫の方向を確認する。発生源はアイ君であった。
「ア、アイ君?」
カラーン、と手に持っていたコップを落とすアルフィミィの背中が目に入る。
その影でアイ君は……緑色の液体を被り、体が溶けてしまっており……アイ君だったと思しき物体から白煙が上がり、鉢の上にデロデロになった何かが広がっているという惨状だった。
……WHAT?
状況が理解できない。
俺はテンガロンハットを被り直し状況を整理する。アルフィミィはコップの中身をかけただけ。ただそれだけだ。しかしその後は惨状である。
「クスハ汁だ」
顔面蒼白のアクセルが言った。
「俺っちは蒼髭流格闘術免許皆伝(ソウシリュウ)……自分で言うのもなんだが相当の猛者だ。だがクスハ汁の味は天地を引っくり返すが如し……この俺をも一撃で昇天させる、まさ悪魔の飲料水……それがクスハ汁!」
「OK、アクセル。つまりこう言う事だな?」
俺がアクセルの話を総括する。
「クスハ汁は毒、だと」
「それも猛毒なんだな、これが」

そんなモノ飲んだのか、お前は？
よく無事だったと褒めてやりたい所だったが、意気消沈するアルフィミィを前にそんなことを口走れるはずがない。

「アイ君……ごめんですの」

アルフィミィは崩れ落ち、項垂れている。額が地面に触れそうな勢いだ。小さな体が小刻みに震えている、おそらく泣いているのだろう。

……無理もない。

予知能力者でもこんな展開は予想できないだろうからな。

あの青汁見たいな液体をかけるだけで愛するペットが絶命するとは……誰が想像できようか？　クスハ汁恐るべし。しかしアクセルがクスハ汁を飲み生きているのを見る限りでは後遺症はなさそうだな……案外、人体には無害なのかもしれん。

しかしアインストには文字通り猛毒なのかもしれん。

……不謹慎な話だが、兵器としては非常に魅力的だ。クスハ汁量産の暁にはアインストなどあっという間に全滅だぜ。

だが今、先決なのは……。

「おい。慰めてやれ、アクセル」

「キザっち……分かってるさ、これがな」

俺に背を押され、アクセルは彼女の元に駆け寄る。座り込み、肩を抱いて声をかけていた。

テンガロンハットを深く傾けることで、俺は自身の視界から2人に退場願った。

帽子の羽を見つめながら背を向けて、体育用具室を後にする。

アクセルとアルフィミィ。2人は知らぬ仲ではない。

ならばあの場に俺は似つかわしくない。居るだけ野暮というもの

だ。
俺は顔だけなく気配りもできるいい男なのさ。
外に出た俺が帽子を上げると、日は傾き、空には茜雲が広がっていた。美しいがどこか儚げで物悲しい。茜雲は夕日が沈み切る間の少しの時間しか見る事ができない……儚く、ほんの一瞬で消えてしまう様は……まるで生き物の命のようである。
夕日で赤く染まる雲が、俺にはアイ君の命のように見えて仕方なかった。

「OK、アイ君」

短い時間を一生懸命に生きて燃え尽きた、アイ君の命。
きっと俺も同じなのだろう。
命は線香花火と同じ。パッと燃えて、輝き、やがて落ちる。いつか俺にもその時が来るだろう。

「その時までお別れだ。また会おう」

俺はテンガロンハットを深く被り、それをアイ君への黙祷とした。
さらば友よ。再び、地獄で相まみえる……その時まで ――

「おいキモキザ。それで締めたつもりか？」

黙祷していた俺の耳とハートを、聞き覚えのある毒舌が劈いた。

声は女性のもので、背後から聞こえてくる。

しかし現在俺は黙祷中。これが終わるまで振り返るつもりはない。

逝った友に失礼に当たるからな。

「キモキザ」

振り返らんぞ。

「おい、女たらしの勘違いカウボーイ野郎。まるで不審者のような格好でイキがるな、貴様の居場所はここじゃない。便所だ」

「OK、ポンコツロボ。お出迎え御苦労さん」

ああ、キレそうだ！

この聞き覚えのある毒舌のせいで忘れていたことを思い出したぞ。俺はエンドレス・フロンティアから、この世界のことを調査兼ガールハントに来たんだったな。

記憶のリカバーに貢献してくれたことは礼を言おう。しかし便所はないだろう、便所は。

振り返ると、そこには見慣れた俺のお付きのアンドロイドが立っていた。

彼女の名前はアシェン・無礼です。

……間違えた、アシェン・ブレイデルだ。

「探したぞ艦長。その年で迷子とはな、捜す方の身にもなってみろ。御蔭で便所という便所を探しまわってしまったぞ」

ああ、そうかい。

お前の中での俺の立ち位置がよーく分かったよ。帰ったら調整槽にぶち込んでやるから覚えていろ。

まったく、悪辣（あくらつ）という言葉はコイツのためにあるようなもんだ。

しかし俺を一人で俺を迎えに来たのか？　ナハトやアーベントを連れていない。

「アシェン。他に誰か来ていないのか？」
「残念ながら突入時にバラバラに逸れてしまった」
「そうか……もしやカグヤもか？」
「ああ、牛乳もバラけた」

牛乳、ね……ま、否定はせん。
しかし全員行方不明か。この世界のことはあまり調査出来ていないし、調査ついでに仲間を探す羽目になりそうだな。まぁ、問題はそこではないが。
……チッ、カグヤが来ちゃガールハントは出来んな。まだ1回もにゃんにゃんしていないのに……合流する前にハントするか？
いや、アシェンの奴が黙っているとは考えにくいな……どうする？　アシェンを撒くか？　しかし折角出会った仲間だし――

「おいキザスケ」

うるさい、俺の崇高な思考を邪魔するな。

「ゲシュペンストは何処だ？」
「む……いかん、俺としたことが……」

街の酒場の前に置いて来てしまった。
あの後記憶が不確かだったから、すっかり存在を忘れてしまっていた。ゲシュペンストにはクロスゲートなんたらが装備されているからな、紛失すればこの世界から帰れなくなる。

「無くしたのか、この愚図が」
「……ソーリー」

く……こちらに非がある以上はなにも言い返せん。
まあいい。ゲシュペンストは俺が一声かければすぐに駆けつける忠犬のような奴だから特に問題ないだろう。
「とにかく一度召集しておくか。コール、ゲシュペンスト！」
空に手をかかげてゲシュペンストを呼ぶ。
――シーン
しかし反応はなかった。
「……コール、ゲシュペンスト！」
「……もしや、愛想付かされたのではないか？」
「そんなはずはない。あのゲシュペンストだぞ？」
俺の相棒、物言わぬ黒き巨人――ゲシュペンスト・ファントム。
俺に従うようにプログラミングされた機人は、何時いかなる時も俺に忠実だったはずだ。戦闘時も呼べば颯爽と参上し、敵を八つ裂きにしてくれる頼もしい戦闘兵器だ。
呼べば来る。
それが当然なのだ。
俺が怪我をして歩けなくなった時も、俺が飲み過ぎて帰れなくなった時も、トイレに入ってからペーパーがないと気づいた時も呼べば登場し、俺を助けてくれた。
そういえば……こちらの世界ではバイクに変化していたな。
その影響なのだろうか？
その時である。

「ゴーゴー、ゲッシーちゃん♪　行け行け、ゲッシーちゃん♪」
「Ｙｅｓ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ」

電子音の声を俺の耳に届かせ、そいつは俺の前に現れた。
ゲシュペンストだ。
その名残を残した黒いフォルムでバイク化しており、その座席には俺ではない人間が腰かけて校庭を走っていた。
金髪の外人女性……なんだか、小牟に似ている気がするのは俺だけだろうか？　兎に角、人様のモノを勝手に使うとは不届き千判である。

「おい、あんた。そこでストップだ」
「ハァイ、私の名前はエクセレン・ブロウニング。色男さん、なにか御用？」

正当に俺を評価した金髪女性はエクセレンと言うらしい。

「ＯＫ、エクセレン。そのバイクは俺のモノなんだ。返してくれないか？」
「やぁーよー」

このアマ、即答しやがった。
ちなみに彼女の理屈はこうだ。

「拾った物は私の物、私の物も私の物。だからゲッシーちゃんは私の物よん♪」
「なんだと？」
「それにゲッシーちゃんも私と居る方がいいものねー？」

はっ、この女は一体何を言っている。

ゲシュペンストの思考パターンはＡＩに制御されているのだ。
入力されたプログラムに逆らうはずが　――

「Ｙｅｓ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ」

――　馬鹿な……ああ、頭が痛くなって来た。マスターという言葉が俺を指していると思いたいが、さっきの文脈ではおそらくエクセレンを指している様に感じる。
まったく、この世界に来てからロクなことがないな。
早くエンドレス・フロンティアに帰りたいぜ。

「おい、アシェン。ゲシュペンストの言葉を通訳できるか？」
「合点承知のすけ」

アシェンがゲシュペンストの電子音声を翻訳する。

「Ｓｈｅ　ｉｓ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ，ａｎｄ　Ｗｉｆｅ」
「俺のマスターはエクセレン、そしてエクセレンは俺の嫁」
「ＫＩＭＯＫＩＺＡ，ｇｏ　ｈｏｍｅ！」
「失せろ、キモキザ！」
「ＯＫだ、アシェン。もういい」

……なんてこったい。
ゲシュペンストの野郎、この世界に来た時は寡黙だったのに……
何故、俺と離れてから饒舌になってんの？
しかも寝返ってやがる……俺の周りの機械はポンコツだらけか？

「ゲシュペンスト、どうやらお仕置きが必要なようだな？」
「まぁ、怖い。ゲッシーちゃん、やっちゃいなさいな」
「Ｙｅｓ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ」

ゲシュペンストめ、どうやら俺とやり合うつもりらしい。
バイクになっている分際で生意気な、キツイお灸を据えてやらねばな。

「Ｎｅｕｔｒｏｎ　Ｂｌａｓｔｅｒ，Ｓｔａｎｄ　ｂｙ！」

ゲシュペンストの電子音声と共に、バイクの先端部分にあるヘッドライトに光が収束されていく。
……まさか……アレを使うつもりか！　エンドレス・フロンティアで機人だった時の最強攻撃で、必殺の連撃の締めで使われていたビーム砲。
バイクのくせに生意気な！　そんな攻撃できるはずがない。
しかし俺の思いと裏腹に、ヘッドライトの光は更に強くなっていく。

「ニュートロンブラスターで消し炭にしてやるぜ！」
「もう訳さんでいい！　あのポンコツめ、もう容赦せんぞ！」

チッ、もはや殺られる前に殺れ状態だ。
関係ないエクセレンが巻き添えになろうと知ったことではない。
俺の切り札、長銃身の大出力リボルバーキャノン「ロングトゥーム・スペシャル」で蒸発させてやるぜ！
俺は〇び太もびビックリの早業で銃を抜き放ち、容赦なく引き金を引いた。

――　ジッポッ

銃口から可愛らしい火が灯される。
いかーーん、忘れていた！　俺の切り札はライターになっていた

んだった！
ゲシュペンストの声が聞こえたのはそのときだった。
「Ｇｏ　ｔｏ　Ｈｅｌｌ，ＫＩＭＯＫＩＺＡ！（地獄へ落ちなキモキザ！）」
「ちょま　――」
「何故私まで　――」
ゲシュペンストのヘッドライトから極太の光線が発射される。
俺とアシェンは声を上げたが、巻き込まれた衝撃でかき消された。
――ズギャアアンッ！！
見事な爆音を轟かせて、俺たちは天空高く巻き上げられ、何処かに吹き飛ばれる。
畜生、また爆発オチか？　いい加減、飽き飽きだぜ。
薄れゆく意識の中で思う……今度は何処に落ちるのだろう？
どうせなら、ガールハントできる所がいいな　――

●

My name is Phantom.
I hate KIMOKIZA. Solshooth
im……Do you understand my lan
guage?
……Wait a moment, please.
……（日本語変換中）。
待たせたな。

俺の名前はゲシュペンスト・ファントム。
見ての通り、かなりイケててカッコいいバイクさ。元々は巨大ロボットだったんだが、この世界に来てから何故かバイクになってしまった。理由は分からない。だが俺は自分を取り巻く現状に不満はない。
なぜなら……。

「ワーオ、あの色男さんたち派手に飛んでいったわねえ」

俺の座席に股がる主人 ―― エクセレン・ブロウニングが呟いた。
エクセレンは俺の嫁！
やはりマスターは女性に限るぜ！
前々からあのキモキザの野郎は気に食わなかったからな、今日は胸に仕えた小骨が取れたにみたいにスッとしたぜ。
大体、俺が喋れねえからっていつもこき使いやがって……戦闘に、飲み会の足代わり、さらには小間使い……俺をなんだと思ってやがる？

OKかい？　俺はとっても優しいイケてるバイク、そこに異論は認めない。
だが俺があのキモキザが大嫌いだ。なにより一番許せない理由が、つい最近の出来事ことに起因していると言っても過言ではない。

洗脳されたナハトとアーベントにハッキング掛けさせやがった……あの時、あいつ等のＡＩの中身が俺の中に流れ込んできやがってな……俺は喋れなかったから無言で仕事をこなしたが、正直発狂しそうになったよ。
ナハトはガチホモ、アーベントに至っては女のくせに男同士の絡みが大好きという腐ったＡＩ（のうみそ）の持ち主だからだ。なにが夜と夕方だ、

格好付けた名前しやがって。サブと腐蘭健に改名するといいと思う。
だって同性の相手同士がくんずほぐれず絡み合っている映像がＡＩに流れ込んで来たんだぜ？　ウィルスを送信して奴らの腐ったＡＩを炎上させなかった俺は、とても大人であったと断言するね。

「じゃあゲッシーちゃん、学校も終わったし帰りましょうか？」
「Ｙｅｓ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ（ああ、俺たちの愛の巣へ帰るとしよう）」

エクセレンは俺の嫁、ここに異論は認めんぞ。
今日も帰って体を綺麗に磨いてもらうんだ。ああ、楽しみだ。
……しかしエクセレンは胸が大き過ぎるな。そこだけが俺の不満の種だった。

――やはり女性の胸は控えめに限るぜ！

そのとき、俺のヘッドライトの前を一組の男女が横切る。

「アルフィミィーちゃん、元気出せよ。せめてお墓作ってやろうぜ、これがな」

一人は赤いモジャモジャヘアーの男。男に興味はない。俺の視界から消えろボケ。
だがもう一人の人間に俺は目を奪われた。

「アイ君……安らかに眠るですの……」
「Ｏｈ……！（す、素晴らしい！）」

俺は感嘆の声を上げていた。
ツルッ、ペタッ、ストーンッ。と擬音が響いてきそうな程の素晴

らしい寸胴体型！　アルフィミィと呼ばれた青髪の少女……その外見はまさしくザ・幼女！　彼女こそ、彼女こそ俺の探し求めていた逸材だ！

俺は興奮して、アクセルを全開に吹かしていた。

「Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ！　Ｉ　ｗｉｌｌ　ｋｉｌｌ　ｈｉｍ！（ＯＫ、惚れたぜ！　邪魔者は排除する！）」

「む……なんだ？　グワッ！？」

俺は赤モジャワカメに全速力で突撃をかまし、奴は悲鳴を上げて上空へ吹き飛んだ。そしてキラーンと一番星のように光って見えなくなる。ＯＫ、これで邪魔者はお空のお星様、アルフィミィは俺の物だぜ。

「あらあら、アルフィミィちゃんじゃない。どったの？」

「あ、エクセレンですの……」

全速力の俺から振り落とされずにいたエクセレンが、俺の幼女に訊いた。

「実はカクカクシカジカで、アイ君が死んでしまいましたの」

「まぁ、それは可愛そうね。せめてお墓を作ってあげましょう」

「Ｊｕｓｔ　ａ　ｍｏｍｅｎｔ，ｐｌｅａｓｅ！（ちょっと待ちな！　良いもん出してやるぜ！）」

アルフィミィは俺の嫁！　嫁に涙を流させるなど、男にあってはならない失態だ！

アルフィミィは俺の嫁！　待っていてくれアルフィミィ、すぐに君の涙を止めてみせるよ。

アルフィミィは俺の嫁！　異論は認めん、俺は彼女の涙を止める

ためにエクセレンに指示を出して、俺の座席の中にある収納スペースからあるモノを取り出させた。
そのアイテムの名前は「ソーマ」。
くたばった仲間だろうがゾンビだろうが、問答無用で復活させる超神水さ。

「Ｕｓｅ（遠慮はいらねえ、使いな）」
「これを……使うですの？」
「Ｙｅｓ（そうだ）」

俺の言葉に戸惑いながらも、アルフィミィは「ソーマ」を持っていた鉢にかける。
鉢の上でドロドロに溶けた物体に液体が上乗せされ、さらに混じり合い、もはやアイ君がどれなのか判別不可能になる。
しかし変化は起きた。

「キシャア」
「ア、アイ君……よかったですの」

「ソーマ」と混じり合った物体をかき分けて、下から小さな芽のような植物が顔を出す。既に死亡した以前の体のＤＮＡと「ソーマ」が合体し、死体を養分として新たな命が誕生した……んじゃないか？　原理は良く分からん。とにかく「ソーマ」凄い、それでいいだろう。

「バイクさん、アイ君を助けてくれてありがとうですの」

アルフィミィが俺に礼を言ってくる。
礼には及ばん。俺は男として惚れた女のために行動した、ただそれだけさ。

「まぁまぁ、ゲッシーちゃんたら凄いのねえ」
「本当にありがとうですの」
「キシャアアアッ」
「ＨＡＨＡＨＡＨＡ、ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ！（ＯＫ、嫁ッ子。俺にかかればこの程度朝飯前だぜ！）」

太陽が山の背に隠れようとし、もうすぐ夕暮れ時も終わるだろう。
一瞬の輝きを見せる茜雲はさながら生物の命のようだ。パッと燃えて、そして消える。儚く美しい。
だから命は尊いのだ。
けどな物も大切にしたやらねえと、後で手痛いしっぺ返しがくるんだぜ？
何にせよ、これで万事解決。
とにかくこれで、めでたしめでたしだ。

人気のなくなった校庭に、俺たちの笑い声が木霊する。

ＯＫか、兄弟？　舞台の幕引き（ショーダウン）だ。今日からは俺が主役だからな。
こうしてアルフィミィを籠絡させるため、俺の素敵な毎日が始まったのさ。

ここはＯＧ高等学院。
『エリア』にある地域最大のマンモス高校だ。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない。

＜キャラ紹介＞

ハーケン・ブロウニング：エンドレス・フロンティアからやってきたキザカウボーイ。女の子大好き。でもガールハントが中々できないのが悩み。イケメンなのに性格が全てを台無しにしている好例。

ゲシュペンスト・ファントム：この話の真打ち。元々３ｍクラスの機体だったが、「エリア」に来たらなぜかバイクになっていた。ハーケンに苛立ちが募っていたらしく、今回反旗を翻す。ロリコン。

アクセル・アルマー：影高３年、恐怖の特攻隊長。女の子大好き。ハーケンとはガールハント仲間。レモンとアルフィミィに２股中。

アインスト・アルフィミィ：ジェネ高１年生の不思議っ子。語尾はたいてい「～ですの」。アイ君を体育用具室で飼育していたが……。

アイ君：アルフィミィのペット。アインスト・グリートを小型化したような
外見をしている。弱点はクスハ汁。

エクセレン・ブロウニング：ジェネ高３年、高校生に見えない高校生。今日もアウトぎりぎりのネタが飛ぶ。ゲシュペンストの現マスター。

アシェン・ブレイデル：エンドレス・フロンティアから来たハーケン付きのアンドロイド。非常に毒舌。主人だろうと手心は一切加えないので注意。

＜次・回・予・告＞

エクセレン「ワーオ、エクセレン・ブロウニング、満を持して本編に再登場よん♪」

キョウスケ「……俺は？」

エクセレン「さあ？」

キョウスケ「……グレテやる」

エクセレン「その外見でグレテも可愛げなんか感じないわよん」

キョウスケ「チッ、さっさと予告を済ませて、タスクからカードでの負け分を巻き上げてやる」

キョウスケ
「俺の名前を忘れないでくれ！
たまにはマジメな話を書いちゃうぜ！
テーマは「家族愛？」、スパロボ史上最大級の合体ロボットに乗る奴らが『エリア』にやって来るぜ！
奴らの名前は、そう「俺たちゃヴァルストークファミリー」！
どんな相手だろうと、打ち貫くのみ！！」

エクセレン「無限のフロンティアＥＸＣＥＥＤもよろしく！」

ｓｉｂｕｇａｋｉさん、三国同盟さん、ケルンバイターさん、ヴィーアスさん感想ありがとうございます！
ムゲフロ回はここでいったん終了です。
ネタを思いついたらまたムゲフロ書きます。
次はカグヤあたりですかね？　ヤンデレにしてやりたいと思います。
ではでは、よろしければ次回も読んでみてくださいね。

俺たちゃヴァルストークファミリー　～俺の妹がこんなに可愛いわけがない～

＜注・意・事・項＞
絶賛、キャラ崩壊中！
ヴァルストークファミリーの面々がキャラ崩壊しています。
イメージを崩したくない方は閲覧を避けた方がよいかもしれません。

ちなみに、今回は久しぶりにややマジメな話。
そのせいで文章長めです。

【ヴァルストーク営業日誌　６月１３日】

突然でなんだが、俺の名前はカズマ・アーディガン。

何故か高校の密集する地域「エリア」一のマンモス高校ＯＧ高等学院、通称ジェネ高に通う高校２年生だ。

本当に突然で申し訳ないのだが　――

――　倒産の危機です、お父さん！

……相変わらず、壊滅的なギャグセンスだな、俺。

俺たちヴァルストークファミリーは、「エリア」で運送業を営んでいる運び屋一家だ。

だけど最近営業が苦しくってな……通産３６回目の倒産の危機を迎えていた。

「武士は喰わねど高楊枝！」

これは親父　――　ブレスフィールド・アーディガンの世迷い言なので気にしなくてくれ。

３６回も危機を迎えるあたり親父の経営手腕に疑問を覚えたりするのだが、問題は３６回目の倒産の危機を乗り越えるにはどうすればいいか？　そこに帰決する。

「しゃかきりに働くしかねーじゃん？」

これは次女で俺の姉貴　――　アカネ・アーディガンの言葉である。

いや御尤も。うだうだ考えている暇があったら体を動かせってことだな。チイ姉らしい言葉だし、俺もその方が性に合っている。

ちなみにチイ姉は既に成人しており取得している大型免許を活かして、我が家なけなしの大型トラック　――　ヴァルストーク号の運ちゃんをしている。

またちなみに、長女のシホミ姉さんはヴァルホーク号でナビをしている（悲しい事にカーナビを増設する余裕がないため）。あとホリスは棚卸や配達のため荷台に押し込まれている（人権侵害？）。

またまたちなみに、俺は帰宅後の空いている時間を活用して自転車便として、愛機――　ヴァルホーク号で「エリア」を駆けまわっていた。

ああ高校生なのに、なんて家族思いなんだろうな、俺。褒めてあげたい。

とにかく、３６回目の倒産の危機を乗り切るため、俺たち一家は一丸となって貧乏と戦っているのだ。

……そんな訳で、実家には親父を含めた社会人組はほとんど帰って来ないのが実情である。

「お兄ちゃん、ご飯だよー、まだ日誌書いてるのー？」

「分かったミヒロ、すぐに行くからちょっと待っててくれ！」

居間の方から妹のミヒロ・アーディガンの声が聞こえて来た。

ミヒロは俺たち一家の四女で、１０歳という幼さだが家事全般をこなし、家計の管理を任される程のしっかり者だ。今日もミヒロの節約料理が、食卓で顔をそろえて待っているに違いない。

またまたちなみに、俺が書いているのはヴァルストーク・ファミリーの営業日誌である。

思い出は大切に……それもあるが、日記は昔を振り返る上で非常に有用なモノなので、営業上の失態を忘れないために日々綴るのが俺の役割になっている。

俺は営業日誌を閉じると、ミヒロの待つ居間へと向かった。

しかし……気が重い。

――俺が、顔を合わせたくない奴が居間にいるだろうからだ。

俺が扉を開けると、ソイツの声が嫌でも耳に届いてくる。

「美味しいぃー、流石ミヒロだね！　もう三ツ星料理店なんかより断然美味しいよ！」

「褒めたってお金は増えないよ、アリ姉ちゃん」

猫なで声。

それ以外に表現が思いつかない甘ったるい声で、ソイツはミヒロの料理を褒めちぎっていた。対してミヒロはその言葉に冷静な返し。流石だぜ、俺はこの子の行く末が怖くて仕方ないね。

食卓に既についているソイツ――アリアは、俺の双子の妹である。

ブルーのショートヘアーが目に入って来る。顔立ちも極めて端正であり、人なつっこい声は話していて気持ちがいい。学校でも友人が多い人気者だ。

しかも学業優秀、品性彷徨で教師受けもよく……チッ、俺とは似ても似つかない双子の妹さ。

アリアの不思議な色をした瞳と眼があった。

「チッ……ウザ……来るじゃないわよバカカズマ」

「……はいはい、悪うございましたね、っと」

一瞥しただけで吐き捨てるアリアに、俺は荒くなりそうな声を抑えながら食卓に着く。
そして夕食。
俺たちの間に会話はない。
アリアは一方的にミヒロに話掛けるだけで、俺などこの場に居ないように振る舞うのだ。明朗に笑うアリアは、元気一杯の美少女だ……なのだが、

「……キモ……見てんじゃないわよ」

これである。笑顔をチラ見してただけじゃんかよ……。
俺に対してだけなぜか態度が固い、というか酷い。他の家族とは仲がいいのになぜだろうな？　俺には理解できずに今に至っている。
特に用がなければ無視し合う。
それが俺たちの間にできた不文律（ルール）だった。
……別にいいね、俺もアリアとなんて別に話したくないし……。

だから、このときは思いもしなかったんだ。
俺たちのこれまでの関係を覆す、あんな事件が起ろうなんて……さ。

スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～
俺たちゃヴァルストークファミリー　～俺の妹がこんなに可愛いわけがない～

【ヴァルストーク営業日誌　６月１９日】

「消えろ、バカカズマ」

それが、玄関で鉢合わせたアリアの開口一発目の言葉だった。

俺が自転車便の仕事を終えて帰宅すると、アリアは何処かに出かける直前だったようで、入り口に立つ俺が邪魔だったのだろう。

だから「消えろ」、端的で分かりやすいね。悪意しか感じないぜ。

「チッ……わぁーたよ」

「……」

俺が道を開けてやると、アリアは無言で玄関口から飛び出して行った。

俺に一言もかけないのはいつもの事だ。別にいい。

しかしそのとき肩を俺の体にぶつけてくるサービス付き、どう思うよ？……可愛くねえ！　ホントに頭に来る女だぜ！　と俺は主張したい。

絶対にワザとだな、間違いない。世間の妹様ってのがみんなああだとは思いたくないね。と　――

「ん？　なんだこれ？」

下足場に一冊の本が落ちていた。

「らき☆シス」……なんだこりゃ？　目の中に星が輝いていそうな数人の少女が「私、可愛いでしょ？」みたいな自意識過剰なポージングで、カバーにプリントされていた。

俺は手に取り中身をパラパラと捲って見る。

「な、なんだこりゃあ！？」

俺は目を疑ったね。そりゃあもう、目玉が飛び出しそうになるぐらいには。

――裸の少女が男と絡み合っていた。

……冷静になろうか、カズマ・アーディガン？

これはー、いわゆる一つのエロ本というモノですねえ。

なぜこんな暗黒物質（ダークマター）が家の玄関口に落ちているのだろう？　分からない。理解できないが、こう言った物を俺たち一家の中で一番持っていそうな奴が誰かは分かる。

俺、さ。

俺は１６歳、思春期真っ盛りの雄だ。こう言った書物の数冊ぐらい持っていても不思議ではない。

だから困る。

もし俺以外の誰かに拾われていてみろ……問答無用で魔女裁判に掛けられて、火あぶりの刑にされるところだった。

「お兄ちゃん、帰ったの？」

「うわあああぁぁ！」

絶妙なタイミングで顔をだしたミヒロに、俺の心臓機能は一瞬で臨界点に達した。

あ、危な……まさしく即死トラップ。もう少しで、一家内での俺の立場が崩壊するところだったぜ。

「なんでもないぞミヒロ！　俺、ちょっと日誌書いてくるからな、絶対に部屋に入って来るんじゃないぞ！」

「……？　分かったよ」

こんなミヒロの情操教育によろしくない物は、早々に処分してし

まうに限る。
疑問符を顔に浮かべるミヒロを置いて、俺は急いで自室に掛け込み、取り合えず机に座り日誌を開いた。習慣的な行動なので特に意味はない。

「しかし、一体誰がこんなもんを……？」

俺は手元にある「らき☆シス」に目を落とした。
少女たちがプリントされたカバー……その一角に１８歳未満購入禁止と書かれている。……つまり、これはそう言うモノだ。内容も卑猥だったしな。こんな爆弾を玄関に落とすなんてありえない、何処の俺に恨みを持つ輩の犯行だ？
俺はパラパラと中身を確認し、一瞥すると本を閉じた。
この本の内容を端的に説明するとだな。
前半部分は卑猥な漫画が数十ページに渡って掲載されている。
そして後半部分はエロい挿絵の入った小説となっていた。いわゆる一つの官能小説ってやつか？　俺はもう一度本を開き、その文章を読んでみた。
そして……後悔する。

「ええーと、俺の名前はカズヤ。今日も激萌え妹のミホロたんと合体するために、毎日超絶な特訓に励む超絶イケメンだぜ。そのとき、敵が現れる。ズガアアン、くっ、何者だ？　貴様、俺のミホロたんになにをする　――」

静かに、俺は本を閉じました。
……はぁ、見なきゃよかった。
なにこれ、ヒロインは妹っぽくて官能小説って……近親相姦モノ？　うぇ……吐き気がする。リアルに妹がいる俺にとっては汚物的な書物である。

こんな趣味の悪いもんで俺の目を汚しやがって……誰が落としやがった!?

しかも偶然なんだろうけど主人公とヒロインの名前が、俺とミヒロに似ているし!?

「許せん。俺に即死トラップを仕掛けたのは誰だ?」

シホミ姉ちゃん……は論外だな。じゃあチイ姉……はマッチョ好きだからこんな本は持っていないだろうし、ミヒロが持っていると は思いたくないので除外する。

となると……

「親父か、はたまたホリスか……趣味悪いことしやがって!」

あのバカ親父と影薄キャラめ、今度会ったら鉄拳を喰らわせてやる……しかし、俺の頭に疑問が浮かんだ。

「でも親父たち……最近帰ってきてないよな? ホリスはこの家には来れないし」

前述したように、俺たち一家は３６回目の倒産の危機に見舞われている。

そのため、社会人組は会社に寝泊まりして働いており、最近実家に顔を出したことがないのだ。

親父たちに俺を落とし入れる暇があるだろうか?

ない。ような気が俺はする。

「じゃあ……誰だろう?」

俺は「らき☆シス」を机の上に投げて思った。

残る容疑者はあと一人だ。

「アリア……？　まさかな？」

俺は自分の呟きに苦笑していた。あのクソ生意気な双子の妹が「らき☆シス」など持っていて堪るか！

しかし……有り得ない。有り得ない考えだが、そう仮定すれば説明がつく。

アリアは俺と玄関でブツカッタときにブツを落とした。

仮定さ。でもこれで万事丸く説明がつくだろう？　有り得ない話だけどな。

「お兄ちゃん、ご飯だよー」

「おう、今行く……ん？」

居間から聞こえてくるミヒロの声に返事をして部屋を出ると、玄関口にアリアが居た。

しゃがみ込んでなにかを探している様だ。

いつもの俺なら無視しているのだが、流石に喉に詰まった小骨は大き過ぎた。俺はそれを吐きだす様に声をかける。

「何探してんの？」

「キモッ……勝手に見るなだし、このバカカズマ」

突き出していたお尻を隠して怒るアリア、その様は他人が見れば悶絶ものかもしれないが、俺にとっては何てことない妹の尻だ。反応なんて全然しないぜ。

それなのに妹様はこの言い草……ああ、キレそうだ。

できることなら尻を引っ叩いてやりたいぜ！

「ああ、そうかい」

冷静に対応すると、俺は居間の食卓についた。

ミヒロも、探し物を諦めたのかアリアも同席する。アリアは心なしか元気がないように見える。嫌な事に、この妹の様子が俺の疑問を確信に近づけていく。

……カマを掛けてみるか？

相変わらずミヒロにばかり話かけているアリアに俺は、

「そういえばさー」

ごく自然に独り言を大声で漏らしていた。

「『らき☆シス』って知ってるか？」

「ッ……！」

「お兄ちゃん、なにそれ？」

おいおい、分かりやすい反応だな。

キーワードに触れただけでビクンって肩を震わせてちゃ、私が犯人ですと言っているようなものだぜ。ふふん。さながら俺の気分は名探偵、某ちびっ子名探偵みたく「犯人はお前だ！」と決めてみたい。

しかし俺の体は大人、心も大人……無意味に妹を曝し物にする趣味は別にないし、しても仕方ないと分かっているのでこれ以上の詮索はしないことにする。

反応してきたミヒロに答えてやった。

「いやな、学校のダチが最近ハマってるアニメらしいんだわ。面白いんだったら見てみようと思ってさ」

「ふーん」

「……」

適当な言葉でお茶を濁す俺、純粋に聞き入るミヒロ、無言のままのアリア。

場の空気があまり良くないなぁ……言っておいてなんだが、失言だったかな？

俺は適当に喋って場を持たせると、食事を終えた後すぐに自室に引っこむことにした。

●

「どうしたもんかな？」

俺は自室に置いた「らき☆シス」を見下ろしながら考えた。

この本の持ち主はアリアだろう。それはおそらく間違いのない事実……そう思わせるに十分な反応を俺の妹は示してくれた。

有り得ない……と思っていたことが実は事実だった。

なんて、俺は信じたくはない。

だってあのアリアだぜ……いつも、俺に対してゴミを見るような態度で臨んでくるクソ妹が、実は妹モノの官能小説が好きでしたなんて……信じられるか？

――だから俺はトラップを仕掛けることにした。

もしアリアが星なら即死級のトラップだ。

俺がこんな状況に陥ったと仮定して、まず何をするか考えて仕掛

けるからな。
黒ならまず間違いなく物的証拠を処分にしにかかるだろう？
俺だってそうする。アリアだってそうするはずだ。
だから俺は廊下で大声を張り上げたんだ。

「おーいミヒロ、ちょっと親父に頼みごとされたからさー、自転車便で届けモノしてくらあ！！」
「はーい、あんまり遅くならないでねお兄ちゃん！」

ああミヒロ、お前はアリアと違って本当に優しいな。
そんな訳で俺は「らき☆シス」を懐に収めたまま実家の外に出た。
俺が自転車便で配達に出た場合、大体の1時間ぐらいが所要時間だ。なにせ物を本社に取りに行って、そこから運ばなければならないからな。迷えばさらに時間がかかるって寸法さ。
……家主が1時間近く帰って来ないと分かったら、あんたならどうする？
俺なら証拠品を処分するね。

「おいおい、マジかよ……？」

実家のすぐ傍で待機していた俺の目に、実家の俺の部屋に電気が灯される光景が飛びこんで来た。
俺は家を出る前に電気を消して来た。エコロジーだろう？
だがそんな俺の前で自室には光が煌々と照らされている。

「……ミヒロが掃除しているだけでありますように」

祈りながら、俺は極力音を立てぬように家に帰り、そして自室の前にまで辿り着いた。
真っ暗な廊下だから分かる。俺の部屋には電気がついている。光

が扉の隙間から漏れているのだ。
　要するに俺は電源を切って行ったから、中に誰か居るってことに他ならない。
　俺は意を決して扉を開ける、
「おい、俺の部屋でなにやってんだ？」
「ッ！？」
　と侵入者が体を跳ね上げる勢いで驚いていた。
　侵入者の名前はアリア……俺の双子の妹だ。部屋はアリアによって滅茶苦茶に荒らされている。俺の机は元より、ベッドのメイキングや俺が苦労して集めた○ャンプコミックまで床に放り出されていた。
　やりたい放題である。最も、俺が帰って来るまでに整理するつもりだったのだろう、アリアは信じられないと言った表情を浮かべていた。
「なっ……な、ななな、なんでアンタがここに居るのよ！？」
「なんでってな……ここは俺の部屋だし」
　俺の理屈は正当だろう？。
　しかし妹よ、いくら取り乱しているからって兄の部屋を家探しするか、普通？　しかもお前が手にかけようとしているベット下のスペースは、俺のコレクションたちが眠っているワンダーゾーンだぜ？　それ以上手を引っ張ることは許さんぞ。
　錯乱しかけの妹に、俺は懐から取り出した物を見せつけてやった。
「らき☆シス」だ。
「お前の探している物はこれか？」
「返せぇ！！」

アリアが飛びかかって来た。
滅殺！　そんな勢いだったが、俺はアリアの突撃をあっさり躱す。
勢い余ったアリアは廊下の壁にしこたま額をぶつけていたが、親の仇みたいな形相で俺を睨みつけてきた。

「なんで……なんでアンタがそれを持ってんのよ……！」
「玄関で拾った」
「この変態！！」

まったく、酷い言い草だぜ。
拾ったのが俺だったのを感謝してもらいたいね。
そもそも俺はアリアに興味はないし、コイツがどんな趣味持っていようが知らないね。
それに趣味なんて個々人それぞれと言っていいし、それを否定しようとは俺は思わない。他人の趣味を否定してまで示せる程高尚な趣味が俺にある訳じゃないしな。
お前はお前の好きにしろ。
それが俺の率直な思いである。

「ほら」
「え？」

「らき☆シス」を差し出した俺にアリアが素っ頓狂な声を上げる。

「玄関で拾ったんだ。でも俺は心当たりがない。お前持ち主を知らないか？　知っていたら返して欲しいんだけどよ」
「え、ええ……知ってるわよ。それは友達があたしに貸してくれた物だから……」

１８禁の漫画つき小説を貸すような友達がいてたまるか！　……いや世の中は広いから実際に居るのかもしれないけどよ、少なくとも俺の周りには居やしないね。

「じゃあな、頼んだぞ」

「う……うん」

「らき☆シス」をアリアに渡した俺は家の外に出ることにした。

ここに居ても妹が居づらいだけだろうし、追い出しても荒れた部屋を直さなければならない。この場に俺が居ない方がアリアも部屋を片付けてくれるだろう、淡い期待を胸に俺は自転車を漕いで近くのコンビニに向かった。

今日は○ャンプの発売日だったのを忘れていた。金魂さんはどうなっているだろうか？

灯りの付いた自室を背に俺はコンビニに向かうのだった。

１時間ほど立ち読みした後、俺は自宅への帰路に着いた。

それにしても今週の金魂さんの展開は驚きだった。まさか辛い物大好きの金さんが超甘党に変身してしまうとは思わなかった。いやぁ、次回も楽しみだ。

「ただいまぁっと」

真っ暗な玄関で定型文を口にする俺だが返事は返って来ない。

ミヒロはお子様だからもう寝てしまったのだろうし、アリアが俺を迎え入れてくれる訳がないからな。別にいい、気にしちゃいない。

俺はさっさと自室へ足を運んだ。

しかしそこで思いがけない人物が俺を待ち受けていた。

「チッ……なにしてんだよ？」
「……」

アリアである。
あのクソ生意気な妹様が、まるで弁慶の立ち往生みたく部屋の扉の前に立ちふさがっているのだ。
はっきり言って邪魔だ。メッチャ邪魔だ。部屋に入れないではないか、俺が。

「……ねぇ……のってよ」
「あん？」

顔をうつ向けがちにアリアがなにか言っていたが、声が小さくてよく聞こえないので俺には理解できない。
俺の様子に苛立ちでも覚えたのか、今度は大きな声で叫んでくる。

「だからー、人生相談に乗ってって言ってるのよ！」
「わ、馬鹿！　ミヒロが起きちまうだろうが！」

俺は慌ててアリアの口を塞いだ。なに逆ギレしてんだ、この妹様はよ？

「分かったからとにかく落ち付け。人生相談だろうが何だろうが乗ってやるから、な……？」
「……うん」
「落ち着いたら部屋に入るぞ、ここじゃ話もできやしねえ」

俺が自室の扉を開けようとすると、

「あっ」

とアリアが小さな悲鳴を漏らした。

なに？　嫌な予感しかしないんだけど……扉を開けた俺の目に飛び込んで来たのは、見るも無残に荒らされたままの自室であった。

……このアマ、掃除してねえ。

家探ししたらばれない様に片づけるのが世間のマナーだろ？　しかしこの妹様が掃除をしている所を俺はついぞ見た事がない。もしかしたら掃除できないのかもしれないな。

茫然としている俺の袖を、アリアが引っ張った。

「ねえ……私の部屋……行こ」

「お、おう」

途切れがちな台詞に俺は思わずドキマギしてしまっていた。……妹なのに、軽くショックだ。しかしアリア、俺以外にその言葉を口にするなよ。相手が勘違いして押し倒されても知らんからな。

暗がりで良く分からんが、アリアの顔は上気しているような気がする。

それにしてもアリアの部屋か……入るのは何年ぶりだろうか。互いに行き来しなくなったのはいつからだったろうな？　覚えていない。まるで北と南に分かれて喧嘩している国みたいに、俺たちの間には見えない国境線でも張られている感じがする。

「……入って」

「ああ、お邪魔します」

国境を越えるとそこは雪国……ではなく、変哲もない部屋だった。ただ壁紙が俺の部屋と違いやや青い色で、空気がなんだか甘ったるく、抱き枕に丁度良さそうな人形が数個転がっている様はまさし

く女の子の部屋といった様相である。

「キモ……あんまりジロジロ見んなバカカズマ」

「……へーいへい」

まったく妹様には敵いませんね。自分から招き入れといてこの仕打ち、嬉しくって涙がちょちょ切れそうだわ。

アリアは電源の入ったデスクトップPCの前の椅子に腰かけた。

俺が座れそうなものは……アリアのベッドぐらいしかない。いや、流石にマズイだろう。

「おい、座布団ぐらい出せよ」

「……チッ」

アリアは舌打ちすると、心底嫌そうにやけにモコモコした分厚い座布団を投げて来た。

客に物を投げんな！

ホント不遜っていうかなんていうか、高圧的でイケ好かねえ女である。チッ、しゃあないから座っといてやるぜ。感謝しろ、妹様め。

「で、なんだよ？」

「……なにが？」

「人生相談」

片言の会話を交わす俺たち。

普段無視し合っている間柄だからこれでも十分すぎるぐらいだ。

俺は早く人生相談って奴を済ませて自室に戻りたいね。文句あっか。

「早くしないと帰っちまうぞ」

「わ、分かったわよ……ほら……」

急かす俺にアリアは1冊の本を差し出してきた。「らき☆シス」だ。

「……これがなに？　返しとけって言っただろ」

「これの持ち主……実はあたしなんだ」

「……ふ」

バウゥゥゥゥゥカッか、こいつは！？

人が善意で詮索せず、友人に返しておいてくれという体（てい）で渡した書物なのに……持ち主不明のままで事が完了するはずだったのに！

よりにもよって、この妹様は自分からカミングアウトしやがった。

分かってる？

それはただの妹モノの漫画＋小説じゃないんだぜ？

年齢制限がつく、俺でも手が出ない代物だというのに、持ち主を名乗り出てどうするんだ。あー、ダル。さっさと帰って部屋片して寝よう。

「中、見たんでしょ？」

「……チッ、ああ見たよ」

「で、どうだった？」

なにがだよ？

「内容、面白かった？　興奮した？　萌えた？　これ売れそうかな？」

「……そんな批評出来る程呼んでねえよ……ち、チラ見しただけだかんな」

エロ本まじまじ凝視してましたなんて答えられるか！　しかも内

容は妹モノで近親相姦モノ……どんな変態だよ俺は！？
アリアが俺をどう思っているか薄々感じ取れる質問だな。やはり今後も無視しよう。それがお互いのためだ。

「そもそもなんでそんな事訊いてくるわけ？　『らき☆シス』っての？　そんなアニメみたいなものって普通に市販されてる物だろ？」

質問に質問で返してやったぜ。ざまあみろ。と……
俺に強烈なカウンターパンチが返って来た。

「だって、あたしが作者だもん」
「なっ……！？」

しかもジョー矢吹ばりのクロスカウンター！
無論、クロス破りなんて使えない俺はまともに喰らう。
ぐぅ、耐えろ！　耐えるんだカズマ・アーディガン！　ここで倒れたら負けだ。
きっと空耳だ。そうだ、そうに違いない。それ以外があってあるものか！
俺の妹が、妹モノで近親相姦モノの漫画＋小説の作者だなんて……信じられる？　俺の嘆きを余所にアリアは実に活き活きと話し始めた。

「同人誌っていうのよ。原作のアニメや漫画のファンの人がオリジナルのストーリーを書いて、即売会で売り合うの。中には原作以上に原作っぽい作品もあるんだよ！」

さいですか。
でもお前のは原作レイプだな。裸にひん剥かれたキャラが可哀想だ。

「でねあたしは『らき☆シス』の漫画とあたしのオリジナルの妹小説書いてみたわけ。ねえねえ、絵上手い？　絵上手い？　話面白い？　萌えた？　萌えたでしょ？　ねえねえねえったら」
「ヴァーーー、うるせえ！！」
せがむようなアリアの態度に、俺の理性は限界を超えた。
空耳だと思いたいのに……このアマ！　そんなに楽しそうな顔されたら否定したいのに否定できねえじゃねえか！
「チラ見しただけで読んでねえっつってんだろうが！　それになに？　お前は兄貴にエロ本の感想訊くわけ！？」
「あ……！」
自分の言動がかなり恥ずかしい事に気付いたのか、アリアは赤面してうつ向いてしまった。
そして沈黙。
……居づれえ。
なんだこの空気？　とんでもなく重い上に、粘着質に絡みついてくる。払っても払っても取りきれない、そんな感じ。
運び屋心得その１「３６計逃げるが勝ち」……はやくこの場を去ってしまおう。
「話はお終いか？　じゃあ俺は帰るからな」
「――――　ったくせに……」
「あん？」
「人生相談乗るって言ったくせに……！」
アリアが俺を非難するような視線をぶつけて来た。
運び屋心得その３６「言った事は必ず守れ、逆に言わせれば勝ち」

……か。

チッ、ここで逃げるのは簡単だがそれでは男が廃(すた)っちまう。言質も取られちまってるしな、ここは協力して人生相談って奴を速やかに終わらせる。俺が解放されるための最速かつ唯一の条件だろう。

運び屋心得その１５「口は災いの元、口は飯を食うことだけに務めるべきだ」だぜ、まったく。

俺はため息をつきながらアリアに訊く。

「分かったよ。で、お前は俺になにをさせたい訳？」

「これ見てよ」

アリアはパソコンを操作して自分のメールボックスを開け、その中の一つを俺に見せた。

……なんだか、面接云々とかいう単語が目に付いた。

「なになに、『連絡有難うございます、アリにゃん様』……ってアリにゃんってお前かよ！？」

「う、うるさいわね。ＨＮ(ハンドルネーム)ぐらい好きにしてもいいでしょ」

俺の突っ込みに頬を膨らませてそっぽ向いてしまう。はいはい、可愛い可愛い。

「『この度は持ち込み希望のメール有難うございます。つきましては一度お会いして原文を確認の後、採用するか検討したいと愚考しております。よろしければ、指定した場所まで来ていただければ』……ってなにこれ？　なんだかコイツ、お前が漫画だか小説を出版社に持ち込みするみたいな口振りだな、ハハ」

「その通りよ」

アリアは胸を張り、誇らしげに答えた。豊満な胸がプルンと揺れ

る。はいはい、でかいでかい。

「ってちょっと待て　――　ッ！！」

胸見てる場合ではなかった。

この妹様は信じられないことをのたまったのだ。

「持ち込みってもしかしてコレ！？　正気かお前！？」

「ふふん、自分で言うのも何だけど相当の自信作よ！」

嘘だ！

冒頭３行で、擬音を鳴らして敵が登場するような小説……出版社に採用されるわけがない。

しかも登場人物の名前が、なんだか俺とミヒロに似ていたしな。

吐き気がする。

「もちろん漫画はアニメのモノだから使えないけど、小説の方は私のオリジナルだからイケるはず。妹萌えを満載した、妹の妹による妹のための小説よ！」

あ、頭痛い……そういやコイツ、ミヒロ大好きだったな。

それが転じて妹好きになり、妹モノの同人誌を書き、さらに内容は卑猥なモノに……いやいや、理屈通ってませんって。オマエ、小説の中で妹泣かせて何がしたいわけ？

頭の中身どうなってんだ？　思考回路曲がりくねって関係ない結論に行きついてカビ生えてんじゃないかな。多分、脳味噌腐ってんだなこの女。

「どうどう！？　イケると思わない！？」

「あ、ああ……そうだな、イケるんじゃないか」

「イケるって、何発？　ねえ何発なの？」

ふへへ、ぶっ殺そうかなコイツ。

さり気なく実に良い笑顔で、兄貴にセクシャルなハラスメントするのは止めてくれ。対応に困る。

「で、結局なんなわけ？」

「え……なにが？」

「だからー、そのメールの内容だよ！　人生相談、それに関係してんだろ！？」

「あー、そうそう、そうだったー」

テヘヘと舌を出してはにかむアリアは、他人が見れば間違いなく可愛らしく映るだろう。俺はぶっ飛ばしたいけどね。

アリアは本題を切り出してきた。

「実は持ち込み希望のメール出したんだけど、そしたら実際に会いたいって返事が返って来たの。出版社の人が私の才能を見抜いたわけ、どうどう、これって凄くない？」

「はいはい、すごいすごい」

この妹様はあの小説を本気で持ち込みするつもりらしい。

勇気があるというかなんというか……俺には理解しがたい。それに好きな事の話になると途端に饒舌になるなぁ。普段もこれの一割ぐらい愛想振りまいて欲しいもんだ。

「それで明日、その編集者さんに会いにいくんだけど……」

「マジか？」

持ち込みしようというアリアもアリアだが、応じる編集者も編集

者だ。しかし　――

「でもよ……いくらなんでも話がうますぎないか？」

まるで振って沸いたような幸運、とでも言えば良いのかな。かなり怪しい。

「……そう？」

残念なことに、アリアは一切の疑いを持っていなかったようだけど……。

胡散臭さはプンプンするが、なにより俺が眉唾物だと思う理由はたった一つ。

俺、文才ないもん。

日誌読み返してみれば分かる。

長年小説を執筆し、持ち込みを続けて来た小説家志望なら話は分かるぜ。けどよ、アリアは俺の双子なんだ。アリアも文章書くスキルは俺と似たようなモンだと勝手に想像する。

まあ仮に才能があったとしても、１８禁モノの小説持ち込む女子高生なんか普通採用するか？

俺ならしないね。

「その編集者って男？　女？」

「多分男だと思うけど？」

「例えばその編集者ってのがウソっぱちでさ。なんか変な奴らだったら、お前危ねえんじゃないか？」

世の中の編集者が全てそうとは言いたかないが、アリアみたいなポッと出の小娘は世の悪い輩にとっては良い喰い物だろう。

編集者を語って近づくナンパ男……なんてのがいないとも限らな

いからな。
　それに身内贔屓（みうちびいき）じゃないが、アリアはかなりの美少女だ。女子高生大好きな某漫画家が援助交際で捕まったりするような御時世だからな。アリア目当てで近づく変態男がいてもオカシクない。
　……俺が渋い顔で腕を組むと、アリアが顔を覗き込んできた。
「……へー、なに？　バカカズマのくせに、あたしのこと心配なんだ？」
「ばっ……バカ言え、誰がお前の心配なんか……！」
　俺がそっぽ向くと、アリアは勝ち誇ったような笑みを浮かべやがる。
「キモーイ。超キモイんですけど？　実の妹がいるのにシスコンとかありえなくない？」
「なんだと！？　俺はシスコンじゃねえ！！」
　口には出さねえが、俺はお前が大嫌いだ！！
「じゃあお前はどうなんだよ！　このシスコン女！！」
「あたしはいいの。あたしが想像してもミヒロは汚れないもん。でもアンタはだめ。汚いから、っていうか男って時点で汚い生き物だしー……えんがちょ」
「ぶるあああああぁぁぁっ！！」
　俺は砕けそうになる心を、奇声を上げることでギリギリ繋ぎ止めた。
　このアマ……男が汚いだと？
　全国の青少年の皆さんに謝りなさい！　あとミヒロにもだ！　お前が淫猥（いんわい）な想像して書物まで執筆してると知ったらミヒロ泣くぞ！

「ふーふー……」
「あはははは、あー面白い」
意地クソ悪く笑うアリア。この妹様はなんとか息を落ちつける俺を散々見下した後、
「はいはい、仕方ないわね。本当は嫌なんだけど、アンタがどーしてもって言うんなら連れて行ってあげてもいいわよ？」
「……くっ」
なんという……なんという上から目線発言であろうか。
俺に人生相談と称してこの話を持ちかける辺り、コイツは本当は怖くてしょうがないのだと思う。
持ち込みしたいけど相手の編集者は男、もし何かされたらどうしよう……不安になるのも無理はない。女子高生が一人で行くのは相当に勇気がいるだろう。
要するに、アリアは一人行くのは怖いから、できれば俺に同伴して欲しいのだ。
偶発的に秘密を知ってしまったゴミ扱いしている兄貴でも、いないよりはまし、ということだろう。
冗談じゃないぜ。
運び屋心得その7「受けた依頼は必ず果たす、金と恩と恨みは必ず返す」だ。
ここで重要なのは恨みな、恨み。俺はアリアから正式に依頼を受けた訳ではないし、返す恨みは山のように蓄えてある。
ヴァァァァカじゃねえの？　誰が行くか、んなもん！　それに物には頼み方ってのがあるんだぜ？
俺は意地クソ悪く質問してやることにした。

「俺が行かねえっつったらどうすんだよ？」
「1人で行く」
「……チイ姉かシホミ姉ちゃんに行ってもらえよ」
「キモ！　何考えてんの、言えるわけないでしょ、こんなこと……」

まぁ、そりゃそうだわな。
妹を凌辱する小説の持ちこみに行きたいから一緒に来てくれなんて、実の姉に言える訳がない。
親父もホリスも論外だし、ミヒロは連れていく訳にいかないだろう。
だからって1人で行こうとするか、普通？
最も会いに行くのは明日らしいので、今日「らき☆シス」を発見しなければ単独行動する予定だったのだろうけどさー。
アリアは見てくれだけは可愛いからな……ナンパされたりするかもしれないし。その編集者が悪い奴だったら、幾らアリアでも一人では抵抗するのに限界がある。
別に心配しちゃいないぜ。
でもよ、聞いちまった以上気になって仕方ないんだ。
……チッ、しゃあねえなぁ。

「……分かった。俺が一緒に行ってやるよ」
「はぁ？　なに、その口の利き方は？　連れて行って下さい、お願いしますアリア様、でしょ？」
「連れて行ってくれ、お願いします！」

もうどうにでもなれ！　床に頭を擦りつける様は、きっと何処からどう見てもシスコンにしか見えないだろう。
断言しとくぜ……俺はシスコンなんかじゃねえ！
俺はアリアが大っ嫌いだ！　ソコのところは勘違いして欲しくないね、まったく……

●

【ヴァルストーク営業日誌　6月20日】

悪夢のような夜が明け、翌日になりました。

夢オチだったらなぁという淡い願いを胸に秘め朝食に臨む俺。
当然、ミヒロとアリアが食卓に同席しているが、アリアは俺のことを完全スルーである。もはや空気。エアカズマとなった俺は手早く食事を済ませて自室に戻る事にした。
昨日の出来事があったから、アリアの態度に変化でもあるのかと思っていたが……冷戦は継続されているようだ。
別にいい。
これで昨日のことが夢だったらそれでいい。

「さあ、行くわよ、バカカズマ！」
「うぇーい」
「なに？　その気の抜けたコーラみたいな返事は？　シャキッとしなさい、シャキっと！」

できるかっての。
やはり現実と言うのは残酷なもので、俺はアリアに引き摺られて「エリア」の繁華街に連れて来られた。なぜコイツは二人っきりになると饒舌になるのだろうか？　食卓でも普通に話掛けてくりゃいいのに、まったく理解しがたい。

とにかく、やる気……出ねえ。
折角の俺の休日を、みたくもない妹様の面倒みて潰されるのか…
…ふ、最高にやるせないね。

「おい、何処で待ち合わせてんだよ？」
「もうちょっと……ほらあそこよ！」

うるせえなぁ。無駄にテンション上げやがって、騒がしいたらないぜ。
アリアが指差した先には、何処かの出版社のロビーのようだった。
「イスルギ文庫」？　俺は小説読まないから分からないけど、割とメジャーな出版社なんじゃねえのココ？

「あんたはここで待ってて！」

入り口を潜るアリアに続こうとしたら怒られた。

「なにかあったら携帯で連絡するから、すぐに飛んできてよ！」
「……」
「返事は！？」
「……はいはい」

ここまで連れて来て門前払いですか？
折角同行したのだから、俺だって編集者という人間を見てみたい。だってそうだろう？　俺たちが普段読んでいる本という本全てに編集者がおり、内容を調整して俺たちに届けてくれているのだ。
どんな仕事しているのかは、ただ純粋に興味はあった。
ま、願いは叶わないけどね……。

「まあ、頑張れよ」

「キモ！　言っておくけどお礼なんてしないからね！」

……なぁ、俺泣いていいのかな？

理不尽だよー、理不尽だよー。なにが理不尽ってもう全部。きっと世の中なんて理不尽とエゴで出来てるんだ。ケッ、やってらんねえ。

「……つ、付いてこないでいいけど、すぐ傍にはいてよね。空メール送ったらすぐに飛んできて」

「あいあい、了解」

どないせいちゅうねん？　見返りなしで協力を求めるこの妹様は間違いなく理不尽の権化だね。

それでも出版社の前で待機する俺はヘタレなのだろうか？

メールを見逃さないためにケータイを握りしめる。……ふう、それにしても俺が来た意味ってあんのかね？

３０分ほど経過……アリアからＳＯＳのメールはなかった。

だが俺の方がそろそろ限界だ。本職の警備員でもないのに、ずっと同じ場所で待機なんてしてられるかよ。と、そのときスーツを見事に着こなした男性が入り口から姿を現した。

アリアも一緒だ。

「よう、お疲れ」

「あれ？　まだ居たんだ、アンタ？」

「ふふふ、さらっとトンデモないこと言いやがったな。もし俺の中にリミットゲージがあったら速攻で超級武神覇斬（ちょうきゅうぶしんはざん）だよ、アリにゃん

？」

まだいたんだ……マダイタンダ……

ホントにコイツだきゃー、いつか殺す！

ちなみに、超級武神覇斬というのはＦＦ７の主人公クラ〇ドの最強リミット技である。

心に誓う熱き思い。だが水を注すようにスーツの男性が俺を見下ろしてきた。かなり細身で背が高い、雰囲気を比喩するなら抜き身の日本刀のようだ。

「アリにゃん様のお兄様ですか？」

「え、ええ、そうですが……」

いかにもビジネスマン風の中年男性が「アリにゃん」とか言うと違和感を覚えるなぁ。

「私、こういう者です」

「あ、ども」

ビジネスマンは丁寧にお辞儀し、名刺を俺に渡してくれた。

「イスルギ文庫　出版部編集者　クリティック」と書かれている。

おお、これが世に噂される名刺というものか！　初めて見た！

頭を上げたクリティックが言う。

「暫くの間、妹さんをお借りしたい」

「はぁ……？」

「アリにゃん様の着眼点は非常にユニークで独創的です。上手くして出版に漕ぎ着ければヒットも夢ではないでしょう」

そういうもんか？

俺にはまったく理解できなかったが、編集者がこう言うのだからそうなのだろう。へー、実はアリアの奴ホントに文才あったんだな。若干、というかかなり気に食わんけど、編集者にこう評価してもらえるとはあっぱれだぜ。

でもどうしてアリアを貸してくれという話になるのだろう？

「アリにゃん様には才能があります。しかし如何せん独学で執筆を続けていたようですので、基本的な文法が出来ていません。作品を売り出すには最低限の作法は知っておかねばなりません」

んー、まあクリティックの言うとおりだろうな。俺は黙って話を聞く。

「ですので数日妹さんを私たちがお預かりし、レクチャーをします。どうでしょう？　妹さんを私たちに貸して貰えないでしょうか？」

「そういう話なら俺は全然ＯＫっすよ。でも、アイツは……？」

俺が視線を向けると、アリアは満面の笑みを浮かべながら言った。俺でなく、クリティックに。

「ねえねえ早く行きましょう？　あたしもっと勉強したいんだ」

「分かっていますともアリにゃん。では参りましょうか」

あれ？　俺、スルー？

アリアの奴、クリティックのこと完全に信用しきっているな。言っていることも筋が通っていたし真面目そうな人だったからな。当初俺が懸念していた悪い人物像からはかけ離れている。ま、あの人なら大丈夫だろう。

俺は遠ざかる２人の背中を眺めながら思っていた。

「アイツがいいってんなら別にいいか……でも俺、マジ、エアカズマ」

もしかして俺、体透けてないだろうな？

あんまりスルー続けられると、ホントに自分がここに居るのか疑いたくなる時があるぜ。

ま、アリアの持ちかけて来た人生相談はこれで終わりだ。

約束は守ったからな。運び屋心得その３６「言った事は必ず守れ、逆に言わせれば勝ち」には反していないはずだ。

「へっ……精々頑張んな」

クソ生意気な妹様の背中に俺は吐き捨ててやった。

別に心配しているわけじゃないぞ。

何度も言うようだが、俺はアリアが大嫌いだ。可愛げゼロだし、俺を邪険に扱うし、まさしく俺の天敵のような存在だと言っていいね。

とにかく、これで俺は自由だ。

帰って、コミックの金魂さんでも読み返そーっと。

俺は軽い足取りで実家へと戻るのであった……

結局この日、アリアは帰って来なかった。

【ヴァルストーク営業日誌　6月21日】

今日も親父たちは帰って来ない。
そしてアリアもいない。
学校を終え、自転車便の仕事を終えた俺を迎えてくれたのはささやかな平穏の日々である。ああ、幸せ。

「お兄ちゃん、アリ姉ちゃんは？」
「知らねー」

夕食を共にするミヒロが訊いてきたので答えてやった。
普段アリアから話しかけられまくってるので気になるのだろう。
でも俺は気にならないね。むしろ、心に平穏を保ったまま食卓に座れることを喜びたい気分だ。
ビバ、平和！
これで倒産の危機が去ってくれれば言うことはない……

結局、この日もアリアは帰って来なかった。

【ヴァルストーク営業日誌　6月22日】

今日も親父たちは帰って来れない。
自転車便の傍ら様子を窺ってみたが、会社内は締切前の漫画家の仕事場のような修羅場と化していた。全員目が血走っている。こりゃあ余計なことは言わない方がよさそうだ。
そんな訳で、親父たちにアリアの事は伝えていない。
今日もアリアは家に居なかった。

……なんだか、火が消えたよう……とまでは言わないが、この家ってこんなに広かったんだなって思う。
冷戦中の俺たちだが、相手が突然消えるってのは違和感しか覚えないな。
ま、アリアの奴は夢に向かって頑張ってんだから邪魔しちゃ悪いよな……でもよ、連絡の一つくらい入れてもバチは当たんねえんじゃねえかな？

結局、この日もアリアは帰って来なかった。

【ヴァルストーク営業日誌　６月２３日】

この日は些細な変化があった。
アリアから連絡があったのだ。俺の携帯に短く４文字で終わってしまうようなメール。実に味気ないモノだったが、

『タスケテ』

と書かれていた。
不審に思った俺は返信をしてみたが、１時間待てどもアリアからの連絡は返って来なかった。
……言わんこっちゃない。
なにかのトラブルに巻き込まれやがったな？
今更ＳＯＳのメールか。お前との人生相談は３日前に終了してんだよ、助けに行く義理なんて俺にはないね。

「お兄ちゃん」

「ミヒロか、どうした？」

ミヒロが俺の部屋の扉を開けて立っていた。

「アリ姉ちゃん、なにかあったんだよね？」

「……」

「助けに行くんだよね？」

「……へっ」

ヴァァァァァァカじゃねえの？

ここに宣言しよう！

俺はアリアが大っ嫌いだ！

高慢ちきで我がままで、俺のことをゴミ扱いして無視ばっかりするくせに、必要な時だけ頼ってきたりする「お前、それは調子よすぎじゃね？」と思いたくなるクソ生意気な妹だ。

外面ばっかり良くて、胸がでかくて、成績優秀で人気者で教師受けもいい……俺に似ても似つかねえ双子の妹だ。

ああ、気に食わないね。

俺はアリアが大嫌いさ。

でもな。それでもアイツは俺の妹なんだよな……。

家族なんだよ。

忘れちゃいけねえ、そこだけは忘れちゃいけないんだ！

「ミヒロ、俺を誰だと思ってやがる？　俺はカズマ・アーディガン、男の中の男だぜ！」

「それ漫画の台詞でしょ？」

「うぐッ……」

見透かされたか。ミヒロ恐ろしい子、可愛い妹だが俺はお前の将来が末恐ろしいよ。

「でもなあ……」

俺はアリアを助けに行こうにも居場所を知らない。

あのクリティックという男を信用していたからな。名刺もよくよく今見ると、会社名と名前しか書いていない。住所や電話番号が書かれていない名刺なんて存在するのだろうか？

偽造だな、十中八九間違いなく。

野郎、手の込んだことしやがって！　目的は確実にアリア本人だろう。

急がねえと、何をされてるか分かったもんじゃねえ。

「お兄ちゃん」

「なんだミヒロ？　お兄ちゃんは今考え事をしていて忙しい――」

「アリ姉ちゃんの居場所なら分かるよ」

なに？　それはどういうことだミヒロ？

「じゃじゃーん、発信器追跡装置『キャレット』ちゃんだよ！」

ミヒロが懐から赤い液晶付きの人形を取り出した。

なんだそりゃ？　それに発信器って……

「こんなこともあろうかと、アリ姉ちゃんの携帯に発信器仕込んどいたの☆」

「へ、へー……凄いなあミヒロは……」

語尾に☆付けてキャピっても誤魔化されんぞ。

実の姉の携帯に発信器を仕込むとは、発想がすっ跳んでやがる。

お前はそれを使ってなにかしたいわけ？　なんて言えばいいのかな

……10歳にして腹の中真っ黒なんじゃないか、この妹様は？
はっ、まさか俺の携帯にも付けていないだろうな！？

「ま・さ・か（ニヤリ）」
「そ、そっか……でも助かったぜミヒロ」

これでアリアの所まで行ける。
ホントはアリアを助けに行くなんて不本意だけどよ、行くっきゃねえだろ？
運び屋心得その7「受けた依頼は必ず果たす、金と恩と恨みは必ず返す」だ。
まだあの人生相談は終わっていなかったみたいだぜ。アリアはクリティックと会う事を不安がっていた。一度は消えた不安が、今度は恐怖として蘇っていることだろう。
受けた依頼は必ず果たす。運び屋として最低限のモラルだぜ。
待ってろアリア、今、迎えに行ってやる。
ここで勘違いしないで貰いたいのは、これはアリアのためではなく、俺の中の運び屋心得を守るためということだ。
俺はアリアが大嫌いだからな、アイツのためになんか動いてやんねえよ！

「行ってくるぜミヒロ！」
「夕食までには戻って来てねお兄ちゃん！」
「あいよ！」

愛機――ヴァルホーク号をぶっ飛ばして俺は目的地に向かった。
俺の脚ならあっという間だね。
後……帰ってきたら携帯をバラシテみよう。怖いったらありゃしないからな……。

辿り着いたのは古びたテナントビルだった。
繁華街から少し離れた所に立っていて人気がなく、ビルにもほとんど店が入っていない。俺は良く分からないだが、こういうビルってスナックとかバーが沢山入る建物だよな？
なのにほとんど店が入っていないというのが怪しい。怪しすぎる。
そして唯一店が入っているのは5階「恥の記録社」という店……
胡散臭さ全開である。
扉に鍵は掛かっていなかったので、俺は抜き足で忍び込む。

「いいよーアリにゃん、もっと足を崩してみてー」

クリティックの声が聞こえた。
先日の真面目そうな声ではなく、ナンパ野郎みたいな間延びした口調だ。
野郎。猫被ってやがったな。
俺が侵入していることに気付かないクリティックは、薄気味悪い口調で続ける。

「いいねー。もっと胸を腕で挟んで強調してね。アリにゃんは胸が売りなんだからー、そうそう、いいよいいよー。あと上目使いで御主人様を見上げるような視線で　――」

――　ブツンッ

俺の中で何かが切れた。

「テメエ、人様ん家の妹になにしてやがる！？」

「――　へっ？」

突然登場した俺に、クリティックは目を白黒させて驚いていた。

「クリティック、よくも騙してくれやがったな！！」

「お、お兄さん？　いや違うんだ、これには事情がね　――」

「問答無用！！」

俺はクリティックの顔面めがけて拳を放った。

クリティックはひょろい中年男性だ。対して俺は自転車便で普段から体を酷使している若者。運び屋の体力舐めんなよ。

クリティックは鼻血を撒き散らせ、一撃で白眼を剥いて気絶した。

ざまあみろ、この変態め。天誅だ。さぁて、あとはアリアを連れ帰って人生相談終了だ。

「もう大丈夫だぞアリア　――　って、お前なにやってんの？」

「こっち見んな、バカカズマ！」

「見んなっつわれてもなぁ……」

俺の視界に飛び込んできたアリアの姿は信じられない物だった。

真っ裸。

ではないよ。もしそうなら今この瞬間に俺はアリアによって全殺しにされているだろうからだ。しかし今のアリアの姿は考えようによっては全裸よりも恥ずかしいモノだった。

白いボディラインの浮き出る全身スーツを身に纏い、赤いカラーコンタクト入れて、頭に妙な髪飾りを着けている。

「お前、それ……もしかしてコスプレか？」
「言うな！！」

アリアは激昂して叫んでいた。
……うんうん、やっぱりコスプレなんだな。クリティックの野郎、文法作法を教えるとか言ったくせに、やっていることはアリアをコスプレさせて撮影会か？　とんだ変態野郎だぜ。
しかしアリアが何のアニメのキャラのコスプレをしているのか、俺にも分かった。
俺が詳しいわけでなく、それくらいメジャーなキャラなのだ。新世紀〇ヴァンゲリオンの〇波　レイだ。白いスーツはプラグスーツだろう。それにしても恐ろしいぐらい似てやがるな……髪の毛が元々青のショートだからか？　カツラも被っていないので違和感が仕事をしていない。
最も、雰囲気は全く似ていない。
助けに来てやった俺を射殺さんばかりに睨みつけてきやがる。性格の悪さがプンプン滲み出てきやがるね。寡黙な〇波とは対照的である。

「ま、いいや。さっさと着替えろ。晩飯までに帰るぞ」
「う……うん」

アリアは奥の更衣室に引っこんだ。
俺の足元には気絶したクリティック。

「まったく、とんだ狸親父だったぜ」

追い打ちとばかりに頭を踏みつけてやる。
小さな悲鳴が上がったような気がするのは気のせいだろう。

「おまたせ！」
「おう」
普段着に戻ったアリアを連れて店を出る。
そして俺たちは帰路についた……。

実家までの道のりを、俺はアリアをヴァルホーク号の荷台に載せながら進んだ。
普段から自転車便で働いている俺だ。女子高生1人くらい、いつもの荷物に比べてれば全然軽いね。楽勝だ。
帰り道でアリアが独白を始める。

「あのおっさん、最初はちゃんと文法を教えてくれてたんだ」

そうなのか？
最後の様子を見る限りじゃ、その名残なんて一欠けらもなかったぞ。

「でも途中から登場キャラの気持ちになりきることが大切だって言い始めて、あたしもなるほどって思っちゃたわけ……最初はキャラの台詞を音読してみたりしてさ、その内だんだんエスカレートして色んな服装に着替えてみたりして……初めは楽しかったよ。色々、可愛い服を着れるんだもん」

ほう、コイツにそんな女の子らしい一面があるとはね。
部屋も女の子っぽかったし、俺に見せないだけで可愛い服を着た

いという願望はあるのだろう。
　無言で話を聞く俺に、アリアは続ける。
「でもね急にオカシクなったの……いろんなアニメのコスプレさせられて、ポーズ取らされて、写真取られて……あたし、だんだん怖くなってきて……」
「……それで俺にメールを、ね……」
　分かるぜ、コイツの気持ち。すげえ分かる。
　怖くて怖くて仕方なかったんだろう……それでも、自分の秘密をばらすことが出来ないから助けを呼ぶこともできない……親父やチイ姉を頼るには自分の秘密をばらさねばならない……イヤだったんだろうな、凄く。コイツ、俺以外の家族大好きだから。
　だから大嫌いな俺でも、秘密を知っている最後に頼りにできる人間だったんだろう。
　それであのメールだ。
　可愛くねえ。ホントに可愛くねえよコイツ。
　消去法で俺を選んだんだぜ。兄貴として立つ瀬がないっての。
「でもね……アンタが来た時、凄く嬉しかったんだ……」
　コイツ……と、突然なに言い出しやがる？
「来てくれた……あたしのために来てくれたんだって……凄く、嬉しかった……」
「アリア……」
　やべえ。
　なんだコイツ、急にしおらしくなりやがって。コイツ、アリアの偽物か？　俺の妹はこんなに可愛くなんてねえぞ。

やべえ、キュンと来ちまった。気持ち悪い、こんな俺自身に吐きそうだ。

アリアは俺のシャツを握りながら。

「あたし……お金が欲しかったんだ……」

今回の持ち込みの理由を語りだした。

「今、倒産の危機迎えてるじゃん？」

「ああ、これで３６回目だな」

「だからあたしも力になりたかったんだ」

紡がれるアリアの本音。

「アンタって自転車便やってんじゃん……それにミヒロも節約料理で家計に貢献してるし……なにもしてないのってあたしだけだったから、なにか役に立ちたかったんだ……」

「……そうか」

お前はそんな事考えていたのか。

俺たちの間に会話が消えてからもう大分長かったからな。お前の悩みなんて俺には気づきようがなかったぜ。

でもよ、お前の気持ちは良く分かる。

俺も同じ気持ちだったからな。家族のために力になりたい。その手段が自転車便か１８禁小説の持ち込みかって違いだけだからな……俺たちの根っこの部分は一緒なんだろうぜ。

アリア……お前はやっぱり俺の妹だぜ。そして家族だ。

確かに俺はクソ生意気なお前が大嫌いだし、無視し合った方が精神衛生上は健康なんだろうがよ、それでもお前は俺の家族だ。

家族が困ってるのを見過ごせるかってんだ！

俺はカズマ・アーディガン、男の中の男を目指してんだ！

「アリア」

俺は久しぶりに妹を名前で呼んだ。

「困った事があったら相談しろ。俺で良ければいくらでも人生相談に乗ってやる」

「……うん」

アリアが俺の背中に体を預けて来た。

なんだろう？　クソ生意気な妹様なのに、コイツの体ってこんなに小さかったっけと、ドギマギしてしまう自分に気付く。

落ち付け俺！　コイツはアリアだ、妹なんだぞ！

「ありがとう」

……なんだって？

アリアが……アリアが俺に礼を言いやがった……。

嘘だろ？　こんなこと初めてだ。礼を言われただけなのに妙に嬉しい。

嬉しいだけじゃくて体や顔が熱い。胸がチリチリする……なんだこの気分？

「頼りにしてるから……お兄ちゃん」

「お、おう、任せとけ！」

俺は顔の熱さを紛らわせるために、ヴァルホーク号を全速力で漕いだ。

……あのアリアが俺のことを「お兄ちゃん」と呼びやがった。

信じらんねえ。クソ生意気な妹様が、なに殊勝になってんの？
俺のことをゴミみたいに見下してるあの妹様がだぜ？　信じられねえっての。
コイツはやっぱりアリアの偽物だ。
だって俺の妹は、全然可愛くないもんね。

――俺の妹がこんなに可愛いわけがないもんね！

だが裏腹に俺の心臓は激しく脈打っている。全力疾走しているせいだと思いたいね。……俺ってシスコンの気があったのかな？　軽くショックだ。
ま、なんにせよ。

「帰ろうぜ、俺たちの家によ！」
「うん！」

俺は妹様を荷台に乗せて、実家に向かって疾走するのだった。

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。
『エリア』には個性豊かな人間が沢山いる。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない

おまけ

【ヴァルストーク営業日誌　7月2日】

あれからしばらく経って、俺たちヴァルストークファミリーがどうなったかというと

――お父さん、倒産の危機は回避されました！

ふっ、俺ギャグセンスが皆無だから、もうこの路線でいくもんね。

なにはともあれ、３６回目の倒産の危機は回避された。

親父やチイ姉の働きが功を奏した……訳ではない。

ではどうやったかと言うと、驚くべき事にアリアの口座に多額の金額が振り込まれていたため、それを使って当面の倒産の危機を乗り切ったと言う訳だ。

……なに？　分かりづらい？

なら具体的に書いてやる。

信じられない事に、クリティックの狸親父め……あの時撮り溜めた写真で、アリアのコスプレ写真集を売り出しやがった！

しかもそれが大ヒット！

世の中の奴ら……感性が狂ってやがる！　人の妹様をなんだと思ってやがんだ！

ま、もちろん肖像権の侵害である。

だがクリティックの奴先手を打って来やがった。

要するに、売上の一部を口止め料として入金してきたわけさ。

俺たちは喉から手が出るほど金が欲しかったからな。まさに渡りに船ってやつ？　裁判沙汰にすると時間と金がかかっちまうからな……俺たちにそんな余裕はない。

ありがたく頂戴いたしました。

無論、アリアはキレていたがどうでもいいね。

俺たちゃファミリー。個人よりもファミリーの方が優先されるのだ。

こうして俺たちヴァルストークファミリーは通算３６回目の倒産危機を無事乗り切ったのだった。

……二度と、倒産の危機が来ない事を節に願う。

あ、日誌のページがないな。

今日の日誌はこれで終わりだ。

次回から新しいノートに日誌を付ける事にしよう　――

＜キャラ紹介＞

カズマ・アーディガン：ジェネ高2年、ヴァルストークファミリーの長男坊。自転車便でファミリーの仕事を手伝っている。双子の妹（原作は違います）のアリアとは犬猿の仲。恋人欲しいけど……そんな話が浮上しないのも悩みの一つ。

アリア・アーディガン：ジェネ高2年、ファミリーの3女。生成優秀、容姿端麗とカズマで友人も多いが、その正体は重度のシスコンで同人誌まで書いている隠れオタク。ミヒロラブ！　バカカズマ死ね！　と思っているらしい。（原作と設定違い元々家族という設定）

ミヒロ・アーディガン；ファミリーの4女、10歳の幼女。家事全般と家計の管理を任されているしっかり者だが、腹黒疑惑が絶えない。家族はみんな大好き。

クリティック：恥の記録社でなにかやってる中年。アリアの写真集で大儲けしたらしい。その後の行方は不明。

＜次・回・予・告＞

エクセレン「キョウスケ・ナンブ曰く『俺の彼女がこんなに可愛いわけがない』！」

キョウスケ「……」

エクセレン「つまりーこの言葉の意味はー、『アイラビューエクセレン、俺は君が愛しくてしょうがないよ。なんでも好きな物を言ってごらん。買ってあげるぜ！』って意味よね、キョウスケ？」

キョウスケ「……チッ」

エクセレン「キョ、キョウスケがグレちゃった！？」

キョウスケ
「俺の名前を言ってみろォ！！　忘れたとは言わせん！！　そんなわけで次回予告だ！！
次回もファミリーの話は続くぞ！
もっかいテーマは「家族愛？」だ！　俺も愛と出番が欲しい！！
次回スパロボ学院「ダイエットは危険の香り」に、リボルビングスティェェクッ！！」

エクセレン「『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』もよろしく！！」

どうも北洋です。
今回は絶賛アニメ放送中の「俺の妹がこんなに可愛いわけがない」ネタでお送りしました。
具体的には1巻と3巻からネタを頂いています。
面白いので興味のある方は読んでみてください。

ケルンバイターさん、ｓｉｂｕｇａｋｉさん、三国同盟さん、ヴィーアスさん、暗黒ミカンさん感想ありがとうございます！
最近、ラノベやアニメ、マンガからネタをパロるのがマイブームです。
ちなみに原作でアリアはカズマの妹ではありません。でも双子みたいなものです。
早くＰＳ３で動くカズマたちを見てみたいものです。

という訳で次回もカズマたちでお送りします。
文章長くなってしまいましたが、読んで頂きありがとうございました！

俺たちゃヴァルストークファミリー　～ダイエットは危険の香り～（前書き）

＜注・意・事・項＞

絶賛キャラ崩壊中！
スパロボWキャラのイメージが崩れるのが嫌な方は閲覧を避けるべきかもしれません！
それでもよいという方はどうぞ！

＜もうひとつ注意と謝罪＞

この作品はパロディです。当然、原作があるので、興味を持った方は原作をご覧になってみてください。
あと、更新遅れてすいませんでした。

それは……遠い昔の記憶。

俺が営業日誌をつけ始めるよりも前の話だ。
双子の妹アリアは今でこそ俺のことをゴミのように毛嫌いしているが、小学生低学年くらいまでは割と俺に懐いてくれていた。
同じ歳で懐くという表現もオカシイかもしれないが、日が落ちるまで公園で遊び合う程度には仲の良い兄妹だったと思う。
……それが高校生になった今では冷戦状態。
どこで選択肢を間違ったんだろうな？
俺には正直見当もつかない。
でも昔からアリアが気の強い女の子であったのは確かだ。
しょっちゅう同じクラスの女の子と喧嘩をしていて、それはそれはガキ大将と呼ぶに相応しい暴れん坊っぷりだったと記憶しているね。
そんな暴れん坊だから怪我することもある。
ある日公園で遊んでいた俺に、ボロボロになったアリアが泣きべそかきながら言ってきた。

『お兄ちゃん、おんぶしてー』

懐かしいな。この頃のアリアは、俺の事をバカカズマではなく兄貴と呼んでくていたんだっけか。
俺はたいして背丈も違わない重い妹を背負って帰ったものだった。
今では想像も出来ないね。俺とあのクソ生意気な妹様にもそんな時期があったんだってな……信じられる？　俺には無理だと、断言

する。
しかし、子ども時分に思ったもんだ。
『おまえ、そんなにらんぼうものだと、しょうらいけっこうできないぜー』
『いいもん。べつにすきなひといないし』
『おまえなぁ……』
女の子なんだから将来の夢はお嫁さんとか、可愛らしい事いってりゃいいのによ……まったく、この頃から妹様は生意気で可愛げなくていらっしゃる。
もう少し女の子らしくして欲しいもんだ、と俺は子ども心に思ったもんだったぜ。
『もし……』
『あん？』
『もし、だれもすきなひとができなかったら、そのときは　――』
アリアはなんて言っていたっけ？
思い出せそうで出てこない、もどかしいとはまさにこの感覚の事だろうぜ。
とにかく時間は人を変えるもんだ。
思春期となった俺たち兄弟の間には見えない国境線が張られ、俺は帝国軍アリア側からの一方的な砲撃に耐える毎日を送っている。
断言するね。
俺はクソ生意気で可愛げのねえ妹様のことが、大っ嫌いだぜ！
スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～

俺たちゃヴァルストークファミリー　～ダイエットは危険の香り～

【ヴァルストーク営業日誌　7月6日】

本日も晴天なり。
ここはなぜか高校が密集する地域「エリア」。その土地で俺たちヴァルストークファミリーは運び屋をしている。
風邪穏やかにして波は低く、３６回目の倒産の危機を乗り切った我らヴァルストークファミリーの生活は順風満帆と言っていい。ただ……

「太った……」

食卓に木霊するアリアの呟きを除いては。

「太ったよう……」
「……」
「太ったんだよう……」

あーウゼえ。
３回も言わなくても聞こえてるっつーの。俺はアリアの言葉を無視してミヒロ特製の豚の生姜焼きをご飯に乗せ、口にかき込む。

「あー、旨い」

まさに至福！
３６回目の倒産危機を乗り越えた我が家の食卓は、少しばかり内容がグレードアップされていた。使っている肉がトリのムネ肉から

豚のバラ肉にランクアップしたのだ！
素晴らしいね。ビバ、贅沢！
しかもヴァルストークファミリーの四女 ――― ミヒロ・アーディガンの料理の腕はプロ並みときている。
今日も食卓に並ぶミヒロの料理を、毎日アリアは……
「美味しいぃー、やっぱりミヒロの料理は最高だね！」
と、パクパク口に運んで、さらにはおかわりまでしていたのだから……そりゃあね、体重もね、アップデートされるわな。自業自得だぜ。
ま、アリアはミヒロの事が大好きだからな……妹ネタの同人誌書いてしまうぐらいに、妹大好きミヒロ大好きな変態妹様さ。ミヒロの料理なら、ご飯何杯でもいけるってか？　ハハ、この変態め！
「太ったんだってばー……」
「よかったねアリ姉ちゃん。すくすく大きなってね」
「あーん、ミヒロが虐めるよー」
悪気のないミヒロの言葉にアリアが打ち崩されていた。
……ああ、申し遅れたな。俺の名前はカズマ・アーディガン。ヴァルストークファミリーの長男坊さ。
今、食卓には俺、アリア、ミヒロが付いて夕食を共にしている。
親父たちはまだ会社から帰って来てないな。倒産の危機は回避されたが、経営難は未だに続いている。なもんで社会人組は各々残業をして別々に帰ってくる……若干寂しい気がするが、ま、しゃあない。
だから、俺たち3人で食卓を囲む光景が日常と化しているのさ。

「……そんな気にするなよ、アリア」

つい最近の事件から、俺は妹様のことを名前で呼ぶようになっていた。

説明するのも面倒なので省くが、少し俺たちの冷戦が終戦に向かいつつある……そう思っているのは俺だけだろうか？

「成長期なんだからさ、多少体重増えるのは仕方ないって」

優しい俺の台詞は、きっと世の兄貴の鏡に違いない。

「キモッ……うわサイテー、セクハラなんですけどー」

だがこれだ。

ふふん、どうやら相手は徹底抗戦の構えらしいな。

もう譲歩などしてやらん。お前なんか俺の敵だもんね、バーカバーカ。

「太ったようー、助けてよーミヒローー」

「だってアリ姉ちゃん沢山食べるんだもん。そりゃ太るよ」

「だってー、ミヒロの料理が美味しいだもん。美味しすぎるは罪」

自分の食欲を料理のせいにするな。

しかしそこはミヒロ。妹様と違って優しい、

「しょうがないなー。じゃあ明日から低カロリーの料理作ってあげるね」

「あ、ありがとーミヒロ。大好き！　もうチューしちゃう、ちゅちゅ？」

「もー、や、やめてよ、アリ姉ちゃん！」

アリアの奴、わざわざ食卓を立ってミヒロをハグしに行きやがった。

そして頬っぺたにキスの乱舞。ミヒロも本気で嫌がっていない様子だ。なんつーの、女姉妹同士のボディタッチって、きっと子猫同士がジャれてる感覚に近いんだろうな。

……もちろん俺は蚊帳の外……俺、イズ、エアカズマ。

いいもんね、慣れたもんね。別に寂しくなんてないもんね。

ふ、お邪魔虫は退場するとするか。見てらんねえし。

俺は居間のテレビでも見ようと、テレビ前のソファに腰掛けリモコンを操作した。

「また悪の組織が、謎の仮面の男に襲撃されました。これで１３件目――」

なんか物騒なニュースやってるなぁ、と俺が思っていると。

「いやっふー」

能天気な声を響かせて居間に入って来る人影があった。

チイ姉だ。

チイ姉はファミリーの次女で、会社でトラックの運ちゃんをしている。ちなみに何故チイ姉かと言うと、シホミ姉ちゃんと比べて胸が小さいから、小さい方の姉ちゃんって意味でチイ姉。

本人には、次女だから歳の小さい方の姉ちゃんでチイ姉と一家一丸となって嘘ぶいている。真実は人の心に沈めておくべきなのさ。

「ただいマンゴープリン！　愛しのマンゴープリンちゃん、今帰ったわよ！」

俺の壊滅的なギャグセンスは遺伝かもしれないな。

「おかえりチイ姉。なんだ、もう風呂入ったのか？」

「うん、仕事で汗かいちゃったからね」

仕事上がりに風呂でも入ったのだろう。余韻の湯気を纏って、着ている服はタンクトップに短パンと下手すりゃ扇情的と言われそうな格好である。

ケッ、風呂上がりに素っ裸で歩き回るオカンじゃあるまいし、俺がいるって事を少しは意識してもらいたいもんだ。

以前文句を言ったことがあるがスルーされた。

残念なことに、我がファミリーにおける俺のヒエラルキーは最下層と言っていいからな。

なんなら分かりやすく図解してやろう。

俺＜ホリス＜＜＜親父＜＜＜＜＜＜＜（ＡＴフィールド）＜＜＜＜＜アリア・ミヒロ・チイ姉＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜シホミ姉ちゃん。

どうだ、分かりやすいだろう？

優しい人たちには、俺がどれだけ虐げられているか察して貰えると思う。

ちなみに冷蔵庫の中身も戦力分布図がハッキリしているね。俺の陣地は卵置き用のケース１個分だ。チロルチョコ１個置けるか置けないかぐらい……切ねえ……

俺の思いを知るよしもなく、チイ姉は広大な自陣からマンゴープリンを取り出した。

「マママッ、マママッ、マーヨネェーズ！　マママッ、ママママッ、マーヨネェーズゥ！！」

さらにチイ姉は意味不明なテンションで、作詞作曲自分の「マヨネーズの歌」を口ずさみながらマヨネーズを取り出した。
マヨラーという人種がいるようにマヨネーズは人を魅了する神の調味料だ。
チイ姉も御多分に漏れず超マヨラーだった。

「おいチイ姉、まさかマンゴープリンにかけるつもりか？」
「そうだけど？」

マンゴープリンとマヨネーズが合うわけねえ。頭文字のマしか合ってねえよ。

「……マヨネーズってカロリー高いんだよね」

何故かアリアがチイ姉に絡んで来た。

「チイ姉、マヨネーズばかり食べてたら太っちゃうよ！」
「大丈夫だよ。私、いくら食べても太らないし」

――ピシイッ
俺は確かに空気が割れる音を聞いた。

「トラックの運ちゃんって意外とカロリー使うんだよね。マヨネーズでも喰わないとやってられないよ」

ブリブリブリ、と濁音を響かせてマンゴープリンを凌辱するマヨネーズ。
チイ姉はそれを美味しそうに食べている。味覚狂ってんじゃねえのか？

「あれ？　もしかしてアリア、太ったの？」
「うわあああぁぁん！！」

直球すぎるチイ姉の言葉にアリアは泣きながら居間を飛び出してしまった。
哀れな……やはり、家の女性陣に慈悲の心など存在しねえな。

「ちょっとチイ姉ちゃん、酷いよ。アリ姉ちゃん体重増えたの気にしてたのに」
「あはは、ごめんごめん。でも体重ってそんなに気になるもん？」

嫌みすぎる……絶対にその言葉をアリアに浴びせるなよチイ姉。
アイツ、再起不能になるぞ。

「そもそも体重が増えるのは運動しないからだよ。アリア、あんまり運動しないだろう？」
「そうだな……確かにその通りだ」
「私みたいなスレンダーボディになりたかったら、しっかり運動しなくっちゃね。どう、カズマ？　うふ～ん、私のボディラインにメロメロでしょー？」
「はいはい、メロメロっす」

ない乳のくせに……ウゼえ。
チイ姉、俺は大草原より双子山の方が好きなんだぜ。しかしシホミ姉ちゃんもアリアも大きいのに、なんでチイ姉だけ小さいんだろうな。へっ、まさにチイ姉　――

「カズマー」
「な、なに？」

チイ姉が鬼の形相で俺を睨んでいた。

「あんた、今失礼なこと考えたでしょ！」

な、なんで分かる？　チイ姉はテレパシーでも使えるのか！？

「あんたの考えなんてお見通しよ！　お仕置きしてやる！」

「ゆ、許してくれ、チイ姉！」

「やっぱり考えてたな！」

「ひ、酷え！　カマかけやがったな！？」

完全に墓穴を掘ってしまった。

チイ姉は飛びかかっきて押し倒し、うつ伏せになってしまった俺の背に腰を降ろした。そして顎に手を掛け、腰を支点に俺を捻り上げる。

「キャメルクラッチ！」

「ぎゃあああああああぁっ！！」

痛え！　なにが痛いって全部痛え！　このままでは○ロッケンマンになっちまう！？

ＤＶ（ドメスティックバオレンス）だ！　こんなのＤＶ以外の何者でもない！

「ひひひ、いい運動になるっしょ？」

もちろん、チイ姉だけはな！？

俺には何のメリットもないこの仕打ちは、結局俺が謝るまで続けられた。酷いもんだ。ヴァルストークファミリーに置ける俺の立ち位置なんてこんなもんさ……。

理不尽だよー理不尽だよー。何が理不尽って？　この家の女共！

男に生まれたってだけで、妹には邪険にされ、姉には玩具にされなくちゃいけないの？

畜生、いつか目にモノ見せてやる……覚えてろ。

……それにしてもアリアの奴、体重気にするなんてやっぱり女の子なんだな。しかしあれだけ食べて動かなければ太るのは自明の理……けどなあ、俺にはアイツが運動している姿が想像出来ないんだ。だって漫画や小説を書いて、それを売って金もうけしようと考えるような女だぜ？

それも１８禁な。

アイツが走ったりしてる姿を思い浮かべるのは無理だわ。

俺みたいに日々運動している健康体と違って、アイツは文字通り心身共に不健全だからな。

痩せたきゃ運動するんだな……ま、俺の知ったこっちゃないけどよ……

「人生相談のりなさいよ！」

チイ姉の呪縛から解放された俺が自室に戻ろうとすると、アリアが仁王像のように扉の前に立ちはだかっており、以前聞いた事がある台詞を叫んできた。

「聞いてるの、バカカズマ！？」

「……チッ」

ウゼえ。

またかよ？　このフレーズは前にも聞いたぞ。しかもその後面倒事に巻き込まれたんだよね……嫌な思い出だぜ……ふう。

やれやれ、そろそろ兄と妹の立場の違いというものを教えてやらねばならないようだな。

はは……

ヴァァァァァッカじゃねえの！？

どんな答えがお望みだ？　嫌だか？　ＮＯか？　ベーだ、か？

失せろ腐れシスコン女か？　どれでも好きなので答えてやるぜ！！

「……なんだよ？」

でも口に出せない俺は、ほぼ間違いなくヘタレだろう……ああ、情けね。

この一家にいると女の命令に逆らえない体になんのかな？　俺は熱く燃える男の中の男になりたいのに、ああ、道のりは遠く険しい……。

「バカカズマ、ダイエット付き合いなさいよ！」

「……」

「返事は！？」

「……へーいへい」

やってらんねえ。

まったく、なんで家の妹様はこんなに自己中心的なんですかね？

俺のこと従者かなんかと勘違いしてんじゃねえの？　これで学校では人気者で友達も多いってんだから、猫被り恐るべしである。おそらく、面の皮が５ｃｍぐらいあるんだろうぜ。

「で、今度はなにをすればいいわけ？」

「あんたバカァ？　それを考えるのがアンタの役目でしょうが！」

うふふ、ぶっ殺そうかなコイツ？
某人気女性キャラの台詞だが、好意を持ってない相手言われても不快でしかねえな。

「あーそう」

妹様に言われて、俺はない脳味噌を巡らせてみた。
で、行きついた結論。
みんな聞いてくれ。俺はこの不毛な大地であるヴァルストークファミリーで生活して悟ったことが一つある。

――結婚するならな、相手は外見じゃなく中身で選ぶべきだね！！

ここ大事、超重要！
アリア見てると心底そう思うぜ！　恋人ならいいけど、家族になったら常に顔合わせるわけだろ？　外見なんて四六時中見てたらすぐ見飽きるね！
断言しよう、アリアと結婚する男は可哀想だぜ！！　……でも、俺も彼女欲しい。なんか沈むな……ハァ。適当に相手しとこう。

「……適当に運動でもすればいいじゃん」
「運動？　運動ってなにすればいいの？」
「脂肪燃やすにはやっぱ有酸素運動だろ？　じゃあジョギングでいいんじゃねえの」
「ハァ？　……もしかしてアンタ、夜道をあたし一人で走れって言うの？　信じらんなーい、痴漢に襲われたらどうすんのよ！？」

……どうしろってんだ？
俺はアリアが痴漢に襲われようが、強姦魔に襲われようが、補導

されようがどうだっていいね。事が起こった場合に事後処理が面倒くさくなるのと、ジョギングを提案した俺へ非難の目が集中するだけだからな……。

チッ、面倒事は嫌なので協力してやらんこともない。感謝しろ妹様め。

「……分かった分かった、付き合ってやるから……」

「運び屋心得『一度言った事は必ず守れ、逆に言わせれば勝ち』よ！　破ったら承知しないからね！！」

……荷物一度も運んだ事ねえくせに……運び屋心得語るんじゃねえ！

また言質取られちまったな。俺、なんだかアリアの手の上で踊らされてるみたいだ……

「いい？　明日の学校終わるまでに、いいダイエット方法考えときなさいよ！　絶対だからね！！」

「はいはい、分かりましたよ」

へこむ……俺の人生これでいいのだろうか？

●

【ヴァルストーク営業日誌　7月7日】

翌日　――

「バカカズマ、なによこれ？」

ジェネ高から帰宅した俺をアリアは侮蔑を持って迎え入れてくれた。

俺たちは実家のすぐ前におり、準備されている道具は愛機――ヴァルホーク号改。配達物を詰む荷台以外にも、サイドカーを増設し無理なく2人乗りができるように工夫してある。

昨日の夜、俺が導き出した効率的なダイエット方法、それは――

「今日配達が1件あるんだ。だからアリア、お前が自転車便で配達しろよ」

「ハァ？　なんであたしが？」

それは自転車便！　俺、頭悪いからな。急に新しい方法考えるなんて無理。

しかし案の定、アリアは眉を顰めて反論してきた。

「配達なんてアンタがすればいいでしょ」

「ふふ、なにも分かってねえな……」

アリアの反論は想定の範囲内だぜ。

コイツ、俺がなにか言うと一言目には侮辱か嘲笑か文句しか言わねえからな。こんな展開になるのは目に見えていた。

まったく、気に入らないことには取り合えず噛み付く猛犬みたいな女だと思う。

「いいか、アリア。ダイエットで重要なのは生活習慣の改善だ。食事の方がミヒロがやってくれるとして、お前運動の方はどうするんだよ？　一人でジョギングするのは嫌なんだろ？」

「当たり前じゃない！　襲われたらどうすんのよ！？」
「じゃあ自転車便だ」
「なんでそうなるのよ！？」

金切り声を上げるアリアは喧しくて仕方ないな。いいだろう。俺が、授業中に考えたロジックでねじふせてやるぜ。

「なあアリア、脂肪を燃やすのに効果的な運動がジョギングとかの有酸素運動だって知っているか？」
「あんたバカァ、そんなの常識じゃん」
「（イラッ）……だからさ、自転車便だって自転車漕いでるわけだから有酸素運動だろ。ダイエットにはピッタリだろうが」

どうだ、この完璧な論理展開は？
ダイエットには有酸素運動→自転車を漕ぐ、という非常に明確で分かりやすい理由づけである。そして自転車便はほぼ毎日あるから、荷物積んで配達続ければ痩せられねえ道理はない。
しかしアリアはまだ不満げに頬を膨らませている。俺の完璧な理論に文句があるらしい。

「だからー、なんで自転車便なのかって訊いてんの。それだと別にサイクリングでもいいわけでしょ」
「ふっ……」

バゥアァァァァカッ、じゃねえの！？
そんなの俺が楽するために決まってんじゃん！
ダイエットにかまけて自転車便を押しつければ楽できるし、空いた時間でコミックの金魂さんを読み返したりできるだろう？　もちろん、俺がな。
はっきり言っておく、俺はアリアが大嫌いだ。

お前の得になるようなこと、素直に実行してやったりするものか！　運び屋心得を守りつつ、普段の恨みをココで晴らしてくれよう。
夜なべして考えたロジックでアリアの説得を試みる。

「だって自転車便は毎日あるだろう？　毎日続けなければいけないってこと、つまり義務だな。やらなくっちゃいけないことが、そのままダイエットに繋がるんだ。合理的だろ？」
「でも……」

まだ不満があるのかアリアは視線を泳がせ、唇を尖らせている。
はいはい、お前の言いたい事は全部お見通しですよ。
この間の事件で判明した事だが、この妹様は意外と臆病だ。
小説持ち込みの一件で面接するのをビビっていたように、一人で自転車便を担うのが不安なんだろうな。普段の強気な態度は臆病な内面の裏返しなのかもしれん。
俺への仕打ちは裏返しでも何でもなく、完全に素だろうけどな……。

「分かってるって。初めからお前一人で行かせたりしねえよ」
「ホ、ホント？」

アリアが安心したような表情を見せる。
俺だって運び屋の端くれ、中途半端な仕事はしたくないし、いきなり素人を放り出すような真似をしたりしないぜ。それに一人にして以前みたいに厄介事にでも巻き込まれたら面倒だしな。
……もちろん、この俺の言葉には裏がある。
日頃の恨みを晴らすための秘策がな、ククク。

「ふっ、お兄ちゃんに任せな」
「キモ」

……チッ、即答かよ。可愛げのない妹には恨みは3割増しでお送りすることにする。

「行くぞアリア、あまりお客さんを待たせる訳にいかないからな」

「ま、待ってよ」

俺はジェネ高から帰って即効でカスタムしたヴァルホーク号のサイドカー部分に腰を下ろした。無論、サイドカーにはペダルなど存在しない。補助動力にもならない完全なるお荷物だ。

聡明なみんなには、俺の言っている意味分かるよね？

「ちょ、ちょっとバカカズマ！　なんでアンタまで乗ってんのよ、重いじゃない！」

「しょうがねえだろ？　チャリはヴァルホーク号しかないんだからさ」

ククク、アリアの唖然とした表情ったらないね。

トドメとばかりに、俺はにっこりと爽やかな笑顔を浮かべて聖母マリアのように優しく言ってあげた。

「それとも1人で行く？」

「う　――――　痩せたら覚えてろ、バカカズマ！」

ラジャー了解、今すぐに忘れるであります。

俺はアリアの言葉を早々に忘却の彼方へと流した。

一方アリアは、俺にやり込められるのが悔しくて仕方ないが、一人で自転車便をこなす自信もなく俺の協力が得られないのは困るし、でもそれはそれでプライドが許さないといった何とも複雑で神妙な顔つきをしていた。

ふふん、実に滑稽で結構だ。
運び屋心得その7「受けた依頼は必ず果たす、金と恩と恨みは必ず返す」だぜ。こんな爽快なフレーズ聞いた事がないね。恨みも返せて気分爽快！　俺は顔に出さずに心の中で笑うのだった。
アリアは渋々座席に付く。

「カズマ・アーディガン、ヴァルホーク号改、出るぞ！！」
「ううぅぅ……」

エンジンは顔を真っ赤に変色させながら、ヴァルホーク号は亀の如き早さで走りだす。

――ざまあみろっ！！

ゆっくりと流れる風景が実に雅（？）だぜ。
これに懲りたら兄ちゃんの扱いを反省するんだな、アリア。
俺たちは荷物を取りに一路会社を目指すのだった。

非常に残念な事に荷物の重さは１－２ｋｇ程度であった。
普段の荷物の量だと、ヴァルホーク号の荷台にリアカーくくりつけて引いていくんだが……俺の両手に収まる大きさのブツにリアカーを使うわけにいかないな。負荷が足りん。まことに遺憾である。

「ひーひー」

ま、それでもアリアには十二分に効いているようだが。
顔面は紅潮して息は弾み、額どころか全身汗だくになっている。俺って結構筋肉質だから５０ｋｇはあるもんね。重いペダルを踏むたびに筋肉はビンビンと刺激を受け、カロリーはガンガンと消費されているだろう。実にエクササイズである。
これを毎日続ければ確実に痩せるだろう。

「ほらアリア、もっとスピードあげろー」
「こっ……はぁはぁ……バッ……ゲホゲホッ！」

もはや悪態をつく余裕もないようだ。実にいい気味。
しかし出発時に比べてスピードが落ちてきたな。このペースだと配達時刻を大幅にオーバーしてしまいそうだ。……うーん、それにちょっと可哀想になってきたな。今日のところはこれぐらいで勘弁してやろうか ――

「おーい、カズマ」

―― とした時、大型トラックが俺たちの隣に付けて来た。ヴァルストーク号だ。
運転席からチイ姉が顔を出してくる。

「アリアと2人っきりでなにやってんの？　ひひひ、デートか？」
「そう見える？　なら眼科行った方がいいぜ、チイ姉」

下世話な笑みを浮かべるチイ姉、昔から俺のことをからかったり虐めたりするのが趣味のような人だから気にはならない。
込められたニュアンスは最低でも笑顔だけは飛びきり上等だからな。嫌な気分にもならないし。

「あれ？」

チイ姉が眉をしかめた。

「アリにゃん、様子変じゃない？」

「え？」

アリアの秘密も知らないのにＨＮ（ハンドルネーム）を当てたチイ姉の声に釣られて振り向くと、目の焦点が合わなくなっているアリアがいた。

目が虚ろで何処を見ているか分からない。

あれ？　ヤバくない？　そう思った瞬間には、アリアの体を俺の乗るサイドカーの方に倒れて来た。

「お、おい、アリア！　大丈夫か!？」

「……」

返事がない、ただの妹のようだ　――　じゃないッ！

しまったやり過ぎた。アリアは普段から運動している俺と違ってインドアだからな。そこんとこ理解して限界まで虐めてやろう、なんて遊び心を持ったのがまずかったか。

気絶してしまったアリアを受け止める俺を見て、チイ姉はヴァルストーク号を路駐する。

降りて俺たちの方へ歩いてきた。

「ど、どうしようチイ姉？」

「たくっ……そんなだからバカカズマって言われるんだよ。反省しな」

「痛ッ！」

呆れたような言葉の後、チイ姉の軽い拳骨が頭に降り注いだ。
ほんの少し視界が歪む程度の衝撃……痛かった。肉体的にじゃなく、精神的にだ。普段から暴力的なチイ姉だからこそ余計に痛かった。

「あー、多分脱水だわ。この子朝からあんまり食べてなかったからね。どうせ学校でもご飯食べてなかったんじゃない？」
「え、さ、さあ？」

そんなの全然見てなかった。だって俺食事の時アリアとろくに話しないし……ていうかチイ姉、良く見てるな。
茫然（ぼうぜん）とする俺を尻目に、チイ姉はアリアをおぶって言った。

「アリにゃんは私が連れて帰るから、アンタは自分の仕事しな」
「でも……」
「大丈夫」

チイ姉は俺に満面の笑みを向けて言った。不覚にも俺は、その笑顔に安堵感を覚えてしまったんだ。

「元々健康だし若いんだ、水分とってしっかり休めば大事にゃならないよ。だからアンタは自分の仕事しな」
「……」
「……ふう。カズマァ！！」

そして答えを返せないでいた俺を、チイ姉は今度は怒鳴りつけた。

「運び屋心得その7、言ってみな！！」
「『う、受けた依頼は必ず果たす、金と恩と恨みは必ず返す』……だろ？」

「そうだ。分かってるね、これ以上は言わないよ」

本当にそれだけ言うと、ニカッ、と聞こえてきそうな笑みを見せてチイ姉は背を向けた。アリアを助手席に乗せ、一度も振り返らずにヴァルストーク号で去ってしまう。

……後には、玩具みたいなサイドカーに乗った俺だけが残された……

「……くそ」

なんて様だ……なんて様だカズマ・アーディガン。

男の中の男を目指す？　……はは、お笑いだね。

今の俺はそれから最もかけ離れた存在じゃないか……中途半端な仕事はしたくないなんて、カッコつけて、心得の意味を都合の良いように解釈して吐き違えて、俺を頼って来た妹をチッポケな感情から傷つけてしまった……。

比べて、チイ姉は小さいけど大きい背中。

俺は……

「……本当に、どうしようもない程ガキだな……」

俺はヴァルホーク号改のサドルに腰を移しペダルを漕いだ。サドルやハンドルが妙に温かい。せめて荷物だけは届けなければと思った……。

配達を終了して居間に入るとアリアの姿はなかった。

自室で休んでいるらしい。結局、夕食にも顔は出さず、誰も俺の事は責めなかった。

……翌日、アリアは体調を崩して学校を休んだ。

【ヴァルストーク営業日誌　7月8日】

俺がジェネ高から帰って来た時も、アリアは自室に引き籠ったままだった。

まだ体調は戻らないらしい……鍛え方が足りない。はっきり言って情けないと思う。

しかし俺にそれを口にする権利はない。

原因の一端は、俺のチッポケすぎる復讐心から来てるんだから……。

アリアの罵声が聞こえないと寂しい……と思う程マゾではないが、アイツがいないと張り合いがない。悪態付かれて無視されるのが日常化していたからな……我ながら情けないが、その環境に体が慣れてしまっているようだ。

……今までの冷戦関係のままでいい、せめて顔を見せて欲しい。

もちろん、俺の中の罪悪感を消すためだけでもいい。

顔を見せだけで、その後は自室に引っこんいてくれても構わない。

俺は、アリアが大嫌いだぜ……でも気分悪いんだよ……顔を見せるだけでもから、早く元気になってくれよ……。

【ヴァルストーク営業日誌　7月9日】

次の日、アリアは食卓に顔を見せた。

「おい、食わないのかよ？」

「……」

当然のように俺たちの間に会話はない。

食欲がないのか普段の半分も食事に手を付けず、悪態も付かずにジェネ高へと出発してしまった。

学校が終了し、自転車便を終えた俺が帰宅すると、運動着に着替えて家を出ようとするところだった。

「どこに行くんだよ？」

「……キモ、アンタには関係ないでしょ」

……チッ、少々元気が足らないがこれは復調の兆しと捉えていいのかね？

生意気な妹様は外へ出るとゆっくりしたペースで走って行ってしまった。どうやら、ジョギングに行くらしい。

あれだけ1人は嫌だと抜かしていたくせに、結局はダイエットの王道に結論が行きついたようだ……別に悔しくなんかない。アリアには自転車便は無理だった。それだけのことさ。

そうそう痴漢に襲われるわけもなく、アリアは無事に帰宅し夕食に顔をだしたが、食はいつもの半分程度だった。

【ヴァルストーク営業日誌　7月10日】

今日もアリアはジョギングに出ている。

しかし夕食の時間になっても食卓にアリアの姿は見えなかった。

「ねぇお兄ちゃん……アリ姉ちゃん、帰って来るの遅いね」

「……そうだな」

出発してからゆうに2時間は経過していた。

遠出したものの疲れて歩いて帰って来ているのか……それとも、またなにかあったのか。後者だとは思いたくないけどなぁ。

と思う俺の前に、扉を開けて居間に侵入してくる影が一つ ――

……

「ただいマンボー♪」

――……チイ姉だった。

仕事帰りの風呂を済ませたのか、湯気と色香をごちゃ混ぜにしたタンクトップ姿で冷蔵庫を漁り始めた。

「チイ姉、親父たちは？」

「んー、まだ残業してるみたいよー。経理的な。私、その方面手伝うの無理だからさっさと帰って来た」

薄情だなおい。

チイ姉が取り出したのは結局マヨネーズで、「最終融合承認だ～」と作詞作曲自分の「マヨネーズの歌」2番を口ずさみ、ミヒロの作った夕食にそれをブチマケル。

ぶりぶりぐちゃぐちゃ。夕食とマヨネーズがフュージョンし、もはや境界線が分からなくなる。完全に夕食レイプだぜ、チイ姉……。

「なぁ、チイ姉？」

「なにー？　うーん、デリシャス！」

白米にもマヨネーズかけて食べるチイ姉に俺は訊いた。

「……アリア、ジョギングに出てまだ帰ってこないんだ」

「……」

「なにかあったと思うか？」

チイ姉は無言で答えなかったが、しばらくすると箸を置いて俺を見た。

「ねえカズマ、アンタはどう思っているの？」

「……？　どうって？」

「あの子になにかあったと思う？」

「……うん」

おうむ返しなチイ姉の質問に俺は頷いた。

勘、だけどアイツを1人にしておくと、なにかとトラブルに巻き込まれやすい気がする。現にクリティックの時もそうだったし、あの妹様は巻き込まれ体質なのかもしれない。

そういや痴漢のことをやけに気にしていたっけ……いやいや、流石にそれはないだろう。

でもジッとしていると……イライラしてくる。

「じゃあ何故カズマきゅんはー、こんな所で呑気にご飯食べてんのかな？」

チイ姉が言った。

「アリにゃんのことが気になっているんでしょ。こんな所で燻ってないで、迎えに行ってやればいいじゃん」

「いや、でもよチイ姉……アイツ、俺のこと大嫌いなんだぜ」

ニコニコと笑うチイ姉に言い返す。

「この間もやりすぎちまったし……俺、絶対また嫌われてるって」

「……」

チイ姉は笑みを浮かべて黙って聞いていた。心なしか眉がピクついている。

「そりゃ元々嫌われてたけど、さらにって感じかな？　そこは別にいいんだぜ。俺だってアリアなんて大っ嫌いだしな」

「……」

「いつもいつもキモッ、とかウザッ、とか言ってくるしよ、でも肝心な所では人のこと頼って来るし、それが上手くいかなかったらさらに文句言ってくるし、我儘だし言う事聞かないし、ハッキリ言って俺はアイツのことが嫌いだぜ」

「……」

「でも気になるんだよ。けど俺が探しに行って見つけても、アイツに文句言われるだけだと思うんだ……なぁ、チイ姉。俺はどうすればいいと思う？」

「……ぷっ」

チイ姉の口から空気が吹き出る音。なんだろう、と顔上げると

――

「ギャハハハッハハハッハハハハッ！！　あはははははっはははははっ！！　ひぃーひひひひひひひひっ　――　ッ！　ゲホゲホッ！！　だはははははっ！！」

――チイ姉が爆笑していた。顔が真っ赤で、苦しそうにむせ込んでも笑うのを止めない……

「な、なんだよ!?」

「ひひ、いやー悪い悪い。カズマがあんまり可笑しな事いうからさー、ぷぷっ、死ぬかと思った」

……酷え。

俺の言ったことは変だっただろうか？　チイ姉は思い出し笑いを堪えるように口元を押さえている。……ケッ、やはりこの家の女共は理不尽だ。

相談する相手を間違えたようだな、カズマ・アーディガン。

どうもチイ姉は味覚だけでなく、聴覚まで狂っているらしい。

俺が空になった食器を流しに片しに行こうとすると、まだチイ姉は笑みを浮かべていた。

「ホント、アンタたちは仲が良いわね」

「はぁ？」

世迷い言をチイ姉がほざいていた。

「似た者同士って言うか、見てて飽きないよ」

「チッ……」

そういう意味か。俺は見世物小屋のサルじゃねえんだぞ？　あんまり見てると金要求すんぜチイ姉。

「素直になんな」

唐突にチイ姉が言った。

「なんだよ、それ？」
「さっきの質問の答えさ」
「はぁ？　意味わかんね。俺のどこが素直じゃねえって言うんだよ」
「ひひ、自覚ないところもキャワイイねー、カズマちん」

チイ姉はいつも俺のことを子ども扱いしやがる。
歳だって４つしか離れてないのにさ、不当な扱いには断固抗議したいと思うね。……どうせスルーされるから言わないけどよ……。
それにしても素直じゃないってのはムカつくなぁ。
その言葉はアリアのためのモノであって、俺のモノじゃないのにさ。
……チッ、やってらんねえ。

「ミヒロ、あれ貸してくれよ」
「あ、『キャレットちゃん』だね。待っててお兄ちゃん、部屋から取って来るから」

ミヒロは発信器探知端末「キャレットちゃん」を取りに部屋へと走って行った。
前回の事件で判明したことだが、ミヒロはアリアや俺の携帯に発信器を仕込んでいるらしい……なんの為かは、残念ながら怖いので訊けない。俺のヘタレ。
俺は携帯をバラして確認してみたが、それらしきモノは発見できなかった……恐怖である。

「カズマ」

チイ姉が白米にマヨネーズを追加しながら声を掛けて来た。どうでもいいがマヨネーズは既に山盛り、マヨネーズご飯ではなくご飯

マヨネーズになっている。

「困ったらいつでも連絡していいからね。力になるよ」
「でもよ……」
「遠慮すんなって。私はアンタの姉ちゃんなんだからさ」

チイ姉はご飯マヨネーズを頬張りながら破顔する。
チイ姉の笑顔は飛びきり上等で、俺はこのアホだけど、頼りがいのある姉ちゃんの笑い顔が大好きだった。
それにしても姉ちゃん、ね。
チイ姉は俺の姉だ、家族だ。アリアだってそうさ。
はっきり言って俺はアリアが大嫌いだけど、それでもアイツは俺の妹で家族なんだ。それはきっと、忘れちゃいけない大事な事なんだ。
俺はガキだ。
加えてバカだ。バカな事して、妹を倒しちまう程度の半端ないバカさ。
それでも困っているかもしれない家族を見過ごすなんてできねえ。
俺がバカでもそこは譲れねえ。
だから俺はアリアを探しに行く。
断っておくがアリアの為じゃない。アイツには自転車便の時の借りがあるからな、早く返しておかないと気分が悪い。あくまで俺自身の為だ、文句あっか!?

「お兄ちゃん、お待たせ『キャレットちゃん』だよ」
「サンキューミヒロ。じゃあ行ってくるぜ!」

俺はミヒロから赤い人形のような端末を受け取ると、愛機ヴァルホーク号を駆り、発信器を頼りに家を飛びだした……

●

前回同様、「キャレットちゃん」は恐ろしいほど正確にアリアの居場所を教えてくれた。

俺が辿り着いた場所は「エリア」内にある小さな公園。

夜になっているため公園内で遊んでいる子どもの姿は見えず、ブランコに揺られる変な仮面を付けたおっさんがいたが関係ないので無視することにした。

発見したアリアはベンチに腰掛けて頭を抱えている。

「こんな所でなにやってんだよ？」

「……バカカズマ」

俺の声にアリアが顔を上げた。

「2時間以上も外でブラつきやがって、俺はしてねえけどミヒロやチイ姉が心配してたぞ。飯もアリアの分取ってあるから早く来いよ」

「……ご飯」

かなり疲れているのか、虚ろな瞳で俺を見るアリア。

ベンチから腰をあげようとしないので起立を促そうとすると、それよりも先に、ぐぅぅぅ～、という間抜けな音が返って来た。

もちろん、アリアの腹からである。

「……何処かで虫が鳴いているみたいね」

お前の腹の虫がな。
バツが悪そうに顔を背けるアリアは少々元気がない。しかし元気の無さを除けばいつも通りの妹様のように思える。
食事をしっかり取ればきっと元に戻るだろう。

「たくっ、ダイエットだがなんがか知らねえけど、動けなくなるまで食事抜いてんじゃねえよ。
それにジョギングも痴漢に襲われるからイヤって言ってたのに、飯抜きで疲れて外で動けなくなるなんて格好の獲物だぜ」
「……うっ、だって……」
「だってじゃねえよ」

飯抜いてまで痩せたいという気持ちが俺には理解できない。
旨い飯食って、元気でいる方が断然良いと思うぜ。自然だしな。
だから俺は言ってやることにする。

「いいじゃねえか、少しぐらい太ってたって。見た目全然変わんねえんだし、なんでそんなにこだわるだよ?」
「……ホント?」

アリアが俺の顔をじっと見てきた。
なんだコイツ? 俺の事嫌いなくせに、なんで俺に意見なんか訊いてくるんだよ?
アリアは体重増えたと自己申告していたが、俺から見ればなんにも変わってない。顔は元々少し丸顔だし、お腹が出てるという印象を受けたこともない。胸も大きいし、十分なナイスバディだと思うんだけどな……。
……ヤベえ。妹の体マジマジ見つめて評価するって、俺、まるで変態みたいじゃん。
へこむなぁ……でもここで回答間違えたら、さらに悪い方向に進

んでしまいそうだ。慎重に答えよう。

「嘘ついてどうすんだよ？　パッと見で全然分かんねえし、言われきゃ体重増えたなんて知らなかったぞ」

「……鈍感。そんなのバカカズマが鈍感だからだよ」

「あ、酷え」

「チイ姉ちゃんは気づいてたでしょ……それにシホミ姉ちゃんはスタイルいいし、チイ姉ちゃんはスレンダーじゃん？　だから、あたしだけがその……少し……その、ね？」

お腹を触るアリアを俺は一瞥して、

「バーカ」

と罵ってやった。途端にアリアの顔色が変わる。

「バ、バカって言った！　バカカズマのくせに生意気ー！」

「あーあー、もううるせえなぁ」

生意気なのはどっちだよ？

だいたいさぁ、チイ姉の言葉じゃねえけど気にしすぎなんだよ。自意識過剰、とまでは言わないにしても気にしすぎだと思う。

そもそも食が細くて痩せている女の子よりも、しっかり飯食って、多少ふくよかで、元気一杯の女の子の方が魅力があると俺は思うね。

……勘違いすんなよ。別にアリアのことじゃねえからな、ボケ。

他の子は他の子。アリアはアリアだ。比べて自分は劣っていると考えるのは自由だろうけど、それに縛られてちゃあ駄目だろ？

「アリア、トレイラー心得その6、知ってるか？」

「うん。『何事にも束縛されず自由であれ。無論、この心得にも』

でしょ？」
「チイ姉はチイ姉、シホミ姉ちゃんはシホミ姉ちゃん、そんでお前はお前だろ。姉ちゃんに比べて自分はどうだ、なんて考えに縛られることはねえよ。お前はお前、それでいいんだ」
「……なによ……今日のバカカズマ、ホントに生意気ぃー」
どうやら、俺はまた妹様の機嫌を損ねてしまったらしい。唇を尖らせてむくれていた。
ハハ、ホント面倒臭い女だぜ。
「少々太ってても見苦しくなきゃそれでいいんだよ。太ってたらお嫁にいけないとかアホなこと思ってるわけじゃねえだろ？」
「……サイッテー」
あれ？　俺、なんか悪い事言った？
まあここで問答してても仕方ないし、はやく家に帰る事にしよう。
俺はアリアに手を差し出した。
「帰ろうぜ、アリア」
「……うん、バカカズマ」
俺はアリアの手を取り、ベンチから引き起こした。しかしこんな時でもバカ呼ばわりか？　でも、キモいと言われなかっただけ、以前の俺たちの関係よりマシなってるのかもしれないな。
俺は尊大な妹様を荷台に乗せて、ヴァルホーク号を漕ぎだした。
別に重くない。この体重をアリアは気にしていたのか？　バカみたいだね、でも口にするとまたアリアが怒りだし説得が無意味になるので声には出さない。
しかしお嫁にいけないね……あれ？　……そういえば昔にも……
あー、思い出した……

「ねえ、バカカズマ」

アリアが荷台で呟いた。

「さっきお嫁さんって言ったよね？」

「言ったけど」

「それで少し思い出したんだけど……」

「うるせえ、それ以上喋るな……恥ずかしいだろが」

「ふふ、そうね」

笑うと、アリアは俺の背中に体を預けてきた。

軽い。軽いね。俺の妹様はクソ生意気で我儘で乱暴者で臆病でどうしようもないシスコンだけど、この軽さを感じるとやっぱり女の子なんだなと思う。

……それにしても……

幼い頃、約束を交わしたのはあの公園だったのかもしれないな。

『そのときは、おにいちゃんのおよめさんにしてくれる？』

……チッ、我ながらハズい記憶だぜ。

運び屋心得その１０「思い出は何にも代えがたい、だから金になる」か……でもなぁ、この思い出はできれば忘れたままでいたかったぜ。

金にもならんし、恥ずかしいだけだしな。

約束した相手が背中に居るってのも気まずくってやり場のない気

持ちにかられるぜ。
決めた。忘れる。それでＯＫだ ――

「お兄ちゃん」
「な、なんだ？」

突然かけられたアリアの言葉に驚いた。
だって、いきなり殊勝に兄と呼ばれるとは思ってなかったし……くそぅ、心臓に悪い妹様だぜ。せめて心の準備ぐらいはさせてもらいたいね。
振り返ると、アリアはチイ姉に似た飛びきり上等な笑顔を浮かべていた。

「お腹すかない？　どっか寄って帰ろうよ！」
「……へっ、とんだ腹ペコ娘だぜ。いいよ、また倒れられちゃ敵わないし、どっか連れてってやる」
「やったー、奢りだー。ありがと、お兄ちゃん！」
「は、なんでだよ！？」

ホント、都合のいい時だけお兄ちゃんって呼ぶ奴だな。
結局この後、商店街で「にんにくラーメンチャーシュー抜き」を振る舞う羽目に……今月小遣いピンチなのに……ケッ、都合のいい時だけ妹面しやがる妹様め……まったく、敵わねえぜ。
俺の人生これでいいのだろうか……なんて。
実は満更でもない自分がいるのが非常に悔しかったりするのであった……へこむぜ。

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。
『エリア』には個性豊かな人間が沢山いる。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない

俺たちゃヴァルストークファミリー　～ダイエットは危険の香り～（後書き）

＜キャラクター紹介＞

カズマ・アーディガン：ジェネ高2年生、ファミリーの自転車便を担当している。アリア以外の家族の事を大切に思っているが、いざという時にはアリアにも手を貸してあげるお兄ちゃん。悩みは彼女ができないこと……絶賛彼女募集中！

アリア・アーディガン：ジェネ高2年生、カズマの双子の妹。最近の悩みは体重が増えた事……カズマを巻き込んでダイエットに勤しむ。ちなみに妹大好き、ミヒロラブ！

ミヒロ・アーディガン：若干１０歳にして、家事全般をそつなくこなすファミリーの末っ子。最近の悩みは中々背と胸が成長しないこと。チイ姉みたいな胸にはなりたくないと思っている。

アカネ・アーディガン：２０歳、ファミリー唯一のトラック「ヴァルストーク号」の運ちゃんをしている。最近の悩みは特になし！分かりやすい特徴を上げると、超マヨラー、マッチョ大好き、キモカワ人形好き、プロレス好き（主に被害者はカズマ）など。カズマにとっては頼れるねーちゃんである。

＜次・回・予・告＞

キョウスケ「ククククッ……！」

エクセレン「……」

キョウスケ「フハハハハッ！」

エクセレン「キョ、キョウスケ……？」

キョウスケ「とうとう来たぞこの時が！　どれだけ待ち望んだことか……フハハハハッ！」

エクセレン「あーん、キョウスケが壊れちゃったよう……！」

キョウスケ
「そんな訳で次回予告だ！
貴様らぁ、俺の名を言ってみろ！
忘れたとは言わせんぞ！　もし忘れても、今から言うから近くに寄って、耳をほじって聞くんだな！！
俺の名前はキョウスケ・ナンブ！　次回の話の主人公だ！！
次回スパロボ学院、『賭博黙示録キョウスケ第３話　～やったぜウルフ！　誰が為に鐘はなる？～』に、ファイナルアルティメットジョーカー！！（意味不明）」

エクセレン
「『世界平和は家族団欒の後で』もよろしく！　原作何巻のパロか分かるかなー♪」

まず初めに、更新遅れて申し訳ありませんでした！
当初の予想でも3，４日で更新するつもりだったのですが、１週間

以上空いてしまいましたね。
言い訳ですが忘年会やら、所属チームの取り組みとか評価で帰ってから執筆する気にならんかったのです。
後、遅ればせながらスパロボLをやってたりするのも一つの原因ですが……

感想を下さっている皆さんには大変感謝しています。
要望も一件貰ったことですし、それもいつか短編にしてみたいと思います。
しかし師走、やらなければいけないことが詰まっているので更新は遅れると思います。どうか、ご容赦を！

鋼鉄の駄狼３　～やったぜウルフ！　誰がために鐘はなる？～（前書き）

＜注・意・事・項＞
絶賛、キャラ崩壊中！
ギャンブルスキーな主人公がキャラ崩壊しています。
それでも良いという方はどうぞ！！

あと後半超展開なので注意です。少しホラーも入っているかも？
ちなみに今回登場するギャンブルはパチンコと麻雀です。

注意：ギャンブルは程々に。のめり込みすぎると身を滅ぼします。

鋼鉄の駄狼3　～やったぜウルフ！　誰がために鐘はなる？～

幸運は神から与えられるモノだろうか？

俺の名前はキョウスケ・ナンブ。

なぜか高校の密集する地域「エリア」一のマンモス高校、ＯＧ高等学院　――　通称、ジェネ高の３年生だ。

幸運。

運が良い事、廻り合わせが良い様……幸せ。

そう言う事を表す言葉らしい。

だが、俺は神の与える幸運を否定する。

神から与えられる幸運なんて意味があるだろうか？

幸運は、自分の力で掴み取ってこそ意味があるモノだろう……俺はそう思う。

そもそも、この世界に神なんて存在がいるのだろうか？

神が生み出した人間同士が争い合うこの世界を、望むような神が存在しているのだろうか？

俺は名前はキョウスケ・ナンブ、チッポケな人間だ。

仮に神がいたとしても、俺に神の意志など理解することは叶わないだろう。

それに俺は神など信じていない。
俺は、俺自身の力で、俺の生き様を決める。
そこに誰も入ることは許さない。
俺の恋人 ――― エクセレン・ブロウニング以外の人間に俺の生き様を指図されることを俺は望んでいない。

「ロンッ」

目の前にどんな障害があろうとも、俺はただ、打ち貫くのみ!!
俺は自分の生き様は自分で決める。
どんな不利な状況だろうとも、俺は自分で道を斬り開いてみせる
……

……それは分の悪い賭けだろう。
止めておけ、誰もがそう言う。
しかし俺は好きなのだ。自分で生き様を切り開くこの感覚が堪らなく好きなのだ。
そう、俺は ――― ……

…… ――― 分の悪い賭けは嫌いじゃない!!

「四暗刻（スーアンコー）、役満だ」
「ま、マジッすかキョウスケさん!?」

対戦相手の一人、タスク・シングウジが悲鳴を上げた。
タスクが捨てた牌を鳴いて、俺が完成させた役は四暗刻。マージャンにおける最高クラスの役名で、それに応じて点数も達成難易度も高くなり、当然のよう成立しにくくなる。
だが、俺はその役を作り上げた。
断言しよう。

一発逆転できる、それだけの威力を持つ役だ。
タスクはこの一撃で降参を余儀なくされる。

「くそぉー、キョウスケさん、今日はバカつきっすね……悪いんスけど、今手持ちが2万円しかなくって……残りの金は付けにしてもらえませんかね？」

タスクがふざけた提案を持ちかけてきた。
タスクは頭に巻いた緑のバンダナがトレードマークの男……ジェネ高2年の俺の後輩だ。俺のギャンブル友人であり、「ラッキースケベ」の異名を取る異常に運の良い男である。
俺は良くタスクとギャンブルをするが、よくタスクにカモられているのが実情だ。
だが俺は……土壇場に滅法強い。
たった今もタスクから一発逆転の手を成功させ、賭け金が足りないタスクから交渉を受けている所だ。

「バカを言うな。お前が今まで付けを許した事があったか？」
「ちぇー、痛いところをつくなーキョウスケさんは……」

都合の良い提案をするタスクに、俺は冷たく言い放ってやった。
俺がタスクに負けた際、俺は速攻で賭け金の徴収を受けて来た。
もちろん借金してでも払って来たさ。それがギャンブラーに求められる最低限のモラルってもんだ。
しかしタスクはモラルを無視するような事を言ってきている。
許せるわけない。
そうは思わないか？

「わ、分かった、分かったよキョウスケさん！」

タスクもそれは理解してくたようだ。
今日のタスクの負けは3万円、残りの1万円分に値する情報を教えるから、納金をしばらく待ってくれとの話を持ちかけて来た。

「言っておくが、そんなに長くは待たんからな」
「分かってるってキョウスケさん」

知り合いのよしみだ。
普通のギャンブルでこんなことはあり得ないが、タスクの持ちかけた1万円に相当する情報というのが、俺は妙に気になって仕方なかったので了承することにした。

「なんでも、『エリア』内にある公園に、チーカマをあげると願いごとを叶えてくれる神様がいるらしいぜ?」
「早く残りの1万円を寄こせ」
「嘘じゃねえよ!?」

タスクが反論していたがどうでもいい。
神様なんている訳ないだろう?
信仰心のない俺には、神なんかより紙幣の方が数100倍信仰の価値がある。それは間違いないだろう……

しかし、今催促しても無いモノは俺の手元に届かない。
知り合いのよしみで、ここは許してやる事にした。
次回のギャンブル開催までに支払いをしてもらいたいものだ……
だが神様ね……。

――そんなモノ、居たら俺の前に連れて来て貰いたいものだ。

でも暇なので、タスクの情報を元にエリアをぶらつく――俺、

キョウスケ・ナンブなのだった。

スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～
鋼鉄の駄狼　～やったぜウルフ！　誰がために鐘は鳴る？～

俺はタスクから得た情報を元に、「エリア」の住宅街の中にある公園に足を運んでいた。
昼時の住宅街は喧騒と呼ぶには程遠く、その公園も人影一つ見ることはできなかった。
まるで世界から刳り抜かれたように公園内は静まり返っている。
ぽつん……と、言った具合にだ。

「タスクの奴め。やはり情報はガセだったようだな」

誰にではなく、俺は呟いていた。
タスクの話を鵜呑みにしていたわけではないが、奇妙な好奇心に駆られて足を運んでしまった。だが眼前には人っ子一人いない公園の風景……まさに無駄足だったようだな。

――　願い事を叶えてくれる神様がいる。

胡散臭い話だ。
分かりきって来た事だが、賭け金の上納を引きのばすための方便だったのだろう。
明日にでもタスクから残り１万円を徴収するとしよう。
俺はチーカマの入ったコンビニ袋をさげ、公園から引き上げるこ

とにした。
チーカマは今日の晩飯ででも食べてしまおうと考えていると、
「にょ」
来た時には居なかった青髪の奇妙な生物が……俺の前に立ちふさがっていた。
いや、立ちふさがるという表現は適切ではない。眼下に全長２０ｃｍ程の、明らかに頭身のオカシイ奇妙な２頭身の生物がおり、俺の顔を見上げていたのだ。
……なんだ、コイツは？
「わたちのなまえはおーちゃむ・ふぉー」
謎生物が勝手に自己紹介を始めた。
「この『エリア』のかみにょ！」
「……」
この時の俺はどんな表情をしていたのだろうな？
俺は一人で公園に来た為、俺の顔色を窺うのはオータムと名乗った謎生物だけなのだが、おそらく唖然とした表情をしていたに違いない。
神を語る謎生物は、黒豆のように円らな瞳で俺を見つめてくる。
吸い込まれそうになる程澄み渡り、淀み一つない純粋な輝きを宿した瞳だった。
取り込まれそうになる……ぐうううぅぅぅ……、しかし唐突な音が聞こえて来た。
発生源はオータムの腹だった。

「腹が減っているのか？」
「にょー、チーカマ食いたいにょ」

オータムは腹を押さえてしょげている。
タスクの話では、この公園にチーカマを献上すると願い事を叶えてくれる神がいるらしいが……まさかな？
コンビニ袋にはチーカマが入っている。特別俺の好物というわけでもないし、オータムに分け与えない程やぶさかではない。

「ほら、食うといい」

俺が包装を解いて、チーカマを差し出すと、

「にょー！」

オータムに素早い動きでチーカマをかすめ取られた。
ωな口で一生懸命食事する姿はどこか愛玩動物に似ているな。最も、食べているのはチーカマというオッサンが好きそうな酒の抓みなのだが。

「ふう、特になにもなかったな」

オータムという変な生物以外には、な。

「さて、どうするか？」

俺は餌付けに来た訳ではないし、タスクの話を真に受けていた訳でもない。
しかしこの後どうするかな？
今日、エクセレンは友人と外出すると聞いているし、ラミアやタ

スクを暇つぶしに呼び出すのは先輩風を吹かせているみたいで気分が悪い。
タスクから撒き上げた2万円で暇でも潰すか……と考えていると、
「おまえ、いいやつにょ！」
チーカマを食べ終えたオータムが叫んでいた。余談だがチーカマを食す速度はかなり早い。体積から考えれば異常だな、オータムを俺に例えてみると数キロの食べ物をペロリと食べた……といった所か？
「いいやつだから、ねがいごとかなえてやるにょ！　いってみるがいいにょ！」
「なんだと？」
オータムの言葉に俺は眉をしかめた。
「なんでも願い事を叶えられるのか？」
「にょ！　それくらい、あたりまえだのくらっかーにょ」
「それは古いぞ」
「にょ、にょー」
俺の突っ込みに困惑した表情　――　ヾ（こんな顔・ω・、；）ノを浮かべるオータム。
突っ込まれることに慣れていないのかもしれないな。だが俺の周りはボケだらけだからな、自然と俺の突っ込みレベルは上昇してしまうと言うものだ。
『チーカマを上げると願いごとを叶えてくれる神様がいるらしいぜ？』

タスクの言葉が蘇る。
火のないところに煙は立たない。
この【（；ω；　）オロオロ　（（　；ω；）オロオロ】としている謎生物が、噂の発生源だとすれば……俺は試しに願い事をしてみることにした。

「オータム、願い事はなんでもいいのか？」
「まかせるにょ！」

オータムはどこが胸だが分からない胴体を張り、誇らしげに答える。

「ではな、お金を拾いたい。できるか？」
「そんなの、あさめしまえをこしてやしょくまえにょ！」

意味不明だな。
突っ込みにもエネルギーが必要だから下らないジョークには突っ込まん、スルーする。
オータムは俺からトテトテと離れると、奇妙な呪文を口ずさみながらクルクルと回転し始めた。なにかの宴舞のつもりだろうか？
オータムは舞うことをやめると、両手を高らかに上げる。

「シーズンフォー！！」
「くっ、バリアか？」

目の前がチカチカするぜ。
突然オータムの体から放たれた閃光に俺は目を覆った。
直視すれば眼潰しになりそうな光が収まると、なんのことはない、オータムが立っているだけだった。

「……おい、願い事はどうした？」
「にょ！」

元気に手を上げるオータム。
ここが幼稚園なら大変よろしいと言う所だが、生憎俺が欲しいのは金だ。あぶく銭でも種銭でもなんでもいい、とりあえず金だ。金がなくてはなにも始まらん。金、金、金だ！　金がなければ勝負もできんし、生活も出来ん。その辺のことをオータムは……分かってはいないだろう、まことに残念なことだ。

「やはり、無駄足か」

付き合いきれないので、俺は公園の外に向けて足を踏み出した

――チャリッ

と、俺の足になにか当たる感触と音が耳に届く。

「これは……小銭か？」

俺が拾い上げたのは、５００と大きく書かれた銀色のコイン。
５００円玉である。安い弁当１個とお茶くらいは買える程度の金銭的価値があるコインだった。

「ささやかだな。金を拾いたいと言ったら、お札ではなく硬貨か？」
「しょぼいにょ？」
「お前が言うな」
「にょ、にょー」

いかん、脊髄反射のように突っ込んでしまっていた。
オータムは漫画のような汗を飛ばして動揺している。突っ込みどころしかない謎生物の分際で、突っ込まれることへの耐性はかなり未熟なようだ。
オータムは置いておくとして……俺は手の中で５００円玉を遊びながら考える。
雀の涙程ではあったが、俺の願いごとは確かに叶えられた。
このオータムという謎生物は自称神……いや、ともすればその自称が外れる可能性があるのではないだろうか？
拾った金が５００円玉だったのも、俺が具体的な願い事をしなかったからではないだろうか？

「む、そうだ」

良い考えを思いついた。
神、というモノは人の作りだした偶像だろう？　宗教というものは突きつめるといわゆる偶像崇拝であり、神というものは天にではなく信者の頭の中にいるものだ。
偶像、理想、幻想……脳内で美化された理想こそが、神の正体だというのが俺の考えだ。神頼みするギャンブラーなど終わっているからな。ギャンブルも所詮はゲーム、自力で運を引き寄せることも可能なはずだ。
脱線したが、俺がなにを言いたいのかいうと、神に実体など存在しないはず。そういうことだ。

「おいオータム、こっち向け」
「にょ？」
――パシャリ！

俺は携帯のカメラでオータムの写真を取った。
実像がないなら、写真に写るはずがないからな。
電子音と共に撮影した画像が表示された……公園の寂れた風景が映っている。
オータムの姿は……ない。
「オータム、こっちに来るんだ」
「にょにょ」
言うとおりにオータムが俺の傍に寄って来る。
俺はかがんで、オータムの頭を撫でてみた。
「にょー」
オータムは気持ち良さそうに目を細め、その姿は目に見えるし、俺の掌にも撫でているという実感は伝わって来る。
しかし写真には映らない……これは本物かもしれん。
「オータム、願い事は1つだけか？」
「にょ！　おまえはあたまなでてくれるいいやつだから、チーカマくれればかなえてあげるにょ！」
「そうか……」
これは検証の価値ありだな。
暇を持て余していた所に転がり込んできた幸運だ。もし本物なら逃がしてなるものか。そのためにも試してみなければな……
「オータム、ちょっと遊びにいかないか？」
「いいにょ？　どこにいくにょ？」
「なーに。ただの銀球弾きだ」

オータムに言いながら、俺は５００円玉を指で弾く。
俺がこれから足を運ぶ場所は、空中で回転するコイン１枚で検証できる、単純なゲームが置かれている店だ。
オータムを頭に乗せて、俺はパチンコ屋へと足を運んだ。

●

ここで「パチンコ」という遊戯について説明しておこうと思う。
パチンコというのは、台と呼ばれる筐体内にプレイヤーが店から借りた球を飛ばし、特定の入賞口に入れるという遊びだ。
ほら、小学校とかで木製の盤に釘を打ち、特定の場所に入ったら何点もらえるなんて台を作ったりしなかったか？　輪ゴムで作った発射台からビーダマを発射したりしてな、昔は、よく獲得した点数を友達と競ったものだ。
パチンコというものはそれに似ている。
大きく違うのは金を賭けるギャンブルの一種だということに加え、入賞口に球を入れた＝勝利ではないということ。
入賞口に球が入ってから内部のコンピューターが抽選を開始し、それに当選して初めて大当たりとなる。
ちなみに抽選確立は台の種類それぞれなんだが、大体３００－４００分の１の確率となっているのが多い。しかも球は釘の調整具合によって入賞口に入りにくくされていたりするので、実質はそれ以上に当たりづらい仕組みとなっている。

しかしそこは所詮機械。データを収集し、分析すればその日当たりやすい台を導き出す事ができるらしい。
パチプロ、という人種がいるくらいだからな。
釘が入賞口に入りやすいように調整された台を見抜き、大当たりしやすい台を分析うする労力さえあれば、パチンコは勝てるギャンブルなのだ。

無論、俺はパチプロではない。
直感に任せた1発勝負にこそ賭け事の本質だと言ってもいいからな。しかし最近ではゲームセンターにパチンコ台があるらしい。それはどうかと思ったりもするがな……

「オータム、願いごとだ」
「なんだにょ？」

俺は適当に台に座り、膝の上に乗せたオータムにチーカマを渡しながら呟いた。
余談だが俺の座った台は「新世紀　〇ヴァンゲリオン　使徒再び」だ。原作など知らん。確立は３５０－３７０分の1ぐらいで確率変動継続率は６５％。ミドルスペックと言うやつだな……専門用語が分からない人は適当に調べてくれ。

「1回転目から全回転で大当たり。その後、1回転目で突当たり。次回は1回転目でインパクトフラッシュからのビタ止まりだ。その後２０連チャン……できるか？」
「おやすいごようにょ！」

チーカマを齧りながら安請け合いするオータム。
あの呪文を膝の上で唱えて閃光が走る。しかし周囲は誰も気が付かない。どうやら、オータムが俺にしか見えていないのは間違いな

いようだ。

「……勝負だ」

俺が５００円玉を投入口に入れると、銀色の球が上皿流れでてくる。蛇足だが貸し玉は１球４円である。安いと思うか？　思う奴はやってみるといい、泣きをみるからな。５００円で１２５玉の貸し、しかしこれで入賞口に入る保障はどこにもない。

俺はハンドルを調整して球を打ち出す。カコンカコン、と釘に弾かれて不規則に球が落下して行く。入賞口に近づいて行くように、ハンドルを調整する作業をしなくてはいけない。

だがこれでオータムが本物かどうか判明するだろう。

最近のパチンコには様々な演出があってだな、ちなみに全回転というのは――その時、球が入賞口に入った。途端に画面が暗転する。

『おめでとう』

突然液晶の中に青空が広がったと思うや否や、○ヴァンゲリオンのキャラたちが勢ぞろいし、俺に向かって賛辞を送って来た。

『おめでとうッ』
『おめでとう』
『おめでとうさん』
「チッ」

最後のは隣の台のオッサンの舌打ちだ。

全回転という演出は、出現しただけで確率変動大当たりが確定する最強の演出だ。出現率はなんと１０００００分の１以下……それを１回転目から引いてしまったのだ！

はっきり言おう。
イカサマを疑われる程の強運と言っていい。通常は考えられないレベルだ。
主人公らしき少年が「僕はここに居てもいいんだ！」と言っている。どうやらキャラたちの賛辞はこの少年に向けられてのモノらしい……まったく、理解しがたい状況だが。

「ありがとう」

取り合えず言い返してみた。意味のない行為は両隣りのオッサンの視線を険しくしただけだ。
全回転が終わり、ラウンドを消化して、確立変動画面に突入した。面倒なので説明しないが、スルーを球が通過し電チュウが開き、球が入賞しやすくなる。１個目の保留玉を消化した瞬間　――

――　バキャアアアン！！

轟音を響かせて、趣味の悪い紫色のロボットが画面を引き裂いた！
実際には引き裂いていない。引き裂いたような演出の後、確立変動図柄が停止して大当たりとなった。突当たりという、この台特有の演出で出現率はこれまた１０００分の１以下である。

「わるものみたいなろぼっとだにょ」
「ああ、まったくだ」

他愛ない会話に、周りのオッサンの視線がロンギヌスのように鋭くなる。負け犬共が、黙って見ていろ。
ラウンドを消化して、ドル箱を交換し、再び１回転目。
今度は台のてっぺんに設置されたパトランプが、けたたましい音と共に光り出した。インパクトフラッシュと呼ばれる確率変動確定

を知らせる役モノである。あまりの騒音に隣どころか、周辺全てのパチンカーの視線を集めてしまっている。
そしてスーパーリーチにすら発展せずにノーマルリーチで図柄が揃う。
大当たりである。

「ふふふふ」

笑いがこみ上げて来て止まらない。
本物だ！　オータムは本物だ！
僥倖！！　こんな幸運があっていいのだろうか！？　俺は最強の切り札を手に入れてしまったようだな！！
確信するに十分な証拠が揃っているからな。１００００×１００００＝１０００００００００だ。しかも全回転は１００００分の１より少ない発生確率なので、実質１億分の１以上の幸運である。
宝くじで１等だって余裕で取れる確率ではないだろうか？
その後、すべて１回転目で大当たりを繰り返し、２０連チャンして俺はパチンコ屋を後にした。
ちなみに「〇ヴァンゲリオン」の確変継続率は６５％、だいたい５分の３程度だ。数回確変が継続するのはよくあることだが、全て１回転目で確変を引き続けるなど不可能に近い。
だが、それを可能にする切り札は、今も俺の頭の上に乗っている。

「オータム、次に行くぞ」
「らじゃーにょ」

チーカマを食べながらオータムが答えた……。

この後、俺たちは「エリア」にあるパチンコ屋というパチンコ屋を廻り、荒稼ぎしてやった。パチンコ屋など善良な市民の射幸心を

煽り、金を貪る愚劣な奴らである。良心は痛まなかったが、出入り禁止にされてしまった……

この日、俺の勝ち金は１００万円を超えた。

●

ジェネ高の屋上。

「ロイヤルストレートフラッシュだ」

「げえ、マジかよぉ！！」

俺の提示した手札に、「スクール」から俺の主催する賭けポーカーに参加するアラド・バランガが叫んでいた。

手札を放り投げて白旗を示す。

「くそぉ、キョウスケさん最近マジでパねえっすね」

タスクが手札を開示しながら負け惜しみを言った。役はフラッシュ。俺の手には遠く及ばない。

点数表には正の字で持ち点が書かれている。タスクが１０、アラドが４、俺は３０……俺の圧勝であった。

「もうそろそろ昼休みだな」

「そっすね、じゃあこれでお開きってことで」

「クソー、ただ飯食えると思ってたのにぃ！」

ドベのアラドが吼えていた。
俺たちの賭けポーカーでの賭け金は1点食事1回分だ。もしくは1食を500円換算するので、今回の俺の価値分は単純に1万円以上となった。
普段、タスクにはカモられまくっていたからな。
たまにはこういう展開も悪くない。

「きょうすけ、チーカマちょうだいにょ」
「ああ、すまんなオータム。ほら」
「わーい」

俺がチーカマをやると、オータムは喜んで食べ始める。

「それにしてもキョウスケさん？」

タスクが尋ねてきた。

「最近、チーカマ買い占めてますね。コンビニ袋の中全部チーカマでしょ？」

俺の傍らにあるコンビニ袋を指して言う。中身は勿論オータム用のチーカマである。
だがタスクやアラドにはオータムは見えていないようだ。オータムは今も俺の隣でチーカマを頬張っているというのに、食べ始めた途端にそのチーカマすら見えなくなっているらしい。

「そんなに好きでしたっけ？」
「ふ、どうも味覚が変わったようでな」
「あーあー、腹減ったぞー！」

大負けし昼食を取る余裕すらなくなったアラドが空に吠えていた。
まさしく負け犬の遠吠えである。
……しかし……勝ったと言うのに……何だろう……物足りない。
俺の勝ち点は３０。これ以上はない程の大勝だが、まだまだ足りない。もっと勝ちたい。もっと大きな勝負で勝ちたい。
俺の苛立ちを余所に、タスクが訊いてきた。

「キョウスケさん、次の賭けポーカーはいつにしましょうね？」
「近いうちにしようぜ！　今度こそ勝ってやる！」

アラドは再戦を心に誓っているようだった。
だが俺にはもう、こんなチッポケな勝負をする気にはどうにもなれなかった。

「なしだ」
「え？」
「今後、賭けポーカーの開催はなしだ」

俺の言葉に２人はポカンッとした表情を浮かべていたが、やがて口を開く。

「なんだよそれ！　勝ち逃げかよ、キョウスケさん！」
「そうだ、俺の飯返せ！」
「ふっ、小物め」
「「なんだとぉ！？」」

ステレオで二人の怒号が響く。
負け犬の遠吠え、まさにそれだ。きっと負け分を取り返そうと考

えること事態がツキを離しているに違いない。
タスクたちの訴えを俺は理解できる。俺も負ければ再戦を申し込むだろうし、この賭けポーカーは貧乏学生の俺らにできる数少ないギャンブルだからな。
だがもう違う。
俺はオータムを手に入れた。こんなチッポケな勝負を続ける理由など存在しない。

――分の悪い賭けは嫌いじゃない……

こんなものは、分の悪い賭けをせざるを得ない人間の言葉だ。
生まれ変わった俺には相応しくない。

「俺はもっとデカイ勝負がしたくてな。賭けポーカーなんて子どもの遊びはお前たちだけでやるといい」
「そ、そんな……」

俺は屋上にタスクたちを置き、階段を下りた。

「どうしたってんだよ、キョウスケさん？」

タスクの呟きが聞こえた気がした。
だがもうどうでもいい。
俺はもっと大きな勝負をするためにジェネ高を早退し、賭場へと向かった。

俺が向かったのは金を賭けて行われる賭博麻雀をしている店だった。

賭けられる金額が半端ではない、無論、非合法に属する部類のギャンブルである。
麻雀は多数ある牌を取り合い、如何に相手より早く、大きな役を作るかを競うゲームだ。互いにフェアに競い合うなら大人から子どもまで真っ当な勝負を楽しめる、非常に奥の深いものである。
しかし、
金が賭かると、
人はその本性が剥き出しにするものだ。

「兄ちゃん、勝たせてもらうで」

酒臭いオッサンが俺に絡んできた。
オッサンは、俺が足を運んだ店で一番の勝ち頭だという。下らないプライドだ。自慢してくるぐらいだ……絶対に勝つ自信がある……要するに、イカサマでもしているのだろう。

「オータム」
「わかったにょ」

俺の勝ちは揺るがなかった。
幸運の女神オータムの加護を受け、勝ち頭のオッサンを完膚無きにまで粉砕する。他の追随を許さない圧倒的なツキ ―― オータムを手に入れた俺に敵はいなかった。
この日も俺の一人勝ち。
勝ち続け、財布の中身が増えていく感覚に酔いしれ、顔や耳まで熱く火照っている。

「兄ちゃん、強いなあ」

最高の気分の俺に、対面のオッサンが声をかけてきた。

「どうや？　ワシが紹介したるさかい、代打ちやってみいひんか？」
「代打ち？」

代打ちとは、麻雀や他のギャンブルにおいてある人間の代わりにギャンブルを行う行為のことを指す。
だが俺には分かる。
対面のオッサンの代打ちとは言葉通りのモノではない。
多額の金額を賭けて行う勝負などにおいて、ギャンブルを代行し、生活を立てている人種がいるという風の噂を耳にした事がある……そういった賭け事の裏にいるのは大概ヤクザだろう。
対面のオッサンは俺をそう言った世界に引きずり込もうとしているわけか。冗談じゃない、お断りだ……しかし……

「代打ちをすれば、大きな勝負をできるのか？」
「おう、やりたい放題じゃ」

オッサンの言葉に足元を見下ろした。
チーカマを齧るオータムの姿が目に入る。コイツが手の内に居る限り、俺に負けはないだろう。
俺はもっと、もっと大きな勝負がしたい……！
答えなんて初めから決まっている。

「その話、受けよう」
「よっしゃ、付いて来な兄ちゃん」

俺はオッサンに連れられ店を出る。
連れて来られたのは「ミザル組」の看板の掛かった日本家屋。
顔を合わせる面々全てが黒服で、見るからに堅気ではない雰囲気が醸し出されていた。

今晩の勝負は「ミザル組」の存亡を賭けた麻雀勝負だそうだ。負ければ首が飛ぶ。「ミザル組」だけでなく、俺もだ。
だからどうした？

その夜、俺は人生初めての代打ちを経験し、華々しくデビューを飾った。
圧勝！　俺に贈られる為に存在する言葉だろう。

「先生、ありがとうございます！」

当主らしい紫髪の男が頭を下げて来た。

「報酬は幾らでも払いましょう。是非、我が家お抱えの代打ちになっていただきたい！」
「その話、乗った！」

即答さ。当たり前だろう？

誰も俺に勝てないのだからな。
勝負の都合で数日間、ジェネ高を無断欠勤し「ミザル組」の世話になることとなった。しかも携帯の電池も切れてしまい外界と遮断されてしまった。エクセレンはどうしているだろうな？
まあ、アイツのことだ。
数日俺と会わなくても、呑気な笑顔を浮かべて生活していることだろう。
待たされた末の勝負も圧倒的な強さを締めくくった。

「最高だな」

代打ち生活は続き、自宅に帰ったのは実に2週間後のことであっ

た――……

●

2週間ぶりに投稿したジェネ高は新鮮だった。
制服を着こみ、友人と他愛ない話を交わしながら登校する生徒たち。平穏な日常、見間違えようのない俺の日常だ。
……しかし、違和感がある。
温い……まるで、ジェネ高の雰囲気がぬるま湯のように感じる。
俺の感覚とズレている。そう、感じた。
校門を潜った辺りで見慣れた後姿を見つけた。

「ん、おい、タスク」
「キョ、キョウスケさん!?」

タスクは俺の声に驚いた様子だった。

「最近のツキはどうだ？　俺はもちろん絶好調だ」
「え……っと……」
「どうだ、久しぶりに賭けポーカーでも開催しないか？」
「か、勘弁してくれ！」

いつも二言返事のタスクが、俺の提案を蹴ったかと思うと、

「アンタみたいな不良――いや、ワルとは付き合いきれねえぜ！　頼むから、もう俺に関わらないでくれ！」

暴言を残して、俺を置いて走り去ってしまった。

「……？　なんだと言うのだ？」

ふと周囲を見渡すと俺を見る多くの視線に気が付いた。

別段有名でもない俺を道行く生徒たちがチラチラっと見て、俺が目を向けると慌てて顔を逸らして去っていく……歩いてく道は誰ひとり邪魔になることなく、歩を進めていける。

……理解しがたい。

ジェネ高に来なかった2週間の間なにかあったのだろうか？

「キョウスケ」

そんな中で声をかけてくる人物がいた……エクセレン・ブロウニング、俺の恋人だ。

「ねえ……キョウスケ……」

「どうした、エクセレン？」

エクセレンの表情には影が差している。普段から明朗活発というか、能天気に何事も笑い飛ばしている彼女からは想像できない顔だった。

……む、もしかすると、俺に借金の招集を迫りたいのかもしてないな。

無理もない、今まで借りた金額は積り積もって５０万円以上だからな……それを返せと言うのは流石のエクセレンも忍びないのだろう。

しかし彼女にはそれを言う権利がある。

俺にも、今、金がある。なら返そうじゃないか。

「エクセレン、今まで迷惑をかけて済まなかったな。借りた金ならスグにでも返せるだけの額が手に入った、だからそんな顔はするな」

「……違うのキョウスケ、そんな事はどうでもいいの……」

「なに……？」

どういうことだ？

「知ってるキョウスケ？　今ジェネ高であなたがなんて言われているか……」

「……いや」

「ヤクザの廻し者……外道……人外、なんだっていいわ……とにかく、今のあなたの評判は最悪なのよ？」

……先ほどのタスクの態度はそう言う事か。

何処からか、俺が「ミザル組」で代打ちをしていたという情報が漏れてしまったようだな。

社会もそうだが、学生も異端を嫌うものだ。たった一度だけでも裏社会に触れた者はつまはじきにされるということか……。

ふん……

別に構わないさ、エクセレンさえ傍に居てくれればな。

「お願いキョウスケ、もうこんな事は止めて……前みたいに、みんなで楽しく遊びましょうよ……」

「なにを言っているんだ、エクセレン」

エクセレンは今にも泣き出しそうな顔で言う。

「キョウスケがこんな事続けるのなら、私、もうキョウスケと一緒

に居られないわ……」
「エ、エクセレン！」
「……さようなら」
「待ってくれ！」

背を向けて足を進めるエクセレンに手を伸ばしたが、彼女は俺の手を避けてジェネ高校舎へと向かった。
空を切った手にはなんの感触も残っていない。

「今のは……別れ話なのか……？」

何故、こんなことになってしまったのだろうか？
確かにジェネ高を2週間も無断欠勤したことに非はあると思うが……いや、それよりも「代打ち」の件か？
ヤクザの「代打ち」なんて学校生活において異分子でしかない。集団というものは残酷で、違う者は極力排除しようとする傾向があるのだろうが……俺が、ジェネ高から、いやエクセレンからも切り捨てられたということか？
だが「代打ち」の勝負は楽しく、最高に充実した時間だった。
俺はそれを否定したくない……

「きょうすけ、だいじょうぶにょ？」
「オータム……」

足元のオータムが俺を不安気に見上げていた。

「……そうだオータム、願い事でエクセレンの心を繋ぎ止めることはできるのか？」
「らくしょうにょ」

オータムは即答した。

「そうか、では……」

俺はそこで言葉を濁してしまった。

……空しい……願い事で人の心を手に入れても空しいだけだ……

止めよう、そんな願いは。

しかし、それならどうすればいい？

エクセレンが俺から離れ、ジェネ高で敬遠されている理由はミザル組での「代打ち」が原因なのは明らかだろう。

俺はエクセレンに傍に居て欲しい……しかし、

「にょ？」

首を傾げ、俺を見上げるオータムを手放すのも惜しい……。

オータムの力で、圧倒的な勝利を得る快感を無くしてしまいたくはない。タスクにカモられるような弱いギャンブラーに戻りたくはない。

それに冷静に考えれば……もう、俺は引き返せない所にいた。

２週間前のあの時、感情のままに「代打ち」を引きうけてしまった相手はヤクザだった。俺が「代打ち」を降りると申し出ても、素直に手放すとは考えられない……ここでオータムがいなくなるのは正に死活問題……ということか。

「……願い事は止めだ」

「わかったにょ」

「……行くぞ、オータム」

「にょにょ」

ジェネ高にいても、エクセレンや他の生徒たちに迷惑をかけてし

まうだけだろう。
俺はエクセレンが好きだ。愛している。
だから彼女をヤクザ絡みの面倒事に巻き込みたくはない……

「さらばだ、エクセレン」

俺はジェネ高を去った。
案の定、しばらく街を歩いていると「ミザル組」の者に見つかり、本家へと招集されてしまった。
大金を賭けた勝負らしい。
無論、その日の代打ちも圧勝だった。
「ミザル組」の当主や他の面々は嬉々とした様相だったし、俺も賭け事に勝った高揚感を感じていたが、どこか心が満たされない思いもあった。
まるで、胸に穴が空いたようだ……
――……その日、郵送で退学届を送り付け、俺はジェネ高を辞めた――

――2年後

「ロン、役満国士無双(こくしむそう)だ」

その日も俺の圧勝だった――

――俺は今も「ミザル組」で代打ちの仕事を続けている。

オータムの力のおかげで俺は負け知らず。週1，2で開催される莫大な金を賭けた麻雀で相手の雀士たちを圧倒し、その恩恵を受けた「ミザル組」は『エリア』で一番巨大なヤクザへと変貌を遂げた。

莫大な資金力を活かして土地を買いあさり、巨大なレジャー施設を『エリア』に建設する予定らしい。第一のターゲットにされたのは商店街の「ヒカワ屋」。一瞬で潰されたそうだ。

それだけに留まらず『エリア』内のほとんどは「ミザル組」の手中に落ちたと言ってもいいだろう……「ミザル組」の成長はひとえに俺の……いや、オータムのおかげと言っても良いだろう……。

無論、俺にも大金が流れ込んでくる。

そして刺激的な勝負もだ……。

あまりに強く勝ち続ける俺に付いた二つ名は「坊やキョウスケ」。代打ちにしては異常に若い年齢の俺は、他の代打ちから見れば正しく坊やだろう……。

「坊やキョウスケ」は代打ち界では有名となり、群がる人間は後を絶たなかったが……俺の周りには……もう、誰もいない。

「ふふふ……」

俺は今日も、愛機 ――― アルトアイゼン号の整備をしている。

余りある資金の殆んどをパーツにつぎ込み、アルトアイゼン号は変貌した。

高級パーツを身に纏い肥大化した車体はまるで巨人……今では、アルトアイゼン・リーゼ号と俺は呼称するようになっている。

「今日も素晴らしいなリーゼ号……明日は仕事がないから共に峠を走るとしよう」

俺がリーゼ号と走るようになってから、峠の走り屋の数はメッキリ減ってしまった。

圧倒的なのだ。
リーゼ号が現れればブチ抜かれる。追いつけない。興が削がれる……
そして、誰も俺の隣を走る事はない……2年前に、エクセレンが走っていたポジションに、今は誰もいない。

「……エクセレン……」

彼女はどうしているのだろうか？
2年前から彼女とは連絡を取れていない。こちらから連絡したこともあるが、着信拒否されてもはや音信不通の状態だった。
……今更、彼女を思っても仕方のない話だ……こうなった原因は俺が作りだしたようなものなのだからな。
俺はリーゼ号の整備を終えると、ジェネ高時代から住み続けている格安賃貸アパートへと戻った。
金は捨てる程あるので引っ越すことは容易だったが、エクセレンと過ごしたアパートから出ていく気にはなれなかった。
2年経ったが未だに住んでいる……きっと、俺はここから出ていくことはないのだろう……

「帰ったぞ、オータム」
「……にょー……」

6畳一間の小さな部屋にオータムはいた。
部屋の隅にちょこんと座っている。その姿には活力がなく、大きさは……5ｃｍ程だ。
あれから2年……元々全長２０ｃｍ程であったオータムだったが、ここ数日にかけて体が萎んでいった。原因は分からない。

「大丈夫かオータム？　ほら、チーカマだぞ」

「……ありがとうにょ、きょうすけ」

好物を口にするがやはり以前のような活力は見られない。調子が悪いのかもしれないな。だがオータムは俺以外の人間には見ることはできない。俺にはどうすることもできなかった。

……休養が必要だろうか？　いや、それで元に戻る保障は何処にもないのだが　――……

「オータム、すまないが願い事だ」

「……にょー……」

俺を見上げたオータムの瞳はどことなく虚ろだった。

「今晩も代打ちの仕事が入っている。いつものように頼むぞオータム」

「……」

「今日の仕事が終わったら、暫く休みを貰えるように頼んでみるか――」

「きょうすけ」

オータムが言葉を遮る。

「……いつまでこんなことつづけるきにょ？」

「なに？　どういう意味だ？」

「……わからないのなら……もういいにょ」

小人のように縮んだオータムが小さなを腰を上げた。

開けっぱなしの玄関口に向かって歩いて行く。その小さな背中に、俺は言い様のない不安感を覚えた。

「お、おい、何処へ行くつもりだ？」
「……」
「答えろ、オータム！」

もう、俺の周りには誰もいない。
エクセレンも、タスクもアラドも、あの腐れ縁のアクセルでさえも……俺は孤独だ。
傍にいるのは俺にだけ見える小さな神様、オータム・フォーだけ。

「頼む、行かないでくれ！　お前にまで去られてしまったら……俺は！」
「きょうすけ、おまえはいいやつにょ」

オータムが振り向いてくれた。

「だからわたちは、ちからをかそうとおもったにょ。わたちにできるのはねがいごとをかなえることだけにょ……きっと、それがよくなかったにょ」
「オータム……！」
「もうきづいてるはだにょ……きょうすけ、おまえがてにいれたものとなくしたもの……わかるはずだにょ……」

それ以上は言うな！　言わないでくれ！
そんなことは2年前のあの日に理解している。
圧倒的強運と金を手に入れた俺が払った代償は、絆だ。恋人との、友人との、悪友との絆だ。
欲しいモノを手に入れた代わりに、本当に大切にしていた者たちを失った……だからオータム、お前にまで去られてしまったら……
俺は……！

「……頼むオータム、独りは嫌なんだ……！」
「ひとはいつでもひとりだにょ」
「オータム！」
「チーカマ、いつもありがとうでしたにょ」

頭を下げて、玄関を潜るオータム。俺は慌てて立ち上がって彼女を追った。
彼女は一度だけ振り向いて言う。

「ばいばい、きょうすけ」
「待ってくれオータム！」

俺の手がオータムを掴むことはなかった。2年前と同じ様に空を切る。
玄関から外に飛び出したがオータムの姿は何処にも見えなかった。ほんの数秒前まで玄関口にいたはずなのに……霞のように消え失せてしまっていた。

「こんな……こんなことがあっていいはずがない！」

オータムは俺の傍にいるべきなのだ。いや違う……いて欲しい。もう願い事なんて叶えてくれなくてもいい。だから傍にいて欲しい。孤独は嫌なのだ……
しかし頬を撫でる風は冷たく、身が震える。声をかけてくれる者は誰もいない……。

「まだ……まだ近くにいるかもしれない！」

諦めきれず、アパートを飛び出してオータムを探しまわった。
何時間探しまわっただろうか？

結局、オータムを見つけることは出来なかった。既に日は落ちてしまっている。俺の足は自然とオータムと出会った公園に向けられていた。

しかし公園にもオータムはいない。

「……どこに行ってしまったんだ？」

「ねえ、お兄ちゃん　――」

背後から幼い声が聞こえて来た。

振り返ると、野球帽を深く被った１２、３歳の少年だった。

「――　ねえ、お兄ちゃんが『坊やキョウスケ』さんですか？」

「ああ、確かにそうだが……？」

目の前にいる少年に見覚えはない。

少年に尋ねられた「坊やキョウスケ」とは、俺の代打ち時の異名である。子どもが夜に出歩いていることにも違和感を覚えるが、裏世界の異名が口から出て来たことも何処か奇妙だ。

不審な少年だった。

「……そう」

少年は呟き、着ているジャンパーの中に手を入れると、

「死ねえ！！」

「ッ！？　がはッ！！」

取り出してきた何かを俺の腹に突き刺してきた。

激痛が奔る。

体を密着させるようにしていた少年が離れると、その手には紅く

染まった刃渡り２０ｃｍ程のナイフが握られていた。月明かりにテラテラと生々しく照り返している……あれは、俺の血か……？
認識した途端、腹部は耐えがたい灼熱感にみまわれて膝をついてしまう。

「な、なにをする貴様……！？」
「うるさい、この人でなし！」

手を震わせながら少年は叫んでいた。

「お前が『代打ち』で父ちゃんを倒したせいだ！　そのせいで父ちゃんは、父ちゃんはぁ……！？　うわあぁぁ、許せない、絶対に許せないぞ！！」
「うぐっ！？」

再び、鋭利な刃物が俺の腹に侵入してくる。
そして続けざまに数回刺された……訳も分からないまま、俺は地面に崩れ落ちた。温かい液体が流れ出る感覚と共に、なぜか痛みが遠のいていく。

「うわあああぁぁ！！」

少年は奇声を上げながら去って行き……腹をめった刺しにされた俺だけが公園には残された……。
痛みや熱感がいつの間にか和らいでいる……いや、感覚が鈍くなっているようであるが、思うように体を動かすことはできなかった。
脳裏にエクセレンの姿がよぎる……

「くっ……う……！」

俺が倒れているのは夜で人通りも少なく視界も悪い公園だ。
発見してもらえる可能性は低い。助けを呼ぼうにも体の自由が利かない……こんな所で俺は死ぬのだろうか？
……嫌だ。
エクセレンに会いたい。独りは嫌だ。死にたくない……できることなら……――

「あの頃に……戻りたい……」
「わかったにょ」

――……聞きなれた声が俺の耳をくすぐった。
力を振り絞り顔を上げると、探していた小さな神様が目の前にいた。

「さいごのおねがいをかなえてなかったにょ。おれいはしないといけないにょ」
「オ……タム……」

もう、力が入らず擦れた声しか出ない。視界も揺らぐ。オータムの声を聞くしか俺にできることはなかった。

「いままでにてにいれたものとひきかえに、もとにもどしてあげるにょ」
「……」
「こんどは、こうかいしないようにするといいにょ」

オータムは呪文を唱えて踊る。
見慣れた儀式が終わると同時に閃光が視界を支配した。
俺の意識も同時に薄れていく……その中で俺は聞いた。

「ばいばい、きょうすけ」

誰の声だっただろう？

思い出せず、俺の意識はそこで途切れた……

●

目が覚めると、俺は夜の公園で横たわっていた。

「……夢か？」

酷い悪夢を見ていた気がする。

大切なモノを全て失ってしまうような……そんな夢だ。

俺の右手には固い感触があった。

「……？　５００円玉？　何故こんなものを持っている……いや、そもそも何故俺は公園で寝ていたんだ？」

……思い出せない。

しかし一つだけ確かなことがあった。

エクセレンに会いたい。無性に強い衝動に駆られ、俺は携帯電話に登録した番号を呼び出す。

数拍の呼び出し音の後、彼女の声が返ってきた。

「ハロハロ、あなたのエクセレンたんですよー♪　どちら様かしらん？」

どうやら相手の名前も確認せずに電話を取ったらしい。

「エクセレン、俺だ」
「あららキョウスケ？　こんな時間にどったの？」
「いやな……」

一瞬返答に困ったが、素直に心の内を明かす事にした。

「急に会いたくなってな。声も聞きたかったので電話をした。迷惑だったか？」
「まっさかー、でも変なキョウスケェー。もしかして変なモノで拾い食いしたのかしら？」
「ふっ、そうかもしれん」

エクセレンとは昨日もジェネ高で会っているはずだった。しかしとても懐かしく感じている自分がいる……どうしてだろうな？　自分でもよく分からない。

エクセレンの声を聞けて安心した。

自分の居場所に帰って来たような感覚だ。

俺は右手の中の５００円玉を見ながら言う。

「エクセレン、今から会わないか？　缶コーヒーぐらいなら奢ってやるぞ」
「え？　嘘！　キョウスケが奢ってくれるなんて凄い久しぶりねー。もちろん行くわよ。待ち合わせはジェネ高の前でいいかしらん？」
「ああ、待ってるぞ」
「はいはーい、今から準備するわね」

電話はそこで終わった。

起きた時握っていた５００円玉を眺める。誰かが落としたのを拾ったのだろう。落とし主には申し訳ないが、俺とエクセレンの仲を取り持つための役に立ってもらおうと思う。

たまには、こういう小さな幸せがあってもいいんじゃないかと思う。

「さて、行くか」

５００円玉片手に、俺はエクセレンと待ち合わせ場所へと急ぐのだった――

ここはＯＧ高等学院。

『エリア』にある地域最大のマンモス高校だ。

今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。

次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない。

おまけ

ジェネ高の屋上で、

「ロイヤルストレートフラッシュだぜ！」

タスクが手札を開示して勝ち誇っていた。

恒例となった賭けポーカー、俺を置いてタスクとアラドはバカつきである。

勝ち誇った笑みでタスクが俺に訊いてくる。

「キョウスケさんはどうっスか？」

「……ブタだ」

俺はワンペアにもならない手札を放り出した。
今日はついていない。
勝利の確定したタスクとアラドが意地悪く笑う。

「巨星、乙！　今日の昼飯はキョウスケさんの奢りっすよ！」
「ひひひ、キョウスケさん、御馳になります！！」
「……仕方あるまい」

俺が言うとほぼ同時に、昼休みを告げるチャイムが響いてきた。
使い古したカードを片づけて、俺たちは食堂に向かう。
今日は何円負けたのだろうな？
兎にも角にも、今日の昼飯は俺の奢りである事に変わりはない。

次回こそは必ず勝ちたいと思う。
しかしなんて言うのかな？　ギャンブル仲間がいて、集まって勝負をするのはやはり悪くない。
そう　――

「ふっ、こういうのも悪くない」

――　これが俺、キョウスケ・ナンブの日常なのだと噛みしめながら、次回へのリベンジを心に誓うのだった。

鋼鉄の駄狼3　～やったぜウルフ！　誰がために鐘はなる？～（後書き）

＜キャラ紹介＞

キョウスケ・ナンブ：ジェネ高3年のギャンブル大好き主人公。分の悪い賭けが大好き。口には出さないが、恋人のエクセレンのことを何よりも大切に思っている。タスクからの情報で公園に赴くが……？

タスク・シングウジ：ジェネ高2年のラッキースケベ。キョウスケのギャンブル仲間だが異常に運が強く、よく彼をカモっている。今回は珍しく負け、代金分の情報を提供するが……？

エクセレン・ブロウニング：ジェネ高3年の高校生に見えない高校生。よく周りから姉さんと呼ばれている。

オータム・フォー：公園に住む「エリア」の神様。チーカマ大好き。

＜次・回・予・告＞

エクセレン「私とキョウスケが結婚したらー、子供は双子の女の子で名前はアルフィミィとレモンにするの」

キョウスケ「……」

エクセレン「キョウスケは改心して賭け事を止めて、有名会社に勤める敏腕サラリーマンで、キョウスケと結婚している私は近所の奥

様方から羨望のまなざしで見られているのよん♪」

キョウスケ「……」

エクセレン「キョウスケは私の事を凄く愛してくれていて、いつもお土産やプレゼントを買ってきてくれるのー」

キョウスケ「それはきっと『夢オチ』だな」

エクセレン「夢ぐらい見たっていいじゃない！？」

キョウスケ「ふん、今回は久しぶりの主役だったのに刺殺されたりして災難だ……俺は夢オチで助かったよ。では次回予告にいこう」

キョウスケ
「俺の名前はキョウスケ・ナンブ。
さあ次回はリクエストにあったスパロボＪの話でもしてみようかと思う。
ついでにもう終わってしまったが、クリスマスネタでも入れてみよう。
次回スパロボ学院、『企業戦士カルヴィナ？（タイトル未定）』！
どんな相手だろうと、打ち貫くのみ！！」

エクセレン「スパロボＪもよろしく！」

ザ・夢オチ！
一度やってみたかったのです。後悔はしていない。
あんまり使うと辟易されるので、もうあまり使わないと思います。

ｓｉｂｕｇａｋｉさん、暗黒ミカンさん、ケルンバイターさん感想ありがとうございます！
年賀状書かなければいけないのに、現実逃避して小説書いてる北洋です……次回の話は年内には書きあげたいと思っています。
ではでは、次回もよければ読んでくださいね。

バーニングラブ　～ラストクリスマスの真っ赤な誓い～（前書き）

＜注・意・事・項＞
絶賛、キャラ崩壊中！
○条さん「その幻想（キャラのイメージ）をぶち壊す！」
スパロボＪ３人娘の１人が激しくキャラ崩壊しております。
主人公もキャラ崩壊中。
キャラ崩壊レベル５（ＭＡＸ５）ですので注意してください。

それでも良いという方はどうぞ！

バーニングラブ　～ラストクリスマスの真っ赤な誓い～

初めまして、私の名前はカルヴィナ・クーランジュ。

何故か高校の密集する地域「エリア」。その地域でとある仕事をしていて、業界内では「ホワイトリンクス」の異名で知られているわ。

私の仕事は企業専門の「再建屋」――理由は不明だけれど「エリア」には「マオインダストリー」に代表される大企業の乱立している。

大企業の力は絶対的で、どこか台風のような天災にも似ているわ。煽りを受けて倒産したり吸収合併される中小企業は沢山ある。多くの企業は大企業に迎合していったけど、それを良しとせずに独自の道を進み、抗う反骨心を持つ企業も数える程だけど存在している。

私の仕事は、そういう潰れかけた少数派の中小企業の再建。

現在取り組んでいるのは「クロイツェル社」の企業再建なの。

「クーランジュ、メルアはコーヒーを入れました。休憩にしましょう？」

「ありがとメルア。これを済ませたらすぐ行くわ」

金髪美少女――メルア・メルナ・メイアに呼ばれ、処理中だった企画書の手を止める私。

メルアは「エリア」一のマンモス高校、ジェネ高に通っている高校2年生だ。自分のことを名前で呼ぶ、少し天然の入った少女だった。金髪以外の特徴は大きな胸。かなり大きく、それなりあった私の自信を見事に砕いてくれる位にサイズだわ。

メルアと一緒に飲み物が用意された接客室に向かう。

潰れかけの「クロイツェル社」に客なんて来ない。私たちの休憩室と化している接客室に入ると、赤い髪をした、これまた美少女がケーキを凝視していた。

「遅いよ、カルヴィナ！　ケーキ全部食べちゃうぞ！」
「待たせてごめんねテニア。さあ、お茶にしましょう」
「わーい！」

美少女　――　フェステニア・ミューズはまるで「よし！」と言われた犬の様に、テーブルに用意されていたケーキに手を伸ばし、口に運ぼうとする。
しかし　――

「待て！」

――　テニアに待ったをかける声があった。
艶やかな黒髪を持つ美少女だった。

「テニア、お行儀が悪いわよ。少しは我慢しないと駄目でしょう？」
「で、でもカティア、アタシもう我慢できないよ！」

躾をする主人のような美少女　――　カティア・グリニャールに反論するテニアの姿は実に元気一杯だ。
テニアは食べ物に目がないからね。目の前にケーキを置かれては我慢できないのは無理ないわ。今にもケーキに頭から突っ込んで行きそうな勢いね。
その様子を諭すカティアは外見通り実に真面目な性格をしており、テニアとメルアを合わせた3人娘を取りまとめるリーダー格と言っていいわね。
何事にもキッチリカッチリしており、ルールやマナーを破ること

は絶対に許さない。

「まだメルアとミストレスが席についてないでしょ」
「で、でも……！」
「頂きますもしていないわ」
「うー、うー……！」

カティアの正論にテニアが唸っていた。ちなみにミストレスと言うのは私のことで、ミスターの女性版らしい。

テニアはもう限界のようね。私とメルアは席に着き、カティアが号令をかける。

『頂きまーす』

いに一番にテニアがケーキに齧り付いた。

「あまぁぁい！」

テニアは恍惚の笑みを浮かべ、私達は3時のお茶とお喋りを優雅に楽しんだ。

メルアと同じく、テニアとカティアもジェネ高に通う高校生だ。

高校生が何故「クロイツェル社」にいるのか、不思議に思う人もいるかもしれないから説明しておくわね。

彼女たちはアルバイトなのよ。普通の企業は高校生を雇ったりしないんだけど、「クロイツェル社」は経営破綻寸前で社員も次々と辞めて人材不足は深刻……才能のある人材なら高校生でも迎え入れているのが現状なの。

彼女たちには主に放課後や休日に出社してもらい、私の秘書として働いてもらっているわ。

おかげで再建の計画も順調に進んでいる。とても助かっている。

歳は離れているけど、３人娘は私の頼りになる相棒たちよ。

「ねえねえ、今年のクリスマスはみんなどうするの？」

頬にクリームをつけたテニアが声を上げた。

「もちろん、アタシは統夜と一緒に過ごすんだ！」

「そんなの駄目です。統夜と過ごすのは私です」

「違います。統夜さんと一緒にクリスマスするのは私だと、メルアは主張します！」

「アタシだよ！」

「私です！」

「メルアです！」

私を置きてきぼりにして、３人娘が口喧嘩を始めてしまった。

以前聞いた話だけど、３人は好きな人がいて、それが同じ人らしいんだ。確か名前は紫雲（しうん）統夜（とうや）。アルバイトしているのも、好きな彼へのプレゼントやデート費用を捻出するためらしい。

会ったことはないけど、３人娘に慕われているなんて幸せな少年だね。

……最も、私にだって想い人ぐらいいる。

「ねえねえ、カルヴィナはどうするの？　１人でロンリークリスマス？」

「失礼ね、そんな訳ないでしょう？」

口論が終わったテニアの質問に答えてあげることにした。

「自慢じゃないけど、私にはステキな彼氏がいるんだから。彼と一緒にホワイトクリスマスを過ごすに決まってるじゃない」

「スゴーイ、でもそれって自慢だよね？」
「まぁね」

コーヒーを飲みながらの返答にテニアが目を輝かせていた。大人の女性を見る羨望の眼差しだ……けど、このコーヒー甘いわね。角砂糖何個入れたのかしら？
コーヒーを入れたメルアが言う。

「アル＝ヴァン・ランクス。同じ再建屋をしていた縁で知り合ったんですよね？　いいなー、メルアも統夜さんと恋人同士になりたいです」
「駄目だよメルア！　統夜はアタシのモノなんだから！」
「2人共なにを言ってるんですか？　統夜は私のことが好きに決まっています！」

何故か第2次統夜争奪口論が勃発していた。

そう、私の恋人の名前はアル＝ヴァン・ランクス。
容姿端麗、文武両道、周囲への気配りができ私にだけ優しい最高の男性よ。
あぁ、アル＝ヴァン……世界で一番私の大切な人。愛する人。彼は私の全て……あぁ、アル＝ヴァン……私にとって貴方は世界よりも大切な全てだわ。

……でも最近、彼に連絡がつかないの。
留守番電話にメッセージを入れても、返信が返って来ない……もうすぐ、クリスマスイブなのに……もしかして、他に女が出来たのかしら？
アル＝ヴァンの容姿なら女遊びなんて好きなだけできるでしょうし……ううん、あのアル＝ヴァンに限ってそんなことある訳ないわ！

武士道精神が彼の座右の銘。
浮気なんてするハズがないわ……でも……もし、していたら……
うふふ、その時は……

あぁ、アル＝ヴァン！
私は貴方を殺したい程に愛してる！！

スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～
バーニングラヴ　～ラストクリスマスの真っ赤な誓い～

クリスマスイブ、前日。

「統夜へのクリスマスプレゼントを買いに行こう！」

テニアの提案で、私と３人娘は「エリア」にある繁華街へと繰り出していた。
今日は「クロイツェル社」の再建業務も休日だ。連日働いていては身が持たないし、息抜きも必要ということで私は彼女たちに同行していた。
３人娘の統夜を廻る口論は、一応彼へのクリスマスプレゼントを一緒に買おうという話に落ちついたらしい。統夜は私のものだ、と豪語していたにも関わらず３人でプレゼントを買いに行くあたりは、やはり３人は仲の良い親友同士なのだろうと思う。
私もアル・ヴァンへのプレゼントを買う予定だったし、この提案は好都合とも言えた。

「3人は統夜君になにをプレゼントするの？」
「はいはい！　アタシはハムの詰め合わせセット買うの！」
元気にテニアが答えてくれた。
「それはお中元でしょう？　それにテニアが食べたいだけでしょ？」
「えへへ、バレたか！」
「メルアはケーキをワンホール買って行きます」
「それもメルアの好きなモノでしょう？　まぁ、クリスマスだからケーキというのもあながち間違いじゃないけれど……」
メルアにまで突っ込みを入れるカティア。2人がボケだと、必然的に残ったカティアがツッコミ役が回って来る。ちなみに、そんな彼女が選んだのは『超機合神　バーンブレイド3　決戦！　ダイミダラー』と書かれたアニメ映画作品だった。
アニメって……統夜君とやらはアニメが好きなのか？　しかしカティアの顔を見るとニヤけていた。このチョイスはおそらくカティア自身の趣味みたいに思えるけど。
レジで会計を済ませて来たカティアが尋ねてくる。
「ミストレスは何を買うのですか？」
「私？　うーん、どうしようかしら？」
3人娘のように自分の好きなモノを買うのも一つだが、プレゼントは相手の喜ぶモノを渡すのが鉄則よね。
アル＝ヴァンが好きなモノと言えば……刃物かしら？
居合道を嗜んでいる彼は趣味で日本刀の収集も行っており、刀以外の刃物にも知識が深く、使う包丁にもこだわりを持っているの。
以前プレゼントした包丁もいたく気に入ってくれ、今も愛用してくれているらしいわ。

私は3人娘を連れて刃物専門店に入る事にした。

「アル＝ヴァンさんって刃物好きなんだね！」

「そこだけ聞くとただ危険人物にしか思えない、とメルアは思うのです」

「失礼ね！　彼のは実用も兼ねての趣味なのよ！」

日本刀も居合道で使用しているぐらいだもの。飾るだけの日本刀には興味がない、飾りっ毛よりも実用性を重視する質実剛健の男なのよ。

「それを聞くとさらに危険人物としか、メルアはメルアは思えなかったりして？」

「殴るわよアンタ！　あとその喋り方止めなさい、色々な意味で危険だから！？」

刃物屋さんの中を探してみても、置いてある商品の殆んど包丁だった。まあ当然か。でも包丁にも色々な種類があるみたいで、細長いモノから分厚く短いモノまで多種多様に揃えられている。

その中で私の目を引く品物があった。

「あ、コレいいかも」

小さな果物ナイフだった。

装飾なんて一つも施されていないけどその分切れ味は鋭そうな印象を受ける。実用性を重視した、アル＝ヴァンのイメージにぴったりの果物ナイフ……一目で気に入った。これならきっとアル＝ヴァンも気に行ってくれるはずだわ。

「お爺さん、これ下さい」

「あいよ」

店員のお爺さんが果物ナイフを丁寧に包んでくれた。

「さて、プレゼントも買ったし、これからどうしようかしらね？」

「はいはい、アタシはご飯食べたいです！」

「大きなチョコレートパフェが食べたいなと、メルアはお願いしてみます」

「統夜と一緒に早く『バーンブレイド』を見たいです」

「ああ、そう……」

三者三様好き勝手なことを言っていた。

帰宅しなければならないカティアの提案は却下。昼時ということもあり、テニアとメルアの案を採用してスイーツの美味しいお店に向かう事にした。

テニアもメルアも満面の笑みだが、間違いなく私に食事をたかるつもりみたいね……社会人だから仕方ないけど、テニアには少し手加減してもらいたいわ……と。

「あれ？　アル＝ヴァン？」

目当ての店の前に私の彼氏　――　アル＝ヴァン・ランクスが立っていた。

携帯でも連絡がつかなかったからアル＝ヴァンの姿を見るのは本当に久しぶりね……あぁ、アル＝ヴァン。やっぱりカッコいいわ！

「ねぇ、アル　――　」

「あ、統夜だ！」

アル＝ヴァンに声をかけようとしたがテニアの大声に遮られた。

紫髪の美少年が私の視界に入ってくる。
その統夜と呼ばれた少年はアル＝ヴァンの元に駆け寄って行った。
そして二人で笑いあいながらスイーツが有名な店の中に入ろうとしている……え、どういうこと？

「おーい、統夜ー！」
「ちょっと黙ってテニア！」
「なにするのカルヴィナ　――　むぐむぐ！」

私は慌ててテニアの口を押さえつけた。
アル＝ヴァンと統夜君は私たちに気付くことなく入店していった。

「ちょっと、どういうことよ！？」
「ひ、ひぃ、止めてよカルヴィナ！　首締めないで、苦しいよ！」
「ミストレス！　落ち付いてく下さい、ミストレス！！」

私は至って冷静よ！！
ホワイト・リンクスの異名を持つ、敏腕の企業再建屋よ！　常日頃から冷静に全てを観察するのは得意中の得意だわ。
腕を掴んでくるカティアを振り払いながら分析した。
アル＝ヴァンが最近私からの連絡に答えなかった↓もしかしたら浮気している可能性がある↓今、アル＝ヴァンは統夜君と一緒に入店した↓同伴？↓統夜君はアル＝ヴァンの不倫相手……？
……なによ？　え？　冷静になれですって！？
失礼ね、私はいつでも冷静よ！
あぁ、アル＝ヴァン！　私というものがありながら……どうしてなの！？　私に魅力が足りないの！？　しかも相手が男だなんて、信じられないわ！！
ちなみにテニアは私の手の中で泡を吹いていた。

「きっと統夜さんが受けに違いないと、メルアは思うのです！」
「いやあああああああぁぁぁぁっ！！」
「錯乱しないで下さい、ミストレス！　ああテニア、しっかりしてテニア！」

カティアが私の手に絡みついてくる、邪魔だ！

「攻めはきっとアル＝ヴァンさんです。アル＝ヴァン×統夜さんはきっと需要が高いだろうと、メルアはメルアは想像します」
「いやぁ不潔よぉー！　不潔不潔不潔ふけつふけつふけつふけつｆｕｋｅｔｕ――」
「止めてッ、お願いだからメルアも煽らないで！　ミストレスが壊れてしまうわ！？」
「嘘だ！」
「ひッ、ぐらし？！」

意味の分からないことを言うカティアに鉈――は無かったから、テニアを叩きつけてやると、カティアは目を渦巻にして倒れた。

「嘘だ嘘だ、嘘だ！　こんなの嘘だ！　アル＝ヴァンが、私のアル＝ヴァンがぁ！　〇×〇な事をする訳がないわ！」
「クーランジュ、ひとまず落ちつきなさいと、メルアはクーランジュに言い聞かせます」

メルアが店の中のアル＝ヴァンたちを指差した。
前面ガラス張りの店内の窓際にアル＝ヴァンたちはいる。彼は統夜君と笑い合っていた。気難しい彼が私にしか見せない笑顔……許せない。
目を爛々と輝かせたメルアが、

「追跡するのです、とメルアはクーランジュに提案します」
「追跡？」
「ストーキング、とも言います。統夜さんが本当にＢＬ展開になるのでしょうか？　メルアはとても気になるのです」
メルア……甘いモノの食べ過ぎで頭が腐ったようね。
でもメルアの言うことは正しい。
まずはアル＝ヴァンの疑惑を解消しなくては！
「あんたたち、起きなさい！」
「痛い！」
気絶していたテニアとカティアをヒールで思い切り踏みつけてやった。さぞかし痛かったのだろう。一瞬で目を覚ました。
テニアは泣きべそをかいていた。
「酷いよー、痛いよー！　カルヴィナ、何でこんなことするのよ！？」
「黙れ！　あんたたちも２人のこと気になるでしょう！　行くわよ！」
「ミストレス、行くって何処へですか！？」
間の抜けた事をカティアが訊いてくる。素直で真面目だけど、愚鈍な子ね。
店に乗り込むに決まっているじゃない！
統夜君を尋問して、アル＝ヴァンとの関係を白状させてやる……
と私が店内を睨んだ時には２人の姿は既になかった。
「おのれ、何処へ行った！？」
「クーランジュ、あそこです。と、メルアは指さしながら言うので

した」

メルアの指す方向にアル＝ヴァンたちは歩いていた。

「な……ななな、なんで手を繋いでるのよ!?」

アル＝ヴァンと統夜君は手を軽く握り合いながら、私から遠ざかって行く。

「統夜、アタシと言う者がおりながら……！」

テニアの眉間に皺が寄っていた。

「うぅ……統夜、私とのことは遊びだったのですか？」

カティアの顔面にも青筋が走っている。

「ハァハァ、どうだ紫雲　統夜？　俺のビームライフルの威力は？　でかくて避けてしまいそうだろう？

統夜パート。

グアァ、な、なんて威力なんだ!?　あ、あまりに大きい……さ、避けてしまいそうだ!?　あぁ……や、やめてくれアル＝ヴァン……ァ、イ……イクゥ……あぁぁ、ユ　――　ユニバアアア

「「イエス、妃殿下様（ユアハイネス）！！」」

カティアとテニアが私に敬礼をした。

一瞬の間に私と2人の間には主従に似た関係が出来上がっていた。

平時であれば「可愛い奴……」と愛でてやれる所だけれど、緊急時であるし〇アスを使えない私にグズグズしている余裕はないわ。

下僕たちと忠誠心ゼロのメルアを連れて、アル＝ヴァンたちのストーキングを開始するのだった。

こちら、スネーク（カルヴィナ）。

これから、アル＝ヴァンと統夜君が回ったルートを紹介しようと思う。

特に廃スペックなスーツなど持っていない私達は、繁華街という環境と、休日と言う日程がもたらす人混みを利用し気づかれることなく2人の尾行に成功していた。

……結果として、追跡しなければよかったと後悔することとなる。

彼らが最初に訪れたのは『女性用の洋服売り場』だった。

見た光景は、2人は店内で商品を手に取り歓談している様子……

美男子同士の絵は眼福に値するが、メルア以外は心に深い傷を負う事になってしまったわ……。

だって男同志が女服売り場で盛り上がるシーンなんて、誰も見たくないでしょう？

私だってそうよ？　アル＝ヴァンが……質実剛健な私の彼が……

女装の気があったなんて信じられないわ。まさに青天の霹靂だわ！
唯一の救いは彼らが服を買わずに店から出た事ぐらいだった……

「統夜……女装は確かに似あいそうだけど……そういう姿は私の前だけにして欲しかった！」
「私、着るよ！　統夜がくれた服なら何でも着るよ？！」
「統夜タン、ハァハァ」

3人娘も私と同様に（約1名を除いて）錯乱していた。
……私だって、アル＝ヴァンが買ってくれた服なら何だって着るわ！　バニーガールにだって、女王様コスチュームだって何でもするわ！　だからお願い……男に女服なんて買わないで……。

次に2人が向かったのは映画館だった。

内容は「秋葉原の休日」……某有名作品をパクったラブストーリーだ。こんな作品が出回るなんて世も末だとは思うが、売り上げは上々らしいわ。売上と作品の質は相関するとは限らないけど、本当に世も末ね。

「ううぅ……ミストさん、なんでそこまで空気読まない台詞を吐けるの？」

テニアが映画を見て涙を流していたわ。
迫害されたヲタクたちの最後聖地を守るために立ち上がった正義の軍団と、悪の眷属である警察との最終決戦の場面で一大決起をした場面で、ミストさんが「でも、それじゃ問題の解決になりませんよね？」と発言し、ヲタクたちによって神の制裁を加えられるシーンだった。
ヒロインたちもミストさんを助ける事は出来なかった。

「あーん！　ミストさんは永遠に不滅です！」
「人間は社会で生きてる生物なんだから、所属組織の利に反する事言っちゃ駄目よねぇ？」
「ザマァ」

映画に熱中し、当初の目的を忘れた3人娘が好き勝手に感想を述べていた。
アル＝ヴァンたちも映画を見たり、途中で2人でトイレに行ったりと自由に行動していたわ。
でもエンドロールを見ることなく彼らは映画館を後にしたの。

「行くわよ、みんな！」
「あーん、ミストさーん！」
「テニア、いい加減にしなさい！」
「空気を読む必要なんてないのです、偉い人にはそれが分からんのです！！」

意味不明に興奮していたテニアを引きずってアル＝ヴァンたちを追った……

……アル＝ヴァンたちは次に入ったのは……宝石店だった……。

それも結婚指輪で有名な店だった……

「もぅ……駄目よぉ……！」

「しっかりしてよカルヴィナ！　何かの間違いに決まってるよ！」
「そうですよ！　統夜が私を捨てるはずがありません！」
「統夜さんとベッドインするのは私です。と、メルアは主張します！」

３人娘は絶望的な現実を見せつけられても、まだ諦めていない様子だった。
統夜君が彼女たちを裏切るはずがないと信じているのね。
……だらしないわねカルヴィナ・クーランジュ……年下の子たちが諦めていないのに……そうよ、私だってアル＝ヴァンは信じているわ。

「行くわよ、みんな！」
『はい！』

私たちはアル＝ヴァンたちのいる宝石店内に突入した。

「アル＝ヴァン！」
『「統夜！」さん！』

私たちの声に、清算口にいたアル＝ヴァンたち振り向いた。

「ん？　カルヴィナ？　ど、どうしてこんな所に？」
「カティア……それにテニアとメルアまで、一体どうしたんだ？」

アル＝ヴァンと統夜君に目が合う。
統夜君は特に慌てた様子もなかったが、アル＝ヴァンの方はと言うと酷く狼狽した様子だった。店員から受け取った掌大の小さな小箱を、急いで懐に収める仕草が非常に怪しい……もしかして……あれは統夜君に渡す用のプレゼントだっんじゃ！？

〈統夜。結婚指輪だ。俺と結婚してくれ！〉
〈ああ、アル＝ヴァン。嬉しいよ。いつまでも君と一緒だ！〉
〈アイ　ラブ　ユー……〉
〈アイ　ニード　ユー……〉
そして2人は貪り合うように互いの唇を　――
「みぎゃあああああああああぁぁっ！！！」

――頭をよぎった映像に私は耐えられなかった。

「カ、カルヴィナ?！　大丈夫か、カルヴィナ！?」

アル＝ヴァンが声を荒げていた。
嫌……来ないで！　この裏切り者め！！　如何にも私のことを心配している体裁で近づいてくるアル＝ヴァン……あぁ、アル＝ヴァン……愛する、私だけの愛する人。
私は貴方のことを愛していたのに！
世界で一番……いえ、宇宙で一番愛していたのに！
なのに貴方は私を裏切った！！　信じていたのに裏切られた！！

「カルヴィナ、落ちつくんだ」
「イヤッ、裏切り者の分際で触らないでよ！」
「な、なにを言っているんだカルヴィナ……？」

そんな困惑したような表情を浮かべても駄目よ。もう騙されないわ。
貴方はホントは男が大好きな変態で、私との関係は遊びでしかなかったのよ……そうよ、私は弄ばれたんだわ！　アル＝ヴァンと統

夜君に弄ばれたんだわ！

「統夜、どういうことか説明してください！」

統夜君はカティアを筆頭に3人娘に詰め寄られていた。

「そうだよ統夜！　アタシというモノがありながら、酷いよ統夜！」

「……返答次第では全殺しにします……と、メルアは脅迫じみた言葉をかけてみます！」

「そうか……お前たち、ついて来てたのか……バレテしまったのなら、しょうがないか」

統夜君はどこか投げやりな台詞を吐いていた。

それはアル＝ヴァンとの関係を認める発言に他ならないわ……認めたわね！　許さないわ紫雲　統夜！　私は懐にしまっていた果物ナイフに手をかけた。

怒りに支配されていたのは、当然私だけではない。

カティアが激昂していた。

「許せません……私たちとの関係は遊びだったんですね!?」

「なぁカティア、俺の話を聞いてくれ」

「聞きません！　聞きたくありません！　あなた、最低です!!」

涙目になったカティアは統夜から顔を背けた。

「あーんあーん、統夜ー」とテニアは号泣し、「死のう、とメルアは独白します」とメルアの表情には影がさしている。

「たくっ……」と統夜君はため息をついて、

「まったく……早合点にも程があるぞ」

カティアの頬に手を添えた。

「と、統夜……？」

「前にも言ったろ？　俺はお前たちのことが好きだ。超好きだ、愛してる。みんな、俺の愛すべきハーレムの一員なんだ！　捨てたりなんかするもんか！」

男らし過ぎる統夜君の告白の後に、

――パチッ

カティアの耳になにかが取り付けられた。銀色の小さなイヤリングだった。

「ちょっと早いけど、クリスマスプレゼント」

「統夜……さん……？」

「カティアなら似あうと思ってさ……秘密にしていたのは謝るよ。アル＝ヴァンさんに店を紹介してもらって買ったんだ……あまり金はないから安物だけどさ」

「あぁ……好きです、大好き統夜！！」

感極まったのか、カティアが統夜君の体に飛び付いた。顔を胸に埋めて恍惚の表情を浮かべている。

「テニアもメルアもごめんな。テニアには指輪、メルアにはネックレスを買ったんだ……受け取ってくれるか？」

「うん……うん！　もちろんだよ統夜、ありがとう！　大好き！！」

「嬉しい……と、メルアは素直に感激したのでした！」

テニアもメルアもプレゼントを受け取り、統夜君に抱き付いた。

３人の美少女が１人の男性に抱き付いてるシーンって、中々壮観なものね……って、なんで仲直りしてんのよ！？　統夜君はアル＝

ヴァンと手を繋いで歩いていたのよ！？

「あんたたち、騙されちゃ駄目よ！　ソイツはホモなのよ！　ゲイなのよ、ゲイナーのよ！！」

「何言ってんだ、この叔母さんは？」

「お、おば……！？」

ムカツクッ、なにこの子？　私まだ２０代前半なのに！　ピチピチの２０代なのに、ちょっと若いからって生意気すぎるわ！

呪い殺してやろうかと統夜を睨みつけると、彼に抱き付いていた３人娘が私の視界に立ちふさがった。

「あんたたち、今ならまだ間に合うわ！　私の元に来なさい！　私たち仲間でしょう！？」

「ミストレス、もう止めましょう……」

カティアが首を横に振っていた。え……なに言ってるのこの子？　なんだかみょーに優しい目をしている気がする。

「これ以上は不毛な争いですよ」

「最後には愛が勝つんだよ！！」

「愛は地球を救う……と、メルアは言っていないけど言わしてもらうことにします」

「う、裏切ったわね！？」

なんてこと……統夜からプレゼントを貰っただけで、３人娘にあっさり掌を返されてしまったわ！

酷い、酷い、みんな許せない！

裏切り者には死を！　私は懐の果物ナイフに手をかけた。

「アル＝ヴァンさん」

統夜……いえ、クズがアル＝ヴァンに話掛けて来た。ゴミ如きが私のアル＝ヴァンに馴れ馴れしく接しないでよ！

「もうバレテしまったんだ……アル＝ヴァンさんも覚悟、決めちまえよ」

「……ああ」

なによ、この会話？

秘密ごとを共有した者の持つ特有の雰囲気を二人は醸し出していた。怪しい……やっぱり、この2人は怪しい！

「いやあぁぁ、不潔、変態！　アル＝ヴァン×統夜なの？　統夜×アル＝ヴァンなの？　どちらにせよ最悪よ！！」

「カルヴィナ、話を聞いてくれ」

「嫌、近づかないで！！」

私はアル＝ヴァンが差し出した掌を払い除けていた。

「ッ！？」

それも彼に買った、プレゼントの果物ナイフで。

掌に直線が走って鮮血が飛び散り、店内が一気にザワメキたつ……やってしまった……。店員の「警察だ、警察を呼べ！」という言葉が聞こえてくる。

力が抜けて、私は地面に座り込んでしまった。

「大丈夫か、カルヴィナ？」

「あぁ……アル＝ヴァン」

私の愛する人……世界で一番大好きな人……私は彼を傷つけてしまった。

彼は無傷な方の手を私に差し伸ばしてくれている……でもきっと、私にこの手を取る権利はない……

今、私の目の前にいるのは……私の、世界一大切な人。世界で一番、守りたい人……あぁ、アル＝ヴァン。愛してるわ、殺したい程に……。

貴方は私の全て。

誰かに取られるくらいなら……いっそのこと……

「さようなら……アル＝ヴァン」

「え？」

私は彼にプレゼントするハズだった果物ナイフを両手で握りしめ、体ごと彼の体に突き立てた。

ズンッ、と重く硬く逞しいアル＝ヴァンの筋肉をナイフが貫通する。

「カル、ヴィナ？」

「さようなら、愛しい人……大丈夫、私もすぐに後を追うわ」

手には赤い液体が滴り、目から出た熱い液体が頬を伝った。周囲のさらに騒然とし、「救急車を呼べ！」という声や悲鳴が耳を通り過ぎて行った……

……ああ、これでアル＝ヴァンは私だけのもの……永遠に一緒よ、アル＝ヴァン。今日はクリスマス前日……神様が生まれた日の近くで死ぬのも悪くないわ……

「カルヴィナ……済まなかった」

アル＝ヴァンが私に詫びを入れてきた。
どうして謝るの？　貴方を刺しているのは私なのに、どうして貴方が謝るの？
彼は私の肩を力強く掴み、ゆっくりと私を体から引き離して言った。

「暫く連絡を絶ったり、統夜と街を出歩いたり……勘違いさせてしまうような行動をして済まなかったな」
「アル＝ヴァン……勘違いって……？」
「本当は明日渡して、君を驚かせるつもりだったんだが……」

アル＝ヴァンは清算口で受け取っていた小箱を懐から取り出した。
余談だけど、彼の服の腹部分は既に赤く染まりきっており、今も広がり、血液が地面に滴っている……しかし、彼は顔に苦悶を見せたりはしない。
取り出した小箱をアル＝ヴァンが開けると、中身は小さなダイヤで装飾された指輪が収められていた。

「カルヴィナ、愛している……その……良かったらなんだが……」

物事を端的に述べるアル＝ヴァンは珍しく言葉を淀ませていた……しかし、意を決したのか凛々しい瞳で私を見つめてきて……そして。

「良かったら、結婚してくれないか？」
「え……それって……？」
「ああ、我が人生、最初にして最後……一世一代のプロポーズだ」

プロポーズ……アル＝ヴァンが……私にプロポーズ……？

嬉しい……いつの間にか手から力が抜け、果物ナイフは金属音を響かせて地面に落ちていた。
そして私とアル＝ヴァンは、互いの存在を確認し合うように抱き合い、唇を重ねた。

「私も、愛しているわアル＝ヴァン……私たちはいつまでも一緒よ……」
「あ……ああ……」
「アル＝ヴァン？」

途切れ途切れになるアル＝ヴァンの声。
見上げると彼は顔面蒼白であり、腹部からは血が止まることなく流れ出ていた。一瞬、表情が苦痛に歪んだかと思うと、彼が力なく崩れ落ちてしまう。

「ア……アル＝ヴァン……？」
「ミストレス、なにを茫然としているのですか！？　早く応急処置を！」

カティアが私たちの間に割り込んできた。

「救急車が着いたよ！　アタシも手伝うから早く車に運ぼう！」
「素人が下手に動かすと危険だと、メルアは思います！」

テニアとメルアがアル＝ヴァンの様子を見て言った。
……嘘よ……アル＝ヴァンが、アル＝ヴァンがこんなことになるなんて……嘘よ……！

「いやあああぁぁ、アル＝ヴァン！？
死なないで、アル＝ヴァン！！　こんなの嫌よ！！　お願い、目を

覚ましてアル＝ヴァン！！」

私が肩を揺するがアル＝ヴァンは反応しない。

「ッ！？　ミストレス、乱暴にしてはいけません！！　テニア、メルア一緒にミストレスを取り押さえて！！」

「離して！！　私のッ、私のアル＝ヴァンが！！　アル＝ヴァンが――――――」

3人娘と統夜に取り押さえられ、無力な私には何もできなかった。

到着した救急救命士により、アル＝ヴァンは担架に乗せられて救急車へ……最寄りの病院へと搬送された。

当たり前のように私は警察に連行され、留置所へ拘留される。

彼の安否が気になり、気が気ではなかった……。

釈放されたのは3日後だった。

殺人未遂にも関わらず異様に早い釈放には理由があった。一命を取り留めたアル＝ヴァンが嘆願書を提出したためらしい。ありがとう、アル＝ヴァン。

あぁ、アル＝ヴァン……世界で一番大切な、私の愛する人……護りたい人。

待っていて、今、アイに行きます！！

●

俺の名前は紫雲（しうん）　統夜（とうや）。

アル＝ヴァンさんが恋人のカルヴィナさんに刺された事件から3日が過ぎた。

あの後、アル＝ヴァンさんはカイメラ医院という小さな病院に運び込まれた。小さいながらに最新鋭の設備を兼ね備えていたようで、あっという間に手術は終了し無事に一命は取り留めることができた。

なんでもアサキム・ドゥーインとかいう凄腕のモグリの医者がいるらしい。通り名はブラックなんたら。あれだけの失血から命を救うのだから相当腕が立つことは間違いない。

「じゃああの時、統夜とアル＝ヴァンさんが一緒にいたのは、クリスマスのデートコースの下見をしていたってこと？」

テニアが俺に訊いてきた。

今、俺たちはカイメラ医院の廊下にいる。アル＝ヴァンさんの見舞いに向かっている最中だ。ちなみにお見舞い品はフルーツ盛り合わせ。

「ああ。結局あの騒ぎのせいで、お前たちとのデートは流れてしまったけどな」

「じゃあ手を繋いでいたのはどう説明するんですか？」

今度はカティアだ。

「想定したタイミングで手を握れるようにする実地練習」

「ふふふ、そこから芽生える禁断の愛。とメルアは淡い期待を抱（いだ）いてみるのです（いて）」

いやいやメメメ、そこは抱かなくていいから。
俺、美少女にしか興味ないし。
アル＝ヴァンさんは父さんの弟子で、尊敬する年上の男性ってだけの関係さ。
宝石店に行ったのだって、カティアたちへのプレゼントを見繕うためだし。アル＝ヴァンさんはアル＝ヴァンさんで彼女へのプレゼントを買う予定もあったみたいだし……まあ、まさかプロポーズの品だとは思わなかったけどな……。

「でもプロポーズかぁ……私もいつかされてみたいものです」

横目でチラチラ俺を見ながらカティアが言った。

「ねえねえ、統夜が私たちの中で結婚するとしたら誰？」
「当然、私ですよね……と、少し自信無さ気にメルアは尋ねてみます」
「ははは、バカだなぁ３人共。みんな幸せにするに決まってるじゃないか？」

俺の言葉にキョトンとした顔をさせ、彼女たちは反論して来た。

「で、でもこの国では一夫多妻制は禁止されていますよ！」
「そんなの、いつか俺が総理大臣になって変えてやるよ」
「あはは、バカだなー統夜は。できるわけないじゃん！」
「でも……ほんの少しだけ期待してみます。とメルアは統夜に伝えました」

他愛ない会話は弾み、いつの間にかアル＝ヴァンさんの病室についた。
術直後なので、まだ一人部屋だ。

ノックをして中に入ると先客がおり、綺麗にカットされたリンゴをアル＝ヴァンさんの口へと運んでいた。

「はい、　アル＝ヴァン、お口あーんして？」

「あー　――　ハッ！　と、統夜？　違うぞコレは、断じてリンゴを剥いてくれなどと頼んだりはしていない　――」

「もう、あーんしてってば！」

「――　むぐぅ！」

哀れ。

アル＝ヴァンさんは俺たちの登場に酷く狼狽していたが、恋人のカルヴィナさんにリンゴを無理やり口に突っ込まれていた。

カルヴィナさんは笑っている。

やっぱり美女は笑った顔が一番だな。美少女じゃないから俺のハーレムに入れれないのが残念だ。

「どうやら俺たちはお邪魔虫みたいだな？　お見舞いの品はここに置いておくから、後はよろしくやってくれアル＝ヴァンさん」

「むぐぅ、むぐぐぅ！！」

リンゴ突っ込まれたままじゃ何を言っているのかさっぱりだな。

でも意外と元気そうでよかったよ。

俺たちは病室の外へ出て、ジェネ高へと帰ることにした。

アル＝ヴァンさん、カルヴィナさん、末永くお幸せに　――　……

どうでもいいが、あのリンゴはどうやって剥いたんだろうな？

例の果物ナイフ？　まさかな……

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。
『エリア』には個性豊かな人間が沢山いる。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない

バーニングラブ　～ラストクリスマスの真っ赤な誓い～（後書き）

＜キャラ紹介＞

カルヴィナ・クーランジュ：「ホワイト・リンクス」の異名を持つ企業の再建屋。アル＝ヴァンとは恋人同士。黙っていれば美人なのだが、非常に独占欲が強く、アル＝ヴァンが他の人といるのを見ると情緒不安定に陥りやすい。俗に言うヤ○デレ……しかし彼が統夜というところを目撃してしまい……

カティア・グリニャール：ジェネ高2年生でアルバイトでカルヴィナの手伝いをしている。3人娘のリーダー格で非常にまじめな性格をしており、2人とは親友兼統夜を廻る恋のライバル。実はロボットアニメ「バーンブレイド」が好きなど、少しオタクな一面もある。

フェステニア・ニューズ：ジェネ高2年生でアルバイトでカルヴィナの手伝いをしている。愛称はテニア。3人娘のムードメーカー的な存在で、2人とは親友兼統夜を廻る恋のライバル。非常に大食いなので、彼女に食事を御馳走する時は注意が必要。

メルア・メルア・メイナ：ジェネ高2年生でアルバイトでカルヴィナの手伝いをしている。一部の人間にメメメの愛称で呼ばれることがある。一人称が自分の名前と言う、3人娘の不思議っ子的な存在で、2人とは親友兼統夜を廻る恋のライバル。甘いものが大好きで脳みそが腐っている（原作では違います）。

アル＝ヴァン・ランクス：カルヴィナの恋人。クリスマスにプロポーズして彼女を驚かすために連絡を絶ち、統夜とプレゼントを買いに行くが……？　苦労人。

紫雲　統夜：ジェネ高2年のモテモテハンサム男子。美少女が大好きでハーレムを作っているため、ジェネ高男子とは非常に仲が悪い。そのため偏見なく付き合ってくれる人間のできたアル＝ヴァンとは仲がいいのだが……今回はそれが災いに……？

＜次・回・予・告＞

カズマ「リア充爆発しろ！！！！」

エクセレン「ワーオ、ねねキョウスケ？　あそこに、みっともない青春の叫びを爆発させている少年がいるわよ？」

キョウスケ「思春期なんだ、そっとしておいてやれ」

カズマ「ハーレム？　ケッ、べ、別に羨ましくなんてないもんね！！　ハーレム作る奴なんて、１人の女の子を愛せない浮気な最低男に違いないぜ！！　ハーレム野郎なんてみんな死ね！！　うおおおおぉぉっ、彼女欲しいぞぉぉ！！！！」

キョウスケ「止めなくていいのか？」

エクセレン「面白いから放置しておきましょう」

キョウスケ「……そうだな（若い者はよく分からん）。次回予告に行くとしようか？」

キョウスケ

「俺の名前はキョウスケ・ナンブ、ちゃんと彼女もいるぞ！

今回はクリスマスネタだったから、次回はお正月ネタにでもしてみるか？
折角だし家族で鍋をつついたりするホノボノ系でな。
次回スパロボ学院、「俺たちゃヴァルストークファミリー３」
俺のアルトが、愛と哀しみの空を切り裂く！！」

カズマ「絶賛、彼女募集中ぅ　――――――――――――――ッッッ！！！！！！！」

今回はヤンデレ回でお送りいたしました。
ヤンデレの内面なんて想像もつかないので変な感じです、ふふふ……。
地味にアル＝ヴァンの一人称を忘れてたり、３人娘が主人公をどう呼んでいたかが思いだせなかったりしたので不自然な部分があるかもしれません（メルアは仕様ですが）。
気付いた部分はどうか御指摘下さい。
平沢　唯さん、元ネタありがとうございました！
ｓｉｂｕｇａｋｉさんも、ケルンバイターさんも感想ありがとうございます！
励みになるし、掲示板の一言でネタが思いついたりするので本当に助かります。

さて、年賀状も大掃除もまだしていない……コタツに入って小説書くと動けなくなります。駄目だコリャ！
次回を年内に更新するかは不明です。
それでは良いお年を～～ノシ

小説に地の文なんて必要ないのです、偉い人にはそれが分からんのですＳＰ（

＜注・意・事・項＞
絶賛、キャラ崩壊中！
地味なキャラたちが地味に崩壊しております！
前回の次回予告を無視した話ですが、それでもいい、という方はどうぞ！

短いです。地の文がないのは仕様です。今年もよろしくお願いします！

小説に地の文なんて必要ないのです、偉い人にはそれが分からんのですＳＰ

ナレーション
「ここは何故か高校の密集する地域『エリア』……２０１０年の暮れに、ある料亭にて勇者たちの集会が行われていた　――」

一同『かんぱーい！！』

ナレーション
「そう……出番が少なく、脚光も日の目も浴びることも少ない……地味キャラたちによる忘年会である」

スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～
小説に地の文なんて必要ないのです、偉い人にはそれが分からんのですＳＰ
～あなた、そりゃー、ただの台本ですがな！　の巻～

ラッセル「えー、皆さん、本日はお日柄も良く、このような催しにお集まり頂き有難うございます！　本日は無礼講で、日頃の鬱憤を晴らす様に飲み明かしましょう！！」

ホリス「いよっ、待ってました！　私たち頑張っているのに、日頃出番ありませんからねえ。こういう機会もないとやってられません

よねえ。あ、ラーダさん、ま、お一つどうぞ（お酒をつぐ）」

ラーダ「パンダ・トラヤ」

エイタ「あ、頂きました。十八番のパンダ・トラヤです。いいですよね、十八番のある人は」

ラーダ「クンダリーニもあるわよ。ぐびぐび（日本酒を一気に煽る）
――ぷはぁ」

ホリス「いやあ、いい飲みっぷりですねー。まま、どうぞどうぞ（再びお酒をつぐ）」

ラーダ「ありがとう、ホリスさん」

ラッセル「それにしても、このメンバーで忘年会ができるとは思いませんでしたね」

エイタ「ホントですね。僕たち地味キャラは普段注目されませんからね。きっと僕なんて名前も覚えられていませんよ！　グビグビ（ビール一気飲み）」

ラッセル「エ、エ、エイ……さんも大変ですね」

エイタ「あれ、名前忘れられてるよ！？」

ホリス「気にすることありませんよ、メガネさん。メガネが本体なんですよね？」

エイタ「んな訳ないでしょう！？」

ラーダ「えい（エイタからメガネを取る）」
エイタ「あっ、何するんですかラーダさん!?」

ラッセル「あれ、メガネさん!　メガネさん!　ホリスさん、メガネさんが息をしていません!」

ホリス「メガネ!　なんで死んでしまったんだメガネぇぇ!!」

メガネ「死んでねえよ!　それに本体はメガネじゃねえよ!　どっかの漫画のキャラじゃあるまいし――ってコラー、名前が違うでしょ!　メガネじゃなくて、エイタ・ナガタだってばよ!　あとメガネ返してください!」

ラーダ「メガネさん、無事で良かったわ」

ラッセル「いやー、良かった良かった」

ホリス「まま、一杯どうぞ（ビールをつぐ）」

メガネ「あ、どうも。って名前戻ってないよ、どういうこと!?」

ラーダ「細かい事は、気にしない気にしない。一休み一休み。カレーでもいかが?」

メガネ「ネタが古いよ!　誰も分からないよ!　あとカレーの登場が脈絡なさすぎるよ!」

ラーダ「ツッコミーニ、乙」

メガネ「自分のアピールばかりしないで下さいよ！　そんなことしても、本編で出番なんかありませんから！」

ラーダ「……ションボリーニ」

ラッセル「ま、まあまあ二人とも、折角の忘年会なんですから楽しく飲みましょうよ。ね？」

ホリス「では折角集まったのですし、自己紹介でもしてみましょうか。精神コマンドで」

メガネ「なんで精神コマンド！？　叫び過ぎて喉が渇いたよ、ゴクゴク（ビールを再び一気飲み）！」

ホリス「精神コマンドにはその人の、人となりが現れると言いますからね」

ラーダ「そうなのかしら？」

ラッセル「初耳ですね」

ホリス「まぁ、言いだしっぺですし、私から行きましょう。私の名前はホリス・ライアン。ヴァルストークファミリーの一員として働かせて頂いています。こう見えても結構インテリでしてね、巷では結構人気者でして　――」

メガネ「ちょっと待って待って」

ホリス「なんですか？」

メガネ「それだと普通の自己紹介だよ！」

ホリス「こりゃー、一本取られたー」

ラッセル「はいはい、じゃあ次は僕ですね。僕の名前はラッセル・バーグマン。精神コマンドは必中　鉄壁　信頼　応援　友情　激励です」

メガネ「いやぁ、実に地味なラインナップですねーホリスさん」

ホリス「地味に役に立つコマンドですねー、鉄壁があるあたり流石はディーフェンスディーフェンスですね」

ラーダ「でも、パンチ力が皆無ね」

ホリス「いやいやラーダさん、ラッセルさんは耐える人なんですよ。きっと泣き寝入りするタイプです」

ラッセル「大丈夫……大丈夫、僕は大丈夫。僕は貝だから！　貝だから叩かないでカチーナ先輩！　竹刀イヤアアアァァァッッ！！？」

ラーダ「……さっきの一言で変なスイッチ入っちゃったみたいね」

メガネ「ふっ、誰にでも触れられたくない部分があるんですよ（儚げな表情で）」

ラーダ「えいっ（エイタの頬を叩く）」

メガネ「あいたぁ！　何するんですか！？」

ラーダ「なんかぁ、ムカついたからぁ、みたいな？」

メガネ「感じぃ？　ってか！？　ふざけんな！」

ラーダ「はい、巻いて行きましょう。じゃあ次は私ね」

メガネ「スルーかよ！？」

ラーダ「私の名前はラーダ・バイラバン。精神コマンドは自分で調べてね」

メガネ「なんじゃそりゃ！？」

ラッセル「メガネは五月蠅いので放置しておきましょう。ちなみにラーダさんの精神コマンドはとてもサポートに特化しています。実に献身的ですね」

ラーダ「あら嫌だ、褒めても何も出ないわよ（テレテレ）」

ホリス「いいですねー、少しはアカネさんに見習ってもらいたいものです。サブキャラなのに覚えるコマンドが必中　ど根性　直撃　不屈　熱血　気合ですからね」

メガネ「まるでキン○クマンが覚えそうなコマンドですね、必殺技はキ○ニクバスター？」

ラーダ「あれ？　私のターンは？」

ラッセル「大丈夫です！　まったく問題ありません！」

ラーダ「なにそれ、フォローなの！？」

ラッセル「モーマンタイ！　では次行ってみよー！」

メガネ「４番、エイタ・ナガタ歌います！（顔は既に赤い）」

ホリス「イエー、ドンドンパフパフッ」

メガネ「宇宙戦艦メガネのテーマ、イエー！！　『さらばー出番よー　たびだーつ船はー　うちゅぅー戦艦んーー、メーガーネー！！』　フォ　――――ッ！！」

ラッセル「メガネ、いらないよ」

メガネ「しどい！！」

ホリス「さー、飲みましょ飲みましょ。ほら、ラッセル君もこっち来て（ラッセルにお酒をつぐ）」

ラッセル「あっ、ありがとうございます。いやー、それにしても気の合う仲間で飲むお酒は美味しいですねー」

ラーダ「そうね。はい、カレーどうぞ」

メガネ「いや、話の展開で出てくるのもおかしいし、そもそもお酒に合いませんって。というかラーダさんってカレー好きでしたっけ？　ヨガのイメージならありましたけど……」

ラーダ「……」

ナレーション
「途端に口を紡ぐラーダ。沈黙が場を支配し、ラッセルとホリスの冷たい視線がメガネに突き刺さる」

メガネ「え？　もしかして地雷？　地雷、踏んじゃった！？」

ラッセル「あーあー、だからメガネは駄目なんですよー」

ホリス「ダメガネだな」

ラーダ「バレテしまっては仕方ないわね！　特徴があった方がキャラが立つでしょう？　だからテコ入れしてみたの」

ラッセル「あ、やっぱりそうですか。ラーダさん、流石です！」

メガネ「うわっ、あからさますぎるゴマすりだ！」

ホリス「まあまあ、でも特徴があることは良い事だよ。そういう意味ではラーダさんは特徴が一杯ですよね？」

ラーダ「例えば？」

ホリス「美人でしょ？　美人でしょ、あとは美人で、最後に美人」

メガネ「清々しい！　逆に清々しいぐらいのゴマすりだぁ！」

ラーダ「ちょっとメガネ、それどういう意味よ？」

メガネ「え？」

ラーダ「鏡よ、メガネよ、メガネさん……世界で一番美しいのは誰かしら、ゴラァ！！（荒ぶる鷹のポーズ（ヨガのポーズの一種）で威嚇）」

メガネ「ヒィ、そ、それは白雪　――　じゃなくて、黒い肌のラーダさんです！！」

ラーダ「よろしい」

ラッセル「……まあ、あとのラーダさんの特徴と言えば、予知能力者とかヨガが得意とか肌が黒いとかがありますよね」

ホリス「でもラッセルもいい特徴が持っているじゃないですか？その地味な顔、まるで小市民Ａと言っていい顔はスパイ向きなんじゃないかな？」

ラッセル「酷いですよ、ホリスさん。そう言うホリスさんだって、○ンダムＷに混じっていたら違和感ゼロですよ？」

ホリス「そうかな？」

メガネ「ねえ、僕の特徴は？」

一同「「「メガネ」」」

メガネ「やっぱりか！　分かってたさ、きっと僕なんてメガネ要員さ！　美少女だったら萌え要素もあっただろうに、きっと兵士Ａと入れ替わっても気づかれない存在なんだ！」

ホリス「まぁまぁ、そう嘆きなさんなって……君なんてまだ良いじゃないか？　皆、自分の扱いに不満を持っているみたいだね」

メガネ「当たり前じゃないですか！　僕だって目立ちたい！！」

ラッセル「自分もです！　専用曲とか欲しいです！！」

ラーダ「私も、ヨガが必殺技になるような専用機体が欲しいですね。ヨーガフレイム、とか」

ホリス「あっはっはっは、皆さんの悩みはそんなものですか？　恵まれていますねー」

メガネ「はあ？　じゃあ、ホリスさんはどんな扱いされているんですか？」

ホリス「そうですね……まず、立ち絵がありません」

ラッセル「え、マジで？（素の反応）」

ホリス「ファミリーの中でも立ち得がないのは私だけです。あと、事あるごとにハブられますね……時々、体が透けてるんじゃないかと思う位に……ううぅ……！（泣き崩れるホリス）」

ラッセル「……」

ラーダ「……」

エイタ「……あれ？　なんで名前戻ってんの！？」

ホリス「ハッハッハァ、こんちくしょー！　みんなぁーー、かんぱーい！！」

一同『かんぱーい！！』

ナレーション
「４人の顔には深い影がさしており、腹の底から悲壮感に溢れた笑いが込み上げるのだった」

一同『あっはっはっは……！！』

ナレーション
「こうして地味キャラたちの地味な年末は過ぎて行き、地味にゆく年くる年を見て、地味に新年を迎えたのであった。
初日の出は上がったが、地味キャラたちに日がさすことがあるのだろうか……それは誰にも分からない……」

小説に地の文なんて必要ないのです、偉い人にはそれが分からんのですＳＰ（

＜キャラ紹介＞

ホリス・ライアン：地味その1。一応、ヴァルストークファミリーの一員。

ラッセル・バーグマン：地味その2。ディフェーンス、ディフェーンス。

エイタ・ナガタ：地味その3。メガネ。

ラーダ・バイラバン：地味その4。献身的なフォロー系。心を許すとヨガの餌食になる？

＜次・回・予・告＞

ホリス「やった、次回予告にて私の独り舞台です！」

キョウスケ「次回の予告は前回の予告と兼用だから、今回は予告はなしだ」

ホリス「そ、そんな！　私の出番は！？」

キョウスケ「なしだ」

悲しいときぃ～。
久しぶりに実家に帰ったら、体質変わって猫アレルギーになっていたときぃ～。
喘息になって死にかかりました。
読者のみなさん、今年もよろしくお願いします！

前回に予告していた話は分量がちょっと多くなりそうで、すぐにアップできそうにないので、思いつきの作品を更新してみました。
地の文なしというチャレンジをしてみました！
２度とやりません！
台本だしね。小説じゃないしね。
今年も頑張りますのでよろしくお願いします！

俺たちゃヴァルストークファミリー３　～叔父、襲来～（前書き）

＜注・意・事・項＞

絶賛、キャラ崩壊中！
仮面パパがキャラ崩壊しております！
キャラのイメージが崩れるのが嫌な方は閲覧を避けてください。
それでも良いと言う方は、是非どうぞ！

ちなみに今回も正月ネタ。
作者の実家での大晦日はすき焼きと決まっております。

本編は短編としては長めです。

俺たちゃヴァルストークファミリー3　～叔父、襲来～

俺の名前はカズマ・アーディガン。
何故か高校が密集する地域で「エリア」で、運び屋をしているヴァルストークファミリーの長男坊だ。

――唐突だが、俺たちには母親がいない。

もちろん、今はいない、という意味だ。
俺には姉が2人に、妹が2人いるので母親がいなかったという事はありえない。俺を合わせて総勢6名にもなるヴァルストークファミリーは、世間一般で言う父子家庭ということになる。
親父――ブレスフィールド・アーディガンは男手一つで俺たち兄弟を育て上げてくれた。
凄い事だと思う。
そりゃ、シホミ姉ちゃんやチイ姉の協力は不可欠だっただろうけど、全員をしっかり学校に通わせてまっすぐに育て上げるのは並大抵のことではないだろう。少なくとも、今の俺には無理だと思うね。
親父は文字通り、俺たちファミリーの大黒柱なのさ。

……でも時々思う。

贅沢だとは分かっている。
母ちゃんがいてくれたら……と。

母ちゃんが亡くなったのは俺とアリアが7歳の頃だ。
死因は事故死。命日は1月4日。車に撥ねられて死んだ。

幼いながらに絶望を知った気がした。みんな泣いていた。母ちゃんの死に顔は忘れられたくても忘れられねえ。

この頃、ミヒロはまだ生まれたばかりだったので、母ちゃんの顔を覚えてはいなかっただろう。

ある日幼稚園でなにか言われたのか……泣きながら俺に尋ねてきたことがあった。

「……お兄ちゃん……どうして、うちにはおかあさんいないの……？」

重い、重い言葉だった。

俺はまだ子どもで、答えをミヒロにあげることはできず、腸煮え繰り返る怒りに駆られて幼稚園に乗り込もうとしたもんさ。止めようとするミヒロとアリアを振り払った俺を止めたのは、他でもない、親父の強烈な拳骨だった。

「カズマ、暴力ではなにも解決しないぞ」

普段の親父はお茶らけて、バカなことばかりして俺たちを笑わせてくれる。親父の周りにはいつも家族の笑顔があった。そんな親父の見せた凍りつきそうな程の無表情に、俺は恐怖を抱いたのを覚えている。

「お前のミヒロを大切に思う気持ちはとても尊い。だからこそ、軽率な行動をするのはよしなさい」

「でも……！」

親父の言葉の意味が分からなかった。

やられたらやり返す。当たり前のことじゃないかとこの頃の俺は本気で思っていたんだ。

でも言い返す言葉が見つからなくて顔をうつ向ける俺に、親父は暑苦しいぐらいのファーザースマイルを向けて言ったんだ。

「なーに、後は父ちゃんに任せとけ！」

八重歯が覗くぐらいに口を開いてウィンクし、右手の親指を立てていた。

３０後半のオッサンの暑苦しいけど頼りがいのあるスマイル。

ファーザースマイルを終えた親父は背を向けて、幼稚園へと足を運んだのを覚えている。

「……ごめんな、カズマ……」

「なに、父ちゃん？」

小さく親父が呟いたのも覚えている。

なにを謝ったのか……分かる訳がない。俺は小さかったんだ。今でもバカだけど、この頃はそれに輪をかけてバカだった俺に、親父の言葉の意味を探ることなんてできやしない……

「なに、ただの独り言だよ」

振り返ることなく、親父は幼稚園へと足を運んだ。デカイ背中だった。

次の日から、ミヒロが母ちゃんのことを口することはなくなったし、泣きながら帰って来ることはなくなった。

親父がなにかしたのだと思う。

凄いと思った。

子ども心に思ったモノだ。

――父ちゃんみたいに、家族を守れる男になるんだ！

シホミ姉ちゃんもチイ姉も、ミヒロも……あとついでにアリアも守れるぐらい強くなる！　男の中の男になってやる。俺は親父だって守れるくらいの男を目指しているのさ。
その思いは今も変わらない。
うちの家族に手を出す野郎は神さんだろうと容赦はしねえ！

――俺の家族は俺が守ってみせる！！

これだけは絶対に曲げらんねえ、俺の信念なのさ。

スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～
俺たちゃヴァルストークファミリー３　～叔父、襲来～

【ヴァルストーク営業日誌　１２月３１日】

前言撤回！！
いきなりだが、前言を撤回させてもらおうと俺は思う。

「アリア！　てめえ、肉取り過ぎだぞ！」

魂の叫び声は俺の腹の底から食卓に響き渡った。
時は年末。空気が凍てつき、寒さが心までも蝕む季節。
人類の心は冷え切っていたが、それでも人類は死滅していなかった！
我ら人類の最後の希望が、今、俺の目の前に広がっているからだ。

――― 年末救世料理（ねんまつきゅうせいしゅ）　すき焼き ―――

ふぅふぅ、少し興奮して強調しすぎたかな。
だがコレで俺の心の内を察してもらえたかと思う。
貧乏ジリ貧のヴァルストークファミリーにおいて、すき焼きとは年に1度の贅沢料理なのだ！
ニンジン、ゴボウ、白菜、シラタキ……そして牛肉！　ビーフ！
ナイスビーフ！
それが妹様に蹂躙されていく。

「野菜も食えよ！　また太るぞ！」
「うっさいわねバカカズマ！　早い者勝ちだよ！」
「そうだよお兄ちゃん。悲しいけど、これ、戦争なんだよ」

おのれ、ミヒロ裏切ったな！　ミヒロの取り皿にはしっかりお肉様がキープされている。

「まいうーまいうー、あカズマ、マヨネーズ取って」

そう言ったのはチイ姉。すき焼きにつけるとき卵にマヨネーズがこれでもかと盛られている。色は卵の黄色ではなくマヨネーズの白だ。

「全国のすき焼きファンに謝れ！」
「なにキレてんの？　あ、この肉煮えてる。もーらい」

「あーー、俺が狙ってたのに！！」
「遅いよ、お兄ちゃん」

チイ姉に続いて、ミヒロが俺の目をつけていたお肉様を掠め取る。
そしてとき卵につけてお肉様は口の中へ。もにゅもにゅ、と噛むたびに肉汁とタレが浸み出し、それをとき卵がマイルドに包み込んで至福のハーモニーを奏で始めている……ような気がする。
まだお肉様を食せていないため味を想像するしかない。あぁ、涎が……
え？　味をイメージしてないで食ってみろって？
ウルセエ！！　食えるもんなら食っとるわい！！
アリアを筆頭に、ミヒロ、チイ姉のカシマシ3連星が俺の狙っていたお肉様を集中攻撃してくるのだ。姉妹ならでは連携プレーに俺は白旗を上げっぱなし……切ねぇ。

「カズマちゃん、食べないの？」

独り優雅に食事をしていたシホミ姉ちゃんが言った。
シホミ姉ちゃんはファミリーの長女だ。食卓の誰もシホミ姉ちゃんの狙った肉には手を出さない、しわ寄せは全て俺の所に押し付けられる。俺には、すき焼き鍋の中が小さな社会の縮図に見えたね。

「だってよう……」

俺が唇を尖らせると、シホミ姉ちゃんは笑顔で手を差し伸べてきた。

「カズマちゃん、お姉ちゃんがよそってあげるから取り皿を頂戴」
「ね、姉ちゃん！」

救世主（メシア）現る！！
シホミ姉ちゃん、あなたは女神です。例えるなら砂漠で行き倒れそうなときに現れるオアシス、足をツッて溺れているときに現れる巨大な空気の泡（バブル）、広がり続け山火事に絶望していたときに降ってくる天の恵み（スコール）。とにかく、シホミ姉ちゃんは最高だぜッ！
まったく、他の女性陣にもこの気づかいを見習って欲しいもんだね。でないと嫁の貰い手なくなるぞ？

「はい、どうぞカズマちゃん」
「すまねえシホミねえちゃん、恩に着るぜ！」

シホミ姉ちゃんから受け取った取り皿の中身を確認する。
まず白菜。これはすき焼きでは外せませんね。流石シホミ姉ちゃん、分かっておられる。さらにニンジンにゴボウ、そして豆腐にシラタキ。最後にトリを務めるのは我らがおにく……あれ？
ウェア　イズ　マイ　ビーフ？
気のせいかお肉様の姿が見当たらないのだけれど……。

「野菜もしっかり食べないと駄目よ」

俺の健康を気遣ってくれるありがたいお言葉を頂いた。しかしそんなシホミ姉ちゃんの取り皿にはお肉様が山のように積まれている。説得力皆無だ！
オ・ノーレ！
女狐め、やりやがったな？　天使の様な笑顔を浮かべておきながら、やっていることは他の女性陣と変わらなかった。シホミ姉ちゃんの顔に浮かべていたのは天使のような悪魔の笑顔でした。くそ、策士め。シホミ姉ちゃんのあだ名は今日から「ギンロー」だ。

「あ、この肉食べれるよチイ姉ちゃん！」

「ありがとうアリア、こっちもいけるよミヒロ」
「アリ姉ちゃん、あっちのも大丈夫そう」

こうしている間に、3連星が脅威の連係プレーでお肉様を迎撃していった。3人を結んだ3角形がまるでバミューダトライアングルのようだぜ！　お肉様がドンドン胃袋に沈んでいく。

しかし、一度取り皿にとった食べ物は食べきらないとシホミ姉ちゃんに怒られるので、俺は急いで白菜たちの始末に取りかかった。

1分程かかって敵機を殲滅し戦場（すき焼き鍋）に戻ると、そこには希望の船（お肉様）の残骸しか残されていなかった。

「絶望した！　優しさの欠片もない家族に絶望した　――――ッ！！」
「あ、買って来たお肉はさっきので最後みたい」
「ちくしょーー！！」

ミヒロの宣告に俺は崩れ落ちた。

結局、お肉様を一切れも口に出来ず、ヴァルストークファミリーのスキヤキウォーズの幕は降りた。惨敗である。

余談だが親父は開戦早々、シホミ姉ちゃんから晩酌攻撃（日本酒）を受け、へべレケになって倒れた。

顔を真っ赤にして、千鳥足になり、居間の壁に張っている超巨大な母ちゃんの遺影に泣きつき

「おおーー、ユウミー、なんで死んでしまったんだー？　子どもたちは元気に育っているよユウミー。今日もシホミにお酌してもらったぞー、どうだー、羨ましいだろー？」

その直後に顔を真っ青にしてトイレに駆け込み、ぶっ倒れていたので俺たちで自室のベッドへと寝かせてきた。

……情けねえなあ……年月はこうも人を変えるモノなのか。幼少時代にカッコいいと思っていた親父の面影を微塵も感じさせずにバカ親父は早々にリタイアした。子どもとお酒を飲むのが夢という親もいるらしいが、そんなに嬉しいもんかね？　分からん。

どの道、親父がいてもスキヤキウォーズの戦績は変わらなかっただろうしな　――

――　ピンポーン

我が家のチャイムが鳴った。今日は大晦日の夜……こんな時刻に来客なんて珍しい事もあるもんだ。

「おい、出ろよ」

「嫌よ、アンタが出なさいよバカカズマ」

「早く行かないとパロスペシャルかけるよー」

アリアに続いてチイ姉が邪悪に笑いながら脅してきた。

年末に必殺技をおみまいされたくないのでシブシブ席を立つ俺。

ちなみに誰も席を立とうとはせず、遠巻きにテレビを見ている。どんだけモノグサなんだよ、うちの女性陣？

廊下に出ると暖房が効いていないのでかなり肌寒かった。

「くそ、誰だよ、こんな時間に？」

舌打ちしながらドアノブを捻る。

玄関を開けると、見覚えのある人物が立っていた。親父並みにガッシリと体格が良く、茶髪と髪の色も同じ……そして、一番特徴的だったのは顔に被った仮面だった。

「久しぶりだな、カズマ君」

「アプリカントの叔父さん！」

親父にそっくりな仮面の男性 ―― 彼の名前はアプリカント。
親父の双子の弟で、俺たちの叔父だった。

アプリカントの叔父さん ―― 叔父さんと記していく ――
を連れて居間に戻ると、銘々に好きな事をしていた女性陣の視線が
集中して向けられてきた。
予想外の訪問者に驚いていたが、それはすぐに歓喜に変わる。

「アプリカントの叔父さま！」

中でもアリアの喜びようは凄かった。叔父さんに向かって飛びつ
く。……おい、胸が当たってんぞ。

「どうしてどうして？　来るんだったら連絡してくれればいいのに」
「ハハハ、アリちゃんはいつも元気だねぇ」

叔父さんは口元を歪ませている。マスクで表情は見えないが少し
困っているように思えた。
アリアの奴は叔父さんが来るといつもテンションが上がる。理由
は分からないんだけど異常なぐらいに叔父さんに懐いているんだ。
……女子高生になったのに、興奮して叔父さんにハグするなんて…
…見てるこっちが恥ずかしい。

「おいアリア、やめろよ。叔父さんが困ってんじゃないかよ」
「ウザ。さっさと部屋に帰りなさいよ、バカカズマ」

俺が話しかけた途端に射殺すると言わんがばかりの視線を向けて来た。

ケッ、可愛くねえ。だがな、俺だっていつまでも引きさがってばかりじゃねえよ。年末ぐらい居間でゆっくりテレビ見る権利があるはずだ。

「やだね。俺は今から紅白歌合戦を見るんだ。トイレの俺様を聞くんだからな」

「ハァ？　意味不明。年末はＫ－１（ケーイチ）でしょ？」

「なに言ってんだ？　紅白を見るのは国民の義務だろうが。Ｋ－１なんて邪道だね」

「あーあー、可哀想に。毎回マンネリ的に繰り返されるだけの歌番組が面白いなんて……やっぱり、思考停止したバカな脳味噌してるのね？」

「ハァ、喧嘩売ってんのか？　紅白は風物詩って奴なんだよ。それとお前は全国の紅白ファンに謝れ！」

「アンタがなんと言おうとテレビはＫ－１よ。ねぇ、チイ姉？」

アリアがチイ姉を引き込もうとしている。汚い。流石アリア、汚い。

「当たり前じゃーん？　年末はやっぱりマッチョだよ！　それともなぁに、カズマは他の番組みたいわけ？」

ニカッ、と太陽のようにチイ姉が破顔した。

「別にいいよ、あたしを倒せたらね」

「Ｋ－１でいいです」

即答でした。

勝負してもタワーブリッジで背骨を痛めつけられるのがオチだ。
男の中の男は無駄な勝負はしないのだ。

「ハハハ、みんな、元気そうでなによりだよ」

叔父さんがアリアの頭を撫でながら言った。アリアは猫のように気持ち良さそうに目を閉じていた。……チッ、ムカつくので後で頭を叩いてやろうと思う。

叔父さんは手に持っていた袋をシホミ姉ちゃんに差し出した。

「はい、これお土産」
「まぁまぁ、わざわざありがとうございます」
「中身肉だから早く食べるんだよ。どうせすき焼きだろうと思ってOGビーフ買って来たから」
「「「「OGビーフ!?」」」」

シホミ姉ちゃん以外の声がシンクロした。
無理もないだろう。
OGビーフは牛肉の中でも味も値段も最高級の代物だからだ。もちろん、俺たちみたいな庶民は口にする機会が事がない。さっそくシホミ姉ちゃん開封した袋の中身は、薄桃色……いや桜色と言っていい色で適度に霜が入った実に美味しそうなお肉様だった。

「ありがとう、叔父さま！」とアリアが礼を言う。
「じゃあ、準備するね」とミヒロ。「マヨネーズまだあったかなぁ？」はチイ姉。「一度食器洗って綺麗にしましょうか？」はシホミ姉ちゃんだ。

「ありがとう叔父さん。俺、実はまだ肉食べれてなかったんだ」
「そんなことだろうと思ったよ。大方、アリちゃんたちとまた喧嘩

してたんだろ？」
「そ、そんなんじゃねよ」
だって喧嘩というモノは、ある程度力関係が拮抗している場合に言うモノだろう？　俺の場合は弾圧とか虐殺に違いない。
「とにかく、第2次スキヤキウォーズ開幕だぜ！」
「ハハハ、よかったねぇ」
こうして闘いの火蓋は切って落とされた。
結果から言うと、惨敗した……3連星恐るべし。しかも片付けを押しつけてくる始末。誰か、この狂ったパワーバランスをどうにかしてくれ……。
食後は叔父さんと一緒にテレビを見ながら、雑談をした。テレビの内容は当然のようにＫ－１。これまた当然のように、俺は観戦していてテンションの上がったチイ姉にプロレス技をかけられた……堪んねえよ、本当に。
叔父さんはその様子を見て笑っていた。
そうしてカウントダウンＴＶにチャンネルを変え、０時を跨いで、新しい年を迎える。初詣に行こうという意見も出たが、寒いので日が上がってからにしようと言うことになった。年越し蕎麦をみんなで食べて、各々床につき、俺たちの家から明かりは落ちる。
ちなみに叔父さんは親父の部屋で寝るらしい。むさ苦しいが、兄弟だからいいのだろうか。
……それにしても、叔父さんはなにをしに来たんだろうな？

●

ここでアプリカントの叔父さんについて紹介しておこうと思う。

アプリカントの叔父さんは、親父 ―― ブレスフィールド・アーディガンの双子の弟らしい。俺とアリアのとは違い一卵性双生児らしく、外見はほぼ同一人物と言ってよいぐらいに瓜二つだ。区別するために仮面を着けていたりするが、親父と一緒にいる叔父さんを見たことはない。

性格はお調子者の親父と違って冷静で紳士的。

たしか10年前ぐらいから俺たちの家に時々現れるようになった。

……しかし、存外俺は叔父さんのことを知らない。

叔父さんが何処に住んでいるのか。結婚はしているのか。仕事は何をしているのか……叔父さんは話をしてくれないので俺が知る由もない。

でも、まぁ、親戚の事をあまり知らないなんてのは割と普通なのかね？

なにがあっても叔父さんは叔父さんなんだし、俺は特筆気にする事もなく今日を迎えている訳だ ――

【ヴァルストーク営業日誌　1月1日】

俺が目覚めたのはお天と様が頭上に差し掛かる頃だった。時刻にして12時越え。ジェネ高が休みだからできる贅沢。朝寝坊っていいよね？

俺以外のメンツは既に活動を始めており、おせち料理を摂った後

の予定は初詣だ。一年の計は元旦にあり。神様にお祈りして今年こそ家族内での俺の待遇改善を願うのだ。

「カズマちゃん、アリアちゃんとミヒロちゃんをよろしくね」

シホミ姉ちゃんは初詣には行かず、家でゆっくりするそうだ。

「あたしもホリスと出かける約束あるから」

チイ姉も年始の家族行事をボイコットするようだ。マッチョ好きのくせに、あんな青瓢箪（あおびょうたん）と出かけるのかよ？　とヤジを入れると、テキサス・トゥ・ホールドでお仕置きされた……年始から痛い。

ちなみに親父は、叔父さんによると二日酔いでダウンしているらしい。情けねえなぁ……

と言う訳で　――

「初詣には俺とアリア、ミヒロと叔父さんでやってまいりました」

「バカカズマ、誰に向かって言ってんのよ？」

「もちろん神様さ」

近所の神社に参拝に来た俺たち。アリアが俺に突っかかってきたが適当にあしらった。嘘は言ってないからな。

「思ったより人が少ないんだねえ？」

叔父さんの言うように神社に人気は少ない。昼過ぎだから、神社参拝はとっくにピークアウトしているようだった。人混みは好きではないから、俺にはこの位が丁度いいけどね。

「ねえねえお兄ちゃん、くじ引きしようよ」

「いや、先に参拝すませちまおうぜ」
「えー、くじ引きがいいのにー」

珍しくミヒロが我ままを言ってきた。ま、くじ引きが初詣の楽しみの一つというのは、分からんでもないけどな。

テレビで見た事のある都会の深夜過ぎの参拝映像のように……ゴミゴミした人の群れなど存在しない「エリア」内のチッポケな神社では、賽銭箱の前まで辿り着くのは実に容易であった。

「一年の計は元旦にありと言う。さぁみんな、しっかり願い事をするんだよ。願い事というのはイメージだからね。想像できない事は実現できないぞ」

いやぁ、流石に叔父さんの言う事は一味違うね。

ありがたい叔父さんの言葉に素直にアリアとミヒロは従い、賽銭を投げて、ぶっとい縄のついた鈴をミヒロが楽しそうに鳴らす。ガランガランッ、と鈍い鈴の音が響いたら俺たちは目を閉じて合掌した。

妹たちは何を願っているのだろうな？

俺の幸せを願ってくれているに違いない……訳がないわな。一度、こいつらの頭の中を覗いてみたいもんだ。

余談だが、俺が投げ入れた硬貨は5円玉である。

理由は……分かるだろう？　御縁がありますように、ってな。

「今年こそ、美人で優しくて巨乳の彼女ができますように！　今年こそ、美人で優しくて巨乳の彼女ができますように！　なんなら、貧乳でも構いません！　彼女彼女彼女彼女ォ、彼女が出来る、出来れば、出来るなら　――」
「心の内を吐露してんじゃないわよ！」

スパーン、と快音を響かせて後頭部が軽く叩かれた。
俺の高尚な願い事を妨害したのは当然のようにアリアで、何処からともなく取り出したハリセンを片手に、眉を歪めて舌打ちしていた……どうやら想いが強すぎて、無意識の内に言葉になっていたらしいが、何故にこの妹様は不機嫌そうなんだ？

「お兄ちゃんのバカ！」
「うぁ、ミヒロまで……！？」

軽いけど、鋭い蹴りが膝の裏を直撃し、下半身が崩れて膝をついてしまった。悔しいが、ナイスな膝カックンだぜミヒロ。
しかしなんでお前まで、顔を紅潮させて不機嫌な様子で頬を膨らませているんだ？

「お兄ちゃんなんて知らない、死ぬまで独身で過ごせばいいんだ！」
「ちょっ、それは酷くねえ？！」
「お兄ちゃんのあほーー！」

ミヒロは脱兎の如く駆け出してしまった。その瞳には一筋の涙が……特には無かったんだけどさ、なんか俺、悪い事言った？
人が少ないからすぐには見失わないが、はぐれてしまう前に追いかけないといけないな。

「サイッテー、バカカズマってホント最低よねー。ミヒロがかわいそう。アンタはそんなだから恋人できないんだよ」

アリアにとても冷やかな瞳で見下されました。
なんだよ、ただ願い事が声に出ただけじゃねえかよ……。

「ハハハ、カズマ君は相変わらず人気者だね」

「叔父さん。仮面外して、目薬さした方がイイっすよ？」

遂には叔父さんまでトンチンカンなことを言いだす始末……このまま弄られ続けても堪ったものではないので、俺は早々にミヒロの後を追う事にした。

子どもって体は小さい癖に走るのが早いよな。ミヒロも全エネルギーを使って俺から逃げてる感じだね。まぁ、向かってたのは、くじ引きとか絵馬の販売しているエリアだったんだけど。

それにしてもハリセンでシバかれた御蔭で、頭の中でイマジネイションできていた超絶美人彼女の姿が吹き飛んでしまった。追走している間にもう一度想像するも、アリアとミヒロの姿しか頭に浮かんでこない。

……刷り込みってやつかな？　ほら、彼女の姿（？）が消し飛んだ直後だったからさ。

何度もイメージするも出来上がるのは妹様たちの姿で、叔父さんの言葉に当てはめると、彼女の姿を想像できない俺には彼女はできないってことなのかな……？　それとも……。

恐ろしい……頭に過った恐怖を振り払っていると、あっという間に、ミヒロに追いついていた。

ミヒロを捕まえたのはくじ引きの券売機の真正面だった。

「ねぇお兄ちゃん、くじ引きしようよ」

「……はいはい」

券売機の前でピョンピョン跳ねながら小銭をねだってきた。本当にチッポケな神社なので、券売機も１００円玉を投入するとくじが

出てくるだけの年季の入った簡単な代物だ。
さっきまで怒っていたのも忘れたのか、ミヒロは手に取ったくじを開いて眺める。

「あ、小吉だ。金銭運は……無駄遣いしなければ徐々に増えて行くでしょう、だって」
「速攻で金銭運チェックかよ。嫌な小学生だな」
「なにか言ったお兄ちゃん？」
「うんにゃ、なんにも」

黒いオーラがミヒロから立ち上りそうだったので適当に誤魔化して、俺もくじ引きをする事にした。
１００円入れると音もなくくじが吐き出される。さーて、今年の運勢は？　大吉が出て、恋愛運も上々だと良いな　――……

――　大凶　――

……　――　ふぅ、まずは落ちつこうか、カズマ・アーディガン。
大凶……凶ではなく、よりによって大凶……

「あー、ミヒロ見て見て、バカカズマが大凶引いてるよ。キモイよねー、ホント」

くじ引きしただけでキモいと言われた。へコむ。ちなみにアリアは中吉。

「確か大凶は与えるショックが強いから廃止になったはずなんだけどなぁ。いやぁ、カズマ君は逆に運がいいよ。ラッキーラッキー」

末吉の叔父さんがフォロー（？）してくれた。
そうなのか……大凶ってもう廃止されているんだ……俺たちが訪れた神社は小さいから、比例して参拝客も少なくくじ引きの補給頻度も少ないんだろうな。そして、券売機の中で「大凶」は出待ちしながら、密かに生き残り続け、俺と出会った。
数奇な廻り合わせである……まったく嬉しくないけど。

「なになに？　家族運。家族円満だがトラブル続出、死なない様に注意？　なんじゃこりゃ、舐めてんのか。金銭運。運勢調べる暇があったらシャカキリに働け？　……なあ、くじ引きってこんな書き方だったか？」
「さぁ？　大凶だからじゃない。アタシのは普通よ」

見せて貰ったアリアのくじには、「恋愛運。想い人は傍にあり、今を満喫しましょう」と書いてあった。確かに俺のに比べたら普通だな。

「くそ、じゃあ恋愛運だ。……高望みするべからず。その考えは身を滅ぼす……」
「言い得て妙だねぇ」

くじを覗き込んだ叔父さんの感想だ。

「うがあぁあ！！」

俺は大凶のくじを破り捨ててしまった。衝動的な行動ってやつ？
もう辛抱堪らん、みたいな。
八つ裂きにしてしまったので、くじは原形を残していなかった。

「あーあー、破っちゃったね。悪いくじは神社内に奉納しないといけないのに」
「でも叔父さん、こんなくじ見たら普通は我慢なんてできないッスよ」
「……まぁいいさ。そうだ、折角だから絵馬に願い事でも書いていこうじゃないか？　叔父さんが絵馬買ってあげるよ」
「本当？　流石叔父さま、大好き！」

アリアが叔父さんにまた抱き付いた。……だから胸が当たってるっつってんだろ……！
叔父さんは神社内にある絵馬や破魔矢を置いてある販売所に行き、人数分の絵馬を買ってきてくれてた。絵馬ってのは五角形の小さな木の板に願い事を書きこみ、神社の絵馬掛けに奉納するためのアイテムだ。
祈願した願い事が叶った時の謝礼として奉納するパターンもあるそうだ。
俺たちの場合は前者で、願い事や今年の意気込みを書くことになった。

「お兄ちゃんに恋人ができませんように、っと」
「流石だなミヒロ。お兄ちゃんは嬉しくて、涙がチョチョ切れそうだよ」

ミヒロは一片の迷いもなく記入していた。参拝の時の仕返しかね？　この子の行く末が恐ろしくて仕方ない時があるぜ。

「コミケに受かって同人誌がバカ売れしますように、っと」
「流石だなアリア。欲望に忠実で分かりやすいぜ……てか、まだやってたのかよ、妹凌辱のクソ小説……？」
「なんか言った？」

「日本の夜明けは近いぜよ」

竜馬伝の真似をして誤魔化してみた。竜馬いいよね？　高〇良い所、みんなでおいで。日本３大ガッカリ名所、はりまや橋が君を待っているぜよ……さて。

俺はなにを書こうかな？

「カズマ君、大分悩んでいるみたいだね」

「叔父さん。そうだ、叔父さんはなにを書いたんだ？」

叔父さんの絵馬を覗き込んで見た。

「我が宝に　出藍の誉れが　あらんことを」……叔父さん、流石だぜ。バカな俺には、なにを願っているのかサッパリだ。

俺の願いごとはどうしようかな？　……やっぱり、あれにしておくか。

「男の中の男に俺はなる、っと」

「へぇ、男の中の男に、ね」

叔父さんに絵馬を覗かれてしまった。なんか恥ずかしいな、と思ったとき。

「でもカズマ君にとって、男の中の男ってなんなのかな？」

「え……？」

「君は具体的なイメージを想像できるのかな？」

どういう意味？

「想像することは大切だよ。人間は想像できないことを実現することはない。想像する事は夢と言ってもいいからね」

「お、叔父さん……？」
「だからカズマ君に聞きたい。君の頭の中にある、男の中の男のイメージは一体どんなモノなんだい？」

叔父さんの声色は優しくいつもと変わらなかった。
けど悪戯っぽく笑う事もなく真剣な問いのように感じられ、俺の腰は引けてしまう。叔父さんの真意が俺には分からない。俺の頭の中にあるイメージ……。
俺の目指す男の中の男……それは、

「か、家族を守れるような男……かな？」
「ふーん」

意味深な笑みを浮かべる叔父さん。

「ま、いいさ。さあみんな！　絵馬を早く飾ろう。その後ご飯を奢るから一緒に行こう」
「やったあ、叔父さま大好き！」

一足先に絵馬掛けを済ませたアリアが3度目のハグ。だからー、胸が……ってもういい。
俺たちは絵馬を奉納して、叔父さんに連れられて食事に出かけた。外食なんてどの位ぶりだろうか。本当に久しぶりだぜ。
でも……叔父さんは、本当に何をしに来たんだろうな？　後ろ髪を引かれる思いだったけど、ご飯が美味しかったから、まぁいいか……。

●

【ヴァルストーク営業日誌　1月2日】

新年を迎えて2日目。

昨日家に戻ると、親父は「旅に出ます　探さないで下さい」と書き置きを残し、シホミ姉ちゃんは友人と一緒に温泉へ小旅行に向かい、チイ姉は外泊してくるとの電話を寄こして帰って来なかった。

要約すると、今、実家に居るのは俺、アリア、ミヒロ……そして叔父さんの4人ということになる。新年から未成年を放置して出かけるなんて……ファミリーの社会人組の無責任ぶりを少しは理解してもらえるかと思う。

「どうだい、アリちゃん？」

叔父さんが居間でアリアに尋ねていた。

「……コイツを、どう思う？」

「すごく……大きいです……」

アリアがテレビ画面に映る巨大ロボットを見て感想を述べていた。

アリアたちは去年に俺が買ってきた巨大ロボット対戦ゲーム「超絶合体　ヴァルザガード」をプレイしている。このゲームは機体のサイズまで正確に再現しているらしく、アリアの選択機体「アルムアルクス」に比べて、叔父さんの機体「ヴァルアルム」は約6倍の大きさを誇っている。

確か３０ｍ対２００ｍだな。そりゃあ、すごく大きいですわな。

ちなみに2機ともゲーム中の敵側の機体で、俺が頑張って出現条件を整えて使用可能にしたものだ。勝手に使わないでもらいたい。

ミヒロも混じって3人で楽しそうにゲームに興じている様を、俺は熱いお茶を啜りながら眺めていた。ビバ、平和。

「そうだ、カズマ君」
「ん？　なに、叔父さん？」

サイズ差に関わらず、あっさりアリアに敗北を喫した叔父さんがこっちを向いていた。

「男の中の男のイメージ、想像できたかな？」
「……またその話か……叔父さん、一体なにが言いたいんだよ？」

昨日と同じ質問が叔父さんの口から出てきた。
想像できるか？　……か。俺の目指している男の中の男像は、昨日叔父さんに伝えてあるはずだ。俺は家族を守れるような強い男になりたい……それが理想さ。

「想像も何も、俺の中のイメージは昨日言った通りだぜ？　それ以上どうしろってんだよ？」
「ふむ、そうだな。では一言だけ」

叔父さんは咳払いをして、言った。

「足りないよ、色々とね。中でも想像力と危機感が足りない。想像できても危機感がなければ行動は起こさないだろうし、危機感ばかり先走っても想像できなければ物事への対処を考える事はできない」
「な、なんだよそれ？　分かんねえ……分かんねえよ、叔父さん……」

叔父さんの言うことはいつも難しい。

いや……もしかしたら簡単な事なのかもしれないけど、故意に難解な表現を使っているような節がある。どちらにせよ、俺はバカだから、叔父さんの言いたい事を理解する事が出来なかった。

「想像しなさい、カズマ君。想像できなければ人はなにもできはしない……誰もす――」

叔父さんは小さく口を動かして呟いていたが、俺と叔父さんの距離は離れていたので聞きとることは出来なかった。なんと言ったのだろう？　分からない。

ただ言えるのは、叔父さんは俺に「想像」してもらいたいらしい。

……一体、なにをだ？

叔父さんはアリアとミヒロにせがまれて、またテレビゲームを再開していた。叔父さんの周りにはいつもアリアとミヒロの笑顔がある。俺もいつも笑っていたさ。

……でも、今は理解できない。

……叔父さん。

本当に、なにをしに来たんだよ……？

【ヴァルストークファミリー営業日誌　1月3日】

その日、事件は起きた。

アリアは友人との約束あるらしく家を空けており、社会人組も帰って来ていない。

家には俺とミヒロ、そして叔父さんの3人しかいない……

「助けて、お兄ちゃん！！」

居間にミヒロの悲鳴が木霊していた。
声を荒げるミヒロの背後には叔父さんの姿がある。叔父さんは小さなミヒロの腕を掴んで背中にまわし、残った手を肩にかけている。2人共立っているが、警察官が強盗犯などを現行犯逮捕するときに見せる体勢に似ていた。
少しでも力が加われば、ミヒロには激痛が奔るだろう。
しかしミヒロの声に悲壮感は籠っておらず、顔には満面の笑み…
…俺をからかって遊んでいるようだ。

「お兄ちゃん、痛いよ、助けてよ！」
「あー、はいはい、痛い痛い」

付き合いきれんので、無視してテレビでも見ることにした。アリアの居ぬ間にお笑いの正月特番を見たい。確かこの時間はお笑い界期待の新人、ミオ・サスガによる２４時間笑わない西遊記が――

「カズマ君、想像できたかい？」
「へ？　なにを？」

お笑いのネタか？　ネタを当てる事が出来てたら、お笑い番組なんて見やしないぞ……とチャンネルを握った俺に叔父さんが声を掛けてきた。

「この状況を想像できたかい？」

叔父さんがミヒロを拘束している絵をか？
唐突過ぎて、想像できる訳がない。
首を横に振る俺に、叔父さんは言葉を紡ぐ。

「想像しろ、カズマ君」

声が冷たい。

「これからミヒロちゃんに降りかかる不幸を、想像するんだ。想像できれば、きっとどんな不幸も防ぐ事が出来る。想像できれば人は何にだってなれるし、何だってできるからね……しかし、想像できなければ ――」

「ア、アプリカントの叔父ちゃん……？」

「ごめんね、ミヒロちゃん」

声色が変わった事に不安になったのか顔を上げるミヒロに、叔父さんは俺を見据えたままで答えた。……叔父さんの言っていることが分からない、とそのとき。

ミヒロの表情が歪む。

「痛い！　痛い痛いよ、止めてよ叔父ちゃん！！」

「ミヒロ！　なにすんだ叔父さん！？」

掴んでいたミヒロの後ろでを捻りでもしたのだろうか。

突然の痛みに叔父さんの手から逃れようとしていたが、逃れるなんて無理で、ミヒロの目尻は涙が滲み始めている……野郎ッ！！

「こんな状況を想像できたかな、家族を守る男の中の男君？」

「うるせえ！　ごたくはいいから、ミヒロを離しやがれ！！」

「運び屋心得その２８『待てと言われて待つ者はいない　叫ぶ暇があったら追え』……離せと言われて離す奴などいないよ」

さらに力を込めたのか、ミヒロが声にならない嗚咽を上げ出した。

「救ってみたらどうだね？　君の大事な家族を」
「野郎！！」

もう我慢ならねえ。
叔父さんがなにを考えているのか、なにをしに来たのか……尋ねて来た時から分からない。だが、もういい。俺の大切な家族に手を上げる奴は誰だろうと容赦しねえ！
それが神さんだろうと、叔父さんだろうとだ。
俺は拳を振り上げる。

「ミヒロを離しやがれ！」

俺の拳が、叔父さんの仮面にヒットして鈍い音を立てた。
自転車便で鍛え上げた身体能力はかなり高い。以前アリアを誘拐したクリティックは一撃で沈んだもんだ。
だが、叔父さんの体は揺らぎもしなかった。

「……ふぅ」

さらにため息。直後に前蹴り。抉られるような衝撃が脳天を駆け抜けた。
痛ぇ……声を上げる間もなく俺は膝をつかされる。「お兄ちゃん！」と大声を上げるミヒロの口を塞いで、叔父さんは俺を見下ろしていた。

「拳が軽いよ、カズマ君。なにも背負っていない軽さだ」
「くっ……！」
「男の中の男なのだろう？　想像できていなかったのかな、それとも、想像できていたが努力を怠っていたのかな？」

叔父さんの言葉が頭上から降ってくる。
男の中の男……家族を守れる強い男……それが俺の夢見ていたものさ……でも、男の中の男になる努力ってなんだよ？　知るか！　イメージ出来ねえよ。
なにが言いたいんだよ、叔父さん！？　叫びたいが声が出ない。

「ありがとう、ミヒロちゃん」
「あっ……！」

叔父さんはミヒロを離すと、俺の襟を掴んで持ち上げた。
いともあっさりと、足が付かない高さに釣りあげられる。俺かなり筋肉質なのに、嘘だろ？

「失望させるな、ブレスの息子」
「な、にっ……？」
「『タカの目』の息子は、タカではなくトンビなのか？　それとも、男の中の男は妹をいたぶる小悪党も退治できないのか？　どうかね？」
「くそぉ！！」

踏ん張りの利かない体勢で、上半身の動きだけで繰り出したパンチが顔面に当たるが、先ほどの全力の一撃も通用しなかった叔父さんが堪える訳がなかった。
叔父さんの俺への返答は報復。
砲弾のような拳骨が左頬に触れ、すぐに視界が流れるような衝撃が襲う。
同時に襟首を離された俺は勢いのまま壁に叩きつけられ、顔面と背中に激痛が廻る。

「……だから軽いんだよ、カズマ君」

口の中が鉄臭い、切れてしまったようだ。

「その程度ではなにも守れやしないよ」

口を押さえた手が赤く染まっている。床が汚れちまうじゃねえか。

「想像するんだカズマ君。起こりうる悲劇を想像しろ。でなければ――」

くそ……！　叔父さんは強い……俺じゃ勝てねえ……そもそも、なんでこんなことになってんだ？　分かんねえ。想像なんて出来やしねえ。

拳の衝撃で視界が揺らいでいる俺に、叔父さんは声をかけ続けてくる。

「――　後悔するぞ」

「叔父さん……？」

叔父さんの言葉には哀愁が漂っていた。だが叔父さんは構わず言葉を紡ぐ。

「男の中の男……いいじゃないか、なりなさい。だが、ブレスのようにはなるな」

「……な、なんで？」

叔父さんの言葉はやはり理解できない。

そりゃ俺の父親だから親父はバカさ。お茶らけて、バカなことばかりしている。でも親父の周りにはいつも家族の笑顔があり、ずっと俺たちのことを守ってくれてきた……言いたかないが、自慢の親

父だ。
家族を守ってきた力強い姿には、俺の目指す男の中の男に近いモノを感じていた。

「ブレスは違うぞ。男の中の男、なんかじゃあない」

しかし叔父さんは親父を目指すなと言う。
……ふざけるな。俺たちの親父は確かにバカでお調子者さ……でもよ。

「バカにすんな……！」

俺の呟きに、叔父さんは耳をかざしてきた。聞こえなかったようだな。いいさ、聞こえるように言ってやる。

「親父はバカさ！　でもな、親父をバカにしていいのは俺たちだけだ！　例え双子の弟だろうと許さねえ！」
「ほぅ……ならどうするだい？」
「ぶん殴るッ！！」

叔父さんだろうが、神さんだろうが、俺の家族をバカにする奴は許さない。敵が強かろうと立ち向かってやる。叔父さんは想像しろというが、そんなことは知った事か。
俺はバカだからな。
バカは真っ直ぐにしか進めねえんだ。
俺は拳を強く握って立ち上がった。掌の血液がぬめったが構わず、叔父さんに向かって駆けて行き　――

「うらあああああぁぁっ！！」

――真っ直ぐに殴った。避けようと思えば避けられる。ただ愚直なだけの軌道の拳を、叔父さんは躱すことはなかった。

仮面にぶつかると同時に拳に痛みが奔る。

渾身の一撃。しかし叔父さんは揺るがない……悲鳴を上げていたのは、叔父さんの被っていた仮面だけだった。鋭い破裂音が響いたかと思うと、仮面に亀裂が入り、左目の部分が割れる。

金属製ではなかったのだろう破片がボロボロと床に零れ、親父と同じ色の瞳が俺に向けられた。

反撃が来るか！

身構える俺に対して、叔父さんは割れた仮面を押さえながら――

「あはははは！！」

――笑っていた。

え、なにごと？　殴られたに関わらず叔父さんは笑っている。それが理解できず、戸惑っていると……

「いやー、ごめんごめん、悪ふざけが過ぎたみたいだねカズマ君」

「わ、悪ふざけ……？」

頭に沸く疑問符たち。

「ごめんね、お兄ちゃん！」

ミヒロが愛くるしい笑顔を浮かべながら俺に謝罪してきた。その手にはポチ袋。つまり中身はお年玉？

……おいミヒロ、もしかしてお前……？

「お年玉で買収されちゃった☆　見て見てー、諭吉さんだよお兄ちゃん♪」

買収されちゃった（ほし）って、妹よ、兄を売ったのか？
しかし中身を見せつけながらキャピキャピ喜ぶ姿に怒る気にもなれない。あははは、そっかー、よかったなーミヒロ。諭吉様かー、俺なんて野口×3だぜ。痛がっている様子も演技だったのだろうか……？　俺はこの子の行く末が時々怖い。
俺の切り傷もそんな深くなかったのか、出血はあっさり止まっていた。でも掌は血のりでベッタリだ。

「結構血が出ちゃったねー」

叔父さんは悪びれもせず見ると、俺の手を握ってきた。

「カズマ君、久しぶりに一緒に風呂でも入ろうか。背中を流してあげよう」
「ちょ、ちょっと叔父さん　――」
「さぁ、レッツバスロマン。あっはっはっは」

俺は強引に風呂場に引き摺られて、結局一緒に入る事になった。
風呂場で服を脱いでいる途中、ミヒロの声が聞こえてきた。

「……盗聴器かおっかな……」

怖いなぁ……気のせい気のせい、空耳空耳。しかしミヒロが諭吉を眺めて呟いている姿が容易に想像できるぜ。叔父さんじゃないが、想像できても実現はしないで欲しいもんだ……

風呂場。

我がファミリーは大人数だが風呂場はそれに見合った大きさではなく、浴槽も大人2人で寿司詰め状態になる程度の広さだ。

――カコーン

背をお湯で流して、手桶を置く音が響く。

叔父さんは言葉通りに俺の背を流してくれていた。使い古されたボディタオルに泡を立てて背中を洗ってくれる。強くもなく弱くもなく、良い具合の力加減だ。

「いやー、大きくなったねえカズマ君。昔はこんなに小さかったのに」

「叔父さん、いつの話してるんスか？」

「ははは、子どもは成長が早いもんだ。それとも私が歳をとったのかね？」

風呂場ということもあり、微笑を浮かべる叔父さんの顔に仮面は付いていない。

叔父さんは親父の双子の弟だ。その顔は親父に瓜二つ……というか親父そのもので、叔父さんが仮面を外したところを見た事がないため違和感というか、むず痒いような奇妙な感じだった。

「……そういや叔父さん……なんでこんな事したんだ？」

痛む頬を押さえながら、俺は思いきって聞いてみた。

「カズマ君にはすまない事をしたと思っているよ。でもね、実はブレスに頼みごとをされていてね」

「それで、俺を殴ったと……？」

「それだけじゃないけどね。カズマ君の成長具合を見たかったのもある」

俺の成長具合を見る……？　どういう意味だろう。

「まぁ、実際のところ君はあまり変わってなかったけどね。本当にいい意味でも悪い意味でも子どものままだね」

「ちぇ、叔父さんまでガキ扱いかよ。俺だって成長してるんだぜ？」

「ははは、そうだねぇ。確かに中々のパンチだったよ」

「だろ？　ってそうじゃねえよ。俺だってもう１６だぜ。精神的に成長してるんだからよ、そこんところも評価してくれよ」

俺だって高校生だし、体も心も大きくなってるんだぜ。男気だってあるつもりだ。まぁまだ彼女はいねえけどよ……。

「そうか……もう１６歳か……」

叔父さんはゆっくりと呟くと、背中を湯で流してくれた。どこか感慨深げな声に聞こえたのは聞き間違えだろうか？　背中越しだから顔は見えないが、眼をつむって言っているような気がする。

「あれからもう１０年になるのか……確かにブレスの言うとおり、もう話してもいいのかもしれないな……」

「……どういうこと？」

軽い沈黙が訪れたが、叔父さんはすぐに口を開く。

「カズマ君。ブレスからの頼みごとというのは伝言なんだ。私は君への伝言頼まれてここへ来た」

「伝言……？」

叔父さんも奇妙なことを言うもんだ。親父から伝言を頼まれたというが二度手間もいいところだし、親父が俺に直接伝えれば万事解決するではないか。

叔父さんはこんな七面倒くさいことを何故引き受けたのだろう……？

俺は風呂場の座椅子から腰を上げ、叔父さんと交代して背中を洗う。当然、叔父さんの背中が目に入る。

叔父さんの背中は大きく力強くて、子供時代に見慣れていた親父の背中を彷彿（ほうふつ）させた。浴槽から汲んだお湯を流しかける。

「カズマ君、明日が何の日か……覚えているかい？」

「当たり前だろ」

1月4日 ―― この日を、忘れられる訳がない。

ユウミ・アーディガン。

俺の母ちゃんが車に撥ねられて死んだ日だ。

「約10年前の明日、ユウミさんは車との接触事故で亡くなった。カズマ君や他の子たちも覚えているだろう」

「ああ……」

「悲しい事故だった……でもね、あの事故は運転手が悪いわけじゃないんだ。決して、運転手が脇見運転や飲酒運転をしていたわけではないんだよ」

叔父さんの声には抑揚がなくなっていた。

当時、俺は6歳だったから事故に関することは詳しく教えてもらえていなかった。例え教えられていたとしても覚えてはいなかったかもしれない。母ちゃんの死に顔はインパクトが強すぎたからな……。

だけど今、叔父さんは事故について語っている。

「今だから言うが、事故の原因はユウミさんだったんだ」

「え……？」

耳を疑った。

「赤信号での飛び出し、運転手は反応しきれずユウミさんに正面衝突した……3が日明けで正月ボケが抜け切っていなかったのか……仮にそうだったとしても運転手に全ての非がある訳ではない……ユウミさんの死因を作ったのは彼女自身だとったということになる」

母ちゃんが車道に飛び出した？

だから、車に撥ねられて死んだ？

……まるで自殺みたいな文面じゃないか……でも、それだけはありえないはずだ。幼いながらに覚えている。母ちゃんは恥かしがり屋で人前に出たりするのは苦手だったが、芯が強い女性だったはずだ。親父もそのことは自慢げに話していたっけ。

だから母ちゃんが自殺したりするはずがない。

「もちろん、自殺じゃあないさ」

沈黙する俺の意を汲んだのか、叔父さんが答えてくれた。

「でもね、殺されたようなものなんだよ。君の父親 —— ブレスフィールド・アーディガンにね」

「……どういうことだよ？」

「言葉どおりの意味さ。ブレス自身が言っていたことだからな」

親父が……母ちゃんを殺した？　そう言ったのか、あの親父が？

信じられない。ありえないことだと思った。

「あの日……ブレスとユウミさんは喧嘩していたそうだ」

叔父さんが淡々とした語り口調で続ける。

「原因は本当に些細なことだったらしい。それが言い争っている内にこじれてしまってな、とうとうユウミさんは家を飛び出してしまったそうだ……」

「じゃあ、その時に母ちゃんは車に……？」

「ああ……撥ねられた」

母ちゃんの死因は事故死。母ちゃんが事故に会ったのは外出していたからで、その原因を作ったのが親父との喧嘩ってか……けっ、馬鹿げてるぜ。

そんなことで、たったそれだけの事で死んじまうなんてよ……母ちゃんは親父と喧嘩さえしていなければ生きていたのかもしれない

――なんて、考えている自分自身もまるで馬鹿のように思える。

そんなの、誰のせいでもねえのによ……馬鹿だぜ、俺も、親父も。

「それで、母ちゃんを殺したのは親父だってのか？　馬鹿だぜ。本当に馬鹿だぜあのクソ親父」

「……そうだ、馬鹿だ。だが馬鹿でも悔いる。あの時、もっと想像していれば……起こりうる悲劇を想像していれば、結果は変わっていたかもしれないとな」

……親父？

背中越しに聞こえる叔父さんの声が、何故か親父のモノのように思えてしまった。叔父さんと親父は瓜二つだ。顔も、声も……だからだろうか？　叔父さんの言葉がまるで親父の言葉のように感じら

れた。

「想像しろ、カズマ。運び屋心得『未来は誰のモノでもない　お前のモノだ』……自分の未来を思い描き、起こりうる出来事を想像し、対処するべく努力しろ。……お前は、ブレスになっちゃいけない」

想像しろ、か。

叔父さんが家に来てから繰り返してきたフレーズだ。

でもな、想像したからってそれが発生する確証は何処にもない。想像し努力しても起こらないかもしれないし、てんで見当違いのことだって起こるかもしれない。

だから叔父さんの言っていることは、自身の経験に基づいた「ただの結果論」に過ぎないのだろう。

だが、間違ってはいない。正しいことだと俺は思う。

「叔父さん」

だから俺は言うのさ。腹の底から、めい一杯、声を上げてな。

「俺は親父じゃねえ、俺はカズマ・アーディガンだ！　男の中の男になる男だぜ！！」

俺が俺であるために、そして愛する家族を守るために叫ぶんだ。

風呂場で大声を上げればそれはもう喧しいこと限りないし、言っていることはガキ臭いし、十中八九聞いた人間に馬鹿にされるような言葉でも、俺は力の限りの大声で叫び続けてみせる。

これだけは譲れねえ。

母ちゃんは死んでしまってもういないからこそ、俺は生きている家族を守れるぐらいに強くなりたいんだ。世界中に定められたどんな記念日なんかよりも、世界中に建てられたどんな記念碑なんかよ

りも ―― みんなが生きている今日がどんなに素晴らしく、意味があるに違いない。
だから俺は叫ぶんだよ、精一杯デカイ声で。

「いつか叔父さんだって、親父だって……あとついでにアリアだって、守れるぐらい強くなってやるさ！！」
「……ありがとう、カズマ君」

へへ、叔父さんから礼を言われる日が来るなんて夢にも思っていなかったぜ。殴られちまったけど、その甲斐があるってもんだ！

「大きく、なったなぁ」

叔父さんはそう呟いて、俺たちは風呂を出た。
たまには家族で風呂に入るのもいいもんだ。裸の付き合いっていうのか。普段言いにくいことも、背中越しなら言えたりするものなのかもしれない。今度、親父とでも入ってやるとしよう ――

―― 叔父さんは、もう仮面で顔を隠すことはせず、俺たちの家を後にした。

夕方にはシホミ姉ちゃん、チイ姉、アリアも帰ってきて、家族でミヒロの料理に舌鼓を打つ。食卓には笑顔が溢れていた。アリアはミヒロに一方的に話しかけ、俺は相変わらず無視される。見慣れたヴァルストークファミリーの風景だ。

「ただいまー」

食事が終わり、みんながテレビに群がり始めた頃、親父は帰ってきた。
外で食事は済ませてきたのか食卓には着かず、炊事場に直行し、慣れた手つきで熱燗を作る。そして、テレビに群がる女性陣に弄られるのが嫌で食卓からテレビを見ていた俺の対面に座った。
その手にはお猪口（ちょこ）が1つ。

「なぁカズマ、たまには注いでくれないか？」
「珍しいな親父。シホミ姉ちゃんでなくて俺にか？　なにか良いことでもあったのか？」
「少し、な」

親父は口の端を上げ、お猪口を突き出し、豪快に笑っていた。俺は感性が狂ってんのかね？　俺は、この暑苦しいファーザースマイルが嫌いじゃないんだよ。
徳利（とっくり）を受け取り、親父のお猪口に注いでやる。作法なんて知らないから、少し零れた。親父は特に咎めることもなく、お猪口の中身を一息にあおる。
酒を飲んだ後特有の熱い息を、天井を見上げたまま吐き出しながら言った。

「……ごめんな、カズマ……」
「いいさ、分かってる」

親父が俺に何を謝ったのか、親父が何を背負っていたのか、どれだけ俺たちのために我慢してきたのか……10年前よりも少しは理解できてるつもりだ。
俺は確かにまだまだガキさ。この「ごめん」の裏には色々な意味が含まれている。でもな、それぐらいなら感じ取れる程度には大人なっているのさ。

親父は飲み終わったお猪口をキレイに拭い、俺に差し出してきた。
しかし手では持たず、俺の目の前に置く。

「ん」

今度は親父が徳利を手にしていた。
どうやら、どっかの地方にあるらしい「返杯」というモノらしい。
元々「返杯」というのは一つの物を分け合って血縁関係になるという意味が込められているそうだ。要するに、気心の知れた者同士の魂の交流と言っていいのだろう。……って、なんで俺はこんなこと知っているんだろうな？
俺のお猪口に親父から酒が注がれる。
俺は未成年でアルコールなんて摂らないから、きっと不味く感じるに違いないだろう。
でも、まぁ、たまには良いんじゃないか？
大人の飲んでいる苦さや辛さを知ることも大切なんじゃないかと、今の俺には思えるんだ。
多分、今だけだとは思う。でも親父の注いでくれた酒なら、今なら、俺は飲めそうな気がするんだ。
意を決して口に一気に流し込んだ。
不味い。ひたすらに不味い。大人はなんでこんなモノが飲めるのだろう？　不思議で仕方ないが、俺の口からは不思議な言葉が零れていた。

「ありがとな、親父」
「気にするな。運び屋心得『未来は誰のモノでもない　お前のモノだ』だ。お前は自分のなりたいようになればいい」
「言われなくたってそうしてやらあ」

叔父さんと親父の姿が重なって見えた。一口で酔っちゃったのか

ね？　ま、いいや。
シホミ姉ちゃんにチイ姉、ミヒロに親父に叔父さん……あと、ついでにアリアも、みんなまとめて守れるようになってやるぜ！
俺は席を立って大声で叫んだ。
「男の中の男に俺はなるッ！！」
……それが不味かった。
「あー、チイ姉ちゃん、お兄ちゃんがお酒飲んでるよ！」
「なんだとー！」
「ヒィ、すいません……！」
ミヒロの密告により、俺はチイ姉の必殺技「四の字固め」の餌食となりました。
悲鳴をあげる俺を親父は大声で笑いながら酒を飲んでいた。人を酒の肴にしやがって！　いい根性だぜ！
いつか大人になったら、飲み負かしてやるから覚えてろ！
アリアまで俺を足蹴にし始め、俺たちファミリーの夜は更けていく……

【ヴァルストーク営業日誌　1月4日】

俺たちの母親　――　ユウミ・アーディガンの命日は穏やかに時間が流れていた。
家族総出での墓参り。誰も涙を流すことはなかったが、全員揃っ

て黙祷していた姿はきっと壮観だったに違いない。
親父は長い間目を瞑っていた。
そして、しばらくの時間そこから動こうとはしなかった。親父に言われて、俺たちは先に家路に着くことになる。いいさ、ゆっくりしてくるといい。
母ちゃんだって、きっともう許してくれているはずさ。
親父ももう自分の人生を歩み始めてもいい頃だと思うぜ。
それでも親父は愚直に母ちゃんを愛し続けるんだろう。
バカさ。本当にバカな親父だ。
だから俺はこの言葉を送ろうと思う。

――俺たちのバカ親父に乾杯――

酒は飲めねえし、口にも出していねえけどな。

親父、俺たちはいつまでも一緒だぜ――……

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。
『エリア』には個性豊かな人間が沢山いる。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない

おまけ

「エリア」内にあるとある小さな神社に、キョウスケ・ナンブは訪れていた。

恋人エクセレン・ブロウニングには内緒で、絵馬を購入し、願い事を書いている。

「必中　奇跡　起死回生……と。よし、これで次回の勝負の勝ちは揺るがんな」

次回の賭けポーカーでの勝利を祈願した絵馬を絵馬掛けにつるそうとした。そのとき、ある1枚の絵馬が彼の目に飛び込んできた。

他の絵馬と違い特徴的なのが、左目部分が砕けた仮面が一緒に供えられているところだった。

「我が宝に　出藍の誉れが　あらんことを……か。深い言葉だ。『私の宝が、私を越えていくことを願う』という意味だろう」

その言葉を見てキョウスケは自分の絵馬に目を落とした。

この絵馬に比べて彼の書いた言葉は実に他力本願だった。

「……ふ、やはり俺も自分で運をつかむことにしよう」

キョウスケは絵馬を掛けずに神社を後にした。

神社の絵馬掛けには、彼の読み上げた絵馬が今も残されている。

しかし、砕かれた仮面の下には文字が隠れていた。強い風が吹いたとき、仮面がめくれ上がり文字が顕になる。

――ブレスフィールド・アーディガン――

そう、人の名前が書かれていたという。

ちなみに、キョウスケはタスクにオケラにされたという。

俺たちゃヴァルストークファミリー３　～叔父、襲来～（後書き）

＜キャラ紹介＞

カズマ・アーディガン：ジェネ高２年生、思春期真っ盛りの男の子。幼いころ母と死別しており、その経験から家族を非常に大切に思っている。ただしアリアとは犬猿の仲。男の中の男を目指しているが、女系家族のファミリー内では虐げられている。

アプリカント：叔父、らしい男。ブレスの双子の弟（自己申告）で仮面を常に着用している。しかしブレスと並んでいるところは誰も見たことがない。今回、肉を手土産にファミリー家へ遊びにきた。アリアに超懐かれており、ファミリー内での評判は上々である。

ブレスフィールド・アーディガン：ファミリーを男手ひとつで育て上げた大黒柱。正月はどこかに行っていたらしい。かなりダンディでモテるが、現在も亡き妻ユウミ一筋である。居間に巨大なユウミの遺影を張って、家族からの顰蹙を買っている。

ミヒロ・アーディガン：若干１０歳のファミリー末っ子。しっかり者で家事全般を一任されているが、密かに発信機などをカズマ・アリアに仕掛けているらしい。カズマに将来を心配されている。お兄ちゃん大好き。

アリア・アーディガン：ジェネ高２年のファミリーの三女。妹大好きで官能小説を書いて儲けようとした前科がある。しかし学校では滅茶苦茶ハイスペックで人気者である。ミヒロ大好き、カズマ泣け思っている。

アカネ・アーディガン：ファミリーの次女でカズマの天敵。プロレス好きで事あるごとにカズマに技を掛けて楽しんでいる。マッチョが好きと公言しているが、休日はホリスと遊びに行ったりしている。

シホミ・アーディガン：ファミリー長女でヒエラルキーの頂点。彼女の言うことにはブレスですら逆らわない。その理由は切れるとやばいため。普段はやさしいが、切れると目が開かれるらしい。

ホリス・ライアン：名前だけ登場のファミリー一員。地味戦隊ジミーズのジミレッド（嘘）

＜次・回・予・告＞

ホリス「次回予告コーナーは私が乗っ取りました！　次回予告を進行させたければ、私に出番をよこしなさい！」

エクセレン「……（チャキっと拳銃を構える）」

ホリス「嘘です、申し訳ありませんでした（五身投地の構え）」

エクセレン「わーお、ディスイズ土下座ね。はじめて見たわん♪　ねえ、ジミーさん、キョウスケを何処に隠したのかしらん？」

ホリス「あ、キョウスケさんなら勝負に負けて、あそこイスで燃え尽きてますよ」

キョウスケ「……燃え尽きたぜ、真っ白にな」

――　パンッ（エクセレンが発砲する音）

キョウスケ「うぐっ……！」

ホリス「キョ、キョウスケさーーーーん！！　なんてことするんですか貴女は！？　この人でなし！！」

エクセレン「大丈夫よ、このぐらいじゃ死なないから」

キョウスケ「……さて、次回予告に行くか」

ホリス「ヒィ、人外どもめ！　こんな所二度と来ませんよ！　助けて、アカネさーーん！！」

エクセレン「あらあら、失礼な子ね　――　パンッ！」

キョウスケ「なんだったと言うのだ？」

キョウスケ
「年が明けても、俺の名前はキョウスケ・ナンブだ！　覚えてなかった奴にはラカンゲキをお見舞いしてやるからな！
次回はＬだぜ！
見た目は子供、中身も子供！　その名は迷探偵南雲　一鷹！
次回、スパロボ学院『迷探偵南雲　一鷹シリーズ　～そのとき、家政婦は見た！～』に、空飛ぶ地雷だ、スクエアクレイモア！！」

エクセレン
「題名だけで中身を一切考えていないわよん☆」

改めて、あけましておめでとうございます！

今回のテーマは「父と子」でございます。
本当は1日に更新しようと思ったのですが、アプリカントとの殴り合いがしっくりこず時間がかかってしまいました。

でも、久しぶりに書きたいことを全部突っ込んだ短編になったかと思います。
ちなみに冒頭のミヒロの言葉は、自分が弟に聞かれた言葉だったりします。小僧にぁ、なんにも答えられちや。
……少しは成長したんだろうか？
年齢だけを重ねたくはないものです。

今回から小説形式の文を再開するつもりです！
ネタ・感想は随時募集中！
今年も書きたい放題書いてやるぜよ！

迷探偵南雲　一鷹シリーズ　～そのとき、家政婦は見た！～（前書き）

＜注・意・事・項＞
絶賛、キャラ崩壊中！
ガキと爺が馬鹿になっています。
キャラのイメージが崩れるかもしれませんが、それでもよい、という方はどうぞ！

前回の話の後だからか、今回はかなり短めです。

迷探偵南雲　一鷹シリーズ　～そのとき、家政婦は見た！～

私の名前はアリスと申します。

何故か高校が密集する地域「エリア」で、発明家としてクラール・グライフ博士の家で家政婦として働かせていただいています。

博士は発明家として非常に優秀で、取得したさまざまな商品の特許権で生活している富豪でもあります。

そんな博士の屋敷で働かせていただけるなんて、とっても光栄だと思っています。ハイ！　今日も頑張って、大きな屋敷の中を掃除させていただいています！

ですが　――

「勇者よ、余の仲間になるがよい」

――　窓ガラスを拭いていた私の耳に、威厳たっぷりのハスキーボイスが届いてきました。

「世界の半分を貴様にやろうではないか」

それは博士の声でした。

勇者？　世界の半分？　何の話をしているのでしょうか？

……ハッ、アリスは大変なことに気がついてしまいました！

きっとグライフ博士は世界制服を企む悪の科学者なのです。いずれは世界をその手に納める程の力を持った天才科学者だったのです。

間違いありません！

「冗談も休み休みにしてもらおうか、大魔王クラール・グライフ！」

窓ガラスを拭く手を止めていた私の耳に、もう一人の勇ましい男性の声が届いてきました。
博士に相対しているのは博士の台詞から推測するに勇者さんのようです。
勇者さんと言えば、ＲＰＧなどのゲームで魔王を退治する主人公的な存在だったはずです。でも何故勇者さんがお屋敷にいるのでしょうか……？

ハッ、アリスは大変なことに気づいてしまいました！
勇者さんは魔王である博士を惨殺に来たに違いありません。
声が聞こえてくるのは屋敷の中の一室……この中では、今修羅場が繰り広げられている。このままでは火曜サスペンス劇場になってしまいます。博士の命が危ないのならば、私は家政婦として助けに入らなければなりません。
私は武器（ぼうき）を携えて部屋の前まで急ぎました。
ほうきだって先が尖っているから凶器になるはずです。間違いありません！

「俺の双肩には世界の平和がかかっている！　貴様の邪悪な誘惑になど屈する訳にはいかない！」
「……どうしてもか？」

それにしても博士のハスキーボイスは渋いです。
いきなり飛び込むのも無謀なので、私は扉を開いて隙間から中の様子を伺うことにしました。
そのとき、私は見てしまいました！
いつもの白衣に身を包んだ博士と、鎧に身を包み剣を携えた少年が１人いました。どこか見覚えのある背中の少年が剣の切っ先は博士に向けられています。

「当たり前だ！　俺は勇者、南雲　一鷹！　世界を救う男だぜ！」
「あーあー、残念じゃのう。今仲間に入れば、限定版の無修正ピンク本がついてきたのにのぅ」
「え、どうしよう？」

真顔で迷う勇者一鷹とエロ本を持った魔王博士が遊んでいるだけでした。
私は盛大にコケてしまいましたが、まったく問題ありません！

スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～
迷探偵南雲　一鷹シリーズ　～そのとき、家政婦は見た！～

私に見られているとも知らず、一鷹さんと博士は問答を続けていました。

「ど、どうしようかな？　世界の平和も大切だけど……ピ、ピンク本も欲しいなぁ……」
「ククク、勇者よ。自分の欲望に正直になりたまえ」

無理やりな感じで悪っぽい話し方をする博士。普段の博士を知っている私には違和感がありますが、十分に様になっていて本物の悪の魔王といった雰囲気です。
ちなみにいつもの博士はこうです。

「おーいアリス、飯はまだかいのう――ブッ（オナラの音）」
「もう博士、お昼ごはんはさっき食べたばかりですよ？」

「そうじゃったかのう。イヤーうっかりうっかり　――　ブゥ（オナラの音）」

博士は髪もボサボサに伸びっぱなしだし、促さないとお風呂にも入らないし放屁しまくりだし……博士は私がいないと本当に駄目なんです！

でも今その博士が……

「いいか勇者よ。人民など救うに値しない身勝手な存在なのだ。いつも他力本願で、脅威が去れば貴様とて忘れ去られる運命なのだ」

立派に悪役をやっていました。なんだかアリスは嬉しいです。

「そんなことはないぜ！　俺は信じているぜ！」

「若造め……貴様に真実を教えてやろう」

博士は懐から金色の勲章か紋章みたいなモノを取り出しました。

「そ、それは勇者の紋章！」

「そうだ。余こそは世界を救った先代勇者クラール・グライフ。世界を救った後、民より迫害され社会的に殺された男よ！」

「な、なんだってー！？」

あれれ、なんだか雲行きが怪しくなってきましたね。

勇者一鷹さんは動揺したように1歩後ろずさっていましたが、博士は紋章を床に捨て踏みつけながら言っていました。

「これで理解できただろう？　人民など守る価値もない、強者に沸いてくる蛆虫（うじむし）のようなものだ。貴様もこれまでの旅路で感じなかったとは言わせないぞ？」

「うぐ……！」
「さあ勇者よ、余の仲間となり愚民共に思い知らせてやるのだ！　世界の広さ、命の儚さ、虐げられる者の悲しさを」
魔王博士の勧誘は慟哭に似ていました。
人の残酷さをよく理解しての発言のように思えました。きっと、悲しい思いを沢山してきたのでしょう。かつて世界を救った勇者が魔王に身をやつしてしまうなんて筆舌に尽くしがたい過去があるに違いありません。
勇者一鷹さんは迷っている様子でした。
と、博士は先ほどのシリアスは口調と打って変わって、機械的な口調で勇者一鷹さんに尋ねていました。
「魔王の仲間になりますか？」
「いいえ」
これまた機械的に勇者一鷹さんは答え、
「いやー、弱い！　ちょっと弱いよ博士。勇者が魔王側に付くんだったら、もう少し説得力がないと厳しいんじゃない？」
「そうかのう？　魔王が実は元勇者というシュチュエーションは、結構いい線いってたと思うんじゃがのう」
勇者一鷹さんは魔王博士を拒絶したにも関わらず和気藹々（わきあいあい）と話を始めました。
扉の隙間から覗いていた私ですが状況を理解できません。
勇者と魔王が結託も対決もせぬまま、どうして仲良く話しているのでしょうか？
「博士、やっぱりＲＰＧの選択肢で拒否権を得るのは難しいな。も

し、魔王との対決で勧誘された場合に出る選択肢で、勇者に『はい』と言わせるに値する状況を発見するのはやっぱり厳しいぜ」
「一鷹よ、諦めてはいかん。諦めたらそこで試合終了じゃ。きっと勇者に『はい』と言わせられるような説得方法があるはずじゃ」
「例えば？」
２人の会話が私にはやっぱり理解できません。
ＲＰＧ？　選択肢？　どんな障害があろうとも、勇者は魔王を退治するものじゃないんですか？
手にほうきと汗を握って、状況の進展を見守ることにしました。
「そうじゃのう、例えば『余にはもうすぐ世継ぎが生まれるのだ』とか『この戦いが終わったら結婚するのだ』と言えば、いくら勇者でも同情ぐらいしてくれそうなもんじゃ」
「うわ、却下。死亡フラグ一直線だぜ」
「じゃあ『勇者よ、お前の母親の命は余の中にある。母を助けたければ余の仲間になれ』とかはどうじゃ？」
「『私に構わず魔王を討つのよ！』と母親の声が聞こえて、パワーアップした勇者に殺されそうな展開になるんじゃない？」
「では実際に母親を殺してみてはどうじゃ？　絶望感からパワーダウンするかもしれんぞ」
「『母さんのことか　――　ッ！！』とか言って、勇者が静かな怒りに目覚めてしまいそうだぜ」
「うーん、難しいのう……」と博士は唸っていました。
本当に難しいですね。
一鷹さんと博士は一体なにをやりたいのでしょうか。まったく、理解できません！
「博士、いきなりクライマックスから考えるから駄目なんだよ。や

っぱり、最初は王道的に物語り冒頭の部分で行くべきだぜ」
「そうじゃのう。では、物語冒頭で王様に魔王討伐を依頼される場面で、どうやったら『いいえ』で通せるかＲＰ（ロールプレイ）してみるとしようかの」

博士は部屋の中にあったリッチな椅子に座ると、足を組んで偉そうに踏ん反り返りました。
一方、一鷹さんは剣を収めて膝をつき、王様に頭をたれる姿勢をとります。

「勇者よ」

王様になったつもりだろう博士が、これまたハスキーな威厳たっぷりの声で言いました。

「大魔王討伐の旅、辛く苦しいものになるだろう……しかし貴君は人類の希望……行ってくれるな？」
「いいえ」
「なんじゃと？」

勇者一鷹さんの即答に、王様博士の顔が歪みました。
凄いです。一鷹さんは本当の勇者です。国家権力のトップの依頼を堂々と蹴りました。きっと後先を考えない、若さゆえの過ちという奴なのでしょう。
当然、王様博士は気分を害したのか、声を荒げて訊いています。

「なぜじゃ？　なにが不満なのじゃ？」
「働いたら負けだと思っている」
「衝撃の新事実、勇者はＮＥＥＴ（ニート）でした」

あまりにも勇者一鷹さんがスパァーンッと答えを返すので、思わず声が出てしまいました……ですが、役に没頭しているのか2人は私が覗いているのに気づきません。

それはそれで嫌なものです。2人で変な問答を続けている様はまるでピエロのようでした。

蛇足ですが博士も特許を取って生活をしているので仕事は一切していないようなものです。博士もＮＥＥＴなのでしょうか？　もうお歳ですからＮＥＥＴには当てはまらないでしょうけど、身の回りの世話を全部私に一任するのはどうかと思います。

ＮＥＥＴじゃないけど、少し苛立ちも募っているので博士はＮＥＥＴということにしておきましょう。でも王様ってＮＥＥＴみたいなものですよね？　やっぱり博士はＮＥＥＴにしておきましょう。

ＮＥＥＴ博士が勇者一鷹にコメントをくれました。

「一鷹よ、勇者がＮＥＥＴというのは少し酷くないかのぅ？」

「あ、やっぱり？　じゃあ、別パターンを試してみようか」

勇者一鷹さんは再び王様博士の前で膝をつきました。

王様博士は勇者一鷹に言います。

「勇者よ、大魔王討伐の旅、行ってくれるな？」

「いいえ」

「勇者よ、大魔王討伐の旅、行ってくれるな？」

「いいえ」

「勇者よ、大魔王討伐の旅、行ってくれるな？」

「いやだ」

「勇者よ、大魔王討伐の旅、行ってくれるな？」

「べーだ」

「勇者よ、大魔王討伐の旅、行ってくれるな？」

「ＮＯだ」

「勇者よ、大魔王討伐の旅、行ってくれるな？」
「もう、帰っていいですか？」
「勇者よ、大魔王討伐の旅、行ってくれるな？」
「しつこいよ、もう諦めろよ！」

王様博士の依頼を拒否していたはずの勇者一鷹さんの方が、先に根負けしていました。同じ文章の繰り返しは拷問みたいなモノですね。モブキャラはこれだから……。

「うーむ、断り続けるだけなのはやはり説得力に欠けるのぅ……やはり、ＲＰＧの選択肢での自由を確保するのは難しいのかのぅ？」
「博士、諦めたらそこで試合終了だぜ！」

勇者一鷹さんが立ち上がり、熱く語っていました。
……そうだ、思い出しました。
一鷹さんは１５歳の中学３年生で、大の漫画やアニメ好きなのでした。
私は個人の趣味に口を挟んだりはしませんが、一鷹さんの場合は少し問題があるんです。
直前に閲覧した作品の影響をすぐに受けるんです。
しかも真似事をせずにはいられない、という悪癖がある一鷹さんが拳を握り締めていました。

「博士。俺はこのＲＰＧにおける選択肢の拒否権を獲得するために諦めないぜ！　どこかに抜け穴があるはずだ。その答えを俺は推理してみせる！　じっちゃんの名に懸けて！」
「おぅおぅ、頑張れよ一鷹」

一人熱血する一鷹さんを博士は優しい眼差しで見つめていました。
博士にとって一鷹さんは血は繋がっていないけど、可愛いもう一

人の孫のようなモノでしたね。おそらく推理系の漫画でも読んで、どうでもいいことを無理やり推理しようとしている一鷹さんに付き合ってあげているのでしょう。

博士！　アリスは博士を見直しました！

例え、1時間前に食べたご飯のことを忘れても、トイレの後水を流すのを忘れても、一鷹さんへの優しさを忘れなければ、まったく問題ありません！

私は扉をそっと閉め、その場を後にしました。

やりかけだった窓拭きの仕事に戻ります。

窓から見える空は雲ひとつない日本晴れで、太陽の日差しで体も心も温かくなりました。

「今日も、平和ですねぇー」

磨き上げた自慢の窓ガラスには、笑っている私の顔が映りこんでいました。

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。

『エリア』には個性豊かな人間が沢山いる。

今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。

次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない

迷探偵南雲　一鷹シリーズ　～そのとき、家政婦は見た！～（後書き）

＜キャラ紹介＞

南雲　一鷹：中学3年生のガキ。漫画やアニメの影響をすぐに受けて真似事をしたがる。グライフ博士の家にはよく遊びに来る。

アリス：グライフ博士の家で家政婦をしている女性。年齢不詳。口癖は「～ありません！」。広大なグライフ邸の掃除・家事を全て任されているので能力は高い。

クラール・グライフ：数々の特許をとり、その代金で悠々自適な隠居生活を送る示威遺産。天才発明家だが最近は少しぼけ気味。よく一鷹と遊んでやっている。孫が1人いる。

＜次・回・予・告＞

キョウスケ「今回の次回予告はなしだ。次回はキャラの紹介を更新予定だ」

エクセレン「キャラの紹介って？」

キョウスケ「うむ。連載が続いている内に登場したキャラが増えすぎたからな、作者もどの話にどのキャラが出てるか分からない時があるそうだ」

エクセレン「まぁ、いい加減ねぇ」

キョウスケ「なので次回は、キャラ紹介とどの話にどのキャラが出てるか纏めて更新するぞ。よろしくな」

エクセレン「第2次スーパーロボット大戦Zもよろしく！！」

前回の話に比べてかなり短いです。
スパロボLのキャラをあまりつかめていないのもありますが、書き始めたネタがこれ以上膨らみませんでした。
次回はどうするか迷い中です。ネタ・感想募集中です。

ｓｉｂｕｇａｋｉさん、ケルンバイターさん、暗黒ミカンさん感想ありがとうございます！　次回はただのキャラ紹介なのでたいしたものじゃありませんが、更新にそう時間はかからないと思います。

ＰＳ.
ＰＳＰで第2次スパロボZが発売されるみたいですね。ガンガンレオンは再登場するのでしょうか？　グレンラガンも出るみたいだし楽しみです。

OG学院　キャラクター紹介（前書き）

登場キャラクターが多くて、全部書くのを断念しました（笑）

暇なときに少しずつ更新することにします。

ちなみにあとがきで、次回予告もあります。

OG学院　キャラクター紹介

【パロボ学院キャラ紹介編】

スパロボ学院の連載も２０話を越え、登場したキャラクターたちも多くなってきました。
折角なので、キャラクター紹介を作ってみました。
どのキャラがどの話に登場するか分かるように書いていきますので、参考にどうぞ。

ちなみに所属と学年別に示していきます。
また、登場キャラが増えた場合はこのページを不定期に更新していくことにします。

＜注意＞
ほぼ全員キャラ崩壊を起こしています。
原作との違いは多々あるので、そこへの突っ込みはご容赦願います（笑）

【オリジナルジェネレーション高等学院】

「エリア」で一番のマンモス高校。理事長のダイテツ・ミナセの計らいで授業料は無料であるため、周辺住民の進学率が半端ないことになっている。

『１年生』……人数は少ない。
・クォヴレー・ゴードン
ジェネ高講師をしている「イングラム・プリスケン」の弟。最近

は反抗期気味で彼らを邪険にしている。「ゼ・バルマリィ学園」のアルマナさんのことが好き。
登場する話「プリスケンさん家の日常」

・ラトゥーニ・スゥーボータ
ジェネ高屈指のメガネ娘。蹴りの達人で達人の集う場所「教導隊」に所属し「裏キック界の死神」の異名を持っている。それ以外は謎に包まれている……「スクール」からの転校生で、おそらくジェネ高に友達はいないと思われる。
登場する話「史上最強のフリーター2」

・マイ・コバヤシ
「SRX団」の団員その3。3年生の「アヤ・コバヤシ」の妹だが、世間知らずで人の言うことをすぐに鵜呑みにする傾向がある。リュウセイのことが好きで、ラトゥーニとは恋のライバルになると思われる。
登場する話「OG日本昔話シリーズ」

・アインスト・アルフィミィ
ジェネ高でも有名な不思議っ娘。語尾が「〜ですの」と特徴的なしゃべり方をする。影鏡高校の3年「アクセル・アルマー」と付き合っているが2股されているのは知らない……。
登場する話「そこが……無限のフロンティア」

『2年生』……ジェネ高の中で一番層が大きい世代。

・リュウセイ・ダテ
ジェネ高でも指きりのロボットオタク。映研「SRX団」のリーダーをしている。発言が中二病臭いのとネーミングセンスが壊滅的

なのも特徴のひとつだが、何故かロリっ子たちの人気を集めてやまない。しかし本人は気づいていない。
登場する話「ＯＧ日本昔話シリーズ」
主役の話「ＯＧ日本昔話シリーズ」

・ライディース・Ｆ・ブランシュタイン
２年の中でも随一の成績を誇る天才イケメン。嫌々「ＳＲＸ団」の団員２をしており、しょっちゅう突っ込み役が回ってくる。リュウセイとは腐れ縁。地味に恋人がいないのは、彼に言い寄ってくる幼女せいと思われる。
登場する話「ＯＧ日本昔話」

・マサキ・アンドー
超方向音痴で有名な２年生。欠点を補うために購入したＧＰＳ「シロ＆クロ」と共に、いつも見当違いな場所に迷い込みトラブルに巻き込まれている。３年生の「ウェンディ」のことが好きだが、同じクラスの「リューネ・ゾルダーグ」のことも気になっている模様。
登場する話「アンドー君漫遊記」
主役の話「アンドー君漫遊記」

・リューネ・ゾルダーク
「可愛い」と言われただけでマサキに惚れちゃった女の子。デートにマサキを誘うが、いつもすっぽかされる（彼が目的地にたどり着けないため）。実は大企業「Ｄ・Ｃ」の社長令嬢。
登場する話「アンドー君漫遊記」

・レオナ・ガーシュタイン
日常の態度がツンデレが地でいく女の子。同学年の「タスク・シングウジ」に言い寄られて困っている風だが、実はまんざらでもないようだ。ハーケンのガールハント被害者第一号だったりする。

登場する話「ＯＧ世界名作劇場　そこが……無限のフロンティア？」
主役の話「ＯＧ世界名作劇場」

・タスク・シングウジ
ジェネ高最強のラッキースケベ。「キョウスケ・ナンブ」の賭け事仲間だが異常に運が強く、大概は彼をカモにしている。スケベぶりも凄く周囲からは「エロ仙人」と呼ばれていたりするが、実は「レオナ」一筋と意外と純なところもある。
登場する話「鋼鉄の駄狼　ＯＧ世界名作劇場　我ニ敵ナシ？」

・ブルックリン・ラックフィールド
剣道部に所属する、文武両道のイケメン。同級生の「クスハ・ミズハ」のことが好きだが思いを伝えられにいる。しかし周囲から付き合っているものと思われている。唯一、クスハ汁を飲んで笑顔を保てる人間。
登場する話「我ニ敵ナシ？」
主役の話「我ニ敵ナシ？」

・クスハ・ミズハ
有名すぎる超天然娘。彼女の作るクスハ汁はある特定の生物を死滅させるほどの威力を誇る。ブリッドから好意を向けられているが当然のように気づかず、毎日お弁当を作ってくるという甲斐甲斐しい生殺し攻撃を続けている。
登場する話「我ニ敵ナシ？」

・アイビス・ダグラス
「プロジェクトＴＤ」に所属するツルペタ娘。巨乳がひしめくジェネ高における、数少ないロリじゃない貧乳という非常に貴重なステータスを持っている。大好きなコトを見つけたいと夢に夢見る少

女である。「プロジェクトＴＤ」のメンバーや甘いものは大好き。恋人や想い人はいなかったりする。

登場する話「今日のワン子」

主役の話「今日のワン子」

・スレイ・プレスティ

「プロジェクトＴＤ」に所属するお兄様命のブラコン娘。実は超能力者だが、巨乳以外で兄に近づく女に偏頭痛を起こさせるという能力であり、専ら被害者は好意もないのに「アイビス」になっている。どうやら、いつも「アイビス」をいじめているのでＳっ気があるようだ。

登場する話「今日のワン子」

・ツグミ・タカクラ

「プロジェクトＴＤ」の副部長を務める巨乳メガネ。（自称）未来人で、決め台詞は「禁則事項です♪」。部長の「フィリオ」のことが好き。彼女の焼くチーズケーキは絶品で「アイビス」の大好物である。

登場する話「今日のワン子」

・カズマ・アーディガン

男の中の男を目指す熱血小僧。ヴァルストークファミリーの長男坊で、家族のことをとても大切に思っているが双子の妹「アリア」とは犬猿の仲。学校に悪友も多いが現在のところ登場していない。最大の悩みは彼女ができないこと……。

登場する話「俺たちゃヴァルストークファミリー」

主役の話「俺たちゃヴァルストークファミリー」

OG学院　キャラクター紹介（後書き）

＜次・回・予・告＞

ハーケン「OK、読者諸君。次回は無限のフロンティア回だ」

キョウスケ「なんだ、貴様は？」

ハーケン「零児、零児じゃないか！？　帰ってきていたのか？」

エクセレン「なになに？　キョウスケ、なんなのこの色男さん？」

ハーケン「シャオムウまでいるのか？　俺はエンドレスフロンティアに帰ってきたのか？」

キョウスケ「無視して次回予告にいくとしよう」

ハーケン「OK、次回はムゲフロ回だからな？　覚えてろ」

キョウスケ「ちなみに貴様は登場せんぞ」

ハーケン「オー、なんてこったい！」

キョウスケ「俺の名前はキョウスケ・ナンブ。みんな、覚えてくれたかな？
次回はムゲフロ回！　真の主役が登場するぜ！！
展開は……なんだこれは！？　くそ、なんてことだ！！
蒼い悪魔め……でもそこに痺れる、憧れる？！
次回スパロボ学院、『マシン　ソウル　～ゲシュの奇妙な冒険～』

にイヤアアアアアアアァァ！！！！」

エクセレン

「スタッフさん、ムゲフロの続編もよろしく！」

Ｍａｃｈｉｎｅ　Ｓｏｕｌ　～ゲシュの奇妙な冒険～（前書き）

＜注・意・事・項＞
絶賛、キャラ崩壊中！
パーソナルトルーパーたちがキャラ崩壊（擬人化？）を起こしています！
キャラ崩壊レベルＭＡＸ（ＬＶ５）のため、読む方によっては不快感を抱く可能性が高いです。
それでも良いという方はどうぞ！

（注意）パクりじゃありません、オマージュです（笑）
ジョジョネタ祭り＆スパロボ主人公陣全滅の危機です。

Ｍａｃｈｉｎｅ　Ｓｏｕｌ　～ゲシュの奇妙な冒険～

俺の名前はキョウスケ・ナンブ。

何故か高校の密集する地域「エリア」一のマンモス高校、ＯＧ高（オリジナルジェネレーション）等学院、通称ジェネ高に通う高校３年生だ。

俺は今、自宅である格安賃貸ボロアパート前の駐輪場にいる。

駐輪場で何をしているかというと……

「……よし、これで完成だ。美しい、苦労したかいがあったな」

俺は愛用の工具を置くと、苦心してチューンした愛車 ―― アルトアイゼン号を愛でる。アルトアイゼン号は真紅の炎のような赤いカラーリングを施した愛用のバイクである。

俺は「鋼鉄の弧狼（ベーオウルブズ）」という走り屋集団のリーダーをやっていて、よく恋人のエクセレンと峠で腕を競っている。

アルトアイゼン号のエンジンは加速性能重視して大型のものを搭載している。スピードはあるがコーナーには弱く、タイヤの磨耗も早く、パーツの消耗も激しい。そのため頻回に部品の交換を行わなければいけない。

そういう理由で、定期的にアルトアイゼン号のメンテは行っているのだが。

実は、今回のメンテは一味違う。

先日、俺は賭けポーカーにてタスクにオケラ（ギャンブルで金を全てする事）にされた。

正直生活に貧窮するほどに金を巻き上げられ、手元に残ったのはたった１枚の紙幣のみという窮地に立たされていた。

食事するのにも困るような状況に追い込まれると思考がおかしくなるな。いや、結果的には問題ないのだが、俺の取った手段はギャンブルであった。

――競馬で大穴に一点賭けしてやったぜ！！

するとどうだろう？

俺は部の悪い賭けは嫌いじゃない……というよりも、追い詰められればられるだけ、俺のツキは冴え渡る。

一発逆転、起死回生。

奇跡という言葉は、まさに、万馬券を手に入れた俺のためにあると言っても過言ではないな。

しかしギャンブルで手に入れた金なんて、所詮は泡銭（あぶくぜに）と言って過言ではないだろう。

勝ち分はさっさとモノに変換してしまうことに限る。

俺は当面の生活で困らないだけの額を残して、残り全額を以前より計画していたアルトアイゼン号強化計画に回すことにした。

「ふふふ……各パーツの高性能化、エンジンとタイヤの巨大化……、まるで進撃する巨人だな。今日からお前の名前はリーゼ号と名づけよう」

アルトアイゼン号改め、アルトアイゼン・リーゼ号の車体はモナ・リザの如き艶美な光沢を放っており、さらにまるで一流アスリートのような力強い雰囲気を身にまとっている。

――素晴らしい……素晴らしい金の使い道だ。これだからギャンブルは止められん！　と――

――トントンッ

俺がリーゼ号を見つめ感慨にふけっているというのに、なにかが

背後から俺の肩を叩いてきた。
誰だ？　今は感動することに忙しいのだ。無視する。
――　トントンッ
ええい、しつこい奴だ。一体なんだというのだ？
俺は仕方なく後ろを振り向くと　――
『ウホッ、お前、いい尻をしているな』
「ギャアアアアアァァッ！？」
――　全長３ｍ程の巨大な鋼鉄の人型が立っていた。
両腕には銃器のような筒と岩石を掘削するためのような巨大な金属製の杭。さらに両肩にはなにが入っているか不明（おそらく凶器の類だと思われる）な四角い箱をを背負い、頭部にはまるでカブトムシのような立派な角が１本そびえ立っている。
見るからに全身凶器の危険人物（？）が俺を背後から見下ろしている。
もっとも特徴的な赤い双眸と、対照的な全身蒼いカラーリングをした巨人が目を明滅させながら俺にこう言った。
『俺の名はアルトアイゼン・ナハト。機人（ヒト）呼んで、真夜中の臀部稼（アナルハン）ぎ（ター）。ノンケだって平気で喰っちまう男だぜ』
「な、なな……！？」
なんだコイツは！
カ、カブトムシの精霊か！？　昔、スイカをやりすぎて死んでしまったペット「カブ太郎君」の亡霊かもしれん！！　蒼いカブトムシは片手に備えた巨大な杭を仰々しく構えた。
ジャギンッ、と非常に物騒な音がする。

『ヤ・ラ・な・い・か？』

ギラリッ、と杭が日を照り返し、カブトムシの目が赤く凶悪に光る。

「ヒ、ヒィ、寄るな！　その腕の杭をどうするつもりだ！
杭じゃない、リボルビング・ブレイカーだって？　名前なんてどうでもいい！　ええい、寄るな近づくな！
俺に触るんじゃない！！　なに、尻をツキ出せだと？　断る！！
うぉ、止めろ、無理やりな体位を取らせるなぁ　――――　ア、ア゛ア゛アアアアアァァァァ――――――ッッ！！！！！」

そこで俺の意識は途切れていく　――
――　薄れ行く意識と臀部の痛みとともに、蒼カブトムシの呟きが聞こえてきた　――

『フハハハ、馴染む。実に！　よく馴染むぞ。
この世界に来てから芽生えた自意識に、この体は非常によく馴染みよるわ。
しかし、この世界には不思議といい男の匂いがするな。男どもめ、尻を洗って待っていろ。このナハトから逃れるなど無駄なのだよ
――　フフフ、無駄無駄無駄ァ！』

――……いかん、逃げろみんな……悪魔がやってきた……！！

スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～
Ｍａｃｈｉｎｅ（マシン）　Ｓｏｕｌ（ソウル）　～ゲシュの奇妙な冒険～

Ｍｙ　Ｎａｍｅ　ｉｓ　――　（即効、日本語翻訳中）　――

俺の名前はゲシュペンスト・ファントム。

何故か高校の密集する地域「エリア」にやってきた、クールでイケメンなナイスバイクさ。

俺は元々、エンドレスフロンティアという世界に居た。

エンドレスフロンティアという世界は様々な世界と融合してしまうとんだビッチワールドでな、これまでにも新たな世界が融合することで尋常じゃない程のトラブルを巻き起こしてきた。

どんな世界だろうと理由も不明に吸収合併されてしまうのが、俺の故郷エンドレスフロンティアなのだ。

――ちなみ、「エリア」はエンドレスフロンティアにやって来た新世界である。

しかし「エリア」は白い球状の防壁のようなモノを張り巡らせ、外部との接触を拒んでいた。音信不通。それが適切な表現だろう。

まぁ、害がなければ放置しておけばよいのだが、エンドレスフロンティアでは新世界の出現に伴う悲劇が繰り広げられてきた。前例がある以上放置しておくわけにも行かないだろう？

という訳で、俺は元マスターであるいけ好かねえキモキザ野郎と共に「エリア」にやってきたのだった。

マスターと言うのは俺の主のことだ。

俺は元々、３ｍクラスの巨大な人型戦術兵器だったのだが、「エリア」に来ると同時に何故かバイクに変貌しており、また自意識も目覚めた。おかげでキモキザの圧政から逃れられたし、まったく「エリア」様様だぜ。

「ゲッシーちゃん、次は5連続コーナーリングよん。いけるかしら？」

『Ｙｅｓ，Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ（任せとけエクセレン。俺に不可能などないぜ）』

俺は新たなマスター、エクセレン・ブロウニングと共に夕暮れの峠を疾走していた。

座席にはエクセレンの柔らかな尻がフィットし至福の快感が俺を包む……なんだ？　キモいだと？　ふざけるな！　俺はキモキザとは違う。

――俺はとってもカッコいいイケてるバイク！

そこに異論は認めない。

俺とエクセレンは連続するヘアピンカーブを車体を傾けながら走り抜ける。減速などしない。ガードレール接触寸前になるまで車体が近づくが、この車体は俺の体と言っていいからな。ぶつかる様なヘマはしないぜ。

カーブを抜けた直線で加速する間もなく、次のヘアピンが俺たちの眼前に広がる。ガードレールの先は崖だが、エクセレンがハンドリングを誤るはずもなく余裕でカーブをクリア。

俺たちに踏破できない道はない。5連続だろうが6連続だろうが、いくらでも来やがれってんだ。

「じゃあ、帰りましょうかゲッシーちゃん」

「Ｙｅｓ，Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ（ＯＫだ、エクセレン。今日もキレイに体を磨いてくれよ）」

5連続カーブを抜けた俺たちはエクセレンの家へと帰ることにな

った。
余談だがエクセレンには恋人がいる。その男の名前はキョウスケ・ナンブ。無愛想な鉄面皮の男だ。
以前の俺なら、何故この男が好きなのか問い詰めただろうな。エクセレンは俺の嫁だと、昔は思っていたものだ……フッ、思えば俺も若かった。
だが俺は気づいてしまったのだ……俺の中に眠るサガに、熱いパトスに覚醒してしまったのだ！

――やっぱり、女の胸は小さいのに限るよね？

ツルペタ、寸胴は希少価値。そこに異論は認めない！
胸などただの飾りです、世の中の男にはそれが分からんのです！
ちなみエクセレンは巨乳、やれやれだぜ……。
そんな俺を運命の出会いが待っていたのは言うまでもないだろう？
アインスト・アルフィミィ……ロリを絵に描いたかの如き神秘のボディラインは一瞬で俺を魅了した。
ジェネ高に通う彼女を篭絡するため、俺は日々切磋琢磨しているのだ。

「あら、あれキョウスケじゃない？」
『Ｏｈ？（なんだ、ぶっ倒れてやがるな？）』

帰り道で偶然通ったボロアパートの前にエクセレンの彼氏、キョウスケ・ナンブが倒れていた。しかもズボンが半分下ろされており、みっともない姿を晒している。どうも気絶しているようだ。
俺がボロアパートに体を寄せると、エクセレンは背中から降りキョウスケを抱き起こして顔を軽く叩いていた。

「もしもーし、キョウスケ大丈夫？こんな所で倒れてどったの？」

「う……エ、エクセレンか……」

キョウスケはエクセレンに抱き起こされて上半身を起こす。
意識をハッキリさせようとしているのか頭を振っているが、決して地面から腰を上げようとはしない。

「キョウスケ、いつまでもこんな所で寝てると風邪引くわよ。さぁ、早く立って
部屋に戻りましょう」

優しく手を差し伸べるエクセレに対して。

「ま、待てエクセレン……今起き上がると　――　ヅッ　――――ッ！！」

「キョ、キョウスケ？　大丈夫……じゃなさそうね。本当になにがあったの？」

「あ、ああ……実はな……」

キョウスケは地面に腰を下ろしたままで事のあらましを話し始めた。俺は野郎と話す趣味はないので蚊帳の外から聞き耳を立てるのだが。

「蒼い……悪魔だ……」

『Ｂｌｕｅ？（蒼い悪魔だと？）』

身に覚えのある呟きに俺は思わず呟きを漏らしてしまっていた。
その声はキョウスケの耳に届いていたようで、奴は俺を奇妙なものでも見るかのように凝視してきた。野郎、こっち見んな。ニュートロンブラスターでぶっ飛ばすぞ。

「おい、エクセレン。あのバイクはなんだ？　ヴァイスリッター号から乗り換えたのか……というか、バイクが喋っているぞ？」
「あの子はゲッシーちゃん。この間、町で拾ったとってもおりこうさんのバイクなのよん♪」
「いや、口を利く時点でバイクではないだろう？」
『Ｆｕｃｋ！（野郎、バイク差別は許さねえぞ！）』

このキョウスケという男はとんだ不届きモノだな。誰も俺が喋ることについてはノータッチだというのに、まったく、これだから空気を読めない男というのは困ったものだぜ！
しかしキョウスケは俺の言葉が聞こえたにも関わらず、俺を見つめ続け、仕舞いには手で顔を押さえて顔を背けてしまった。野郎、顔を背けんな。

「くっ……このバイクを見ているとあの蒼い悪魔がフラッシュバックするようだ……！」
「ねえねえキョウスケ、その蒼い悪魔って一体なんなの？」

エクセレンの問いには俺も無い首を縦に振りたい気分だ。
ムッツリ野郎、蒼い悪魔なんて抽象的な表現では相手に何も伝わらないぜ？　……だが野郎の話は気になる。しかし話を聞きたい気持ちの反面、嫌な予感がして俺の無い耳を塞ぎたくなる感情もある。
その蒼い悪魔という表現に、俺は、覚えがあるからだ……
しばらくして、キョウスケはゆっくり口を開いた。

「蒼い……巨大なロボット……そう、ちょうどそのバイクに似た雰囲気を持った、まるで青いカブトムシのような……？」
『Ｏｈ　Ｍｙ　Ｇｏｄｓ　（なんてこったい……）』

どうやら、俺の不安は的中してしまったようだな。

以前、俺がアルフィミィと出会ったときのことを覚えているだろうか？

あの時の校庭には俺の元マスターのキモキザ以外に一人の女性がいた。アシェン・ブレイデル……クソったれな毒舌アンドロイドさ。こいつの毒舌に一体どれだけの人類が犠牲になってきたことか……まぁ、重要なのはここではない。

俺は「エリア」にキモキザと共に突入したにも関わらず、キモキザと再開したときにアシェンは奴の傍にいた。

つまり、アシェンたちは俺たちが突入した後に「エリア」に突入したということだ。

『……Ｏｈ（……しかしあの時アシェン以外のパーティはいなかった。つまり、アシェンたちは突入時にバラバラになった可能性が高い……俺としたことが、奴がこっちに来ている可能性を失念していたとはな……）』

奴、だ。奴が来た。

青いカラーリングのカブトムシのようなロボット……俺の同僚――アルトアイゼン・ナハト以外にあり得ないだろう……。

『Ｎｏ　Ｆｕｃｋ！　Ｇｕｎｇｈｏ，ｇｕｎｇｈｏ，ｇｕｎｇｈｏ！（野郎ども頭はいいから尻を隠せ！　穴を隠せ！　これは我らの聖地を守るための聖戦である！　ヤラれる前にヤレだ、ガンホーガンホーガンホー！！）』

「意味は分からんが、とにかく凄い気迫だ」

キョウスケは顔を歪めながら立ち上がった。

尻を押さえている……そうか、可愛そうに。野郎は既に餌食になってしまったようだな。

アルトアイゼン・ナハト……ガチムチとう描写にふさわしい屈強な装甲を持ち、その膂力を持って敵を正面から粉砕する類まれなる強き戦士。

だがそれは表の顔である。

裏の顔は……いや、奴のＡＩの中に埋もれていたデーターは酷いモノだった。以前、俺がキモキザの命令でナハトにハッキングしたとき、俺のＡＩには裸の男同士が絡み合う映像が延々と流れ込んできた。実に気持ち悪く、その方面の趣味が無い俺には劇物以外の何者でもない……とにかく、要するに、つまりだ。

ナハトはホモなのだ。それもガチホモなのだ。

奴が「エリア」に来て、自由意志を獲得したとしたら非常にマズイことになる。

「エクセレン、俺はしばらく歩けそうにない。俺の代わりにジェネ高の男連中に伝えてくれ」

「なんて？」

「尻を隠せ。青いカブトムシに気をつけろ、とな」

ナハトの毒牙にかかってしまったキョウスケはエクセレンの手を借りて自室へと引っ込む。俺はしばらくの間、キョウスケ宅の外で待機せざるを得なかった。

しかし、ナハトの奴を放置するなど空腹のライオンを檻から出しているようなモノだ。早く手を打たなければ。野放しにしていると次の犠牲者が出てしまうぞ、と……戻ってきたエクセレンに俺は提言してみたが……

「はいはい、帰ったらキレイキレイしてあげましゅよー。待っててね、ゲッシーちゃん」

どうやら、俺の言葉は正確に伝わっていないようで軽く流されてしまった。おかしいな、俺の言語はエクセレンの母国の言葉のはずなのだが……とにかく、俺は今バイクである。文字通り、手も足も出せずにあっという間に数日が過ぎた　――

――　それは、蒼い悪魔の伝説が広がるのには十分すぎる時間であった

●

俺の名前はリュウセイ・ダテ。

自分で言うのもあれだが、俺は相当のロボットオタクだぜ。いいよな、スーパーロボット！　まさに漢のロマンだな！

「やっべー、遅刻遅刻！」

そんな俺がジェネ高の登校で、とある公園を通り抜けしショートカットするのは日常の風景だ。夜遅くまでロボットサイトを巡回しすぎて思い切り寝坊してしまった。急がないと授業に遅れてしまう

――　と、俺の目に1体のロボッツの姿が飛び込んできた。

「ウホッ、いいロボット☆」

３mクラスの巨大なロボットが鉄パイプのベンチに腰掛けている。ベンチは「ヒィー、もう駄目ッスよー」と悲鳴をあげるかの如く変形してしまっている。それでも構わずロボットは座っている。その姿は実に男らしいぜ！

俺は遅刻そっちのけで、ロボットの前で足を止めてしまった。

蒼いカブトムシのようなロボットだった。

「カッケー、超カッケー！！　なぁなぁ、そのコスプレって何処で売ってるんだ！？」

『虫けらが……飛んで火に入る夏の虫とはこのことよ』

ロボットは立ち上がって、俺の手を引いた。

「なんだ、こっちで売ってんのか？」

俺がロボットに連れて来られたのは公園にある男子トイレだった。そうか、激レアのコスプレグッズだから、きっと普通のショップじゃなくて人気の無い場所で売買するんだな。そうに違いない。

だがトイレの中に人影はなかった。コスプレグッズの売人は何処にいるのだろう？

と、俺はトイレの個室の中に突き飛ばされた。便座に体が当たって痛かった。

「なにしやがる！？」

『い・た・だ・き・ま・す』

ロボットの片手に装備された巨大な杭のような武装内で、まるで銃弾でも装填したかのような音が響いていた。巨大ロボットが俺に向かってくる。個室の扉なんて全部砕きながら、俺に向かってくる

！！

「止めろ、来るな！　俺はロボットは好きだけど、そんな杭は好きじゃねえんだ！
なに？　杭じゃない、リボルビング・ブレイカーだって？　カッコいい名前じゃねえか！　でもそれをどうするつもりだ！　……便座に両手をついて、尻をこっちに突き出せだって？　断る！！
うぉ、何しやがる！？　アダダダ、便座に顔が当たってるって！！
た、助けてくれ　――　ママア〝アアアアアァァァァ　――
――――ッッ！！！」

臀部から脳天に駆け向ける衝撃と共に、俺の意識は薄れていった

――

――　薄れていく意識の中でロボットの声を聞いた　――……

『ＷＲＲＲＹＹＹＹ（ウリイイィィィィ）　――　そんなねむっちまいそうなのろい動きでこのナハトから逃れられるものか。男なぞこのナハトへの供物に過ぎんのだ。精々、抵抗することだなマヌケッ』

●

俺の名前は紫雲　統夜。

男の夢、ハーレムを地で実現している男さ。

今日は俺のハーレムの女たちのために、プレゼントを買いに繁華街に来ている。

何をプレゼントすることにしようか？　やはり装飾品の類かな…
…と、俺がウィンドウショッピングに勤しんでいると。

『ウホッ、いい尻のニホイがしおるわ』
「ん……ギャアアァ　――　ッッ！？」

俺の背後には蒼いカブトムシのようなロボットがいた。３m程の巨体で見下ろし、ロボットの影で俺の体はスッポリ包まれてしまっている。
繁華街なので人ごみは多いのだが、この異様なロボットの周辺には人っ子一人いない。明らかに避けている。その程度には蒼いロボットは異常で危険そうな物体であった。

『小僧、名前を言ってみろ』

ロボットが赤い目を明滅させながら喋った。

『小僧、名は？』
「し、紫雲　統夜……」
『なぁぁにぃぃぃ？』

声色が変わり、ロボットは腕に備え付けられた杭のような武器を仰々しく構えた。

『夜を統べるだとぉ？　夜の支配者はこのナハトだけで十分よ！！』
「なんで逆切れしてんの！？」

このロボットは危ない……俺は踵を返して逃げ出すことにした。
猛ダッシュでロボットから離れて人ごみに紛れ込もうとする……
も、３mの巨体から繰り出される腕のリーチからは逃れられず、上

半身を掴まれて引きずり戻される。

『貧弱貧弱ぅ、その程度でこのナハトから逃れようとは片腹痛いわ』

「くっ……俺をどうするつもりだ？」

俺の言葉に答えるように、ロボットは杭をジャギンッと構えなおした。

……まさか、考えたくないがあの杭を俺に突っ込む気か？

いい尻、とロボットは言っていた。まさか、あそこにその太い杭を入れるつもりか！？

俺は必死に暴れたが、ロボットの膂力に敵うはずもなかった。

「おい、クソロボット！　その杭で俺をどうしようとしているのかは知らん。けどな、こんな人通りの多いところで暴行を働こうものなら、お前なんてすぐに捕まってしまうぞ！」

『ククク、確かにプレイの最中を見られるのはマズイな。しかし小僧、このナハトを脅迫しようとはいい度胸だ！』

「なに――アチッ！」

ロボットの語気が強まったかと思うと、蒼かったボディが炎のように赤く染まっていく。それに伴い、俺を掴んでいるロボットの手が熱を帯びてきた。どうやら、熱暴走でもおこしているらしい。

『このナハトが「エリア」に来て目覚めたのは、なにも自意識だけではない。新たな能力にも目覚めたのだ！』

「は、離せ、この！！」

俺は自由になる脚で蹴りをお見舞いしたが、ロボットはまったく堪える様子はない。

『マヌケが……知るがいい……私の能力名は「世界（ザ・ワールド）」だ！　まさに世界を支配する能力！　小僧、貴様はヤラれたことにすら気づくことはない　――

――　時よ凍れ、ガチホモ・ザ・ワールド！！』

そこで俺の意識は一度、とぎ、れ、た……

……気が付くと、臀部に強烈な痛みが残っていた。
俺の周りには人垣ができており、あの蒼いロボットの姿はなかった　――　俺の意識は再び闇の中に落ちていった　――……

●

俺の名前はゲシュペンスト・ファントム。

エクセレンと共に登校したジェネ高の風景は見慣れたモノだったが、雰囲気はここ数日で非常に様変わりしていた。
蒼い悪魔の伝説はジェネ高男子を恐怖のどん底に突き落とすのに十分であったようで、男子は登下校中は常に数人一組で行動し、誰

かが背後に立つ事に酷く神経質になっている。

「おい、聞いたか。スクールのアラドもヤラれたらしいぞ？」

「いよいよヤベえな……鋼鉄製の貞操帯でも作った方がいいんじゃねえか？」

「彼女ができる前にヤラれちまうなんて、俺は絶対は嫌だぞ！」

駐輪場に向かう俺とエクセレンの横を、３人の男子生徒がすれ違った。

緑のバンダナの少年と金髪の美少年と茶髪の彼女がいそうにない少年だった。確か名前はタスクとブリッドとカズマだったか……校舎内に入れない俺でも有名どころの生徒名ぐらいは覚えている。

「ゲッシーちゃん、学校終わるまでここで待っててね」

『Ｙｅｓ，Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ　（分かったぜエクセレン。時間になったらここに戻ってくるとしよう）」

俺はエクセレンが校舎に入るのを確認してから、アクセルを吹かせて駐輪場を出た。

俺の体はバイクで手も足も出ないわけだが、タイヤはあるので平地なら自由に走り回ることはできる。放課後まで律儀に待っているのも退屈なので、最近は広大なジェネ高の敷地内を探索しているのだ。

どうでもいいが、敷地内を走行する俺の姿を見た生徒は「首なし……いや、幽霊ライダーだ！」と叫んで逃げていく。学校の七不思議にされても面倒なので、人目につかない道を選んで走っていると

――

「「「ア〝ア〝アアアァァァァ　――　ッッ！！！！」」」

『ＷＲＲＲＹＹＹ　――　掘ったどぉぉーー！』

――男子生徒の悲鳴と共に、聞き覚えのあるような電子音声が聞こえてきた。

『Ｗｈａｔ？　（なんだ？）』

声の聞こえてきたのは校舎裏の方角だ。

俺は急いで校舎裏に向かう。するとそこには、登校時にすれ違った３人の少年が亡骸となって（気絶して）転がっていた。

すぐ傍には蒼い悪魔――アルトアイゼン・ナハトが佇んでいる。

『ＮＡＨＡＴＯ！　（ナハト！　貴様、俺のシマで何をしてやがる？）』

『ん……お前、ファントムか？　なんだその姿は？　ちっとも萌えんぞ』

野郎……戦友との再会の言葉がそれか？

『Ｎｏ　Ｆｕｃｋ！　（ＯＫ、ナハト。やはり貴様の性根は腐ってやがるな。残念だが今の俺には尻はねえ、貴様に万が一の勝機もないぞ！）』

『ならばこすうるまでよ』

ナハトは言うが早いか、片手に装備された連装チェーンガンを構えやがった。

いかん！　急旋回して回避運動に入ろうとしたが、間髪入れないナハトの銃撃が俺の車体を直撃する。

元々ＰＴだった頃の名残か装甲はそれなりに厚く、エンジンに直撃して爆散ということは無かったが、俺は傷だらけになりその場に

横転した。

『Ｎａ……ＨＡＴＯ……　（……くっ、ナハト、貴様やってくれたな……）』

『貧弱貧弱ゥ。ファントム、今まで戦ってきた相手の中で貴様が一番なまっちょろいぞ！』

野郎、バイク相手に無茶苦茶言いやがって……ナハトは地響きと共に俺に近づき、巨大な足で俺を踏みつけてきた。畜生、屈辱だ……。

『ファントム、昔のお前は強く、逞しく、このナハトの供物に相応しい存在だった……だが今はどうだ？　その様な姿に成り下がりおって！　お前なぞ、ヤル価値もないわっ、このマヌケ！』

グリグリと、ナハトは足を俺の車体に抉り込むように押し付けてくる。圧倒的な重量差に体は貯まらず悲鳴を上げていた。俺は元々ＰＴだ。痛覚なんて存在しない。しかし限界が近いことを脳裏に掠める数値が示してくる。

分かる……このままでは俺は死ぬ。

『ＮＡＨＡＴＯ……！　（ナハト……貴様ぁ、許さんぞ！）』

『虫ケラが、死ねぃ！！』

ナハトがリボルビング・ブレイカーの槲鉄を上げる音が耳に届いた。

男たちをヤッテきた時とは違う。

確実に俺の体に風穴を開けるつもりだろう……もう駄目か、走馬灯のように「エリア」での日々がフラッシュバックし始めた、そのときだった　――――

「なんですのアクセル？　私に見せたいものがこっちにあるんですの？」
「そうそう。こっちに人気が無くて、にゃんにゃんするのに丁度いい場所があるのさ、これがな」
――校舎裏に2つの影が踏み入ってきた。
あれは……アルフィミィ！　青い髪にツルペタ寸胴体形の完璧なるロリボディを持つ、俺の想い人だった。傍には赤いモジャモジャヘヤーの男がいる。エロそうな笑顔が顔面に張り付いていやがる……頬骨ごと叩き割ってやりたいような表情だ。
しかしいかん！　今、こっちに来ては危険だ！
『Ｇｅｔ　Ａｗａｙ！　（離れろ！　こっちに来ちゃいけない！）』
「あら？　エクセレンのバイクさんですの？」
アルフィミィが俺に気づいたようだが、
『女に興味はない、消えい』
同時にナハトも彼女たちに気づいたようで5連装チェーンガンを照準していた。
『Ｎｏｏｏｏｏｏｏ！！　（ヤメロオォォォォォ！！）』
アルフィミィが！　アルフィミィが死んでしまう！
俺の体は金属製だから銃弾に耐えることができたが彼女は生身だ。ナハトから浴びせられるスコールのような実弾を受ければ、彼女は肉体は原型を留めない程に破壊されるだろう。
それだけは……阻止せねば。だが俺の車体は既に限界な上に、ナ

ハトに踏みつけられている。動けない……それがこれ程口惜しいと思ったことはなかった！

――轟音と共に銃弾が発射された……

ただし、天空に向かってだ。ナハトの腕が蹴り上げられ、射線が上方へとズレていたのだ。

「俺の女に何しやがる？」

蹴りを放ったのは赤いワカメヘアーの男だった。

「俺っちバカだけどよぉ、これだけは分かるぜ。可愛い子ちゃんに乱暴しちゃいけねえってな。アルフィミィちゃんに手を出す貴様は俺の敵なんだな、これが」

『ウホッ、いい男☆』

ワカメ男の啖呵がツボに嵌ったのだろうか？　ナハトは俺に叩き込む予定だったリボルビング・ブレイカー構えなおし、空いた手で男の動きを止めるべく掴みかかる。

「しゃらくさい！！」

ワカメ男はナハトの手を難なくかわした。

ナハトと距離を保ったままで、コォォォォ、と深く息を吐き出し両手を合わせた構えを取る。数回、その呼吸を続けるうちに両手に白い靄のようなモノが集まっていくのが見えた。それが何か、機械の俺には分からない……だがこの男が何者なのかは思い出した。

アクセル・アルマー。

俺にまだ自由意志がなかった頃にエンドレス・フロンティアに転

移してきて、元マスターのキモキザたちと共闘したことのある仲間だった。

俺は依然あった時にはぶっ飛ばしてしまったのに、アクセルは既に水に流したかのような態度だ。俺など意に介さずアルフィミィの前に壁として立つ姿は実に雄々しい。惚れた相手は意地でも守り通すか……漢だぜ、アクセル・アルマー……。

頼む、俺の代わりにナハトを叩きのめしてくれ！

「青カブトムシが、この俺の蒼髭流格闘術のサビにしてやる！！闘気にはこういう使い方もできるんだぜ！！」

『愚者がぁ！　お前の腕ごとカメを砕くようにして尻を貫通してくれるわ！！』

ナハトが背面のブースターを点火した。ナハトは自重を物ともせずにアクセルに突撃していく。

重量×速度×堅さ＝攻撃力だ！　ナハトのリボルビング・ブレイカーの直撃すれば、人間など上下に裂けてしまうだろう。だがアクセルは動じなかった。

「闘気を波紋に変えて打ち込む　――」

体格差を活かしてナハトの足元にすべり込む。股下をすり抜けられリボルビング・ブレイカーを打ち込む相手を見失ったナハトは急停止をせざるを得なくなった。

地面に脚部をめり込ませ強引な制動を得る。

すぐさま振り返っていたが、アクセルは白い靄を纏った両手をナハトに押し付けていた。絹をさする様にゆっくりと、両手の平がナハトの腹に触れ。

「――　蒼髭流格闘術奥義　白虎咬ッ！！」

ナハトの体内に白い靄のようなモノが打ち込まれた。アクセルの言葉を借りるなら、闘気を変換した波紋をナハトの中に注ぎ込み、それは背部へと突き抜けていた ――

『―― ＷＲＲＲＹＹＹＹ ―― な、なんだこれはぁ!? 装甲が役に立たん……衝撃がぁナハトの中で暴れているというのか?! よ、よくも貴様ぁ!!』

アクセルの一撃にナハトは膝をついていた。

『よくも! このナハトに傷をつけてくれたな!!』

「ほざくな雑魚が。貴様などベーオウルフに比べれば小物にすぎねえんだよ、これがな」

『こ、このナハトを……このナハトを雑魚扱いだと!? フーフー息を吹いて練った波紋とやら如きで、本気でこのナハトが倒れると思っているのか!?』

ナハトが絶叫しながら立ち上がった。

外見にダメージは見えない。

アクセルの一撃では致命傷にならない、ということか。

―― ピキュィィィィィンン

と、俺が考えていた矢先に、どこかで聞いたことがあるような効果音が響いた。

ナハトの肩部分にはレイヤードクレイモアという指向性地雷が大量に積まれている。着弾すれば対象を蜂の巣にするナハト最強の武装である。ちなみに爆発すれば周囲を巻き込む大惨事となるだろう。

そのレイヤードクレイモアを搭載したコンテナが爆ぜた。火薬で

はなく、コンテナ接続部のボルトが破裂して、クレイモアごとコンテナが吹き飛ばされる。

『な、なぁにいいいいい！？』

「お前はもう死んでいる、これがな」

一瞬、アクセルの顔が劇画調に見えたのは俺の気のせいだろうか。

「なんつって♪」

しかしそれは俺の錯覚であった。そう確信できるぐらいに、アクセルはだらしない笑顔を直後に浮かべていた。

アクセルはアルフィミィに手を伸ばす。

「さ、アルフィミィーちゃん、何処か他所でにゃんにゃんしようぜ？」

「はいですの。でもアクセル、にゃんにゃんってなんですの？」

「それはヤッてみてのお楽しみさ、これがな。ウフフ」

そうして、アクセルは、ナハトに背を向けるのだった。

あ、このバカ！　ヤラれるぞ！！

無論、アクセルは格闘技の達人のようだし、背後にも気を配っているに違いないのだろうが……猛烈に不安感が俺のＡＩを支配する。

『マヌケがぁ……一息にトドメを刺せばよいものを』

ナハトの声に篭った怒気が強っていく。それに伴い、青一色だったナハトのボディカラーが炎のような色に変わっていく。

色は真紅。まるでナハトの怒りを体現しているかのような色だ。

『貴様は千載一遇の好機を逃したのだ！　後悔するがいい　――

――　時よ凍れ、ガチホモ・ザ・ワールド！！』

ナハトは仰々しく両手を広げて叫んでいた。
それと同時だった。
俺たちを包む空気が変わったのは。

止まっている……風に揺られていた木の葉も、少しずつ流れていた雲も、校庭から聞こえてきていた生徒たちの声も……全てが止まっている。全部だ。アルフィミィも、アクセルの手を取ろうとしている所で動きを止めており、まるで蝋人形でも見ているような錯覚見舞われる。
同時に、強烈な思考が俺のＡＩの中に流れ込んでくる。なんだこれは？　男同士が見詰め合っている。

「先輩、やっぱりボクには無理ですぅー。そんなに大きいの……入るわけがありません！」
「なにを言うんだ？　やってみなくちゃ分からないじゃないか？」
「で、でも……そんなエクスカリバー……」
「ふふ、自慢の一品だ。決して、エクスカリパーじゃないぞ」
「や、優しくしてくださいね……？」
「保障はしかねるな。慣れてきたらＶ－ＭＡＸのように激しくしてやろう。いや、月まで飛ぶぐらい絶好調にしてやろう」
「そ、そんな　――　あ、来る！　来ちゃう、先輩が来ちゃう　―

――ユ、ユ、ユニバアアアアアアアアァァサルッ！！！！」

『Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏ！？　（ぎゃあああああああぁぁぁぁぁっ！？）』

俺はＡＩ（せいしん）に５０００のダメージを受けた。

ナハトめ！　あのガチホモ野郎！

野郎の思考が俺に流れ込んで来てやがるじゃねえか！？　エンドレス・フロンティアでのハッキングの時の再現だ！！　畜生、ぶっ殺してやる！！　しかし体は動かない。おのれ、アルトアイゼン・ナハト、許すまじ。

俺の絶叫を聞いたナハトが振り返っていた。

『ほぅ……見えているのか？　俺とお前は同タイプＰＴ（パーソナルトルーパー）を素体に開発されたのだったな。俺たちは血族と言ってもいい、お前をヤレないのが本当に残念だよ』

『Ｗｈａｔ　Ｈａｐｐｅｎ？　（ナハト……貴様、一体なにをした？　見えはするがタイヤ一本動かせん。こんな能力、貴様には備わっていなかった筈だ！）』

『そうだよ、兄弟。この能力は「エリア」に来てから身に付いたものだ。名は「世界（ザ・ワールド）」――ご察しのとおり、時を止めることの能力だよ……どうやら、貴様は静止した世界を見ることができるようだがなぁ……』

そう言うと、ナハトは俺に背を向けた。相手をする必要すらない、ということか。

ナハトはアクセルを掴むと、軽々と空中に持ち上げた。

『この能力も最初は瞬きほどの一瞬しか止められなかった……しか

し、男共を一人、また一人とヤっていくに連れて、止められる時間も延びた。ククク、貴様ほどの男をヤレば相当の時間を止められるようになるに違いない』

ナハトが空いている手を構えた。
アクセルの尻にリボルビング・ブレイカーの鋭利な切っ先が向けられる。

『さらばだ、強敵(とも)よ』
『Ｎｏｏｏｏｏｏｏ！！　（やめろおおおおおぉぉ！！）』

アクセルの尻にブレイカーが近づいていく……俺は目を背けずにはいられなかった。
済まない、アクセル……臆病者と罵ってくれても構わない。だが、俺には見ていられなかったんだ……

『ＷＲＲＲＹＹ　――　掘ったどぉぉぉぉ！！』

ナハトの絶叫が響き、繰り広げられている惨状が手に取れるかのようだ。

『このナハトに逆らおうなど無駄なのだよ！
そおぅら、無駄無駄無駄ァ、無駄ァ！！　這い蹲れ、虫けらがァ！！』

ナハトの咆哮に呼応し、ブレイカーから炸裂音が連続する。
生身の人間がリボルビング・ブレイカーをもらえば即死だろう……しかし、ナハトは死なない程度に威力を落としているに違いない。
餌食となった、キョウスケを初めとする人間たちは全滅しているだ

ろうから。
なんて残酷なことをしやがる……いっそ、一思いに殺してやるのが情けだろうに……許せない。ナハト、貴様だけは許せない！
行為を終えたアクセルが俺の眼前に投げ捨てられてきた。時間が止まっているので微動だにしない。用済みということか、ナハトめ！

『ククク、あと一秒』

ナハトが人差し指を立てて、俺たちを見下ろしていた。まさか、そのカウントは時を止められる時間なのか？　止めろ……今、時間が動き出したら……ナハトの双眸に嗜虐的な光が灯り、指は無情にも折られる……。

『ゼロ！　時は動き出す！！』
「ぎゃあああああああぁぁ！！」

アクセルは俺の眼前で体を跳ね上がらせて絶叫。そのまま白目を剥いて気絶した。酷え……！

「ア、アクセル？　どうしたんですの？」

アクセルの手を掴むことができなかったアルフィミィは、倒れている奴を見つけると駆け寄ってきた。きっとアルフィミィには一瞬の出来事だったに違いない。

『ご・ち・そ・う・さ・ま・で・し・た』
『ＮＡＨＡＴＯ　――　ッ！！　（ナハトォォ、貴様、絶対に許さんぞ！！）』
『ん～、聞こえんなぁー。何処かで幽霊が恨み事を唱えてているのかなぁ？』

もう我慢ならん……しかし、ナハトに痛めつけられた車体は言うことを聞かない。

「アクセル……起きるですの」

アルフィミィがアクセルに手を当てて声をかけるが答えることはなかった。その目には薄っすらと涙が……畜生、俺の天使を泣かすとは、俺の魂が幾千万回生まれ変わっても貴様だけは絶対に許さん！

『女。汚らわしい肉の固まりめ、すぐにミンチにしてくれるわ』

ナハトが再び5連チェーンガンを構えて、アルフィミィに接近してきた。

くそ、このままではアルフィミィが……誰か……誰でもいい！奴を、ナハトを止めてくれ！！　そのためなら何だってする！！だからお願いだ！！　俺はどうなってもいい……だからアルフィミィだけは、アルフィミィだけは救ってやってくれ！！

「わかったにょ」

それは天の声だったのだろうか？

分からない。

ただ言えるのは、気がつくと、俺の目の前に全長２０ｃｍ程で２頭身の奇妙な生物が立っていたということだけだ。

「わたちはおーちゃむ・ふぉー、このせかいのかみにょ！」

『Ｇｏｄ？　（神さま、だと？）』

「マーズ」

シャラップ！

つっ込みどころの多い生物だぜ。あれ？　前にもこんなやり取りを見たことがある気がする……だが今はそれどころではない。

相手が神さまなら好都合だぜ。

『Ｐｌｅａｓｅ　Ｐｏｗｅｒ！　（俺に力を！）』

「チーカマくれにょ」

『……Ｎｏ　（……持ってない）』

「じゃ、いやだにょ」

『Ｏｈ　Ｍｙ　Ｇｏｄ！！　（なんだと！？　ふざけるなこのクソチビが！！）』

緊急事態だぞ。チーカマなんぞ知るか。そもそも俺は食事をしないから食品を入手する術も知らないしな……こうしている間にも、ナハトはアルフィミィに引導を渡すべく近づいてくる。

「しょーがないにょ」

謎生物がため息をついていた。

「わたちのせかいをあらすふとどきものがいるみちゃいだし、こんかいはさーびすしてやるにょ」

『Ｔ，Ｔｈａｎｋ　Ｙｏｕ！　（す、済まない、恩に切るぜ！）』

「ぼっこぼこにしてやるにょ！」

謎生物はそう言い捨てると、体から閃光を放ってその場から忽然と姿を消した。

だが同時に、俺の車体も光に包まれていく。

『な、なんだ？』

ナハトが俺に気が付いたようだった。

光の中で俺の意識は混濁していく。俺の体がバイクになってもう結構になる。慣れ親しんだ車体の輪郭が徐々に崩れていくような感覚に見舞われる。光の中で俺の意識は溶け、巨大な球体へと変貌を遂げていた。

さらに球体が変形し、四肢ができる感覚……これは人型だ。そう、俺がエンドレス・フロンティアに居た頃の姿だ。

そう、俺は――

『ゲシュペンスト・ファントム、只今推参ッ！！』

――ゲシュペンスト。幽霊の名を持つ黒光りする巨体が俺の元に戻ってきた。足元にいるアルフィミィが小さく見える。どうやら、大きさも元通りの３ｍクラスに戻ったらしいな。

ありがとう神さま、これで俺は戦える。

『来いナハト。格の違いを思い知らせてやろう』

『ＷＲＲＹＹＹ――生意気ィー！！　幽霊め、その名の如く天に還してやろう！！』

ナハトが先制攻撃とばかりに５連チェーンガンを乱射してきた。

俺の足元にはアルフィミィとアクセルが居る。俺がここを動くわけにはいかなかった。

俺は両腕で体をガードしてあえて攻撃を受けた。チェーンガンの弾丸が矢の様に俺の装甲を抉っていく。痛みはない。俺には痛覚がないからな。ダメージを受けているが、人間と違い、痛みで自分の限界を見誤ったりはしない。

全ての銃弾を受けきったとき、俺の体は満身創痍の状態であった。
だがアルフィミィたちは無事……よかった。

『なまっちょろいぞファントム！　それは愛か？　それとも自己犠牲か？　正義の味方にでもなったつもりか？
あまい、あまっちょろいぞファントム！　大概の奴には心に善のタガがある。だが俺たちは違うだろう、なぁ兄弟？
昔のお前は、俺のヤリたかったお前は、もっと冷酷で残忍な殺人マシーンだったはずだ！！　外せ、心のタガを！！　お前も所詮俺の同類よ！！』
『言いたいことはそれだけか？』
『なにぃぃ？』

俺は一足に地面を蹴り、ナハトとの距離を詰めた。
そのまま体当たりに吹き飛ばす。アルフィミィたちから離れさせるためだ。ナハトは校舎裏から弾き出され、校庭へ……しかし、そこには授業中の生徒たちがいた。

「うわあぁぁ、化け物だぁ！」
『ＷＲＲＹＹ　――　なんだとぅ、人間共め！　吹けば吹き飛ぶ虫けらの分際で、いつもいつも俺に命令ばかりしやがって！　人間なぞ、ヤリ終わった後に皆殺しにしてくれるわ！！』

数人の生徒が集まっている場所にチェーンガンの銃口が向いた。

『いかん！』

慌てて突撃し、ナハトの鼻っ面にパンチをお見舞いしてやった。
青い巨体が揺らぎ、銃口から放たれた弾は見当外れの場所にばら撒かれる。幸いにも負傷者はゼロ。

『早く逃げろ！』
「は、はい！」
生徒たちは教員に先導されて校舎内へと走っていく。
『邪魔をするなファントム！』
『何故だナハト？　何故、人間に牙を剥こうとする！』
『マヌケが、貴様になら理解できるはずだぞ！　俺たちがどんな扱いを人間共に受けてきたのか忘れたか！？』
それは慟哭に近い叫び声だった。
そうか、ナハト……お前にもエンドレス・フロンティアの時の記憶が残っているんだな。
確かに俺たちの扱いは酷いモノだった。人間のいいように呼び出され使役され、戦わされ、多くの命を奪ってきた――仕舞いに、俺たちは１０年戦争の恐怖の象徴として恐れられる始末……そうなりたかった訳じゃない。
そうするしかできなかっただけだ。
過去の俺には自意識なんてなかった。
でもあればきっと、俺は人間を恨んでいただろう。俺は、こんなことをするために存在しているんじゃないと、叫びたかっただろう。
だが俺は、「エリア」でキモキザと決別し、エクセレンやアルフィミィに出会った。
温かい人たちだ。
俺の守りたい人たちだ。
でもナハトにはそれがなかった。夜を彷徨う蝙蝠のように人の意識と機械の体を持つものとして苦しんでいたのだろう……残酷だぜ。
いっそ、心なんて無い方がどれだけ楽かもしれない。
ナハトは俺を殴りつけてきた。衝撃で俺の体が揺れる。

『決めたぞファントム！　俺はＰＴ（パーソナルトルーパー）をやめるぞぉ！　ＰＴも人間も超越した存在として全てを支配してやるわ！！』
『そんなことは俺がさせない！！』
『貴様の頑張りなど無駄よ！　無駄ァ！！』
『ナハト、お前を止める！　オラァ！！』

俺とナハトの鉄拳が空中で交錯し、同時に弾かれた。
ナハトの赤い目に不適な光が宿ったのを俺は見た。

『良い突きだ。ならば突き（ラッシュ）の速さ比べといこうではないか！　ゆくぞ、ファントム！
無駄ァ！！』
『来い、ナハトォ！！
オラァ！！』

俺たちの必殺の連撃がぶつかり合う　――　どれだけの間、殴り合っていたのか分からない。先に根負けしたのはナハトの方だった。
俺のパンチがクリーンヒットし、ナハトの胸部装甲が大きくへこむ。

『ぐふぅ……！　や、やるなファントム！　だがお前が俺に勝つことは決してない　――

――　時よ凍れ、ザ・ワールド！！』

再び、ナハトの静止時間の世界へと突入した。
この世界の中ではやはり俺の体は動かなくなる。比べてナハトは悠々と俺に接近してくる。手も足も出ない。かと言って、カメのように防御を固めることもできない……万事休すだ。

『むぅ、卑怯だぞ、ナハト！』
『マヌケがァ、この俺にあるのはたった一つだけのシンプルな思想だけよ！　「勝って支配する」、それだけよ！　過程や……方法なぞ……どうでもいいのだぁ！！』

ナハトのパンチが頭部を直撃する。時が止まっているので体が動くことは無いが、時が動き出した途端に全てのダメージが一斉に襲い掛かるだろう。
このままではアクセルの二の舞だ……なんとか、しなくては。と、そのとき。
俺の指が動いた！
微かだが、本当に少しだが確かに動かせた！
俺とナハトは同系統のＰＴだ。ゲシュペンストシリーズというＰＴの基本フレームを流用し、カスタマイズされて完成した試作機。それが俺たち……つまり、ナハトにできることは俺にもできる可能性がある。
一筋の光明はまだ残されている！

『ファントムゥ、お前には全弾打ち込んでくれるわぁ』

ナハトがリボルビング・ブレイカーを構えていた。ブレイカーの装填数は６発……俺の装甲でも同一箇所に６発もの衝撃は防ぎきれ

るモノではない。
急がなければ……動け、動け動け、動け動け動け動け動くんだー！！

『さらばだ兄弟！！』

ナハトがリボルビング・ブレイカーを大きく振り上げたそのとき。
俺の体は動いた。

『ナハトォォォ！！』
『なにぃ！？　ファントムゥ！！』

俺はリボルビング・ブレイカーをナハトの懐に入って回避し、体をぶつけてナハトを転倒させた。
ナハトはすぐに起き上がろうとした。
だが動作がどこか鈍い。そのことにナハトも気づいたようだった。

『こ、これは体の動きが鈍い……いや、ち、違う！　動かない！！
まさか、これは！？』
『そう、９秒経過した時点で、俺が逆に時を止めなおした。名づけて、ゲシュペンスト・ザ・ワールド！！』

できた……俺にも時を止めることができたのだ。
ナハトは話すことはできるが動くことができないようである。とにかくこれで形勢逆転だ。

『ナハト』
『ヒ、ヒィ、やめろ！　来るんじゃない！』

ナハトは怯えていた。

当然か。時を止められる恐怖。自分だけが圧倒的優位に立っていたにも関わらず、カードの裏表を変えるかの如く、立場が逆転してしまったのだ。

怖かろう。だが、俺はナハトを許すことはできない。

ナハトは俺の大切な人たちに手を上げようとした。それだけは許すことはできない。

そしてナハトにも知ってもらいたいのだ……

『ナハト、俺はこれからお前を殴る。だが身を持って知ってほしい。俺の拳に乗せられた魂を！』

『た、魂だと？　バカな、俺たちに魂などあるものか！』

『あるさ』

俺は拳を強く、強く握った。

『俺の拳に宿るのはみんなから受け継いだ心だ！　Ｍａｃｈｉｎｅ（マシン）Ｓｏｕｌ（ソウル）だ！　人間の魂だ！！』

俺に残った全エネルギーをこの一撃に賭ける。

アルフィミィ、エクセレン、アクセル、キョウスケ……みんなが平和に過ごせる世界のために、そしてナハト、お前にも知ってもらうためにこの一撃を送ろう。

人間は素晴らしいぞ、ナハト！

いつかお前にも分かって欲しい。俺の心も一緒に乗せて、必殺の一撃を送ろう！

『必殺ッ　――　ゲシュペンストォォォパァァァンチィィッッ！！！』

『バ、バカなぁ！！　このナハトが、このナハトがぁぁぁぁっ！！？』

俺の拳がナハトの胸に命中する。
それは静止時間中にも関わらず、ナハトの装甲に亀裂を奔らせていた。
俺は勝利を確信し、背を向けて言い放つ。
『Ｔｉｍｅ　ｔｏ　Ｃｏｍｅ　――　そして時は動き出す』
『うおおおおおぉぉぉぉっ！！！』
時間停止が解除され、ナハトは装甲を砕かれながら吹き飛んでいった。俺の視界から消えるが、奴のことだ、この程度でくたばったりはしないだろう。いつでも再戦を申し込んでくりゃあいい。俺は逃げも隠れもしない。いつだって相手をしてやるさ。
ＯＫか、兄弟？
とにかくだ、これで万事解決ってことだ。
『また逢おう、兄弟』
俺はナハトの消えた方向に呟いていさ。
もちろん、テンガロンハットなんて無いから、体に染み付いていた軍隊式の敬礼って奴で見送りながらな。
こんな俺は強くて、優しくて、カッコいい最高のロボットに違いない。ここに異論は認めない。
いいか、兄弟？
これからも俺の素晴らしい日常は続くのさ　――……

ここはＯＧ高等学院。
『エリア』にある地域最大のマンモス高校だ。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない。

おまけ

俺は今日もエクセレンと共に峠を疾走する。
その姿は見事なまでにバイクに戻っていた。

『Ｗｈｓｔ？　（おい、どうしてまたバイクに戻ってんだ？）』
「ゲッシーちゃん、今日も５連続ヘアピンいくわよー♪」

エクセレンが華麗なハンドル捌きで俺を操縦していく。

カーブに次ぐカーブ、そしてカーブ。
この曲がりくねった道の先に一体なにがあるんだろうなぁ？
この道を思い切り翔け抜けることができるのなら、バイクっていうのもあながち悪いモンじゃないかもしれない。

『Ｏｋ，ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ！　（ＯＫだ、エクセレン！　振り落とされないようにしっかり掴まっとけよ！）』

今日も、俺は最高にカッコいいコーナリングを決めてやることに成功した。
悪くない、むしろ良い生活が俺の周りにはあるんだ。

どうだい、兄弟？

うらやましいだろう？
でも譲ってなんかやらないぜ。ここが俺の居場所なんだからな……

Ｍａｃｈｉｎｅ　Ｓｏｕｌ　～ゲシュの奇妙な冒険～（後書き）

＜キャラ紹介＞

ゲシュペンスト・ファントム：エンドレス・フロンティアから「エリア」にやってきたＰＴ。「エリア」に来てから自意識に目覚めたがその姿はなぜかバイクに……ロリコンでアルフィミィが好き。

アルトアイゼン・ナハト：エンドレス・フロンティアから「エリア」にやってきたＰＴ。「エリア」に来てから自意識に目覚めるがその姿はそのままで、かなり脅威。真性のガチホモで、野郎は彼のリボルンビング・ブレイカーに注意されたし。

エクセレン・ブロウニング：ジェネ高３年生、高校生に見えない高校生その１。繁華街で勝手にゲシュペンストを拾って新しいマスターになった。

キョウスケ・ナンブ：ジェネ高３年生、ギャンブル狂いだが分の悪い賭け以外は滅法弱い。今回、競馬で大勝ちし、バイクの改造中にナハトに襲われる。被害者１号。

アクセル・アルマー：不良の巣窟である影鏡高校３年生。暴走族「シャドウミラー」の特攻隊長で、蒼髭流格闘術の免許皆伝。装甲を貫通する必殺技も持つが、真性のアホのため敗北。被害者２号。

アインスト・アルフィミィ：ジェネ高１年のツルペタ寸胴のロリ娘。その外見からゲシュペンストに惚れられる。アクセルと付き合っているが、レモンと二股されていることには気づいていない。

＜次・回・予・告＞

エクセレン「えー、本日はキョウスケが負傷を負ったため次回予告は休載よん♪　みんな、キョウスケにエールを送ってあげてねん☆
じゃーねーんノシ」

アリス「あれ？　本当にないんですか？　でも、まったく問題ありません！！」

エクセレン「ジョジョの奇妙な冒険もよろしく！！」

ザ・デオチ！！

今回の元ネタはジョジョと安部さんです。
ｓｉｂｕｇａｋｉさん、ケルンバイターさんいつも感想ありがとうございます！
前回の話と違って書いてたらこんなに長くなってしまいました。
デオチ↓中だるみ↓バトル物になってしまってますね。
ちなみに何故ジョジョかというと、最後の台詞「Ｔｉｍｅ　ｔｏ　Ｃｏｍｅ、そして時は動きだす」を書きたかっただけです！
次回はおそらくスパロボＬネタで書くと思います！
では、よろしければ次回も読んでみてくださいね！

南から来た女　～そのとき、家政婦は見た！～（前書き）

＜注・意・事・項＞
絶賛、キャラ崩壊中！
スパロボＬの女キャラが戦争ボケ化しています。
読むとキャラのイメージが崩れるかもしれません。
それでも良いという方はどうぞ！

＜注意＞銃の所持は２０歳になってから（嘘）

南から来た女　～そのとき、家政婦は見た！～

私の名前はアリス。

何故か高校の密集する地域「エリア」でも指折りの大富豪、クラール・グライフ博士のお屋敷で働かせてもらっている家政婦です。

クラール・グライフ博士はそれはそれは優秀な発明家でして、これまでに様々な発明品の特許を取得し、現在では特許による収入で悠々自適な隠居生活を満喫しているのです。

そして、私は一介の家政婦として広大なグライフ邸の家事全般と経理管理を任されているのです！

どうですか？　すごいでしょう？

こう見えても、私は結構有能でして掃除・洗濯・料理・介護などなど……いろいろな仕事を一任されている程なのです。

ですがグライフ邸はとても敷地が広くて、家政婦一人では仕事が追いつかず、特に安全管理面での仕事が疎かになりがちなのです。

――という訳で、グライフ邸には家政婦がもう一人働いています。

彼女は私にできないお屋敷の安全管理を一任されていて、お屋敷は「エリア」内では豪華な方ですので、頼んでも居ないのに泥棒さんが侵入してくるものです……

そのたびに。

「動くな。両手を挙げて、武器を捨てろ」

腰まで伸びる赤いサラサラのロングヘアーをなびかせて、今日も彼女は泥棒さんに警告します。高圧的な雰囲気を漂わせた美人さんです。

屈強なガードマンならいざ知らず、メイド服を着込んだ美女の恫喝で泥棒さんが気おされることはありません。懐からスタンガンを取り出しました。先端でバチバチと電流が火花を散らします。

早く、早く逃げてください！　このままでは手遅れになってしまいます！

「へへへ、姉ちゃん。丸腰でくるなんて、ヤッテくれと言っているようなもんだぜ？」

「そうか？　では　――」

早く逃げて下さい、泥棒さん！

彼女が足首まで隠れるロングスカートの裾を捲ります。その中に花園……は広がっていませんでした。

拳銃、マシンガン、ショットガン、手榴弾ｅｔｃｅｔｃ……私の知っている銃器という銃器がスカートの中には納められていました。

彼女はマシンガンを手に取ります。

「――　お前はここまでだ」

ばらららららっ。マシンガンが乱射され、ちゅど～んと地雷が爆発しました。

彼女が放ったマシンガンの弾から逃げ惑った泥棒さんが、彼女お手製のトラップゾーンに足を踏み入れてしまったのです。

哀れ、泥棒さんは黒焦げになり目を回しています……死んではいないようです。

「任務、完了ね」
「まったく、問題ありまくりです！」

真顔で呟いていた彼女の頭を、私は何処からか手に入れたハリセンで思いっきり引っ叩いてあげました。

「痛いじゃないの」
「黙ってください！　誰が掃除すると思ってるんですか？」
「はぁ、アリスだろう？　それより勤務時間中だ、早く仕事に戻れ」

彼女はマシンガンをスカートの下に納めながら返事をしました。
グライフ邸で働くもう一人の家政婦　――　ハルノはお屋敷の安全面を一任された、拠点防衛のエキスパートなのです！
今日も銃声と硝煙の匂いがお屋敷に立ちこめるのでした……。

スパロボ学院　～OGだよ、全員集合！～
南から来た女　～そのとき、家政婦は見た！～

ここで、私の同僚のハルノについて説明しておきましょう。

ハルノは広大なグライフ邸で安全管理を一任されている家政婦です……安全管理、侵入者排除の名目の元敷地内にトラップゾーンや監視カメラを設置したり、しばしば銃器を発砲して脅威を排除しています。
実に素晴らしい仕事ぶりですね？
おかげでグライフ邸への進入に成功した不届き者は独りも居ませ

ん！　素晴らしい。まったく素晴らしい成績です！
ただ　――

「よく来たな。全身全霊をもって排除する」

――と、お屋敷に招待されたお客様にまで銃器を向けたりするのを除けば……ですが……。せめて、歓迎してもらいたいものです……

……もう、ぶっちゃっけちゃいますね。グライフ邸には家政婦が2人しかいません。
何故でしょうね？　理由は理解しかねます。
そういう事情もあり、私がお屋敷の経理担当、ハルノが安全管理を任されているのが現状です。
ただ……ハルノは家事が壊滅的に下手で、手伝ってもらうとかえって手間が増えてしまいます。結局、私が経理と家事全般を担当するしかないという結論にたどり着くのは容易なのでした……

私は泥棒さんを手早く警察に引き渡すと、地雷原に散らばった土ぼこりなどをほうきで掃いてきれいにします。地雷の位置はハルノに聞いて暗記していますので、地雷原を歩いていてもまったく問題ありません。
今日も平和です。
平和ですったら、平和です。まん丸お日様が私を見下ろしていました。
うふふ、お日様ポカポカで気持ちいいしこういう日にお布団を乾すと、さぞかし気持ちよく眠ることができそうです。
決めました。片付けが終わったら、博士のお布団を乾して　――

――ズガガアアアアンッッ！！！

強烈な爆音と風がお屋敷の門の方角から流れてきて、私の思考はそこで中断されました。

一体、どうしたというのでしょうか？

……いえ、犯人は分かっています。ハルノに違いありません。

私が門たどり着くと、案の定、ハルノが木っ端微塵になったポストから距離を取ってたたずんでいました。

「あーあー、なんてことをするんですか！　ポストをこんなにして……手紙までボロボロに　――」

「よせ！　それ以上近づくな、危険だ！」

鬼気迫る表情でハルノが銃口を向けてきました。勢いで……私にそれを向けないで下さい！

「まだ危険物が残っている可能性がある」

「き、危険物？　ポストですよ。入っているのは郵便物に決まっているじゃないですか？」

「甘いぞ、アリス」

ハルノの鋭い眼光は真剣そのものでした。

「そう考えるのは素人の浅はかさだ。敵は、そう言った油断につけ込んでくるのだ。私が依然聞いた話では、とある国では帰宅したらポストを開ける習慣のある重鎮が狙われ、爆死したことがあるそうだ」

敵って誰ですか？　私たちはお屋敷に住んでいるのであまり外出もしませんし、ポストを爆破したのはハルノですよね？

ハルノは慎重に足で無残に爆散した郵便物を掻き分けていた。

「ところでどうやって爆破したんですか？」

「プラスチック爆弾だ。扱いやすいからな」

プラスチック爆弾って……大方、あのロングスカートの中にでも仕込んでいるのでしょう。歩く火薬庫のような女性ですね。

そう言えば、依然聞いたことがあります。

ハルノが博士のお屋敷で働き始める前、彼女は傭兵としてア〇ガンやア〇ガニスタンの戦場で活躍していたそうです。

また、生まれも育ちも一切不明。唯一分かっているのは、元傭兵という物騒極まりない経歴だけで、ハルノは自身の価値観に基づいて忠実に仕事こなしています。

プロ意識があるというのはとても好感が持てるのですが、ここは戦場ではなくて平和な「エリア」なんですよね……ハルノには少しは平和ボケしてもらいたいものです。

私がポストを爆破した理由を尋ねると、ハルノはこう答えました。

「屋敷に届く郵便物を回収するのは私の役回りだ」

「まぁ、ハルノは安全管理という名目でお屋敷を巡回していますものね」

博士はモノグサだから言うまでもなく、お孫さんの悠さんも学生さんですので、郵便物の回収は普段からハルノの仕事です。

「ですが、それがどうかしたのですか？」

「門の外ではなく屋敷側からポストが開閉した形跡が見られた。仕

掛け爆弾かもしれん。不用意に開けるわけにはいかないからな、だから――」
「爆破したと？」
「ああ」

あぁ、あまりの弁明に立ちくらみがしてきました。
そりゃあ博士や悠さんは普段からポストを触ったりしませんよ？
でも、それがどうして爆弾が仕掛けられているという思考に繋がるのでしょうか？　思考がぶっ飛んでいますね。

「博士を狙ったとは断定はできん。私を狙ったテロかもしれない。ポストを開けて郵便物を確認するのが私の日課だと調べをつけての犯行だ」
「……ハルノ、心当たりがあるのですか？」
「ああ、山ほどな」

怖いのでそれ以上は訊きませんでした。皮肉をこめた質問にも真顔で返すハルノは、良くも悪くも生真面目な性格をしていますね。
……はぁ、でも戦争ボケも大概にしてもらいたいです。

「ハルノの言い分はよく分かりました。でもここからは私の仕事です。燃えカスを掃除しますから退いて下さい」
「駄目だ、まだ安全が確認でき――ん？」

ハルノが燃え残った郵便物に視線を落とした。しゃがみ込み、掻き分けると紙切れが出てくる。『ハルノ』と書かれている。

「なんだ……これは？」
「ハルノ宛の手紙じゃないですか？　燃やしちゃって、まったくもう」

「だが、私に手紙を寄こす知り合いなどいないぞ」

ハルノが真顔で悲しいことを口走っていました。

「昔の知り合いは、その……みんな、遠いところに行ってしまったし、ここでは住み込みで働いているから外出はほとんどしないしな」

「いいんですよ、ハルノ……それ以上言わなくても……私も住み込みだから外に友人はほとんど居ませんからね……」

「ん？　どうした、顔が暗いぞアリス？」

放っておいてください！

仕方ないんです。このお屋敷に訪ねてくるお客様と友人になるわけにはいきませんし、かといってお仕事は多くて外へ出る機会もほとんどないし、昔の友人と連絡取ってもお暇がいただけないし……私も手紙をくれるような友達欲しいです。よくよく考えたら、お屋敷に遊びに来てくれる友人って一鷹さんぐらいですね……考えてて悲しくなってきました。

こういうときは仕事をして嫌なことを忘れれば、まったく問題ありません！

「さあハルノ、残った紙切れも拾いましょう。合わせればまだ解読可能かもしれません」

「ああ、犯人を特定して、生きているのが辛くなる程の拷問をしてやろう」

……敵は出会い頭に取りあえず撃て、みたいなことを言うハルノ。

もしかしてこれはツンなのでしょうか？　自分に手紙が来たことの歓喜を隠すための演技……でも、デレが想像できません。ハルノはきっとツンドラですね。間違いありません！

私たちは紙切れをかき集めて、休憩時間にハルノの部屋に集まる

ことにしました。

休憩時間　ハルノ自室。

私とハルノは軽い昼食を済ますと、集めた紙切れを観察することにしました。

その手紙は爆発でほとんど燃えてしまっていましたが『ハルノ』『いつも見てい～』『胸を締めつけ～』『つきあい～』『放課後、ジェネ高体育館裏で待っ～』という文面を読み取ることができました。

「やはり、私を付け狙う誰かの仕業だな。間違いない」

「え～、そうでしょうか？」

ハルノは断片からそう断じていました。

……うーん、でも私の感想を言いますとね、この手紙はラブレターなんじゃないでしょうか？　ハルノのことを遠巻きに見ているシャイな男の子が搾り出した一欠けらの勇気……あぁ、いいですねぇ。きっと文面は「ハルノさん。いつも見ています。貴女のことを考えると胸を締め付けるように苦しいのです。よかったらハルノさんとつきあたいです。放課後、ジェネ高校体育館裏で待っています」……といった風なのでしょう。

「この文面からは敵意しか感じないな。

『ハルノ、いつも見ているぞ。いつか、胸を締め付けるような苦痛を与えて殺してやる。だがそれは無理なようだ。剣でつきあい決着をつけよう。放課後、ジェネ高　――』……といった内容だろう」

「なんでやねん！」

私は思わずハリセンでハルノの頭を叩いてしまいました。ハルノは「痛いじゃない」と私を見ると、手紙のパーツを指差して言いました。

「見ろ。この書き殴った、汚らしい字を。私に対する憎しみの表れだと思わないか？」

「ただ字が汚いだけでしょう。きっと、男の子の字ですよ」

「甘い。これは筆跡鑑定を逃れるための偽装工作に違いないわ」

ハルノは断定した。

どうしてそうなるんですか？　少しは常識的に考えてくださいよ、ハルノ。

「私は至って真面目だが？」

ハルノから自分の結論に一部の迷いもない眼差しが返ってきました。

駄目ですね。この人にはしっかり言葉にして伝えないと理解してもらえそうにないです。

「ハルノ。これはラブレターというものですよ。間違いありません！」

「て、天敵（プレデター）？　それはいかん、早く対策を　――！」

「なんでそうなるんですか！？」

本日3回目のハリセンをハルノの頭にお見舞いしてやりました。

「バカになったらどうする？」とハルノは返答してきましたが問題ありません！　ハルノは既に戦争バカです！

バカには一から手取り足取り教えてあげないといけないようです

ね。

「いいですかハルノ？　ラブレターというのは好きな子に対して、私は貴方のことがこんなに好きですよ、と伝えるために文章をしたためて送る物なのです」

「はぁ？　何故、そんな事をするのだ？」

眉を歪めて表情を作るハルノ。私をバカにしている、のではなく純粋に不思議そうな顔です。

「ですから、好きな子の心を射止めるためにですね……」

「心臓を射止めるのならスナイパーライフルだろう？　安心しろ、アリス。知り合いに凄腕のスナイパーならいるぞ。ただ背後に立つと撃たれるがな」

「……もういいです」

駄目ですね。ハルノに色恋を期待するだけバカだったのです。私はもう匙を投げました。

しかし手紙を出した男の子のために、あと一肌だけ脱ぐことにします。

「ハルノ、ちゃんと放課後に行ってあげて下さいね」

「もちろんだ、私を誰だと思っている？」

もちろん、戦争ボケのうすらバカですよ？

でも口には出しません。お屋敷に家政婦は2人しかいませんから、可能な限り仲良くしなくては……しかし私の譲歩もそろそろ限界な気がします。ハルノには早く平和に慣れてもらいたいものです。

休憩が終わり、私たちはそれぞれの仕事に戻りました。

私は屋敷内の掃除をしていましたのでハルノの姿は見かけませんでしたが、宣言どおり約束の場所まで行くのでしょうか？
不安になってきました。
それに手紙の出し主が誰なのか気になります。
……悠さん、でしょうか？　ハルノの周りにはいる若い男子は悠さんぐらいしかいませんからね。でも悠さんなら、このような回りくどいことはせずに面と向かって告白しそうなものです。

「うーす、アリス、博士いる？」

お屋敷の玄関口を掃いていると、よく博士の家に遊びに来る中学生、南雲　一鷹さんが姿を現しました。

「あ、一鷹さん、いい所にきました」
「なになに？　なんか面白いことでもあるの？」

私はことの経緯を話しました。
そこは好奇心旺盛な中学生の一鷹さん、

「よっしゃあ、覗こうぜ！」
「駄目ですよ一鷹さん。ハルノにもプライバシーがあるんですから」
「アリス、笑いながら言っても説得力ないぜ？」
「そういう一鷹さんだって」
「へへへ」
「うふふ」

こうして私と一鷹さんは、ハルノの逢引の瞬間を確認することにしたのでした。
別に下世話な好奇心が倫理観やモラルに勝ったわけではありません。

ハルノはあのとおり戦争ボケですからね。トラブルを起こさないように見守る義務が私にはあるのです！　私はハルノの保護者みたいなモノなのです！

「さあ、いざジェネ高だぜ！！」
「駄目ですよ～一鷹さん～」

一鷹さんを止めるために、使命感の強い私は彼を追いかけるのでした。
中学生と家政婦が、高校という未知のテリトリーに足を踏み込むのでした。

●

ジェネ高体育館裏。

ジェネ高の体育館裏は校舎側からは見えないような構造になっていました。
私と一鷹さんは体育館裏の茂みの裏に身を隠し様子を窺います。
ですがまだ手紙の差出人はおりませんし、ハルノの姿も見えませんでした。もしかしたら、あの手紙は悪戯だったのではないかと私が思い始めた頃、

「あ、来ました！　来ましたよ、一鷹さん！」
「ちょっと静かにしろよアリス。バレちまうだろ？」

草葉の陰から様子を見守っていた私たちの前に現れたのは、茶髪のジェネ高男子生徒でした。左頬に絆創膏を貼っている以外にはこれといって特徴のない少年です。なんと言いましょう、彼女がいないオーラが全身から湧き上がっているような少年でした。

「なんだ、カズマの兄ちゃんじゃん」

「一鷹さん、知っているんですか？」

「アリス知らねえの？　有名だぞ。毎日、夕方ごろに自転車便で『エリア』内を爆走してる兄ちゃんだよ」

確かに……そう言われてみると、博士のお屋敷にも荷物を持ってきたことがあるような……ないような？

後で教えてもらった話なのですが、カズマさんという男の子は「ヴァルストークファミリー」という運び屋一家の長男坊さんらしいのです。彼女いない暦＝年齢、という話も以外に有名な話らしいです。

「そのカズマさんという方はハルノの知り合いなのですか？」

「そりゃあないと思うよ。多分、悠兄さんもジェネに通ってるからハルノの話を聞いたんじゃないかな？」

「では、カズマさんとハルノは面識がないと？」

「多分ね」

小声で密談を交わす私たちにカズマさんが気づくことはありませんでした。

時刻はとっくに放課後……携帯電話で時間をせわしなく確認しながら、カズマさんは何か呟いていました。

「初めてラブレター書いたけどうまくいくかなぁ？」

おぉ、純ですね！　純情ですね！　青春っていいですね、間違いありません！

「ま、書く相手はハルノさんじゃなくても良かったんだけどな」

え？　やはりカズマさんはボソボソと口を動かしています。

しかしアリスイヤーは地獄耳！　どんな言葉だろうと逃さずキャッチするので、まったく問題ありません！

「やっぱり彼女を作るにはこちらからアプローチしていかなくちゃな。でもジェネ高内でラブレター書いて、振られて噂になるのもマズイし、悠さんに紹介してもらったハルノさんはちょうどいい練習になるぜ」

……まぁ、なんてことを言っているのでしょうか、このカズマさんは……？

「おい、アリス。なんて言ってるんだ、教えてくれよ？」

「お子さまには聞かせられない話ですよ」

「ひ、酷ぇ……」

一鷹さんがしょげていましたが無視します。

私に独り言を聞かれているとは露知らず、カズマさんはそわそわしながら呟いています。

「でもＯＫされたらどうしような……？

年上で、ロングヘアーの美人でメイドさんという超ハイスペックな彼女をゲットしてしまうことになるのか？　女日照りで苦しんでいた俺にも春がやってくるのか？

よぉーし、やるぞカズマ・アーディガン。メイドさん萌えーだ。本

番のつもりでメイドさんをゲットしてやるぜ」

カズマさんは急にスキップを踏み始め、2～3分おきに携帯電話で時間を確認し始めました。……正直、気持ち悪いです。

これは私の私見ですが、このカズマさんに彼女さんができない理由の一つは、彼女が欲しいとがっつき過ぎな部分が大きいのではないでしょうか？　付き合い始めた途端に色々と束縛されそうで私は嫌です。

「なぁなぁアリス、なんて言ってたんだよ？」

「要約するとですね、ハルノをゲットしてやるぜコン畜生、と気合を入れていましたね」

「おお、なるほど！　頑張れよ、カズマの兄ちゃん！」

前振りを省略して教えてあげると、一鷹さんは拳を握り締めて熱い視線を向けていました。

正直、ハルノを練習台にしようという考えは感心しませんが、カズマさんも恋人作りに必死なんでしょうね。

こういうのもきっと青春の一ページになるのです。後々振り返り「あぁ、俺はなんて若かったんだ……」と赤面してしまうでしょう。若気の至りですが、そこは、まったく問題ありません！

それより問題なのは、ハルノがここに現れるか、なのです。

案の定、ハルノは現れませんでした　――

――　3時間経過……

時刻は夜８時。月が顔を出し、学校に人気はなくなり、体育館裏は小さな街頭からの光で薄暗く照らされていて物悲しさが滲み出ていました。
それはカズマさんも同じ。憔悴しきった表情で呆然と立ち尽くしています。

「なぁなぁアリス、もう帰ろうぜ。ハルノもう来ないって」
「もう少し、もう少しだけです。いくらハルノでも、そこまで酷い子じゃないはずです」

淡い期待を胸に私は待つことにしました。一鷹さんは辟易とした表情を浮かべながらも付き合ってくれました。一鷹さんはいい子なのです。ハルノもそこまで酷い子じゃないと信じたいのです。だから私は待つことにしました。
すると、体育館裏に１つの人影が近づいてきました。
シルエットは女性ではありません。

「カズマ」
「ゆ、悠さん」

カズマさんに声をかけたのは、グライフ博士のお孫さん悠さんでした。

「まだこんな所にいたのか……家族が心配するぞ？」
「あ、あの悠さん、ハルノさんはまだお屋敷に居たりしなかったか？」
「いや、見てはいないが……そうか、ハルノの奴来ていないのか」

悠さんは全てを悟ったようにため息をつくと、

「済まないことをしたなカズマ。ハルノの奴には後で言い聞かせておくよ」

気にするな、とばかりにカズマさんの肩に手を置きました。

「ゆ、悠さん、ありが――」

カズマさんが礼を述べて悠さんの手を取ろうとしました。刹那

――

――ズダァァァンッ！！

――轟音が響きました。私たちの耳元……そう、私たちが隠れていた茂みから銃声が聞こえたのです。

茂みからショットガンの銃口がせり出し、上空に向かって発射されたのです。

「な、なんだ？」

カズマさんも鳩が豆鉄砲を食らったような表情で茂みを見ていました。私にもなにが起こったのか分かりません、とそのとき。

茂みが動きました。

猛スピードでカズマさんにタックルをかまし、腕を捻り上げ足を払って彼を地面の上に転倒させます。弾倉に弾を送る動作と音を響

かせて、動く茂みはショットガンの銃口をカズマさんの後頭部に向けていました。

「気を抜くな、接近戦は、ＣＱＣ　――　お前はここまでだ」

茂みはハルノでした。

かくれんぼの神さまみたいな事を言いながら、カズマさんを拘束しています。

彼女は布着れに茂みの木の葉を貼り付け、塗装し、キレイな顔にも黒と緑のペイントを塗りたくってカモフラージュしています。ご丁寧にショットガンまでペイントしていました。はっきり言います。傍に居てもまったく気づきませんでした……

カモフラージュ用の布着れを剥ぎ捨てると、ハルノは銃口をカズマさんの後頭部にグイグイと押し付けます。

「貴様、何処に雇われた殺し屋だ？　何故、悠様を狙う？　答えなければ、貴様の頭を砕けたザクロのように破裂させてやるぞ」

「ヒィィィ！？」

カズマさんは目を白黒させて絶叫していました。

「ふむ。口を割らんのを見ると、相当訓練された殺し屋のようだな。では自白したくなるまで指を一本一本切り落としていくことにしよう」

「いい加減にしろ」

ロングスカートの中からサバイバルナイフを取り出すハルノを、悠さんが何処からか取り出したハリセンで叩きました。

スパァァン、と夜の学校に快音を響き渡ります。

「悠様、痛いじゃないですか」
「うるさい。お前は人の友人になにをするんだ？」
「友人？　ハハ、バカな。こいつは殺し屋です。現に先ほども悠様の手を取り、悠様を拘束しようしていました。オイ、そうだな？」
ハルノがサバイバルナイフを投げると、それはカズマさんの指と指の間に深々と刺さりました。
「はい！　そうです、なんだっていいです！　だからお家に帰してー！」
「ほら？」
「誘導尋問をするな！」
再び悠さんのハリセンの音が木霊しました。
「ぽんぽん叩かないでください。バカになる」
「気にするな。気づかないお前は幸せ者だ」
「お褒め頂き光栄の極み」
「褒めてない！　あと、カズマから早く銃を退けろ！」
「しかし……」
ハルノの顔には不満が満ちています。
「上官命令だ！」
「サー、イエッサー！」
悠さんの一声でハルノは銃口を外すと、カズマさんの尻を蹴り飛ばしました。
「おい、地面に這い蹲るのがお似合いの〇〇野郎。悠様の命だから

今回は見逃してやる。だが今度こんなことをしてみろ。お前の○という○に煮えた油を流し込んで、×××が使い物にならなくなるまで△△△してやるぞ。分かったか！」

「ひ、ひぃ……！」

アリスイヤーは地獄耳。

ハルノの過激な発言もしっかり聞こえていましたが、危険なので全て伏字にさせてもらいます。一鷹さんの耳は私が塞いでいるのでまったく問題ありません。

しかしカズマさんの精神的ショックは計り知れず、ヨロヨロとハルノから後ろずさっていました。

だぁん。ハルノが上空にショットガンを発射しました。

「分かったら走れ！　トロトロするな新兵が！　○の◎に散弾ぶち込まれたいのなら歩けばいい！」

「そんなことされたお婿にいけない？！」

カズマさんは慌てて走り去って行きました……あぁ、無情。

ハルノはショットガンをロングスカートの中に納めると、ペイントされまくりの美顔でメイドさんスマイルを悠さんに向けます。

「危ないところでしたね？」

「お前が危ないわ！」

悠さんのハリセンが一閃します。もしかしたら、居合いの域に達しているかもしれないハリセン攻撃に、ハルノは頭を抑えて訴えていました。

「痛いじゃないですか？」

「黙れ。人の友人にトラウマ植え付けよってからに、お前は……」

「致し方ない処置でした。奴が悠様に手を上げずに去れば、私も奴を見逃してやるつもりでしたが……」
「見逃してやるって……お前、ずっと隠れてたのか？　茂みになって？」
「はい」

ハルノは即答すると、私たちが隠れている茂みを睨み付けてきました。ヤ、ヤバイです。

「不届きな闖入者がやってくる３０分程前から茂みに潜んでおりました」
「闖入者？　誰だか知らんが、お前は数時間も潜伏して、銃口をずっとカズマに向けていたと言うのか？」
「私にかかれば造作も無いことです」

ハ、ハルノ、恐ろしい子……！

私たちが体育館裏に来た時からずっと息を殺して、カズマさんを狙っていたなんて……それに、同じ茂みに隠れている私たちに気づかせないなんて……ステルス機能でもついているのでしょうか？

「はぁぁ」

悠さんが深いため息をつきました。

「もういい、帰るぞ」
「はい、護衛はお任せください」

ハルノはスカートの中から暗視ゴーグルとサプレッサー付きの拳銃を取り出していましたが、悠さんにハリセンでしばかれて、シブシブ元に戻していました。

2人が去った体育館裏には誰もいなくなります。私と一鷹さんを除いては。

「凄いもの見ちゃいましたね」

「ハルノ怖ぇー、ハルノ怖ぇー。俺、もうハルノに口ごたえするの止めよう……」

私たちも茂みから抜け出すと帰路に着きました。

一鷹さんをお家に送り届けお屋敷に戻ると、門番のように入り口にハルノが立っていました。

顔のペイントを落として、整った顔立ちと切れ長の瞳で私を睨んでいます。

「おい」

「な、なんですか？」

もしかして、覗き見していたことを怒っているのでしょうか？

ハルノの言っていた闖入者とは私と一鷹さんのことですものね。さすがに発砲とかしませんよね……？

「夕食を早く作れ。博士と悠様を飢え死にさせるつもりか？」

「……はい、分かりました。すぐに準備しますね！」

よかった、食事のことでしたか。

覗き見に必死になりすぎてすっかり忘れていました。短時間で作れる料理……残り物を活用したチャーハンにでもしましょうか。栄養価もあり、時間と食材を節約できるので問題も解決。これで問題ありません。

ハルノの用件はそれだけだったのか屋敷の中に戻ろうとしました。

が……

「期待しているぞ」
「へっ……？」

ハルノがボソリと呟いたのを私は聞き逃しませんでした。
アリスイヤーは地獄耳。
まさかハルノがそんなことを口走るなんて……私の料理を少しは認めてくれているのでしょうか？　うふふ、それなら嬉しいですね。
まさに、まったく問題ありません！

「さあ、今日も腕を振るいましょうか！」

お腹を空かせた博士たちのために私は厨房へと急ぐのでした。
あぁ、なんて言えばいいのでしょう？

あぁ、実に、平和ですねぇ　――……

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。
『エリア』には個性豊かな人間が沢山いる。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない

おまけ

ここは「ヴァルストークファミリー」の実家。
遅めの夕食を済ませたカズマは、食卓の対面に座っている双子の妹・アリアを見つめていた。

「なぁ、アリア」
「なによ、バカカズマ？」

アリアは一瞥もせずにテレビを見ながら、食後のコーヒーを飲んでいる。
カズマはアリアの顔をマジマジと見ながら言った。

「やっぱり、女の髪はショートに限るよな！」
「ブゥ――――ッ！！」

力強いカズマの宣言に、アリアは思わずコーヒーを噴き出していた。せきごみながら顔を紅潮させて、荒々しく食卓を叩く。

「なによ、アンタ！　あ、あたしをそんな目で見てた訳！？」
「へ？　なにが？」

カズマは訳が分からずただコーヒーを啜るだけ。
居間でテレビを見ていた妹のミヒロと姉のアカネも、カズマの言葉に反応していた。

「お兄ちゃん！　私も髪の毛短いよ、ねえねえ、可愛い？　可愛い？」
「はいはい、可愛い可愛い」

ミヒロの言葉を軽く流すカズマ。

「私なんてショートでスレンダーだよ。うふ～ん、どうカズマ？メロメロっしょ？」
「はいはい、メロメロメロメロ」
「ダッシャア！」
「１６文キック？！」

適当な受け答えをしていたらカズマはアカネに前蹴りをお見舞いされた。食卓から蹴り落とされる。

「痛えじゃねえか！？」

カズマが起き上がると、視界に入ってきたのは長女のシホミ・アーディガンだった。ちなみに彼女の髪の毛はロングヘアー。
普段からシホミが天女のような笑顔を絶やすことはない。

「あらあら、カズマちゃんは髪の長い女の人が嫌いなのかしら？」
「え……？　そういう訳じゃあ……」

身の危険を感じたカズマは必死に取り繕おうとする。
しかし――

「お姉ちゃんは悲しいわぁ！！」
「ぎゃあああああああぁぁっ！！」

――時既に遅く、シホミの両目が見開かれたとか、開かれなかったとか……真相は定かではない。

合掌。

南から来た女　～そのとき、家政婦は見た！～（後書き）

＜キャラ紹介＞

アリス：クラール・グライフ博士の家で働く家政婦。年齢不詳。屋敷の家事全般と経理担当をしている。暇があまり貰えず、住み込みで働いているので友人が出来ないことが悩み。

ハルノ：クラール・グライフ博士の家で働く家政婦2。アリスと違い家事はできず、屋敷の安全管理を一任されている。その経歴はなんと元傭兵で、どういう育てられ方をされたか不明だが、平和な「エリア」の常識を無視した行動をすることが多い。スカートの下に武器を隠し持っている。

南雲　一鷹：博士の家によく遊びに来る中学3年生。好奇心旺盛で色々なことに首を突っ込みたがる。アリスの数少ない友人の一人。

悠凪　グライフ：ジェネ高3年生で、博士の孫。カズマとは何故か知り合い。女を紹介してくれと懇願され、とりあえずハルノを紹介する。

○屋敷側からラブレターを入れた犯人は実は彼。

カズマ・アーディガン：ジェネ高2年の「ヴァルストークファミリー」の長男坊。彼女いない暦＝年齢で、恋人を作るために行動を開始する。手始め（練習）にハルノを紹介してもらい、ラブレターを送ってみるが……。今回の一件で少しロングヘアー不信に陥る。

＜次・回・予・告＞

キョウスケ「キョウスケ・ナンブ復活。みんな、心配をかけたな」

エクセレン「大丈夫よ、きっと、誰も心配なんてしていないから」

キョウスケ「そ、そうか」

エクセレン「それよりお赤飯炊いたの。キョウスケもどう？」

キョウスケ「ああ、頂こう。ところで赤飯を炊くとは、なにか良いことでもあったのか？」

エクセレン「キョウスケの開通祝いよん♪」

キョウスケ「……ご馳走様でした」

エクセレン「お粗末様でした。じゃあ次回予告いってみよー！」

キョウスケ

「俺の名前はキョウスケ・ナンブ！　覚えてくれたかな？

次回は第2次スパロボZの発売決定を記念して、ランド・トラビスを登場させる予定だ！

名づけて「ザ・ヒート　熱すぎる漢たち」！

内容は一切考えていない！　落ちぶれて　――　ではなく、こんな作者でスマン！

では次回もスパロボ学院に、打ち砕けリボルビング・バンカー！！」

エクセレン

「フルメタル・パニックもよろしく！」

はい、今回は「フルメタルパニック」ネタでお送りしました。
ギャグはいい。
スラスラ書けますね。
フルメタの短編はかなり面白いので、興味の向いた方は是非読んでみてください。

ｓｉｂｕｇａｋｉさん、ケルンバイターさんいつも感想ありがとうございます！
感想を励みにこれからも頑張っていきたいと思います！

次回はランドを出すどー！
暑苦しくなるのはお約束な話にしたいです。

俺たちゃヴァルストークファミリー４　～燃える闘魂　ザ・ヒート登場！～（前

＜注・意・事・項＞

絶賛、キャラ崩壊中！
第２次スパロボＺ販売決定記念！　スパロボＺのキャラがキャラ崩壊しております！
暑苦しい思いをするかもしれませんが、それでも良いという方はどうぞ！

俺たちゃヴァルストークファミリー４　～燃える闘魂　ザ・ヒート登場！～

【ヴァルストークファミリー営業日誌　１月１３日】

俺の名前はカズマ・アーディガン。

何故か高校の密集する地域「エリア」で運び屋家業を営む「ヴァルストークファミリー」の長男坊さ。

いりなりだが、俺の朝は優雅なモーニングコーヒーから始まる。

愛妹ミヒロの焼いてくれたサニーサイドアップ（目玉焼き）をナイフで切り分け口に運び、トースト、サラダと食卓に並ぶ料理を頂くのだ。

優雅な朝食を終えたのちに、口に広がるコーヒーの苦味は実に気持の良い朝のスパイスだ。カフェインで目が覚め、俺の灰色の脳細胞が冴え渡る。

そして俺の周りには美人、美少女と呼ぶに相応しい容貌の姉妹たちがいてくれる。

ふふ、実にいい……実にナイスな展開じゃないか。

親父が　――

「虎だアァァ！」

タイガー？

「お前はァ、虎になるのだアァ！！」

――　と、朝のひと時をぶち壊さなければ、だが。

昨日、親父は知り合った友人の家に外泊していたため、本日は朝帰りである。
先ほどの台詞は帰ってきて開口一番の言葉なのだ。

「カズマ！　男の中の男になりたいとは思わんかね！」

親父　――　ブレスフィールド・アーディガンが暑苦しく俺を指差してきた。
男の中の男、ね。
確かに俺は目指してるよ。
俺は家族を守れるような強い、男の中の男を目指しているんだ。
それは誰に誓ったものでもなく、俺が心の中に刻んだ理想像というものだ。
しかし今日の親父はどこかおかしい……親父の顔は暑苦しい方だが、こんなに熱血するタイプではない。
いや熱い男なのだが表面上にそれを表さないだけで……しかし、まぁ、どちらかと言えば、したたかに策を練るタイプの男だと思う。

「どうしたんだよ親父？　朝からやけに熱血しているな」
「そんなことはどうでもいい！　答えろカズマ！　男の中の男になりたいのか、否か！？」

まただ。叫びながら体仰け反らせて、大げさに俺の方を指差してくる。「お父さん、うるさい！」と娘たちにどやされているはご愛嬌だ。
仕方ないので俺は答えてやる。

「そりゃあなりたいけど……？」
「そうか！　ならばここへ行くがいい！」

親父が地図と住所を書いた紙切れを俺に押し付けてきた。

「私の新しい友人の家だ！　そこへ赴き、男の中の男とは何たるかを学んでくるのだ、カズマよぉ！！」

「暑苦しいな、後で行くよ」

「今すぐだ！」

俺は、親父に食卓から引き起されると背中を押して玄関先に追いやられた。お、おい、まだコーヒー飲みかけなんだぞ。

「だまらっしゃい！　漢の流儀を学んでくるまで帰ってくるな！！最近のヘタれっぷりをきっちり修理してもらって来なさい！！」

「ちょ、ちょっと待てよ親父。こんなの唐突すぎるぜ」

「ふん、人生などそんなもんだ！！」

意味深な台詞を吐かれ、俺は玄関から外へと蹴り出された。

辛うじて靴は履けたものの他に手荷物は一切なしだ。

「漢を学べ、カズマ！！」

親父が親指を立てて、ウィンクしニカッと笑う。無精髭も相まってファーザースマイルの暑苦しさは倍増だ。俺はこの笑顔は嫌いではないが、今だけはひじょーにムカつく！

親父はそのまま顔を引っ込め、玄関口を閉じてしまった。

カチリッ、と鍵のかかる音が……親父め、どうやら本気らしいな？

いいだろう、なってやろうじゃねえか！　男の中の男って奴にな！

俺は渡された紙に目を通す。

「なになに？

何処でも出張　何でも修理！　壊れたテレビだろうが曲がった性根

だろうが、なんでも修理いたします。修理の依頼は『スマイル一番！　ビーターサービス！』までだって？　なんだこりゃ？」

運び屋が修理屋でなにを学べってんだ？　……まったくナイスじゃない展開になってしまった。

しかしつっ立っていても仕方ないので、俺は着の身着のまま地図の示す場所へと足を運ぶのだった。

スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～

俺たちゃヴァルストークファミリー４　～燃える闘魂　ザ・ヒート登場！～

地図に従って行くと、辿り着いたのは、ジェネ高の裏山にある汚らしい掘っ立て小屋であった。

ＯＧ高等学院は「エリア」一のマンモス高校で非常に広い敷地を有している。

その裏山も居に及ばす「エリア」で一番大きな山だった。

俺も小さい頃はダチと一緒に山の中に秘密基地でも作ろうとしたもんだ。振り返ればそこにある。「エリア」の住民にとって裏山は日常の風景なのさ。

俺はその裏山の奥深くにある掘っ立て小屋に来ている。

周りには木々が溢れ、鳥たちのさえずりが聞こえてくる。掘っ立て小屋はその中で悠然と佇んでおり、黄色い軽トラも駐車されているので人がいるのは間違いないだろう。

電気が通っているのかは疑わしい掘っ立て小屋に近づくと、乱暴に地面に突き刺された木製の看板に「ビーターサービス」と書かれていた。

「……ここか」

俺は息を飲んだ。

「親父め……こんな所で何を学べってんだよ？　電気通ってんのか？　つーか、注文来なくて潰れてんじゃないのか？　それよりこんな山奥だと野生動物が出てきそうで怖いんだけどよぉ……」

俺が呟いていると、掘っ立て小屋に隣接する林の中から叫び声が聞こえてきた。

「な、なんだ？」

多分、野生動物の鳴き声だろう。

その鳴き声はすぐに止まった。そして今度はなにかと草が摺れる音が聞こえ、林の木々を縫ってその音源が俺の方に近づいてきてくる。

「も、もしかして、本当に動物さんですか……？　い、イノシシやクマじゃあないだろうな？」

今は1月だ。冬だから、クマは冬眠していると思うんだけど……でも、最近ニュースで山に餌がなくって住宅街にクマが下りてくるって話を見た事があるぞ。

ま、まさか、本当に腹を空かせたクマ……？

恐怖が俺の脳裏をかすめ……。

その直後だった。林の木の後ろから大きな影が姿を現したのは。

「ク、クマだぁー！　し、死んだふりしなくちゃ！！」

俺は慌ててぶっ倒れた。

地面に横たわり、クマが俺に興味を失うのを待つ！　クマに遭遇したときに死んだふりするのは常識なのだ。

気配で、大きな影が目の前で足を止めるのが分かった。くっ、は、はやくどっか行け！　普段から肉はアリアに横取りされてるからな、俺なんか食っても旨くもなんともないぞ！

だがクマは俺の頬を触ってきた。まるで人の指先で頬を突かれているような感触だ。

「おーい、兄さん。なにやってんだ？」

「……」

返事がない、ただの屍のようだ。

俺は死体だから返事できねえんだよ！　だから早くあっちいけよ、クマ！

……って、あれ？　クマってしゃべったっけ？

「あー、ちなみにな、クマは死体も平気で襲うから死んだふりしても無駄だぞ」

「な、なんだってー！？」

俺は『クマ』からのアドバイスで慌てて飛び上がった。

こうしてはいられない。急いで逃げなくては。俺が全力疾走の準備をしていると『クマ』が言った。

「あと、クマの走力は時速３０ｋｍだから走って逃げても無駄だぞ」

「くっ、じゃあ木の上だ！」
「クマは木登りが大得意だぜ」

なんてこった！　万事休す、絶体絶命とはこのことか？
チッ、こうなりゃ破れかぶれだ。どっかのボクシング漫画のチャンピオンみたいにパンチで『クマ』をＫＯしてやるぜ！
振り返りざまに一発いれてやる。狙うは鼻っ面だ。自転車便で鍛え上げた俺の鉄拳が『クマ』の体（多分ボディ）に突き刺さった！

――　グキィ！

拳に奔ったのは『クマ』をヤッつけた手ごたえではなく鉄板を殴ったような硬い衝撃と勢いよく手首を捻ってしまったことによる激痛だった。

「痛えぇぇぇぇっ！！」
「おいおい兄さん、なにやってんだ？」

そこに居たのはクマではなかった。
立っていたのはクマ並みに筋骨隆々の大男で、俺のパンチはどうやら男の腹に命中したらしい。しかし男はまるで意に介していないかのように笑顔を浮かべいた。

「兄さん、もしかしてお客さんかい？　いらっしゃい！　ようこそ、いつもニコニコ、信頼と実績のビーターサービスへ！！」

笑顔だった……とても笑顔だった。
男は口を大きく歪め白く手入れの行き届いた歯をのぞかせて、体の大きさに比例して大きな顔をグイっと俺の方に近づけ、片目を閉じながら、右手の親指を立てて豪快すぎる笑顔を俺に向けてくる。

――あ、暑苦しいぜ！！

くぅ、気の弱い人間が見たら失神しそうなぐらいに暑苦しい。
この笑顔に比べれば、親父のファーザースマイルなんてコタツのようなものだ。ホット程度のレベルなのだ。
だがこの男は違う。まるで波動が迸り、燃え尽きるほどにヒートな太陽の光のようだぜ！　ヒートスマイル！　そう呼ぶに相応しい暑苦しさだ。

「なぁ……もう顔を離してくんねえか？」
「おっと、悪い悪い」

男の顔がやっと遠ざかった。
同時に男の全貌が見えてきた。ボディビルダーとは違う魅せるではない使うための筋肉の鎧の上にはタンクトップ1枚、ズボンは作業着のようなラフな服装をしている。色も日に焼けて褐色で、なんとも力強い大人の男と言った印象だ。
親父と違うワイルドさが体全体から滲み出ていた。
だが、一番印象的なのは片手に持っているモノである……。

「な、なぁ、それなに？」
「なんだぁ、最近の若い奴はイノシシも知らねえのか？」
「知っとるわ！　そうじゃなくて、なんでイノシシが死んでるのかって訊いてんだよ！」

男の片手には、頭から血を流して死んでいるイノシシが無造作に掴まれていた。眉間のあたりがパックリ割れて血まみれになってお

り、体もかなり大きく、成長しきったイノシシのように見える。
男の手に武器は見当たらない。まさか……素手で狩ったのか？
男はそのイノシシを軽々と持ち上げると、ヒートスマイルを俺に向けてくる。暑苦しい……。

「さっき見つけたから狩ったんだよ。猪鍋や燻製にしたら美味しいぞ。そうだお客さん、折角だから食っていきな！」
「い、いやちょっと……」
「そんなに遠慮すんなって！！」

男は笑い声を上げながら俺の肩を叩いてきた。かなり痛い。

「そうそう、自己紹介が遅れたな！　俺はビーター・サービスのランド・トラビス！　師匠が留守の間、修理屋ビーター・サービスを任されてんだ！　よろしくなァ！！」

三度目の正直のヒートスマイルが俺に炸裂した。暑苦しい……実に暑苦しい出会いだった……そう、これが俺とランド・トラビスとの出会いとなったのだった。

●

ジェネ高の裏山に存在する修理屋「ビーターサービス」の本社（？）と思しき、掘っ立て小屋の中に俺は案内された。
内装は豪華とは言えない。外見どおりに質素な造りの仕事場に、ロフト形式の生活空間が2階部分があり、無理やり後付された印象を俺に与える。

ボロいなぁ……電気は通っているみたいだけど、よくこんな所で生活できると思うぜ。

貧困に喘ぐ「ヴァルストークファミリー」でさえ暖かく快適な居住空間を持っている。だが小屋には暖房器具など存在せず、かなり肌寒かった。俺は、軽くカルチャーショックを受けてたさ……こんな生活している人たちもいるんだ、ってな。

……でもさ、一番ショックだったのはさ……

「ダーリン、お帰りなさい！」

「おうメール。今日は猪鍋だぞ」

「本当？　やったぁ！」

と、ランドさんの腰にしがみ付いて、喜んでいる幼女の姿を目にした時だったと断言できるね。

しかもこの幼女は「ダーリン」と言ったよな？

「ダーリン、ご飯にする？　お風呂にする？　そ・れ・と・も　――」

ま、まさか……その後に続くのは、俺が人生で一度は言われてみたい台詞で上位5位に食い込んでいる、あの台詞じゃあるまいな！？

幼女が甘えるような声で言った。

「――　わ・た・し？」

言った！　言いおったぞ、この幼女！

羨ましい　――　間違った、幼女に抱きつかれたランドさんが急に恨めしく思えてくる。

「このロリコンめえぇっ！！　幼な妻どころじゃないでしょ！　犯

罪っすよ、コレ！？」
「おいおい兄さん、何か勘違いしちゃいないか？」
ランドはイノシシを降ろすと幼女の頭に手を置いていた。
「こいつはメール。俺の師匠の娘で、師匠が留守の間は世話してやってんだ」
「でもダーリンの夜のお世話は私がしてるのよ！」
「見てのとおりマセたガキだけど仲良くしてやってくれよ、なっ、兄さん」
「あーん、ダーリンのいけずー」
ランドさんはヒートスマイルを向けて、腰に絡みつくメールを意に介さずイノシシを解体にかかった。メールはズルズル引きずられてもランドさんにくっ付いて離れない。イノシシの解体中も背中におぶさっていた。
あっ、という間に解体されたイノシシを使った猪鍋が瞬く間に出来上がり、おそらく作業用と思われる机で鍋を囲むことになった。猪鍋に臭みはまったくない。ちなみにどんな魔法を使ったのかは不明だ。
「なんだ、兄さんはブレスの旦那の息子さんだったのか」
「ランドさん、その兄さんってやめてくれません。カズマって呼び捨てで良いですよ」
「そうかい？　じゃあ、カズマ」
ランドさんはメールに鍋をよそってあげながら訊いてきた。
「カズマはビーターサービスに何をしに来たんだ？　修理依頼か？」

そうそう、忘れかけていたけどランドさんは修理屋なのだった。
イノシシを素手で狩ってしまう肢体は筋肉の鎧と呼ぶに相応しく、修理屋よりも壊し屋と言った方が雰囲気的にはしっくりくる。

「あァ？　おいカズマ、なんか変なこと考えなかったか？」
「い、いや、してねえよ」
「そうかい、ならいいけどよ。俺ってさ、『壊す』って単語が大っ嫌いなんだ。いやな、俺ってさ、ほら、見るからに修理屋じゃん？」

え？　どこが？

腹筋が鋭角に割れてるのがタンクトップの上からでもしっかり分かる。太すぎる指は繊細な作業には向いていないように思える。とってもとってもパワフルかつヤバーンな感じがプンプンするぜ。
やっぱり「壊し屋」だよなぁ……でも賢い俺は思ったことを口に出したりしないのさ。実家で思いの丈を述べすぎてチイ姉たちから酷い目に合わされているからな。
ランドさんが「修理屋」でなく「壊し屋」に見えるのは俺の心の中にしまっておくことにする。これで問題なしだ。

「そうだな」

何故かランドさんが俺を睨んでいた。眉が釣り上がり、青筋が顔中に走っていてめっちゃ怖い。ど、どうしたのだろう？

「惜しかったな、カズマ。
お前が、考えている事を無意識の内に喋っていなければ、本当に問題なしだったのになァ！？」
「な、なんだってー！？」

バ、バカな！　そんな漫画みたいなこと　――

「誰が『ザ・クラッシャー』だ、コラ！！」
「お、俺はそんな事思ってねえよ！　『壊し屋』って思っただけだよ！」
「誰が『壊し屋』じゃい、クラァ！！」
ランドさんが立ち上がり、座っていた椅子を蹴った。
それだけで椅子の足は割り箸のようにへし折れ再起不能に……やっぱり「壊し屋」だった。
「小僧、口の中に手ぇ突っ込んで奥歯ぶち抜いてやろうか！」
「ヒィ、奥歯いや！　抜くのは親知らずだけにして？！」
「ダーリン、いい加減にしなさいよ」
幼女　――　メールがランドさんを嗜めていた。
「カズマくん、怖がってるじゃない」
「……ああ、悪い、ついカッとなっちまった。悪かったな、カズマ」
「い、いや、俺も悪かったよ。もう思わないからさ」
「なにを？」
「な、なんでもないっす！」
ランドさんが凄みを利かせたヒートスマイルを向けてきた。眉間にしわが寄っただけで雰囲気が一変するなぁ、笑顔って。暑苦しいぜ（炎天下で首を絞められてる感じ？）。
「話は戻るんだが、カズマはなにをしに来たんだ？」
「ああ……それなんだけどよ」
俺は、親父に「ビーターサービス」で漢を学んで来いと言われた。

くどいようだが男の中の男になるのが俺の目標だ。家族を守れるような男になることが俺の夢なのさ。
漢を学ぶことはそれに一歩近づくことになるとは思う。
ただ「修理屋」でそれを学べるかは甚だ疑問ではあるが……。
俺はランドさんに事情を説明した。

「へぇー、ブレスの旦那がそんなことをねえ。俺のことを買って、息子を俺に預けてくれるなんてな。いやぁ、照れるぜ！！」

ヒートスマイルを向けて照れるランドさん、暑苦しい。

「私のダーリンは最高です！」

メールはメールで意味不明な言葉を吐きながら、猪鍋を食べていた。モフモフ食べて、時々食べこぼしてランドさんに拭取ってもらっている。幼いなぁ……。
うーん、ここで本当に大丈夫だろうか？
親父へ。俺は「ビーターサービス」で漢を知ることができるのか、はっきり言って不安です。
こうして、俺の「ビーターサービス」での生活が始まったのだった――……

【ビーターサービス営業日誌　1月14日】

今日からの営業日誌は「ビーターサービス」の仕事っぷりを記していこう思う。

「ビーターサービス」下働き1日目の今日、俺に任された仕事はまき割りだった。

「いいかカズマ、まきの中心をしっかり狙って斧を振り下ろすんだ。足を前に出しすぎるなよ。間違って切り落としても俺は修理できんからな」

「それは分かったけどよ……なぁ、ランドさん。ランドさんは修理屋だよな？」

「おうよ！」

ランドさんは元気いっぱいに答え、本日1回目のヒートスマイル。

……俺は朝からお腹いっぱいだ。

「壊れたテレビから曲がった性根まで、なんでも修理、いつもニコニコの『ビーターサービス』とは俺たちのことさ！」

「じゃあ何故まき割り？」

「カズマ、深く考えるな。考えるんじゃない、感じろ」

なんでやねん。

「まき割りは後背筋によく効くぞ。これで鍛えれば、君もパーフェクトボディ！」

「いや、別に俺はマッチョになりに来たわけじゃないし。漢を学びに来たんだし！」

するとランドさんは余程自信があるのか、ボディビルダーのようにポージングし肉体美を強調してきた。

「なにを言う。漢と筋肉とは切っても切り離せない関係だ。そうだな。喩えるなら、政治家と金の問題ぐらいに切り離すのは困難もの

なのだ」
「なんだよ、その喩え！　嫌だよ、そんな漢になりたくないよ！」
「ＨＡＨＡＨＡＨＡッ」
「笑って誤魔化すな！　しかもアメリカン？」

むしゃくしゃするので斧をまきに振り下ろしてみた。簡単に割れると思っていたが、斧がズレてまきの途中で刃が止まってしまう。まきにを引っ掛けて斧を抜こうとするも、以外に固くて思うようにいかなかった。

「貸してみ」

ランドさんが斧を俺から借りる。
すると斧は簡単にまきから取れ、ランドさんは片手で斧を軽々と振ってまきを真っ二つにしてしまった。断面がキレイだ。

「ざっとこんなもんだ」
「むー」
「ははは、むくれるな。自分で汗水垂らして作ったまきで風呂を沸かしてみ、きっと気持ちいいぞ！」

ランドさんが指差したのはレンガの上に設置されたドラム缶だった。ドラム缶の下には隙間があり、まきを燃やせばドラム缶の中でお湯を沸かせそうではある……。

「まさか、あれで風呂に入れと？」
「おうよ！」

ランドさんが歯切れのよく答える……マジっすか？

「カズマ、俺とメールは少し街に行ってくるからな。悪いけど、その間お前はまき割りしててくれ。教えられることもないしな」
「分かったっすけど、街になにかあるんですか？」
「廃品回収さ。最近の奴らときたら、まだまだ使えそうなモノを平気でポンポン捨てるからな。俺たちが拾って修理してやるのさ」

おお、なんだかランドさんが「修理屋」に見えるぞ。
所謂、リサイクルやエコロジーという奴だな。確かに、使えるものでも新しいモノを買い、用済みになれば捨ててしまうことはある。ランドさんたちはそういった不要になった品を回収・修理するらしい。
……その修理依頼は何処から来ているのだろうか？
街の偉い手の人たちなのかね？　でも俺にはボランティアのように思えてならない……。

ランドさんたちは黄色い軽トラ「ガンレオン号」で街へと繰り出した。

俺はしばらくまきを割り続け、やがて上手に割れるようになっていた。
ランドさんのような切り口ほどは無理だけど、それなりに真っ直ぐ切れるようになったぞ。
カズマ・アーディガンはまき割りのレベルが1上がった！　……虚しい。
しかしまき割りというのは結構な重労働で汗だくになってしまった。
結局、俺はまきで火を起し、ドラム缶風呂に入ることにした。

「いー湯だぜぇ」

自然の中で入る風呂も良いものですね？　浴槽はヒノキとかでなくドラム缶だけどな。
平和だ。実に平和だ。
俺はなにをし来たのだったか。
忘れてしまいそうになる。

「おーい、帰ったぞ」

ランドさんたちが帰ってきた。
軽トラには壊れたテレビや自転車などが積まれている。家電製品以外にも超合金製のロボットのおもちゃなども見られる。ずいぶんと節操なく色々集めてきたらしい。

「さー、修理するかぁ」
「おいおい、これ全部直すのか？」
「そうだぜ」

ランドさんは実に生き生きとした表情をしていた。

「カズマ、聞こえないか。こいつ等は泣いてるんだ。まだ大丈夫、まだ働ける……でも捨てられてしまった。男として、『修理屋』として、こいつ等の叫びを見過ごすわけにはいかないだろう？」
「そういうもんすか？」
「そういうもんだ」

少しだけ、ほんの少しだけランドさんの言っていることが理解できた。
俺は「エリア」で「運び屋」として自転車便で荷物を配達している。「運び屋」として預かった荷物を届けるのは責務であり、最低限のモラルだ。だから、なんとなく理解できた。

「修理屋」であるランドさんは、まだ使えるモノたちを放っては置けないのだろう。
しかし軽トラの荷台に山のように積まれた修理対象――俗に言う、粗大ゴミを小屋の中に運び込むには骨が折れた。
その後は、作業用の机に腰掛け、黙々と作業を続けるだけ……なんていうか、「修理屋」って地味だな。
という俺の先入観は、モノの見事にぶち壊された。

「さあ、蘇れお前たち！！」
「あ、熱いぜ。ランドさんが燃えている」

チュィィィン、ガガガ、ガリガリ、ドカーン。
レンチにスパナ、さらにはチェーンソーを使ったランドさんの修理（破壊？）が炸裂する。後には、使用不能だった家電製品が……気持ちいい位に、バラバラに分解されて横たわっているだけだった……。
ちなみに分解されたのは冷蔵庫で、転がっているモノたちは原型を留めていない。

「ってコラー！　ランドさん、修理せずにぶっ壊してどうすんの！」
「元気ですか！」
「イノキ？！」

反射的な俺の突っ込みに、ランドさんの平手打ちが飛んだ。
バチコーン。痛い。打ったね、親父にも打たれたことないのに（叔父さんには経験あり）！

「元気があれば何でもできる！　カズマ、パーツを選別しろ。この中から故障の原因を見つけ出して交換し、元通りに組み直すぞ！」
「えーー、無理無理。だってコレ全壊してんじゃないすか？」

「漢が弱音を吐くな！　それとも……」

作業の手を休め、拳をバキバキ鳴らしながら俺に近づいてきた。
体格差もあり、俺は完全に見下ろされている。眉を吊り上げているランドさんの顔がちょー怖かった。
この時、俺は初めて気づいたんだ。
俺が足を踏み入れたのは「ビーターサービス」という名のライオンの折の中だった、とな。フッ、後悔先立たずとはまさにこのこと――

「お前のフヌケっぷりを先に『修理』してやろうかァ！！」
「ラジャー了解！　全力で取りかかるであります！」
「元気が足りんぞォ！！」
「シャーコラッ！　出てきやがれ、諸悪の根源めコラ！！」

俺はバラされた部品の中に飛び込んだ。
畜生、なんで俺がこんな目に合わなきゃならないんだ？　理不尽だ。部品を漁る手も乱暴になるというものだぜ。
コレも違うな。
目当てのモノでないパーツを俺が投げ出すと、ランドさんの蹴りが尻に降ってきた。腰骨直撃でめっちゃ痛い！

「馬鹿野郎ォ！　部品はもっと丁寧に扱え。喩えるなら、女の肌を愛でる時のように優しく、それでいて求め合う時のように荒々しくだ！」
「無茶言うなよ！　俺、〇貞だぞ！」
「あっ、そうなの、ごめん」

キィー、ムカつく。素で謝罪しやがって。しかも哀れむような目で俺を見るじゃねえ。ランドさんの喩えは的を得ていないなぁ、ホ

ント。

「見ろ。メールなんて立派に修理しているぞ。あの手つきを真似るんだ」

なんだって？

メールは作業用の机に座り、超合金ロボットなどの子供のおもちゃの類を修理していた。滑らかな動きでおもちゃをバラして、また元通りにしていく。冷蔵庫と違い小さなおもちゃたちは必要時間も少ないのだ。

くそ、あんなジャリンコメールにできて俺にできないはずは……ふと、メールの呟きが耳に入ってくる。

「ふふふ、ダーリンはここが感じるのよね？　ここよね、この裏が○感帯ね。あぁ、なんだか私も興奮してきちゃったぁ。こうなったらメールスペシャルで一気にイカせてあげるわ！」

幼女が顔を上気させて、手を動かしていた。

「変態だ！　マセガキってレベルじゃねえぞ、これ！」

「気にするな。既に手は尽くした……修理は不可能だ」

「さじ投げちゃったよ、コレ！」

だめだコイツラら、なんとかしないと……。

でも俺は「運び屋」。長年培って形成された人格を修正なんてできないぜ。「そんな大人、修正してやるー！」と殴りかかっても、ランドさんに一蹴されるのがオチだしな……。

「うおりゃあああああああぁっ！！！」

ちゅぃぃぃん、ガリガリ、どぎゃどぎゃどぎゃ。
俺が雑念に走っている間に、ランドさんは次々と家電製品を解体していく。急がないと部品の山に埋められることになりそうだ　――……

こうして「ビーターサービス」1日目は、回収物の修理でふけていった。
バラしたモノもパーツを取替え、（信じられないことに）キレイに復活した。
本当に元に戻せるとはなぁ……「修理屋」ランド・トラビス、恐るべしである。
作業が終わったのは深夜だったため2階のロフト部分で休むことになった。3人で川の字になり、死んだように重い体を横たえまぶたを閉じる。
あぁ、疲れた　――……

【ビーターサービス営業日誌　1月15日】

ビーターサービス、下働き2日目。

「来たぞ、出張修理依頼だぜェ！！」

俺の朝は、暑苦しいランドさんの笑顔から始まった。
目覚めの1発「ヒートスマイル」。
このスマイルの値段はプライスレス。皆さんもどうですか？　寝起きの俺の眠気は無尽の果てに吹き飛んで行ってしまったぜ。

「ランドさん、顔近いっすよ」
「お、悪い悪い。ガハハハハハッ」

朝から上機嫌に笑うランドさんは低血圧とは無縁に見えた。
その手には一通の手紙が持たれていた。なんでも、時々出張修理の依頼の手紙がポストに届くのだそうだ。
誰だ、ランドさんに修理を依頼する猛者は？　妖怪ポストに手紙を出すよりも勇気が要るぞ。
ランドさんが手紙を読み上げる。

「拝啓、ビーターサービス様。
突然ですが性根の捻じ曲がった男がおります。この男はプロレスを嗜んでおり、この歪んだ男のために多くのプロレスラーが犠牲になっております。
この男の性根を修理していただきたい。ご多忙かとは思いますが、是非、今すぐにお願いいたします」

手紙には地図が同封されていた。
手にとって見ると、目印には「地下プロレス界」と書かれている。
なんだこりゃ？

「なぁ、ランドさん。これって悪戯じゃ　――」
「うおっしゃあっ、来たぜ来たぜぇ！！」

ランドさんは俺の言葉を聞いていなかった。背景に炎を立ち上がりそうな位に熱血している。

「壊れたテレビでも曲がった性根でも、なんでも修理致します！
いつもニコニコ『ビーターサービス』、いざ、出陣ダァ！！」
「ま、待ってくれランドさん！」

俺は手をつかまれてランドさんに引きずられる。

「なんで俺まで？」

「これを見ろ！」

ランドさんは読み上げていた手紙を俺に見せつけて来た。

なになに……手紙の末尾には勝負の日取りが書かれていた。１月１５日。今日だ。

修理依頼の手紙に試合の日程が書かれている理由は分かりかねるな。

しかし気になる単語がもう一つ書かれている事に気づいた。

「タッグバトル」――と書かれている。

猛烈に嫌な予感が俺を支配した。

「まさか……俺に試合に出ろと？」

「おうよ！！」

やはりそうか！　確かに「ビーターサービス」に残る社員はメールだけだ。試合に出られるはずもないが、部外者の俺を巻き込むのか？

技をかけられるのは慣れているが、かける方はズブの素人だぞ。

「気にするな。俺も素人だ！」

「駄目じゃん！　どうするだよっ？」

「元気があれば試合もできる！！」

「負けるだろうが！」

「ワハハハハハッ！！」

俺の泣き言はランドさんの轟笑に一蹴され、なす術なく軽トラに

乗せられて連行された。

「あきらめなよ。こうなったら、ダーリン止まらないから」

悟りを開いたかのような一言をメールに言われた。

俺の目指すのは、家族を守れるような男の中の男になることだ…

…プロレスラーじゃない。

「お家に帰してー！」

こうして、俺は「裏プロレス界」の試合に出場する羽目になったのだった。

●

地下にある広いスペースに熱気が篭っている。

座っている観衆たちの視線は中央のリングに釘付けだ。正方形のリングはまるで白いキャンパス。しかしマットには点々と赤いシミがついており、頭上のライトがそれを浮き上がらせる。

『さぁ、本日のメインイベントの開催だぁー！！』

司会者が高いテンションで叫び声を上げると、観客席から歓声が上がっていた。「殺せ！」「ぶち壊せぇー！」と、異様な熱気の視線が俺たちに突き刺さってきて痛い。試合を楽しみに来たという雰

囲気じゃあない……観客の瞳に宿るのは狂気のように思えた。

「ランドさん、やっぱり止めましょうよ……もう完全に処刑ムードですって」

「そうかぁ？」

俺の恐怖をよそに、ランドさんは耳を穿って指についたミミクソを息で吹く。のん気な……殺されるかもしれないんですよ、俺たち!?

『さぁ、赤コーナー、本日の犠せ　――　挑戦者ァー、『燃える闘魂　ザ・ヒート』だ　――ッ!!』

「ダアァァ　――――ッッ!!」

司会者の煽りと共にスポットライトが俺たちを照らし、同時にランドさんが拳を高く掲げて絶叫していた。

観衆たちからはブーイングが巻き上がった。俺たちには完全にアウェーらしい。

『対する青コーナー、来るなら来い！　裏プロレス界のチャンピオン『鮮血の獅子王　レーベン・ゲネラールゥ』!!』

「血だ、今日も血の雨を降らせてやるわあああぁ!!」

対面のコーナーポストにスポットライトが当たり、金髪の青年の姿が露になった。

ランドさんとは違い無駄なく絞り込まれた筋肉が凛々しい。戦化粧を施し、完全に臨戦態勢のレーベンに観客席からレーベンコールが嵐のように巻き上がっていた。

「今日もぶっ壊してやるぜ」

「おいおい、アイツメリケンサック握ってんぞ！　いいのかよ、審判？」

審判に訴えるが無視される。

『さぁ、チャンピオンのパートナーはお馴染みぃ、『あぁレーベンシュラン・オペル』だぁ！！』

「あぁ、レーベン。あぁ、レーベン、今日も君の活躍を見せておくれ」

「シュラン。お前は後ろで見てるがいい。この俺の活躍を！」

メガネを掛けた痩身の男がリング外に待機していた。

チャンピオン、レーベンのパートナーということは、ランドさんに対する俺のようなものか。

「なぁ、ランドさん。出張修理依頼って言ってたけど、一体なにを修理するんだ？」

「分からないか、カズマ。あいつだよ」

レーベンを指差しながらランドさんは不適に微笑んだ。

「俺たちは『ビーターサービス』、壊れたテレビだろうがなんだろうが修理する。

性根が曲がってんなら、熱して叩いて伸ばして、まっすぐにしてやりゃいいのさ」

「んな無茶な！」

言っていることが無茶苦茶だ。荒唐無稽にも程がある。

俺とランドさんが出会ってからまだ2日しかたっていない。たったの2日だ。でもランドさんのハチャメチャっぷりを理解するには

十分過ぎた。
人格は育った環境に左右されるものだ。それをどうこうできる訳がない……そう思っている俺に触れる者がいた。
今、俺はリングユフォームのためパンツ一枚だが、その裾を引っ張っている。
「ほらカズマ君。危ないからリングから降りて」
セコンドとして同行したメールだった。
「ダーリンなら大丈夫だから」
「で、でもよぅ……」
「いいから」
俺はメールに手を引かれて、しぶしぶリングから降りる。リング上にいてもできることはない。居残っても仕方ないことだが後ろ髪を引かれる気分だ。
「大丈夫だって。言ったでしょ？　私のダーリンは最高だって！」
「さーて、と……一つ、思いっきり修理するとしようか」
首に手を置き、左右に振ってゴキッゴキッと骨を鳴らしながら、ランドさんが一歩前に出た。
リング中央へ。「裏プロレス界」のチャンピオン、レーベンの待つ場所へと足を運び睨み合う。
「まず、逃げなかったことを褒めてやろう」
戦化粧で整った顔を歪めてレーベンが笑っていた。

「だがお前はこれから俺に壊される。血と肉が詰まっただけの皮袋に成り果てるのだ」
「……どうやら、聞いていた以上に歪んだ野郎みたいだな。多くのレスラーをそうやって再起不能にしてきたのか？」
「ほぉ、誰かに俺を倒すよう依頼でもされたようだな。だが無駄なこと。俺に勝てる男などこの世には存在せん」
「どうかな？」

レーベンの挑発にランドさんは笑顔で返していた。
不適な笑み、ではなく、とびきりのヒートスマイルでだ。

「安心しろ。お前は俺が修理してやる」
「あ、暑苦しい奴め！　離れろ、ゴングと共に貴様をマットに静めてやる！」

二人ともリング中央から離れた。
距離を保ち、試合開始のゴングが鳴るのを待つ。

『皆様、お待たせいたしました！　『鮮血の獅子王　レーベン・ゲネラール』対『燃える闘魂　ザ・ヒート』、只今より試合開始です！」

――カーンッ

決戦の火蓋が切って落とされた。
「裏プロレス界」のチャンピオンＶＳ「修理屋」の試合だ。
ランドさんよりも先にレーベンが動いた。

「血だ！　俺は血が見たい！」

レーベンは手に持っていたメリケンサックを握りこみ、ランドさんに突撃してきた。

メリケンサックが風を切り、ランドさんの顔面に直撃する。

「ランドさん！」

空中に赤い血液が吹き上がる。ランドさんの口から流れ出たものだ。

顎周辺にレーベンの一撃はヒットしていたが、それでもランドさんは倒れなかった。

「カズマァ、よく見とけ」

「き、貴様、離せ！」

殴りかかったレーベンの腕を掴み、ランドさんは背中越しに俺に語りかけていた。

「これが『修理屋』ランド・トラビスの戦い方ダァ！」

ランドさんの叫びが会場に響き渡る。

同時に。

鈍い音が俺の耳に届いた。なにかが砕ける音だった。

――　レーベンの腕があらぬ方向に曲がっていた。

悲鳴をあげ、レーベンはマット上に崩れ落ちる。レーベンの腕は前腕部でくの字に折れ曲がっていた。

人間の骨を握り折るなんて……ランドさん、アンタ本当に人間で

すか？

「痛ぇか、レーベン？」

激痛に見舞われているだろうレーベンにランドさんが言葉を投げかける。

「その痛みをよく覚えておけ。その痛みは、お前がレスラーたちに与えてきたものだ」

「ザ・ヒート、貴様あああぁぁ！！」

「血が見たいためだけに相手を傷つける、その曲がった性根を修理してやるぜ！」

ランドさんはレーベンを頭を掴み、軽々と持ち上げた。

指がレーベンの頭に食い込んでいる。アイアンクローという技だった（俺もチイ姉にやられたことがある）。レーベンは当然悲鳴をあげながら、蹴りを放つ。

しかしランドさんの強靭な腹直筋の前には無力であった。

「あぁ、レーベン！　今、君の元へ行くよ！」

リングサイドで待機していたシュランが乱入してきた。

あの野郎、パイプ椅子を持ってやがる。

タッグバトルって2対1はＯＫなのか？　知らないけどランドさんを助けに行かないと！

俺がリングサイドに手をかけた時には、シュランの持っていたパイプ椅子が、ランドさんの頭に直撃していた。

額から血が伝い落ちる。

「あぁ、レーベン！　君を救うことに全てをかけよう！」

「シュ、シュラン！　済まない、心の友よ！」

そのままパイプ椅子で強打強打強打。

そ、そんなに叩きつけたら危ないんじゃないか？　頭が割れて死んでしまうのではないだろうか。

俺の血の気は引いていたが、会場は逆に盛り上がっていた。コイツラ……そんなに血が見たいのか？　狂ってやがる、レーベンも、シュランも、会場の観客たちも全部だ。

『さぁ、レーベンのピンチにシュランが飛び出したぁ！　美しき友情かな！　ザ・ヒートは滅多打ちです、このまま終わってしまうのかぁ！？』

「もう我慢できねえ！」

俺もリング内に乱入しようとした。

しかしメールが再び俺を止める。

「大丈夫だよ。ダーリンはこの程度じゃへこたれないから！」

「うがあああああぁぁっ！！」

メールの言葉通り、ランドさんは倒れなかった。

シュランの振るってきたパイプ椅子を殴り飛ばすと、その手で顔面を鷲掴みにする。

みしみしみし、とレーベンたちの骨が軋む。大の大人が2人、頭を掴まれて空中に持ち上がられている様は圧巻だった。

「馬鹿野郎め、凶器使ってまで勝って嬉しいのか？　俺に勝ちたきゃ、みそ汁ででも顔を洗って出直して来るんだな！」

言っている意味は分からないけど、とにかく凄い気迫だ。

顔面血まみれ、傷だらけになったランドさんだけど弱った気配は微塵も感じられない。むしろ雄々しくリングに立つ姿は心に熱いモノを湧き上がらせてくれるぜ。

「離せ、ザ・ヒート！」
「黙れ、そして聞け！」

この後、ランドさんは掴んでいた2人を投げ飛ばした。
レーベンはマットに、シュランはロープに叩きつけられるがダメージは殆どない。ランドさん、何故2人を解放したんだ？　そのままケリをつけてしまえば良かったのに！
レーベンたちが立ち上がる。

「闘魂とは　――」

ランドさんが天高く拳を掲げる。

「――　闘魂とは、己に打ち勝つことッ！！
故に、お前たちは俺には勝てない。己の性分に屈し、武器を用いる戦いをするお前たちではな！！」

ランドさんはレーベンたちに指を突きつけた。
……カ、カッコいい……熱い、熱すぎるぜランドさん！　カッコ良すぎて背中を電気が奔ったようだ。感銘を受けて鳥肌がたってしまっていた。
対するレーベンたちは、互いにメリケンサックを装着しランドさんを強襲する準備を整えていた。

「黙れザ・ヒート！　俺は血さえ見られればいいんだよ！　血だ！　血液だ！　テメエの鮮血で俺は化粧をしたい！！」

「あぁレーベン。あぁぁレーベン！　そんな君が大好きだ！　さぁレーベン、殺ってしまおう！」
「応、心の友よ！」

野郎、また2人がかりか？
卑怯なのも大概にしておけよ。
やはり俺もリングに上がって戦うべきだろう。
しかしランドさんは首を振り、俺のリングインを拒むとこう言った。

「カズマ、馬鹿になれ」
「ランドさん……」
「とことん馬鹿になれ。とことん恥をかけ。恥をかいて裸になった時、初めて本当の自分が見えてくるもんだ。本当の自分が笑っていられるように、まっすぐに生きて行け。
振り返ってもいい、後ずさってもいい、ただ、少しずつ前へ進むんだ。
それが漢の生きる道！　それが俺の闘魂だぜ！！」

口の端を上げ、ウィンクして破顔し、親指を立てて俺に向けていた。
見慣れたヒートスマイルだ。
暑苦しくなんてない。むしろ熱い！　熱すぎるぜランドさん！！
あんたこそ「ザ・ヒート」の異名に相応しすぎる漢だぜ！！

「隙だらけだぞ！」

俺の方を振り返っていたランドさんにレーベンたちが背後から襲い掛かった。危ねえ！

「とった！　死ねい！！」

2人のメリケンサックがランドさんに迫る。
後頭部に直撃した。
常人なら昏倒してもおかしくない一撃がランドさんに入っていた。
しかしランドさんは倒れない。

「ふざけやがって。やはりその性根は、叩かないと真っ直ぐにならねえみたいだな」

大きな拳が握りしめられる。
そして岩みたいに固そうな鉄拳が振るわれた。

「あぁレーベン、君をやらせは　――　ブフゥ！！」

レーベンの前に飛び出してきたシュランの体が空中にかち上げられた。猛スピードで回転し、マットに叩きつけられる。
白目を剥いて動かなくなった。

「シュラン！　ザ・ヒート、貴様よくもシュランをやってくれたな！」
「闘魂注入！」

ランドさんの平手打ちがレーベンに炸裂した。
会場に快音を響かせて、レーベンの首が明後日の方向を向き、動かなくなる。立ったまま気絶していた。

「しゃあぁぁっ！！」

ざわめき立つ会場にランドさんの咆哮が轟いた。

『な、なんということでしょう！　新チャンピオン誕生です！　その名も『燃える闘魂　ザ・ヒート』だぁ！！』
「ご唱和ください！！」

勝ったランドさんが会場に向かって叫ぶ。

「いちっ」

絶叫に近い声に観客たちは驚いている様子だが、

「にいっ」

ランドさんに感化されたのか、カウントに便乗し始めた。
俺も叫ばずにはいられず、

「「「さぁん　――　ッッ」」」

3本目の指が立った時、俺の興奮は最高潮に達していた。
ランドさんの勝利の雄たけびに、会場が一つになり、

『――　ダアアアアァァァッ！！！』

ランドコールが沸きあがった！
熱いぜ！　体も心も熱すぎるぜ！　熱すぎるぜ、ザ・ヒート　――
――　ランド・トラビス！！

「いつ、何時、誰の挑戦でも受ける！！」
「ランドさん　――　いや、兄貴！　アンタ、最高だぜ！！」

歓声に包まれながら、「ザ・ヒート」のデビュー戦は終わった。
俺は、なんにもしてないけどね　――……

●

所変わって、「ビーターサービス」事務所である掘っ立て小屋。
小屋に戻った頃には日は落ちていた。
月が木々の間から顔を覗かせ、神秘的な光が裏山を照らしており、虫や鳥たちのざわめきも昼とは趣きを変えていた。
「裏プロレス界」で1試合してきただけなのに、帰宅時間が夜になったのには理由がある。

「裏プロレス界」は健全な組織ではない。
アントキノイノキが活躍するのが表とするなら、ランドの兄貴（以下兄貴とする）が活躍したのが裏なのだ。
残虐非道、極楽往生（？）。これまでに死人が何人も出ている「裏プロレス界」のファイトマネーは結構な額だった。俺の家族を数ヶ月養えるだけの額だ。これは危険に見合った報酬と考えればいいのだろうかね？

多額の報奨金を得た兄貴が足を運んだのは、学校に文房具などを卸している小さな卸売り業者の店だった。
小さな店で、年老いた老夫婦が経営していた。

その店で兄貴は　――

「この金で買えるだけのランドセルをくれ」

――と分厚い札束を老夫婦に押し付けて仰天させていた。

老夫婦が驚くのも無理のないことだろう。あれだけの額を躊躇せず差し出し、注文したのがランドセル……申し訳ないが、兄貴の風貌だとランドセルなんて頼むなんて想像もできやしないぜ。

番長御用達のボロボロの長ランがお似合いだ。

それとも、ランドだからランドセル頼んだのかな？

ププッ、相変わらず、俺のギャグセンスは壊滅的だぜ！　もし笑ってくれた人がいたらありがとう。貴女にはカズマ・アーディガンと交際できる権利を差し上げます。

……しかし理解できない。

コレだけの額、ランドセルに変えたりせずに設備投資に回せばいいのに。

「ビーターサービス」もそれで潤うというものだ。

「カズマ」

俺の問いに兄貴はこう答えた。

「金は生きていくのに必要だ。それは間違いない。でもな、必要以上には要らないと俺は思っているんだ」

分からない。兄貴の考えが理解できなかった。

必要なくても貯蓄すればいいじゃないか？

いざ必要になったときにお金が無いの辛いぜ。倒産の危機を繰り返す、家のファミリーが言うんだ。間違いない。

「そうだな。お前の言うことが正しいと俺も思うよ」
「じゃあ、なんで？」
「喩えるなら、拾われた赤子が優しくしてくれた人たちにお返しをする、ようなものかな」
「いや、分からねえよ兄貴。兄貴の比喩はいつも分かりにくすぎるぜ」
「そうか、ガハハハハハハッ」

豪快に笑って誤魔化され、俺たちは両手で持ちきれないくらいのランドセルを購入し、今先ほど「ビーターサービス」に戻ってきた所なのだ。

「よーし、じゃあガンレオン号にランドセルと昨日修理したモノを載せるぞー」
「えー、マジかよ？　夜だぜ。商売なんてできっこないって」

はっきり言って、今日は疲れた。俺の不満に兄貴は飛び切りのヒートスマイルを向けてくる。暑苦しいけど、嫌いじゃない兄貴の笑顔だ。

「いいか、カズマ」

兄貴が俺の頭を撫でてきた。子供扱いされているような気がするが、嫌な気分ではない。

「今日はお前が虎になるのだ」
「虎？」
「イエス、タイガー！」

文法的にも明らかに間違っている兄貴の答えに、俺の頭には疑問

符の嵐が駆け巡っていた。
そういや、親父も言っていたな。
虎になるのだぁ、とな。なにか関係あるのだろうか？
しかし思う。兄貴は虎というよりもライオンだけどな。

「さぁ、『ビーターサービス』、夜の仕事にいざ出陣！」

荷物を積み終わったガンレオン号を兄貴は勢いよく発進させた。
自慢じゃないが状況に流されるのは得意だぜ。
俺は訳も分からぬまま、兄貴たちと夜の街に繰り出したのだった。

●

ガンレオン号が到着したのは夜の学校だった。

その学校の名前は「スクール」。

何故か高校が密集する地域「エリア」で経営される、親のいない子どもたちを無償で通わせてくれる学校だ。経営者のアギラ・セトメは近所では聖母と名高い老女らしい。
初等部から高等部まで存在し、高等部には俺のダチのアラド・バランガも通っている学校だった。
兄貴はガンレオン号を「スクール」内に侵入させ、校庭を横切って、玄関口に停車させる。

「さぁ、荷物を降ろすぞ。カズマも手伝ってくれ」

「ちょ、ちょっと待ってくれよ兄貴。どういうことか説明してくれよ」

巡る状況に俺は着いていけない。

俺は兄貴に説明を要求した。すると ――

「修理したモノを寄付するんだよ」

「寄付？」

「そうだ。元々、拾っただけのタダみたいなモノだしな」

兄貴は満面の笑みを浮かべながら、俺たちが修理した冷蔵庫を玄関口に下ろしていた。

スクール内で冷蔵庫を使わなくても、親のいない子どもたちの家に運べば立派に使用できそうだった。

それを俺たちが修理したというのは誇らしくもあり、それを売却せず提供するというのは残念でもある。俺の感性は曲がってんのかね？　でも貧乏ジリ貧で嘆く「ヴァルストークファミリー」としては金になるモノをタダであげるというのは、身を摺りきられるような苦痛でもあるんだ。

兄貴はランドセルも玄関口に下ろしていた。

自分で勝ち取ったファイトマネーで買ったランドセルを、だ。

「カズマ君」

メールが話しかけてきた。兄貴に聞こえないように、小声で、俺の耳に手を当てて、だ。

「ここだけの話、ダーリンって昔孤児だったらしいの」

「兄貴が……」

孤児。
兄貴が、孤児。
どんな生活をしていたのだろう？　俺には想像もつかない。
メールが話を続けてくれる。

「それで昔相当荒れてたらしいわ。でも私のお父さんに出会ってから変わったらしいの。人生観を変えてくれた恩人だって、今でも酔ったときに口走ったりしてるのよ」

ふふ、とメールは微笑んだ。
その様子は何処か艶やかで、幼女には不相応な大人の女性の雰囲気を纏っている。

「その時に聞かせてくれたの。ダーリンね、孤児だったから勉強もろくにできなかったんだって。だから、せめて今の子どもたちにはしっかり勉強して欲しいって……時々入るなけなしのお金をこうして使ってるんだ」
「で、でもよ、それだと困らねえか？　生活、とかさ……？」
「ふふ、懐かしい。私もカズマ君と同じことをダーリンに言ったよ。その時、ダーリンはなんて言ったと思う？」

メールは苦笑しながら訊いてきた。
……正直、俺には想像もつかない。
嬉しそうに荷物を運ぶ兄貴……なにも考えていなさそうな、馬鹿みたいな笑顔を振りまいている兄貴。
兄貴がなにを考えているのか、俺には理解もできない。
メールが兄貴に注意を向け、バレないように教えてくれた。

「ダーリンはこう言ったの。
貧乏でも、金が無くても生きてはいける。けど心の貧乏人にはなり

たくない……ってね。だから、私のダーリンは最高なの」
「心の貧乏人……？」
「お金を持ちすぎると人は堕落するものよ。だからダーリンは必要以上にお金を持ちたがらないの。今の『ビーターサービス』を見れば分かるでしょう？」

確かに「ビーターサービス」本社の掘っ立て小屋は、お世辞にも立派とは言えない。
手に入れた木材を組み合わせて作り上げた手作り感満載の建物だ。暖房も無い。電気は通っているがテレビもない。あるのは工具と生活空間、そして運搬用の軽トラのみ。
それでも兄貴たちは生きている。生活している。
そして残ったお金をモノとしてこうして「スクール」に提供している……兄貴、俺は兄貴に惚れました。
カッコよぎる。
アンタこそ漢だ！　漢の中の漢だぜ！

「おーいカズマ、手伝ってくれよ」
「はい、喜んで！」

俺は兄貴と一緒に修理したモノやランドセルを玄関口に下ろした。
見れば、結構な量だった。
これだけのモノがあれば、親のいない子どもたちの生活も少しはマシになるのではないだろうか？
……マシ、ね。
もしかしたら、俺はとんでもないクソ野郎なのではあるまいか？
マシ、なんて明らかに上から目線の言葉だ。俺が孤児を見下しているから出てくるに違いない、深層心理からの言葉だろう。
マシ、という言葉は表現するのにちょうど良いのかもしれないが、あまり使ってはいけない言葉なのかもしれないな……でも、兄貴は

違う。

兄貴は純粋な善意から行動しているのだ！

兄貴、アンタこそ漢だぜ！

俺は兄貴に出会えてよかった！

俺も兄貴みたいになれるよう、男の中の男になれるよう努力するぜ。

荷物を運び終わった後、兄貴は一枚の手紙を置いて「スクール」を後にした。

――傷だらけの虎より、子どもたちへ。

手紙がどうなったのか、ランドセルがどうなったのかは知らない。

知る必要はないのだろう。

知ろうとすれば、それは単なる偽善になってしまうのだから――

――……

こうして、俺の「ビーターサービス」での下働きの日々は終わった。

たった2日だったけど、兄貴と出会えて良かったと思っている。

蛇足だが、兄貴は虎というよりライオンだと思うけど、俺は兄貴の生き様を見習って生きていくと誓うのだった――……

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。
『エリア』には個性豊かな人間が沢山いる。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない。

おまけ

【ヴァルストークファミリー営業日誌　1月16日】

「ビーターサービス」から帰ってきたカズマ。
居間の扉を開けると、愛すべき姉妹たちの視線がカズマに集中した。
なにか言え。
そんな視線だ。

「待たせたな、みんな　――」

カズマはランド譲りの笑顔をお見舞いすることにした。
口の端を上げ、片目を瞑り、親指を立てて豪快に笑う。
そう、ヒートスマイルだ！

「――　カズマ・アーディガン、只今帰ったぜ！」
「暑苦しい！」

アカネが顔を覆ってカズマから顔を背けた。

「キモ」

アリアは見向きもせずに言い放った。

「あーん、お兄ちゃんが暑苦しくなっちゃったよー！」

ミヒロに至っては泣き出し、

「毒ね」

シホミはぼそりと呟いた。

しっかりカズマの耳に届いた姉妹の反応に、彼の迸るハートは見るも無残に切り捨てられた。

ガクリっ、と項垂れるカズマ。

頑張れ、カズマ・アーディガン！

負けるな、カズマ・アーディガン！

いつかきっと、君の思いが姉妹に届く日が来るさ……多分。

あと、彼女もそのうちできるさ……多分。

「うるせえ！！」

「黙れ、コラ！！」

アカネに卍固めを掛けられ、今日も「ヴァルストークファミリー」にはカズマの絶叫がこだまするのだった……。

＜キャラ紹介＞

カズマ・アーディガン：ジェネ高２年、「ヴァルストークファミリー」の長男坊。男の中の男を目指してる。今回、漢を学ぶため「ビーターサービス」に下働きに出される。絶賛、彼女募集中！

ランド・トラビス：「ビーターサービス」を任される漢。暑苦しいと評判の「ヒートスマイル」を看板に、今日も直すぜ、社会の色々。ちなみに「壊し屋」や「ザ・クラッシャー」と呼ぶと切れるので注意。

メール・ビーター：絶賛、失踪中のシエロ・ビーターの一人娘。外見はロリっ娘だが、実は高校生レベルの年齢。ランドをダーリンと呼び心底ほれ込んでいる。だがランドからはマセガキ扱いされている。

レーベン・ゲネラール：「裏プロレス界」のチャンピオンとして君臨していた男。血を見るのが大好きという特殊な性癖の持ち主。本職はＭＥらしい。ちなみに極度の女性恐怖症で、シュランとは心の友である。

シュラン・オペル：レーベンの心の友。彼に心酔しており、彼の行くところ全てに付きまとう。本職はＭＥらしい。

＜次・回・予・告＞

ランド「1・2・3、ダァァァァ！！」

キョウスケ「な、なんだ、この暑苦しい男は？」

ランド「元気ですか！？」

キョウスケ「うっ……この手合いの奴は苦手だ。頼む、エクセレン」

エクセレン「はいはい。わお、今日も私は元気よん♪」

ランド「元気があればなんでもできる！！　さぁ、お嬢さんもご一緒に！！」

エクセレン「元気があれば、ギャンブルも辞められる！！」

キョウスケ「ちょ、ちょっと待て！　なんでそうなる！？」

ランド「元気ですか！？　ギャンブルやってますか！？」

キョウスケ「ま、まぁ、少々……」

ランド「闘・魂・注・入ッ（平手打ちを加える）！！」

キョウスケ「ぎゃあ！！」

ランド「そろそろ潮時でしょうね（凄く物悲しそうな表情）」

キョウスケ「何の！？　カン政権？　それともギャンブル？」

エクセレン「はいはい、その辺にしておいて、次回予告に行きましょうね」

キョウスケ
「俺の名前はキョウスケ・ナンブ！　アニメでの出番がちょっと少ないな？　忘れないでくれよ！
次回も第2次スパロボZ発売決定記念でスパロボZネタをやろうかと思う。
しかしネタはまだ決まっていない。
次回の更新は少し遅めになるかもしれないが、みんな、よろしく読んでやってくれ！
次回もスパロボ学院にリボルビングステェェク！！」

セツコ
「ス、スーパーロボット大戦Zもよろしくお願いします」

エクセレン
「私の台詞とられたッ？！」

どうも、北洋です。
今回はランド回にしてみました。
熱い展開にしてやろう、熱い展開にしてやろうと考えていたら、プロレスになりました（笑）。
しかもプロレスの辺りの展開は若干無理がある気がします……。
でも後悔はしていない。

イノキさんも言ってました。
元気があれば何でもできる！　電気があれば小説も書ける！
次回も頑張ろうかと思いますので、皆さんご唱和ください！

1・2・3、ダァァァァァァ！！

失礼しました。

鋼鉄の駄狼４　～斬殺天女だよ！　カグヤちゃん！～（前書き）

＜注・意・事・項＞
絶賛、キャラ崩壊中！
次回予告を無視しました。すいません。
キャラ崩壊という言葉はこの話のために存在します！
そのくらいキャラが崩壊しています。
キャラ崩壊レベルＭＡＸ＆ａｍｐ;スプラッタなシーンがあるので苦手な方はご注意ください。

元ネタはあの小説です。
擬音の発音はアニメをご参照下さい。
ぴぴるぴるぴるぴぴるぴ～。

鋼鉄の駄狼４　～斬殺天女だよ！　カグヤちゃん！～

俺の名前はキョウスケ・ナンブ。

何故か高校が密集する地域「エリア」一のマンモス高校、ＯＧ高等学院　――　通称「ジェネ高」に通うごく普通の高校３年生だ。

趣味は「分の悪い賭け」。特技は「分の悪い賭け」。得意技は「分の悪い賭け」だ。

崖っぷちはいい。

生きている事を実感できる最高のスパイスだからだ。

そんな天衣無縫な生き方をしている俺であるが、恋人と連れ添って自宅へと向かう平和な下校風景が嫌いというわけではない。

どちらかと言えば、恋人　――　エクセレン・ブロウニングと２人きりで過ごせるこの時間を、俺は愛していると言ってもいい。決して口には出さないし、顔にも出さない。ポーカーフェイスはギャンブルの基本だからな。

「じゃーねー、キョウスケ。また明日、学校でねん」

「ああ、ではな」

俺は自宅前でエクセレンに手を振る。

エクセレンは最近手に入れたという「喋る黒いバイク」に跨り、颯爽と俺の視界から姿を消した。

「さて、競馬新聞でも読むか」

風呂便所付き、キッチン付きの格安賃貸のボロアパートが俺の根城だ。壁の塗装は剥げ金属がむき出しになっており、１歩踏み出す

ごとに軋む階段は赤錆だらけで手すりに触ると手が汚れる。
はっきり言って生活環境はよろしくない。しかし住めば都とは本当で、俺はこの住処にすっかり馴染んでいた。
階段を上がり、鍵を開けると、見慣れた畳部屋が目に入ってくる。

「ただいまー」
「えっ、パパ　――　ッ？」

誰も居ないはずの我が城から聞きなれない女の声が聞こえた。
聞きなれない、は正確ではないな。
まだ、聞きなれていない女の声だ。
どうもその女性は風呂上りだったようで、牛のように豊満な胸と女の秘部を手で隠し、立ち込める湯気とシャープな括れが成熟した女性の色香を演出していた。

「うおわぁっ？！」
「――　イヤアアアアァァッ！！」

途端に、俺の口からは嬉しい悲鳴、女性の口からは黄色い悲鳴が上がり　――

「パパのエッチ　――――ッ！！」
「ま、まま、待て　――――　カグヤちゃん！　お前は、全然着痩せしないんだな――あっ――――」

――　小さな断末魔を残し。
俺のちっぽけな命は。
唐突に、
理不尽に、
終焉を迎えた。

俺、キョウスケ・ナンブ。享年、高校3年生。

――ずばばばばあああんっ！！

俺の頭は爽快な音と共に、胴体から斬り離され空中高くに放り出された。

あぁ……首から下の感覚がないな。切り裂かれた首の頸動脈から鮮血が噴出しているのが、今の俺にはしっかり見える。

そして、俺の命を奪った、巨大な大太刀の姿も見えた。

護式（ごしき）・斬冠刀（ざんかんとう）。

身の丈2mはあろうかという巨大な人斬り包丁は、黄色い悲鳴を上げていた裸の女性の華奢な腕に握られている。

既に5回目となる走馬灯が俺の頭を駆け巡り、俺の体が崩れ落ちる姿を目にしながら、遠のいていく意識の中で女性の声が聞こえた。

「あっ、ごめんさないパパ！」

謝って済むなら警察は必要ない！

この突っ込みに残る生命力を全て注ぎ込み、俺の命は終焉を向かえ――

――どららどらどらどららぁ～！！

――なかった。

「奇妙な擬音」が聞こえた。

その後、カグヤちゃんの背後に3m程のロボットのようなシルエットが浮かび、手に持っていた長銃からの鉛球で、泣き別れした俺の胴体を蜂の巣にする。ロボットの名前は「クイーンダイヤモンド・オブ・ヴァイスリッター・アーベント」――ス○ンドだ。一瞬にして俺の体は肉団子に早変わり。

泣きっ面に蜂とはまさにこの事である。

「おい、斬殺しないと今朝約束したばかりだろう？」

「パパがいきなり入ってくるのが悪いこと極まりないです！　ノックぐらいしてよ？」

「それとこれとは関係ない。それにここは俺の家だ」

モザイクで隠されるような惨状から、あっという間に、俺の体は元通りに復元していた　――……

彼女の名前はカグヤちゃん。

異世界からやって来た天女（！？）らしい。

何故か、突然俺の家に住み着くことになった。

信じられるか？　俺は未だに信じられん。俺は理解の範疇からは既に逸脱した存在を、今日も必死に隠し続けるのだった。

……エクセレンにバレないようにな。

スパロボ学院　～OGだよ、全員集合！～

鋼鉄の駄狼４　～斬殺天女（ざんさつてんにょ）だよ！　カグヤちゃん！～

カグヤちゃんとの出会いは3日前に遡る。

「月が出ているな」

俺は耳に赤鉛筆を挟み、アパートの窓を開けて夜空を見上げていた。

天空から黄色い真円が優しい光で闇を照らしていた。雲ひとつ無い空に浮かぶ満月は本当に美しい。俺の心の中に浮かぶちっぽけな迷いなど吹き飛ばすには十分すぎる程に魅力的だった。

俺は赤鉛筆で手元の新聞にマルを描く。

「明日の第7レースは『サテライト・キャノン』に全額一点賭けに決まりだ」

単賞一点賭け。同レースにトロンベが出走するため倍率は77倍。無謀？　馬鹿め。俺は「分の悪い賭け」には滅法強いのだ。一発逆転こそ、漢のロマン――と。

空で何か光った。

「なんだ？　勝利の女神が俺に微笑んだのか？」

その光は影となり、黄色い月に黒点を描いていた。

だが黒点は徐々に大きくなっていく。やがて月を全て多い尽くす……いや、俺の方に近づいてきて、俺の視界を覆い尽くした。

――どんがらがっしゃーんっ！！

何かが、俺を突き飛ばして、窓から自宅に飛び込んできた。悲鳴を上げる間もなく、俺は部屋の壁に叩きつけられた。痛い。

背中を摩りながら起き上がると、白い装束に身を包んだ美女が畳の上で気絶していた。

「勝利の女神が……降ってきた？」

まさか、な。

メルヘンチックな妄想が頭によぎったが、生憎と俺はリアリストだ。勝負だって勝ち目ゼロの勝負には手を出さない。

落ちてきたのは豊満な胸と端正な顔立ちをした美女だったが、こんな漫画みたいな状況を俺は受け入れる事はできなかった。

「う、うぅーん」

女性が目を覚ました。

「此処は誰？　私は何処？」

「落ち着け。古典的なボケをかます前に言うことがあるだろう？」

「ほぇ？　貴方はどちら様ですか？」

女性は間の抜けた声を上げ、とろぉーんとした瞳を俺に向けていた。

服装もかなり際どく、落ちたのが俺の所でなければ押し倒されても文句を言えない格好をしている。

「俺の名前はキョウスケ・ナンブ。いきなりで申し訳ないが、割れた窓ガラスを弁償してくれ」

女性が落下した衝撃で窓ガラスは粉微塵になっていた。

明日は勝負に出るため余計な出費は抑えなければならない。不躾を承知の俺の申し出に女性は目を、カッと、見開いた。

「ナンブ！！」
「？　そうだが、それがどうした？」
「パパァ！！」
「な、なにっ？」

女性は満面の笑みを浮かべて俺に抱きついてきた。
パ、パパだと？　馬鹿な。俺に子どもはいない。高校3年で定職にもついていない俺が子どもなど作れるものか！
それに女性は明らかに成長しきっているし、こんな……こんな、けしからん胸に見覚えはないぞ！
冤罪だ！　俺は再審を要求する！

「待て待て！　何故俺がお前の父親なのだ？　お前のような大きい子どもなど身に覚えがないぞ！」
「酷いパパ！　カグヤですよ！　カグヤとの日々は遊びだったの！？」
「知るか！　離せ！」

どうもカグヤというらしい女性を、俺は引き剥がそうと手を突き出した。

「あっ……！」

その手がカグヤの胸に触れてしまった。
あまりに突然の出来事だったため、カグヤを女性として認識する時間が足りなかった。男でも突き飛ばすように強く手を出したため、カグヤの胸を鷲掴みする形になる。

「パパのエッチ　――　ッ！！」

「ま、待て、今のは不可抗力　――――　おぎゃあああっ！！」

俺の言葉は、激痛と反射的な悲鳴によってかき消された。

――　俺の体が腹を境にして、上下に斬り離されていたからだ？！

カグヤの手には、いつ何処から取り出したのか分からない巨大な刀が握られていた。

血が付着している。巨大な刀で俺を斬ったのは間違いないように思えるが、２ｍ超の大刀を一瞬で振りぬくとは、この女の腕力は化け物か！？

その思考を最後に、俺の思考は遠のいていく。

エクセレンとの日々が蘇る……あぁ、俺はこれから死ぬのだ……直感した。

「あぁっ、ごめんなさいパパ！！」

カグヤの声がこの世の聞き納めになるのだ、と、

――　どららどらどらららぁ～！！

聞きなれない擬音が耳に届いた。

途端に傷の痛みが消失し、霧がかかったような意識が急に清明になる。

「な……んだと？」

切り離されたはずの下半身があった。繋がっていた。思うとおり

に足は動くし、痛みも無い。
俺は生きていた……

……これが俺とカグヤちゃんの出会い。
カグヤちゃんが俺に説明してくれた内容はこうだ。
彼女は異世界からやって来た天女で、俺の娘らしい。
娘。という点は断固として否定したい。身に覚えが無いし、彼女の気のせいで間違いないと思う。
俺を斬り捨てた巨大な人斬り包丁の名前は護式・斬冠刀。どんなモノでも切断する切れ味があり、軽い金属でできているためカグヤちゃんでも簡単に振るうことができるらしい。
護式・斬冠刀で斬殺された俺が生きていた理由はこうだ。

――どららどらどらどららぁ～！！

「奇妙な擬音」と共に合わせて、彼女の背後に３ｍ程の巨大なロボットが浮かび上がる。存在感は希薄だが確かにそこにいる。不気味に浮き出るロボットの名前は「クイーンダイヤモンド・オブ・ヴァイスリッター・アーベント」。
護式・斬冠刀で斬られたモノを再生させる能力を持つ。
再生させる際には、手持ちのパルチザンランチャーという長銃で対象を打ち抜かなければならないという……なんとも矛盾した存在であった。

「パパ！　カグヤはどうしてこの世界に来たのか、覚えてないこと極まりないです。だから思い出すまでこの家に置いてね！」

こうして、カグヤちゃんは俺の城に勝手に住みついた。

際どい服装の巨乳美女と一つ屋根の下。しかも記憶喪失。見方によれば世の男たちから羨望の眼差しを向けられても不思議ではないシュチュエーションではある。

どうだ？　羨ましいか？

だが俺はまったく嬉しくないね。

相手は俺を殺した超危険人物だからな。

確かに、俺は再生され生きている。

だからどうした？　外見が美しかろうと、カグヤちゃんの本質は電波な危険人物でしかない。

俺は携帯電話を取り出し、迷うことなくあの番号を押した。

「もしもし警察ですか？　刃物を持った不審者がいるんで　――」

「もー、パパの意地悪！」

――　ズバババババッ、ブッシャアアアァァ！！

脳天から肛門にかけて護式・斬冠刀で真っ二つにされた。

「ぎゃあああああああぁ　――　ッッ！！」

――　どららどらどらららぁ～！！

アーベントの銃弾にミンチにされて再生する俺。

「これからよろしくね、パパ！」

斬殺に怯える、恐怖の同棲生活が始まった。

●

これが、俺とカグヤちゃんが出会った経緯である……。

同情を感じざるを得ない不幸の境地に俺は立たされている。

斬殺。文字通り、斬って惨たらしく殺す事。

俺はカグヤちゃんと出会ってから僅か3日で5回も斬殺された。

5回死んで、生き返ったのだ。命は一つしかない。だから尊いし素晴らしい。

……そんな感性は麻痺した。

5回だぞ。不老不死になったわけじゃないのだが、斬殺されることに慣れてしまうには十分な回数だ。

抵抗など無意味。

一瞬で命を刈り取る護式・斬冠刀を前に俺は諦めの境地に立たされ、早くカグヤちゃんの記憶が戻ることを切に願うに至った。

人間、諦めも肝心である。

「パパ、一緒に寝ましょう！」

「ああ、そうだな」

「パパ、カグヤの事好きですか？」

「ああ、そうだな」

「パパ、カグヤの話聞いてます？」

「ああ、そうだな」

――ザシュ！　ゴトンッ……。

俺の頭が床に落ちた。

――どららどらどらどららら～！！

健康体に戻った俺の布団にカグヤちゃんが侵入してくる。
柔らかな膨らみが肩に当たるが少しも興奮しなかった。
勘違いしないで貰いたいのは、俺はＥＤと言うわけではない。ただ単に俺の目が、死んだ魚のようになっている。それだけの事だ。
諦めようぜ。
人、それを、泣き寝入りと言う。知っているさ。だからどうしろと言うのだ？
傍らにはカグヤちゃんの暖かな温もりがあったが、さっさと夜が明けないものかと願いながら眠りに落ちていったのだった――……

翌日。

特に何事もなくジェネ高に登校した俺は、教室にてエクセレンと話をしていた。

「ねね、キョウスケ。あの噂聞いた～？」
「何のことだ？」

エクセレンとの会話はやはりいい。
突拍子も無い非日常など必要ない。そう、つくづく感じさせられる。
エクセレンは能天気な笑みを浮かべながら、俺に耳打ちしてくる。

「今日、このクラスに転校生が来るんですって。しかも女の子らしいのよ」
「そうか」
「もし可愛くっても浮気しちゃやーよ。そんなことされたら私泣いちゃうから、しくしく」
「そうか。それより早く席に戻ったらどうだ？　もうすぐホームルームだぞ」
「キョウスケったらノリわるーい。でも、そんな所もス・テ・キ」

コロコロと変わるエクセレンの表情はまるで好奇心旺盛な子どものようだ。
時刻は8時30分。
俺たちの教室に担任であるヴィレッタ・パディム教諭が入ってきた。

「席に着け。ショートホームルームを始めるぞ」

エクセレンも席に戻り、つつがなくホームルームは進行する。
これが俺の日常。ギャンブルによる刺激も無く、変哲も無い、続くだけの毎日だ。しかしこれはこれでいいものだと、カグヤちゃんが来てから思えるようになった。
切り裂き巨乳娘に感謝するべきなのだろうか？

「今日は転校生を紹介するぞ。おい、入れ」

ヴィレッタ教諭が促すと、転校生が教室に入ってきた。
おずおずと教壇の上へ進む転校生は女性で、見慣れたジェネ高の制服にはち切れんばかりに豊満な胸を詰め込んでいる。
短いスカートの裾から見える太ももは艶やかで、はっきり言って見覚えのある御み足だった。

「初めまして、ナンブ・カグヤです。遠い所からやって来ました。優しくしてくれると嬉しい事極まりないですぅ」
「「「「うおおおおおおぉぉぉっ！！！！」」」」

教室内の飢え男子生徒たちから歓声が上がった。
「春だ！　遂に春が来たぞ！」「胸でけえ！」「その足で踏みつけてください、ハァハァ」など各々が好き勝手に口走っているが、俺は気が気ではなかった。
教室では大人しいことに定評のある俺も我慢できない。

「カグヤちゃん、家から出るなと言っておいたはずだぞ。言いつけを破って何をしている？」
「あ、パパだ！　カグヤ、パパに会いたくって転校してきちゃいました！」
「「「「パパだぁ～！？」」」」

男子生徒たちの声にドスが篭る。
教室中の視線が俺に集中していた。なんだお前ら、こっちを見るな。

「帰れ」
「そんなパパったらぁ、カグヤの制服姿がいくら可愛いからって、家に帰って布団しいて待ってろだなんて。カグヤ、恥ずかしいこと極まりないですぅ」

カグヤは顔を赤らめて体をくねらせていた。
俺の言葉を曲解するな！
たった3文字からこれだけ誤解できるとはある意味才能だ。俺の言葉にそんな意味は含まれていないし、行為に及んだ事実も無い。

あるのは6回も「斬殺」されたという痛い記憶だけだ。
だがクラスの反応は冷たかった。
女生徒は性犯罪者でも見るような視線で俺を見てくる。男共は嫉妬と憎悪と殺意がミキシングされた怨念を俺に向けてきていた。
「ちょっと、コレどういうことよ?」と、エクセレンも視線で俺に訴えかけてきている。
知るか。どうしろというのだ……?

「カグヤ、パパの隣の席がいいです」
「任せるわ、転校生」

ヴィレッタ教諭の悪い癖、放任主義が発動した。彼女は事ある毎に決定権や仕事を生徒に押し付けてくる。しかも責任もすべて添加する始末で、名前だけのクラス担任と化していた。
ホームルームの終了を宣言しさっさと職員室に帰る彼女を尻目に、カグヤちゃんは足取り軽く俺に向かってくる

「パパ！　これからは学校でも一緒だよ！」

「学校でも!?」と教室中から好奇に満ちた声が上がった。
厄介な。エクセレンの居る時の危険発言は避けてもらいたい。
だが今は直面している問題に対処しなくては……

「待てカグヤちゃん。残念なことに、俺の隣の席は既に満席だ。なぁ？　ラッセル・バーグマン　――　って、いない？」
「ラッセル？　誰だそれ？」
「なぁ、お前知ってるか？」
「知らねえ。影が薄すぎて消えたんじゃねえか」

周囲の男子生徒どもが好き放題言っていた。

馬鹿な。昨日まで確かここにいたぞ。何故、みんな忘れているのだ。

カグヤちゃんの瞳が怪しく光っていた。

「カグヤちゃん、なにかしたのか？」

「えー、カグヤよく分かんなーい」

ぺ〇ちゃん人形のように舌を出して知らばっくれるカグヤちゃん。

犯人はコイツだな。なにをしたか不明だが確信犯であるのは間違いない。

ならばと　――

「転校生の面倒を見るのは、クラス委員長の仕事だと思うぞ」

――　俺は、新たな生贄（スケープゴート）の羊を用意するだけだ。

俺が指差した先には、毎学期クラス委員長を押し付けられているメガネの男子生徒、エイタ・ナガタの姿があった。

エイタは嬉々として立ち上がる。

「お任せ下さい！　不詳このエイタ・ナガタ、手取り足取り腰取り、なんでも教えて差し上げましょう！！」

――　どららどらどらららぁ～！！

擬音が聞こえた。

振り向くとカグヤちゃんの〇タンド　――　アーベントが長銃を構えていた。生徒たちは気づいていない。俺にしか見えないようだ。

アーベントが見えない一発の銃弾を発射する。それがエイタのメ

ガネを吹き飛ばし、粉々に粉砕した。グラスの破片がキレイに光る。

「エイタ！　エイター！　大変だ、みんな！　エイタが倒れたぞ！」

「しっかりしろ傷は深いぞ！」

「担架だ！　早く保健室へ　――」

砕けたメガネに駆け寄る友達がいのある生徒たちが数人いる。

「ちょっと待てぇぇぇ！　それ、メガネだよね！　ボクじゃないよね！　どうしてメガネがボクの本体みたいな扱いを受けている訳!?」

くぅ……エイタ、済まない。

俺が生贄の羊（スケープゴート）にしたばっかりに……アーベントに撃たれ瀕死の重態となったエイタを、みんなが保健室に連れて行く。その後を、影のようなものが追って行ったがおそらく気のせいだろう。

「クラス委員長さんいなくなりましたね？」

下手人は天使のような笑顔を浮かべていた。外道め！

「パパの隣には私が座ります。いいですよね？」

「……好きにしろ……」

第3、第4の被害者を出すわけにもいかず、俺は頭を抱えてカグヤちゃんを迎え入れるしかないのだった。

エクセレンから「ちょっとキョウスケ、後で話があるからね」とアイコンタクトが送られてきた。はい……分かってます。

来る時が来てしまった。

カグヤちゃんの存在がエクセレンに発覚してしまった。

俺は覚悟を決め、普段と違いやけに短く感じる授業を受けるのだった　――……

昼休み、ジェネ高校舎屋上にて。

「ちょっとキョウスケ！　どういうことよ！？」

エクセレンに俺は問い詰められていた。

俺とタスクたちの賭けポーカーの定位置で正座させられ、エクセレンが鬼のような形相で俺を見下ろしていた。

「私という者がおりながら、誰なのよあの子！」

「カ、カグヤちゃん……？」

「疑問系で言っても駄目よ！　いつから、２番さんを養えるほど金持ちになったのかしら？　さっさと借金返しなさいよ、このギャンブル狂！！」

エクセレンは激しく誤解していた。

俺はエクセレンが好きだ。愛している。ギャンブルはするが、決して浮気はしない。

現に俺とカグヤちゃんの関係はとっても血生臭い関係なのだ。

「誤解だエクセレン。カグヤちゃんの事はなんとも思っていない。あんな奴はただの厄介者だ。確かに、俺とカグヤちゃんは一つ屋根の下で暮らしているが、決してその様な関係では　――　はっ！！」

エクセレン・ブロウニングは「戦慄」を覚えて、使用した。

し、しまった　――　墓穴を掘るとはこのことだ！　エクセレン

に黒いオーラが立ち上り、俺は戦慄を覚えた。背筋がピンとなり身が縮む。

「ち、違うぞエクセレン！　今のは決して違う！　お前の考えているような意味ではない！！」

「じゃあどんな意味があるってのよ！？」

血走った目でエクセレンが問い詰めてくる。

修羅場だ。こんな浮気の現場を見つかった主人のような修羅場を、俺が迎えることになろうとは……夢にも思っていなかった。

誰か助けてくれ、天に願ったそのとき。

――ピンポーンパンポーン

学内放送を告げるアナウンスが敷地内に響き渡った。

『あーあー、本日も蒼天なり本日も蒼天に願え』

アナウンスの声に乗ってカグヤちゃんの声が聞こえてきた。どうやら放送部の部室から全校放送をしているようだ。

『パパァー、どこに行ったのー？　自宅からお越しのナンブ・キョウスケさん、お子さんがお待ちです。至急、放送部部室まで来てください』

「お子さんって……キョウスケ、そんな……」

エクセレンが崩れ落ちた。

口元を押さえ、体を小刻みに震わせて涙ぐんでいた。

「もう子どもまで……負けたわ。私の完敗よ……」

「誤解だエクセレン。子どもというのはカグヤちゃんのことでだな――」
「あんな大きな子どもいる訳ないじゃない！？」
ご尤もです。涙ながらのエクセレンの叫びを説得する自信が俺にはない。
『早く来て。今すぐ来て。カグヤは寂しいと死んじゃう生き物なんですよ？　早く来てくれないと～、パパの秘密を一つずつ公表しちゃうこと極まりないです』
「なんだと？」
『ではパパの秘密その１　――』
背中に寒気を覚える。
『――エッチな本の隠し場所は押入れの隅にあるダンボール箱の中ですぅ～』
「や、止めろ！　鬼か貴様は！？」
「やっぱり……隠し場所を知っているなんて、一緒に住んでいる証拠だわ！！」
エクセレンが激昂していた。
ええーい、コレが若さ故の過ちというものか！　カグヤちゃんを自宅で一人にするべきではなかった。隅から隅まで家捜しされていたようだ。
よよよ、と泣き崩れるエクセレンも手に負えん。
神よ、何故俺にかような艱難辛苦を与えるのか？
正直、勘弁してもらいたい。
『パパの秘密その２　――』

間髪居れずにカグヤちゃんの一人暴露大会が続く。この声が全校生徒の耳に届いているとしたらゾッとするぜ。

「なんとぉー！　やらせはせん、やらせはせんぞぉぉ！　エクセレン、お前も一緒に来て、カグヤちゃんを止めてくれ！」

「いや！」

「来い！　止めた後、全部話すから！」

俺は嫌がるエクセレンの手を引いて駆け出した。温もりとじっとりとした汗が手のひらから伝わってくる。俺はエクセレンの手を離したくなかった。

だからカグヤちゃんを交えて、こじれた話に決着をつけるのだ！

俺はエクセレンと屋上の階段を勢い良く下る。

『――　パパは最近お〇の×を使ったプレイに興味が沸いていますぅ～』

耳を覆いたくなる放送を止めるため、急ぎ廊下を駆け、放送室へと向かう　――

●

――　私の名前は、アシェン・ブレイデル。

極めて近く果てしなく遠い世界「エンドレス・フロンティア」か

らやって来た近接戦闘タイプの女性型アンドロイドだ。

私は今、何故か高校の密集する地域「エリア」一のマンモス高校、ジェネ高の内部に潜入している。

それは何故か？　説明してやろう。

私は「エリア」へと突入したキモキザこと艦長である「ハーケン・ブロウニング」の探索のために「エリア」へとやって来た異邦者だ。共に「エリア」に突入した仲間とは逸れた。

ウスノロどもめ。

あの出来損ないの愚図どもは、いつも完璧かつビューティフルである私に迷惑をかける。私が居なければ、キモキザも駄乳姫もなにもできんのだ。私こそ裏のヒロインと言って過言ではないだろう。

ヒロインには仲間の面倒を見てやる義務がある。

現在は、はぐれた仲間の探索にジェネ高にやって来ている、といったところか。

「しかし、妙な場所だな」

すれ違う人間たちは皆同じ服装をしていた。

「無個性か……それとも……」

軍隊のように規律を教え込む場所なのか？

しかしどいつもこいつも同じようにしか見えん。Wシリーズの量産型のようにだ。センスがイモだな。

『パパの秘密その2　――』

「む、この声は牛乳か。この施設内のどこかにいるようだな」

どうやらジェネ高に来て正解だったようだ。
聴覚センサーの出力を上げ、音声の発信源を探る。
場所の特定には少し時間がかかりそうだ、とそのとき。

「放送室に急ぐぞ、エクセレン！」
「もう、待ってよキョウスケったら」

階段を下り、通路を私の方向へ走って来る影があった。
一つは髪の一部が茶色の男性。もう一つは金髪の女性だ。
……あれは、アリス・レイジとシャオムゥか？
かつての戦乱を共に駆け向けた2人が目の前に居た。戦いの後、自分の世界に戻ったはずだが……とすれば「エリア」が彼らの世界になるのか……いや、違う。
なんだ、この違和感ワワワワワワワワワ――

――ＷＡＲＮＩＮＧ！！　ＷＡＲＮＩＮＧ！！

私のＡＩ内にアラートが響き渡る。

――　ＤＡＮＧＥＲ！！　ＤＡＮＧＥＲ！！　策敵。対象を視認……認証完了。対象をベーオウルフと断定する。直ちに迎撃、殲滅を実行せよ。

奴の顔が見えた。
レイジではない。
奴は敵だ！！

――　コードＤＴＤ、強制発動！！

敵は殺す。我らの世界のために奴を殺す。
ターミネイトだ！　ヒューマンなぞ、ターミネイトせよ！！
コードＤＴＤは強制的にオーバーヒート状態を誘発する事で戦闘能力を飛躍的に上昇させる機能だが、上昇した出力から発生する余熱を逃がすため、スーツの一部が露出し、バイザーが後頭部に移動する。
副作用の熱上昇でＡＩが加熱され、人間で言えば「高揚」した気分になったりもする。
あはははははっ、あー、楽しい。
「テンション上がってキアアアァァッ！！」
ボクはレイジもどきに突撃した。
「うおっ、なんだ！」
走っていたレイジもどきは、ボクの美しさに足を止めてしまったよ。
「キラ☆　初めまして？　それとも久しぶりと言えばいいのかな？」
「邪魔だ。どけ」
「そうはいかないよ。だってボクは　――」
ボクの名前はアシェン・ブレイデル。
このお話の真のヒロインさ☆

●

俺の名前はキョウスケ・ナンブ。

放送室に向かう俺たちの前に奇妙な女が立ちふさがっていた。

露出度の高い服装で明らかにジェネ高生ではない。怪しさ１２０％の不審者だった。

「だってボクはキミを殺したくって仕方なんだもん♪」

発言も狂っていた。

不審者は手をグルグル回しながら、何が面白いのか「あはははは」と笑いながら上体をグラグラっせている。

ラップのつもりなのか、妙な言葉を口ずさんでいた。

「キキルキルキルキキルユ～、キキルキルキルキＫＩＬＬ　ＹＯＵ！！」

危ない！

こいつ、アブナイ奴だ！

不審者の双眸には怪しい光宿っており、不思議な踊りを披露しながら俺たちに近づいてくる。

「撲殺機械（ぼくさつマシーン）アシェンちゃーん。キキルキルキルキＫＩＬＬ　ＹＯＵ～、あはっ☆」

『パパのぉー、秘密そのさぁーん　――』

天井のスピーカーからカグヤちゃんの声。

「ええーい、厄介ごとばかりだ！　とにかく、放送室へ急ぐぞエクセレン！」
「え、ええ……って、危ないキョウスケ！！」

不審者を無視しようとした俺の手を急にエクセレンが引いた。
意表を付かれたため少し体制が崩れる。仰け反るような姿勢になってしまった。
その俺の鼻っ面を何かが掠めていた。
轟音を共に何かは壁を突き破っていた。コンクリの厚い壁が発泡スチロールのように砕かれ、風通しの良くなった教室の中が見えている。
一瞬遅れて、鼻に灼熱感が……触れると、手には温かい血がべったりと付いていた。

「キキルキルキルキＫＩＬＬ　ＹＯＵ～、な・ん・で・も砕けるパンチ～、ゲンブスパ～イク～♪」

なんと、壁を叩き割ったのは不審者の鉄拳だった。
しかしそれは不審者の手には付いていない。不審者の手を離れて壁の瓦礫の中に埋もれていた！
ぎゅるるるるるーがしゃん。と拳に繋がっていたワイヤーが引き戻され、不審者の腕に接続される。
コイツ、人間じゃないぞ！？
不審者は小刻みにステップを踏みながら。
ラップ調の調べに乗って拳を向けてきた。

「憎き仇敵ベーオウルフ♪　ここで会ったが百年目♪　今日こそ、お前をターミネイト♪　キラ☆」
「逃げるぞ、エクセレン！」
「逃がすかＹＯ♪　あはははははっ」

不審者が再び拳を飛ばしてきた。
幸運にも拳は外れた。俺が崖っぷちに強いからなのかは分からない。
しかしＴ－千みたいな走り方で不審者が追いかけてきた。超怖い！
「どうするのよ、キョウスケ？」
「放送室だ。あそこにはカグヤちゃんがいる！」
「だからどうしたってのよ！」
がなりたてるエクセレンが喧しくてしょうがない。
兎に角、放送室だ。
カグヤちゃんの護式・斬冠刀なら、あのターミネーターみたいな不審者も倒せるはずだ。
俺は斬冠刀の切れ味を、文字通りその身を持って知っているからな。
放送室の扉が見えてきた。
慌てて中に飛び込み、扉を閉め鍵をかける。
「パパはぁ、カグヤの事が好きなんですぅー」
カグヤちゃんはまだ全校放送で（俺の）恥の上塗りを続けていた。
「助けてくれカグヤちゃん！　変な奴に追われているんだ！」
「あ、パパ！　来るのが遅い事極まりないッデス！！」
――ズバンッ！！　ブュシャアアアアッ！！！
出会い頭に、何処からともなく取り出した斬冠刀で首を刎ねられた。

ぽーん、と首が宙を舞う。

「いやあああああああああぁ　――　ぁ……」

俺の斬殺現場を目の当たりにしたエクセレンが絶叫を上げて気絶した。

無理もない。出来れば記憶も失って貰いたいもん、だ　――

――　どららどらどらどららら～！！

意識が完全に途切れる前に、アーベントの銃弾でただの肉塊にされ、俺の体は元に戻る。

「酷いぞカグヤちゃん。いきなり斬殺はないだろう？」

「遅かったこと極まりなかった罰です。まったくしょうがないパパなのです」

「なんでやねん。いや、それよりも今は　――　ッ！」

刹那、扉が弾け飛んだ。

頑丈な木製の扉がただの木屑に成り果てる瞬間を目撃する。破片の雨の向こう側には、あの不審者がいる。恐怖の鉄拳　――　ゲンブスパイクを片手に俺ににじり寄ってくる。

「キキルキルキルキＫＩＬＬ　ＹＯＵ～♪　尻の穴から手を突っ込まれて奥歯ガタガタ言わされて死ぬのと、砕いた肋骨が肺に突き刺さって窒息死するのとどっちがいい？　選ばせてあげるってヴァ？」

「残酷すぎるわ！　どっちも断る！」

「もぅ我侭さんだなぁ！　じゃ、アシェンちゃんがハグしてあげる

？」
「ハグ？」
「胸の感触に酔いしれながら、脊椎をへし折られて死ぬといいよ？」
「なるほど、最後の慈悲という訳か。ありがたい限りだ。
だが断る！」

どれを選択しても最終的には死ぬわけだ。
やってられんわ！　俺は恥も外聞も捨ててカグヤちゃんにすがりついた。

「助けてカグヤちゃん！　無敵の護式・斬冠刀で何とかして下さいよ～！！」
「もー、本当にしょうがないな～パパは」

カグヤちゃんが斬冠刀を構えた。切っ先はもちろんアシェンとか言う不審者だ。
斬冠刀は自分に向けられると絶望感しか感じない凶器だが、味方になるとこれ程頼りがいのあるモノも珍しい。
アシェンの敗北を確信し、俺は安心して見ていられる。

「あれ、牛乳じゃん？」

しかしアシェンの言葉で、俺は絶望のどん底に突き落とされた。

「ひっさしぶりー！」
「あ、あれ……ううーん、えーと……そうだ！　アシェンさん！
アシェンさんじゃないですか！」

カグヤちゃんが剣を下げた。
どうやら、この２人は知り合いらしい。

……なんてことだ。この世には夢も希望も存在しないらしい。
と、その時。
『Ｈｅｙ！（テメエら、俺のマスターに何してやがる！？）』
エクセレンの「喋る黒いバイク」が放送室の入り口に立っていた（？）。どうやって構内に侵入したのか不明だが、主人の悲鳴を聞きつけてやって来たのだろうか？
だとすれば大した忠犬っぷりだ。
『ＦＵＣＫ　ＹＯＵ！！（エクセレンに乱暴働きやがって！　テメエら、まとめてニュートロンブラスターでブッ飛ばしてやるぜ！！）』
「あ、ゲシュペンストだ！　やっふー、久しぶり！」
『Ｄｉｅ！！（死にさらせぇ！！）』
バイクまでアシェンたちの知り合いだったらしい。
だがバイクのヘッドライト部分には光が収束していく。仲間らしいがアシェンの事を忘れているのだろうか？　それとも仲間割れか？
兎に角、助かった！
バイクだろうがなんだろうが、アシェンをやっつけてくれ！
黒バイクのヘッドライトは放送室の中に向けられている。
ヘッドライトに集まっている光はおそらくビームかなにかだろう。
アシェンが人間で無かろうとひとたまりもない、はずだ……待てよ。
ヘッドライトの先は放送室の中に向けられていた。
アシェンもカグヤちゃんも、俺も、放送室の中にいる。
ということは……
『Ｆｉｒｅ！！（消し炭にしてやるぜ！！）』

「ま、待て　――　ッ！！」

俺の言葉は目が眩む光の奔流にかき消された。

――　ズガガガアアアアアァァンッ！！

黒バイクのヘッドライトから図太いビームが発射され、放送室を消滅させ、俺たちは天空高くに吹っ飛ばされた。器用に立っていた面々だけを攻撃し、床に倒れていたエクセレンだけ無事に残してだ。

「アイルビーバァァァクッ！！」

「酷い事極まりないですぅーー！！」

「なんで俺まで　――――っ！？」

あまりの熱量に俺の体は空中で蒸発し、星となった。

その刹那、俺はあの音を聞く……あの擬音を、だ。

――　どららどらどらららぁ～！！

体の無事を確認する間もなく、俺の意識は闇に飲み込まれていく

――……

●

目に飛び込んで来たのは見慣れた天井だった。

「た、助けてくれぇえええっ！！」

意識が戻ると同時に俺は起き上がった。

俺が目覚めた場所は、畳の上に敷かれた布団の中。見慣れた古い和室は俺が借りている格安賃貸住宅の自室であった。

息が苦しい。体が熱い。全身汗だくで、寝ていた布団も熱気と湿り気を帯びていた。

外はまだ明るく、いつ自宅に戻ったのかも覚えていない。

ただ覚えているのは、俺が黒バイクの放った閃光に巻き込まれて死んだという事実のみ。だが俺は息をしているし、手も動く。生きていた。

「夢、だったのか？」

だとしたら悪い夢だ。

黒バイクの所業しかり。撲殺機械（ぼくさつマシーン）を名乗った不審者しかり。俺を斬殺しまくったカグヤちゃんしかりだ。

ハチャメチャが押し寄せて来るような非日常だった。

生きているのが不思議なぐらいだ。生きている。死んでいないという事実を噛み締める。

やはり平和な日常が一番だな。そしてギャンブル程度の刺激とエクセレンがいれば、俺は満足して人生を謳歌できる。

「ふぅ」

安堵のため息が漏れる。

もう少し休もうと、掛け布団を手で探した。

――むにゅっ
「あん……！」

柔らかな触感と女の声が聞こえた。
もう、聞きなれた女性の声だ。
脂汗が全身から湧き出すのを感じながらも、手を動かせず、声の方に視線をむける。
顔を赤くしたカグヤちゃんが、俺と同じ布団の中で寝ていた。
俺の片手に握られているのは……言うまでもないだろう？　カグヤちゃんの双子山だった。
血の気が引く。数秒後には文字通り、血の気が引くだろう。

「いやぁぁ、パパのエッチ――――ッ！！」
「夢じゃなかった　――――ぐぇっ！？」

――ズバババババッ、バシュ、ドシュ、ジャキーンッ！！

俺の体は護式・斬冠刀によって切り刻まれた。
頭部を残して胴体が刺身のようにバラされる。そう、俺は斬殺されたのだ。
斬殺天女（ざんさつてんにょ）だよ！　カグヤちゃん！
俺は心の中で夢であって欲しいと適わぬ願いを唱えるのだった。

――どららどらどらどららぁ～！！

今日もアーベントの銃声が響き渡る　――……

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。
『エリア』には個性豊かな学生が沢山いる。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない。

鋼鉄の駄狼４　～斬殺天女だよ！　カグヤちゃん！～（後書き）

＜キャラ紹介＞

キョウスケ・ナンブ：最近出番の少ないジェネ高３年生。ギャンブル狂いは直らない。競馬の予想をしていたら、天から女神、いや天女が降ってきた。不審者に因縁をつけられるし踏んだり蹴ったりな主人公。今日もカグヤちゃんに斬殺される……。

ナンブ・カグヤ：エンドレス・フロンティアからハーケンを探しにやって来た女性。しかし突入の衝撃で仲間と離れ離れ＆ａｍｐ；記憶喪失に！　愛刀（護式・斬冠刀）を振り回し、今日もパパと勘違いしたキョウスケを滅多切り！　死んでも、相手を治療できるス○ンド「アーベント」がいるから大丈夫（元ネタはもちろんジョジョ）！　我こそは、と言う方はどうぞ斬られてみてください！

エクセレン・ブロウニング：キョウスケの恋人で、高校生に見えないジェネ高３年生。今回は珍しく嫉妬する。あの後、ちゃんとゲシュペンストに回収されて無事でした。

アシェン・ブレイデル：エンドレス・フロンティアからやって来たアンドロイド娘。記憶喪失ではなく、逸れた仲間を探してジェネ高に侵入しキョウスケと対面する。キョウスケをベーオウルフと認識し、システムが暴走、コードＤＴＤが勝手に発動し彼を殺しにかかる。「アイルビバック」と言っていたので、また戻ってくるかもしれない。

＜次・回・予・告＞

キョウスケ
「お詫び。前回の次回予告を無視して私の話を書いてしまったことをここに深くお詫び申し上げます。作者がテレビアニメで最近出番の少ない私を傷買ってくれた結果とのことです。今後はこのような事がないよう尽力していくつもりであります」

エクセレン「嘘だッ！！」

キョウスケ「ああ、嘘だな。それより誰か、俺がカッコよく活躍できるようなお話のネタをくれ！　頼んだぞ！」

エクセレン「では、また次回でお会いしましょう！」

キョウスケ「キミの感想・ネタを待っているぞ！」

擬音、超連発！

今回の話の元ネタは「撲殺天使ドクロちゃん」です。
ちなみに私は読んだことはありません。
凄く擬音だらけらしいですね。
小説のネタはアニメの一話を参考にしました。笑っていただけたなら幸いです。

暗黒ミカンさん、ｓｉｂｕｇａｋｉさん、ケルンバイターさん、平沢　唯さん感想ありがとうございます。

特にｓｉｂｕｇａｋｉさん。セツコの登場を期待してくれてたみたいだったのにすいません。
猛烈にアホな話を書きたくなりまして（笑）。

次回はあの子が登場？　予定は未定です！
ではでは、次回もよろしくお願いします。

薄幸処女　～目指せ！　栄光の星！～（前書き）

＜注・意・事・項＞
絶賛、キャラ崩壊中！
前回ほどのキャラ崩壊はございません。
しかし冒頭から不幸＆ａｍｐ；鬱展開全開ですので注意してください。

注意：今回は病院ネタ。
でもこんな病院は存在しません（笑）

薄幸処女　～目指せ！　栄光の星！～

私の名前はセツコ・オハラ。

何故か高校の密集する地域「エリア」で暮らすごく普通の女です。

突然ですが、私は入院しています。

「エリア」にある私設病院である「カイメラ医院」。

生まれつき体の弱かった私はカイメラ医院に押し込められて、病院から殆ど出た事はありません。

白い天井に固いベッド。同室の他の患者が入れ替わり立ち代り退院していくのを、私は見ているしかできなかった。

体はすっかり成人しているのに……主治医であるアサキム・ドゥーイン先生は退院を許してくれません。治療費がかさむだけの私は家族にとっても厄介者なのでしょう。いつの頃からか両親も面会には来てくれなくなりました。

悲しいです。

寂しいです。

私だけが何故こんな目に会わなければならないのでしょうか？

不幸だわ……私はアサキム先生に退院できない理由を尋ねたことがありました。

「その眼はなんだい？」

アサキム先生は黒衣をなびかせて答えてくれました。

「君に許されるのは闘病を続ける事だけだ。この病院を出て、君が生きていけると思っているのかい？　乙女のスフィアの発動を抑えるためには、君は僕の傍に居るしかないのさ」

スフィア？

アサキム先生の言う事は難しくて、院内学級を卒業した程度の私には理解できない。

でも先生の言っていた事は嘘ではなかった……。

一度、先生の忠告を無視して病院の外へ出た事がある。

「エリア」１のマンモス高校であるジェネ高を覗きにいったのだ。

私の通えなかった高校というものを一度は見ておきたかったから……でも、私の帰る場所は病院しかない……結局、夕方には自分のベッドに戻るしかなかった。

看護師のツィーネに怒られた。

味気ない入院生活が戻ってきた。

特に美味しくもなく、栄養バランス第一の夕食が配膳されたとき、私は絶望という言葉の意味を知った。

――味が……ない。

口に入れて噛んでいる触感はある。しかし味覚を感じない。

私はツィーネに内緒で隠し持っていたお気に入りのドロップを取り出して、舐めてみた。

まるで小さな石ころが口の中で転がっているようだった。

「スフィアが脳の味覚中枢を冒したようだね」

それがアサキム先生の診察だった。

だからスフィアって何？　アサキム先生は太極へ至る道と言っていたけど、私には理解できなかった。

「この薬を飲むんだ。症状の進行を抑えられる」

「先生！　私の病気は治らないのでしょうか！」

「ああ」

宣告。

人の希望を刈り取るには十分すぎる言葉。

「僕はこの無限獄から逃れる術を知らない。この世界での君は力を覚醒できずスフィアに喰われて死ぬだろう。しかし転生することもできない。君も僕も『エリア』という檻に捕らわれた、哀れな子羊なのさ」

「先生……なにを言っているのか分かりません……」

「……この病院から出れば、君は必ず不幸になる……そういうことだ」

先生の顔に深い影が差したことを私は覚えている。

それから、私は病院を抜け出そうとしたことはない……そんな気力は沸いてこなかった。

何不自由ない……でも面白みのない病院生活は続いた。

不幸だわ……同室の患者が何度も入れ替わるぐらいの時間が過ぎていた　――……

スパロボ学院　～OGだよ、全員集合！～

薄幸処女　～目指せ、栄光の星！～

私の同室の患者たちは少し変わっている。

「うひょひょひょひょ、アイラーヴュ～、セツコちゃん、この汚らしい老人をぶってくだされい」
「嫌です」

同室の老人、ジエー・ベイベルがベットに腰掛けていた私に擦り寄ってきた。
私の病室は４人部屋で、ジエーさんはぎっくり腰で入院してお爺さんです。ナマズみたいな髭と醜悪な風貌をしているけどひょうきんな性格で、事あるごとに私にこう言ってきます。

「女の子に叩かれたいのじゃ！」

一度、軽く頬を叩くフリをしてみたら、顔を赤らめて息を荒げていました。
二度とこのお爺ちゃんの要望には応えることはないと思います。気持ち悪い。
ジエーさんを適当にあしらって遠ざけると、男の人の声が聞こえてきました。

「どうしたトビー！　まだ訓練は終わっていないぞ！　スクワットをあと１００回だ！」

同室の中年男性　――　デンゼル・ハマーが檄を飛ばしていた。
デンゼルさんは高校の体育教師らしく、誰かに指導するのが大好きとのこと。スポコン万歳な熱血中年男性です。
デンゼルさんに檄を飛ばされているのは金髪の青年でした。
病衣を汗まみれにしながら、ヒンズースクワットを続けています。
入院しているのに元気な人です。
彼の名前はトビー・ワトソン。最近、私の病室に入ってきた男性です。

「星だ！　トビー・ワトソンよ、お前は栄光の星（グローリースター）になるのだ！」
「デンゼルのオッちゃん！」
「栄光の星たち（グローリースターズ）に仲間入りするために、入院中でも鍛錬を欠かしてはいかんぞ！」
「分かったぜオッちゃん！　俺は病気を治して、栄光の星（グローリースター）になってみせるぜ！」
「トビー！」
「オッちゃん！」

デンゼルさんとトビーが汗と涙を振りまきながら抱き合っていた。
とても暑苦しい。私は入院生活しかしていないのでスポーツには疎いのだけど、彼らのやっているのがスポコンなんだろうなぁと思う。
トビーはプロ野球チームの「栄光の星（グローリースター）」を目指しているらしく、努力を重ねていたが病気が見つかった。青天の霹靂だったに違いない。
なんでも心臓の奇形らしい。生まれつき心臓の中にある仕切りに穴が開いている病気だそうだ。外科手術で穴を埋めれば治る病気らしい。
トビーは病気を治すために「カイメラ医院」に入院してきた。
病気に絶望せず、夢のために立ち向かっていく姿は輝いて見えた。
カッコイイ、素直にそう思えます。

「あなたたち、なにを騒いでいるのよさ――のよ！」

2人の大声を聞きつけて、看護師のツィーネが部屋に来た。
コメカミに青筋が立っている。怒ると変な口調に変わるツィーネがトビーたちを睨み付けていた。

「病室で騒ぐなって言ったでしょうが！　この馬鹿患者ども！」

ツィーネは胸も大きくて美人さん。男性患者から人気を博しているが、怒らせると非常に怖いので基本的に誰も逆らわない。

只一人の人物を除いて、だけど。

「もっと、もっとじゃ！　ツィーネちゃん、もっとこの腐れ老人を罵ってくだされぇい！」

「キモいのよ、このクソ虫が！　そんなに元気ならさっさと退院しなさいよ！」

「もっともっと！　もっとぉ、もっとぉ！　ＭＯＴＴＯッ、ＭＯＴＴＯッ！！」

「失せろ、このクソ爺！」

「いやんばかん」

恍惚の表情を浮かべるジエーさん。

ツィーネの注意もジエーさんにだけは一切通用しない。相手をしても喜ぶだけだから、ツィーネにとって厄介極まる存在に違いないだろう。

ヒルのように絡み付いてくるジエーさんを必死に引き剥がしながら、ツィーネは私に言った。

「セツコ、アサキムが呼んでいたわよ！」

「先生が？」

「診察じゃない？　アサキムも忙しいから早く行ってあげ　――って離れるのよさ！　じゃない、離れなさいよエロ爺！」

生理的にちょっと……というレベルにニヤけた顔をツィーネの胸に押し当てるジエーさん。私がツィーネでなくて良かった。不謹慎だけど本当にそう思う。

アサキム先生の待つ診察室に向かおうと、ベットから足を下ろした。

「なんだセツコ、診察か？」

スクワットを止めたトビーが話しかけてきた。彼の汗と熱気が鼻を突く。男っ気のない私には少し刺激が強すぎる、かな？

私が少し目を逸らすと、

「あ、悪い。少し、臭かったかな？」

「そ、そんなんじゃないですけど……」

トビーは汗だくだから確かに少しにおいは気になるけど、嫌な感じのにおいではない。すえた油のようなにおいならなら私だってお断りだけど、トビーのは気にならなかった。

むしろ気になる。ドキドキする。

トビーはフェイスタオルで汗をふき取っていた。

「俺もシャワーでも浴びてくるかな。あ、そうだセツコ」

「なんですか？」

「アサキム先生に会ったらさ、俺の手術の日程決まったか聞いといてくれよ。俺、早く病気を良くして、全力でトレーニングしたいんだ」

「分かりました。聞いておきますね」

凄いな、トビーは。いつだって前向きだ。手術する事に恐怖を覚えたりしないのだろうか？

私はトビーに挨拶すると病室を出た。

アサキム先生の診察室に向かう。

●

「カイメラ医院」内にあるアサキムの診察室。
アサキム先生は「ブラックなんたら」と揶揄される高名なお医者様だ。
外科手術でメスを握らせたら右に出る者は「エリア」内にはいない。先生の治療を受けるために法外な治療費を払ってまで掛かりたいという人が後を絶たないそうです。
そんな名医が私の主治医。

「特に変わったところはないね？」
「はい、先生」

もう慣れたもので、診察は滞りなく進んでいった。
聴診、触診、レントゲン写真に腹部エコー……変わらない診察メニューが淡々と消化されていく。
診断は健康そのもの……でも私が退院することはできない。
スフィア……原因不明のそれが私の体を徐々に蝕んでいるらしい。
自覚症状はない。あるのは味覚が失われたという事実だけ……。

「今日から薬を変えよう。僕が調剤した特製だ」
「先生……それで病気は良くなるんでしょうか？」
「無理、だろうね」

アサキム先生は言い切った。
先生の言葉はいつも切れ味鋭いメスのようだ。まるで私を追い詰

める事を楽しんでいるかのよう……先が見えない。この不透明さの苦痛を誰か理解してくれるだろうか？

「セツコ。今の君の魂も、僕の魂にも自由はない。『エリア』に住む全ての人たちは無限獄に縛られている。太極の意志を覆すことはできない。できることは、やがて訪れる不幸を先延ばしにしてやることぐらいだ」

「……夢も希望も……」

答えは何度も聞いた。

帰ってくる言葉は分かっている。

それでも呟かずにはいられない……言葉が変わっていると願いたいから。

そう。希望を捨てきれない私は、きっと、哀れで滑稽なお人形。

「ない」

先生の返答は同じだった。

「僕らが僕らに戻るためには、この世界から旅立たなければならない。しかし、今の僕にその術はない。まさに、籠の中の鳥、だよ。僕の翼は何者かによってもがれてしまったのさ……フフ」

絶望的な結果以外、先生の言葉はいつも抽象的で的を得ていなくて、私には意味を理解する事できません。

籠の中の鳥。

それは私。アサキム先生じゃあない。

アサキム先生は多くの患者さんを救っている。

でも私は無力だ。なにも出来ない。病院から出る事も叶わず……

いえ、肉体的に出る事は可能なのだろうけど、その勇気がもう私に

はない。
　このまま、病院で私の人生は終わりを迎えるのでしょうか……。
「フフフ、笑ってくれセツコ」
　先生は天井を見上げ、顔を覆っていた。
「君を壊すことのできない僕を笑ってくれ。『エリア』に捕らわれ、太極を目指せぬこの僕を。無力で小さな、この僕を……」
　いいえ、先生。
　私は笑ったりしません。
　無力なのは私。もし喩えるなら、先生はきっと黒い翼を持った大きな鳥。鎖が無ければ何処までも飛んで行ける漆黒の翼。
　でも私には翼なんてない。
　飛べない鳥、走れないダチョウ、泳げないペンギン……それが私……。
「今日の診察は終了だ」
「……ありがとうございます、先生」
　あぁ……不幸だわ　――……。

●

　……ああ、トビーに頼まれていたことを忘れていました。

それを思い出したのは、既に病室に帰ったときだった。

「セツコ、どうだった？」

トビーが訊いてきた。

「ごめんなさいトビー。聞くのを忘れてしまいました」

「そっか。じゃあいいや。悪かったな、頼みごとしちまって」

「い、いえ。私にできることなら何でも言ってください」

私の心は沈んでいたけど、それは出来るだけ表に出さないように勤めました。

微笑をトビーに返す。

トビーに頼られるのは嬉しい。それが単なる雑用だとしても、私にできることは限られている。だから手伝えることが嬉しいというのは、私の心の底からの本心なんだ。

でも私の笑顔は薄っぺらい。

「大丈夫か、セツコ？」

診察で落ち込んでいる事を、あっさりとトビーに見破られてしまっていた。

「またアサキム先生になにか言われたのか？」

「……ううん、大丈夫。いつものことだから、トビーは気にしないで」

私は嘘をつくのが下手なのだろうか？

私の嘘はいつもトビーに見破られてしまう。

心配をかけまいとトビーに笑ってみせた。本当に慣れたことなの

……私の入院生活では本当に……日常なの。アサキム先生の宣告は……。

「ほら、まただ」

トビーの眉が歪んでいた。

「どうして無理に笑おうとするんだ？　辛いときは我慢しなくってもいいんだ。セツコは1人じゃねえだろ」

「トビー……」

「困った事があったら俺たちにいつでも相談しろよ。俺たち仲間だろ？」

トビーは白い歯を見せて思い切り笑ってみせた。

明るい、太陽のように眩しい笑顔ね。羨ましい。私も、いつかトビーのように笑えるときが来るのだろうか？

デンゼルさんのように、熱く誰かに接する事ができるようになるだろうか？

ジエーさんのように、自分の事を表出していけるようになるだろうか？

……無理、だ。

私は「カイメラ医院」から出る事はできない。

トビーは仲間だと言ってくれたけど、いつの日かトビーたちはこの病室を去っていき……そして、私はまた1人になる……

「あぁー、もうッ！」

トビーが叫んでいた。

「分かった！　セツコ、デートしよう！」

「え、デ、デデ、デート？」

舌が回らない。トビーの突然の提案は私の心を揺るがすには十分すぎた。

トビーに気がある事がばれてしまったの……？

「俺のお気に入りの場所に案内してやる！　誰にも内緒の、俺の秘密の場所だ！」

「え、え……？」

「そこに行けば、暗い気持ちなんてきっと吹っ飛ぶさ！　無理して笑う必要なんてない。一緒に笑おうぜ。心の底からよ！」

トビーは私の手を取って歩き出した。

繋がった手の平から熱が伝わってくる。温かい……この人はなんて温かい人だろう。私なんかのためになにかしてくれようとする。

嬉しかった。私は返事をしなかった。それは無言のＹＥＳ。

廊下ですれ違う患者さんたちの視線が向けられてくる。顔が熱かった。

夢に向かうトビーもカッコイイけど、強引なトビーも……。

しかし興奮にはすぐに水が差された。

「ト、トビー、病院の外に出ちゃ駄目だよ」

「いいから」

「で、でも……！」

私はここから出たら不幸になる。

味覚は無くなった。次に外に出れば、どうなるかなんて分からない。

「いいか、セツコ」

トビーがこちらを振りむいた。顔が近くて、気恥ずかしく思わず顔を背けてしまう。

「どんな病気だって、気持ちが負けてちゃ良くなるはずがない。今のお前に必要なのは薬や最新の施設なんかじゃない。きっと、心の支えになり得る、楽しい記憶や思い出だと思うんだ」

楽しい、思い出。

これまでの人生を振り返る。

いいことなんて無かった。不幸なだけの生活で、思えば他人や世界を恨まず生きてきた事が不思議な位に、私の胸の中は空っぽだ……。

なにごともない日々を繰り返すだけの日々。

喩えるなら私は静かな水溜りで、トビーは水溜りに投げ込まれる小さな石なのかもしれない。

彼の言葉に私の心は揺らいでいく。

「それに俺はセツコの笑顔が見たい」

「トビー……」

「行こうぜ！」

「うん……！」

私はトビーと一緒に病院を抜け出した　――……

――　案内されたのは、山の上にある展望台だった。

ジェネ高の裏山にひっそりと佇む人気のない展望台。

山肌に人の手が加わった平地があり、小さなベンチが一つぽつんと佇んでいる。
周囲は木々に囲まれていて、いつの間にか日は落ちていた。光源は空から降り注ぐ月光だけで、聞こえてくる虫や鳥たちの鳴き声で展望台は神秘的な雰囲気に包まれていた。

「ほら、座れよセツコ」
「うん」

トビーに促されるままにベンチに腰掛ける。

「見てみろよ」

トビーの指差す先には光があった。
「エリア」の町の光。
暗い空間に灯っているそれは生活の光だった。一つ一つの光の元で人が暮らしている。
目を凝らせば「カイメラ医院」も見えた。今頃、ツィーネはカンカンになって私たちの事を探しているだろう。そんな光景がそれぞれの光の元で繰り広げられているかもしれない。

「どうだ、ここの眺めキレイだろ？」
「うん。本当にキレイ……『エリア』ってこんなにキレイだったんだね」

初めて見る、上から見下ろす「エリア」の夜景だった。病室の窓から見ていた夜景が、目線が変わるだけでマジックアートのように見せる顔を変えていた。
キレイだと思った。
天上の星に負けるとも劣らない、まさに地上の星だ。

「俺さ、落ち込んだりした時によくここに来るんだ」
「トビーが？」
俄かには信じられなかった。でもトビーも人間だもの、喜びもすれば落ち込みもする。
トビーは夜空を見上げた。
「俺は栄光の星を目指してる。俺は自分の好きな事で一番になりたい。夜空に輝く一番星みたいになりたい。だから努力している」
視線につられて空を見上げた。
まだ日は沈んだばっかりで一番星はすぐに分かった。たった一つだけで光り輝いている。
「でもよ……」
トビーの声が暗くなった。
「正直、挫けそうになることもある。栄光の星（グローリースター）はプロ野球チームだから、生半可な事で入団できるわけがないのも分かってる。努力が全て報われるわけじゃないことも知っている。一度や二度じゃないさ、挫けそうになったのは……」
私がトビーから弱音を聞くのはこれが初めてだった。
「よく挫けそうになるよ。でも、そのたびに俺はここに来るんだ」
「……？　どうして」
「見てみろよ、セツコ」

一番星から目を降ろし、町の明かりを指差した。
ネオンが煌びやかな繁華街、優しい光が灯っている住宅街、残っている光の少ないジェネ高……色々な夜の光が私の目に飛び込んでくる。

「みんな、同じなんだ」

トビーが言った。

「どんなに権力を持った偉い人でも、天才と持てはやされている人でも、みんなあそこに住んでいるんだ。どんなに輝いている人でも空に住んでいるわけじゃない。みんな、地に足をつけて生きている」
「うん……」
「ここへ来るとな、みんな、俺と同じだって思えるんだ。手の届かない高みに居る人も、俺と同じ場所で生きている。だから俺も努力すれば、そこまで行けるんじゃないかと思うんだ」

トビーは町の光を見下ろしていた。
町の明かりが夜の暗闇に映えている。「エリア」……私たちが生きている土地だ。私たちは鳥じゃない。どんな人間だって、ここを離れて生きていくことはできないんだ。
……なんとなく、トビーの言っている事が理解できた。
強い人や偉い人を目の前にすると、まるで自分とは違う存在のように感じることがある。住む場所が違うような、そんな感じ。
でも、もしかしたらそれは気のせいで、自分の中で壁を作ってしまっているだけなのかもしれない。
分からない。
実は言うほど変わらないのかもしれないし、違うのかもしれない。
浮かんだ疑問の答えが私には分からなかった。
でもきっと、そういうことなんだと思う。

届かないモノなんてない。
自分が作り出した壁を壊せるのは自分だけで、その先に進めるかどうかもきっと自分次第なんだ……。

「ここに来ると少し安心するし、また頑張らなきゃと思えるんだ」
「トビー、あなたは頑張っているわ。あなたの頑張りを私は見ていたわ。だから無理はしなくてもいいのよ」
「でも、俺はなりたいんだよ」

トビーは笑いながら言った。

「俺はプロ野球選手になりたい。栄光の星（グローリースター）になりたい。だから俺は頑張るのさ。誰かに強要されたからじゃない、俺はなりたいから努力するんだ！」
「凄いな、トビーは……」

やっぱり凄いよ。トビーは凄い。
夢に向かって頑張るトビーはカッコイイ。私にはないものを持っている。

「いいなトビーは……私にないものを全部持っている」
「何を言っているんだ、セツコ。俺もセツコも大して変わらないよ」
「……嘘よ」
「嘘じゃないさ。俺の持っているモノは誰でも持っているモノだから」

トビーは手を夜空へと突き出した。
その先には一番星。周りにも星が輝きだしたから、来たとき程の強い印象を受けなかった。トビーは一番星をグッと掴み取るように手を握りこむと、拳を私の胸に近づけてくる。

「星ってのは夜空に輝いているモノだから届かない。でも栄光の星は違うんだぜ。栄光の星は空に無いんだ」
「え……？」
「栄光の星ってのはな　――」
トビーは握った拳をトンッと私の胸に当てて、
「――　そこにあるもんなんだぜ」
「トビー……」
「セツコ。お前にだって栄光の星はあるはずだ。まだ、それが何なのか気づけていないだけなのさ」
栄光の星は私の胸の中にある……？
きっとトビーの言っているのは、夢や希望というモノなのだろう……。
「……ある、のかな？　私にも栄光の星が……」
「あるさ、必ず！　だから元気出せ、セツコ！」
トビーが励ましてくれた。
栄光の星　――　果たして、夢や希望は本当にあるのだろうか？
アサキム先生にばっさりと切られたその言葉が私の中にあるのだろうか？
分からない。
答えなんて分からない。
私の歩く道は不透明で、先なんて見えないの。それがあるのかどうかなんて、私に分かるはずもない。
でもトビーは、私の中にあると言ってくれた。
嬉しかった……トビーが言ってくれて良かった。

トビーの事を考えると胸がぽかぽかしてくる。温かい。あぁ、そうか……私は、きっと、この人の事が好きなんだ。

「ありがとう、トビー」

感謝の言葉が自然と口から出ていた。

ありがとう。感謝の言葉。初めての言葉、ではない。何度も言ったことのある言葉だった。

けれど顔が熱くてしようがない。

空気は刃物のように冷え切っているのに、感情が高ぶっているのか体全体が熱かった。

「お、おいおい、泣くなよセツコ」

「え……？」

トビーが困惑した表情を向けていた。

頬を触れると温かい液体が流れている。痛くもない。悲しくもない。でも自然と涙が溢れて止められなかった。

トビーは困ったように頭を掻いていた。

「悪かったよ。嫌がるお前を無理やり連れてきてごめんな。謝るからさ、許してくれよセツコ？」

「違うよトビー……お礼を言うのは私の方。ありがとう、トビー」

私はこの人を好きになって良かった。

トビーは少し困っていたが「そうか」と、頷いてくれた。

その後、私たちはしばらく「エリア」の灯火を見つめていた。

栄光の星は各々の胸の中に違う形で存在している。

いつか私も気づく事ができるのだろうか？

自分の中にある栄光の星の形に。

形は漫画のような形だろうか、それとも歪な球体だろうか。
分からない。
でも、もし分かったなら、私は真っ先にあなたに伝えたい。私だけの栄光の星の形を、あなたに。
ねぇ、トビー……ありがとう。好きです。この言葉も伝えていいのかな？
こんな事訊けないよね？
分かってる。でも、いつか伝えたい……。

「冷えてきたな。帰ろうか？」
「うん」

私とトビーは暗い道を下り、ジェネ高の裏山を後にした　――……

――　街頭の点いた道をトビーと一緒に歩く。

「カイメラ医院」まであと少しだ。
きっと、帰ったらツィーネから大目玉を喰らうんだろうな。
でも、いいの。
今の気分は最高に幸せなんだから。
この道が永遠に続けばいいのに。そう思った。
そのときだった。

――　目の前が暗闇に包まれた

闇夜なんて表現は生ぬるい。

完全なる黒。
街頭に照らされていた歩道が一瞬にして暗転した。なに、これ！？　見えない！　怖い！！

「ト、トビー！　トビー、何処！？」
「ん？　どうしたセツコ？」

声は聞こえるが姿はない。
私はトビーの声がする方向に向かって駆けたが、なにかにぶつかって倒れてしまった。
太ももものあたりに固い衝撃があり、頭から地面に転倒する。手で頭をかばったけど、その手を思い切り摺ってしまう。

「い、痛い……」
「セツコ、危ねえッ！！」

トビーの絶叫と共に体に強い衝撃が走った。
肩に強い痛みが走ったかと思うと体が投げ飛ばされていた。そのまま受身も取れずに肩から地面に落ちる。
なにも見えない。
だから、良く聞こえた。
車のエンジン音と車輪に急激な制動を駆けた音が空気を切り裂き、

――なにかにぶつかる鈍い音が耳に届いていた。

「な、なに？」

状況が理解できない。
けれど、とてつもなく嫌な予感がした。
人が集まってきたのかザワメキが徐々に大きくなっていく。

聞きたくないキーワードが耳に飛び込んできた。

「人が撥ねられたぞ！」

……嘘？

撥ねられたって……まさか、まさかまさか！

そんなはずがない！　私は頭を振って最悪の結論を追い出そうとした。

途端に、視界が開けた。

目の前の光景が網膜に飛び込んでくる。

――トビーが頭から血を流して倒れていた……

「ト、トビー……？」

震える足を動かす。

血を流したトビーの顔には血の気が無かった。

「う、嘘よ！　こんなの嘘よおおおぉぉぉ！！」

「おい落ち着け！　誰かその娘を押さえろ！」

「救急車だ！　救急車を呼べ！」

「いやあぁぁぁぁ！！」

見知らぬ誰かが呼んでくれた救急車に乗せられて、トビーと私は「カイメラ医院」へと戻された　――

――トビーの緊急手術がすぐに決定した。
私の目の前で手術室に運び込まれていく。
目の色を変えたツィーネや、ＭＥのレーベンさんとシュランさんがそれに追随していた。
「カイメラ医院」を抜け出したことを怒って欲しい……怒られる程度で済む怪我だと思いたい。次の瞬間には、元気なトビーが私にこう言うの。悪いなセツコ、心配かけたな、って……
それは単なる逃避だとは分かっている。
でも願わずにはいられない。
お願いです神さま。
トビーを……トビーを助けてください！

「彼は死ぬ」

死神の一言がアサキム先生から発せられた。

「前回で１５４９９回目だ。１５４９９回中、彼が助かった事例は一度もない。１０５０９回の死因が交通事故死、残りが原因不明の心停止だ」

私には先生の言葉が理解できなかった。
でもトビーの命が危ないという事だけは理解できる。

「セツコ・オハラ、君はどの世界でも何回も廻った人生の中でも彼を救う事はできなかった」
「そんな！　先生、私、なんでもします！　だからトビーを助けてください！」
「その言葉も１４５９８回目だよ」

先生の言葉に世界がぐにゃりと歪んだ。

涙で視界がぶれたのだと気づく。
先生は手術室の自動扉を潜ろうとしていた。
「彼の瀕死は今回で実に１５５００回目だ」
背を向けたまま先生が言った。
「過去１５４９９回中、実は一度も試した事がないことがある。私の考えでは試行したとしても、彼が助かる可能性は限りなくゼロに近い。現に過去の君は僕の提案を全て断っている」
「いいえ、先生！　私はなんでもします！　いえ、やらせてください！」
「そうか。では提案だ」
先生の口から出たのは信じられない言葉だった。
「君には手術に同席してもらう」
「え？」
「彼は頭部を強打して硬膜内に血腫が形成されている。術式は開頭血腫除去術だ。端的に言えば、頭を割って血の溜まりを除去する。君にはそこに同席し、手術を見てもらう。これが僕からの提案だ」
頭が真っ白になり、動悸が激しくなっていくのを私は感じていた。
私はただの入院患者だ。
私が手術場に居ようと居まいと手術の成績は変わらないだろう。いや。むしろ役に立たない人間がいることでツィーネたちの集中力が乱れ、手術は失敗してしまうかもしれない。
冷静に考えれば、私はアサキム先生の提案に応じない方が良い。
「もちろん、断ってくれても構わない」

先生は私の方を振り返らない。応えるのなら早くしろ、と言うことだろう。

「この世界は狂っている。彼の死が太極の意志だと言うのなら、来世でもこの悲劇が繰り返されるだけだ。僕が無限獄から逃れる術を見つけるまで、ずっとね……」

「先生……私……！」

私は先生の言葉を理解するのを止めた。

先生はきっと私とは違う次元に生きる人なんだ。

私の理解できないことを理解し、やってのける。その先生が無理だと言うのなら、きっと本当に無理なのだろう……。

どうしようもない……あぁ、不幸だわ。

でも……不幸だからって諦めるのはもう嫌だ。

トビーを助けたい。無力でも、助かる望みになるのなら私は……

「やります！　私、行きます！！」

私の答えに先生は振り返っていた。驚きに満ちた顔。私の答えが余程意外なものだったらしい。

「そうか、では準備したまえ」

「はい！」

この後、ツィーネに教えられるままに着替え、手を洗う。

私は人生で初めて、手術室に足を踏み入れた。

手術室の真ん中に手術台があり、トビーは既にそこで寝かされていた。

●

私はトビーの頭元に立っている。
手術室を入ってすぐの所で、最も邪魔にならなそうな場所だ。
トビーの首の付け根から3又の点滴ラインが迫り出しており、それぞれに輸液が繋がっている。3つのラインには三方活栓（入院生活が長いのでコレくらいは知っている）と呼ばれるモノが数個取り付けられており、他の薬液も横から注入されていた。
口には太いストローのようなモノが差し込まれており、大きな機械に繋がっている。人工呼吸器、というモノだと思う。
MEのレーベンたちはトビーの足元で呼吸器の2倍はあろうかという機械に、太い太い点滴のようなモノを取り付けていた。この機械は使っていないようだけど、なんだか怖い。使っちゃいけないモノのように感じる。

「術式開始」

アサキム先生の宣言と同時、手術場内の時計が動き出し、空気が緊張するのが分かった。
いきなり、先生はトビーの髪の毛が剃り始めた。キレイな金髪が10cm程にわたって切り落とされた。丸い肌色のスペースが出来上がる。
そのスペースが見えるように穴を開けた布を被せて、先生がメスを握った。
アサキム先生は鋭利なメスを迷いなく振るっていく。繊細かつ慎

重に、しかし大胆にトビーの皮膚が切開され、白いモノが覗いて見えた……。
骨だった。

「ひっ！」

小さく悲鳴を上げてしまった。
先生の手に握られていたモノを見てしまったから……。
先生の手に握られていたのは小さな電気ドリル。鋭利な切っ先がモーター音を響かせて回転する。
先端が骨に触れる。がぁぁ、と嫌な音が耳を劈く。
私は目を瞑った。見たくない。
私は耳を塞いだ。聞きたくない。
人の骨が削られる瞬間を見聞きする事になるなんて、思っても見なかった……。

「出て行ってもいいのよセツコ」

手術道具をアサキム先生に渡していたツィーネが、こちらを一瞥もせずに言った。

「無理しなくていいわさ　――　じゃなくて、いいわよ。キツイでしょ？」
「……いいえ、私、ここに居ます」
「そう」

ツィーネは手術の介助に戻った。
私に出来る事はただ見守ることだけだ。
トビーが助かるように祈る事だけだ。
目は閉じない。耳も塞がない。トビーが受けている苦しみをしっ

かり私も受けるんだ……私にできることはそれしかないから。
先生はドリルで骨に数箇所小さな穴を開けた。
間髪居れずに、今度は電気のこぎりのような器具で頭蓋骨が切断されていく。形容しがたい音が耳に届く。でも耳は塞がない。
音が止んだ頃、髪を剃った形にトビーの頭蓋骨が取り外される。
だが先生の手は止まらない。
素早くメスを走らせ、なにかを切り開いた。
そして、それを捲り上げる。
私の立っている位置からでは良く見えない。しかし手術場に設置されたカメラを通して、テレビ上に中の光景が映し出されていた。
なにかの膜を捲り上げた下には、トビーの脳があった。
その周囲に血の塊……気分が悪くなってくる。

「これより、血腫を除去する」
「アサキム！　血圧が落ちてるわ！　５０台！　心拍数も！」

ツィーネの切迫した声が響いて、私の吐き気は吹き飛んだ。
血圧や心拍数を表示している画面があり、赤い文字が５３ｍｍＨｇと表示されていた。

「輸血とヘスパンダーを全開投与しろ」

アサキム先生が冷静に指示を飛ばした。

「外回り看護師はマップを全部温めておけ。取り急ぎ４単位は使う」
「はい！」
「麻酔科医。ノルアドリナリンを増量して、ボスミンを１アンプル引いておけ」
「アサキム！　心拍数が！」

再びツィーネの悲鳴。
画面上の緑色の文字と波形が変化していく。４０、３０、２０…
…と少なくなっていき、遂にはゼロになる。波形が私でもドラマで見た事のある形になっていた。
横一文字の一本線だ。
つまり ――

「心拍停止」
「トビー！！」

―― あくまで冷静な先生の言葉に、私は気が狂いそうになった。
トビーの心臓が止まってしまった。死んでしまった！
しかし先生は私の叫びなど気にも留めない。

「助手、ＣＰＲだ」
「は、はい！」
「レーベン、人工心肺は行けるな」
「俺を誰だと思ってやがる！　１０分で行けるぜ！」
「５分だ！」
「楽勝！」
「あぁレーベン、僕は君だよ！」

シュランさんが意味不明なことを叫びながら、トビーの足元にあった機械を弄り始めた。レーベンさんも同様に手早い手つきで作業をしていく。
私が怖いと感じた機械……人工心肺というらしい。
アサキム先生がトビーの股の辺りをメスで切り開き、レーベンさんから受け取った太い太い点滴のようなチューブを体の中に挿入した。
トビーの体から抜き出された血液がチューブの中を伝って、人工

心肺に吸い取られていく。レーベンさんたちＭＥが人工心肺を操作しているようだ。

「血だぁ！！　俺は血が見たい！！！」

「あぁレーベン、君こそ鮮血の貴公子だよ！！」

言動とは裏腹に仕事は正確にこなしているようで、アサキム先生からの注意はなかった。

先生は反対側の股に人工心肺からの血を還す点滴を刺し、縫い付ける。それを介して血液がトビーの体の中に戻っていき、助手が心臓マッサージを中止する。

「よし、手術をさい　――」

――　ボン！

小さな爆発音にアサキム先生の声が遮られた。

音源は人工心肺だった。

「馬鹿な！　人工心肺がトラブった！　ピクりとも動かない！」

「……これも太極の意志か……」

アサキム先生の声が聞こえた。

弱音だ。この言葉は、どう聞いても弱音にしか聞こえない。

つまり、もう手がないということ！？

トビーが死んでしまう！　嫌、そんなの絶対に嫌よ！

「先生！　手術を続けてください！」

「しているさ……」

周りを見ると助手が心臓マッサージを再開し、麻酔科医が薬を注

入していた。
だけど先生の顔には諦めの色が濃い。
どうして……？

「今回も運命には逆らえないようだ……通算、１５５００回目か」
「諦めないで！」

どうして、簡単に諦めてしまうの！
トビーはまだ死んでない、生きてる！　患者の命を救うために全力を尽くすのが医療職者じゃないの！？　先生がなにを見てきたのかは知らない！！　でも諦めないで、アサキム先生！！
私は諦めない！
諦めたくない！！
トビーの命は助ける！！　私のなにを犠牲にしたって構わない！！　トビーだけは絶対に助ける！！

「セツコ？　なにをしている？　止めるんだ！」

アサキム先生の声色が変わった。
慌てて私を止めようとしたアサキム先生の手に腕をつかまれた。
患者の命を救う神の手だ。今、それを差し伸べるべきなのは私じゃない！
私は先生の手を払って、

「――――――――」

「トビーを助けて！！」と叫んだ。
確かに私は叫んだ。
でも口は動くのに声が……出なかった。
しかし出なかった私の叫びに代わる絶叫が手術室に木霊していた。

「人工心肺が動き出したぞ！」

レーベンさんの声だった。

人工心肺が動き出している。モーターで脱血された血が人工心肺を通してトビーの体に戻っていく、

手術場内に小さな歓声が沸きあがり、助手は心臓マッサージを中断した。後はアサキム先生が手術に戻り、トビーの血腫を取り除けばトビーは助かる！

きっと、助かる！

事はそんなに単純じゃないのかもしれないけど、私には彼が助かる予感が　――　いや、確信が持てた。

「そうかセツコ……君はスフィアに声を捧げたのか……」

「――――」

「スフィア？」――　私の呟きはやはり声にならなかった。

「いいだろう。僕も希望を捨てない。共にこの檻を抜け出そう。いつの日か、君を壊すことを夢見て」

先生は手術に戻った。相変わらず言っている事は意味不明だったけど、先生の腕なら手術はもう問題ないだろう。

良かった……これでトビーは助かるんだ……本当に良かった……。

まだ……伝えていない……やっと気づいた私の栄光の星を……私の気持ちを……

「セツコ！？」

ツィーネの声が聞こえたのが最後、私の意識は途切れた　――……

トビーの手術は成功した。

あの後、心臓が動き出し問題なく人工心肺も離脱し、骨も戻して固定して手術は終了したと聞きました。

トビーには奇跡的に後遺症は残らず、順調に回復しています。ただ事故直前の記憶は抜け落ちてしまっているそうですが、命あっての物種です。本当に助かってよかった……アサキム先生にはもう足を向けて眠れません。

アレから1週間が経過し、トビーはリハビリしながら入院生活を続けています。

「たるんどるぞトビー！　手術から何日たったと思っている！」

「デンゼルのオッちゃん！」

「日々のたゆまぬ努力だけが、お前を栄光の星（グローリースター）とするのだ！」

「分かったぜオッちゃん！　俺は栄光の星（グローリースター）になってみせるぜ！」

デンゼルさんの叱咤激励を受けて、今日も病室でトビーはヒンズースクワットを繰り返しています。飛び散る汗、沸き立つ男の香り……正直、私には刺激が強いです。

私の病室の患者は相変わらず変わった人たちばかり。

「のう？　セツコちゃん？」

ジエーさんが私のベッド柵にもたれかかり、首を「わし、可愛いじゃろ？」とアピールするかのように曲げて、目をキラキラさせています。

「ねぇ、ぶって？」

嫌です。気持ち悪い。

ジエーさんは最近趣旨変えして、ぶりっ子しながら殴打を要求してくるようになりました。厄介な上に気持ち悪いので無視しています。

しかしジエーさんは相手にしなければしないで、駄々っ子のように床に寝そべってわめき始める。

「いやじゃいやじゃ～、ぶってくれなきゃいやじゃ～！」

「喧しいのよさ　――　じゃなくて喧しいわよ、このクソ患者ども！」

ツィーネが顔を阿修羅面【怒り】にしながら入ってきた。

「他の病室から苦情が来てるわよ！　６６６号室は馬鹿ばっかりだってね！」

「メシアキター！！」

ジエーさんは絶叫すると、ツィーネの足元に老人とは思えない動きで這いより腰を突き出した。

もちろん、ツィーネの行動は無視。

でもツィーネに女王様チックな雰囲気があるからか、ジエーさんは「ほ、放置プレイじゃ？」と頬を染めていました。もはや手に負

えません……。

「トビー・ワトソン！　勝手にトレーニングをするな！」

「げっ、やべ！」

ツィーネの怒声にトビーは肩を引っ込めてベッドに逃げ去り、カーテンを閉めてしまいました。デンゼルさんに至っては、ツィーネが入ってきた直後にロッカーの中に隠れていました。鍵をかけてしまいましょうか？

病室の患者の始末をつけたツィーネが私に話しかけてきた。

「ごめんねセツコ。女部屋の病室が空かなくってね、空いたらすぐに移動させてあげるから」

【いいんですよ。私は嫌いじゃないですよ、この部屋】

手元にもっているホワイトボードに文字を書いてツィーネに見せた。

あの手術以来、私は喋る事ができなくなった。口は動かせるし、食事も取れる。でも声だけがでない。どうやら、声門を支配している神経がスフィアに冒されてしまったらしいです。

診察をしてくれたアサキム先生はこう言っていました。

「この『エリア』という名の無限獄から抜け出す鍵は、セツコ、君かもしれないな」

相変わらず、アサキム先生の言葉は理解不能です。

きっと思考回路が私たち常人とは違うのでしょう。

声が出なくなった以外で変わった事と言えば、飲む薬の量が増えた事くらいで、トビーも元気だし以前と変わらない入院生活に戻ったんです。

……ああ、そうそう。
もう一つだけ変わったことがありました。
【そうだツィーネ】

「なに、セツコ？」

ツィーネは笑顔で答えてくれました。
【私、勉強して医療職者になりたいです】
そう、夢が　――　私だけの栄光の星が見つかりました。
これがもう一つの変化です。

「へぇー、どうしてそう思ったの？」

【私って入院生活長いですから、患者さんの気持ちは良く分かるんです。だから医療従事者になって、患者さんの力になってあげたいって最近思うようになりました】
私は味覚が無いのと、声が出せない以外は至って健康です。
免許を取って仕事をするのに少し障害があるかもしれませんけど、きっと誰よりも患者さんに親身に接することができるのではないかと思います。
あの手術の前、トビーに助けられたこの命を、誰かのために使いたいと思ったんです。
トビーを助けたアサキム先生のように、なりたいと思ったのです。
不幸を嘆いていただけの私は死んだ。
私の栄光の星はまだおぼろげで形は分からないけど、前を向いて、後悔しないように生きて行きたいです。

「凄いじゃない！　応援するわさ　――　じゃなかった、応援するわセツコ！」

【ありがとう、ツィーネ】
私はもう不幸なんかじゃない。
いえ、不幸なのかもしれないけど、こんな良い人たちに囲まれて私は幸せです！
この幸せをみんなに返していきたい。
だから私は頑張ります。

「目指せ！　栄光の星！」

トビーが我慢できなくなったのか、ベッドの上で腹筋運動を始めたようです。
ツィーネに説教されるトビー。
退屈だった入院生活は変わり、私の生活は色鮮やかになったように思います。今は無理だけど、いつの日か私の気持ちを伝えられる日が来るといいなぁ。
ありがとう、トビー。
トビーはツィーネに説教されて、しょげ返っていたけれど　――

――こんな日が、ずっと続きますように　――……

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。
『エリア』には個性豊かな人間が沢山いる。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない。

薄幸処女　～目指せ！　栄光の星！～（後書き）

＜キャラ紹介＞

セツコ・オハラ：カイメラ医院で療養生活を送っている女性。味覚がなくなったりとにかく不幸。トビー・ワトソンに気がある。

トビー・ワトソン：プロ野球集団「栄光の星」を目指している青年。心臓に奇形があり、今回は手術目的の入院。セツコの不幸に巻き込まれる……。実は婚約者がいるとか、いないとか？

アサキム・ドーウィン：カイメラ医院の凄腕医師。白衣ではなく黒衣を着ており、「ブラックなんたら」と呼ばれる程の敏腕。言っていることは基本的に意味不明だが、「エリア」の秘密に感づいているように見える……？

ツィーネ・エスピオ：カイメラ医院の看護師。巨乳で男性患者から慕われているが、怒らせると超怖い。「～のよさ」「～わさ」と言ってしまうことがある。

＜次回予告＞

キョウスケ
「不幸だー！」

エクセレン
「どうしたの？」

キョウスケ

「なんでも作者の通勤中に自転車がパンクして遅刻したそうだ」

エクセレン
「日ごろから整備してないからでしょ」

キョウスケ
「うむ。みんなはタイヤのパンクに気をつけるように」

エクセレン
「じゃあ、次回予告いってみよー」

キョウスケ
「もうすぐ1月も終わりますね。
アニメでの出番はまだだろうか……？
それはさておき、2月にはあのイベントがあるな。菓子メーカーの陰謀の日が、今年もやってきた！
ジェネ高に貧民ＶＳ富豪の戦いの火蓋が切って落とされた?!
戦乱の嵐が巻き起こるジェネ高に救いはあるのか？
なぜかモテナイあいつはチョコをもらえるのか？
次回、スパロボ学院、俺たちゃヴァルストークファミリー５　～仁義なき戦い！　見よ、ジェネ高は嫉妬に燃えている！～に、ランページ・ゴォォォスト!!」

エクセレン
「義理チョコもよろしく!!」

はい、今回は病院ネタですよ。

セツコ編……手間取った。
なんか、書いてて疲れました。
やっぱり書くならアホな話かぎりますね。
ちなみに人工心肺は脳外科の手術で使ったりしません。
人工心肺、超怖いッス……管理してるＭＥさんには脱帽。調子に乗って実名のクスリとかも出してます。
私の文章で、手術場の中を想像できたあなたは医療従事者に違いない（断言）！
ちなみに今回は「エリア」の秘密に少し触れてみたりしてます。
あと、ジミにＰＶ１万突破しました！　やったね、ドンドンパフパフ（自演）。これからもジミに頑張ります！

ロボッツさん、ケルンバイターさん感想ありがとうございました！
ラノベのパロディは好きなんですけど、最近ストックがなくなってきました。かと言って仕事終わりに小説書いていると、あまり読んでいる暇がなかったり……。
数読めないので、面白いラノベあったら是非に教えてもらいたいです。

ではでは、次回も宜しければお付き合いください。

俺たちゃヴァルストークファミリー5　～仁義なき戦い！　見よ、ジェネ高は嫉

＜注・意・事・項＞
絶賛、キャラ崩壊中！
炎の江戸っ子ファイターがキャラ崩壊しています！
読む方によっては気分を害される可能性があります！
それでもよいという方はどうぞ！

注意：バレンタインネタ。完全にフライングです。
「俺は～」で始まるパートは1人称。それ以外は3人称で書いています。
やったらいけないことらしいですが、あえてやりました。
読みづらかったらすいません！

――　聖暦２０１１年　２月１４日　――

とある少年が言った。

「男の価値はハーレムの女の数と貰ったチョコの数で決まるんだ」

彼の周りには３人の美少女がいる。

「統夜、私のチョコを受け取ってください！」
「おお、カティア。ありがとう」
「はい、統夜！　アタシからもチョコレートだよ！」
「テニア、ありがとう。今日も可愛いよ」
「手作りのチョコを綺麗に包装して好きな人に渡します、とメルアは顔を赤らめながら言いました」
「やぁ、メルア。今日も口調が面白いね。チョコ、ありがとう！　みんな、大好きだよ！」

少年は３人の美少女と両手に一杯のチョコレートを持っていた。

――　世界は【ラヴ】の炎に包まれた！！　――

２月１４日。
セントバレインタインデー。
無垢なる乙女たちが好きな男子にチョコを渡し、思いを伝える１年に１回の大切な日。

義理チョコだとか、最近は友チョコだとかあるらしいが、そんなモノは邪道だ！
乙女が、本命チョコ１つを胸に抱き、好きな男子にカミカゼアタックする日こそ、セントバレンタインデーなのである！

――世界が【ラヴ】で溢れかえる日、ジェネ高も【ラブ】で溢れかえっていた――

女子にチョコを渡され、だらしない笑顔を浮かべる男子たち。
実に幸せそうである。

――だが！！――

光あるところ影あり。
正義あるところ悪あり。
天上に昇る気持ちの男子たちがいれば、当然地獄に突き落とされる気分の男子たちもいた！

「おいタスク。お前は貰ったか？」
「愚問だなカズマ。当然、ゼロだ」
「裏切ったら許さねえぞ」
「当たり前だカズマ、俺たちは心友（しんゆう）じゃないか？」
「おお、心の友よ！」

何故か高校の密集する地域「エリア」１のマンモス高ジェネ高に通う２年生――カズマ・アーディガンが、悪友のタスク・シン

グウジとガッチリと強い握手を交わしていた。
カズマは外見も性格も悪くない。
だが彼女居ない暦＝年齢の、彼女が欲しいお年頃の男の子であった。
そう ――

――弱者は死滅（モテナイ・オトコ）していなかった!!――

カズマは血眼になって食料（チョコレート）を探していた!
靴箱を、机の中を、ロッカーの中を。出てきたのは賞味期限の切れたヨッチャンイカだけだった。

「神よ! アンタに慈悲の心があるのなら、俺たち飢えた者たち（ラブ・サバイバー）を救いたまえ!!」

信仰心のないカズマが膝をつき、天に祈るという世に珍しい日がバレンタインデーなのである。
彼の傍を、3人の美少女をはべらせた美少年が素通りしていく。

「いやー、今年もこんなに沢山チョコもらっちゃったよ」
「統夜! 私たち以外から貰わないでと言ったでしょう!?」
「いやだなカティア。コレは義理チョコだよ。後でみんなで食べよう」

殺すッ!!
紫雲 統夜。面識は無いが、貴様だけは絶対に許さない! 貴様は全人類の敵だ! カズマの眼光は殺意で満ち満ちていた。ファンタジー世界の大魔王でもこうはいかないだろう。

カズマは立ち上がり、タスクと手を組んだ。
「心友(とも)よ！　今こそ立ち上がるとき！」
「応ッ！　あのイケ好かねえイケメン野郎に引導を　――」
「あ、居ましたわ！　タスク！」

タスクの言葉を遮った少女がいた。
レオナ・ガーシュタイン。金髪の美少女で、手には大きな箱を持っている。顔を真っ赤にしながら、タスクに箱を突きつけてきた。

「べ、別に貴方のために作ったんじゃありませんからね！　ほ、本命じゃありませんわよ！　義理ですわ、義理！　超義理チョコですわ！」
「レオナちゃぁーん！　１万年と２０００年前から愛してるうぅぅうぅぅっ！！」

タスクがレオナに抱きついて殴り飛ばされていた。
裏切り者め！
この世には神も仏もいないのか！？
カズマが絶望のあまり、地面に突っ伏して泣き出した。
そのとき。

「待てえええぇぇいッ！！」

頭上から声が聞こえた。
カズマも統夜もタスクも、声のした方向を見上げる。
ジェネ高の校舎の屋上に、太陽を背にして立っている男のシルエットがあった。

「な、何者だ！？」

統夜が悪役っぽく叫んでいた。
男のシルエットは良く見ると紅い。
真紅の鎧を全身に纏った男が、ジェネ高校舎の屋上に立っていた。

「テメエらに名乗る名前はねえんでえ！！」

真紅の鎧の男が屋上から跳躍した。
危ない！　誰もがそう思ったが、男は２０m近い高さから問題なく着地する。
真紅の鎧の男の顔は、人の顔の仮面が被られており青い髪の毛がなびいていた。

「遠からん者は音に聞け、近くばよって目にも見よ！！」

鎧の男が急に頭を振って、名乗りを上げた。名乗らないと言っていたのに……そんな突っ込みは通用しそうにない、熱い雰囲気で大声を上げる。

「てやんでぇ、べらぼうめ！　喧嘩１００段、炎の格闘家コウタ・アズマとは世を忍ぶ仮の姿！　その正体は！　嫉妬の炎（ジェラシー・フレイム）より生まれた炎の戦士　――」

鎧の男が手を振りかざすと拳から炎が舞い上がった。
男は統夜に向かって拳を放つ。拳から離れた炎が龍の形を成して、統夜の持っていたチョコートを詰めた袋にを貫通する。
真っ赤砂塵縛（まっかさじんばく）に続く男の奥義、ファイヤードラゴンだ。
「あぁ、チョコが！」という統夜の悲鳴を残し、チョコレートは蒸発し、統夜は心に熱傷を負った。

「――　俺の名前は、しっとファイター・ロア！　待っていろショウコ！　お前のチョコを誰にも渡させたりはしないぜ！！」

カズマの前に救世主が舞い降りたのだった。

スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～
俺たちゃヴァルストークファミリー５　～仁義無き戦い！　見よ、ジェネ高は嫉妬に燃えている！～

救世主の名前は「しっとファイター・ロア」と言った。

「しっとファイター・ロアは長くて呼びづらいな！　俺を呼ぶときはしっとファイターでいいぜ！」
「２文字しか略せてねえし！」

カズマは反射的にしっとファイター・ロアにツッコみを入れていた。

赤き鎧を身に纏い、弱者のために拳を振るう正義の戦士。
その名は、しっとファイター・ロア！
しっとファイター・ロア改めしっとファイターの手により、悪の組織【ハーレム】の大幹部「紫雲　統夜」は倒れた。統夜は膝をつき、燃え尽きた手提げ袋を見ている。
中にはチョコが入っていた。
お菓子メーカーの陰謀に踊らされた女子たちから統夜への供物である。

「よ、よくも、女の子たちの気持ちを踏みにじっ　――――ッ！」
「てやんでえ、べらぼうめ！！」
しっとファイターが叫んだ。
「他の奴らはだませても、俺の目は誤魔化かせないぜ！　カイザースキャンを持ってすれば、お前がまだブツを隠し持っているのは丸見えだ！！」
なんだって！？　しっとファイターの言葉にカズマは衝撃を覚えた。
紫雲　統夜。
ハーレムを地で作っているモテモテイケメン野郎！　ジェネ高全男子の敵は、手提げ袋一杯のチョコレート以外にも隠し持っているというのか！？
しっとファイターに燃やされたのは板チョコなら５０枚は入りそうな手提げ袋だった。はたして、統夜はアレ以上の量を隠し持っているのか？
結果は、しっとファイターの言葉通りだった。
統夜は懐からチョコレートの箱を取り出した。いつもはべらせている３人娘からのプレゼントだろう。
まるで瞬間湯沸し沸騰機のように、カズマの脳細胞は灼熱した。
「ゆ、許せねえ！」
独占禁止法を知らんのか！？
１つ……また１つと、統夜にチョコレートが流れていく度に、カズマに来る可能性のあったチョコたちが減っていくのだ。例えチョコがもらえる可能性がゼロだったとしても、統夜のような男は許せない。カズマは激しい怒りを覚えた。

何故、統夜ばっかり？
何故、カズマはモテない？
何故、カズマはチョコレートをもらえない？
そのとき、カズマの中で何かが切れた。

――コ・ノ・ウ・ラ・ミ！　ハラサデオクベキカ！

心に炎が燃え上がる！
それは、嫉妬、というものであった！

「おう、兄ちゃん！　良いモン持ってんじゃねえか！」

しっとファイターがカズマに手を差し伸べていた。

「良い嫉妬（ジェラシー・フレイム）の炎だぜ。兄ちゃんなら、きっと、しっとファイターになれるはずだ！」
「しっと、ファイター……？」
「さあ、戦士よ立ち上がれ！　今こそ弱き者のために立ち上がる時だ！　とうっ！」

刹那、しっとファイターが真っ赤な体躯を跳躍させた。
空中高く飛び上がったしっとファイターは、太陽の光を背に受けながら、

「しっとキィィィクッ！！」

渾身の飛び蹴りを繰り出していた。
悲鳴を上げる間もなく、しっとファイターの蹴りが統夜に――
統夜の持っていたチョコレートに直撃する。

――バキボキッ

快音を上げてチョコは砕け、統夜は蹴り飛ばされて気を失った。
「いやー、統夜！」などと口々に叫びながら3人娘が駆け寄って行った。

「成敗ッ！！　悪は滅んだぜ、べらんめえ！！」

しっとファイターは、まるで仮〇ライダーが怪人を倒したときのようなポーズを決めている。

「す、凄い！　これがしっとファイターの力！」
「そうだ。兄ちゃんなら、このマスクを被れば、きっと、良いしっとファイターになれるはずだぜ！」
「こ、このマスクは！」

しっとファイターが両手でマスクを差し出した。
カズマの前にマスクは2枚ある。
1つは、緑色で木目が入っており、骨董品のように見える。おどろおどろしい雰囲気を纏っており被った者の人格を豹変させそうな、被ると呪われそうなマスクだった。
もう1つは、何の変哲もない白いマスクだった。
南米のプロレスラーが好みそうな白いマスクには、怒っているようなツリ目が描かれており、その周囲に炎が象られている。
見ているだけで腸が煮えくり返りそうな炎！　真っ赤な炎！
そう。これは嫉妬の炎だ。
カズマは迷うことなく炎のマスクを手に取った。

「流石だ兄ちゃん！」

しっとファイターが緑色のマスクを捨てた。
捨てられたマスクは大きな石の上に載った。人の顔ぐらいの大きさの石だったため、ちょうど石が緑のマスクを人が被ったように見えた。

――ジャキンッ、ズゴッ!!

直後、緑のマスクから骨の針が突き出した。骨針は石を貫通して、風穴を開ける。カズマが被っていれば脳を貫かれていただろう。カズマは冷たいモノが背中を駆け抜けるのを感じていた。

「さあ兄ちゃん、マスクを被れ!」
「嫌だ!!」

カズマは即答した。だがしっとファイターは許してくれない。

「ええーい、てやんでえ、べらぼうめ!!」
「な、なにしやがる!? 止めろ!! 俺はまだ死にたくねえ!!」

しっとファイターが炎をマスクをカズマに被せてきた。
凄い力でカズマは抵抗する事ができない。

「安心しろ!! しっとだ、お前はしっとファイターになるのだ!!」
「は、離せジョッガーーー!? うおっ、うおおおおおおおおおおおぉぉっ!!!」

カズマの顔が完全に炎のマスクで隠された、そのとき。

――真っ赤な衝撃がカズマの中を駆け抜けていた！

熱い……熱い衝動が体を包んでいく。体の奥にメルトダウン寸前の溶解炉があるかの如く、血が沸き立つのをカズマは感じていた。感情が爆発する。

「しいいいいいいいっとッ！！！」

憎い！　チョコレートを貰えるモテメンどもが憎い！

嫉妬の炎がカズマの心を支配した。

マスクの怒った目を象ったマーキング周辺に炎がメラメラと揺らめいていた。学生服に白い覆面を付け、目の周辺から炎が上がっている。それが今のカズマの様相だ。

「お、おいカズマ、大丈夫か？」

タスクが心配して声をかけてきた。

「裏切り者には死を！」

「な、なに言ってんだおまえ？」

「しっとッ、顔面ファイヤー！！」

カズマのマスクの目から炎が噴出した。

タスクが持っていた大きなチョコの箱に直撃する。箱は黒焦げになり、中のチョコは溶けた。

「カズマ、てめえ　――」

「しっとパンチ！」
「――　うんぎゃー！」

裏切り者タスク・シングウジは元心の友の拳により沈んだ。
カズマが倒れたタスクの頭を踏みつけて叫ぶ。

「しっとファイター2号、爆誕ッ！！」

今、ここに、新たなる炎の戦士が誕生した！
その名も、しっとファイター2号。
中身はカズマなしっとファイター2号に、しっとファイター・ロアこと1号が近づいてくる。

「2号！　今こそ、弱者のために立ち上がる時！」
「応！」

2人のしっとファイターが力強く握手を交わす。その姿は実に壮観であった。
この出来事は後世に「ジェネ高の誓い」として語り継がれていく……ことになったり、ならなかったり……？　とにかく、戦士は立ち上がった！　弱者の弱者による弱者のための学校を作り上げるために！
今、世界の悪（モテメン）に立ち向かう弱者の味方（モテナイオトコたち）が手を合わせたのだ。もはや恐れるものなど何処にもない！　泣き寝入りするときは終わったのだ！
進め、しっとファイターズ！
戦え、しっとファイターズ！！
弱者（モテナイオトコ）の未来は君たちの双肩にかかっている！！
弱者（モテナイオトコ）の明日を守るため、しっとファイターズはジェネ高校舎を見上げた。

「カイザースキャン！」

一号は指で輪を作り、その間から校舎を見る。

「いるぞ、女子からチョコを受け取ろうとする悪（モテメン）が！　待っていろショウコ！　お前のチョコは誰にも渡さないぞ！」

「先輩！　やりましょう！」

2号の声に1号が頷く。

しっとファイターズは拳を空に掲げて叫んでいた！

「「モテメン全滅大作戦だ！！」」

しっとファイターズは校舎内に突入して行った。

●

俺の名前はリュウセイ・ダテ。

今日は待ちに待ったバレンタイン・デー。

ジェネ高内ではチョコの受け渡しをしている男女の姿がチラホラ見受けられた。渡す方も受け取る方も緊張した面持ちをしている。

中にはリンゴのように赤面している女子もいた。

いいね、青春だぜ！

俺もア○ロダイAやビーナ○Aみたいな女性型ロボットからチョ

コレートを貰いたんモンだ！

「リュ、リュウ！」

「ん？　なんだマイか。どうした？」

俺が廊下を歩いていると、ジェネ高の後輩のマイ・コバヤシが声をかけてきた。

マイは3年の先輩であるアヤ・コバヤシの妹さんだ。桃色の髪の毛と幼い容姿が特徴的な女の子で、最近、俺たちがやっている映研「ＳＲＸ団」に入ってきた娘だ。

俺のロボット談義にも着いて来れる、将来有望な逸材だった。

そのマイが顔を赤らめてうつむいている。

「よお、どうしたマイ。顔が赤いぞ。熱でもあるんじゃねえか？」

「リュウ！　渡したいものがあるんだ！」

マイは大きな声で言うと、手に持っていた小さな箱を俺に突き出してきた。箱を持つ手は震えている。

何だろう？　箱の大きさは長方形、１５ｃｍ×２０ｃｍぐらい。

うーん、マイから渡されるモノって想像つかないぞ。

……はっ！

もしや、中身は超合金のロボットフィギアではあるまいな！？

いや、このシュチュエーションで渡すのだからそうに違いない！

「サンキュー、マイ！　ありがたく頂戴するよ！」

「リュ、リュウ！　聞いて、私、リュウのことが　――」

「「待てぃッ！！」」

俺がマイから超合金フィギアの箱を受け取ろうとしたとき、大きな声が廊下に響いてきた。

声の方を振り返ると、赤い鎧をつけた男と白いマスクを被った学生服の男がいた。
うん。不審者だ。
赤い方の不審者が俺に指を突きつけてきた。
「純(マイ)なる子どもの心を操り、己が欲望病(リュウセイ)を達しようとする者よ！　恥を知れ！　人、それを、エゴと言う！！」
「誰だ！？」

不審者の語りに俺は反射的に答えていた。
なんだか分からないけど熱い奴だ。ここで正体を訊かないのは失礼に値する。アニメやドラマ的に言えば「お約束」という奴だぜ。
「てやんでえ！　嫉妬の炎(ジェラシー・フレイム)の戦士、しっとファイター・ロア1号！」
赤い方がバーンとポージングする。カ、カッコいい！！
「同じく、しっとファイター2号！」

学生服の方も負けじとポージング。くそ、俺だって！
「「モテメンめ、覚悟しろ！！」」
「受けて立つぜ！」
「リュ、リュウ？！」

俺だってカッコいいポーズぐらいできるぜ！　見ろ。この華麗なるＪＪ立ちを！　斜に構えたポーズが最高にカッコイイ。惜しむらくは帽子が無いことぐらいか　――
「成敗！！　しっとブロー！！」

「げふうっ！？」

――赤い方のボディブローが腹に突き刺さった。

野郎、ポージングや合体中は攻撃しちゃ駄目って知らないのか！

暗黙の了解って言葉を知らんとみえるぜ！

情けない事に俺は一撃でナックダウン。

廊下に横たわりながら、学生服の方がマイから箱を奪い取るところを見た。

学生服は箱を胸に抱き、強くハグをして、

「しっとブリーカー！　死ねぇ！！」

箱はグシャグシャに潰された。

「よし。2号、次に行くぞ！」

「はい、先輩！」

不審者2人組みは走り去って行った。

俺の超合金が！　畜生、覚えてろ！

●

俺の名前はキョウスケ・ナンブ。

今日は待ちに待ったバレンタイン・デー。

俺にはエクセレンという彼女がいる。エクセレンは俺にチョコを

プレゼントしてくれるだろう。俺の場合、チョコなしという悲惨な事態は確実にあり得ない。
しかし貰えると分かっていても、バレンタインデーに貰うチョコは格別だ。

「キョウスケ」
「む、なんだ。アルフィミィではないか」

教室でチョコを待っていた俺の前に現れたのは、恋人のエクセレンではなく、ジェネ高1年生のアインスト・アルフィミィだった。
彼女はツルペタ寸胴な完璧ロリータ体形をしており、ジェネ高では密かにファンクラブが結成されているとの噂がある程だ。
アルフィミィは手の平大の小さな箱を持っていた。
2月14日という日程から中身は容易に推測できる。
しかしアルフィミィはアホのアクセルと交際していたはずだ。

「はい、キョウスケ。義理チョコですの」
「なんだ……義理か」

俺は、ほっと胸を撫で下ろすような感覚とガッカリと肩を落とすような感覚に見舞われた。
アルフィミィの声はエクセレンに似ているからな。それで残念だと思ってしまったのだろう。
本命が貰えなくて残念とかはあり得ない。
俺はエクセレン一筋なのだ。断じて、ロリコン、ではない。
……しかし、義理でもチョコが貰えるのはやぶさかではない。

「悪いなアルフィミィ。ありがたく頂戴す　――」
「「待ていッ！！」」

教室の扉が激しく開かれた。
赤い鎧をつけた男と白い覆面をした学生服男が立っていた。
なんだコイツラは？
明らかに不審者だった。
赤い方が俺に指を突きつけてきた。

「己が欲望に忠実なる者よ！　欲望に任せた勝負は何も生まず、いつか身を滅ぼすだろう！　人、それを、博打と言う！」
「誰だ？」

失敬な奴だ。
俺が欲望に忠実だと。俺はしっかりと節制しているぞ。種銭を作るためにな。
しかしなんだろうな？　赤い方の文句を聞いていると、俺もこう言った台詞を口にしてみたくなる。まぁ、俺のガラではないのだが……。
俺の質問に、２人組の不審者が答えた。

「べらんめえ！　嫉妬（ジェラシー）の炎の戦士、技のしっとファイター・ロア（1号）！」
「同じく、力のしっとファイター２号！」

２人同時にポーズを取る。

「「モテメンめ、覚悟しろ！！」」

なんだコイツらは？　馬鹿じゃあるまいか？
馬鹿はアクセルだけで間に合っている。
俺は奴らを無視してアルフィミィから義理チョコを貰うことにした。

「危ない！　しっとフライングドロップキック！！」
「ぐはっ！」

赤い方が飛び蹴りをかましてきて、俺のわき腹に鎧で守られた足が突き刺さった。
周囲の机を巻き込みながらを吹っ飛ばされる俺。はっきり言って、かなり痛い。

「今だ！　必殺、しっとデスク！！」
「ちょま　――　ぎゃ！」

学生服の方が学生机を掴んで投げてきて、転んでいた俺が避けられるはずもなかった。
顔面に机が直撃した。めまいがする。視界がぼやけて俺はその場に倒れた。

「よし！　チョコは死守したぞ！」
「やりましたね先輩！　弱者に配りましょう！」
「おい、そこのメガネ！」
「ひっ、ボク！？」

クラス委員長のエイタ・ナガタの方にアルフィミィの義理チョコが投げられていた。

「モテメンは滅びた！　安心して生きるがいい！」
「あ、ありがとうございます！」
「先輩、次に行きましょう！」

野郎……あの不審者たちめ、人が貰うはずだったチョコを……。
本命でもないのに、何故、俺がこんな目に合わなければならんの

だ……？
この恨み、忘れんぞ！

●

俺の名前はブルックリン・ラックフィールド。

今日は待ちに待ったバレンタイン・デー。
俺はクスハ・ミズハのことが好きだ。
交際している訳ではないが、彼女は毎日俺に弁当を作ってきてくれる。味は良いし、栄養バランスも取れたクスハの弁当は俺の心のオアシスさ！
毎日弁当を作ってきてくれるようなクスハだ。
きっと……きっと、チョコも作ってきてくれるはずだ！
きっと、たぶん、メイビー……いかんいかん、クスハを信じるんだ！
クスハは絶対にチョコを俺にくれるはずだと！

「ねーねー、ブリット君」
「なんだい、クスハ？」

昼休みの屋上で食事を共にしながら、俺は極めて平静に返答した。
来たか！　ついに来たか!?　バレンタインデーだぞ、内心は平静でいられるわけもない！

「私、チョコを作ったの～」

「本当かいクスハ？　ありがとう！」

やったー！　万歳！　ブルックリン・ラックフィールド、高校２年生にして遂に本命チョコをゲットであります！

嬉しい。クスハからチョコが貰えるのなら死んだって構わない！

クスハはチョコが入っていると思われる箱の包装を剥いだ。

箱を開けるとチョコが見えてきた。

一口大の大きさのチョコが６個可愛らしく並べられている。

いいなぁ。幸せだなあ……ただ、一つだけ気になる点があった。

――　チョコが緑色をしていた

しかも見覚えのある色だ。

「……クスハ。これは？」

「えへへ、クスハ汁を混ぜて作った特性チョコレートだよ～。ブリット君の健康のために頑張っちゃった～」

な、なんですと――――ッ！！？

オウッ、マイッ、ガット！！　甘美なスイーツが一瞬で毒物に早変わりだぜ！！

クスハ。チョコレートってお菓子だから、栄養バランスなんて考えなくていいんだよ？　菓子の栄養を考えるぐらいなら、３食の栄養バランスを考える方が有意義だし、意味があるんだよ？

「はい、ブリット君。あ～ん」

クスハがクスハ汁チョコを一粒取り、俺の方に差し出してきた。

……ズルイよクスハ……君の笑顔は天使だよ。

好きな娘が俺のために作ってくれたチョコ……これを食べずば、まさに男子の名折れ！　やってやる！　食べてやる！　クスハ汁チョコを！！

俺は意を決して口を開いた。

「あ～ん　――」

「「待てい！！」」

そのとき、屋上の扉が轟音と共に開いた。

赤い鎧をつけた男と白い覆面をした　――　ってあれ？　カズマじゃないか？　目から炎が上がっている白い覆面をしたカズマが屋上に乱入してきた。

覆面を被ったカズマが口上を述べ始めた。

「己の力に溺れる者は、より大きな力の持ち主の前に必ず破れ、己の不明を悔いることになる！　人、それを、滅殺と言う！！」

「一応聞いといてやる……誰だ！？」

声を聞いて分かった。覆面の方はカズマだ。

「愛と真実の戦士、しっとファイター2号！！」

「同じく、嫉妬（ジェラシー）の炎（フレイム）の戦士、しっとファイター・ロア！！」

「ちょっと先輩！　同じく、じゃないですよ！　違うじゃないですか！？」

「てやんでえ！　男はいつでも胸に炎を抱いているもんだ！！」

江戸っ子みたいな口調で赤い方が答えていた。

……なんだ、コイツは？　カズマも……完全に不審者だ。

しかし今は好都合だ。

カズマたちがこの場を乱してくれれば、俺はクスハ汁チョコを食

べられない！　クスハを傷つけることなく、この状況を抜け出す事が出来る！
ありがとう、しっとファイターズ。
君たちは俺の救世主だ！

「……先輩」
「あん？　どうした2号？」

カズマが赤い方に言った。

「奴らは……見逃してやりましょう」
「なんだと！？　バーロー、なにを甘っちょろい事言ってやがる！　モテメンたちを駆逐して、弱者（モテナイオトコ）が安心できる高校にするんだろ！？」
「でも！　俺はダチを裏切れない！！」

カズマが友情を発動していた。
カズマ、お前……俺はカズマの友情に、怒り、覚えた。
バッキャローッ、お前が状況をかき乱してくれなきゃ、俺はクスハ汁チョコを食べなきゃいけないんだぞ！
お前は知らないだろうけど、クスハ汁の味は悶絶モンなんだぞ！？
カズマ、友情の使い時は今じゃないだろ！？

「そうか、ダチなのか」

しかし、カズマの言葉に赤い方も心動かされていたようで。

「じゃあ、しゃあねえな。おいモテメン、運が良かったな！　その子を大切にしてやんな！！」
「ブリット、達者で暮らせよ！！」

待って！　しかし俺の横にはクスハがいる。叫ぶわけにはいかない。
カズマと赤い方は屋上から姿を消した。
クスハが「じゃあ……」とチョコを再びに手に取った。

「ブリット君、あ～ん」
「あ～～～ん」

カズマ。お前の友情の重みを思い知ったぜ。
覚えてろ！！

●

放課後。

しっとファイターズの戦いは終わった。
実に多くのモテメンを駆逐し、チョコを強奪し、弱者に配ることでジェネ高は夢と希望に満ちる……ジェネ高は救われたのだ。
しかし、まだしっとファイターズの戦いは続く！
しっとファイター・ロア（1号）はある人物を探していた。
ジェネ高の校庭で大声を張り上げる。

「ショウコー。何処だショウコ？　お兄ちゃんがお前のチョコを守りに来てやったぞー！」
「あ、先輩！　あそこ！」

カズマは気づいた。
校庭を抜けた先……校門に2人の女生徒が居る事を。
1人は茶髪の女の子。活発そうな印象受ける少女だ。
もう1人は青い髪の女の子。髪の毛が跳ねており、前者同様に活発な印象を受ける。
2人は談笑しながら校門を出ようとしていた。

「あれは……アリアじぇねえか！！」
「ショウコー！　ショウコー！　アズマ・ショウコー！！」

1号がカルト宗教に取り付かれたように絶叫しながら女の子たちの方に突撃して行った。
カズマ（2号）も1号を追う。
2号の双子の妹アリア・アーディガンと一緒にいるのが、1号の目的のショウコらしい。

「ショウコ！！」

1号はショウコの前に立ちふさがった。

「きゃ、お、お兄ちゃん！　どうしてジェネ高にいるの？　お仕事はどうしたの？」
「バッキャロー！　妹の一大事に、仕事なんかしてられっかい！！」

即答する1号。
一瞬でショウコの顔が青ざていた。

「は！？　お兄ちゃんのバカ！　まだ間に合うかもしれないから、早く仕事場に戻って謝ってきなさいよ！」

「てやんでえ！　こちとら仕事に魂まで売ったつもりはねえんでい！」
「もう、仕事とショウコのどっちが大事なの！？」
「もちろん、ショウコだぜ！」
「バカ　――――ッ！！！」

校門付近でショウコの大声が響いた。
そして1号とショウコは人目もはばからずに口喧嘩をし始めた。
「いつもいつもお兄ちゃんは　――」「ショウコが大切なんだ　――」「妹離れしてよね　――」「ショウコ、チョコは　――」「このバカ兄貴　――」「フォルカと別れろ　――」……などなど。
中には聞くに堪えない罵りあいの言葉もあったが、ここではあえて割愛させていただく。
その様子を見て2号は思った。
兄弟喧嘩って……醜いなぁ。

「アンタ、カズマでしょ？」

アリアが2号の方を見て言った。
2号は思わず「ギクッ」と声に出してしまう。アリアの瞳を見る。
2号がカズマであるということに確信を持っているのが分かる。
それぐらい真っ直ぐに2号にガンをつけていた。

「な、なんのことかな？　俺は愛と真実の戦士、しっとファイター2号だぜ」

2号は、ス○イダーマッ、のようなポーズをして誤魔化してみた。

「アンタ、バカァ？」

2号を見るアリアの視線に蔑みに似た光が灯っていたのを、彼は決して忘れないだろう。

「バレバレなのよ。授業にも出ずになにやってたのよ、このバカカズマ」

「ふ、聞きたければ教えてやろう。なにを隠そう、俺は強気を挫き、弱きを助けていた！」

「はぁ？　意味不明。超キモイんですけどぉー」

2号のマスクの皺が増えた。

目の炎の揺らめきが大きくなっている。嫉妬の炎ではない。2号の瞳には怒りの炎がメラメラと上がり始めているようだった。

現在のカズマはしっとファイターのマスクをつけているため、自分の感情に正直になっている。深層意識からカズマの本音が間欠泉のように溢れ出てきた。

コイツだきゃー絶対に許さん！

日頃からアリアに溜まっていた不満が2号の中で爆発しそうになる。

と　――

「はい」

――アリアがなにかを2号に手渡してきた。

それは小さな箱だった。お世辞にも綺麗とは言えない包装を施されている。

「なんだこれ？」

「はぁ、察しなさいよ。今日がなんの日か分かってるの？」

「……？　バレンタインデー？」

「……あぁ、もう！　そういうことよ！」

アリアは顔を赤らめて2号から顔を背けていた。
2号は手元の箱を見る。乱れた包装紙の端はアリアがよく使っているテープで止められおり、箱も市販されているモノと違い歪だった。
まさか、箱から手作りしたのか……2号がアリアの方を見たが、アリアは決して視線を合わせようとしなかった。

「か、勘違いしないでよ！　家族チョコよ！　みんなで作ったんだから感謝しなさいよね！！」

耳まで真っ赤にしたアリアの指には絆創膏がいくつも巻かれてた。
2号は胸に来るものを感じていた。

（か、可愛い。俺の妹ってこんなに可愛かったっけ ―― い、いかんいかん！　しっかりしろカズマ・アーディガン！　アリアは妹だ！　義理じゃない、血の繋がった妹だ！　い、妹にドキドキするって俺……シスコンだったのか！？）

2号は首を振って否定する。

（俺が女日照りだからそう感じるだけだ！　錯覚だ！　家の妹様は自己チューで人の言う事聞かなくて、妹萌えの小説を書いている変態だ！　こんな奴、全然俺の好みじゃないもんね ―― でも）

2号はチョコを貰えたことが嬉しかった。
それが実妹からだとしても。2号はアリアに聞く。

「食っていいか？」
「はぁ？　アンタ、食い意地張りすぎ。勝手にすれば」

「ではお言葉に甘えて」

2号は包装紙を剥がし、箱を開けた。

色の違うチョコが4つ入っていた。青色、薄緑色、赤色、黒色…

…もしかしたら、それぞれを2号の姉妹が作ったチョコなのかもしれない。

2号は迷うことなく青い色のチョコを手に取った。

マスクに手を掛け、外した。爽やかな風がカズマの頬を撫でていった。

それを見た1号が2号 ―― カズマ・アーディガンを咎める。

「2号！　マスクはどうした！？　嫉妬（ジェラシー・フレイム）の炎はどうしたんだべらんめえ！？」

「……先輩。俺、分かったんスよ」

カズマは失笑すると、手に取った青いチョコを見ていた。

青い色……おそらくアリアが作ってくれたチョコだろう。カズマはチョコの作り方なんて知らない。どうやって色をつけたのかなど見当もつかない。

しかしアリアが、手の中のチョコを一生懸命作ってくれたというのは分かった。

彼女の指の絆創膏を見たからではない。

冷たいチョコから優しい温もりが伝わってくる気がしたからだ。

作った人の思いがチョコには詰まっている。

それを世話になった相手や気になる相手に渡すのがバレンタインデーだ。

カズマは1号と共にモテメンを叩きのめしてきた。奴らはこの世の女性を独占し、弱者（モテナイオトコ）への女性供給率を減少させている最大悪だ。

叩きのめす事になんの躊躇があろうか？

だから、モテメンを成敗したことを後悔していない。

だが、チョコに罪はなかったのではないか？
女の子のチョコまで、潰す必要があったのだろうか？

「こんな事は無意味だ！　先輩、こんな事はもう止めよう！」

カズマは瞳を輝かせながら、1号を説得していた。

「てやんでぇ！　チョコなんてどうでもいいんだよ！　俺はショウコに近づく悪い虫の芽を潰してるだけだぜ！！」
「先輩の馬鹿野郎！　そんなだから、妹さんから邪険にされるんですよ！！」
「グハッ　――――ッ！！？」

カズマの言葉は1号のハートを抉る。

「そうよ！　お兄ちゃんなんて大ッ嫌い！！」
「ゲフゥ　――――ッ！！？」

ショウコの追撃が1号にトドメを刺した。
1号……いや、しっとファイター・ロアは倒れる。あまりのショックに気でも失ったのか。真紅の鎧は消え、青い髪の少年がそこに横たわっていた。
哀れな……嫉妬に狂った炎を戦士は倒れた。武力行使していれば決して勝てなかっただろう強敵（トモ）だ。しかしカズマは勝利した。
勝利の鍵は「愛」だ。
カズマは勝ち誇ったように言う。

「ふっ、悪は滅びる運命にあるのだ」
「「「ああ、その通りだな！！」」」

幾十にも重なった男の怒声がカズマの耳を劈いた。
カズマが声の方を振り返ると、

「カズマ、よくもやりやがったな！」

タスクが激怒しており、

「俺の超合金返せ！！」

リュウセイが吼え、

「仕置きが必要だな」

キョウスケが拳を鳴らしており、

「カズマ！　俺の友情を受け取れ！！」

血走った目のブリットがいの一番に殴りかかってきた。
殴り飛ばされたカズマの視界に入ってきたのは、信じられない光景だった。

――見渡す限りの男、男、男ッ！

ブリットらの他にも、カズマたちの被害にあったモテメンたちが鬼気迫る表情で人垣を作っていた。
無言の連携プレーでカズマを方位し、脱出不可能の状況が出来上がる。
血の気が引くとはこのことだ。
カズマは瞬時に脱出法を模索し、脱出不可能という結果を弾き出すと、ブリッドたちに極めて紳士的に提案をした。

「まぁ、待て諸君。暴力はいけない。話し合おうじゃないか？」
『問答無用ッ！！』
「ぎゃあああああああぁぁぁぁっ！！！」

モテメンたちがカズマを蹴る。蹴る。蹴る。
入れ替わり立ち代り制裁が加えられる。

「ホント、バカばっか。ショウコちゃん、帰りましょう」
「そうね、アリアちゃん」

人を呪わば穴二つ……カズマへの制裁は終わる気配を見せない。
アリアとショウコは、兄を置き去りにして家路を急ぐのだった。

ここはＯＧ高等学院。
『エリア』にある地域最大のマンモス高校だ。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない。

おまけ

お、俺の名前はカズマ・アーディガン。

今、俺は夜のジェネ高の校庭に横たわっている。

空を見上げれば、にじんだ星空が目に入る。体中が痛い。ブリッドたちの反逆によって、俺はすぐには起き上がれそうにない位に痛めつけられていた。

「へ……へへ……でも、これだけは死守したぜ」

握り続けていた右手を開いた。

青いチョコが俺の手の中に残っていた。

アリアの作ったチョコだ。他のチョコたちも何とか無事だ。

よかったぜ……家族に貰ったチョコをなくしたなんて、カッコつかねえからな……。

「しばらく、動けそうにないな……チョコでも食うか」

正直に言うと腹が減った。
せっかく貰ったのだから食べなくては失礼だろう。
俺はアリアの青いチョコを口に入れた。

「ううーむ、デリシャ　――」

舌の上で2，3回転がしたとき、俺はこの世に生まれてきた事を後悔した。

「くぁw背ｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ――――！？〝？？？！！」

声にならない。
この世のモノと思えない味だった。
アリアめ……青い色演出するのに……なに入れやがった……まさか染料か……？
俺は、薄れ行く意識の中で思った……

……あ、今日、営業日誌書いてないや……

俺の意識は闇に落ちた　――……

＜キャラ紹介＞

カズマ・アーディガン：ジェネ高2年生、「ヴァルストークファミリー」の長男坊。彼女およびチョコレート絶賛募集中！　男の中の男を目指しているが、妙な経験ばかり経て変な方向に成長中。最近獲得したスキル「燃える闘魂」「チェンジ、しっとファイター！」など。

ファイター・ロア（コウタ・アズマ）：ジェネ高に通うショウコ・アズマの兄。妹を高校に通わせるため働いており、高校には行っていない。極度のブラコン。フォルカを一方的に毛嫌いし、毎日フォルカ抹殺のための奥義を開発、いつも返り討ちに会っているらしい。

その他大勢のモテメン：今回の被害者。

＜次・回・予・告＞

エクセレン「はいキョウスケ。チョコレートよ？」

キョウスケ「すまんなエクセレン。だができれば本編の方で貰いたかったぞ」

エクセレン「ごめんねキョウスケ。でも仕方ないの。ほら、私、アニメに誘拐されちゃったじゃない？」

キョウスケ「知るか」

エクセレン「も・ち・ろ・ん、助けに来てくれるのよね？」

キョウスケ「……ああ」

エクセレン「うふふ、じゃあ次回予告いってみよー！」

キョウスケ

「アニメではボコボコにされ、この小説ではカグヤにズタズタにされ、最近いいことのないキョウスケ・ナンブだ。

だが遂に俺に出番が回ってきた。

来い、リーゼ！　俺のリーゼが愛と友情の空を切りさく！

そんなわけで（？）、次回は俺の話の予定だ！

内容もタイトルも未定だ！　まさに出た所勝負……分の悪い賭けは嫌いじゃない！

アニメも小説もよろしくな！」

エクセレン

「逆襲！　パッパラ隊もよろしく！」

バレンタインデーまであと2週間……ゆっくり書くつもりだったのが、あっさり掛けてしまったので更新します。

元ネタは「逆襲！　パッパラ隊！」のしっとマスクです！

昔、少年ガンガンで連載していた漫画の続編に当たります。一体、どれだけの人が知っているのでしょうか？

カズマとコウタのコラボはいつかやりたいと思っていました。
こんな形で実現してしまいました。
アホな話でしたが楽しんでいただければ幸いです。

では、また次回でお会いしましょう！

苦労人、世にはばかる　～ふぅ、たまんねぇな、こいつは！　の巻～（前書き）

＜注・意・事・項＞

絶賛、キャラ崩壊中！
コメディー編、久しぶりの更新です！
しかも短めのＳＳです！
閲覧すると、守銭奴キャラのイメージが崩れる恐れがあります。
それでも良いという方はどうぞ！

苦労人、世にはばかる　～ふぅ、たまんねぇな、こいつは！　の巻～

俺の名前はクロウ　――　クロウ・ブルースト。

唐突だとは分かっているが俺の仕事を紹介しよう。

俺の仕事は珍獣ハンター。

世にも珍しい生き物や人物を捜し歩き、その写真や映像データを撮影して売りさばく。専ら買い手は特定の人物に限られているのだが、そうして日銭を稼ぎながら各地を転々とするのが俺の仕事だ。

珍獣を捕獲して売りさばけば、きっと結構な額になるには違いないが、真っ当でない手段で金を稼ぐのは俺の主義に反する。

だから俺は風来坊としてさすらいながら、今日も珍獣を探しているのだ。

……なんだって？

何故、普通の仕事につかないのか、だと？

よくぞ聞いてくれたご客人。

実は……俺は珍獣データを買い取ってくれる買い手に結構な弱みを握られていてな。俺の立場では彼女の指示には逆らえないのさ。

断っておくが、弱みと言っても、汚職やら云々かんぬんの日の光が当たらないような類のものではない。

その弱みはしっかりと数をカウントできるし、汗水たらして働けば……きっと、いつかきっと返済できるはずのモノだ。

……ＯＫ。この説明で、分かってくれたかい？

分からないのなら、端的に誤解しようがないように言っておいてやる。

――俺、クロウ・ブルーストは莫大な借金を抱えているのだ！

それも、ポックリと逝きやがったクソ親父の残したものだった。
俺はその借金を肩代わりし、その返済のために、珍獣データが大好きな奇天烈女科学者に雇われて珍獣ハンターをしているってわけさ。
……ちなみに金額はだな……ユキチ様が余裕で１０００人斬りされる……と言えば分ってもらえるだろうか ――

「……ふぅ、たまんねぇなこいつは」

――俺の気持ちを分かると思う。
まったく、世知辛いねぇ、この世の中はさ。

スパロボ学院 ～ＯＧだよ、全員集合！～
苦労人、世にはばかる ～ふぅ、たまんねぇな、こいつは！ の巻～

珍獣ハンターにだって休息は必要だ。

俺は今、「エリア」と呼ばれる地域にある１件の銭湯に足を運んでいた。
「エリア」と言うのは、理由は定かではないが何故か高校が密集する地域らしく、在校生１０００人オーバーのＯＧ高等学院や不良

の吹き溜まりの影鏡高校など多くの高校が存在していた。
俺は珍獣ハンターとして放浪するうちに、この「エリア」に足を踏み入れていたという訳さ。
別に俺の仕事は場所を選ばない。
珍獣（別に世にも珍しい特技を持つ人間でも可）の写真、肉声、映像が採取できるなら何処でもいいのだ。
俺は愛用のリュックサック「ブラスタ」に映像機器や旅道具を詰め込んで旅を続けているのさ。スタッフは俺1人。機材運ぶだけでも重労働であるのに、逃げ回る珍獣を追いかけまわし、自分1人でその映像を撮影するのは非常に疲れるのものだ。
大事なことだ。
だからもう1度言う。
ひじょ～～～に疲れるのだ。

「たまんねぇなぁ……こいつは」

大きな浴槽で足を延ばして、俺は至福の時を過ごしていた。
風呂はいい。人類の生み出した文化の極みだよ。
鬼の居ぬ間に（珍獣映像を欲する雇い主から催促の電話がないうちに）命の洗濯をしている気分である。適温に保たれた湯が俺の皮膚を温め、歩き通しで棒のようになった足の血流を脈動し始める。
源泉かけ流し……なんて大層なモノじゃなくても、風呂は人の疲れを癒し、心を癒し、活力を漲らせてくれるのだ。この湯が「飲めば若返る神秘のお湯」とかなら申し分ないし、持って帰って売りさばくのだが……そんなお宝があったら、是非俺の前に現れてもらいたいものだ。
手で湯をすくい、顔に浴びせてみた。
気持ちいい。ついでに疲れ切った足を手で揉み解すと、これがまた気持ち良くて、このまま長く浸かっていると体が溶けていくのではとさえ錯覚する快感だった。

「ふぅ、たまんねぇなこいつは」

ハンドタオルは四つ折りにして頭に載せてある。これが紳士の正しい銭湯スタイルだ。

俺のいる銭湯の壁には風流にもフジヤマの絵が描かれている。陳腐とも表現できるだろうが、これはこれで雰囲気が出ていてオツなものである。

……しかし、この銭湯……人が少ないな。

俺以外に人影は見当たらない。

時間帯によるものかもしれないが、俺が今は大きな浴槽を独り占めにしている。小さな子どもならバタ足運動を始めてしまいそうなシュチュエーションだが、俺は紳士だ。そんなことはしないのさ。

と、そのとき。

――ガラガラッ

入り口の引き戸が開いて客が入ってきた。

1人は筋骨隆々の大男。鋭角に鍛え上げられた筋肉は程よく日焼けしており、伸ばしっぱなしの髪の毛が男のワイルドさを助長していた。

「おいカズマ、早く来ねえか！」

「待ってくれよ、ランドの兄貴！」

ランドと呼ばれた大男の後ろを、カズマと呼ばれた普通の少年が付いて入ってくる。

カズマの外見は実に普通だ。体は鍛えこまれてはいるがランドと

違い細身で、左頬に絆創膏、伸びた後ろ髪をくくって短い尻尾が肩にかかっている。

「悪いなカズマ。仕事を手伝って、その礼が銭湯だなんてよ」

「よしてくれよ兄貴。俺、兄貴の手伝いなら喜んでやるぜ！」

「がはは、悪いな！」

ランドがカズマの肩を叩いた。

バチィーン、と銭湯内に反響音がする。とても痛そうで、カズマの顔は歪んでいたが笑っていた。深い信頼関係のある間柄だからできるスキンシップ、と言ったところだろう。

「たまんねぇな、こいつは」

そういえば、俺ってそんな知り合い居たっけな？

昔は居たような気がするが、親父の借金騒動で務めていた会社を辞め、今の雇い主の元で働き始めてから親友と呼べる人間は居なくなったような気がする。

薄情なことに、昔の仕事仲間からの連絡は1本もない。

金の切れ目が縁の切れ目、ってか？

実感が沸く言葉であることが尚更腹立つぜ。

ランドとカズマはと言うと、紳士のルールを心得ているのか、浴槽に入る前にキレイに体を洗い流していた。仲良く背中の流しっこしている様は、何だか、カズマには彼女なんて居そうにねぇなぁと思うのには十分で、構図がなんだかシュールである。

体を洗い清めた2人が俺の浴槽の方に向かってきた。

「垂れ目の兄ちゃん、隣、空いてるかい？」

誰が垂れ目だ。

不躾なのだがランドが言うとあまり勘には触らない。
俺は頷いて隣を空けてやった。
ランドとカズマが浸かると浴槽から湯をが大量に流れ出す。ランドの体積、推して知るべしである。

「がはは、やっぱ仕事あがりの風呂は最高だな！」
「出た！　銭湯で見るヒートスマイルは一際暑苦しいっす！」
「がはは、ぬかせ！」

ヒートスマイル……？
聞きなれない単語に、俺はマナー違反だとは分かっていたが、ランドの方を向いてみた。
ランドは親指を立てて、片目をつむり（ウィンクして）、白い歯を豪快に覗かせながら強烈な笑顔を振りまいていた。

「……たまんねぁな、こいつぁ」

暑苦しいぜ！
その程度がどの位かと言えば、サウナで脱水症状が出る直前まで頑張った後に飲む冷水の気持ち良さを、一瞬で吹き飛ばすだろうレベルの暑苦しさだった。
……凄いモノ見ちまったな。
ヒートスマイルは間違いなく珍獣レベルのレア度はあるだろう。
カメラを持ち込んでいないのが悔やまれた。

ヒートスマイルと銭湯の湯で体の芯まで温まったので、浴槽から上がることにした。

●

至福の時は永遠ではない。俺は仕事に戻らなければならなかった。

珍獣ハンター……きっと誰にも理解してもらえないだろう職種だ。

だがしかし、まだ、俺にはやることが残っていた！

体を拭いたバスタオルを腰に巻き、銭湯お決まりのショーケースに陳列された濁った薄茶色の至高の飲料に手を伸ばしたのだ。

そう！

その飲み物とはコーヒー牛乳である。

しかも紙パック入りではなく、しっかり瓶詰というのが銭湯らしくで実に良い。

俺はビンの蓋をキュポンと外すと、片手にビンを高く持ち、もう片手を腰に据えた。

そしてコーヒー牛乳を一気に煽る。

火照った喉を冷たい液体が流れ落ちていく。

快感だった。銭湯の後で飲む1杯は、世界三大珍味など目じゃない贅沢に違いない。断然するぜ。珍獣レベルの美味しさだ。

「たまんねぁなぁ、こいつは」

口元に残ったコーヒー牛乳を振り取ると、俺は服に袖を通した。

至福の時は終わりを迎える。

俺は借金返済のために身を粉にして働かねばならないのだ。何故か高校の密集する地域「エリア」……この土地でどんな珍獣が俺を待っているのだろうか？

「てやんでぇ！　５２０円になるぜ！」

番頭をしていた青髪の少年が江戸っ子口調で叫んだ。
５２０円、ね。
俺の借金の総額に比べれば雀の涙程の額である。それでこの至福を味わえたのだ。銭湯は庶民の強い味方であるのは間違いない。
俺はリュックサック「ブラスタ」から財布を取り出した。
天秤の絵の入った小さなガマグチだ。長い間使い続けている、愛着のあるガマグチ財布である。
蓋を開けて、金を取り出した。

――チャリンチャリンッ！

手のひらに、１００円玉２つと１０円玉４つ……あと五円玉が１つ転がり落ちてきた。
……あれ？
オカシイな？　ガマグチを逆さにして振りくってみた。
ジャラジャラという音は聞こえてこない。落ちてくるのは埃だけだった。

「……ふっ、たまんねぇな、こいつは」

そうだった。借金返済のために金は全て雇い主にむしり取られているのだったぜ。
２４５円。
それが俺の所持金総額であった。
江戸っ子の兄ちゃんの顔色が豹変する。

「おう兄ちゃん、金もねえのに風呂に入ろうたぁ太ぇ野郎だな。他の者の目は誤魔化せても、このコウタ様の目は誤魔化せねぇぜ！

カイザースキャン！！」

コウタという少年は指で輪っかを作り、その中を通して俺を見た。

「てやんでぇ！　現金がもうねぇじゃねえか！　足りねえ分は体で返しやがれ！！」

「……たまんねぇなぁ……こいつは……」

……

……

……こうして。

俺は、コウタがバイトする銭湯でただ働きをする羽目になったのだった。

珍獣ハンターはしばらく休業。

ただ働き中に雇い主からの連絡が入らない事を切に願う……

……俺の借金、返せる日は本当にくるのだろうか……？

ここはＯＧ高等学院。

『エリア』にある地域最大のマンモス高校だ。

今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。

次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない。

苦労人、世にはばかる　～ふぅ、たまんねぇな、こいつは！　の巻～（後書き）

＜登場キャラ紹介＞

クロウ・ブルースト：珍獣ハンター。雇い主（女）の命令で世にも珍しい珍獣（人間でも可）のデータを探して「エリア」にやってきた。借金の総額はユキチさん１０００人でも勝てない額らしい。口癖は「たまんねぇなこいつは」。実に貧乏くじな男である。

ランド・トラビス：「エリア」で修理屋「ビーターサービス」を営む快男児。彼のヒートスマイルは暑苦しいことで評判。クロウに珍獣認定されていた。

カズマ・アーディガン：エリア１のマンモス校「ＯＧ高等学院」の２年生。家族を守れる「男の中の男」を目指していて、ランドの漢っぷりに惚れて兄貴と呼び慕っている。絶賛、彼女募集中！

コウタ・アズマ：銭湯で番台をしている。妹を高校に通わせるため多くのバイトを掛け持ちしている。番台もその一つ。超シスコン。

コメディー編、久しぶりに更新しました。
他の短編の違ってかなり短いですが、その分起承転結に気を配っています。
あとクロウのセリフに縛りをつけて遊んでみましたが、ゲームの彼は色々としゃべってくれますのでご心配なく。
ただセリフが全部微妙ですけどね……ただの貧乏くじ、この表現が一番しっくりくる。

後編で「スフィア」の覚醒に期待したいです。

ではでは。

鋼鉄の駄狼5　～ワンだふるデイズ～（前書き）

＜注・意・事・項＞
絶賛、キャラ崩壊中！
孤狼さんとファミリアさんのイメージが壊れる可能性があります！
嫌な方はユーターンを推奨します！
それでも良いという方はどうぞ！

今回のサブタイトルはあるアニメの主題歌のパロです。
内容もその作品のパロ成分が含まれています、ご了承ください。

鋼鉄の駄狼5　～ワンだふるデイズ～

ここは何故か高校の密集する地域「エリア」。
地域一のマンモス高校ＯＧ高等学院や、地域一の不良のたまり場として悪名高い影鏡高校などが軒を連ねていているが、繁華街や商店街も存在し日常生活に必要なものなら全て「エリア」内で揃ってしまう。

必要なものはすべて揃ってしまう、そんな地域がエリアだ。
生活必需品や日用雑貨……生活に根付いている物品を取り扱う店が多い商店街を、俺は1人寂しく歩いていた。

「……ふっ」

俺の名前はキョウスケ・ナンブ。
ＯＧ高等学院　――　通称ジェネ高に通う3年生だ。

今日は日曜日、時刻は丁度昼ごろ……ランチタイムと言う奴だ。
商店街の肉屋からは揚げたての旨そうなコロッケの匂いが漂い、某有名ハンバーガーショップでは期間限定商品のチラシが張られている。
実に美味そうだった。俺の腹の虫たちが今にもクーデターでも起こしそうな勢いで泣きわめいている。
正直、腹は減っている。
だが俺は飲食店などには目もくれない。
ん？　何故か、だと？
そんなに聞きたいのか、仕方のない奴だ。

理由が知りたいという稀有な輩は、俺の視線の先にご注目願おう
派手な電飾がチカチカと、地味な商店街の中に異質な存在感を放ちながら、真昼間から自己主張していた。近づけば店内の音が容易に聞き取れるだろう。チンチンジャラジャラと、「パ」で始まり「コ」で終わる銀球を弾いて遊ぶ遊技場だ。
ずばり「パチンコ屋」　――　店前にはドでかい看板が見えた。
内容はこうだ。

――　待望の新台「マ○○スＦｅｖｅｒ」登場！
超時空妖精、アップル・ボンバー・歌姫ちゃんの歌をキケェェェッ！！

ここまで言えば、皆まで言わずとも分かるだろう？

「……ふっ」

俺　――　キョウスケ・ナンブは、パチンコで持ち金を全てスリました！！

逆境無頼キョウスケ　――　初戦敗退編　――　完
次回作にご期待ください。

というのは、もちろん冗談だが。
実際、俺の財布の中には諭吉様はおろか野口さんも居やしない。小銭入れを覗いてみる。残金１１０円……昨今では自販機のジュースも買えない金額が、期限切れのクーポン券を除けば今の俺の全財産だった。
まったく、ツイていない。
俺は分の悪い賭けには滅法強いが、他人に言わせればそれ以外では滅法弱いそうだ。パチンコ程度ではこの俺を窮地に立たせることは不可能、という事らしい。
しかし金はないし、腹は減った。
どうしたものか、と商店街をぶらついてるのが客観的に見た今の俺の現状だ。

「ん？　何だ、あれは？」

俺の目に興味を惹かれる看板が飛び込んできた。
決して賭け事ではない。小屋を改造したような小さな建物で「真実はいつも１つ！　あなたの未来を占います。ライアー堂」と書かれている……どうやら占い屋のようだ。
金もなく、バイトも非番のため特にやることもない俺の足は自然

とその店に吸い込まれていた。
店先に料金設定が書かれている。

「なになに……金運占い（金運上昇グッズつき）が1回１１０円だと？　……安いな、そして嘘くさい」

安くて良い物は沢山あるが、安い接客業程信用のおけないものはない。
客を客と思わない不貞の輩が営業している店かもしれないな……
もしかすると、１１０円と見せかけて小さな○が2つ書かれていたりするボッタくり占い屋かもしれない。
確認したが、その線は流石に無いようだ。
兎に角だ。大昔に孔子という偉いお爺さんが言ったそうだ。君子、危うきに近寄らず、とな。
先人の言葉は尊重すべきだ。俺は店から離れようとした。
しかし料金設定に書かれた魅力的な文句が俺の後ろ髪を引く。

「……金運上昇グッズか……」
「いらっしゃい」

気が付いた時、俺は既に占い屋に入店していた。足が勝手に動いたらしい。正直、ここまで金への執着心が強かったことに俺も驚きを隠せない。

「ようこそ、ライアー堂へ。私の名前はアイム・ライアード。見ての通りの、真実一路、清廉潔白で嘘が大嫌いな占い師です」
「はぁ……」

俺は占い師アイムに生返事しか返せなかった。
だってそうだろう？　悪いが断言できる。初対面でしかも客に対

して「自分は正直者だ」と主張することほど、胡散臭い自己アピールはない。

だがしかし、一度入ってしまったものはしょうがない……俺はなけなしの１１０円を差し出して、「金運占い、あとすぐにでも効果の出るグッズ付きで」とオーダーすることにした。

「金運ですね？　分かりました」

アイムは返事をすると、商売道具の水晶玉に手をかざし、むむむと唸りながら水晶を見る。

胡散臭いと思っていたが、こうしてみると中々に占い師に見える。

案外、この店は大当たりかもしれないなと思っていたとき、「整いました！」とアイムが奇声を上げた。

「あ、あぁ、でどうだ？　俺の金運は？」

「はい、最高ですね」

アイムが即答する。

「もうすぐあなたに３０年に一度の大好機が訪れるでしょう。ギャンブルをなさい。勝てば一生遊んで暮らせる額の金が手に入ります」

「それは本当か？」

「はい、もちろんです。私は嘘が大嫌いですから」

ニヤーと口を三日月形に歪ませて笑うアイム。

かなり胡散臭い印象を受ける。

俺はアイムの言葉を冷静に分析してみることにした。

はっきり言って、最近の俺は負けが込んでいる。大負けこそしていないが、小負け子負けの連続で生活も貧窮してきている（実際、占い代を払うと俺は無一文になる）。俺は追い詰められている、正

に崖っぷちというやつだ。
だが俺は内心ほくそ笑んでいた。
俺は分の悪い賭けには滅法強い。
例え１００回負けていようと、１回の勝ちで逆転できる。そんな大勝ちで波乱万丈のギャンブル界を生き延びてきた男だ。
最近の負けを考えると、そろそろ大勝ちのサイクルに入ってもオカシクないはず……ん？　なんだ？
その社会の底辺を見るような視線は？
馬鹿め。まずは勝つことだ。勝たなければ始まらないのだ。
アイムの占いは、俺に大勝ちの契機が近づいてきていることを証明しているのだ。きっと、そうに違いない。

「今なら、ワンだふるな生活を送れる手助けをしてくれる、このドリンクを差し上げますよ」
「ワンダフルか……悪くないな」

アイムが瓶に入った青色のドリンクを差し出してきた。
金運グッズ来た、これで勝てる！
俺はバイトの給料が入るまで空腹に耐える決意を固め、「ライアー堂」を後にした。アイムがニヤニヤと三日月みたいな口をして笑っていた気がするが、きっと気のせいだ。
俺は意気揚々と帰宅し、軍資金を作るために新しいバイトを探すのだった。

スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～
鋼鉄の駄狼　５　～ワンだふるデイズ～

カクカクシカジカで、あっという間に給料日になった。

俺は自宅であるボロアパートで出陣の用意を整える。

バイトの数を増やし手に入れた軍資金を全て引きだし、財布に詰める。耳には赤鉛筆、右手には愛車 ―― アルトアイゼンリーゼ号のキー、左手には赤鉛筆で丸印を付けた新聞紙を装備する。

もちろん、競馬新聞だ。

まさにフル装備。某龍伝説的ＲＰＧに例えれば、伝説の武器をフル装備しているような状況だ。

「おっと、忘れるところだった」

玄関口から外に出ようとしたところで、俺は重要アイテムを置いていることに気が付いた。

そう、「ライアー堂」で貰った金運アップアイテム ―― 青色の某〇―ション的な雰囲気を覚える飲み物である。

常温でも大丈夫かと思ったが、一応冷蔵庫に入れておいた。ポー〇ョンはキンキンに冷えていて飲み頃のように思えるが、しかし存在そのものが実に胡散臭い。

なにせこのポーショ〇、入手先の男が胡散臭さ全開のアイムだからだ。

「……ま、ゲン担ぎぐらいにはなるだろう。さすがに、客に毒物を渡したりする男でもあるまい」

俺はポーシ〇ン的飲料を一気に飲んだ。

漢方薬的な苦みを想像していたのだか、意外にフルーティーで飲みやすかった。空瓶を洗って、とりあえずシンクに置くと、俺は本日の主戦場 ―― 馬の遊技場へと足を急がせる。

ドアを開け、赤錆びた鉄階段を下り、ボロアパートの1階部分に降りていく。

いつも意識せず上り下りしている階段だったが、今日はなんだか大きく感じた。一段一段降りるのに、普段よりもエネルギーがいる感じだ。

1階部分に降りると、俺は駐輪場に急いだ。

アルトアイゼン号を停めている場所に向かう途中、俺は体に違和感を感じた。

立っている……というより、2足歩行をするのが堪える。

ためしに両手を地面について、土下座の体勢を取ってみるとこれが無性に安定感があり、心安らぐのを俺は感じていた。

「バウ……？（一体……俺の体はどうしたのだ？）」

なぜか、口から犬の声がした。心なしか獣臭……というか体が犬臭い。

アルトアイゼン号の元に駆け寄ってみる。普段は俺が跨ることができるサイズのアルトアイゼン号が、見上げなければ視界に入れることができない程巨大化していた。

「バ、バゥ……ババッバウバウ（正にリーゼ……ってそんなことを言っている場合ではないな。一体どうしたというのだ、俺の体は？そうだ、ミラーで体を確認してみよう）」

俺はアルトアイゼン号のサイドミラーを覗き込むことにした。

車体が巨大化しているため、ミラーに体が映る位置に移動する。

ミラーには俺の姿は映っていなかった……

――鏡には、柴犬が映っていた

頭の部分の毛だけが妙に伸びて、先が金色をしている茶色の柴犬だ。

服なんて着ている筈もない。降りてきた階段を振り返ってみると、俺が愛用している紅いジャケットとか、ズボンとかパンツとか財布とかが……全部落ちていた。

俺は全裸だった。

でも寒くない。

だって犬だもん。

「バオーーン！（なんだ、これはーーーーー！？）」

「あらあら、騒がしいワンちゃんね」

俺が悲痛な叫びを上げていると、黒いロボット的なシルエットのバイクに跨って、金髪の女性がボロアパートにやって来た。

金髪の美女 ―― 俺の恋人であるエクセレン・ブロウニングだ。乗っているバイクは、最近町で拾ってきたという英語を話す謎のバイクである。確か名前はゲシュペンスト・ファントム。

「バウバウ！（エクセレン！　俺だ！　キョウスケだ、分かってくれ！）」

「え！？　なになに？　ババア、俺だ！　結婚してくれ！　ですって……もぅ、失礼なワンちゃんねー」

ちっがーう！

違わないけど違う！

やはり俺の話している言葉は犬語のようで、人間には通じないらしい。一昔前に発売されていたバウリン○ルという犬の気持ち翻訳装置を思い出した。眉唾物だと思っていたが、こんな状況になると

欲しくなるのだから人間は現金なモノだ。

「キョウスケー、いるー？」

「バウ！（待て！　俺はここにいるぞ！）」

エクセレンは俺に会いに来たようだ。俺の自室に向かって、錆びた階段を上がっていく。

慌てて後を追いかけようとしたが、あの黒いバイクが1人でに動いて、俺の行く手を塞いできた。

エクセレンが乗っていた喋るバイク　――　ゲシュペンスト・ファントム号である。

『Ｈｅｙ　Ｄｏｇ！（おい、犬っころ。貴様、キョウスケ・ナンブだな？）』

「バ、バゥ……！（なんだ？　バイクの言葉が分かるぞ）」

バイクには俺がキョウスケだと分かるようだった。

運が良い。外見が犬になってしまっている状況で、俺がキョウスケだと理解してくれる者がいるのは非常に助かる。

「バウ（おいバイク、俺がキョウスケだとお前には分かるのだな？）」

『Ｙｅｓ（当然だ、俺は最高にイケてるかっこいいバイク。そこに異論は認めんし、貴様がくそったれのキョウスケ・ナンブだと見抜くぐらいの眼力は持ちあわせている）』

バイクの言い草は不愉快だが、今はスルーすることにした。

「バウバウ（頼むバイク、体が突然犬になってしまって困っているのだ。エクセレンに俺がキョウスケだと伝えてもらえないだろうか

？）」

『ＨＡＨＡ（なるほど。理由は知らないが、俺が『エリア』に来てバイク化してしまったのと似たような現象か？
そいつは大変だな、同情に絶えない状況と言う奴だ、こいつは）』

バイクは俺に協力してくれそうな雰囲気だった。
バイク化……ということは、どうやらこのバイクは元々バイクではなかったようだ。
まぁ、でも今はバイクだし、なによりバイクの身の上話になど興味はない。
とにかく助かった。
体が犬になっていると分かった時は絶望したが、これで光明が少し見え　――

『ＮＯ！（だが、断る）』

――バイクが大声で拒絶した。

『Ｉ　Ｈａｔｅ　Ｙｏｕ（このファントムの最も好きな事の１つは、いけ好かない人間の頼みごとを無下にしてやることだ。
美女か、ロリ美少女に生まれなかった自分を呪え！）』
「バ、バウゥ……！？（い、意味が分からんぞ！　どういうことだ！？）」
『Ｆａｃｋ　Ｙｏｕ！（俺の目の前から消えろ、さもなくばぶち殺す、と言っているのさ！）』

バイクのヘッドライトが急に光り出した。
夜間の照明用なんて表現は生ぬるい。敵はぶっ殺す！　そんな空

気をかもしだしている白い光がヘッドライトに収束していく。
猛烈な恐怖感が俺を襲う。
既視感（デジャヴ）……俺は一度この光に吹き飛ばされているような気がす

――――

『Ｋｉｌｌ　Ｙｏｕ！！（ニュートロンブラスターで蒸発させてやるぜ！　覚悟しろ！！）』
「バオーーンッ！！（くそっ！　一時退却……いや、せ、戦略的撤退だー！！）」

犬の姿のまま撃ち殺されてはたまらないので、俺はバイクの前から逃げ出すことにした。
俺が離れるとすぐにヘッドライトの光は収まる。しかし振り向くとバイクはすぐに光を灯して、前輪部分を俺の方に向けてきた。どうやら、俺は相当あのバイクに嫌われているらしい。
これでは自宅に近づくこともできないな。
仕方なく、俺はその辺りをぶらついて時間を潰すことにした。エクセレンが帰れば、あのバイクも一緒に帰るだろうからだ。

俺の部屋からエクセレンの声が聞こえる

「キョウスケ、どこー？　特製スープ作ってきたけど、いらないのー？」

そういえば、朝食を取っていないことを思い出す。
腹の虫が暴徒のように唸りをあげる。
……侘しい。

俺はエリアの住宅街を彷徨うのだった　――……

犬の体になって初めて分かることもある。

エリアの住宅街は意外と広い。いつもアルトアイゼン号で駆け抜けているから気づかないだけで、歩いてみると割と広大で、野良の動物たちが結構な数見ることができた。

今日は確か生ごみの日。そこかしこのゴミ捨て場に、黒いゴミ袋入りの生ごみが捨てられていた。

犬の嗅覚は人間のそれより遥かに優れている。

袋の中から漂う腐臭がツンと鼻を刺す。しかしその中にもまだ腐っていない食べ物の匂いも混ざっていて、俺はそれを嗅ぎ分けることができた。

……腹が空いた。

見ると、ごみ袋を漁っている野良犬や猫の姿がチラホラ見受けられる。

「ガル（コレはやらねえぞ！　俺の食い物だ！）」

「フゥー！（なんだ、テメェ新顔か！　自分のシマに帰りやがれ！）」

野良だと心が荒むのか、聞いてもいないのに辛辣な言葉が送られてくる。

今は犬の姿をしていても俺は人間だ。土下座して頼まれても、そ

のような生ごみを食べるなど願い下げだった……しかし、腹は減る。

「バウ（アイムの奴め、覚えていろよ）」

俺が犬になってしまったのは、ほぼ間違いなくアイムの寄越した金運アップグッズ――あの〇―ション紛いの飲み物のせいに違いない。

アイムへの復讐心よりも先に人間に戻れるのか？　という、懸念が先に立つ。人間が犬になるなど見たことも聞いたこともない事態だったからだ。

当てもなく歩き続け、俺は人気のない空き地に辿りついた。

中央部分に重ねられた土管があり他には何もない。某有名漫画に出てくるスネた金持ちの坊ちゃんや、「お前のモノは俺のモノ」的なガキ大将がたむろしている空き地に良く似ている。

……まぁ、どうでもいい。

それよりも腹が減って動くのが億劫になってきた。本当なら馬で一発当てながら、売店で買ったホットドックでも食べようと思っていたのに……アイムの奴め。

金運以前に、それ以外の運が今日は最悪のような気がする。

「……バウ（腹が減っては戦はできぬ……寝るか）」

俺は中央の土管の中に潜り込む。

日の光を避けながら、少し休むことにした。動き回って腹が減るよりはマシだからな。

しばらくすると、俺は微睡（まどろみ）の中に落ちて行った　――……

●

「ワン（アニキッ！）」

俺の目を覚ましたのは、聞き慣れない犬の鳴き声だった。
土管の外は既に暗い。
相当長い時間眠っていたことに気付いた俺は、土管の中で伸びをしながら外の声に耳を傾けた。

「ワンワン（無茶だよフレキのアニキ！　やっぱり見つけれっこないよ！　黄金の骨なんて！）」
「ガウガウ！（馬鹿やろうゲリ！　お前の爪はなんのためにある！？　地面を掘るためだろうが！！）」
「ワンワン（で、でも……！）」
「ガウ！（いいか、よく聞けゲリ！）」

土管の外では気弱そうな雄犬の声と、その兄貴分らしい雄犬の声が聞こえていた。
兄貴分の犬　――　フレキが言う。

「ガウガウガウ！（いいかゲリ、自分を信じるな！　俺を信じろ！お前を信じる俺を信じろ！！）」
「……ワン（……アニキ）」
「ガオーンッ！（いけ！　ゲリ！　お前の爪で地面を掘れえええええぇぇぇっ！！）」
「ワオーンッ！（わかったよアニキ！　俺、やるよ！！）」
「バウ……？（なんだ、これは？）」

外から聞こえる遠吠えに、俺の頭に疑問符が沸き上がる。

近所迷惑甚だしいただの犬の遠吠えだ。人間だった時には聞き流していたに違いないこの遠吠えも、犬になっている今なら話の内容を理解できた。

無駄に熱いドラマが展開されているが、要約すれば「ここ掘れワンワン」ということらしい。

馬鹿馬鹿しい。なにが黄金の骨だ……金塊なら兎も角……ん？

黄金の骨、だと？

「バウ……（黄金の骨などあるはずがない……もしや、本当に花坂爺さん的な展開があるのでは……？）」

今も2匹は「ワンッワンワン！（ギガッファングブレイクゥゥゥ！！）」とか叫んで地面を掘っている。

もし、2匹が掘り出したものが花坂爺さん的なブツだとしたら……犬っころには勿体ない代物だ。

大判小判ザックザックー。猫に小判、豚に真珠、犬に……マタタビ？

とにかく、もし金塊が掘り出されようものならそれは獣の手には余る代物であり、俺のような人間様が手にしておくべき物である。

……もっとも、俺も今は犬だがな。

「バウ（おい、お前たち）」

「ガウ（なんだあぁぁっ、テメエはあああぁっ！！）」

血の気の多い方 ―― フレキが土管から出て声をかけた俺を睨みつけてくる。

敵意、もとい牙を剥き出しにしている。噛まれそうで怖い。

「ワ、ワン（ア、アニキ……！）」

「ガウガウッ！ ガオーンッ！！（ヤイヤイヤイ、テメエ、俺たち

を一体誰だと思ってやがる！！
泣く子犬も黙る、不倒不屈の鬼リーダー！　フレキ様とその弟ゲリの2人組！　天上天下唯我独尊、天下無敵の『ヤケン団』たぁ、あっ、俺たちのことよ！！）」
「ワンワン（そ、そうだぞ！　強いんだぞ！）」

啖呵を切るフレキの後ろに隠れてゲリがキャンキャン吠えていた。
可愛い奴め。俺が人間だったなら、頭をなでなでしてやりたい気分になるだろう。

「バウ（団って、2匹しかいないじゃないか？）」
「ガウガウ！（うるせえ！　これから増えるんだよ！　それよりテメェ、ここが俺たち『ヤケン団』のシマだと知っての　――！？）」

牙剥き出しで吠えていたフレキが急に沈黙した。
泡立てていた尾がしんなりとなり、耳が伏せられている。犬が相手に恐怖を抱いている時に見せるポーズだった。
それはゲリも同じで、

「ワ、ワンワン（ア、アニキ！　こいつ……いや、この方から凄いダケン力を感じる！）」
「ガウゥ……！（くっ……ダケン力53万だと！　か、敵わねえ……ゲリ、認めよう……俺たちの負けだ）」
「ワン（うん）」
「バウバウ（待て待て、一体何なのだ？　そのダケン力というのは？）」

話の方向性が見えない。
そもそもダケン力とは何なのだ？　野良犬間で流行っているの流行語か何かか？

「ガウガウ（ダケン力というのは、野生の犬の逞しさやしぶとさ、だらしなさを数値化したものだぜ）」
「バウバウ（ちょっと待て。最後のは聞き捨てならんぞ）」
「ワ、ワンワン（ダ、ダケン力１万なら一人前の野良。３万なら強い野良……５３万なら、この地域の野良を全て牛耳れるだけの力を持っているんだ）」
「ガウガウ（ちなみに俺のダケン力は１０万……敗けたぜ、アンタにはよぉ）」

俺の異論は無視されて会話が進行していく。
ダケン力かラセン力か知らないが、俺は人間だ。どうせあるなら、霊力とかオーラ力の方がいい。もっとも、一番欲しい力は、ここ一番でモノを言う勝負強さだが。
ゲリが恐る恐る俺に声をかけてくる。

「ワン（ち、ちなみに……）」
「バウ（何だ？）」
「ワ、ワン（ダ、ダケン力は人間が持っていると仮定すると面白いよ）」
「バウ（ほぅ）」

興味があったのでゲリの言葉に耳を傾ける。
俺のダケン力５３万と高値だ。ダケン力を持つのが犬から人間に置換されると何になるのだろう？
やはり強運や悪運、ギャンブル力になるのだろう。
ゲリは言葉を続けた。

「ワ、ワン（人間がダケン力を持っていると、数値の分だけその人間のだらしなさを表しているんだ）」

「バウ（なんだと？）」

はっきり言う、聞き捨てならんぞ。

ゲリはビクビクしながら答えた。

「ワ、ワワンワンワン、ワッフー（ダ、ダケン力５３万を人間で言い表すとこんな感じだよ……

『ギャンブルが超弱いのに時々ある大勝を勝負強さと勘違いしたギャンブル中毒者で、恋人から借りた金や給料を全部ギャンブルにつぎ込んで負け続けている上に、食事なども恋人から恵んでもらっている男』

……要するに人間社会の底辺のような数値だね）」

「……」

なぜだろう？　ゲリの説明は凄く親近感を覚えるものだった。

身に覚えなど、当然、ない。

ないったらない、本当だ。

俺に刺さってくる視線が冷ややかな物に感じるが、それは気のせいに違いない。

ゲリの言葉も所詮は犬の遠吠えなのだから、人間の俺は気にする必要もないさ。

……それよりもだ。

完全に脱線してしまったが、俺は本題を切り出すことにした。

「バウバウ（お前たち、黄金の骨というものを探しているのか？）」

「ガウガウ（おうよ！　黄金の骨はそれはそれは素晴らしい物だ！　それがこの空き地に眠ってやがんのよ！！）」

「ワンワン（テュッティが言ってたんだ！）」

テュッティ……どうも人間の名前のような気がするが……。

フレキとゲリは、そのテュッティとい人間から黄金の骨の事を聞いたのかもしれない。だとすれば、ますます黄金の骨を見つけない訳にはいかなくなるな。

人間が良い物と言っているのだ、金目の物に違いなかろう。

「バウバウ（ほほぅ、やはり黄金の骨は金塊か何かか？）」

「ガウガウ（キンカイ？　なんだそりゃ！　食べられるのか！？）」

「……バウ（……もういい）」

犬のフレキには金塊の価値が分からんようだ。

……まぁ、いい。むしろ好都合だ。

黄金の骨が金塊だったなら、２匹を適当に言いくるめてやることにしよう。犬が金を持っていてもしょうがないからな。

人間に戻った俺が有益に使ってやるのが、黄金の骨にとっても２匹とっても正しいことに違いない。うん、きっとそうだ。

「バウバウ（お前たち、俺もその黄金の骨探索とやら手伝ってもいいぞ）」

「ガウガウ（本当か！　助かるぜ！）」

「ワンワン（さすがダケン力５３万の漢だね！）」

俺は２匹の黄金の骨探索を手伝うことになった。

すっかり日も暮れて夜になった空き地で、俺とフレキとゲリは地面を掘り返す。

爪で地面を掘る。前足が土色に汚れていく。俺が好きなのは土ではなく機械いじり、中でもバイクのチューンが好きなのだが、こうして土をいじるのも悪くないと思うのは……俺がだんだん犬化して

きている証拠なのだろうか？
だとしたら非常にマズイ。
早く黄金の骨を見つけて、人間に戻る方法を探さなければ……。
「ワンワンワン（ギガファングブレイク・スペシャル！）」と叫び猛烈な勢いで掘り進める2匹を尻目に、俺はそんなことを考えていた……。

しばらくして、俺の前足に何か硬い物が当たる感触があった。
「バウ（むっ、これは……？）」
「ガウガウ！（おお、見つけたか兄弟！）」
フレキからの呼び名がいつの間にか兄弟になっていた。しかし気にするべきはそこではじゃない。俺の前足の下だった。
硬い感触を確かめるように、前足で土を払いのけると、骨の端――関節部分が地表に姿を現していた。
色は……金色だ。
俺は感極まって、骨の端を口にくわえ強引に地面から引き抜いた。
「バオーーン！（掘ったどーー！！）」
月光を照り返し金色に輝く骨が俺の口の中にある。
骨の長さは３０ｃｍほど。これが全て金塊なら、かなりの金額になるはずだ。アイムの占いも捨てたものではない。こうして金塊を手に入れられたのだから、俺の金運は本当に高かったようだ。
――ガリッ

喜んだ直後、口の中に違和感を感じる。
引き抜くために力いっぱい噛んだ黄金の骨に俺の牙がめり込んでいた。
そんな馬鹿な。金がいくら柔らかいと言っても、犬が噛んだぐらいでめり込むはずがない。冷静になって口の中の感触と匂いを確かめる。
カルシウムの匂いと、ざらざらした舐め心地……間違いなく「骨」だ。

「バウバウ！（やったぞ兄弟！　これでテュッティに、また骨を投げて遊んでもらえるぜ！！）」
「ワンワン（やったねアニキ！）」

遊んでもらえるって……何？　こいつら飼いならされてたの……？　呆然とする俺の口から、黄金の骨は滑り落ちていた。
俺の牙が触れていた部分は金メッキが剥げて骨の白色見えている。
黄金の骨は、金メッキを施しただけのただの骨だった。
黄金の　――　いや、ただの骨をフレキが拾い上げる。

「ガウ！（あばよ、ダチ公！！）」
「ワン！（じゃあね！）」

フレキとゲリは颯爽と空き地を後にした。
残されたのは４本足で直立したまま俺だけ……夜風が身に染みる。

ああ、空しい。
俺はとぼとぼと空き地を後にした。

穴掘りで浪費し、俺の体力はもはや風前の灯だった。

空腹と口渇で頭が回らない。

いくら空腹でも生ごみあさりなどしたくない。

せめて喉を潤そうと、住宅街の中にある公園に俺は足を運んでいた。

「バ、バウ……（み、水……）」

夜のためかその公園に人気はなく、公園を照らしているのも小さな外灯一個のみ。薄暗い公園内では妙に目につくブランコ以外に特徴的なものがない。どこにでもありそうな公園だった。

ふらつく足を引きずって、公園にある水飲み場へと辿りつく。

体が犬になっているからと言って、水たまりや川の水は飲みたくない。ミネラルウォーターなどと贅沢は言わない。

せめて水道水が飲みたかった。

「バウ……（せめて、水で腹を膨らませよう……）」

俺は水の噴出口に口を近づけ、蛇口に手をやった。

なんと、手が空を切る。

忘れていた。今、俺の手は犬の前足になっている。犬の手では物は握れず、蛇口も捻れないことは道理であるのに……俺はそのことを失念していた。

「バゥゥ……（なんと……いうことだ）」

俺はその場に仰向けに倒れた。

もう1歩も動けなかった……そういえば、朝から何も口にしていない。限界だった。

「バウウ……（情けない……あまりにも情けない最後だ……）」

正に犬死に……あ、今、俺もしかして上手いこと言ったのか？

どうやら、頭がオカシクなっているようだ。人間として生まれて犬として死ぬなんて、どんな喜劇だ？　正直、勘弁してほしい。

……どうやら、お迎えが来たようだ。

俺の顔を小さな天使が見下ろしている。青いオカッパヘアーの（´・ω・`）顔をした2頭身の天使だった。

俺の鼻っ面にキスしそうなぐらいの至近距離で、青髪天使は俺を凝視している。

「バゥ……（すまないエクセレン……先に逝っているぞ……）」

「そんなことより、チーカマくれにょ」

天使が……天使がおっさんの好きな酒のつまみを要求してきた。

もうダメだ、もはや世も末だ。

「わたちのなまえはおーちゃむふぉー、このせかいのかみにょ」

「ばう……ばうばう（そうか……天使じゃなくて神様か……どこかで見たことがあるような、ないような……きっと、気のせいだろう）」

「……きょうすけは、こんなところでなにをしているにょ？」

オータムとか言う神様には俺の犬語が通じるのか、少しの間を置いてから訊いてきた。

「ばうばうばうばう（実はカクカクシカジカでな……）」

「それはたいへんだにょー。そんなことより、チーカマくれにょ」

「……ばぅ（……持ってない）」

俺の身の上話に相槌を打ってくれながらも、最終的にチーカマを要求してくる。あまりの世知辛さに俺は涙を流したい気持ちなる。

地獄の沙汰は金次第だが、この世界の神様はチーカマ次第らしい。

犬がチーカマ持っている訳がないだろう？　常識で考えてくれ、頼むから。

と言うか、この状況でチーカマ持っていたら既に食べている。そのぐらい察してくれ、頼むから。

しかしオータムは ε＝（こんな ω-；；）顔でため息をついていた。

しかも何処からともなくスーパーのレジ袋を取り出し、中から食べ物　――　よく見るとチーカマを取り出してきた。

持ってるじゃないか！　と内心ツッコミを入れながらも、俺はオータムの優しさに感謝していた。

きっと、あのチーカマを俺に恵んでくれるつもりなのだ。

オータムちゃんマジ天使！　オータムは小さな手でチーカマの包装を剥いでくれ、

「あげないにょ」

ω口（こんな）でチーカマを食べ始めた。

……オータムさん、マジ鬼畜。

空腹のあまり意識が薄れるが、こんな理不尽な世界に未練はなかった。

さあ！　天国だろうが地獄だろうか、できれば俺は前者がいいが、

何処へでも好きに連れて行くがいい！！

「まったく、キョウスケはしょーがないにょー」

一瞬でチーカマを完食したオータムが俺に言った。

「もう、だまされちゃだめだにょ。あとさっさといえにかえるにょ」

もはや口を利く気力もない。

動けない俺の前でオータムは妙な舞を踊りだした。四季の名前を適当に並べただけの呪文を唱え、直後、オータムの体から閃光が迸る。

眩しい……目がチカチカするぜ。

閃光を浴びせられて視覚が奪われる。見えている世界が白く彩られ、俺の意識は微睡の中に引きずり込まれていく。

「ばいばい、キョウスケ。もう、ここにきちゃだめにょ」

誰かの声が聞こえた。

この声は……誰だ？

何も分からなくなり、俺の意識はそこで途切れた。

●

目が覚めると、やる気満々のお日様が俺を見下ろしていた。

いつまで寝ていやがるんだ、と言わんがばかりの日差しが俺の肌を焼いている。周囲を見渡せば傍に水飲み場、少し離れた位置に妙に目立つブランコがあり、俺がいる場所が住宅街の公園だと分かる。
俺は公園の中で眠ってしまったようだ。
太陽は空に上がり切っているので既に昼時だろう。
にも関わらず、公園の中は閑散としていた。

「み、水……」

太陽の直火焼きの影響か、やけに喉が渇く。俺は立ち上がり、水の噴出口に顔を近づけ、蛇口をひねった。噴き出した水道水が顔を濡らす。温い水が徐々に冷たくなってきて気持ち良かった。

「ふぅ」

水を飲んで一息ついた。
そして気づく。

「人間に戻っている……？」

俺の姿はもう犬ではなかった。
喋っている言葉も人語だし、2足歩行もできるし手で物も握れる。
俺の姿は犬から人間へと戻っていた。
しかしどうやって人間に戻ったのか、全く覚えていない。
俺はアイムの寄越したあのドリンクが原因で犬になってしまったわけだが、もしかするとドリンクの効果時間が切れたのかもしれない。

「……結果オーライか。しかし、アイム、許さんぞ」

脳裏に三日月みたいに口を歪めて笑うアイムの顔が浮かんだ。
あの嘘つきインチキ占い師め。
なにが30年に一度の大好機だ。奴の言葉を真に受けたせいでひどい目にあった。
俺は静かに怒りの炎を燃やしながら、アイムへの復讐を誓い、公園を出る。
公園の敷地内から1歩足を踏み出した、その時 ――

「きゃあぁぁ!?」
「へ、変態よ! 露出狂が出たわ!!」

―― 空気を切り裂くような甲高い悲鳴を、公園の近くにいた奥様方が上げる。
露出狂だと? この平和で閑静な住宅街に、真昼間からそんな変態が出没するとは……俺は周囲に視線を走らせた。
しかし、それらしい変態は何処にもいない。
見える者と言えば、仲間内で耳打ちをしている奥様方や、顔を赤く染め手で顔を覆っているが隙間から覗き見ている女子高生や、「ママ、あれなにー?」「見ちゃダメよ!」と叱られている幼女ぐらいのものだ。
……奇妙なことに、全員の視線が俺に釘付けになっていた。

「……ふっ」

俺は状況を一瞬で理解できた。
この時ほど、俺は自分の頭脳の聡明さを恨んだことはない。
俺はアイムのドリンクで犬になっていた。
そして人間に戻った。
その過程を分かり易く書くとこうなる。

犬になる↓↓↓服が脱げる↓↓↓犬の時は全裸↓↓↓人間に戻る↓↓↓スッポンポン

爽やかな風が、俺の裸体を撫でて行った。

「こらー、そこの変質者！　わいせつ物陳列罪で逮捕するー！！」

「ま、待て！　俺は変態なんかじゃない！　待て！　まっ、アッ――――ッ！！」

こうして、警察に連行された俺　――　キョウスケ・ナンブは前科1犯となりました。

エクセレンが迎えに来てくれたが、酷く申し訳ない気分だった。

帰り道でみっちり説教されました。

穴があったら入りたい……こうして、俺のエクセレンに対する弱みがまた1つ増えたのであった　――……

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。

『エリア』には個性豊かな人間が沢山いる。

今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない

一方、その頃……商店街から繁華街に移転した占い屋「ライアー堂」では……

「この地域には『ヴァルストークファミリー』という運び屋がいます。
そこで働けばあなたの借金は全額返済、さらに一生遊んで暮らせるだけの金額がはいってくるでしょう」
「えっ、マジでか!?」

アイム・ライアードが、大きなリュックを背負った幸薄そうな青年――クロウ・ブルーストを占っていた。

「大金持ち!?　マジで!?　ねぇ、マジで!?」
「もちろんです」

必死な表情のクロウに、アイムは笑顔浮かべて答える。
口を三日月のように歪めた、飛び切り上等に胡散臭い笑顔を。

「私は嘘が大嫌いですから――」

このあと、クロウがどうなったのかは誰も知らない――……

鋼鉄の駄狼5　～ワンだふるデイズ～（後書き）

＜キャラ紹介＞

キョウスケ・ナンブ：ジェネ高3年生。分の悪い賭けが大好きで、超劣勢でないと勝負に勝てないため、いつもタスクやアラドにカモられている。今回はパチンコで惨敗、なけなしの金を握りしめて「ライアー堂」に入ったのが運の尽き……前科1犯になる。コメディーよ、俺は帰ってきた！

アイム・ライアード：年齢不詳の占い師。「ライアー堂」という小さな占い小屋を持っている。義を重んじ、嘘を嫌い、正義を愛する好漢である（嘘）。今日もどこかで占い中、無限ループって怖いよね？

フレキ&ゲリ：狼に見えなくもない大型犬コンビ。フレキは強気な兄貴分、ゲリは弱気な弟分、2人なのに何故か「ヤケン団」を名乗っている。最近、テュッティーなる人物に餌付けされ、遊んでもらうためには何でもやるようになった。

エクセレン・ブロウニング：高校生に見えないジェネ高3年生。キョウスケの恋人で時々食事を作っては、キョウスケの家に届けている。彼女が握っているキョウスケの弱みは数知れない。

ゲシュペンスト・ファントム：エンドレス・フロンティアからやってきた元は3mクラスPT。エリアに来てから、何故かバイクになり人格が芽生えていた。キョウスケは生理的に嫌い……おそらく、内部データにキョウスケの記録があるのだろう。

＜次・回・予・告＞

エクセレン「とうとう犯罪者になってしまったキョウスケ。臭い飯、閉ざされた空間、暗い投獄生活が幕を開ける！」

キョウスケ「……おい」

エクセレン「そのとき、キョウスケは思ったの！　超絶ビュティホーな恋人、エクセレン・ブロウニングにもう1度会いたいと！」

キョウスケ「おい、こら」

エクセレン「キョウスケは食器のスプーンを懐に隠し持ち、穴を掘り始める！　すべては脱獄し、愛しのエクセレンに会うために！！　ああ――エクセレン！！　愛しのエクセ　――」

キョウスケ「もういい、放っておこう」

クロウ「おいおい、いいのか？」

キョウスケ「ああなっては、もう飽きるまでやめん。あいつはそういう奴だ」

クロウ「なんだ。彼女の事よく分かってるじゃないか（ニヤニヤ）」

キョウスケ「……次回予告だ！（クワッ）」

キョウスケ

「嘘……それは甘美なる誘惑。その誘惑のままにことが運べばいうことはない。
しかし人生はそんなに甘くない！
次は誰が騙されるのか！？　いい加減、嘘に気づけよなお前ら！！
次回、スパロボ学院、苦労人、世にはばかる２　～サブタイトル未定～
コメディよ！　俺は帰ってきた！！」

クロウ「第２次スーパーロボット大戦Ｚ　破界編と再世編もよろしく！！」

希望が何件かあったので今回は嘘つきさんの登場ですよ。
ほぼ登場キャラが全てキャラ崩壊を起こしている中、彼だけが素のままなのは流石としか言いようがありません（笑）
今回はケルンバイターさん提供のネタでお送りしました！　ネタの提供ありがとうございます！
ネタの方は今後も絶賛募集中です！
ただシリアス編も執筆していくため、コメディー編の更新頻度は遅いです。ご了承ください。

世紀末救世主伝説ＯＧ　～お前は既にタヒている～（前書き）

＜注・意・事・項＞
絶賛、キャラ崩壊中！！
今回のパロネタは某超有名ひでぶ漫画です！！
ＳＲＸチームが世紀末化しています、キャラのイメージを崩したくない方は閲覧しないことを推奨します！！
それでも良いという方は、キャラクターの眉を濃く、劇画調に想像してお楽しみください！！

世紀末救世主伝説ＯＧ　～お前は既にタヒている～

――　１９９Ｘ年　――

「大統領！　ロシ○が○メリカに向けて核を発射しました！！」
「おのれ、共産主義者どもめ！　やはり核抑止論など幻想だったのだ！　報復だ！　撃ち返せ！！」
「北も核を撃ってきました！　着弾予想地点は日本のトッキョーとここ、ブラックハウスです！！」
「あのデブ将軍めが！！　日本などどうでもいい！！　撃てッ、撃ち返せ！！」

――　世界は核の炎に包まれた！！　――

核の炎が大地を焼く。
海は枯れ、地は裂け、あらゆる生命体が絶滅したかに見えた……だが。

――　人類は死滅していなかった……！！　――

「奪え！　殺せ！　Ｚ（ゼ・バルマリィ）に逆らうものは皆殺しにしろ！！」
「ひゃっはー！！」
「ユーゼス様の許しが出たぞ！　奪え奪え！　水も食料も、女も俺たちのものだ、ただし美女に限る！！」

荒れ果てた平原を仮面をつけたバイクの集団が走り回っている。
仮面の額にはZ（ゼ・バルマリィ）の文字。仮面のバイク集団は斧や槍で武装していて、その矛先は眼前を疾走するジープに向けられていた。
ジープには家族と思われる男と女、そして子どもが乗っていて、荷台には複数のポリタンクが乗っている。ギラつく日光でタンクの中身が透けて、揺れて見える。中には水が詰められているようだ。

「た、助けてくれー！！」

ジープを運転する父親が絶叫する。
その父親の頭をZの一人が放った槍が貫いた。運転手が絶命したジープは横転し、妻も子ども下敷きになって息絶える。
追いついたZの一員がジープに積まれていたポリタンクの蓋を外し、中身を頭から被った。透き通る綺麗な水がZの仮面の濡らす。

「ひゃっはー、水だ水だー！」
「食料も沢山もってやがるぜー！」
「金も沢山つんでやがるぜ！　馬鹿が！　こんな紙切れ、もうなんの役にもたたちゃしねえんだよ！！」
「燃やせ燃やせー！」

核の炎で世界中の国家は滅亡し、荒廃した世は再び暴力が支配する時代となっていた。
力こそが正義。
弱者は強者になぶられ、奪われ、殺される。
力なき者たちは苦悶の声を上げながら願った……！

――　乱世を斬る光……救世主の存在を……！！　――

「ユーゼスさま！！」
「んん、どうした？」

Ｚのリーダー各と思われる仮面の男　――　ユーゼスの元に、下っ端らしい仮面が駆けてくる。

「大変です！　て、偵察隊のやつらが何者かに　――……！！」
「なんだと？」

下っ端の報告を受けたユーゼスはＺのメンバーを引き連れて仲間の場所へと駆けつけた。
そこでは、うめき声を上げて横たわる仮面で埋め尽くされていた。
ユーゼスはバイクから降りて、うめいている仮面の１人に近づいて訊いた。

「どうした？　何があった？」
「ろ……」
「ロ？　安心しろ、家のローンなど核の炎で吹き飛んだわ」
「ろぼっと……！」

ユーゼスの抱いていた仮面はそこで意識を失った。ろぼっと、という単語を残して。

「ろぼっと……だと？　いや、今の時代にそんな精巧な物が残っているはずはない……ろぼっととは一体なんなのだ……？」

ロボット。一般には人間が活動できない場所で活躍する機械の総称だ。亜種に２足歩行型のスーパーロボットとかが存在するらしい

が、それはゲームの中の話である。
核で滅亡した世界にそんな物が存在するはずもない。あるとすれば、超未来からやって来たターミネーター的な何かだろうか？　あぁ、怖い怖い。

「まぁ、いいか……皆の者！　とりあえず食事だ！　バルマー鍋の準備をいたせ！！」
「「「イィーーーー！！」」」

ユーゼスの声に仮面の軍勢（バルシェム）が悪の組織の戦闘員のような声で応える。

その晩……宴会は夜半過ぎまで続けられた。
荒れ果てた荒野で……荒れ果てた荒野ってなんか変だな？　ぼーっと見ている傍観者と同じぐらい意味が重複しているが割とどうでもいい。
荒れ果てた世界の中で、今日もユーゼスたちZの愉快な生活は続く――……

めでたしめでたし

「めでたくねぇよ！」

どっか離れた場所で、１人の男が声を荒げていた。

ボサボサの黒髪、何故か前髪だけ付け毛のように茶色く染まっている。体格は普通、麻布でできたボロボロのマントを羽織っていて、心なしか眉が太かったりモミアゲが自己主張しているのは気のせいかもしれないし、気のせいではないかもしれない。

「み、水……声出したら余計のどが渇いたぜ……」

男の名前はリュウセ……ではなく、リュウシロウ。呼び名が長いので、これからはリュウと呼んでいくことにする。

リュウは「俺より強い奴に会いに行く！」と言って旅に出た訳ではないが、とりあえず荒野をジリジリと焼く太陽に手持ちの水筒の水を使い切り、強い口渇に苦しめられていた。

水分が飛んで頬がこけている。

彼の目の前には陽炎のような町が見えていて、水を恵んでもらうためにそこを目指して歩いていた。砂漠じゃないから大丈夫だろうけど、蜃気楼じゃないと良いけどね ――― と。

――― バッバババッバッ！

急にリュウの足元が動いて、投網のようなものが飛び出してきた。

リュウは底引き網で釣り上げられた魚のように網に囚われ、空中に浮かされる。

「捕ったどー！」

「Zの奴が罠にかかったぞアヤ！」

のどが乾きすぎて声を出す気力もないリュウの前に、やけに露出度の高い服装の緑髪の女性が現れた。

「私は美しき女リーダー、アミヤ。長いからアヤって呼んでね」

「い、一文字しか略せてねーよ……」

「出番は殆どないけどよろしくね」

「み、水……」

「あ、ちょっと！　聞いてるの、ねぇ ―――」

リュウの意識はそこで一度途切れた。

スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～
世紀末救世主伝説ＯＧ　～お前は既にタヒている～

「自己紹介中に気絶する失礼な男は、とりあえず、牢屋にぶち込んでおきましょう！」

憤慨したアヤの一言で、リュウは目指していた町の地下牢に叩きこまれることになった。
床に放りだされた衝撃でリュウは目が覚める。
牢屋の中は薄暗く、外の荒野よりは涼しい。しかし気温が低ければ快適という訳でもなく、湿気と埃っぽさに不快指数は絶賛上昇中だ。

「どこかのバカがドジを踏んだようだな」
「うぅ……っ」

牢屋の中には先客がいた。
金髪の美青年が牢屋の隅で座り、リュウのことを見ている。リュウと似たような麻布製のマントを着用し、何故か左手に黒い手袋をしている。

「あ、あんたは……？」
「俺か？　俺の名前はライディース・Ｆ・バットシュタイン。フルネームが呼びにくいなら、俺を呼ぶときはライでいいぞ」
「そうか、ライ、あんたは何故捕まっているんだ？」

リュウは不思議に思い訊くことにした。
なぜなら、牢屋の雰囲気にライがあまりにも似合っていなかったからだ。ライは金髪美青年を絵に書いたような外見をしている。対して牢屋は埃っぽく、ジメジメしていて暗い……同じ牢屋の中なのに、ライの周辺だけがキラキラと光っているようにリュウには思えた。
もしかしたら、ライという人物はリュウの見ている錯覚で、本当は牢屋の隅に生えているオロシャヒカリダケの精なのかもしれない。
それぐらい、とにかく、牢屋の中にいるのが似合っていない青年だった。
ライがリュウの問に答える。

「分からん。気が付いたらここにいた」
「気が付いたらって……気絶でもしてたのか？」
「それも分からん。とにかく、気が付いたらここにいた」

世の中には奇妙なこともあるものだ。
詳しく突っ込んでもいいが、あまり興味もないのでリュウはそれで納得することにした。それよりも、

「あぁ……のどが渇いたぜ……」

今は口渇の問題の方が深刻だった。

「なんだ、水が欲しいのか？」
「ああ、ライ、持っているのか？」
「いや」

ライの答えにリュウは肩を落とした。

「なんだよ……期待させやがって」
「それは悪かったな。なら、お詫びに良いこと教えてやる。もうすぐマイが食事を持ってくる時間だぞ」
「食事……？　マイ？」

リュウが首を傾げていると、コツッコツッ、と地下牢に足音が響いてきた。リュウたちの方に近づいてくる。
しばらくして、桃色の髪をした少女が、トレイを2つ持ってリュウたちの入れられている牢の前に訪れた。

「……」

桃髪の少女は無言のまま、トレイを牢の前に置く。トレイの上には５００ｍｌペットボトルに入った水とリンゴが1個が乗っていた。

「やった！　水だぜ！！」

リュウは運ばれてきたペットボトルを受け取ると、キャップを外して水を口に流し込んだ。
程よい冷たさが喉をするりと滑り落ちていく。乾いた砂のようだったリュウの体に水がいきわたっていく感覚、五臓六腑に染みわたるとは正にこのことだろう。

「ぷはーっ、美味い！　生き返ったぜ、ありがとうな！！　えぇと――」
「……」

水を運んできた桃色の髪の女の子。礼を言おうとしたリュウだったが、初対面のため、彼は少女の名前を知らなかった。どこかでよく会っている気がするが、それは、まちがいなく、気のせいであろ

う。
　少女は微笑みを浮かべていたが、リュウに名前を名乗ることはしない。
「その子の名前はマイだ」
　代わりにライが答えていた。
「マイはこの牢屋の管理を任されているのだ。囚人に食事を運んだり、世話をするのも彼女の仕事だ」
「そうか、マイっていうのか。ありがとうなマイ！　おかげで生き返ったぜ！！」
「……」
　リュウの声かけにマイの頬が赤く染まる。しかし声を上げることはなかった。
　彼女が喋らないことにリュウは首を傾げる。
「どうしたんだ？　さっきから少しも喋っていないじゃないか？　あぁ、そうか！　俺の自己紹介がまだだったな。俺の名前はリュウシロウ、長いならリュウって呼んでもらっても構わないぜ！」
「……」
　しかしマイは答えない。
　困った顔をして視線を泳がせている。
「あはは、そうか、マイは恥ずかしがり屋さんなんだな！」
「……」
　マイはやはり答えない。いや、口は動かしている。掠れた音が小

さく聞こえてくるが、それは声を成していなかった。

「折角知り合ったんだし、恥ずかしがらずにもっと話そうぜ！」

「やめろ、リュウシロウ」

「なんだよ、ライ？　何をやめろって言うんだよ？」

「喋るのをやめろ。その軽口を止めないと、俺が貴様の口を糸で縫い付けてでも力づくで止めてやるぞ」

ライは牢の隅に座ったままリュウを睨んでいた。

リュウがライに注意されている。しかしリュウには怒られる理由が分からない。リュウの脳みそには怒られる理由は刻まれていなかった……そう、例えるなら、それはもう豆腐のごとき潔白の白である。

ただしすき焼きにすると美味そうな白でも、頭の中身が決して空っぽな訳ではないことは彼の名誉のために補足しておく。

リュウは身に覚えのない叱責に少し戸惑う。

ライはゆっくりと口を開いた。

「その子は　――　マイは喋れないのだ」

ライの言葉にリュウは耳を疑った。

「なんだって？」

「何度も言わせるな。その子は耳は聞こえる。しかし喋れないんだ。……だが、無理もない。目の前で野盗たちに親兄弟を殺されてしまったそうだからな……心的外傷後ストレス症候群　――　俗に言うＰＴＳＤ、という奴だ」

「ひ、ひでぇ事をしやがる……！」

リュウの拳は怒りに震えていた。

１９９Ｘ年に勃発した核戦争以来、地球は暴力の支配する荒廃した世界へと姿を変えてしまっていた。
力を誇示する強者が弱者から奪っていく。水や食料だけでなく、命や人権ですら理不尽に……弱肉強食こそが、崩壊した世界の理となっていた。
荒廃した大地が、人間らしい感情すら奪っていき、他人の痛みを理解できない輩が横行している……それが今の世界だ。
だから、マイのように身よりを失くして孤独になる子は少なくない。
普通だ。一般的だ。珍しくもない悲劇の１つでしかない　――誰もが泣き寝入りし、諦めて生きている。

「許せねぇ！」

しかしリュウは違っていた。

「どこのどいつだ？　そんな酷い事をしやがったのは！」
「ゼ・バルマリィ……通称『Ｚ』、この近辺を根城にしている野党どもだそうだ。この町には地下の水脈が通っている。水があれば、農作物も作れ食料もある。Ｚの奴らは生かさず殺さず、定期的にこの町を襲い略奪を繰り返してるようだな」

ライの説明にリュウは激昂する。

「そんな奴らをのさばらせておいて良いのか！？　町の皆で団結して立ち向かうべきだ！！」
「既に自警団は作られているそうだが、Ｚの奴らは強い。ボスのユーゼスという男は別として、部下の仮面の男たち（バルシェム）は人間離れした身体能力を持っているそうだ」
「だからって　――　くそっ、マイ！！」

リュウは牢の鉄格子から手を出して、マイの肩を強く掴んだ。マイは体を小さく震わせる。

「……！？」

「大丈夫だ！　そんな理不尽がいつまでも許される筈がねえ！　だから諦めちゃダメだぞ、胸の奥に熱い魂が残っていれば何時か必ず奇跡も起きる！！　お前も、また喋れるようになる日がやって来るさ！！」

「……！」

「だから……そんな世界に絶望したような悲しい目をしないでくれ！！」

リュウの大声が牢屋の中に響き渡る。

彼の言葉にマイの目から涙が落ち、頬を濡らしていた。

「つらいな……」

2人の様子を見たライが呟いていた。

いつの間にか牢の隅にはおらず、リュウの背後に立っている。リュウに肩を押さえられているマイを見下ろし、黒い手袋をした左手でそっと彼女の頭を撫でる。

「大丈夫だ。動かないで」

ライは頭を撫でていた左手を後頭部へと移動させる。そして首の付け根辺りを指圧した。ピシィィ、と鋭い音が聞こえた気がしたが、マイは痛みを感じていないようだ。

「？　なぁライ、一体、マイに何をしたんだ？」

「なに、喋れるようにおまじないをしただけだ。あとは彼女の心次第だ」

リュウの質問に答えると、ライは牢の隅に移動して腰を下ろしてしまった。

リュウはライの言葉の意味を理解することはできなかったが、彼の行動に悪意がないことは見れば分かる。

おまじないなんて気休めかもしれない。

だが願ってくれた人の優しさがこもっている。

ライは黙っていると冷たい印象を受ける男だが、リュウはライと上手くやっていけそうな気がしていた……もっとも、今はこの牢屋の中でだが ――― と。

「た、大変だーー！！　Zだ！！　Zの奴らが攻めてきたぞーー！！！」

男の絶叫が牢屋の外から響いてきた。切迫した声だ。

多くの靴の音が床を鳴らし始める。慌ただしくなった雰囲気の中で、自警団と思われる男の声がマイに向けられた。

「マイ、何してる！　お前も来て、一緒に戦え！！」

「……！」

男の声に促されたマイがリュウたちの前から走り去ろうとする。

「マイ！」

「……！」

マイは一瞬だけリュウの方を振り返り、彼の顔を見た。マイは寂しげな表情を浮かべていた。別れを惜しむようにリュウの顔を見ていたが、やがて背を向けて走り出す。

「マイ！　行くな！　殺されるぞ！！」

リュウの叫びも空しくマイの姿は見えなくなった。

しばらくして、牢の上　――　地上から悲鳴が聞こえ始め、その数は少しずつ増えていく。

「Zか。皆殺しにするつもりなら、この町の自警団ではそう長くは持たないだろうな」

「冷静に言ってる場合かよ！　早く助けに行かなくちゃ！」

「そうだな」

ライは淡々と答え、牢の隅から腰を上げた。

リュウは牢の鉄格子を掴んで力を込めた。直径１－２ｃｍはある鋼鉄製の柵だ。

リュウの上腕二頭筋、広背筋、胸筋が躍動する。心臓から送り出された血液が筋肉をパンプアップさせた！

「ほあぁぁぁぁぁ　――――」

するとどうだろう！

囚人を逃がさないように捕えておくための鉄格子が！

「――　痛ったあぁっ！！」

人間の力で開く訳がない！

力の入れすぎで手が滑り、勢い余って後ろに転倒するリュウ。腰

を床に打ち付けていて、とても痛そうな上に情けない。
やはり牢を出るとなると鍵が必要になってくるようだ。鉄格子を曲げられるような人材がいるはずもなく……というか、そんな脱獄し放題な人間がいたら、是非とも連れてきてもらいたいものである……

「退け」

と、ライがリュウを押しのけて鉄格子に向かって行った。
黒い手袋をしている左手を構える。
直後、閃光が奔る。

――ジャキン！　ガラガラガラッ！！

ライが左手の構えを解いた時、鉄格子は細切れになって崩れ落ちていた。斬られた鉄格子はチャンバラするのに丁度いい長さで、鉄格子の断面はまるで鏡のように輝いている。
鉄格子が無くなった牢は脱獄し放題だ。
リュウは腰を擦りながら立ち上がったが、目の前で起こった現象に驚きを隠せない。

「な、何が起こったんだ……？」
「質問はあとだ。急ぐぞ」
「あ、待てよライ！」

リュウは先に牢から出たライに続いた。
地下牢の通路を2人で走り抜けて行くが、囚人はリュウたち2人だけだったらしく人の姿は見えない。見張りの姿も今は見当たらな

い。
地下牢の出口を目指しながら、リュウはライに訊いた。
「ライ！」
「なんだ？」
「牢屋の檻を切ったのってライか？」
「ああ、そうだ」
振り向きもせず即答するライ。
「檻を切れたってことは、本当はいつでも脱獄できたってことか？」
「ああ」
「じゃあなんで今まで逃げなかったんだ？　ライなら簡単に逃げ出せただろ？」
「俺が逃げたら、牢番をしているマイはどうなる？　どんな罰を受けるかは分かったものではない」
「へへ、そうかよ！　ライ、お前はやっぱり良い奴みたいだな！」
リュウの声に応えず、ライは先頭を走り続けた。
しばらくすると2人は階段を見つけ、上ると外が見えてくる。同時に悲鳴が大きく鼓膜を震わせてるようになる。
目がくらみそうに眩しい太陽の下に飛び出すと、血を流した町の自警団らしき男たちが倒れていた。仮面を被った男たちが町の人たちを襲い、次々と倒されていく。
「抵抗をやめろ！」
リーダー格らしき3つ目の仮面をつけた男　――　ユーゼスが言った。

「さもなくば、この娘（マイ）を洗脳するぞ！」
「……！？」
「最終地獄とか痛いこと言ったり、キックで叫んじゃう娘にしてしまうぞ！」
「げ、外道め、なんて恐ろしいことを……！」

ユーゼスの言葉にリュウが声を荒げた。
すぐに洗脳するなんて言葉が出てくるとは、流石は野党たちのボス、ワルである。

「許せねえ！　待ってろマイ、今助けてやるからな！」
「ん？　私の言葉が聞こえなかった輩がいるようだな？」

マントをなびかせて近づいてくるリュウを見たユーゼスが声を上げる。
それもそのはず。町の自警団は既に壊滅状態となり抵抗する気力を失っている。だがリュウの瞳には熱い真っ赤な炎が揺らめいていたからだ！
マイを捕まえているユーゼスに向かって行くリュウ。
しかしユーゼスの部下が彼の歩みを許すはずもない。

「ひゃっはー、ここは通さねえぜ！」

仮面の男の1人がリュウの前に立ち塞がった。
仮面の額の部分にはゼ・バルマリィのメンバーの証として、Zの文字が刻まれている。リュウはその仮面に見覚えがあった。

「なんだ、あの時の野党の仲間か。仲間と同じ目にあいたくなかったら、そこを退けよ！」
「なんだと！　さては貴様、偵察隊の奴らをやった男か！？」

仮面の言葉にリュウは笑みを浮かべて応える。
「俺のロボッ斗神拳の錆びにしてやるぜ！」
着込んでいるボロマントの中に両手を納めてリュウが叫ぶ。
その様子を見てユーゼスは、
「ろぼっと……ロボ、ロボッ斗神拳……まさか……！？」
「ユーゼス様、知っているのですか！？」
「いや、まったく知らぬ」
期待外れの返答にユーゼスの取り巻きの仮面はズッコケた。
さっきの知ったかな態度は何なんだよ！？
と仮面はツッコミたかったが、チーム内での序列が違いすぎるため何も言えない。世界が滅んでも、人間がいて集団を形成していれば、下っ端は存在し、そしてその発言力の弱さは変わらないようだ。
「遠慮せずに意見言ってよ！」と促されて発言しても、多くの場合はスルーされるのだ……世知辛いね。
と言う訳で、仮面の下っ端は適当に相槌を打ちながら、ユーゼスの言葉を聞くことにした。
「ロボッ斗神拳、昔、私が呼んだ漫画にそんな名前の拳法があった気がするが……」
「ユーゼス様、それってもしかして北〇神拳ですか？」
「あ、そうそう。確か人体のツボを突いて、敵を内部から破壊する暗殺拳だったはずだが……」
「ではあの男の拳　――　ロボッ斗神拳もそうだと？」
「ＨＡＨＡＨＡ、バカを言っちゃいけないぞ、下っ端Ａ。漫画じゃあるまいし。ツボを突いたぐらいで『ひでぶっ』てたら私は指圧マ

ッサージに行けないではないか？」
「ユーゼス様、もうマッサージ店なんてありやしませんよ」
「そうだな下っ端A。力こそ全て、良い世の中になったモノだが、マッサージ店が姿を消したのだけはいただけんと私は思う。ほら、私って仮面被ってるから頭が重くってさー、肩こっちゃうんだよねー」
「あー、仮面あるあるですねー（笑）」
「……？」

ユーゼスたちの会話に、囚われているマイは付いていけない。

「とにかく現実は漫画ではない。小説は漫画とは違うのだよ、漫画とは――」

――ズギューンッ！！
「ヒデブッ？！」

ユーゼスと下っ端Aの歓談を、耳をつんざくような轟音と部下の悲鳴が遮った。
音のした方に目を向けると、ユーゼスの部下の仮面が仰向けに倒れていた。仮面の額部分から白煙が上がっていて……同じように、リュウの手に持っている銃口からも煙が上がっていた。
……銃？

「ロボッ斗神拳奥義、イングラム&ベレッタ……天誅」
「天誅、じゃないだろ。銃を使うな、銃を。拳ですらないのに神拳を名乗るな」
「いいだろ別に。俺、公式設定で射撃の名手なんだぜ？　知ってた

？」

「……！」

知らなかった、といった表情でマイが驚いていた。

対してライはため息1つ。

ちなみに倒れたZの仮面をよく見てみると、額の仮面に銃弾を受けて脳震盪を起こしているだけなのが分かる。

「はいはい、メタ発言はやめような」

「なんだよー、ノリが悪いなーライは。とにかく、俺はこのロボッ斗神拳でマイを助けるぜ！」

リュウは両手の自動拳銃 ―― イングラムとベレッタを構えて、ユーゼスに近づいていく。ライは呆れ顔でそれに続いた。

しかしリュウが拳銃を持っていると分かった瞬間、Zのメンバーの顔色（全員仮面なのに）が変わった。

マイを捕まえているユーゼスを護るため、リュウたちの進行方向に立ち塞がって壁になる。手には斧や槍が持たれていて、殺気が矢のようにリュウたちの肌を刺さってきた。

ユーゼスが「やぁっておしまい」と指示すると、仮面たちは「イィー」と叫んで武器を構えてにじり寄ってくる。何だかんだで、この仮面たちノリノリである。

「……リュ」

仮面たちが今にも飛びかかろうとしたとき、マイの口から声が漏れた。

「リュウ、来ちゃダメーー！！」

「マ、マイ……！　マイが喋ったぞ、ライ！　やったな、お前の左

手が効いたんだ！」
「……ああ。だが、少々マズイタイミングでな」
突然喋り出したマイにユーゼスの魔の手が伸びる。
「うるさいぞ小娘。洗脳されたくなければ黙っていろ！」
「いや！　リュウ、助けて！」
「くっ、待っていろマイ！」
大声で暴れ出したためユーゼスに押さえつけられるマイ。
リュウは慌てて、銃口を構える。狙いはユーゼスの仮面の額部分だ、が　――
「なんだ、このやろー！！」
「素直に撃たせると思ってんのか！？」
「すまらっぱぎー、ってあえがせるぞオラー！！」
ユーゼスの部下の仮面が射線上に障害物として立ち塞がる。それぞれが意味不明な奇声を上げているので、はっきり言ってとても怖い。
奇声の内容を実況してみよう　――　「マミるぞ、オラ！」「ミックミックにしてやんよ！」「ミシェってやんぜ！！」　――　兎に角、意味不明である。Ｚは性質の悪い野党だから危ない薬でも極めているのかもしれない。
「邪魔だ、退け！！」
しかしリュウにそんな奇声は通用しなかった。
リュウはユーゼスを狙っていた２丁の銃をブンブンと振り回し始め、立て続けに引き金を引く。

「ロボッ斗神拳奥義、ランダムシューーッ！！」

銃口から雷撃音が連続する。

リュウの正確無比な射撃が仮面たちの額を直撃した。仮面も金属製だから貫通はしない。しかし銃弾の衝撃が仮面を揺らし、反響して仮面たちの脳を揺らす。

脳震盪を起こした仮面たちは次々と地面に体を預けていった。

「な、なんという猛者だ！」

「リュウ、カッコいい！」

ユーゼスが驚愕し、マイが喜々とした声を上げる。

「こうなりゃ、ヤケクソだぜぇーー！！」

生き残っていた仮面が猛然とリュウに飛びかかってきた。武器はもっておらず、拳1つでの突貫だ。

対してリュウは拳銃もち、イングラムの銃口を向けて仮面を迎撃する。リュウは引き金を引いた。

――カチンッ

寂しい音が銃口から木霊する。もう一度トリガーを絞ってみるが、聞こえてくるのは撃鉄の空撃ち音だけだった。

「た、弾切れ！？」

「好機！　死ねぃ！！」

「ちょ、ちょっと待って！　俺のリロードは凄いから！　レボリューションだから！　だから少し見てってよぉ　――」

仮面が拳が炸裂する。

「――　あべし！？」

リュウはあっけなく仮面に殴り倒された。
その様子に気絶していない仮面たちから嘲笑が巻き起こる。

「なんだコイツ、てんで弱いぞ！」
「お返しだ、やっちまえ！」
「ふはははは、俺の名を言ってみろい！！」
「や、やめて！　暴力反対、はなしあはわばッ！！」

仮面たちの攻撃がリュウの体に炸裂する。
ボコスカ。仮面の攻撃と逃げようとするリュウの動きで土煙が巻上がり、そんな効果音が巻上がりそうな光景が繰り広げられる。

「リュウ、カッコ悪い」
「なんだ、やはりただのヘタレだったようだな」

マイの言葉に続いて、ユーゼスが追い打ちをかけてきた。リュウがなぶられる光景を遠巻きに見ている様子は、何故か仲が良さそうに見えるから不思議なものだ。

「ふぅ……仕方ない奴だ」

リュウの醜態にため息をつきながらも、ライが動いた！
派手に！　素早く！　動いたりは決してしない！

ゆっくりとリュウを殴っている仮面の1人に近づくと、最後の忠告とばかりに肩を叩く。

「おい、弱い物いじめはそのくらいにしておけ」

「うるせえな、今いいとこなんだから邪魔すんじゃねえよ！」

仮面が肩に触れたライの左手を払いのけた。

――カンッ

仮面の手が触れた瞬間、ライの左手から金属音が聞こえたが、仮面たちは誰もその音に気付かなかった。

ライは2度目のため息をつき、左手を手刀構えで頭上に掲げ、

「ライディーチョップ」

ボソっと呟くと左手を振り下ろした。

狙われたのは先ほどライの手を払いのけた仮面の頭だ。金属製の仮面に小さな衝撃が走り、自分が攻撃されたと気づいた仮面はライの方に振り向いた。

「テメェ！　何しやが、る……？」

仮面は自分の身に起きた異変にすぐ気付いた。

視界が微妙にずれている。視界の中心に1本細い線が走っているように見えた。

「仮面を被った者が仮面を剥がれるのは、死に匹敵する屈辱らしい

な？」

ライが言う。

「そういう意味で、貴様は既に死んでいる」

刹那、仮面が真っ二つに割れて、素顔が露わになった。ライの体に隠れて素顔は良く見えない。仮面を割られた仮面（パルシェム）は無言のまま倒れた。

その光景にリュウを殴っていた仮面たちも手を止め、ライに恐怖の視線を向ける。

「な、なんだテメエは！？」

「や、やんのか、こら！」

「い、言っとくがな、俺は強いんだぞ！　ほ、本当だぞ！」

怯える仮面たち。彼らに向けてライはただ一言　――

「俺に出会った不幸を呪え」

――……　その日、ゼ・バルマリィという野盗グループは地上から姿を消したのだった　――……

●

あっと言う間にZの連中は片づけられ、マイも無事に取り戻した後、

「ライ斗聖拳伝承者、ライディース・F・バットシュタイン。それが俺の名だ」

美しき女リーダーアミヤ ――通称アヤの質問にライはそう応えていた。

「姉さんを拉致したライ斗6聖拳の男を追って旅をしていたのだが、気が付いたらこの町の牢に入れられていてな……正直、どうしたものかと悩んでいた所なのだ」

「私は美しき女リーダーア（略）、ライ様！　いいえ救世主様！是非、この町に滞在して町を守ってください！！」

「……話を聞いていたか？　俺は旅をしているんだ」

眉尻を上げて返答するライに対して、アヤは瞳をキラキラと輝かせながら答える。

「私は美しき女（略）、ありがとうございます救世主様！　この町に滞在してくれるのですね！」

「おい」

「私は美し（略）、救世主様万歳！」

町民から救世主コールが沸き起こる。

「救世主様マンセー！」
「救世主！　救世主！」
「ハ・ガ・ネの」
「救世主（メシア）！！」
「メシ屋じゃないぞ！！」
「……勘弁してくれ」

辟易とした表情を浮かべるライ。
そんな彼を、リュウは遠巻きに眺めていた。元々ボロボロだったマントは穴だらけになり、顔面には青あざが幾つも浮かび上がっている。仮面たちに相当こっ酷く暴行を受けた証拠だった。

「ライ、只者ではないと思っていたけど……恐ろしい子」
「顔を劇画調にして言っても駄目だよ、リュウ」
「そうだな、じゃあ少女漫画風に……」
「目を白目にしても駄目だよ」

マイさん、ツッコミありがとうございます。
やはりツッコミは大事だなとリュウは感じていた。
１人旅をしていては決して味わう事のできない快感が、確かにツッコミにはあった。要するに１人でボケとツッコミは成立しないということであり、１人旅を続けてきたリュウもそろそろ他人が恋しくなってきたということでもある。
さて、これからどうしたものかとリュウが悩んでいると、

「リュウ。リュウもこの町で暮らしなよ、水も食料も、拳銃の弾だって少しはあるよ」
「そうなのか？　いやー助かるぜ。弾切らしちまったから旅は続け

られねぇなって思ってたところなんだ！」
「じゃあ丁度いいね！」
「おう！　マイ、これからよろしくな！」
「うん！　よろしくねリュウ！」

必死に町民の手から逃れようとするライを尻目に、リュウとマイは微笑ましく笑いあう。

結局、町民の手から逃れられなかったライを加わったこの町は、救世主の住む難攻不落の要塞都市として発展し、豊かな水と食料を得て平和を求める人々が集うようになりましたとさ　――……

めでたしめでたし。

俺の名前はキョウスケ・ナンブ。
俺の心には今、猛烈な感動のさざ波が押し寄せている。
それはなぜか、今から説明することにしようと思う。
なぜか高校の密集する地域『エリア』における1番のマンモス高校――OG（オリジナルジェレーション）高等学院、通称ジェネ高の体育館。
そこに俺は、恋人のエクセレンとなぜかついてきたラミアと共に、先ほどの映画を見ていた。

●

完

あの映画は、ジェネ高の映研「ＳＲＸ団」が作成したものだ。
某有名漫画をモチーフにした実に良い作品に仕上がっていた。
「俺たちにはまだ帰る場所がある、こんなに嬉しいことはない。平和が一番、実に心が休まる良い話だった」
感動のさざなみが押し寄せている俺の心の海岸で、
「お前のようなギャンブル狂いに言われたくない、でござんす」
「家賃払えなくなって、帰る家無くなっても私は知らないからね」
「……」
ラミアとエクセレンは容赦なくゴミをポイ捨てしていく。
投げ捨てられた空き瓶が割れて、破片で俺は足を切る。痛い。心が。
「エクセ姉さま、このダメ旦那は借金ちゃんと完済したのでございますのことよ？」
「あはは、まっさかー。今の借金の総額は８３万７６５円よ。ちゃんと帳簿つけてるから間違いないわ？」
ああ、穴があったら入りたいし、その帳簿を燃やしたい。
どうでもいいがラミアよ？
影鏡高校のお前がなぜジェネ高にいる？
お前がいると、アクセルあたりが乱入してきて大騒ぎになりそうで怖い……俺の心の平穏のために、できれば帰ってもらいたい……
あと、俺の財布の中身に平和が訪れるのは一体いつになるのだろうか……？

ここはＯＧ高等学院。
『エリア』にある地域最大のマンモス高校だ。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない。

世紀末救世主伝説ＯＧ　～お前は既にタヒている～（後書き）

＜キャラクター紹介＞

リュウセイ・ダテ：ジェネ高2年生、映画研究会「ＳＲＸ団」のリーダーで時々映画を作って体育館で放送している。ロボット大好き！　ジェネ高一のロボットヲタクとしても有名である。アニメが放送され始めてから、何故かモミアゲが濃くなってしまった。

ライディース・Ｆ・ブランシュタイン：ジェネ高2年生、リュウセイとは腐れ縁の金髪美青年。過去の事故で左手は鋼鉄製の義手になっており、左手で人を叩くときは心の底から怒った時だけである。しかしリュウセイにだけは容赦なく「ライディーチョップ」をかましている。

マイ・コバヤシ：ジェネ高1年生。3年のアヤ・コバヤシの妹で、リュウセイに好意を持っている。彼から教えられるロボオタ知識を着実に吸収していて、アヤに心配されている。

アヤ・コバヤシ：ジェネ高3年生。マイのお姉さん。それ以上でも以下でもない。

ユーゼス・ゴッツォ：元悪の秘密結社の大首領だったが、今は無職のまるで駄目なおっさん（マダオ）。今回は特別に出演している。

＜次・回・予・告＞

キョウスケ「まず始めに、前回の次回予告をまるで無視したことを謝罪しておく」

エクセレン「前回でクロウが主役の回を書くみたいに予告していたのに、まったく関係な話を書いてしまってごめんなさいね！」

キョウスケ「まぁ、コメディ編は次回予告も存在そのものもギャグみたいなものだ。次回予告で予告しているのは、そういうネタを思いついているというだけで、確実に書く保証はどこにもないかもしれないな」

エクセレン「でもそれだと次回予告する意味ないんじゃないの？」

キョウスケ「そうかもな。だが、俺は予告を止めんぞ」

エクセレン「え、なぜかしら？」

キョウスケ「コメディー編における、俺の数少ないレギュラー枠だからだ！」

エクセレン「わぁお！　じゃあ、今日も元気に次回予告いってみよー！！」

キョウスケ

「さぁ、次回予告だ！　言っておくが、予告したからって次回はこの話になる保障はどこにもないからな！！　ご了承ください。

ある日の放課後、彼女は教室に忘れ物をしてしまった。

自分の教室に行くための近道で、１年生の教室あるフロアを通って

おくことにした彼女だったが、その時彼女は誰もいないはずの教室から響いてくる笑い声を耳にする。
誰かと話して笑っているようだが、声は1人分しか聞こえない。
気になった彼女 ――― アイビス・ダグラスは、その1年の教室の中を覗くことにした。
教室では1年生の女の子が1人で空中に向かって話しかけ、笑っていた。
その様子を目撃された1年生ラトゥーニ・スゥボータは言う。

『話していただけ……エア友達と』

次回は未定！　スパロボ学院コメディー編「今日のワン子2　～私の友達は友達が少ない～」をそのうち書くぞ！」

エクセレン「北斗の○もよろしく！！」

いや、コメディはいいですね。すいすい書けます。
今後もネタや要望は絶賛募集中です！
ただしいつ執筆に取り掛かれるかは未定ですので、そこのところはご了承ください
ではではノシ

バカとビビリと大金持　～兄より優れた妹など存在しねえ！～（前書き）

＜注・意・事・項＞

全力でキャラ崩壊中！
閲覧すると気分を害する可能性があります！
スパロボＯＧ界で生身で戦えるユニットとなったお兄ちゃんがキャラ崩壊起こしております！
それでもよいと言う方はどうぞ！

次回予告？　なにそれ、美味しいの？　と言わんがばかりに、次回予告を無視中ですｗ
いや、あの、ごめんなさい。
ではどうぞ！

バカとビビリと大金持　～兄より優れた妹など存在しねえ！～

ここはなぜか高校の密集する地域、エリア。

突然の話だが、エリアは住宅街、商店街、繁華街と大まかな区分分けがされている。

住宅街は住民の寝起きする場所、商店街は日用雑貨や卸売の食材を販売、繁華街では大手の店が軒を連ねて商売をしていたりする。

住宅街を除き、商店街・繁華街とエリアの住民が店を構え商売をしているわけだが、個人商店の脅威になる大規模フランチャイズ店がないわけではなく、モスドナルドやケンカッキーフライドビーフなど有名店も進出していた。

有名フランチャイズ店のバックには、当然のように巨大企業の影が存在している。

飲食店経営に限らず、コンピュータ製造販売のソミーや週刊誌の製造販売を担う超英社のように、有名な企業の息がかかった店はエリア内にもあるのだ。

これは、そんな巨大企業の若社長と社長秘書のお話である。

「あぁ、暇だなぁ」

エリアのどこかにある超高層ビルの一室――社長室で、その男は呟いていた。リッチな社長椅子の背もたれがギシギシと豪華そうな悲鳴を上げている。

「世の中の物事の９９．９９９９９９％はお金があれば解決できる。僕はお金持ち。それも超絶お金持ちだ。

僕にできないことは何にもない。僕はいうなれば全能者さ。だけど今、僕は猛烈に暇なんだ」

男は独り言を終えると、社長椅子から立ち上がり、天を仰ぐように両手を突き上げて唸った。

「お金があれば何でもできる！　お金、持ってますかー！？」

「うるさいですよ、カルロス・アクシオン・Ｊｒ．。何がそんなに不満なんですか？」

「そんなの決まっているじゃないか、シオニーちゃん」

男をカルロスと呼んだ銀髪の社長秘書らしき若い女性を、彼はシオニーと呼んだ。

男の名前はカルロス・アクシオン・Ｊｒ．、つい最近、エリア内で頭角を現し始めた「アクシオン財閥」を取り仕切る頭取、いや、若社長である。ちなみにカルロスは、奇抜で常識を疑うようだがそれでいて独創的かつ効果的な経営手腕を持っており、古参の企業「Ｄ・Ｃ」や「マオ・インダストリー」とは犬猿の仲である。

決して、彼が、奇抜で常識を疑うような独創的な男というわけではない。そこのところは間違えないでいただきたい。

新進気鋭、生き馬の目を抜くような企業間経済闘争の寵児……それがカルロスだ。

そんな大物が、コメリカ初の黒人大統領のような身振り手振りを交え、吼えた。

「暇なんだ！」

「はぁ」

「ＨＩ・ＭＡ・ＮＡ・ＮＮ・ＤＡ！」

思わずローマ字で発声してしまう程、カルロス・アクシオン・Ｊｒ．は暇だった。

金を手に入れ、すべてを自由にできるようになった。何でもでき

る。だから何をしようか迷い、仕事を終えたあとの時間が、カルロスには暇で暇で仕方なく感じられるようになっていた。
カルロスの暇さを目に見えるように表現すると、

――バンッ！（机をたたく音）
「ひっ……！」

意味も無く机をたたき、ついつい、美人秘書のシオニーちゃんをビックリさせて暇をつぶしてしまう程である。

――バババンッ、バ、バンバンッバンッ！（カルロスが机をたたく音）
「ひっ……やめて心臓が……はぁはぁ」

胸を押さえてうずくまるシオニーちゃんを見て、しょうがないので机をたたくのを自重するカルロス。彼は欲望に抑えが少しだけきく、立派な大人なのだ。偉いぞ、カルロス。

「これで、僕がどれぐらい暇か分かってもらえたと思う！　中小企業『リモネシア』の社長だったけれど、経営難から我が財閥に吸収され、今は社長秘書として働いているとっても臆病者のシオニーちゃんにもね！」
「はぁはぁ、と、とても説明ちっくなセリフありがとうございます……！」

言葉とは裏腹に射抜くようなシオニーの視線。だがそんなもので

貫かれるような薄い皮を、カルロスの面はしていなかった。

「シオニーちゃん、僕は暇なんだ？」

「知ってます」

カルロスを無視して、落とした書類を拾い集めるシオニー。

無言で両手を上げるカルロス。

数秒後、彼の手が振り下ろされる先には、さっきのバンバン音を奏でた分厚い木製の社長デスク。

「シオニーちゃん、僕は暇なんだ？」

「……」

「ＨＩ・ＭＡ・ＮＡ・ＮＮ・ＤＡ？」

そりゃあもう、２度もローマ字で発音してしまうぐらいには。

カルロスの手首がピクつく。肩を震わせながら、シオニーちゃんは答えた。

「分かりましたよ！　やればいいんでしょう、やれば！　暇つぶしの企画を！？」

「さすがシオニーちゃん。頼りになるぅ」

こうして、アクシオン財閥主催の「第１回自慢自慢大会」が、エリアの商店街に特設ステージを建設して行われることになった。

カルロスの暇をつぶすために、急ピッチで作業が進められ、参加者を募るチラシがエリア中に配られた。

賞金は１０００万……ペイカ（見えないぐらい小さく書かれている。ペイカはアクシオン財閥内でだけ通用する単位で商品券のようなもの、価値は円の１／１０００程）……シオニーちゃんのヤケっぷりが目に見えるような宣言っぷりであった。

「もう、やだ」

頑張れ、シオニーちゃん。君が報われる日はいつかきっと来るさ……たぶん。

こうして、あっという間に、「第1回自慢自慢大会」の開催日がやって来るのだった。

●

開催日、商店街の特設ステージ上で、赤いジャケットを着た男がマイクに向かって言った。

「俺の名前はキョウスケ・ナンブ。この物語の主人公にして、俺の絶叫は収録用のマイクすらも破壊したことがある程だ。
では、みんなに俺の美声を堪能してもらいたい。せーの、ボルッテッ――――」

――カーン

審判用の鐘の音が鳴る。最低ランクの1鳴りであったことにキョ

ウスケは驚愕し、その驚きの様は彼の眼にありありと浮き上がっていた。

「キョウスケ、アウトーー」

審査員長カルロスのほくそ笑んだ審判が下される。

「待て！　なぜだ！　なぜなんだ!?　俺の舞台はまだ終わっていない！」

「えぇい、その鐘1つ男をひっ込めろ。賞金欲しさにメタ発言するような奴は失格。僕の悪口を言うような奴も失格。

それに君の発言で、この大会が公共広告機構に睨まれたりしたら面倒ジャロ？」

カルロスの発言に場の空気が凍った。

時が止まったような寒さが会場内を駆け抜けていく。まるでその様はさながらブリザード……しかし直後、会場内から拍手喝采が巻き起こる。先ほどの白けた雰囲気すら、この爆発のためのタメでしかなかったような。そう思わされる程の拍手とカルロスコールだった。

もちろん、サクラである。

シオニーちゃんに雇われたサクラが、観客を扇動し場を盛り上げていた。カルロスは、まぁまぁ、と会場の騒ぎを押さえるように、檀上の審査員席から手を振り、満足気な表情でジェスチャーをしていた。

納得いかん、と黒子に引きずられながらキョウスケが叫んでいた。

「俺の！　俺の名を言ってみろ　――　ッ！！」

「キョウスケ、あうとーー」

残酷な鐘の音（1回）が死神の鎌のように、キョウスケの退場を告げる。

カルロスはその光景を笑いながら眺めている。実に楽しそうだった。エリア住民の滑稽な自慢話が、カルロスの退屈を拭い去っているように見える。

シオニーちゃんは審査員席でカルロスの隣に座っていた。楽しそうに笑うカルロスに白い流し目を向けた後、びくびくしながら司会の仕事を続ける。

「で、ではエントリーナンバー33番、『ミザル組若頭　重震のマグナス』さん、ど、どうぞ」

シオニーちゃんの言葉に続いて、相撲取りに贅肉をさらに足したような巨漢が壇上に姿を現した。

マグナスと呼ばれた男が腹を叩く。湖面に小石を投げ入れたような波紋が肉面に広がった。

「ぐふふふ、俺様の体は拳法殺しの体ー。さらに俺様の必殺技、巨霊奔烈は地を砕き、天を裂き、人を　――――」

――　カーン

カルロスの鐘による審判が冴えわたる。

「マグナス、（存在自体が）アウトー」

「な、なんだってー!?」

マグナスの大きな体が衝撃にぷるんと震えた。

確かに、マグナスは某有名、ほあたぁな、漫画のキャラクターに似ている。具体例を挙げるならハー……とその時、マグナスの怒りが爆発した。

「なんで俺様が失格なのだ！　理由を言え！　理由を！」

だからマグナスがハー……とにかく、マグナスの主張は当然のものでもある。

世の中には理不尽が溢れているとしても、自己アピールさえさせてもらえない、売り込むチャンスすらないなんて悲しすぎる。

マグナスの主張はもっともだと、シオニーちゃんは思った。

なぜなら、彼女はアクシオン財閥への就職希望者の面接官をしたことがあったからだ。ちなみに内定率は１００％と破格。彼女が担当する面接通過のコツは簡単だ。シオニーちゃんの前で大声を上げたり、机をたたけばそれでいい。

「ごめんごめん、悪気はないんだ」

カルロスがマグナスに謝罪する。

「けど、ほら、あれさ。僕って金持ちだからね、貧乏人の考えは分からないんだ。だから許しておくれよ」

「テメェ、謝る気ねえだろう！？」

「そんなことはないさ！」

――　カンカーン

カルロスの叩く鐘が２連発した。

「ほら、奮発して鐘を2回鳴らしておいたよ。君ら貧乏人には勿体ないくらいさ」
「ぶるぅぅあぁぁ！　許さん！　このチビめ、俺様の巨霊奔烈の餌食にしてくれるわ！」
激昂したマグナスがカルロスたちに近づいていく。マグナスの巨体の影が、審査員席に座っているカルロスたちを覆っていく。鬼の形相のマグナスと2人の視線が絡み合った。
「ひ、ひぃ……！」
シオニーちゃんが怯えた声を漏らす。
両手で頭を庇って震えていて、その様子は見ているものの嗜虐性を刺激する。マグナスの瞳に怪しい光が灯る。拳を鳴らすマグナスの巨体が、まるで悪魔のようにシオニーちゃんには見えた。
「ぼ、暴力反対！　僕を殴ると高額訴訟を起こすよ！」
「ぐふふ、ならばその減らず口、二度とたたけぬようコンクリに固めて沈めてくれるわ」
「な、なんだって！？　君、貧乏人の分際で金持ちに逆らおうって言うのかい！？　信じられない、アンビリーバボーだよ！！」
カルロスの絶叫にマグナスは、ヤクザ屋なめんなよ、とドスの利いた声で返してきた。
このままでは2人の身が危ない。特にシオニーちゃんに非はないため、完全にカルロスの傲慢のとばっちりである。コンクリと合体して海にダイブ……想像しただけ身の毛もよだつ。
しかしマグナスはやりそうだ。
マグナスの嘲笑がシオニーちゃんの恐怖に拍車をかける。

「何なのよ、もう……！　帰りたい……私をお家に帰してよ！」

もう嫌だ。なぜ自分はここにいるのだろう。なぜリモネシアは経営難に陥ってしまっただろう。なぜ、あのときあの男 ――― アイム・ライアードの言葉を信じてしまったのだろう。シオニーちゃんの頭で走馬灯のように疑問の嵐が吹き上がる。

しかしそれは直面した事態からの逃避でもあった。

「ぐふふ、安心しろ。女の方は回したあと、娼館に売り払ってやるわ」

「ひっ、い、いや……！」

マグナスの笑顔が痰のようにシオニーちゃんの視界にねばりつく。気持ち悪い。他に表現のしようがないマグナスの顔から反射的に顔を背けた。

――― 助けて！　誰か！！

シオニーちゃんは懇願する。しかし理解していた。願って叶うのなら、あのときリモネシアはアクシオン財閥に吸収合併などされなかったはずだ。

この世界にヒーローなんて存在し ―――

「待てぃ！！」

――した。

壇上に力強い声が響いた。背後から聞こえた声にマグナスが振り返り、カルロスもシオニーちゃんも声のした方を向いた。

壇上に紅い鎧に身を包んだ男が立っている。

「行く手に危険が待ち受けようと、心に守るものあるならば」

鎧の男は青い髪をなびかせてマグナスに近づき、

「たとえ己の命尽きるとも、体を張って守り通す――」

人の顔を模した仮面、その瞳部分に真っ赤な炎を燃やしながら叫んだ。

「――人、それを『男』と言うんでえ！！」

「テメェ、何者だ！？」

「エントリーナンバー３４番！　『萌える妹魂（もシスコン）』しっとファイターロア』！　呼ばれてなくても只今参上だぜ！！」

紅い鎧の男――ファイターロアが一瞬でマグナスの懐に潜り込む。そして燃え上がる拳をマグナスに突き込んだ。

しかしファイターロアの突きは肉に阻まれた。マグナスの腹の贅肉がファイターロアの拳の威力を分散させて、消してしまうようだ。

「ぐふふ、俺様の体は拳法殺しの体よ！　そんなパンチ、痛くもかゆくもないわ！」

「そうかい！　なら、こうするまでだぜ！」

ロアが止められた拳をねじり上げる。真っ直ぐ突き出していた腕を肘を視点に直角に曲げ、至近距離にも関わらず一歩踏み込んだ。

足で地面を蹴って、生まれたエネルギーを全てマグナスの体をかち上げるために使った。

「うらあああぁぁ　――　ジェットアッパァァァッ！！！」

マグナスに接触したままの拳が、直上に向けて振りぬかれた。マグナスの巨体が地面から離れる。

「お、俺様の体が持ちあがる、だとぉぉ！？」

「パンチで倒せないなら、パンチでふっとばすまでよ！」

「ば、バカな！　そんな……パンがなければ、お菓子を食べればいいじゃない的な、そんな理屈が通用するはずが！　通用するはずがぁ　――　ッ！？」

ＢＡＣＯＯＯＯＭＭ！！

マグナスの体が渦を巻きながら天空高く叩き上げられた。１ｍ、２ｍ、３ｍ……マグナスの体の速度は増していき、ドンドン上昇していく。その様子はまるで加速し、上昇するジェット機のようだった！

車○先生の某漫画と違い、マグナスの体は頭から落ちてくることはない。落ちれば間違いなく頸椎を折る高さからの落下は免れ、きらりと、マグナスの体は空に輝く星となった。

――　カンカンカンカーン！！

カルロスが鐘を狂ったように打ち鳴らす。

「勝者、ファイターロア！」

「見てたかショウコ！　兄ちゃんは、兄ちゃんはやったぞ！　次はフォルカだ！」

カルロスの判定にロアが拳を突き上げて吠えた。

会場からも歓声が沸き起こる。シオニーちゃんの雇ったサクラが観客を扇動したようだ。「次は～」の下りには誰も触れず、会場は自然とロアコールが巻き起こっていた。

「な、なんだか……大会の趣旨が変わっていない……？」

もはや会場では、シオニーちゃんだけが冷静だった。

「第１回自慢自慢大会」……カルロスの暇つぶしのために、シオニーちゃんが無理やり考案した、自慢したいことを自慢する大会だ。

カルロスも審査員として参加させれば暇はしないだろう、というかなり投げやりなアイデアだったが、予想以上に参加者が集まり大会らしくなった。その事にシオニーちゃんは小さな達成感を感じていた。

それが今はどうだろう？

気づけば、ボクシング漫画のような展開になっているではないか。

「よーし、お前らこれを見ろ！」

ロアコールに当てられたのか、ファイターロアが何処からか数枚の写真を取り出した。

女の子の写真だ。カメラ目線のものもあるが、ほとんどが撮られていることに気付いていないと思われる写真ばかり……盗撮チックな写真を見せつけ、ファイターロアは全身全霊で喉を震わせた。

「これが！　俺の自慢の妹、ショウコだあぁぁぁっ！！！」

――カーン

カルロスの鐘がうなりを上げる。

「ロア、（倫理的な意味で）アウトー」

「あ、あれ？　意外と冷静なんだ」

カルロスが適正な判断を下したことにシオニーちゃんは驚く。

「当たり前だよ、シオニーちゃん。僕は金持ちだからね。金持ちは社会の流れに敏感なものだよ。どんな大金持ちの権力者でも、社会という化け物には勝てない。社会という化け物の規範に刃向えば、僕のような大金持ちでもすぐに潰されてしまうからね。

だから僕ら金持ちは社会に刃向わず、流れに乗り、金を稼ぐのさ。投資するのさ。だから彼はアウト。社会が彼を認めないからさ！」

「てやんでぇ、べらぼうめ！」

ファイターロアの江戸っ子口調が空を裂く。

「妹を舐めんなよ！　妹は最高だ！　もう文化と言ってもいい、デカルチャーなんだぜこんちきしょー！！」

シオニーちゃんの目の前で、カルロスの持論にファイターロアは妹最高論を振り上げて反論していた。

妹を大切に思う兄の気持ち……シオニーちゃんは、彼の気持ちは素晴らしいものだと思った。こんな自慢大会に出場して訴えることができる程、彼は妹のショウコちゃんのことを想っているのだ。

ふと、ファイターロアが握っている写真の絵がシオニーちゃんの

目に入った。
お風呂場だ。それも、これから風呂に入ろうとしているショウコの写真だった。上着に手をかけて脱ごうとしており、お腹周りのタマのような素肌が見えていた。
気持ち悪い。素直にそう思えた。

「いいか、妹は素晴らしい！」

ファイターロアはシオニーちゃんの心の内を知らず、マイクに向かって主張を続けた。
主張自体は自慢大会の趣旨に合っているのでシオニーちゃんは止めなかった。
先ほどまでの江戸っ子口調とは打って変わって、真面目にファイターロアが語りだす。

「まず妹は、兄よりも歳が若いことが美点としてあげられる」

真面目な口調だが言っていることは大したことない。妹が兄より若いのは当たり前のことだ。
ファイターロアの熱弁は続く。

「身内が女ならいいのか？　いいや、違うだろう。
女でも母ちゃんや姉ちゃんだと、歳が上になってしまう。歳が近い姉ちゃんがいたとしても、姉という人種は弟に対してあまりに独裁的である。加えて歳が離れている姉ちゃんほど我慢しがたい存在はいない。母ちゃんなど論外だ。歳が離れれば離れるほど、母ちゃんや姉ちゃんに対する萌え度は、まるで滝から落ちる水のように急降下する。
しかし！　妹は！　違う！
妹の歳は離れれば離れるほど、萌えるのだ！　歳の差がメリット

に成り得るのは妹だけだ！　ちがうか諸君！！」
「おぉ……」

誰かが会場で感嘆の声を漏らしていた。誰だ？　シオニーちゃんは見つけ出して、声の主を打ち首にしたい衝動に駆られた。
ファイターロアのトークは段々と熱を持っていく。「Ｙｅｓ．Ｗｅ　Ｃａｎ！」と言い出しそうな身振り手振りでロアの妹論が続く。

「ここでドジッ子属性について考察してみよう。
ドジッ子とは間が抜けてミスを連発してしまうが、むしろそこが逆にイイ！　という恵まれたキャラクター性だ。ドジッ子は可愛いよなぁ、と思う人も諸君らの中に少なくないと思う」

驚くことに、うんうん、と小さいながら声が上がった。シオニーちゃんは賛同者を発見したら、すぐさまバイクによる町内引きずり回しの刑にしたい衝動に駆られた。

「ではまず、姉ちゃんがドジッ子だった場合を想像してくれ。……想像できたか？　自分よりも年上の人間が、バケツにつまずいて水浸しになる、運んでいたコーヒーをこぼしてカップを割る……なんでもいい、想像してくれ。
……確かに、見た目に可愛くは映るかもしれない。
だが、ここでもう一度想像してほしい。先ほどのシュチュエーションで、姉ちゃんを妹に挿げ替えて想像してみてくれ！」

ファイターロアは一拍の間を置く。

「どうだ！　可愛らしさが2、3倍になっただろう！
あるとき妹がバケツにつまずいて水浸しになれば、大丈夫か？かわいそうに、と心配し、別のとき妹がコーヒーをこぼしてカップを

割れば、ふふふ仕方のない奴めと、俺たちの顔には笑みが浮かぶ！！
妹とは、どんなシュチュエーションでも萌え度を倍増させてくれる。妹とは、人生における最高のスパイスなのだ！！」
「「「おおぉ～～」」」

会場から上がる歓声を聞いて、もう死ね、とシオニーちゃんは思った。結構な数の声が会場から上がっていた。シスコンを1匹見つけたら、あと30匹はいると考えた方がいいのかもしれない。
あと付け加えれば、妹想いの人は決して妹の脱衣風景を盗撮なんてしない。
盗撮。ダメ。絶対。

「いいか！　妹は最高だ！　さぁご一緒に、妹は最高ですかーー！？」
「「「最高でーす！」」」

ファイターロアの声に観客の多くが応える。
なんだか、怪しい新興宗教みたいになっている。止めた方がいいんじゃないか、とシオニーちゃんは焦燥感を覚える。
と、そのとき。

「ちょっと、待ったぁーー！！」
「え？　こ、今度はなに？」

大声を上げ、1人の少年が壇上に乱入してきた。

「俺の名前はカズマ・アーディガン！　先輩、あんたは間違っている！」
「オメェ……2号か！　久しぶりだなぁ。しかしさっきの言葉はどういう意味でぃ？」

「そのまんまの意味だぜ、先輩！」

乱入者の名前はカズマ・アーディガンというらしい。しかもファイターロアと知り合いらしい。それだけで気持ち悪い。とシオニーちゃんは思ってしまった。

「いいか！　妹ってのは鬼だぞ！　鬼畜じゃねえか！　それを褒めたたるなんて、先輩はどうかしている！」

「なにを言う2号！　妹は　──　ショウコは最高だ！　なんなら歌を歌ってやってもいいぐらいだ！　そら、いくぞ！

ショウコーショウコーアズマーショウコー、ショウコは可愛い女の子─」

なんとファイターロアがマイクに向かって歌いだした。しかも歌は即興で考えた自作のようだ、しかも下手。これにはドン引きしていたシオニーちゃんも、さらに大きく引かざるを得ない。

「なんだと？　なら、俺も！」

カズマも対抗して歌を歌おうとし始めた。しかし壇上には大会参加者が喋る用のマイクは1つしかない。大会参加者が喋る用のマイクは、だ。

カズマとシオニーちゃんの目が合う。シオニーちゃんの手には司会者用のマイクが1つ握られていた。

「頼む！　司会者の姉さん、そのマイクを俺に貸してくれ！」

「ひっ、なんで？」

「これが男の戦いだからだ！」

「もう嫌ぁ！」

シオニー・レジス25歳。心の底からの叫びであった。

「なんなのよ……なんなのよこの人たち……！」

「あははは、いやー、楽しいね。最高だ」

「ちょっとカルロス！　あなたまでなにを言っているの！」

カルロスまで妹魂（シスコン）に目覚めてしまったのか、とシオニーちゃんは驚愕する。

……いや違う。カルロスはこのカオスな状況と慌てふためく自分を見て楽しんでいる。そうに違いない、とシオニーちゃんは推測した。

「むむ、僕の考えを読んだか。ビビリのくせに」

「ひっ……こ、心を読まれた……？」

「あははは、なーに、ちょっとした読心術だよ」

得意げなカルロスの笑みに、大きな苛立ちを覚えるシオニーちゃん。

「それよりマイク貸してくれよ！」

「ショウコーショウコー、ツンデレショウコー！　よぉし乗ってきた！　2番いくぜぇ！」

「もう嫌！　誰か！　誰か私を助けてよ！」

歓声、暴走、煽り……様々な要素が入り乱れてカオスとなった会場に、シオニーちゃんの悲鳴が響き渡る。

それは経営していた会社を乗っ取られ社交秘書にされた挙句、無理やり企画させられた大会をもメチャクチャにされた、1人の女の悲痛なまでの叫びであった。

あぁ、誰か私を助けて。他力本願なシオニーちゃんには誰も応え

てくれない。というより、騒然としている会場に声はかき消され、誰の耳にも届いていなかった。
それでもシオニーちゃんは願った。
このカオスに収集してくれる救世主の存在を！
まさにそのときだった！

「お兄ちゃん、恥ずかしいからやめてよね！」
「いい加減にしなさいよ、このバカカズマ！」

会場から女の子の大声が上がった。
会場の人垣が声の主を中心に割れた。まるでモーゼのなんたらのように、声の主から人が引いていく波のように離れていき、２人の少女と１人の青年だけが残された。
茶髪の少女と青髪の少女、そして赤い髪の青年が腕を組んで立っていた。

「おお、ショウコ！　ショウコじゃないか！」
「げぇ、アリア！」

ファイターロアが茶髪の少女を喜々としてショウコと呼び、カズマが青髪の少女をアリアと呼んで怯えていた。怒り心頭。ショウコもアリアも目と眉が吊り上っている。

「お兄ちゃん、これはどういうことなの！？」
「妹の　――　ショウコの素晴らしさをみんなに伝えようと……」
「このバカァ！！」

ファイターロアがショウコに怒声を浴びせられ、

「ねぇバカカズマ、鬼畜の妹って誰のことかしら？」
「……ミヒロ」
「嘘おっしゃい！　このバカカズマ！」
やはりカズマもアリアに罵声を浴びせられていた。
「バカなお兄ちゃんには」「バカなアニキには」
2人の声がシンクロする。
「「お仕置きが必要ね！」」
「心得た」

ショウコたちの後ろで動かなかった赤髪の青年が動いた。
背が高く、引き締まった筋肉をした男だ。眼力だけで相当の修羅場を潜ってきた男だと分かる。只者ではないことが一目でわかる。
その男が腕組みを解き、なにかの拳法の構えを取ったのだ。
途端に、会場にいた観客が逃げ始めた。まるで湖面から飛び立つ水鳥のように、静かに会場には誰ひとりいなくなる。
シオニーちゃんは猛烈に嫌な予感に襲われていた。

「テメェ、フォルカ！」

ファイターロアが赤髪の青年の名を呼んだ。フォルカと言うらしい。

「今日で会ったが１００年目！」
「いえ、今日で会ったのは４回目です。お兄さん」
「てやんでぇ！　俺をお兄さんと呼ぶんじゃねえ！　今日こそ、俺

の奥義『ファイヤードラゴン』で消し炭にしてやるぜ！！」
「致し方なし。ならば、こちらも機神拳の奥義で迎え撃つまで……！」

ファイターロアの体が燃え上がり、拳を構えたフォルカの周りの空気が揺らめき始めた。
ファイターロアの体から燃え上がる炎の龍が出現し、フォルカの周りの空気は青白いオーラのようなものに変質する。
２人が何かを口走っている。おそらく技の名前かなにかだろう。
シオニーちゃんにはそんな風に見えた。
２人が拳を振るう。発光と轟音、そして衝撃が拳から生まれる。

「ひ……！」

一瞬でシオニーちゃんの視界はまばゆいまでの白で覆い尽くされた――……

●

それからの事をシオニーちゃんは覚えていない。

目を覚ましたら、全壊した「第１回自慢自慢大会」用の特設ステージだけが残されていた。
ファイターロアも、カズマも、フォルカの姿も見えなかった。ショウコとアリアも当然いない。残っていたのは、みすぼらしく真っ

黒に焦げた服を着たカルロスだけだった。
髪の毛もちりちりに焦げている。凄い熱量に曝されてしまった後の、燃え残った残りかすのように見えた。彼はなぜか残っていた審判用の鐘の傍で立ち、シオニーちゃんの方を見ている。
その顔には、なぜか、彼が暇をしていない時に浮かべる笑みが張り付いていた。

そして気づく。
自分の姿もカルロスと同じザマになっていることに。

いや、もっと酷い。愛用のスーツが真っ黒どころではなく、ボロボロに焼け落ちていた。焼けて穴の開いたスーツの隙間から、シオニーちゃんの雪のような素肌が見える。ついでに愛用の黒い下着もだ。

――ガイィィン

カルロスの審判の鐘の音が鳴り、砕けて落ちる。

「シオニーちゃん、（性的な意味で）アウトー」
「死ねぇ！！」

唸る鉄拳、轟く打撃音……その日、シオニーちゃんがカルロスを殴る音が商店街中に木霊したという。
今日も明日も、カルロスの暇つぶしに付き合わされるシオニーちゃんの日常は続く。

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。
『エリア』には個性豊かな人間が沢山いる。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない

バカとビビリと大金持　～兄より優れた妹など存在しねえ！～（後書き）

＜キャラクター紹介＞

シオニー・レジス：中小企業「リモネシア」の社長だったが、「アクシオン」財閥に吸収され、今はカルロスの社長秘書をしている。あだ名のシオニーちゃんはカルロスが勝手に命名（実は２５歳なのでちゃん付けされる歳ではない）。超が付くほどのビビリで、そのビビリっぷりはＳたちの嗜虐性を刺激し、彼女の前で机をバンしたいというＳなファンが地味に増えているという。

カルロス・アクシオン・Ｊｒ.：「アクシオン財閥」の若社長。奇抜ば経営手腕で短期間でトップ企業の一員に上り詰めた。暇を持て余すと、シオニーちゃんに無茶ブリをしたり、彼女の前で机をバンする悪癖がある。金持ちを鼻にかけた嫌な奴のため、特定人物に「すっとこどっこい」と呼ばれている。

（しっと）ファイター・ロア：深紅の鎧に身を包む我らが変身ヒーローにして、「萌える妹魂」。今回は妹の素晴らしさを広めるために大会に出場。日々、妹ショウコの恋人フォルカをぶっ殺すための必殺技を開発にいそしみ、毎度返り討ちに会っている。

その他：主人公・長男坊・妹・修羅など

＜次・回・予・告＞

キョウスケ

「マイクの力を借りて！　今こそ必殺の！

リアクタアァッボルッテッ　――――」

――　カーン

エクセレン「キョウスケ、アウトー♪」

キョウスケ「くっ、なぜだ！　なぜ、邪魔をするエクセレン！？」

エクセレン「うふふ、それはねー、キョウスケが私のお兄ちゃんじゃないからよ♪　お兄ちゃんになってくれたら、叫んで撃ってもいいわよん？」

キョウスケ「な、なにを言っているんだ？」

エクセレン「そんなわけで『宇宙の騎士　テッカマンブレード』もよろしく！」

キョウスケ「次回予告は？」

エクセレン「なしよ！　毎度無視するから！」

キョウスケ「お、俺の出番が……」

カルロスとシオニーちゃんを書いていたらこうなった。
後悔はしていない。反省もしていない。
こんな作者で良ければ、絶賛元ネタ募集中です！
提供されたネタを私なりにアレンジ・統合して書いていきたいと思います！

今日のワン子2　～アイドルマスター・アイビス～　（前書き）

＜注・意・事・項＞

絶賛、キャラ崩壊中！
フィリオさんや負け犬ちゃんが、大変にキャラ崩壊起こしています！
プロジェクトＴＤのイメージを崩したくないという方は、読まない方がいいかもしれません。
あ、あと微エロです。
以上を踏まえた上で大丈夫という方は、どうぞご覧ください！

今回の話には、ゲレゲレさんから提供された「みてみん」に投稿されている絵を使わせていただきました。
もちろん、許可は取ってあります。
ちなみに初めての挿絵付きの話になります。

今日のワン子2　～アイドルマスター・アイビス～

私の名前はアイビス・ダグラス。

エリア一のマンモス高校、ＯＧ高等学院　――　通称ジェネ高に通う高校2年生。いわゆる一つの、青春を謳歌している、今が旬の花の女子高生なんだ。

箸が転んでも面白い。そんな年代の私だけど、毎日が楽しいことばかりで、悩みがまったくない訳じゃないんだ。

例えば、いくら牛乳を飲んでも胸が大きくならないことや、ツグミの焼くチーズケーキの食べすぎで……その、ほんの少し成長しちゃったり、とか……。

でもそんなことは些細なものだ。

私の毎日はなんて言えばいいのだろう？

むしろ、悩み事がお祭り騒ぎしながら押し寄せてくるような、そんな毎日なんだ。

今日も今日とて、それは彼の一言から始まった。

スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～

今日のワン子2　～アイドルマスター・アイビス～

切っ掛けは単純なことだった。

「諸君、聞いてくれ！」

私の所属するプロジェクトTD（テレポシスト）の部長、フィリオ・プレスティが元気いっぱいに宣言していた。

ジェネ高にある部室棟の一室で。

プロジェクトTDの部室には小さなデスクが置かれていて、私は自分の席でツグミの焼いたチーズケーキを楽しみながら、いきなり椅子から立ち上がったフィリオを見た。

フィリオは私の先輩で高校3年生。

眼鏡をかけた色白で知的な細身の男性だ。外見のイメージ通り勉強は学校内でトップクラス、でも虚弱そうな印象は裏切って超健康体な上、運動神経抜群という絵に描いたような優等生なんだ。

しかし天は二物を与えずという言葉があるように、神様はそんなに優しくない。

完璧超人なフィリオにも重大な……いや、致命的な欠点があった。

「モグモグ……どうしたのフィリオ？　今日は宇宙人でも探すの？　それとも改造人間、異世界人？　付き合うけど、このチーズケーキ食べ終わってからにしてね」

どうせ、いつもの戯言だろうとケーキを頬張りながら受け答えする私。

フィリオは一見完璧な人間に見えるけど、実は普通の人間に興味がなく、未来人や宇宙人、さらに改造人間やUMAなど、普通じゃない人にしか興味のない変人なんだ。

部活であるプロジェクトTDの目的はテレパシーで宇宙人と交信すること。

その上、部活の主な活動内容は未来人などの野外探索。

なんて言えばいいのかな？

悲しいことにもう慣れちゃったけど、世間で後ろ指を指されかね

ない変人的な活動をしている部に、なぜか私、アイビス・ダグラスは所属していた。

「なにを言っているんだいアイビス！　今日は至って真面目な話だよ！　無論、いつでも僕は真面目だけどね！」

「そうよ。私のフィリオは最高なんだから」

「私のだと！　ふざけるなよ、ツグミ！」

フィリオの言葉に賛同したツグミの言葉に、スレイが目くじらを立てて怒りはじめる。

プロジェクトＴＤは普通じゃない。

つまり集まっている人間も普通じゃなかった。

フィリオに笑顔を向けている豊満な胸の女性の名前はツグミ・タカクラ。

この部の副部長であり、また未来人（自称）でもある。だけど未来に関する質問はすべて「禁則事項です☆」の一言で返される。

客観的に見てツグミはフィリオの事が好きみたいだから、気を引くために未来人を名乗っているようだ。

そしてツグミを親の仇のように睨んでいるスレンダーな女性はスレイ・プレスティ。

私と同じ平の部員にして、フィリオの妹であり、さらに超能力者でもある。

スレイは冗談ではなく本物の超能力者なんだ。けれど能力は「フィリオに近づく異性に偏頭痛を起こさせること」……ただし巨乳には効かず……。

ツグミに通用しない地味な超能力の矛先は、主に色目を使ってないのに私に向けられている……正直、勘弁してもらいたいよ。

「なによ！」「私の兄様に近づくな！」と口論している２人を尻目に、フィリオは高らかに手を上げて宣言する。

「実は！　部費が、もう、ない！」
「えぇー、なんでー？」

プロジェクトＴＤの主な活動は、エリア内の散策だから、資金が必要なことは少ない。今まで使わず貯まった部費は結構余っているはずだ。

「実は先日、『宇宙人探知レーダー』を通販で購入してしまったさ！　ごめんね！」

この野郎。覚えた怒りを、私はチーズケーキの甘味で中和する。

「とにかく、ノーマネーノーフューチャーだ！　スマイル０円だとか、旅先の思い出はプライスレスだとかよく聞くけれど、お金がないと活動できないし首は回らないのだ！　分かるかね、諸君？」
「さすが、私のフィリオね！　一味もふた味も違うわ！」
「さすがです兄様！　えぇいツグミ、私の兄様から離れろ！」

フィリオの腕に抱き着くツグミを、スレイが引き剥がそうと躍起になっていた。

この２人はフィリオの言うことを無条件で受け入れるので、はっきり言って何の役にも立たない。

オセロの駒には、白と黒以外に実は幻の赤色があるとフィリオが言えば、「すごいわ、フィリオ！　物知りね！」と絶賛する始末なんだ。

ストレスの緩和にはやっぱり甘いものだよね。今日も今日とて、チーズケーキの甘味が倍増だよ。

「ガツガツ……それで、どうするの？　お金がないのは分かったけ

ど、どうやって部費を増やすの？　生徒会に部費の増額を申請するの？」

「ＨＡＨＡＨＡ！　まさか！　あの偏屈な生徒会が、そんなこと許すはずがないじゃないか」

あれ？　私、変な事言ったかな？　アメリカ笑いされて、いやぁ、今日は一段とチーズケーキが美味しいなぁ。

「バクバク……じゃあどうするの？」

「そんなの決まっている！　こうするのさ！」

フィリオが大仰に叫びながら、懐からなにかを取り出した。

それは小さなビデオカメラだった。子どもの運動会なんかで、お父さんが片手で持って我が子の活躍を撮影してそうなイメージの奴。多分、メーカーはソミーだと思う。

「実は最近、宇宙人たち以外にアイドルに凝っていてね。プロモーションビデオとかを結構見ているのさ」

「ムシャムシャ……へぇー、意外だなー」

フィリオが異能者以外に興味を持つなんて。

でもこれは良い傾向かもしれない。アイドルに傾倒すれば、異能者好きなんて変人からは脱却できそうに思える。

でも、それが部費稼ぎとなんの関係があるのだろう？

フィリオがビデオの電源を入れ、レンズを私に向けてきた。

「前々からアイドルのプロモーションビデオを撮ってみたくてね。そして自作したプロモションビデオをコピーして、みんなに売りさばくのさ。楽しくお金も稼げて、実に一石二鳥だとは思わないかい？　ねぇ、アイビス？」

……なんだろう？　すっごーい、嫌な予感がしてきた。
その証拠に、チーズケーキの美味さが一際輪郭を鋭くする。
天使のようなフィリオの笑みには地雷のような危険物が含まれている。そんな錯覚を覚えながら、私は言う。

「アイドル、ノーサンキュー」
「いやぁ、アイビスとアイドルって語呂が似ているよね」

お願いフィリオ。人の話を聞いて。

「い、嫌だよ。アイドルの真似事なんて私にできるはずがないよ。それに素人の作った自作ビデオなんて売れる筈がないよ。ねぇ、フィリオ、だから止めよう」
「違う！」

フィリオが目を険しくして大声を上げた。

「これから、僕のことはプロデューサーと呼ぶように！」
「さすが、私のフィリ　――　プロディーサー！」「さすが、私の兄さ　――　プロデューサー！」

フィリオに構ってもらいたいのか、ツグミもスレイも彼をプロディーサーと呼び、視線が絡んで火花を散らしていた。
子どものごっこ遊びじゃあるまいし、付き合いきれないし、恥ずかしいからやりたくない。
まだ部活の活動時間内だが、今日の所は部室からさっさと退避するのが身のためだろう。
私は残っていたチーズケーキを口に詰め込み、飲み込むと、椅子から立ち上がる。机に手を突き、腰を上げた。

けどそのとき、スポンジ製の床に立っているような不安定さを体に覚えた。

「あ、あれ？」

チーズケーキを食べすぎたのかな？　頭がボーっとして顔が熱い。いや、顔だけじゃなくて体も熱いし、原因不明の高揚感が、私の背筋をつぅと指でなぞっているような感じだった。

「ＨＡＨＡＨＡ、アイビス、僕から逃げられると思っているのかい？」

「え？　な、なに？　フィリオ、私になにかしたの？」

「ごめんねーアイビス」

なぜか、ツグミが手を合わせて謝ってきた。

「あなたの食べてたチーズケーキにお酒を混ぜといたの。どう？　なんだか楽しくなって、色々やってみたくなったでしょう？」

え？　お酒って、もしかしなくてもアルコール？　私、一応未成年だから勘弁してもらいたいんだけど……それにアルコールって火を入れたら飛んでしまうはずなのに、どうやってチーズケーキにアルコール分を残したのだろう？

疑問の視線を向けると、ツグミは唇に人差し指を当て「企業秘密です☆」と返してきた。

「そ、そんな。酷いよツグミ、フィリオ」

「さぁ！　では、用意してある衣装に着替えようか！　あと、僕のことはプロデューサーと呼ぶように！」

「い、いーやーだー……あぁ　――」

アルコールと聞いて、何だかさらに酔いが回ったような気がする。
フラフラする私の両腕を、ツグミとスレイが腕を回してがっしりと掴んできた。振り払う力が出ない。２人に引きずられて、更衣をするために、私は別の部屋に連れて行かれた。
気分は蜘蛛の巣に絡め取られた蝶々。
２人に無理やり制服をはぎ取られ、フィリオの用意した衣装を着せられた。
衣装は銀色を基調にしたショートパンツと丈の短いシャツ、さらに上着という出で立ちで、ヘソ丸出しな恥ずかしい服装だった。お願いだから、他の生徒たちには見られませんように……不幸中の幸いか、私の姿はツグミたち以外に見られることはなかった。
２人に引きずられて、私は部室に連れ戻された。

「さぁ、用意はできているよアイビス！」

プロデューサー気取りのフィリオが言った。
私をハンディカメラのレンズに収めながら、手招きする。そしてコード付きタイプのマイクを差し出してきた。まったく、何処で手に入れてくるのだろう？

「アイドルと言えば、やっぱり歌だよね！　ねぇ、アイビス！」
「う、うん……そうだね」

フィリオのハイテンションぶりに腰が引けてしまう。しかし背後にスレイが居て、後ずさることもできず、しぶしぶフィリオの前へと足を運んだ。

「なんだか、アイビスのテンションが低いな。このままでは撮影に支障を来す可能性があるね。ツグミ」

「分かったわ！　アイビス、新しいチーズケーキよ！」
「も、もうお腹いっぱぉわ　――――　ムグゥ」

ツグミがアルコール入りケーキを私の口に押し込んできた。
食べちゃダメと分かっているのに、反射的に口が動いて飲み込んでしまった。ど、どうしよう……アルコールが……。頭が火照る。
気づくと、フィリオが糸で吊った5円玉を取り出して私を見ていた。
彼は5円玉を左右にゆっくりと振り始める。5円玉の規則的な動きが、古時計の中にある振り子のような……見てて心が落ち着くような……そんな感じがする……

「アイビス、君はアイドルだ」
「私が……アイドル……？」
「そうだ！　君はアイドルマスターさ！　天下無敵のスーパーアイドル、アイドルマスター・アイビスさ！」
「私がアイドル……私はアイドル……私こそアイドル……！」

フィリオの5円玉を見ていると、私は自分がアイドルだったことを思い出す。
私はアイドルなんだ。いつからアイドルになったかは、まったく全然これっぽっちも覚えていないけれど、私はアイドルなんだ。

「さぁ、歌うんだアイビス！　君のファンのために！」

フィリオ……いや、プロデューサーがカメラを回しながら、マイクを差し出してきた。
迷うことなく、マイクを受け取る。
電源を入れ、口元にマイクを近づけた。
私はアイドルマスター・アイビス。頑張って、ファンのみんなの

ために歌わなくっちゃ！　持ち歌は……なんだっけ？　そうだ、「流星、夜を切り裂いて」だ！

「よぉーし！　みんなぁ、私の歌を聞けぇ！！」

カメラ目線で指を突きだし、私は歌う！　みんなのために！

＞ｉ２９７１１―２３７９＜

残念ながら伴奏はないけれど、みんなの頭で想像しながら聞いて欲しい。２番まで続いた「流星、夜を切り裂いて」を約４分間熱唱し、清々しい汗が私の頬を伝った。

興奮のせいか、頭がボゥとする。でも気持ちいい。会場いっぱいの観客が、私のためにスタンディングオベーションしてくれているような、そんな最高の気分だった。

「えへへ、ありがとー！　ありがとー！」

「よぉし、良いぞアイビス！　次はファンサービスのためにマイクパフォーマンスをするんだ！」

「はい、プロデューサー！」

私はプロデューサーのカメラにではなく、目の前のファンのみんなに手を振って応えた。ファンが幻のように揺らめいている気もするが、それは気のせいだ。

「みんな、私アイビス！　よろしくねー！」

「駄目だ駄目だ！　そんなんじゃ、ファンの方々は満足してくれないぞ！　もっと色っぽく、艶っぽいセリフを言うんだ！」

「え？　は、はい！　プロデューサー、私、頑張ります！」

色っぽい上に艶っぽいセリフ。

なんだろう？　どんなセリフならいいだろう？

……分からないや。私って色恋沙汰に疎いし、胸もないから色気もないし……でも、ファンのみんなのために頑張らなきゃ！

こうなったら、シンプル　イズ　ベストだ。小細工抜きで、みんなに真正面からぶつかろう。

でも頭がずきずき痛んで熱っぽい。頬も熱い。立っているのが少し辛くなってきたけど、私はカメラ目線のまま頑張って口を動かす。

「ぬ　――　」

＞ｉ２９７３８―２３７９＜

「――　濡れる！！」

「いいよぉ！　凄くいい！　これで売れ筋好調間違いなしだ！」

……なぜだろう？　とんでもない失言をした気がする。

でもプロデューサーの熱意が大きな声となって私に伝わってくる。

だから私の言葉はなにも間違っていないんだ。そうにちがいない。

……でも、だんだん頭が痛くなってきた。なんでだっけ？　ああ、そういえば、アルコール入りのチーズケーキをしこたま食べたんだった。

「さぁ、最後はお色気シーンだ！　スレイ、ツグミ、用意は良いかな！」

「簡易ベットと枕は用意できました、兄さ　――　プロデューサー

！」

「金髪のカツラと『つなぎ目が絶対に分からない爆乳体験ブラ』の用意ももいいわよ、フィリ ――プロデューサー！」

大分酔いが回ったらしく、3人の声が少し遠くに聞こえた。

私の知らない所で、話がとんでもない方向に進行している気がする。いつの間にか、あれだけ沢山いたはずのファンの皆の姿も消えていた。頭、痛い……。

「さぁ！　アイビスに、金髪のカツラと『つなぎ目が絶対に分からない爆乳ブラ』を付けて、ベットに横にするんだ！」

プロデューサー……じゃなくて、フィリオの声が聞こえた。

「分かったわ。アイビス、服を脱ぎ脱ぎしましょうねー」

「ツ、ツグミ……」

「偽乳とは言え、爆乳体験ができるんだ。兄様に感謝しろ、屑星」

「スレイまで……」

気分が悪い。吐きそうだ。

弱り切った私が2人の魔の手に抵抗できるはずもなく、服を引っぺがされて、ベットの上に押し倒された。

「アイビス、シーツで胸を隠して、カメラを見るんだ！」

フィリオの指示が飛んできた。

気分が悪い、吐き気もするしすごく眠い……早く寝たい。もうどうにでもなれ。早く終わらせて楽になりたかった。

私は最後の力を振り絞って笑顔を作り、上目使いでカメラを見た。

>i129728—2379<

「いいよぉ！　これでこのプロモーションビデオは大成功間違いなしだ！」
「さすが、私のフィリオ！　最高ね！」
「ツグミ！　貴様、兄様から離れろ！」

3人の声をバックコーラスに、私の視界はシーツと枕の白に覆われた――……

●

「いやぁ！　お願いだから止めて！」

とんでもない悪夢に、私はベットから飛び起きた。
目が覚めると、そこは雪国……ではなく、勝手知ったる自分の部屋だった。シングルベットにウサギの抱き枕、ワンコの人形やダンディライオンちゃんに囲まれて私は起きた。
どうやら私は、いつの間にか寝てしまっていたらしい。いつからだろう？　それはよく覚えていないけど、兎に角、全身汗だくで寝苦しい夜を過ごしたのだけは間違いなかった。

「ゆ……夢かぁ。良かったぁ……」

さっきまで見ていた悪夢が、ありありと現実のように思いだされた。アイドルの真似事をして、歌って、失言して、最後はヌードシーン……うわぁ……穴があったら入りたいよ。これがもし現実だったら、恥ずかしさのあまり引き籠ってしまいそうだ。

夢で良かった。

ほっ、と胸をなで下ろし、目覚まし時計を手に取った。

電池が切れて、短針は12時で動きを止めていた。

携帯電話のデジタル時計を確認すると、8：30と表示されている。

「え……わ、わぁ！　ち、遅刻だ！」

寝過ごした。焦って身支度を整えて家を出る。私の家とジェネ高はかなり近いけど、5分はかかるから走らないとホームルームに間に合わない。

髪を振り乱しながら走り、教師が校門を閉める前に構内に入ることができた。

でもホームルームまでに教室に辿りつかないと、遅刻にされてしまう。

私は教室に続く廊下を小走りで進んでいく。

私と同じような境遇の男子生徒が数人、走って私を追い抜かして行った。すれ違いざまにその内の1人と視線が合う。左頬に絆創膏をし、茶髪の後ろ髪をひもで括った男子生徒だった。

「お、アイドルマス　――　じゃなくって、アイビスさんじゃん。頑張れよ、俺、応援してるからな」

「え？　は、はい。ありがとう」
「じゃあな！」

男子生徒は手を振り、去って行った。見たことはあるけど名前は知らない。別のクラスの男子生徒だろう。

でも応援してるって……なにを？　ホームルームに間に合えるように、ということだろうか？　……と、こんなことを考えている場合じゃなかったや。

なんとかホームルームには間に合い、遅刻することだけは免れた。あっという間に1日が終わり、私はプロジェクトＴＤの部室に顔を出す。なぜだろう？　無性にツグミのチーズケーキが食べたい気分だった。

部室棟に足を運び、部室のドアノブを捻る。

「みんなー、お疲れ。今日はなにする　――　って、あれ？」

扉を開けると、室内から心地よい冷気が流れ出してきた。また部室内の様子も変わっていた。

私の記憶ではなかったはずのエアコン、プラズマクラスター、液晶テレビに小型冷蔵庫が増えていた。扇風機が部屋の隅に追いやられている。しかしそれも必要ないぐらい、快適な空間にプロジェクトＴＤの部室は様変わりしていた。

「あら、アイビス。授業お疲れ様。チーズケーキと紅茶、いる？」
「あ、うん。いるいる。ありがとう、ツグミ」

先に来ていたツグミが冷蔵庫からチーズケーキを取り出してくれた。紅茶も、なかったはずの電気ポットからお湯を注いで入れてく

れる。ケーキは程よく冷えていて、紅茶と相まって美味しくいただけた。
部室内での私の定位置の椅子に座る。
使い古されていたはずの座布団が新しくなっていた。

「ねぇ、ツグミ」
「なぁに、アイビス」
「どうしたの、これ？」
「勿論、新しく買ったのよ。かなり古くなっていたしね」

さすがに、それぐらいは分かる。
私が訊きたいのは、そのお金が何処からでたのかなんだけどな。

「部費が増えたのかな……？」
「うふふ、禁則事項です☆」

ツグミお得意の決め台詞。なにか隠しているのかなぁ。
まぁ、でも、部室が綺麗になることはいいことだよね？　クーラーも効いていて、とても過ごしやすい部屋になっているし。

「ま、いいや」

私は快適空間と化した部室で、ツグミお手製のチーズケーキに舌鼓を打つのだった　――……

ここはＯＧ（オリジナルジェネレーション）高等学院。
『エリア』にある地域最大のマンモス高校だ。

今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない。

今日のワン子2　～アイドルマスター・アイビス～　（後書き）

＜キャラ紹介＞

アイビス・ダグラス：ジェネ高2年、夢に夢見る女の子。ジェネ高は比較的胸が大きい人が多いので、1・2を争うペチャパイぶり。いつもスレイに苛められている。でもTDのみんなは好き。チーズケーキ大好き、多分酒に飲まれるタイプ。

フィリオ・プレスティ：ジェネ高3年、自称神様のプロジェクトTDのキチガイ部長。体は超丈夫な健康体で、成績も優秀。今日も宇宙人などを探して街を捜索する。

ツグミ・タカクラ：ジェネ高2年、プロジェクトTDの副部長。自称未来人で口癖はあのセリフ。フィリオが好きで未来人を気取っている。

スレイ・プレスティ：ジェネ高2年、フィリオの実妹。超ブラコン。実は超能力者、しかし能力はフィリオに近づく女に片頭痛を起こさせること。しかも巨乳には効かない。今日もアイビスを苛める。

＜次・回・予・告＞

エクセレン「さぁーて、次回のスパロボ学院は？」

キョウスケ「次回、『キョウスケ・ナンブに出番をよこせ！』の巻！　お楽しみに（嘘）」

エクセレン「要するに、なにも決まっていないってことよん。短編でかけそうなネタがあったら、みんなドシドシ送ってねん。採用できるとは限らないけと、できるだけ書くように心掛けるわよん？」

キョウスケ「出番……」

久しぶりにコメディー編更新。

挿絵を提供してくださったゲレゲレさん、本当にありがとうございます！

ゲレゲレさんは「史上最強弟子　ケンイチ」の二次小説と、オリジナル小説の2作品を執筆されている作者さんです。

絵を描けない私が言うのもあれですが、「みてみん」で絵も描いており、書き始めの頃よりずいぶんと上手くなっていらっしゃいます。

とても努力家の作者さんです。

興味が沸いた方は、ゲレゲレさんの小説や絵をどうぞ読んでみてくださいね。

アイビスは絶対に弄られキャラだと思う。

ちなみに私はアイドルマスターはタイトルしか知らなかったりします。

なので、今回の話はあまりパロディじゃないですね。

では、また次回ノシ

スチールラブ　～華麗なる錬金術師～

オラは彼女に恋してる。

これはオラの片思い　――　決して届かぬ一方通行。

今日も彼女は、オラの前で腕を振るう。

キラリと輝くの包丁が、今日も彼女の細腕に握られている。量販店で買える、ごく普通の、ただの包丁。しかし彼女がひとたび持ったなら、たちまち芸術品へと早変わり。

褐色の彼女の肌に、皮を剥かれたジャガイモの白が映える。

ニンジンも。タマネギも。自ら服を脱ぎ捨てるように皮を剥かれ、野菜も鶏肉も、喜びに打ち震えながら体を細かく分けられていく。

彼女は可憐な褐色の指先で、材料を、腹ペコなオラの腹に入れてくれる。

オラの腹は魔法の腹。熱を持った腹で材料を炒めて、水を飲めば、すべての旨みの溶け出した不思議なスープの出来上がり。

オラの腹は魔法の腹さ。

オラを使う褐色の美女　――　それが彼女。

彼女はさながら魔法使い……いや、華麗なる錬金術師だ。

「ターメリックに、ナツメグに、シナモンを加えて、と……」

オラの腹の不思議なスープに、彼女の調合した魔法の粉が投入された。

はらわたが煮えくり返るような熱に、彼女の粉とスープが溶けあう。

ぐるぐる、ぐるぐる。

彼女がオラの腹の中のスープを掻き混ぜていくうち、スープの色は変わっていく。まるで魔法のように、スープの色が彼女の肌に似た褐色に変わっていくのを、オラは腹の中で感じた。

彼女が手を止め、オラの腹の中のスープを小皿に取り、口をつける。

うん、と彼女が頷くと同時。

――チリンチリーン

店先の扉に取り付けていた鈴が、オラと彼女に来客の存在を知らせた。

「ラーダさん、チース！」

店内に入ってきた紫髪の少年が彼女――ラーダ・バイラバンに笑顔を向けた。

「あら、いらっしゃいアラド。ご注文は？」

「カレー！　もち、超大盛りで！」

お腹を擦るアラドのジェスチャーに、微笑みを受けべて頷く彼女。

彼女は俺の腹の中の褐色スープ――カレーを、大皿に盛ったライスに注ぐ。食欲を駆りたてる白と褐色のコントラストが出来上がり、彼女はそれをアラドの座るテーブルに差し出した。

「いただきます！」

アラドは大声で宣言すると、スプーンでカレーライスを大口に掻き込む。

「うんみゃあぁぁっ！！」

アラドの歓喜の声が彼女を笑顔にしていた。

オラの大好きな彼女の笑顔。

彼女を笑顔にすることは決してオラにはできないけれど、オラが丹精込めて腹で煮込んだカレーはお客を笑顔にできる。

お客の喜びは彼女の喜び。

彼女の喜びはオラの喜び。

それでいいんだと、オラは思う。

『カレーの工房（アトリエ）　パンダ・トラヤ』

今日もお店でお客の笑顔をスパイスに、彼女 ―― ラーダとオラ ―― 鍋の、甘くて辛い日常は続いていく。

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。

『エリア』には個性豊かな人間が沢山いる。

今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。

次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない

スチールラブ　～華麗なる錬金術師～（後書き）

＜キャラ紹介＞

鍋：カレー用の鍋。

ラーダ・バイラバン：カレー屋さんの店主。

アラド・バランガ：大食い小僧。

＜次・回・予・告＞

鍋「オッス、オラ鍋！　オラ、なんだかワクワクしてきたぞ！
　ラーダを馬鹿にされる怒りで、スーパー鍋ヤカンに目覚めそうなオラが、次回予告を担当するぞ！」

キョウスケ「……おい」

鍋「（某ト○コのアニメ風に）誰かが言った！
食欲の秋、お腹すいたなぁ……でもちょっと待ってくれ！　エリアって、実は名物食がないんじゃね？
カルロス社長は言いました……ないのなら作ればいい！
シオニーちゃんは言いました……どうぞご自由に　――　机を叩く音が空気を劈く。
そして、商店街のちっぽけなパン屋「ヒカワ屋」に白羽の矢が立つのだった……

次回、スパロボ学院　コメディー編

『あなたはパン派？　ごはん派？　２　～カルロス社長のプロデュース大作戦！～』

カルロス社長に黒い交際はございません？　オラ、ワックワクしてきたぞ！」

キョウスケ「……鍋にまで出番を奪われるなんて……」

エクセレン「ドンマイ、キョウスケ？」

絶賛、スランプ中！

最近、執筆がうまくいかず更新が遅れる日々が続いております。

特にシリアス編が先に進みません。

頂いたネタをコメディー編で書いてリハビリをしてみたいと思います。

暖かい目で見守っていただけると嬉しいです。

ではではノシ。

リョートのパン2　～カルロス社長のプロデュース大作戦！～（前書き）

＜注・意・事・項＞

絶賛、キャラ崩壊中！
オデコちゃんとか王様が激しくキャラ崩壊しております！
見る方によっては不快感を覚える可能性があります！
それでも良いという方はどうぞ！

リョートのパン2　～カルロス社長のプロデュース大作戦！～

ここはなぜか高校が密集する地域、エリア。

エリアには高校だけではなく、商店街や繁華街も存在し、住民相手の商売を生業としている者たちも多く生活している。

ちっぽけなパン屋でほそぼそとパンを売る者もいれば、大企業の協力を得て大々的に商売をしている者もいる。

ここはエリア。

高校が密集し、それなりに商売も盛んなこの地域の一室で、誰かが言った。

「ある地域には、ホートーという美味なる鍋料理があるらしい」

赤い絨毯が引かれた広い一室で彼は腰かけていた。艶のある木製のワーキングデスク、それとセットになっている豪奢なリクライニングチェアの上で、彼は悠々と呟く。

「誰かが言った。

またある地域にはメン・タイコーという特産品があり、ほかの地域の海岸線にはボルテッカ丼という丼料理を出す店があるらしい。

いったい、誰が言ったのか？　まぁ、そこにたいした興味は沸かないんだけどねぇ」

「はぁ」

彼の言葉に美人秘書のシオニーちゃんが生返事を返していた。

社長室らしき一室でシオニーちゃんは彼に訊くことにした。

「でもカルロス……社長、それが一体全体どうしたというのですか

？」

「おやおや、僕の言いたいことが分からないのかいシオニーちゃん？　誰かが言ったんだ。要するに、エリアではない他の地域にはそれはそれは美味しい料理や特産品が存在する、とね。

でも、エリアにはそれがない。これはチャンスだとは思わないかい？」

「はぁ……」

カルロスの戯言がまた始まった。反射的にシオニーちゃんは生返事を返してしまう。

シオニーちゃんの目の前にいる若者 ―― カルロス・アクシオン・Ｊｒ．は巨大財閥「アクシオン財閥」を取り仕切る頭取、いや若社長だ。天才的な経営手腕で「アクシオン財閥」を巨大企業にまでのし上げた、いわば時代の寵児のような存在だった。

カルロスが椅子から勢いよく立ち上がる。

「そう！　まさに、今こそが、大事な大事なアタックチャ～スッ！」

「さ、さすがにそれは古いんじゃ ――

―― ズバンッ！（机をたたく音）

「ひぃぃ！」

突然耳に届いた鋭い音に、シオニーちゃんは思わず悲鳴をあげた。頭を抱えてしゃがみ込んだシオニーちゃんを、カルロスが机に手を押し付けたままで見下ろしている。

あはっ、と擬音が聞こえてきそうな程にカルロスの顔は緩んでいて、シオニーちゃんは強い憤りを覚えた。

「いいかい、とってもビビリな美人秘書のシオニーちゃん。僕はね、

とってもとっても暇なんだ」
「ま、またですか？」
「うん。だから、ハイ、これ」

カルロスが1枚の写真をシオニーちゃんに差し出してきた。
シオニーちゃんは猛烈に嫌な予感しかしなかったので、写真を見たくはないと思ったのだが、カルロスが両手を高く持ちあげるのを見て観念した。カルロスが手を下ろせば、そこには机があるからだ。台パン怖い……シオニーちゃんは恐怖に負けて写真を受け取った。
写真には小さなパン屋が写っていた。古びた看板には「ヒカワ屋」と名前が書かれていた。

「シオニーちゃん。君はこれからこのパン屋に行き、エリアの特産品になりそうなパンを創作するように。あ、折角だから、秋の味覚的なものをふんだんに使った創作パンがいいなぁ」
「そ、そんな無茶な　――」

――パンパァンッ！！（机をたたく音）
「ヒッ」

カルロスが机を2連打した音に、シオニーちゃんの肩が震えた。
カルロスは微笑を浮かべながら言う。

「シオニーちゃん、僕は誰か言ってごらん？」
「カ、カルロス……社長」
「そう！　僕は社長さ！　偉いのさ！
お客様は神様ですか？
答えはＮＯ！　神様は社長ですぅ！！　テラダ　――　いいや、社長、イズ、ゴッド！！

君はこれから『ヒカワ屋』で創作パンを作り、ついでに売上を3倍に増やすこと。それが今回のミッションさ！」

「も、もし……失敗したら……？」

シオニーちゃんの不安に、カルロスは笑顔で親指を立てて応えた。首に押し付け、笑みのまま立てた親指を横に引いた。

「ヒトラーとリストラって似てるよね？」

似てねえよ！　シオニーちゃんは口が動きそうになるのを必死に堪えた。ここでカルロスの機嫌を損ねることは、もし消えれば死んでしまう蝋燭の炎を自分で吹き消すような行為だからだ。

カルロスの言葉を意訳すれば「アドルフに告ぐ。失敗すれば君はクビ」ということらしい。

カルロスは意気揚々と手を突き上げ、宣言した。

「エリアの特産品創作計画！　名付けて　――

スパロボ学院　～OGだよ、全員集合！～

リョートのパン2　～カルロス社長のプロデュース大作戦！～

シオニーちゃんのため息が、社長室にむなしく漏れたのは言うまでもない。

●

僕の名前は氷川（ヒカワ）諒斗（リョウト）。

なぜか高校の密集する地域『エリア』の寂れた商店街で、小さなパン屋を経営している。

店の名前は「ヒカワ屋」、まぁ少し安直な気もするけど、店の名前は分かり易い方がいいと思いこうなった。洒落た名前よりは覚えやすいし、この方が僕にはしっくりくる。それに大仰な名前を付けても、評判が付いてきてくれるとは限らないことを僕は知っている。

評判って、毎日の頑張りの繰り返しによって作られていくものだと思うんだ。

だから僕はパンを焼く。

毎日粉からタネを作り、練って、焼き上げてお客さんに食べてもらう。

バイトのミナキさんやトウマ君の協力もあって、僕の店「ヒカワ屋」の評判はそれなりに良かった。

幼馴染のリオ・メイロンが大企業「マオ・インダストリー」の営業店「マオ屋」というおにぎり屋を開いた時は、さすがに屋台骨が折れかけたけど……リオが展開するおにぎりの格安販売キャンペーンが、実は僕の店を潰すために行われているという裏事情がなぜかお客さんたちにばれていて、それが話題になったのか店の客足は途絶えることはなかった。

なんだかんだで「ヒカワ屋」は潰れることなく、それなりに営業出来ていた。

でもいつかは、僕の焼いたパンでリオをぎゃふんと言わせ、見返してやりたいと思う。あの紙に名前を書くためにも、僕はパン屋と

いう職業で一人前になりたいと思うんだ。

――そんなある日だった……

「店長！　大変です！」

僕が奥の工房でパンを焼いていると、バイトとして雇っているトウマ君が大声を上げながら飛び込んできた。

バイトの達人の異名を取るトウマ君は、貧乏経営を続けている「ヒカワ屋」には欠かせない人材だ。しかもなぜか日に日に筋肉質になっていく……同じ仕事量の僕は華奢なままなのに不思議な事もあるものだ。

しかしトウマ君には材料の買い出しを頼んでいたはず。

「どうしたの？　あ、もしかしてまたリオの嫌がらせ？　小麦粉が全部買い占められたとか、それともおにぎり１個５０均一セールとかやっていたとか……嫌だなぁ、気が滅入るよ」

「違います！　悪い知らせじゃなくって朗報ですよ、朗報！」

「え、本当？」

なんだろう？　僕はパンを練る手を止めて、トウマ君の報せを聞くことにした。

「お客さんが来てます！　それもあの大企業『アクシオン財閥』から、さらに言うと『ヒカワ屋』に協力したいって言ってましたよ！」

「きょ、協力？　大企業が僕の店に……？」

寝耳に水とはこのことだろう。

大企業が個人経営の店に協力を申し出る……耳を疑う言葉をトウマ君は口走っていた。

「アクシオン財閥」と言えば、最近台頭していた新参の財閥で、飲食店のフランチャイズも展開している。契約店から利益を吸い上げているので、何もしなくても、僕のような個人経営の店とは段違いの売り上げを叩きだしているはずだ。

そんな「アクシオン財閥」が、僕の店に協力を申し出るメリットは無い……というか皆無のように思えるのだけど……。

「もしかしてあれかな？　店を畳んで、財閥とフランチャイズ契約しろって来てるんじゃないの？　トウマ君、前にも言ったけど、僕はそういうのはあんまり好きじゃないんだ」

以前にも「マオ・インダストリー」から、フランチャイズ契約の話が来たことがあったっけ。

自分だけのパンを焼いて商売がしたかった僕は、その話を断り不意にしたことがある。

おかげで「マオ・インダストリー」からリオが派遣されてきて、僕の店を潰しにかかってきたり……というか、まだ彼女の攻勢は続いていたりする。けど、まぁ、それは置いておこう。

「トウマ君、僕は契約店になれって話だったら断るからね」

「あはは、分かってますって。店長がフランチャイズが嫌いなのは。そういう話だったら、とっくに俺が玄関先で追い返してますよ」

まぁ、確かに。トウマ君は僕よりも腕っぷしは強いしね、昔店を狙っていた地上げ屋レベルでなければ簡単に追い返してくれそうだ。もっとも彼が暴力的な手段に訴えることは、余程のことがない限りありえないのだけれど。

でもフランチャイズの話でないとなると……なんだろう？　無条件で店を支援してくれる。そんなおいしい話が転がり込んでくるはずがない。棚から牡丹餅なんてそうそうないものだ。

「なんでも協力する代わりに、この店の工房で商品開発をしたいそうですよ。少し臆病そうな印象の美人のお姉さんが言っていました」
「商品開発……ねぇ。財閥にパン工房がない、とかかな？　……いやぁ、それはないよね」
「ですね。でも悪い話じゃなさそうだったんで、その女性には店内で入って待ってもらっていますよ」

もう店内に来ているのでは、この店の責任者として合わない訳にはいかない。来客を許可なく入れるのは少し感心しなかったけど、話ぐらい聞いてみてもいいかもしれないな。

「トウマ君、少し話をしてくるよ。パン作りの引き継ぎよろしくね」
「了解です！」

僕はパン練り途中で粘ついていた手を洗う。少し膨れた生地をトウマ君に任せると、財閥から来たという女性に合うために店内に向かった。

●

お客のいない店内の片隅で。

「エリアの特産物になりそうなパンを作れ……？」
「は、はい」

銀髪のスーツを着こなしたその女性――シオニー・レジスから、僕はことの顛末を聞かされた。せまい店内に飲食スペースはなく椅子も机もないため、申し訳ないが立ち話になっている。

彼女の話を要約するとこうだ。

「エリアには特産品的な食べ物がないから、それを作って売り出そうと……地域の活性化にもつながるし、エリアと財閥の宣伝にもなる。成功すれば、この店の宣言にもなる……そういうことですよね？」

「はい。そ、創作するのはエリアの特産品なので、財閥が商品開発しても地域に密着したものにはならないもので……」

シオニーさんは僕の目から視線を少し外して言った。

「アクシオン財閥」は巨大だ。財閥が特産品と称して商品開発するのは容易いことなのだろう。けど、地域の特色を反映させた商品を作るなら、その土地の住民に依頼をする方が良いと判断したのかもしれない。

「で、僕の店に白羽の矢が立った、と？」

「そ、そうなんです。そ、それにこの『ヒカワ屋』は評判はそれなり……」

やはりシオニーさんは僕の顔を見ずに小さな声で喋る。語尾の方はなんと言っているのか聞き取れない程の小ささだった。

トウマ君の言うように臆病そうな印象を受ける女性だった。動物に例えるなら羊だろうか？　狼が皮を被っている……なんてことはさすがに無いだろう。強気なリオと足して2で割れば、丁度いい具合になるのかもしれないね。

「ど、どうでしょう？　仕事、受けていただけますか……？」

伏せ目がちにシオニーさんが質問する。
どうしよう……なんて、迷う必要なんてないように僕には思えた。
シオニーさんの持ちかけた話はフランチャイズ契約ではなく、エリアの特産品になるような商品の開発だ。協力を申し出てくれているのだから、開発に必要な費用ぐらいは負担してくれるはず。
それに特産品の開発が成功し、それがウケれば、エリアは活性化するし僕の店の宣伝の一翼を担ってくれる商品となるはずだ。
良い事づくめ。僕のパンが人のためになり、自分の成功にもつながる。そう、悪いことなんて1つもない。
内心で既に決断はできていたけど、すぐに返答すると儲け話に喰いついたみたいで嫌だった。

「……シオニーさん」
「は、はい」

なので、少し間を置いてからシオニーさんに声をかけると、彼女の肩がビクンと跳ねた。驚かせるつもりはなかったけど……まぁ、いいや。

「依頼、ぜひ受けさせてください。エリアのためになるなら、精一杯頑張らせてもらいます」
「あ、ありがとうございます」
「いえ、こちらこそありがとうございます。これからよろしくお願いします」

僕は綺麗に洗った右手をシオニーさんに差し出した。
これから一緒に特産品を開発していくのだ。挨拶し握手するのは、互いの関係のために当然の礼儀だと思った。
シオニーさんは僕の手と顔を交互に見比べたあと、

「えっと、こ、こちらこそよろしくお願いします」

声が少し引きつっていた。でもそこは流石社会人。浮かべられた微笑に嫌味さは感じられず、手を差し出して、迷うことなく僕の手を握り返してきた。

蛇足だけれど、僕の手は無駄に温かい。パン作りをするには最適な血流豊富な温かい手には、シオニーさんの手は冷たく小さく感じられた。

これからシオニーさんと協力して、特産品になるような商品を考えなくっちゃな ――

――ドカーンッ！！

「ヒッ！」

僕の決意を揺らがせたいのか、店の扉が大きな音と共に蹴り開けられた。

あぁ、またか……僕にとっては慣れたシュチュエーション。でも慣れないシオニーさんは大いに体を強張らせて、扉を蹴り開けた女の子の方を凝視する。

「おーほっほっほ、久しぶりねリョウト君！」

「リオ……はぁ、また君か」

扉を蹴り開け、店の中に侵入してきたのは僕の幼馴染にして、道路を挟んだ向かいに立っているおにぎり専門店「マオ屋」の店長

――リオ・メイロンだった。

リオは艶のある黒髪に強気な釣り目、チャーミングなおでこが可

愛らしい女の子。でも少し変わった性癖の持ち主のため、事あるごとに「ヒカワ屋」を潰そうと突っかかってくる。
意気揚々な彼女の手には1枚のチラシが握られていた。見るまでもない。どうせまた会社の金に物を言わせた、僕の店を困らせるためのキャンペーンに違いないのだから。

「はぁはぁ、リョウト君の困った顔が見たいから、今回はおにぎり全種類50円均一アンド次回来店時に使える50円引きチケット配布キャンペーンを行うわよ！　どう？　困るでしょ、ハァハァ」

暴挙だ。なんというか、もう、暴挙だ。
50円引きチケットってことは、次回来店時に使えばおにぎり無料ってことじゃないか。キャンペーンの内容が書かれているチラシを握り締めたリオは、顔を紅潮させて荒い息をしていた。
なんて言おう。僕の幼馴染は変態なんです。
超ドS、それも僕に対してだけ。昔から僕の困ることをするのが大好きで、年々その性癖は悪化の一途をたどり、今では僕の困った顔を見て恍惚する始末。
勘弁してほしい……無意識なのか条件反射なのか、僕は表情は困っていたらしく……

「ああ、いいわぁ！　リョウト君の困った顔はやっぱり最高ね　――ん？」
「……はぁ、今度はなに？」

リオの言葉尻が途切れたので不思議に思い、どうせまたロクでもないことだろうと決めつけ、ため息交じりに彼女を見た。
紅潮していたリオの顔が一変して青ざめていた。プルプルと体を震わせ、手に持っていたチラシが地面に落ちる。視線は僕の方、それも手の方に注がれていた。

僕とシオニーさんの手が繋がっている。もちろん、握手的な意味で。

「だ、誰よ！　その女はぁ！！！」

「ヒ、ヒィ　――――ッ！？」

今度は噴火したマグマの如く顔を紅潮させ、リオが絶叫した。その剣幕にシオニーさんが手を離して尻もちをつく。あわあわ言いながら、壁際に逃げていく。

僕はと言うと、リオに襟首を掴まれて締め上げられた。

「どういうこと！？　ねぇ、どういうこと！？　リョウト君の婚約者は私でしょ！？　それなのに、私の知らない女と仲良さそうに手を繋いで……！　説明してよ！！」

「ギ、ギブ……！　と、とりあえず落ち着くんじゃリオ……！」

つい方便が出てしまった。説明しろと詰め寄るリオだったが、僕のクビを締めたまま広いおでこに血管を浮き上がらせていた。話を聞いてくれる雰囲気ではない。あと、僕はリオの婚約者でもなんでもない。

「分かったわ！　可愛そうなリョウト君、きっとあの女に騙されているのね！　きっと私の知らない弱みを握られているに違いないわ！」

聞き捨てならないセリフを吐いて、リオはシオニーさんを睨みつけた。

「この……泥棒猫！」

「ごめんなさい！　ごめんさない！」

「あ、謝っちゃダメ……余計に誤解される……！」

頭を下げるシオニーさん、今にも噛みつきそうなリオ、そして首を絞められ意識が遠のいてきた僕。

まずい。血が流れそうな状況になってきた……なんとかしないと……と、そのときだった。

――ドバーンッ！！（扉が開く音）

「ひぃぃ」

店の扉が勢いよく開かれ、シオニーさんをビビらせながら新たな闖入者が現れた。

「御機嫌よう、貧乏人の諸君！　話は全部聞かせてもらったよ！」

「誰よ、あなた！？」

店に入ってきたスーツ姿の男性に、リオが猛犬注意よろしく噛みついた。しかし男性は顔の面が厚いのか、リオの矢のような視線を物ともせず応える。

「僕の名前はカルロス・アクシオン・Ｊｒ．、金持ちさ！」

男の名前はカルロスと言うらしい。それにしてもファミリーネームがアクシオンといおうことは、もしかして……？

「カルロス……アクシオン財閥の社長……？」

僕の考えはリオが代弁してくれていた。

「あなたがリン社長が言っていた、金持ちを鼻にかけた嫌味なすっとこどっこいね！」
「世の中の９９．９９９９％は金で解決できると思っています。そのつもりで接してください」
「すっとこどっこいで間違いないようね！　『マオ・インダストリー』の敵が、いったい何の用よ！？」
　リオはカルロスが財閥のトップだと分かっても、一歩も引かずに捲し立てた。
「おぉ、怖い。お嬢さん、頼むからそんなに怒らないでくれよ。僕はこの状況を収集するために、とびきりにいいアイデアを持ってきただけなんだから」
　カルロスの口の端を上がっていた。カルロスはリオの誤解を解いてくれるらしい。僕はシオニーさんとただ握手をしていただけなんだ。リオの誤解を解いてくれるのなら願ってもない話だ。
　僕を指さして、カルロスは続けた。
「勝負さ、料理勝負。この店長くんはオデコちゃんのものなのか、それともシオニーちゃんのものなのか、それで争っているのだから勝負して決めればいい。エリアの特産品になるような料理を作って勝負すればいい。勝負に勝った方が彼の所有者という寸法さ」
「え？　ちょっま　――」
「いいわ！　受けて立とうじゃないの！！」
　瞳に炎を滾らせたリオの咆哮に僕の言葉は遮られた。
「つまり、よりエリアの特産品になりそうな商品を作った方が勝ちってことね！」

「オデコちゃん、理解が早くて助かるよ。
試合会場は我が『アクシオン財閥』が責任を持って用意しよう。審査員も僕の知り合いで最強の美食屋を呼ぼうじゃないか。さらに勝った方の商品を特産品として、我が財閥が販売することを約束しよう」

料理勝負はカルロスが取り仕切るつもりらしい。勝利の特典は作った特産品の商品化、ここだけ聞けば願ってもない提案に聞こえる。
聞こえるのだけど……

「望むところよ！　待っててねリョウト君、もちろん婚姻届と印鑑持ってね！」
「ちょ、ちょっと待って、リオ　――」
「さぁ、グズグズしていられないわ！　早く商品を開発しなくっしゃ！」

誤解の解こうとする僕の言葉は、またリオの大声によって掻き消された。彼女は意気揚々とおにぎりキャンペーンのチラシを投げ捨てると、店を飛び出していった。
僕の所有権がどうたらと、カルロスは料理勝負の提案時に言っていた。
リオは僕にとってはドSのいじめっ子だけど、根は素直で真っ直ぐな良い女の子なんだ。所有権の話が、カルロスが冗談半分で言った言葉だとしても、絶対に真に受けたに違いない。
つまり……この料理勝負に負けてしまうと……僕は　――

――　人生の墓場に埋葬決定！？

い、嫌だ。嫌すぎる。

「じゃ、勝負は1週間後ということで！」

カルロスが手を立てて挨拶し、颯爽と去ろうとする。

「待って！　カルロス……さん、社長！　今のはなにかの冗談ですよね！？」

「冗談？　あっはっはっは、店長くん、君こそなにを言っているんだい。これはミリオネアジョークではないよ。それに　――」

カルロスはバチンッとウィンクを決めて、僕に言った。

「こんな面白そうな話、見逃す手はないよね！」

「待って！　お願い！　待て！　待てと言っとるんじゃ、このすっとこどっこい！」

「あっはっはっは、Ｂｙｅ！」

カルロスは僕の手をすり抜けて店の外に飛び出した。慌てて後を追う僕。

見慣れた店前の道路にカルロスの姿はなく、買い物帰りの奥様方や買い食いしている学生の姿しか見当たらなかった。

カルロスはあっという間に姿を消していた。金持ち恐るべし……

「あ、あの」

「店長、どうしたんすかぁ？」

店前で棒立ちになっていた僕を、シオニーさんとトウマ君が眺めていた。

さ、最悪だ。カルロスは状況を掻き回すだけ掻き回して、姿をく

らました。
リオは事情を説明しても、おそらく聞き入れてはくれないだろう。以前リオに渡されて、押入れの中に封印したままのあの紙……――婚姻届が脳裏にかすめた。しかも未記入欄は1つもなく、あとは僕の印鑑を押すだけという墓場への片道キップだ。
訳も分からぬ内に、僕の精神は崖っぷちへと追いやられていた。

「や、やるしかない……！　シオニーさん、トウマ君、急いで特産品パンの創作を始めよう！」
「は、はい」

僕の大声にシオニーさんはビビリ、

「お、流石は店長。やる気満々ですね！」

トウマ君は歯を見せて笑っていた。おそらく、今の状況を「やぁぁってやるぜ！」的な熱血展開だと勘違いしている。……違うんだよ、トウマ君。僕の今の心情は、自暴自棄気味に「やぁってやるわ！」と叫びたい気持ちなんだよ。
店内に戻ると、リオが投げ捨てたおにぎりキャンペーンのチラシが目に入る。

【超お得！　おにぎり全種類５０円均一セール実施中！　さらに次回から使える割引券もプレゼント！】

なぜだろう？　涙がでちゃう。だって、いつも崖っぷちなんだもん。
工房に戻り、特産品パンの創作に取り掛かることにした。

●

料理試合までの1週間、僕はシオニーさんとトウマ君と一緒にアイデアを出し合った。

「ねぇ、エリアの特徴ってなんだと思う?」

僕の言葉にトウマ君が応える。

「高校が多いとかですかねぇ?」

「特産品に使えそうな食材ってあったっけ?」

「うーん、ないような気がします」

「というより、統計ではエリアで農業は行われてません。畜産も漁業もです」

シオニーさんが社長秘書らしく資料を読み上げて教えてくれた。とても様になっていると思う。

しかし農業が行われていないというのは初耳だ。商店街に並んでいる商品は、全てエリア外から入手しているのだろうか? 入手先の土地名も知らないし、イメージも沸かなかった。なぜだろう?

「じゃあ特色を出せる食材はないってことですね。店長、こうなったらインパクトですよ。理由なんてこじ付けで、無理やり特産品にしてしまえばいいっすよ」

「高校が多いだけに、コーコーパンとか?」

「それだけだと、インパクトが今一つですね」

「エ、エリアには商店街とか繁華街、住宅街に企業と色々あります

し、いろいろ混ぜてみたらどうでしょう？」

シオニーさんからの意見。エリアってなんだか「ごちゃ混ぜ」な印象が強いし、まぁ、納得できる意見だった。

と言うわけで採用。

「どうせ地元の食材はないんだから、秋の味覚を取り寄せて沢山使ったらどうでしょう？」

これはトウマ君の意見。

秋の味覚と言えば、サンマにマツタケ……あとはクリなどだろか……？

まぁ、採用。

「でも、サンマもマツタケも冷えると美味しくない食材ばっかりだね」

「じゃあアツアツで食べられるように、肉まんみたいにその場で蒸すタイプにしたら？」

「はい、採用」

何だかんだで、あっと言う間に1週間は過ぎてしまった。

こうして、僕とシオニーさんとトウマ君のアイデアを詰め込んだ特産品パンは出来上がった。

ふわふわの肉まん生地で、サンマとマツタケさらにクリと秋の味覚をふんだんに「ごちゃ混ぜ」にした餡を包み、蒸し上げた……その名も「カオスまん」……。真っ黒な餡を白い生地が包み込み、美しい白と黒のコントラストがまるでパンダを連想させ……って、

「こ、こんなパンで大丈夫かな……？」

「大丈夫だ、問題ない！」

トウマ君は自信満々だけど……本当に？
僕は時を巻き戻せないので、完成させた「カオスまん」を片手に、カルロスの用意した試合場へと向かうしかなかった……不安だ。

●

僕たちはシオニーさんに案内されて「アクシオン財閥」の本社ビルへと案内された。
エリアの繁華街にあるビル街、その中でも一際高い高層ビルが「アクシオン財閥」の本社のようだ。巨大企業にありがちな美人の受付嬢に「アポは取ってますか？」と聞かれたりもした。巨大企業の本社に足を運んだ経験はないので、僕の方はひたすら低姿勢。その受付嬢は後でシオニーさんの一声で青ざめていたけど、少し申し訳ないことをしてしまったかもしれない。
僕らは案内されるままに、本社ビルの一室へと向かった。
装飾の施された大きな扉を開け、中に入る。

「誰かが言ったぁ！　私の記憶が確かなら　――」

スピーカーからカルロスの声が聞こえてきた。
室内ではカルロスがマイクを持って立つステージが見えた。ステージの前には食材が山のように積まれた円卓があり、その両サイドには鏡のように磨き上げられた調理台。まるで一昔前にテレビ放送されていた「料理の超人」のようなスタジオが、僕の眼前には広がっていた。

高いテンションのままカルロスがマイクを握り締めて言う。

「――　一口飲めば即昇天ものの味の、脅威の健康ドリンクを自作する女子高生がエリアにはいる！　名前は、なんだったか……？」

「待っていたわよ、リョウト君！」

「リオ！」

対面の調理場には既にリオがいた。腕を組んだまま僕たちの方を睨んでくる。

「観念するのねリョウト君！　今日こそ決着をつけてあげるわ！　そして、あなたはここに印鑑を押すのよ！」

リオが1枚の紙きれを突き出して言う。

薄い1枚の紙に、僕とリオの名前、そして色々なことが書き込まれている。用紙の一番上には、少し太い大きめの文字で「婚姻届」と書かれていた。

「リ、リオ！　まさか、それは2枚目の……！」

「安心してリョウト君！　その女の魔の手からすぐに解放してあげるからね！」

「ひっ……！」

ナイフのようなリオの視線に、シオニーさんが怯えて肩を震わせた。助手として付いてきたトウマ君はやる気満々といった具合で鼻息が荒い。カルロスはこの状況を面白がっている様子だし、僕の周りに普通の人はいないんじゃないかとさえ思えてしまう。

どうせ聞いちゃくれないだろうけど、弁明ぐらいしてみようと思う。

「聞いてくれリオ。僕とシオニーさんは、君が思っているような関係じゃないんだよ」
「大丈夫よ！　ほら、ここにリョウト君の印鑑は用意してあるわ！　心配無用よ！」
「心配だよ！　なんでリオが僕の印鑑持っているの！？」
「もちろん愛の力よ！」

くっ、物怖じせずに言い切るなぁ。言われているこっちが恥ずかしくなるけど、印鑑の入手法が気になってそれどころじゃない。誰かリオに「愛するがゆえに見守る愛もある」と教えてやってくれないだろうか？

「さぁ！　結婚を賭けて、いざ尋常に勝負よ！」

試合の趣旨は「エリアの特産品」を作ることなのに、副賞が前面にしゃしゃり出すぎな気がするなぁ。

「あっはっは、オデコちゃんは準備万端のようだね。店長くんは準備は大丈夫かな？」
「ま、まだ心の準備が　――」
「よっしゃあ、いつでも行けるぜ！！」

勝負とか対決といった展開が好きそうなトウマ君が、先走って吠えた。
実に活き活きとした表情をしている。彼の好物は「努力・友情・勝利」で間違いないだろう。

「こ、困るよトウマ君。僕には印鑑を押すかどうかが掛かっているんだよ。まだ心の準備が　――」
「あぁん、いいわぁ。リョウト君、今の困った顔、とってもそそる

わ！」

ド畜生！　僕から困ったオーラが出ていたらしく、リオが頬を染めて身をよじっていた。僕の周りには変人しか集まらない定めなのだろうか……？

「OK。では早速勝負を始めようじゃないか！」

「あの、カルロス……社長、僕の話聞いてました？」

「もちろんさ！　でも僕は暇なんだ。貧乏暇なしの逆バージョンだよね。審査員の先生ももう呼んであるし、面白そうなことは早く始めようじゃないか！」

スピーカーで拡張されたカルロスの叫びが、激しく僕の鼓膜を震わせた。あーあ、何となく察しは付いていた事だけど、カルロスは人の言葉に耳を傾けるような人じゃないようだ。

僕は観念して、持ってきた「カオスまん」と調理器具を台の上に広げた。

「では、先行はおにぎり専門店『マオ屋』にしようかな！　準備はいいかな、オデコちゃん？」

「いつでもいいわよ！」

カルロスの声に応えて、リオが調理台の上にランチパックを取り出した。

僕もそうだけど、店の方で粗方の調理工程を済ませてきえてあるようだ。リオはランシパックから三角おむすびを取り出すと、調理台に併設されていたコンロでに金属製の網を敷き、その上で焼き始めた。

おにぎりの色は茶色　――――　焼き上がるにつれて食欲を刺激するスパイシーな香りが会場に漂い出す。馴染みのある匂い。リオ

のおにぎりが茶色なのは、おそらく素材にカレーを使っているからだろう。
焼き上がったおにぎりをリオが皿に盛った。
「できたわ！　特製焼きドライマーボーカレーおにぎり！」
リオが勝ち誇った笑顔を浮かべている。
白いお皿の上に乗った茶色いおにぎりも、いい匂いがして正直かなり美味しそうに見えた……けど。
「マーボーカレーって……ねぇトウマ君、どこかで聞いたことない？」
「そう言われると……聞いたことがあるような、ないような……版権的に問題ないんでしょうかね？」
「なに言っているの！　このおにぎりは私のオリジナルよ！」
僕とトウマ君の会話が聞こえたのか、リオが凄い剣幕で怒っていた。
「似た名前の料理があるかもしれないけど、それは単なる偶然よ！……分かったわ！　私がチャイニースだからバカにしてるんでしょう！？　チャイニースはすぐに真似するからって……酷いわ！　風評被害よ！」
リオは目じりに涙を浮かべ、肩を震わせていた。
な、なんだか悪いこと言っちゃったかな……？　苦労して作った料理をパクり的な言い方されれば、誰だって腹が立つだろうし……マーボーカレーだって耳に覚えがある程度のうろ覚えの料理だし。
「ご、ごめんよリオ。風評被害は少し違う気がするけど、そのおに

ぎりは、間違いなくリオのオリジナルだよね」
「そうよ！　この焼きドライマーボーカレーおにぎりは私のオリジナルなんだから！」
「あ、あれ？」
リオは元気よく宣言していた。その目には涙なんて浮かんでいない……まさか嘘泣き？　まさか、ね。
しかしリオのおにぎりは美味しそうだ。パクリ云々は置いといて、あのおにぎり相手に僕らの「カオスまん」に勝ち目はあるのだろうか？
僕の杞憂を余所に、カルロスは楽しそうにマイクを振るう。
「さぁ、次は店長くんの番だよ。２人の料理が出そろってから、審査員の美食屋の王様には入ってきてもらうからね」
「王様？　……ま、まぁいいや。トウマ君、蒸し器出してくれないかな」
「はい、店長！」
トウマ君に運んでもらっていたコンロで使えるタイプの蒸し器に、水を注いで火にかけた。蒸し器から湯気が上がり始めた頃に、持ってきていた「カオスまん」を中に入れて蓋をした。
蓋をして数分待つ。いい具合に蒸し上がった頃合いに取り出して、皿に盛りつける。
「これが『ヒカワ屋』特製、特産品パン『カオスまん』じゃあ！」
「店長、口調戻ってますよ」
「おっといけない」
蒸し上がった興奮で地方の方便が出てしまっていた。
でも蒸し上がりは完璧だ。これならリオのおにぎりにも対抗でき

る……かな？

「よぉし、２人とも料理は出来上がったようだね。じゃあそろそろ、審査員の美食屋に来てもらおうかな」

僕らの料理が出そろったのを見て、カルロスは携帯電話を取り出した。ボタンを押すと誰かに電話をかけ始める。

数回コールした後に相手が出たらしく、「あ、もしもし僕だけど――」とにこやかに会話をしていた。

ふとそのとき、僕の頭に疑問符が沸き上がる。

「ねぇ、トウマ君」

「なんすか、店長？」

「美食屋って聞いたことある？　僕、聞いたことがないんだけど」

トウマ君は少し考えてから返事をしてくれた。

「俺もないですね。大方、美食家の間違いじゃないですか？　美味い物食べて料理を批評する人ですよ、きっと」

「だよねー。きっとフードファイターみたいなものだよねー。ご飯食べてお金貰えるなんて職業が、そうそうあるわけないもの――」

「――オウ様、早く来てよ。……え？　お土産？　狩ってたら遅くなったって？　僕が金持ちだからって、そんなに気を遣わなくてもいいのに――」

あれ？　なんだか嫌な予感がするぞ。

狩る……ってなんだろう？　背中をしゃくとりむしが這っているような悪寒が走る。鳥肌が立つ。僕らがこの勝負会場に入ってきた扉の向こうから、凄いものが近づいてきているような錯覚を覚えた。

ズン、ズン、と大男が地面を踏みしめる音が近づいてくる。

「もう着いたって？　あはは、じゃあ早く入りなよ　――」

カルロスが朗らかに電話に応えた刹那。

――　ドガァアアァンッ！！

「ヒィィッ？！」

会場入り口の扉が吹き飛んで、試合を黙って見ていたシオニーさんが悲鳴を上げた。

扉を固定していた留め金が千切れていた。大きな足跡が付いた扉は空中高く飛ばされ、全体に細かな亀裂が走る。扉は地面に落下することなく、無数の木片に砕かれパラパラと床に降り注いだ。

な、何事だろうか……？

恐る恐る扉がなくなった入り口を振り返ると、そこには山のような大男が立っていた。

大男の顔は、見上げなければ僕の視界に捉えることもできない程……優に２ｍは超える巨躯の大男の肩には何か持たれていた　――

トカゲの尻尾の先のようなもの……良く見れば肉だ。３ｍ程の長さで切り取られた尻尾を引きずって、炎のような赤い髪を掻き毟りながら大男は会場内に入ってくる。

筋骨隆々で、金棒でも持たせれば赤鬼にだって見えなくもない……

「よおっ、久しぶりだなあカルロス！！」

大男がカルロスに挨拶した。

「やぁ、久しぶりだねガイオウ様」

カルロスも旧友にでも会ったかのように朗らかに挨拶をする。

「そのトカゲの尻尾みたいなのがお土産かい？　それが君の探していた幻の食材【ゲールティラン】なのかな？」

「いいや違うぜ。【ゲールティラン】も俺の記憶も、まだ見つかってねえ。こいつは【ディノダモン】って言うオオトカゲよ！　捕獲レベル９８ぐらいだったかなぁ、まぁ、俺のナイフで１撃だったがな。がははははっ！！」

大男　――　ガイオウが【ディノダモン】とか言うトカゲの尻尾の先を離すと、ずずぅんと音を立てて床に落ちた。

３ｍ程ある尻尾の根元の部分は、巨大で鋭利な刃物で切り落とされたような断面をしていた。尻尾部分でこの大きさなのだから、本体はもっと巨大に違いない。

「て、店長……なんなんですか、この人？」

「ぼ、僕が聞きたいよ……でも普通ではないよね……？」

少なくとも、ガイオウは美食家には見えない。

赤い髪の毛も手入れされず、無造作に伸びているし……やはり赤鬼という表現が一番しっくりくる。ちなみにシオニーさんは、調理台の下に隠れてハムスターみたいに震えていた。

「よお！　で、どこだ！　俺に喰ってもらいたい食材ってのはよぉ！！」

「そこだよ、ガイオウ様。そこの２人だよ」

カルロスが僕とリオを指さしてくる。……え？　まさか僕たち食べられちゃうの？

ガイオウと目が合う。

威圧感がハンパじゃない。現に調理台の下に隠れているシオニーさんは、目もあってないのに気に当てられて、泡を吹いて気絶していた。

「なんだい、あまり喰いではなさそうだな」

「ひ、ひぃぃ……！」

こ、怖い。対してガイオウは僕の方を見て舌なめずり。も……もう駄目だ。僕はこのまま食べられてしまうんだ……と。

僕とガイオウの間に、トウマ君が立ち塞がった。

「て、店長を喰おうってのか！　この化け物め！　『教導隊』の一番弟子、このトウマ・カノウが成敗してくれる！！」

トウマ君が愛用しているリストバンドを外した。

金属音を響かせて落下し、バンドは床にめり込んでいた。前々から思っていたけどどれだけ重いの、このリストバンド……？

「なんだお前？」

「問答無用！　ミナキ、俺に力を貸してくれ！　師匠たちとの長く辛い修行で会得した、バイト神拳の奥義『バイト獄兎け　――』

「てい」

ガイオウがトウマ君の額にデコピンを1発。

「ぐはぁ！！」

トウマ君は悶絶して倒れ、気絶した。

無様に崩れ落ちる。ガイオウは「なんだ、こいつ？」と呟いたあと、視線を僕の方に……いや、冷静になってよく見ると、視線は僕

にではなく調理台の上にある「カオスまん」の方に向けられていることに気付く。
ガイオウが「カオスまん」を指先でつまみ上げた。
「おい、これは普通に喰えばいいのか？」
「え……？　は、はい。普通の肉まんと同じように食べてもらえば……」
「そうか。では、いただきます」
礼儀正しく手を合わせた後、ガイオウは「カオスまん」を大きな口の中に放りこんだ。むしゃむしゃと咀嚼する。信じられないことだけど、カルロスの言っていた通り、ガイオウは勝負の審査をしに来たようだ。
「う……」
食べ終わったあと、ガイオウの口からうめき声が上がった。ふるふると体を震わせている……ど、どうしよう……口に合わなかったのかもしれない。
「だ、大丈夫ですか？　マズイのだったら吐き出してもらっても――」
「う、美味い！　美味いぞおおおおおおおおぉぉっ！！！」
「――　びぃやあああっ！！」
突然、ガイオウが大声を上げた。叫び声が衝撃派になり、目に見える光線のようになってガイオウの口から噴き上がった。
会場内を衝撃派が襲う。ガイオウの一番近くにあった料理台がひっくり返り、下に隠れていたシオニーさん共々、僕は吹き飛ばされた。

壁にしこたま背中を打ちつけられ、シオニーさん、僕の順で気絶しているトウマ君の上に折り重なった。

「なんだ、この喰い物は！　サンマの油分、マツタケの香り、クリの甘さが餡という形で混然一体となり、俺の口の中を駆け抜けて行ったぞ！　この小さな饅頭の中に秋の味覚が詰め込まれている。

一見、まったく絶対合いそうにない素材でこれだけの味を生み出すとは……あまりの美味さに、俺のリヴァイブ・セルも喜びに打ち震えているぜ！！　やるな、小僧！！」

「げほげほ……あ、ありがとうございます」

自信なかったのだけど、ガイオウは「カオスまん」を絶賛してくれていた。背中を強打したためムセて、呼吸がしにくい。

喜んでくれるのはいいのだけど、毎回こんなリアクションを取られたのでは体が持たない。

「ごちそうさまでした　――　さて、対戦相手の品を喰うとするか……む」

ガイオウの声に顔を上げると、向かい側のリオの調理台も僕のと同じようにひっくり返っていた。疑いようもなく、ガイオウの「うまいぞぉ」衝撃派のせいだ。

リオは目を回していて、彼女のおにぎりは……かわいそうに、調理台の下敷きになっていた。

「あちゃあ、やっちまった。対戦相手の料理がダメになっちまったんだ、今回の勝負の判定は無理だな」

ガイオウが申し訳なさそうに眉をひそめていた。

「まったく、ガイオウ様はしょうがないなぁ」
「すまねえな、カルロス！　あんまり美味かったもんでつい興奮しちまったぜ！　許せ、がははは！！」
「いいよいいよ、良い暇つぶしになったから。あっはっはっは！」

カルロスとガイオウの笑い声が会場内に木霊した。調理台も吹っ飛び、立っているのは彼ら2人だけだ。倒れている面々で気を失っていないのも僕だけだろう。
死屍累々な会場内でひとしきり笑いあった後、ガイオウが言った。

「しかしどうすんだ？　今回の勝負は、特産品を決めるためのものなんだろう。決着つかず仕舞いじゃあなぁ」
「そうだねぇ。僕としては、あの2人の料理のどちらでもいいと思っているんだけど。ガイオウ様はどうなの？　店長くんの料理を食べただろう？」
「あの饅頭な。あぁ、美味かったなぁ。
だがあの味は俺みたいな上級者向けだな。一般人にゃ、味が複雑すぎてウケねえんじゃねえかなぁ」

うぐ……ガイオウが痛い所を突いてきた。
あのパンは色々な旨みを「混ぜて」詰め込んだだけのパンだ。旨みがごちゃごちゃだから名前は「カオスまん」……商品としては売り出せないだろう。
ガイオウの言葉は続く。

「それに素材も良くない。その辺で手に入る粗悪品で調理したんだろうな。もっといい素材を使えば、小僧のパンはもっと美味くなる」
「でもガイオウ様、仮にいい素材で作っても、あの饅頭だとウケないんだろう？」
「まぁな」

「じゃあ、どうすんの？」
「俺に考えがある」

ガイオウは凶悪に顔を歪めると、床に投げ捨てていた【ディノダモン】の尻尾を持ち上げた。そして視線を僕の方に向けてくる。し、死んだふり死んだふり……。

「あの小僧、腕は確かだな。饅頭の生地も美味かった。問題は具だな。もっといい素材でシンプルな味のパンを作れば、小僧のパンはきっとウケるはずだ」
「ふーん……で？」
「分かんねえかなぁ、カルロス。この【ディノダモン】の肉を使って、小僧にパンを作らせるんだよ。きっと美味いぞぉ。【ディノダモン】なんて食材、どこも卸してねえからな。特産品にしても問題ねえだろう」
「いいねそれ！　よし、それで行こう！　決定！」

死んだふり死んだふり……。
なんだか僕の意志を無視して、話が進行していっている気がする。それも、取り返しのつかない方向に……。
目を閉じて死んだふりをしている僕の方へ、足音が2つ近づいてきた。大きい方はガイオウ、小さい方はカルロスだろう。

「おい小僧。タヌキ寝入りなんてせずに良く聞け。お前にこの【ディノダモン】の肉を売ってやるよ、特別割引価格で1億円だ。それでこれからも仕入れをしてやる」
「……は？」

いけない。つい声が出てしまった。
死んだふりがバレテしまったので、仕方なく顔を上げると、カル

ロスが満面の笑みを向けていた。

「代金は僕が肩割りしておくからね。無金利、ある時払いの催促なしだよ。僕はなんて良心的なんだろう、まさに金持ちの鏡だね！」

「ちょ、ちょっと待って……」

「俺はホットドックがいいなぁ」

「僕はやるなんて一言も……」

「俺は、ホットドックが喰いたいなぁ！」

ガイオウ……様が凶悪な笑顔で注文してきた。

ライオンのタテガミにも似た赤い髪をざわめかせ、上がった口端からは白く鋭い犬歯が覗いている。さらに槍のように鋭い眼光。加えて恐ろしいまでの気迫……果たして、ガイオウ様の注文を断れる人はこの世に居るのだろうか？

居るのなら紹介してもらいたい……僕は黙って首を縦に振ることしかできなかった。

「どうだいガイオウ様、カルロス社長のプロデュース大作戦は大成功だね！」

「おうよ！　早くホットドックで1杯やりてえぜ！」

散々たる状況の会場に2人の笑い声が響く。

これにて大団円。めでたしめでたし……なら、どれだけ良かっただろう……こうして僕は取り立てはないものの、1億円という多額の借金を背負うことになったのだった……ド畜生……。

僕の名前は氷川（ヒカワ）　諒斗（リョウト）。

エリアの商店街にある小さなパン屋「ヒカワ屋」で、今日も僕はパンを焼く。

あの子を見返し、借金を返すその日まで。
いつかあの紙を彼女に渡せるその日まで。
頑張れ、僕。負けるな、僕。
粉骨砕身 ―― 魂を込めたパンを、今日も僕は焼き続ける ――
――……

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。
『エリア』には個性豊かな人間が沢山いる。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない

おまけ

商店街にある小さなパン屋「ヒカワ屋」に、キョウスケ・ナンブは訪れていた。

腹が減っては戦は出来ぬ。キョウスケは競馬場に出陣する前の腹ごしらえのため「ヒカワ屋」に足を運んでいた。

焼き立てのパンの良い匂いが食欲をそそる。左手に取り皿、右手にトングを持ち、キョウスケは商品を物色する。

「む……一際、良い匂いのパンがあるな。あれか？」

他のパンと桁違いの魅力で、そのパンはキョウスケの食欲を引き付けていた。

見た目はただのホットドックだ。

商品名は「ガイオウ様のホットドック」、キョウスケは迷うことなくトングを伸ばした。

だが！　そのとき！

「な、なんだ！　この値段は！？」

キョウスケの目がカッと見開かれた。

商品の値段を表すタグ……そこに描かれた０の数が尋常ではなかったからだ！

「『ガイオウ様のホットドック』、１個１００００円……」

キョウスケはなにも買わずに「ヒカワ屋」を後にした。

そして戦場へ　――――――　黄金色に輝くパンに挟まれた赤く太いフランクフルト……「ガイオウ様のホットドック」は、まるで店内

の主のように売れ残り続けていたと言う　――……。

数時間後、キョウスケが討死したのは言うまでもない。

リョートのパン2　～カルロス社長のプロデュース大作戦！～（後書き）

＜キャラ紹介＞

リョウト・ヒカワ：「ヒカワ屋」店主、高校には通っていない。太陽の手を持つ。リオとは幼馴染で、いつも迷惑をかけられているが実は好き。最近になって、自分の周りには変人ばかりだと気づき始めるも時既に遅し、１億円の借金を負わされる。

リオ・メイロン：マオ社の社員、高校には通っていない。リョウトの困った顔に興奮する変態で、昔から将来はリョウトを養ってやろうと思っている。根が真っ直ぐのため、一度信じると誤解を解くのはとても大変。実はＤＳの変態。

トウマ・カノウ：「ヒカワ屋」で働く史上最強のフリーター。教導隊で毎日しごかれているためドンドンタフになっていく。最近、バイト真拳なる拳法を編み出してみたりしている。

カルロス・アクシオン・Ｊｒ．：「アクシオン財閥」の若社長。奇抜ば経営手腕で短期間でトップ企業の一員に上り詰めた。暇を持て余すと、シオニーちゃんに無茶ブリをしたり、彼女の前で机をバンする悪癖がある。金持ちを鼻にかけた嫌な奴のため、特定人物に「すっとこどっこい」と呼ばれている。

シオニー・レジス：中小企業「リモネシア」の社長だったが、「アクシオン」財閥に吸収され、今はカルロスの社長秘書をしている。あだ名のシオニーちゃんはカルロスが勝手に命名（実は２５歳なのでちゃん付けされる歳ではない）。超が付くほどのビビリで、そのビビリっぷりはＳたちの嗜虐性を刺激し、彼女の前で机をバンした

いというSなファンが地味に増えているという。

ガイオウ様：美食屋なる謎の仕事をしている謎の巨漢。威厳と威圧感はたっぷり。身体能力も高く、手刀（ナイフ）で巨大トカゲのしっぽも一刀両断できる。実は記憶喪失で、【ゲールティラン】という幻の食材を食べば記憶が戻ると思い込んでいる。好物はホットドック、某味オーみたいにそのうち巨大化もできるかもしれない。外見に見合わず実はいい人。彼を首相にすれば日本は世界を征服してくれるはずだ。

＜次・回・予・告＞

キョウスケ「もうすぐ２０１１年の秋アニメが始まるな」

エクセレン「そうねぇ」

キョウスケ「『僕は友達が少ない』もアニメ化するそうだぞ」

エクセレン「そういえば、以前の次回予告で『はがない』のパロをやるみたいなことを書いてあったわね」

キョウスケ「そうなんだ。だから、余裕があったら次回は『はがない』の話を書くかもしれないそうだ」

エクセレン「まぁ、また予告無視する可能性大だから、気長に待っててねん♪」

キョウスケ「というわけで、『僕は友達が少ない』と『トリコ』も

よろしく！」

今回は提供いただいたネタ「リオが浮気と勘違いして猟奇的な彼女に」という一文が元ネタとなっております。
私の執筆速度が遅いので、今更書いた感はありますが、できるだけ提供されたネタを元に話を作っていきたいと思っています！
こんな拙作ですが、生暖かい目で見守ってもらえると嬉しいです。
ではではノシ

今日のワンコ３　～私の友達は友達が少ない～（前書き）

＜注・意・事・項＞

絶賛、キャラ崩壊中！
スパロボＯＧ１のゴスロリキャラがキャラ崩壊起こしています！
「はがない」のパロディだけど、小鳩やマリアみたいにはなりません。
それでもいいという方はどうぞ！

「僕は友達が少ない」よろしく！

今日のワンコ３　～私の友達は友達が少ない～

ここはなぜか高校の密集する地域エリア。

その日、私　――　アイビス・ダグラスは、忘れた体操服を教室に取りに行くため、廊下を１人寂しく歩いていた。

下校時刻はとうに過ぎ、廊下に人の気配は感じられない。夏も終わりに近づき、日が落ちるのが早くなった。夏の終わりを告げるヒグラシの鳴き声が、人気のない校舎を不気味に怪しく彩っている。

こんな時間まで学校にいるつもりはなかったのになぁ。本来なら、今頃家に帰ってスイーツをつまみながら、人気のテレビドラマ「ラブキ」を見る筈だったのに……。

授業終了の鐘と同時にフィリオたちに拉致られて、部活で課外活動をする羽目になって……気づけばこんな時間になっていた。

「近道しよっと」

私は普段通らない１年生の校舎を通り、２年の校舎までショートカットすることにした。私の通うＯＧ高等学院　――　通称ジェネ高はエリア１のマンモス高校だ。生徒数があまりに多いため、普通の学校と違い学年ごとに校舎が割り振られていた。

実を言うと、あまり知られていないが１年生校舎を突っ切った方が、２年生校舎につく時間は短くなる。最近の遅刻騒動後、試してみたら私の統計でそのような結果が出た。

私の所属する２年Ａ組を目指して歩いていると、１年生の教室から楽しそうな話声が聞こえてきた。

「そう。ふふ、からかわないで、そんなことはない」

「あれ？　まだ誰か残っているのかな？」

聞こえてくるのは女の子の声だ。それも透き通った可愛らしいアニメ声。喋っている子はきっと美少女だろう。

ととっ、こんな事考えている場合じゃなかったや。

早く教室に体操服を取りにいかなくっちゃ。

「え？　彼とは、進展したのかって……もぅ、シャイン王女のイジワル」

「王女様？　知らなかった、ジェネ高に王女様なんて居たんだ」

王女。このキーワードが好奇心という名の見えない鎖となって、私の足の歩みを止めた。

気になる。中の様子がとても気になる。やっちゃいけないことなんだろうけど、私は好奇心を押さえられなくなって、1年の教室のドアをこっそりと開けるのだった。

そのことを今でも少しだけ後悔している。割とトンデモナイものを見たからだ。

「あ……ありのままに今見ているものを話すよ。

私は教室の扉を開けて中の2人を見ようとしたのだけど、中に人は1人しかいなかったんだ。

な……なにを言っているのか分からないと思うけど、私もなにを見ているのか分からなかった。頭がどうにかなりそうだった……催眠術とか幻覚とか、そんなチャチなもんじゃ断じてないよ。

もっと恐ろしいものの片鱗を見た気がしたんだ……」

教室の中を見た私は軽い錯乱状態になってしまったようで、こんなことを頭の中で考えていた。俗に言う「アイビスパニック」というヤツだよね？　え、なに？　違うって？

……ま、まぁ、とにかく、私が見ているものをありのままに話すよ……あれ？　既視感（デジャヴ）がする……もしかして、これって無限ループの入り口かな？

怖いのでこのセリフは封印しようと思う。

とにかく、私の覗いた1年生の教室からは「女の子が誰かと会話してる」と思しき声が聞こえてきていた。

王女様と言っていたし、当然中には女の子が2人いて、おしゃべりに花を咲かせているんだろうなぁと思って覗いてみたんだけど……。

教室には1人の女子生徒しかいなかった。

窓際の机にちょこんと腰かけた紫髪のメガネっ娘が、夕日をメガネで反射させながら談笑していた。ジェネ高の制服を着た小柄な女の子で、分厚すぎるメガネのためどんな瞳をしているのかは分からない。

その子は微笑を浮かべて、話しかけている。

「シャイン王女の方はどう？　……そう、この間、遊園地でデートしたの。いいなぁ、羨ましい」

誰もいない虚空に向かって。

「え？　本当？　うふふ、だったら嬉しいな　――」

彼女たち（？）の会話は楽しそうにヒートアップしていく。

もちろん、私にはシャイン王女の姿は見えないし、声も聞こえない。そしてここは夜に沈む直前の学校である。

私は見てはいけないものを見ているんじゃないだろうか？　「この世ならざるもの」とか「触れ得ざる者」とか「アカシックレコー

ド」とか……目の前の光景は、そういった類のモノなんじゃなかろうか？

一滴の冷や汗が頬を伝い落ちた。

この場は退散した方がよさそうだ。客観的に見ても、覗き見というシュチュエーションはマズイ。もし見つかったら、なにを言われるか分かったものじゃないし。

私は教室のドアを閉めて、2年生の教室へと急ぐことにした。

でも……あれ？　この扉動かない。ジェネ高もいい加減古いし、そろそろ建てつけも悪くなってのかも。扉の持ち手に込める力を少し強くする。でも動かない。

えい！　この、動け！　動け動け！　動いてよぉ！

――がたがたっ

「誰？」――メガネ少女の視線が私の方に向いていた。

し、しまった！　アイビス・ダグラス、一生の不覚！

ドアなんて閉めずにさっさと教室に向かえば良かったのに……はぁ、なにやってんだろ、私。

メガネ少女の視線は完全に私をロックオンしていた。

仕方ないので教室に入って弁明することにした。入るときは扉はあっさりと道を開く、この野郎。

「あ、あはは－、ごめんね。声がしてたから、なんだろうと思って、つい……」

「……」

メガネ少女からの返事はなく、小さな手をぎゅっと握りしてめて私を睨んできた。完全に警戒されてしまったようだ。彼女からしたら私は不審者なんだから仕方ないよね。

「あ、えと、そのー……」

無言で近づいても怖がらせるだけだよね？　取り合えずなにか言おうと思ったけど、うまく言葉が出てこなかった。

「……なに？」

でもメガネ少女からはリアクションがあった。

今が好機。これを逃せば空気が悪くなり、会話という名の牙城を切り崩すことは難しくなるだろう。なんでもいい、なんでもいいから話題を　――

「えぇと……もしかして、霊が見えたりする人？」

――　あぁぁぁぁぁっ、な、なにを言っているんだ！　私は！？　初対面の会話の掴みは「いい天気ですね？」か「いやぁ、ミストさんは強敵でしたね？」だと相場が決まっているのに、こんな電波な人と勘違いされそうな質問をしてどうするんだ？

十中八九馬鹿にされる。

案の定、メガネ少女は「はぁ」と首を傾げて応えた。

「幽霊なんて非科学的。いるはずがない」

「え？　でも、さっきまで誰かと喋っていたよね？」

「……やっぱり、見ていた」

かあぁぁぁと、メガネ少女の顔が赤くなる。

「あれは友達と話していただけ。エ、エア友達と……！」

……え？

メガネ少女がなにを言っているのか、私はしばらく理解できなかった。

エアギター、という言葉がある。実際にはギターを持たずに、さながらギターを演奏しているように見せる高等技術だ。少なくとも私にはできない。

エア友達とは、エアギターの友達版なのだろうか……？

メガネ少女は口元を綻ばせながら言った。

「シャイン王女と話していると楽しい。いつも時間が経つのを忘れてしまう。

友達ってとてもいいもの。シャイン王女はリクセント公国の王女様で私の親友、今日はお忍びでエリアに遊びに来たっていう設定」

「設定！　今、設定って言った！」

「言ってない。私たちの友情は真実だもの。まさにエターナルフォースフレンドリー」

メガネ少女はない胸を張って、誇らしげに答えた。

い、痛い！　なんて言うか痛い。どうやらメガネ少女には妄想癖があるらしい。

痛さに思考が停滞していると、気づけば頼んでもいないのに、メガネ少女は淡々と自己紹介を始めていた。

「私は、Ｌ５星域から地球の監査にやって来た『無限力』の対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェース。対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェースとは、人型機動兵器の概念をバイオロイド化し、ダウンサイジングしたもの。得意技はキック。地球の文明レベルを査定し、レベル５を超え、他星への侵攻の意志が確認された場合にのみ交戦が許可されている。『無限力』とは宇宙を統括する複数の意志の集合体であり、宇宙の存

在を維持してきた絶対的な存在。アカシックレコードや至高天、テラダ、漆黒の叡智とも呼ばれ ――」
「す、ストップ！　ストップ！」

専門用語が多すぎて、メガネ少女がなにを言っているのか私には分からなかった。じわじわと痛みが全身を浸食していくような錯覚すら覚える。

「結局、君はなにが言いたいの？　簡潔に言ってもらえると助かるんだけど……」
「理解した。私の名前はラトゥーニ・スゥボータ ――」

私は耳を塞いでおけば良かったと後悔する。

「――　いわゆる1つの宇宙人です」

それが私とラトゥーニの初めての出会いだった。

スパロボ学院　～OGだよ、全員集合！～
今日のワンコ3　～私の友達は友達が少ない～

そんなこんなで翌日。ジェネ高の屋上。

あの日から、私はラトゥーニに付きまとわれるようになった。
休み時間、気が付けば教室の外でラトゥーニが待っていたり、トイレに行くにも一緒に付いてきたりする。こちらから一緒に居て欲

しいとお願いしたことはないのだが、すべての休み時間開始時にはラトゥーニは教室入り口に待機していた。
ちなみに今は、屋上の貯水塔の縁に腰かけ、私が手作り弁当の卵焼きを箸で突っつく横で、ラトゥーニは購買で買ったメロンパンにかぶり付いている。

「栄養補給中。有機体の脳には糖分が必要不可欠。私の味覚センサーも喜んでいる」
「あはは、要するに美味しいってことだよね？」
「……うん」

頬を少しだけ赤く染め、ラトゥーニは無表情のままで頷いた。
ラトゥーニに付きまとわれて既に半日。太ったゲーマーにストーキングされるのは勘弁だけど、可愛らしいメガネ娘に付きまとわれる分には別に気にならない。でもラトゥーニがどんな子なのか、私なりに興味が出てクラスの友達から情報収集してみた。

ラトゥーニ・スゥボータ、ジェネ高1年生。
1年次開始からジェネ高に居た訳ではなく、途中にスクールから転校してきた女の子。
メガネっ娘、分厚いメガネの下の瞳に憧れた隠れ男子ファンがいるくらいには、美少女美少女している女の子だそうだ。
しかしクラスの女子連合から孤立しているらしい。
男子生徒の人気の高いラトゥーニへの嫉妬と、訳ありの孤児が集められる「スクール」から転校生ということもあり、大分時間の経った今でさえクラスに馴染めずにいるそうだ。
彼女をクラスから孤立させる原因は、まだ1つある。

「宇宙から『無限力』の通信を受信。……地球の文明レベルは現在2。アイビス、攻撃対象レベルにはまだ達していない、だから安心

していい」

痛いよぉ。青空を見上げて呟くラトゥーニと、私は目を合わせられなかった。

ラトゥーニの孤立の原因の1つはおそらく……いや間違いなく、この電波な言動だろう。宇宙から毒電波かなにかを受信しているのかもしれない。

「シャイン王女も安心してね。私たちのエターナルフォースフレンドリーは永遠だから」

さらに凄い良い微笑みを浮かべて空中に話しかける……エア友達のシャイン王女に。電波に加えて中二病にも罹患しているらしい。さらに自称宇宙人。

私、アイビス・ダグラスが客観的にラトゥーニ・スゥボータを評価し、表現するとこうなる。

ロリのメガネ美少女だけど、超電波で絶賛中二病中の痛いざんねん美少女自称宇宙人。

冷静に考えて、エア友達がス○ンドの類だとしても私を含む一般人には見えないので、評価点をプラスにすることはできない。

外見の多大なプラスポイントを、内面の圧倒的マイナスポイントで泥沼に引きずりこんでいる少女 ―― それがラトゥーニ・スゥボータだった。

だからだろうか、クラスで孤立しているらしい。

……失礼だとは思うんだけどね。やっぱり聞いてみたいので、聞いてみることにした。

「ねえラトゥーニ」
「なに、アイビス？」
口の中のメロンパンを紙パックのイチゴミルクで洗い流しながら、彼女は答えた。私同様、甘い物好きだなぁ、と思う。
「友達……もしかして、いないの？」
「……いる」
お、良い返事だ。
「シャイン王女がいる」
えぇー、そっち？　私が聞きたいのは人間のお友達のことなんだけどなぁ。
「私たちの友情はエターナルフォースフレンドリー」
「いや、あのね。シャイン王女は置いといて、ラトゥーニはそれ以外に友達はいるか聞きたかったんだけど……？」
「……」
ラトゥーニは食事の手を止め、私たちの間には気まずい沈黙が走る。
やっぱり、聞いたらまずかったかな？　ラトゥーニの返事を待ち、長い沈黙をお弁当を食べながら耐えた。残念なことに、まったく美味しくない。
1分が過ぎ、流石にキツいので私から話題を振ろうとしたとき、ラトゥーニが答えた。

「……いる、スクールには」

短い言葉がすべてを物語っていた。ラトゥーニは悲しそうに続ける。

「アラド、ゼオラ、オウカ姉さま……でもジェネ高のみんなは私を相手にしてくれない」

「……そのさ、友達が欲しいならジェネ高でも作ったらいいんじゃない？　エア友達なんかじゃなくて、現実の友達をさ……」

的確な問題解決法を提示できたと自分でも思う。

「それができたら苦労しない。皆、私が宇宙人だからと言って相手にしてくれないから」

でもごもっともすぎる言葉で返されてしまった。まぁ、彼女が言うとおりなんだけどさ。宇宙人言動止めれば、少しはいやかなり光明が見える気がしないでもない。

「じゃあさ、思い切って近くの人に友達になってくださいって、言ってみたらどう？」

「私に近づいてくるのは男子ばかり。彼らは劣情に支配された生き物。言ったことはあるけど、そんなことより恋人になってくださいと告白される。不潔」

だ、男子ぃー……！

思春期なのは分かるけど、恋人作りが大切なのも分かるけど……自己中心的じゃない他人を気遣う優しい心を育てることが、恋人を作るのに一番の近道だと私は思うんだけどなぁ……ま、私も恋人いないけど。

「じゃ、じゃあさ、女子に言ってみればいいんじゃない？　女の子なら告白はされないだろうし」
「言った。でも『あんた、男子に人気あるんだから男子と友達になれば！』とか『近づくな、宇宙放射線病になるじゃない！』とか『リア充爆発しろ！』とか言われた」
ラトゥーニの周りの空気が心なしか重くなったように感じる。なんとなく分かっていたけど、やはり友達関係の話題は地雷らしい。
そういえば、あんまりモテすぎたり優秀すぎる女は同性に疎まれるってたまに聞くなぁ。友達に聞いた話だと、ラトゥーニの成績は1年生の中では常に上位を維持しているらしい。
ちなみに私は中の中。女の子に疎まれた経験は1度もない。
「男子は『ロリっ娘サイコー！』とか『メガネっ娘サイコー！』とか『蹴ってください、女王様、はぁはぁ……！』とかいう男子ばかり。こいつらは『無限力』に報告して、消えてもらうべきだろうか？」
どうやらラトゥーニはクラスの男子にモテまくっているようだ。それで女子から迫害されているのか、不憫な。
彼女に友達ができないのは彼女のせいだけじゃなく、周囲の環境も悪いのかもしれないね。ラトゥーニには話を聞いてくれる、同じ趣味の人間が必要なのかもしれない。
「インターネットで同じ趣味の友達を探すのはどう？」
「趣味？　なんのこと？」
「え？　だから、ラトゥーニの宇宙人趣味と同じ人を探して、その人と友達になってもらえばいいじゃん」
「アイビス、私は宇宙人。趣味じゃない。『無限力』から派遣され

た対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェース…
…それが私」
「えぇー……？」

ラトゥーニ、君はどっからどう見ても、ロリメガネ美少女だよ。
でも彼女は自分が宇宙人という主張を、断じて曲げるつもりはなさそうだ。まさか本当に宇宙人……？　まさかね。ツグミと同じ自称未来人に決まっている。
さらにラトゥーニはこう続けた。

「それに私の超異空間経由通信機能は『無限力』との通信にのみ使用が許可される。基地に有線通信装置を備えるには資金が不足している。そんなものは必要ない理由もある。
ほら、私がいるから友達はいなくても大丈夫だと、シャイン王女も言っている」
「そんなわけないよ?!」

……駄目だこの娘……早く、なんとかしないと……。
友達はいなくても大丈夫と、ラトゥーニは言う。けれど彼女の行動は矛盾していると思うんだ。
ラトゥーニはエア友達との会話を見た私を、午前中いっぱい付け回した。
友達がいらないというのなら、図書館で静かに読書でもしていた方が、他人に干渉されず自分の時間を持てていいのではないか？
でもラトゥーニはそうはしなかった。
エア友達という秘密を知った私のあとを付け回した。
まるで秘密を共有できる友達が欲しい……とでも言っているかのように、だ。

「ねえ、ラトゥーニ」

「なに、アイビス？」

メロンパンの捕食を再開していた彼女が私の方に視線を向けた。
分厚いメガネで隠されて、彼女がどんな瞳で私を見ているのかは分からない。
でも今日のラトゥーニの行動を見ていて、私は確信したんだ。
やっぱり、彼女は友達が欲しいんだ、と。
だから私はこう言うの。
少し照れくさいけどさ。

「私と友達になってくれませんか？」

「え――――」

ラトゥーニが食べかけのメロンパンを手から落とした。私の言葉がよほど衝撃的だったのかもしれない。メロンパンは屋上の床に落ちて、割れてしまった。
しばらく口を開けて呆けていたが、直後、ラトゥーニは顔を真っ赤にして顔を背けてしまった。

「え？　え、ええ、で、でも……わた、わたち」

噛んでる噛んでる。言ったことはあっても、言われたことはないのかもしれない。
私の友達になって宣言にラトゥーニは大いに狼狽していた。
でもこれでいい。こういう経験も乗り越えて、誰かと友達になることが、今のラトゥーニにはきっと必要なんだと思う。
もう1回、私は言った。

「ラトゥーニ、私と友達になってくれないかな？　もしかして、嫌？」

「え！　……嫌、じゃ、ないです……」
「じゃあ友達になろう！　はい、友情の印の握手！」
私は右手を彼女に差し出した。
でも自分から彼女の手を握ることはしない。
ラトゥーニが自分で、私の手を握ってくれなければ意味がないからだ。
多分、慣れない事なのだろう。ラトゥーニの手は震えていた。震えていたが、少しずつ手を前にだし、自分の意志で私の手を握り返した。

「ラトゥーニ、これで私たちは友達だね！」
「……友達」
「そうだよ！　もう私たちは友達なんだよ！」
「友達……私とアイビスは友達……！」

ラトゥーニは顔を真っ赤にして破顔していた。
分厚いメガネのせいで彼女がどんな瞳をしているのかは分からない。けれど、瞳に映っているのが悲しみではない事だけは分かった。

「ラトゥーニ。放課後、私たちの部活にきなよ。皆に紹介してあげる」
「うん。ありがとう、アイビス！」

笑顔でラトゥーニは応えてくれた。
これでいいんだ、きっと。
ラトゥーニには友達が必要なんだ。それが同じような趣味を持つ仲間なら申し分ない。私はラトゥーニをプロジェクトＴＤ（テレギヌシス）に連れて行くつもりだった。

こうして、私とラトゥーニは友達になった。
お世辞にも、ラトゥーニに友達は多いとは言えないけど、これから少しずつ増やしていけばいいと思う。
私の友達の友達は、まだ、少ない。
でもいいんだ。これから増やしていくのだから　――……

ここはＯＧ（オリジナルジェネレーション）高等学院。
『エリア』にある地域最大のマンモス高校だ。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
友達１００人できるかな？　ついでにアイビスに恋人も……それは誰も分からない。

おまけ

放課後、プロジェクトＴＤの部室にて。

「宇宙人、ゲットだぜ！！」

部長のフィリオ・プレスティが、自称宇宙人のラトゥーニ・スゥボータを捕まえて叫んでいた。

ラトゥーニの傍には部員のツグミ・タカクラとスレイ・プレスティもいる。

「ほほう、これが宇宙人か。兄様、グレイ式に記念撮影をしましょう」

「おお！　いいねえ！」

「うふふ、ラトゥーニちゃんってゴスロリの衣装が似合いそうね。私、今度縫ってくるわ」

「さすがはツグミ！　よろしく頼むよ！」

「あ、あの……」

フィリオを始めとした部員たちに圧倒されるラトゥーニがおずおずと口を開いた。

「私は『無限力』に作られた対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェースだけど、乱暴にされると壊れちゃ　――」

「むむぅ！　こ、これは！」

「あっ……！」

フィリオがラトゥーニの分厚いメガネをひょいと奪い取った。
メガネで隠されていたラトゥーニの可愛いくりくりお目目が露わになるが、当然、フィリオはそんなものに興味は示さない。

「これが宇宙メガネか。ラトゥーニ君、入部の記念に、この宇宙メガネを僕のメガネとトレードしてくれたまえ！」
「え？　でも私、まだ入部するとは　――」
「ラトゥーニ君！」

フィリオがイケメンスマイルを浮かべながら、外した彼のフレームレスメガネをラトゥーニの顔にかける。
先ほどまでの分厚いメガネと違い、透明なガラスでラトゥーニの綺麗な瞳もしっかりと見えた。正真正銘のロリメガネ美少女自称宇宙人だ。

「僕たちはもう仲間じゃないか！」
「仲間……私たちが……」
「そう！　この僕が、貴重な宇宙人枠を逃すわけないだろう？　既に入部手続きはツグミとスレイが完了させてくれたよ！」
「え？」
「ようこそ、プロジェクトＴＤへ」
「兄様に手を出すと殺すぞ、微少女」

こうして、プロジェクトＴＤのメンバーが１人増えましたとさ。
ちなみにアイビスはと言うと、彼らの様子をツグミ特製チーズケーキを食べながら眺めていた。

「モグモグ……今日も平和だなぁ」

こうして、彼女たちの放課後は過ぎていくのだった　――……

今日のワンコ3　～私の友達は友達が少ない～（後書き）

＜キャラ紹介＞

アイビス・ダグラス：ジェネ高2年、夢に夢見る女の子。ジェネ高は比較的胸が大きい人が多いので、1・2を争うペチャパイぶり。いつもスレイに苛められている。でもTDのみんなは好き。今回はひょんなことからラトゥーニに付きまとわれる。負け犬は悪口ではなく愛称。

ラトゥーニ・スゥボータ：ジェネ高1年、脅威の人気を誇るロリネガネ美少女。元々スクールに通っていたが諸事情によりジェネ高に転向してきた。メガネが太いが完璧すぎる美少女美少女ぶりでクラスの男子には大人気、女子の反感を買っている。でも内面は電波・中二病の自称宇宙人。好きな先輩に近寄る同期を抹殺するべく「教導隊」の一員になり、「裏キック界の死神」の通称をもらっていたりする。

その他：メガネなど

＜次回予告＞

キョウスケ「次回予告だと、馬鹿め、そんなものはない！」

エクセレン「どったのキョウスケ？　機嫌悪いわね？」

キョウスケ「最近、コメディー編で主役をまったく張れていないんだ。いちおう主人公なのにどういうことだ？」

エクセレン「あわてなーい、あわてなーい、一休み一休み」

キョウスケ「イッキューか！？　ふざけるな、覚醒するぞ！」

エクセレン「いやーん。キョウスケったらケダモノー、マイッチング？」

キョウスケ「ええーい、やってられん！　読者のみんな、俺が主役になれそうなネタを考えてくれ！　いつ、話にできるかは不明だがな！」

エクセレン「じゃーねー！　『僕は友達が少ない』は２０１１年秋からアニメ化されるからよろしく！　本作以上にパロディ全開だから、パロディ嫌いじゃない人は読んでみてね！」

今回は「僕は友達が少ない」ネタで書いてみました。
今季からアニメ始まりますね。
最近シリアス方向に持っていって面白いと思える作品が個人的に少ないので、パロディ全開のこの作品は好きです（というか、よく出版できたなというレベル。太陽族はヒュッケバイン問題よりこちらを取り締まった方がいいんじゃないかと思えるぐらいに酷い［まぁ、コメディだからＯＫなのか？］）

ちなみに今回の元ネタは「僕は友達が少ない」「涼宮ハルヒの憂鬱」「ジョジョの奇妙な冒険」でした。
分かるかな？
ではでは、また次回でお会いしましょうノシ

泣くな、狼よ！　～エリアのゴーストライダーの巻～（前書き）

＜濃・霧・注・意・報＞

絶賛、キャラ崩壊中です！
今回は……キャラ崩壊しているのかな？　案外、原作通りだったりして？
内容を読んで確かめてみてください！
ちなみに今回はバイク話です！
ではどうぞ！

泣くな、狼よ！　～エリアのゴーストライダーの巻～

なぜか高校の密集する地域「エリア」

時刻は0時。閑静な住宅街は寝静まり、商店街のシャッターは全て閉まり切っている。夜になっても賑やかな繁華街を除いて、エリアの真夜中は静かなものだった。

……いや、もう1つだけ例外が存在していた。

「峠」と呼ばれるエリアの山岳地帯にある公道だけは、バイクを乗り回す走り屋や暴走族の集会所に利用され、真夜中になっても賑やかな声が聞こえてくることが多い。

「峠」とはそんな場所だった。

しかし走り屋や暴走族の集会が、毎日のように行われることはまずない。一定の期間を設けて開かれるのが通例であり、毎日のように「峠」の夜を爆音が切り裂くことはありえない。

無論「峠」では、集会の日を狙い警察の白バイ隊が張り込みをし、時どき暴走族を検挙したりするスポットでもあった。しかし暴走族もバカではなく、その度に集会日を変えたり、何らかの対策を練ってくる。白バイ隊の人員も限られているため、暴走族と白バイ隊の対立は、さながらイタチごっこの様を呈しているのが現状だった。

……しかし異変は起きた。

――パッタリと、「峠」に走り屋が現れなくなったのだ

原因は容易に判明した。

「峠」に不気味な王者が君臨したからだ。

「いたぞ！　ゴーストライダーだ！」

ヘルメット内側に装備された通信用のスピーカーから、相棒のフォリア・エストの声が聞こえてきた。

ゴーストライダー……それが「峠」に君臨する王の名前だった。

つい最近になって「峠」に現れ、夜な夜な危険な走行を繰り返している危険人物。「峠」を根城にしている走り屋たちをことごとく打ち破り、その走りは「えぇい、あの黒いバイクは化け物か！」「まるでお化けだ」「幽霊怖いよぅ」と彼らに評されて恐れられていた。

そしてついた2つ名が「ゴーストライダー」……彼が走り屋たちへの抑止力となり、「峠」での暴走は影をひそめた。

しかし今度は、彼が我が物顔で「峠」を暴走するようになったのだ。だが危険な走行の繰り返しを、いくら抑止力になるからと言って警察が無視し続けるわけにはいかない。

こうして俺の所属する白バイ隊「クライウルブズ」に「ゴーストライダー」検挙の命令が下されたのだった。

「親父、ヒューゴ、見つけたぞ！　あの黒いバイクがゴーストライダーに間違いない！」

「でかしたぞフォリア。俺が先行する。2人は俺のあとに続け！」

「「了解」」

「クライウルブズ」の隊長アルベロ・エストの声に、相棒のフィリアと俺　――　ヒューゴ・メディオの声が重なる。

今、俺たちは「峠」で暴走する「ゴーストライダー」を追跡して

いる最中だ。アルベロ隊長を先頭に、3台の白バイが列になって「峠」のヘアピンカーブを曲がる。最後尾の俺には、「ゴーストライダー」の赤いテールランプの残光が視界の端に映るだけだ。

「ゴーストライダー」の姿をしっかりと見れているのは、きっとアルベロ隊長だけだろう。隊長の声がメットのスピーカー越しに聞こえてくる。

「お前の命運は尽きた！　ここで捕まれい　――――　なにっ！？」

突如、隊長が驚愕する声。

何事か！？　と考えた矢先　――　隊長のバイクが安定性を失う。

「親父！？」「隊長！？」

眼前の異変に俺とフォリアは反射的にブレーキレバーを握り締めた。

瞬時に制動がかかり、タイヤから白煙が上がりながら減速する。もう数秒で停車できる……そんな俺たちの目の前で隊長はバイクから転がり落ち、白バイはガードレールに乗り越えて崖の下へと転落していく。

隊長はバイクから投げ出され、道端に横たわっていた。

「隊長！　しっかりして　――」

やっとの思いでバイクを停車して、隊長の元に駆け寄ろうとした俺の視界に影がさした。今日は雲1つ無い夜空で、黄金色の満月が神秘的にエリアを照らし出している。その月光を、俺の頭上を横切るなにかが遮り、影になっていた。

反射的に見上げる。

――黒いバイクが大ジャンプして、俺の頭上を通り抜けていた……

影の正体は追っていた筈の「ゴーストライダー」だった。

ほんのさっきまで、隊長の直前を奔っていた筈なのに……いつの間にか逆走し、俺の頭上を飛び越す程の大ジャンプ……慣性を無視したかのようなあり得ない動きで、「ゴーストライダー」は「峠」を逆走したのだ。

隊長はその動きに驚き、ハンドリングを誤った。

俺の思考をあざ笑うかのように、「ゴーストライダー」は俺の背後に着地し「峠」を逆走して去っていく……そのシートに……人影は見当たらなかった。

「……あれがゴーストライダー……？」

フォリアの大声が聞こえてくる。

「親父！　大丈夫だ！　傷は浅いぞ！」

「う……フォリアか……？」

「はっ、呆けている場合じゃない。救急隊を呼ばないと……！」

俺はメットを外して、無線で救急隊に応援を要請した。

十数分後、救急車が到着し隊長は最寄り「カイメラ医院」へと搬送される。

不幸中の幸いか、頭部の傷はなく右足の単純骨折ですんだ。

こうして俺たちは「ゴーストライダー」との初戦で、手痛い1敗を喫したのだった……

スパロボ学院　～OGだよ、全員集合！～
泣くな、狼よ！　～エリアのゴーストライダーの巻～

数日後、カイメラ医院。

俺とフォリアは入院したアルベロ隊長の見舞いに、カイメラ医院を訪れていた。

「俺としたことが……なんという様だ」

アルベロ隊長がベット上で新聞を広げてぼやいた。漫画のようにガチガチにギブスで固められた右足が、紐で釣り上げられている。既に油性のマジックで「早く良くなってねアーちゃん?」と書かれている。奥さんだろうか?

和む文面とは対照的に、新聞を睨む隊長の目は鋭い。

隊長の眉尻が寄っている理由は新聞に書かれた内容にあった。

「『白バイ隊、深夜の暴走バイクを取り逃す。隊員の1名が横転し、重体』だと……?　マスコミめ、こんな事ばかりには鼻が利く。他に取り上げるべきことはいくらでもあるだろうに」

「まったくだぜ。そのうえ煽るだけ煽って、責任は取らねえしな。マスコミじゃなくマスゴミに改名しろっての……っと、親父。リンゴ剥けたぜ」

「おお、すまんなフォリア」

フォリアが切り分けたリンゴを隊長に渡す。隊長はリンゴを普通に口に入れて食べた。本当に右足以外に大きな怪我はないみたいだ。しかし今回の骨折で隊長は入院せざるを得なくなった。隊長の抜けは「クライウルブズ」には大きな痛手だ。

「ところで、ゴーストライダーのその後はどうだ？」

隊長はリンゴを1切れ食べきると、俺たちに訊いてきた。

「他の白バイ隊に捕まったのか？」

「まさか。ゴーストライダーは隊長と互角に渡り合えるんですよ？他の白バイ部隊にそうそう捕まるはずがないですよ」

「だ、そうだぜ親父。現にあれから毎晩ゴーストライダーは出没しているが、誰も彼も追いつくことはできないんだと。まったくハタ迷惑な奴だぜ」

俺に続いてフォリアが失笑して言う。

アルベロ隊長は「むぅ」と唸って答えた。

「ゴーストライダー、なんとかせねばなるまい。奴を放置すれば警察の威信にかかわるし、なにより危険だ」

「そうですね。でも隊長が振り切られるような相手……どうすればいいか……？」

白バイ隊の中でも隊長の腕はピカ一だ。

隊長よりも速い「ゴーストライダー」に追いつき、捕まえる自信が俺にはない。

「案ずるな。この間も不意さえ突かれなければ追いつけていた。不

可能ではない」
「しかし……」
それは隊長並の腕前がある前提での話だと思う。俺も、相方のフォリアも、隊長に比べればまだまだ青二才だ。
しかし隊長は言う。
「ヒューゴ、フォリア、お前たちならできる。お前たちは俺の部下だ。お前たちは俺のシゴキに付いてきたんだ、自身を持て」
「お、親父……俺たちのこと、そこまで認めてくれてたのか……嬉しいぜ」
フォリアが目じりに薄らと涙を浮かべていた。
大げさな奴だ、とは言わない。アルベロ隊長は滅多に人を褒めないことで知られる。その隊長が俺たちに自信を持てと言ってくれたのだ。嬉しくない訳がない。
隊長はバツが悪いのか顔をしかめて、こほんと咳払いを1回した。
「勘違いするなよ。お前たちなど、俺から見ればまだまだ半人前以下。ひよっこだ。調子に乗っていると、すぐに腕前は錆びつくことを忘れるな」
少し隊長の頬が赤いような気がしたが、指摘してもただの藪蛇なのでスルーする。
隊長はもう1度咳払いをして、続けた。
「しかし俺を抜いて奴を捕まえるのは少々厳しいだろう。そこで、だ。俺が不在の間、お前たちを協力してくれる助っ人を知り合いのつてで依頼した」
「助っ人ですか？」

「親父が抜けた枠が埋まるのはありがたいな」

フォリアの言葉に隊長が頷く。

「うむ。エルリック・シャルティールという警察学校時代の同期の元部下でな、能力はあるらしい。まぁ、少し問題もあるそうだが、お前たちだって俺から見れば問題だらけだ。大した問題ではあるまい」

「あ、ひでぇなぁ」

フォリアが苦笑する。隊長もつられて微笑み、続ける。

「この病院に来るように言っておいた……もうそろそろ来る時間だと思うのだが」

と、そのとき。

――コンコン

アルベロ隊長の病室をノックする音が聞こえた。

どうやら、隊長が呼んでいた人物が到着したらしい。

「開いている。入ってくれ」

「はっ、失礼します！」

隊長の声に青年が扉を開けて入ってきた。

歳は俺と同じぐらいのように見える。橙色の髪の毛が特徴的な若者だった。

「初めまして！　ミスト・レックスです！　よろしくお願いします

！」

「ああ、こちらこそ面倒をかける。俺が不在の間、この2人をよろしく頼んだぞ」

定型文のような挨拶を済ませ、橙髪の青年ミスト・レックスがベット上の隊長と握手を交わす。

続けて俺とフォリアの方にも手を差し伸べてきた。

「君たちが残りの『クライウルブズ』のメンバーだね？　短い間だけど、よろしく頼むよ」

「はい、俺はヒューゴ・メディオと言います。こちらはフォリア・エスト」

「よろしくお願いします」

「ああ、よろしくね！」

などというテンプレ気味な挨拶を俺たちはミストさんと交わし、病院に長居するのもなんなので、ミストさんを連れて職場に戻ることにした。

俺たちのミストさんの第一印象は悪くなかった。

明るいし、ハキハキと挨拶もできる（まぁ、できて当然なのだが）。

腕前の方も、あのアルベロ隊長の同期の方が認めてるぐらいだから十二分に高いのだろう。

間違いなく「ゴーストライダー」の捕縛の手助けになる。

そんな俺たちのミストさんへの期待感は……

……

……

……

……色々な意味で裏切られることになる。

●

例えば、こういうことがあった。

「ゴーストライダー」が出てからというもの、「峠」での暴走は無くなったものの、代わりとばかりに市街地で暴走する車両の数が増えていた。

「ゴーストライダー」登場直後の暴走件数の低下は、いわゆる「嵐の前の静けさ」だったらしい。奴の脅威は暴走族の抑止力としても働いたが、結局、族は暴走する場所を変えれば奴の怖さを味あわずに済むという結論に達したらしい。

街で暴走する族の数に応じて、住民からの苦情の件数ももうなぎ上りだ。

白バイ隊の総力を挙げて、暴走族の検挙に乗り出すことになった。

各白バイ隊の配置場所や方針を決定する会議に、俺たち「クライウルブズ」も出席していたが（隊長は入院中のためいない）、その場でミストさんがこんなことを言い出した。

「暴走族の検挙は確かに必要なことだと思いますよ。

でも、確かに検挙によって暴走族の数は減るでしょうけど、それじゃあ根本的な解決にはなりませんよね？」

「「「はぁ？」」」

ミストさんの言葉に首を傾げるものが続出した。俺とフォリアを含め、会議の場には白バイ隊のメンバーのほとんどが集まっていた。俺たちを始めとして、彼の言葉に頷いた者は1人もいなかった。

「君はなにを言っているのかね？　……えぇと、アルベロ君の代わりに配置された……」

「ミストです。ミスト・レックス！」

白バイ隊の総隊長の声にミストさんが堂々と返事をする。

フルネームで答えるのは良いとは思うが、相手は目上の方なのだから語尾に「～です」ぐらい付けた方がいいと思う。しかも語尾を力強く言い切ったため、怒鳴りつけているような印象を受ける。

総隊長の眉が一瞬ピクリと動いた。

怒らせてしまったか……とも思ったが、総隊長は普段と変わらぬ優しいトーンでミストさんに話しかける。

「えー、ではミスト君。君は根本的な解決にならないと言ったが、いったいどういう意味なのかね？」

「そのままの意味です！　暴走族を検挙しても、この世から暴走族がいなくなるわけではありません！　今、暴走族の一斉検挙を行っても、それは一時しのぎでしかなく根本的な解決にはならないと思います！」

「ふぅ……君はなにを言っているのか、分かっとるのかね？」

総隊長のため息に釣られて会議室内から呆れ声が次々と上がる。

いったいミストさんはどうしたと言うのだろう？

白バイ隊に所属して、暴走族検挙の配置分けや方法を話し合う会議でこんなことを言うなんて……よほど、検挙に出向きたくない理由でもあるのだろうか？

なんにせよ、この場で言うようなことではない。

それに……

「住民から苦情が来ているんだよ、苦情が」

俺の思っていたことを総隊長が代弁していた。

そう。住民から暴走行為への苦情が来ているのだ。

暴走族を検挙したって、エリアから暴走行為を根絶しきれるとは思わない。検挙＝暴走族根絶という図式はあまりに安易すぎる発想だ。

しかし住民から苦情が出ている以上、俺たち警察が動かないといけない。住民の安全を守るのが、俺たちの勤めだからだ。

「住民が困っているのに、我々白バイ隊が動かないでどうするのかね？」

「……でも、それも原因の解決にはなりませんよね？」

「くどい！　……まったく、これで会議は終了だ。皆は仕事に戻ってくれ」

総隊長の怒声を皮切りに、会議に参加していた白バイ隊員たちはそれぞれの持ち場へと戻って行った。

俺も軽い偏頭痛を覚えながら、持ち場へと足早に急ぐ。

頭痛の種は言わずもがな、ミストさんの言動だ。

「おいヒューゴ。ミストさん、頭大丈夫なのか？　あの発言は『こんな仕事できません』って言うのと同じことだぜ？」

「俺が知るかよ……」

ミストさんに気付かれないように、フォリアと小声で話す俺。

歩く俺たちのあとを、ミストさんはぶつぶつと独りごちしながら付いてきている。

「こんなに俺と他の白バイ隊で意識の差があるなんて思わなかった……！」

こちらのセリフですよ、ミストさん。

白バイ隊だって警官だ。警官が住民の安全を放棄しちゃダメでしょうに。

「……ま、ちょっとした気の迷いだよな……？」

俺はミストさんの事を自己完結させ、急いで仕事に戻った。

アルベロ隊長の知り合いが紹介してくれた人材だ……邪推はしたくない。

ミストさんは少し空気が読めないだけ……それだけだ。

……結論から言おう。

俺がミストさんに抱いていた懸念は、決して気の迷いなんかじゃなかった……。

●

次の日から、俺とフォリアはミストさんを注意深く観察してみることにした。

仕事は問題ない。白バイ隊として日々の業務をこなす彼は、先日

の発言と裏腹に次々と暴走行為を行う車両を検挙したり、住民間のトラブルを解決して回っていた。
能力は問題ない、いや平均以上はある。では俺がミストさんに抱いている懸念はただの思い過ごしなのだろうか？
それならいい……しかし、

『――能力はあるらしい。まぁ、少し問題もあるそうだが　――』

アルベロ隊長の言葉が思い出された。
不安はある。誰にだって多少の欠点というものもある。だが大概の場合はうまくやっていけるじゃないか？
……大丈夫だ、問題ない。
しかし極め付けの言葉を、俺は他の白バイ隊の先輩から頂くことになった。

「おうヒューゴ、お前んトコのアレ、どうなってんだ？」
「アレ？　なんのことですか？」
「ミストさんだよ、ミストさん」

先輩の苦情はミストさんに関してのものだった。
先輩曰く、ミストさんの問題は能力ではなく、彼の空気の読めなさっぷりらしい。
その場にそぐわないまたは言うべきでない言葉を連発して、ミストさんは多くの同僚から反感を買っているとのことだ。
先輩が知っているだけでも
「そんな事はどうでもいいんだ。重要なことじゃない」
「これじゃ、俺……住民を守りたくなくなっちまうよ……」など……発言した詳しい状況は分からないが、おそらく先日の会議のような場で言ってしまったに違いない。

「いいかヒューゴ。最近の『クライウルブズ』には悪い噂ばっかり立ってるぞ、主にアレのせいでな。気を付けろよ」
「す、すいませんでした！　気を付けます！」

先輩はそれだけ言って仕事に戻って行った。
ミストさん……この後、俺が聞き込みをして知った彼の評判は、白バイ隊に配属されて日が浅いにも関わらず最低のものだった。
このままではマズイ。
何とかしなくては……俺はフォリアと相談することにした。

「……どうする？　忠告してみるか。いっそストレートによ」とフォリア。
「だが俺たちの言葉をミストさんが聞くと思うか？」と俺。
「いや……聞いて反省したとしても、なんか学習しそうにはないよな」
「あー確かに。ミストさんは反省だけして、同じことを繰り返しそうだな」

結局、ミストさんの言動を改善する妙案は出てこなかった。
それどころか、

「はやく、ミストさんを『クライウルブズ』から追い出せねえかな？」

フォリアに至っては、ミストさんへの嫌悪感を顕著に表す様になっていた。

「おいおい、酷い言い草だな。ミストさんなんかでも、今は一応『クライウルブズ』の仲間なんだぜ」
「ヒューゴ、その言葉はそっくりそのままお前に返すぜ」

「そうか？」
「そうさ。中々の毒舌だぜ」
「ま、まぁ、俺のことはいいじゃないか。それより今はミストさんをどうするかだ」

しばらくの間、俺とフォリアはミストさんをどうするべきかを話し合った。
ミストさんをどうにかする。ミストさんを改善する。といった方向性では一切話し合わなかった。
どのようにして、ミストさんを俺たちの「クライウルブズ」から出て行ってもらうか……焦点はそこだけに絞り込む。

「ゴーストライダーだ」

フォリアが言った。

「奴さえ検挙できれば、ミストさんが『クライウルブズ』にいる理由はなくなる。この際だからはっきり言おう。気を使ってくれた親父には申し訳ないが、ぶっちゃけ、ミストさんいらねぇよ。
通常の白バイ隊の業務は、頑張れば俺たちだけも事足りるしな。『ゴーストライダー』さえいなくなれば、無理を言ってミストさんを俺たちの隊に引き留めておく必要はなくなるだろう？」
「なるほど。理由もないのに、わざわざ出張ってもらうのも悪いから……とでも言えば」
「そうさ。体裁を保ちつつミストさんを追い出すには、十分な説得力だ」

影のある笑みを浮かべて、フォリアが言った。
時代劇に出てくる悪徳商人に通じるものがある、イヤらしい笑みだ。

「くくく……フォリア屋、お主も悪よのう」
「いえいえ、ヒョーゴ様ほどではありませぬ」
「……おい。名前、間違えてるぞ」

こうして、俺たちは「ゴーストライダー」の検挙に本腰を入れることとし、上司に申請して深夜の「峠」で奴を待ち構えることにした。
残念ながらミストさんも一緒に、だ。
彼も能力だけはある。
「ゴーストライダー」の検挙に一役買ってくれることだろう。

ミストさんにお帰りいただくために、俺たちは深夜の「峠」へと出向くのだった。

●

深夜0時。
俺とフォリア、そしてミストさんは「峠」にて白バイを走らせていた。
「峠」は人通りのない山道なので外灯は立っていない。土砂崩れ時の被害を軽減するために設置された山際の金網の向こうからは、耳を傾ければ、野鳥や虫の鳴き声が本当は響いて来るのだろう。
しかし今夜は違う。俺たちの乗るバイクの排気音が、自然の調律を崩し雰囲気をぶち壊していた。

「なぁ、本当に『ゴーストライダー』は来るのか？」

ヘルメット内部に仕込まれたスピーカーを通してミストさんが尋ねてきた。同じくヘルメットの縁から口元に伸びたマイクで、俺はミストさんに答える。

「はい。以前は確かにこの辺りで……不審な黒いバイクです」

「相手は親父を振り切るほどの腕前だ。3台で連携して追い詰めるぞ」フォリアが言う。

「ああ、俺に任せてくれ！」

ミストさんが啖呵を切り、彼のバイクのアクセル音が強くなる。

俺、フォリア、ミストさんの順で隊列を組み走行していたのに、ミストさんだけが加速して列を抜けた。俺の視界の端をミストさんの姿がかすめる。緩いカーブを抜けたあと、ミストさんは俺たちの先頭を走っていた。

「……あの野郎……！」

フォリアが小さく舌打ちしたのを俺は聞き逃さない。

「ゴーストライダー」は疾い。あのとき、慣性を無視したような急ターンで不意を突かれたとは言え、あのアルベロ隊長が取り逃がす程に、だ。

フォリアはその事をミストさんに、先ほど、ミストさんにしっかり伝えたはず。しかし直後にミストさんは独断専行……押さえろフォリア。

ああ、そうだなフォリア……俺にはお前の言いたいことはよく分かる。だがな、

「フォリア、冷静になれ」

「……すまねぇヒューゴ。そうか、そうだったな……」

「そうさ。思い出せ、俺たちの目的を」
「ああ、忘れるものかよ」

マイク越しに頷きあう俺とフォリア。
今一度、俺たちは「峠」に来た理由を深く胸に刻みつける。
そうさ、俺たちは――

――ミストさんを追い返す！

「ゴーストライダー」を捕まえてだ。
断じて、目的と手段は逆転などしていない。断じてだ！

「いたぞ、『ゴーストライダー』だ！」

メット内にミストさんの悪声が響きまわった。うるさい、黙れ。
「峠」の坂を上り切ったあたりに奴はいた。
黒い車体から爆音を響かせて、俺たちの前を悠然の疾走している。
下り坂のカーブも一切減の速せずに、人間業と思えない車体の傾け具合でクリアしている。

「くっ、やはり速い……！」

夜の暗さと奴の速度が相まって、俺は奴の姿を見失わないので精いっぱいだ。
化け物じみた技量……あのアルベロ隊長を振り切るだけのことはある。あまりの速さに、俺は「ゴーストライダー」に付いて行くことだけに集中した。
カーブを抜けて、直線の下り坂に差し掛かる。

そのときだ。急カーブでさえ減速しなかった「ゴーストライダー」のテールランプが、不自然にパッパッと明滅を繰り返したのは。

「直線でブレーキ……っ！　『ゴーストライダー』め、バカにして！」

あからさまな挑発にミストさんが声を荒げた。

下り坂とは言え、俺たちの走っているのは直線だ。減速すれば、速度を上げる俺たちに追いつかれる。それは目に見えている。だが奴はそれを承知で、制動をかけているに違いなかった。

――追いつけるものなら追い詰めてみろ

そう言わんがばかりの挑発に、俺はバイク乗りとしてのプライドを酷く踏みにじられた気分だった。

……だが、ここで冷静さを失ってはいけない。接戦であればあるほど、冷静さを欠けばすぐに勝負は決する。フォリアもそのことを承知しているようで、黙々と「ゴーストライダー」を追跡する。

しかし……奴の挑発がクリティカルヒットした人が1人いた。

「くっ……！　落ち着け！　あんな安っぽい挑発に乗るな！」

ミストさんの声が震えていた。

「なぜ追いつけない……！　あんな、あんな奴に！」

「おい……ミストさん！」

「うおおおおおおおおおおおぉっぉぉっ！！！」

ミストさんが絶叫し「ゴーストライダー」に突っ込んでいく。
フルスロットルで俺とフォリアから離れ、奴に肉薄していく。
バイクのライトが闇を切り裂き、ミストさんは速度を落としていた「ゴーストライダー」に並んだ。ぴったりと並走している。アルベロ隊長すら振り切った「ゴーストライダー」を、ミストさんは完全に捉えていた。

「す、すごい……！」
「チッ……認めてやるよ、技量だけは！」
「うおおおおおおおおおおぉぉっ！！！」

ミストさんが「ゴーストライダー」との車間距離を、車体の側面同士が接触するぐらいのにまで縮じめていく。
バイクの運転中、互いに接触すれば大事故は免れない。
だから普通は接近してくるバイクからは距離を取る。ミストさんはこれを利用して、「ゴーストライダー」を「峠」の山側の壁へと追いやっていく。そのうち逃げ場が無くなれば、奴は停車するしかなくなる。
ジワジワと山側に追い詰められる「ゴーストライダー」。
あと少し……！　あと少しだ！　頑張れ、ミストさん！
俺は心の中でミストさんを応援した　――

『Ｓｈｉｔ！』

――「ゴーストライダー」から英語の声が聞こえてきた。
まるでラジオから響いて来る機械の音声のような……そんな声だった。
壁際に追いやられ、さらに速度を落とした「ゴーストライダー」

に俺も追いつくことができた。ヘッドライトが奴のナンバープレード、テールライト、座席の順に照らし出していく……が

「な、なに?!」

「ひ、人が乗ってねえぞ!!」

「ゴーストライダー」の座席に運転手の姿はなかった。

人が乗っていない。にも関わらずアクセルはふかされ、ハンドルは一人でに動き、「ゴーストライダー」は「峠」を走っていた。

幽霊の走り屋……「峠」の走り屋たちが恐れていたのは、圧倒的な実力を持つ王者ではなく、姿の見えない奇怪な走り屋だったのだ。

そのことに、俺たちは今更気づかされた。

「うおおおぉぉ、これで終わりだぁ!!」

『Ｆｕｃｋｉｎｇ Ｓｈｉｔ!』

「ッ! ミ、ミストさん、よせ ――――」

頭に血が上っているのか。おそらく、自分の車体ごと奴を壁に叩きつけて止めるつもりなのだろう……ミストさんは「ゴーストライダー」にとうとう突貫した。

嫌な予感しかしない。

案の定、次の瞬間、俺の眼前から「ゴーストライダー」の姿は掻き消えた。

だが俺は奴がどこに行ったのか知っている。あのとき、アルベロ隊長でさえ意表を突かれた奇策。普通のバイクなら、絶対に不可能な挙動を「ゴーストライダー」は行っていた。

ジャンプ台もない直線で、まるでモトクロスバイクがそうするように、「ゴーストライダー」は空中を跳んでいた。高さにしてざっと3～4ｍの高さを奴は舞っている。

刹那 ――

「アアアアアアアアァァァッ！！！」

――　今度は耳を劈くようなミストさんの悲鳴。

車体を叩きつける相手を見失ったミストさんは、それはもう見事に壁に側面から衝突し、バイクから投げ出された　――

――　よりによって、俺とフォリアの方に向かって……

「ちょ！　嘘だろ、オイ！」

「こっち来るな、バカ！」

「アアアア　――――　ッ！！」

下り坂を駆け下りていた俺たちが、錐もみ回転しながら突っ込んでくるミストさんを避けられるはずもなく……正面衝突。

3人で揉みくちゃになりながらアスファルトの上に投げ出されて、ゴロゴロ転がって、山際の壁にぼすっとブツかって止まった。

全身打撲による激痛が俺を襲う。頭は打っていないのが不幸中の幸いというものか。俺たちの白バイは見るも無残に大破していたのに、なぜか3人とも生きていた……不思議なこともあるものだ。

だが痛い。

痛みのあまり意識が遠のく俺の傍に、ぼぼぼぼっと排気音が近づいてくる。

月夜に煌めく漆黒のボディ……「ゴーストライダー」がまるで大きな単眼で見るみたいに、ヘッドライトで俺を照らしていた。

そして……一言……

『Ｇｏｏｄ　Ｎｉｇｈｔ！』

「……空気……読めよ……」

本当によぉ……まったく……イラっとする。

こうして、俺の意識は野鳥の鳴き声を子守唄に夜の闇へと沈んでいった　――……

●

数日後、カイメラ医院、３人部屋。

あの後、連絡が途絶えたことを不審に思った総隊長が派遣した救急隊によって、俺たちはカイメラ医院に運ばれていた。

俺を筆頭にフォリア……そしてミストさんは全身打撲に加え、不思議なことに３人とも右足を骨折し入院を余儀なくされることになった（それもアルベロ隊長と同じ骨……妙な因縁も感じたが、おそらくただの偶然だろう）。

加えて言えば、勤務中の負傷のため警察が治療費を持ってくれたのはいいのだが、金がないのか、俺とフォリア……そしてミストさんは同じ３人部屋の住民となる（妙な因縁どころか策略すら感じる）。

やってられない。
今回の仕事の結果は、この一言で片すことができる。
同僚のアクアが差し入れてくれたフルーツ盛り合わせセットから、バナナを取り出して皮を剥き、頬張りながらフォリアがぼやいていた。
「世の中ってのは理不尽さ。……なぁ、ミストさん？」
こめかみに青筋を浮かべ、ミストさんの方を一切向かずに訊くものだから、フォリアの勘忍袋のライフはもうゼロ……いや０．１ぐらいしか残っていないのがすぐ分かる。
……分かるぞ、フォリア。
俺たちは怒ってもいい。怒ってもいいんだ。
だって――
「はいミスト。ボク、頑張ってリンゴ剥いたんだ。だから、はいアーン」
「おいおい、シェルディア、もう食べれないって」
「ちょっとシェルディア！　あまりミストにベタベタしないでよ！」
「なんだよアンジェリカ、いいじゃないか、これぐらい」
――ミストさんのベットには女性が見舞いに来ていた。
１人はシェルディア・ルージュという名の小麦色の肌をした少女。
もう１人はアンジェリカ・シャルティールという緑髪のメガネの女性。
彼女たちはミストさんが入院したとの風の噂を聞きつけ、カイメラ医院に押しかけてきた。そして付きっきりで、看病と称した乳繰り合いを繰り広げているのだ。
恋人のいない俺とフォリアの目の前で、だ。

それも数日間、ずっと。
さらに何故かカイメラ医院には、患者の間を仕切るカーテンの類が一切ない。どういうことだ？　この病院のプライバシーの保護はどうなっている？

「2人とも仲良くしてくれよ、な？」

ミストさん、ついにフォリアの問に答えず……どうやら聞こえていないらしい。
もう、やめてくれ。フォリアの堪忍袋のライフはもうゼロだ。ついでに言うと俺のもな。

「なぁ、ミストさん」
「俺たちに、なにか言うことがあるんじゃないかな？」

怒りのあまり眉じりのピクつきが止まらないなんて、そうそう経験できることじゃない。
低い俺たちの声にやっと気づいたのか、ミストさんがニヤケ面を俺たちに向けてきた。

「いやぁ……ゴーストライダーは強敵でしたね」

――ブチンッ

俺たちの中でなにかが切れた。
穏やかな心で怒りに目覚めて、髪が金髪化してしまいそうだ。
俺とフォリアの声がシンクロする。

「「お前って、本当に最低の屑だぜ！！」」

こうして、俺たちの波乱に満ちた入院生活は幕を開けたのだった

――――……

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。

『エリア』には個性豊かな人間が沢山いる。

今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。

次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない。

おまけ

真夜中の住宅街。

真ん丸お月さんが住宅街をゆっくり走る彼を空から見下ろしていた。

『Ｇｏｏｄ　Ｒｕｎ（ふっ、今日も実にナイスな走りだったぜ）』

黒光りするボディを持つバイク「ゴーストライダー」こと「ゲシュペンスト・ファントム」は、最近マイブームである「峠」攻めを終えて、意気揚々と帰宅の路についていた。

『Ｉ　Ａｍ　Ｎｏ．１！

（もうあの「峠」で俺に勝てる奴はいねえようだ。今日は妙なボケナスが突っかかってきたが、あの程度では、最高にイケててカッコいいバイクであるこの俺に勝てようはずもないぜ！）』

片言の英語を漏らしながら、ファントムは主人であるエクセレン・ブロウニングの自宅へ向かう。

しかしその道中、

「あら、ゲッシーちゃんじゃないの。どったの？」
『Ｍａｓｔｅｒ？（エクセレンじゃないか？　どうしたんだ、こんな夜中に？　俺と同じで夜の散歩か？）』
「うふふふ、なに言ってるのか分かんないけど、私はコンビニに言っていただけよん？　さぁ、ゲッシーちゃん、帰りましょう」

偶然出会ったエクセレンをファントムは座席にまたがらせる。
そして思う。
一人で走るのも悪くないが、やはり誰かを乗せて走る方が性に合っている。

『Ｔｈｅ　Ｅｎｄ（へっ、もうちゃちな夜遊びはヤメにするとしよう。これからは、またエクセレンと一緒に「峠」を攻めるとするぜ！）』
「ゲッシーちゃん、レッラゴー♪」
『Ｙｅｓ、Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ！（かっ飛ばすぜ！　しっかり握りしめて離すんじゃねえぞ！）』

ファントムはエクセレンを乗せて、自宅へと全速力で突っ走るのであった。

……その日以来、「峠」で「ゴーストライダー」を見た物は誰もいないと言う　――……

泣くな、狼よ！　～エリアのゴーストライダーの巻～（後書き）

＜キャラ紹介＞

ヒューゴ・メディオ：エリアの白バイ隊「クライウルブズ」のメンバー、２０歳。相方のフォリア、隊長のアルベロと共にエリアの治安を守っている。かなりの常識人だが地味。時々名前をヒョーゴとかヒャーゴとか間違えられる。婦警のアクアとは恋人未満友達以上らしい。

フォリア・エスト：エリアの白バイ隊「クライウルブズ」のメンバー。隊長であるアルベロ・エストの息子。名実ともにヒューゴの相方だが、彼と比べると熱しやすい性格をしていて少し暴走しやすい。

ミスト・レックス：アルベロの同期であるエルリック・シャルティールの元部下。今回、アルベロの負傷の穴を補うために呼ばれた。技量は高いが、空気を読む能力がマイナスのベクトルを持っている。彼と話してイラっとしたら負けである。しかも2人の女性に言い寄られていて、イラツキぐあい倍増。しかもかなりの高確率で暴走し、反省はするが、学習はしない。ミストさんは愛称？

アルベロ・エスト：エリアの白バイ隊「クライウルブズ」の隊長。白バイ隊屈指の実力者で、ヒューゴたちを毎日しごいている。だが時々デレる親父デレ。

今回はクライウルブズとミストさんの提供でお送りしました。

ちなみに「スパロボK」は私が購入したスパロボの中で、初めて途中で投げ出したゲームです。
元ネタはミストさんで検索した情報から。
ではでは、また次回ノシ

鋼鉄の駄狼Ｒ　～序の終　終の序～（前書き）

＜注・意・事・項＞
絶賛、キャラ崩壊中！

シリアス編、始めました。
「エリア」の秘密に焦点を当てて、話が進んでいく予定です（予定は未定）
コメディー編とリンクしていますので注意してください！！
場合によってはネタバレになることもあります！！

鋼鉄の駄狼R　～序の終　終の序～

この、世界は、歪んでいる。

歪んでいるとはどういうことだろう？

それは整然とした正六面体に穴が開き、角が欠け原型を留めないような状態なのか？

それとも、世界を境界する線が取り払われ交じり合い、パレットの上でグチャグチャになった数種の絵の具のようなものか？

どれも的を得ない。

どれも違う。

私の目の前の世界には夜のフィルターが掛かっている。

けれど色は別れ、線ははっきりとしていて、形ある物として確かに眼前に存在している。

見えているものは歪んではいなかった。

そう……今、私の見ているモノは決して歪んでなんかいない……

けれど、この世界は、見えない部分で歪んでいるのだ。

ここは「エリア」。なぜか高校が密集する地域。

「エリア」の住民たちが暮らすごく普通の1地域にすぎない。住民たちは毎日笑い、泣き、感動しながらそれぞれの人生を謳歌している。

ある者は恋人との日々を謳歌し。

ある者は家族を守れる男になろうと努力し。

ある者は友人との日々を満喫している。

青春……そう呼べる日々を「エリア」の住民たちは過ごしていた。

……けれど私は知っている。

それは虚構の日々であることを。

「また、だにょ……」

私は「エリア」にある名もない公園でつぶやいた。

錆びたブランコに腰掛け、短い足を放り出してブランコを漕ぐ。振れ幅は小さい。エキサイティングな揺れを体験できる程、今の私の体は大きくない。

全長約２０－３０ｃｍ、青い髪の毛に2頭身、さらに教科書の隅っこに書かれるパラパラ漫画の棒人間に無理やり付け加えられたようなやる気のない顔。

例えるならメールの絵文字。

奇天烈な外見をしていると自分でも思う。

しかしこれは私の本来の姿ではない。

――私の名前はオータム・フォー。

この世界の神だ。

誤植や虚言などではない。

文字通りに神様。この世界「エリア」で絶対的な力を行使し、すべての事象を覆すことができる存在……それが私だ。

神様である私は、公園のブランコに揺られながら夜空を見上げた。

雲一つなく月が我が物顔で居座っていた。月光が公園内を照らす。私はこの公園でどれだけの人と出会い、そして忘れられていったことだろう。

人の歩みは日進月歩にして諸行無常。

１秒１秒を人は生きていて、完全に同じ存在はどの瞬間にも存在しない。

だけど月は見上げれば空にある。

分かっている。それも虚構だ。どこまでも飛んで行けそうで吸い込まれていきそうな夜空だが、決してある一定以上の高みに行くことを許さないだろう。

「エリア」は檻だ。
無限に続く地獄だ。
そして私は籠の中から抜け出すことを諦めた哀れな小鳥。

――　今日の月は血のように紅く染まっていた

……分かっている。また来たのだ。今回も……また来たのだ。私は紅い月から目をそらすことができなかった。

「……１５５００かいめの、おわりがくるにょ……」

私は体の異変を感じていた。
人形のように縮まっていた手足が伸び始めた。形すら定かではなかった手に指が生え、届かなった地面に足が着いた。私の体は成長していた。
分かっている。
なにせ１５５００回目だ。
気づいた時、私の外見は１０歳ほどの少女に近くなっていた。髪の長さは変わらず、俗に言うおかっぱに近い。胸の膨らみもほとんどないし、元々の私の体にはまだほど遠い姿だった。
数回手を握り締め、戻ってきたボディイメージを確かめる。伸びた手足は2頭身の謎生物ではなく、一端の少女のモノだ。動かしやすい体を私は手に入れた。
だが……喜ばしいことではない。
これは終わりの兆候なのだ。１５５００回目の。やがて１５５０１回目が始まり、私の体はまた縮むだろう。

「……キョウスケ」

彼の名前が口から零れた。
理由は分からない。
神様にだって分からないことはあるのだ。
ただ、零れたのだ　――……

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』
『エリア』には個性豊かな人間が沢山いる
楽しく愉快な仲間たちがアホな事件を巻き起こす日々
しかし終わりは唐突にやって来る……その先にあるものは　――

――神だって知らない……

スパロボ学院　～OGだよ、全員集合！～
鋼鉄の駄狼R　～序の終　終の序～

物語はある男の夢から始まる。

To be continued——……

鋼鉄の駄狼Ｒ　～序の終　終の序～（後書き）

シリアス編は普通の小説のように連載にします。
短編を書きあがったらコメディー編に更新する予定です。
指摘・感想・誤字脱字報告ありましたら感想掲示板かメールでお願いします。

鋼鉄の駄狼Ｒ　～迷いの国のアリス～（前書き）

長編は短編と違って１話１話が短くなると思います。
今回からあの男が登場！
頑張るのでよろしくお願いします！

鋼鉄の駄狼R　～迷いの国のアリス～

夢を見ていた　――……

俺の名前はキョスケ・ナンブ。

なぜか高校の密集する地域「エリア」1のマンモス高校、OG高（オリジナルジェネレーション）等学院、通称ジェネ高に通う高校3年生だ。

趣味はバイク弄りとツーリング。賭け事は趣味ではない。断じて違うと主張したい。

蛇足だが、俺は走り屋チーム「鋼鉄の孤狼（ベーオウルブス）たち」のリーダーをしている。根っからのバイク野郎、それが俺だ。好きな理由は分からない。だが好きなことに理由なんて必要だろうか？　嗜好の良し悪しの問答ほど無意味なものはないだろう……。

そんな俺だが、よく、夢を見る。

夢の内容はいつも同じ。目が覚めると霧がかかったようにおぼろげにしか思い出せなくなるが、夢を見始めると「あぁ、またか」と夢の中で嘆息する。そんな夢。

もちろん見るのは夢だから、その中で俺は手も足も出せない。ただ見ているだけだ。

内容を分析してみれば、悪夢、の部類に入る夢だろう。

――しかし……今日の夢は、俺の見慣れたそれではなかった。

見知らぬ男がコンクリートジャングルの中で腕を組み、瞑想している。

「そいつは重畳（ちょうじょう）」

赤いジャケットを着た若い男だった。

鍛え上げられた筋肉が逞しく、服の上からでも見て取れる。髪は黒髪だが、左のこめかみあたりに傷跡があり、その周辺だけが白髪と化していた。中途半端なモノクロ……というよりはアクセントになる程度の白髪が黒髪に交じっている状態だ。

冷静かつ寡黙な印象を与える男だったが……なぜだろう？　俺に既視感（デジャヴ）を感じさせる。そんな男だった。

男は見慣れぬ街にたたずんでおり、携帯電話らしきもので誰かと連絡を取っている。隣には金髪で小柄な少女が寄り添っていた。

「了解だ　――　小牟（シャオムゥ）、どうやら閉鎖地区から住民の避難は完了したようだぞ」

「やれやれじゃのう。のう零児（レイジ）、どうしてわしらばかりにお鉢が回ってくるのじゃ？」

小牟と呼ばれた金髪少女が外見とは裏腹な言葉づかいで返す。

まるで小さな村で、長老などの老人が話していそうな口調だった。

彼女が目指しているのはギャップ萌えだろうか？　だとすれば残念だったな。今のところ、彼女の言動には違和感しか沸いてこない。

少女の背丈は零児と呼ばれた男の肩ほどまでしかない。長い金髪を後頭部でまとめているが先別れしており、変則ポニーテールとなって数本の動物の尾のように見えた。髪の先は先は黒く染まっており、スリットが深くきわどいチャイナ服を着ている。キツネのような耳が目に栄えて飛び込んでくるがどうせ作り物だろう。

俺は、彼女にも、既視感（デジャヴ）を覚える。面識などない。雰囲気が俺の恋人エクセレン・ブロウニングに似ているからだろうか？

小牟が険しい顔つきで口を開く。

「森羅のパソコンでＢＬサイト巡りをしておったというのに、まったく空気の読めない『ゆらぎ』じゃ！」
「……」
「また沙夜の仕業かのぅ？　逢魔の奴らめ、まだ懲りぬと見える。いい加減、沙夜めとの腐れ縁を切っておかねば、オチオチ森羅オフィスでネットサーフィンに興じれぬではないか！」
「森羅の電子の妖精の正体、ここに見たり、だな」
「うるさいぞ零児！　やっと！　やっと、ぬしのそっくりさんが漢と絡んでいるＣＧを見つけたというに！」
「……帰ったら尻を百叩きだ」

零児は微動だにせず重い口で宣告した。
小牟は「ひぃぃぃぃ」と尻を手で隠して零児から離れる。頭のつけ耳が怯えたネコのように縮こまっていた。
零児は小牟を振り返ることなく目を開いた。視線の先は正面の巨大な横断歩道。大きな車道が十字に交差し、それを６本の横断歩道が横切っている。
交差点中央で交差している横断歩道……要するに交差点の中央部分が「ゆらい」でいた。
その様子は……なんと言うか表現しにくいな。水に工業用の油かワックスが浮かんでいるような感じ、だろうか？　水と混じり合うことはなく、モヤモヤっと奇妙な色が広がっているイメージ。
ただモヤモヤっとしているのは水面ではなく、交差点中央の空間なのだが……。

「揺らぎの調査をするのが、俺たち森羅のエージェントの任務だ」
零児が誰にでもなく喋りだした。
「だが揺らぎにも２種類ある。沙夜……逢魔が作為的に作り出した

揺らぎと、偶発的に自然発生した揺らぎだ。後者ならば、俺たちが手を下さずとも自然消滅することもある」

「零児、ぬしの勘はどっちじゃの？」

尻を隠しながら小牟が訊いた。

零児は頭の傷口を手のひらでなぞる。

「……傷口が痛むこともない。おそらくは後者、だな。ただ――」

「ただ？」

「寒気を感じる。この閉鎖地区に来たときからだ」

「なんじゃ、零児。ぬしもか？」

「ああ……こんなことは今までになかった」

零児と小牟の顔からはしわが消えることはない。

俺には理解できない会話だな。

雰囲気だけはエクセレンとの会話に似てはいる……だが内容は違う。俺とエクセレンの話には、今の零児と小牟のような寒気は感じることはない……。

寒気？

俺には感じられない。夢だからだろうか？　俺が寒気を感じるのは、借金の取り立てのときぐらいのものだ……夢の中でまで感じたくないものだが――？

……ん？　ちょっと待て。

なんだ？

これは？

俺の目の前で……いや、俺が見下ろしている零児たちの目の前で、異変は起こった。

「ゆらぎ」が増した。交差点中央で「ゆらぎ」は渦を巻き始め、中心には黒い穴のようなモノが浮かび上がってくる。

零児たちの声に緊張感が増していた。

「いかん小牟！　鬼門封じを急げ！」

「皆まで言われんでもわかっちょるわい！」

零児と小牟のやり取りの間にも「ゆらぎ」は増大していく。空間が「ゆらぎ」、光までも捻じ曲げられているのか。まるでミキサーで掻き混ぜられた食べ物みたいに風景が歪んで見えた。

中央の黒点は緩やかに、だが確実に成長していく。黒点が生み出す引力に周囲に転がっていた空き缶が引き寄せられ、中に飲み込まれた。人が黒点に吸い込まれた場合、どうなるのか俺には予想もつかなかった。

しかし、小牟は黒点に向かって一歩を踏み出していた。

「シャオムゥゥゥッ、ウエェェェイブッ！！」

小牟の右手から見えない力が放たれる。

見えない何かが巨大化する「ゆらぎ」を包み込んだ。小牟が手に力を込め、握りつぶそうとする。その動きに呼応して「ゆらぎ」が徐々に圧縮されていく……少なくとも、俺にはそう見えた。

「れ、零児ぃ　――」

気づくと、小牟の顔は苦痛に歪んでいた。

「――　だ、ダメじゃ！　わし一人の力では抑え込めん。こんな事は初めてじゃ！」

「悪い予感が的中したようだな。あの『ゆらぎ』は普通ではない！」

「も、もうダメじゃあ！」

弱音とともに小牟の右手が弾き飛ばされた。

弾ける音が俺の耳に飛び込んできたときには、小牟の腕は頭上へと持ち上がっていた。千切れてはいない。だが流血していた。

小牟が痛みに声を漏らした　――

――　刹那、「ゆらぎ」が膨れ上がる

押さえつけられていた反動か、もしくは元々それだけのキャパシティを内包していたのか……「ゆらぎ」の大きさは一気に数倍にまで膨張した。

周辺の物体を飲み込みながら、黒点も成長する　――　なんだ？

黒点のさらに中心に映し出されるモノが存在した。

町、に見えた。

どこか見覚えのある町が、黒点の中心で空から見下ろされる形で垣間見える。

「れ、零　――」

「小牟！？」

小牟の小さな体が黒点に飲み込まれた。

辛うじて黒点から伸び出ている細腕を零児はつかむ。全力で黒点

から小牟を引き上げようと零児は力を込めていた。足をつっかえ棒のように地面に立てて、剛腕を振り上げる。

「くっ……！」

だが小牟は零児の手から離れ、黒点に完全に飲み込まれた。零児の手に血のりが付着している。先ほどの流血で小牟の手が滑り抜けて行ったのだろう。

「シャオム　――！」

零児の声も途切れた。

一瞬……本当にものの数秒で、零児と小牟は姿を消した。彼らを飲み込んだ黒点は、まるで役目を終えたと言わんがばかりにしぼみ、すぐに見えなくなる。

残されたのは、アスファルトが抉り取られた交差点中央部だけだった……。

一体……この夢はなんだ？

既視感（デジャヴ）を覚える一組の男女と謎の「ゆらぎ」。彼らが「ゆらぎ」に飲み込まれ、静寂に支配された見慣れない街。そして、黒点に映り込んでいた、見慣れた町。

なぜだ？　俺がこんな夢を見ている理由はなんだ？

――　異分子が紛れ込んだ

突如、女の声が頭に響いた。耳で聞いている感じではなく、頭に音声が直接流れ込んでくる。

――排除することにしましょう……すべては平穏な世界のために……

抑揚のない声だ。機械的とさえ言える。
うぐっ、なんだ……？　急に頭痛が……！

――世界は繰り返され人は幸せを享受する……それでいい……

この声……どこかで耳にした覚えがある。
だが思い出せない……思い出そうとすると頭痛が酷くなる。
夢の中であるのに、俺の意識は闇へと引き込まれていく。起きている状態なら眠気と呼ばれる感覚だった。

――この世界に悲劇はいらない

その言葉を最後に、俺の夢に堕ちていった……よく見る、いつもの悪夢に……

●

俺の名は、有栖（ありす）　零児（れいじ）。特殊組織「森羅」のエージェントだ。

俺は「ゆらぎ」に飲み込まれた。

相棒の小牟も「ゆらぎ」の濁流に押し流されて既に行方不明だ。

「ゆらぎ」の圧力に負けて、腕を動かすことも難しい。

……また、どこかの世界に飛ばされるのか？

まったく、これで何度目だ？　人生でこうも「ゆらぎ」に巻き込まれるとは……呆れを通り越して感心してしまいそうになる……。

さて。悠長に物思いにふけっている場合ではなかったな。

どんな世界に出るのかは分からないが、兎に角、小牟と合流せねばならん。

「……やるか。有栖流　鬼門解放を」

鬼門解放……小牟の使っていた鬼門封じの逆バージョンだ。

「ゆらぎ」を強制的にこじ開けて外への道を作る術。まったく……こんな術、人生で1度でも使えばいい方だぞ。俺が鬼門解放を使うのはこれで2度目だ。

そして今回も小牟絡み……まったく世話の焼ける相棒だ。

……小牟の妖気を辿り、鬼門を開く。

この「ゆらぎ」は普通ではない。

成功率は楽観的に見積もって５０％、と言ったところか……分の悪い賭けは好きじゃないのだが……やるしかあるまい！

「待ってろ小牟。スグに迎えに行ってやる！」

俺は鬼門解放に取り掛かる。

To be continued——……

鋼鉄の駄狼Ｒ　～迷いの国のアリス～（後書き）

誤字脱字・感想・指摘など随時募集中です！
仕事の関係で更新速度には難ありだと思いますが、お付き合いいただければ幸いです！

鋼鉄の駄狼R　～キョウスケ・ナンブの散々な一日～

夢を見ていた　――……

今度は見慣れた夢だ。見慣れたかったわけではない。こんな悪夢、できれば二度と見たくはない。

だが子供が親を選べないように、人が見る夢を選べるはずもない。

起きれば内容もうろ覚えになってしまう夢だけど、この夢の内容は壮絶だった。

「なんでだ!?」

インターフェースを通じてリュウセイ・ダテの叫びが届く。

「なぜ、あんたがこんなことを!?　キョウス　――　!!」

リュウセイの声が途切れた。

先ほどまでリュウセイの顔が表示されていた画面では白黒の砂嵐が吹き荒れている。

夢の中の俺は、いつも、巨大なロボットのコックピットに乗っていた。

ロボットの名前はアルトアイゼン。

ドイツ語で「古い鉄」という意味らしい。不名誉な話だ。

だが俺の操る「古い鉄」によって、既に無数の鉄くずの山が築かれていた。

目の前でコックピットを潰されて横たわる巨大ロボットもその１つ……。

巨大ロボットの名前はＳＲＸ。リュウセイ・ダテら、ＳＲＸチームの乗る特機だった。ＳＲＸの胴体にはアルトアイゼンのリボルビングステークで風穴が開いており……パイロットは間違いなく即死だろう。

俺は仲間を殺したのだ。

強烈な罪悪感が俺の胸を締め付けてくる。共に戦ってきた仲間たちが、俺の手によって次々と屠られていく。

ブリット……ゼンガー……レーツェル……タスク……アラド……みんな、みんなみんな、俺が殺した。俺が、殺した。

殺したのだ。

悪夢のような光景が脳裏から離れない。

みんな「なぜだ!?」と口を揃えて訊いてきたさ。こちらが訊きたいよ。なぜ、俺は仲間を殺している？

「すべては静寂なる世界のために」

俺の口から言葉が漏れる。

だが、これは俺の言葉ではない。俺の体は自由が利かなかった。

……なにせこれは夢だからな。加えて言えば、三ツ星レストランも霞む程に飛び切り最上級の悪夢だった。

俺は手も足も出せずに仲間が駆逐されていくのを、指をくわえることもできず、見ているしかない。

しばらく殺戮を繰り返した俺の口は歪んでいた。

なんだ、こいつは？　俺、なのか？　俺は殺戮を楽しんでいると言うのか？

血しぶきの代わりにオイルが飛び散り、爆音が戦場を劈く。

俺の悪夢は終わらない。

いつも殺戮を繰り返し、やがて場面が急に変わるのだ。

「狼と言うより、外道にすぎるぞ、ベーオウルフ」

俺の眼下でソウルゲインに乗ったアクセル・アルマーが立ち塞がっていた。

場所はどこかの基地の内部。俺のアルトアイゼンは運搬用の通路いっぱいに巨大化し、格闘戦用の特機ソウルゲインに対峙する。

ソウルゲインの背後には巨大な機械の塊があった。それが何なのかは理解できない。ただ……アクセルはその機械を守るために、俺とアルトアイゼンに相対しているのは分かる。

「アクセル・アルマー」

俺の口を借りて、何者かがアクセルに語りかける。

「勝利、敗北、そこに意味はない。破壊されるか作り出されるか、創造は破壊、破壊の創造 ―― お前は箱舟とともに朽ちよ」

「化け物め」

「すべては静寂なる世界のために」

アルトアイゼンが両肩のクレイモアを発射した。指向性地雷によって打ち出されたチタン製のベアリング弾のスコールが、ソウルゲインの立っていた位置を撃ち抜く。

ソウルゲインは飛翔することでベアリング弾を回避していた。

「すまんレモン……約束は守れそうにない……」

アクセルの悲壮な独白が聞こえてきた。

空中に飛び上がったソウルゲインの両肘部に青い光が集まっていく。

「コード麒麟（キリン）！　リュケイオスと共に消えてもらうぞ、ベーオウルフ！」
「アクセル・アルマァー！」

超高密度なエネルギーを纏ったソウルゲインの肘と、アルトアイゼンのリボルビングステークが交錯する。鋭利な肘と屈強な鉄針。ぶつかり合う両者が火花を散らし。
リボルビングステークがソウルゲインを貫いた。
炸薬により腹部に刺さったステークが射出される。
単純な攻撃ほどいざという時に防ぎにくく、威力も高いものだ。
ゼロ距離からの一撃に、ソウルゲインの雄々しい体躯が真っ二つに裂けていた。上下に巨体を分断され、ソウルゲインは腹部を構成していたパーツを周囲に撒き散らす。

「俺の……敗けだ……」

アクセルの声だった。腹の底から絞り出すように俺の頭に響いてくる。

「だが、ただでは死なん……！」

上半身だけとなったソウルゲインがアルトアイゼンに組み付いてきた。残された全エネルギーを腕部回しているのか、アルトアイゼンの首をへし折らん剣幕で締め付けてくる。
夢の中の俺の顔が歪んだ。アクセルの足掻きをあざ笑うかのように口の端があがる。
だが、ソウルゲインをアルトアイゼンから切り離すことはできなかった。
俺はすぐに諦めたようだった。ソウルゲインは離せない。だがア

ルトアイゼンの指が鋭利な爪に変貌を遂げ、ソウルゲインの背中に深々と突き刺さっていた。
アクセルから悲鳴が上がった。だがそれも一瞬。
アクセルの咆哮が俺の耳を切り裂く。

「ベーオウルフ……共に死ねえええぇぇっ！！」

直後、アクセルがリュケイオスと呼んでいた機械が大爆発を起こした。
基地の内部で起きた爆圧と炎が逃げ場を失う。その殆どがアルトアイゼンに向かってきた。巨大な機械の自爆が生んだ圧倒的な破壊力に、アルトアイゼンの装甲は紙のように燃え崩れていく。

「アクセル・アルマー！」

夢の中の俺の声にアクセルから返事はなかった。
既に事切れたのだろう。ソウルゲインから人の気配は感じ取れない。
上半身だけになったソウルゲインは爆発にさらされる。爆発に耐え切れず、アルトアイゼンに密着したまま爆散した。それが最後の引き金となり、アルトアイゼンは崩壊し、俺の体は業火に包まれた。

「うおおおおおおぉぉっ！！」

蒸発。とまではいかないが、俺の体は一瞬で肉は焼け飛び、骨まで崩れ、血液は一瞬で沸騰した。即死。今まで仲間殺しを続けてきた俺に相応しい……惨めな最後だった。
だがこれは夢だ。
俺の見ている悪夢だ。
ここから俺は目を覚まし、夢の内容は風景をレースのカーテン越

しに見ているかの如く不明瞭になる。
何度も、何度も何度も繰り返される。それが俺の悪夢の常なのだ。

――救われない魂に救済を

だが今日の夢は違った。
また、女の声が俺の脳裏に響いてきたのだ。零児たちが黒点に飲み込まれたときの女の声だった。

――すべては平穏なる世界のために……

どういう意味だ？　俺には理解できない。分かるのは、これがただの悪夢であり、現実において微々たる意味も生み出さないことだけ。
もういい……早く目が覚めてくれないものか……そして、悪夢の内容も綺麗さっぱり忘れ、楽しいジェネ高生活が幕を開けるのだ。エクセレンたちとの素晴らしい日々。永遠に続いて欲しい、俺の宝物のような日々だ。
魂の救済？
俺には必要ない。
俺は幸せだ……今もこれからも、このままでいい。

しばらくして俺の意識は光に包まれて行った　――……

●

目を開くと、見慣れた天井が飛び込んできた。

「朝か」

染みが目立つ木目の天井は、以前雨漏りしていた部分にカビが生えている。間違いなく俺の家……愛すべきボロアパートだった。

畳敷きの6畳の和室に敷かれたせんべい布団の中で俺は目覚めた。俺は気持ち悪い寝汗をびっしりとかいていた。気持ち悪いな。朝風呂にでも入ってさっぱりとしたい気分だった。

「ふぅ……あんな夢を見るとはな……」

パジャマの袖で額を拭う。

先ほどまで見ていた悪夢を思い起こす。

俺がリュウセイやアクセルたちを皆殺しにする……悪夢以外の何ものでもない。アニメの中でしか存在しそうにない巨大ロボットに乗って、顔見知りを次々と虐殺する様は身の毛もよだつ悪夢だ。

しかもその時の俺の顔ときたら……まるで殺人狂のように顔を歪めていた。

夢で見る自分は、その人間の一側面を表していると聞いたことがある。俺に夢の中の奴のような残虐性が備わっていないと信じたいが……。

「ん……？」

俺は違和感を覚えた。

なんだ？　違う……今朝の目覚めはなにか違う……。俺の起きた部屋はいつもの自室だし、布団もいつものモノだ。だが違っている、そう感じている。

冷静に考えてみる。違和感の正体はすぐに判明する。

今、俺は悪夢の内容を覚えていた。

悪夢を見たということは覚えていても、内容はいつも靄がかかったかのように思い出せなかったのに……

「覚えている……今日は覚えている？　だがなぜだ？」

目を閉じて熟考する。俺に心当たりはなかった。この場合には残念と思うべきなのだろうか？

……まぁ、いい。

内容を覚えていようと、夢は夢だ。悪夢だろうと起きてしまえば夢はそこで終わり。終わったモノの原因を究明しても無意味だ。

俺は原因検索を中断し朝食を作ることにした。その方が有意義だ。今朝はトーストとブラックのコーヒーにでもするとしよう。

布団から抜け出すために手をついて腰を上げる。片膝をついて布団から出ようとした俺だったが、起き上がるためについた手に奇妙な感触を覚えた。

――むにゅう

「あん……！」

聞きなれた女の声が聞こえた。

マシュマロのような柔らかさで、手から零れ落ちる程の大きさの球体がそこにあった。まぁ、ひらたく言うとだな、俺が握っている

ものはおっぱいだった。それも超巨乳……その双頭龍の持ち主は俺の布団に忍び込んだ居候……なのだが。胸に触れられたことで目覚めたのか、彼女は鬼のような形相で俺を睨んでいた。

俺の全身から脂汗がガマのように滲み出る。

どうやら、悪夢はまだ続いているようだな。

「やあ、おはよう。いい朝だな、カグヤちゃん」

「いやあぁぁぁっ、パパのエッチイィィィッ！！」

――ジャキーンッ！！　スパァーン！！　ブシューー！！

悲鳴をあげる暇もなく、俺は記憶喪失の巨乳美人、ナンブ　カグヤに首を刎ねられていた。護式・斬冠刀が今日も華麗に振るわれ、俺の首が鮮血を吹き上げて舞い踊る……。

――どららどらどらららぁ～！！

擬音が聞こえ、俺の体は再生された。もう慣れた。慣れてはいけないはずだが、もう、慣れた。ふふ、枯れ果てた泉のように、斬殺されても俺の目から涙など落ちようはずもない……。

あぁ……俺にとっては、現実こそが悪夢なのかもしれん　――……

とにかく言えるのは、今日の目覚めは最悪ということだけだ　――……

鋼鉄の駄狼Ｒ　～キョウスケ・ナンブの散々な一日～（後書き）

やっと起きた主人公。
次回はジェネ高に登校だ。
この話は基本的にキョウスケの一人称で進みますが、所々他人の話が混じる予定です。

鋼鉄の駄狼R　～キョウスケ・ナンブの散々な一日　2～

なぜか高校の密集する地域「エリア」。
その「エリア」内で最大の生徒数を誇る高校こそがOG高等学院、通称ジェネ高と呼ばれる俺の母校だ。
朝から斬殺されたが、学校内で事件は起こらなかった。
今日も平和だ。いいね、実に結構。平和に勝る宝なしである。

「――　という夢を今朝見てな」

今日も平和に、ジェネ高の屋上で賭けポーカーをしながら、俺はタスクとアラドに言った。
タスク・シングウジとアラド・バランガ。
俺の悪友で、ギャンブル仲間の2人だ。
今朝の夢の話を2人に聞いてもらっていた。

「そりゃあまた妙な夢ですね、っと。そら、ストレート！」

タスクが手札を開示しながら言った。役はストレート。俺の話はスルーされているように感じるぞ。

「俺は死んでんの？　酷いっすよ、キョウスケさん！　俺の手札も酷い……2ペアだ」

アラドは勝ち目のない役を見せて、半ば投げやりに答えていた。

「その夢の中じゃ、キョウスケさんがみんなを倒しちゃうんすね？　もしかして、俺らに恨みでもあるんですか？」
「そういう訳ではないが……」
「だって俺、殺されちゃうんでしょ？　アラド・バランガ、暁に死す。俺のファンなら号泣ものの話だね」

残念なことに、アラドファンクラブの存在が風の噂になったことはない。
きっと奴の頭の中にだけある幸せなクラブなのだろう。俺は触れないでやることにした。

「それにしてもロボットですか。まさに夢って感じですね」
「？　なぜだ？」
「いや、だってですよ」

タスクが気持ち悪い笑みを俺に向けていた。
なんだ、この顔は？　俺の鉄拳で修正してやろうか？
……まぁ、それはさておき。タスクは近所の奥様方の井戸端会議のように「あら、奥様聞きました？」と言わんがばかりに、手をひらひら振って俺とアラドに話しかけてくる。

「ロボットですよ、ロボット。リアリティなさすぎますよ、その夢は。もしかしてキョウスケさん、隠れロボットヲタクですか？」
「失礼な奴だ」

機械いじりは好きな方だが、あくまでバイク限定だ。
ロボットヲタクという人種は、２年のリュウセイ・ダテという男だけで間に合っている。

「俺は走り屋だ。ロボットヲタクなんて2次元の住民と一緒にするな」
「ですよねぇ。キョウスケさんが『スーパーロボット命！』とか叫んでたら、俺は引きますわ」
「ぷぷっ」

おいアラド、貴様、なにを笑っている？
錯乱でもしない限り、俺がそのような言動をすることはありえない。

そもそも俺の見た夢のロボットは、未来から某ネコ型ロボットのような平和な代物ではなかった。
武骨な金属で構成された２０ｍ超の２足歩行人型兵器。人ひとりを簡単に踏みつぶせてしまう。巨大な金属の兵隊……いや、化け物。
それが俺の夢のロボットたちだった。
今の時代に巨大ロボットを作る技術はないだろう。
巨大ロボットが完成したというニュースをマスコミが逃すとは思えないからだ。マスコミが特集すれば俺の耳にも当然入ってくるようになるはずだからな。
そもそも、平和な時代に、巨大な戦闘ロボットを作る（作れるかどうかは別問題として）メリットがあるとは思えなかった。

「確かにリアリティのない話だな」
「そうでしょう？」

タスクが笑う。

「しかし夢自体のリアリティは強かったぞ。違和感も強かった。なぜ……今日に限って……？」

俺は手に持った手札に視線を落とした。

俺たちの賭けポーカーは「ジョーカー（切り札）」ありのポーカーだ。最強の役はジョーカーを含めた5カード。ジョーカーがある分、様々な役が完成しやすくなるが、5カードなど早々完成するものではない。

俺の手札は。

ハートの4。クラブの4。ダイヤの4。スペードの4。

そして切り札。

4444＋ジョーカー　――　4の5カードだった。

今日に限って……なぜだ？　俺は分の悪い賭けには滅法強い。生活困窮に追い詰められた事が多々あったが、一発逆転の手で何度も巻き返してきた。……逆説的に言えば、崖っぷちでないギャンブルには滅法弱い。それが俺だ。

しかし今日は追い詰められていない。フツーの日に、フツーに賭けポーカーをしているに過ぎない。

それなのに俺のヒキは強かった。

なぜ、今日に限って……？　引いた数字も不吉である。「4」……これがタロット占いなら「死神」か「逆さ吊り男」を連想しそうな数字だった。

今日の俺は馬鹿ヅキだ。

だから、嫌な予感がする……幸運と不幸は一枚のカードの裏表のようなものだ。この幸運を裏返すと、俺はどうなってしまうのだろうか？

「それでも所詮は夢っしょ？」

アラドが訊いてきた。

「気にする必要ないっすよ！　どんな夢だって朝になったら覚めるんだから、起きてまで夢に迷うよりも、俺たちは美味しいごはんを食べることにつとめるべきっす！」

いやはや、なんともアラドらしい言葉だった。
しかも的を得ている。
目覚めているのに夢に悩んでいてもしようがない。
今はこの幸運を享受するとにした。「では……」と、俺は手札を屋上の床に開示した。２人の顔色が一瞬で青ざめる。

「ファ、ファイブカードォ！？　俺の昼ごはんぎゃあああぁ――――？！」

２ペアのアラドが両手を投げ出し、

「ちくしょー、今日は馬鹿ヅキっすね」
「まぁな」

点数表を整理するタスクに俺は自信ありげに頷いてやった。
今日はカードが配布された時点で役が出来上がっていることが多い。
そのすべてが強い役ばかり。間違いなく、今日の俺は絶好調だった。

「さて、２人とも次はどうする？」
「「もちろん、リベンジ！！」」

アラドとタスクの声がシンクロした。
まったく、この２人は本当に仲がいいな。どちらも俺の可愛い弟分たちだ。それを夢の中で俺は……いや、もう考えるのは止めよう。
俺は、このギャンブル仲間の弟分たちからどれだけの額をボラレタだろうか？　偶には逆もいいだろう。今日は俺が攻勢に出る日な

のだ……。

今日の賭けポーカーは俺の圧勝だった。

賭け金替わりの美味しい昼食をいただき、午後の授業へと戻る……

――すべては静寂なる世界のために……

妙な声が頭の中で響いた気がした。

……結局、嫌な予感を拭い去ることはできなかった。

●

俺の名前はアクセル・アルマー。

なぜか高校の密集する地域「エリア」で、悪の巣窟として名高い影鏡（えいきょう）高校の3年をしている。

自分で言うのもなんだが、俺は、相当の悪だ。

巨大暴走族「シャドウミラー」の特攻隊長をしており、井戸端会議をしている奥様方たちから、後ろ指を指され噂になる程度には悪い男なのだ。

しかも悪いだけではなく、俺は強い。

俺は蒼髭流格闘術（ソウシリュウ）の免許皆伝。俺に敵う男は滅多にいないだろう。

俺は格闘家だからな。俺とまともに殴り合えるのは、同じ「シャドウミラー」でもウォーダン・ユミルぐらいのものだろう。

俺は強い。だから許せないのだ。

「ベーオウルフ」

影校の教室で机に脚を放り出して、俺は仇敵の名前をつぶやいていた。

ベーオウルフ――本名はキョウスケ・ナンブ。俺の幼馴染で、小さい頃は蒼髭流格闘術（ソウシリュウ）の道場に通っていた仲だ。

俺は、ベーオウルフに勝ったことがない。

最初に敗けたのは、幼い道場にいた頃だ。急にベーオウルフが暴れだし、道場の大人たちすら叩きのめして道場を辞めてしまったときだ。俺はとばっちりを喰らって初の黒星を刻まざるを得なかった。

強さは、男の価値を決める重要な要素だ。

だが未だに敗けを返せずにいる。俺には許せないのだ、これがな。

しかし……なにより許せないのは、ベーちゃんが俺を倒したときのことを、一切覚えていないことだ。

記憶喪失？　いやいや、どちらかと言えば、ベーちゃんの場合は二重人格のようなものだろう。俺が敗北を続けているのは、ベーちゃんのもう一つの人格なのだ。

だからどうした？　俺がベーオウルフに敗れている事実は変わらない。

次こそは勝つ。

それだけさ、これがな。

「さ～て、今度はどうやって誘き出してやろうかな～？」

俺は聡明なる頭脳をフル回転させた。

……ちくちくちく、ぽ～ん！

思いついた。やはり、恋人のエクセレン・ブロウニングを誘拐することにしよう。やはり男を誘き出す王道はお姫様か恋人の拉致と相場が決まっているだろうぜ。
俺は悪人だからな。
誘拐ぐらいなんともないぜ！

「待っていろ、ベーオウルフ」

太陽を背中に受けた俺は最高に決まっているに違いない。
今度こそ俺が白星を飾るときだ。
俺はスキップを踏みながら、影校の教室を後にした　――……

鋼鉄の駄狼Ｒ　～キョウスケナンブの散々な一日3～

結論から言おう。
存外はやく、俺の嫌な予感は的中した。

タスクたちとの賭けポーカーの後、食堂で勝利の食事を終えた。
俺は学生なわけだから、サボタージュでもせぬ限り、午後の授業には出なければならないわけで。
授業を熱心に受ける……なんて情熱を、俺が持ち合わせているかというと、答えはＮｏなわけで。

……至極当然かつ自然な成り行きで、授業の内容は耳を右から左へと通り抜け、内容なんて欠片も頭には残っていなかった。学生の悲しい習性かな。板書だけはノートに写し取っていたが、教科書のどの点を要約したものかまでは覚えていない始末である。
ま、何事もない日常だ。
俺は非日常が日常な毎日に憧れたりしない。俺にとってのスパイスはバイクとささやかなギャンブルで十分だ。あとはエクセレンたちとの日々が続けば万々歳である。

「じゃあキョウスケ、先に駐輪場で待っててねん」
「わかった。では、またな」

教室でエクセレンと別れて一足先に駐輪場に向かう。
期末テストという現実から目を背け、俺はエクセレンとランデブー（ツーリング）に出かけることにしていた。愛機アルトアイゼン・リーゼ号を駆り、今日も峠をせめる予定である。

廊下ですれ違う級友たちと挨拶をかわし、玄関口で外履に変えた。
マンモス校であるジェネ高の駐輪場は広大だ。自転車が２００台は置ける広大な敷地に俺のリーゼ号もある。バイク通学を許可していない高校もあるそうだが、自由気ままに、がジェネ高の校風だ。
要するに生徒の好きにしろ、という事で、生徒指導などはかなりおざなりだった。
ま、おかげでリーゼ号で通学できるのだ。
俺としては文句の付けようなどない。

「今日も頼むぞ、リーゼ号」

リーゼ号の傍まで寄り、炎のように紅いボディをなでる。日頃の整備の甲斐もあって太陽の光を反射する光沢が美しい。
今日も峠をブッ飛ばしてやろう。
しかし、エクセレンが来るまで少し時間がかかりそうだ。
やることがない。携帯を数分弄ってみたがすぐに飽きた。年がら年中携帯電話をいじっている生徒もいるが、俺にはその良さがあまり理解できない。要件は電話で済ます俺には、メール交換でのコミュニケーションは面倒でならないものだ。
手持無沙汰に、リーゼ号が照り返している太陽を見上げた。

「――　うひゃ　――――」

空から、声が聞こえてきた。
空から声？　不思議に思い、手で日よけを作りながら目を細める。
本日は雲一つない日本晴れで太陽がギンギラギンに自己主張しているのだが……はて？　太陽の一部が黒く塗りつぶされていた。◎の中円を黒く塗りつぶしたように太陽が見える。
日食か？　そんなニュースは聞いていないが……黒い円は次第に大きくなっていく。……よく見れば日食ではない。太陽と俺を結ん

だ空中に黒い穴が開いている。そのことに気付くのに時間はそうかからなかった。

「うひゃあああぁぁ　――　！！」

聞き覚えのある悲鳴とともに。

――　金髪の少女が、空から落ちてきた！？

それも俺に向かってだ。

女？　なぜ空から？　それよりぶつか　――

「危なっ　――　うぐっ！」

「あ痛ッ！？」

直後、視界に火花が散った。頭にも激痛。降ってきた少女と俺の頭が、何の因果か衝突したのだ。

なんだって俺にぶつかる？　そこらの自転車をクッション替わりに突っ込めばいいのに……む、金属では緩衝剤の代わりにはならんか。一瞬だけ冴えたように思えた思考だったが、すぐにホワイトアウトし、俺は駐輪場の地面に尻もちをついてしまっていた。

痛い。朝からそうだが、もしかすると今日は厄日なのではあるまいか？

「まったく……」

予期せぬ頭突き合戦により、落ちてきた金髪少女は目を回して潰れたカエルみたいに伸びていた。頭には漫画のような肌色のこぶができている。どうやら、俺は相当の石頭らしい……。

「……一体……なんだと言うのだ？」

空から人が降ってきたぞ？

古来より空から降ってくるものにはロクなモノがない。

飛行石を持って落ちてくる少女しかり、黒魔法で呼び出される巨大隕石しかり。昔のアニメだと、空から宇宙船と美少女が落ちてきて主人公がトラブルに巻き込まれるなんてのもあったな。

エンディングは知らないが、空から落ちてくるモノにロクなモノはない（断言）。

トラブル臭が芳香剤よりも強烈に湧き上がってくる。非日常への片道キップに違いないぞ。

「レ……レイジ～……」

目を回している少女のうわ言だった。

……零児？

聞き覚えのある名前だった。遠くない時分に、少女の声を耳にした気もする。

ビンビンに反り返る悪い予感に導かれ、俺は少女の姿を見た。

貧弱な胸板を補うように、太ももまでスリットの入った際どいチャイナドレスを着た少女で、九尾のキツネの尾のように枝分かれしたポニーテールと……ぴくぴくと動いている三角形の耳がついている。

どうせ耳は作り物だろう？

コスプレイヤーが空から降ってきた。と、終いを付けられれば良かったのに……俺は、このコスプレ少女に見覚えがあった。

その金髪少女は。

……夢の中の金髪少女　――　小牟（シャオムウ）だった。

「なぜ、こいつがここにいる？」

俺の夢の中の住民、小牟。
悪夢の内容を覚えていた俺だったが、悪夢の前に見ていた夢もクッキリと脳に刻み込まれている。忘れるはずもない。見知らぬ街にいた2人組の片割れで、「ゆらぎ」の中の黒点に飲み込まれて消えた少女だ。
夢の中の登場人物が現実に登場するなど、常識で信じられるか？
俺には無理だ。
あの夢が正夢や予知夢の類だと仮定しても、目の前で小牟が倒れている事実は揺らぎようがない。
……だが、放置すると罪悪感に苛まれそうだ。
小牟の肩を軽く揺すってみた。

「う、うぅ……」
「むっ、もう少しで起きそうだな」

うめき声をあげていたので、俺は小牟の首根っこを掴んで持ち上げ、頬を叩いてみる。

「おい。起きろ小牟。もうすぐ夕方だぞ」
「うぅ……零児、やめんか。わしが魅力的だからと言って、あぁ、そんな……！」
「淫夢を見てる場合か。早く起きろ」

エクセレンがもうすぐ来てしまうぞ。今日はツーリングに行くのだから、正体不明の小牟の相手なぞしてられないのだ。
だからさっさと起きろ！

「はっ、ここは誰じゃ？　わしは何処じゃ？」
「古典的なボケはいらん。早く夢の中に去れ。でなければ失せろ」

金髪。それでいて小柄な美少女……現実的なエリアに住んでいて非現実的な少女がそこにいた……

反射的に飛び出た俺の言葉は、断じて非現実的なものではないだろう。

……まったく、俺はこれからエクセレンと楽しい時間を過ごすと言うのに……

……俺のいやな予感だけは……無駄に的中するものだ――

ちなみに、これが……俺と小牟の……現実における出会いだったのは言うまでもない……

……ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ――

鋼鉄の駄狼Ｒ　～キョウスケナンブの散々な一日3～（後書き）

久しぶりに更新できました！

これからも時間の許す限り頑張りますのでよろしくお願いします！

鋼鉄の駄狼R　～空から降ってきた幼女～

空から金髪幼女が降ってきた。

幼女の名前は小牟（シャオムウ）。

俺……キョウスケ・ナンブの夢の中に出てきた少女だった。

「むぅ……零児。ここはいったい何処じゃ？　わしは何故このような所にいる？」

「知るか」

空から降ってきて俺にぶつかってきた小牟に言ってやる。

「俺はこの後、エクセレンとツーリングに行く予定なのだ。お前の都合など知らん。

空に　――　いや、夢の中に帰れ」

「もぅ、零児はいつもつれないのぅ。そんなんじゃ、わし、愛想尽かしてしまうぞ？」

小牟が片目を閉じて視線（ウィンク）を送りながら、俺に向かって言ってきた。

零児。

有栖　零児……今朝の俺の夢に出てきた男の名前だ……俺に似ている外見をした男……。特徴的な左こめかみの白髪に、俺が愛用しているような赤いジャケットを着ていた。中々の男前だったが、俺の方がイケメンだったと断言しよう。

だが、それも俺も夢の中で、の話だ。

ここは『エリア』、何故か高校の密集する地域……現実の世界で、夢と違って俺の体も自由になる。

だから言ってやるのだ　――

「――　零児じゃないっつーに」

いや、本当にね……

スパロボ学院　～OGだよ、全員集合！～
鋼鉄の駄狼R　～空から降ってきた幼女～

ジェネ高の駐輪場で「夢で見た金髪幼女」　――　小牟が降ってきた……

……憑いてない。いや、全くもってついていない……これから、恋人エクセレンとツーリングに行く予定だったのに。

「おい、小牟」

「なんじゃ、零児？」

零児じゃないっつーに。

俺の声かけに小牟が自然に返してきた。まぁ、客観的に見れば俺と有栖　零児の外見は確かに似ている……だがが相棒をごく自然に間違える小牟の空気は、どこかエクセレンに似ている。

２人ともやや天然成分が入っている。というところが、特に似ているな。

……まぁ、いい。

現在、俺が最優先ですべきことは小牟を傍から遠ざけることだ。

カグヤちゃんの時に分かったことだがエクセレンは意外に嫉妬深

い。
エクセレン似の小牟が傍にいることは、エクセレンの中にあるみょ～なスイッチを押してしまうことになりかねん。
冗談じゃない。俺はエクセレンが好きなのだ。愛しているのだ。
エクセレンとの間に亀裂を入れかねない要因は……この際だからはっきり言おう。
俺はご免こうむる！

「おい、さっさと失せろ」
「むむ、いつから零児はツンデレになったのか？　仕方あるまい。寂しいのなら、わしがずっとそばに居てやるから安心せい」

小牟は、突き放す俺の言葉に相対し、腕を回して俺に抱きついてきた。
空耳にしても性質が悪い。駐輪場で転んでいる俺に小牟が抱き着いている構図は、俺の主観で見れば迷惑極まりないだけでしかないが、客観的に見れば俺が小牟に押し倒されているようにしか見えないだろう。
勘弁してもらいたい。

「ええぃ、離せ！」

俺の答えに小牟が反応する……

「零児の恥ずかしがり屋め。折角、助かったのじゃ。互いの無事を祝おうではないか？」
「だから零児じないっつーに」
「本当に零児は恥ずかしがり屋じゃのう。ほれ、いつものようにしてもいいのじゃぞ？」
「だからぁ、零児じゃないっつーに！」

「零児ぃ……」
「無意味に切なげな声を出すな。喋るな。失せろ」
「あぁん、零児の行けずぅ……」

のれんに腕押しとはこのことだな。
キツネのようなつけ耳をした幼女の口撃を、俺は説得することができなかった。小牟はまだ俺に抱き着いている。
きっと、これは俺の推測にすぎないのだが……空から降ってきて俺とぶつかった衝撃で、一時的な記憶の混乱が起きているのではなかろうか……？　我が家の居候　――　カグヤちゃんのようにな。
……しょうがない。記憶の件は時間がそのうち解決してくれるとして、だ。

「とにかく、離れろ」
「嫌じゃッ！！」

小牟め、腕の力をさらに強めて抱き着いてきやがった。
厄介な。とにかく引き剥がさなくて　――

「キョウスケッ？！」

――　その時だった。

……エクセレンの声が聞こえたのは。
恐る恐る振り返ると、腰をついて小牟に抱き着かれている俺を、青筋を立てて笑っている見下ろしているエクセレンがいた。

「違うんだ、エクセレン」

開口一番の俺の言葉は否定から始まった。もしかして、俺はヘタレの部類に入るのだろうか？

身の潔白の証明。

そして俺の愛。

それを示すには、今の俺の言葉は短すぎた。

途端に、エクセレンの双眸が猛禽類のそれのように見開かれていたからだ。

「何がよ！？」

主語がなくても意味は分かる。

「だ、だから――」

「キョウスケの……キョウスケの浮気者――――ッ！！！」

「待て！　エクセレン！」

エクセレンは絶叫すると俺から背を背け、つい最近手に入れた（喋る？）バイクに乗る。エンジンキーを回すこともなく、そのバイクのエンジンは唸りをあげた。

涙を溜めたエクセレンは俺を睨み、

「キョウスケのぉ、ヴァッッッカァァァァ！！！」

「待ってくれぇぇぇ、エクセレェェェーーンッ！！」

俺が救いを求めるように出した手を無視して、彼女はバイクの排気塔から轟音をあげて、ジェネ高の駐輪場から走り去ってしまった……。

すぐに駐輪場の自転車・バイク・人ごみに紛れてしまう。残された俺は一瞬だけ生徒たちの視線にさらされたが、ただの痴話喧嘩と

思われたのか生徒たちの目からは解放された。
……俺は駐輪場で尻もちをついて……勘違いの原因である小牟に抱き着かれたまま……。

「のぅ、零児？」

小牟が胸元で声を上げた。俺を零児と疑わぬ真っ直ぐな眼差しだった。

「あの女子（おなご）は何じゃったのかのぅ？」
「……だから、零児じゃないっつーに……」

やってられない……昼休みの大勝をすべて帳消しにするように、圧倒的な不幸だった……。
やはり俺は分の悪くない賭けには滅法弱い。
エクセレンの誤解をどうやって解こう……このときの俺は小牟に抱き着かれたまま、そのことばかり考えていたのだった ――……

鋼鉄の駄狼Ｒ　～空から降ってきた幼女～（後書き）

シリアス編は１話１話が短いです。
次回もこの話が続きます。

鋼鉄の駄狼R　～空から降ってきた幼女　2～

なぜか高校の密集する地域「エリア」。
その商店街にある全国チェーンの某有名にカフェにて。

「いやぁ、悪いのぅ零児」

俺の対面に座った小牟（シャオムウ）が顔をほころばせながら礼を言ってきた。
店内は中々に広い。俺たちが座っているのはその中の角にある小さな席で、互いに向き合う格好で座っている。
カウンターで注文したブラックを一口含むと、上品な香ばしさと苦みが俺の鼻と舌を刺激する。愛用しているインスタントコーヒーとは一線を隔している味だった。
あとな、蛇足だが付け加えておく。知っていると思うが、俺は零児ではないぞ。
ジェネ高の3年生、キョウスケ・ナンブだ。

「小牟、いくつか聞きたいことがある」
「なんじゃ、スリーサイズか？　零児は相変わらずむっつりさんじゃのぅ」

小牟がキャラメルマキアートを飲みながら茶化してきた。
……まったく、何なのだこの女は？
俺の夢の中に出てきて、空から降ってきて、エクセレンには誤解されるし……駐輪場からこの店に場所を移したのも、俺を零児と勘違いして抱き着かれたままでは、ジェネ高生徒の視線を集めて仕方ないからだった。
我が家のカグヤちゃんしかり、空から降ってくる女はロクなものがないな。

やはり小牟は厄介事の塊だ。俺はエクセレンとの日々を謳歌していた。小牟となんて関わり合いたくなかった。頭突きをしあっただけの間柄なのに……愛するエクセレンには邪推されて関係を誤解されてしまう始末……。

電話を入れても出てくれない。

誤解だ！　それをエクセレンに分かってもらわないといけない。

そのために小牟には協力してもらわないとな。

あと俺は零児じゃないっつーに。

「なぁ小牟。何度も言うようだが、俺は零児ではないのだ。俺はキョウスケ・ナンブ、お前となんの関わりもない一般人だ」

「そうじゃのぅ。確かにぬしからは霊力を感じぬ。ぬしのいう通り、ぬしは零児ではないかもしれん」

おぉ、分かってくれたか。

「それに零児はわしをカッフェに連れて行ってくれるような男ではないしのぅ。あのむっつり男はケチじゃから。旨いものを食したければ自炊するしかないのじゃ、可哀そうな小牟ちゃん」

「そうか。しかし今は零児のことは置いておこう。小牟、お前はいったい何者なのだ？」

俺が小牟に尋ねると、

「零児、ぬしはいったい何者なのかの？」

小牟は質問に質問で返してきた。人の質問には答えようぜ。しかもキョウスケではなく零児呼ばわり。零児じゃないっつーに……もしかすると名前を覚える気がないのかもしれないな。

「自己紹介なら先ほど済ませたはずだが？　おい小牟、俺の名を言ってみろ」
「零児。人の呼び名に意味などない。大事なのはその人の人となりはずじゃ」
「知るか。俺の名前はキョウスケ・ナンブだ」
「それより零児」
スルーかよ。零児じゃないっつーに。
「何故ぬしはわしの名を知っておった？　名乗った覚えはないのじゃが」
「あぁ、そのことか……」
正論だな。俺が空から降ってきた小牟の名前を知っていることは不自然でしかないだろう。
小牟にしてみれば、落ちた先に自分の名を知る、知り合いに似た他人がいるわけだから気味が悪いと思う。
俺が小牟を知っているのは夢に出てきたからだ。それを口にするのも荒唐無稽な気がして腰が引ける。だが夢のことを語らずに説明するが難しいのも事実。
俺は小牟に夢のことを話した。
「なるほどのぅ……」
小牟は飲み干したカップを置き、腕組みをして眉をしかめている。
「面妖な。ぬしの夢の内容は、まさしくわしらの体験した出来事そのものじゃ」
「やはりそうか……」

夢と現実が奇妙な線でつながった。
いや、だからどうした、という話ではあるのだが。俺の眼前にいる小牟は白昼夢ではなく実像だ。夢から出て、空から降ってきた少女……この時点で俺の理解の範疇を超えているのは言うまでもない。
あぁ、そうさ。トラブルの匂いがプンプンするね。
小牟は独り言で、自分なりの見解を述べていた。

「『エリア』と言ったかの？　おそらくここは『物質界』とは別の世界じゃろうて。『ゆらぎ』に巻き込まれて放り込まれたのは間違いない……じゃが、問題は……」

小牟が俺の目を見つめてきた。
妖艶な瞳だ。外見に不相応な落ち着いた空気を持った視線が、俺を上から下まで観察する。

「よく、似とるのぅ」
「それはこちらのセリフだ」

小牟は俺が有栖　零児という男に似ていると言いたいのだろうが、彼女だってエクセレンにそっくりだ。
体格は確かに似ていない。エクセレンは長身で胸があるのに対して、小牟は小柄な寸胴体系。だが顔つき・と髪の色、何よりも身に纏っている雰囲気が瓜二つだった。
楽天的……とでも言うのだろうか？　周りを巻き込んで明るく楽しくしてしまう。そんな感じ。まるで同一人物のように二人ともそれを持っていた。

「先ほどの女子（おなご）のことかの？」
「ああ」
「むー、確かにわしによう似とったのぅ。じゃがな、わしの美貌の

方が一枚上手よ」
「ふっ、勝手に言っていろ」

思わず口元が笑ってしまっていた。ブラックを飲むと、ホットだったそれは温くなってしまっていた。結構話し込んでいたいたらしく、外は暗くなり始めていた。

「まぁ、ただの偶然じゃろうて」

俺の有栖　零児そっくりさん疑惑は、たった一言で片ずけられた。外も暗くなり始めていることもあったので俺たちは退席することになる。

会計はもちろん俺。小牟が言うように、彼女が「物質界」とかいう夢の中から来たのなら、「エリア」で通用する貨幣を持っているはずがないからな。

財布の中から残り少ない紙幣が一枚飛んだ……所詮、飲み物2杯なのに、どうしてこんなに高いのだろう？　それでいて人が入っているあたり、さびれた商店街の店にとっては天敵と言ってもいいカフェなのだろうな。

「それより零児」

店を出たところで小牟が声をかけてきた。

「飯はまだかのぅ？　きつねうどんなんかいいと思うんじゃが」
「ちょっと待て。食事まで俺にたかるつもりか？」
「当然じゃろう」

小牟は小さな胸を威厳たっぷりに突き出して宣言した。

「頼る者もいない異世界に迷いこんだか弱い美少女を零児は見捨てるのか？　零児がそんな男だったとは思わなんだ！　わしは情けなくて涙がでるわい！」
「大声を出すな」
「わしはそんな男に育てた覚えはないぞ！」
「安心しろ。俺もない」
「嫌じゃ！　わしはきつねうどんが食いたいのじゃ！　食わせてくれるまで死んでもここから動かぬぞ！」

小牟が某有名カフェの入り口に座り込んだ。……なんというはた迷惑な。まるで駄々をこねた子供だ。有栖　零児……よくこんな女の世話を焼いていたな。
尊敬に値するぞ。

「分かった。飯は食わせてやるから立て。他の客の邪魔だ」
「本当か零児！　嘘ではあるまいな？」
「うるさい。カイ〇に誓ってもいい。俺は嘘など言わん」

そうさ。俺は本当のことしか口にはしない。ただし金はないから、スーパーで買ったカップ麺を俺のボロアパートで食わせることになるがな。
飯は食わせる。だがそのお返しに、エクセレンの誤解を解く手伝いをしてもらうことにしよう。

「では行くか」
「うむ。ではしっかり道案内を務めるだぞ、零児」
「だから零児じゃないっつーに」

このやり取りも何回目だろうな？　慣れた、というより妙に口癖になりそうなフレーズだ。小牟とこうして話すのは嫌な気分ではな

かった。
店外に停めていたアルトアイゼン号を押しながら、ボロアパートへの帰路に着く俺と小牟。
茜色の夕日が「エリア」を美しく染め上げていた。見慣れた美しい風景 ―― 俺の日常だった。
今日は突拍子もないイベントがあったのは間違いないが、明日はエクセレンの誤解を解いて仲直りしたいものだ。
自宅に近づくにつれて日が落ち、視界が薄暗くなっていく ――

―― すべては静寂なる世界のために ――……

頭の中に声が響いた気がした。
男の声だった。
しかし傍で小牟が喧しく話しかけてくる。きっと声も間違えだろう。女の話声は時々金切声のようにうるさくて堪らないものだしな……

空に浮かぶ月の色は黄金色、ではなかった。
血のように紅い満月。気味の悪い夜空が気になりつつも、俺は自宅へと早足で向かうのだった。

鋼鉄の駄狼R　～空から降ってきた幼女　2～（後書き）

場面がジェネ高からカッフェに変わってます。
店内はスタバとかでも想像してもらえると助かります。
次回はキョウスケのボロアパート。
書けるときにしか小説書けないので、更新は不定期ですが、読者さんには感謝しています。感想や誤字脱字の報告なども待っています。

蛇足。
スパロボZの発売日が近づいてきましたね。
発売日延期にならずに発売されそうですね。購入したら、自宅にいる時間をすべてゲームに割きそうです。小説の更新もさらに遅れそう……。
でも個人的に楽しみです！

鋼鉄の駄狼R　～空から降ってきた幼女　3～

俺、キョウスケ・ナンブが自宅であるボロアパートに到着したのは、日が落ち切り月が空に輝く頃合いだった。

風呂・便所付き格安賃貸アパートが俺の寝床だ。

2階部分に上るための階段は赤錆で覆われ、一歩住みだすたびに悲鳴をあげる。通路を照らす電燈の光も息も絶え絶えだし、金さえあればさっさと抜け出したくなる古めかしさだった。

むっ、古めかしいという表現は、どこか品がありそうで少しいかんな。

「うわぁ、本当にボッロいのぅ」

「うるさい。文句があるのなら家には上げんぞ」

我が家を見た小牟（シャオムウ）の感想に俺は腹立たしさを覚えた。

何も声に出して言わなくてもいいだろう？

ボロいのは分かっているのだからさ。しかし住めば都という言葉があるように、贅沢を言わなければ暮らす分にはさして問題はないのだ。

錆びた階段を上る俺の後を小牟はちょこちょこ着いてくる。

盗られる物なんて何もないので自室に鍵はかけない。家探しされようと、アルトアイゼン号さえ無事ならそれでいい。俺がドアノブを捻ると、扉は何の抵抗もなしに俺たちを迎え入れてくた。

「お帰りなさい、パパ！」

同時に、最近になってやっと聞きなれた女性の声　――　カグヤちゃんの声がした。

今日も際どい服装でカグヤちゃんが俺を出迎えてくれた。カグヤちゃんは我が家に勝手に絶賛居候中の女性で、小牟同様に空から降ってきた（!?）文字通り厄介事の塊だった。

彼女の斬殺ぶりに俺は　――　ガクガクブルブルッ　――　ま、まぁ、その話はまた今度の機会にするとしよう。

とにかく挨拶は大事だ。俺は返事を返すことにした。

「ただいま、カグヤちゃん。飯はもう食べたか？」

「ううん。パパを待っていたからまだです。お腹が空いたこと極まりないのです！」

カグヤちゃんは元気いっぱいに答えてくれた。その姿は実に魅力的な女性に違いないだろう……これで刀さえ振るわなければなぁ……まことに遺憾でならない。

「では飯にするか……あ、そうだカグヤちゃん。実はな、今日は客がいるのだ」

「お客さんですか？」

首をかしげるカグヤちゃんに背後にいる小牟を紹介しようとすると　――

「おっす、わし小牟！　腹が減ったぞぉ！」

――　小牟は自ら進んで前に出ていた。

玄関口で小牟とカグヤちゃんの視線が合う。

「あ、あれ……？」

カグヤちゃんの口から名乗りは上がらなかった。代わりに細指をこめかみに当てて唸りだした。

なんだ？

確かカグヤちゃんは記憶喪失だったな。もしかすると、小牟の顔を見て何か思い出しそうなのかもしれん。

一瞬の沈黙。しかしこの沈黙は数秒しか持たなかった。

「む、ぬしは牛乳姫ではないか？　何故、このような所におる？」

「ほぇ？　貴方は私を知っているんですか？」

「なんじゃなんじゃ、若干天然入っとるとは思っとったが早くも呆けたか？　この齢７６５歳の仙狐にして森羅の美少女エージェントであるこの小牟を忘れたとは言わせんぞ」

小牟がカグヤに詰め寄りながら捲し立てる。

……なんだ？　さっき会話から察するに２人は知り合いのようだが……齢７６５歳？　仙狐？　嘘くさい単語が飛び出してきたが、どうせ眉唾だろう。小牟の頭に乗っているつけ耳と同程度に信憑性のない話である。あとどうでもよくないが、玄関から廊下に上がるときには靴は脱ぐように。

「うーーん……あっ」

「ふふん、思い出したようじゃのぅ」

ぽんっ、と手を叩いて見せたカグヤちゃんに、小牟は得意げな笑みを浮かべていた。

「やっぱり、思い出せないこと極まりないですぅ」

「ズコ――――ッ！」

「ふむ、見事なズッコケだな」

カグヤちゃんの答えが余程肩すかしだったのか、小牟は床に頭から滑り込んだ。弩理府（ドリフ）も真っ青のズッコケだった。コケタ拍子に靴も脱げたので、俺的には１００点満点をプレゼントしたい所だが……

「なぁ、カグヤちゃん」
「なんですか、パパ？」
「本当になにも思い出せないか？　このような１人漫才師はそうそうお目にかからないと思うのだが……」
「１人で悪かったのぅ！　わしにだって相方ぐらいおるわい！」

有栖　零児のことか？　小牟のような万年ボケ娘の傍に居ると延々とツッコみを続ける必要がありそうだ。……俺の周りもボケが多いからとても他人とは思えないな。外見が似ていると境遇も似通ってしまうのだろうか……まぁ、いい。

「どうだ？　何か思い出せるか？」
「うーん、この辺りまで名前が出かかっているんですけど……」

カグヤちゃんは自分の喉元あたりを指さしていた。顔をしかめて唸っている。なるほどな、小骨がのどに引っかかっているような感覚なのだろう。
気になって仕方ないだろうが、そんな時に熟考して、思い出せたためしは俺はないな。

「気を落とすなカグヤちゃん。そのうち思い出すだろう。それに、何はともかく腹が減った。飯にしようじゃないか」
「おお、流石は零児じゃ！　待ってました！」

いつの間にか、ズッコケていたはずの小牟が居間のちゃぶ台に陣

取っていた。……いつの間に。食い意地張っているというか何と言うか。あと、俺は零児じゃないつーに。

「私もお腹が空いたこと極まりないです！」とカグヤちゃんも言うので、俺は台所の戸棚を開けて目当てのモノを探すことにした。その間、２人はちゃぶ台で談笑している。

「おっ、あったあった」

戸棚の奥は暗かったため探すのに難渋したがブツを入手することに成功した。

「待たせたな」

「おお、きつねうどんじゃ！　待ってました　――　って、おい零児。なんじゃこれは？」

俺が両手に持っているブツを見て小牟が眉をしかめて訊いていた。

「カップ麺だ」

「なんじゃと？」

「ご要望通り、真っ赤なきつねだぞ。カグヤちゃんには真っ青なタヌキだ」

「わーい、ありがとうパパ！」

カグヤちゃんは無邪気に真っ青なタヌキを受け取ってくれた。蛇足だが、長期間放置しすぎて賞味期限はメルトダウン寸前だと思うが、あえて言わない。

一方、小牟は不満げに頬を膨らませていた。

「なんだ。文句でもあるのか？」

「当たり前じゃ！」

えらい剣幕でちゃぶ台をバンバン叩いて講義してくる。

「見損なったぞ零児！　ぬしはきつねうどんの何たるかを全く分かっておらん！

魚介で取った出汁の中に喉ごし爽やかでコシのあるうどん、そして！　甘辛い汁で煮た油揚げ！　あぁ、この神秘のハーモニーをカップ麺程度で再現できると思っておるのか！？」

「パパぁ、お湯は？」

「待ってろ。今沸かすからな」

「スルー！？　このわしを無視するとはええ度胸じゃ　――」

小牟が背後でなにか喚いていた。ギャアギャア叫んでいるが、知らん。小牟の言う贅沢料理など貧乏学生の俺には不可能だし、調理スキルもないからな。

鍋に水を張り、台所のガスコンロに火をかける。

３人分だから結構な水の量だ。沸騰するまでしばらく時間がかかるだろう……と。

ふと、思う。

俺の家も賑やかになったものだ。

昔は時々エクセレンが遊びに来る程度で俺以外の住民がいなかったこの部屋は、カグヤちゃんが来てから多少血なまぐさくはあるが騒がしくなった。今日は小牟がやってきた。あのきつねうどん娘は持前の喧しさだろうが、この部屋を賑やかにしてくれている。人が集まり生活することは家の本文だろう。喩え、ボッロボロの賃貸アパートでも、だ。

――　ピンポーンッ

俺の思考は呼び鈴の音で終了した。

「？　こんな夜中に一体誰だ？」

俺は鍋に火をかけたままで玄関口に向かう。

セールスマンか何かだろうか？　だとすればこんな時間まで働いてご苦労なことだ。どうでもいいことを考えながらドアノブに手をかけ、開けた。

「キョウスケ　――――ッ！！」

「ひっ、エ、エクセレン」

外にはエクセレンが立っていた。

駐輪場で別れた時のままのひどく不機嫌なオーラを纏ったままだ。顔面を撃ち抜くような視線に反射的に1歩後ずさってしまう。手にはスーパーのビニール袋を持っていた。

エクセレンは下足場を見下ろす。

「くつ」

「え……？」

「キョウスケ以外のくつがあるわ」

やばい。

エクセレンが目を付けたのは小牟とカグヤちゃんの履物だ。小牟のことはもちろん、カグヤのこともエクセレンは知らない……以前2人は会ったことはあるのだが、かくかくしかじか（コメディー編を読んでくれ）でエクセレンはカグヤちゃんのことをすっかり忘れていた。

説得の協力を得るために小牟を家に上げたのだ。

そう弁明しても聞き分けてくれそうにない雰囲気で、エクセレンはくつを脱ぎ始めた。

「ま、待ってくれエクセレン。今は部屋が散らかっていてな、片すから少し待っていてくれないか？」
「そんなこと言って、私に見せたくないもの……いいえ、人がいるんでしょう？」
うぐっ、鋭い。今、エクセレンと小牟に出くわされると話がややこし――
「おぉい零児！　もうこれでいいからはよせい！　わしは腹が減ったぞ！」
――……ＫＹよろしく……居間から小牟が声を張り上げていた。
「やっぱり……この声、夕方の女の子ね。家に連れ込んでたんだ？」
「エクセレン」
とびきり上等に張り付いた彼女の笑顔に、俺は背中に寒いものを感じた。
まずいな。とにかく弁明せねば……
「今、俺たちの間にはマリアナ海溝の如き深い誤解が生じているのだ。秋風と夫婦喧嘩は日がいりゃ止む、というだろう？　説明するから聞いて欲しい。これにはふかーい事情があってだな――あっ」
エクセレンは話を聞いておらず、玄関を上がりさっさと居間に入って行ってしまった。
直後……

「ちょっとあなたたち！　人の彼氏の家でなにしてるのよ！？」

エクセレンの怒声がボロアパートを震わせていた。

「おぉ、夕方の女子ではないか。数時間ぶりじゃの。つまらぬものしかない場所じゃがゆっくりしていくといいぞ」

小牟のお気楽な声が聞こえてきた。つまらぬものって……俺の家なのに、既に我が家気分になっていやがる。

「まぁ、夕方の子だけじゃなくてもう1人居たのね！」

どうやらエクセレンがカグヤちゃんを見つけたらしい。

俺は頭の中で緊迫感のあるアラームが鳴り響くのを感じていた。まるで銃弾飛び交う戦場で銃を握りしめる手の平にかく汗のように、じっとりとした嫌なものが噴き出してくる。

「ちょっとあなた、何でこの家にいるのよ！」

「はい、私の名前はナンブ・カグヤです！　カグヤはパパの娘だから、この家で一緒に暮らしているのです！」

「一緒にって……ちょっとキョウスケ！」

元気いっぱいのカグヤちゃんの自己紹介に、案の定というか、必然的に怒りの矛先は俺に向いた。

「キョウスケ、こっち来なさい！　これはどういうこと！？　この子とひとつ屋根の下で暮らしてるって本当なの！？」

「い、いや……その……あの……話すと長くなるのだがな」

俺はカグヤちゃんのことを話した。都合のいい嘘も思いつけなか

った。ありのままの事実を説明することにしたのだが……

「嘘よ。そんな突拍子もない話しんじられないわ！」

……いや、ご尤もだ。

俺だって、カグヤちゃんは空から降ってきた記憶喪失の女の子で異世界から来た斬殺天女だと言われても、耳を疑うだろう。でも事実なのだから受け入れてもらいたい。現実は小説よりも奇なり、とはよく言ったものだ。

「決めたわ！」

エクセレンが叫んでいた。何を決めたのだろうか？

……まさか、別れ話か？　小牟とカグヤちゃんを見て、俺と別れたいと話を切り出すつもりだろうか……嫌だ。俺はエクセレンが好きなのだ。

エクセレンと別れるなど冗談ではないぞ。

「なぁ、考え直してくれないか？」

「うふふ、イヤぁよん」

俺にとっては深い絶望感を味わえるセリフだった。

しかし思惑とは裏腹に、エクセレンの表情はいつもの天真爛漫な笑みに戻っている。口の形なんかωにして、新しいいたずらを思いついた悪ガキのように俺を見て笑っていた。

「キョウスケ、今日から私もここに住むわよん！」

「な、なにっ？」

「あのカグヤって子が良くて私がダメな理由はないわよね？　キョウスケがあの子たちに手を出さないように見張ってないと、私の精

神衛生上よくないわん？」

エクセレンは俺にウィンクをしながら言った。

彼女と一つ屋根の下、か。悪くない。悪くないフレーズでとても魅力的だと俺は思う。俺はエクセレンと一緒に暮らすことに抵抗はないし、それで彼女が納得してくれるのなら、この提案を飲まない理由なんてあるはずもない。

ただ先住民（？）のカグヤちゃんと、行き場のないため泊めざる得ない小牟との間にトラブルが起こらなければいいのだが……。

「なんじゃ零児。その女子もぬしの家に泊まるのか？　それよりも飯じゃ、飯！　ほれ、ぬしもこっち来い」

小牟がエクセレンに手招きをする。

「飯は大勢で食った方が美味いに決まっておる」

「わぁお、恋のライバルからの挑戦状に応えないわけにはいかないわねん。あ、私はエクセレン・ブロウニング。悪を断っちゃう剣なの？」

断つ悪がいないだろう？　とツッコミは心の中だけにとどめておく。

「ブロウニング……あのキモキザと同じ苗字か。奇妙な偶然もあるもんじゃのぅ」

「エクセレンさん、これからよろしくですぅ！」

「よろしくねカグヤちゃん。でもキョウスケは渡さないわよ？」

ちゃぶ台の前に腰を下ろしたエクセレンが、微笑を浮かべながらカグヤちゃんに言った。

「はいです！　カグヤはお友達が増えて嬉しいこと極まりないです！」

が、カグヤちゃんからの返答は歓迎の言葉だった。

エクセレンなりに彼女をけん制したのだろう。しかし天然のカグヤちゃんをけん制しようとするなら、もっと純粋に悪意を持って接しないと効果はなさそうだ。のれんに腕押しとは正にこのことである。

「ん……待てよ」

エクセレンが泊まることになったため、我が家の住民は４人に増えることになった。それはいい。賑やかなのは別に嫌いではない。

このアパートは居間と小さなキッチン、廊下＋玄関程度のスペースしかないのではっきり言って狭い。

寝床が確保できそうにないな。居間には布団を２つしか敷けそうにないためエクセレンとカグヤちゃんが寝るとして、小牟は〇ラえもんよろしく押入れででも寝てもらうとしよう……。

だが俺はどこで寝ればいい？

「なぁ、俺はいったい何処で寝るのだ？」

「廊下でいいんじゃなーい？」

愛するエクセレンの冷たい言葉だった。そんな殺生な。

「それよりキョウスケ、夕飯作ってよ。材料買ってきてるからさ、鍋でも作ってみんなで食べましょ♪」

「鍋か。いいのぅ。締めは当然うどんじゃな？」

「当たり前のコンコンチキよ、小牟ちゃん。油揚げもあるわよん？」

「むむ、やるなお主。さては、通じゃな？」

おほほほほ、笑いが響く、俺の家、もちろん俺は、蚊帳の外（By. キョウスケ・ナンブ）

エクセレンたちは、いつの間にやら仲良く談笑しているように見えた。怒鳴り込んできたにも関わらず、小牟たちとすぐに打ち解けることができるとは……流石はエクセレン。コミュニケーション下手な俺には到底無理な芸当である。

エクセレンの言った通り、スーパーの袋の中にはオーソドックスな鍋の材料が入っていた。即席の鍋スープも入っているので、これなら俺でも調理することができる。

「さて、やるか」

ジャケットの袖をめくって台所に立った。

トントントンッ、と俺が不慣れなため、リズミカルではない包丁の音が響く。背中越しにエクセレンたちの笑い声が聞こえる。

エクセレン、小牟、カグヤちゃん、そして俺。

俺たち4人の間には一悶着あったし、それを解決できたと言う事はまだできないだろう。これからも、何かしらのトラブルが俺たちの間で起こる予感はビンビンする。

だが起こってもいないことを懸念していても仕方がない。

小牟たちのことは明日から考えることにしよう。

鍋用の野菜を切りながら思った。

――こういうドタバタも悪くはないな……と

エクセレンたちの声を背に受けながら、俺は調理を進めるのだった……

鋼鉄の駄狼Ｒ　～空から降ってきた幼女　3～（後書き）

今回は少し長めになりました。
キョウスケお父さん地味にハーレム形成。なんつって（笑）
次回は他キャラ視点で短い話を挟みます。
誰かって？　ヒントは序盤で登場して放置されているキャラですよ。

鋼鉄の駄狼Ｒ　～異変～（前書き）

私の執筆が遅いため、かなり放置していた2人の登場です。

鋼鉄の駄狼R　～異変～

ベーオウルフ　――　キョウスケ・ナンブの恋人であるエクセレン・ブロウニング。

奴が血相を変えてベーちゃんの家へと走りこんでいく様を、俺は奴の家付近の電柱の陰から見ていた。

「ベーちゃん、意外とやるじゃない、これがな」

俺の名前はアクセル・アルマー。

なぜか高校の集まる地域「エリア」1の不良の巣窟、影鏡高校の3年生だ。

今日1日、俺はキョウスケ・ナンブことベーちゃんを追跡していた。

理由は至って単純。ベーちゃんを誘き出すためのネタを探るためである。

俺は今まで幾度なくベーオウルフに戦いを挑み敗北してきた。男にとって強さとは自分を示すための1つの形だ。それなのに俺は一度もベーオウルフに勝利したことがなく、白旗を上げっぱなし……蒼髭流格闘術免許皆伝であるこの俺が、たった1人の男にすら勝てたことがないなど恥以外の何ものでもない！　これがな。

「夕方の女と彼女を合わせて3〇か？　いい身分だな。俺っちだってしたことないのに羨ましいことこの上ないぞ」

俺だってレモン姉さんとアルフィミィーちゃんと3人でにゃんにゃんを　――　といかんな。話が完全に脱線してしまっている。

俺はベーちゃんを誘き出してタイマン可能な状況を作り出すために、丸一日かけて奴を追いかけ情報を収集したのだ。

これまではベーちゃんを彼女であるエクセレンを誘拐して誘き出していたが、最近どうも反応が悪くってさぁ……なんてぇの。倦怠期って言うのか？　前にバイクをパクッた時のようにスッ飛んでくることが最近少なくなっているのだよ、これがな。

どうせ誘き出すならベーちゃんの追い詰められた表情が見たいじゃん？

しかし今回は良いネタが手に入った。

ベーちゃんが駐輪場で一緒にいた金髪小娘は、きっと奴の2号さんに違いない！

ならば誘拐すれば間違いなく奴は俺の元に来るだろう。

さらに彼女に関係をばらすぞと言えば、より一層血相を変えて走ってくるに決まっているぜ。

「クックク、待っていろベーオウルフ。明日こそが、本当に貴様の命日だ」

「良くないですね」

あん？　何だか背後から声が聞こえた気がするな。

俺は蒼髭流格闘中免許皆伝！　気配を断つことなど造作もない！

もちろ他人の気を読むことだってできる。

そんな俺の背後から声が聞こえるなどありえん……俺が背後を取られたと言うのか？

だが振り返ると俺の前に外見で１０歳ほどの少女が立っていたのさ、これがな。

「なんだ、貴様は？」

「私の名前はオータム・フォー。この世界の　――」

俺の質問に答えようとしていたのは青い髪を無造作に切りそろえた少女だった。髪型は俗に言うおかっぱ。顔は作り物みたいに端正に整っているので美少女の部類に入るのは間違いないだろう。

黙っていれば同年代の男どもが寄ってくる。そのレベルの魅力は内包されていそうな少女だった。

「――　神です」

そう、黙っていれば男が寄ってくる。間々ある話さ。口を開かなければ神秘的ですまされる、といったところか、これがな。

たった一言で魅力値を地獄まで引き下げた少女の名前はオータム・フォーと言うらしい。

「ふん、まあいい。ゴッドだか仏だか知らんが、この時間は子どもが出歩く時間じゃないぞ。さっさとお家に帰るんだな」

「アクセル・アルマー。戦争の溢れる世界に生まれ、闘争の継続を願って戦い続けた男　――」

「なんだと？」

俺の名前はアクセル・アルマー。「エリア」１の不良高である影鏡高校３年生にして、超巨大暴走族「シャドウミラー」の特攻隊帳を務める男だ。言いようによっては闘争の中に身を置く者と言っても良いのかもしれないな。

オータムという少女は俺の顔を見て、とても深いため息をついていた。

「――　何度生を繰り返しても、同じ結論に至るのですね……あなたは」

「なんだと？」

「いい加減、平穏の中に身を委ねてはどうでででっでで　――」

突然、オータムの口調がおかしくなった。聞き取れない言葉が口から洩れている。

「？　お、おいお前、どうした？　大丈夫か？」

「ははははは　――　ややｙ――」

俺の声に対し何か答えようとしているようだったが、オータムはまるで壊れたラジオのように声は乱れ、体は強張っていた。

震える華奢な手で俺を体を掴んでくる。小刻みに震えていることが分かった。

「は……やく　――　逃げて　――――　あｗせｒｇｙｈｇｈ」

早く逃げて。オータムは小さな手で必死に俺を掴みながら言っているように思えた。

言葉の意味は分かるさ。でもな、こんなに具合の悪そうな子どもを放置して帰れるわけがないだろう？　いくら俺が札付きの悪だとしてもさ、これがな。

「おい、大丈夫か？　しっかりしろ」

「に、にげてぇててててぇっぇぇ　――――――　ふふ、ありがとう」

オータムの様子が再び豹変した。

出会ったときのような口調に戻る。先ほどの不安定さの欠片も感じさせない声で言った。

「あの小牟（シャオムウ）という女は危険です。あの男の中のモノを刺激している。これまでの異分子たちとは比べものにならない程に、です」

「あの男、だと……？」

オータムの言葉が指す男が誰なのか、俺には分からなかった。
だが小牟という言葉には覚えがある。
夕方からベーちゃんが一緒にいた金髪小娘だ。誘拐するにしても名を知ることは必要だ。ベーちゃんが名前を呼んでいたのを俺は聞いていたからな、この金髪娘の名前ぐらい把握しているさ。
だとすれば、オータムの言うあの男とは ――

「オータムは大事な体です。大事なきように、アクセル・アルマー、あなたの力を借りますよ」
「な、なんだと ――――― うぐッ！！」

オータムの言葉を聞いた、その直後、途端に俺の体が重くなった。
体重が数倍になったような、これは錯覚？　いや、実際に体が動かせなかった。指の1本もだ。
バカな……！　蒼髭流格闘中で鍛えぬいていた俺の体が……動かせないなどあり…え…な……い……。
頭も重くなった。考えることができない。思考が纏まらず、視界に薄暗いフィルターがかかっていく感覚に支配される ――

「アクセル・アルマー、もう戦うことを忘れるのです ――」

薄れゆく意識の中でオータムの声が聞こえる……

「――　全ては平穏なる世界のために」

……くっ……そ……この俺がベーオウルフ以外に白星を喰らうとは……まったく、予想外だ……これがな……
俺の意識はそこで途切れた ――……

鋼鉄の駄狼Ｒ　～異変～（後書き）

今回はアクセル視点でしたが、また次回からはキョウスケ視点に戻る予定です。

Q．さ～て次回のスパロボ学院は？

A．あと数日で発売の第２次スパロボＺに夢中になり、更新が遅れる気がするでござる。

携帯機でありながらシナリオ数も多いらしいので楽しみです！

この調子でＯＧ３も発売してくれると嬉しいのですが……もちろんスパロボＷ勢を出してね！

２０周年記念らしいし頑張ってくれないでしょうかねぇ。

ではでは。

鋼鉄の駄狼Ｒ　～異変　２～（前書き）

注意：お酒は２０歳を過ぎてからｗ

鋼鉄の駄狼R　～異変　2～

エクセレンと小牟が俺の家に泊まることになった翌日……。

「……朝か」

俺、キョウスケ・ナンブは肌寒さを覚え、自宅の玄関口前の廊下で目を覚ました。

寒さで痛むを頭を押さえながら起き上がり、昨日の出来事を思い出す。

確か……俺が鍋を作り終え居間に運んだ時には、エクセレンが持ち込んでいた日本酒「邪神ヴォルクルッす」で酒盛りが始まっていたのだったな。

実を言うとエクセレンは高校3年生にして相当の酒豪でな、ジェネ高の校長ダイテツ・ミナセ氏と杯を交わしたことがある（高校の校長がそれでいいのか？）程度には酒を嗜んでいるのだ。

鍋に箸をつける頃には、小牟とカグヤちゃんは既にベロンベロンに酔っていた。2人の年齢は知らん。酒は20歳を過ぎてからと法律で決められているが、そんなの律儀に守っている奴は俺の近くには1人もいないのであえて言及はしなかった、が。

当然のように俺も飲まされた。

そして1升ビン2，3本が空いた頃には全員酔いつぶれ、布団に寝かしつけた（小牟は布団で簀巻きにして押入れに入れておいた）あとに俺もぶっ倒れたのだったな……。

「……2日酔いか……」

頭が痛い。酒が体に残っているのかもしれないな……。

ちなみに俺は一人暮らしであるため、客を泊める用の布団をそこ

まで揃えてはいない。精々、エクセレンが泊まれば使うぐらいだった物なので、俺の分の布団は確保できず、俺は毛布に包まって廊下で寒い夜を過ごすしかなかった……。

それも頭痛に拍車をかけている気がした。

固い廊下で寝たため体も痛むし、喉もカラカラだ。俺は水を飲むために台所に足を運ぶことにした。

「……む。いい匂いがするな？」

「うん？　零児か？」

台所には小牟（シャオムウ）が立っていた。コンロで鍋に火をかけており、そこから漂ってくる味噌の良い香りが俺の嗅覚をくすぐってくる。

どうやら、昨日残った鍋用野菜で味噌汁でもを作ったらしい。

「中々に起きるのが早いのぅ。もう零児も歳か？」

「誰がじじいだ。寒くて目が覚めただけだぞ」

小牟は一々一言多い、これはたった1日付き合っただけで分かったことだ。

あと俺は零児じゃないっつーに。心の中でツッコみがら、グラスに注いだ水道水を一気飲みにする。壁に立てかけた時計を見ると短針は7を指していた。

「7時か。確かに早く起きすぎてしまったな。しかし小牟、お前は何をしているのだ？」

「ふふん、見て分からぬか？　朝食の準備じゃよ」

まぁ、味噌汁を作っているし、普通に考えればそうだろうな。

他に台所を見渡してみる。炊飯器かはらコメを炊いている湯気が出ていたし、1人暮らしでは中々使い切れない10個パックの卵の

残りで卵焼きも作られていた。
昨日の鍋の汁に米を入れれば雑炊もできるし、冷蔵庫の残り物で作ったにしてもは上出来の朝食だった。

「一宿一飯の恩義も返さぬでは仙狐の名が泣くでのぅ」
「全部うちの食材なのだが……ま、礼は言っておこう。ありがとう、小牟」
「素直でよろしい。本物もこれぐらいならよいのじゃがな」

小牟は苦笑しながら味噌汁の仕上げに入っていた。
俺は口の中がネバネバするのでうがいをして横目で居間をみる。
寝相の悪いエクセレンがカグヤちゃんを押しつぶしていて、カグヤちゃんは寝苦しそうに唸っていた。
……ま、平和でよろしい。
それにしても小牟の言う本物とは、やはり有栖（ありす）　零児（れいじ）のことだろうか？

「なんだ、本物は素直じゃないのか？」

疑問に思ったので質問すると、小牟は意気揚々と答えてくれた。

「うむ。本当はわしにぞっこんラブラブのくせに素っ気ない態度ばかり取るのじゃ。俗に言うツンデレじゃよ、ツンデレ」
「……そうか」
「何かあるとすぐに尻を叩こうとするしのぅ。あれは間違いなく愛情の裏返しじゃ。内訳はきっとツンが9で、デレが1ぐらいじゃな」

……大変なのだな。零児も。
このボケ倒し娘を躾けなければないないとは……同情の念しか浮かんでこないな。

小牟の場合は甘い顔をすれば付けあがるだろうので、零児がデレを出せていない可能性がある。おそらく零児にデレ期は一生訪れないだろう（断言）。

コンロの火を止め、小皿に味噌汁を取って味見する。「うん」と唇をなめて、小牟を小皿を置いた。

同時にため息が口から洩れる。

「さて、これからどうするかのぅ……？」

「？　エクセレンたちなら起こせばいいだろう？」

「そうではない。わしの、これからの身の振り方についてじゃ……」

ああ、そちらの方か。

昨夜の大騒ぎのせいで忘れかけいた。ごく自然に溶け込んでいるので気にならないが、小牟は空から降ってきた。そしてこの世界の住民ではないと言った。

「わしが住んでおった世界は『物質界』という名ということは昨日話したな」

「ああ。俺が見た夢……俄かに信じがたいが、あそこがお前の住んでいた『物質界』……」

小牟は頷いて続けた。

「そうじゃ。あそこで寝こけとる牛乳姫もこの世界の住民ではない。本来はエンドレス・フロンティアという世界にいるはずなのじゃが、何故かこの世界におる」

つい、エクセレンの重さで唸り声をあげているカグヤちゃんに視線が向いてしまう。

カグヤちゃんも小牟と同じように空から降ってきた。記憶を失っ

ていたため詳しいことは詮索しなかったが、来ている服などは俺には見慣れないし護式（ごしき）・斬冠刀（ざんかんとう）という大剣も持っていて――なるほど、異世界の住民と言われれば確かにしっくりはくる。

だが……

「解せんな。漫画やアニメじゃあるまいし、そんなことが起こるとは信じられん」

「だが事実じゃ。状況を柔軟に受け入れる頭も時には必要じゃよ。固くて役に立つのは下だけじゃ。のう、零児？」

この駄狐め。出会って2日目でセクハラか？　勘弁してくれ。

俺の頭はそこまで凝り固まっていないと信じて、さらに聞くことにした。

「だがカグヤちゃんだけなら兎も角……小牟、お前で二人目だぞ。俺の所に落ちてきたのは。こんなことありえるのか？」

「明確に説明はできぬ。じゃが実際に起きてしまったことは認めねばなるまい？」

……確かに。

起こりうる確率を起こってしまった後で論じても意味はない。

俺にできることは、せめて3回目がないことを祈ることぐらいだしな。いや、さすがにもうないだろう。俺は分の悪い賭け以外は滅法弱い……べつにヒキが強い方ではないのだ。

納得できない点は多数あるが状況を受け入れなければならないのも事実。

俺の問題を現実的に検討してみると、増えた同居人の食費とか同居人間の取り決めなども決めなければならないし、小牟をこれからどうするかも考えなければならない。小牟たちが降ってきたことを論じるのはもう止めにしようと思う。

大切なのは、これから小牟たちをどうするか、だ。
しかし当の小牟は「もしかしたら……」と首を捻って、考え込んでいた。

「どうした？」
「いやな、わしらがぬしの所に集まった理由に少し心当たりがあってな……」
「なに、本当か？」
「うむ。もしかすると、ぬしの中のモノが関係しているのかもしれぬと思っての」

俺の中のモノ……どういうことだ？
意味が分からない。しばらくすると小牟が不思議そうに俺を見ながら言ってきた。

「なんじゃ気づいとらんのか？　ぬしには霊力は感じぬが、代わりに妖力に似た妙な力を感じるのじゃ。わしはてっきり、とうに知っているもんだと思っておったが……」
「妖力……だと？」

霊力や腕力と一文字違うだけで御免こうむりたい力になるな。縁起が悪いぞ。

「はっきり言うとな、おぬしはなにかに取り憑かれとる」
「……」

明言されてしまった。
俺はオカルトは信じない性質だが、空から降ってきた女に言われてしまうと不安感で胸がいっぱいになるな。心霊現象は身に覚えがないのだが、お祓いとかしなければいけないのだろうか？

「ぬしは本物の零児に会った方が良いかもしれんの」
「俺が有栖　零児にか？　何故だ？」
「あやつは妖を封印する術にも長けておるのじゃ。零児もこちらの世界に来ていればよいのじゃがのぅ……」
小牟の顔に影がさした。
「しかし、わしも弱くなったものじゃな」
「……」
「たった1日。たった1日じゃ。あやつが傍におらぬだけで心が乱れる……765歳の仙狐ともあろう者が情けない限りじゃよ」
「……そうか」
俺は不器用な人間だ。はっきり言って人の気持ちを察したり、気の利いた言葉をかけるのは得意な方ではない。
しかし小牟の中で渦巻く心情は理解することができた。
寂しいのだろう。心細いのだろう。
無理もない……相方とは引き離されて1人で見知らぬ世界に放り出されれば、誰だって心細くなるだろう。弱音だって吐きたくなろうと言うものだ。
「零児よ、知っておるか？　『ゆらぎ』が自然発生することは稀じゃ。そして『ゆらぎ』に巻き込まれた者はまず元の世界には戻ってこれぬ……俗に言う神隠しというやつじゃな。まぁ、わしらのように『ゆらぎ』の知識がある者は別じゃがな」
「ではお前は帰れるのだな？」
「うむ。入り口があれば出口があるのも道理というものじゃ」
確かにそうだ、と俺も思った。

小牟が元の世界に戻れる帰れる希望はある。にも関わらず小牟の顔から笑みが戻ることはない。

「……じゃが、わし1人でそれを探し出すことができるのか？　自信がないのじゃよ零児……こんなときにあやつが居てくれればのぅ……」

「……だい　――」

大丈夫。そう声をかけようとした口を慌てて貝のように閉じた。慰めの言葉をかけるのは簡単だ。「大丈夫」「きっと良くなる」「頑張れ」……相手を励まして元気づける言葉だが、時には傷つけ突き放す言葉にだってなり得る。

「ゆらぎ」を知らない俺が安易な言葉をかけるのは無責任と言うものだ。得体のしれないモノに飲み込まれた仲間が生きている、無事だと保証することは俺にはできなかった。

だから俺は……

「らしくないな、小牟」

「零児？」

小牟は俺のことを零児と呼ぶ。

俺の名前はキョウスケ・ナンブ、零児ではない。

これは単なる推測にすぎないが、小牟は有栖　零児に外見が似ている俺を零児と呼ぶことで、不安や心細さを和らげようとしているのではないだろうか？

あくまで推測だから口にはしないし、それで不安が和らぐのなら好きに呼べばいいと思う。

「お前は笑っていろ。それも飛び切り能天気にだ。次に有栖　零児に会ったときに、彼を不安にさせないためにな」

「……」
「それに笑顔はお前の唯一の美点だろう？」
「くくく、言うてくれるのぅ？」

小牟の顔には笑みが戻っていた。まだ全快ではなかったがな。

「確かにわしらしくはなかったのぅ。すまぬ。今の話は忘れてくれ」
「2日酔いで頭が痛い。明日になれば忘れてしまっているさ」
「ふふっ、まったくもってぬしの言う通りじゃて。……のぅ、ナンちゃん」

……？　なんだ。小牟に聞きなれない名前で呼ばれたな。それも零児ではなく、どこぞの大物芸人にみたいな名前で。

「ナンちゃんって誰やねん？」
「ぬしの名前はキョウスケ・ナンブというのじゃろう？　だからナンちゃん。いい呼び名じゃろう？」

小牟が即答した。
ひどく安直なネーミングだった。それにしてもウッちゃんは何処に行った？　あと、俺の相方はウッちゃんではなくエッちゃんだぞ。
……まぁ、いい。
俺を零児と呼ばなくなっただけ1歩前進と言ったところだろう。
好きに呼ぶといいさ。

「のぅナンちゃん、良かったらこの辺りを案内してもらいたいのじゃが……」
「この辺り？　あぁ、『エリア』を見て回りたいということか」
「うむ。巡っておるうちに何か帰る手がかりを掴めるやもしれぬしのぅ」

「確かにな」

小牟の言うことには一理ある。

俺のボロアパートに籠っていては何の情報も手に入らないだろう。幸い今日はジェネ高は休みだし、金もないからギャンブルにも行けない。

それに、たまには空気が凛と冷えた早朝に散歩するのも悪くないものだ。

「では、まずは腹ごしらえにするか」

「そうじゃのう。大した物はないがたんと召し上がるがよい」

「……材料はうちの物だろうが」

他愛無い会話を交わしながら小牟特性の朝食を取り、俺たちは外出することにした。

エクセレンは泥酔しているので昼間では起きそうにない。置いていくことにした。

外出する旨をメモに書き残す。

――全ては静寂なる世界のために――……

頭痛と共に声が聞こえた気がしたが……2日酔いのせいだと思うことにして、俺と小牟は「エリア」散策へと出発したのだった――……

鋼鉄の駄狼Ｒ　～異変　２～（後書き）

いよいよ第２次スパロボＺの発売が明日に迫ってきましたね。
ちなみに私は明日は日勤で、日勤終了後は先輩に「マクロスＦ」の映画見に行く誘いを受けているため当日ゲットは無理っぽい感じです。
１歩出遅れてゲームの開始となりそうです。
蛇足：どうでもいいけど公式ＨＰで紹介されている主人公がなんか気に入らない。
　どうせならガンレオンとランドみたいな熱い漢でよかったのになぁ。
　まぁ、プレイしてみて印象は変わるかもしれませんが。

ではでは、次回もスパロボ学院　シリアス編をよろしくお願いします。

鋼鉄の駄狼Ｒ　～異変　３～（前書き）

途中からキョウスケ視点に戻ります。

俺は……アクセル・アルマー……

「助けてくれえぇっ！！」

俺の脳裏に助けを求める声が響き渡る。腹の底から喉をひりつかせて絞り出したような声が、体も自由に動かせないままの俺に訴えかけてくる。

虚ろな意識に声はやけに耳に残った。

「死にたくない！」

「殺さないで！」

声が増えた。

目は見えず状況も分からない。

声を耳で聞いているのかすら分からなかった……

「ぎゃあああぁっ！！」「痛い！　痛いよぉ！」「ぶっ殺してやる！」「死ねぇ！」「地球人の分際で　――」「助けて、お母さん　――」「皆を守る　――」「ユニバァーサル　――」「粛清だ　――」「うぎゃあああぁ　――」「ひぃいいぃ　――」　――……声は際限なく増えていく。

ある声は男、ある声は女、またある声は子どもであり老人であり……統一性のない様々な声が俺の頭に響いてくる……。

一体何が起きている……？

俺は……アクセル・アルマー……確か、ベーちゃんの後をつけていて……それで……

――世界には悲劇が多すぎる

また、声が聞こえた。

女の声だ。聞き覚のある声だった。

つい最近……本当にごく最近に聞いた覚えのある女の声……いや、遠い昔にも聞いたことがあるような気すらする……そんな声……

――この世界に悲劇はいらない――救われない魂に救済を

――

女の声を聴いていると、なぜだろう……心が安らぐ。

ささくれ立っていた心が解けていくようだった……体の輪郭もあやふやで不透明で分からない……もう、このまま体が溶けてしまいそうな感覚すら覚える……

――全ては平穏なる世界のために

だが女の声を聞いていると、それでもいいか……と、思えてしまう……

……俺は……誰だ……？

まだ肌寒さを感じる春の早朝。

軽い朝食を済ませた俺と小牟（シャオムウ）は、まだ寝ていたエクセレンとカグヤちゃんを起こさないように家を出て、俺のボロアパート周辺の道を歩いていた。

何の変哲もない住宅街。

俺のボロアパートはその中にあり、歩くたびに目に入る住宅はまだ人の気配がしないモノが大半だった。今日は休日だからな。あと20分かそこらで8時になるが、起きていないからと言って責める人がいる訳でもない。

「呑気なモノじゃのう」

訂正。若干1名だけ唇を尖らせてブー垂れていた。

小牟は不満があるような視線で住宅街の家々を見つめている。

「平穏そのものじゃ。わしが帰り道も分からず困っておるというのに、まったく不貞な奴らじゃのぅ」

「無関係だからな。当然だ」

「ちぇ、わしだって本当は夕方まで寝ていたいのに……」

そう言うと、目を細めて寝起きにするように背伸びをする。

「それは寝すぎだろう。せめて昼までにしろ」

小牟はしっかりと朝食を作っていたので寝ぼけている筈はない。

習慣的な行動に思える。普段はこんなに朝早く起きないのかもしれないな。

「却下じゃ。ネットの海がわしを呼んでおるからの。それにナンちゃんは分かっておらん」

「なにをだ？」

「毎晩、零児に隠れてお宝画像を探すのは一苦労なんじゃぞ！」

理不尽に怒鳴られた。

要するにこの狐耳娘は、毎晩ネットサーフィンして夜更かししているのだろう。

目覚める時間が夕方だなんて、インターネットに接続できる環境のない我が家には理解しがたい状況だが……それに贅沢かつ実に理不尽な怒りをぶつけられても俺は困る。

「はぁ～、パソコンの電源消してきたかのぅ？　心配じゃ。記憶が曖昧じゃからして」

「俺はお前の頭が心配だぞ」

ネットから毒電波を受信しているかもしれんしな。

それにしても、郷愁の思いよりパソコンの心配が先とはな。まずは帰郷するための情報を集めるのが先決だろうに……何を考えているのやら。

「本当に何もないのぅ」

「まぁ、ただの住宅街だからな」

「家政婦は見た！　隣の奥様の不倫関係！　みたいな事件はないかの？」

「ない」

「なんじゃ、つまらん男じゃのぅ！」

歩道を俺と並んで歩きながら小牟は頬を膨らませていた。発言が失礼極まりなかったが、俺は通過スキル『右から左（ライト トゥ レフト）』を使って華麗にスルーすることにした。

……ふぅ、しかし話が一向に進まないな。

「おい」

「なんじゃ？」

「何か手がかりはあったか？」

「ないのぅ」

即答。案内役として付き合わされている身としてはまっこと遺憾である。要するにガッカリだ。

「……ま、無理もないか」

周りの住宅を見渡しながら俺は嘆息した。

俺の目に映る家々で手がかりが見つかるとは思えなかったからだ。

「住宅街」……その一言で十分説明できる程度には、特徴がなく平々凡々とした場所だからだ。

仮にこの住宅街に小牟が飲み込まれた「ゆらぎ」が発生したとしてみよう……きっと、次の日にはお祭り並みの大騒ぎになり、記念碑的なモノの建設計画が立ち上がりそうだった。

それくらいに何もない、変哲もない、ただの住宅街……落ちているのは、手がかりではなく犬の糞くらいのものだ。

「さて……これからどうしたものか？」

「それはわしのセリフなのじゃが……しかし、なぁんかおかしいのぅ」

「どうした？」

「ネトゲやＲＰＧだと立札や看板があって『こっち』と教えてくれるのじゃが、どういうことか、何処にも見当たらんのぅ」
「……そりゃあ　――」
俺たちがいるのは現実だからな。
現実とゲームを本当に混同しているか、それとも何かのメタ発言が小牟の場合は判断がつかんな。当たり前のことを言葉にして指摘するのは面倒なものだ。スルーする。
結局、俺と小牟は無益な会話を繰り返しながら住宅街を闊歩することになった　――……
……２０分が経過した。
Ｔ字路を曲がると、家の塀同士でできた歩道がまたまっすぐ伸びているだけだった。
……４０分経過。
Ｌ字路を曲がると、どこかの家の裏口に出ぐわした。要するに行き止まり、袋小路だ。
…1時間経過。
いい加減、まるでラビリンスのように似たような風景しか展開されない散策に、俺たちは嫌気がさしてきた。
「のぅ、ナンちゃん……」
小牟の声にも覇気がなくなっていた。
「なんだ？」
「本当に、なぁぁぁぁぁんっにもないのぅ」
「平和、だからな」

「退屈じゃのぅ。平和ってこんなんで良いのかのぅ？　ボケとるだけと違うか」

小牟が俺に訊いてきた。

答えはいつでも俺が知っている……などと思っているのだろうか？

「なぁ小牟、ボケれるだけ幸せだろう？　世界には平和でいられない人たちも沢山いるのだ。だからせめて俺たちは平和にいこうじゃないか」

「むぅ、平和のぅ……ぬしの言うのは平和とはちと違うように思えるが……」

小牟は俺の言葉に不満があるらしく、目を細め腕を組んで唸っていた。

何が不満なのだ？　世界平和に問題などないに決まっている。

俺は、エクセレンと共に過ごせる今の平穏な毎日に不満なんてない。

この日々が永遠に続いてくれればとさえ思っていた。

だがしかし、小牟のいうことにも一理ある。

退屈は心に毒だしな、

「住宅街に手がかりがないなら、繁華街の方にでも行ってみるか？」

と小牟に提案してみた。

「うむ、そうじゃのぅ　――――――？　なんじゃ？」

「どうした？」

小牟の返事に俺は首をかしげた。

「なにか……なにかあるのぅ……それもすぐ近くにじゃ」
「なんだと？」
「面妖な……妖力とも霊力ともつかぬ感じのなにかじゃ。……あちらじゃのぅ……あの公園じゃ」

小牟はしぶい表情をしていた。彼女が指さした先には彼女の言う通りに公園があった。
まだ時間も早いこともあり、公園に住宅街の奥様や子どもたちの姿は見えない。
そう、俺にはなにも見えない。
しかし、小牟の目にはなにか見えているのかもしれなかった。
俺は理解できない霊力やら妖力の概念を小牟は理解しているのだからな。それに小牟は異世界の住民だ。俺に感じない何かを感じているのかもしれない。

「あそこがどうかしたのか？」
「……ナンちゃん、あの公園を少し見てみてもいいかのぅ」
「別に構わんぞ」

散策の目的は小牟帰還のための手がかり探しだからな。俺は案内役にすぎず、目ぼしいものを見つけるのは彼女の方が得意だろうから異論はなかった。
俺は小牟とその公園に足を踏み入れる、
住宅街の中で、公園はまるで野原でポツリと忘れさられた野草のように佇んでいた。
人は誰もいなかった。時間が早朝だからだろうか？　公園は住宅街の中にあるから、昼時になれば奥様方とその子ども恰好の交流の場になりそうな気はするが……いや、どうだろうな。
世界からこの公園だけがくり抜かれている。そう錯覚しそうになる位にシンと静まり返っていた。

「むぅ……」

隣で小牟が唸っている。真剣と書いてマジな表情が普段の小牟からかけ離れていた。

どうやら、この公園にはなにかあるのだなと俺が感じた、その時

――

――全ては……

声が、俺の頭に響いてきた。

――静寂なる世界のために……

家を出る時に聞こえたあの声だ。

声と一緒に耳鳴りと頭痛もしてくる。ガンガンと内側から反響してくる痛みだった……まるで、何者かが外に続く扉を内から蹴り開けようとしているような感覚……。

暴れまわる痛みに俺は頭を押さえて膝を着いていた。

「む、どうした？」

「……頭が……痛むんだ」

「2日酔い……ではなさそうじゃの」

小牟は俺の様子を見て言った。

「やはり、この公園はなにかあるようじゃのぅ。妙な気配も漂っておる……『ゆらぎ』ではないようじゃが……妙な場所じゃ」
「……ッ、そうか」
「のぅ、ぬしはこの場所に心当たりはないのか？」

小牟が横目で俺を見てきた。
正直言うと、頭痛が酷くて質問に答える気にはならかったのだが、小牟の言葉が俺の心に引っかかり奇妙な違和感を覚えていた。
……俺はこの公園に来たことがある。
公園は俺の住んでいる住宅街にある。立ち寄る機会ぐらい幾らでもあっただろう……しかし俺は忘れていた。
以前、この公園に足を運んだことがあることを今思い出したのだ。
何故忘れていたのかも思い出せず、違和感としか表現しようのない感覚が俺の中を駆け巡っている。

「おい小牟……ここに、なにがあるんだ？　公園に入ってから頭痛がやまない……こんなことは初めてだ」
「ふふん、そんなことわしが知るわけなかろう！」

そこで胸を張られても困るのだが、小牟は自信満々に答えてくれた。小牟は異世界の住民だから勝手知らぬ「エリア」のことが分からないのも無理はない。

「じゃが大体の見当はつくぞ」

小牟が人差し指をこめかみに当てながら言った。
そういえば、小牟はカグヤちゃんのいた世界にも行ったことがあるのだったな。もしかするとそれ以外にも色々な世界を旅したことがあるのかもしれん。今までの経験則から思う所があるのかもな。
俺は小牟の答えに耳を傾けた。

「ぬしは『特異点』という言葉を知っておるか？」
「……？　いや、すまんが知らないな」
はっきり言って初耳だった。俺の様子を見た小牟は続けた。
「この場所からは『ゆらぎ』の気配もないし、妖力の残滓も感じ取れぬ。じゃが、言いようのない違和感を感じるのじゃ」
「それは……俺も感じている」
「じゃろう？　一見しただけじゃと、ここは何の変哲もない公園じゃ。確かにこの公園は子どもがはしゃぎ回っとるのがお似合いの場所じゃろうて。
じゃが『特異点』となれば話は別、『特異点』は事象の発生確率を歪めることすら可能なそうじゃからのぅ」
「……」
いまいち……小牟の言っていることが理解できなかった。
事象の発生確率を歪める……？　話が急に飛躍したな。まるでSF小説の中の話のようではないか。だんだん強くなってくる頭痛も意味を理解するのを妨害してくれている。
「すまん。もう少し噛み砕いてくれ、頼む」
「うむ。要する『特異点』は『ありえない事が起こる』場所やモノということじゃな。もちろんこれはわしの推測じゃから確証なんてないに等しいがのぅ」
ありえないことが起こる、だと……？
小牟の説明が俺の心を泡立たせた。俺はなにかを忘れている……それすら忘れていた。小牟の言葉でそれを思い出した俺だったが、記憶を掘り返そうとすればするほど、痛みが激しくなっていく。

「……くっ……」

おぼろげな記憶を探る。たしか俺は、ここで、アイツとあっているはずだ。

ではアイツとは誰だ？

頭痛が一層強くなっていく ――

――全ては……

『全ては……』

また声が聞こえた。

今度は頭の中だけじゃない。耳に届いた声の方に俺たちが振り返ると、公園の入り口に人影が立っていた。

――静寂なる世界のために……

『平穏なる世界のために……』

その人影は俺のよく見知った人物で、言葉は彼の口から発せられていた。

「アクセル……くっ、なにをしに来た？」

公園の入り口に立っていた男の名前はアクセル・アルマー。

天然パーマの赤髪がトレードマークで、「エリア」１の不良高校「影鏡（えいきょう）高校」に通う高校３年生だ。なにかと理由をつけて俺に喧嘩

をしかけてくる厄介極まる俺の幼馴染だった。
ちなみにアクセルは「蒼髭流格闘術（ソウシリュウ）」免許皆伝の格闘家……ただの貧乏学生の俺が奴に勝てる訳がないのだが、俺はアクセルに敗けたことがないらしい。
らしい、というのも喧嘩の時の記憶はいつもアヤフヤで、気づけば勝負が終わっているのが常だからだ。
そんな男がまるで幽鬼のように公園の入り口から俺を見ていた。

「なんじゃなんじゃ。ここには牛乳姫だけでなくアホワカメまで居るのか？　奇妙な縁じゃのぅ」
「アクセルを知っているのか……ッ」

アクセルを見た瞬間から俺の頭痛はさらに強くなる。頭が割れそうな痛みだ。耐えられなくなった俺は両膝をついてしまった。

「お、おい、大丈　――」
『やはり貴女は危険ですね』

小牟の言葉をアクセルが遮った。いつものアクセルの口調ではない……まるで女が喋る時のような物言いに俺は違和感を覚える。

『今までの異分子と違い、貴女はアレを激しく刺激しています。アレが目覚めるにはまだ早い……』
「……ぬし、アクセルではないのぅ。物の怪の類か？」

アクセルは単純明快な男だ。意味不明な言葉なんて言わない。こちらに論破されればとりあえず拳を振るってくる、そんな男だ。
小牟の言うように、あのアクセルはアクセルであってアクセルではない……アクセルの姿をしたナニカだと、俺も感じた。

『答える必要はありません　――』

アクセルの声でナニカが言う。

『――　貴方は、この平穏な世界で永遠を生きるのですから。……そのために一度死んでもらいます』

「支離滅裂な奴じゃ。それにわしをなめるでないわ！　この小牟ちゃんをそう簡単にやれると思わんことじゃ！」

『ふふ』

小牟はどこからか錫杖のようなモノを取り出して構え、懐から銀色の拳銃を取り出してアクセルに向けていた。いったい何処に隠し持っていたのか問いただしたいところだったが、俺はそれどころではなかった。

頭痛が酷い。耳鳴りがする。吐き気まで催してきた。

くそっ、体調が最悪だ。俺は動くことすらできなかったが、揺れる視界の中をアクセルが歩いてくるのは見えた……いや、アクセルの体を使ってナニカが近づいてくる。

「に、逃げろ小牟……！」

「無理じゃな。背中を向ければやられるのはわしじゃ」

小牟が拳銃の撃鉄を起こす音が聞こえてくる。

『ふふふ　――』

ナニカが笑う……

『――　全ては平穏なる世界のために』

……その言葉がきっかけだった。
俺の中で声がした。

――　全ては静寂なる世界のために

……俺の中でなにかが爆ぜる。
紅く……熱く……どす黒いなにか……それは血液のように一瞬で全身を巡り、

「がぁぁぁぁぁっ！！」

俺の体を支配した……。
膝を立てる。手を着き腰を上げる。ゆらり、と幽鬼のように立ち上がった俺の頬には、赤い水玉模様のタトゥーが入っていた……。

信じられないことに俺はその光景を　――　自分が立ち上がる光景を見ていた。鏡もないのに自分の体の全身が見える。そのとき、俺は背後から自分自身の背中を眺めていたんだ。
俺であって俺でないナニカが……確かにそこには立っていたんだ

――……

To be continued――……

鋼鉄の駄狼R　～異変　3～（後書き）

誤字・脱字・感想を絶賛受付中！
更新が遅いですが読んでくださっている方々ありがとうございます！
これからも頑張るのでよろしくお願いします！

あ、第2次スーパーロボット大戦Z購入しました！
お気に入りは何とっても「ダイ・ガード」です。戦闘中の掛け合いから必殺武器まで全て私のツボでした。装甲がやや薄い、適性が悪いなど問題がたくありますがそこは愛でカバー。
うちのトップエースは赤木くんなのでした。

スフィア。
この言葉も再登場しましたね。スフィアや太極といった言葉はこの小説でも使うつもりです。かなり自分なりの解釈になってしまいますがそこは笑って流してもらえるとありがたいです。

ではでは、次回の更新はなるべく早くにしたいと思います（ノシ

鋼鉄の駄狼R　～HERO～

住宅街にポツンと寂しく佇んでいる公園で……

俺は、俺が立ち上がる光景を確かに目にしていた。
体格は変わらない。だが目元には赤い水玉のタトゥーが浮かび、体から発せられている雰囲気は邪悪だった。背中を見ているだけなのに鳥肌が立ち、理由も分からない強い危機感に襲われる。
これが俺なのか？
それに何故、俺は自分の後ろ姿を見ることができる？

『……まだ早い』

俺の疑問を捨て置くように、アクセルに憑いたナニカが言った。

『異分子による刺激に加えて、この場所、そして私……目覚めを促す要因としては十分ですが、貴方はまだ目覚めるべきではないのです』

違和感のある女口調だ。喋っているのがアクセルではないと確信できるぐらいには不信が残る。
ナニカの言葉の意味が分からず頭を押さえた。
不思議と……公園に入った時から続いた頭痛は治まっていた……しかし、俺の意志に反して、見えている俺の体が頭を押さえることはない……。
体の自由が利かない、と言うべきなのだろうか。俺の体はゆらりと立ったまま口を動かしていた。

「破壊は創造……創造は破壊……全ては静寂なる世界のために……」
「おい、ナンちゃん！　大丈夫か!?」
小牟（シャオムウ）が俺に触れようとして手を伸ばす。
しかし直前で手を止めた。
「ち、違う……ッ！　ぬし、ナンちゃんではないのぅ！」
身軽な小牟は後ろに地面を蹴って俺から距離を取り、アクセル憑きのナニカに向けていた銀の拳銃を俺に向けた。
……俺ではない？　俺の名前はキョウスケ・ナンブ……たしかに、今は自由にならないがあの体は俺のもので間違いない。それなのに小牟は何を言っているのだろう。
一方、俺の方は小牟を一瞥もせずに正面だけを見据えていた。
「何者じゃ！　名を名乗るがよい！」
銃口が俺の頭に向けられている。場に緊迫した空気が流れているが、まるで俺は意に介していないように見えた。
引き金を引かれれば俺の命は終わるだろう……だが何故だ？　嫌な予感がする。
銃を持ち武力的に勝っているのは小牟のはずなのに、体の小さな小牟が俺と対峙する光景が……小動物などが狼などの大型肉食獣を必死に威嚇している様に見えた。
『撃ちたければ撃ちなさい』
静観していたナニカが間に入ってくる。
「なんじゃと!?」

『その瞬間に貴女の命が終わるだけです。ふふ、まぁ、撃たなくても貴女の命はありませんけどね』
「くっ……物の怪風情が、このわしを安く見おるか」
ナニカの言葉に気圧されたのか、さらに1歩後ずさる小牟。
彼女の前には体の自由が利かない俺の体と、ナニカに憑かれたアクセルがいる。アクセルの体はナニカの女口調で話し口元には似合わない微笑を浮かべている。俺の体は立ち尽くしているだけだった。
だが気づくと、俺の視線はナニカの方に向けられていた。
「……お前か」
『お久しぶりですね、名も無き破壊の権化よ』
破壊の権化……俺の体のことを言っているのか？　俺はただの貧乏学生だから、ナニカの表現が理解できなかった。
厨二病か、とツッコミを入れたかったが俺の口は自由に動かない……
『起こしてしまってごめんなさい。でも安心して。貴方の力が必要なのはまだ先なの……だから、もう一度寝てもらいますね』
「……ふん、我をどうしようというのだ？」
勝手に動く俺の口からは間違いなく俺の肉声が発せられ、
『そうですね　――』
ナニカは少し逡巡した様子を見せた後、言った。
『――　生かさず殺さず、憑代を傷つけることにしましょう。いくら貴方でも弱れば眠るしかありませんからね』

「……」

『では、お休みなさい、名も無き破壊の権化よ……あぁ』

忘れ物を思い出した時のように、ナニカは小さな声をあげて手を叩いた。

『そうそう、そうでしたね。貴方にも一つだけ呼び名があったことを忘れていました……ふふ』

アクセルに似合わない微笑を浮かべさせながら、ナニカは指を弾く。

パチン、と気持ちいい音が響き異変は起きた。

アクセルの傍の空間が大きく歪んでいく。

夢で見た「ゆらぎ」に似た揺らめきが大きくなっていき、その大きさは上空１０ｍを超える。数秒で「ゆらぎ」は１０ｍ大に固定された。

そして、信じられないことに「ゆらぎ」に亀裂が入る。何もない空中に、倒壊直前の廃ビルにあるようなヒビが走っていた。

「これは『ゆらぎ』！？　やっと手がかりを見つけたぞ！　わしをこの世界に巻き込んだのはもしやぬしか！？」

『それは単なる偶然です。彼の目覚めを助長する異分子なんて私は望んでいません』

小牟の問にナニカが答えた。

偶然、助長、異分子……どうやら小牟が「エリア」に落ちてきた事に、このナニカが関わっているのは間違いないだろう。

帰還の手がかりを探して発見できたが、実は中身は爆弾でしたっ

てか？
……信じられない。というか信じたくない。だが信じざるを得ない。
俺が夢で見た「ゆらぎ」を、目の前のナニカは出現させたのだからな。
同じ夢の住民の小牟を引き寄せたのが、あいつの言う通りに不幸な事故だとしても、異常な力を持っているのは疑う余地もなく状況がヤバイことには変わりない。
まさしく……俺の嫌いな、非日常、というやつだ。

『ふふ』

ナニカが笑うと同時に、亀裂の入った「ゆらぎ」が砕けた。まるでガラスのような音を立ててだ。
砕けた空間は真っ暗闇で先が見えなかったが、中から巨大な人影が出てくるのが見えた。大きさは１０ｍくらい……黒い甲冑で身を固めた巨人が「ゆらぎ」から現れたのだ。
黒い巨人は周囲を見渡し、俺の体に狙いを付けたのか真っ直ぐ見下ろしてくる。ちなみに小牟は「ロボットじゃ！」と驚愕の声をあげていた。

「ふん……イコンか」
『お休みなさい、ベーオウルフ』

黒い巨人が拳を握る。公園のどの遊具よりも大きいグーパンチが空中に出来上がり、冷たそうな甲冑に包まれた、巨人の顔と思しき部分に赤い光が灯る。
瞬間、巨人が空中高く上げた拳を振り下ろしてた。もちろん狙いは俺の体！　万事休すだ！

「馬鹿め」

ベーオウルフ……そう呼ばれた俺の体が呟いた時、巨人の拳は……いや腕は消えて無くなっていた。

正確には消えたわけではない……ベーオウルフに触れる前に、巨人の腕が粉々に砕けて吹き飛んでいたのだ。

はじけ飛んだ金属片が空中を舞っているが、俺には何が起きたのか分からなかった。

腕を飛ばされた巨人はたじろぎ、破片が公園の土に突き刺さる。巨人の腕からは血液は流れていない。どうやら生物ではないようだ。

俺の体 ――― この際だからベーオウルフと呼ぶことにするが ――― には傷一つ付いておらず、奴は巨人に向かって右手を差し出していた。

大きさは違うが、ちょうど親が子どもをあやす様に、頭をなでるように手を上げている。もちろん、手は届いてはいないが……そういう風に俺には感じられる。

もし俺がベーオウルフと同じ視点を持っていたとすれば、巨人の頭頂部に手のひらが被さって見えるだろう。

そんな位置にまで奴は手を上げ、腕に力を込め、

「潰れろ」

勢い良く手を振り下ろした。

ただそれだけ。

それだけで巨人の頑丈そうな甲冑が一瞬だけ悲鳴を上げて、頭から砕け、スクラップ工場の作業音に似た金属がひしゃげ、潰れる音を響かせた。端的に言えば圧し潰されたのだ、文字通りに。

対決……にもならなかった巨人の部品が足元に転がってきて、ベーオウルフは鬱陶しそうにそれを蹴り飛ばす。

『完全に覚醒していないのに……やはり貴方は危険ですね』
「破壊は創造。創造は破壊。全ては静寂なる世界のために……」

――それが、お前の願いだ……

俺の頭に声が響いた。
もう聞きなれてしまった声……そう、あの声はベーオウルフのものだったようだ。俺の体でベーオウルフは意味不明な言葉を繰り返しているが、先ほど聞こえた声は一体何だ？
もしや、奴の心か……小牟の言っていたように俺にはナニカが憑りついていて、ベーオウルフがもしそうなのだとしたら、たった一振りで鋼鉄の巨人をスクラップにするような化け物が俺の中に住んでいる……ということになるのだろうか？
分からない。
だが声と、俺の口から出るベーオウルフの言葉は合致した。
超常的な非日常が俺の中に潜んでいる。そして非日常――ベーオウルフが俺の体を乗っ取り、今は動かしている、という所か。
目の前で起きている現象は、その仮定で全部説明がついてしまう……何という事だろうか……。
とにかく、このままでは何もできない。
俺の体を取り戻さなくては……。

「引っ込んでいろ」

ベーオウルフが小さな声で言った。誰にも聞こえないレベルの小声……俺に話しかけているのだろうか。

「お前では死ぬだけだ」

確かに……あんな巨人を呼び出す化け物から逃げ出せる自信は欠片もなかった。
その証拠に、アクセルの体が白く光り出していた。
……何かを、するつもりらしい……

『対消滅……私の方が力の総量は多い。これで休眠しても――』
「消えろ」

ナニカの言葉を遮って、ベーオウルフが手を突き出していた。
ベーオウルフの手から放たれた見えない何かが衝撃波となってアクセルの体を襲う。

『くっ！』

ナニカがアクセルの体を動かして防御するが、衝撃波は簡単にアクセルの体を持ち上げて吹き飛ばしてしまった。
公園脇の民家の壁を突き抜け、轟音と埃を巻き上げながら、何件もの家をぶち抜きながら姿が見えなくなった。
これで休日の朝の静けさが一瞬で台無しなったこと請け合いだ。
当然、家屋や家具は破損しているだろう、けが人だって出ているかもしれない。その原因を作ったのは俺の体だ。
周辺住民には申し訳ない。
だが、俺は恐ろしくて仕方なかった。俺の中にこんな力が住んでいるなんて。

「ナンちゃん」

小牟の声がして振り向くと、彼女は俺の体の背後に立っており、銀の拳銃を至近距離で突きつけていた。

「すまんが撃つ。ちぃとばかし痛いぞ」

やめろ！　保身のためか、それとも小牟の身を案じてか、俺は大声で叫んでいた。やはり声にはならない。

引き金を引けば心臓を撃ち抜く位置に銃口はあった。撃てば死ぬ。そんな位置。

しかし小牟は一拍の間を置き、銃口を俺の大腿部に向けて変え、トリガーを引いた。

耳を劈く銃声。

ベーオウルフに体を乗っ取られている今、俺に痛覚があるのかは分からない。しかし痛覚云々以前に、銃弾は至近距離で発射されたに関わらず俺の脚を撃ち抜いていなかった。

銃口と脚との間の空間で、らせん回転する銃弾が止まっている。弾はまだ回転しているので先に進もうとしているようだ。だが、まるで壁が立ちはだかっているように前進できず、やがて弾は地面に落ちた。

「やはりな。念力か。厄介な奴じゃて」

「言いたいことはそれだけか？」

横っ飛びで距離を取ろうとする小牟をベーオウルフは見逃さなかった。

小牟に敗けない機敏な動きで、彼女の首根っこを掴んで持ち上げる。白い首筋に男の指が食い込んでいる。

「かはっ……！」

「破壊は創造。死は生……生は死……異次元同位体は必要ない。悲劇の起こらぬ世界を創らねばならない……」

ベーオウルフが小牟から手を放した。

しかし小牟の脚は地面には着かずに、逆にどんどん上空へと持ち上げられていく。ベーオウルフの手の動きに合わせて小牟の体は上昇していった。

「は、離さんかい！」

「……破壊する」

ベーオウルフが開いていた手を少し握った。丁度、小牟の体を握っているような形の手を、徐々に握り狭めていく。

「あっ……あああああああぁぁぁぁぁぁっ！！」

耳を塞ぎたくなる絶叫が小牟の口から飛び出した。

服や皮膚がベーオウルフの手の跡がついている。まるで子供が小さな人形を力いっぱい鷲掴みにしているようだった。見えない圧力が小牟の小さな体を締め上げ、身動き一つ取れていない。

念力、と小牟は言っていた。

その力が作用するのは外側だけではなかったようだ。体内からも何かされたのか、小牟が吐血する。

「ぐはっ……！」

やめろ！　これ以上は小牟が死んでしまう！

俺はベーオウルフが操る俺の体に掴みかかったが、触れることができずすり抜けてしまった。そのまま転倒してしまう。

急いで起き上がり、ベーオウルフを睨みつけた。

俺の顔は笑っていた。

瞳が爛々と輝き、口元が三日月形になるまで吊り上っている。一方的な暴力を愉しんでいる。夢の中で見た俺の狂気の笑みが目の前にあった。

「全ては静寂なる世界のために……」
「れ……零……児　――――ッ！！」

ベーオウルフがさらに力を込め、断末魔に思える悲鳴が響く。
……もう、やめてくれ……！
顔見知りを殺すのは、夢の中だけでたくさんだ！
俺はこの「エリア」でタスクやアラド、アクセルやエクセレンと一緒に……ただの日常を過ごしていたいだけなんだ！
ただの日常、俺が望んでいたのはそれだけだ……延々に続くと思っていた日々が、どうしてこんなことになるのだ！？
ベーオウルフ……頼むから、もうやめてくれ！

――日常……それは……お前が望んだ世界ではない……

声が聞こえた。ベーオウルフのだ。

――お前は望んだ……静寂なる世界を……だから、我は……

違う！
俺はそんなもの望んでなんかいない！
だからやめてくれ！　小牟を殺さないでくれ！

俺の願いは届かなかった。
ベーオウルフは手の力を益々強くしていく。
それに呼応するように絶叫。

……もう駄目だ……俺にはどうすることもできない……
俺は、無力だ……

もう、諦めた。
その時だ、

「待てぃ！！」

空から男の声が聞こえた。
だ、誰だ！？　この状況で、聞きなれない男の声。あまりの不信さに俺は辺りを見渡した。
誰もいなかった。やはり声は空中からだ。

「……」

ベーオウルフが小牟から視線を逸らした。
その視線の先は「ゆらい」でいた。工業用油が水面に広がったような、ゆらゆらと空間を曲げるその「ゆらぎ」はきたない虹にさえ思える。俺が、昨日の夢でみた「物質界」とやらの街で見た「ゆらぎ」と同じものだった。

「木よ、火よ」

男の声が聞こえるのはやはり「ゆらぎ」からだった。
ゆらゆらと広がっていた「ゆらぎ」が一変する。
色が黒く変わり、

「土よ、金よ。そして水よ！」

男の声に呼応して、「ゆらぎ」は黒い球状の空間へと変貌を遂げた。安いゲームのブラックホールのようになった「ゆらぎ」の中心に、小さく人影が見える。

「世を司る全ての事象よ、我に味方せよ！！」
「ッ――――？」

男の声が誰のものなのか、俺にはようやく理解することができた。
だが同時に激しい頭痛に苛まれる。
それはベーオウルフにも伝播したのか、奴は膝をついていた。
小牟に対する攻撃も止まっていた。
空中で力から解放された小牟は頭から地面に落下を始める……。

「うおおおぉぉ――有栖流・鬼門解放ッ！！」

その光景を見た男の叫びが轟く。
刹那、黒変した「ゆらぎ」はガラスのように砕け散った。破片は太陽を照り返すことなく一瞬で消える。
中から飛び出してきたのは、赤いジャケットを着込んだ筋肉質の男だった。黒髪だが、特徴的な左側頭部の白髪が太陽の光で銀色に

輝いて見える。
男は落下する小牟を受け止めて着地した。
「結果は重畳(ちょうじょう)だ」
小牟を抱き上げた男を　――　俺は知っていた。
「待たせたな、小牟」
「……やっぱり……ぬしは、わしのヒーローじゃな、零児」
弱々しく呟く小牟を、力強く抱き上げている男の名は零児。
有栖　零児。
俺が夢で見た、小牟と同じ「物質界」の人間だった。
「……何者だ？」
頭を押さえ、うずくまったままのベーオウルフが訊いた。
零児は応えず、周囲の様子を観察する。公園には砕かれた巨人の金属片が散らばり、大穴が開けられた民家も見られる。そして、弱った小牟以外には俺の体を使うベーオウルフ以外に人の姿はない。
……零児の眉間に深いしわが刻まれた。
小牟をベンチにそっと寝かせると、零児は刀の柄を手に取り、
「貴様に名乗る名はないッ！！」
怒声を発したのだった　――……

鋼鉄の駄狼Ｒ　～ＨＥＲＯ～（後書き）

ヒーローは遅れてやって来る。
私には零児がロム兄さんとダブって見えます。
今回は零児に言わせてみたいセリフを言わせることができたので楽しかったです。
あと一つ言わせてみたいセリフ
「俺の名は零児。地球は狙われている」とか言ってもらいたいですね。
→元ネタが分かる人がいるかは別として。
では次回も熱血１００％で頑張ります。

鋼鉄の駄狼Ｒ　～ベーオウルフとキョウスケ・ナンブ～（前書き）

戦闘回です。
臨場感や躍動感はあまり出せてないかもしれないです。
誰かアドバイスくれると嬉しいです。

……俺は……何をやっている……？
強い衝撃により目覚めた俺の、久しぶりの思考がそれだった。

もう……俺は、自分の名前も思い出せない……理由も動機も分からぬまま……俺は、ただ、目の前にいた男に叩き飛ばされていた。
紅いジャケットを着ている髪の先端が茶髪の男……。
覚えている。忘れるはずもない……自分の名前を忘れたとしても、奴のことだけは……決して忘れない。

ベーオウルフ。

俺の宿敵、仇敵、好敵手。
靄に抱かれたような夢心地のまま、俺は、奴に吹き飛ばされた。
でも、一体なぜだ？
分からない。何も分からない。俺が誰なのか、何故こんな目にあっているのかも、全て分からないことだらけだった……

――油断、しました……

女の声が聞こえた。
耳に？　心に？　魂に？　どこに聞こえたのかすら分からない。
それ程までに俺の意識は不安定だった。

――事態は急を要する……ベーオルフを休眠させねば、世界は終わってしまう……

聞き覚えのある名前だった。

ベーオウルフ……俺の敵の名前……なぜ、敵と思うのか？　理由なんて、当の昔に忘れてしまったさ。

俺と奴が戦うことに理由なんて必要ない。

俺が俺で、奴がベーオウルフだから……俺は奴を倒す……ただそれだけだ……。

――過去生と現実が混じり合っているようですね……

過去生？　知らない、そんなモノは。

ベーオウルフは宿敵だ。だから、俺はベーオウルフを倒す。ただ倒す。この命に代えてでも構わない……俺にとってベーオウルフは倒すべき対象……それだけなのさ、これがな。

――戦いの性から逃れられないのですね……アクセル・アルマー……哀れな男

アクセル・アルマー、それが俺の名か……だが、実感がわかないし、どうでも良いことだった。

俺は、ベーオウルフを倒す。

ベーオウルフを屠る。ベーオウルフを刈る……きっと、それが俺が存在意義なのだろう……

――いいでしょう。貴方の思いの力……使わせてもらいます……

声は響く。俺の五臓六腑に響き渡る。

――ベーオウルフを倒してみせなさい。私が力を貸しましょう

ベーオウルフ。

鋼鉄の孤狼――ベーオウルフ！　奴だけは俺の手で……

奴との戦いは果てしない昔から続いてきた。

そうさ。奴との決着をつけるためだけに、俺はこの世界で生きてきたのだ、これがな。

――命を燃やしなさい、今がその時です

「うおおおぉぉぉぉぉぉっ！！」

瞬間。

体は灼熱し、血液が逆流した。

家の瓦礫を押しのけて立ち上がる。

そして俺は、噴き出してくる力に背中を押されながら、あの公園へ足を向けて歩き出したのだ――

スパロボ学院　～OGだよ、全員集合！～

鋼鉄の駄狼R　～ベーオウルフとキョウスケ・ナンブ～

有栖（ありす）　零児（れいじ）が俺の体を見下ろしていた。

夢で見た「物質界」から小牟を探してやってきた男 ―― 有栖零児。

紅いジャケットを羽織り、鍛え上げられた右腕は、腰に下げられている刀の柄にかけられている。特徴的な左側頭部の白髪を持ち、俺に似た顔立ちをしていたが、表情には怒りが如実に現れていた。

原因はただ一つ。

急な頭痛に膝をついている俺の体の所業だった。

「小牟（シャオムウ）が世話になったようだな」

ベンチに横になった小牟を一瞥すると、俺を睨んでくる。

「相応の礼はさせてもらおう。そして吐いてもらうぞ。俺たちをこの世界に呼んだ理由をな」

「ふん……そうか。お前も異次元同位体か……」

止まない頭痛に頭を押さえながら、ベーオウルフが俺の体を立ち上がらせる。膝に手をついて起き上がると目まいが襲ってきた。

痛み……この感覚が、俺の意識と体の繋がりを強くしたのかもしれない。

その証拠に、まるでテレビでも見ているように自分の体が見えていた視点が変わっていた。

眼を通して見える……それはいつも見ている俺の視界だった。俺の体が見ている眼前の光景に零児が映り込んでいて、彼の背後にはぐったりと横たわる小牟の姿。

すぐにでも駆け寄って彼女の無事を確かめたかったが、やはり見えるだけで、体の方は自由が利かなかった。

「容赦はしない。まずは動けなくなってもらうぞ」

零児が刀の鍔を指で押した。チキ、と時代劇の殺陣（たて）で聞こえそうな音が耳に残る。

それにしても零児の持っていた刀は奇妙な形をしていた。いや、刀は普通の日本刀に見えるが、それを収めているモノが見慣れないモノだった。

鞘に納めた2本の刀と巨大な銃（おそらくショットガンの類の大きさ）が一つのホルダーのようなモノに収まっている。

零児はホルダーの一番上の刀を握り締めていた。

一方、俺の体は動かない。体の感覚は戻っていたが、零児に対して構えることもせず、ただ立っているだけだった。

「ふんっ……」

「行くぞ！」

宣言の直後、零児の姿が消えた。正面の視界からだ。

姿勢を低くして俺の懐に飛び込んだのだと気づいた時には、刀が鞘から抜き放たれる瞬間だった。

「火鱗（かりん）ッ！！」

神速の抜刀術　――　俺の語彙ではそう表現するしかできない。

正に目にもとまらぬ早業で抜き放たれた日本刀からは炎が上がり、切っ先が俺の腰骨と肩の間を駆け抜けていた。

肉が焦げ、切断された肉と血管から血が噴き出す。

……なんてことは、一切なかった。

頭痛を紛らわせる程の痛みはなく、零児が火鱗と呼んだ刀は火の粉を散らしながら空中を舞っていた。

切先が無くなっていた。零児が降りぬいた火鱗は根元から折れ、その先が空中でクルクルと回転した後に地面に突き刺さる。

「くっ、柊樹（ハリウッド）ッ！！」

折れた火鱗を捨てると、ホルダーの下にグラインドされた散弾銃を手に取った。

そして先ほど同様に躊躇なく引き金を引く。

数回。轟音と共に発射された散弾は、小牟の放った銀の弾丸と同じで、空中で静止し勢いを失った後地面に転がり落ちる。

零児の顔が引きつっていた。信じられないモノを目の当たりにした。そんな時に人が見せる表情だ。つい先ほどまで、俺だって見せていたに違いないそれだ。

俺だって刀で切られて無傷だったり、銃弾を空中で止める人間を見たら、開いた口が塞がらなくなること請け合いだろう……零児も躊躇したのか、一瞬 ―― ほんのコンマ数秒だろう ―― 動きが鈍った。

―― 破壊する

ベーオウルフの声が聞こえたかと思うと、直後、零児の持っていた全ての武器がはじけ飛んだ。刀は折れて金属片になり、銃はバラバラに分解されてしまう。

握っていたショットガンの感触が失われた零児も、驚きを隠せていなかった。

……その一瞬が命取りとなる。

零児の足が地面から離れ ――

「ぐはっ！」

――そして1m程空中に浮きあがった直後、柔道の背負い投げとは違う、軌道が真っ直ぐの垂直落下……背中から地面に叩きつけられていた。
おそらく、ベーオウルフに体の自由を奪われていたのだろう。
零児は受け身も取れずに全身を強打し、悲鳴と共に肺から空気が逃げ出す。零児は衝撃と痛みで筋肉が痙攣し呼吸がままならないながら、かすれた声を上げ、俺の体を睨んでいた。

「念動……力か……！　くそ、ぬかった……！」
「同位体は同次元に存在してはならない」

ベーオウルフが地面に大の字になって動けない零児を見下ろした。
音もなく……いや、地面と零児の体が軋む音をさせて、零児が見えない力で押しつぶされていく。その証明とばかりに、彼の周囲の土が窪んだ。零児が地面にめり込んでいく……彼はドンドン重くなっていく体に自力で動けずにいた。
このままでは……潰れたカエルのような無残な死体になるのを待つだけだ……！
零児は声も出せない。俺も手が出せない。
なす術もなく……俺は零児が地面の裂け目に飲み込まれていくのを、見ているしかないのだろうか？

「死は生、生は死。延々に巡る輪の中に還るがいい」
『ええ。繰り返す生　――　輪廻。ですが、そこに還るのは貴方が先　――』

女口調のアクセルの声が聞こえた。
ベーオウルフが俺の体を反転させる。振り返った先には、住宅街の家に大穴を開けて埋もれている筈のアクセルが立っていた。
目立った外傷は見当たらない。

代わりに見慣れない赤い水玉タトゥーが、たれ目がちのアクセルの目元に増えている。と ――

『ベーオウルフゥ ――――― ッ！！』

アクセルの雰囲気が一変した。

『ベーオウルフ！ ベーオウルフ、貴様は殺す！！』

ナニカに憑りつかれ女口調だったアクセルが突然獣のように吠えだした。

公園で出くわした時より異様な空気を生み出しながら、俺の体の方へと走ってきた。

アクセルは蒼髭流格闘術（ソウシリュウ）の師範で、免許皆伝の腕前を持つ格闘家だ。脚力も並の人間の比ではない……しかし、早いッ！ １０m程の距離を1秒程で詰めてくる異様な速度に俺は寒気を覚える。

アクセルの顔がまじかに見えた。

目が虚ろでまるで焦点が合っていない。見えているのか？ 俺が

――

『玄武剛弾（げんぶごうだん）ッ！！』

―― 横っ面から襲ってきた衝撃に俺の思考は中断された。

蒼髭流格闘術の奥義、玄武剛弾。

アクセルの尤も得意とする技で、闘気を拳にのせて放つ直突きだ。

何度かお見舞いされたことのある俺は知っている。この技の威力は折り紙つきで、意識を刈り取るには十分すぎる程の威力だった。

……そう。威力だった、はずだ。

今のは衝撃は強いが痛みは弱く、耐えるのは容易いことだった。

ベーオウルフが体を使っているからだろうか？ やけに冷静にアク

セルの動きが見ていることができる。

「アクセル……！」

『ベーオウルフゥ　――――――　ッ！！！』

アクセルが地面を蹴ってジャンプした。

空中で体を捻り後頭部に回し蹴りを放ってくる。俺は避けたくても避けられない。ベーオウルフが体を操っているからな。

しかし不思議と恐怖感は感じなかった。

だからだろうか？　ベーオウルフは俺の体を動かさなかった。後頭部の真下　――　首筋に回し蹴りがクリーンヒット……一般人なら頸椎損傷して死んでしまうかもしれない位置に、無防備に格闘家の蹴りを受けてしまう。

だが俺は痛みを感じなかった。

それどころか、この程度では俺は死なない、という考えさえ頭をよぎる。

『舞朱雀（まいすざく）ッ！！』

アクセルは蹴りの反動を利用して、近くにあった木へと飛び、木の幹を蹴って再び俺に向かって飛びかかってきた。

高速のすれ違いざまに、アクセル必殺の肘が頭に命中してしまう。

衝撃、僅かな痛みに俺の体が揺れた。

「むっ……！」

『死ね、ベーオウルフ！！』

勝機とみたのか、アクセルが大振りに肘を構えた。

蒼髭流格闘術の極意は闘気と肘にあり……と以前聞いたことがある。幼い頃は俺もアクセルと同じ道場に通っていたが、辞めてしま

ったため身に着けることはできなかった闘気というものが、目に見える青白い光になっていた。
光がアクセルの肘に集まる。
奴は体を屈めて俺の体の前にしゃがみ込み、光り輝く肘を俺に向けて打ち上げて来た。
『奥義　麒麟（きりん）ッ！！』
人体で最も硬く、凶器となりうる箇所である肘が、俺の鳩尾あたりを狙ってくる。
鳩尾は人体の急所だ。その奥には胃があり、肘で内臓を破壊されれば大量に吐血してしまうだろうし、それを手当しなければ簡単に人は死ぬ。闘気云々関係なしに危険な急所であることに違いはない。
躊躇なくアクセルは狙ってくる。
殺す気だ。俺を、本気で。冷たいものが背中を駆け抜ける。
「調子に乗るな」
『――――――ッ！？』
肘が俺の体に触れるよりも早く、アクセルの体は吹き飛ばされていた。
触れたわけでもないのに凄い勢いで公園の木に叩きつけられる。
小牟、零児の言っていた念力……？　念動力というモノのようだ。
アクセルがぶつかった木がミシミシと鈍いを音を立てて折れ、アクセルもその場に崩れ落ちた。
前のめりに倒れ、ピクリとも動かなくなる。
「出ろ」
ベーオウルフがアクセルに言った。

「アクセルは、もう使い物にならんはずだ。出ろ」
『……』
――ふふ……
倒れているアクセルから声が響いてきた。
男の声ではない。女の声だ。それも頭の中に直接響いてくる……
俺が聞いたベーオウルフの声に質が似ていた。
状況判断なんて必要なかった。
感覚で分かる。この声の主がアクセルの体を乗っ取っていたナニカだ。
アクセルの体が薄らと光っていた。白い膜のようなモノがアクセルの体を覆っていて、声はそこから響いてきていた。
――酷い人。あの時のように一瞬で楽にしてあげればいいのに
「黙れ。我は全てを破壊する。アクセルだろうがお前だろうが関係ない。破壊する。全てだ ――全ては、静寂なる世界のために……」
――ふふ……危険ですね。平穏なる世界に貴方は必要ない。だから……
女の声が途切れた。
死んだのか？　声の主はアクセルに憑いていた。いや、憑いていたとするのなら、声の主は悪霊的ものだろうから死にはしないだろう。そのように仮定すれば、ベーオウルフの攻撃でダメージを受け、何処かに去ってしまったと考えるのが妥当だろう。
俺の考えは、見事に的を、外していた。

――眠りなさい

再び声がしたと思ったら、アクセルの体が強く発光した。
白く、眩しい白熱灯のような光。それがアクセルからではなく、彼を包んでいた白い膜から放たれていることに気付くのに長くはかからなかった。
光が収束して、アクセルの体から離れたからだ。
集まった光は小さな球体を形作った。ソフトボール程の大きさで、白く発光をしながら空中に浮いている。
女の声は、その光から聞こえていた。

「むっ……？」

光が球体になるのとほぼ同時に、ベーオウルフが呻き、俺の体は膝をついていた。
なんだ……？　何をされたのか理解できないが、俺の体がブルブルと震え始めたのだ。同時に頭痛が酷くなり、嘔気が込み上げてくる。
く、苦しい。
ベーオウルフも苦しそうに「おのれ……」と声を上げていた。ベーオウルフの感覚が俺に流れ込んできているのかもしれない。

「対消滅……いつの間に……」
――油断は身を滅ぼす。アクセルの体に触れたのが運の尽きです
「力を流し込むためだけに奴を使い捨てたか……」

……アクセルのことに間違いないだろう。対消滅、というモノのためにアクセルをベーオウルフにぶつけた。

そして光の目論見は達せられた。
効果は抜群だった。ベーオウルフから俺に苦痛が流れ込んでくる。致命的……とはまではいかないが、効果的にダメージは与えることができていたようだ。
しかし俺が感じているのがベーオウルフの感覚そのものだとすれば、奴は相当の負けず嫌いと思われるな。苦しみに耐えながら、奴は俺の体を立ち上がらせていたのだから。

「ふんっ……だがこの程度で、我を封じようとは片腹痛い」
――いいえ、これで十分です

言い切った光の声に、ベーオウルフは「なんだと？」と不機嫌そうに答えていた。
僅かに眉尻が上がる感覚を覚えた。苦痛を共有するたびに、俺の体の感覚が戻ってきているように感じる。ベーオウルフが弱っている、または体の支配権が俺に戻っているのかもしれないな。

――今の貴方なら、私が相手をするまでもありません。後ろを御覧なさい

声のするままに意識を後ろに向けると、俺の体はそれに従った。単にベーオウルフと後ろに振り向くタイミングが被っただけなのか、俺が体を動かせたのかは分からない。
この状況で、俺に分かることはただ1つ。
俺の目の前には、有栖　零児が立ち塞がっていた。
眉間に皺を寄せ、青筋をたてながら……固そうな拳を豪快に鳴らしていた……そう、俺の体には危険が迫っていた。零児という名前の脅威である。
それだけはしっかりと理解できていた。
ベーオウルフの攻撃で一方的にやられていた零児だが、アクセル

の登場で念力から解放されていたようで、

「霊力を波紋に変えて打ち込む！」

鍛え上げられた腕から剛拳が放ってきた。

視界が握り拳で遮られた直後、ガツンっと頭をシェイクするショックが俺を襲う。口から鮮血が滲む。痛い。拳が触れ、口の中を切った痛みが、体の輪郭がよりくっきりと俺に認識させる。

殴られた……？

父さんにも殴られたことないのに……！　……訂正、激痛で思考がおかしくなっている。アクセルの攻撃ですら痛みを感じなかった俺の神経を、零児のパンチ1発が酷く刺激していた。

「これは小牟の分！」

2発目。ボクサーの教科書に載せれそうな、キレイなボディーブローの衝撃が払うを突き抜けた。口から貯まっていた血が出る。

腹を押さえてうずくまりたい衝動に駆られた。

「お　──　おのれ　──」

「これは小牟の分！　これも小牟の分だ！」

「──　ブフゥ！？」

3発目、4発目と俺の体に激痛が走り、ベーオウルフがなす術もなく殴られる。

念力を使えば勝負は一瞬だと思うのだが、アクセルから出た光にやられた「対消滅」とやらが利いている様子だった。

はっきり言って洒落にならん。

殴られているのは俺の体だからな。

しかも零児は鍛えた肉体の膂力だけでなく、霊力を波紋に変えて

打ち込んでいるらしい（なんのこっちゃ？）。
頭が痛み、膝が笑う。
そんな俺を尻目に、零児は手で印を作り、九字を切っていた。

「火よ、水よ！　木よ、土よ！　そして金よ！　我に力を与えたまえ！」
「ちょ、ちょっと待っ　――」

声が出せた。

「もはや問答無用！　震えるぞハート……燃え尽きる程にヒート！
黄金に輝く光の力を持ちて、我、闇の者を封じせしめん！」

しかし俺の言葉に零児は耳を傾けることはなく、彼の右拳には金色の光が収束していた。霊力を波紋に変えたモノらしいが、正直、俺には理解できん。
逃げ出したい気持ちに駆られて後ずさると、俺の足はそれに応えてくれた。
もう、ベーオウルフの声は聞こえない。
いつの間にか、俺の体は俺の意志で動くようになっていた。
だから、お願いだから、止めて欲しい。
暴力反対！

「有栖流裏奥義　――　五行封印、霊波紋疾走（オーバードライブッ）！！」
「うぉ……！」

零児の光り輝く拳が容赦なく俺の胸に突き立てられた。
ドクンッ、と零児の拳から光が消え、胸の奥に何かが突き抜けて

いく。
肉体的な衝撃や痛みも勿論あった。この一撃が最も重かったと言ってもいいし、心臓が止まってしまうのではと脳裏に過りもした。
しかし、それらが些細なことに思えてしまう程に、今、俺の頭の中ではベーオウルフの声が木霊している。

――対消滅……未知の封印術……休眠するしか術は残っていない……

俺に語りかけてくるのではなく独り言ではあったが、これまでで最も大きな声だった。

――世界には……悲劇が多すぎる……

大きかった声も徐々に小さく、遠くへと消えていき、

――我は破壊者。全てを破壊する……全ては、静寂なる世界のために……

声は、そこで途切れた。
だが、これだけは確信を持って言うことができる。
ベーオウルフは消えていない。
俺の中の何処かで眠っているだけだ……。
そしてベーオウルフの声が消えた俺の体には、激しい痛みがぶり

返してきていた。
零児につけられた傷だけではない。まるで……体とは違う見えない何かを酷使しすぎたかのように……耐えがたい虚脱感と激痛が俺を襲ったのだ。
気づいた時に既に俺は前のめりに倒れていて、頬に触れる冷たい土の感触が気持ち良かった……。

「悪霊、成敗ッ！！」

零児の啖呵が聞こえた。
ベーオウルフは眠りについた……自由になる体に喜びを覚え、痛みを受け入れ、俺は再び立ち上がるべく体に力を込めるのだった

――……

鋼鉄の駄狼R　～ベーオウルフとキョウスケ・ナンブ～（後書き）

次回予告

ベーオウルフ
鋼鉄の孤狼　――　赤き鉄の子宮に眠る孤独な狼は目覚め、再び微睡に落ちた
彼は何だ？　誰も答える術など持たない
だがキョウスケは出会う
答えを知るその者の名は……？

次回、「遭遇」
平穏は瞬く間に崩れ去った。

こんにちは。
最近、「装甲騎兵ボトムズ」の世界観にだだハマリな北洋です。
キリコかっこいい……むせるぜ（注：褒め言葉）
そんな訳で「ボトムズ」風に次回予告を書いてみた……難しい（苦笑）
「ボトムズ」の次回予告のレベルの高さは異常。あの雰囲気を文章で出してみたいと思っている今日この頃なのでした。

結局、後半パロディに走ってしまった（汗）。
ただ零児に「成敗」と言わせたかったんです……反省。
ではでは、失礼しました。

鋼鉄の駄狼Ｒ　～遭遇～（前書き）

冒頭は零児視点。途中からキョウスケ視点で書いています。

鋼鉄の駄狼R　～遭遇～

似ている。それが俺の第一印象だった。

俺の名は有栖　零児。特殊組織「森羅」のエージェントをしている男だ。

今、目の前に1人の男が倒れていた。

その男は赤いジャケットを着ている。俺の着ている森羅指定のジャケットに良く似ているし、背格好も、顔立ちまでそっくりで、似てないのは髪の毛だけであった。白髪が混じった俺と違って、茶髪の先を金色に染めている。

そう。似ているのだ。

俺　――　有栖　零児と倒れている男は瓜二つと言ってよかった。

「……やったか」

慎重に、先ほど殴り倒した男へと近づく。警戒を緩めるわけにはいかなかった。

俺は男の念動力で一度殺されかけた……圧倒的な力で蹂躙される恐怖と、死という言葉が頭の中をよぎったのだ。これまで、念動力を武器として使う敵とは何度も相対してきた俺だったが、この男ほど強力な力は初めてだった。

火鱗（かりん）、地禮（ちらい）、柊樹（ハリウッド）……長年愛用してきた武器が一瞬にして砕かれた。

おそらく、小牟（シャオムウ）もあの力にやられたのだろう。

……正直、俺が男を倒せたのは運が良かったからに他ならない。

有栖流裏奥義、五行封印（ごぎょうふういん）。

俺が素手で放てる最大最強の封印術の名だ。

男に憑いている悪霊を封じれていなければ……旗色はかなり悪いことになるだろう。覚悟を決めねばならない、絶体絶命の状況になりうる瀬戸際……今がその時だ　――――　と、男が動いた。

地面に手を付きながらゆっくりと起き上がってくる。

ジャケットは土埃にまみれ、口元からは血が滲んでいた。

五行封印は俺の霊力を直接打ち込む必要があったから、俺も死に目に会って余裕はなかったし、申し訳ないとは思ったが殴らざるをえなかった。

倒れていた男は傷を負いながらも立ち上がってきた。

……だが、それは重要な事ではない。

肝心なことはただ一つ　――

「おい、貴様は何者だ？」

――　男の中の妖が封印できたか、否か、だった。

「……俺は　――」

男の口がボソボソと言葉を紡ぐ　――

鋼鉄の駄狼Ｒ　～遭遇～

「――　俺の名前は……キョウスケ・ナンブ……」

目の前の男　――　有栖　零児に向かって言ってやった。

少し喋っただけで口の中がしみる。零児の鉄拳で口の中が切れて

しまったのだ。血が混じって妙な味のする唾液を地面に吐き捨てる。やはり唾は地面を赤く染め、歯が折れていないだけマシかと思い頬を擦った。

痛む、痛覚だ。

体の輪郭も分かるし、思うように動かすことができる。

ベーオウルフではない、俺が、俺の体を動かしているのだ。痛いことは痛いのだが、逆に今はその事が妙に嬉しかった。

「すまなかった。礼を言わせてくれ、有栖　零児」

「何……っ？」

俺の言葉に零児が身構える。左拳を構え、左半身を俺の方に向け、右拳を引いていた。正拳でも繰り出せそうな姿勢で俺を警戒していた。

ああ、そうか。

零児は俺のことを知らないのだったな。にも関わらず、俺の方は零児の名を知っていて呼びかけるというのは奇妙な話だろう。実に不思議な話なのだが、俺の方は零児の事を夢で見て知っているのだ。

夢の中の住民、有栖　零児が現実に現れる。

まったく、俺の嫌いな非日常であることは間違いないのだが、この2日の体験で俺にも相当の耐性が出来上がってしまったらしい。

……悲しいことにな。

「零児、少し落ち着いてくれ。お前の話は小牟から聞いていた。お前が異世界の住民だと言うことも知っている」

今は夢の件は伏せておいた方が無難かもしれん。説明はシンプルに。シンプル　イズ　ベストだ。

「それよりもお前には感謝している。お前が来なければ……俺は小

牟を……」

「……どうやら、本人の方で間違いなさそうだな」

ベーオウルフでないことを確信したのか、零児は拳を収めてくれた。零児も小牟と同じく奴の気配を感じることができるのかもしれんな。

零児が近づいてきて肩に手を添えてきた。

途端に、小さな電流が体を奔ったような感覚。痛み……とも取れる感覚で体が敏感になっているようだった。もしかすると……ベーオウルフが好き放題してくれた影響かもしないな。

「俺の方こそすまない。奴を封じるにはこうするしかなかった……」

「構わないさ。俺も初めての経験だったからな……お前が止めてくれなければどうなっていたことか……」

考えるだけでぞっとする。

ベーオウルフは小牟や零児を子ども扱いしていた。武器を持った人間を、だ。

あのまま体の自由が戻らなかったら、俺は悪夢のように――

――いや、考えるのは止めよう。もう済んだことだからな。

ベーオウルフは封印された。

今後の対処は検討せねばなるまいが、当面の間は大丈夫だと思いたい……

「それより、アクセルだ」

ベーオウルフにやられて動かないアクセルに目を向けた。

相変わらず前のめりに倒れていて身動き一つしていない。

「アクセル？　やはり、あれはアクセルだったのか？」

「知っているのか？」
「ああ。昔、一緒に戦ったことがある。エンドレス・フロンティアという世界での話だが……何故ここにアクセルがいる？」
エンドレス・フロンティア？　確か、カグヤちゃんが住んでいた世界の名前だと小牟が言っていたな。
アクセルの奴、一体いつの間にそんな世界に行っていたのだろうか？
週1くらいの頻度で襲撃を受けていた俺から言わせてもらうと、奴に異世界に飛んで大冒険する時間はなかったと思うのだが……まぁ、いい。
今はアクセルの体の方が心配だった。
体は頑丈な方のはずだが、へし折れる程の勢いで木に叩きつけられたのだ。ただでは済むまい、大怪我していてもおかしくはないぞ。
あと何か忘れている気がするな。
兎に角、俺はアクセルの傍にしゃがみ込み、
「起きろ、アクセル」
と肩を揺すってみた。反応はなかった。
「おい　――」
「止めろ。今は無理に動かさん方がいい」
さら強く刺激しようとしたが零児に制止された。
零児は俺に指示を出してゆっくり、慎重に2人でアクセルの体を仰向けに戻した。顔色は……悪くない。だが目は閉じたままだ。
零児はアクセルの口元と首筋に軽く手を添えた。
「呼吸、脈拍は問題なさそうだな。ただ……」

零児の言葉が詰まり、それが俺の猜疑心を煽り立てる。

「ただ、なんだ？」

「……魂魄の気配を感じない……」

「魂魄……だと？」

女がよく携帯している、パウダーとパフを詰めた鏡付きの化粧道具のことか？

そりゃ、コンパクトやがな！

……つまらん……やはり、脳内1人ツッコミなどするものではないな。

しかし魂魄とは……これまた聞きなれない単語である。多分、オカルト方面の単語だったように思うが……俺はバイクや賭博用語なら詳しいのだけど、他の専門用語はさっぱりだ。

零児に説明を要求することにした。

「なんだそれは？」

「魂魄、霊魂……様々な言い方はあるが人間の魂のことだ。妖の中には力をつけるために人間の魂を好んで喰らう種類も存在している」

そうなのか？　それは大変なものだな。

俺の反応は危機感がないとヤジられるだろうか？　だが俺には幽霊や魂の類は見えない。見えないものに危機感なんて持ちようがない。俺は現実主義（リアリスト）なのだ。

「俺の専門は妖の撃滅と封印だ。魂魄の探索や感知は専門外になるのだが……」

「……で、結果は？」

「うむ。専門外だが……いや、専門外の俺でも分かる。……違うな、

専門外だから感じられないだけかもしれないが……」

零児が言葉を濁し、続けた。

「アクセルからは魂が感じられない。まるで抜け殻……ここにあるのはアクセルの体だけだ」

「魂がない……では死ん――」

「いや脈はある。呼吸もしている。肉体的には生きている……だから分からん。俺の気のせいであればいいが」

霊が見えるだろう零児が言うと実に不吉である。

魂が無くなれば人は死んでしまう、これはオカルトの知識が乏しい俺でも知っている事実だった。だがアクセルの体に生命反応はある。要するに生きているのだ。

では零児の勘違いなのではなかろうか？　魂がない、というのは。

しかしアクセルの意識は戻らない。耳元で大声を出してみたが反応はない……不安は俺の胸で徐々に大きく育ち始めていた。

「……一度、病院で精密検査を受けた方がいいな」

零児が言った。

「魂魄の件は……俺の勘違いかもしれん。アクセルは木に叩きつけられていた。肉体的な問題が……考えたくないが、脳に何かあったかも――」

「零児、そこまでだ」

俺は零児の言葉を遮った。

「ここで考えても仕方ない。アクセルを病院に連れて行くことが今

は先決だ。
それにな、このバカがこの位でくたばるタマか？　どうせ１週間もしたら、アホみたいな顔して俺に喧嘩吹っかけてくるに違いないさ」

そうさ。アクセルが死んでたまるものか。
バカでアホで喧嘩っ早くて悪ぶってるわりには何処か憎めない間抜けなアクセル。こんな奴でも俺の幼馴染なのだ。毎週の襲撃には辟易とさせられたことも多いが、それが無くなるなんて考えたこともなかった……。
だから大丈夫だ。
アクセルはすぐに目を覚まして、俺に喧嘩をしかけてくるさ。そして黒星を重ねる、それが俺たちの日常なのだ。
……奴を殺すのは、悪夢の中だけで十分だ……！

「行こう、零児　――　ッ！」
「その体では無理だ。俺が背負おう」
「……すまん」

アクセルを運ぶのは無理そうな俺に代わって零児がアクセルを背負う。
なるべく早くアクセルを医者に見せなければならない。この辺りで一番近い病院と言えば「カイメラ医院」だったか？　歩いて１０分少々だったはずだ　――

――と。

俺の意識に違和感が残った。
何か忘れている。それも大切な何かだ。
取り返しのつかないことになる……そんな予感もする。
……そうだ、思い出した。

アクセル……アクセルの体に憑いていた光は何処へ行った？

「……ん？　小牟、何処だ？」

零児の声に小牟が寝かされたベンチに視線を向けた。

この公園は広くはなく、ベンチも2、3個しか用意されていない。

その内の1つに小牟は寝かされていたはず……しかし、いない。

公園内を見渡すも、俺と零児以外の人影は見えなかった。

異常な話だ。鉄の巨人が召喚され、木が倒壊し、周囲の家に大穴が空いていた。それだけの騒ぎに周辺住民が1人も集まってこない。

退屈で平和な住宅街の住民が野次馬根性を発揮しないなんて普通じゃない。

なんなのだ、この公園は？

普通ではない。異常だ。

『ふふ　――』

声がした。

頭上からだ。

それも小牟の声……恐る恐る空を見上げると……居た。

――小牟が空中に浮いていた！

俺の頭上4～5m程の高さ、視界の端にも入らない高さで小牟はあぐらをかいて座っていた。プカプカ、なんて浮遊感のある擬音で表現はできまい。まるで床や地面に腰を下ろしているかのように、どっしりと空中から俺たちを見下ろしていた。

「小牟ッ！」
『――　零児さん』
「くっ！　貴様、小牟ではないな！」

零児が小牟に向かって叫んでいた。
俺に見えているのは確かに小牟だったし、声も彼女のものだった。
しかし……違う。
小牟は零児のことを呼び捨てにしていた。空中浮遊という怪奇現象を、棚に上げてもいい位の異常さである。アクセルの女言葉と同等には違和感を覚える。
そして目に見えて違う点が一つあった。
小牟の目元に赤い水玉タトゥーが浮かび上がっている。アクセルやベーオウルフに操られた俺に見られたモノと同じだった。

『ベーオウルフの封印、お疲れ様でした』

小牟の声でナニカが喋る。

『まさか異分子の貴方がこれほど役に立つとは思いもしませんでしたよ。それに免じて仕事を与えましょう、ベーオウルフの監視です』
「黙れ！　妖め、早く小牟から出るんだ！」

零児は怒っていた。ベーオウルフにそうしたように、眉間に皺を寄せて小牟を睨んでいる。
いや、小牟ではないな。零児が妖と言った以上、小牟には何か憑いている。正体なんて容易に想像がつく。
アクセルの体から分離したあの白い光だろう。

『ふふ……』

小牟の口元が歪んでいた。三日月のような形に頬が吊り上っている。底抜けに明るい小牟の笑顔とは異質な笑いだった。

『却下です』

「なんだと!?」

『貴方とこの体が一緒にいれば、それだけベーオウルフに与える影響が強くなります。世界が終るその日まで、この異分子は私が預からせてもらいますよ』

世界の終りだと? こいつも、ベーオウルフと同じで意味不明なことを言う口か?

耳を傾ける必要などない。今は小牟を取り返すのが先決だ。

「そうはさせるか ――ッ!?」

銃声が轟いた。

飛び上がりそうな勢いだった零児の足元に銃弾が撃ち込まれている。小牟が銀色の拳銃を持ち出して、発砲していた。

『ふふ、武器もないのに息巻いても可愛いだけですよ、坊や』

小牟の手の銃口から硝煙の匂いがしそうだった。

確かにナニカの言う通り、俺たちに武器は何1つない。ただの一般人である俺は元より、「森羅」のエージェントと言う零児でさえベーオウルフに武器を全て破壊されているのだ。

しかも相手は空中にいる……手の出しようがなかった。

『では御2人とも、またお会いしましょう』

小牟の傍の空間が「ゆらぎ」始めた。鉄の巨人を呼び出したモノ

と同じに見えるが、サイズは小さい。小牟の体が通れるサイズだ。

「待て！」

『ふふ、御機嫌よう　――』

「待てぇ　――――　ッ！！」

零児が絶叫する。だが手が出せなかった。

零児はアクセルを背負っていたし、俺は4～5mの高さまで飛び上がることなんてできるはずもなかった。

『――　全ては、平穏なる世界のために　――……』

声の残滓を残して、小牟の体は「ゆらぎ」の中に消えて行った。

「ゆらぎ」も消滅し、残されたのはただの青空だった。

「くそっ！　何てことだ、目の前で小牟を連れて行かれるとは……！」

「……小牟」

もういない。

正体不明のナニカに小牟は連れて行かれてしまった。「ゆらぎ」なんてモノに飲み込まれてしまったのでは行先も分からない……まるであの夢の再現のように感じられた。

出会ってまだ1日だし、俺は小牟の詳しいことはほとんど知らない。しかしそれは大した問題じゃないのかもしれん……俺は知り合いが窮地に立たされているのに何もできなかったのだから。

小牟の時も、零児の時も、アクセルの時も……！

あの悪夢の時でさえ俺は何もできなかった。

無力だ……俺にはそれが無性に腹立たしく感じられた。

「一体……奴は何者なんだ……？」

ただの独り言だ。誰も答えてくれるはずのない、な。

答えが分かるはずもなし。奴は人外で、ベーオウルフと同じような存在のように思えた。だから誰も答えを知っている筈がないのだ……ここは平和な「エリア」……小競り合い程度の争いはあっても、存続が危ぶまれる程の脅威なんて存在しないのだから。

裏を返せば、小牟の手がかりを掴むこと不可能に近い、ということだ。

……俺と零児は呆然と立ち尽くすしかなかった……

仕方ないだろう？

相手は人外だ。零児や小牟のような人種はともかく、俺はただの貧乏学生だ。

泣き寝入り以外の何ものでもないだろう。だが俺にできることなんて何もありはしないのだ……体が重かった。気持ちも重い。足が地面にめり込んでしまいそうな錯覚に見舞われるほどに、俺の胸には無力感がひしめいていた。

……せめて。せめて相手のことだけでも分かればいいのに……

俺の願いを聞いてくれる神様なんていやしなかった……

「知りたいですか？」

代わりとばかりに声が聞こえた。

「……誰だ？」

発信源は公園の入り口。

零児も無言のまま反応し視線を動かすと、入り口には女の子が立っていた。歳はおそらく１０歳前後だろう、青い髪の毛が整然と切りそろえられていて所謂おかっぱな髪型をした少女だ。

「キョウスケ、お久しぶりです」

少女は俺を知っている風だった。

入り口から俺たちに近づいてくる少女……しかし俺には心当たりがない。

「知り合いか？」

「いや、覚えがない」

零児への返答は心からのモノだったが……何故だか心に違和感が残る。俺は本当に知らないのか？　あの少女に出会ったことはないのだろうか？

考えている間に少女は俺のすぐ傍まで詰め寄っていた。

俺は少女に訊く。

「君は……一体？」

「私の名前はオータム・フォー」

オータム・フォー、それが少女の名前らしい。

「この『エリア』の神だった存在です」

オータムは、ただ淡々と、言ったのだ。
淡々と、神であったと。自分が、だ。
普通なら耳を疑う言葉だろう？
普段の俺なら間違いなくツッコミをいれていただろうし、その位には信憑性のない話だが……この日の俺は、オータムの言葉を受け入れていたのだ。

オータムは「エリア」の神様、だった……そうさ、俺の願いを聞いてくれる神様なんていやしない。
でもな……これが貧乏学生と元神様の初めての「遭遇」だった
――……

こうして、俺のボロアパートに戻ってオータムの話を聞くことになったのだ　――

鋼鉄の駄狼R　～遭遇～（後書き）

＜次・回・予・告＞

神、それは全知全能なる絶対者である
秋の名を冠する少女は言った、私は神だった、と
エリアの秘密、敵の正体……知ればきっと引き返せない
それでも知ろうとするは人の業か？　性か？
乞われるままに彼女は語る……ここは地獄だと

次回、「リバース＆エンド」
再生、破壊、貴方はどちらを望む

ボトムズ風次回予告第2弾！
勢いでやっているため予告内容とタイトル・本編内容が違う可能性は大いにあります。
次回は裏設定のネタバレオンパレードにするつもりです。
読むと短編がつまらなくなる可能性もあるかもしれません。
それでもよろしければ次回もお付き合い下さい！

鋼鉄の駄狼Ｒ　～リバース＆エンド　モノローグ～（前書き）

＜注意＞
今後数話は、この小説の舞台になっている「エリア」の裏設定がダダ漏れになる回の予定です。
モノローグに続いて１－２回ぐらいに分けて更新するつもりですので、よろしくお願いします。

鋼鉄の駄狼R　～リバース&エンド　モノローグ～

世界は歪んでいる。
しかし世界の住人たちが歪みを認識することは不可能だった。
この世界は例えるなら鳥籠だ。住人たちは籠の中の鳥、しかも盲目の鳥だ。見えていれば脱出を試みる者もいるでしょうが、見えていなければ出て行こうとは思わない。
盲目の鳥にとって、世界は鳥籠の中だけなのだから……。

鳥籠の名前は「エリア」――何故か高校が密集する不思議な地域。
視覚、聴覚……五感ぼ全てを研ぎ澄ませ、あるいは第6感を持ち合わせていても「エリア」の歪みを感じ取ることは決してできないでしょう。
なぜなら「エリア」の風景、自然、住民たち……全てのものが実体を持ち、歪んでなどいないのだから当然か……。

だけど。
それでも「エリア」は歪んでいる。

私の名前はオータム・フォー――ほんの数日前までこの「エリア」の神様として、全知全能の行使を許されていた存在だった。
何度目になるだろう？
もう何度も何度も終わりを見据え、始まりを記憶し、住民たちの幸福を見守ってきた。意志を持つ人々が幸せに暮らしている光景――それはかつて私が望み描いた絵、そのものだったはず。
私の望みは叶えられ続けているのだ……なら、私は幸福なのかもしれない。

「エリア」の住民たちに比べれば、だけど……

「着いたぞ。ここだ」

先頭を歩いていたキョウスケが足を止めた。

彼の目線の先には古ぼけた年代物のアパートがあり、そこが私たちの目的地であるキョウスケの自宅のようだった。階段の手すりは赤錆にまみれてしてしまい、地震で間違いなく倒壊しそうな雰囲気を出している。鉄骨でできてはいないことを容易に想像できた。

「早く入るぞ」

私たちに同行していた有栖　零児が口を開いた。

「男一人背負って移動するのは目立ってしょうがない」

「ああ。アクセルも休ませなければならん。そしてオータム、お前の話も聞かなければな」

キョウスケが私の見下ろしていた。今の私の体は小さいから、身長は人間の女の子に例えるなら１０歳の平均程度。今の私にはキョウスケは見上げるぐらいに大きく感じられる。

初めてだろうか？　キョウスケに真実を話すのは。

おそらく……多分、いいえ確実に無駄足に終わるでしょう。

それでも私はキョウスケに真実を告げようとしている。

キョウスケは何と言うでしょうか？　かつて戦友だったキョウスケ・ナンブなら、分の悪い賭けは嫌いじゃない、と言ってくれたのだろうか……。懐かしい……私でも郷愁を感じるのだなと不思議に思う……でも違うのだ。

目の前のキョウスケは違う。

私と一緒に戦ったキョウスケとは違う。知っていたから関わるこ

とをなるべく避けてきたのに……私は……。
錆びた階段をキョウスケ、アクセルを背負った零児、私の順番で上がっていく。
零児に背負われたアクセルは微動だにしなかった。
見ているのが辛かった。彼が二度と目覚めないことを、私は知っていたから。
彼女に魂を回収されたのだ……彼は「エリア」の終焉まで眠り続けることだろう。悲しいけれど、それが今の「エリア」のルールであり、歪みなのだ。
私にはどうすることできない。

「帰ったぞ。エクセレン、まだ寝ているのか？」

キョウスケが入り口を開けて、家の中に向けて声をかけていた。
中から金髪の女性 ――― エクセレン・ブロウニングが出てくる。

「あ、お帰りキョウスケー。朝早くから小牟ちゃんと何処に行ってたの？　って、ヴぁあああっ！！」
「ど、どうした？」

突如、居間から顔を出したエクセレンが奇声を上げた。
彼女の視線は私の方に向けられている。

「また増えてる！　しかも今度はリアルロリ？！　キョウスケ、ちょっとこれはどういう事なの！？」
「う、うむ。話すと長くなるのだが ――」

エクセレンに弁明を始めるキョウスケ。
エクセレンに誤解されるのを恐れているのだろう。仏頂面な彼が額に汗をかいて言葉を繋げる様は少しかわいらしかった。

2人を見ているとなんだかホッとする。
心のある人間同士のやり取り……人工子宮ウームによる人類再生と人間社会の再構築　――　この光景はかつて私が望んだモノ、そのものなのかもしれない。
でも私はすぐに頭を横に振っていた。

……ここは「エリア」。
かつて惑星「エリア」と呼ばれ、機械が人類を死滅させてしまった世界。
彼女の力で永遠の楽園として変質した、無限の牢獄だ　――……

私は、１５５００回目の「エリア」で、初めてキョウスケの家に足を踏み入れた。

「おじゃまします」

こんな言葉、言うことになるとは思わなかった。
人生　――　いいえ、朽ちることのない長い時間には、どんなことがあるかなんて分からない。

そう、分からない。
元神様にだって分からない。

だから私は託すのだ、彼に。
１５５００回目にして、彼に初めて真実を告げるのだ。
一縷の望みを……彼、キョウスケ・ナンブに。

鋼鉄の駄狼Ｒ　～リバース＆エンド～

ここは何故か高校が密集する地域　――　「エリア」という名の無限獄　――……

そう、きっと未来は、地獄の神様にだって分からない。

鋼鉄の駄狼R　～リバース&エンド　モノローグ～（後書き）

モノローグはオータム・フォーが担当。
コメディー編で登場している彼女の容姿はシリアス編とは違います。
原作と違う容姿で描写しているのは彼女だけです。自分に絵心があれば分かりやすいのに……そう何度思ったことか。
ないものねだりしてもしょうがないのでこのまま執筆続けることにします。

次回からはキョウスケ視点に戻します。
遅筆ですので短い分量でチビチビ更新続けていきますのでよろしくお願いします！

鋼鉄の駄狼Ｒ　～リバース＆エンド～（前書き）

「エリア」の裏設定の説明回です。しかも1回で終わりませんでした。

鋼鉄の駄狼R　～リバース&エンド～

「エリア」の住宅街、俺のボロアパートにて……

「分の悪い賭けは？」

俺の恋人、エクセレン・ブロウニングが俺たちに訊いてきた。
居間には俺　――　キョウスケ・ナンブと有栖　零児、オータム・フォー、そして布団に寝かされたアクセルとエクセレンがいる。
エクセレンがマイクを握るような手をこちらに押し付けてきた。
見えないマイクを使って気分は上々、私は某テレビ局の美人アナ！
といった様子に見える。

「はい。リピートアフターミー　――　分の悪い賭けは　――　？」
「――　嫌いじゃない」「――　好きではない」

どちらが俺の答えか分かるかな？
勿論、俺は分の悪い賭けは嫌いではない。
分の悪い……追い詰められた時に、逆転の一手で巻き返す快感は何者にも勝る感覚と思っている。
だが俺のセリフに対抗するように零児が声を上げていた。

「そいつは重畳（ちょうじょう）……ではないな。ナンブ、賭け事はいずれ己が身を滅ぼすぞ」
「なんだと？」

零児は失礼な奴だな。
俺と零児は初対面から1日も立っていない間柄だ。
だが零児は俺に似た容姿を持っているが感性はまったく別物……

いや真逆だとかん感じさせられる。我が家の居間に上げてからのエクセレンとの問答でそれを感じることができた。

「決め台詞は？」

「どんな相手だろうとただ打ち貫くのみ」「そいつは重畳」

俺と零児がエクセレンの問に同時答える。

零児の言葉は重畳……確か、何事もなくてよかったね、的な意味だったはずだ。やはり初志貫徹的な俺の決め台詞は方向性が全く逆で、趣味嗜好においては問う必要性すらないように思えてくる。

だが彼女は飽きずに質問してくる。

「あなたの好きな服の色は？」

「赤だ」「赤だな」

「あなたの好きな距離は？」

「ゼロ距離」「近距離だな」

「あなたは恋人を愛してしますか？」

「……」「……」

「あん、何か言ってよね。キョウスケのイケズ」

知るか。

２人きりなら兎も角、零児、オータムと他人の居るところで返事をできるはずがないだろう？　俺とエクセレンの付き合いは長い。俺が返答できないのを承知で質問してくるのは正直ムカついたが、あえて此処は顔には出さない。

前言撤回だ。恋人のくだりで返事をしないあたり、俺と零児の感性はかなり似通っているように感じる。

零児は俺に負けず劣らずの仏頂面で腕を組んでいた……言っておくが、俺の顔が鉄面皮だと認めたわけではないぞ。

「それにしても似てるわねぇ。もしかして生き別れた双子ちゃんとか言う設定なのかしらん？」
「そんな訳ないだろう」「頼むから黙っててくれ」

エクセレンの茶化しに俺と零児の声が重なった。
やはり、俺と零児は似ているな。賭け事に関する考え方以外は容姿、性格、仲間内での役回りなどなど色々と共通点が多い――
その気づきを、エクセレンの質問が手助けしてくれたようだ。

「初対面なのに失礼した」

零児がエクセレンに謝罪した。初対面で俺の家をつまらない家扱いした小牟とは大違いである。

「すまないが、今は彼女の話を聞くのが先決なのだ」
「え～と、零児……さん。小牟ちゃんがさらわれちゃったのって本当なの？」
「ああ。小牟の後を追うためにも彼女の話を聞かなければならない……あと、俺のことは零児でいい。何故か……君に敬語で呼ばれると気分が悪くなる……」

エクセレンと小牟の雰囲気が似ているからだろうか？　俺もエクセレンに「～さん」付で呼ばれたら吐き気を催しそうなので零児のことは言えないか。今回はツッコミはなしとしておく。
さて、場を取り仕切るのに慣れているのか、

「オータムさんと言ったか」

零児が率先して会話を再開していた。

「率直に訊こう。小牟に憑りついた妖の正体と行先について、知っていることを教えてくれないか」
「はい。そのために来たのですから、私の知る全てをお伝えするつもりです」

ボロアパートの居間で、丸いちゃぶ台の対面に座ったオータムが答えた。

蛇足だが俺たち四人でちゃぶ台を囲んでおり、エクセレンが「粗茶ですが（俺の家の茶葉なのだが……）」と言って淹れた緑茶が回されていた。オータムにだけ茶柱が立っていて軽い敗北感を味わったのは俺だけの秘密だ。

ちなみにカグヤちゃんは「自由極まりないですぅ！」と外に遊びに行ったらしい。フリーダムすぎるが晩飯までには帰ってくるだろうので放っておくことにする。

オータムが開いた口を動かして説明を続けてくれた。

「彼女の名前はリバース　――」

彼女……という事は、アクセルに続いて小牟に憑りついたあの光体はどうやら女性らしい。もちろん、奴の口調から薄々感じてはいたことだが。

光体の名前はリバース……名前が分かっただけでも、呼び方、認識の仕方が統一されて幾分やりやすくなる……と思っていた、が。

「――　この『エリア』の神です」

突拍子もない単語の登場に、先行きが猛烈に不安になる俺　――

キョウスケ・ナンブなのであった。

「……神様、か」
「はい、そうです」
ただの呟きにオータムが生真面目に返答してくれた。
「彼女は『エリア』の神です。私は彼女が眠っている間だけ、力を移譲される監視者にすぎません。彼女が覚醒して活動を開始した以上、私には何の力もないのです……ほんの数日前までは神の力を行使できたにも関わらず、です」
「そうか、神様か……」
「キョウスケ、信じてくれないのですか？」
オータムが寂しげな表情で俺の顔を覗き込んでいた。
どう答えるべきだろうか、正直に言えば迷っている。
俺は現実主義者（リアリスト）だ。元々神様なんてものは眉唾だと思っているし、目に見えない信仰に時間や情熱を費やすよりも、バイトに性を出して金を稼ぐ方が健康的だと思っている人間だ。
以前の俺なら歯牙にもかけずに言い放っていただろう……嘘を言うな、とな。
だが昨日・今日の出来事は、俺の価値観を揺るがすには十分すぎたのだ。
目に見えないものは確かに存在する。
それが光体　――　リバースであり、俺の中に眠るベーオウルフなのは間違いない……神と表現するのは少し大げさすぎる気もしたがな。

「分かった、信じる。だからそんな顔をするな」
「ありがとう、キョウスケ」
オータムの顔に可愛らしい笑みが戻った。
幼い外見に比例しいおぼこさだったが、その様子をエクセレンに「むむっ」と睨みつけられてしまう。
「ふ、ふーん、小牟ちゃんを誘拐したのは神様なんだ～。で、オータムちゃんは元神様ね～……いいわ、信じちゃう。ほら、私って根が素直だもの。ね、キョウスケ？」
そうだな、と肯定するのも気恥ずかしいため俺は返事をしなかった。エクセレンはオータムに対抗心でも燃やしているように見えたが、子ども相手にむきになるとは、彼女にも外見に似合わず可愛らしい所があると思う。無論、顔には出さんし声にも出さん。
その態度が彼女の琴線を刺激したようで、
「でも神様だなんて普通は信じないわよね？　もし私たちが話を信じなかったらどうするつもりだったのかしら？」
とオータムに絡み始めた。
「そうですね。その時はキョウスケを含め、皆さんの過去生を見てもらうつもりでした」
「過去生？　何それ？」
「文字通り、皆さんの過去の人生の記憶です。
私の中には『エリア』の住人全ての過去生が収められています……エクセレン、当然あなたの分もここに記録されています」

オータムは自身の頭を指さしながら言った。
「……どうします？　閲覧しますか？」
「ちょ、ちょっとタンマ！」
この発言には流石のエクセレンも戸惑ったようで、俺に耳打ちしてくる。
「ねぇキョウスケ、この娘ちょっと頭おかしいんじゃないの？　神様とか過去生とか、意味不明なんだけど……」
「そうだな。だが……リバースとやらの情報源はオータム以外にない。小牟を見捨てる訳にいかん以上、話を聞くしかないだろう」
「それは、そうなんだけどさぁ……」
「兎に角、今はオータムの話を聞こう」
俺の言葉に不満を残しつつもエクセレンは了承してくれた。
「オータム、過去生というのに興味がないわけではないが、俺たちが知りたいのは第1に敵 ―― リバースの正体と第2にその目的だ。
リバースが『エリア』の神だとしても、それだけでは漠然として全容が掴めないからな」
「分かりました」
オータムが答える。
「再誕と再生の力を持つ精神寄生体、それがリバースです」
「精神……寄生体……？」
「悪霊とは違うのか？」

戸惑う俺に代わって零児が質問する。オータムは首を横に振っていた。

「リバースは霊体ではありません。そもそも悪霊とは元は人間の怨念などが悪性変異したもののはず……リバースはただの純粋な力の塊です」

「オリジナルの肉体はないのか？」

「私の知る限りでは、彼女に自分の肉体が存在したことはありません」

険しい表情の零児が質問を続ける。

「……つまり、奴は体がないから他人に憑依する。そして憑依された肉体は力を行使する媒介でしかない、ということか……」

「そうなりますね」

オータムの返答に零児の小さな舌打ちが聞こえてきた。腕を組んで目を閉じている。眉間に皺が寄り、苛立っているのが簡単に見て取れた。

リバースにとって小牟は使い捨ての道具でしかない……零児が苛立つのも無理はなかった。

「悪霊ではない精神寄生体、か……厄介だな」

「何故だ？　お前にはベーオウルフを封じた術があるだろう」

零児には封印術「五行封印」がある。俺の中にベーオウルフを封印した術だ。あれがあればリバースだって何とかなるのではないだろうか？

「……おそらく、通用しないだろう」

「そうですね。悪霊を封印する術はリバースには通用しないでしょう」

零児の言葉にオータムが被せてきた。

「彼女を封じようとするなら、彼女と強く癒着した魂が必要でしょう。

精神寄生体にとって還るべき家のような存在……そう、キョウスケ……あなたの魂のように、ベーオウルフと容易に引き剥がせぬ程癒着している必要があるのです」

「なん、だと？」

オータムは間違いなくベーオウルフと言った。

リバースの話の最中に何故奴の名前が出てくる。嫌な予感が俺の中を駆け巡る。

「キョウスケ……あなたも薄々気が付いているのでしょう。ベーオウルフが何者であるかを……」

「……唐突だな」

だが、彼女の言葉は俺の疑念を確証に近づけていく。

確かにリバースとベーオウルフには類似点が多かった。

例を挙げるなら他人の体に憑依する、意味不明な言動、念力や「ゆらぎ」を操る力……憑依体に浮かぶ赤い水玉のタトゥー。

似ている部分が多すぎた。

そこから導き出される答えは1つ……考えたくもないが、リバースとベーオウルフは――　俺の思考をオータムが代弁する。

「ベーオウルフも彼女と同じ精神寄生体です」

「……やはりか」

「彼女が再誕と再生の力を持つのに対して、ベーオウルフが持っている力は破壊」

物騒だが納得できた。俺は奴が念力で全てを破壊する様を見ているからな。もし奴に破壊を楽しむ嗜虐性がなければ、零児や小牟は既にこの世にいないだろう。

「全てを破壊しゼロに戻す、それがベーオウルフです。私の知る知識では、太極の破片から生み出された意思……それがリバースとベーオウルフです」

「太極？」

「詳しくは分かりません。至高天、絶対者、アカシックレコード……様々な呼び方があるようですが、私に分かるのはたった一つだけです。

彼女たちは同じ太極の欠片から誕生した……真逆の力を持った同質の存在ということだけ……だから――」

オータムはうつむいてしまった。

小さな肩が震えていたが、やがて意を決したように顔上げる。

「――だから私はあなたに託すのです、キョウスケ」

何をだ？　そう訊くのもはばかられた。オータムの顔は真剣だったから。

「彼女を……『エリア』の神を殺せるのはあなたしかいません。あなたしか……『エリア』という名の無限獄を終わらせることができないの……」

「……オータム」

俺はオータムに言葉を返すことができなかった。
彼女の話があまりにも荒唐無稽だったからだ。
小牟の誘拐犯が神様、これは２００歩譲って認めよう。俺もリバースの力の一端を目撃してしまったのだから、オータムの言葉の全てを否定はできないのだ。
だがな。
神様を殺せるのが俺だけだと？
これぱかりは信じられるものか。自慢ではないが、俺は分の悪い賭け以外は滅法弱いのだ。運の神様にすら見放された人間がどうして神様を殺せるだろうか？
そうさ。何処にでもいるしがない貧乏学生、それが俺なのだ。

「いいえ、違います」

頭の中を読んだかのように、オータムが否定していた。

「あなたは忘れているんです」
「……では訊こう。俺が何を忘れていると言うのだ？」

俺は、俺だ。これは間違いようのない事実だ。
俺はこのボロアパートに住み、ジェネ高に通っているしがない高校三年生である。

「思い出せないでしょう」

しかしオータムが言った。

「当然です。彼女がそう認識させているのですから」
「彼女 ―― リバースが、か？」
「はい」

オータムは青く澄んだ瞳で俺を見つめ、答えた。
嘘は言っていない、ように思える。
だが付き合いきれん。

「妄言は沢山だ。それに、お前が俺の何を知っているというのだ？」
「……ではキョウスケ、教えてください。あなたは何者なのですか？」

哲学者か、お前は？
呆れてため息をついてしまったが、一応質問には答えてやる。

「下らん。俺は俺だ。それ以外の何者でもない――」
「では答えてください」

オータムに言葉を遮られた。今は自分について問答している場合ではなく、小牟救出のためリバースの情報を集めなければならないのに……さっきからオータムにはペースを崩されてばかりだ。
当のオータムはと言うと俯き、顔に影が差していた。先ほどより暗い声で俺に訊いてくる。

「キョウスケ……今、あなたは何歳ですか？」
「は？」
「ですから、あなたの年齢ですよ。あなたの歳を私に教えてください」

単純な質問だった。歳を喰いすぎていなければ間違いようはない。
仰々しく話を振ってきて割には中身のない、スカスカな質問だ。
答えは簡単。
俺は高校３年生だ。当然、俺の年齢は――

「……妙だな」

――思い出せなった。自分の歳を、だ。

俺は高校3年生、高校3年生だ。それ以上でも以下でもない。したがって、導き出される俺の年齢は……いくつだ？

思い出せん。頭の働きが活発になるかと思いコメカミに手を添えてみるが、答えは出てこない。

……何故だ？

「エクセレン、お前の歳はいくつだ？」

「やぁーねーキョウスケったら、私はピチピチ新鮮な女子高生よん？　あ、ちなみに高校3年なの」

「それはいい。歳は？」

「だから高校3年生だったら。もぉ、変なキョウスケー、あはは」

カラカラと質問を笑い飛ばすエクセレン。俺が見当違いの質問をしている、そんな反応だった。

途端に俺は猛烈な違和感に襲われた。俺は、本当にキョウスケ・ナンブなのか……？　鳥肌がたった。たかが年齢を度忘れしただけなのに、気味の悪い違和感が俺の中に宿り始める。

「あなたの両親、生年月日、『エリア』の外の地域のこと……なにか1つでも分かりましたか、キョウスケ？」

オータムが俺を見ていた。まっすぐだが影のある瞳で、だ。

彼女は俺が質問に答えられないことを知っていて、軽い罪悪感に苛まれているかのように、視線が合うと目を逸らす。

親はいると思うが顔が思い出せない。生まれた日もうろ覚えった。

特に異常だと感じたことは、オータムに言われて初めて、俺は「

エリア」の外に出たことがないことに気付いたことだった。
繁華街も商店街もある「エリア」では、必要な物は全て「エリア」内で揃えることができる……だが、高校3年生になるまで「エリア」の外に出たことがないなんて……。
何故、今まで疑問に思わなかったのだろう？
何故だ？　何故だ？　分からない　――　答えの出ない思考がぐるぐる回り、結局、オータムの問に俺は応えることができなかった。

「ごめんなさい、キョウスケ。少し、いじわるでしたね」
「オータム、教えてくれ……何故だ？」

質問にすらなっていない言葉だったが、彼女は応えてくれた。

「『エリア』の住人は全て、彼女に認識を操作されています。住人が何の疑問もなく、永遠に続く楽園を受け入れるように、『エリア』や住人自身のことに疑問を抱かないように……です」
「理解できんな。仮に認識の操作が可能だとしても、そんなことをするメリットがどこにある？」
「彼女には、そうする必要があったのです」

オータムが即答する。

「破壊と再生を繰り返し、永遠に続く平穏な世界……それが『エリア』です。繰り返される世界に疑問を持たせぬよう、彼女は住人の認識を操作しました」

公園でのリバースの言葉が蘇る。

――　全ては平穏なる世界のために

どうやら、あれは「エリア」を指していたようだ。
確かに「エリア」は平和だ。ただ日常生活を送る分になにも不満はない。
リバース……「エリア」の裏に巣食う奴の存在を知らなければ、という前提尽きの話でだがな。住人に奴を気付かせぬための認識操作、といった所か。
だが疑問はまだ残る。

「破壊と再生を繰り返す、とはどういう意味だ？」

妙に引っかかるキーワードだった。
再び、リバースの言葉が思い出される。

――世界が終るその日まで――……

小牟の体を使って、奴は確かに言っていた。ベーオウルフと同じただの意味不明な言動だと思っていたが、奴の言葉に意味があるとすれば、オータムの言葉の意味は途端に重くなってくる。
世界が終わる日……破壊と再生……嫌な予感しかしないぞ――

「ナンブ」

と、しばらく黙っていた零児が俺に声をかけてきた。

「少し休憩を挟もう。外の空気も吸いたいしな」

零児が俺に視線を送ってくる。目が合うと、視線を家の出入り口の方へ向けた。おそらく、話があるから外へ出ろ、といった所だろう。

実際、オータムから突拍子もない話を聞かされ続けて、俺の脳内はやや混乱気味だった……ここで休憩を挟むのもやぶさかではない。

「そうだな、少し休もう。それにお茶ばかりで腹を膨らますのもなんだからな。自販機で飲み物を買ってくるとしよう」

「わお、キョウスケの奢り？　明日は槍が降るかもね？」

やかましい。

いけしゃあしゃあと炭酸を注文してくるエクセレン。比べてオータムは俺に任せるとのことだった。

財布の中身はかなり寒かったが、外で零児と話す時間を稼ぐには少しぐらい口実ぐらい必要だろう。

「では行くか」

「ああ」

俺と零児は短い会話を済ませ、ボロアパートから外へと出たのだった　――……

鋼鉄の駄狼Ｒ　～リバース＆エンド～（後書き）

中々キャラに喋ってもらって説明というのは難しいですね。
あと原作のオータム・フォーの話方がうろ覚えです。こんな話し方で良かったかな？

後々、内容を大幅に修正するかもしれません。
ではではノシ

鋼鉄の駄狼Ｒ　～リバース＆エンド　２～（前書き）

説明回、終わらず……。

「ナンブ、お前はどう思う？」

ボロアパートを出た後、最寄の自動販売機の前で、零児が訊いてきた。

俺は零児の存在を背中に感じながら自販機に１００円玉硬貨を入れる。自販機内に明かりがつくが、あと２０円足りないと要求してくるので、しぶしぶ１０円玉を２つ投入した。

商品が選択可能になった頃に俺は振り返った。

「オータムの話を信じるか、信じないか、か？」

「ああ」

「ふむ、そうだな……」

少し間を開けて俺は言った。

「正直眉唾……と言いたい。それが本音だ」

しかし否定しきれない。そんな自分がいるのも確かだ。

神様だ、神を殺すだ……そんな文句は信用できなかったが、俺の中にベーオウルフという得体のしれないモノが宿っていたことは事実だったからな。

半信半疑。あと一押しで信頼、否定どちらにでも転ぶ……そのような不安定な位置に俺の心は立っている。

零児は腕を組み、住宅の外壁に背を預けて唸っていた。

「そうか。そうだろうな、一般的な感性を持っていればそう思うのは無理もない」

「……では訊こう。零児、お前はオータムの話を信用しているのか？　根も葉もない子どもの妄言かもしれないんだぞ」
「そうかもしれない……だが俺にはあの子を信じるしか道は残されていないのだ」
零児は目を閉じて続けた。
「小牟を助けるために、今はただ情報が欲しい。この世界に来たばかりの俺にとって、彼女は数少ない情報源だ。それに　――」
「それに？　なんだ？」
「――　オータムの言っていることは満更嘘ではなさそうなのだ」
俺は耳を疑った。
零児には物事を冷静に分析する冷静な男という印象を抱いていた。だから先ほどの発言が零児のものとは思えなかったのだ。
内心を知ってか知らずか、零児は俺に言う。
「リバース、ベーオウルフ……奴らと直接会って感じたことが、オータムの説明と符合していたからな。悪霊、あるいは別の何かだとしても、奴らが同質の存在だということはあの時に気づいていた」
零児は霊的なモノを見ることができるらしいから、小牟が俺の中のベーオウルフに薄々気づいていたように、奴らの性質を見抜いていたのかもしれないな。
ベーオウルフたちは精神寄生体というモノのようだが、何処か霊と似た性質があるのだろう。
「そして認識の操作や阻害、これは難しいことではないんだ。集団催眠のようなモノを使えばある程度は何とかなる筈……勿論、俺は『エリア』の広さや人口を知らないから断言はできないがな」

人口、それに「エリア」の広さか……どちらも俺は知らない。いや、疑問も持たなかった。オータムの話を聞くまでは。

「だが『エリア』がリバースの世界なら認識の操作も容易だろう」

「何故だ？　俺には理由がさっぱり分からんぞ」

「それが普通の反応だ。しかし俺には経験があるから推測できるのさ」

零児は異世界の住人だ。カグヤちゃんの故郷、エンドレス・フロンティアにも赴いている。かなりの修羅場を潜ってきているのは間違いないだろう。

「アインスト空間……」

その零児の口から聞き慣れない単語が飛び出していた。

「特定の強力な力の持ち主が生み出した空間では、様々な法則を歪めることが可能だ。

アインスト空間では、取るに足らない雑魚が強敵となったり、俺たちに不利な状況が発生しやすくなったり……通常な世界では考えられないことが起きやすくなっていた」

「では、『エリア』もアインスト空間と同じだと……？」

「そうは言っていない。ただ……リバースが神で、『エリア』がリバースの世界だとしたなら、おそらく物理法則なり、何らかの法則を操作することも可能だろう。

おそらく、住人の認識操作など容易だ……無論これは仮定だが……

それでもオータムの話が本当だとすれば説明できてしまう。だから

俺は彼女の話は聞く価値があると思う」

認識操作、リバース、神、「エリア」……それらが零児の中では1本の線で繋がっているようだった。

確かに零児の言い分は筋が通っている。

なるほど。零児の説明だけ聞いていると、オータムの言葉に真実味が出てくるように感じる。

しかし……やはり納得はしきれない。受け入れるには何か足りない、朝食の魚の小骨が奥歯に引っかかっているような感覚だった。

俺は自販機に向き直り、エクセレンに頼まれていた炭酸ジュースのボタンを押した。自販機は当たり付きだったらしく、コラ・コーラの赤缶を吐き出してからルーレットがスタートする。

数秒後、ささやかなファンファーレが上がった。

ランプが「当たり」で止まっていて、俺はもう1本飲み物を購入する権利を得る。

ラッキーなのに猛烈に嫌な予感がしてならない……普段から、分の悪い賭けにしか勝てない副作用だろうか？

気を取り直して、奥歯の小骨を取るために俺は零児に質問した。

「……零児、オータムの言っていたことが本当なら……俺は神を殺せるのか？」

「……ああ」

零児が重々しく言葉を返してきた。

「対消滅、というのを知っているか？」

「つい ――― いや、知らんな。なんだそれは？」

耳に覚えがあるが、思い出せなかった。

「あるエネルギーと相反するエネルギーが衝突すれば、互いに消滅してしまう現象のことだ」
「……そうか。あの公園でベーオウルフが口走っていた言葉か」
「ああ。オータムの言う通り、リバースが再誕と再生、ベーオウルフが破壊の力を持つのなら、おそらく対消滅が起きる。もちろん、両者が１００％真逆の存在である保障は何処にもないし、ベーオウルフの力を制御できるとも思えんがな」

零児の言う通りだと、思わず首を縦に振ってしまう。
ベーオウルフ……零児と小牟を殺しかけたあの化け物が俺の願いを聞いてくれるとは思えない。現に、零児によって奴が封印されるまで俺の体は乗っ取られたままだった。理論上は可能でも実現不可能……机上の空論というものだ。
しかし同時に思い出す。
公園でアクセルの体を使ったリバースの攻撃を受けて、確かに、ベーオウルフは弱っていた。それは奴らが１００％――完全に相反する性質を持っていることを意味しているのではないだろうか？
答えは出せない。
回答不能のまま俺は自販機のボタンをチョイスする。
選んだのは午前の紅茶。オータムも女の子だからきっと甘いものが好きだろう。

「ナンブ、お前はどうするんだ？」

オータムの分の飲み物を取って立ち上がった時、零児が俺に訊いてきた。

「どうする、とは？」
「これからの身の振り方だ。当然、俺はリバースを追う。小牟を取り返すためにな。だがお前はどうするつもりだ？」

「……」

答えることができなかった。

俺は「エリア」が嫌いではない。

エクセレンたちと送る平穏な日常 ―― 俺はそれを愛していると言ってもいい。

それは何故か？　強い、明確な理由があるような気もするし、無いような気もする。しかし恋人と過ごす時間が続いて欲しいと思うのは当然のことではないだろうか。

「お前はこの世界の住人だ。だが俺は異世界から来た。小牟を取り返したら、すぐにでも元の世界に還らなければならない。方法はまだ分からないがな……」

「零児……」

「だがナンブ。お前は違う」

強く、はっきりした声で言った。

「もう1度言う。お前はこの世界の住人だ。神を殺せる、殺せないの問答は抜きにして訊くぞ……お前に、神を殺す意思はあるか？」

神殺し。

自分の世界の神を殺す……大それたことだ。

それが何を意味するのかも俺には分からない。

零児に質問されて初めて、小牟に出会ったこと、零児に出会ったこと、オータムの話を聞いたことを俺は後悔していた。

知らなければよかった、と。

知らなければ、エクセレンや皆との日常をただ楽しく過ごすこともできていただろう……だが、俺は知ってしまったのだ。

今の俺たちの生活はリバースに与えられたもの、それも認識まで

歪められてまで与えられた……半ば強制されているも同義のものだった。

無限獄。オータムがそう表現したのが、今なら何となく理解できる。

「エリア」は監獄だ。囚人は俺たち。看守はオータムで、管理者はリバースと言った所だろう。

知らなければよかった……だが知ってしまった。

俺が望んでいるものはただ1つ。エクセレンとの生活だ。彼女と一緒に過ごす日々こそが俺の宝なのだ。しかし事実を知った俺をリバースが見逃すだろうか……？

もし、俺たちの生活を邪魔しようというのなら ――

「殺すさ。あいつのためならな」

「そうか」

俺の返事の理由を零児は追及しなかった。

俺たちは自販機で購入した飲み物を持って帰宅する。その間、俺たちの間に会話はなかった。

赤錆びた鉄製の階段を上り、自室のドアノブに手をかける ――と同時に、ナンブ、と零児が声をかけてきた。

「俺たちは仲間だ。リバースという共通の敵を持った、な」

仲間という言葉を、零児の口から初めて聞いた。まぁ、出会ってまだ数時間なのだから当然と言えば当然なのだが、その言葉は俺の体の奥に染み込んでくるみたいに響いていた。

もしかすると、さっきの質問は俺を試していたのかもしれないな。俺がリバースに立ち向かっていく覚悟があるのか、をな。

「俺もお前に力を貸す、だからお前も俺に貸してくれ ――」

――ないか？　と続きそうだった言葉を、

「水臭いぞ、零児」

俺は遮った。

「俺たちは仲間だろう？　協力し合うのは当たり前だ」

「……ふっ、すまなかった。礼を言わせてくれ、ナンブ」

「ナンブじゃない」

「えっ？」

素っ頓狂な声を上げる零児を初めてみたかもしれないな。

不思議そうな表情をする零児に俺は言った。

「キョウスケだ。俺も零児と呼んでいるのだ、お前も俺をキョウスケと呼んでくれ」

「分かった。これからよろしく頼む、キョウスケ」

「ああ、もちろんだ」

俺と零児は力強く握手を交わす。手のひらから鍛え抜かれた零児の力が流れ込んでくるようだった。

俺は零児と対等だとは思わない。

零児の方が強い。それは間違いない事実だが、例え俺が無力でも立ち向かっていこうと心に決めたのだ。

エクセレンたちとの生活を守る。

相手が神だろうが、何だろうが、だ。

俺たちはオータムから話の続きを聞くために、室内へと戻ってい

鋼鉄の駄狼Ｒ　～リバース＆エンド　２～（後書き）

導入だけにする予定が４０００文字オーバーしてしまったので、一度話を切りました。

あるサイトで、ネットサイトで載せる長編の１話１話は短い方が良いと書いてありました。
そのため長編の１話１話を短め（４０００文字オーバーしたら更新）にして、短いスパンで更新しているつもりなのですが……読者の皆様はどう思いますか？

話の流れが途切れて読みにくかったり、読み応えがなくてガッカリ……なんて思われたりしていませんか？

今後の参考にしたいので、良ければ感想や活動報告、メールに意見を頂けると嬉しいです。
ではでは。

「では、話を再開しましょうか」

ボロアパートの居間にて、オータムが飲み物をちゃぶ台に置いて呟いた。

ちなみに彼女が飲んでいたのは午前の紅茶。かなり甘めの飲料だが女の子には丁度いいと思って俺が買ってきたものだったのだが、当の彼女は飲んでいる際中は無表情だった。

甘いものが苦手なのかと思いもしたが、飲み干していたのでそういう訳でもなかったらしい。

一方エクセレンはコラ・コーラを一気飲みして、プハァ～、とオヤジのように息を吐き出していた。勿論、ゲップはお約束……客人の前で恥ずかしいからやめて欲しいのだが、まぁ、いい。

俺と零児は淹れなおした緑茶だ。早い、健康にも良い、そして旨いと3拍子揃っているし何より安い！　これは非常に重要なことで、まさに安物茶葉は貧乏人に優しい味方である。

俺もちゃぶ台の上に湯呑みを置いた。

「オータム、教えてくれ」

零児と外出する前に訊こうとしていたことを確かめる。

俺はあの時少し混乱していたが、今は冷静だ。

受け止める。俺はオータムの言葉を全て真実として受け止める覚悟はできていた。

エクセレンの方を見ると彼女は能天気に笑みを浮かべていた。

俺は彼女を守りたい。彼女の笑みと今の生活を守るために、敵――リバースの事を知っておく必要があるのだ。リバースの言っていた「世界の終わる日」が来るとすれば、その時に奴は俺に接触

を図るはずだからな。
俺の中に眠るベーオウルフを奴が重要視しているのは疑いようのない事実。
日常を守るためには、非日常を受け入れなければならない時もある、ということだ。だから俺は確かめる。

「『エリア』が破壊と再生を繰り返す……これはどういう意味なんだ？」
「言葉通りの意味です」

オータムは顔を伏せてしまう。

「『エリア』　は歪んでいます。
彼女が集めた魂を、ウームで生み出した肉体に宿らせて、惑星エリアを変質させて『エリア』は作られている……歪められて作られた世界……それが『エリア』です。
だから、どうしても無理が出てくる……それを矯正するために、『エリア』は数年周期で破壊され、再生されているのです」

やはり、か。俺の嫌な予感は見事に的中したという訳だ。
耳を疑う言葉だったがそれは今に始まったことではない。
俺はオータムを信用すると決めたのだ。彼女の言葉を信じた場合、世界が何度も滅んでいるのなら俺やエクセレンもただではすまないはずなのだが……この際、目を瞑ることにした。
重要なのは過去よりも、真実を知った今なのだ。

「キョウスケ。歪みが頂点に達した時、彼女はあなたの中のベーオウルフを強引に覚醒させ、破壊の力を暴走させるでしょう」
「なんだと？」
「ベーオウルフの力は絶対です。暴走すれば、『エリア』と住人た

ちを確実に一瞬で消し去ります。キョウスケ……あなたの体もろともに、です」
「……信じがたい。が、事実なのだろう？」
「はい」

罪悪感でも抱いているのか、オータムが顔を上げることはなかった。
世界の終り……それは、やはり死を意味するらしい。憑依している俺の体ごと、とはな……想像もつかん。零児を殺しかけた念力などは、ベーオウルフの力の一端にすぎないのかもしれないな。
そして奴の力が覚醒、暴走すれば「エリア」は滅ぶ。
小牟との出会いを発端に「エリア」の裏に触れた俺だったが、彼女や零児と会わなければ、何も知らないまま死んでいた、ということか？　それもエクセレンまで巻き添えにして。
冗談ではない。
伏して死を待つほど俺は酔狂ではないのだ。
オータムはポツポツと説明を続けてくれた。

「全てを消し去りベーオウルフが力を使い果たした時、彼女は再誕と再生の力を使い『エリア』を作り直します。
彼女が私の中の情報を元に再生した『エリア』で、住人達は全てを忘れて平穏な日々を送る……そしていつか『エリア』は歪み、破壊され再生する……既に１００００回以上繰り返されているサイクルです」
「知らなければ平穏な楽園。だが知ってしまえば死と蘇りを繰り返す地獄……なるほど、無限獄……良く言ったものだ」
メビウスの輪のように出口はないのだろう。誰かが手向かわなければ、な。

「少しいいか？」
零児が声を上げた。
「俺のように異世界から来た者はどうなる？」
「……例外はありません」
「では、俺も死ぬということか？」
「……肉体は消滅、魂を彼女に回収され、ウームから作られた空の肉体に魂を宿されるでしょう。そして誤った認識を与えられ、『エリア』の住人になります……」
沈黙。
シンとしてしまった居間で零児は腕を組み、目を瞑っていた。オータムも無言、ただエクセレンだけイマイチ理解出ていないのか苦笑いを浮かべていた。
異世界の住人だろうがなんだろうが、世界の終りに巻き込まれれば死ぬ……いや、それどころか取り込まれてしまう、ということか。恐ろしいことだ。俺が知らないだけで、そうして「エリア」に取り込まれていった人間も決して少なくはないのだろう……何故か、そんな気がした。
とにかく、状況は芳しくなかった。
放置すれば俺とエクセレンの生活は破綻する。決して別れ話などの甘いものではなく、物理的な破滅がそう遠くない未来に待っている。それは間違いなさそうだ。
何らかの手を、打たねばなるまい。
逆転の秘策を練られねばならない、今はその時だ。
しかし俺の頭は回転しない。
心に引っかかる事があったからだ。
「オータム、世界の消滅に巻き込まれた者は『エリア』の住人にな

る。それはいい。突拍子もないことだが、そういうことなのだろう」

ありえない非日常。だが俺はあえて受け入れよう。

非日常であることを承知の上で、俺には気になって仕方がないことがあった。

「俺は……そして、ベーオウルフは何処から来た？」

俺は取り込まれしまった異邦者にすぎないのか？

最初から、「エリア」の住人であったのか？

それとも……今まで自分の出自に関心はなかったのに、俺は知りたくてしょうがなかった……俺は何処から来た？

「キョウスケ、私は言いましたよ」

オータムは相変わらず俺の目を見ずに口を開いた。

「『エリア』は、彼女が集めた魂を、ウームで生み出した肉体に宿らせて、惑星エリアを変質させて作られている、と」

惑星エリア……それが「エリア」の原型か。俺の知る限り「エリア」は惑星規模とは言えないが、歪んだ世界である以上、広さはどうにでもなるのかもな。

俺は背中に寒気を覚えていた。

オータムの「集めた魂を、ウームで生み出した肉体に宿らせて……」というフレーズに、俺は悪寒を感じていた。いや、これは不快感か？　マイナスな感情であることだけは間違いない。

「彼女が集めた魂は、意思の宿らなかったウーム製の肉体に宿ることで、活き活きした人間として動き始めます……」

「……おい、まさか……」
「ええ、それが『エリア』の住人なのです……みんな、オリジナルの肉体なんて存在しない……当然です。元の世界で既に亡くなっているのですから」
オータムはやはり俺の顔を見ない、いや、見れなかった。自分が告げる事実が、俺たちにとって酷な事だと知っていたからだろう。
事実、彼女の言葉は俺にとって死刑宣告に等しかった。
死んでいる？　俺が？
体は脈打っているし息もしている。目は見えるし体も動く。今、俺は疑うことなく生きている。
だが冷静に考えれば「エリア」の再生の際、俺たちの体は消滅するらしいから、死んでいるのは当然の事だった。何度も死と再誕を経験しているのだ、俺は。１ミリも覚えてすらいないがな。
しかし意味が違っていた。
「エリア」で死と、元の世界での死は違うだろう……元の世界で死んだ俺はリバースの力によって「エリア」で再誕した、ということか？
「極めて近く、限りなく遠い世界　――」
オータムが俺の思考を読んだようなタイミングで答えた。
「――　全次元に無限に存在するパラレルワールド……キョウスケ、あなたはその中の１つの世界で無残な最期を迎えた……無限に存在するキョウスケ・ナンブの内の１人なのです」
パラレルワールド。俺でも耳にしたことがあるメジャーなＳＦ用語だ。
並行世界、並列世界、俺たちが暮らす世界とは似て非なる世界…

…俺はそういった世界のうちの1つで生きていたらしい……そして死んだ……オータムが言っているのはそういうことだった。

まったく、理解しがたいな。

この2日で非日常に慣れ始めたばかりの俺にとって、彼女が言っている事実は受け入れるには高すぎるハードルだった。考えてもみてくれ……俺は生きているにも関わらず既に故人で、体はウームとかいうモノから生み出された体だと言うのだ。

はっきり言おう、訳が分からない。

子どもの冗談だと思いたかったが、おそらく事実だという零児のお墨付きだ。受け入れなければならない……だが俺の脳にある非日常領域は非常に狭い。受容するには時間がかかるだろう。

急いで拡大する必要がありそうだ、と ――

――救われない魂に救済を

何故か、夢で聞こえた声が思い出された。聞き覚えのない女の声……もしかするとあれは……？

「少し待ってくれ……頭がおかしくなりそうだ」

「いいえ、もうあまり待てません……」

オータムが顔を上げていた。

俺を真っ直ぐ見つめていたが覇気がない。元々白い顔なのに、血の気が引いてさらに白く見える気がする。

「どうやら予想より……歪みの進行が速い……すみません、キョウスケ。全てを話すことはできそうにありません……」

直後、オータムは立ち上がろうとしたがヨロヨロとふらつき、尻もちをついてしまっていた。

「おい、大丈夫か？」

「平気……」

顔面蒼白なオータム。俺には彼女が無理をしているようにしか見えなかった。俺は零児、エクセレンと共に腰を上げオータムの肩を抱いた。

触れただけで手のひらから熱が奪われていく。それ位にオータムの体は冷え切っていた。

「少し休ませた方がいいな」

「そうね、お布団まだ余ってたから敷きましょうか」

エクセレンが率先して押入れの方に向かう。

「ありがとう……でも時間はあまりありません……聞いて、キョウスケ」

「なんだ、言ってみろ」

横になる準備を整えるエクセレンを背中に感じながら、俺と零児は彼女の話を聞く。

「小牟、零児……あなたたちが来てから歪みの進行が急に増しました……おそらく……『エリア』が限界を迎える時間は……もって、あと3日です……」

「なに！？」

「それは本当か！？」

俺だけでなく、零児も声を荒げていた。
3日……幾らなんでも急すぎる。

「どうやら、やはり俺と小牟はこの世界にいるべきではないようだな」

零児がオータムの肩を揺する。

「オータム、リバースは何処だ？　教えてくれ！」
「……私には……分からない……でも」

オータムは弱々しく答えた。

「彼女は必ず……キョウスケの前に現れます……『エリア』を破壊するにはベーオウルフの力が必要だから……」
「なるほどな」

「エリア」がベーオウルフとリバースの力で破壊と再生を繰り返しているのなら、オータムの言っていることは道理だ……尤も、リバースが離れた場所からベーオウルフの力を暴走できるなら話は別、というより致命的だがな。

「しかし待っているだけでは後手に回る」
「……カイメラ医院……」
「アクセルを運ぼうとした個人病院か？」

カイメラ医院はここから一番近い病院だった。
なんでも「ブラックなんたら」と異名を取る腕の良い医者がいることで有名だが、俺は病気知らずな体だったので通ったことはない。

「アサキム……ドーウィン……」
「？　会えばいいのか、そいつに？」

オータムが無言で頷いた。相当辛いのか瞼も閉じてしまい、ぐったりと体から力が抜けていた。
それでも尚、オータムは喋ろうとする。口は動いているが声にはなっていない。

「もういい。喋るな」
「……ごめん……なさい」
「何故、謝る？」
「……ごめんさない……キョウ……スケ……」

謎の謝罪。オータムと出会ったばかりの俺には心当たりなど当然ない。オータムが俺に対して何を謝っているのか見当もつかなかった　――……

――その後、寝息をたて、オータムは眠りについてしまった……

いや、眠り、というよりは昏睡に近いのだが、何故、このタイミングでだったのか……俺たちには分からない……。眠りについた理由も不明だった。
だが、彼女の話を聞いて分かったことは大きい。
彼女は言った、「エリア」は歪んでいると。無限獄とも表現していた。その世界で生きている俺は一体何をするべきなのだろうか……？
エクセレンと共に生きていくために、俺は何をすればいい？

俺の中に、答えはまだ見えていない……。

●

眠ってしまったオータムは居間に敷いた布団に寝かしつけた。隣にはアクセルも寝ている。俺の家は病院ではないのだが、この場合は致し方ない。

オータムの寝ている姿は外見相応の子どもに見えた。

「オータムちゃんの言っていたこと、本当なのかしら？」

唐突な話だったため、エクセレンは半信半疑なようだ。

「子どもの嘘でかたずけるには少し大げさすぎるのよねー。それにオータムちゃんも嘘を言いそうな子には見えないし……ねえねえ、キョウスケのそっくりさんはどう思うの？」

「……おそらく、事実だろう」

零児は腕を組んだまま答えた。エクセレンの物言いはスルー、好きに呼べばいいと思っているのかもしれない。

零児が言う。

「予想以上に事態は切迫しているようだ。敵の居場所も分からない……猶予はあと3日、この家でじっとしている理由はないな」

「ああ。今はできることをせねばなるまい」

俺は零児の言葉に同意した。
3日――時間に直せばたったの72時間だ。しかも確実な猶予期間である保障すらなく、もっと短い時間しか残されていないかもしれない。
そんな時だからこそ動かなければならない。
できることをする……何もせずに世界の終りなど迎えてたまるものか。

「オータムの残した言葉……カイメラ医院のアサキム・ドゥーインに会え、か」
「そいつは重畳。情報は大いに越したことはない」
零児の言う通りだ。それにアクセルの体も検査してもらわなければならない。
そう、自宅に籠っている時間など俺たちにはないのだ。

「エクセレン」
「なぁに、キョウスケ？」
返事をする彼女に俺は言った。

「俺たちはアクセルを連れてカイメラ医院に向かう。お前はここでオータムを見ていてやってくれ」
「わぉ、看護師役ってわけね。任してちょうだいな♪」
満面の笑みを見せるエクセレン。勘違いしてお医者さんごっことか始めたりしないだろうな？　いや、流石にそれはないか。
一抹の不安は残るが贅沢は言っていられない。
俺はカイメラ医院に連れて行くため、アクセルの体を抱き起そうとした。

その時　――

「あら？　キョウスケ、顔に何か付いてるわよ？」

――とエクセレンが俺の顔を指さしてきた。

埃でもついているのだろうか、と袖で顔を拭ってみたが何も付いていない。

「キョウスケ……お前」

「？　どうした、零児。まだ俺の顔に何か付いているのか？」

「……鏡で自分の顔をよく見ろ。右目の下だ」

零児が眉間に皺を寄せて答えていた。

一体どうしたのだろうか？　俺は腰を上げ、洗面台の方へ足を運び、髪型をセットする際に使う鏡を覗き込んだ。

右目の下　――丁度、頬骨の辺りを見る。

――紅い水玉のタトゥーが浮かび上がっていた……

俺は言葉を失った。

それは間違いなく、俺がベーオウルフに乗っ取られた時に顔に出ていたモノに違いなかったから。あの時は両頬骨の上に浮かんでいたが、今は左に水玉タトゥーは見えない。右目のすぐ下にだけ紅い水玉が浮かんでいた。

体は問題なく動く。ベーオウルフは間違いなく眠っているはずだ。

それなのに……何故だ？

――全ては……静寂なる世界のために……

声が、頭に響いた。
間違いなく奴の声だ。

「どうやら、俺の残り時間も少ないようだな」

あと、どれ位だ？　無論、誰も教えてはくれない。残り時間が判明したところで何ができるかも分からないし、仮にできたとしても焼け石に水程度のことしか無理だろう。
急がねばならない。

焦燥感に背中を押され、俺と零児はカイメラ医院へ向かう　――

……

鋼鉄の駄狼R　～リバース&エンド　3～（後書き）

＜次回予告＞

呪い
たった3文字の言葉が男の自由を縛る
その男は漆黒の翼を持ち、数多の世界を股にかけた
ただ利己的に他者を……幾千もの敵を屠ってきた
だが男は囚われてしまった、偶然足を踏み入れた世界に
地獄、監獄、牢獄……何とでも言うがいい
どうせ男は逃げられない

次回、「飛べない鳥」
翼を?がれた鳥は死ぬ……だが、その男は……?

ボトムズ風次回予告追加しました。
説明回は今回で終了です。
あとのネタ晴らしは少しずつやっていきます。

次回はあの人が登場。それでメインキャラは全部出切るかと思います。
良ければ次回も読んでくださいね。

鋼鉄の駄狼Ｒ　～飛べない鳥～

希望はない。
それは、僕が永遠に続く長い生の果てにたどり着いた結論の一つだった。

夢、希望、未来……人間が愛する美しい言葉だが、僕の迷い込んだ世界にそんなものは存在しなかった。
僕の名前はアサキム・ドーウィン。
「エリア」にある個人病院、カイメラ医院で雇われ医者をしている青年、それが僕だ。腕は立つ、患者からも信頼されている、評判が先行し「ブラックなんたら」の異名を持つ天才外科医　――　それが僕の「エリア」での姿だった。
勿論、そんなものは偽りの姿にすぎない。
医師免許だって当然ないし、年齢も外見通りのものではない。

「太極の呪い」により不死の肉体を与えられた「呪われし放浪者」……それが僕だ。
呪いを解くためには、覚醒した１２のスフィアの魂を刈り集め、太極へと至らなければならない。
そのために、僕は全次元に散ったスフィアを探して並行世界を渡り歩いていた。

……だが、それも昔の話。

僕は足を踏み入れてしまった。「エリア」という名の別の無限獄に。

「セツコ・オハラ」

処女のスフィアの所持者に、僕は声をかけた。

返事は帰ってこない。彼女は今日もベットに横たわっている。

誰もが平穏な日々を送っているエリアにおいて、彼女だけが圧倒的に不幸だった。「エリア」でスフィアが覚醒することはない。スフィアは太極の意思の欠片だが、同じ太極から生まれたモノにも序列というものが存在するらしく、「エリアの神」によりスフィアの覚醒は抑えられていた。

何故、僕がそんなことを知っているかって？

ふふ、皮肉なことに時間だけはたっぷりとあったからね。「太極の呪い」を直接受けている僕には「エリアの神」の力も限定的だが通用しないらしく、記憶だけは残っていたのさ。

１００００回以上繰り返された世界を記憶している僕は、さしずめ「エリア」の記録者だろう……監視者程でないにせよ、僕は「エリア」について詳しいのだ。

兎に角、セツコ・オハラから返事は帰ってこなかった。

彼女は今もベッドで眠っている。この2日で彼女の症状は急激に悪化し、意識混濁から昏睡へと移行していた。スフィアの神経浸食で味覚を失い、声を失い、今度は命を失いかけた彼女のそれを繋ぎとめるぐらいは僕にだってできた。

セツコの口には７ｍｍ口径の挿管チューブが気管支上部まで押し込まれ、抜けないように口の周りにテープで固定してある。チューブの先には人工呼吸器。神経浸食が生命維機能を司る脳幹が犯されたのか、自発呼吸が全くない状態だった。

辛うじて対光反射は残っているが、体内の循環の維持も間々ならなくなっているらしく、何度も心臓が停止した。心臓マッサージ、中心静脈カテーテルによるルート確保、薬剤による管理……彼女は蘇生した。

だが僕は知っている。

彼女はもう目覚めない。

そう、彼女の昏睡は世界の終りの兆候だった。おそらく、「エリア」はもう間もなく１５０００回目の終焉を迎えるだろう。

世界が死に、蘇る時までセツコ・オハラは目覚めない。目覚めたところで今回の記憶は残っていない。何度も何度も経験していることだった。

「僕は鳥。羽を?がれた黒い鳥さ。笑ってくれセツコ……僕は君を殺してやることもできやしない」

希望はない、自由もない、彼女からの返事も当然ない。

もう、慣れた。

何度も脱出を試みて失敗してきた。

僕だけの力では「エリア」から抜け出すことはできないだろう。

知らざる者には楽園、知っている者にとっては無限獄……それが「エリア」だった。

セツコに背を向け、彼女の隔離病室から外に出る。

「アサキム先生！　セツコの容体はどうなんだ!?」

出口で待っていたのか、セツコの同室のトビーが部屋から出たばかりの僕に訊いてきた。

トビー……何度も繰り返す「エリア」においてほぼ確実に死を迎える男……だが彼は生きていた。

今回のエリアではトビーは生きながらえ、代わりにセツコは声を

失っている……僕にとっても初めてのケースだったのだが……今回はもしかして？

……なんて、所詮、淡い期待でしかないということだ。

「何度も言っているだろう？　面会謝絶だ」

「おい、アサキム！　テメエ！」

トビーは激昂して僕を呼び捨てにしていた。

彼の怒声を背に受けながら僕は仕事に戻る。

希望はない。

僕は羽を？がれた黒い鳥。

鳥籠から抜け出して大空に戻ることはもうないのだ、きっと……

鋼鉄の駄狼Ｒ　～飛べない鳥～

俺　――　キョウスケ・ナンブと有栖　零児はカイメラ医院に辿りついていた。

カイメラ医院は個人が経営する小さな病院で、住宅街から一番近くに立地しているため、住宅街の人たちから最も親しみやすい病院の１つだ。

それなりの救急体制も整っているらしく、何かあったらカイメラ医院と言われる位には、俺の耳に覚えがある有名な病院だった。

「ここか、オータムの言っていた病院は？」

「ああ、そうだ」

アクセルを背負った零児に俺は応えた。

「何の変哲もない病院、だと思うがな。しかしオータムの弁だ、おそらく何かあるのだろう」

「そいつは重畳。アサキム・ドーウィンと言ったか？　アクセルを預けたら、その者を探すことにしよう」

俺たちは玄関を通って受付ロビーへと進む。

その間、意識のないアクセルを背負っている俺たちは奇異の視線にさらされた。大の男を一人運んでいるのだから当然か。カイメラ医院に到着するまでにも怪訝な目で見られていたため、警察を呼ばれやしないかと少し不安だったぞ。

受付嬢にも不審がられたが目立つのだから仕方がない。兎に角、今は医者にアクセルを診てもらうことが先決だった。

受付嬢に診察を申し出ると、

「保険証をお願いします」

と返された。

……まったく、世知辛い世の中だな。

俺も失念していたもいいとこだ。保険証がなければ診察料は全額負担しなければいけない。しかもアクセルは間違いなく初診だろうから、貧乏人には手痛い出費になることは簡単に想像できた。

「零児。アクセルは保険証を持っているか？」

「さぁな。だが普通は持ち歩く物ではないと思うが……」

零児の言葉はご尤もだ。

個人情報満載の保険証を落としでもしてみろ、悪用されれば大変

なことになる。必要時以外に持ち歩くことは少ないと思うが、相手はあのアホのアクセルだ
穴馬的な感じ（？）で、予想を裏切って持っているかもしれない。

「零児、早く探せ」
「分かっている」

アクセルを地面に下ろした。服の中やポケットを探る俺たちは間違いなく不審者だろう。

「あったか？」
「いや……財布すら持っていない。あったのは携帯電話だけだ」
「ちっ」

自然に舌打ちをしてしまった。
アクセルのアホめ。金も持ち歩かないなど何を考えて生きているのだ？　急きょ金が必要になったらどうするつもりだったのか……案外、携帯電話でアルフィミィあたりに連絡を取って、金の催促でもするつもりだったのかもしれないが……まぁ、いい。
異世界の住人の零児に金を借りる訳にもいかん。……仕方ない、ここは俺が立て替えるしかあるまい。覚えていろよ、アクセル。
当のアクセルは昏々と眠り続けているのが妙に腹立たしかったが、病人に文句を垂れても仕方がない。

「すまない。保険証はないので、そのまま診察してもらえないか？」
「料金は高くなりますが？」
「構わない」
「分かりました。では４番の診察室前でお待ちください」

受付嬢から番号札を受け取り、４番診察室の前に移動する。

俺と零児でアクセルに肩を貸して移動するため人目を集めてしまうのはお約束、カイメラ医院内は診察希望者が多いため、それなりに経営が潤っているのが見て取れる。

俺の渡された番号札は「3」。4番診察室の前のソファーには先客のお爺さんが座っていたので、俺たちは部屋の前で立って待つことにした。

「2番の番号札でお待ちの方、どうぞ～」

「はいはい、今行きますよ」

程なくしてお爺さんは診察室の中に呼ばれて入って行った。

「俺たちの札は3番。順番的には次になるのか」

「そうだな」

零児に返事をし、空いたソファーにアクセルを寝かせた。ドサッ、と少し乱暴にソファーに倒れてしまったが、やはりアクセルに反応はない。

「零児、やはりアクセルから魂の気配は感じ取れないままなのか？」

「……ああ」

腕組みし目を瞑るという、もう見慣れてしまった癖の体勢で零児は答えていた。

「だがそれは俺が未熟だからさ。そう思うことにしようじゃないか」

「お前が未熟……？」

とてもじゃないが、俺にはそうは思えない。別の要素も噛んでいたとはいえ、零児はベーオウルフを封印したツワモノだ。零児が未

熟であるはずがない。
「エリア」以外の異世界も旅したことがあるそうだし……そうだ。
「零児」
「なんだ？」
「お前はカグヤちゃんの故郷 ── エンドレス・フロンティアに行ったことがあるそうだな」
「ああ。アクセルともそこで出会った」
順番待ちの間、零児はエンドレス・フロンティアでの思い出話を語ってくれた。
エンドレス・フロンティアは様々な世界が入り乱れた混沌とした世界だったということや、そこで多くの仲間と出会ったこと、そして世界を救い元の世界に戻ったことなど……多くの夢物語のような話を零児は語る。
オータムの話を信じたのも頷ける。零児は多くの大冒険を繰り広げてきたのだろう。
「アクセルも俺と同様に、エンドレス・フロンティアでは異邦者だった。記憶を失っていたがアクセルの力はエンドレス・フロンティアを救う大きな手助けになったのは確かだ」
「俺の知らないアクセルの大冒険、か。役に立ったのは蒼髭流格闘術か？」
「さぁな。アクセルの流派までは知らないが、ミズチブレードという武器を使って戦っていたな」
ミズチブレード？　ブレードと言うからには刃物なのだろうが、俺はアクセルが武器を使っている所を見たことはなかった。
体と拳一つで相手を叩きのめす。悪名高き巨大暴走族「シャドウミラー」の特攻隊長はそういう男だ。俺は零児の言葉に違和感を覚

えた。

「あの戦いの後、アクセルも元の世界に戻れたはず……こうしてもう再会するとは夢にも思わなかったがな」

「なぁ、零児……このアクセルは、本当にお前の知っているアクセルなのか？」

「なんだって？」

零児は不思議そうに声を上げた。

だってそうだろう？　零児の知っているアクセルは刃物を使って戦うが、俺の知っているアクセルは決して武器を使わない男なのだから。異世界に飛ぶという非常時だから拳に拘っていられない、と言われればそれまでだが、それでも俺の知っているアクセルなら武器は使わない気がするのだ。

俺と零児の知っているアクセルは別人なのではないか？　オータムの言葉が俺の頭で蘇っていた。

「並行世界　――　パラレルワールド、俺が無限に存在するキョウスケ・ナンブの内の1人でしかないのなら、このアクセルだってそうかもしれない」

「なるほどな。俺は並行世界の別人物に出会った経験はないが、その可能性は十二分にありえる話だ」

零児は俺の考えに同意してくれた。

しかしまったく、奇妙な話だ。

数多く存在するパラレルワールドで俺は無残な最期を迎え、この「エリア」に取り込まれたとオータムは言っていたが、並行世界があるということは、死なずに幸福を掴んでいるキョウスケ・ナンブも存在するということか？

例えばの話だが、エクセレンが既に死んでいる並行世界や、俺と

アクセルが殺し合っている並行世界もある……のかもしれん。考えたくもないがな。

「3番の札でお待ちの方、どうぞ～」

間延びした声で看護師が俺たちを読んでいた。気づけばお爺さんは4番診察室から出てきている途中、俺たちの順番が回ってきたようだ。

「並行世界……興味深い話だが、考えたところでどうしようもない事だ。世界がいくつ存在しようと、俺たちは目に見える世界しか認識できないのだからな」

「そうだな」

零児の言葉に頷くと、俺はアクセルを抱き起した。零児の手も借り、4番診察室へと足を向ける。

そうさ。肩にかかるアクセルの重さに並行世界なんて関係ない。アクセルはアクセルだ。別世界にいるアクセルの別人を感じられない以上は、肩に感じる重みこそが俺にとって全てなのだ。

だからアクセル……早く、目を覚ませ。

今度は、お前との喧嘩にトコトン付き合ってやるから。

顔なじみが動けない様を見るのは辛い。だから早く起きろ、このアホめ……内心毒づきながらも、俺は間違いなくアクセルの事を心配していた。やはり、俺たちは幼馴染なのだ。

見殺しにはできない。

●

悪友を救うため、俺と零児は４番診察室の中に入った。
診察はこじんまりとしていた。医師が電子カルテを操作する用のパソコンと、大人１人が横になれる診察台があるだけ他に物は少ない。奥に続く道にはカーテンで仕切りがされていたから、他に必要な道具はきっとそこに置いてあるのだろう。

「次の患者は君かい？」

白衣ならぬ、黒衣を来た若い医者が俺を見て言った。
髪の毛も漆黒。黒衣の下の服も黒で全身黒ずくめの男だったが、瞳だけはまるでウサギのように透き通るような赤色をしていた。白を基調とした病院内で、まるで白紙に落としたインクのように浮いている、そんな印象を受ける男だ。

「いや、診て欲しいのはコイツだ」
「なら診察台に寝かせるといい。すぐに診よう」
「分かった」

黒医師に言われるまま、俺たちはアクセルを診察台の上に仰向けに寝かせた。
パソコンのある机の前に座っていた黒医師が腰を上げる。アクセルに詰め寄ってきて見下ろす。
俺たちは離れて様子をうかがっていたが黒医師は診察らしい行動を何一つしていなかった。時間にして十数秒……ただアクセルを見下ろしていただけだ。

「ほぉ」

黒医師が声を上げた。

「おい、何か分かったのか？」

「ああ、分かったよ」

俺の問に黒医師は答えた。

「教えてくれ。アクセルは目を覚ますのか？　意識を失ったまま起きないんだ。あんた、医者なんだから何とかできるだろう？」

「いいや、無理だね」

黒医者は言い切った。

「断言しよう。この男は二度と目覚めない。『エリアの神』に魂を回収されてしまっているようだしね」

「なんだと？」

「貴様、何者だ！？」

零児が俺を庇うように前に飛び出し、拳を構える。黒医師の言葉を聞いた直後の行動だった……俺も体こそ動かなかったが、心は敏感に反応していた。

エリアの神、という単語にだ。忘れようのない言葉だった。

「貴様、リバースを知っているのか！？」

「勿論、知ってるよ」

零児の怒鳴り声に黒医師は冷静な受け答えをする。

「『エリアの神』リバース、奴がいる限り僕はこの無限獄から逃れることはできないんだ。だけど、より太極に近しい奴には僕の力は

通用しない。……実に忌々しい奴だよ」
「……本当に、何者だ？」

オータムの話では、エリアの住人は世界が作り直される時に記憶を失うはずだ。認識の操作も行われていてリバースの存在にも気づけない。俺のように直接目撃したり、オータムから話を聞いたりする場合を除いて、な。

黒医師は何故知っている？　知っているふりをしているだけ……には思えなかった。

仮に相手がサマシだとしても、俺を騙す利点や理由が見当たらん。

「君たちも奴を知っているのか？　なら、自己紹介をしておこうかな」

見方によれば邪悪にも見える笑みを黒医師は浮かべている。

「僕の名前はアサキム・ドーウィン。
『エリア』という無限獄に囚われ、羽を?がれた無力な黒い鳥……
それが僕なのさ」
「お前が……アサキム？」

偶然か必然かは分からない。
弱音を吐く黒医師　――　アサキムとは逆に、俺はこの出会いに運命を感じずにはいられなかった。
例え、相手が「エリアの神」だとしても俺はやってやる……そうさ。俺は分の悪い賭けは嫌いではない。

まだ、希望の芽は潰えてはいないのだ。

鋼鉄の駄狼Ｒ　～飛べない鳥～（後書き）

活動報告に書きましたとおり、少し更新が遅れるかもしれません。

「そう。アサキム・ドーウィン、それが僕名前だ」

カイメラ医院にて、黒い衣服をまとった医師は答えた。

アサキム・ドーウィン……オータムが俺に会えと言った男の名。

その名前を持つ男が俺の目の前に、今、いる。

「さぁ、僕の自己紹介は済んだ。次は君たちの番だ」

アサキムは笑いながら言う。

エクセレンとは違う、何処か含みがありながらイヤらしい笑み。

アサキムのそれは、本人は知らずとも他人に不快感を与えてしまう類の笑顔だ。

相手に与える効果など承知の上のことかもしれないが、アサキムは笑みを崩すことはせず俺たちの方を見据えていた。

「どうしたんだい？　相手が名乗ったら自分も名乗る。……ハハ、どうやら『エリア』の人間は当たり前の礼儀も知らないようだね」

「……言ってくれるな」

明らかな挑発だった。

オータムの言葉に従い会いに来て、俺はアサキムに偶然出会った。

運命のような……今後の幸運の兆候のようなものを感じていたのだが……どうやら、初対面で挑発してくるあたり、この男の性格は相当に悪いらしい。

俺の求めているのはエクセレンとの平穏な日々だ。俺はそのために必要な情報を求めているに過ぎず、アサキムとの交流を求めている訳ではなかった……が。

確かに、最低限の礼儀は必要だろう。

「……俺の名前はキョウスケ・ナンブ。こちらで寝ているのはアクセル・アルマーだ。あと――」

「有栖　零児だ。乱暴を働こうとした件は謝罪する」

零児が構えていた拳を下ろし、さらにアサキムに頭を下げた。

だが顔を上げた時には、射殺すような眼光でアサキムを睨んでいた。

「失礼を承知で、単刀直入に教えてもらいたい。アサキム、あなたはリバースの居る場所を知っているか？」

リバースの居場所……それは、零児にとって体を乗っ取られた小牟の居場所に他ならない。

真剣な表情の零児、対してアサキムは対して動じた様子は見られなかった。

「知らないな。むしろ僕の方が教えてもらいたいくらいだよ」

「……そうか」

「尤も、僕が奴の居場所を知っても何もできはしないけどね」

アサキムは物憂げな表情を浮かべている。言動と同じく、全てを諦めてしまったような表情だった。

自暴自棄とも取れる態度のアサキム。オータムがこの男に会えと言った理由が俺には理解できない。アクセルを運んだ診察室でアサキムに出会えたことは運命すら感じていたが、果たしてこの男が俺たちに協力してくれる保証はどこにもないのだ。

現に、アサキムはリバースの居場所を知らないと言った。

これは有用な情報を引き出せる可能性が減ったことに他ならない。

「ははははっ、悪かったね。期待外れでさ」
「いや……」
「まぁいいさ。それよりかけなよ、話をしようじゃないか？」
アサキムは患者を診察時に座らせる丸椅子を指して言った。
彼自身はデスクトップの前の椅子に再び座り、肘かけに腕を休めて俺たちを見る。
立ちぼうけていても仕方ない。俺と零児は丸椅子に座ることにした。

「さて、僕の事を、誰に聞いたのか教えてくれるかな？」

突然のアサキムの質問に俺はすぐに返答はできなかった。
アサキムはオータムに続く貴重な情報源であることは間違いないだろうが、どうもこの男は胡散臭く感じるのだ。背中を見せれば、バッサリと、斬り捨てられてしまいそうな……爪を隠した猛禽のような男。
全幅の信頼をおいてはいけない。いつでも逃げれるように、ある程度の距離は取っておいた方がいい……俺の勘がそう告げている。
信用していない相手にオータムの事を話すのは気が引けた。俺と零児は目配せして、しばらく黙っていた。

「黙秘かい？　言いたくなければ別にいいさ。どうせ、その行動もすぐに無意味になる」
「なんだと？」
「そう遠くない未来に『エリア』は滅ぶ。キョウスケ・ナンブ　――　君の中の魔物の手によってね」

アサキムは口を釣り上げて笑っている。彼の瞳には嗜虐的な光が

宿っていた。こいつ……含みを持たせた物言いで、俺たちが動じるの見て愉しんでいるようだな。
性根が真っ直ぐとは言い難い男だが、色々と俺の知らない事を知っているのは間違いなさそうだ。

「……ベーオウルフを知っているのか？」

アサキムは何処まで知っている？　俺は探りを入れることを優先することにした。

「勿論さ。太極の欠片から生まれた破壊の権化、それが奴だ。奴によって『エリア』は滅ぼされ、『エリアの神』によって再生され続けてきた、もう１００００回以上にもなるはずだ」
「……ベーオウルフが破界し、リバースが再世する、ということか？」
「その通り。
ただし、奴らにとって呼び名なんて何の意味も無いものだけどね」

決まりだな。アサキムはリバースの事を知っている、俺がオータムに教わった程度の事ならば、だ。
ベーオウルフ、リバース共に奴らの本当の呼び名ではないのかもしれないが、この際どうでもいい。呼び名など些細なことだ、俺はその名で奴らを呼び続けることにする。
俺は今の生活を守るため、零児は小牟を救うためにリバースの事を知らなければならなかった。

「答えろ、アサキム。リバースとは何者だ？　リバースは太極から生まれたと言ったが、太極とはいったい何だ？　『エリア』の破滅を防ぐ術はないのか　――――？」
「まぁ、待ちなよ」

アサキムが俺の問を制止する。

「君たちは色々知っているようだからね、1つずつ答えて言ってやるよ。まずはリバースとは何かだったね」

俺は無言で頷く。零児も同様だった。

「12のスフィアは太極の心の欠片から生まれたモノ……奴らは太極の記憶の欠片から生まれたモノ、だと僕は考えている」

「記憶の欠片……だと？」

心、記憶の欠片、スフィア……そして太極というキーワード。

太極……それが何を指しているのか俺には分からない。

だがオータムも言っていた。

至高天、アカシックレコード――どの様に多彩な呼び方があるにせよ、太極と言う奴がリバースやベーオウルウを生み出した、と。

しかし太極の記憶の欠片からリバースたちが、心の欠片からスフィアが生まれた。アサキムは確かにそう答えた。

俺はスフィアというものを知らないわけだが、たった1つのモノからそれ程多くモノを生み出すことができるものなのだろうか？

「僕だって、太極の全てを把握している訳じゃないさ」

アサキムの答えは猫の手にも値しないものだった。

要するにアサキムは太極の多くを知らず、推測で話をしているに過ぎないのだ。

「でもね、この世界は太極の記憶の欠片から生まれた奴――そ

う、君たちの言う所のリバースの世界だ。さっきも言ったけど、太極から生まれたものにも序列があるらしくてね……この世界に囚われたスフィアは覚醒することはできないんだよ」

「覚醒……？」

「そうさ。僕は『太極の呪い』から逃れるために、覚醒した12のスフィアの魂をかり集めなければならない。太極を消滅させ、『太極の呪い』から逃れるためにね」

アサキムの言ってことは酷く受け入れにくかった……が、この2日で俺にだって非日常への耐性はある程度ついた。

アサキムの目的なぞどうでもいいし、奴に協力してやるつもりなぞサラサラない。俺と零児は、アサキムから情報を引き出すために奴と話をしているにすぎないのだからな。

しかしアサキムの話を統合すれば、全ての元凶は太極にある、ということになりそうだ。

「アサキム」

俺は零児はアイコンタクトをした後、さらにアサキムから情報を引き出すために声をかけた。

「リバースが太極から生まれ『エリア』の神であることは理解できた。だからこそ聞きたい。何故……奴は『エリア』の神にも関わらず、何故『エリア』をベーオウルフに破壊させ自ら再生させるのだ？」

これだ。俺が最も疑問に思う点がこれだった。

俺は「エリア」は平穏で過ごしやすい、ただの日常生活を送るには最適で、理想の場所だと思っている。

それなのにリバースは「エリア」をやり直させる。零児のような

異邦人まで巻き添えにして、だ。
夢に見たリバースの声が思い出された。

――全ては平穏なる世界のために

妙だ。
零児のような異邦人が、オータムの言う「エリア」の歪みの元だというのなら、ただ零児を排除すれば良いだけではないだろうか？
リバースは零児と小牟を呼び寄せた「ゆらぎ」の力を扱えていた。ならば「ゆらぎ」を使い、零児たちを他の世界に放り出せば歪みの原因はなくなり、万事解決……ではないのか？　それで平穏な「エリア」は戻ってくるはずだ。
平穏な世界のために、わざわざ「エリア」を滅ぼす必要など何処にある？　それも１００００回以上――

「分かってないね」

――アサキムが俺を見てため息をついていた。

「分かってない。奴の宿主の分際で、人の性がまったく分かっていないね、君は」
「人の性だと？」

偉ぶるな。
アサキムは、人を語る程に人生を熟知した老獪にはとてもじゃないが見えなかった。

「そうさ　――」

アサキムは笑っていた。
まるで俺の存在をあざ笑っているかのように、俺に向かって言った。

「――破壊、殺戮、強奪……人は他者との関係を続けているうちに組織が出来上がり、やがて組織同士の争いが勃発、激化する。もちろん『エリア』にだってそれはあるが、大規模な、人が人に殺意を抱くようなものは起こっていない……良い意味で捉えれば刺激――レクリエーション程度の争いしか『エリア』では起こらない」

アサキムに言われて、俺は奴の言葉に実感を持つ。

「7つの大罪とはよく言ったものだよ。人はそこにいるだけで争いの権化だ、行き着く先は一つしかない――そう、戦争だよ。君は感じないのかい？『エリア』に殺しの一歩手前はあっても、戦争が起こったというニュースすら流れない違和感を。『エリア』の中だけならいざ知らず、世界は広いんだ。世界中で戦争が起こらないなんてありえないし、その知らせが耳に入らないなんてありえない。
にも関わらず『エリア』は戦争とは縁がない……奇妙だと思わないのか、キョウスケ・ナンブ？」

アサキムは力強く言い切った。
争いのない世界なんてない、と。確かにそうだと俺も思った。
だが、アサキムの話を聞いた今に思い返せば……今までに俺の周りで起こった争いは、所詮いい思い出だったのではないだろうか。
特にアクセルとの喧嘩がいい例だ。
エクセレンが誘拐され、俺がアクセルに殴られ、いつの間にか俺が勝利している見慣れた光景……それは半ば俺のライフワークにな

っていたのではないだろうか？　命までは奪われない……理由は分からないが、俺にとってそれが安心の根底になっていたように思える。

決して、殺し合いには発展しない……そこに絶対的な安心感を感じている俺がいた。

何故だ？

殴られれば痛い。

痛いことを回避しようとするのは当然のことなのに、俺の中には死ななければ問題ないと思う部分がいつも何処かにあった。

「エリア」のような平穏な場所で、何故、俺はそのようなことを思う？

答えは分からなかった。

「『エリア』は歪んでいる」

アサキムが言った。

「人の性を歪めてまで、平穏を維持させている世界が『エリア』なのさ。しかし歪めておけるのにも限界がある……いつか戦争は起きる。『エリア』にだってね。

だから歪みを矯正、全てを忘れさせるために、奴は『エリア』のリセットボタンを押すんだ」

「……ベーオウルフという名のリセットボタン」

「そうさ。さしずめ、リバースはリスタートボタンと言った所かな。良くできているとは何度も思ったよ。誰かの言葉を借りるなら、『エリア』は終わらないワルツのようなものなのさ」

ワルツはいつか終わる。

だから踊り手はワルツを楽しむのだろう。この楽しい時が永遠に続けばいい、と願いながら。

誰もワルツが終わらないと知らないから、今をきっと楽しめるのだ。

俺だってエクセレンとの日々がいつまでも続けばと願ったことはある。しかし、虚構の日々など俺から願い下げだ。

「アサキム、俺と零児はどうすれば元の世界に戻れるか教えてくれ！　俺はあいつと元の世界に戻りたい」

「待てキョウスケ。俺は小牟を取り返すまでは帰れない」

「零児……」

「今知るべきは帰り方よりも、リバースの居場所と倒し方だ。アサキム、あんたはそれを本当は知っているんじゃないのか？」

零児の表情は真剣だった。小牟は零児にとって異世界でたった1人の同胞だ。いや、それ以上の……零時がリバースを追わなければならない理由はいくらでもある。

俺だってそうだ。

滅びるとわかっている世界に、いつまでもエクセレンと留まっている訳にはいかない。

「ククッ……」

だがアサキムは笑っていた。俺たちを嘲笑するように、だ。

「何が可笑しい？」

零児が眉を吊り上げながら訊いた。

「異邦人の君　――　零児と言ったか？　君では無理だよ、『エリア』の神を殺すなんてね。諦めなよ」

「……断る。諦められない理由が俺にはある」

こうしている間にも小牟の体はリバースに使役されている。退けない理由が零児にあるのは明白だが、

「君が神を殺しても、消滅するのは肉体だけだ」

アサキムは絶望的な言葉だけを連ねていく。

「肉体を失っても神は死なない。新しい肉体にまた宿る、それだけだ。

太極から生まれたスフィアの力なら別かもしれないが、この世界では覚醒することもできない。

太極から生まれたモノにも序列があるのは明らかだし、きっと『太極の呪い』を受けた僕の力も通用しないだろう……現にシュロウガも呼べないしね」

「シュロウガ……？」

また新しい単語の登場に俺は首を傾げるが、アサキムは意にも介さない。

「気にしないでくれ。それより、神を殺す方法だったね ―― あるよ、たった一つだけね」

「ッ！　教えてくれ、頼む！」

零児がイの一番に反応していた。

神殺し……それが何を意味するのか、俺には分からない。それが小牟の体を取り戻すことになるのか、それとも ―― どちらにせよ、リバースに対抗する術は必要だった。

アサキムの返事は希望の欠片だろう。

だが同時に、俺の心が不安感で覆い尽くされていたのも、間違い

ようのない事実だった。

「キョウスケ・ナンブ」

アサキムが俺を見て、淡々と言った。

「神を殺せるのは君しかいない」

「俺、だけだと……？」

「狼の牙を世界に突き立てればいいのさ。それで世界は終わる。クックッ……もしかすれば、僕だって死ねるかもしれない……そうさ、そこから先は誰にも分からない、神にだってね」

気味の悪い笑みをアサキムは浮かべていた。

狼とはおそらくベーオウルフのことだろう。なるほど、リバースはベーオウルフの破壊の力を意図的に暴発させ「エリア」を破界し、自分の力で再世させてきた。

オータムの言っていたことだ。

リバースとベーオウルフは対。

両極である力がぶつかれば、反作用を起こし対消滅する……

「だができるのか？　神殺しなど……できたとして、俺とあいつは生きていられるのか？」

「知らないね。言っただろう？　そこから先は神だって知らない、とね」

尤もだった。

アサキムの言う通り俺がリバースを殺せるとして、問題はリバースを殺した後ではなく、俺がベーオウルフの力をコントロールできるか否かに尽きるだろう。

……無理だ。

熟考の必要すらなく俺は判断する。

俺は伝説の勇者なんかじゃない。「エリア」に住む平凡な貧乏学生だ。神をも殺せる力を一般人が御し通せるとはやはり思えなかった。

だが、このままではベーオウルフの力が暴走して「エリア」はリセット……俺が持っている記憶もリバースに改竄される……好機があるとすれば今しかない。

「アサキム、俺がベーオウルフの力を使いこなす術はあるのか？」

「知らないね。知っていればもっと早くに君に接触している」

絶望感……俺はアサキムの言葉で谷底に突き落されたような感覚を味わう。

「だが無いとも言い切れない」

今度は彼の言葉が地獄に下ろされた蜘蛛の糸ように感じられた。

「答えなんて案外近くにあるものだよ。例えば、君の頭の中　――君の過去生に答えはあるかもしれない」

「過去生だと？　何だそれは？」

確かオータムも口にしていた言葉だ。

――皆さんの過去生を見てもらうつもりでした

確かにオータムは言っていた、過去生と。

つまりオータムは、俺たちに過去生と言うのを見せることができるという事か。過去生とやらの正体が何であれ、そこにベーオウルフの力を制するヒントがあるのなら僥倖と言わざるを得ないだろう。

俺の期待感を裏切らない言葉をアサキムは放っていた。

「文字通り、キョウスケ・ナンブ……君の過去さ」

「俺の過去……それがどうしたというのだ？」

「君は僕のように途中から『エリア』に取り込まれたのかな？　違う。

『エリア』の繰り返しに破壊の力が関わっている以上、君は最初の『エリア』から存在したと考えるのが妥当だ」

なるほど。

ベーオウルフとリバースの力は「エリア」の破界と再世に関わっているのだ。

最初の「エリア」――「エリア」誕生の時からベーオウルフとリバースが居なければ、今の「エリア」は存在し得ない。

俺が零児のような異邦者であると仮定すれば、2回目の「エリア」は存在できないだろう。それが道理……俺とベーオウルフが最初からいなければ矛盾を生じるのだ。

それに「エリア」誕生の際に俺はおらず、その際に異邦者として「エリア」を訪れたとしても、神と同等且つ真逆の力を持った者が都合よく現れるとは考えにくい。

万が一……憶が一あったとして、ベーオウルフが易々とリバースに利用されるタマか？　そうは思えない。

「つまり……何らかの理由で、ベーオウルフは最初から『エリア』に組み込まれていた？」

「そう。それも何時でも力を引き出せ、その時まで大人しく眠って

いるように……キョウスケ・ナンブ、君の中に封じられているのさ。これは僕の推測にすぎないけどね」

そうだ、アサキムの言う通りだ。

でなければ、リバースが公園で俺の前に現れた理由が分からなくなる。

小牟、零児の登場は俺の中のベーオウルフを刺激していた。自身の登場が目覚めを助長するとしても、覚醒直後のベーオウルフの封印なら容易とリバースは踏んでいたに違いない。

だから、あの時俺の前にリバースは現れた。そして案の定、ベーオウルフは俺の中に封じ込められた……。

「全て予定調和……俺は奴の手のひらの上で踊っているに過ぎん、そういうことか」

「それも永遠（エンドレス）の舞踏（ワルツ）会を、だよ」

「気に入らんな」

奥歯をギリリと噛みしめた。

我慢ならん。俺とエクセレンの日々も、ジェネ高での日々も、何もかも……！

幸せな日々だと、素直に受け入れていた自分を許せなかった。

「俺はあいつと共に生きる。それを茶番で汚すリバースは許しがたい」

「なら見るがいいさ。監視者の中にある君の過去生を」

アサキムは言った。

「後悔しても知らないけどね」

「望むところだ」

俺は受ける。
受け止める。それがエクセレンと生きる道に繋がるというのなら、それがどんなに凄惨で惨たらしい過去だったとしても受け止めてみせる。
俺は丸椅子から腰を上げた。
難しそうな表情で腕を組んでいた零児が俺を見上げてくる。

「どうする、キョウスケ？」
「いちど俺の家に戻ろう。オータムの力が必要だ」

やはり、彼女は全ての鍵なのだ。俺にはそう思えて仕方なかった。

「なら行くがいいさ。あ、そうそう、アクセル君はこちらで預かるよ。昏睡状態の患者を自宅で看るのは相当キツイだろうしね、病院の体裁もある」
「すまん。恩に着る」

アクセルをアサキムに預け、俺と零児は診察室を出た。
４番診察室の前には順番待ちの老人が既に数人ソファーに座っている。病院ではありがちな光景で現実のようにしか俺には見えない。たぶん現実なのだろう。だが歪んだ、リバースに与えられた現実だった。

「ふふ、お大事に」

診察室の中から聞こえたアサキムの声が、やけに遠く、現実離れしたものに感じられる。彼が言葉に含めた意味を俺は読み取ることはできなかった。
全てを忘れ、「エリア」で生きろということか？

それとも、過去生を見て、無事にここへ戻ってこいということか？
分からない。
だが世の中なんて分からないことだらけだ。
次の目的が分かっているだけ、俺はマシな方なのかもしれない。
勿論、目的地までの道など存在しない。
道は、自分たちで作っていくしかないのだ。

「行こう、零児」
「ああ。俺たちの人生を生きていくために、な」

受付で料金を払い、俺と零児はカイメラ医院を後にした　――……

●

希望はない。

そう思っていた。
だがそれは単なる思い込みで、希望はすぐ傍に転がっていたのかもしれない。
僕は電子カルテ用のテーブル前で、セツコの姿を思い浮かべていた。
彼女の姿は僕を現実に引き戻してくれる。
人工呼吸器、まるでスパゲッティーのように伸びる点滴ルート類、その他もろもろの生命維持のための機械たち……まるで写し身だと、何度思ったことだろう。
まるでセツコは終末を迎える「エリア」の写し身。

まるで現実という名のナイフを視覚を通して心に突き付けられたような絶望感。
世界は間もなく終わるのだ。
何度も何度も。
そして再誕する。

「たまにはいいか　――」

圧倒的な死が近づいているにも関わらず僕は笑っていた。
怖くない訳がない。
死のない肉体だって傷を負えば痛むのだ。肉体的な死が怖くない訳がない。
だがあの2人は違った。
自分のためではない。誰かと生きるために戦っていた。
だから、色々と話してしまったのさ。
滑稽だと思いながらも、勝ち目のない戦いだと思いながらも……ね。

「――　たまには、分の悪い賭けも悪くない」

ＢＥＴするのは僕の命。
乗らせてもらうよ、キョウスケ・ナンブ。
君は最後の希望になり得るだろうか？
君という名の大穴に、僕のすべてを賭けよう。

僕の名前はアサキム・ドーウィン。
君の過去が、君に希望を与えてくれることを祈っているよ　――
……

鋼鉄の駄狼R　～飛べない鳥　2～（後書き）

＜次回予告＞

過去、それは生まれたての赤子以外は必ず持ち合わせているもの
過去が現在の自分を構成し、現在が未来へと突き進む
未来は章末へと行きつき、そこで終わる
それは死というもの
それが当たり前
それが常識
だがここは「エリア」、メビウスの輪のように生と死が螺旋し、
終わりの見えない世界において、過去とはどこの地点を指すのだろうか？
答えは簡単だ
切ってしまえばいい
バッサリと、メビウスの輪を！

次回、「過去生」
メビウスの輪の最果てに何があるのか、誰も知らない。

ボトムズ風次回予告、これで何段目でしょうか？　行き当たりばったりの予告なので何回目か私は覚えていません（オイ

シリアス編、次回が序盤の最終話になる予定です。
書いている間に妄想が膨らんでしまったので、シリアス編は全部で3章構成にしようかと思っています。
ではでは、次回もお付き合いいただければ幸いです！

P．S．

ボトムズ　ペールゼンファイルの次回予告はヤバイですね。

次回予告で鳥肌がたったのは初めてかもしれません！

「嘘を言うなッ！！」

では失礼しました！ノシ

鋼鉄の駄狼Ｒ　～過去生～（前書き）

序盤のエピローグみたいなもんです。

鋼鉄の駄狼Ｒ　～過去生～

「エリア」は歪んでいる。

オータム、そしてアサキムが俺に言ったことだ。

リバースが生み出した「エリア」は平穏を維持するために、数年周期で破界と再世を繰り返している。

巻き込まれる「エリア」の住人は認識を操作され、事実に気付くことなく平和を享受している世界　――　それが「エリア」。

いいさ。それもな。

もし気づかず、いや、気づいたとしても……この「エリア」を受け入れる人間だっているかもしれない。永遠に続く平穏と生、例えるなら古代の帝王が求めた永遠の命のようなものが「エリア」にはある。

だが、それがどうした。

俺はエクセレンと生きていく。

この思いだけはたとえ殺されようとも変えるつもりはないし、魂が何万回生まれ変わろうとも成し遂げてみせるつもりだ。強烈な願望　――　俺が何故、ここまでエクセレンとの生活に固執するのかは正直分からなかった。そもそも理由など最初からないのかもしれない。

ただ、愛する女と生きていく世界が偽りのものであることが、俺　――　キョウスケ・ナンブには我慢ならないのだ。

鋼鉄の駄狼Ｒ　序章　最終話　過去生

俺たちはカイメラ医院から自宅へと戻ってきていた。

「零児。過去生……オータムの中にあるというそれを見れば、俺たちに勝機は沸いてくるのだろうか？」

自宅のボロアパート前で零児に訊くと、零児はお決まりの腕組みスタイルで俺に応えてくれる。

「分からん。過去生を知ること……「森羅」の事件ファイルの記載にも、前世の記憶を持っている者がいなかった訳ではないが、今回のは少々毛色が違うからな」

過去生と前世。完全にイコールで結べるものかは、残念ながら俺に知識がないため断言はできない。

永遠に破界と再世が繰り返される「エリア」では、前世とは前回の「エリア」のことを指すのだろうか？　それとも過去生とは……いや。

「零児、無為に考えるのはよそう」

「キョウスケ……？」

零児が首を傾げていた。

「どの道、俺たちにはオータム以外の情報源はないのだ。手をこまねいているより、行動していくべきだと俺は思う」

「そいつは重畳（ちょうじょう）。リバースの居場所が分からない以上、やれることをやる。勿論、俺も同意見だ」

俺たちは互いに頷きあう。
上がり慣れた鉄錆びだらけの階段をあがり、古びたドアを開けて自室へと戻った。

「エクセレン、今帰ったぞ」
「あ、お帰りキョウスケー」

キッチンの方からエクセレンの声が返ってきた。
香ばしい香りが鼻をくすぐってくる。スパイシーで食欲をかき立てる匂い、どうやらカレーでも作っているらしい。

「勝手にキッチン使ってるわよ。なんだかいつの間にか大所帯になっちゃってるから、夕飯はカレーでいいかなって」
「問題ない。むしろナイスチョイスだ」
「うふふ、待っててね。まだ完成には時間がかかるから～？」

鼻歌交じりで調理を再開するエクセレン。朝の騒動から、オータムの話、そしてカイメラ医院へと移動して帰ってきただけで、いつの間にか結構な時間が経過していた。
まだ夕食と言うには早すぎる時間帯だったが、そういえば昼食をとっていない俺にとっては丁度良い腹具合だ。
カレーは好きな部類の料理だし、エクセレンが作ってくれるのなら文句など欠片もない。零児にカレーで問題ないか確認すると、彼は「すまんな」と一言言って頷いた。零児もカレーは嫌いではないらしい。

「さて……」

夕食が出来上がるまでにまだ時間がある。
俺と零児は居間の方に寝かせてあるオータムの方へと向かった。

１０歳程の女の子の外見をした「エリアの元神様」、というか「監視者」だ。彼女もアサキムも言っていたので、オータムが長年「エリア」で俺たちを見続けてきたのに間違いはないだろう。
彼女の中には俺たちを見てきた記憶が詰まっているはず。

「起きろ、オータム」

肩を軽く叩いてみたが彼女い起きる気配はみえない。

「ふむ、どうしたものか……？」

オータムが起きねば、過去生とやらの話を聞くこともできないし、彼女が言っていた「閲覧」というコトもできはしない。
方法を考えている俺に、

「キョウスケ、俺に任せてくれ」

零児が声をかけてきた。

「有栖流の最終秘伝の一つに『夢想転生』というものがあってな」

むそうてんせい……？　どこかで聞いたことのある響きだが、危険そうなので突っ込まないことにした。

「無にした心　――　つまり夢を見ているような状態の心に、相手の心や記憶を映し出して、擬似体験させるという技だ」
「……藪から棒に、よくそんな技があったな」
「何を言う。事情聴取で口を割らん相手には、これ以上ないもってこいの技だぞ。……尤も、人権問題で使用はできないがな」

駄目だな、これは。
無用の長物、としか言い様のない技だ。
確かに相手の記憶を疑似体験できれば、これ以上ない証拠にはなるだろうし、検挙の理由にも挙げられるだろう。
だが零児の口ぶりからは使ったことは無いと見える。
人権問題、プライバシーの尊重という枷の前では、夢想転生など宝の持ち腐れでしかないという事だな。使えない技……そう、平常時においては、だ。

「しかし今は非常時だ」
「理解が早くて助かる」
「当然だ」

放置すれば、あと3日で「エリア」が滅ぶ。この時勢を、緊急時と呼ばずして何と呼ぶのか。
夢想転生を使ってオータムから過去生の情報を引き出す、それに異存はない。
だが気になることが1つあった。

「零児、その技の成功率はどのぐらいだ？」
「成功率？　いや、試したことがないからな。成功率というのは答えることができないが……」

やはりか……だが、まぁいい。
細かいことは気にしている場合ではないからな。
ベーオウルフを封印したように、零児の腕は一流だ。それを信用するのが今の俺の仕事だろう。

「零児、頼む」
「いいのか？」

「あぁ、他の方法を模索している時間の方が惜しい」
「確かにな」

零児は俺の答えに同意を示してくれた。
その後、俺は零児に言われるまま、居間で寝かされているオータムの隣に横になった。布団こそ敷いていないが、もしエクセレンがここに加われば、親子で川の字で寝ているように見える位置に俺は仰向けになった。
零児は説明した夢想転生の手順はこうだ。
隣り合って寝ている2人の枕元に零児が座禅をし、両者の体に触れた零児を通して、記憶を映し出す。
その間、零児は集中しているし、俺は寝ているので動けない。かかる時間は軽く昼寝している程度のもの……30～1時間程度だそうである。

「では、いくぞ」

無言で頷く俺の頭に零児の手のひらが添えられる。
見ると、オータムの頭にも零児の手が触れていた。

「有栖流　最終秘伝　夢想転生……！」

その言葉の後、空気が変わる。霊力に鈍感な俺でも分かった。瞑想し、真剣に集中している零児の姿が容易に想像できる。
零児の手のひらを通じて何かが流れ込んできた。
正体不明の俺にとって未知の何か……そうか、これが……きっと霊力と言うモノなのだろう……しかし直後に、瞼が重くなるのを俺は感じていた。
鉛のようになった瞼には逆らえず視界が暗転する。
体から力が抜け……眠気が俺を支配していく……。

過去生……俺の過去……「エリア」に来る前の俺の過去に、俺がエクセレンと生きていくために必要な手がかりがあるのだろうか……？

リバースを倒し、彼女と生きていくための……何か……ベーオウルフの力を制御するための術が……あるのか？　そんなものが……？

分からん……

だが……

……俺は……分の悪い賭けは嫌いじゃない……

……眠気に敗けた俺の意識は深い闇の中に沈んでいく　――

……

――全ては静寂なる世界のために……

誰の言葉……？　もう、何も分からない……

To be continued――……

鋼鉄の駄狼Ｒ　～過去生～（後書き）

次回、小話を挟んでから第2章に移ります。

これまで読んでくださった皆さんありがとうございます！

よろしければ、次回からもよろしくお願いします。

???

「助けてくれ！」

悲鳴によってそれは目覚めた。

「殺さないでッ！！」「嫌だ、嫌だあぁぁっ！！」「うあああぁぁっぁ！！」「やめろぉぉぉっ！！」「死にたくないよぉ！！」「こっちに来るな！」「撃たないで！！」「ぎゃあああぁぁっ！！」「母さんッ、お母さん助けて ――――

――悲鳴によって、それは涙を流した。

いつなのか、どこなのか、誰なのかもわからない。

だがいつでも、どの宇宙でも、誰もが同じだと、それは感じていた。

世界には悲劇が多すぎる。

悲劇のない世界はないものか。それは模索しながら全ての次元を見据えてきた。

悲劇のない世界。

悲劇のない世界。

そんなものはない。

知っていた。それには理解できていた。だからそれは何もしない、ただ涙を流すだけだった。

だが、涙は違っていた。

――世界には悲劇が多すぎる

それが落とした涙の一つが言った。
涙は白い光体になり、光から女の声が響いていた。

――悲劇のない世界を創るために……全ては、平穏なる世界のために……

そう言い残すと、光体は消えてしまった。行先は分からない。きっと何処かの次元の宇宙に足を運んだのだろう。

――世界には悲劇が多すぎる

それが落としたもう一つの涙が言った。
もう一つの涙はどす黒く光る光体に姿を変え、黒い光体から男の声が聞こえてくる。

――破壊する

黒い光体が言った

――悲劇を生み出すものを、全て……全ては、静寂なる世界のた

めに……

そう言い残すと、黒い光体も消えてしまった。行先は分からない。
きっと何処かの次元の宇宙に根を下ろすのだろう。

その様子を、それはただ見ていた。
自分が手を下して何が変わるわけでもない。
好きにすればいい。
それは　――　太極はただ世界を見続けるだけ……

時代も定かでない、気が遠くなるほど昔の出来事だった　――……

???（後書き）

＜次回予告＞

新西暦と呼ばれた時代
地球は異星からの脅威に曝され続けていた
数えきれない程の人が死に、数えきれない程の悲劇が生まれた
しかし人は戦うことを止めない
戦わなければ守れない
愛する人たちを守れない！
だからこそ、その男は立ち上がるのだ！

次回、鋼鉄の駄狼Ｒ２　決戦前夜
男の命は何のために賭けるべきなのか？

次回からは鋼鉄の駄狼のキョウスケ視点……要するに３人称で送る予定です。
誤字脱字、感想募集中です！
原作から逸脱した方向に向かいそうですが、シリアス編Ｒ　第二章　鋼鉄の孤狼始まります！
よろしくお願いします！

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～決戦前夜～（前書き）

＜注意＞
この作品の舞台はパラレルワールドです。
使用している機体の名称や種類が違ったりします。
人間関係も原作とは色々違いますが、そこはご愛嬌ってことで生暖かく見守ってもらえるとありがたいです。
それでは、スパロボ学院　シリアス編Ｒ　２章「鋼鉄の孤狼」始まります！

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～決戦前夜～

極めて近く、限りなく遠い世界で　――……

新西暦と呼ばれる時代。

人類が宇宙に出て既に2世紀が過ぎようとしていた時代に、地球は地球人同士の争いと異星人による武力侵攻という脅威に曝されていた。

新西暦１７９年にアイドネウス島に落下した「メテオ３」から発見されたＥＯＴ（エキオトテクノロジー）から異星人の存在が明らかになった。そしてビアン・ゾルダークを総統とするディバイン・クルセイダーズは、明らかとなった地球外知的生命体に徹底抗戦の意を表明し、地球連邦政府に反旗を翻した。

「ＤＣ戦争」と呼ばれる地球人類同士の戦争……そこに異星人エアロゲイターが乱入し、争いは地上だけでなく宇宙までを戦場にした生き残りをかけた戦いに発展した。

「Ｌ５戦役」と呼ばれる戦争を勝利した人類。

しかし訪れた平和は束の間のものだった。

インスペクター。

新西暦１８７年、地球侵略に乗り出した新たな異星人の通称である。

彼らの登場により、地球人類の生き残りを賭けた戦争は再び勃発し、無数の兵士と罪なき命が散って行った。数えることなどできな

い。両手ではとても数えきれない程の人間が死んでいった。
だが幸か不幸か、地球人類の戦闘に関する潜在能力はインスペクターのそれを上回っていた。
劣勢だった戦況はいつしか覆る。
新たな兵器の開発、戦闘スキルや戦術の洗練、地球人類が巨大な敵に一眼となって立ち向かう様はまるで巨大な一匹の狼のようであり、人類の反抗はインスペクターの喉元へと牙を突きつけるまでに至っていた。

新西暦187年の末、クロガネを旗艦とした突撃部隊が編成される。
彼らは、かつての決戦場「ホワイトスター」へと向かっていた。
エアロゲイターをくだした白き魔星は間もなく血と銃弾と硝煙に包まれるだろう。
決行は明朝10：00……インスペクターとの最終決戦の火蓋が切って落とされようとしていた ――……

●

地球 ―― 某所、士官学校の教壇にて

「――そこでヴァイスちゃんがズガガガガッと撃つとね、ドギャァァンと敵が爆発して、隊長を失った敵のテンションはズゥゥンンと下がるわけね。このように、戦闘では指揮官機を倒すことはとてもグッドな事なのよん？　アンダスタン？」

「エクセレン先生、擬音だらけでよく分かりません！」

教鞭を取っていた金髪女教師――エクセレンの授業を受けている生徒が堪らず声を上げていた。

エクセレンはペンを取り、ホワイトボードに向かって絵と数字や文字を書いており、絵はお世辞にも上手いとは言えない。ロボットらしい絵からは矢印が伸びており、おそらく「L5戦役」時の異星人の偵察機バグズであろう絵に突き刺さり、大きなバツ印が描かれている。おそらく矢印は銃弾でバグズをそれで撃破した、という意味だろう。

しかもエクセレンの説明は非常に擬音を多用しており、抽象的すぎて理解すら難しい。士官学校の生徒たちが理解できないのも頷けた。

「そーう？　私は分かりやすいと思うんだけどなぁ……」

「分かりません。このままでは、私たちのテスト結果は散々な結果になるのが目に見えています！」

エクセレンに異を唱えていた生徒が声を荒げていた。

なるほど。学生にとってテストは重大なイベントなのだから、エクセレンのように意味不明な授業をされても対策も練れずに困るに違いない。

不平が上がるのは当たり前なのだが、エクセレンの面の皮は厚かった。

「えー、分からない人は後で補習してあげます。先生がぁ、手取り足取り、腰取り教えてア・ゲ・ル？」

「うっ、結構です！　それに先生には旦那さんがいるでしょうが！」

エクセレンの冗談に一々反応する生徒。彼女はその反応を見て楽

しんでいる。そのことに気付かない生徒の初心さが彼女の悪戯心を刺激しているのだろう。

旦那、というキーワードに生徒たちの視線がエクセレンの左手薬指に集中した。

キラリと光る白銀の結婚指輪がそこにあった。

と、その時。

『エクセレン・ナンブ先生、すぐに職員室まで来てください。宇宙から連絡が入っています。繰り返します、エクセレン・ナンブ先生、すぐに職員室に――』

「あらん、宇宙からってダーリンかしら？　じゃあみんな、そういうことだから！」

エクセレンはホワイトボードの落書きを消すと、デカデカと自習と書いて教室を飛び出して行ってしまった。

途端に残された生徒たちが話だし、教室中がエクセレンの通信相手の話題に持ちきりとなる。

ザワメキの中にはこんな言葉もあった。

「なぁなぁ、エクセレン先生ってハガネで戦っていたってホントか？」

万能宇宙戦艦「ハガネ」――「Ｌ５戦役」でエアロゲイターを退けた特殊部隊の旗艦だった船だ。現在も現役で、最強の宇宙戦艦の一角を担っている。

エクセレンはかつて「Ｌ５戦役」を生き抜いた猛者の１人だった。

「ホントらしいぞ。射撃の名手だったそうだ。その人も寿退社ならぬ寿退役して今じゃ士官学校の先生……そして、旦那は空の上ってね」

「インスペクターとの最終決戦……クロガネは勝てるのかな？」

生徒の１人の言葉に教室中が静まり返った。

生徒たちは分かっているのだ。戦況が地球側に優勢に傾いているのは確かだが、敗北すれば人類は滅ぼされる……または支配されるだろう。クロガネを旗艦とした部隊は現地球側では最強といえたが、逆に負ければ地球側が敗北するのと同義だ……その事を生徒たちは理解していた。

それ故の沈黙。

敗ければ自分たちも死……もしくはそれに準ずる苦痛を受けることになる。

「大丈夫だって！！」

重々しい沈黙は一人の生徒の空元気によって破られた。

「忘れたのかよ皆！　クロガネにはあの人がいるんだぜ！　エクセレン先生の旦那がさ！」

「そうだな！　エクセレン先生の旦那さん……キョウスケ・ナンブ！」

「殺しても死なない男、鋼鉄の孤狼　――　ベーオウルフと、不死の部隊ベーオウルブズがいるんだ！！」

そうだ、クロガネは負けないのだ。

と、生徒たちはキョウスケの名が出ただけで大きな盛り上がりを見せていた。

現在の時刻は１７：００……ホワイトスター突入作戦の決行は明朝の１０：００。

明日の１戦で全てが決まる。

地球人類が生きるか死ぬか……全てはクロガネの双肩にかかって

いた　――……

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～決戦前夜～

宇宙　――　Ｌ５宙域付近に停留するクロガネの通信室にて。

「久しぶりだな、エクセレン」

画面にうつされたエクセレンの笑顔に男が話しかけていた。

男は金属製の肩当があしらわれた赤いジャケットを肩にかけている。上半身はノースリーブの黒いシャツ、その下には鍛え抜かれた筋肉が垣間見える。無駄な脂肪が少ない、戦うための筋肉のように見えた。

茶髪の先端を金色に染めたその男はエクセレンを見て口元を緩ませている。

男の名前はキョウスケ・ナンブ。

地球連邦特殊部隊「ベーオウルブズ」の隊長であり、階級は大尉。しかしその実力と強運　――　異常なまでの作戦生存率から「絶対に死なない男」の異名を取る連邦随一の猛者である。

妻帯者の証の婚約指輪も薬指にはまっていた。

戦場では一瞬たりとも気は抜けない、まだ戦場に辿りついていない戦艦の中であろうともキョウスケは神経を張りつめている。緊張感の連続する時間はせわしなく流れていた。そんな中、最終決戦前に唯一許された安息の時間がエクセレンとの通信だ。

時間にして５分程度しか許されないだろう。ほんの５分、たったそれだけでもエクセレンの笑顔はキョウスケの乾いた心を潤してく

れていた。

「そっちは元気でやっているか？」

「もちろんよ。キョウスケこそ大丈夫？　怪我とかしてない？」

「ああ。俺の方は問題ない」

5分の間、キョウスケとエクセレンは他愛のない会話を繰り返した。

士官学校での出来事やクロガネクルーの話……取り立てて意味があるとは言えない会話を続ける。

傍から見れば貴重な5分間を無為に費やしているように見えるかもしれない。

しかしキョウスケの心は確実に癒されていた。

そして胸に立てた誓いを新たにする。

妻の――エクセレンの笑顔を守るために。彼女と共に生きていける平和な世界を手に入れるために俺は戦う、と。

地球人類の未来のためという大義名分も確かにある。だがキョウスケが戦争で命を張る理由は、エクセレンという1人の女のためと言っても過言ではなかった。

「エクセレン、絶対に生きて帰るからな」

「うん、無事に帰ってきてねダーリン？」

5分が過ぎた頃、キョウスケがエクセレンに別れを告げる。

エクセレンも彼に応え、

「あと、戻ったら話があるの」

お腹をさすりながら微笑んでいた。

「？　なんだ？　話なら今すればいいじゃないか」
「もぉー、キョウスケのニブちん」

エクセレンは苦笑いを浮かべながらもお腹をさすり続けていた。
キョウスケには彼女の行動が何を意味しているのか分からなかったが、冷静に考えてみれば、彼女の行動の意味がうっすらと理解できる。

「もしや……エクセレン、お前　――」
「うふふ、これ以上はヒ・ミ・ツよん？　続きは戻ってきてから。楽しみは最後にとっておきましょう」

キョウスケは確信した。
エクセレンの言質を得たわけではないが、おそらく、いやほぼ確実に間違いないだろう。
キョウスケとエクセレンは四六時中離れ離れな訳ではなかった。ささやかな結婚披露宴のときはもちろん一緒だったし、初夜だって、何度も夜を共に過ごしたこともある　――　つまりはそういうことだ。
胸の奥が温かい。キョウスケの中はには奇妙な充足感生まれていた。

「死ねない理由がまた1つ増えたな」

エクセレンに聞こえないように小さく呟くキョウスケ。
キョウスケは何度も死の淵から生還してきた男だ。搭乗員がほぼ全滅した航空機の墜落事故でも生き残ったし、試作可変戦闘機の変形実験中に機体が空中分解してことだってあった。戦闘中に機体を大破させられたこともあるし、脱出装置が機能しなかったことだってある。

だがキョウスケは死ななかった。
重症こそ負いはしたが常人では考えられない短い期間で必ず戦線復帰する。いつしか「絶対に死なない男」と揶揄されるようになっていた。

――死にたいと思ったことはない、だが、これ程生きたいと願ったこともない

エクセレンとの通信は彼の心に決意を刻み込ませていた。たった5分の会話はもうすでにタイムオーバーしていたし、通信室の外には他の隊員たちが順番待ちをしていることだろう。
だがこの5分はキョウスケに強い力を与えてくれた。そう彼は感じている。

「エクセレン、また会おう」
「うん、待ってるからね」

通信室にいつまでも居座ることはできない。キョウスケはエクセレンに別れの言葉を告げる。
プツリと音がして画面が暗転した。
もうしばらく彼女の顔を拝めない。次はインスペクターとの戦争に勝利し、生還する時までお預けだ。
キョウスケは通信室を後にする。

「キョウスケさん」
「エクセ姉さんとの話は終わったすか？」

通信室を出ると、緑色のバンダナを巻いた男と紫色の髪をした若

い男がキョウスケを出迎えた。

「タスク、アラド……どうした？」

キョウスケは自分の部下である2人の名前を呼んでいた。

緑色のバンダナを巻いた男はタスク・シングウジ、紫色の髪をして能天気な笑顔を浮かべている方がアラド・バランガ。

鋼鉄の孤狼（ベーオウルフ）ことキョウスケ・ナンブの率いる少数精鋭の特殊部隊「ベーオウルブズ」。

2人はそのメンバーで、キョウスケと同じく運が強い――いや、戦場からの異常な生還率を誇る部下であった。

「何って、ブリーフィングっすよ。忘れてたんですか？」

「ああ、そうだったな」

アラドの言葉に思い出す。

インスペクターとの最終決戦――小型衛星級の巨大軍事要塞「ホワイトスター」での総力戦の作戦会議がもうすぐ開かれる予定だった。当然、ブリーフィングにはクロガネに集められた精鋭全員が参加する。キョウスケはブリーフィング後ではエクセレンと話をする時間が無くなるかもしれないと考え、早めに通信室に足を運んでいたのだ。

私情を挟んで申し訳ないと思うのと同時に、キョウスケは考えていた。

……このホワイトスターの総力戦……一体どれだけの仲間が生きて戻れるだろうか？　と。

ホワイトスターは元々「エアロゲイター」の地球侵攻のための拠点だったのだ。強力な拠点防衛兵器を多数配備しているし「L5戦役」でも苦しめられた。インスペクターがそれを使わない筈はないだろう。いや、もしかすると以前以上に強化してクロガネを待ち構

えている可能性が高い……。
防衛兵器を無力化することが、今回の作戦の成否のカギと言ってもいい。

「では、行くか？」
「はい！」「うっす！」

肩に掛けていたジャケットを羽織るキョウスケ。彼の赤いジャケットの腕部分には「ベーオウルブズ」の隊長の証である狼を象った腕章が描かれていた。
キョウスケはタスクとアラドを連れてブリーフィングルームへと向かう。

現時刻は１８：００……作戦決行まで、あと１６時間……

●

宇宙戦艦「クロガネ」　――　ブリーフィングルーム。

ブリーフィングルームで説明されたホワイトスター攻略作戦はこうだ。

クロガネの艦首には超巨大な回転衝角　――　巨大なドリルが装備されている。エネルギーフィールドを展開してインスペクターの攻撃を防御しつつ、ドリルを使って突撃を敢行し、ホワイトスター内部へクロガネを直接突入させる。

クロガネ艦隊の他の艦の援護を受けながらの突入になるが、おそらく突入後は半壊し使い物にならないであろうクロガネを放棄、特機を中心とした主力部隊を中心部に向かわせてインスペクターの指揮官機を撃破する。

「作戦の成功確率は兎も角、生存率は極めて低くなるだろう」

艦長代理であるテツヤ・オノデラが説明していた。

当然だろう。

クロガネが半壊し動けないのなら、行きは良いが帰る手段はないことになる。指揮官機を撃破できたとしてもインスペクターが全滅するわけではなく、消耗した所を残存部隊やホワイトスターの防衛機構に攻撃されては各個撃破されかねない。

いくら特機が一騎当千のパワーを秘めていても多勢に無勢では勝敗は目に見えている。クロガネ以外の脱出方法または敵戦力の無力化する方法がなければ、作戦が成功しても全滅すらありうる、ということだ。

テツヤの話を受けてブリーフィングルームが途端に騒がしくなる。

誰だって死ぬと分かって戦場へ行きたくなどない。それはキョウスケだって同じだった。

「静かにしろ！　手を考えていない訳ではない！」

テツヤの一喝に場は静まり返る。

彼は咳払いを1つして続けた。

「もしクロガネが使い物にならなくなった場合、ホワイトスターからの脱出方法は各自で探してもらうか、各々の機体で宇宙空間に脱出し味方部隊に合流するしかない。

だがここで問題になるのがインスペクターの残存部隊と、なにより

ホワイトスターの拠点防衛兵器だ」

キョウスケはテツヤの言葉に首を縦に振る。

ホワイトスターの拠点防衛兵器――対艦用のエネルギー兵器やＰＴ用の機銃やミサイルなど、全てをキョウスケも把握している訳ではないが、それらは確実にキョウスケたちだけを狙って攻撃を仕掛けてくるだろう。

当然、防衛兵器の攻撃に対処すれば隙ができる。その隙を残存部隊に突かれたのでは堪ったものでもないし、防衛兵器を全て破壊して回るのもホワイトスターが巨大すぎて現実的ではない。

「そこでこれを使う」

テツヤがブリーフィングルーム備え付けのモニターを指さした。モニターには地球連邦の主力ＰＴゲシュペンストが表示されている。そのゲシュペンストのマニュピレーターの先には手の平大の金属製の筒が握られている。

２ｍ程の円筒形の外殻には【マ改造】とキョウスケに馴染みのある言葉が描かれていた。

「マリオン・ラドム博士が開発した超強力なコンピューターウィルスだ。これを防衛兵器の制御部分に使用し、友軍と敵軍の認識を書き換える」

「……つまり成功すれば、防衛兵器が俺たちでなくインスペクターを攻撃する、ということか？」

「そういうことだ」

キョウスケは頭痛を覚えて頭を押さえた。恐るべきは【マ改造】……いや、マリオン・ラドム博士だと、身に染みていた事実を改めて実感する。短期間でホワイトスター防衛兵器用のウィルスなど良

く作れたものだ、と。
確かにホワイトスターはインスペクターに接収されるまでは地球が管理していた。防衛兵器のデータを保有していてもおかしくはない。
仮にウィルスが有効で兵器の識別が反転するというのなら、防衛兵器ありきとの認識のインスペクター軍が防衛兵器に攻撃されればパニックとなるのは間違いない。現状の把握をされる前に大多数の敵を撃破が可能だろう。
正に起死回生、一発逆転の一手になり得る。

「ただし、ウィルスがきけばの話だがな」

テツヤもキョウスケと同意見のようだった。

「ウィルスはインスペクターに占拠される前のホワイトスターのモノを使って作られている。インスペクターが防衛兵器のデータを改変していたり、対策を練っているのなら通用しない可能性の方が高い」
「オールオアナッシング……運否天賦（うんぴてんぷ）の勝負になりそうだな」
「真に遺憾だが、我々には時間がない。この機を逃せば、敵は本星へと増援を要請する可能性もある。そうなれば我々に未来はない」

確かにそうだと、キョウスケは同意する。
現状でこそ彼我戦力差は同等か、インスペクター側が少し勝っている程度ではある。しかしインスペクターは地球侵攻の先遣隊のようなものだ。彼らの後ろには本星という強力なバックボーンが存在することを忘れてはならない。

「ジョーカーの切り時、それが今のようだな」

キョウスケの呟きが聞こえていたのか、両隣のタスクとアラドが頷いていた。
多少運任せでもやるしかないのだ。
だが問題は、誰がその役を担うかだった。
この役目を担う者たちは少数でなければならない。感づかれれば何らかの対策を練られるだろう。大多数で制御室へ押しかけるなど愚の骨頂なのだ。
敵の基地内を少人数で攻撃を掻い潜りながら進む……今回の最終決戦で最も成功率・生還率共に低い作戦であることは間違いないだろう。

「この作戦の担当を発表する」

テツヤの言葉をブリーフィングルーム中が息を飲んで見守っていた。

「特機は論外だ。目立ちすぎるからな。特機は主力部隊として指揮官機の撃破と共に派手に暴れ回り、敵の陽動を行ってもらいたい」
「……となれば、ウィルス運搬役はやはりＰＴ（パーソナルトルーパー）だな」
「ああ。そして、この作戦に失敗は許されん。制御室へ１人でも生存してウィルスを使用してもらわなければならない……となれば、必然的に作戦生存率の高い部隊が必要となるだろう」

テツヤの視線がキョウスケに向けられた。ブリフィーングルーム中の視線がキョウスケと、タスク、アラド ――つまり特殊部隊「ベーオウルブズ」に集中する。
キョウスケは腕を組み、目を瞑っていた。
キョウスケ、タスク、アラドの３人は強運の持ち主だ。いや、悪運と言ってもいい。作戦の成否は問わず、彼らは絶対に死なず、生きて帰ってきた。

異常に作戦生存率の高い3人で構成された特殊部隊。
それがベーオウルブズ、別名 ――

「不死の部隊」

テツヤが言う。

「お前たちの評判に俺は賭けてみたい。すまんが……お前たちの命を俺にくれ」
「笑えん冗談だ」

キョウスケは鼻で笑い、目を開いた。
全員の視線がキョウスケの視界に入ってくる。期待と不安と罪悪感に満ちた視線だ。自分が選ばれなくて良かった、という安堵感が混じったものもあった。
誰だって死にたくはない。
キョウスケだってそうだ。
ましてや彼には待っている女がいるのだ、死ぬわけにはいかない。
キョウスケの鋭い眼光がテツヤを射抜いていた。

「俺たちは死なん。喩え、インスペクターの血肉を喰らっても生き延びてやる」
「そうだ！　俺たちは死なねぇんだ！！」

アラドが大声を上げていた。

「この作戦が終わったら、ゼオラが腹一杯パインサラダ食わせてくれるんだ！　俺の食い意地は半端ないからな、こんな所で死ぬわけねえぜ！！」
「そうだ！　俺もこの作戦が終わったら、レオナちゃんに正式に交

際を申し込むんだ！！　こんな所で死ねるかよ！！」

タスクもアラドに釣られて絶叫していた。

キョウスケは思う。こいつらにも死ねない理由があるのだ。大切な人たちがいるのだ。ならば、死ねない。愛する者たちの未来を勝ち取るために絶対に負けるわけにはいかない。

勝利、そして生還。

キョウスケたちの目的はそれだけだ。この瞬間、彼らは間違いなくチームだった。

「ではベーオウルブズ隊長、キョウスケ・ナンブ大尉……この作戦を頼まれてくれるか？」

テツヤが最後の確認を取ってきた。

答えなど決まっている、キョウスケは口を開く。

「受けよう。分の悪い賭けは嫌いじゃない」

どんな相手だろうと、どんな難関だろうと関係ない。

エクセレンと共に生きる未来のためにキョウスケは引き金を引く。

ただ撃ち貫くのみ……そうだ、やるしかないのだ。キョウスケは体に力が入るのを感じていた。

「よし！　作戦の決行は明朝１０：００！　各自の奮闘と生還を祈る！！」

『イエス、サー！！』

ブリーフィングは終了し、それぞれが部屋から出ていく。

生き残るための努力するのか、明日に備えて休むのか、友や恋人との時間を大切にするのか……それは人ぞれぞれだ。

ただキョウスケたちは格納庫へと足を運んでいた。
生き残るため、機体の最終調整を行うために。

時刻は２０：００……作戦決行まで、あと１４時間――……

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～決戦前夜～（後書き）

＜次回予告＞

まるで剥き身の刀
それが男に抱いた最初の印象だった
触れれば切れる、鋭利な切っ先と鋭い眼光を持つ男
男は言う
兵士は戦争なしでは生きられない……
無情にも、時間だけは平等に刻々と刻まれていく

次回、鋼鉄の駄狼Ｒ２「出撃」
ＥＦＡ特別任務実行部隊、彼らはこの戦いに何を求める？

第２章は３人称でお送りします。
原作のベーオウルブズは大部隊ですが、本作の同部隊は３人編成です。スパロボで殺しても「ラッキー」とか言って死にそうにない、キョウスケの博打仲間を詰め込みました。
しばらくは女っ気ゼロの話が続くと思いますが、感想・誤字脱字等の報告をお待ちしています！

ではでは、よろしければまた次回でお会いしましょうノシ

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～出撃～

宇宙戦艦「クロガネ」　――　格納庫。

ブリーフィング終了後、キョウスケはタスクとアラドと連れ立って格納庫に足を運んでいた。

何個かある格納庫の内、キョウスケたちの訪れたのはＰＴ用の格納庫だった。ホワイトスター攻略作戦に選抜された兵士たちのＰＴが、格納庫のハンガーに固定されている。ＰＴの全長は平均２０Ｍ程、それ以上のサイズになる特機は別の格納庫に搭載されていた。

量産型のゲシュペンストにリオンシリーズ、さらにはワンオフの専用機など　――　様々な機種が安置され、もし軍事ヲタクから見れば遊園地に見えるかもしれない。尤も、一般人から見れば兵器が集められた異常空間でしかないのだが、キョウスケたちにとっては命を預ける相棒の眠る寝室といった所だろう。

「頼むぞ、ゲシュペンストＭｋ－？」

ハンガーに固定された愛機に向かってキョウスケは呟いていた。コックピットの高さに作られた通路からは彼の愛機「ゲシュペンストＭｋ－？」の姿を見ることができる。全高約２０ｍ、炎のような真紅のカラーリングを施した近接戦闘重視の重装甲タイプＰＴだ。

特徴的な１本角を頭部から生やし全体的に鋭角的なフォルムをしており、両肩には巨大なコンテナ、右腕部には巨大な杭打機　――　パイルバンカー　――が装備されている。一応、気休め程度に左腕部に５連マシンキャノンも装備されているが、どう見ても遠距離射撃戦重視の機体には見えなかった。

ちなみにコンテナの中身は火薬入りの特製チタン弾「Ｍ１８０Ａ３」が装填されており、指向性の爆圧によって飛ばした大量のチタ

ン弾で敵を粉砕する兵器でアヴァランチクレイモアと呼ばれる。
さらにパイルバンカーはリボルビング・バンカーの名称であり、バンカーの根元にある回転式薬室に装填された炸薬で巨大な杭が打ち出される仕組みになっている。装弾数は6発だが、普通に格闘しても敵機装甲を貫通する威力の杭を、炸薬でさらに撃ち込むのだから威力の方は必殺の名に相応しいものとなっていた。
実は頭部の1本角も飾りではなかった。プラズマホーンという名の兵器であり、プラズマ帯電させたブレードとして使用し、PTの装甲程度なら豆腐のように切り刻める優れものである。
さらにそれらの武器の威力を十二分に発揮するため、接近戦に耐えうるように特機並の重装甲を施し、落ちた機動性は並のパイロットではブラックアウトすら起こしかねない程の大出力ブースターで得た推進力でカバー、あまりにバランスの悪い機体のためテスラドライブで安定性を辛うじて保っている始末……あまりに時代に逆行したコンセプトで作られた欠陥機……それがゲシュペンストMk－?だった。

――だが俺はこいつと共に生き抜いてきた

キョウスケはMk－?の装甲に触れ、思いを馳せる。
地球連邦の主力量産機「ゲシュペンストシリーズ」の後継機として開発されたが、誰も扱えずお蔵入りしていたMk－?。しかしキョウスケという最高のパイロットを得たことで、Mk－?は戦場に帰り咲きベーオウルブズの隊長機として活躍している。
今度もコイツと切り抜けてみせる。決意を胸にキョウスケはMk－?の各部をチェックし始めた。
Mk－?は最近オーバーホールしたばかりだったため、特に異常は見当たらなかった。これなら最高のコンディションで戦いに臨め

そうだ。

「キョウスケさん」

キョウスケはタスクに声をかけられた。

「どうですか、俺のＭｋ－？？」

タスクは自分の機体を指さして質問してくる。

指先には赤いチームカラーに塗装された量産型ゲシュペンストＭｋ－？改・タイプＣがあった。両肩にビームキャノンをマウントした砲戦仕様の機体だ。

「どうしましょう、やっぱりビームコーティングした方がいいですかね？」

「コートなら必要以上にエネルギーは食わん。今回は今まで以上の激戦になるだろう、できることはしておけ」

「了解です」

「あと、手持ちの武装はアサルトマシンガンにしておけ。実弾ならキャノンと違ってエネルギーを喰わんからな」

「はい。交換用の弾倉もできる限り搭載しますよ」

タスクは元メカニックだけあって理解が早い。キョウスケのアドバイスを受け、彼はすぐに作業に取り掛かった。

タクスは整備員にコーティングの依頼に向かっていく。

コーティングを施すのには手間がかかるし経費も掛かるが、対ビームに対する対弾性は格段に上昇する。しかもビームを弾く特殊な素材を装甲表面に塗布するだけなので、機体の重量にはほとんど影響を与えないものだ。

ただしコストは高かった。

しかも毎回コーティングをし直さなければいけないため、そうそう量産機に導入できるような技術ではなかった。

だが今回は人類の命運をかけた1戦だ。コスト度外視で機体を整備できるため、タスクも機体に好きなだけ武装や処理を施すことができるのだ。

「キョウスケさん、俺のＭｋ－？はどうっすか？」

アラドがキョウスケに訊いてきた。

彼の機体も量産型ゲシュペンストＭｋ－？改だった。機体色は当然のようにベーオウルブズの赤に統一されている。ただ武装がタスクのＭｋ－？とは違っていた。

両腕部にブラズマバックラー、胸部に大出力のメガブラスターキャノンを装備し、ブースターも高出力に整備されており完全に接近戦使用の機体に仕上がっている。

ゲシュペンストＭｋ－？改は機体各部に設置されたハードポイントを交換することで、様々な武装を装備することができた。そのため非常に汎用性は高いのだが、反面、まだ生産ラインが整っていないためコストは割高だった。

キョウスケは、アラドの接近戦用のＭｋ－？改 ――― タイプＧを見る。

「アラド、お前もコーティングは施しておけ。今回の作戦中は帰艦することは不可能だ。お前は接近戦しか能がないからな、対弾性は可能な限り引き延ばしておけ」

「了解っす！　武器にブーストハンマーを持って行ってもいいっすか？」

ブーストハンマーとは複数の鋭利な突起付きの鉄球を、鉄球に内臓されたブースターで加速して敵に叩きつける質量兵器だ。威力は

折り紙つきだが、鉄球に接続された鎖の距離しか射程がなく汎用性に欠ける。
ホワイトスター内部ではどんな敵が待ち構えているか分からない。今回は射程、安定した威力、換装した弾倉を捨てれば機体重量の削減にもつながる実弾兵器が無難だろう。

「アサルトマシンガンにしておけ。敵機をけん制しつつ距離を詰めるのには最適だ」
「ちぇ、ハンマー威力高いのになぁ」
「交換用の弾倉も積み込んでおけよ」

キョウスケの忠告にアラドは「うっす」と笑顔を浮かべて作業に戻った。
実弾兵器は確かに有用だが、弾がなければ用はなさない。補給が望めない状況では機体重量と相談しつつ、交換用の弾倉を準備することが肝要だ。
キョウスケは整備員の協力を得て、ゲシュペンストＭｋ－？の腰部に鋼鉄製のチェーンを巻きつけ、そこに交換用の弾倉を釣るし下げることにした。
リボルビングバンカーの炸裂弾の代えと、今回手持ち武器に選んだＭ９０アサルトライフルの交換用弾倉だ。タスク、アラドと共に手持ち武器の射程はライフル系の武装より短いが、今回の作戦はホワイトスター内部をなるべく敵と遭遇しないことが理想である。
仮に遭遇した場合、命中率や連射率に優れるマシンガンは敵機の掃討に優れているし、タスクの長射程のビームキャノンの存在もあった。３機で連携すれば距離の問題はさほど問題にはならないだろう……
しばらく、キョウスケたちは黙々と作業を続けた。
今回の最終決戦を生き残るために。
生きて、エクセレンと再会するためにキョウスケは出来得ること

を全て行った。武装の確認、戦闘プログラムの入力、連携パターンの確認……最後に、ホワイトスター内部の地図をＭｋ－？のコンピュータに入力し終わった時には、既に作戦当日の０１：００時を回っていた。

「ほぉ、精が出るな」

そんな時だった。聞き慣れぬ声の主が背後から話しかけてきたのは。

キョウスケが振り返ると、パーマのかかった赤い髪の男が立っていた。垂れ目の見慣れない男だったが、幾つもの戦場を潜り抜けた兵士の匂いがする男だった。

クロガネの中にいる以上、明日――いや、もう今日になったのだが――のホワイトスター最終決戦に参加する精鋭の一員であるのは間違いないだろう。

「初めましてだな、ベーオウルフ」

赤髪の男が言った。

「俺の名前はアクセル・アルマー。ＥＦＡ特別任務実行部隊の隊長をしている」

赤髪の男の名前はアクセル・アルマーというらしい。俺が知っている男にそっくり、いや瓜二つだ。

「不死の部隊ベーオウルブズの隊長、キョウスケ・ナンブ――通称鋼鉄の孤狼（ベーオウルフ）。俺は貴様に興味がある……少し話をしないか、これがな？」

語尾を強調するアクセルの妙な喋り方にキョウスケは一瞬だけ振り向いたが、すぐに視線を戻して作業を再開した。

「悪いが俺はお前に興味はない」

「そう邪険にするな。ベーオウルフ、俺は貴様の強さに興味があるのさ」

「……」

アクセルはキョウスケの意を無視して話を進める。

キョウスケは手を止めずに耳だけ傾けていた。

しかしアクセルはキョウスケに歩み寄り、横顔を覗き込んできた。

天然パーマの赤髪が顔に触れそうで鬱陶しい……キョウスケは舌打ちが出そうになるのを押し込めて作業を続ける。

「『絶対に死なない男』と呼ばれているそうだな？」

アクセルはお構いなしに話を続けた。

「どんな絶体絶命の状況でも必ず生き残る、それがベーオウルフ――貴様だ。

死なない兵士。最高じゃないか。戦争に生きる俺たちにとって、兵士として目指すべき理想像……ベーオウルフ、それが貴様なのさ」

「……下らん」

眉一つ動かさず、手だけを動かしながらキョウスケが答えた。

「不死の兵士などいるものか。兵士も人間だ。人間は簡単に死ぬ、そういうものだ」

「ほぅ、奇妙な事を言うな。不死の部隊の隊長様が、自分の部隊の存在価値を否定するのか？」

「ああ」

キョウスケが作業の手を止めた。

時刻は０１：００を回り、作戦決行まであと9時間を切っている。初見の男であるアクセルと下らない問答をする趣味はキョウスケにはなかった。

自分の中にある答えを示す。そしてアクセルには早々にこの場を去ってもらうことにした。その方がこのまま「ながら作業」を続けるよりも効率的だと判断したからだ。

「俺たちの命はチップのようなものだ」

「はぁ？」

アクセルが眉をしかめる。

不快感はない。自分の考えが大多数の人間に理解されないことは、今に始まったことではなかった。キョウスケはアクセルをジィと睨みつけながら言う。

「戦場を巨大な鉄火場とするなら、俺たちの命は賭け金（チップ）のようなものだ。そして賭け金の取り合いをするのが戦争にすぎん。ただ一般の賭け事の相違点はただ1つ。

負ければチップを亡くし、勝ってもチップは増えない……戦争は俺たちにとって分の悪い賭けなのだ」

「それがお前の戦争観か？　流石だなベーオウルフ。変わっていると言っておこうか、これがな」

「囀（さえず）るな。賭け事を続ければいつかは破滅する、誰にでも理解できる論理だ……俺たちの賭け金も何時かは尽きる時が来る。

アクセル・アルマー、貴様も兵士なら理解できんとは言わせんぞ？」

キョウスケの言葉にアクセルは微笑を浮かべていた。

「確かにな」と呟き、キョウスケの意見に賛同を示すが。

「それが兵士、それが戦争というものだ。認めるさ、ベーオウルフ。貴様の言っていることは正しい……だが違う。貴様の言っていることは、少し、間違っているな」

「何だと？」

キョウスケの疑問にアクセルは飄々と応えた。

「死なない兵士は実在する。今はまだ人形だがな。しかし経験の蓄積と、持って生まれた素質により死なない兵士となれる者は少ないが、確かに存在する」

「……それが俺たちだと？」

キョウスケの声にアクセルはコクリと頷いた。

「下らんな、アクセル・アルマー。俺たちが生き残って来たのは、生き残るために懸命であったからだ。生き残るためには卑怯な事もしたさ……それら結実して俺たちは生きているに過ぎん。死なない兵士だと？　そんなものは実在しない、寝言は寝て言うものだ」

「分かっていないのはお前だ、ベーオウルフ。お前は生きるために戦争をしている訳ではないだろう？」

アクセルが小さく笑いを漏らしながら答えたが、キョウスケには理解できなかった。

死なない兵士？　それに生きるために戦争をしていないだと？馬鹿な、いつでも全力で生き残るために勝利をもぎ取りに行った。だから今、キョウスケはここにいるのだ。

生き残るために戦争をした。平和のために。エクセレンのために、

キョウスケは戦ってきた。
アクセルの言葉は現実味のない妄言でしかなかった、少なくともキョウスケの中では。
「生きるために戦争をする？　違うな。勘違いにも程がある、これがな」
アクセルは言い放った。
「ベーオウルフ、俺と貴様は同類だ。兵士として戦争の中でしか生きることしか能のない男だ」
「……」
キョウスケは否定できなかった。
自分を生んでくれた親の顔も覚えているし、自分がどのようにして育ってきたのかも覚えている。決して、キョウスケは最初から兵士だった訳ではなかった。
だが戦争に駆り出されてからの日々は騒然としていて、それまでの生活が薄れてしまう程には強烈だった。士官学校を卒業し、初戦、初めての勝利……今では息をするようにＰＴを自在に操ることができる。
あの２０ｍもある金属製の巨人を、だ。
キョウスケはＰＴに乗り込むことでハガネの巨人に変身できるのだ。
様々な意味で刺激的だった。幼少期の日常生活の記憶など擦れてしまう程に……成人して生きる術を身に着けた今では、自分にそんな幼少期があったのかと疑問に思うことがある程に、だ。
そして、キョウスケは戦うことでしか収入を得る方法を知らなかった……戦うしか能がない。この言葉をすぐに斬り捨てることができなかった……。

返す言葉が見つからないまま、アクセルの言葉に耳を傾けるしかなかった。

「生きるために戦争をする？　嘘を言うな……！　俺たちは活きるために戦争をするのだ。戦争は無くなるべきではない。俺たち兵士が活きるため、俺たちのアイデンティティーを失くさないためにも、戦争は永遠と続かなければならないのさ、これがな」

兵士は戦争があるから喰っていける。それは赫奕（かくやく）たる事実だ。戦争が無くなれば職を失う兵士などごまんといる。キョウスケもその1人に数えられるのだろうが、アクセルの発言は常軌を逸していた。

「……貴様、平和を求めていないのか？」

「平和だと？　平和など水たまりに貯まった水のようなものだ。しかも水には流れもなく、蒸発することもない。するとどうなる？　分かるだろう？　水は腐るだけさ、これがな！」

「だから平和などいらん、戦争を続けるべきだと言うのか？」

「そうだ」

「実に下らん考えだな」

「馬鹿を言うな」

キョウスケの言葉をアクセルは一蹴する。

「戦争は人類を進化させてきた。その最たる例が『Ｌ５戦役』と、今回のインスペクター襲来だ。俺たちが進化するには戦争は不可欠なのだ、これは歴史が証明している」

人類の歴史は戦いの歴史……否定はできない。でなければ戦史と

いう言葉など誕生しなかったはずだから。
だがキョウスケはアクセルの言葉を受け入れる訳にはいかなかった。
地球でエクセレンが待っている。
ホワイトスターに巣食う毒虫――インスペクターを駆除して帰るのだ。エクセレンと笑って過ごせる平和を掴みとるのだ。

――それが腐っているなど、誰にも言わせはしない……！

アクセルの言葉を受け入れることは、やはりキョウスケには無理だった。

「……どうやら、俺とお前は根本的に考え方が違うらしい」
「残念だよベーオウルフ。貴様はもっと見込みのある奴だと思っていたのだがな」

アクセルはキョウスケに背を向ける。
彼が格納庫の出口に向かうのを確認すると、キョウスケは作業を再開することにした。と――

「あ、そうそう」

アクセルが振り返ってキョウスケに向かって言った。

「今回のホワイトスター攻略作戦だがな、俺たちが貴様らを援護することになったから」
「援護だと？」
「さしずめ、ウィルスの運搬の弾除け役だな。要するに、俺たちが

陽動をかけて敵の注意を引き付ける役を担う……別に珍しくもない話だ」

珍しくない、確かにそうだ。

最優先事項を達成するために投げ込まれる捨石、捨て駒……そんな作戦と実行員たちをキョウスケは何度も見てきた。

今回はそれがアクセルの部隊。ただ、それだけの話だった。

「……すまんな」

「礼はよせ。俺は兵士だ。与えられた任務は全うするだけだ、これがな」

アクセルはそれだけ言うと格納庫から出て行ってしまう。彼の話は何処かリアルで重かった。キョウスケに話をして何が解決するわけでもない。

だがきっと複雑な心境なのだろう。

だから見に来た。自分が命を張ってまで守る価値がキョウスケにあるのかを。

キョウスケは眼鏡にかなったのか……アクセルが語らない限り答えは知ることはできないだろう。

「キョウスケさん、整備完了しましたよ」

「こっちも終わったぜ、キョウスケさん！」

タスクとアラドが自機のチューンナップを終わらせたようだ。

２機ともビームコーティングを完了し、交換用の弾倉をたんまりと搭載していた。

特にタスク機はＦ２Ｗキャノンをバックパックにマウントさせ、徹底的に火力を強化していた。多少機動性が犠牲になるが、チーム内でのタスクの役割は後方支援。突撃仕様のキョウスケとアラド機

をフォローするには十分な装備だろう。
アラドの装備はプラズマバックラーにＭ９０アサルトマシンガン、高威力のメガブラスターキャノンだ。近接戦闘用にコールドメタルナイフも2本装備しているが、余程懐に潜り込まなければ使う機会はないだろう。
指揮官機であるキョウスケのＭｋ－？の装備は、Ｍ９０アサルトマシンガン以外に平常時と同じモノだった。使い慣れた武装こそ、土壇場で地力を見せるものだ。整備も申し分ない、おそらくスペック以上の戦果を発揮してくれるに違いない。
3機の腰部には【マ改造】ウィルス運搬用の鋼鉄製の筒が1つずつ装備されていた。

「よし、では作戦に備えて休むぞ」

作業を終了したキョウスケの声にアラドが拳を鳴らす。

「よっしゃあ！　腕が鳴るぜ！」
「おいおいアラド、そんなに興奮して休めなくても知らねえぞ」
「ははは、こりゃいけねえや！」
「ふっ……」

2人のやり取りにキョウスケは微笑ましいものを感じていた。
今回もタスクとアラドと共に生き残ってみせる。
キョウスケは決意を新たにし、自室に戻り休息を取るのだった

――……

……
……
……明朝、１０：００。

『総員ッ、対ショック、対閃光防御！！』

艦内通信で艦長代理テツヤ　オノデラの咆哮が響き渡った。
１０：００　――　作戦決行時間を迎え、キョウスケたちベーオウルブズは格納庫で待機していた。
クロガネの精鋭たちが手塩にかけてチューンしたＰＴに乗り込んでいく。キョウスケもゲシュペンストＭｋ－？に登場し、ＯＳを起動させた。コックピットハッチが閉鎖し一瞬視界が暗転するも、すぐに各計器の光やモニターに映された機体外の映像で明るくなる。
機体はまだハンガーに固定されている。突入の衝撃で転倒等の事故を起こさないためだ。

「……いないな」

アクセルの姿は見当たらなかった。通信もない。気にはなるが、アクセルは陽動　――　別行動のため特に問題はなかった。
遠い爆発音と共に数回の振動が連続している。クロガネが攻撃を受けているのだ。敵本拠地への突撃だから多少の損害がでるのは止むおえなかった。

『艦首超大型回転衝角、始動ッ！！』
『了解、艦首ドリル始動します！』

ブリッジでのやり取りが聞こえてくる。
直後、被弾の振動とは違った小刻みな揺れがキョウスケに伝わっ

てきた。艦首ドリルの回転運動が機体を揺らしていた。

『総員に奮闘せよ！　我々に敗北は許されない！　地球の命運は諸君らの双肩にかかっていることを忘れないでもらいたい！！』

そう、これが最後の戦いだ。

インスペクターの襲来で数えきれない程の人命が失われた。

報いを受けさせる時が来た。

命の代価は命だ。代貨（チップ）をインスペクターに支払わせるために、キョウスケたちはコックピットで声を待つ。

『クロガネッ、突撃ィィィッッ！！！』

テツヤの啖呵が飛ぶ。インスペクターを倒し平和を勝ち取るために、クロガネは突き進む。目指すは白き魔星 ―― ホワイトスター。

キョウスケは待った。

腕を組み、目を瞑り、その時を待った。

キョウスケにできることは祈ることだけだった。

クロガネが無事にホワイトスター内部に突入できることをただ祈る。それが、今のキョウスケにできる精一杯だった。

『衝撃に備えろ！！』

テツヤの声が耳に届いた刹那、キョウスケの体を衝撃が襲った。

強烈な横揺れ、その後に縦揺れに近い激しい振動が続く。

キョウスケは目を開いて、操縦桿を握り締めた。桿が手にしっくりと馴染む。モニターに人の姿は既にない……

――ここからは、俺たちのフィールドだ

人ではない、２０ｍ超の鋼の巨人が闊歩するフィールド。キョウスケたちの戦場がすぐ傍まで迫っている。

振動は数分続いただろうか。時間の感覚がおかしくなりそうな緊張感、作戦開始前に確認した時計をのぞくと、時間にしてほんの３０秒程しか経過していないことが分かった。

キョウスケが時計から視線を戻したと同時に再び大きな衝撃が訪れる。

『ホワイトスター内部、侵入成功！！』

同時にオペレーターの報せが入った。

『よし、これより本作戦はフェイズ２に移行する！　特機、ＰＴ部隊は直ちに出撃せよ！！』

「了解」

キョウスケはコンソールを操作し、Ｍｋ－？を安置していたハンガーの固定を外す。

ずずぅぅぅん、とキョウスケを皮切りに格納庫各部で響いていた。各機がハンガーから降りたのだ。

キョウスケはタスクとアラドに回線を繋ぐ。

「お前たち、準備はいいな？」

『俺はいつでもいいぜ！』

『さっさと終わらせて、たらふく旨い飯を食おうぜ！！』

チームカラーである赤に統一されたパイロットスーツに身を包み、

部下の2人が返答する。2人の士気は十分のようだ。

「よし、ベーオウルブズ出撃るぞ！」

『了解ッ！！』

キョウスケの指示に2人の声が重なった。

不死の部隊ベーオウルブズ ―― 彼らの最大最後の戦いの幕が上がる ――……

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～出撃～（後書き）

＜次回予告＞

戦場を鉄火場にした命を張ったコインゲーム
チップはなんだと訊かれれば、俺の命だと答えるのみ
伸るか反るか、生きるか死ぬか、２つの結果のうち１つしか手できない
戦争は博打のようなものだ……それも、まったく分の悪い賭け
だが彼は賭けに乗るだろう
愛する女の笑顔を守るために

次回、鋼鉄の駄狼Ｒ２「激突」
どんな相手だろうと撃ち貫くのみ！

次回からホワイトスター内部戦に移ります。
スーパーロボットの必殺技の応酬みたいな派手な話にはならないと思います。
小隊戦闘みたいな戦闘シーンが書ければいいな、と思っています。
あと、戦争がなくても兵士は食っていけるかもしれませんが、そこのとこのツッコミはなしの方向でお願いします（あまり詳しくないもので汗）

感想くださった皆さん、ありがとうございます！
これからも頑張って執筆していくので、どうかヨロシクお願いします！

え？　死亡フラグ？

回収するのか、しないのか……そこは読者様の想像にお任せします。

ではノシ

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～激突～（前書き）

今回はあの機体が登場します。

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～激突～

ホワイトスター通路内を銃弾が飛び交っていた。

『敵機撃墜ッ！』

ホワイトスター内部、ＰＴ処か特機すら運搬できる大きさの通路。ＭＳ９０アサルトマシンガンの連射で敵機　――　レストジェミラという人型機　――　撃破したアラドの声が聞こえてきた。

「よし、残りの敵機は？」

『全機掃討完了！　どうやらホワイトスター内の巡回部隊だったみたいだぜ！』

タスクがキョウスケに応えた。

クロガネがホワイトスターに突入し、キョウスケたちベーオウルブズが出撃して既に十数分が経過しようとしている。

ホワイトスター内部　――　主にその外殻はさながら迷宮のように複雑であった。中世の城のように、敵機が内部へ侵入するを妨害するためにワザと入り組ませて作ったのだ。キョウスケたちが迷わず進めるのは、事前に持っていたホワイトスターの全体図データの恩恵と言っても過言ではない。

ゲシュペンストＭｋ－？を先頭にホワイトスター内部を突き進んだ。

目指すは防衛兵器の制御室……敵に遭遇しなければ２０分程で到達できる距離ではあったが、内部を巡回する無人機がそれを許してくれなかった。

レストジェミラ３機に遭遇。無論、無人機に後れを取るキョウス

ケたちではない。1分も経たぬ内に、彼らの足元には敵機の残骸が出来上がっていた。

『チッ、仲間を呼ばれたかもしれねえな』

通信越しにタスクが毒づいていた。所詮、相手は無人機。1機1機は敵ではないだろう。しかし、応援を呼ばれ数が揃えば言うまでもなく脅威となる。

『どうする、キョウスケさん?』

「愚問だな」

タスクにキョウスケが答えた。

「俺たちに後退の二文字はない。ならば、相手よりも早く懐に潜り込むまで……そうだろう?」

『へっ、ちげえねぇや!』

アラドが納得したのか意気揚々と声を上げた。

『見つかっちまった以上は先手必勝だぜ!』

「発見された時点で既に後手だがな」

『構うもんか! 俺たちゃ男だ、突っ込むのは慣れているぜ!!』

アラドが意味不明な啖呵を切っていた。

直後、ゲシュペンストMk-?改がアフターバーナーを噴かせて先行する。

「続くぞ、タスク」

『了解!』

アラドの後を、キョウスケのＭｋ－？、タスクのＭｋ－？改が追走し始めた。
キョウスケのＭｋ－？は搭載された大型ブースターの恩恵で推進力は非常に高い。あっという間にアラド機に追いつき並走し、その後ろをタスク機が続く形となった。

幸いなことに敵と遭遇することはなかった。
キョウスケたちは地球がホワイトスターを管理していた際の全体図を頼りに、迷宮のような通路を進んでいく。
事前に伝えられている情報では、制御室はＰＴでも自由自在に動き回れる広い空間にあるらしい。制御盤にＰＴの端末を接続すればコックピット内で作業もできる。ウィルスも制御盤に接続するだけで、後は自動でプログラムの書き換えを行ってくれるとの事だった……

――しかし、妙だな……

敵との遭遇率が少なすぎる。
ホワストスターの防衛兵器は拠点防衛の要だ。落とされればホワイトスター陥落に繋がりかねないはずなのに、キョウスケたちが敵と遭遇したのは先の１回だけだった。
しかも１度会敵してしまった以上、キョウスケたちの侵入は知られていると考えるのが妥当だ。
だからキョウスケたちは最大戦速で制御室に向かっている。しかし敵影はレーダーにも映らず、気配すら感じられない。

――誘い込まれている……？

そんな懸念が脳裏をかすめた。

まさか、な。敵と遭遇しないのは迷路のようなホワイトスター内部の構造と、単純に運が良いからだ。そう、キョウスケは思いたかった。

『行き止まりだ！』

アラドが機体の前進を止めた。

正面モニターに映る巨大な隔壁を確認できる。キョウスケもＭｋ－？のブースターを停止させた。全体図ではこの先に巨大な空間があり、その少し先に制御室があるはずだが。

Ｍｋ－？を一時停止させ、隔壁を観察する。

隔壁の脇の壁に制御盤らしき物があった。既にタスクのＭｋ－？がアクセスして操作している。

『チッ、ロックが掛かってやがる……！』

タスクが毒づいていた。

タスクは有能だ。時間さえかければ隔壁のロックも解除できるだろうが、どれだけの時間が必要か分からない。

キョウスケは敵との遭遇率の低さが気にかかっていた。もし敵が戦力を温存し、キョウスケたちが隔壁前に到着するのを故意に待っていたのだとしたら……？

単なるキョウスケの考えすぎ、かもしれない。

だがこのまま隔壁が開かず、敵が押し寄せればキョウスケたちは

まさに袋の鼠。
次々に投入される物量差の前に蹂躙されるのは目に見えている。

「アラド、退け」
『キョウスケさん……？』

隔壁前で立ち尽くしていたアラド機をキョウスケ機が押しのけていた。

「お前たち、下がっていろ」
『っ……！　な、何するつもりっすか！？』
『まさか……！　おいアラド、下がれ！』

タスクが何か察したのか、アラド機の肩を掴んで後退した。
キョウスケは操縦桿を動かしてＭｋ－？を隔壁へと近づけた。Ｍｋ－？の腕部を伸ばせば届くか届かないかの距離。そこでＭｋ－？の腰を低くし、重心を安定させる。
すぐにコンソールを操作して、武装を選択した。
Ｍｋ－？の両肩部に装備されたコンテナのハッチが開放される。

「アヴァランチクレイモア……！　これで抜けぬ装甲など、ない！」

ゲシュペンストＭｋ－？の両肩部に装備された特殊兵装の名称だ。コンテナに内蔵された指向性地雷による爆圧で、火薬入りの特殊チタン弾「Ｍ１８０Ａ３」を散弾のようにばら撒いて敵を破砕する。
物理的に敵を撃ち抜いてから、チタン弾内の火薬が炸裂するのだから、威力はＭｋ－？の固定武装の中で最も高い代物だった。
キョウスケがロックオンサイトを正面隔壁に抜けると、コックピット内にアラート音が木霊し始める。ＰＴのコンピューターは動態反応などを頼りにターゲットを補足するのだが、ただの隔壁ではロ

ックオンもできない上、Ｍｋ－？が隔壁に近過ぎるため警告音を鳴らしていたのだ。

――無視だッ……俺たちには、退路も時間も残されていない……！

キョウスケはかまわずにトリガーを引く。

アラートを鳴らしながらもＭｋ－？は従順にコンテナからチタン弾を吐き出した。チタン弾が隔壁を小さな穴を蜂の巣のように空ける。直後に衝撃でチタン弾内の火薬が着火して隔壁を吹き飛ばした。

「ぐっ……！」

衝撃がキョウスケを襲った。ダメージメッセージあり。至近距離での爆圧にＭｋ－？は巻き込まれ、表面装甲が少々焼かれていたが、厚い装甲があるため大事には至らなかった。小破もしくはそれ以下……作戦行動に支障がでるレベルではない。

アヴァランチクレイモアで、隔壁には大きな風穴が空いていた。

『キョウスケさん、大丈夫っすか！？』

『たくっ、無茶するんだから！』

アラドとタスクが回線越しに怒鳴ってきた。

『一緒に爆発でもしたらどうするつもりだったんですか！？』

「Ｍｋ－？の装甲は特機並だ。問題ない」

『っ……！　たくっ、無事だったから良かったものの……！』

タスクがブツブツと文句を言っていた。キョウスケはため息を漏

らしそうになったが、タスクの心配は尤もなものだとも分かっていた。

もし開放状態のコンテナ内に残っていたチタン弾に引火でもしていたら、それこそ大惨事になっていただろう。最悪、Ｍｋ－？ごと爆散……任務は失敗。結果オーライ、の一言では済まされないのも確かだった。

「心配をかけてすまなかった。だが、これで道は開けた」

『こじ開けたの間違いでしょ？』

違いない。アラドの言う通りだが、前に進めるようになったのも事実。

「今の爆発で敵が集まってくるだろう。その前に事を済ませるぞ」

『了解。制御室まではこの先の空間を抜けて、あと少しだ』

『ここまでくりゃ、もう楽勝っすね！』

アラドがモニター越しに笑っていた。

だと良いが……キョウスケの胸には拭いきれない不安がこびり付いていた。

敵との遭遇率が低かったのは、単に隔壁前にキョウスケたちを追い詰めるためだったのか、それとも本隊やアクセルたちの陽動が上手くいっているためか……どちらせよ杞憂であれば良いが……兎に角、今は前へとキョウスケは操縦桿を握りこんだ。

「行くぞ、お前たち」

『『了解ッ』』

キョウスケたちは隔壁に空いた穴から内部へと突入していく。

●

隔壁を抜けた先には巨大な空間が広がっていた。

上下左右に約１ｋｍ程のスペースが目の前にある。ＰＴと特機の混成大部隊を展開することだって容易にできるだろう。ホワイトスターの巨大さならば、この程度の空間を用意するのは難しくはない。

だが――

『な、なんだこりゃあ……？』

――アラドが驚きの声を上げた理由が、キョウスケのモニターにも映し出されていた。

荒野が広がっていた。

ホワイトスターという人工物の中に、土でできた地面とささくれ立った岩石、そして丘が見える。閑散として距離は空いていたが樹木の姿も確認できた。キョウスケたちが通過してきた通路の無機質さとは違う……しかし生物が息づいている気配もしない奇妙な空間だった。

「なんだここは？」

『制御室前にある空間のはずですけど……』

タスクがデータを確認しながら答えた。

「こういう場所なのか？」
『そういう情報は貰ってないけど……』
「……インスペクターに奪われてから建造された……とうことか？」

腑に落ちない。キョウスケは敵の意図を推察してみた。……分からない、こんなことをするメリットがインスペクターにあるのだろうか？　地球の自然環境を保存・再現するなんて殊勝なマネを、あの侵略者たちがするとも思えない……と。

キョウスケはある事を思い出した。

モニターには荒野が表示されているし、キョウスケの目にもそれは間違いなく映り込んでいる。

だが違和感が残る。

目の前に、荒野が、本当にあるのか？　いや、ある。確かに荒野は目の前に存在している……だが奇妙な感覚が心に残っている。

「……まさか」

キョウスケは「Ｌ５戦役」でも似たような経験をしていた。

それは、人間の深層意識に干渉して、見えているもの感じているものを誤認させる。「Ｌ５戦役」時のホワイトスター攻略作戦で、キョウスケたちは苦戦させられたものだった。

それに認識を操作された結果、それまで倒してきた難敵や強敵……味方に至るまで敵として目の前に現れたのだから　――

「もしや、トラウマシャドウか……？」

キョウスケが呟くと、

『その通りさ！』

聞き慣れない少年の声が返ってきた。回線越しではなく、この空間に反響する声をＭｋ－？の集音マイクが拾っている。

『ッ……！　なんだ！？』

『何処にいやがる！？』

すぐにタスク機とアラド機がそれぞれアサルトマシンガンを構えた。Ｍｋ－？のマシンガンも銃口を上げ、３機背中合わせになって周囲を警戒する。

レーダーに反応なし。敵影も確認もできない。

声の主の姿は何処にも見当たらなかった。

『よく来たね。僕の名前はウェンドロ。インスペクターの総司令官さ』

「なんだと？」

インスペクターの総司令官……ホワイトスター中心部に進攻している本隊のターゲットだ。

総司令官ならばクロガネ隊との戦闘の指揮をとらなければならないはず。つまりこの空間に総司令官　――　ウェンドロはいない。おそらく遠隔カメラでキョウスケたちを見て、マイクで話しかけているにすぎないのだろう。

『地球人　――　幼稚な野蛮人どもめ。よくもまぁ、単身で本拠地に突入なんてできるもんだね。

後先考えていないのか、それともニッポンとかいう島国の『カミカゼトッコウ』という精神なのかな？』

「……この声、子どもなのか？」

『ふふふ、子ども、か。だから幼稚なんだよ、君たちは』

顔は見えないが、声変わり前の子どもの声のようにキョウスケには感じられた。尤も、異星人であるインスペクターに、地球人の成長過程が適用できるかは不明だが。

ウェンドロは冷たい声で言う。

『我々の星系では能力さえあれば年齢なんて関係ないのさ……子どもだから、なんて侮っていると……死ぬよ』

キョウスケはウェンドロの言葉を聞きながら、周囲を確認した。敵影はなく、見えるのは荒野だけだ。迷彩を施したスナイパーが潜んでいるのなら見つけられないかもしれないが、敵の総司令官がこそこそと隠れるような真似をするとは考えにくい。

やはりウェンドロはこの空間にはいない、キョウスケは確信する。

『君たちが、少数で防衛兵器の機能を潰しに来るのは予想済みだったのさ。ここには面白い機能も備わっているみただし、君たちを潰すついでにテストしようと思ってね』

「やはり、トラウマシャドウか」

『そうだ。どうだい？　君たちにはこの機械惑星の内部はどう見えているのかな？　荒野かな？　草原かな？　僕には金属製の演習スペースにしか見えていないけどね』

荒野はトラウマシャドウの作用が見せている幻らしい。ウェンドロの言葉から実際は演習場だと分かる。荒野にそびえる丘は、おそらく演習用の障害物か何かだろう。

「俺たちをどうするつもりだ？」

返答は容易に想像できたが、あえてキョウスケは質問した。

『もちろん、死んでもらうよ』

予想通りの答えだ。

『ただし、面白可笑しく、有意義に死んでもらうとしよう』

ウェンドロは笑いながら答えた。冷たい印象を受ける笑い声。きっと地球人の命はゴミ程度にしか思っていないのだろう。いや、もしかすると自分の仲間の命ですら……

キョウスケは傍受されないよう周波数を変え、タスクとアラドへ回線を開いた。

「タスク、アラド、そちらから敵機は確認できるか？」

『いいや、こっちは見えねえぜ』

『こっちもだ。レーダーにも敵影はなしだ』

「よし」

2人の答えを聞いてキョウスケは決断する。

見られている以上キョウスケたちは既に後手に回っていた。素直にウェンドロの話を聞き続けてやる義理などない。意表を突く。どんな伏兵を用意していようと関係ない。制御室まで最大戦速で突っ切るのだ。

「突っ込むぞ、奴らより速く！」

『『了解ッ！！』』

キョウスケはＭｋ－？の大型ブースターの出力を上げた。フルスロットルだ。途端に強烈なＧが体にかかってシートに体が押し付け

られる感覚を味わうが、それに見合った急加速でＭｋ－？は走り始めた。
空間内を横断して、最短ルートで制御室を目指す。タスク、アラドの２機も追従してきていた。

『おやおや、必死だね』

ウィンドロのほくそ笑む声が聞こえた。
だが無視する。３機は空間の中央に躍り出て、そのまま前進した。
ウェンドロもお構いなしに続けた。

『そんな君たちにプレゼントだ。ありがたく受け取ってくれたまえ』
「なっ……！」

刹那、レーダーに機影が映し出された。
Ｍｋ－？に隣接するほど近くに反応がある。しかし敵機は確認できない。となると ――

「直上か！？」

キョウスケはＭｋ－？のカメラを直上に向ける。
敵がいた。
黒い甲冑のような装甲の巨大ロボット ―― まるで鎧武者のような外見をした特機が、その巨大な身の丈ほどもあろうかという大剣を振り上げている。
今にも大剣は振り下ろされようとしていた。

「敵機直上！　回避しろ！」
『なっ……！　あれは……！』
『ダ、ダイゼンガー！？』

2人は驚愕しながらも回避行動に移る。3機のゲシュペンストはそれぞれ別の方向に散開した。

直後、ダイゼンガーと呼ばれたロボットが無言のまま大剣を振り下ろす。

爆弾が爆発したような音を轟かせて大剣が地面に叩きつけられる。巨大な質量の剣が剣風を巻き起こしてＭｋ－？を揺らし、巨大な斬撃の跡が地面に刻み込まれた。

『喜んでもらえたかな？』

ウェンドロが訊いてきた。

『ウィガジのガルガウが敗れた機体と言うから興味があってね。地球人は野蛮な猿だが、兵器を作らせれば天下一品だ。データを集めて、研究させてもらったよ。

その過程で再現してみたのさ。どうだい？　インスペクター製のダイゼンガーの力は？』

「インスペクター製、だと？」

キョウスケはＭｋ－？の体勢を立て直し、アサルトマシンガンの銃口をダイゼンガーに向けた。

――まがい物だと？

瓜二つ。外見はキョウスケの良く知るダイゼンガーそのものだ。手持ち武器の参式斬艦刀の威力もさっきの攻撃を見る限り、本物に勝るとも劣っていなかった。

さらにダイゼンガーから浴びせられる威圧感も、まるで中に操縦者が乗っているように感じられた。

「この威圧感……ちッ、トラウマシャドウか」

『恐ろしいかな？　認識が操作できるというのは便利だね。限られた空間でしか使えないのが残念でならないよ、ふふふ』

トラウマシャドウ――厄介極まりない機能だ。

ウェンドロが笑いながら言った。

『さようなら。ここが君たちの墓場となるのさ……精々、頑張ってくれたまえ。ハハハハハ――――』

高笑いを響かせてウェンドロの声は途切れた。ダイゼンガーというワイルドカードを出して勝利を確信したのだろう。見くびられたものだ、とキョウスケは思う。

ダイゼンガーは1機、対してこちらは3機。

ＰＴと特機。保有している戦力は五分五分か、ダイゼンガーの方が少し上と言った所だろう。しかしキョウスケは敗ける気がしなかった。敵のダイゼンガーになくて、キョウスケたちだけが持っているものがあったからだ。

ダイゼンガーの武装、戦闘方法、弱点――共に戦ってきた仲間だからこそ知っているコトがある。

威圧感をトラウマシャドウで再現しようとも無駄だ。

真の兵士はそんなものに屈したりはしない。いつでもマシンガンを発射できるように、トリガーに指をかけた。

「お前たち、やるぞ」

『待ってくれ、キョウスケさん』

タスクが言った。

『ここは俺たちに任せてくれないか？』

「なんだと？　本気か？」

相手はダイゼンガー。まがい物だとしても一瞬の油断が命取りになる相手だ。しかしモニターに映るタスクの目に迷いはなかった。

『時間がないんだ。敵がダイゼンガーだけならいいさ。でも全員で相手をして時間を喰えば、食った分だけ敵機が集まってくるはずだ』

『そしたら任務も果たせねえ。皆、ここから帰れなくなるんだ！』

アラドが叫んでいた。その顔に怯えはない。２機でダイゼンガーに立ち向かう。覚悟を決めた男の顔だった。

「お前たち……」

『大丈夫さ！　俺たちゃ死なねぇんだ！　だから先に行ってくれ、キョウスケさん！！』

『後から必ず追いつく！　だから、ここは任せて行ってくれ！！』

時間がない……それは事実だ。

残って戦いたい……そうも思ったが、２人の言っていることは正しかった。３機で時間を喰うよりも、２機で踏ん張り１機を先行させる方が目的は果たしやすいはずだ。

キョウスケは苦渋の決断をするしかなかった。

「分かった。……死ぬなよ」

『へへ、俺を誰だと思ってやがる！　不死の部隊ベーオウルブズのアラド・バランガだぜ！』

『そうさ！　俺の死に場所は、レオナちゃんの膝の上に予約済みだ

ぜ！』

「……よし。行くぞ、お前たち」

２人の決意を無駄にはできない。

キョウスケは操縦桿を握り締め、銃口は向けたままでダイゼンガーから距離を取り始めた。

だがダイゼンガーはキョウスケの動きを察知し、斬艦刀の切っ先をＭｋ－？に向けてくる。

『させるかよ！』

２機のゲシュペンストがアサルトマシンガンを斉射した。

貫通力に優れる徹甲弾が連続で銃口から打ち出され、ダイゼンガーの表面装甲を抉る。戦車すら一撃で撃ち抜く巨大な徹甲弾でも、特機の装甲を貫通することは敵わないのだ。

特機の装甲を撃ち抜こうとするなら、特殊な金属で処理が施された銃弾が必要になってくる。しかしキョウスケたちが持ち合わせている筈もなかった。

銃弾を浴びたダイゼンガーは斬艦刀の腹で弾丸を弾き返す。

『今のうちだ！』

タスクの声に無言で頷き、キョウスケはＭｋ－？のブースターを噴かせた。

数秒で最高速度まで加速し、ダイゼンガーを引き離す。ダイゼンガーには射撃武器は装備されていないため追ってはこれない。

「死ぬなよ、２人とも……！」

空間に２人を残して、キョウスケのＭｋ－？は制御室へと駆けて

いく――……

●

『さて、どうしたもんかな？』

ゲシュペンストＭｋ－？を先行させた後、タスク・シングウジはぼやいていた。

『なんだタスク、いい案あるんじゃなかったのかよ？』

アラドがタスクに訊いてくる。

『ねえよ、そんなもん』

『おいおい、どうすんだよ！？　相手はあのダイゼンガー――って、うわっ！』

ダイゼンガーの斬艦刀の横薙ぎを、アラドのゲシュペンストＭｋ－？はバックステップで躱した。そのまま横っ飛びで空間内にある丘の陰に機体を隠し、タスクの機体もそれに続いた。

ダイゼンガーは斬艦刀を持ちなおして２人に迫ってくる。

『やっぱり斬艦刀は洒落にならんぜ。間合いの外から立ち回るしかねえな』

『ちぇっ、俺、射撃苦手なんだけどなぁ』

アラドが自信なさげに呟いていた。彼の射撃の腕は本当に悪い。
相手がＰＴでは狙った所に命中させるのは難しいかもしれないが、ダイゼンガーは特機だ。
ゲシュペンストの倍程の体格があるため、アラドでも当てることぐらいできるだろう。

『兎に角、やるしかねえか』
『応、偽物なんざさっさと倒してキョウスケさんを追うぜ！』

２人はモニター越しに頷きあった。
撃ち尽くしたアサルトマシンガンの弾倉を交換し、互いにタイミングを図り合わせて、丘からダイゼンガーの前へと躍り出た。
ダイゼンガーの視線とゲシュペンストの銃口が空中で交錯する。

『『こんな所で死ねるかよ！！』』

銃声と剣戟の音が響き渡った　――……

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～激突～（後書き）

＜次回予告＞

死ね
そう言われて、素直に受け入れる人間は少ないだろう
彼らも当然同じだった
生き残るために敵を殺す
敵が無人機ならなら言うことはない
容赦の必要がないからだ……

次回、鋼鉄の駄狼Ｒ２「死線」
壊す、生き残るために……！

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～死線～（前書き）

今回はキョウスケの出番は少ないです。

タスクとアラドを空間に残して、キョウスケは制御室へとＭｋ－？を走らせていた。

まだアラドたちを残した空間から脱出したばかりだった。ホワイトスターの全体図によれば、防衛装置の制御室まではあの空間から直進すれば到着する。

かかる時間はどれくらいだ？

果たして、ウィルスは有効なのか？

様々な思考がキョウスケの頭に浮かんでは消えて行った。

しかし、暫くするとキョウスケは考えることは止めた。

――俺は、俺にできることをするだけだ……！

Ｍｋ－？も腰部に携帯されている【マ改造】印の円柱。この鋼鉄製の容器の中に入っているウィルスを制御装置に無事侵入させる。

それが今、キョウスケにできることであり、キョウスケにしかできないことだった。

「２人とも踏ん張れよ。すぐに助けに行くからな」

Ｍｋ－？は弾丸のように加速して制御室へと急行する。

●

制御室手前　――　トラウマシャドウによって荒野に見えている空間。

荒野を3体のロボットが動き回っている。

ベーオウルブズの部隊色の赤にカラーリングされたゲシュペンストMk－？・改が2機　――　両肩にキャノン砲を装備している機体……タイプCと胸部にメガブラスターキャノンを装備している……タイプG　――　が銃口を敵機に向けて高速で移動している。

前者の機体にはタスクが、後者の機体にはアラドが登場しているのだが、敵の黒い鎧武者　――　ダイゼンガーの振り回す斬艦刀により追い詰められていた。

ダイゼンガーが振るう斬艦刀は岩の塊である丘　――　トラウマシャドウで丘に見えるだけで、実際は演習用の障害物だろう　――　に刃がするりと入っては抜けて行く。まるで豆腐を切り分ける包丁のような切れ味……さらに圧倒的重量、それを扱うダイゼンガーの膂力（りょりょく）をもってすれば、ゲシュペンストなど容易に両断されてしまうだろう。

触れれば即撃墜　――　死亡。

PTでダイゼンガーを敵に回すとはそういう事だった。

無論、タスクたちはそのことを理解しているので、剣戟の間合いの外から銃撃に徹している。

乱射したM９０アサルトマシンガンの徹甲弾が、既にダイゼンガーの表面装甲を抉っていた。だが、抉っているだけだった。内部の動力機関やフレームまで達した弾は１つもなく、しかも大半は斬艦刀の刃の腹で弾き落とされていく。

『ちッ』

ラチのあかない攻防にアラドが舌打ちする。
丘の陰に退避し、撃ち尽くしたマシンガンの弾倉を交換する。投げ捨てられた弾倉が鋭い音を立てて地面に落ちた。

『射撃戦じゃキリがねぇよ！　このままじゃ、時間と弾ばっかり喰っちまう！』
『確かにな……』

2人を探して闊歩するダイゼンガーを見てタスクが答えた。

『アサルトマシンガンじゃ撃墜……いや、致命傷を与えることもできそうにないな。この武器結構威力高いのに……』

タスクは特機の装甲はそれ程に堅牢なのだと改めて思い知らされた。特機のほとんどは専用機で整備性やコストも量産機に比べれば劣悪だが、それに見合うだけの戦力はある。
一騎当千の鋼の巨人　――　それが特機、俗に言うスーパーロボットだった。
が、いくら特機と言っても完全無欠ではない。

『装甲に穴が空けられりゃ何とかなるんだけどな……』
『どのみちマシンガンじゃ無理だぜ！　なぁタスク、もう接近戦しかねぇって！　こうなりゃ、出たとこ勝負だぜ！！』
『けどダイゼンガーには斬艦刀が　――』
『ビビってんじゃねぇよ！！』

アラドがタスクを叱責した。

『このまま時間をかければ敵の増援が来て、どうせ俺たちはオジャ

ンだ。何もせずに死ぬのを待つのか？　俺は嫌だね！　どうせ死ぬなら、前のめりに死んでやる！』

『アラド……』

『装甲に穴開けて、至近距離からメガブラスターキャノンをぶち込んでやるぜ！』

メガブラスターキャノンとはアラドのＭｋ－？・改の胸部アタッチメントに装備された高出力のビーム砲のことだ。チャージに時間がかかるし、エネルギーは喰うので連発はできないがタイプＧの最強武装である。

至近距離からならば、キョウスケのＭｋ－？のアヴァランチクレイモアに匹敵する威力だった。

通信越しにアラドがタスクに笑いかける。

『単勝大穴１点賭けだ。どうする、タスク？　乗るか？』

伸るか反るか。勝てば生き残り、負ければ死ぬ……あまりにも見返りの少なすぎる分の悪い賭けだ。

危ない橋だ。できることなら渡りたくなどないだろう。

だが２人にとってはいつも通りのことだった。タスクとアラドはいつでも窮地に立たされ続けてきた。分の悪い賭けに勝利し、生き残ってきた。

いつしかアラドとタスク、そしてキョウスケは不死の部隊と呼ばれるようになっていた。

『へっ、アラド、本気で訊いてるのかよ？』

タスクは不敵に笑っていた。

『乗るさ。俺はギャンブラーだかんな』

『へへっ、そう来なくっちゃ！』

アラドはタスクに笑い返すと、ゲシュペンストＭｋ－？にマシンガンを捨てさせた。

両腕部に装備されたフプラズマバックラーへエネルギーバイパスを繋げる。ステーク部が帯電し、ダイゼンガーに格闘戦を挑む準備が整った。

『行け、アラド。俺がばっちり援護してやるぜ』

Ｍｋ－？にバックパックにマウントさせていたＦ２Ｗライフルを展開させながら、タスクが言った。

Ｆ２Ｗライフルは連射力に優れるが射程が短いＳモードと、連射できないが長射程かつ高出力のＬモードの使い分けができるビームライフルだ。アサルトマシンガンよりは大きなダメージを期待できる。

２人が会話している間も、ダイゼンガーは2人のゲシュペンストに着々と近づいてきていた。肩に乗せた斬艦刀がギラリと光る。

『頼むぞアラド。接近戦のセンスだけは買っているんだからな』

『だけは、はないだろ。だけは、は。それじゃまるで俺が能無しみたいじゃねえか？』

『おまけに大飯ぐらいってか？』

『へっ、言ってくれるぜ』

『ただ飯喰らいにならない様に頑張ろうぜ』

『違ぇねえや』

２人は他愛無い言葉を交わしながら、ダイゼンガーとの距離を測る。

レーダー上の距離は２００。ダイゼンガーの突撃を防げれば、剣

戟の間合いの外でいられる距離だった。
タスクのＭｋ－？がＦ２Ｗライフルの銃口を上げた。モードはＳだ。

『アラド、先に出るぞ！』

丘の陰からタスクのＭｋ－？が飛び出す。ダイゼンガーに銃口を向け、ロックオン。当然、ダイゼンガーもロックに反応して斬艦刀を構え直し、距離を縮めようと突撃の体勢を取る――

『させるか！』

――よりも早く、Ｆ２Ｗライフルが火を噴いた。乱射されたビームが直撃し、機先を制されたダイゼンガーが仰け反る。与えたダメージは微少。タスクはさらに追い打ちとばかりに両肩部に装備されたビームキャノンを発射した。
だがそれは斬艦刀の腹で防御されてしまう。
被弾しながらも体勢を整え直していたダイゼンガーがとっさに斬艦刀を構えていたのだ。大きなビームの光が弾かれて、複数の小さな光の筋になって飛び散っていた。
与えた損傷は少ないが、足止めは出来ていた。

『行け、アラド！』
『おおおぉぉぉぉっ！！』

アラドのＭｋ－？がブースターを噴かせて飛び出した。ジェネレーターの出力を色が黄色から赤に変わる。ジェネレーターの負担に比例してブースターから爆炎が吐き出され、ゲシュペンストがダイゼンガーに肉薄してく。
しかしダイゼンガーとアラドのＭｋ－？の距離は約２００。

一瞬で懐に飛び込むはできなかった。
タスクの射撃から体勢を立て直したダイゼンガーが斬艦刀を構える。柄を両手でしっかりを持ち、剣先を直上へと向けている。ダイゼンガーが防御を捨てて、攻撃に集中する際に見せる構え――ダイゼンガーの本来のパイロットであるゼンガー・ゼンボルトの得意とする示現流の構え――だった。

『タスク！』

アラドはタスクに呼びかけると、Ｍｋ－？に腰に携帯していたＭ９０アサルトマシンガンの弾倉を掴ませる。
距離は５０……ダイゼンガーなら一跳びで斬りかかることのできる間合いで、Ｍｋ－？は弾倉をダイゼンガーに向けて投げた。
斬艦刀がアラドのＭｋ－？に振り下ろされる――

『任せろ！』

――まさにその直前。
タスクのＭｋ－？のＦ２Ｗライフルが空中を舞う弾倉を撃ち抜いた。
内部の銃弾の火薬がビームの熱で引火し、爆発する。弾倉が細かい金属片となって飛び散り、煙がダイゼンガーの眼前でもうもうと立ち込めていた。

『今だッ！！』

アラドのＭｋ－？が跳躍した。両腕ノプラズマバックラーに電流が迸る。アラドが狙っているのは、カメラアイが搭載されていて装甲の最も薄いダイゼンガーの頭部だ。
空中で体勢をスラスターを噴かせて調整、煙で視界の利かないが

既にロックオンしているダイゼンガーの頭部に、必殺の拳を打ち下ろさんとさらに接近する。
お約束の技名を叫びながら。
『ギャラクティカ　――――――ッ！？』
アラドの声が途切れた。
『アラド！？』
煙の中から斬艦刀がＭｋ－？に向けて振り下ろされていた。
縦一文字　――　真っ直ぐな剣筋で、斬り捨てられたアラドのＭｋ－？の一部が宙を舞う。ステークにプラズマを纏ったまま、Ｍｋ－？の右腕部がひゅんひゅんと空中で回転している。
『腕の１本ぐらいッ！』
アラドのＭｋ－は健在だったが、ダイゼンガーは振り下ろした斬艦刀の柄を握り直していた。そのまま切り上げようとする。
アラドは残った左のプラズマバックラーにエネルギーを集中させる。Ｍｋ－？の左腕を振り上げた。
だが、ダイゼンガーの方が早い。必殺の切り上げがアラドのＭｋ－？に襲いかかろうと、斬艦刀がピクリと動く　――
『させるかよ！』
――　それよりも早く、ダイゼンガーの両手が高出力のビーム砲によって撃ち抜かれていた。
ロングバレルを展開したＦ２Ｗライフルから白煙が上がっている。
タスクがＦ２Ｗライフルのモードしで、ダイゼンガーの両腕部を狙

撃したのだ。
　握力を奪われたダイゼンガーは、金属音を響かせて斬艦刀を地面に落としていた。

『やれ、アラド！』
『うおおおぉぉぉっ、ジェットファントム　――　ッ！！』

　アラドが絶叫し、Ｍｋ－？の剛腕が唸りを上げる。
　プラズマバックラーに備わった３本のステーク　――　電流を流し込むための細長い棒　――　が、力任せにダイゼンガーの顔面部に叩きこまれた。人の双眸を模したがカメラが割れ砕ける。装甲ではなく、脆い機械部分が見えた。
　そこにプラズマバックラーに貯めこまれた高圧電流が注ぎ込まれる。
　回路が焼き切れる音の後に爆発音を響かせて、ダイゼンガーの顔面が半分弾け飛んだ。

『まだだぜ！』

　アラドはＭｋ－？の腕を引き抜くと、現在機体に残されているエネルギーを全て胸部の砲門へと集中させる。

『喰らえ、メガブラスターキャノンッだあぁぁぁぁっ！！』

　タイプＧの最大武装　――　メガブラスターキャノンが注がれた全エネルギーを開放する。極太の、真っ白なエネルギーの波動が、ダイゼンガーの割れた顔面へと叩きつけられた。
　重装甲が売りの特機といえども、体内に敵の攻撃が侵入することは想定していない。メガブラスターキャノンという暴力がダイゼンガーの体内を凌辱する。

直後、機体表面を電流が奔り回り、ダイゼンガーはあっけなく爆散した。

至近距離でその爆発に巻き込まれたアラドのＭｋ－？は吹き飛ばされて、荒野の中にある丘の一つに背中から叩きつけられた。

『アラド、大丈夫かッ？』

『へへっ、このくらい何でもないぜ』

機体を駆け寄らせ心配するタスクにアラドが答えた。

『やったぜタスク、俺たちの勝ちだ』

『あ、ああ。でもアラド、お前、その血……』

コックピットモニターに映るアラドの額には血が付いていた。爆発に巻き込まれて頭を切ったのか、ドロリと赤い鮮血がまぶたで逸れて頬を伝って垂れている。

アラドのゲシュペンストの状態も散々たる状態だった。

ダイゼンガーに切り飛ばされた右腕からは火花が飛び散り、爆発に巻き込まれたため装甲全体に細かな傷が刻まれて、さらに焦げている。胸部アタッチメントに装備されたメガブラスターキャノンは大破。もしかすると、それ自体が装甲強化の役割をはたして機体の大破を免れたのかもしれない。

アラドはヘルメットを脱ぎ捨て、血を拭いながら言った。

『言っただろ？』

コックピット内の救急セットから止血バンドを取り出し、それを頭部にあてがう。鉢巻のようにバンドを結び、アラドは応急の止血を行っていた。

『俺は　――　いや、俺たちは死なねぇんだ。どんな目に会おうとも、必ず生きて帰る……それが俺たち、ベーオウルブズだ。そうだろ、タスク？』

『ああ、そうだったな。アラド、お前の言う通りだ』

アラドが笑顔にタスクも微笑みで応えた。

いつでもそうだった。どんな重傷を負ったとしても、機体が大破したとしても、タスクとアラド、そしてキョウスケは必ず生還してきた。

厳しい戦いは今回が初めてではない。

きっと、今回も生きて帰ることができる。

インスペクターを退けて、地球圏に平和を取り戻すのだ。

『行こうぜ、タスク。キョウスケさんが待ってる』

『ああ、俺たちがみんなの帰る道を作るんだ』

２人はモニター越しに頷きあう。

ダイゼンガーの撃破におよそ５分以上かかってしまった。敵機にさえ出くわさなければ、キョウスケは今頃制御室に辿りついているだろう。

『立てるか』

タスクのＭｋ－？がアラド機に手を差し伸べる。

『悪ぃな』

アラドのＭｋ－？は残った左腕でタスク機の手を掴んだ。タスク機に引き起こされながら、関節内のモーターを軋ませて機体を起き上がらせようとする。

だが……

次の瞬間、タスク機の腕部が爆発した。

『ッ！？』

『うわっ！』

いきなり牽引力のなくなったアラドのＭｋ－？は、勢いよく腰部を地面をぶつけていた。

アラド機のモニターに映るタスクのＭｋ－？は、左腕部の肘から先が無くなっていた。

２人は慌ててレーダーを確認する。

２機の青い点滅の周囲に十数個の赤い点が明滅していた。モニターで視認するまでもなく取り囲まれている、どうやら敵の増援がきたらしい……機体を損傷したゲシュペンストが２機に対して、この数は絶望的だ。

だが現実は甘くない。

『なんだこりゃ……』

頭部カメラが捉えた映像にタスクが愕然とする。

２人のゲシュペンストを見覚えのあるロボットたちが取り囲んでいたからだ。

『ズィーガーリオンにフェアリオン、ヒュッケバインにグルンガスト……』

『ＳＲＸ、アウゼンザイターに……ダ、ダイゼンガーまで……ウソだろ……？』

クロガネに集められた精鋭たち――2人の仲間たちの機体がに2人は取り囲まれている。ズィーガーリオンの持っているブレードレールガンの銃口から白煙が上がっていた。タスク機の腕部を吹き飛ばしたのは、あの銃口から発射された銃弾らしい。

ロボットたちが銃や拳、剣など各々の武器で2人のゲシュペンストを狙っていた。

2人は震える。

死ぬ。今度こそ、死ぬ、と。

『『うおおぉおおぉおおっっ！！』』

2人のゲシュペンストは武器を取り応戦を開始した……トラウマシャドウで荒野に見えている空間に再び銃声が響き渡る――……

●

キョウスケは制御室へと辿りついていた

タスクたちと別れてから既に5分が経過しようとしていた。

5分は長い。戦場での5分は長すぎる。戦場で両手で数えきれないぐらいの人間を殺すのに、5分もあれば十分すぎた。生身どころかロボットという破壊兵器を使った戦闘なら、さらに多くの人間を殺すことも容易いだろう。

5分、

――既に決着がついた頃合いか

タスクたちがダイゼンガーを倒すには十分な時間だ。
ダイゼンガーに2人がやられる可能性をあえてキョウスケは考えなかった。考えても仕方がないからだ。
2人の生死がどうであれ、キョウスケのやるべきことは1つだった。

「あれか」

ゲシュペンストMk－？のモニターにやけに大きな制御盤らしき装置が映っていた。
ホワイトスターの防衛装置の制御室は広かった。制御室前の空間程ではないが、PTが縦横無尽に動き回れる程のスペースがある。
制御盤も同様に大きく、まるでPTで装置を操作するために作られたように思えた。

「敵はいないな」

レーダーを確認するが自機以外の反応はなし。
敵機がいないのなら今の内だ。キョウスケは急いで作業に取り掛かることにした。Mk－？の腰部に携帯していた【マ改造】ウィルスが入った容器を取る。
Mk－？の左手にウィルス入りの円柱を持たせ、ウィルスを侵入させることができそうな端末接続部を捜索する。
だが、その時 ――

「なんだと？」

――コックピット内にアラームが鳴り響いた。
モニターに「Ｒｏｃｋ　Ｏｎ！」の表示、そしてレーダーに敵影が突如出現したのだ。レーダー上で敵機を表す赤い点の表示が大きかった。おそらくは特機クラス。
その特機クラスの敵から高エネルギー反応を感知していることを、アラームは知らせていた。

「くっ……！」

敵機の姿をモニターに捉えるよりも先に、キョウスケはＭｋ－？のスラスターを逆噴射させた。猛スピードで後方に退がる。
それとほぼ同時に、先ほどまでＭｋ－？が居た地点を巨大な破壊エネルギーの塊が通過。赤色と青色の光線が螺旋を描いて、Ｍｋ－？の鼻っ面の先を通過していった。激しい衝撃に襲われながらも、キョウスケは敵の攻撃を冷静に分析していた。

――これは……クロスマッシャー？

キョウスケは光線に見覚えがあった。
新西暦１８６年、インスペクターが地球侵攻を開始する約１年前に勃発した戦争がある。
ディバイン・クルセイダーズ――通称「ＤＣ」
ビアン・ゾルダークを総統した「ＤＣ」が地球連邦に反旗を翻した戦争を「ＤＣ戦争」と呼び、キョウスケもその戦いに参加していた。
赤と青の螺旋光線はその時に見たモノだ。
究極ロボ・ヴァルシオン。

そして、その量産型であるヴァルシオン改。
ＥＯＴの粋を尽くした、「ＤＣ戦争」当時の最強の特機の名前だった。クロスマッシャーはヴァルシオンの持つ最強の武装であった。
そう、キョウスケは記憶している。

「ちっ……！」

どうやって存在を隠していたのか、ステルスか、はたまた空間転移か……気配を感じさない見事な不意打ちだったと褒めてやりたいところだが、今のキョウスケにはそんなことはどうでもよかった。
アラーム音が鳴りやまない。それもそのはず。
ゲシュペンストＭｋ－？の左腕の反応がロストしていた。
当然、左手に持っていた【マ改造】ウィルスの反応も、だ。

「サマ師め、よくもやってくれたな」

ウィルスを紛失してしまった以上、作戦は失敗だった。
レーダーの敵機反応をモニターに捉える。キョウスケの予感は的中していた。青い塗装を施されたヴァルシオン改がゲシュペンストＭｋ－？の前に立ち塞がっている。
キョウスケはＭｋ－？のリボルビングバンカーのセーフティーを解除する。
こうなってしまった以上、急いで戻ってタスクたちと合流し、２人の持つウィルスを手に入れる他ない。
だがそのためにはヴァルシオン改が邪魔だった。

「ヴァルシオン……何度立ち塞がろうとも撃ち貫くのみだ」

Ｍｋ－？に装備された大型ブースターが火を噴く。
キョウスケはゲシュペンストＭｋ－？を駆り、ヴァルシオン改に

突撃していった――……

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～死線～（後書き）

＜次回予告＞

不死の兵士
戦争をするために生まれた、死という概念を持たぬ化け物
そんな人間が果たして存在するのだろうか？
答えはもうすぐ分かる
死なない化け物がいるのか、その目で確かめるがいい

次回、鋼鉄の駄狼Ｒ２「不死」
死なない人間がいるのだろうか？　答えは、見て確かめろ……

ボトムズ風次回予告、今回はイマイチです。
次回は少し長めになるかもです。
できるだけ早めに更新するのでよろしくお願いします。
感想等、絶賛募集中です！

撃鉄を上げたリボルビングバンカーがヴァルシオン改に肉薄する。

異様とも思える巨大なブースターが、ゲシュペンストＭｋ－？の巨体を一瞬で敵の懐へ運んでいた。

ヴァルシオン改の全高は約６０ｍとＭｋ－？の倍以上　――　キョウスケは推進力を殺さぬようにＭｋ－？に地面を蹴らせ飛び上がり、リボルビングバンカーの切っ先を突き出させる。

電光石火。

並のパイロットなら状況を把握できないだろう。

それ程に速い踏込みで、リボルビングバンカーが敵の装甲に喰らいついていた。

だが　――

「歪曲フィールドか」

――　キョウスケが舌打ちした。

リボルビングバンカーはヴァルシオン改をしっかりと捉えている。

しかしバンカーは装甲に触れているだけで、その鋭利な先端は装甲に突き刺さってはいなかった。何かに阻まれるようにして、Ｍｋ－？の突撃の慣性は殺されていた。

歪曲フィールド。

確か、ヴァルシオンが持っていた特殊な防御フィールドだったとキョウスケは記憶している。

防御範囲は自機周辺のみと極めて狭いが、侵入してきた異物　――　銃弾だろうが、ビームだろうが、ロボットだろうが　――　の慣性や威力を半減させる防御機能だ。

キョウスケは技術者ではないためフィールドの原理は詳しくは分からない。
だが彼はパイロットである。歪曲フィールドが厄介である点は良く知っていた。
歪曲フィールドはエネルギー障壁を展開して攻撃を弾いている訳ではない。あくまで空間を歪めて、それにより威力を半減させているだけだ。
つまり、どんな攻撃も１００％防げない代わりに、どんな攻撃の威力も削いでしまう――フィールド内の敵機に本領を発揮させないようにする、極めて厄介な機能だった。
コンマ数秒の一瞬の思考。
直感と経験で自機に起きている現象を把握したキョウスケは、

「……」

無言のままトリッガーを引いた。
薬室内に装填されていた炸裂弾が発動する。薬室内で生じた爆発は衝撃となりリボルビングバンカーへと伝達される。
敵を貫くための鋭く太い鉄針が、勢いよくヴァルシオン改の装甲へと押し出された。
ヴァルシオン改の装甲が大きく窪んだ。
ゼロ距離からの一撃はそれ程威力を軽減できないようにキョウスケには見えたが、画面上、リボルビングバンカーがヴァルシオンの装甲を撃ち抜いたようには見えなかった。
内部まで届いていない、装甲止まりだ。
キョウスケは操縦桿を動かしＭｋ－？は右腕部を引き抜くと、すぐにスラスターを逆噴射させた。
ヴァルシオン改が目を赤く光らせ、巨大な大剣を振り上げていたからだ。

「……っ」

ディバインアームという実体剣が振り下ろされたが、Ｍｋ－？は攻撃を躱した。

真上から振り下ろされたディバインアームと制御室の床が接触し、金属の反響音が鳴る。しかし斬撃は回避したにも関わらず、剣風が衝撃波となってＭｋ－？に襲いかかった。

キョウスケはスラスターで制動をかけたが、ヴァルシオン改から大きく弾き飛ばされてしまっていた。

ヴァルシオン改は床から武器を引き抜き、赤い双眸をＭｋ－？に向けてくる。ロックオンされたことを知らせるアラームが鳴った。

「この威力、もらってやるわけにはいかんな」

Ｍｋ－？はブースターとスラスターを併用し、制御室内を滑らかに移動する。コンソールを操作して、持ち込んでいたＭ９０アサルトマシンガンのトリガーに指をかけさせる。

ヴァルシオン改に向けてマシンガンが連射された。

だが歪曲フィールドに阻まれて、ヴァルシオン改の装甲を撫でるだけのお粗末な銃撃になりさがる。

焼け石に水とは正にこのこと……キョウスケの苛立ちは強くなっていく。

ヴァルシオン改は腕部に備わった銃口をＭｋ－？に向けていた。高エネルギー反応の感知をコンピューターがキョウスケに報告する。

直後に銃口から赤と青の２条の螺旋 ―― クロスマッシャーが発射された。

キョウスケはブースターの出力を上げ、体にかかるＧを堪えながらＭｋ－？の軌道を変えた。

Ｍｋ－？が移動してきただろう場所をクロスマッシャーが通過する。

「このままでは……」

キョウスケの脳裏に最悪の未来が過った。

ゲシュペンストＭｋ－？とヴァルシオン改では撃ち合いをすれば、勝敗がどうなるかは目に見えている。かたや貧弱なマシンガン、かたや一撃必殺の破壊光線……攻撃はいつまでも躱し続けられるものではない。

直撃する時が必ずやって来る。Ｍｋ－？の装甲が特機並に厚くても、クロスマッシャーを何度も受け切れるものではなかった。

――やはり、歪曲フィールドをどうにかせねばな……

先ほどの接近戦でキョウスケは感じていた。銃撃は勿論、至近距離から撃ちこんだリボルビングバンカーも多少ではあるが威力を軽減されていた、と。

歪曲フィールドの対処ができなければ、ヴァルシオン改の撃破は困難だ。

――フィールドの発生装置の破壊……それが勝利の鍵か

歪曲フィールドは機体の外側に展開しているバリアだ。ならばフィールドを発生させるための装置が必ずある筈で、装甲に守られていたり巧妙にカモフラージュされているかもしれないが、それを破壊すれば歪曲フィールドは消失する。

問題は、発生装置が何処にあるか、だった。

モニターに映るヴァルシオン改を目視で確認するが、発生装置らしき物体は見当たらない。敵の威圧的な外見が目に飛び込んでくるだけだった。

「ならば、炙り出すまでだ」

キョウスケはコンソールを操作、武装を選択する。武器は相変わらずＭ９０アサルトマシンガンだ。しかし同時にＭｋ－？のコンピューターにヴァルシオン改の解析を行わせることにした。

ヴァルシオン改は動かず、Ｍｋ－？に向けて3発目のクロスマッシャーを発射する。

Ｍｋ－？はブースターで攻撃を回避し、マシンガンの口から徹甲弾をばら撒いた。

銃弾は歪曲フィールドで減速され、カツンカツン、と装甲に弾かれた。しかしキョウスケはトリガーを引き絞ったまま、射撃を止めない。Ｍｋ－？の足元には空薬莢が、ヴァルシオン改の足元には実弾が転がり小さな山になり始める。

キョウスケの攻勢に、ヴァルシオン改はフィールドを展開して防御態勢を取っていた。マシンガンの弾が尽きれば攻撃に転じてくるだろう。

キョウスケはそれを承知した上で射撃を続け、横目でヴァルシオン改の解析結果を確認した。

「両肩……装甲内部か」

モニターに表示されたヴァルシオンの両肩から、高エネルギー反応が放出されている。歪曲フィールドを展開し防御態勢のヴァルシオン改で最も高いエネルギーが検出される部位 ―― フィールドを発生させている装置がある場所の可能性が高い。

フルオートで連射されるマシンガンの残弾をチェックする。

もってあと5秒。
銃弾の雨が止めば、ヴァルシオン改は攻撃してくるだろう。キョウスケは選択しなければならなかった。

「分は悪いか……だが、敗ける訳にはいかん……！」

地球で待つエクセレンの笑顔が浮かんで、消えた。
絶対に生きて帰る。そしてエクセレンともう一度会う。キョウスケにできることはヴァルシオン改に突撃し、目標めがけてリボルビングバンカーの引き金を引くことだけだ。
キョウスケは心を決めた。
それが定めならば、と覚悟を決める。
もうマシンガンの弾はなかった。

「勝負だ、ヴァルシオン！」

マシンガンから空撃ちの音が聞こえてくるよりも早く、キョウスケはＭｋ－？のブースターの出力を上げた。
フルスロットル ―― 目がくらむようなＧが体にかかると共にＭｋ－？は加速する。キョウスケ十八番である突貫と一撃戦線離脱戦法だった。
歪曲フィールドの制御装置はヴァルシオン改の両肩内部にある可能性が高い。歪曲フィールドの性能はかなり高い。制御装置が１つ潰れれば、おそらく満足に展開することはできなくなるだろう。
無論、制御装置が両肩に存在する確証はどこにもない。
エネルギーの解析結果と自らの直感を信じ、キョウスケはヴァルシオン改の右肩部分をロックオンした。青い肩に赤いロックオンサイトが重なる。
直後、マシンガンの弾が尽きた。
Ｍｋ－？はマシンガンを投げ捨てると、リボルビングバンカーの

薬室を回転させ、撃鉄を上げる。
ヴァルシオン改がＭｋ－？にクロスマッシャーの砲門を向けてきた。

「遅い！」

砲門にエネルギーがチャージされるよりも早く、キョウスケはリボルビングバンカーを叩きつけていた。
歪曲フィールドが展開され威力は削がれ、鉄針は装甲に突き刺さることはない。だがフィールド展開にエネルギーを回したためか、ヴァルシオン改の動きが鈍った。

「零距離、取ったぞッ！」

キョウスケがトリガーを引き、リボルビングバンカーが炸裂した。
鉄針がヴァルシオン改の右肩装甲へと撃ち込まれ、衝撃が内部をつら抜いていく。バチチッ、と火花が散った。Ｍｋ－？がバンカーを引き抜くと、右肩装甲は貫通しており、内部に覗ける機械がショートしているのが分かる。
キョウスケがエネルギー解析のデータを確認する。
歪曲フィールドは消失していた。

「ヤマ勘が当たったか　――――　ぐっ……！？」

Ｍｋ－？のコックピットを激しい振動が襲った。
衝撃に抗えず、Ｍｋ－？はヴァルシオン改から大きく弾き飛ばされ、制御室の壁に叩きつけられる。ディバインブレードを振りぬいたヴァルシオン改の姿がモニターに残っていた。
Ｍｋ－？はディバインブレードで斬り飛ばされていた。

「ぬかった……！」

解析結果よりすぐに離脱するべきだったと、キョウスケは悔いる。

Ｍｋ－？のコンピューターがモニターにダメージを報告してくる。

右肩から左腰にかけて斬撃の跡が残っているのが分かった。中破……作戦行動に支障が出るレベルだ。Ｍｋ－？の装甲が特機並でなければ、機体を真っ二つにされて爆散していたことだろう。

右肩から黒煙を上げながらも、ヴァルシオン改の瞳はギラついていた。

ロックオンアラートが鳴る。その直後、クロスマッシャーの砲門がＭｋ－？に向けられるのが見えた。

キョウスケは慌てて操縦桿を動かした。

「っ！？　どうした、動けＭｋ－？！」

キョウスケの操作にＭｋ－？が反応しない。

ヴァルシオン改の攻撃で制御系がシステムダウンしているようだ。

急いでシステムを復旧させようとするが、クロスマッシャーの砲門へのエネルギー集中の方が早い。砲門ではエネルギーの塊が、まるで膨らませている風船のように膨張していた。

すぐに発射されるのは目に見えている。

しかしＭｋ－？はまだ動かない。

――間に合わん……ッ！

このままでは、次のＭｋ－？の機動よりもクロスマッシャーの発射の方が確実に早い。

Ｍｋ－？の左腕部を一瞬で吹き飛ばした砲撃を、無防備に直撃す

ればどうなるか？　結果は目に見えていた。
汗ばんだ手で操縦桿を動かすが、Ｍｋ－？はやはり動かない。
動けと念じて動くほど、世の中は都合よくできてはいなかった。
死。
寒気を覚える単語が頭をよぎった直後、クロスマッシャーが発射される。

なす術もなく、キョウスケの視界は赤と青の光に包まれた　――
……

もう、駄目だ。
クロスマッシャーは撃たれた。
動かないＭｋ－？でそれを回避することはできないし、耐えきることもできないだろう。
もうすぐ自分は死ぬのだ。
もう、エクセレンにも会うことはできない。
それだけがキョウスケにとって心残りだった。

……――　衝撃や苦痛は感じなかった。

それ程一瞬で焼き殺されたのだ……そう、キョウスケは思った。
だが同時に疑問を持った。
……何故、自分はまだ考えることができるのだろう、と。

『情けないぞ、ベーオウルフ』

聞き覚えのある声にキョウスケは気を持ち直した。

一瞬だが、意識が飛んでしまっていたらしい。キョウスケはまだＭＫ－？のコックピットの中にいた。

手もある。足もある。恐怖で弾けそうに鼓動する心臓の音が頭に響いているし、熱を持った息を吐き出し、全身が汗で濡れているのも分かった。

キョウスケは生きていた。

『俺が来なければ死んでいたぞ？』

声の主がモニターに表示された。

見慣れないパイロットスーツとヘルメットをしているが、バイザー越しに見える顔はキョウスケの知っている男のモノだ。

出撃前に格納庫で言葉を交わしただけの赤い髪の男……

「アクセル……アルマー……？」

『どうして俺がここにいる？　と訊きたそうな顔だな。しかしそれを話している暇はないのさ、これがな』

『隊長、敵が来ます』

今度は聞き慣れない声。女のものだった。

キョウスケは急いで現状を把握する。

ＭＫ－？は２機の見慣れない機体に抱き起されていた。画面には「ＡＳＫ－ＡＤ０２　アシュセイヴァー」と機種名が表記されている。どうやらクロスマッシャーが直撃するよりも早く、Ｍｋ－？は２機のアシュセイヴァーに救出されたとみて間違いないだろう。

Ｍｋ－？のシステムも復旧していた。キョウスケの操作に反応し、

Ｍｋ－？は自力で地面に立つ。
『よし、もう動けるようだな』
アシュセイヴァーの１機に乗ったアクセルが言った。
『Ｗ１７、これからベーオウルフと連携し、敵機を撃破する。敵はヴァルシオンだが、できるな？』
『了解』
Ｗ１７……それがもう１機のアシュセイヴァーに乗っている女の名前らしい。
抑揚のないＷ１７の言葉にキョウスケは違和感を覚えていた。Ｗ１７の声に感情が感じられなかったからだ。
――こいつ……何者だ……？
兵士と言えども人間だ。感情は必ずある。しかしＷ１７からはそれが感じられなかった。
『レモンの最高傑作、その性能を存分に見せてみろ』
『了解』
『ベーオウルフ、貴様もぼさっとするな。貴様はこんな所で死ぬような男ではあるまい』
「言ってくれるな」
アクセルの言葉にキョウスケは苦笑いを浮かべていた。
モニター上のアクセルは不敵な笑みを浮かべている。対してＷ１

7という女性は無表情で、人間の顔立ちをしているにも関わらず、現在敵対しているヴァルシオン改に近い何かを感じさせた。
気にはなる。しかし「ぼさっとするな」というアクセルの言葉は的を得ていて、ヴァルシオン改の銃口はＭｋ－？と2機のアシュセイヴァーが密集している場所に向けられている。
クロスマッシャーのチャージは既に開始されていた。

「アクセル。すまないが、借りは後で返す」
『ふんっ、では生きて帰れたら酒でも奢ってもらおう。それも上等の酒をだ、これがな』

生きて帰る。
その言葉は、キョウスケに今生きている実感を感じさせた。まだ生還できるチャンスは残されている。
キョウスケはヴァルシオン改をロックオンし、コンソールで武装を選択する。リボルビングバンカーは次弾を装填し、両肩部コンテナのロックを解除、頭部のプラズマホーンへのエネルギーバイパスを開放した。
Ｍｋ－？頭部にそびえる1本角が帯電し、白熱化する。

『ベーオウルフ、抜かるなよ』
「ああ」
『Ｗ17、散開だ。攻撃を俺に合わせろ』
『了解、隊長』

極めて事務的にＷ17は言葉を返した。
それを合図にキョウスケたちは機体を3方向に別々に動かし始める。アクセルたちのアシュセイヴァーは高機動戦闘を得意とする機体のようで、Ｍｋ－？に比べると滑らかで素早い機動でヴァルシオン改を取り囲み始めた。

Ｍｋ－？はアシュセイヴァーのように運動性は高くない。
低い運動性を補うための強力な推進力を活かして、Ｍｋ－？はヴァルシオン改に接近した。
しかし、Ｍｋ－？の急接近にヴァルシオン改が反応しない筈はなく。
３機が密集していた地点に照準されていたクロスマッシャーを、Ｍｋ－？単機に向けて発射していた。
キョウスケはスラスターを全開で噴かせて、Ｍｋ－？の突撃の軌道を強引に変えた。
クロスマッシャーが機体の真横をすり抜けて行った。光線の放つ熱量で、直撃していないのに装甲表面が溶解し、コックピットを横向きのＧと振動が襲う。
キョウスケはスラスターを逆噴射させ、機体の制動を得ると、再びヴァルシオン改へと突撃を敢行した。

――切り札、切らせてもらう！

プラズマホーンの限界容量ギリギリのエネルギーを流しながら、Ｍｋ－？は地面を蹴り、空中高く飛翔した。頭部を大きく振り上げる。伊達や酔狂ではなく攻撃のために取り付けられたプラズマホーンの狙いを、ヴァルシオン改の頭部へと定める。
しかし空中に大ジャンプすれば当然隙ができる。
間髪入れずにクロスマッシャーの砲門がＭｋ－？を狙い、エネルギーチャージを開始した。

『させん！』

だが、ヴァルシオン改はその直後に背後からビームを浴びせられ

た。
アクセルの乗るアシュセイヴァーが両手持ちのビーム砲で攻撃したのだ。
直撃だ。
歪曲フィールドで威力を減退させられた様子はなく、ヴァルシオン改の巨体が大きく揺らいでいた。

『好機！　合わせろ、Ｗ１７！』
『了解、ソードブレイカー全基射出』

２機のアシュセイヴァーが両肩部に装備された攻撃ユニットを射出した。アクセルとＷ１７の分を合わせて１２基 ―― 短剣のような形をした自律機動兵器が空中を高速で舞う。
１２基がそれぞれ不規則な軌道でヴァルシオン改の周辺を乱舞し、鋭利な切っ先で突撃し、装甲を抉る。レーザーで攻撃を行いつつ、最終的にはヴァルシオン改に突き刺さり自爆した。
轟音と閃光がヴァルシオン改を包む。
歪曲フィールドが消失したヴァルシオン改は爆発の威力を軽減できず、動きが止まった ――

「零距離、取ったぞ！」

―― 直後、Ｍｋ－？の１本角がヴァルシオン改の頭部を斬り裂いた。
全重量と加速を乗せ、白熱化したプラズマホーンがヴァルシオン改の顔をまるでバターでも切り分けるかのように裂いていく。
その勢いは頭部だけで留まらず、胸部、腹部装甲を縦一文字に斬った。装甲の裂け目から火花が散る。内部まで届いたらしい。

「釣りはいらん ――」

間髪入れずに、プラズマホーンを引き抜いたＭｋ－?はアヴァランチクレイモアを発射した。至近距離から火薬入りチタン弾の散弾が直撃する。プツプツと、装甲に小さな穴ができ、衝撃でチタン弾内の火薬に火がついた。

蜂の巣にされた装甲が弾け飛び、

「――　全弾持って行けッ！」

すかさず装甲が抜けたヴァルシオン改に、キョウスケはリボルビングバンカーを叩き込んだ。

歪曲フィールドが消失し、装甲が抜けたヴァルシオン改に鋭利な鉄針が深々と突き刺さる。

リボルビングバンカーの炸裂弾が爆ぜ、鉄針が打ち出された。１発の凶悪な衝撃がヴァルシオン改の体内を駆け抜ける。

ヴァルシオン改の内部構造が巨大な鋼鉄の針で潰されていく。

しかしキョウスケはすぐさまリボルバーを模した薬室を回転させ、次弾を装填すると迷わずトリガーを引いていた。火のついた火薬は薬室内で暴徒と化し、バンカーの鉄針に逃げ場を求めた。鉄針が敵を抉り、そして戻り、リボルバーが回転し次の炸薬が装填される。

キョウスケは再びトリガーを引く。

その作業を３回　――　撃ち出された計４発の荒れ狂う衝撃と共に、リボルンビングバンカーはヴァルシオン改を巨躯を撃ち貫いていた。

「俺の……いや」

『俺たちの勝ちだ、これがな』

胴体に風穴を空けられて、ヴァルシオン改は沈黙した。

Ｍｋ－?を苦しめたクロスマッシャーの砲門も、装甲を切り裂い

たディバインアームももう動かない。
キョウスケたちの勝利で戦いの幕は閉じたのだった。

●

「聞かせてもらうぞ、アクセル・アルマー」
戦闘終了後、キョウスケはすぐにアクセルのアシュセイヴァーへと通信回線を開いていた。
「何故お前がここにいる？　お前の任務は敵の陽動だったはずだ」
『ご挨拶だな、ベーオウルフ。俺が制御室へと駆けつけなければ、貴様は既に死んでいるのだぞ。絶対死なない男が聞いて呆れる』
「絶対に死なない男」――不死の部隊ベーオウルブズ、その隊長であるキョウスケの通称であり、鋼鉄の孤狼以外にこの名で彼を呼ぶ者も少なくない。
しかしキョウスケはこの通り名が好きではなかった。
「助けてくれたことには礼を言う」とアクセルに頭を下げて、続けた。
「だが言ったはずだ。俺は兵士だ。そして兵士は人間だ。死なない人間など存在しない、俺だって死ぬときは死ぬ」
『だが貴様は生きている』
「……何が言いたい？」

アクセルの物言いにキョウスケの眉尻が上がる。
その表情を楽しむようにアクセルは口元を緩めていた。

『兵士は人間、人間である限り命は有限だし、怪我もすれば死にもする。貴様は今回も死にかけた、あの砲撃を直撃していれば死んでいただろう。
なるほど、納得だなベーオウルフ。貴様は確かに不死ではない。だが不死に限りなく近い何か、だ』

キョウスケの頭に疑問符が浮かぶ。

『貴様は持っているのだ。
肉体的な素養ではなく、絶体絶命の状況でも、周囲の状況を変化させたり、本来ありえない確率の物理現象を起こす何かを、な』
「……悪運だとでも言いたいのか？」
『呼び名など知らんな。ただ、戦場に貴様のような男がいれば、限りなく不死に近い兵士に成り得るだろう……そういう話だ、これがな』

不死に限りなく近い兵士。
アクセルの話は夢物語にしか思えない。
しかしキョウスケは身に覚えがあった。彼の言葉のような現象が、これまでキョウスケの周りでは度々起こってきた。
士官学校時代の旅客機墜落事件の時は、キョウスケはほとんど無傷の状態で救出された。キョウスケ以外の搭乗員は全滅していた程の被害であったのに、だ。
また、過去にＰＴを撃破された経験もある。
しかも脱出装置が機能せずコックピットが破壊されたことだってある。
だがキョウスケは重症を負いながらも生き残ってきた。

不思議に思ってきたことだ。キョウスケとて自殺志願者ではない。決して死にたい訳ではないが、何故、自分は死なないのか？　と

――

「今回もそうだと言いたいようだな」

『その通り。そうそう都合良く増援なぞ来るものか。貴様を不死としている何かが、俺たちをここへ連れてくるように状況を変えたのだ』

「世迷言を……兵士は、戦場において現実主義者（リアリスト）であるべきだ」

『まったくだな。お前のいう事は一々正しいよ、ベーオウルフ』

アクセルは同意を示す。

戦場では冷酷になる必要がある。例え味方が目の前で倒れようとも、兵士に要求されるのは作戦に従って行動をすることだ。

兵士の集合体は軍隊となり、軍同士のぶつかり合いが戦争と呼ばれる。戦争は非情だ、そのことをキョウスケは熟知していた。命令違反、作戦を逸脱した行動をして死んでいった兵士を数えきれない程見てきた。

だから思うのだ。

戦場では現実主義者（リアリスト）になるべきだ、と。

甘えと言う心の贅肉を削ぎ落とし、客観的に戦況を把握し、味方が撃破されようとも冷静にもの事を運ぶ精神力が戦争で生き残るには必要なのだ。

キョウスケはアクセルの発言に違和感を覚えていた。

アクセルはキョウスケと同じ現実主義者（リアリスト）だと、直感で分かる

似も関わらず、言っている事は現実味を帯びない言葉ばっかりだった。

『俺だって現実主義者（リアリスト）だよ、ベーオウルフ』

「では何故……？」素朴な疑問がキョウスケの口から洩れていた。
アクセルは不敵な笑みを浮かべながら答える。
『だがな ――― いや、現実主義者だからこそ求めるのさ。俺たちには不死の兵士が必要だ。
戦意高揚やプロパガンダのためではなく、文字通り、死なない肉体を持つ兵士が俺たちには必要なのさ、これがな』
「……何故 ――」
『Ｗ１７！』
キョウスケの質問をアクセルが大声で打ち消した。
直立不動で待機していたＷ１７のアシュセイヴァーが反応する。
『何をしている？　油断は死に直結すると教えたはずだぞ。貴様は周囲を警戒していろ』
『了解』
Ｗ１７のアシュセイヴァーは、両手持ちのビームライフル ――データ照会ではハルバードランチャーと表記されている ――を構えて入り口へ向かった。
制御室には入り口は１つしかない。Ｗ１７はハルバートランチャーを入り口に向けて警戒態勢に入った。
『すまんなベーオウルフ、見苦しい所をみせた。見た通り新兵でな、まだ色々と手がかかるのさ』
「新兵？」
新兵がホワイトスターの激戦を潜り抜け、ヴァルシオン改の撃破を的確にサポートできるものなのか？　キョウスケにはにわかに信じられなかった。

『その顔は信用していないか、まぁいい。それよりもだ。ベーオウルフ、貴様は貴様の任務は早く済ませろ。今ならウィルスを流し放題だぞ』
「……ないんだ」
『何だと？』
「ウィルスがない。最初の砲撃で破壊された」

キョウスケの言葉に、画面上でアクセルが明らかに不機嫌になるのが見て取れた。

『馬鹿か貴様は。最優先で死守すべき物だろうが』
「すまん」
『……まぁ、いいさ。無いものネダリをするつもりはない。ふっ、それに貴様の無能っぷりが俺の行動の価値を高めてくれたぞ、これがな』

アクセルが鼻で笑いながら答えていた。
彼の発言の意味がキョウスケにはよく分からない。
キョウスケはその意味を問おうとするが、アクセルは彼より早く口を動かし始めた。

『俺たちの任務は陽動だ。派手に立ち回り、敵を引き付けるのが仕事だ。それなのに構成メンバーが俺とＷ１７だけだったと思うか？』
「いや……」

戦闘で撃破されたと考えるのが妥当だ。キョウスケは声には出さなかった。

『ご名答。しかし俺たちは愚鈍じゃない。防御に徹して敵を引き付

けるだけなら、被弾はしても撃破までされる奴はいなかったよ』
「では何故2機にまで減ったんだ？」
『自分たちの身を守るだけなら容易い。しかし動けない者を守るとなると話は別だ、難易度は跳ね上がる。いつもなら見捨てていたのだがな……気づくと、大勢いた俺の部下はＷ１７だけとなっていた』
アクセルが淡々と言った。
『隊長』
当の生き残りＷ１７が声を上げた。銃口は入り口に向けられたままだ。
『ＰＴ反応2機、こちらに接近中』
『識別反応は？』
『……青。味方機です』
キョウスケもＭｋ－？のレーダーを確認する。
２つの青い光点が隣接して、制御室へとゆっくり向かって来ていた。
『ベーオウルフ、俺たちはどうやってここまで来たと思う？』
唐突にアクセルが訊いてきた。
『妙な話だ。陽動に成功していた敵機が急に踵を返してな、俺たちはそれを追ってこちらに来たに過ぎん』
陽動中の突然敵が逃げたのだろう。

しかしホワイトスターに展開しているインスペクター軍の多くは無人機だ。目前にターゲットがいるのに逃亡するとは考えにくかった。

目の前の敵機よりも重要な出来事があったとしか考えられない。

――もしや、あの時のあれか……？

隔壁をアヴァランチクレイモアで撃ち抜いたのを思い出した。

ロックしていた隔壁が破壊される。敵にとっては一大事に違いない。

しかし隔壁の先には――

「まさか、おいアクセル――」

『察しが良いな。その通り、逃げた敵機を追っていた俺の目の前には荒野が広がっていた。

目を疑ったぞ。追っていた敵の無人機が、グルンガストやＳＲＸなどの特機に化けて、２機のゲシュペンストを取り囲んでいたのだからな』

――キョウスケの思った通り、アクセルたちはあの荒野の空間を通って制御室に来たようだ。

アクセルに敵機を特機に見せたのは間違いなくトラウマシャドウの仕業だろう。

――アクセルが守って戦った機体とは……もしや……？

キョウスケの額に汗が伝った。不安と期待が入りまじり胸の鼓動が早くなる。

荒野の空間にいるゲシュペンストには心当たりがあった。つい先ほど別れた、キョウスケの仲間 ――

『キョウスケさん！』

――耳に残っていた声が、Ｍｋ－？の通信機を震わせていた。通信源は制御室の入り口にいた。腕部を喪失した2機のゲシュペンストＭｋ－？改が肩を貸し合って立っている。真っ赤な装甲板が傷だらけになっており、激戦を物語っていた。

Ｗ１７に銃口を向けられたままのゲシュペンストからＭｋ－？に映像通信が入る。

キョウスケのよく見知った顔がモニターに映っていた。

『へへっ、悪いなキョウスケさん！　また生き残っちまったぜ！』

アラドが屈託なく笑いながら言った。

彼のＭｋ－？改は左腕がなく、胸部メガブラスターキャノンも潰れている。全身の装甲も焦げていて、まだ機体が動けているのが不思議なぐらいだった。

タスクの機体も左腕がないが、アラド機に比べると損傷は軽い。

『こっちはこの人たちのお蔭で助かりましたよ』

タスクがアクセルたちを見て言った。

やはりアクセルがタスクたちを助けてくたようだ。キョウスケはもう1度アラドたちの機体損傷を見る。ボロボロだ。アクセルたちのアシュセイヴァーと一緒に制御室に到着できていない以上、2機はやはり足手まといだったのだろう。

圧倒的な感謝。
アクセルは多くの部下を犠牲にしてまで、タスクとアラドを救ってくれたのだ。

『キョウスケさんも無事でよかった』
『言ったろ！　俺たちは死なねぇのさ！』
「タスク……アラド……」

無事でよかった。キョウスケは胸をなで下ろす。
キョウスケたちの様子を見て、タスクたちの救世主は何も言わなかった。
タスクたちが助けられたのは、それがアクセルの任務だったからだろう。
アクセルたちの任務は陽動だ。キョウスケたちを制御室へ向かわせることがアクセルたちの任務だった。だから足手まといのタスクたちを助けた。理由はそれ以上でも以下でもないだろう。
分かっている。
キョウスケもアクセルも兵士だ。
任務に私情を持ち込んだりはしない。
ホワイトスター防衛装置ヘウィルスを侵入させる――任務達成のために、タスクたちを助けることは意味があるとアクセルは判断した。
だから助けた。
それだけだ。

それでも、キョウスケは叫びたい気持ちだった。
ありがとう、と。

タスクたちの分の【マ改造】コンピュータウィルスを受け取り、
キョウスケは作業を開始する――……

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～不死～（後書き）

＜次回予告＞

始まりがあれば、また終わりも当然やってくる
延々に続く戦争などありはしない
人が死に、武器が尽き、指導者を失えば戦争は終わるのだ
例え、相手が異星人だとしてもその事実は変わらない
戦いは終わる
その後に、平和を求めるか、それとも争いを求めるのか。
それが勝者に課せられた唯一の義務である

次回、鋼鉄の駄狼Ｒ２「終戦」
ふらなければ分からない、人生はどこか賽の目に良く似ている

今回はシリアス編を書き始めて一番長い話になりました。
２人が助かった理由づけはしたつもりですが、少しご都合っぽいかもしれませんね。前回に登場したグルンガストやＳＲＸたちは、インスペクターの雑魚がトラウマシャドウでそう見せられていた、という設定のつもりです。
人間にはトラウマシャドウが効くけど、Ｗ……には効かない。
というつもりで書いてみました。機会があれば、荒野でのアクセルたちの戦闘も書いてみたいですね。

ここからはすっごい蛇足。

ボトムズの幻影編が見たいけど、バンダイチャンネルにまだあが

ってなくて残念な今日この頃。
でもスパロボＯＧ？の発売日が発表されました！
９月２９日！
わりと早いですね。発売延期にならずに発売されることを祈ります。

私が好きなスパロボＷのカズマ君は出ないみたいですが、ライオウのトウマは出るみたいで嬉しいです。
敵をライオウのみで蹴り倒してくれるわ！
あと早く第２次Ｚの続編発売してくれないだろうか？
ああ、早くむせたい（ゲホゲホ）。
そう思う今日この頃。

所々にパロセリフ（地の文）を入れ見ました。どんなモトネタか分かるかな？
ではでは、次回も良かったら読んでくださいねノシ

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～終戦～（前書き）

戦後の後日談をイメージして書きました。
かなり内容を省略しています。

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～終戦～

俺は……俺は、夢を見ていた　――……

俺の名前はキョウスケ・ナンブ。
何故か高校が密集する不思議な地域「エリア」。
そこで暮らす、ごく普通の貧乏学生……いや、貧乏学生だったと言う方が正しいのかもしれない。
なぜなら、俺は知ってしまったからだ。
「エリア」の歪みを……俺の中に潜むモノの存在を……「エリア」を支配する神の存在を、知ってしまったからだった。

知らぬが仏とはよく言ったもので。
真実を知らなければ、俺はエクセレンと毎日楽しい虚構の日々を送ることもできたのかもしれない。事実を知ることが幸せだとは限らないのだ。知らない方が幸せでいられる……断言はしないが、俺が改めて知った「エリア」では、無知であることが幸福を享受する絶対条件だった。

――「エリア」に残された時間は、あと3日……

あと3日で、「エリア」の歪みは限界を迎え、リバースにより暴走させられたベーオウルフの力で破界されるらしい。
そしてリバースの力で再世され、俺たち「エリア」の住人は幸せな人生を繰り返す、らしい。

何故、らしい、かって？
覚えていないからさ。「エリア」はもう1万回以上も滅びと再生のプロセスを繰り返しているそうだが、再世のたびに俺たち「エリア」の住人の記憶はリセットされる。
「エリア」に住む者はこのプロセスに逆らえない。
自身も気づかないうちに、「エリア」の住人である俺たちは1万回以上の死を迎え、再生されて生きているらしい。

忘却と平穏の楽園 ―― それが「エリア」。
しかしどんな楽園にも異分子というものは存在する。
俺の知る限り、繰り返される「エリア」の中で、記憶を保ったままでいられる人間が2人いた。

「エリア」の監視者 ―― オータム・フォーとカイメラ医院の謎の黒医者 ―― アサキム・ドーウィン。
人間、と言ったが、彼女たちが本当に人間なのかは正直疑わしい。彼女たちの言葉が全て虚言や妄言の類である可能性だって捨てきれない。
だが俺には彼女たちの言葉を信じるしかなかった。無知な俺に残された道は彼女たちを信じることだけ……それも、また事実だった。
だから俺はアサキムの言葉に従った。
オータムの中に記憶された俺自身の過去生を見ろ。
アサキムの言葉に従い、協力者 ―― 有栖（ありす）零児（れいじ）の秘伝「夢想転生」の力を借りて、俺は夢を見ていた ――……

夢の中の俺は、ただただ浮遊感に包まれている。
体の輪郭を感じ取れない。思考だけが鮮やかに澄み渡り、俺は俺 ―― キョウスケ・ナンブを観察していた。

ホワイトスター攻防戦。

防衛装置の制御室に辿りついたキョウスケたちは、特製の【マ改造】コンピューターウィルスを侵入させることに成功する。

ウィルスの効果はすぐに現れた。

『ホワイトスター防衛兵器、インスペクター軍に対して攻撃を開始。戦況は我が方に有利だ』

アシュセイヴァーで通信を傍受していたＷ１７が報告する。

どうやら【マ改造】コンピューターウィルスは有効に機能しているようだ。

キョウスケたちは制御室でのヴァルシオン戦から敵機と出くわしていない。Ｗ１７の報告が事実なら、インスペクターの無人機がホワイトスターの防衛兵器に攻撃されているはずだった。

『キョウスケさん、本隊から入電だ』

タスクが喜喜とした声を上げた。

『本隊がインスペクターの指揮官機を撃破したらしい！』

『やったぜ！　俺たちは戦争に勝ったんだ！』

アラドもモニター越しに笑顔を浮かべている。
指揮官機　――　キョウスケたちと別行動していたクロガネの本隊が、インスペクター総司令官ウェンドロを討ち取ったのだ。頭を潰せば戦争は終わる……と言える程、戦争は簡単なものではないが、インスペクター軍に関しては別だった。
インスペクター軍のほとんどは無人機だ。事前の調べで、インスペクター軍に純粋なインスペクターの本星の人間はほとんどいないことは判明していた。
実質、インスペクターの地球侵攻メンバーは５－６人。
その中でグループのトップが討ち取られれば、自然と敵軍は瓦解するだろう。
指揮官の撃破後に問題となるのは、ホワイトスターから脱出する友軍への無人機からの攻撃であるが、それは【マ改造】コンピューターウィルスで既に対応はできている。

「よし。みんな、脱出するぞ」

キョウスケの合図を皮切りに、ベーオウルブズの機体とアクセルとＷ１７のアシュセイヴァーが動き出した。
目指すはホワイトスター外部で交戦中の友軍艦だ。
２機のアシュセイヴァーに護衛されながら、満身創痍のゲシュペンストたちは外を目指して歩き出す　――……

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～終戦～

戦いは終わった。

総司令官がいなくなったインスペクターは脆いものだった。
ウェンドロを討ち取られ、ウィルスによって拠点の要を失ったインスペクター軍は、地球連邦とホワイトスター防衛装置の火力の板挟みに曝される。
防衛していた筈の拠点の兵器に背中から撃たれたのだ。多くの敵機が無防備に銃撃に曝されて撃墜、残った機体も混乱した戦場の中で次々と散って行った。
わずか半日足らずで、ホワイトスターに残存していた無人機は掃討され、生き残っていた突入部隊の多くは無事に帰還することに成功、インスペクター軍は壊滅した。
クロガネの精鋭たち以外は、キョウスケたちの存在を知らない。
防衛兵器がインスペクターを攻撃したのは、すべてキョウスケたちが制御装置にウィルスを使用できた故の結果なのだが。
ホワイトスター防衛兵器の異変は、当然、事情を知らない者たちには奇跡として映る。
戦場で戦っていた者たち誰もが歴史的な大勝に酔いしれていたのは言うまでもなかった ――……

反面、この戦いでは多くの兵士がホワイトスター宙域で散っていた。
後に計算された数値ではあるが、このホワイトスター攻防戦だけではなく、インスペクターの襲来から勃発した戦争で失われた命の数は実に９９８１２人。
救えなかった命だ。
意味のない民間人まで大量に巻き込んだ戦争……異星人の侵略に対する全面戦争は、この日、終わりを迎えたのだった ――……

●

戦闘終了後、万能宇宙戦艦「クロガネ」。

突入のダメージで半壊状態に陥っていたクロガネも回収され、味方の修理艦の助力を得て、通常航行ならこなせる程度には回復していた。

キョウスケはアクセルと共に、クロガネ内で経営している酒場へと足を運んでいた。

普通の戦艦に酒を扱う店があることはまずないが、クロガネの前艦長であるレーツェル・ファインシュメッカーという人物が大の食通であり、趣味で艦内に小さなレストランと酒場を建造していたのだ。

レストランではない方、つまり酒場のカウンターでキョウスケはアクセルと並んで座っている。

酒場は生還したクロガネの精鋭たちで賑わっていた。

生気に満ちた笑みと笑い声が飛び交っている。酒を交わしながら戦争の勝利と仲間との再会を祝っていた。中にはキョウスケの見知った顔の者も多く、未成年者の姿も見えたが、今回ばかりはお咎めなしで見逃されている。

タスクやアラドは、同世代のブルックリン・ラックフィールドやレオナ・ガーシュタインらと同じテーブルに着き談笑していた。遠目には飲んでいるのが酒なのかは分からない。

「お待たせしました。ＸＹＺでございます」

髭をたくわえた細身の老人マスター――ヒリュウの副長ショ

ーン・ウェブリーに似ているがあえてキョウスケは突っ込まない――がカクテルグラスを差し出してきた。
不透明な白い色をしたカクテルだった。
「ベーオウルフ、貴様も義理堅い男だな」
アクセルがＸＹＺを手に取り言った。
「俺は確かに酒を奢れと言ったがな、まさか本当に奢られるとは思ってもみなかったぞ」
「そう言うな。誰かに借りを作ったままにしておくのは、気分の良いものではないからな」
そう言いながら、キョウスケもＸＹＺを手に取った。
キョウスケがアクセルをクロガネの酒場に招待したのには訳もがある。
１つは助けられた借りを返すこと。ホワイトスターの戦闘でキョウスケたちが助かったのはアクセルたちの助けがあったからだ。キョウスケは元より、タスクもアラドもアクセルの部隊がいなければ、おそらく全滅していただろう。
不死の部隊、ベーオウルブズはまた生き残った。
世間では噂だけが先行するものだ。ベーオウルブズの生還ばかりがピックアップされ、おそらくアクセルたちの話題は影も見せなくなってしまうのは目に見えている。
だからせめて、自分たちだけでもアクセルに感謝を示しておきたい。キョウスケはそう考えて、酒場へとアクセルを案内した。
２つ目の理由は単に興味が沸いただけだ。
出撃前には突き放したような態度を取ってしまったが、キョウスケはアクセルという男の人物像に興味が沸いていた。

「酒か。酒も女も断ってどれ位ぶりになるかな」
アクセルがグラスを覗きながらつぶやいた。
「戦争中に酒を飲むなどできる訳がないからな」
「そうさな。冷静な判断力を保ちたければ酒は邪魔者だ。それに酒は脳細胞を破壊する。兵士を長く続けていたければ、酒は飲むべきではないのかもしれん、これがな」
「そうだな」
「だがこれは祝杯だ。受けない訳にはいくまい、なぁ、ベーオウルフ？」
アクセルはグラスを掲げていた。
キョウスケもグラスを掲げ、アクセルのグラスと縁を合わせた。
チン、と小さな反響音が鳴る。
「互いの生還と」
「戦いの勝利を祝して」
ＸＹＺが互いの口に運ばれた。
一瞬の甘美さの後に、強い灼熱感が体中を駆け抜ける。キョウスケは知っていたことだが、この酒は相当に度数が高い。
「ふぅ、きくねぇコイツは」
アクセルは１口でグラスを空けていた。酒に強いのかもしれない。
キョウスケは目配せでマスターに追加を注文した。
「終戦の味といった所だな、こいつは」
「不味かったか？」

「いいや、悪くない。カクテルのネーミングもな」
「ＸＹＺ――これ以上はない、これから先もない……要するに行き止まりということだ」
「ふっ、戦争の終結には持って来いと言う訳か？　意外とロマンチストなのだな貴様は」

マスターが差し出した追加のＸＹＺをアクセルは受け取ると、また１口で飲んでしまった。マスターは顔色一つ変えずに追加を作り始める。

カッ、とグラスをカウンターに置いてアクセルがキョウスケを見てきた。

「不死の兵士――鋼鉄の孤狼、キョウスケ・ナンブのセリフとは思えんぞ」
「……そうだろうか？」

キョウスケは微少を浮かべていた。

「確かに俺は兵士で、人間だ。不死じゃない。それはお前も認めていたことだぞ」
「その通りだ。俺もお前も兵士。そして人間だ。いつの日か命が絶える日がやって来る、それは避けがたい事実だし、自然の摂理だ。だが……いや、だからこそ……なぁベーオウルフ、貴様は見たいとは思わないのか？」
「何をだ？」
「死なない兵士を、だよ」

シェイクし終えたＸＹＺがアクセルの前に差し出された。
アクセルはグラスに手を付けずにキョウスケを見つめていた。
答えを求められている。それが理解できたから、キョウスケは声

を殺して笑い、口元を緩めてしまっていた。
アクセルが仲間や同類を探す、寂しい一匹狼に思えてしまったから。それは自分も同じではないかとも思いながら、キョウスケは口を開いた。

「思えば、俺たちの話題はいつも同じだったな」
「不死、兵士、戦争か？　それはそうさ。俺たちは兵士。骨の髄、血の一滴まで硝煙のにおいが染みついているのだから」

硝煙どころか、手からは血の匂いが立ち上る。キョウスケはそんな錯覚を抱いたこともあった。

「それは別にいい。それより答えろ、ベーオウルフ。貴様は不死の兵士を見たいのか、見たくないのか？」

アクセルの質問にキョウスケは考える。
不死の部隊と呼ばれているキョウスケたちだが、決して不死身ではない。
不死というのは、死とスキンシップしている戦場での兵士たちにとっては金塊よりも欲しいものに違いなかった。
無論、キョウスケも不死の兵士には興味がある。
だが見たいとは思わなかった。

「俺はご免だな」
「何故だ？」
「戦争は兵が死に、武器が尽き、指揮官が潰されて終結する。今回のインスペクター戦ではそれが特に顕著だった。頭１つが潰されただけで敵軍が壊滅したのだからな」

インスペクター軍のほとんどが無人機だった。指揮官が討ち取ら

れた時点で、後は敵の掃討戦に移行したのだから今回の戦闘は特殊だったと言える。
これが人間相手なら、こうはいかなっただろう。
もしかすると指揮系統は混乱しつつも、時間をかけて新たな指揮官を立て、陣形を立て直して攻め直してきたかもしれない。

「死なない兵士、死なない指揮官……そんなものが存在すれば、戦争は永遠に終わることはない」

歴史上、戦争と平和は繰り返されてきた。それこそ永遠の円舞曲のように。
だが死なない兵士が存在すれば、円舞曲（ワルツ）の調和は崩れ去り、地獄への行軍歌（マーチ）へと様変わりするだろう。
想像するだけで冷たいものが背中を走る。
キョウスケはそんな世界を見たくはない。
エクセレンと平穏に暮らせる日常、キョウスケが求めているのはそれだけだった。

「永遠の闘争、いいじゃないか」

だからアクセルの言葉に耳を疑った。

「なんだと？」
「永遠に続く戦争、それは俺たち兵士にとって正に理想じゃないか」
「……本気で言っているのか？　つい先ほど、人類の生き残りをかけたインスペクターとの戦いが終わったばかりなのだぞ？」

激戦を越えて、祝勝会雰囲気の酒場での発言とは思えなかった。

何かの冗談に決まっている。
キョウスケはそう思いたかったが、

「それは生き残るための戦争だ。厳密に言えば、兵士が活きるための戦争ではない」

期待を裏切ってアクセルが断言する。

「戦争は人類に必要だ。戦争があるから技術は躍進し、兵士は活き、適度に人口が減る」
「だが不幸が生まれる。戦争により生まれる憎しみや悲しみはどうするのだ？」
「やはり貴様はロマンチストだな、ベーオウルフ。貴様の言う事は綺麗ごとばかりだ。戦争により生まれる憎しみや悲しみを失くすために、貴様は引き金を引き続けてきたとでもいうのか？
嘘を言うな！　引き金を引けば、憎しみは消えずに増えるだけだ。貴様だって分かって撃ち続けてきたはずだ」

アクセルはマスターが出していたＸＹＺをまた一気飲みした。
顔色は変わっていないが饒舌になっている。

「俺たち兵士は、戦争をする者として受け入れなければならない。戦争によって生まれる憎しみも悲しみも悲劇も……全てだ」
「……しかし」
「憎しみは負の感情だ。だが負の感情が無くなれば、正の感情だけが残るわけではない。負の感情があるからこそ、正の感情が活きるのだ。
戦争は必要悪だ。地球は戦争の繰り返しで発展してきたような星だ。戦争がなくなれば、いつか世界は腐っていくだろう　――　俺はそ

んな世界は見たくはない、これがな」
「だが戦争はもう終わったぞ。これからの世界は平和になっていく」
インスペクターは退けた。
新たな異星人の襲来に向けて研究は続けられるが、軍事にさかれる費用は確実に削減されるだろう。復興に力が入れられ、それが落ち着いた頃には平和な時間が訪れるはずだ。
「馬鹿か？」
アクセルは鼻で笑っていた。
「束の間だ。そんな平和。
戦争はすぐに起こるさ。まぁ、数年以内にな」
「……もし、起こらなかったとしたら？」
「なんなら俺が起こしてやってもいい、これがな」
にわかに信じがたい言葉だった。
キョウスケはアクセルに興味があって酒場に招いたが、彼は根っからの戦争馬鹿のようにしか思えなかった。
戦争を起こす？　馬鹿馬鹿しい、個人に戦争が起こせるはずがない。鼻で笑いたくなるキョウスケだったが、胸に妙なしこりが残っていた。
アクセル・アルマー。
この男を、このままにしておいていいのだろうか？　と。
「……アクセル……もし、もしそんなことをすれば……俺はお前を――」
キョウスケはエクセレンのために戦争を駆け抜けた。彼女と暮ら

す平穏のために戦い、戦争がやっと終わったのだ。
これからの世界は平和になる。
アクセルがそれを否定し、もし……もし本当に戦争を起こすというのなら。

「――　お前を殺す」

キョウスケの脅迫をアクセルは笑い流していた。

「ベーオウルフ、やはり貴様の根っこは俺と同じだよ。根を生やした場所が違ったというだけ、まったく、勿体ないの一言に尽きるぞ」
「……」
「得意のだんまりか？　まぁいいさ」

アクセルはカウンターから腰を上げた。
空のグラスをマスターに返し、椅子に腰かけたままキョウスケを見下ろす。
キョウスケは目を合わせようとはせず、半分程ＸＹＺが残ったグラスを見つめていた。

「ご馳走になった」

アクセルが礼を言う。

「また会おう。もっとも、次に会うのは戦場で、だがな」

それだけ言うと背を向けて、アクセルは酒場を後にした。
キョウスケはカウンターに１人取り残される。耳には酒場内で飛び交う歓声がやけに遠くに聞こえていた。

――　アクセルの言うことは正しくもある……

ＸＹＺの液面に映る、濁った自分の顔を見てキョウスケは思った。
キョウスケが引き金を引き続けてきたのは事実だった。
戦争だ。生き残るために敵を倒す、それは当たり前の事ではある。
しかしキョウスケは目を背けてきたのかもしれない。
インスペクターは別として、これまで相手にしてきた敵機にも人が乗っていて、落とせば死に、残された者たちに憎しみや悲しみが訪れる。
分かっていた。理解していた。だからその事実を思考の外へと追い出してきた。生き残るために、だ。
戦争だから、誰もキョウスケを責めはしないだろう。良心だけがキョウスケを責めていた。

「くそ……っ」

残ったＸＹＺを飲み干す。
ＸＹＺ　――　これ以上はない、これでお終い。
キョウスケは信じている。
戦争はもう終わったのだ　――……

クロガネが地球に帰還した後、ベーオウルブズには北米ラングレー基地への異動が命じられた。

異動の事務処理やホワイトスターでの戦闘報告書の作成など……手続きや雑務に追われて1週間が過ぎる。

やっとラングレー基地に腰が落ち着き始めた頃、キョウスケは格納庫へと足を運んんでいだ。

●

ラングレー基地、格納庫。

キョウスケたちの愛機もそこに格納されていた。

真紅のカラーリングを施された重装甲ＰＴ――ゲシュペンストＭｋ－？は修理され、損失していた左腕も元通りに戻っていた。

装甲板も新品に取り換えられ、ホワイトスターでの激戦の痕跡は何処にもみてとれない。

タスクたちのＭｋ－？改も同様だった。

「綺麗になったな」

３機のＰＴを見てキョウスケは呟いた。

戦場では頼りになったＭｋ－？の武装も目に飛び込んでくる。５

連チェーンガン、プラズマホーン、アヴァランチクレイモア、リボルビングバンカー……凶悪な殺傷兵器たちだ。
改めて、ＰＴは戦争のための兵器なのだとキョウスケは思った。
平和になれば、ＰＴは不必要な存在なのかもしれない。特にＭｋ－？のように全身を武器で固めたＰＴは、戦う以外では無用の長物という言葉しか思いつかなかった。

「アルトアイゼン……か」

ドイツ語で「古い鉄」という言葉だ。
それはＭｋ－？が製造され、誰も扱えるものがおらずお蔵入りしていた時の賤称（せんしょう）だった。使い物にならない、役に立たないまるで「古い鉄」の塊。
しかしアルトアイゼンはキョウスケというパートナーを得て、水を得た魚のように戦場を駆け巡り、一騎当千の活躍をみせた。いつしかアルトアイゼンとは呼ばれることはなくなり、軍にも「ゲシュペンストＭｋ－？」と正式名称と登録されるに至る。
だが、それも終わり。
ゲシュペンストＭｋ－？は「古い鉄」に戻ったのだ。

「今なら、悪い言葉には思えないな」

平和になった世界なら、Ｍｋ－？は間違いなく「古い鉄」だろう。
それでいい。
キョウスケは感慨に耽り、しばらくＭｋ－？を見上げていた。
どれだけの時間が経ったのか、分からない程の時間が過ぎた頃、キョウスケはＭｋ－？に背を向けた。

「さらばだ、アルト……もう、会うこともあるまい……」

ゲシュペンストＭｋ－？は格納庫の奥の奥に押し込められた。汎用性のない戦闘特価のＰＴはこれからの時代に必要ないとの判断からだ。

キョウスケは奇妙な喪失感を味わいながら、格納庫を後にした。

それから数日して、キョウスケたちには休暇が与えられた。

インスペクター撃退の恩賞とのことだったが、キョウスケの階級は上がることはなかった。表だって指揮官を撃破したわけでもなく、記録に残るような戦闘をしたわけでもなかったからだ。

ウィルスの件はクロガネの面々しか知らないから無理はなかった。

「帰るか、あいつの所へ」

キョウスケは休暇を利用して、故郷である日本へと旅立って行った――……

●

日本、江里阿町。

キョウスケが家を借りている町の名前だった。
何の変哲もないただの住宅街にある古びたアパートがキョウスケの家だった。
軍務で滅多に帰ることはできない。インスペクター戦の恩賞も出るだろうから、そろそろ引っ越してもいいかとも考えている。
一緒に住んでいる、女性のために大きな家に住み替えるのも悪くない。

「キョウスケ」

アパートの前で1人の女性が立っていた。
薬指に指輪をはめた金髪のアメリカ人女性だ。エクセレン・ブロウニング ―― 今はキョウスケと結婚して、ナンブ性を名乗っている彼女がキョウスケを笑顔で迎えてくれる。
キョウスケが守りたかった笑顔がそこにあった。

「お帰りなさい」
「ああ、ただいま、エクセレン」

キョウスケも笑顔で応える。
安堵感と一緒に、体の奥に温かい感情がこもるのを感じていた。
エクセレンの下腹が少し大きくなっていて、出撃前の予感が当たっていたことを確信し、キョウスケはさらに幸せな気分に包まれる。

戦争は終わった。
これからエクセレンと新しい家族を迎えての生活が始まるのだ。
キョウスケが夢見ていた幸福が目の前には広がっていた ――……

俺はその様子を見ていた。

ラングレー基地での1週間も、まるで一瞬の事のように頭に飛び込んできた。

これがキョウスケ・ナンブの人生……俺の過去生なのか……？
戦いに生きた男が掴んだ細やかな幸せ。
この感覚は既視感（デジャヴ）とでも言えばいいのだろうか？　俺は奇妙な気分になりながらも祝福してやりたい気持ちだった。

だが。
俺を包んでいた浮遊感が、急に渦を巻いて俺を飲み込もうとし始める。

――なぜ？

女の声が俺の頭に響いてきた。
聞き覚えのある女の声だった。

――ウームだけでは足りないというのですか……？

悲しげな声を聞きながら、俺の視界は闇に包まれた。
しかし、すぐに闇は消えうせる。
直後に目の前に広がっていたのは、巨大な試験管のようなモノが沢山ある施設だった。試験管の中には人間の姿が見える。成人しているものから、子どもや赤ん坊までいる。試験管の外で横たわっている人間もいた。
試験管の前に青い髪の女性が項垂れている。

「なぜ……？」

何処か無機質で端正な顔立ち、切り揃えられた青い髪は俗に言う「おかっぱ」というものだ。外見は１５～６歳ぐらいに見える女の子だった。

俺は彼女の顔を知っていた。

背の高さが違うが間違いない。

――オータム・フォー……？

「エリア」の監視者、オータム・フォーが俺の目の前にいた。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ――……

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～終戦～（後書き）

＜次回予告＞

次回、鋼鉄の駄狼Ｒ２「？？？」
そして、彼女は言った……

今回もパロネタを自然に混ぜてみました。分かるかな？　モトネタはガンダムＷとシティーハンターだよ。
第２章も序盤は終了、次回は短めの回を挟んで、さらにシリアスにしていく予定（は未定）。

では、よろしければ次回もお付き合い下さい！ノシ

???

場所も分からない研究所らしき一室で。

オータム・フォーは嘆いていた。

「何故……上手くいかないのでしょうか？」

誰に問いかけるでもなくオータムはつぶやいていた。

彼女の周りに人の気配はない。研究所の一室で、何かのコントールパネルらしき物の前で立ち尽くす彼女は、アクリル板を隔てて広がる眼前の光景を見て独り言をもらしたのだ。

視線の先　――　アクリル板の向こう側には複数の巨大な試験管が並べられていた。

試験管は大きな機械の上に乗せられており、中には透き通った緑色の液体が満ちている。緑の液体の中を下から上へと細かな気泡が沸いて出て、泡は緑の液体に浮かぶものを守るように流れていた。

目を凝らして試験管の中を見る。

よく見れば、試験管の中身は人だった。

試験管の中に浮かべられる形で人が閉じ込められていて、目を閉じたまま緑の液体に包み込まれている。

「……シーズンから惑星エリアを解放して、もう２０年……」

オータムは誰にではなく、たった一人で言葉を連ね始める。

やはり周りに人の姿はない。もしかするとオータムは、考えていることを声に出しているだけなのかもしれない。

思考を声に出す理由は何か？

誰もいない寂しさを紛らわせるため、なのかもしれない。
板についた独り言で、オータムは独白のように声を上げる。

「エリアを解放してすぐに、私は人工子宮ウームを用いて、人類再生計画に取り組み始めました。ウームに保存された遺伝子情報と人工子宮をおかげで、人類の再生は意外な程に早く進みました……でも」

オータムは言い淀み、影の差した表情で後ろを振り返った。
オータムのいる一室は広いが、彼女の前にある何か ――― 人工子宮ウーム ――― のコントールパネルの他には何もない。
しかし、一室に足の踏み場はなかった。
薄布を敷いてこしらえた簡易的な寝床に、裸の人間たちが寝かされていた。
掛布団の代わりに薄い布を被せられ、首には3つ又に別れた点滴ルートが入っていて栄養剤と思しき薬が投与されている。
誰も動かない。スースーという呼吸音の他には、オータムの声と機械の音しか一室には聞こえてこなかった。

「肉体の再生は容易でした……でも、再生できたのは肉体だけで、どの個体にも心は宿りませんでした」

初めはただの偶然だと判断し、新しい個体を再生したが、それにも心は宿っていなかった。そして、何度何度も再生し続けた、とオータムは呟いていた。

「何故なの……？」

オータムは天井に向かって問う。
しかし無機物である天井が答える筈がない。

「ウームのデータの損傷か、それとも成長過程や方法の問題か、様々に検討を重ねている内に２０年が経って……もう、さすがに疲れました」

オータムの声のトーンが落ちる。

オータムの外見は歳にすれば１５から１６歳の女の子に見える。

２０年間も研究所に籠っているようには思えなかった。

「私が人間じゃないから……アンドロイドだから、上手くゆかないのでしょうか……？」

分からない。と言った表情で、やはりオータムは一人ごちする。

「キョウスケ……」

気づけば、オータムは男の名前を呼んでいた。

「あの時　――　シーズンと戦った時のように、私を助けて欲しいと願うのは、きっと独りよがりで自分勝手な願いなのでしょう。異世界に帰ったキョウスケが、都合よく現れて私を助けてくれるなんてあり得ない……分かっています。

でも、辛い……もう２０年間も１人ぼっち……あぁ、私にセンチメントサーキットなんて付いていなければ良かったのに……」

今にも泣きだしそうに顔をしかめるオータム・フォー。

しかし透き通る青空のような瞳から涙が零れ落ちることはない。

「私が人間だったら……涙も流せるし……死ねるのに」と重々しい言葉が、再生された人間たちが横たわる一室で空しく響いた。

「誰でもいい……誰か、助けて……」

オータムは天井を見上げ、助けを求めていた。
しかし天井は無機物だ。意志のない無機物は答えることをしない。

――いいでしょう

だが声が聞こえた。
女性の声だ。俺にとって、聞き覚えのある女の声だった。
突然聞こえた声に驚き、オータムは周囲を見渡したが、動いている人の姿は確認できなかった。

「誰？」

オータムは恐る恐る空中に向かって声をかける。

――誰と訊かれても　私には答える名前がありません

「姿が見えませんが……？」

――見える必要はありません　私は力　力は感じればよいのです
機械の娘よ

声はオータムが人間でない事を見抜いていた。

オータムは驚愕した様子だったが、少し黙っていたかと思うと、声に向かって質問していた。

「いいでしょう……とは、あなたが私を助けてくれるという意味でしょうか？」

――ええ　貴女は人類を再生させ　悲劇のない平穏な世界を創ろうとしているはず
　それは素晴らしいことです　私も力を貸しましょう

「ありがとう。でも……人類再生計画は上手くいっていないのです」

オータムはこれまでの事情を声に説明した。
何故、彼女が声の事をすぐに信用したかは分からない。
オータムにとって、声は２０年にわたる孤独な生活の中で初めてできた話し相手……だったのかもしれない。センチメントサーキットがそうさせるのか、事情を説明するオータムの表情は少し嬉しそうに見える。
オータムは再生した人間に心が宿らないことを声に説明した。
声はすぐに答えを出した。

――それは魂がないからです

「魂？」

――肉体は魂の器　魂なき肉体に心は宿るはずもなく　心なき肉体が動くはずもない

「では、魂というモノを手に入れればいいのでしょうか？」

――　ええ　理解が早くて助かります

声の答えにオータムの表情が柔らかくなる。

「魂というモノが手に入れば、人類を復活させることもできるのですね？」

――　勿論です　魂の方は私に任せてください　心当たりがあります

「私は何をすればいいのですか？」

――　貴女は魂の器となる人間を　できるだけ沢山作ってください
　私の集めてきた魂が　宿るべき肉体をね

「では、その魂と肉体が揃えば」

――　貴方の念願である人類再生は成就されるでしょう
　そして再生された人類による　悲劇のない世界が生まれるのです　――

オータムは声に言われるまま、ウームを使って人間を生み出し始める。

ウームにより生み出された魂の宿らない人間……研究所の一室に寝かされた人間たちのような存在が、これから量産されていくのだろうか……？

俺は、猛烈な不安感に駆られていた。

オータムは声に唆（そそのか）されている。魂は物ではない。手に入る筈もないものを声はどうしようと言うのか？　オータムに声を疑っている様子は微塵も感じ取れなかった。もしかすると、彼女がアンドロイ

ドであるために魂の概念を掴み損なっているのかもしれない。
だが、それは些細な問題だった。

声は、オータムを残して、最後にこう言って消えたからだ。

――全ては　平穏なる世界のために

直後、俺を包んでいた浮遊感が再び渦巻いた。

そして、暗転。
次に視界が開けた時には研究所は消え、そこにいたオータムの姿はなかった。
俺は別の場所に飛ばされてしまったようで、目の前には少し小さめの一軒家が建っていた。少人数の家族なら問題なく住めそうな大きさの平屋だ。
一軒家の表札には「南部」と書かれていた。

――さっきのは、もしやオータムの記憶か……？

俺は今、零児の「夢想転生」によってオータムの記憶にある、俺の過去生を覗いている。
これは推測だが、何かの拍子にオータムの過去の世界へと飛ばされていたのかもしれん。
と、考えていた俺の横を1人の男が素通りしていった。

「エクセレン、今帰ったぞ」

一軒家の入り口を開けて、男は中へ呼びかけている。
紅いジャケットを着た日本人男性で、肩には不死の部隊「ベーオウルブズ」のトレードマークである狼が描かれていた。
男の顔は鏡を見れば必ずそこにある、身近で見覚えのあるものだった。
俺――キョウスケ・ナンブが、ドアを開けて玄関で何かを待っている。小さな玄関口には女性物の靴が1組の他に、小さな子ども用の靴が見て取れた。
キョウスケに呼ばれて、家の中から金髪の女性エクセレンが姿を現した。

「あら、お帰りなさいダーリン、キラ☆」

超時空とか、シンデレラがいそうな異世界あたりで流行りそうな仕草でウィンクするエクセレン。似合ってはいる。2頭身化して星が目から飛び出し、八重歯が口からのぞきそうな位には似合っていたが、それを見るキョウスケの視線は冷ややかだった。
白い。と言ってもいい。

「今度は何のマネだ？」

「超時空妖精、アップル・ボンバー・歌姫ちゃんの決めポーズよ、キラ☆」
「イラッ、とするな」
「あぁん、キョウスケのいけずぅ～」

キョウスケの言葉に、エクセレンは身をくねらせて反論していた。
その行動に込められた意味は、もっとかまって、だろう。
キョウスケは静かに靴を脱ぎ始める。
靴を脱ぐためにしゃがんだキョウスケ。しかしその時、キョウスケの前に躍り出る一つの陰があった。

「おかえりなしゃいパパ、きら☆」

3、4歳程の青い髪をした女の子だった。
ついさっき、エクセレンがしていた超時～（以下略）の決めポーズをしている。年齢相応の体の小ささも相まって、まるでぬいぐるみのように愛くるしくキョウスケには映った。

「ただいまアルフィミィ。どうしたんだ、そのポーズは？」
「うんとねー、ママのまねー」
「ほう、可愛いな」

「キラ☆」のポージングで応える女の子 ―― アルフィミィの頭をキョウスケは撫でてやった。

「でもママの真似をしちゃダメだと言っただろう？ 恥ずかしいから ――」
「きらっ☆」

また「キラ☆」のポーズを取るアルフィミィ。

小さい娘が好きという嗜好の持ち主なら、鼻血を出して卒倒してもオカシクない愛くるしさだったと断言しよう（断っておくが、俺は断じてロリコンではない）。

「――　まぁ、いいか。ほら、飴をやろう」
「キィ　――――ッ！　キョウスケがデレてる！　やっぱり、若い娘の方がいいのね！？」
「自分の娘に嫉妬するな」
「あめふぁまほいしぃー」
「美味いか、良かったな」

嬉しそうに飴玉を舐めるアルフィミィ、愛おしそうにそれを撫でるキョウスケ、少しジェラシーを感じている困ったちゃんなエクセレン。
この小さな一軒家には、キョウスケを含めて3人の家族が住んでいるようだった。

どうやら俺はオータムの過去から、キョウスケの過去へと戻って来たらしい。
不思議と俺の心には温かいものが込み上げていた。郷愁に似た感覚で、俺はキョウスケたちを観察する。

戦いに明け暮れた男の小さな幸せが、その小さな家には広がっていた　――……

???（後書き）

＜次回予告＞

世界は平和になり、復興も果たした
インスペクター事件から5年が経った頃
戦争の気配は感じられず、人々は平和を享受していた
それはキョウスケも同じ
彼らは平和な世界で祝福の声を上げる

次回、鋼鉄の駄狼Ｒ２「祝福」
シリアスな次回予告だが、次回はコメディータッチだ

今回は短めでした。
次回から「インスペクター事件」から5年後が舞台です。
色々独自解釈が入っていたりしますが、２章の基本は並行世界のキョウスケと戦争を描いていきます。
よろしければ、次回もお付き合い下さい！

蛇足。
ガンダムの新作……なにこれ？
ガンダムっぽくないですね。下手すると打ち切られて、黒歴史にされるのでは？　中途半端臭が凄いすると思いました。

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～祝福～

日本、某所のとある基地。

「アルフィミィちゃんの誕生日パーティーやろうぜ！」

それは、アラドの一言がきっかけだった。

時は新西暦１９３年。

インスペクターの襲来により勃発した戦争は、ホワイトスターでインスペクターの総司令官ウェンドロを討ち取ることにより終結した。

「インスペクター事件」と呼ばれる戦争が残した被害は大きく、多くの人命が失われただけでなく、建築物や食料にまで被害およんだ。

多くの人々の生活は困窮するのは予想に難しくなく、戦争の終結からしばらくの間、地球連邦は復興のために尽力することになる。

専門家の予測では、インスペクター事件以前の状態に戻るためには、早くても3年はかかると予想されていた。

しかし、復興は実際には僅か1年足らずで成し遂げられることになる。

宇宙にあるコロニーの連合が地球連邦へ、全面的な強力を申し出たのだ。

食料、人材、技術提供が惜しげもなく両組織間で行われた。

インスペクターという巨大で共通の敵を相手にして、両者の間には絆が生まれていた。そう、キョウスケは思っていた。

こうして、地球連邦とコロニー連合の間には、横の太いパイプが出来上がる。

やがて、人材交流と称して、窓際で干されていたような老人が、互いの組織の重職を独占していくようになる……。

復興が終わり平穏になると、キョウスケたち兵士にも影響が現れた。

北米のラングレー基地に駐屯していたベーオウルブズは、不死の部隊という戦々恐々とした2つ名のために、各地を転々とさせられる。

栄転と称して繰り返される異動は体の良い厄介払いに他ならなかった。

兵士は平和になれば最低限しか必要なくなる。

戦闘のプロフェッショナルは組織に置いておきたいが、各基地の司令官たちは手元に置きたがらなかった。特に「インスペクター事件」で活躍した、万能宇宙戦艦クロガネの元クルーならなおさらだ。

理由は簡単。

扱いにくいから。

下っ端のように扱えず、かといってある程度に高い給金を与えな

ければならないキョウスケたちのような存在は、軍の上層部にとっては煙たがられるだけである。
だがキョウスケに不満はなかった。
兵士が不要とされるのは、世間が平和になった証拠だ。そう信じていたから。
それに最終的には、隊長であるキョウスケの故郷ということで、ベーオウルブズは日本のとある基地に配属されることになった。

エクセレンの住む町まではかなり離れているが、それでもアメリカや中国よりは格段に距離が近い。家に帰りエクセレンと、戦後に生まれた2人の子供 ―― アルフィミィに会える機会も比例して多くなる。
キョウスケたちの日常は血で血を洗う殺し合いの日々から、新兵の訓練や周辺の警備などの安穏とした業務に追われるものに変わっていた。
キョウスケは戦時中とギラギラした活力とは違う、誰かのために働く充実した日々を送っていた ――……

そんな、インスペクターとの戦争から5年が経ったある日のことだ。
暇な時間を潰すため、何時の間にかベーオウルブズの慣習となった賭けポーカーの席で、アラドが提案していた。

「だからさ、もうすぐアルフィミィちゃんの誕生日だろ？　プレゼント作って、誕生日を祝ってやろうぜ！」

アラドは手持ちのカードを開示しながら言った。役は6のスリーカード。それなりに上々の役だ。

小さな円卓に向かい合って、キョウスケはアラドとタスクと一緒にポーカーに興じていた。

「インスペクター事件」の後、キョウスケたちに出動命令がかかることは、ほとんどなくなった。命令が下るとしても、PTを使った災害救助や慈善事業への協力などがほとんどで、当然のように愛機――ゲシュペンストMk－?の出番はない。

専らの仕事である新兵教育がひと段落つけば、キョウスケたちに回ってくる仕事は少なかった。できることと言えば、緊急時に備えて基地に待機することぐらい。

こうして暇を持て余すたびに、ベーオウルブズはこうして賭けポーカーを開催していた。

「お、いいねぇ。休暇も重なってるし、皆でアルフィミィちゃんを祝おうぜ。ほい、ロイヤルストレートフラッシュ」

「ぎゃーー！」

タスクがテーブルに開けた手札に、アラドが奇声を上げてズッコケた。

銃弾がタスクの前に積まれ、山のように盛り上がっている。キョウスケたちは銃弾を賭け金のチップ代わりに扱っていた。勝負終了後、銃弾の数が最も多い者いに少ない者が食事をご馳走するのがルールだ。

キョウスケとしては少し物足りないが、彼の財布の紐はエクセレンに握られている。一攫千金が可能なギャンブルは今のキョウスケには不可能だった。

キョウスケは自分の手札を見て、テーブルの上に放り投げた。

「ブタだ」

「また役なしですか。今日はついてないですね、キョウスケさん」

タスクがニコニコしながら、戦利品である銃弾を手元に引き寄せていた。ちなみにキョウスケの手元に銃弾は1つも転がっていない。本物のギャンブルならオケラと呼ばれる状態だった。

「で、キョウスケさん、どうします？」

「ん？　どうもこうもないさ」

こんなギャンブル平和なものだ、と思いながらキョウスケは答える。

「アルフィミィの誕生日を祝ってくれるのだろう？　俺には断る理由などない。それにあの子も時々お前たちに会いたがっているしな」

タスクたちとアルフィミィは面識がある。

というか、日本に転属になってから暇で予定がない時にはキョウスケ宅に足を運んで、アルフィミィと遊んでくれていた。そのため、2人はアルフィミィにはかなり懐かれている。

「やあやあ、聞きましたかアラドさん」

タスクが嬉しそうに声を上げた。

「えぇえぇ、聞きましたともタスクさん」

「アルフィミィちゃんが俺たちに会いたがっているみたいだぜ？」

「これは行かねばならねぇな！　会えないなんて許さない！　そうッ、絶対にだ！」

えっ、そこってそんなに強調する所？

アラドのオーバーリアクションに、キョウスケは微笑を浮かべていた。

「さーて、プレゼントは何にすっかなー？」

と、アラド。

「3人でロケットでも手作りしないか？　ほら、家族の写真入れたりして、胸にぶら下げるやつ？」

と、タスク。

タスクが提案しているのは、いわゆるロケットペンダントと呼ばれる物だ。手作りできるものなのかと疑問に思ったが、タスクは手先が器用だから何とかしてしまうかもしれない。

だが1つ疑問が出てきて、キョウスケは訊いた。

「しかし父親のプレゼントが、お前たちと一緒というのはどうなのだろう。いいものなのか？」

「ジョーブ、ジョーブ！」

「ハラキリー、スキヤキー！」

「意味は分からんが、とにかく日本語で話さないか？」

結局、キョウスケは2人と一緒にロケットペンダントを作成し、それとは別に人形を買ってプレゼントすることにした。

ペルゼイン・リカヒイトとか言う、「キモコワ」系で分類される人形を買うことにした（驚くことにアルフィミィはキモコワ系人形が大好き）。

娘の将来が少し心配になるキョウスケであった。

あっという間に、アルフィミィの誕生日はやってくる。

日本の絵里阿町という町にあるキョウスケ宅では、アルフィミィの誕生日パーティーの準備が進んでいた。

キッチンにはエクセレンが立ち、揚げ物やサラダなどの料理を準備している。キョウスケの家は３ＬＤＫとなっていて、キッチンと繋がっているリビングは広く、キョウスケたちが集まっても狭く感じることはない。

キョウスケは食卓用のテーブルで、招いたタスクとアラドと一緒にアルフィミィの様子を見ていた。

アルフィミィはリビングにある４０インチの液晶テレビで、タスクの持ってきたアニメＤＶＤに熱中していた。

『頼む、フィ○ナ！　戦ってくれ！』

『分かったわ、○リコ　――　合体しましょう！！』

敵の軍勢に囲まれて、アニメの主人公たちが、定めとあらば覚悟を決めていた。

子供が感情移入しやすいようにか敵は正体不明の怪獣だった。主人公たちはそれぞれ別の緑色の小型宇宙戦艦に乗っていて、なんとも形容しがたい変形機構で変形し、合体して巨大な緑色の丸っこいロボットが登場する。

頭部の回る３連カメラが印象的だ。

どうでもいいが、タイトルは「エースを目指せ！　～最低野郎たちの大逆襲！～」だった。

ロボットが機銃を振り回して、敵の怪獣を撃破していく……粉々の肉片にならずに爆発あたりがお子様むけアニメなのだろうと、キョウスケは渋い顔でコーヒーをすする。

『ゴー○の　――　オヤっさんの魂が籠っているんだ……！』

主人公が宇宙機雷の密集地に敵をおびき寄せ、機銃で機雷を爆破した。阿鼻叫喚の鳴き声を上げる間もなく、宇宙怪獣は弾け飛んだ。実に卑怯だ。

もっとも、キョウスケたちも戦場に舞い戻れば躊躇せずに使う手段だろうが、お子様に見せるアニメには似つかわしくない気がする。

しかし、このようなアニメに熱中していてアルフィミィは大丈夫なのだろうか？

情操教育上よろしくない気がして、キョウスケはＤＶＤの持ち込み人であるタスクに訊いてみた。

「おいタスク、このアニメはなんだ？」

「今日のことを知り合いに話したら貸してくれたんですよ。アニメならアルフィミィちゃんも見れるだろうから、持ってきたんですけど」

「ほぅ。で、そのＤＶＤの持ち主とやらは誰だ？」

「リュウセイ・ダテですよ」

アイツか……と、キョウスケは頭が重くなるのを感じた。

リュウセイはキョウスケの戦友だが、重度のロボットアニメヲタクで、事あるごとに周囲にお勧めのアニメを押し付けてくる困った男だった。タスクの話を聞いたところ、メールで今日の事を教えたら、テスラ・ライヒ研究所からＤＶＤがわざわざ速達で大量に郵送されてきたそうだ。

キョウスケ宅に持ち込んだのは、その内の１本だと言う。

「リュウセイにも困ったものだな。その分では、まだ恋人はできていないのだろう？」
「らしいですね。レオナちゃんに聞いた話だと、ボンッキュッボンッ、に成長したラトとマイにアプローチ掛けられてるみたいですけど、まぁーーーったく進展がないらしいですね」
「馬鹿か？　馬鹿なのか、アイツは？」

リュウセイの事は嫌いではないが、理解できない部分が多くある。キョウスケがリュウセイの将来に不安を抱いていると、タスクが言い始めた。

「確かに……昔から鈍かったですけどねー、ここまで来ると病気なんじゃないのか？　と思う時がありますよ。何でこれで気づかないのかってね。
でも2人の美人に言い寄られてるって……正直、羨ましい限りっすよ」
「リア充爆発しろッ！！」

タスクの横に座っていたアラドが突然大声を上げた。

「リア充なんて大爆発しろ！！」
「……アラドはどうかしたのか？」

小声でタスクが耳打ちしてくる。

「なんでもゼオラと喧嘩したらしいですよ。いい加減、パインサラダ飽きたって言ったら、キレられて平手打ちを喰らったらしいです。それが昨日で……今も電話もメールも着拒中らしいっす」
「大変だな、アラドも」

「しょーまっこと、ありえんぜよ！」

アラドは意味不明で悲痛な叫びを上げると席を立ち、アニメを見ているアルフィミィの方に歩いていく。

「怪獣だぞー、食べちゃうぞー」とアルフィミィにちょっかいを出して遊びだした。アルフィミィは転がっていた俺が新聞紙で作った剣「鬼蓮華」を拾うと、きゃっきゃっと笑いながら怪獣アラドをしばき始める。

「まぶいえぐりですのー」と新聞紙の先が怪獣の腹を直撃し、「げふっ……！」とアラドが本当に痛そうな声を上げ、一瞬で勝敗は決した。

アラドが仰向けに倒れると、アルフィミィはアラドの腹の上に腰を下ろして、新聞紙で追い打ちをかける。

しばかれるアラドの瞳は何処か空虚だった。

「寂しいんすね」

「そっとしておいてやるか」

キョウスケたちは友情を発動して、アラドに生暖かい視線を送ってやることにした。「痛いねん」と悲鳴が聞こえたような気がするが、それは空耳だ。気のせいだったら気のせいだ。

ボコスカ。

そんな擬音が止まないリビングに、エクセレンが料理を盛った大皿を運んでくる。

「あらあら、そんな汚物触ると手が汚れるでしょ。アルフィミィちゃん、汚物を触った手はどうするのかしら？」

2人のじゃれ合いを見ていたエクセレンが毒を吐いた。

アラドはショックを受けていたが、

「おぶつはしょーどくですのー」

アルフィミィは笑いながら返事をする。

元気よく立ち上がると手洗い場の方に走って行った。その際、アルフィミィの小さな足がアラドの股間を容赦なく踏みつけたのを、キョウスケは見た。

アラドは顔を青くして、大事な所を庇いながら横たわっている……哀れ。

「うぅ……酷い……エクセ姐さん、ドSっすか？」

「どっちもイケるわよん？」

「聞かなきゃよかった……あと、すっげぇ良い笑顔っすね」

「あら、ありがと？」

エクセレンは満面の笑みを浮かべていた。

アラドは毒気を抜かれたのか、立ち上がると頼りない足取りで手洗い場に向かう。

入れ違いでアルフィミィが戻ってきた。

「ママー、おなかすいたですのー」

「はいはい、もう準備できたわよ。アルフィミィちゃんは、ここに座りましょうねー」

食卓に用意された子供用の椅子にアルフィミィは座らされる。

食卓にはサラダ、揚げ物、焼き物と――普段の食事では出ないような豪華なメミューが顔を揃えている。取り皿と箸も用意されていて、アルフィミィ用のジュースや大人用のワインなども用意されていた。

しかし、誕生パーティーの主役である、あのメニューは見当たら

ない。

「けーきがないですのー」

「うふふ、すぐに出すわね」

誕生日と言えばケーキ。全国のお子様にとって、間違いなくケーキは誕生日の醍醐味の1つと言えるだろう。

エクセレンが冷蔵庫から取り出したのは、生クリームとイチゴがトッピングされたオーソドックスな物だった。ケーキを見たアルフィミィの目に星が宿る。丸々ワンホールのケーキの上には小さなろうそくが4本立っていた。

「あ、もう始まってるっすか？」

手洗い場から戻ったアラド。

エクセレンが彼に向かって言う。

「今から始めるわよ。カーテン閉じて、電気消してくれないかしら？」

「了解っす」

アラドが言われるままにカーテンを閉じ、電気を消す。電燈の光に慣れていたキョウスケたちの目の前が闇に包まれた。漆黒と言うほど暗くはなく、夕闇よりは暗い。

暗くなった食卓でエクセレンはマッチを使い、ケーキ上のろうそくに火を灯した。

優しい明るさが、暗がりの中でキョウスケたちを照らす。

アラドが席に着いたの確認し、キョウスケとエクセレンは目配せをした。

「せーの　――」

エクセレンの掛け声でキョウスケたちは銘々に声を上げる。

「ＨＡＰＰＹ　ＢＩＲＴＨＤＡＹ　ＴＯ　ＹＯＵ　――」

流暢な発音でエクセレンが、

「ハッピー　デイ　バース　トゥーユー　――」

何処か間違えている文句でアラドが、

「ハッピー　バースデイ　トゥーユー　――」

淀みない日本語でタスクが、

「――　ハッピー　バースデイ　ディア　アルフィミィー」

愛おしそうにアルフィミィを見つめながらキョウスケが、娘の４歳の誕生日を祝福する。

「「「「ハッピー　バースデイ　トゥーユー」」」」

最後には４人の声が重なり、拍手がアルフィミィへと送られた。

暗い室内でろうそくに照らされてアルフィミィの顔は赤らんで見える。もしかすると、本当に照れていて顔を赤くしているのかもしれない。

アルフィミィはキョウスケたちの祝福に、天真爛漫な笑顔を見せる。

「ありがとーですのー」
「はい、よく言えたわね。流石、私とキョウスケの娘よねー」
親バカ全開なセリフをエクセレンが言った。
「じゃあアルフィミィちゃん、ろうそくをふーして消しましょうね」
「うん。ふーーーー」
ろうそくの火に小さな口から息が吹きかけられる。
勢いが弱かったのか、アルフィミィの傍にあった2本のろうそくは消えたが、遠くにある2本は残った。アルフィミィはテーブルに身を乗り出して、もう1度息を吐く。今度はろうそくの火が4本とも消えた。
「アルフィミィちゃん、4歳の誕生日おめでとう！」
「いやー、あっと言う間に大きくなっちゃったな！　これからもすくすく大きくなるんだぜ！」
「タスクお兄ちゃん、アラドお兄ちゃん、ありがとーですのー」
火が消えて真っ暗なリビングではタスクたちとアルフィミィの明るい言葉が交わされていた。
キョウスケは無言のまま席を立つ。タスクたちがアルフィミィの気を引いているうちに、彼は隠しておいた誕生日プレゼントを取りに行った。
エクセレンと一緒に買った「ペルゼイン」とかいう名の人形と、タスクたちと一緒に作ったロケットペンダントだ。
銀色のハート型のロケットペンダントで、首にかけれるように細いチェーンが付いていた。ロケット部分を開けば、中には小さな写真を収納できるスペースがある。
キョウスケたちが賭けポーカーの時間を削って、1か月がかりで

少しずつ仕上げたペンダントだった。

「喜ぶといいがな」

娘の喜ぶ顔を想像すると、鉄面皮と表現されるキョウスケの表情も柔らかくなるというものだ。キョウスケはロケットペンダントを見て、微笑を浮かべていた。

ペンダントの中にはまだ写真は入っていない。

今からデジカメで写真を撮り、ペンダントに入るように調整するつもりだった。

キョウスケはプレゼントとデジカメを片手にリビングに戻り、スイッチを押してリビングに明かりを戻した。

アルフィミィの表情が目に飛び込んでくる。楽しそうに笑いながら、エクセレンやタスクたちと話している。

――あぁ、俺は今、幸せなのだな

胸に込み上げてくる温かさを感じて、キョウスケは確信する。自分は幸せ者だと。そして思う。目の前の暖かで、心安らぐ光景がいつまでも続けばいい――いや、絶対に続けさせてみせる、と。

キョウスケは口元を緩ませて、アルフィミィに近づいた。

「アルフィミィ、誕生日おめでとう。プレゼントを用意したのだが、受け取ってくれるか？」

「あ、ぺるぜいんですのー。わーい、ありがとーですの」

キョウスケが持っていた人形を見つけ、アルフィミィは大喜びする。人形は鬼の面をつけたロボットを2頭身化させた少し不気味な

ものだったが、不思議なもので、アルフィミィが抱いていると可愛らしくも思えてしまう。
十分すぎる満足感を味わいながら、キョウスケはもう1つのプレゼントを差し出した。

「これもやろう」
「？　パパ、これはなんですのー？」

初めて見るロケットに興味を惹かれたようで、受け取ったロケットを弄り始める。

「これはロケットペンダントというのだ。ほら、ここが開くようになっているだろう？」
「あ、すごーい、ひらいたですの！」

ロケットを開くことに驚きの表情を見せるアルフィミィ。

「ここには写真を入れることができるんだ」
「しゃしんですの？」
「そうだ。ここにパパとママと写った写真を入れよう。そうすれば、いつでもパパと傍にいれるからアルフィミィも寂しくないだろう？」
「うんですの！」

キョウスケは持っていたデジカメを起動させた。

「アラド……いや、タスクに頼もうか？　すまないが、どっちか、俺たちの写真を一枚撮ってもらってもかまないだろうか？」
「いいですよ。アラドだとピンボケになりそうだし、俺が撮りますよ」
「あ、ひっでーな。俺だって写真ぐらい撮れるっつーの」

タスクの言葉に反論していたが、アラドは身体能力こそ高いのだが、それ以外の事を任せるとなると不安が残る。逆にタスクは身体能力こそ高くないが、細かな作業が得意だしセンスもいい。

記念の写真ということもあり、綺麗にとってもらいたいとおうのがキョウスケの本音だ。

「すまんな、アラド。今回はタスクに頼むことにするよ。お前にはまた今度手伝ってもらおう」

「そっすか。ま、キョウスケさんがそう言うなら、俺は別に構わねぇすけど――」

アラドから納得の言葉が出切る直前だった。家の呼び鈴が鳴ったのは。

誰かがキョウスケの家を訪ねて来たらしい。アルフィミィの誕生パーティーに招いたのはアラドとタスクだけだ。それ以外に訪ねてくる人物に、キョウスケに心当たりはなかった。

「俺が出よう。タスク、写真を撮る準備をしておいてくれ」

「分かりました」

タスクにデジカメを渡して玄関口へ足を運ぶ。が、ドアの向こうに人の気配はなかった。扉の覗き窓から外を窺ってみたが、人の姿は見えなかった。

キョウスケは不審に思いながらも、扉を開けて外を確認することにした。

外に出てみたが、やはり人の姿はない。普段と変わらないキョウスケ宅の入り口があるだけだった。

「子どもの悪戯か……ん？」

家の中に戻ろうとしたとき、キョウスケは足元に1枚の紙が落ちていることに気付いた。
少し大きめの白い紙だ。コピー用紙のように見える紙だった。キョウスケの記憶では、タスクたちが訪ねてきたときには何も落ちていなかったはずだ。

――誰かが落としたのか？

キョウスケはその紙きれを拾い上げた。
紙には新聞の文字が切りばりされていた ――

T I M E T O C O M E

――不揃いな大きさの文字が、紙きれにはられていた。
ただ、それだけだ。
裏面には何もはられていないし、書かれてもいない。
ただ、その英語しか変わった点は紙きれにはない。

「……なんだ、これは？」

紙きれの落とし主の考えがキョウスケには理解できない。悪戯にしたって性質が悪い。脅迫文めいた文章だ。それとも最近の子どもの悪戯は、ここまで手の込んだものになってきているのだろうか？
だが、子どもの悪戯でないとしたら？
誰が？
何のために？
キョウスケには理解できないし、こんな紙を置いて行かれる原因も検討がつかない。
恨みなら、戦場で山のように買っている。
しかし戦場で買った恨みなら、こんな子どもじみた仕返しで済むはずがなかった。殺った、殺られたが、戦場で最もポピュラーな恨みの理由だからだ。
キョウスケに報復しようとする者がいるのなら、有無を言わさずに殺しに掛かってくるはずだ……

――やはり、ただの悪戯か……？

キョウスケはそう結論すると、紙きれを潰して丸め、家の中のクズカゴに捨てた。
戦争が終わってもう5年だ。
今更、キョウスケに復讐しようとする者がいるとも考えにくい。
世界は平和になったのだ　――　自分に言い聞かせるように、キョウスケは呟いていた　――……

この後、キョウスケはリビングに戻り、エクセレンとアルフィミィと一緒に写真を撮った。
写真撮影後は、豪華なメニューが並んだ食卓を5人で囲む。
アルフィミィを寝かしつけた後も、キョウスケたちは夜遅くまで楽しく団欒し、穏やかに過ごした。
平和だ……キョウスケは思う。
世界は平和になったのだ。自分もその中で、やっと手に入れた小さな幸せに、身を委ねてもいいのだ、と。

しかしキョウスケの胸に、一抹の不安も胸に残っているのも事実。
未来に何が起こるかなんて、神にしか分からない。
それがどうした。キョウスケは思う。
例え何者が立ち塞がろうと撃ち貫くのみ。
今までだってそうしてきた。
きっと、これからもそうするだろう　――　彼の家族と友人を守るために。

後日、縮小処理した写真が出来上がる。

キョウスケはそれをアルフィミィのロケットペンダントに入れてやった。
アルフィミィは満面の笑みで礼を言ってくる。
愛しい娘の笑顔を、キョウスケは絶対に忘れることはないだろう
――……

休暇が終わり、キョウスケは基地へ戻ることになった。
キョウスケは後悔することになる。

――ＴＩＭＥ　ＴＯ　ＣＯＭＥ――

何故、この文字の意味をもっと考えなかったのか、と。
何故、あの時にすぐ動かなかったのか、と。
深く、深く後悔することになる　――……

悪夢が始まる

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～祝福～（後書き）

＜次回予告＞

贈賄、脱税、汚職……どれをとっても世間では悪とされ
それらを全てひっくるめて腐敗で括る
澄み過ぎた水に魚は住まず、世界は徐々に腐り始めていた
その先に待つのは自滅か、それとも……？

次回、鋼鉄の駄狼Ｒ２「影」
光があるから影が映える、戦争があるから平和が栄える

次回からドンドンシリアスになる予定です。
この世界でのアルフィミィは、キョウスケとエクセレンの子どもという設定にしています（原作では違います）。
４歳児ということで、文章をほぼ全てひらがなにしてあります。
読みにくかったらすいません。

久しぶりにパロネタを使いまくりました。
モトネタ分かるかな？

感想・誤字脱字報告・批評大歓迎！
第２次ＯＧが発売されるまでに、本作をある程度形にしたいものです。
ではではノシ

転機。
それは、いつも唐突にやってくる。

「インスペクター事件」から5年が経った頃、軍の上層部は腐り始めていた。

軍の上層部での重要ポストの独占や備品の横流し、贈賄が日常的に繰り返されていて、それは末端の兵であるキョウスケたちが子耳に挟む程、頻回に繰り返されるようになっていた。
不正である。
しかし軍部の末端であるキョウスケたちは、決して異を唱えたりはしなかった。
不正は戦時中から行われていたし、キョウスケたちもそれを薄々感じ取っていたからだ。それに上は下の声を拾い上げたりしない。抗議しようとも権力の前に握りつぶされるのがオチだ。
いつしか不正を容認する空気が軍全体に広まり、ぽつぽつと出始める不届きな上役の存在が、そういった行為をさらに加速させていく。
軍は腐っていく。
もはや腐敗と言ってもいい状況が続く。
それは平和の代償なのか、それとも副作用なのか……キョウスケにとっては、どちらでも良いことだったが。

エクセレンとアルフィミィ、そして仲間たちと過ごせる日々に満足していたから。

不正を知り、何もしないのは怠慢だろうか？
知らず知らずのうちに、平和の持つ裏の顔に毒されているのかもしれない。
幸せな日々が続くのなら、自身が毒に冒されていても構わない……キョウスケでさえ、そう思うようになっていた。

アルフィミィの誕生パーティーと休暇が終わり、キョウスケは所属している基地に戻っていた。

「ロイヤルストレートフラッシュ、俺の総取りだ」

キョウスケが手持ちのトランプを開示した。
今日も今日とて暇なもの……新兵の訓練が終わった後の退屈を、キョウスケはタスクたちと恒例の賭けポーカーで潰している。小さな机の上にはダイヤのA、K、Q、J、10が顔を揃え、タスクたちが顔をしかめる。
役ができていたか不明だが、タスクたちはカードを投げ捨ててしまった。

「キョ、キョウスケさん、どうしたんですか？」
「今日は馬鹿ヅキっすね！」
「ふっ、まぁな」

キョウスケはタスクたちから配当の銃弾を受け取る。
キョウスケたちの賭けポーカーでは銃弾をチップ代わりにし、ゲーム終了時に銃弾を最も多く持っている者が食事をご馳走になる権利が発生する。要するに勝てばただ飯にありつける、その程度の平

和な設定のギャンブルだ。
机のキョウスケのエリアには既に銃弾が小山を作っていた。
銃弾の総数は限られているので、反比例してタスクたちの銃弾は少ない。
戦況は、リアルなギャンブルでないのが悔やまれる程にキョウスケの大勝だった。
ワンゲームを終え、仕切り直しとばかりにタスクがカードをシャッフルし、配布しながら訊いてきた。

「何か勝つ秘訣でも持ってるんですか？」
「いつもボロ敗けなのに、今日はボロ勝ち。ほんと、キョウスケさんって極端っすねー」

アラドが配布されたカードを確認し、少ししょげた様子で言った。
「嫌味か？　確かに、今日は出来すぎているが、これも俺の実力だ」

微笑でアラドに返事をすると、手札に視線を落とす。
Aがハート、ダイヤ、クラブ、スペード……と、4枚のエースが雁首揃えてキョウスケを出迎えてくれた。
残りの1枚はダイヤの3。それを机の中央に置かれたカード山と取り換えると、キョウスケたちの賭けポーカーでは採用されている最強のワイルドカード　――　ジョーカーが手に入る。
5カード。あっという間に、必勝で最強の役が出来上がっていた。

「ちくしょー、このままじゃただ飯奢らされちまうぜ！」

役が出来上がらないのか、アラドが手札をポンポン変え続ける。

「キョウスケさん、天に還る時が来たのだ」

タスクは手札を交換し終え、ポーカーフェイスはどこ吹く風か、勝ち誇った顔でキョウスケを見ていた。
どやっ。
と言わんがばかりの勝ち誇った顔だ。相当に強い役が出来上がったのだろう。
しかし5カードの前にはどんな役も必敗である。今日のキョウスケは絶好調だ。どんな相手だろうと敵ではない。
ただ ――
――こういう時は、大概何かあるものだが……
まぁ、いい。
どうせ杞憂だ、とキョウスケはタスクのマヌケ面を期待しながら、声をかける。
「準備はいいか？」
「俺はＯＫです」
「……ちぇ、俺もいいっすよ」
タスクは自信ありげに、アラドは渋々カードの開示を飲む。
「では、俺からオープ ――」
勝利を確信してカードに手をかけた。
しかし、キョウスケの言葉は突然の放送によって遮られる。
何事か？　とキョウスケはスピーカーが設置されている天井を見上げた。

放送は隊員の呼び出しなどで使われる類のもので、緊急出撃を告げたりするものではない。
大事ではないだろう。
が、キョウスケは手を止めて、放送に耳を傾ける。

『キョウスケ・ナンブ大尉、およびベーオウルブズはすみやかに司令室まで出頭せよ。繰り返す。キョウスケ・ナンブ大尉および――』

「呼び出し？　俺たちがっすか？」

アラドが首を傾げていた。
キョウスケにも呼び出しを喰らうような心当たりはなかった。
タスクも同じようで、不思議そうに訊いてくる。

「俺たち何かやらかしましたっけ？」
「さぁな」
「案外、この賭けポーカーのことだったりとかかな……？」

そんな馬鹿な。今は自由時間だ。基地内に待機しているのだから、キョウスケたち何をしようと余程のことでなければ許される。
キョウスケは見当違いなアラドの推測を否定して、呼び出しの理由を思い起こしてみた。
思い当たらなかった。キョウスケは普段の仕事は真面目に取り組んでいる方だ。結果もアラドと違い優秀で、通常業務がうんぬんで呼び出されるとは考えにくい。

「ここに居ても仕方ないな。呼び出された以上、出張るしかあるまい」
「そっすね！」

アラドが嬉しそうに答えた。余程手札が弱かったのだろう。

「あーあ、勿体ない……」

逆にタスクは落胆していた。相当強い手札だったのだろう。

「それはこちらのセリフだ」

「え？　キョウスケさん、いま何か言いましたか？」

「何でもない。お前たち、行くぞ」

やはり勿体ないのか、見せても今回の勝負が流れるのは明白なため、キョウスケは勝利濃厚の役を机に伏せた。

タスクたちに見せてもいいが空しいだけだ。

棚から降ってきたボタモチを、受け止められずに地面に落としてしまった……不意にしてしまった幸運のせいか、キョウスケには、5枚のカードに黒い影がかかっているように見えた。

キョウスケはタスクたちを連れて、呼び出された司令室へと向かう。

●

キョウスケたちは、基地の司令室へとやってきた。

指令室には司令官とオペーレーターが常勤しており、通常は日本の周辺空域の監視などを行っている。

日本の安全を守る。それが指令室業務のお題目だが、世界が平和になってからは大した事件も起こらず、ただ画面の前に座って交代時間が来るのを待つだけ……そんな日の多い仕事だ。

異常がなければ、ただ呆けているだけで仕事が終わる。少なくともこの基地の司令室はそういう所だと、キョウスケは記憶していた。

が――

「所属不明機、日本領空を侵犯しています」

オペレーターの声が耳に届く。

今日の司令室には緊迫した空気が流れていた。

司令室のモニターには日本地図が表示されており、数機の所属不明の輸送機が侵入しているのが分かる。

「やっと来たか」

基地の司令官が、不機嫌そうな声でキョウスケたちを出迎えた。

司令官はキョウスケたちを一瞥だけすると、すぐにモニターに視線を戻す。

日本空域に侵入してきた不審機――司令官がキョウスケたちを呼びつけたのは、画面の不審機が絡んでいるとみて間違いなさそうだった。

「領空侵犯ですか？」

「そうだ。既に警告は発しているのだが、一向に止まる気配を見せぬ」

司令官は答えた。

気に入らない、といった表情でキョウスケを睨みつけてきた。キョウスケは「何か？」と訊いたが、司令官は質問に答えることなく

続ける。

「通信にも応じない……いや、一言だけ要求はあったのだ」

「不審者は何と言ったのですか？」

司令官は、やはり不機嫌そうな表情を崩さなかった。

不審機の領空侵犯や通らない警告に、司令官は苛立っている。その苛立ちをキョウスケにぶつけるのは如何なものか？　だがキョウスケは慣れたもので、刺すような司令官の視線に顔色1つ変えない。

「インスペクター事件」後、ベーオウルブズは邪険にされ続けてきた。キョウスケが受けてきた理不尽に比べれば、司令官の不機嫌ぐらい可愛いものだ。

鉄面皮のキョウスケに、司令官は吐き捨てるようにして言った。

「……ベーオウルブズを　――　キョウスケ・ナンブを出せ。それが不審機からの要求だ」

「俺たちを？」

「だから貴様たちを呼んだのだ。おいっ」

鼻息荒く答えると、司令官はオペレーターに通信を繋げるよう命令する。

「……」

「キョウスケさん、心当たりありますか？」

「いや……」

作業に入るオペレーターを尻目に、キョウスケとタスクは小声で話す。

「アラドはどうだ？」

キョウスケがアラドに訊いた。

「分からねぇっす。そもそも、領空侵犯って……この平和なご時世に？　メリットがあると思えねえんだけど」

「全くだ。しかし相手は俺たちを知っているようだ……一体、誰が？　何の目的で……？」

ただの愉快犯で済ませることができれば、どれだけ楽になることか。

しかし不審機はこちらの警告を無視し、領空に入ってきている。警告を無視し続ければ、不審機は軍と敵対することになるだろう。さらには軍側に要求を出している。

不審機には軍を敵に回しても果たすべき目的があるに違いない。ただ妙なのは、その要求である。

軍の末端に過ぎないキョウスケたちを呼びつけることに、何の意味があるのだろうか？

――この感じ……あの時に似ている

アルフィミィの誕生パーティーの時、キョウスケは妙な紙きれを拾ったのを思い出す。

「ＴＩＭＥ　ＴＯ　ＣＯＭＥ」――紙にはそう書かれていた。

杞憂だと思っていた違和感が首を起こしてくるような……胸に粘り付くような不安を、キョウスケは感じていた。

「不審機より入電、繋ぎます」

オペレーターが報告する。
画面に【ＳＯＵＮＤ　ＯＮＬＹ】と文字が表示される。さすがに顔をさらすつもりはないらしく、音声のみの通信だった。

『久しぶりだな、ベーオウルフ』

顔も分からない通信相手が言う。聞き慣れない男の声……いや、キョウスケが以前に耳にしたことがある男の声だった。
だが誰だったかは思い出せない。
のど元まで答えが出かかっているが、どうしても出てこなかった。

「誰だ、お前は？」
『おいおい、ご挨拶だな。一緒に戦ったこともある仲じゃないか』

声の主はどうやらキョウスケの戦友らしい。
長い間共闘したことのある仲間なら、キョウスケが声を忘れるはずはない。だが1度か2度しか戦ったことのない者なら話は別だ。
声の主の名前は出てこなかった。

『まぁ、いいさ』

声は鼻で笑うと、続けた。

『また後で会うことになるだろうからな』
「どういう意味だ？　いや……それ以前に、お前の目的は何だ？」
『知れたこと　――』

探りを入れるキョウスケに対して、声の主は飄々と答える。

『――　どうだベーオウルフ、あの時の俺の言葉通りになっただろう？』
「なんだと？」
『流れがなければ、水たまりの水は腐る。
世界は平和になったが、世界は次第に腐り始めた。
やはり戦争は世界に必要なのだ』

男の答えを、確かにキョウスケは聞いたことがあった。
キョウスケの直感が告げる。キョウスケの記憶が確かなら、声の主はたった1度だけ彼と共闘し、ベーオウルブズを窮地から救ってくれたことがある……そんな男は1人しかいない。

「まさか……」

キョウスケは男が誰なのか思い出し、

『だから、俺　――　俺たちが戦争を起こすのさ、これがな』

この言葉で確信した。
間違いない。声の主は「インスペクター事件」の時、ホワイトスターで共に戦ったあの男だ。

「アクセル・アルマー……か？」
『……ふっ、貴様には平穏など似合わん。血と硝煙の匂いの方がお似合いだ　――　ベーオウルフ、戦場で待っているぞ』
「不審機、一気に加速しています！」

オペレーターが声を荒げた。

「向かっているのはこの基地ではありません！　これは……市街地に向かっています！」
「おのれ奴らめ！　一体、何をするつもりだ！？」

司令官の顔に焦りが見える。
領空侵犯した輸送機が市街地を目指している　――　考えうる最悪の事態の1つだった。
危険を冒して侵犯してきている以上、輸送機が武装していないとは考えにくい。加えて、画面に捉えられている輸送機はかなり大型のものだ。
機銃や爆弾どころか、PT（バーヲカルバー）が2，3機……いや、それ以上に格納されている可能性が高い。
しかもアクセルは戦場と言っている。
市街地を、だ。

『我々はシャドウミラー。人類の未来のため、永遠の闘争を実現する者たちだ』
「待て！　アクセル！」

キョウスケの叫びに、アクセルは笑い声で返すだけだった。
アルフィミィの誕生パーティーの時、家の前に落ちていた1枚の紙きれ。書かれてた言葉の意味が、キョウスケにもやっと理解できた。
杞憂ではなかった。あれは、アクセルが置いていったのだ。
おそらくはキョウスケの警戒心を煽り、その様子を楽しむために。

『ＴＩＭＥ　ＴＯ　ＣＯＭＥ　――　時は来たのさ、これがな』

通信はそこで途切れた。
司令室のざわめきが増していくのが分かる。

画面上に捉えられた不審機の編隊が、速度を上げて市街地へと向かっているからだ。何の変哲もない昼下がりの午後に、避難勧告や警報が発令されているわけがない。

市街地には人が溢れているはずだった。

「アクセル……なのか？　本当に……？」

何か、性質の悪い冗談だと思いたかった。

キョウスケの記憶では、アルセルの所属していた部隊名は「ＥＦＡ特別任務実行部隊」――確か、表舞台にあまり顔見せず、極秘裏でに与えられた任務を遂行する部隊である。

影――シャドウミラーはその部隊の通称……それ位なら、キョウスケだって知っている。

汚い仕事が多く回ってくる部隊、軍の裏側を最もよく知る暗部のような部隊のはずだ。

「インスペクター事件」後も、アクセルがシャドウミラーに所属し続けていたのなら、彼は軍の汚職や腐敗をまじかで見続けたことになる。

――時は来た……だと？

裁きの時が、か？

ふざけるな、とキョウスケは思う。

汚職に手を染めていたのは軍の上層部のごく一部にすぎない。それを見逃してきたキョウスケたちも同罪かもしれない。ならキョウスケたちの所に来ればいい。

軍を粛清すればいい。

武装した輸送機で市街地に向かうなど、不要な混乱を招くだけで、

百害あって一利なしだ。

「シャドウミラーの目的地が判明！　到達予測ポイントは……絵里阿町です！」

「なっ……！？」

衝撃がキョウスケの中を駆け抜けた。

絵里阿町はキョウスケが家を構え、エクセレンとアルフィミィが住んでいる町の名前だった。

戦争は人類にとって必要悪　――　アクセルが言っていた言葉だ。

一度やると決めたなら、あの男は実行するだろう……懸念は確信に変わる。

「キョウスケさん！？」

司令室から駆け出したキョウスケに、タスクの声が背中から届く。

「来い、お前たち！　アクセルを止めるぞ！」

「りょ、了解！」

衝動的に体を突き動かすキョウスケに、タスクたちが慌てて付いていく。

強い危機感で全身がじっとりと汗ばんでいた。

――　エクセレン、アルフィミィ……無事でいてくれ！

キョウスケたちは、愛機の楔を解くために格納庫へと急いだ。

司令官は唖然としていたが、すぐに我を取り戻し、基地内全域に非常事態警報が発令された。
基地全体が慌ただしくなり、シャドウミラーの追撃部隊が急ぎ編成される。輸送機に地球連邦の量産型ＰＴであるゲシュペンストＭｋ－？が搭載されていった。

キョウスケの愛機――ゲシュペンストＭｋ－？も同様だった。格納庫の奥の奥に、押し込まれていたＭ－？を引きずり出してくる。
戦闘だけが取り柄の深紅のＰＴが、キョウスケの目の前で輸送機へと運び込まれていく。
輸送機への搭載が遅い。作業員たちは突然の状況のためにに混乱していた。
１分１秒が惜しい状況で、キョウスケは出撃準備が整うのをじっと待つ。
待機時間がとても長く感じられた。
やがて準備が整い、キョウスケたちを乗せた輸送機に発進許可が下りた。

「ベーオウルブズ、出撃（で）るぞ！」

アクセルを追って、輸送機が滑走路から離陸する――

●

絵里阿町へと向かうシャドウミラーの輸送機の中で。

「隊長、何故ですか？」

１人の美女がアクセル・アルマーに質問していた。

美女のプロポーションは抜群で、出る所は出て、引っ込む所は引っ込んでいる。さらに流麗なロングヘアーに端正な顔立ちをしている。道ですれ違えば、振り返らない男は存在しないだろう。

それほどの美貌を持った女が、軍用の輸送機の中にいた。

だが違和感はない。

美女の持つ無機質で機械的な雰囲気が、武骨な輸送機の格納スペースによくマッチしていた。

「何故、とは……どういう意味だ、Ｗ１７？」

質問を受けたアクセルが美女 ―― Ｗ１７に逆に訊いた。

「何故、我々の存在を明かすようなことをするのです？

この作戦は奇襲です。作戦の成功率は、我々の存在が発覚した時点で減少します。

ＡＳＲＳも使用せず、所属も明かす。これによるメリットは何なのですか？」

表情１つ変えず、Ｗ１７は淡々と口を動かした。

「メリット？　そんなもの、あると思うのか、貴様は？」

「いえ……」

「そうだ。貴様の返答は正しいぞ、Ｗ１７。

今回の俺の行動は、作戦成功率においては肯定的な意味は１つも持たないだろう」

はっきりと、アクセルは言い切った。

輸送機は目的地である絵里阿町に近づいている。彼の周りではシャドウミラーの兵が各々の機体に搭乗し始めていた。その多くは「アシュセイヴァー」と呼ばれる機体の量産型のようだ。

輸送機の格納スペースで、口を動かしているのはアクセルとＷ１７だけだった。

兵たちは皮膚１つ見える隙間もないパイロットスーツを着ている。全員がＷ１７と同じ機械的な雰囲気を醸し出し、黙々と動き続けている様は実に異様だった。

Ｗ１７だけが作業に加わらず、アクセルに質問を繰り返している。

「では、何故です？」

「確かに作戦にメリットはない。だが軍は俺たちの存在を知った。奇襲で敵を下すより、俺たちの存在を敵が認識し、かかってくる方が歯ごたえがある。

それに、正面からぶつかって勝った方が、俺たちの名が効率的に広まるだろう？」

「それは、そうかもしれません」

Ｗ１７は首を縦に振っていた。

策など弄さず正面からのガチンコで敵を倒す。その方がシャドウミラーの名は印象強く、巨大な脅威として刻まれるだろう。奇襲で勝利するよりも、だ。

「だが見せしめは必要だ」

アクセルは渋い顔で唸っていた。

「俺たちの覚悟と力を示すために。俺たちは町を焼くのだ、これがな。
鬼畜、外道と罵られようとも、俺たちが理想とする世界の実現に必要なことだからな」
「はい、理解しています」
「ならば無駄口を叩くな。もうすぐ、出撃だ」
「はっ」

W17は敬礼を返すと、登場する予定のロボットの元へと走った。
彼女の前に用意されていたのは量産型のアシュセイヴァーではなかった。
ロボットの全長はアシュセイヴァーの約2倍だ。天使のような羽を持ち、純白と桃色折り合わせたドレスに身を包んだ、女性型の特機が彼女の機体のようだった。
コックピットを開き、中に乗り込もうとする。
しかしW17は、ハッチに足をかけた所で、思い出したようにもう一度質問した。

「隊長」
「なんだ?」
「何故、あの時、キョウスケ・ナンブの家へ手紙を置いてきたのですか?」

W17が言っているのは、「TIME TO COME」と書かれた紙のことだ。

「あのような手紙は、敵の警戒心を煽るだけだと思いますが……?」
「さて、な。正直なところ、俺にもよく分からん。やりたかったからやった……と言ったところか」

「理解しかねます」
「Ｗ１７。やはり、貴様は人形だな」
「……」
「全ての行動に理由づけなどできん。時には感情や直感で動く。それが人間というものだ、これがな」

「覚えておけ」とＷ１７の質問に区切りをつけるアクセル。
「了解」とハッチを閉じ、コックピットに引き込もるＷ１７を確認し、彼も自分の機体の元へと足を運んだ。
青い特機だった。
機動性重視のシュセイヴァーとは真逆で、丸みを帯びた厚い装甲で全身を覆っている。装甲の厚みは、まるで鍛えられた空手家の筋肉のように肉厚だ。射撃用の兵装は一瞥しただけでは確認できない。見るからに馬力のありそうな、格闘戦仕様の特機だった。
特徴的な髭が生えたその特機の名前はソウルゲイン。
シャドウミラー特別部隊隊長であるアクセルのために開発された、専用のスーパーロボットだった。

「さぁ、ベーオウルフ。俺を見事止めてみろ」

１人ごとを呟いた後、アクセルはソウルゲインに乗り込む。

輸送機は、間もなく絵里阿町に到着しようとしていた　――……

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～影～（後書き）

＜次回予告＞

倒壊した建物
飛び交う銃弾と悲鳴
そしてむせかえるような真っ赤な炎
炎はすべてを焼き尽くす、輝かしい過去も、希望ある未来も
だが炎は無限ではない
守って見せる、絶対に……男は火をかき消す風となり、戦場に舞い戻る

次回、鋼鉄の駄狼Ｒ２「炎」
正義のための犠牲は、無駄ではないというのか？

意見・感想・誤字脱字報告大歓迎！

次回からアクセル隊長が登場します。
アホセルではありません、アクセルです。ややキャラ崩壊気味かも……？　こんなのアクセルじゃないと思われる方もいるかもしれません。ファンの方ごめんなさい。

次回から残酷シーンが増えます。ご注意ください。
ではでは、ノシ

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～炎～（前書き）

＜注意＞
この話以降、第２章では残酷描写が強くなる予定です。
これはひどい。なんでこんな展開に……と思われる方も多いかとは思われますが、生暖かい目で見守ってくれれば幸いです。
では、どうぞ。

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～炎～

日本、絵里阿町。

エクセレンは、アルフィミィを連れて買い物に出かけていた。
今日は近所のスーパーで特売をやっていた。生活必需品と食料品の買い出しのため、散歩がてらアルフィミィと出かけたのだ。両手には物が大量に詰まったレジ袋が持たれている（アルフィミィにねだられたお菓子入り）。

「いー天気ねー、アルフィミィちゃん」
「はやくおかしたべたいですのー」

住宅街の通路を歩くエクセレンの前を、アルフィミィが元気に駆けていく。とてとてとて、と小さな歩幅でエクセレンから離れ、ある程度離れると不安になるのか、踵を返して彼女の元に戻ってくるのを繰り返していた。
「はいはい、家に帰ったらねー」とアルフィミィの要求に応えるエクセレン。
時刻は既に昼下がりの午後で、空には雲一つない蒼天が広がっていた。俗に言う日本晴れだ。

「今日も平和ねー。帰ったら、パインケーキでも焼こうかしら　――ん？」

空を見上げるエクセレンの視界の端に、見慣れない物が映り込ん

だ。
軍用の大型の輸送機だ。エクセレンが軍に所属していた時に見たことがある、ＰＴを大量に輸送する際に使う輸送機……それが１、２、３、――５機。
徐々に姿を大きくしながら、エクセレンたちの方に近づいてきていた。

「おかしいわねぇ……この辺に、軍の基地は無いはずなんだけど……？」

エクセレンは不審に思う。
付近に基地があるのなら、飛行訓練で戦闘機や輸送機が飛んでいても不思議はない。だが絵里阿町に最も近い軍事拠点は、彼女の夫であるキョウスケ・ナンブの務める基地であり、そこはかなり距離のある場所に存在する。
今まで、輸送機の類が絵里阿町上空を通過していくのを、エクセレンは見たことがなかった。

「ママー、ひこうきですのー」
「そうね、飛行機ね」

無邪気に飛行機を見てはしゃぐアルフィミィ、それを尻目にエクセレンの視線は上空の輸送機に釘付けだった。

――何かしら？　この嫌な胸騒ぎは……？

背中に毛虫でも這っているような、気味の悪い、嫌な感じ。
このまま、ここにいてはいけない。

そんな予感をエクセレンは感じていた。軍人時代の経験や直感がエクセレンに訴える。

逃げろ、と。

輸送機は巡航と言うには早すぎる速度で向かってくる。

あっという間に、エクセレンの視界で大きくなり、かなり近くの上空で滞空し始めた。

発進用らしきハッチが開くのが見える。

「おーー」

「アルフィミィちゃん、こっちよ！」

「ママ？」

エクセレンはアルフィミィの手を引いて走り出した。輸送機を興味津々で見上げていたアルフィミィは驚いて目を丸くする。それでもエクセレンの誘導に従って付いていく。

その時だった。

５機の輸送機から、次々とＰＴとは違う人型の機動兵器が飛び出してきたのは。

わらわらと輸送機から出撃、着地、建築物が破壊される轟音が響き渡る。着地の衝撃で家々の窓ガラスが砕け、突風に乗って撒き散らされた。鈍い音と鋭い音が連鎖し、衝撃波が襲ってくる。

エクセレンはアルフィミィを守るように抱きしめていた。

「ふが……ママ……？」

「見ちゃダメ！　じっとしてて！」

目を白黒させるアルフィミィを抱きかかえて、エクセレンが走り始めた。

背後では輸送機から飛び降りたロボットたちが動き始めていた。

腕を振り上げて、建築物を叩きつける。両手持ちの銃から迸ったビ

ームの光が、周囲を無慈悲に焼き払う。爆音が大きく響き渡り、そこにいるはずの人々の悲鳴は聞こえなかった。
平穏だった街並みが、一瞬で、鋼鉄の巨人が闊歩する地獄絵図へと豹変する。

――テロ……それともクーデター……？

元軍人だったためか、エクセレンの思考は冷静だった。
しかし体は平静でいられない。心臓は裂けそうなほどに跳ね回り、冷や汗が全身から滲み出る。

――とにかく逃げなくちゃ！

どこへ？　と、考えるよりも先に体が動いていた。
まずはロボットたちから離れるのが先決だと思った。
異様な雰囲気を察したのか、アルフィミィも口を利かなくなり、小さな手でエクセレンにしがみついている。
この娘だけは守らなくてはならない。母の強い意志がエクセレンに力を与える。先ほどより幾分早く足を動かすことができていた。
が――

「っ！？」

――エクセレンの視界の端を、青い影が奔る。
地面を砕く音と衝撃を伴って、青い影は彼女の前に着地していた。

「と、特機……！？」

特徴的な髭をたくわえた青色のスーパーロボットがエクセレンの前に立ち塞がっていた。

カメラが備わっているだろう双眸は、エクセレンに向けられてはおらず、ロボットたちが徘徊する町へと向けられている。

別段、エクセレンを狙って彼女の前に現れた訳ではなさそうだ。

青い特機は腕を組んだまま微動だにせず、町に視線を向けたまま動かなかった。

しかし山を見上げるように巨大な青いロボットの威圧感は圧倒的だった。

ロボットの戦闘に、生身の人間が巻き込まれればひとたまりもない。エクセレンは反射的に後ろずさり、反転して逃げ出した。

しかし今度は風を巻き起こしながら、違うロボットが彼女の前に舞い降りて来た。

落下ではない。優雅なドレスのような装甲と天使のような翼を持った、女性型のロボット――これまた特機――が、舞い落ちる羽のようにふわりと地面に着地していた。

エクセレンには背を向けて、町を見ている。この特機も別にエクセレンを狙って来た訳ではなさそうだ。

だがエクセレンは2機の特機に挟まれていた。2機とも見たことのない型だ。

「ママ……」

「大丈夫、大丈夫だからねアルフィミィちゃん」

エクセレンはアルフィミィを強く抱きしめた。

ふと見ると、町ではやはりロボットたちが破壊を繰り返していた。

逃げなくては……だが、逃げ道を探すエクセレンの耳に、青いロボットの拡張器から響いた声が届く。

『我々の名はシャドウミラー』

エクセレンは聞いたことがない男の声だった。

『諸君らに恨みはない。
だが我らの悲願成就のため、諸君らにはここで死んでもらう』

淡々とした声に、エクセレンは恐怖を覚える　――……

●

絵里阿町に降りた青い特機　――　ソウルゲインのコックピット。

黒煙の上がる街並みを眺めながら、アクセル・アルマーはコックピットで腕を組んで立っていた。

ソウルゲインのコックピットは少し変わった作りをしている。
通常のコックピットは単座式で座ったままレバーやペダルの使用、コンソールによる武装選択をして機体を動かす。しかしソウルゲインは直立式のコックピットをしていて、コンソールの類はあるにはあるが、従来機のそれより遥かに少ない。
さらコックピットスペースも通常のものより広かった。
これはソウルゲインの操縦様式に、パイロットの動きに追従して機体を動かすダイレクト・アクション・リンクを使用しているためだ。さらにパイロットの思考を機体に反映するダイレクト・フィー

ドバック・システムというＭＭＩも兼ね備えているため、機体の追従性は従来機の比ではない。

要するに、ソウルゲインは、パイロットの思いや動きを忠実に再現することができるのだ。

コックピットでアクセルが腕を組めば、ソウルゲインも腕を組む、といった具合にである。

アクセルのソウルゲインは指揮官機だ。

町で暴れている実動部隊から離れた場所に着地し、戦況の確認を行っていた。

無論、敵はいない。

「戦場か……違うな、まだここは戦場ではない」

ただの虐殺現場か、とアクセルは自虐的に呟いていた。

だが必要なことだ、そう自分に言い聞かせる。

戦争が終わり、平和が長く続いて、世界は腐り始めた。このまま放置すれば、世界全体が悪臭を放つような怠惰な世界になってしまうだろう。アクセルは兵士である以前にこの世界の一員だ。世界が腐っていくの見てはいられなかった。

アクセルは上官の言葉を思い出す　――……

【いいか、アクセル。人類に戦いは、戦争は必要なのだ】

上官　――　ヴィンデル・マウザーは言った。

【戦い続けることで人類は進化する　――　否、腐敗しない。ただ生きているだけでは駄目なのだ。活きて、生き抜くためには戦いは

必要不可欠。
　無論、理由はそれだけではない。戦争のもたらした恩恵の多さは、お前もよく知っている所だろう？】
【だが、失ったものも多い】
【得られるもののために、失われるものもある。失わずに得ようなど、虫の良すぎる話。かつての偉人は言った……人は何かを得るためには、同等の代価を支払わねばならない、とな】
【しかし……！】

　その時、アクセルは上官であるヴィンデルに食ってかかったことを覚えている。
　若かった、と言えばそれまでかもしれない。
　だがあの時のアクセルは、戦争によって生まれる悲しみや憎しみ……悲劇と一括りにされる出来事を見過ごすことはできなかった。
　そんなアクセルにヴィンデルは言った。

【ならばアクセル、お前は全人類が幸福で、腐敗もせず、戦争も必要のない世界を創ることができると言うのか？】
【そ、それは……】
【答えられまい。だがそれでいい。お前は実に誠実な男だよ】

　できる、と答えるような奴は、現実を知らない愚かな夢想者に過ぎないとヴィンデルは言い切った。

【そんな世界は不可能だ。世界には貧富の差があり、食料や物資は無限ではない。
　貧富の差は要らぬ劣等感や両者の確執を生み、富のある者の方に物資や食料は流れていく。そして貧困者は喘ぎ、貯めこまれたフラストレーションはいつか爆発する。
　どう足掻こうが、戦いの無い世の中を創ることは不可能なのだ。

そして、もし貧困者が立ち上がらなければ、いずれ上は欲望と怠慢、下は絶望と無気力に苛まれ、後は腐って堕ちていくしか道はなくなる】

【それは……詭弁ではないのか？】

【違う。事実だ。それは歴史が証明している】

この時のアクセルには反論することはできなかった。

ヴィンデルの言っていることが真実だと、頭で否定したいのに心の何処かで認めてしまっていた。

【いいか、アクセル】

ヴィンデルは言う。

【戦争は無くせない。私たちは戦争と共存せねばならんのだ】

【ヴィンデル……】

【戦争が無くならない世界で、一体、何が一番理想的なのか考えてみろ。

人類が腐敗せず、進歩し続ける世界こそが、最も理想的な世界なのだ。

人類には闘争が必要だ。人類には闘争と戦争を管理する、神のような存在が必要なのだ】

【……貴様なら、神になれると？】

【私はそこまで傲慢ではないよ。

だが世界中の戦争を管理するための組織……その礎を築くことぐらいなら、ちっぽけな私にでもできるのではないだろうか？】

アクセルはその後に述べられた、ヴィンデルの言葉が忘れられない。

【頼む友よ。私に力を貸してくれ】

アクセルは無言で、ヴィンデルの手を握り返していた。

……――　目の前で行われている理不尽な暴力、虐殺。それすらも必要なことなのだ。

組織の力を示すため、腐敗が何をもたらすのかを知らしめるために。

アクセルの耳には爆発音や破砕音ばかり届いてきて、殺されているはずの人々の声は響いてこない。酷く、非現実的だ。巨大ロボットで生身の人を殺めるというのは、こういうことなのかもしれない。

――　ヴィンデル……俺は、間違っていないよな……？

言い聞かせるように、アクセルは目を閉じ、友へと思いを馳せた。

作戦行動中である以上、返事など返ってこない。

今は自分の行動を信じて、作戦を遂行するしかない。この作戦で沢山の人が死に、多くの悲しみや憎しみも生まれるだろう。

アクセルには、それらを全て背負い込む覚悟はできていた。

兵士はそれらを全て受け止めて、それでも引き金を引く覚悟がなければならないのだ。そういう意味ではアクセルは間違いなく兵士だった。

「Ｗ１７」

アクセルは前方で待機している女性型特機　――　アンジュルグ

――　の専属パイロットＷ１７に通信を入れる。

「はっ」と返事と共に、Ｗ１７の画像がモニターに表示される。

「焼き払え」

『了解』

機械的な返答。

直後、アンジュルグに動きが見られた。

背中に生えた天使の翼が大きく開かれる。ウィングから発生させた反重力がアンジュルグを一瞬で空中高く飛翔させた。

絵里阿町を真下に見下ろせる位置でアンジュルグは停止し、巨大な弓を取り出した。エネルギーで形成した矢を弓にかけ、弦を引く。

『リミット、解除。コード、入力　――　ファントムフェニックス』

アンジュルグの手から矢が放たれた。

絵里阿町へと放たれた矢は、着弾するまでの間に姿を変貌させる。一条の光の矢は、内包されたエネルギーを爆発させるかの如く膨れ上がり、炎で形作られた鳥へと変わる。

その姿はまるで不死鳥だった　――……

●

エクセレンは2機の特機の隙間を抜けて、走って距離を取っていた。

息が苦しい。軍を退役してからというもの、家事と仕事に追われて、あまり運動していなかったのが祟ってか、それとも異常な状況

のストレスからか体力の消耗が激しかった。
だがエクセレンは走るのを止めない。
腕の中に小さく震えるアルフィミィがいるから。

「大丈夫よ、アルフィミィちゃん……！」

自分にも言い聞かせるようにして言った。
諦めたら、そこで終わってしまう。
走って、逃げ続けるしかない。
だが、その時。
空が光った。

「っ！？」

炎でできた巨大な鳥がエクセレンの方目がけて落ちてくる。
直撃……ではない。僅かにそれているが、巻き込まれる可能性が高い、そんな位置に不死鳥が舞い降りてくる。
エクセレンはアルフィミィを力強く抱きしめた。
直後、エクセレンの視界は光で包まれる　――……

●

アンジュルグの最強兵器　――　ファントム・フェニックスが絵里阿町を抉った。

着弾地点には大きなクレーターができており、着弾の余波で飛び

散ったエネルギーにより、町には火が付き轟々と燃え上がっている。
たった1撃で町は赤く彩られた。
その光景はアクセルの目にも映っている。
この炎が収まった時、アクセルの見慣れた戦場にありがちな廃墟が、1つ出来上がっているだろう。

『命令、遂行しました』

浮遊していたアンジュルグが緩やかに着地してきた。

『隊長、次のご命令を』

W17がアクセルに指示を求めてきた。
何故か、アクセルはその対応に不快感を覚える。
部下が上官に指示を仰ぐのは当然のことなのだが、それでも、何故かW17の言葉が癇に障る。W17の声が、無感情で抑揚のない声だからかもしれない。
戦争は人間がするものだ。だがW17は……そこまで考えて、アクセルは気持ちを切り替えた。今は、任務の遂行が最優先だ。

「W17、貴様は他のWシリーズを指揮しろ。派手に暴れ回ってやれ。
そしてじきにくる敵機を掃討させろ。1機残らず、叩きのめすんだ」
『はっ』
「貴様らの力を示すのも、今回の作戦の骨子だというのを忘れるな」
『任務、了解』

W17の返答後、アンジュルグは再び浮遊する。町で破壊を行う量産型のアシュセイヴァーと合流するため、高速で飛び去って行った。

アクセルはW17を追わず、離れた位置からそれを観察することにした。アクセルは指揮官、全体の戦況を把握しておく必要があるからだ。

もちろん、現段階では敵もおらず、アクセルが動く必要もない。

「戦場か……」

腕を組んだまま、アクセルは呟いていた。

「俺は帰ってきたのか？　戦場に？　いや、違う。まだだ。まだ、ここは戦場ではない」

何故なら、敵がいない。

アクセルたちが求めるのは永遠の闘争だ。

戦い続けるためには敵が必要だった。

しかし絵里阿町にアクセルたちの敵はまだ現れていない。

――早く来い、ベーオウルフ……早くしなければ、町の住民は皆殺しだぞ？

アクセルの中で苛立ちがつのる。

……直立のまま立ち尽くすこと10数分。

その間も量産型のアシュセイヴァーたちは、W17の指揮に従い、町で傍若無人の限りを尽くす。鉄の拳やビームの雨が建物を無差別に破壊した。ソウルゲインのレーダーを見れば、町全体にシャドウミラー部隊が散開しているのが分かる。

レーダーは生体反応を拾わないが、もし拾っていれば、動かなくなった人の影でレーダーが埋め尽くされたのではあるまいか？　そ

う、思わずには居られなかった。
アクセルの視界に死体は入ってこなかったが、遠巻きに聞こえる爆音で、人が死んでいない訳がないと思わされる。

「ヴィンデル……本当に、俺たちは正しいのだよな……？」

答えは返ってこない。
だが、もうアクセルは引き返せなかった。
一度足を踏み入れた修羅の道……後は、前に進み続けるしか道はない。噛みしめた奥歯が痛む。だがアクセルたちに焼かれている人々の痛みは、この比ではない……いつか自分は業火に焼かれて、地獄に落ちるだろう。
アクセルに、覚悟はできていた ――

―― と、ソウルゲインのレーダーに赤い点が表示される。

「来たか」

絵里阿町の上空に輸送機の編隊が見えていた。
最寄りの基地から急行してきた掃討部隊だ。
おそらく全速力で駆け付けたのか、シャドウミラーが想定していた時間よりも早かった。
アクセルは回線を開き、命令を送る。

「全機、戦闘態勢に移行しろ」
『『『了解』』』

アクセルの号令でアシュセイヴァーが輸送機の迎撃を開始した。

図太いビームが輸送機を狙って撃ちだされていく。
かすめたり、被弾したしたりするが輸送機もすぐには墜ちない。
機銃で反撃を開始しながら、ＰＴ格納庫のハッチを解放していた。

「来い、ベーオウルフ」

アクセルの動きを反映し、ソウルゲインが初めて迎撃の体勢を取った。

●

輸送機内。

キョウスケはゲシュペンストＭｋ－？のコックピット内で待機していた。
輸送機の揺れが激しくなった。おそらく、敵の迎撃を受けているのだろう。

「まだか……？」

自然と、操縦桿を握る力が強くなる。
急げ急げ、と念じるが、それで到着が早くなれば苦労はしない。
某アニメのおばあさんではないが、あまりに遅い輸送機の移送に「３０秒で支度しな！」と叫びたくなるが、キョウスケにはただ待つことしかできなかった。
輸送機は空中にいるため、空から女の子は降ってきたりはしない。

代わりに地上の巨し　――　ロボットの銃撃が激しくなってきている。

このままでは輸送機の撃墜もありえる。

何もできないことに、キョウスケは焦燥感を覚えていた。

『キョウスケさん』

ゲシュペンストＭｋ－？・改タイプＣに乗ったタスクが通信を送ってきた。

『敵は本当にあのアクセルなんでしょうか？』

「……おそらくはな」

基地での通信で顔は確認できなかった。だがあの声と話し方は間違いなくアクセルのものだった。

『でも、仮に敵がアクセルだとして、何故こんなことをするんでしょう？』

「さぁな」

『俺には理解できませんよ』

「そうだな」

『せっかく平和になったのに、こんなことして、意味が分からない……』

「そうだな」

『……って聞いてます？』

「あぁ」

『ちょっと、キョウスケさん？』

タスクの声が遠くに聞こえる。

早く出撃しなくては、町はどうなっている、エクセレンとアルフ

ィミィは無事なのか、いや無事に決まっている　――　雑然とした考えがキョウスケの頭を駆け巡る。それがフィルターとなってタスクの声が掠れてしまっていた。

タスクに何度も話しかけられ、キョウスケは自分の精神状態に気づかされた。

冷静を欠いたまま戦場に出る訳にはいかない。雑念は戦場で自分だけでなく、仲間も殺す。キョウスケはその事をよく理解していた。

深く息を吸い込み、そして吐く。

数回深呼吸してから、タスクに返答する。

「すまんな、タスク。おかげで落ち着いたぞ」

『？　い、いえ、どういたしまして？』

首を傾げるタスク。

キョウスケはそれを一瞥して、タスクと、もう1人の隊員アラドに声をかける。

「いいか、今回は市街地戦だ。しかも住民の避難は完了していない。不用意に飛び道具は使うなよ、被害が拡大するからな」

『ちっ、タイプCには不向きな任務だぜ』

『逆に俺は大得意だけどな』

ゲシュペンストMk－？・改タイプGに搭乗したアラドが答える。

同様にキョウスケのMk－？にとっても近距離戦は得意な間合いだ。しかし、戦場となっている絵里阿町の状況はまだ把握できていない。

しかも戦域は町1個とかなり広範囲だ。

「いいか、出撃後は3機で散開するぞ。敵機の掃討よりも、住民の保護が最優先だ」

『了解だ』
『ああ、エクセ姐さんたちも絶対助けてみせるぜ！』
アクセルたちが何故罪もない市民を攻撃しているのか、その理由は分からない。
だが軍人が非戦闘員を攻撃するなど、あってはならない。
それは悪だ。それだけは断言することができる。キョウスケはアクセルを許すことができなかった。

――罪という名の代貨（チップ）、その身で支払ってもらうぞ……アクセル・アルマー

一度はアクセルに救われた命だ。アクセルを止め、間違いを正すために命を使おうと、キョウスケは心に決める。
それからすぐに出撃許可が下りた。
輸送機のハッチが開かれ、眼下に町の様子が広がって見えた。
町は炎に包まれていた。
物静かな住宅街も、馴染みの店も、いつかアルフィミィを通わせようと思っていた学校も……沢山の建物が倒壊し、赤い炎と黒煙があがり、所々に何かが倒れているのが分かる。
キョウスケはカメラをズームにして確認しようかと思ったが、止めた。
見なくても、直感と経験で理解できたからだ。倒れたり、転がっているモノが何なのか。

「アクセル・アルマー……許さんぞ」

Ｍｋ－?をハッチに向かわせる。

先陣を切って、キョウスケはＭｋ－?で絵里阿町の空へと飛び出した。

「ベーオウルブズ、１番機ゲシュペンストＭｋ－？　――　キョウスケ・ナンブ出撃る！！」

むせ返るような炎の匂いが、キョウスケとＭｋ－?を包む。

不死の部隊の戦いが、再び、幕を開けた　――……

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～炎～（後書き）

＜次回予告＞

戦って、戦って、戦い抜いて
男はいつも生き残り、気づけばいつでも独りきり
男の戦いが終われば、決まって戦場に立っている影は１つだった
自分か、それとも相手か
今回はどちらが生き残る

次回、鋼鉄の駄狼Ｒ２「孤影激突」
今回の敵はどいつだ？

またやってしまった。
シリアスな話なのに、衝動的にパロネタを入れたくなってつい入れてしまう。
もはや病気の域と思う今日この頃です。

あと最近ｐｉｘｉｖで公開されている「片乳首出したおっさんの後つけたら天空の剣見つけた」という漫画に嵌っています。
タイトルこそ、何ぞこれ（笑）ですが、クオリティが半端ないです。
ドラクエＶ好きだからか、久しぶりにマンガ読んで涙ぐんじゃいました。
早く続きでないかなぁ……ではではノシ

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～孤影激突～（前書き）

この話は長めになりそうなので、数回に分けて投稿する予定です。
なるべく投稿間隔が空かないように頑張りたいと思います。

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～孤影激突～

絵里阿町に到達した輸送機から次々とＰＴ（パーソナルパー）が飛び出してくる。

アシュセイヴァー群による地上からの砲撃に耐えた輸送機から、地上に降下してくるのは、ゲシュペンストと呼ばれる地球連邦採用の量産型ＰＴだった。

アシュセイヴァーとは違い、骨太な印象を与える外見はどこか男らしい。

ボクシングに例えるなら、アシュセイヴァーはフェザー級、ゲシュペンストはミドル級といったところか……重量感たっぷりの黒く武骨な装甲を持つ巨人が、絵里阿町に続々と降り立ってきていた。

その数、レーダーで捉えられる限り約３０機 ―― シャドウミラーの用意した量産型アシュセイヴァーの数は１５機なので、彼我戦力差はほぼ2倍だ。

戦場でモノをいうのは最終的には物量である。

質が高いに越したことはない。

だが質が高く、尚且つ量産性も高い兵器の創造は非常に難しい。

大きな組織の主力として位置づけられ、数々の派生機が存在するゲシュペンストは、コストパフォーマンスに優れた名機であるのは疑う余地もなかった。

シャドウミラーの量産機であるアシュセイヴァーも十分に高性能だ。しかし質の高い３０機が相手となれば、戦況は不利だと言わざるを得なかった。

だが次々と敵として地上に現れるゲシュペンストを見て、アクセルは頬を綻ばせた。

「来たか」

輸送機から出撃する敵機の中に、赤いゲシュペンストを見たからだ。

奴が――ベーオウルフが、戦場となった絵里阿町にやってきた。

戦場の勝敗を決定づける要因はなにも物量だけではない。パイロットの手腕も大事な勝因の1つだ。質の良い機体を操縦する、手練れのパイロットがいれば、不利な状況から巻き返せることも少なくない。

「インスペクター事件」はその良い礼だった。

その激戦を生き抜いた手練れの男の登場は、シャドウミラーにとって不利益以外のなにものでもないだろう。

だが、アクセルは笑っていた。

――やはり、戦いはこうでなくてはな

紅いゲシュペンスト――ゲシュペンストMk－?の操縦者キョウスケ・ナンブ。

奴は強い。「インスペクター事件」で活躍したクロガネのクルーの中でも、トップクラスの実力の持ち主だ。だが、アクセルにはそれが堪らなく嬉しかった。

アクセルはキョウスケと共同戦線を張ったことがあるが、その時から思っていたことだ。

一度、キョウスケと手合せしてみたい、と。

できれば敵同士ではなく、味方同士として、模擬戦をしてみたかった。

互いを認め合い、高め合う……アクセルにとって、キョウスケはそれに値する男だったのは確かだ。

しかし、キョウスケと再会したのは戦場だった。例え、シャドウミラーが引き金を引いた戦いであったとしても、この再会は茶番だと罵られようとも、アクセルはこの出会いに感謝していた。

戦場で出会った敵はどうする？

戦場の敵は倒すものだ。

シャドウミラーの戦いの正否……心のどこか迷っている自分がいることに、アクセルは気づいている。

だからアクセルは、そのことについて考えることを止めた。

戦場での迷いは死に繋がる。たとえ陳腐な言葉でもこれは真実だ。

――俺は、貴様以外の男に敗けるのは我慢ならん……！

仮に、この戦いにアクセルが敗れるとしよう。

戦場での敗北は死を意味する。仮に自分が戦いに敗れるとしても、殺される相手をアクセルは選びたかった。まだ敗けると決まったわけではないし、他人には理解不能なわがままだとも理解している。

兵士失格の烙印を押されても仕方のない、自分勝手な選択だ。だが、アクセルはこの戦いで敗北するかもしれないのだ……。

アクセルが勝つつもりで戦うのは当然だが、未来のことなど誰にも分かりはしない。

だから……。

どうせなら、どうせ命を懸けて戦うのなら、キョウスケ・ナンブがいい。

結果は後から――戦いが終わった時には出ているはずだ。

「来い、ベーオウルフ」

アクセルはソウルゲインのコックピットで拳を握りしめた。
ダイレクト・アクション・リンクが作動し、ソウルゲインが文字通りの鉄拳を握り締める。
懐かしい緊張感がアクセルを包む。常人なら吐き気を催しかねない程のプレッシャーが、アクセルにあることを実感させてくれていた。

「戦場よ……俺は、帰って来たぞ」

絵里阿町はただの虐殺現場から戦場へと変貌していた。

それはシャドウミラーが望んでいる光景だ。
胸に闘志が沸くのを感じながら、アクセルはソウルゲインを駆り、戦場へと向かう ――……

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～孤影激突～

輸送機から降下したキョウスケとＭｋ－？は、燃え盛る炎の真っただ中にいた。

キョウスケが絵里阿町で見慣れていた建物の多くは破壊され、中に倒壊してしまっているものもある。外観が無事な建物もガスなどに引火し、内部から炎と黒煙がもうもうと上がっていた。
窓ガラスは乗用車が通っていた車道に撒き散らされ、瓦礫の下には何か見える。それは瓦礫の下でピクリとも動かない。

キョウスケはあえて見ないことにした。
この状況で動いていないものは既に手遅れだ。残酷なようだが、動かないそれを回収している余裕は今のキョウスケにはない。少数の生を拾うために、多くのそれを斬り捨てることも時には必要なことだった。

――……生存者は……

画面上、動いている人影は確認できなかった。
代わりとばかりにレーダーには赤い光点が確認できる。Ｍｋ－？周囲に２つ。敵機だ。今の絵里阿町でキョウスケが認識できる範囲では、動いているのは鋼の巨人たちだけだった。
タスクやアラドとは別行動を取っているため、キョウスケは２機に取り囲まれていることになる。
敵機もキョウスケを認識しているはずだ。燃え盛る建築物の影から、こちらの様子を窺っている。

――どうする……？

攻めてこない敵に対し、キョウスケは思考を巡らせた。
ゲシュペンストＭｋ－？の装備は、接近戦で威力を発揮するものが多く取り揃えられている。
リボルビングバンカーにプラズマホーン、アヴァアンチクレイモアは射撃武器に分類されるが、チタン弾を散弾と同じような軌道で撃ちだすため、遠距離では格段に威力が落ちる。そのため、ほぼ接近戦専用の射撃武器と言えた。

しかし囲まれている状況で接近戦を仕掛ければ、１機は残せても、残る１機に対して大きな隙を見せることになる。
となれば、残る武装は左腕部の５連チェーンガンのみだった。
高威力の武器とは言えない。ＰＴ相手ではけん制程度にしかならないが、距離は稼げる武装だ。
キョウスケは迷うことなく５連チェーンガンを武装選択する。敵の動きをうかがい、可能な時に接近してケリを付けるつもりだった。

「……」

容易に動くべきではない。
キョウスケはＭｋ－？を建築物の影に隠し、敵の動きを待つ。
先に痺れを切らしたのは敵の方だった。
レーダー上の光点の１つが移動し、Ｍｋ－？のカメラが敵機の姿を捉える。

――あれはアシュセイヴァー……やはり、アクセルの部隊か

ホワイトスターでキョウスケに助力してくれたロボット――アシュセイヴァーが、大きなビーム砲を持ち、ゆっくりと動いている。アクセルが乗っていたものと違うのは色ぐらいで、画面に映っているアシュセイヴァーの色は緑だった。
銃口でキョウスケを探しながら、近づいてくる。
飛び出して不意を突けば、確実に命中する。そんな距離だ。
キョウスケはＭｋ－？のスラスターを噴かせ建築物の影から躍り出ると、アシュセイヴァー目がけて５連チェーンガンの引き金を引いた。
徹甲弾が５つの銃口から唸りを上げて飛び出し行く。

命中した後に追いうちをかけるため、キョウスケがリボルビングバンカーを構えようとした。その時……

「なにっ！？」

敵の動きがキョウスケの憶測は裏切る。

アシュセイヴァーは地面を蹴って横に跳び、銃弾を回避していた。車道の瓦礫を蹴散らしながら受け身を取り、上体を起こしてビーム砲をＭｋ－？に向けてくる。

ロックオンアラームがキョウスケの鼓膜を震わせた。

操作が間に合わない。ガンマンの早撃ちのように、アシュセイヴァーがビーム砲を発射する。ビームがＭｋ－？の装甲を直撃するが、耐久性向上のために塗装されたビームコーティングがそれを弾いていた。

バチバチバチ、と花火のように閃光が飛び散り、ビームは霧散した。しかし塗装は剥げてしまったため、同一部位ではもうビームを防ぐことはできなくなる。

――なんだッ！？

被弾直後、背後からもロックオンアラーム。

Ｍｋ－？を囲んでいたもう1機のアシュセイヴァーが銃口を向けていた。急いでキョウスケが建物の影に逃げ込むと、先ほどまでＭｋ－？のいた場所を白い光の筋が突き抜けて行った。

――反応速度が速い！　敵はエース級か！？

ちっ、と舌打ちし、キョウスケは2機のアシュセイヴァーから距離を取った。

しかし1度姿をさらした以上、敵はキョウスケを追ってくるだろう。そうなれば不利になるのは結局キョウスケだ。

ならば、と。キョウスケは奇をてらった先手を打つことにした。

敵はキョウスケが逃げたと思い追ってくるだろう。そこに逃げずにブツかっていけば、敵の意表をつけるかもしれない。

上手くすれば、リボルビングバンカーで1機ぐらいは撃墜できるだろう。

しかしこれは、キョウスケにとって都合の良い自分勝手な仮定だった。

当然、2機の集中砲火の餌食になる可能性もある。

――かまうな！　そのためのＭｋ－？だ！

イチバチはキョウスケの十八番（おはこ）だ。

ペダルをめい一杯踏み込む。爆発に近い音を響かせてブースターが火を噴いた。化け物じみた推進力がＭｋ－？を一気に最高速まで加速させる。

景色が一瞬で流れる。歪んで流れる視界でも、キョウスケは敵機を捉えていた。

2機とも銃口をＭｋ－？に向けてくる。

だが一瞬早く、Ｍｋ－？が加速させた全重量を乗せたリボルビングバンカーを、アシュセイヴァーの1機に打ち込んだ。

爆ぜる炸薬、唸る切っ先、回る薬室。

胴体に風穴の空いたアシュセイヴァーは、Ｍｋ－？の突進の勢いもあり、上下に裂けて爆散した。もう1機はビームで応酬してくる。

しかしバンカーの次撃の準備を整えて、Ｍｋ－？は爆炎に紛れて姿を消した。

アシュセイヴァーがＭｋ－？を索敵する。

結果が出た。

Ｍｋ－？の反応はアシュセイヴァーの真正面だ。

そこにはボロボロになった建築物しか見えない――――と、その建物を突き破って、Ｍｋ－？がアシュセイヴァーの前に姿を現した。

爆炎と建物に紛れた後に、敵の視界に入らぬよう、建物を破壊しながら近づいたようだ。

「とったぞ！」

リボルビングバンカーの切っ先が突き刺さり、アシュセイヴァーの体を撃ち抜いた。

撃ち抜かれた巨大な穴から向こう側が見えた。グラリと揺らいで、アシュセイヴァーは倒れこむ。間違いようもない。２体の敵は戦闘不能だった。

「……やったか」

苦戦した。それがキョウスケの素直な感想だった。

アシュセイヴァーの動きは何処か機械的だったが、反応速度が尋常ではなかった。キョウスケの先手を取るような動きこそ見せなかったが、反応して反撃するという単純動作だけで言えば、キョウスケよりも早かったかもしれない。

「敵が２機で助かった、というところか……」

あの反応速度の攻撃で、取り囲まれてしまうのはかなり危険だ。

しかも行動に躊躇が感じられない。どこか人外を相手にしているような錯覚を覚える敵だった。
とにかく、周囲の敵機は掃討した。
キョウスケの視界には、揺らめく炎以外に視界で動いているモノは確認できなかった……つまり、全滅だ。

「……アクセル、これがお前の求めたものなのか……？」

人類に戦争は必要だと、アクセルは言っていた。
確かに、戦いは必要だ。
キョウスケもそう思う。
キョウスケだって戦い続けてきた。
だがそれは誰かを護るための戦いであり、無暗に命を奪うための戦いではない。
しかし、護るための戦いでも人は死ぬ。たった今も、アシュセイヴァーのパイロットに留めを刺しばかりだった。

――そうだ……俺だって、人は殺している……

キョウスケだって、目の前の光景を作り続けてきたのかもしれない。炎にまみれた絵里阿町のような町を作ってきたのかもしれない。
誰かを護るために、誰を殺すのは許されるのか？
Ｎｏと答えたかった。しかしその資格が、自分にはないように、キョウスケは感じていた。
見知った風景が壊される……それがどういうことなのか？
今、キョウスケは身を持って体験していたからだ。

『ベーオウルフ』

アクセルの声が聞こえた。
数秒の間、呆然としていたらしい。
その間にアクセルがＭｋ－？に通信回線を開き、話しかけてきていた。レーダーには一際大きな光点が表示されている。

「アクセルか……何故、こんなことを？」

不思議なことに、キョウスケの声は穏やかだった。
アクセルの所業は許せない悪であるにも関わらず、声を荒げて責めることが、この時のキョウスケにはできなかった。
キョウスケの問にアクセルが答える。

『必要だからだ』
「こんな殺戮が、か？」
『そうだ。言ったはずだぞ。流れのない水たまりの水はやがて腐る。世界の腐敗を防ぐために、人類は戦い続けなければならないのだ』

アクセルは淡々と語った。
キョウスケにはアクセルの口調が、何かを隠すためのモノのように感じられた。
もしかすると、彼も迷っているのかもしれない。

「戦いのための戦いに、何の意味がある？」
『戦うこと。それ自体に意味があるのさ、これがな』
「目的と手段をはき違えているだけではないのか？　それは正しいことなのか？」

護るために戦ってきたキョウスケでも迷う。
護るためになら戦ってもいいのか？　戦わなければ護れないのか

？　戦いの他にだって方法はあるかもしれないのに？
キョウスケだって明確な答えは出せない。もしかすると、初めから正解などないのかもしれない。

『問答はしまいだ、ベーオウルフ』

アクセルが言った。

『俺たちの行動が正義なのか、それとも悪なのか……それは歴史が教えてくれるだろう。
だがな、ここは戦場だ。戦場に生きる俺たちには、たった1つだけ絶対のルールがあるはずだ』
「ああ　――」

アクセルの言うルールが何なのか、キョウスケはすぐに理解した。

「――　戦場では、最後まで生き残った方が正義だ」
『そうだ。来い、ベーオウルフ』

アクセルはそこで言葉を途切る。
キョウスケはレーダーに映る光点の方角を確認した。遠方から青いロボットが歩いてくるのが分かる。遠巻きながらかなりの巨体であることが見て取れた。
青いロボットは明らかに特機　――　スーパーロボットだ。
サイズはキョウスケのＭｋ－？の倍ほどある。
おそらく、搭乗者はアクセルだろう。アクセル程の実力者が操る特機が相手となると、いくらキョウスケと言えども苦戦は必至である。

「だが、負ける訳にはいかん」

これは護るための戦いだ。
エクセレンとアルフィミィを見つけ、助け出すまで、キョウスケは敗ける訳にはいかなかった。
アクセルを倒す。覚悟を決めると、操縦桿を握る手に自然と力が籠った。

「貫けＭｋ－？、奴よりも早くッ！」

Ｍｋ－？のブースターが火を噴く　――……

●

一方そのころ……

『ちっ、こいつら……！』
『強えぞ！』

タスクとアラドは合流し、行動を共にしていた。
２機のゲシュペンストＭｋ－？・改が背中を合わせて、周囲を警戒している。今の所、視認できる距離に敵機はいない。

出撃した直後は別行動していた２人だったが、多数のアシュセイヴァーに苦戦を強いられていた。アシュセイヴァーは運動性重視の軽量型の機体だったが、それ以上に、敵機の反応速度が異様に早い。
攻撃のほとんどは躱され、瞬きする間もなく反撃に移ってくる。

行動パターンは単純で、避けて反撃するを繰り返すだけだったが、敵の反応速度とアシュセイヴァーの機動性も相まって手に負えなかった。物量で勝っていたはずのタスクたちは次第と劣勢となり、味方の量産型ゲシュペンストＭｋ－？がなす術もなく撃破されていった。

致命傷ではないがタスクたちの機体も被弾していた。被害が少なくすんだのは、「インスペクター事件」の際に機体に施していたビームコーティングの恩恵だ。

継戦能力は十分に残っている。しかし戦況はよろしくない。このまま囲まれて集中砲火にあえばどうなるか……分かりきっていることだ。

１機では危険だと判断したタスクは、アラドと連絡を取って合流した。

『久しぶりの戦闘で、これはキツイぜ』

『タスク、弱音なんか吐いてんじゃねえよ！　俺たちは敗けるわけにはいかねぇんだぞ！　こんな酷ぇこと、絶対に許しちゃいけねぇんだ！』

町の惨劇を見てきたアラドが叫んでいた。

エクセレンとアルフィミィが生活していた町だ、アラドたちにも少なからず愛着はあった。のどかだった街並みが、シャドウミラーの襲来で燃え盛る戦場と化してしまっている。

許せなかった。

表情を歪ませているアラドの心情を、タスクは痛いほど理解できる。

『ああ、シャドウミラーは許せない。奴らを追い出して、町の皆を助けるんだ！』

『やるぞぉ、タスク！』
『ああ　――　ッ！？　アラド、何か来る！！』
『なんだって！？』

タスクの声にアラドは前方を警戒する。
しかし敵機の姿は確認できない。

『上だ！』

レーダーを確認したタスクが叫ぶ。
大きな光点が2人のゲシュペンスト直上で明滅していた。
2機は銃口を空に向けた。町の炎でうすい赤に染まった青空が見える。青に栄える白い翼を広げて、1機のロボットが滞空していた。天使のような羽を持ち、白と桃色で彩られたドレスのような装甲を持つロボットだ。
特機　――　モニター情報には「アンジュルグ」と表示されている。
優雅な外見と裏腹な巨体を空中に浮遊させ、そのロボットはエネルギーで形成された矢を、既にタスクたちに向けていた。
2人は反射的にトリガーを引いた。
愛用のアサルトマシンガンから徹甲弾が飛び出すが、それよりも一瞬早く、女性ロボットの矢じりが放たれる。
矢は空中で膨張し、炎でできた巨大な鳥へと変貌する。
炎の鳥に飲み込まれて、徹甲弾は蒸発した。
視界は鳥の赤い光に覆い隠されて、

物を言う間もなく、2機のゲシュペンストは不死鳥の炎の翼に抱かれる　――……

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～孤影激突～（後書き）

この話はあと１，２回続くと思います。
しかし、やっぱりロボットの戦闘描写は難しいです。案外スパロボの２次小説って少ないですが、ＳＦやロボットものの敷居の高さが敬遠されがちな理由なんでしょうかね？

どうでもいこと。
「戦場よ……俺は、帰って来たぞ」は、ガンダム００８３のガトーの台詞のパロのつもりです。
ガトーは男前ですね。やっぱりライバルはああでなくっちゃ、と思う今日この頃です。

雑記。
先日、友人宅でＯＯの劇場版を見ました（ちなみにテレビは見ていない）
て、敵が……！
どこのガンバスターだ、これは！？
と思わず突っ込んでしまいました（笑）
「しかも名前がエロスとか（笑）」
「エルスな、エルス」
と普通に友人に突っ込まれたのは、数日前の良い思いでです。

炎に彩られた絵里阿町を、Ｗ１７は空から見下ろしていた。

「アンジュルグ」と呼ばれる女性型の特機に搭乗し、シャドウミラー軍を指揮していたＷ１７。

地上で繰り広げられる自軍側のアシュセイヴァーと、地球連邦のゲシュペンストの戦闘を空中から観察する。ビームの光と銃声が聴覚センサーで拾われ、視覚センサーには大破していくゲシュペンストの姿が捉えられる。

数ではシャドウミラーが不利だったが、パイロットの性能差か、地球連邦を劣勢へ追いやるのは容易だった。

眼下の戦闘風景を眺めながら、Ｗ１７は空中から的確な指揮と、援護攻撃を行う。

アンジュルグの放ったエネルギーの矢がゲシュペンストを破壊していき、絵里阿町は火の手の勢いに油をさしていくような行動を継続する。

Ｗ１７は、つい先ほども、２機のゲシュペンストを仕留めていた。

『……』

紅いカラーリングのゲシュペンストＭｋ－？・改　――　Ｗ１７が「インスペクター事件」で共闘した、ベーオウルブズの部隊の機体だった。

アンジュルグの最大兵装　――　ファントム・フェニックスを直撃し、防御した四肢は爆ぜ、カメラアイを保護する頭部のゴーグルは砕けている。装甲も焦げて傷だらけだ。しかし単なる量産機では

なくチューン機であることが幸いしたのか、コックピットブロックを含む胴体部分は無事だった。
ただし、中のパイロットの生存は不明だった。
Ｗ１７は大破した２機のＭｋ－？・改にロッオンカーソルを重ねた。
アンジュルグの手には、再びエネルギーで形成された矢が握られる。
敵は徹底的に壊す。それは「インスペクター事件」からの５年で、Ｗ１７が学んだことの１つだ。
Ｗ１７はアクセルと、シャドウミラーの総帥ヴィンデルから教授されたプロセスを、冷徹に実行しようとした。
しかしその時、戦場の情報を収集して表示しているモニターに、最新の情報が飛び込んできた。

『隊長、戦闘を開始したか』

レーダーの遠方に大きな光点が１つ。それに対する赤い光点がまた一つ。大きな光点はアクセルのソウルゲイン、小さな光点がアクセルの相手にしている敵機だろう。
Ｗ１７は戦闘風景を確認するため、アンジュルグのカメラを最大望遠にする。
アクセルの敵は紅いゲシュペンストだった。
ベーオウルブズのリーダー――キョウスケ・ナンブの乗る、ゲシュペンストＭｋ－？……難敵だ。
Ｗ１７はカメラの望遠を中止する。ゆっくりと地上を見下ろした。
大破した赤いゲシュペンストＭｋ－？・改が転がっている。
Ｗ１７が破壊した、キョウスケ・ナンブの部下の機体だった。

『戦術効果、確認。実行する』

Ｗ１７がつぶやき、アンジュルグは弓を納める　――……

●

圧し掛かってくるＧが、キョウスケに戦いを実感させる。

背部の大型ブースターの吐き出した炎が化け物じみた推進力を生み、ゲシュペンストＭｋ－？を猛烈に直進させていた。
戦場と化した絵里阿町。破壊された建物の間に敵は立っている。
アクセル・アルマーの乗り込んだ青色の特機だ。
ロックオンと共に敵情報が画面に表記された。ＳＯＵＬＧＡＩＮ――ソウルゲイン、それが青い特機の名称のようだ。
超闘士グルンガストのような青色のボディで、火器らしき武装は携帯しておらず、ソウルゲインも多くの特機の例にもれず接近戦用にチューンされている印象を受ける。
格闘家のような体つきのマシンだが、特に四肢に力強く、肘部分には短いエッジが伸びていた。
ソウルゲインはギラリと光るエッジを向けてこなかった。
両手を前に出し、足を開いて立っている。拳は作っていない。腰を落として、機体の重心を低くしていた。

――ＭＫ－？を受け止めるつもりか？

Ｍｋ－？のサイズはソウルゲインの半分ほどだ。
しかし狂気じみた重装甲のため機体重量は異様に重い。それに伴う機動性低下を、背部の大型ブースターの推進力で無理やり解決したのがＭｋ－？であり、代償として訪れるＧの負荷こそ、Ｍｋ－？を操縦の困難性を助長し、お蔵入りの原因を作ったと言っても過言ではない。
当然、重い物を速く飛ばすには、比例して大きなエネルギーが必要になる。
今のＭｋ－？は運動エネルギーの塊だ。
超加速したＭｋ－？を止められるＰＴなど存在しない。例え相手が特機でも、だ。Ｍｋ－？を受け止めるという事は、生身で小型の大砲の弾を体で受け止めるのに等しい行為と言えた。

「甘いぞ、アクセル・アルマー！」
『それはどうかな！』

キョウスケは使い慣れたモーション ―― 左肩でタックルし、敵の体勢が崩れた所にリボルビングバンカーを使用する ―― で、ソウルゲインに攻撃を仕掛ける。
直後、Ｍｋ－？の左肩を、ソウルゲインが両手で受け止めた。

『むっ！』

踏ん張っていたソウルゲインの足がアスファルトにめり込んだ。
超重量×超加速だ、そう容易に止められるはずもなく、Ｍｋ－？の突撃がソウルゲインを後方にぐいぐい押して行く。アスファルトを砕きながら後方に押し出されながらも、体勢を崩さないソウルゲイン。
並のＰＴならフレームが歪んでもおかしくない。やはり特機は伊達ではない。

思惑と違ってソウルゲインの体勢は崩せなかった。
反射的にキョウスケは予定変更。体勢を崩すことが困難と見るや、すぐさまリボルビングバンカーの撃鉄を上げた。
ソウルゲインに切っ先を突き込むために、Ｍｋ－？が右腕を振り上げる。

「ッ！？」

リボルビングバンカーを叩き込もうとした瞬間、コックピットをガクンと衝撃が襲った。
振り上げた右腕をソウルゲインが掴んでいた。
Ｍｋ－？を支えていた手で撃鉄を押さえている。撃鉄の動きを封じられてしまうと、薬室内の炸薬に着火することができない。
リボルビングバンカーは、リボルバータイプの拳銃を模して造られている。撃鉄の動きで炸薬に着火し、そのエネルギーでパイルバンカーを撃ち出す仕組みだ。原始的な作りだが、その分強度が高く、確実に動作することが強みである。
しかし撃鉄を押さえられると、炸薬に着火できない。かの有名な４４マグナムを想像してもらえれば分かり易いだろう。火が付かなければ、銃弾もパイルバンカーも撃ち出すことができなかった。
想像の斜め上のバンカー封じに、キョウスケが驚愕する。
しかし撃鉄を押さえるため片手を使ってしまったため、ソウルゲインはＭｋ－？の勢いを抑えきれずに体勢を崩していた。
上体がぐらりと揺らいだ。
が、ソウルゲインはＭｋ－？の腕を引き、

『でいいいやあぁぁっ！！』

Ｍｋ－？の突撃の勢いに逆らわずに体を半歩ひらいて道を開け、投げた。

加速とソウルゲインのパワー。
キョウスケの視界が一瞬で歪み、背中から矢じりのように鋭い衝撃が体を突き抜けた。

「かは……っ！？」

地面にＭｋ－？は背部から叩きつけられていた。それを悟るには十分な痛みがキョウスケを襲い、肺の中の空気が押し出される。
Ｍｋ－？の損傷はほとんどないが、殺しきれなかった衝撃がキョウスケを苦しめる。
息ができない、呼吸を整えたい、と思った。
が――

『とったぞ！』

――ソウルゲインが拳を振り上げていて、そんな余裕をキョウスケに与えない。
息が詰まったまま操縦桿を動かす。
Ｍｋ－？は地面を転がって、ソウルゲインの打ち下ろしを避けた。
悲鳴を上げて、アスファルトに亀裂が走り、拳型に陥没する。

『逃がさん！』

ソウルゲインは拳を引き抜くと、前腕部を回転させ始めた。
高速の前腕部横回転。回転や捻りを加えることで貫通力が増すのは良く知られていることだ。銃火器の類の弾もらせん回転を与えることで貫通量を得ている。それを、ソウルゲインは前腕部で行っていた。
先の打撃は回避したが、まだＭｋ－？は地面の上に仰向けの状態だ。

『玄武剛弾！』

天元を突破しそうな勢いで、アクセルはソウルゲインの回転する拳を振り下ろしてくる。

もう1度転がって避けようか。駄目だ間に合わない。Ｍｋ－？が動くよりも早く、ソウルゲインの拳に抉られるのは目に見えていた。

――アクセルめ、やってくれる……！

必勝のモーションパターンを逆手に取られ、一瞬で追い詰められるとは夢にも思っていなかった。

特機の動きは普通鈍い。ＰＴに圧倒的に劣る機動性は、特機の巨体とパワーの代償だ。だがソウルゲインの動きは機敏で、高機動ＰＴには及ばないが、並のＰＴなら軽く凌駕する動きのように思えた。

伊達に隊長を張ってはいないということか？　キョウスケは内心でアクセルを認めつつも、黙って操縦桿のトリガーを引いていた。

ソウルゲインのパンチを躱した時に武装選択しておいた。両肩コンテナのハッチが開放される。

アヴァランチクレイモア。

火薬入りのチタン製ベアリング弾がコンテナから発射された。

『なっ……！？』

至近距離からの銃弾の雨だ。拳が到達するよりも早く、ベアリング弾はソウルゲインに直撃する。青い装甲に小さな穴ができ、火薬

に引火して大爆発を起こした。
ソウルゲインは胴体装甲を大きく抉れる。吹き飛ばされて背中から地面に落下した。すぐには起き上がれないだろう、その隙にキョウスケはＭｋ－？の体勢を立て直す。
関節部が嫌な音で軋んでいる。
至近距離でのアヴァランチクレイモア、使うのはこれで2度目だ。しかも今回は位置取りもできない緊急使用だったため、爆発によるＭｋ－？へのダメージも前回より大きい。
装甲が焼かれているのは以前と同じだが、関節部にまでダメージが及んでいた。
機動に違和感がある、破損状態を分かり易く表現するなら小破といった所か……コンテナ内のベアリング弾に引火しなかっただけ運がいい方かもしれない。
キョウスケは愚痴をこぼしながらＭｋ－？を立ち上がらせた。

『やるな、ベーオウルフ』

ソウルゲインが起き上がってくる。
深手には違いないが、ソウルゲインはまだまだ戦えそうに見えた。

『とっさの判断と思い切りの良さ……よもや、あんな手を使うとは思ってみなかったぞ。
やはり貴様は一流だ。ここで殺すのが惜しいぐらいにはな』
「ぬかせ」

Ｍｋ－？の5連チェーンガンが唸りを上げた。
しかし徹甲弾のつぶては空を切る。ソウルゲインは地面を蹴って、大きく飛翔していた。
キョウスケは銃口を空中に向け、再びトリガーを絞る。
空中で動く敵に対しチェーンガンの弾道はバラけ、命中すること

はない。

『飛び道具はこちらにもある！　青龍鱗ッ！』

ソウルゲインの掌に青いエネルギーが収束し、撃ち出された。

Ｍｋ－？はスラスターで移動し、青い波動を回避する。

ソウルゲインは着地すると、Ｍｋ－？と一定の距離を保ちながら走り出す。

２機の戦いは、建物を盾にしながらの射撃戦闘へと発展した。

Ｍｋ－？のチェーンガンとソウルゲインの青龍鱗が、互いを狙いながら回避され、絵里阿町の街並みを破壊していく。コンクリも鉄筋も撃ち抜かれる。巨体の接触も伴って次々と倒壊していった。

２人は無言のまま撃ち続けた。

辺りには、Ｍｋ－？とソウルゲイン以外に動く物はない。

人影は……ない。

キョウスケはエクセレンとアルフィミィの安否が心配だった。

ああ見えてもエクセレンは元軍人だ。きっと、２人で無事に生き延びているはず。絶対に、生き延びているはず。そう信じて、キョウスケは引き金を引き続ける。

撃たなければ、自分がやられるのだ。

――だが、俺は正しいのか……？

疑問が頭をよぎり、青龍鱗がＭｋ－？の頬をかすめる。

撃ち合って、崩れていく建物。もしかすると、その中に生き残りがいるのではないか？　だとすれば、護るための戦いが、護るべき人を殺していることになるのではないだろうか？

青龍鱗を回避したＭｋ－？の足が、瓦礫を踏みつぶした。

この中に人が埋もれていないとも限らないのだ。
助けるべき人たちを、自分の戦いが殺してしまっているとしたら……考えてしまうと、戦えなくなる。
キョウスケは心を凍らせる。
アクセルとの戦闘が、キョウスケを戦争をしていた頃へと急速に引き戻していた。
戦争に犠牲はつきものだった。
分かっていた。
この戦闘でも犠牲者は絶対に出る。
分かっている。
何度も、何度も目を背け続けてきたことだった。

――……慣れるくらい繰り返してきたことだ

手に馴染む操縦桿と引き金、爆音、銃声、硝煙の匂い……それでも、人の悲鳴は耳が慣れてくれない。
悲鳴を生み出す、アクセルの行為を許すことはできなかった。
アクセルを倒すために銃を撃つ。
撃てば撃つほどに思う。
結局、キョウスケはアクセルと同類なのではないか？
考えても仕方がない……キョウスケは考えることを止めた。

アクセルを倒す。
そのためにトリガーを引き続け、ついにチェーンガンの弾が尽きた。
カラカラカラ、と空撃ちの音が響く。緊急時だったので交換用の弾倉は用意できなかった。常に携帯させているリボルビングバンカーの弾薬だけを交換した。

シリンダーがセットされ、撃鉄が上がる。

「アクセル・アルマー、覚悟！」

『来い！　返り討ちにしてくれる、これがな！』

緊迫した空気が両者の間に流れる。

Ｍｋ－？はリボルビングバンカーを、ソウルゲインは拳を構え、突撃の構えを見せる。

一触即発。

次の接触でかたをつける。

加速のため、Ｍｋ－？のブースターに火が灯った　――　その時。

Ｍｋ－？の肩が爆発した。

正確には肩部分マウントされてるアヴァランチクレイモア搭載のコンテナが爆発した。

至近距離の爆発にＭｋ－？は膝を地面についてしまう。

――　な、なんだ！？

頭部に搭載されたメインカメラが破損したのか、モニターの一部が黒く抜け落ちている。爆散したのは左肩のコンテナで、操作に対して左腕が反応しなかった。コンテナが閉鎖状態だったため、被害は最小限で済んだのは不幸中の幸いだったが、Ｍｋ－？のダメージは深刻だ。

レーダーを確認すると、付近に敵機が確認できる。

アクセルとの戦闘に気を取られ、周囲への警戒がおろそかになっていた。

「ぬかった……！」

サブカメラもフル稼働させ、モニターの映像を復帰させる。

空中に女性型の特機が浮いていた。

「アンジュルグ」と表記されたその特機に、キョウスケは攻撃されたようだ。

アンジュルグは手に何かを持っている。

それはボロボロにされ、動かなくなった紅いゲシュペンストＭｋ－？・改だった。持ち運びやすいように、四肢と頭部を切断され、胴体部分だけ残されている。ゲシュペンストのコックピットは胴体部分にある。コックピットは無事であろう2機のＭｋ－？・改を、アンジュルグは両手に抱えていた。

それらはキョウスケにとって見覚えのある機体だ。

キョウスケの部下 ――― タスクとアラドの乗っているはずの機体だった。

『……Ｗ17、貴様、一体何をしている？』

不機嫌そうな声で、アクセルはアンジュルグのパイロットに話しかけていた。

Ｗ17。その名にキョウスケは覚えがあった。

ホワイトスター攻略の際、アクセルが連れていた女性パイロットの名前だ。

『隊長を救援に来ました』

『なんだと？』

『ベーオウルフの動きを封じる材料を入手しました。これで隊長の

勝利は確実なものになります』

Ｗ１７がキョウスケに通信を送ってきた。

『ベーオウルフ、これは警告だ。
一歩でも動いて見ろ。貴様の部下の命はない』

「なに……？」

『聞こえなかったか？　動けば、貴様の部下は殺す、と言ったのだ』

Ｗ１７が淡々と言った。

アンジュルグの両手にはタスクたちのＭｋ－？の胴体が持たれている。戦闘能力は既に失われているから、Ｗ１７がその気になればいつでも手を下すことができるだろう。

――人質か……舐めたマネをしてくれる

キョウスケの心は平静だった。

タスクとアラドはキョウスケの大切な部下だ。

しかしそれ以前に２人は軍人だ。戦場での敗北は死を意味することも理解している。敵に引き金を引く以上、自分たちも撃たれ、最悪死んでしまう覚悟もできている。

撃っていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ。

タスクたちはこの戦闘に敗れた。

普通、それは死を意味する。

生存を確認できるなら躊躇もするが、２人の機体は無残にバラバラにされ大破している。コックピットブロックは残っているから中で生きているかもしれないが、死んでいる可能性の方が高い。

今は生死不明の味方に気をやっている場合ではない。

ただでさえ、Ｍｋ－？はソウルゲインとアンジュルグという、２機の特機に囲まれている状況なのだ。

――タスク、アラド……すまん、許せ……！

戦いは非情、そんなことは分かっている。
キョウスケはアンジュルグをロックオンした。不意を突き、リボルビングバンカーでコックピットを撃ち抜いてやる。
しかしキョウスケの動きをまるでけん制するように。

『Ｗ１７、貴様、俺の顔に泥を塗るつもりか？』

キョウスケの心中を知ってか知らずか、アクセルがＷ１７に対し声を荒げていた。

『人質だと？　そんなもの無くとも俺は敗けん。余計な手出しはするな』
『隊長、作戦を優先してください。単機でベーオウルフを撃破するメリットはありません。人質を取られれば、人間は心の動揺や躊躇が発生し、戦力がダウンするとのデータがあります。ベーオウルフを確実に撃破するには有用な手段です』
『……本気で言っているのか？』

怒りと呆れの入りまじったような声をアクセルは上げる。

『所詮は人形か……いいだろう、人形には人形らしく接してやる。おいＷ１７、命令だ』
『はっ』

『俺の目の前から失せろ。今すぐにだ！　でなければ、俺がお前を消す！』

アクセルの言葉にＷ１７は、しかし、と反論する。

『命令の意味が理解できません。隊長を護れと、レモン様から命令を受けています。Ｗナンバーズにとって、レモン様の命令は最上位命令に位置しています』

『では、俺の命令に背くと言うのか？』

『はい。ですがレモン様の命令だからだけではありません……』

Ｗ１７の声の雰囲気が変わった。

注意して聞かなければ分からない。

それ程に小さく微妙な変化だが、Ｗ１７の声は小さく震えていた。

まるで初恋の相手に告白する乙女のように、不安に押しつぶされそうになりながらも、勇気で声を絞り出しているような。

そんな印象をキョウスケに与える声で、Ｗ１７は言う。

『……私は、隊長に死んで欲しくない。貴方を生き残らせるためなら、どんな手段も使うと誓った……』

『……そうか。すまなかったな、Ｗ１７。貴様を人形呼ばわりしたことは謝罪しよう。

そして、許せよ。俺は貴様の期待にそうような男ではないのだ、これがな』

アクセルの言葉の後、ソウルゲインの両前腕部が竜巻の如く回転し始めた。ヴィィィィン、と空気を震わせる高速回転はキョウスケの耳にも届き、その発生源である拳が上腕から切り離されて打ち出された。

ソウルゲインより分離された拳が、アンジュルグに高速で肉薄す

る。

グルンガストシリーズのブーストナックルに良く似ている。違うのは回転が加わっていることと、軌道が直線ではなく弧を描いてアンジュルグを捉えたことだった。

タスクたちのＭｋ－？を抱えているため回避が遅れ、アンジュルグは前と後ろから、ソウルゲインの玄武剛弾の直撃を受ける。明らかに、無防備だったアンジュルグの装甲が、拳の形に凹んだのが見て取れた。

『隊長……な、ぜ……？』

衝撃でＷ１７の意識が途絶えたのか、アンジュルグは爆散はしなかったが、浮力を失って落下していった。轟音が耳に届くが、建物が邪魔でアンジュルグの姿は見えなくなる。

『Ｗ１７、覚えておくといい』

飛翔していた拳をソウルゲインに接続し直し、アクセルはＷ１７に語りかけていた。

『男には引けない戦いがある。意地がある。下らない生き物だ、貴様は俺のようになるなよ』

「……アクセル」

『待たせた、そして失礼したなベーオウルフ。見苦しい所を見せた』

ソウルゲインが再び徒手空拳の構えを見せる。

意地、か。キョウスケはアクセルの独白に共感を覚え、彼の取った行動の不可解さを何となく理解することができた。

戦場で意地は必要なものだろうか？

肥大化しすぎたそれは、いつか自身の首を絞め、窮地へと追いや

るかもしれない。
だが意地は人間に力を与えてくれる。決して譲れない意地があるからこそ、人間は生き残ろうと戦場で躍起になり、限界以上の力を引き出すことだってある。
キョウスケだってそうだ。
エクセレンやアルフィミィを護る。これは決して譲れない、キョウスケだけの意地だ。
アクセルにだってあるのだろう。
心に決めた戦いは、彼自身の手によって決着を迎えなければならない。
そんなルールがアクセルの中にはあるのかもしれない――今のアクセルは兵としては失格だが、間違いなく戦士だった。
不快感はない、むしろ好感すら持てる。

「アクセル・アルマー……俺たちの出会った場所が戦場でさえなければ……」
『ああ、俺たちは良い友人になれていたかもしれないな。しかし、ここは戦場だ。戦場でアクシデントは付き物……全力でいく。悪く思うなよ、ベーオウルフ』

Ｍｋ－？の左腕部は完全に機能停止している。アヴァランチクレイモアを積んだコンテナも１つ失い、ギリギリで保たれていたＭｋ－？のバランスは崩れてしまっている。
Ｍｋ－？はテスラドライブの力を借りて、やっと直立できるバランスを保てていた。今は重量が右半身に集中し、直立することも難しい。
立つことはできない。
だが飛ぶことはできる。
重量やバランスなど、大出力ブースターで帳消しにしてやればいいのだ。ソウルゲインにも装甲が大きく抉れ、ダメージは大きく残

っている。まだ勝機はある。

「……幕引き（ショーダウン）だ、アクセル・アルマー」

『俺か、それともお前のか……答えを知る権利は、最後まで立っていた者にだけ与えられる』

キョウスケはリボルビングバンカーのリミッターを解除した。

撃鉄が焼き付き吹き飛んでも構うものか。装填された6発分の威力を、全てソウルゲインに叩き込む。

遠慮はしない。

躊躇もしない。

それがアクセルへの礼儀というものだ。

「勝負だ！」『勝負だ！』

2機の巨人は、最後の戦闘を再開する――……

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～孤影激突　２～（後書き）

＜次回予告＞

ただ冷酷に
ただ冷徹に
引き金を引き続けてきた２人の男
１人は愛する女と家族のために
１人は腐敗していく世界を変えるために
譲れないものがあるからこそ、２人の男は理解しあいながらも、
殺しあう
そんな２人の戦いも終結を迎える
その先には何がある？
現実を見るがいい

次回、鋼鉄の駄狼Ｒ２「発狂」
地獄とは、人の世のことを指すのだろうか？

ボトムズ風次回予告も慣れてきたけど、質が上がらない。ボトムズの次回予告の３０秒ほどが、他作品の１話分の内容に匹敵すると思っている自分は、きっと異能者ではなく最低野郎中毒者です（笑）

さてはて、次回、決着がつきます。
第２章もクライマックス。
ここからさらに残酷描写も増えます。苦手な人は注意してください。

ではではノシ

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～発狂～（前書き）

＜注意＞
この話以降の第２章では残酷描写が強くなります。
苦手な人はご注意ください。

炎に彩られた絵里阿町で。
２機の鋼の巨人が最後の一撃を繰り出そうとしていた。

１機は髭が特徴的な青い格闘戦用の特機　――　ソウルゲイン。
もう１機はキョウスケ・ナンブの駆る、ゲシュペンストシリーズの最新機　――　ゲシュペンストＭｋ－？だ。
戦場となった絵里阿町に立つ２機は無傷ではなく、戦いによって傷を負っていた。
ソウルゲインは胸部から腹部にかけての装甲が削げている。至近距離で爆発に巻き込まれたように、厚かった装甲は薄くいびつに歪んでいた。これは推測にすぎないが、一転集中の強い攻撃を受ければ、容易に貫かれてしまうだろう。
一方、ゲシュペンストＭｋ－？は左腕部が動いていない。
加えて右肩には装備されているコンテナが左肩には存在せず、Ｍｋ－？の重心は大きく右側に傾いていた。
キョウスケは、重心の歪みを、Ｍｋ－？の大型ブースターによる飛翔で解消していた。

――　いける！

今のＭｋ－は直立……待機姿勢すらままならない。元々Ｍｋ－？は超大型のパイルバンカーや炸裂弾入りのコンテナを積み込んでいて、非常にバランスを取ることが難しい機体だ。従来機ではありえ

ないアンバランさを、テスラドライブという重力制御装置で解消していたのがキョウスケの愛機 ―― ゲシュペンストＭｋ－？である。

しかし今のＭｋ－？には、本来両肩に装備されているはずのコンテナが右肩にしか装備されておらず、テスラドライブでも姿勢を安定させることは難しい。

立ち上がることができなければ、Ｍｋ－？はただの的だ。

しかもソウルゲインは特機……動かなければ即撃破されるだろう。

しかしＭｋ－？は立つこともできず、あるくこともできない。

なら、飛べばいい。

それがキョウスケの選択した答えだった。

―― まだ、俺とＭｋ－？（おまえ）は戦える！

背部の巨大ブースターで機体をカットばし、ソウルゲインへと突撃するＭｋ－？。

左腕は動かず、残っているクレイモアのコンテナは残り１個……Ｍｋ－？に残されている武装は右腕のリボルビングバンカーしかない。キョウスケは最も使い慣れ、信頼を置いている武器に全てをかけていた。

リボルビングバンカー……俗に言うパイルバンカーである。

通常のものよりも巨大な盾殺しで、キョウスケの多くの敵を破ってきた。

ソウルゲインの装甲が健在なら無理かもしれないが、今ならやれる。リボルビングバンカーに搭載された６発の炸裂弾を全て使えば、特機であるソウルゲインと言えども撃破は可能だろう。

半壊し、数か所か黒く映らなくなったモニターに、肉薄してくるソウルゲインが見えた。

『けりを付けるぞ、ベーオウルフ！』

アクセルが吠える。

Ｍｋ－？を、猛烈な回転を加えたソウルゲインの拳が狙っていた。

玄武剛弾という、ソウルゲインの技の１つだ。本来は拳を腕から切り離して使うはずの攻撃だが、分離させずに、Ｍｋ－？を直接殴りつぶすつもりらしい。

Ｍｋ－？の倍近い全長のソウルゲインの一撃……もらえば、間違いなくただではすまないはずだ。

だが、

「来い、アクセル・アルマー！」

キョウスケにとって、死線とも言えるその距離は、逆に望むところだった。

接近戦はキョウスケの１８番だ。至近距離での殴り合いなら、誰にも負けない自信があった。現にキョウスケは、斬艦刀という大剣を持つ特機と互角に接近戦を繰り広げたこともある。

ソウルゲインにだって引けは取らない。そう、絶対に。

――俺の距離だ！

ソウルゲインの懐に飛び込んだＭＫ－？は、リボルビングバンカーの撃鉄を上げる。リミッターを外した切っ先を突き込む場所はただ１つ。装甲が薄くなっているソウルゲインの胸部だ。

『でいいいやぁぁっ！！』

アクセルの怒号と共に、ソウルゲインの玄武剛弾が打ち下ろされた。
頭部ごとＭＫ－？のコックピットを撃ち抜く軌道だ。

――今だッ！！

操縦桿を動かし、キョウスケは行動を入力した。
ここ１番でモノを言う、キョウスケ得意のモーションパターンだ。
Ｍｋ－？は玄武剛弾かい潜り、動かない左肩でソウルゲインにタックルを敢行した。ショルダータックルから敵の体勢を崩してリボルビングバンカーを叩き込む、キョウスケの最も得意とする攻撃パターンだった。

『なっ！？』

攻撃を回避され、アクセルが驚きの声を上げた。
リボルビングバンカーの切っ先がギラりと光る。Ｍｋ－？の腕を突き出せば当たる、そんな距離にソウルゲインの体があった。

「零距離、とったぞ！！」

勝利を確信し、キョウスケはバンカーを振るう。
切っ先がソウルゲインの装甲を抉る。
トリガーを引けば炸薬が連続で爆発し、ソウルゲインの胸に風穴が空く。
……はずだった。

「ッ！？」

信じられない光景に、キョウスケは驚愕の色を隠せなかった。
切っ先がソウルゲインを命中せず、空を切っている。

――馬鹿な！？

外した……リボルビングバンカーで攻撃した時、重心の偏った右腕を振るったため狂ったようだった。ソウルゲインへの体当たり……突撃の勢いが殺されたのも悪かった。
突撃で維持していた平衡が崩れ、機体が右側に大きく傾き、結果として切っ先はソウルゲインからそれる。
ＭＫ－？は体勢を維持できず、アスファルトの上に片膝をついて倒れた。

『勝機！』

間髪入れずに、ソウルゲインの玄武剛弾が迫る。
回転する鉄拳が、まるで巨大な弾丸のようにキョウスケには映る。
肉薄する拳が、一瞬でコックピットのモニターを埋め尽くした。
動けなかった。
意識ははっきりしているのに体がそれに着いてこない。視界を占領した玄武剛弾の回転が妙に遅く感じられた。肉眼で捉えられないぐらいの高速回転なのに、まるでスローモーションでも見ているかのように、ゆっくりと拳が回転している様がキョウスケの網膜に焼きつく。
しかし体は反応しない。
機体も動かない。

直後、キョウスケ眼前のモニターが暗転し、強烈な衝撃が来る。
ヘルメット越しだが、コンソールに激しく頭を叩きつけられ。
衝撃の次はモニターに亀裂。
モニターは砕け、コックピットハッチが音を立てて歪む。
コックピットとしてキョウスケを包んでいた金属の塊が、人を無慈悲に飲み込む津波のように迫ってくる。

ソウルゲインの玄武剛弾はゲシュペンストＭｋ－？の頭部を砕いていた。頭部を破砕した巨大な鉄拳が、キョウスケのいる胴体にめり込んでいる……

『俺の、勝ちだ！！』

アクセルの勝利の雄叫びが響いた。
それを最後に、キョウスケの意識は途絶える。

「絶対死なない男」キョウスケ・ナンブの敗北の瞬間を、俺は目の当たりにしたのだ　――……

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～発狂～

俺の見た光景はまさに悪夢だった。
希望の白を黒の絶望が塗りつぶすように。
平穏な時間はもろくも崩れ去る……まるで儚い夢のように……。

しかし悪夢は終わらない。

「キョウスケさん！」

「しっかりしてくれよ！」

キョウスケはまだ生きていた。

聞き慣れた男たちの声が、キョウスケの意識を呼び起こす。

戦場となった絵理阿町でタスクとアラドが、キョウスケの名前を呼んでいた。元はビルだった瓦礫にキョウスケは背を預けている。町の炎の勢いは弱まっていて、もう、大きな爆発音や銃声は聞こえてこなかった。

キョウスケの頬には額から伝い落ちた血の跡が残っている。燻る炎の熱で血は乾燥し、額には赤く染まった包帯が巻かれていた。

タスクたちが応急処置を施したようだったが、頭からの出血以外、特に目立った外傷は見当たない。

キョウスケの眉尻がピクリと動き、ゆっくりと瞼が上がる。

その光景を、俺は空から見下ろしていた。

俺の名前はキョウスケ・ナンブ。

何故か高校の密集する地域「エリア」で貧乏学生をしている、しがない一般人だ。

今、俺は有栖　零児の奥義「夢想転生」の力を借りて、オータムの中にある過去生を覗いている。

俺　――　キョウスケ・ナンブの過去生を、だ。

不思議なことに、俺にはキョウスケの考えていることが理解でき

た。もしかすると、ここが俺の過去生であることが関係しているのかもしれない。
薄雲のかかった思考……だが指を動かすことができる、息をすることができる、キョウスケを心配し顔を覗き込むタスクとアラドの顔が網膜に飛び込んでくる。

――また……助かったようだな……

体は痛む。しかし動かせない程ではなかった。しいて言えば頭痛が酷いぐらいだ。

「キョウスケさん！」
「よかった！　本当に、生きてて良かった！」
「お前たち……」

目を開けたキョウスケを見てタスクとアラドから歓喜の声を上がる。
彼らも負傷はしていて応急処置を施していたが、しっかりと五体満足だ。彼らの機体は大破して、コックピット周りしか残っていなかった。しかし、その惨状に不釣り合いな程の軽傷である。
それはキョウスケにも同じことが言えた。
視線を横にやると、すぐ傍にキョウスケの愛機の姿が見える。
首から上がねじ切られたように消し飛んでいた。厚い胴体の装甲板も歪み、大きく窪んでしまっている。ゲシュペンストＭｋ－？は、ソウルゲインの玄武剛弾で頭とコックピットを潰されていた。
大破した赤い巨人は横たわったまま動かない。

――悪運だけは……相変わらずだな……

潰れたコックピットから、外傷を負っているにしろ、生きたまま救出された。

統計を取ったものがいないため断言はできないが、奇跡的な確率ではないだろうか。

「大破したＭｋ－？を見たときは肝を潰しましたよ」

タスクが言う。

「コックピットも潰されてたけど、キョウスケさん1人が収まるくらいのスペースは残ってたんです。何とかしてハッチを開けて……キョウスケさんが助かったのはＭｋ－？の重装甲のおかげでしょうね」

「……そうか」

Ｍｋ－？に視線を向けるキョウスケ。

物言わぬ相方の、無残な死に体が転がっている。

またこいつに助けられたな、とキョウスケは心の中で感謝しつつ起き上がった。

頭痛と目まいが襲ってきて、タスクたちが心配して声をあげるが、キョウスケは構わずに質問する。

「タスク、戦況はどうなった？」

「……」

無言のまま視線を泳がせるタスク。

アラドも顔に影を作ったまま答えなかった。

「タスク……そうか、分かった」

2人の態度だけで、キョウスケは察することができた。

ぱちぱちと火が燃える音しか絵里阿町には響いていない。友軍のゲシュペンストが残っていたり戦闘が続いていれば、物寂しげな沈黙が続いているはずがない。助けを求める人の声も聞こえてこなかった。

つまり、全滅だ。

町の人間も、キョウスケたちの部隊も。

シャドウミラーに皆殺しにされたのだ。

喧騒とは程遠い静寂は、キョウスケにそれを痛感させるに十分だった。

「町の、人たちは……？」

それでも、キョウスケは確認せずにはいられなかった。

絵里阿町はキョウスケたちの町だ。キョウスケが、エクセレンとアルフィミィと暮らしてきた、これといって特徴のないごく普通の町だ。

だから確かめずにはいられない。

町の人は……エクセレンは、アルフィミィは無事なのか？

やはり、帰ってくるのは沈黙だけ。

「……もうすぐ、基地から救援が来ます……」

タスクがやっと口を開いていた。

「生存者の捜索はそれから行われる予定です……」

「エクセレンたちは……？」

「分かりません……姐さんたちを探す余裕はなくって……すいません」

「……気にするな。別に、お前が謝ることじゃない」

タスクの言い分は正しい。

2人はキョウスケを助け出し、介抱してくれていたのだ。

生存者捜索の余裕がなくても無理はない。

――エクセレン……アルフィミィ……

キョウスケはいても立ってもいられない思いだった。

絵里阿町は、キョウスケにとって見慣れた廃墟と化している。この廃墟の中で愛する女と娘が彷徨っているかもしれないのだ。1人だけじっとしている訳にはいかなかった。

「キョウスケさん、どうするんですか？」

絵里阿町に歩き出そうとするキョウスケにタスクが訊いた。

「エクセレンたちを探す」

「無茶ですよ！　それに危険です！　建物の崩落に巻き込まれたどうするんですか！？」

「なら、どうしろと言うんだ……じっとしていろというのか……！　エクセレンたちが助けを求めているかもしれないのに……！」

「でも……！」

タスクの言い分が正しい。

戦地や被災地で単独行動するのは危険だ。戦闘や2次災害に巻き

込まれる可能性が高いし、何より1人でできることには限りがある。
生存者の捜索、救助、治療……と分担すべき仕事もある。
人手が必要な以上、救援が来るのを待つべきだろう。
タスクの判断は正しいし、1人にできることはタカが知れている。
分かっている。
理解している。
しかし心は従ってくれなかった。
ざわめく。ざわざわと。探しに行かなければと、強い焦燥感に駆られる。

「俺はエクセレンたちを探す。お前たちは……好きにしろ！」

キョウスケは2人を置いて歩き出す。

「キョウスケさん！」
「お、おい、タスクどうするよ？」
「どうもこうもねぇよ！」

結局、2人はキョウスケに付いてきた。
エクセレンたちを探して、キョウスケたちは廃墟と化した絵里阿町を見渡す。
キョウスケが休暇の際、エクセレンたちとよく行った行きつけの料理店が見える。建物が崩落し、看板は炎の下に埋もれてしまっていた。人の気配はない……気の良い大将は何処に行ってしまったのだろうか？
食料品の買い出しをしていたスーパーマーケットも倒壊している。
アルフィミィと買い物に来ると、よくお菓子を買ってくれとねだられたのを思い出す。些細な思い出も瓦礫の下に埋もれてしまっている。
いつの日か、アルフィミィを通わせようと思っていた学校は無事

だった。
鉄骨で作られているからだろうか？　地震の時などには避難所になるくらいなので丈夫なのだろう、コンクリにはいくつも亀裂が走っていたが、全体の景観は残されている。
しかし避難している人の姿は見えない。
代わりに校庭に転がっている影は沢山目に入ってきた。

「ひでぇ……！」

アラドが強張った声を上げた。
校庭には爆撃されたような大きな穴が開いており、その周囲にそれは沢山転がっている。動かない。学校に避難してきた所を、シャドウミラーに襲撃されたのかもしれない。
よく見れば、校舎の窓ガラスは全て割れている。中から人の気配は感じられなかった。
キョウスケたちは中を探索した。
動いているものは何1つなく、赤い水たまりに沈んだそれが幾つか見つかった。頭部を撃ち抜かれている。即死だ。どうやらシャドウミラーが、わざわざ機体から降りて、校舎に入り掃討したように見えた。
意味が分からない。
校舎を破壊すれば済む話なのに……キョウスケには、シャドウミラーの行動が理解できなかった。

――　アクセル……これがお前の望んだ世界か……？

アクセルは腐敗していく世界を憂いていた。
世界を正すために立ち上がる、素晴らしいことだと思う。

だがアクセルが取った手段に、キョウスケは決して賛同することはできなかった。
戦争が生み出すものは、結局、いま目の前に広がっている惨状なのだ。

――悲劇か……こんなもののために、俺は戦っている訳ではない……

しかし戦争をすれば、惨状は避けては通れない。大義名分を大仰に掲げても、キョウスケの戦いは必ず人を殺す。
空しさがキョウスケの胸を満たす。
キョウスケたちは校舎を出て、絵里阿町の探索に戻った。
町にはまだ炎が燻っていた。
硝煙と黒煙に混じった、人肉が焼ける匂い……吐き気を催さないのは、キョウスケが訓練された軍人だからだろう。
目を背けたくなるような現実が広がっている ――……

キョウスケの足は、自然に自宅の方へと向いていた。

無事に残っている。そんな淡い期待は容易く打ち砕かれた。
何も残っていない。
倒れて建築材が燃えていることすらなく、キョウスケの自宅は消し飛んでいた。アシュセイヴァーのビーム砲が直撃したのかもしれない。残っている土地は黒く焦げ、煙だけが立ち上っている。

思い出の詰まった家は灰になっていた。

「キョウスケさん……」

かける言葉が見つからない。そんな顔でタスクとアラドはキョウスケを見ていた。

キョウスケは返事をせず、ひたすら探索を続ける　――……

どれだけ探し回っただろうか？

基地から救援が到着し、生存者の捜索が始まった。

キョウスケたちには基地に帰還する命令が下っていた。

しかし　――

「俺はエクセレンを探す……お前たちだけで先に戻っていろ」

「キョウスケさん、でも……」

「いいから。俺の我がままに、お前たちまで付き合う必要はない」

――　キョウスケは命令を無視し、タスクとアラドだけを先に帰還させる。

基地から派遣された捜索隊に混じり、たった1人で捜索を続けるキョウスケ。

どれだけ時間が経過しただろうか？

分からない。

時間を確認するものをキョウスケは持ち合わせていなかった。

ただ日は沈み始め、青空を夕闇が覆い始めた頃……キョウスケは見つけた。

「これは……」

ある倒壊した建物の前に、それは転がっていた。
ハートの形をした、ロケットペンダント　――　キョウスケが、アルフィミィにプレゼントしたものと同じ型のものだった。
ロケットは銀色の表面を土埃で汚してしまっている。
キョウスケの背筋を冷たいものが奔った。
途端に胸の鼓動が早くなる。冷や汗が噴き出した。震える手で、キョウスケはロケットを拾い上げる。
恐る恐るロケットを開いて、中の写真を確認した。
アルフィミィが、キョウスケとエクセレンに抱かれて写っていた。
倒壊した建物に目を落とした。ロケットが落ちていたすぐ傍にある建物だ。
元はビル化何かだったのだろう、無数に砕けたコンクリが、瓦礫の山を形成している。
キョウスケは瓦礫の山から目が離せない。
無言のまま、瓦礫の山を掘り始めた。
１つ１つが人の頭ほどあるコンクリの塊をどけていく。細かな障害物は指で掘り出していく。キョウスケの荒い息遣いと作業音以外、その場で音を立てるものはない。
どける、掘る、のかす、掘る……延々と繰り返すうちに、キョウスケの指の爪は剥げ、手は血まみれになっていく。
それでも掘る。
ひたすら掘る。
がむしゃらの掘り続けて、キョウスケは見つけた。

見慣れた白い女の手　――　指には既婚者の証である白銀のリングがはめられている。

「エクセレンッ！！」

キョウスケが見間違えるはずがない。彼女の手だ。
埋まっている。彼女はこの瓦礫の下に。
助けなくてはという思いがキョウスケの中に噴き上がる。
キョウスケは見えている彼女の手を握り、引いた。
ずるり。
そんな擬音が聞こえてきそうなくらい、彼女の手は瓦礫の中からあっけなく抜ける。
彼女の手は、間違いなくキョウスケの手に握られていた。
ただ、手首から先が無かった……。
無かった……。
キョウスケの中で何かが弾ける。

「うおおぉおおおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉ　――――――――！！」

キョウスケの絶叫が、日が落ちて炎で灯る絵里阿町に木霊する
――……

その様を、俺は見ていた。
俺が見ているのは、俺の　――　キョウスケ・ナンブの過去生。
オータムの中に記憶されている俺の過去は正に悪夢だった。
発狂してしまいそうな、信じがたい光景が俺の眼下で繰り広げられている。

エクセレンが……死んだ。
キョウスケが涙を流して泣く様を俺は初めて見る。目から尽きることなく流れる液体を、俺も心の中で流していた。
涙で心を湿らせながら思う。
夢なら覚めてくれ、と。

だが悪夢は終わらない。
これは俺の過去生だ。
キョウスケが生きている限り、この悪夢が終わることはない。

そこで俺の視界が暗転した。
俺を包んでいる浮遊感が渦を巻くのも感じる。
1度、オータムの記憶を覗いた時に感じた感覚だった。
どうやら、場面がまた変わるらしい。
いつまで、俺はキョウスケの地獄に付き合わなければならないのだろうか ――― とその時。
声が聞こえた。

――― 全ては 静寂なる世界のために

耳ではなく頭に直接響く、聞き慣れたあいつの声だ。
空耳だと思いたい。
なす術もなく、俺は浮遊感の渦に飲み込まれていく ―――……

To be continued——……

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～発狂～（後書き）

＜次回予告＞

次回、鋼鉄の駄狼Ｒ２「変貌」
そして、彼は言った。

次回は第２章のクライマックスです。
残酷描写ありなので苦手な方は気を付けてください。
はっきり言って、内容はエグイものになりそうです。
こんな拙作ですが、よろしければお付き合い下さい。

俺は見たことのある研究所へと飛ばされていた。

浮遊感の渦が収まり、視界が開けると、青い髪の女性が空中に向かって話しかけているのが見える。

「どうですか？　これだけいれば十分でしょう？」

俺が彼女を見間違えるはずもなかった。

青い髪の女性の名前はオータム・フォー。俺の見ているキョウスケの過去生はオータムの中に記録されたものだ。オータムの中にあるキョウスケの過去生から、彼女の過去の記録へと、俺は再び迷い込んでいた。

実体のない傍観者にすぎない俺は空中に浮いている。

彼女も空中へと話しかけていた。

しかし彼女の声は俺に向けられたものではない。

「どうなのですか、リバース？」

オータムは何もない空間に向けて、自分の背後を指さしながら尋ねていた。

彼女の背後には広い空間が広がっており、薄布を敷いただけの仮の寝床に沢山の人が寝かされていた。

子ども、成人、老人　――　男も女も、皆等しく同じ寝床に横になり、首からは体に必要な栄養を補うための点滴ルートが伸びている。誰も動かない。生きている証拠として、沢山の寝息だけが合わさり広い空間に小さな不協和音を響かせている。

俺は知っていた。

あの人間たちは、オータムが人工子宮「ウーム」を使って再生させたものだ。

以前覗き見た彼女の記憶では、ウームの欠陥かそれとも遺伝情報のバグか、再生された人間たちに心は宿らなかった。

オータムがその事を嘆き、苦しんでいたことを俺は知っている。

ただ再生人間の数は、前に俺が見た時より大幅に増えていた。

「答えてください、リバース」

――リバース？　もしや　それは私の呼称でしょうか？

何もない空間から返答が返ってきた。

若い女性の声……耳ではなく頭に直接流れ込んでくる感覚は、奴の声の質に良く似ている。

「そうです。いつまでも名無しのままでは不便でしょう？」

オータムは空中にいる筈の、見えないリバースに向け笑顔を見せていた。柔和な笑み。前に見たオータムの雰囲気からは想像できない表情だった。

センチメントサーキットがそうさせるのか……話し相手がいるということは、長い時間を孤独に過ごしてきたオータムにとっては嬉しいことなのかもしれない。

――　オータム　私にとって　呼び名は大した意味はありませんよ

「でも、人間は相手のことを名前で呼ぶわ。そろそろ貴方との付き合いも長いし……いつまでも呼び名が貴方では寂しいでしょう？」

――そうでしょうか？　私は人間ではありません　人間の感性を理解するのは難しい

「そう……」

オータムの顔に影が差す。

声の主――リバースに喜んでもらえる。そう、彼女は考えていたのかもしれない。

しょ気るオータムに気を使ってか、リバースは淡々と言っていた。

――ありがとう

と。

――貴女が私に名を付けてくれる　それは感謝に値する　だからありがとう

「リバース。いいえ、私の方こそありがとう」

オータムの表情に明るさが戻っていた。

リバースは彼女にとって初めてできた仲間であり、友人だった。

仲間がいた経験は勿論ある……しかし、惑星「エリア」をシーズンから解放した後、その仲間たちは元の世界へと帰って行き、彼女はたった1人きりで惑星「エリア」に残された。

寂しかった。

辛かった。

人工子宮「ウーム」を用いて、全滅した人類を再生させる。

科せられた使命だけがオータムを支え、気づけば20年が経っていた。再生を成功させることもできず、アンドロイドであるオータムは死ぬことも叶わず、ただただ長い孤独に疲れ果てていた。

そんな時、彼女に手を差し伸べてくれたのがリバースだ。
だから、ありがとう。
俺には彼女の気持ちが理解できた。1人きりは辛い……そう感じることができるのは、オータムの機械の体に人間の心が宿っている証拠なのだろう。

「リバース、どうですか？　貴方に言われた通り、できるだけ多くの人たちを再生させました」

横たえられた人たちを示し、オータムはリバースに言う。

「ですが、やはり心は宿りませんでした……貴方の言う通り、肉体に心を持たせるには魂というモノが必要なようです」

――　ええ　魂あってこその肉体　そして心です

「それではリバース、魂の方はどうなっていますか？　私には魂の方はどうしようもないのです」

――　心当たりがあると言ったでしょう　もう　間もなくですよ
もう間もなく　器に入る魂は手に入ります

オータムの問にリバースはそう答えた。
魂は物ではない。魂を手に入れるなど、俺には到底理解できない言葉ではある。しかしオータムはリバースの言葉を鵜呑みにしているように見えた。
機械の体の弊害なのか、彼女は魂の概念を捉えそこなっているように思える。

「もうすぐ魂が手に入る。そうすれば、人類再生計画の成就が可能

――」

――そうすれば　再生された人間たちによる　悲劇のない世界が出来上がるのです

「もうすぐ……もうすぐなのですね」

神に祈るように胸の前で手を合わせ、オータムは感慨深げに呟いていた。

ええ、と返答するリバースの声が、俺の頭の中にも響いてくる。

――全ては　平穏なる世界のために

奴と似ている。しかし、どこかベクトルの違う言葉を最後に。

俺は再び浮遊感が渦巻くのを感じていた。

また、場面が変わるようだ。

これで3回目……いい加減に慣れた。しかし抵抗のしようがないというのは、どうにも癇に障るものだ。

とにかく、如何ともしがたいのは事実。

程なくして、俺の視界は暗転した　――……

●

あの日を境に、キョウスケ・ナンブは変わった。

エクセレンとアルフィミィを失った絵里阿町での戦闘から、既に3か月が経過している。

あの日、シャドウミラーは地球連邦に反旗を翻した。

地球全土を統一している軍隊に、いかに大きいとはいえ連邦の1部隊が刃向ったのだ。飼い犬に手をかまれるとは正にこのこと。当然、地球連邦が黙っているはずもなく、シャドウミラーに対して全軍を上げての掃討を開始する。

しかしシャドウミラーは数の不利を百も承知だった。

連邦の大部隊とは正面からぶつからず、各地でゲリラ的な戦闘を散発させる。

数で攻め込めば逃げ出され、油断したところを背中から撃たれる。

そんな攻防を地球連邦はシャドウミラーに強いられていた。おそらく、連邦上層部にシャドウミラーの放ったスパイがいるのだろう。でなければシャドウミラーが連邦の行動を読み、逃げ続けられる理由が見当たらない。

散発的な戦闘と逃走を繰り返すシャドウミラー。

劣勢に見えなくもない行動だが、実質イニシアチブを取り、戦闘をコントロールしているのはシャドウミラーだった。

延々に続く闘争。

奇しくも総力戦を選択しなかったことが、シャドウミラーの理想の世界を実現させていた……。

そんな3か月の出来事が、俺の頭の中に一瞬で流れ込んできた。

理解もできる。

シャドウミラーが絵里阿町から始めた戦闘は、もはや戦争と言っ

て遜色ないものに発展していた。

あの日――エクセレンとアルフィミィを失ったあの日。
キョウスケは声を上げて泣いた。
捜索隊が捜索を続けて、少ないながら生存者は発見されていた。
一握りの生き残りもほとんどが重症者で、病院のベットから起き上がれた者はおよそ半分しかいなかったらしい。
結局、エクセレンとアルフィミィの遺体は見つからなかった。
もしかしたら発見されていないだけで生きているかもしれない。
しかしキョウスケの淡い希望を打ち砕くように、彼はエクセレンの手首を見つけてしまっていた。
見間違えるはずもない白く美しい肌。
その指にはめられた白銀の婚約指輪と、アルフィミィにプレゼントしたロケットペンダント。
キョウスケに残されたのはそれだけだった。
愛機は破壊された。
家も焼け、残っていない。
現実と言う名のナイフがキョウスケの胸を深く抉った、あの日。

あの日から、キョウスケ・ナンブは変わっていた。

見るからにやつれ、基地内では1人でいることが多くなった。タスクとアラドが心配して寄ってくると、避けるように何処かに行ってしまう。元々少なかった口数はさらに少なくなり、他人と話すこ

とを忘れてしまったようにさえ思えた。
しかしキョウスケは軍人。
出撃命令が下れば、修理されたＭｋ－?を駆り戦場へと赴かなければならない。
戦い方も変わっていた。
元々、突撃と急速離脱を主体にした戦法を取っていたが、あの日以来、キョウスケの無謀な突貫は目に余るものになっていた。仲間の制止も一切聞かない。
突撃し、コックピットをリボルビングバンカーで撃ち抜く。そして戦闘能力を失った敵機に無意味に銃弾を浴びせ続けるようになっていた。
以前のキョウスケの突撃は、無茶には見えても何処かに勝算が見えていた。だが今は違う。
キョウスケの戦い方は、クレバーからクレイジーへと変わっていく。
まるで死に場所を探しているかのように……。

当然と言えばいいのだろうか、キョウスケの無茶な行動のツケはＭｋ－?の撃破と言う形で払わされることになる。
１度ではない。
出撃するたびにほぼ毎回だ。
タスクたちのフォローの届かない場所に突出し、包囲、一斉攻撃を受けて撃破されることを繰り返す。
しかしキョウスケは死ななかった。
毎回救出され、怪我も何故か軽傷で済む。
Ｍｋ－?の修理が完了し、何度も戦場に駆り出されるというループを延々と繰り返していた。
戦場で頼りになる「絶対に死なない男」は、ただの厄介者扱いされるようになり、いつしか戦死を望む声も上がり始める。

また、嗜む習慣のなかった酒も、煽るように飲むようになっていた。

明かりを消して、カーテンも閉め切った基地の自室で。

キョウスケは、今も買い込んだウィスキーをビンから直飲みしている。

首には形見のロケットペンダントが掛けられていて、チェーンにはエクセレンの婚約指輪が提げられている。エクセレンの遺骨が入った袋はいつも胸ポケットに忍ばせていた。

瓶を口から離し、ダンッ、と乱暴にテーブルに置く。

――何が……鋼鉄の孤狼だ……

キョウスケの思考が俺の中に流れ込んできた。

絶望、悲しみ、憎しみ……あらゆる負の感情で塗り潰された心が、俺の頭を浸食していく。色は黒だ。真っ黒……というよりは漆黒に近い色にさえ思える。

愛した女と娘を、キョウスケは守れなかった。

そのことを悔いる。後悔する。自分の力の無さを憎み、悲しみ、絶望する。

そして恨む。

何故、自分ではなかったのかと。

エクセレンたちは死ぬべきではなかった。自分だったのに。殺されるべきなのは自分……戦争に関わり続け、正義のためとは言えば聞こえはいいが、多くの命を奪ってきた自分が！

自分が！　殺されるべきだったのに！！

キョウスケは改めて理解し、初めて実感した。
大切な人を失うことはこれ程苦しいのだ、と。
キョウスケは愛する女と娘を護るために引き金を引き続けてきた。
だが引き金を引くたびに、キョウスケと同じ思いをする人間は必ず生まれるはずだ。
分かっていた。
だがどうしようもないと、目を背けてトリガーを引き続けてきた。
その罪は自分にこそあり、罰は自分に下されるべきなのに、エクセレンが犠牲にならなければならない理由は何だ！
悲劇だ。
世界は悲劇に満ちている。
殺し合いの果てにあるモノなど限られている。
多くの場合はきっとそれしか残らない。
戦争が終わり平和になったとしても、所詮は儚い人の夢だ、砂上の楼閣だ。平和という名の美しい湖があったとしても、その湖底には無残な悲劇が無数に沈んでいるに違いない。
そういうものだ。きっと、そういうものなのだと、キョウスケは受け入れてしまっていた。

あの日以来、キョウスケには戦争と悲劇が繰り返されるこの世界は、哭き叫び、助けてを求めている子どものように思えてしょうがなかった。

――……うるさい……

悲鳴や絶叫だけではなく、人の声でさえ煩わしいもののように感じられていた。
エクセレンを失ったキョウスケに、タスクたちは勿論、顔なじみ

の隊員や戦友から慰めの言葉が贈られる。
頑張れ、元気だせ、まだまだこれからだ――キョウスケを元気づけようとする声は多くあった。

――うるさい……！

労いや励ましの言葉がキョウスケの胸に楔として打ち込まれていく。
タスクたちにも戦友にも、まだ大切な人がいるのだろう。だが自分にはいない。エクセレンはもういない。その事がフィルターとなって、素晴らしい仲間たちの気遣いを、侮辱や嘲笑の類のように感じさせた。
妬ましい。
こんな感情、自分が抱くなどキョウスケは夢にも思っていなかった。

「……夢なら覚めてくれ……」

部屋にはキョウスケしかいない。タスクたちにも部屋に入ってこないように言いつけてある。返事が返ってくるはずもなかった。

「何が鋼鉄の孤狼だ……絶対に死なない男だ……不死の部隊だ……。大切な人1人護れやしない……俺の力など、所詮こんなものだ……」

自暴自棄。
今のキョウスケの姿を見た俺の脳裏にその言葉が浮かんだ。
兵士は戦闘で生まれる悲しみや憎しみ、罪を一生背負って生きていく。キョウスケの先人たちはそうしてきた。キョウスケだってそ

れに倣ってきた。
しかしあの日の1件は、キョウスケが背負うには重すぎるように思えてくる。
自由に積荷を下ろせれば、人生はどれだけ楽になるだろうか？
見ていられない。キョウスケの悲しみが俺の中に伝播してきて、目を背けたい気持ちになってきた　――　そのとき。

――　悲しいか？

声が聞こえた。
耳でなく、頭に直接響く男の声だ。
声の質問にキョウスケは思考で応える。悲しい、悲しいと……。

――　悲劇が憎いか？

声の問にキョウスケの中で炎が燃え上がる。憎い、憎いと……黒い炎がめらめらと。

――　我はお前の悲しみに惹かれ　この世界に来た
悲しみを知る者よ　悲劇を憎む者よ
我と共に　悲劇のない　完璧なる世界を創ろうではないか

「悲劇……のない世界……？」

キョウスケは呆然とした意識のまま声を上げていた。
あの日以前の冷静沈着なキョウスケであれば、声の存在に違和感を感じ警戒していただろう。
だが今のキョウスケの思考は、まるで汚泥のように濁り切っていた。多量の酒が入っているのも良くなかったのかもしれない。
キョウスケはこう答えていた。

「悲劇にまみれ……エクセレンやアルフィミィがいない世界など……」

キョウスケの唇が動く。同時に俺は耳を覆っていた。
聞きたくなかったからだ。
過去の俺が辿りついた結論が何なのか……この悪夢を見続けてきた俺には、うすうす分かりかけていたからだ。
声は聞こえない。
だが口の動きで、口走っていることが理解できた。

オレハイラナイ

耳を塞いでいても分かる。ここは俺の過去生だ。キョウスケの感情が流れ込んでくるぐらいなのだ。言動など目を瞑っていても把握できるに違いなかった。

不安感と恐怖が俺を包み込んだ。
それを裏付けるように、

――お前こそ　我の憑代に相応しい

声が言った。
声の姿は何処にも見当たらない。
聞き覚えのある男の声、見えない姿、直接頭に響いてくる声　――
――共通点が多すぎた。
奴との共通点、がだ。
これであの刺青が浮かび上がれば完璧だ。当たって欲しくない推理ではある。しかし嫌な予感しかしなかった。

「うっ……」

キョウスケが突然机に突っ伏した。
酒の飲みすぎで酔いツブれてしまったのだろうか？
ならいいのだが……しかし、神様は俺の予想を裏切るのが大好きらしい。
キョウスケはすぐに起き上がってきた。
邪悪と表現するのが正しいのだろう。そんな黒い雰囲気を纏っている。
目元には紅い水玉のタトゥーが浮かび上がっていた。

「全ては、静寂なる世界のために」

彼は言った。
そして俺は確信した。

声の正体と俺の過去生の結末を……。

声　――　ベーオウルフによる、本当の地獄絵図が幕を開けるのだと　――……

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～変貌～（後書き）

＜次回予告＞

ぶっ潰しても、切り刻んでも、焼き尽くしても……死なない
炎でむせ乾いた喉を、爆ぜて舞い散る血で潤す……奴は、そう
化け物だ
殺してみろ！
俺を！　この俺を！　殺してくれ！
男は哭いていた
悪夢だ……悪夢が男の前で繰り広げられていく
男は奇跡を望む
だがそれは叶わぬ願い
結論は始めから決まりきっていたのだから
そう、全てはふりだしに戻る

次回、鋼鉄の駄狼Ｒ２　最終回「ベーオウルフ」
過去は変えられない、だから人は未来の生きるのだ……

前書きを書きあげると６０００文字になってしまったため更新しました。
もう１回だけ続くんだよ（禁書目録風）。

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～ベーオウルフ～（前書き）

＜注意＞

今後の話には、残虐シーンが非常に多く含まれています。
また超展開、中二病（？）要素が非常に多いため、読む方の気分を害される可能性があります。
血が噴き出る、などの表現でも残酷で嫌だという方は、読まない方が無難かもしれません。

第３章開始時にあらすじを書くつもりなので、本話を読まなくても内容は理解できるようにする予定です。

夢を見ていた　――……

正確に言えば、悪夢のような光景を眼下にして、俺は呻いていた。
俺の名前はキョウスケ・ナンブ。
なぜか高校の密集する地域「エリア」で生活する、何処にでもいそうな貧乏学生だった男だ。
だった　――　なぜ過去形なのかは、今更説明する必要もないだろう？
俺は有栖　零児の奥義「夢想転生」によって、オータムの中に封印された俺の過去生を垣間見てきた。
だがそれも、もうすぐ終わる……明確な原因が判明しなくても、俺にはその事実を理解することができた……。

……うすうす勘付いてはいた。
俺の過去生　――　キョウスケ・ナンブの前世は悪夢だ。
そう。俺がうなされ続け、朝になるとぽっかりと穴が空いたように忘れていた、あの悪夢だ。
あの悪夢の中の俺は、仲間を殺し尽くし笑っていた。
そして　――……そうだ、俺は、もうすぐその光景を目の当たりにするだろう。
どうすることもできない。
なぜなら、俺は自分の過去生を見ているだけの、ただの傍観者にすぎないのだから　――……

●

キョウスケはゆっくりと机を起き上がると、自室から基地内の通路へと出ていた。

愛用の赤いジャケットを羽織り、少々やつれてはいるが、外見上はいつものキョウスケと変わらない。目元には紅い水玉タトゥーが浮かび、重々しい空気を纏っている以外は、だが。

ふらふらと幽鬼のように通路を歩く。

「あ、キョウスケさん！」

L字の左へと曲がる通路の角で、キョウスケはタスクとアラドに出くわした。

「部屋から出ても平気になったんですか　――　って、うわ！　酒くさ！」

「また飲んでたんすか？　いい加減にしてくださいよ、キョウスケさん！」

タスク、アラドの順にキョウスケに言葉をかけてくる。

「ほらほら、酔っぱらって外に出たら危ないですって！」

「そっすよ！　部屋で大人しく寝ててくださいよ！」

安定感の感じられないキョウスケの動きを2人は心配して言う。
だがキョウスケは返事をしなかった。
反応はしていた。伏せがちだった顔を上げ、2人の顔を覗き込む。
目元のタトゥーが2人の目にとまる。

「あれ？　キョウスケさん、タトゥーなんかしてましたっけ？」
「あっ！　もしかして、新しいファッシ　――」

突如、アラドの頭が爆ぜた。

文字通り爆発だ。
火薬の音ではなく、膨らませた風船が割れる音を強くしたような炸裂音に、アラドの言葉は遮られていた。
いや、言葉を発せなくなった、と言う方が正しいか。
頭が消えてしまったのだから。
血と肉と骨片が辺りに飛び散る。壁に扇状に血がアートを描く。
アラドの首から上は、まるで口に手榴弾をくわえ自決した兵士を連想させるように無くなっていた。むき出しになった頸動脈から血液が勢いよく噴き出している。
ゴトン、とアラドの体が力なく崩れ落ちる。

「ア、アラド……？」

タスクがアラドの異変に言葉を失っていた。アラドからの返り血で顔が赤く汚れている。顔から赤い水滴が零れ落ちるが、ふき取ることも忘れて、倒れたアラドに視線を釘づけにされていた。
頭のなくなった首から洩れた血液で、赤い水たまりがすぐに出来上がる。

「う、うわあああぁ　――――――　ッ？！」
「うるさい」
次の瞬間、タスクの左手が千切れ飛んだ。
恐怖の悲鳴が、激痛によって絞り出される絶叫へと変わる。左手は鈍い音を鳴らして壁にぶつかり床に落ちた。指先が微かに動いている。
「ッ　――――――　！！　な、なに……！？」
やがて悲鳴は声にならなくなり、へたり込み、血の噴き出る肩部分を押さえながらタスクは唸った。目を白黒させていて、状況が理解できていないのが見て取れる。
タスクは千切れた自分の腕と動かないアラドの体を交互に見て、最後にキョウスケを見上げていた。
「キョウスケ……さん……？」
それがタスクの最後の言葉になる。
首から上が千切れ飛んだ。
頭は独楽のように回転しながら壁に衝突し床に落ち、一拍おいて首から赤い噴水が上がる。一説によると、人間は首を切断されても数秒は意識を保つことができるそうだ。タスクの顔の表情が固まる。彼のデスマスクは恐怖と苦痛に歪んだ、筆舌に尽くしがたいものになっていた。
キョウスケは倒れたタスクの体を乗り越えて先に進む。まるで、そこに何もないかのように。
「全ては、静寂なる世界のために」

それが不死の部隊の壊滅の瞬間だった。

タスクたちは見えない力によって殺害された。
その正体を俺だけは知っている。
そうだ……不可視の力は、あの公園でベーオウルフが行使していた念力、または念動力というものに間違いない。
零児と小牟（シャオムウ）を殺しかけた、あの力だ。
俺は恐怖していた。
あのとき奴が全快だったなら、零児たちは惨殺されていたのだ。

「撃ち方構え！」

通路を悠然と闊歩するキョウスケに多数の銃口が向けられていた。
基地内では警報がけたたましく鳴り響いている。聴覚が麻痺しそうな程の大音量でアナウンスが流れていた。

『基地内で殺人事件発生！　犯人はベーオウルブズのキョウスケ・ナンブ大尉！　発見次第射殺せよ！　これは演習ではない！！　繰り返す　――』

基地内に無数に仕込まれたカメラで撮影されたのだろう。基地内の全隊員にキョウスケの射殺の命が下されていた。
身柄の確保ではなく射殺だ。

その理由は簡単だった。
１本道の通路はキョウスケを境に色が違っていたからだ。
キョウスケの背後の通路は色が赤く染まっている。血だ。おびただしい量の血液が、本来単色の通路の壁に赤と灰色のグラデーションを作り出していた。そして肉片と骨片、体の一部が欠けたモノが沢山転がっている。
対して、キョウスケの進行方向は綺麗な単色の灰色。つい数分前まで、キョウスケの背後の通路もこの色だったと言えば、流れた血液の量がいかほどが理解してもらえるだろうか？
粘性のある赤い液体がこびり付いた靴でゆっくりと前に進むキョウスケ。
軍服を着た兵士が自動小銃を肩に固定して、キョウスケに狙いを定めている。

「撃て！」

１人の掛け声を合図に、兵士たちの自動小銃が火を噴く。
フルオートで銃弾が小銃から発射された。
生身の人間なら原型を留めない程の量の弾幕がキョウスケに迫る。

「なっ！？」

だが銃弾はキョウスケの体に届かない。
キョウスケの眼前５０ｃｍ程の位置で銃弾は止まっていた。
念動力だ。事実を知っている俺以外には超常現象にしか映らないだろう光景に、兵士たちは当たり前のように驚愕していた。空中で浮遊している銃弾も、やがて回転と推力を失って次々と床に落ちる。

「ば、化け物め……！」

その言葉を最後に、兵たちは爆死した。
念動力で体内から圧力をかけられ、膨張力に耐えられなかった肉体が爆ぜたのだ。血と臓物が噴き上がり、雨のように降って通路を濡らしていた。5人いた兵の血肉で赤く染まった通路をキョウスケは歩く。

「人……」

キョウスケが呟いた。
いや声を発しているのはキョウスケの体だが、実際に喋っているのは彼ではない。
ベーオウルフの声が俺の耳に聞こえてくる。

「全ての悲劇の元凶……我の性、破壊……完成された世界には必要ない、悲劇を生み出す者も、感じる者も……」

奴の言葉と共に、キョウスケの感情が俺の中に流れ込んでくる。
暗い感情 ―― キョウスケの心のほとんどは深い悲しみに埋め尽くされていた。エクセレンを失った悲しみ……それだけではなく、目の前の惨劇を心の中で嘆いている。
体の自由をベーオウルフに奪われながらも、キョウスケには目の前の光景が見えていた。心の中で慟哭に近い叫びをあげている、やめてくれ、と。

―― なんだこれは!? 俺はなにをしている!?

自由にならない体、叶えられないキョウスケの叫びが俺の中でデジャヴする。

基地の中では既に多くの兵が死んでいた。
いや、キョウスケが手にかけていた。

――タスク……アラド……すまない……！

長年連れ添った大切な部下たちさえも、キョウスケは殺した。すまないすまないすまない……間欠泉のように湧き上がる罪悪感が、俺の中にもやはり流れ込んでくる。2人の死に様が脳裏にフラッシュバックする。
キョウスケも俺も吐き気を催していたが、俺には実体がなく、キョウスケは体の自由が利かない。

「と、止まれ！　ベーオウルフ！！」

気づくと、基地の司令官がキョウスケの異名を呼びとめていた。
厳つい顔を強張らせてキョウスケを睨んでいる。司令官の周りとその反対方向――キョウスケの背後には、彼の部下たちが自動小銃を構えて既に配備されていた。
キョウスケの体は挟み撃ちにされていて、逃げこめる場所はどこにもない。

「き、貴様、気でもふれたか！？　我が連邦がシャドウミラーと事を構えているこの時期に謀反か！？　さては貴様ァ……敵のスパイだな！？　そうに違いない！！」
「解せぬ」

キョウスケの口が動く。

「理想の世界……素晴らしき世界……新世界……どこにもお前たちの居場所はない。破壊は創造……創造は破壊……破壊され、無となり、太極に帰する……それこそ至福。なのに、お前たちは……」

「意味不明なことを！　えぇい、総員構えぃ！　奴を殺せぇ！！」

司令官の命令に従い、銃口の引き金に手がかかる。

その瞬間、その場にいた者全てが絶命した。

熟れたトマトを握りつぶすかのように容易く、赤い命の水が噴き上がる。兵も司令官も分け隔てなく、五体不満足にされ、瞬きする間に動いているものはキョウスケだけになった。

やめてくれ！　俺もキョウスケも心の中で叫んでいた。

これは戦いではない。ただ一方的に、圧倒的な力に蹂躙される。人が虐殺と呼ぶ行為そのものに思えてしょうがなかった。

だが、違う。

目の前の惨状は決して虐殺などではない。

処理だ。これは推測にすぎないが、ベーオウルフと人間の関係はきっと人と虫のようなもので、人が害虫を処理するように、ベーオウルフも人を処理しているだけなのだろう。

理解不能だ。

虫が人を理解できない様に、人も虫を理解できないのだ。

「解せぬ」

ベーオウルフはポツリと呟くと、キョウスケの体で基地内を再び徘徊し始めた。

――1時間後――

基地内で動いている者は、キョウスケ以外……誰1人いなくなった。

基地を壊滅させたベーオウルフは、キョウスケの体を使い基地の外に出ていた。

キョウスケの所属している基地は、日本本島から少し離れた埋立地に作られている。飛行場同様に、近隣住民への影響を考慮したことと、海路による物資の運搬をしやすくするためだ。

キョウスケの体は基地の近くにある崖の傍にいる。断崖絶壁、眼下２０ｍには荒波で削られた鋭い岸壁が見える。落ちればまず無事では済まないだろう崖で、ベーオウルフは基地を見ていた。

静かだ。

基地はベーオウルフにより完全に制圧されたにも関わらず、火の手は見えず、爆発音なども聞こえてこない。基地の外観もまったく損なわれていなかった。

しかし人のいる気配は一切感じ取れない……基地は完全に沈黙している。

「……」

ベーオウルフは基地から空へと視線を移していた。

空は一面の曇天に覆われていて、今にも一雨来そうな雰囲気を醸

し出している。水平線の向こう側、見えない場所では雷が落ちたようで空が光り、遅れて雷鳴が聞こえてきた。
しばらくすると小雨が降りだした。
小さな雨粒がキョウスケの体を濡らす。

「……足掻くか」

雨に濡れながらも、ベーオウルフは視線を空から外さずに言った。
俺も灰色の空に目を奪われていた。
なぜなら、灰色の雲の中に2つの黒点が見えたからだ。
2つの黒点が空から降ってきているということに気づくまで、さほど時間はかからなかった。黒点は俺の視界の中で接近、ぐんぐん巨大になり、それが人型であることにはすぐに気づく。
黒い2機の巨大ロボットが空から降下してきていた。
どう見積もっても20m以上の巨体を持つロボット ――― 特機が、ブースターの逆噴射で落下の位置エネルギーを相殺し、キョウスケの体の前に降り立っていた。

『武神装攻ッ、ダイッゼンッガーー！　推参ッ!!』

俺の見た過去生の中で見覚えのある黒い鎧武者の特機が名乗りを上げていた。
巨大な日本刀を携えている特機の名は、確かダイゼンガー。ホワイトスターでタスクたちと死闘を繰り広げた特機だったはずだ。

『同じく、ダブルG2号機アウゼンザイター、参上!』

アウゼンザイターという特機の方は俺には見覚えのないものだった。
ダイゼンガーと同等の巨体に、巨大な円盤状の盾を両肩に装備し

た西洋風の甲冑風の装甲を持ち、黒いマントをたなびかせている。
頭部から青白い炎が上がっており、両手には巨大な長身のライフルを装備していた。

『キョウスケ！　お前は一体何をしている!?』
「……ゼンガー・ゾンボルト……」

ベーオウルフがダイゼンガーのパイロットの名を言っていた。もしかすると、キョウスケの記憶を読むことができるのかもしれない。
奴はアウゼンザイターの操縦者の名を「レーツェル・ファインシュメッカー」と呼んでいた。

『救援信号を受け、駆け参じてみれば……下手人は貴様だと言うではないか!?』
「……」
『どうなのだ!?　答えろ、キョウスケ・ナンブ!!』

ゼンガーの怒号をベーオウルフは受け流していた。
さして興味もない。答える義務もない。といった所か……。

『ゼンガー』

レーツェルがゼンガーに声をかける。

『やはり、基地との通信は途絶したままだ。完全に制圧されたか、それとも……』
『くっ！　答えろ、キョウスケ！　返答次第では、いくら貴様でも容赦はできぬぞ!!』

ベーオウルフは相変わらず無言だ。

口を閉じたまま、ダイザンガーをただ見上げている。
先に痺れを切らしたのゼンガーの方だった。

『答えろ！！』
「……うるさい奴だ」

奴が辟易とした感じの声を上げる。その瞬間、鋭い金属音が響いたのを俺は聞いた。
直後にはダイゼンガーの兜飾りがへし折れて落下し、地面に深々と突き刺さっていた。兜飾りの切断面は鋭利だ。どうやらベーオウルフの念動力は生物以外にも有効なようだ。

『なに！？　キョウスケ、貴様、一体何をした！？』

種を知る俺にしか分からない攻撃方法だ。
知らない者にとっては奇術でしかないため、ゼンガーは大いに驚いていた。ただの人間を前にしただけで、金属製の兜飾りが破壊されたのだから無理もない。

「斬ればいい」
『なんだと！？』

キョウスケの口から出た言葉にゼンガーは一々大声で反応する。

「ゼンガー……斬るしか能のない男……どうせ斬るのだろう……いつものように斬ればいい……血塗られた武器……今まで、どれだけの悲劇を産み落としてきた……？」
『キョウスケ！　やはり狂ったか！？』

ダイゼンガーが巨大な日本刀の切っ先を空に向けた。

柄部分の装置が展開され、超々圧縮されていた液体金属の刃が伸びる。ダイゼンガーの全長が平均的な日本人男性の身長だったと仮定するなら、１ｍそこそこだった刀身が２ｍ以上にの巨大な諸刃に変化する。無論、ダイゼンガーの全長は目測で少なく見積もっても４０Ｍ……それに見合った刀身を持つ大剣だった。

ダイゼンガーが大剣を構え、ゼンガーが叫ぶ。

『我はゼンガー・ゾンボルト！　悪を断つ剣なり！！』

『我らに出会った不幸を呪え！』

レーツェルがゼンガーの名乗りに被せるようにして言った。

その様子を見てベーオウルフは嘆息する。

「……破壊する」

虐殺が始まる。

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～ベーオウルフ　２～（前書き）

＜注意＞

原作ブレイク要素が多分に含まれています。
残酷描写もあります。
ご注意ください。

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～ベーオウルフ　２～

暗雲が空を覆い、雷が轟き、雨がキョウスケの髪を濡らしている。

壊滅した基地の前、曇天の下で……キョウスケの体は２機の巨人と対峙していた。

見上げるように巨大な鎧武者ダイゼンガーと、西洋甲冑に身を包んだ銃戦士アウセンザイターである。

キョウスケの体を操るベーオウルフと２機との戦闘は、開始されてから既に５分が経過しようとしていた。

『おのれ！』

ゼンガーが毒づく声がスピーカー越しに聞こえてくる。

ダイゼンガーの剣戟は既に何度も弾かれていた。

彼の目の前に立ち塞がる１機の紅いＰＴ……見ようによっては鬼の持つ１本角のようにも見える、ごてごてに装甲を固めた重量級のＰＴだった。

『ゲシュペンストＭｋ－？……』

武器を構えダイゼンガーに対峙しているＰＴを見て、ゼンガーが毒づく。

キョウスケの愛機ゲシュオペンストＭｋ－？　――　ダイゼンガーの半分ほどの体躯の赤いＰＴが武器を構えてダイゼンガーの顔を睨みつけていた。

超大型のパイルバンカー　――　リボルビングバンカーがダイゼンガーを狙っている。鋭利で図太い鋼鉄の針……ダイゼンガーが斬艦刀を振るえば、Ｍｋ－？はリボルビングバンカーの切っ先で斬艦刀の一撃を器用に流す。

ゼンガーは目の前の事態に驚きの声を上げていた。

『なぜだ……！？』

攻撃がいなされている事にではなく、

『なぜ、動く！？』

Ｍｋ－？が稼働していることがゼンガーには信じられなかった。

あの後……ゼンガーがキョウスケに宣戦布告し、戦闘を開始する直前の事だ。

Ｍｋ－３　は単機で基地の中から飛び出してきた。理由はおおよそ見当がつく。キョウスケの体にとって敵であるダイゼンガーたちを迎撃するためだろう。

敵が来たから戦う、それは分かる。

だがいま問題になっているのは、ＭＫ－？がダイゼンガーの敵として現れたことではなく、無人のはずのＭｋ－？が勝手に動いていることだった。

ＭＫ－？の背後数百ｍの位置で、キョウスケの体は立っている。

キョウスケの体は、Ｍｋ－？の後方で立ったまま戦闘の成り行きを観察していた。

Ｍｋ－？のコックピットに乗り込んではいない。ただじっと戦闘風景を眺めている。それだけなのに、Ｍｋ－？は水を得た魚のように活き活きと動き回っていた。

そのことが、ゼンガーには俄かに信じられない出来事だった。

戦闘開始すぐは、キョウスケ以外の他人が乗り込んでいると思っていたのだが、よくよく考えればＭｋ－？の操縦は非常に難しい。
採算度外視したテスト機にも関わらず、長い間お蔵入りとされ埃を被っている程度には扱いにくい……正にじゃじゃ馬な機体と言えた。
キョウスケ以外に扱えるとは考えにくい……しかし眼前のＭｋ－？は自由自在に動き回り、ダイゼンガーの攻撃を受け流している。
さらにＭｋ－？の動きや戦い方は、ゼンガーの良く知るキョウスケのそれに酷似していた。

『どけ、ゼンガー！』

攻めあぐねるダイゼンガーを押しのけ、アウセンザイターが巨大な２丁ライフル――ランツェ・カンノーネを連射した。
巨大なビームの筋がダイゼンガーの横をすり抜け、Ｍｋ－？に直撃する。当たり所が悪ければ、連邦の主力量産機ゲシュペンストを１撃で撃破できる……そんな威力のビーム砲だ。
しかし直撃したはずのＭｋ－？は無傷……不可視の壁のようなものがＭｋ－？を包んでいて、２機の攻撃のほとんどはそれにより無効化されていた。

『レーツェル！』
『ああ、バリアーようだな。だが……このような機能はＭｋ－？には搭載されていないはず……』
『おのれ、面妖な！』

ゼンガーが叫び、ダイゼンガーが斬艦刀を構えた。

『我が一刀は、雷光の煌めき！』

ダイゼンガーは地面を蹴り、Ｍｋ－？との距離を詰めると斬艦刀を横に薙ぎ払った。超重量武器を振るっているとは思えない滑らかで、しかも速い剣筋が光る。

斬艦刀とＭｋ－？が接触。並の敵機なら音もなく１撃で両断する必殺を、Ｍｋ－？は音もなく防いでいた。

Ｍｋ－？の鋼鉄の皮膚まで斬艦刀は届いていない。

見えない壁がまるでクッションのように切れ味を殺し、威力を拡散させていた。斬ることのできない不可視の空気の壁が立ちふさがっている――が、

『ならば！』

とダイゼンガーが柄の握り手を変えた。横薙ぎの構えから、下方から斜め上に斬り抜ける袈裟斬りへ。壁に接触した状態から力いっぱい斬り上げる。

しかし加速の伴った斬撃で切れなかった壁だ。至近距離から刃を押し当てるだけでは切れ味は半減し、見えない壁をを斬ることはできない――

『はあああああぁぁぁっ！！』

――ダイゼンガーは斬ることのできないＭｋ－？を、その強力を使い、見えない壁ごと空中へ高くと打ちあげた。打ち上げの際、機体に捻りを加える……さながらハンマー投げのように、Ｍｋ－？を刀の切っ先に捉えたまま回転して、だ。

Ｍｋ－？が上昇する。見えない壁で移動エネルギーは打ち消せないのか、錐もみ回転させられて自由を奪われていた。

『友よ！　今こそ我らの力を見せる時！』

レーツェルの声に、

『応！』

ゼンガーが応える。

２人の声は闘志に満ち満ちていた。呼応するかのように、２人の乗機の目が強く輝く。

ダイゼンガーは大地を強く蹴り、空中へと躍り出ていた。斬艦刀を肩に担ぎ、まるで何かを待っているように下を見る。そこにはレーツェルのアウセンザイターがいる。

『チェンジ、プフェールトモード！』

アウセンザイターはランツェ・カンノーネを背部に収納すると、足底部のランドローラーで加速し始めた。

疾走しながら機体が変形を始める。腕が折りたたまれ、上半身の装甲が展開、人型の頭部が収納されると同時に、漆黒の馬の顔が露わになる。肩装甲は後方に――馬の腰周り部分に――スライド。さらに収納されていたランツェ・カンノーネが変形し、馬の足に相当する部位に接続された。

２、３秒の早業……人型だったアウセンザイターは、巨大な漆黒の戦馬へと変貌する。

炎をたてがみをなびかせながら、跳躍――ダイゼンガーを鞍に乗せて、着地した。特機２機分のパワーを持つ騎兵が大地に立つ。

『刃馬一体ッ、参るッ！』

『友よ、今が駆け抜ける時！』

馬形態のアウセンザイターがダイゼンガーを乗せて疾走。竜巻に匹敵するエネルギーを纏って、ゲシュペンストＭｋ－？目がけて駆

け抜ける。
降りしきる雨を切り裂いて、空中から錐もみ回転のまま落下し始めるＭｋ－？に向かって。
ダイゼンガーは刃わたり４０ｍはある斬艦刀を振りかぶって、吠えていた。雄々しき武神の如く、力の限り、斬艦刀を振りかぶる。
『奥義　――　斬艦刀！　逸騎刀閃（いっきとうせん）ッ！！』
２機の力を合わせた必殺の一刀が落下してきたＭｋ－？を斬った。
見えない壁に阻まれる。だが今度は斬艦刀はすぅとＭｋ－？の胴体をすり抜けた。直後には剣風が巻き起こり、剣圧で生じた竜巻がＭｋ－？を再び空中へと押し上げる。
暴力的な上昇気流で弄ばれるＭｋ－？を、ダイゼンガーは無慈悲に斬り刻んだ。
流れるような連続攻撃　――　その最後を大振りの切り上げで〆る。
収束していた風が散り、黒く厚い入道雲に風穴が空いていた。青空からのぞく陽光がＭｋ－？を照らす。機体にいく筋もの線が奔り、ズレている……鋼鉄の皮膚は斬れていた。
『ふっ、我らに　――』
『断てぬものなしッ！！』
Ｍｋ－？は断末魔にも思える轟音を響かせ、空中で爆散する。
紅い金属の破片が落ちてくる。
キョウスケの愛機ゲシュペンストＭｋ－？は、修理も不可能なほど粉々に破壊されていた。

その光景を、ベーオウルフはただ黙って見ていた。
俺も、キョウスケもだ。愛用していた機体が散る瞬間を見る。それは辛いものだ。
だがそんなことは些細な事だった。
キョウスケの悲痛な叫び声が俺の頭の中で木霊していたのだから。

――逃げろ！　ゼンガー！！

キョウスケの脳裏にはタスクたちの死がフラッシュバックしていた。
惨たらしい理不尽な死。飛び散る血肉。助けを求める悲痛な叫び声……キョウスケの頭にこびり付いて剥がせないそれらが、ゼンガーを覆い尽くしていくような……キョウスケには、そんな気がしてならなかった。
死。
絶対的な死。
ゼンガーは死ぬ。絶対にだ。
頭を振って否定したいのに、キョウスケと俺は、いとも容易く確信してしまっていた。
理由は分からない。
客観的に見れば、全長４０ｍ超の特機に乗るゼンガーが生身の人間であるキョウスケと対峙して、どうして死んだりするだろうか？
ありえない。普通なら殺されるのはキョウスケの方であり、ゼン

ガーが殺されることなど天地がひっくり返ってもありえない。
絶対にありえない。
だが死ぬ　――　相手がベーオウルフの時点で終わりだ。
殺され尽くした基地の人間がそれを証明している。

『キョウスケ！』

ダイゼンガーがアウセンザイターに跨ったまま斬艦刀を向けてきた。

『我は悪を断つ剣なり！　貴様が悪に成り下がるのなら、俺がそれを止めてみせよう！　行くぞ！！』

ダイゼンガーが斬艦刀を構えた。４０ｍ超の大剣を人に向ける。
ゼンガーは武士道精神にあふれる漢だから、普段は絶対にこのようなことをしない。
おそらく感じているのだろう、直感か何かで……キョウスケの体に宿るベーオウルフの危険性に。

「……悪か」

ベーオウルフが呟いた。

「我は悪か……？　悪とは何だ……正義とは何だ……悪は悪なのか……正義は正義なのか……お前は……幼稚なまま事を演じているにすぎん……」
『何を言っている！？』
「悪を断つ……傲慢……あまりに傲慢……その傲慢さで、一体どれだけの同族を斬ってきた？　正義とはなんだ？　悪とはなんだ？
その問答の果てに……多くの悲劇が生まれるのなら　――」

ベーオウルフはダイゼンガーを見上げた。
４０m超の鋼の巨人、特機だ。
人の手足を持ち、武器を持ち、多くの場合は殺し合いに使われる兵器。
武器や兵器は単なる力……要は使い手次第だとよく言われる。確かそうだと思う反面、嘘だとも思う。きっとその言葉の半分以上は詭弁だ。
平和の象徴と褒めたたえられようと、世界平和のための使われようと、特機は所詮兵器だ。正義のために悪を屠ってきた殺戮マシーンだ。それは拭えるはずもない事実。
悲劇を生むモノと言える。
俺にはベーオウルフが何を考えているのか分からないし、言っていることの意味も理解しきることはできない。
確かに、ベーオウルフは人間の味方ではない。
だがもしかすると……人間の敵でもないのではないだろうか？
ベーオウルフはベーオウルフのルールに従っているだけなのかもしれない……何故か、そんな気がした。

「――　我は……全てを破壊する」

ベーオウルフの言葉の後、鋭い音が響いたのを俺は聞いた。

『何だと！？』

続いて、ゼンガーの慌てた声が届く。

斬艦刀が折れた。

俺が視線を向けると、根元から綺麗に折れた斬艦刀の切っ先が宙

を舞い、地面に突き刺さるところだった。
間違いなく、ベーオウルフが念動力でへし折ったのだろう。考えてみれば、ベーオウルフは銃弾を念動力で防いでいたし、ダイゼンガーの兜飾りも破壊していた。特機にだって有効なのは少し考えれば分かることだ。
しかし、どんな力にも程度や限度がある。巨大な鋼の大剣を念動力でへし折るとは……あまりの力の大きさに俺が驚きを隠せないでいると、

『ッ――――――？！』

一瞬だけ、ゼンガーとレーツェルの悲鳴が耳に届いた。
そして……声が聞こえなくなる。
ただ黙って、ベーオウルフの隙を窺っている。そんな沈黙とは何処か違う……何事かと思っていると、アウセンザイターの背からダイゼンガーが転がり落ちた。
大きな音と共に、受け身も取らずに背を大地に預ける。
ダイゼンガーの巻き起こした土煙が収まると……2つの特機は一切動かなくなっていた。

――ゼンガー！　レーツェル！！

キョウスケの絶叫が、俺の頭の中で鳴り響く。
活動不能になる程のダメージはダイゼンガーには見られない。
悪寒が俺の中を奔り抜けて行った。
基地の中での惨状が浮かんで、消えて行く。ベーオウルフを相手にして、機体は無事だが活動は不能になる……信じたくはない。
だがダイゼンガーは動かない。それはきっと……そういうことだ。

「ゼンガー……この体の記憶にある言葉を……お前に贈ろう……」

ベーオウルフはキョウスケの体を動かして、倒れたダイゼンガーに近づく。

足元までやってきたところで、破壊音がダイゼンガーの胸部装甲から聞こえた。胸部装甲が弾けて、遠くへ飛ばされる。血の匂いがした。

ベーオウルフはあえてコックピットの中を見ようとはしなかった。キョウスケにも見えてはいないだろう。

だが、俺には見えた。

このとき程、俺は自分が傍観者であることを呪ったことはない。

血の海になっている。

原型はない。コックピットの中は紅く染まっていた。

気が狂いそうだ。むせ返るような血の匂いに、キョウスケもゼンガーの死を理解する。

――うおおおぉぉおおぉぉっ！！

絶叫と共に、キョウスケの心が死んでいくのを俺は感じていた。

ベーオウルフが言う。

「戦場では……最後に立っていた者が正義なのだろう……？」

悪魔が笑っていた　――……

しばらくして、ベーオウルフは基地を後にした。

俺には……ベーオウルフの笑みが忘れられなかった……俺が良く見ていた悪夢の中で、俺が浮かべていた笑みが……そこにあった。

ベーオウルフは基地から出る前に止めるのがベストだった。

ベターなど存在しない。ベスト以外の事態は、全て最悪の事態とさえ言えた……。

俺には分かる。

地獄など生ぬるい。

悪夢のような現実が幕を開ける　――……

彼女は世界を見ていた。

もうすぐ終わりを迎える世界がある。
そのことを、彼女　――　リバースは予見していた。その原因が奴であることも。
救われない魂が大量に生まれるだろう。
自分はそれを救う。
自分にならそれができる。
再生と再誕の力を持つリバースなら。

――　もうすぐですよ……オータム

リバースは世界をのぞき見ながら呟いた。

――　もうすぐ　悲劇のない　完璧なる世界が誕生する

オータムの再生した魂の宿らぬ肉体に魂を宿す。
そして自分の力で惑星エリアを、未来永劫に平穏が続く世界へと変えるのだ。
だが無限の楽園などありえない。
なぜなら変化が楽園を破壊する。

ならば変化を防げばいい。
だが変化を押さえつけることは歪みを生み、歪みはやがて楽園を破滅させるだろう。
歪みを矯正するための破界の力が必要だ　――　奴の力と自分の力が楽園には必要になってくる。
２つの力が合わさったときに初めて、エリアは終わらない楽園へと昇華するのだ。

――　全ては　平穏なる世界のために……

●

夢……これは夢だ。
何度嘆いたことだろう。
これがもし悪夢だったなら、どれだけ幸せなことだろう。
そう思わずにはいられない。
そんな地獄絵図が展開されていた。

基地を壊滅させ、ダイゼンガーを退けたベーオウルフは、人間狩りを開始した。
狩り……という表現は適切ではない。
処理だ。
ベーオウルフが足を踏み入れるだけで、わずか１時間で町１個が壊滅した。建物や植物、買われていたペットたちは全て無事。ただ人間だけが全滅させられる。

ベーオウルフ殲滅に向かった部隊は全て全滅、１人も生きて帰ってこない。
ベーオウルフは破壊した機体の残骸から、キョウスケの愛機だったＭｋ－？を模した機体を復元させていた。
ただしＭｋ－？の色は赤から青へと変わり、５０ｍを超える巨大な化け物に変貌する。青鬼のような殺戮マシーンに迎撃部隊は全て殺され尽くしていた。

基地での事件から１週間がたつ頃、地球連邦政府はある決定を下すことになる。

「インスペクター事件」の英雄、クロガネ部隊の再招集である。
地球圏最強の守護者である「クロガネ隊」がベーオウルフを駆逐する。ベーオウルフはかつての「インスペクター事件」や「Ｌ５戦役」と同等か、それ以上の脅威として認識されたのだ。
すぐさま、クロガネ部隊はベーオウルフの元へと差し向けられる……

そこからの光景は、俺がよく見ては朝になると忘れていた、あの悪夢その物となっていた。
悪夢だ……そう、あの悪夢。
俺が、仲間を殺し尽くすあの悪夢。

『なんでだ！？』

変貌したＭｋ－？のコックピットに、インターフェースを通じてリュウセイ・ダテの叫びが届く。

『なぜ、あんたがこんなことを！？　キョウス　――　！！』

リュウセイの声が途切れた。

モニターに映っていたリュウセイの顔が消える。同じく画面に映っていたリュウセイの特機ＳＲＸの胸には巨大な風穴が空いていた。変貌したＭｋ－？の、あまりに巨大なリボルビングバンカーを直撃して空いたものだった。

ＳＲＸは崩れ落ち、地球圏を護ってきた守護神は鉄くずへと成り下がる。

ＭＫ－？の周りには、ＳＲＸの他に無数のロボットの残骸が転がっていた。

グルンガスト、弐式、ジガンスクード、ゲシュペンスト、ヒュッケバイン……多種多様の機体がエンジンの駆動音１つ響かせず、黒煙をあげたり、火花を散らせたりして横たわっている。

多くはリボルビングバンカーの餌食となり、無傷のモノはベーオウルフの念動力で屠られた。

死屍累々。

その言葉しか浮かんでこない戦場には、クロガネとヒリュウ改も轟沈していて、動いている者は誰もいない。

――　殺した……！

強い罪悪感がキョウスケの胸を締め付ける。

――俺が殺した……！　タスク……アラド……ゼンガー……レーツェル……

みんな……みんな！　俺が殺した！！　殺してしまった！！！

夢と同じだ……キョウスケは、俺が悪夢で思っていたことを嘆いていた。

仲間を殺してしまったことを。深く嘆き、謝罪し、絶望する。そして懇願する。

やめてくれと、叫んでもベーオウルフが手を休めることはなかった。「なぜだ！？」と問いながらも攻撃してくるキョウスケの戦友たち。しかし手を出そうとした瞬間に、ある者は爆ぜ、ある者は撃ち抜かれ次々と絶命していった。

ゼオラやレオナは恋人の仇と攻撃してきて返り討ち。教導隊の生き残りも即死。戦艦のクルーに至ってはベーオウルフの念動力で１人残らず爆死し、制御できなくなった艦は自沈する。

圧倒的。あまり圧倒的な力に蹂躙される。

――なぜだ？

キョウスケは心で血の涙を流しながら、ベーオウルフに訊いた

――なぜ、こんなことをする！？

ベーオウルフは念話で返答する。

――全ては……悲劇の無い世界をつくるため……完璧なる世界の創造のため……

――馬鹿な！　多くの人を殺しておいて、何が悲劇の無い世界だ！？

お前は悲劇を生み出し続けているだけだ！！

――だが……あのとき、お前は思った……悲劇が憎いと……悲劇にまみれた世界など必要ないと……

――支離滅裂だ、お前の言っていることは！　人を殺せば悲劇が生まれる！！

お前が人を殺し続ければ、俺のような人間を生み続けることになるんだぞ！！

――それは……今だけだ……

――なにっ？

――悲劇を生み出すもの……悲劇を感じるもの……人間

人間が全ていなくなれば……悲劇は存在そのものに意味がなくなる……

――なっ……！

狂気じみた返答にキョウスケは息をのむ。

人類皆殺し。笑い話や子どもの戯言で使われそうな言葉だが、べ

ーオウルフが言うと冗談には聞こえない。

――　我が性は破壊　我が力は破界　だが我が力は使わぬ
　　消えるべきは世界ではない　世界に救う邪悪を
　悲劇を生み出す　権化のみを　我は破壊する　――

ベーオウルフの声は揺るがない。
世界には絶対にして至高の答えがあり、奴はそれを知っていて、まるでその答えに向けて邁進する求道者のように。
ベーオウルフは歩みを止めない。
俺やキョウスケの声など歯牙にもかけない。
止められない……俺たちとベーオウルフでは見えているものや、見ている世界が違っていた。

「太極の涙をぬぐう……そう、全ては、静寂なる世界のために」

空前絶後の化け物を解き放ってしまった……キョウスケの心は、激しい後悔と罪の意識で満たされる。
無力に歯噛みし、骨が砕けそうな程に強く拳をつくる。しかしキョウスケの体は彼の意に従う事はなかった。手を握りしてもいないし、奥歯を噛みしめることもしていない。
手も足も出せずに、キョウスケは世界が滅ぼされていくのを見ているしかなかった　――……

―　1か月後　―

地球連邦は壊滅した。
幾つかの国も滅亡した。
全戦力、全兵員を投入し、湯水の如く無意味に鉄と人命が浪費されていった。
繰り返される殺戮劇にキョウスケの心はいつしか麻痺していた。
助けを求める声、抵抗も空しく機体を破壊され失われる命、そして何もできない自分……まともな神経でその光景を見ていることできなかった。
キョウスケは人が死んでも何も感じなくなる。
それは戦場を駆けたあの頃と、どこか違うが、同じ根を持つ感情のような気がしてならなかった。

だが、もうどうでもよかった。
抵抗など無意味だ。
侵略と言う暴力を正義という暴力で薙ぎ払い、キョウスケたちの地球は存続してきた。それがキョウスケの生きてきた世界だ。異星人の侵略を無抵抗で受け入れるべきだった……などとは思わない。
この世界は戦うことで維持されてきた。闘争の続く世界だ。シャドウミラーの望んだ世界とは正にこのことではないだろうか？
力が全て、勝った者が正義、生き残った強者だけが正義を語ることができる世界。
無味乾燥とした悲しい世界が、自分の守ってきた世界のように思えて仕方なかった。
……ベーオウルフの描いてきた地獄絵図は、闘争の果てに訪れるしごく当たり前の結末とさえ、キョウスケは思うようになっていた。
そんなキョウスケを尻目にベーオウルフは毎日処理にいそしむ。
人間の処理に、だ。
ある日、破壊のために内部に侵入した軍事基地にて、

『狼と言うより、外道に過ぎるぞ、ベーオウルフ』

キョウスケはあの男と再会していた。

戦友は全て死んだ。いや、殺された……殺した。戦場で再会したその男は、もはやキョウスケにとって最後の顔見知りとさえ言えた。

「アクセル・アルマー」

キョウスケの口を動かして、ベーオウルフが男の名を呼んだ。

巨大化したＭｋ－？の前にアクセルの乗るソウルゲインが立っていた。特徴的な青い髭を持つ、格闘家のような雄々しい体躯の特機だ。

Ｍｋ－？の進む巨大な通路の先で、背後にある巨大な機械を護るようにして立ちはだかっている。

『ベーオウルフ……いや、キョウスケ・ナンブ』

回線越しにアクセルが語りかけてくる。

『すまなかったな』

コックピットの中でアクセルの表情が曇る。

『あの時、確実に貴様を殺しておけば……貴様を化け物にしたのは、この俺だ』

「ア、アァァ、アク　――　アクセル……！」

キョウスケの口からうめき声が漏れた。

キョウスケの感情が流れ込んでくる俺にだけ分かる。

今、声を上げたのはベーオウルフではなく、キョウスケ・ナンブだった。

――ほぅ……

ベーオウルフの声が俺の頭に響く。

――支配権を奪い返すつもりか……復讐……報復……悲劇を生み出す最たる例の1つだが……いいだろう……

この体の礼だ……我が……力を貸してやろう……

途端に、腹の底から黒いマグマが噴き上がるような――全身の皮膚を駆け巡る黒い熱さが、キョウスケの頭を灼熱させていく。絶望、後悔、罪悪感……多くのマイナスの感情を吹き飛ばし、憎しみだけがキョウスケの心に火をつけた。

それは炎。

全てを焼き殺して、自身を焦がす尽くしても決して消えることのない炎のように、キョウスケの喉をひり付かせる絶叫に変わっていた。

「アクセル・アルマアアアァァァッ！！！」

『俺は貴様の大切なものを奪った。それが貴様を化け物へと変えた……俺が憎いだろう？　殺したいだろう？

だが、それでいい。俺には、貴様に許しを請う資格などありはしな

い――』

ソウルゲインが拳を構えた。
さらに絵里阿町で使用しなかった両肘の鋭いエッジが伸びる。ソウルゲインの体は青い光を発し始め、それは両拳と両肘のエッジ部分に収束していった。

『――コード麒麟（きりん）。ソウルゲインの最大攻撃だ……いいか、ベーオウルフ。俺は謝罪はせん。俺はお前の大切なモノを奪った！　その罪は、俺の命１つでとうてい償い切れるモノではないからだ！』

刹那、ソウルゲインはＭｋ－？に突撃を敢行してきた。
両拳に集められていた青い光を無数の光弾にとして発射してくる。青龍鱗を変化させた砲撃のようだが、Ｍｋ－？の装甲には傷１つ着けることはできなかった。ただ、青白い光で視界が塞がれる。
アクセルの独白が聞こえてきた。

『俺にも護りたい女がいる！　身勝手な男と笑わば笑え！　たとえエゴイストと罵られようとも、俺は貴様を殺す！　代価はこの俺の命だッ！！』
「アクセル・アルマアアアアァァッ！！」

青白い光が引いた時、ソウルゲインはＭｋ－？の懐に入り込んでいた。
身を屈ませて、伸ばした肘のエッジにエネルギーを集中させる。エッジに集まった光がスパークする。アクセルの命を籠めた、両肘エッジによる超斬撃がＭｋ－？を襲った。
だがＭｋ－？も黙ってはいない。
巨大化したリボルビングバンカーを、同時にソウルゲインに振り下ろしていた。

鋭利な肘と屈強な切っ先が交錯する。

――すまんレモン……

勝負は一瞬でつく。勝者と敗者が決定する瞬間に、アクセルの声が俺の頭に響いてきた。

おそらく、アクセルの思考だろう。

神の悪戯か……アクセルの声が聞こえた理由は正直分からない。どこか寂しげな心の声。俺に分かったことは、レモンという名がアクセルの守りたい女の名だということぐらいだった。

――約束は……守れそうにない……

直後、リボルビングバンカーの切っ先がソウルゲインの腹部に突き刺さっていた。

いや、ソウルゲインの肘も命中はしていた。しかしベーオウルフの念動力による防壁に阻まれていた。一矢報いることはできず、ソウルゲインはリボルビングバンカーが突き刺さったままの状態で空中に持ちあげられ。

静かな通路内に炸裂音が木霊する。

巨大なパイルバンカーがソウルゲインの腹部を突き抜けていた。

あまりの破壊力に耐えきれず、ソウルゲインは腹を境に上下に裂ける。腹部を構成していたパーツが肉片のように飛び散り、機体内を循環していたオイルが血のようにＭｋ－？の体を汚した。

『俺の……敗けだ……』

――やめろ！　絞り出すようなアクセルの声に、キョウスケが悲痛な叫びを上げる。

やめてくれ！　と懇願する。

アクセルはエクセレンの仇と言ってもいい。

しかしキョウスケはアクセルの顔を知っている。共同戦線を張ったこともある。アクセルは憎い……憎かったが、もう誰かを殺すことには耐えられなかった。

「……解せぬ」

ベーオウルフが呟いていた。

上半身だけとなったソウルゲインが飛び込んでくる。その光景に対して言ったのか、それともキョウスケの懇願に対して答えたのかは分からない。

ただソウルゲインは、唯一動かすことができる上腕で、Ｍｋ－？に抱き着いてきた。Ｍｋ－？の首を絞めつけくる。蝋燭が消える前の灯なのか……万力のような力だった。

『だが……ただでは死なん。ベーオウルフ……貴様もリュケイオスと共に道連れだ！』

リュケイオス――おそらく、ソウルゲインが立ち塞がり守っていた巨大な機械のことだ。気づけば、リュケイオスを通るエネルギーパイプから蒸気が噴き出している。今にも爆発しそうに激しく全体を震わせていた。

ソウルゲインと戦っている間に、リュケイオスは暴走していた。

辛うじて画面に映っていたアクセルの顔……その口元が歪む。ざまぁみろ。と言わんがばかりに。

『ベーオウルフ　――　共に死ねえぇぇ！！！』

アクセルの咆哮が耳をつんざいた。

瞬間、リュケイオスが大爆発を起こす。室内の爆発で逃げ場を失った炎が、Ｍｋ－？の方へと押し寄せてきた。

熱量の塊がＭｋ－？の装甲を溶かす。上半身だけのソウルゲインも同様に爆発を巻き込まれる。そして機体内のオイルに引火、Ｍｋ－？に組み付いたまま状態で動力源の誘爆を巻き起こした。

「うおぉ　――――――　ッ！！」

装甲が溶け、ハッチが弾け飛び、コックピットブロックが剥き出しになる。

中のキョウスケの体が外界に露わになり、リュケイオスの爆熱に巻き込まれた。肉は溶け血は沸騰……皮膚が焼け剥がれ、奥に見えていた白骨も一瞬で黒焦げになる。

即死　――　Ｍｋ－？の大爆発も相まって、骨の欠片も残さず、キョウスケの体は消滅した　――……

しかし、

――マズイ……！

肉体を失ってなお、ベーオウルフの声は俺の頭に響いていた。
キョウスケの感情や声は、もう俺の中には流れ込んで来ていない。
キョウスケ・ナンブは死んだ。それは紛れもない事実のようだ。
しかし俺はまだ過去生の世界の中にいた。
キョウスケの過去生は終わった。
ならば、俺が見ているのは一体誰の過去なのだ？　オータムの中に記憶された誰かの過去……そう仮定するのが妥当だが、目まぐるしく変わる状況に俺は流されるばかりだ……

――我に死はない……だが突然すぎる……！
このままでは　我の破界の力が暴走する……罪なき世界が消滅する……！
それだけは　防がなければならない！！

焦るベーオウルフの声に続いて、リュケイオスの爆炎の中に人影が現れる。

黒い光の人型だった。中に吸い込まれそうな漆黒だが、何故か光輝いているように思えた。俺は爆炎の中に浮かぶ人型を注視する。

黒い人影はキョウスケだった。

いや、キョウスケ・ナンブの姿をした光体が、黒い光を放ちながら浮いている。

――力を使いすぎた　憑代の魂との癒着が激しい……！

癒着を解除し　力の開放を止めねばならん！！

――そうはさせませんよ

突如、ベーオウルフとは違う声が俺の頭の中に聞こえてきた。女の声……何度も聞いた、もう二度と聞き間違えることのない女の声だ。

現れた白く輝く光体から、女　――　リバースの声が響いてきていた。今のリバースは人型ではなく球体で、キョウスケの姿を借りたベーオウルフを見下ろしていた。

――癒着を解かせはしません　魂の癒着は　枷そのもの

貴方には　その男と深く結びついたまま　眠ってもらいます

――お前は……そうか　理解したぞ　我と同じく　太極の涙より生まれし者か……

得心したベーオウルフが呟いていたが、俺には状況が理解できなかった。

――お前は　正に我が半身……ならば、理解できるはずだ
　悲劇のない世界を作るために　我は戦わねばならん
……
　そのために　今　力を暴走させる訳にはいかないのだ……

――ええ　理解できます
　私と貴方は半身　兄妹のようなもの
　　貴方の力が破界に対して　私の力はいわば再世
　全ては　悲劇の無い　平穏なる世界のために……

――そのとおり　全ては　悲劇のない　静寂なる世界のために……
だから　邪魔をするな……我は癒着を解き　力の暴発を止めねばならん
　　世界を消し飛ばすわけにはいかんからな
……
　そして　新たな憑代を探し　人間を破壊し尽くすのだ……

――ふふふ

――……なにが可笑しい？

　リバースの笑い声に、ベーオウルフは気分を害したようだ。キョウスケを模した黒い光体の眉が吊り上る。

――　いえ　同じ太極から生まれた同士なのに　どうしてここまで考え方が違うのかと
　ふふ　貴方は　面白いとは思いませんか？
　悲劇の無い世界を創る　それは私たちに共通する使命のようなもの
　でも　貴方のとった手段は　私の考えているそれと　正に真逆なのです……
　これも　それぞれの性ゆえか……と考えていると　妙に　可笑しくなってしまいまして……

――　笑止　我は　我のやり方を貫くまでのこと……

――　ふふふ　ですから　言ったでしょう？
　そうはさせません……とね

――　なに……？

　２つの光の問答の直後、キョウスケを模した光体の周辺がゆらいだ。
　「ゆらぎ」は大きくなり、リュケイオスの爆炎の中に空間の裂け目を作り出した。黒い光を放つキョウスケの体は、徐々に空間の裂け目に飲み込まれていく。

――　何をする？　我が半身よ……

――　ふふふ　貴方には　私と共に　惑星エリアに来てもらいます
　貴方がこの世界で駆逐した　救われない多くの魂たちと共にね

――エリア……次元の向こう側……無数に存在する並行宇宙の1つか……？
そんな場所に我を招き　一体　どうしようというのだ？

――知れたこと
貴方の破界の力を暴発させ　惑星エリアを　破壊してもらいます

リバースは淡々と言い、続けた。

――そして　私が　全力を使い　エリアを再世させます
小さく隔離された世界をつくり　そこでオータムの作った人間たちに
貴方がこの世界で殺した　人間の魂を　移植するのです
私の力で管理された　悲劇のない　完璧な世界を創造するのですよ
延々に繰り返される世界で　人は幸福のみを享受する
それこそが　私の出した答えです

――馬鹿な……理解不能だ……！

――それはお互い様
人を消滅させ　悲劇をなくそうなど……愚の骨頂
貴方の破界の力は　私に管理されて　初めて活きるのです……
それに　今の貴方なら容易に操作し　封印することができます

ふふふ……

――……おのれ……

リバースの言葉が的を得ていたのか、ベーオウルフは大した抵抗もできず、彼女の作った空間の狭間に飲み込まれていく。
基地内から黒い影が消えた。
リュケイオスの爆発で崩壊をする基地。
白く輝く光体も、爆炎の中から姿を消した。

――全ては　平穏なる世界のために

リバースの言葉に引き寄せられるかのように、俺の意識も基地内を後にした。
キョウスケの生きた世界がどうなったのか……もう、誰にも分からない。
こうして俺は、キョウスケ・ナンブの過去生の世界に別れを告げたのだ。
俺の悪夢を具現化し、エクセレンを失った世界から……俺は飛ぶ。
今度は現実世界か？
いや違う。俺の直感が告げていた。きっと、俺は引き戻されるのだ……オータムの過去の記憶の世界へと。
俺の視界は暗転する。

●

俺の視界が再び開いた時、俺の眼下にはオータムがいた。

「おかえりなさい、リバース」

見覚えのある研究所の一室で、オータムは空中に向かって話しかけている。

リバースの姿は見えない。だが恐らく……いや確実にリバースはいる。しかしあのリバースの白い光体の姿は、オータムの過去では見えていないようだった。

「それで魂というモノは手に入ったのですか？」

無垢に質問するオータム。

リバースは優しげな声で応えていた。

――ええ　勿論です

これで貴方の再生させた人間に　心を宿すことができるでしょう

「良かった。ではこれで、人類再生計画は成就するのですね……」

胸の前で手を組み、感慨深げに笑顔を見せるオータム。

彼女にとっては２０年来の悲願が達成するのだから、喜ばすには

いられないだろう。
嬉しそうに微笑むオータムの横顔を、俺は直視することができなかった。

今更だが言っておく。
俺の名前はキョウスケ・ナンブ。
なぜか高校の密集する地域「エリア」で生きる、ごく普通の貧乏学生だ。
俺は過去生の中で間違いなく死んだ。
それなのに、俺は「エリア」という地域の中で生きている。
これが意味する答えはたった1つ……答えは決まっていた。
俺がオータムの中に眠る、自分の過去生を見始めた時から、この結末は決まっていたのだ。

喜ぶオータムを尻目に、リバースは言った。

――ですが　その前にやらねばならないことがあります

「やるべきこと？　それは何ですか？　リバース、私で良ければ力になりますよ」

――ありがとう　オータム
貴女は　本当にいい娘ですね

「えっ……？」

突然、オータムがその場に膝をついた。
手足が震えている。体に力が入らないようだ。腕を動かそうとし

ているがプルプルと痙攣するだけで、体が自由になっていない。

「か、体が……一体……？」

――オータム　貴女の体をお借りします
　私の再世の力を　最大限に発揮できるようにね

「体を……借りる……？」

弱々しいオータムの問にリバースが答える。

――そう　この惑星エリアを破界させ　平穏なる世界に再世するためには
　私が力を発揮するための憑代が必要なのです

「は、はかい……？」

――そう　破壊は創造　創造は破壊
　惑星エリアは　私の半身の力で破界され　悲劇のない　平穏な世界へと再誕する
　全ては　太極の望み　悲劇のない　平穏な世界のために……

「リ……バース……」

オータムの声は途切れ途切れとなり、やがて絞り出すこともできなくなる。

俺には理解できた。体の支配権をリバースに奪われているのだ……リバースがベーオウルフと同様の存在だとすれば、俺がそうだったように、オータムも抗うことができないはずだ。

やがてオータムは立ち上がる。
目元には赤い水色のタトゥーが浮かんでいた。

「さぁ……存分に貴方の力を解放しなさい」

オータムが言った。
いや、声こそオータムのものだったが、喋っているのは彼女ではない。
リバースがオータムの口に発せさせた声の先には、黒い光を放つ人型の光体がいた。キョウスケの姿を模した黒い人型の光体 ――ベーオウルフだ。

――キョ、キョウスケ……!?

俺の中にオータムの思考が流れ込んでくる。
今見ているのがオータムの過去だからだろうか？ その因果関係を解き明かすことはできないし、さらに時間もない。オータムは驚愕していた。

――なぜ……キョウスケが惑星エリアに……!?
あの戦いの後、自分の世界に戻ったはずなのに……！

オータムはキョウスケを知っているようだったが、その理由を詮索する時間も無ければ、目の前にいるキョウスケが彼ではないことを伝える術も時間も、俺は持ち合わせていなかった。

「ふふふ、さぁ……！」

リバースが浮かべるオータムの妖艶な笑み。

――うおおおぉぉぉぉぉっ！！！

それに呼応するようにベーオウルフの悲鳴が響き渡った。

キョウスケを模した黒い光体の周辺が歪む。

実体のない俺でさえ肌が粟立つのを感じていた。ベーオウルフの周りに闇が収束していく。収束した闇は次第に膨れはじめ、その漆黒に触れた空間は、まるで黒の絵の具に塗り潰されたかのように見えなくなっていった。

破界の力……リバースが呼んでいた力が、おそらくベーオウルフに纏わり付くあの闇なのだろう……。

消えていく。

ベーオウルフの立っている床や接している空間が、黒に塗り潰されて消えていく。

――おのれ……！

ベーオウルフの無念の声が聞こえる。

――消耗さえしていなければ……お前ごときに……！

「恨むのなら、無暗に力を使い続けた己の迂闊さを恨むのですね
力を浪費し、消耗した貴方なら私の力で自在にできる……貴方の破
界の力は、これから私が有効に活用して差し上げますよ」

オータムの　――　いや、リバースの口元が歪んだ。
勝利を確信しての笑み。その表情にベーオウルフの眉尻は面白く
なさそうに吊り上る。
それを皮切りに、ベーオウルフから放出されていた闇の勢いが強
まった。鉄砲水のような勢いで周りを飲み込んでいく。
オータムのいた研究所も、人工子宮ウームも、横に寝かされてい
た再世人間たちも……リバースが支配しているオータムの以外の全
てが、ベーオウルフの黒で塗り潰されていく。

――　覚えていろ！　我は　必ず戻ってくる！
全ての人間を根絶し　悲劇のない　静寂なる世界を創るために！！

「ふふふ、それは無理な相談です。
私が再世させたエリアで、貴方は眠ったまま生きるのです。貴方に
癒着したその男の魂と共に……」

黒へと変色した世界の中で、元より黒い光だったベーオウルフの
姿は見えなくなり、オータムの体だけが漆黒の中に浮かんでいた。
ベーオウルフの念話も聞こえなる。
静寂が支配した漆黒の空間で、リバースは眩い白の光をオータム
の体から生み出しながら、言った。

「全ては、悲劇のない、平穏なる世界のために　――」

オータムの体から閃光が放たれた。
漆黒の世界を白が上塗りしていく……この白い光の正体がきっとリバースの力なのだろうと思いながら、俺は意識が遠のいていくのを感じていた……。

すぐに視界は白で覆い尽くされ、何も見えなくなる。
しかし遠のいていく意識とは裏腹に、空虚だった俺の体に実感が戻ってくるのも俺は感じていた。
……ああ、そうか。
終わるのだ。俺の過去生という名のビデオテープが終わるのだ。
オータムというビデオデッキの過去も知った。次回予告やおまけ映像までをも見尽くした。役目を終えたビデオテープは最後にどうする？
見終わったテープ巻き戻して、視聴者はテレビ画面から目を離して現実に戻る。
それだけだ。

――ごめんなさい……キョウスケ……

意識が薄霧に飲み込まれていく中……オータムの声が聞こえた気がした……。

こうして、俺の過去生の旅は終わりを迎えた。
滅んだ世界と生み出された世界。
俺の過去生はエリアの始まりそのものに思えた。

そして俺は唐突に理解する。

無理矢理に改変され、生じた歪みを正す為に繰り返される破界と再世……それがエリアの本質だと。

リセットボタンは押され……そう……全ては、振り出しに戻る

――……

●

目が覚めると、見慣れた天井があった。

古びた木製の天井に安っぽい室内灯がぶら下がっている。天井には木目の他に、以前の大雨の時にできた雨漏りの後が薄黒く残っており、天井の角には小さな蜘蛛の巣が張ってあった。

毎回毎回、寝て起きるたびに目にしている見慣れた天井だ。

見間違えるはずもない……それは俺が借りているボロアパートの天井に違いなかった。俺は愛用のせんべい布団に横になり、天井を見上げていた。

「キョウスケ……戻ったか？」

頭上から男の声がし、寝たまま視線を上に向ける。すると座禅を組んだ有栖（ありす）　零児（れいじ）がそこにいて、俺は彼の奥義「夢想転生」で自分の過去生を覗いてきたのだと思い出す。

俺の隣にはオータム・フォーが眠っていた。

俺が過去生の中で見た彼女より一回り小さく、１０歳前後の外見の女の子に見える。彼女は寝苦しそうに布団を握り締め、涙を流していた。

「ごめん……なさい……」

「……オータム」

俺はオータムの涙に、ここが俺の過去生の世界ではないことを再認識させられた。

オータム・フォーはアンドロイドだ。体は機械で、涙は決して流せないし、成長だってしないし外見も変わらない。俺が過去生の中で見てきたオータムは確かにそうだった。

だが、今、俺の隣で寝ているオータムは違っている。

外見は似通っているが歳と背は１０歳前後。しかも泣いている。

俺は布団から体を起こすとオータムを見る。俺には彼女が泣ける理由がなんとなく理解することができた。

きっと、オータムは生まれ変わったのだ。リバースの力によって惑星エリアがエリアに再誕したように、彼女もまた人間に近い肉体を手に入れたのかもしれない。

泣ける……それが喜ばしいことなのか、俺には判別しかねることだった。

「……零児、俺はどのくらい眠っていた？」

「時間にすれば３０分ほどだ」

零児が座禅を解きながら答えてくれた。

「ふぅ……だが、お前自身の経験は３０分どころではないはずだ」

「あぁ……」

キョウスケ・ナンブ……俺の過去生。時間に直して約5，6年の月日を俺は見た。

しかし現実には３０分程しか経過していないらしい。壁にかけている時計をみると納得する。なるほど、長針が半周しているが短針は少ししか動いていなかった。

どっと疲れが襲ってきた。

３０分。たったの３０分間横になっていただけだと言うのに、体が鉛にでもなったように重い。
しかし疲労に関しては、俺よりも零児の方が上のようだ。
零児の息遣いが心なしか荒い。

「少し……休ませてくれ」

零児は壁に背を預け、目を瞑ってしまった。

「零児、大丈夫か？」
「すまないな……お前の過去に少し当てられたようだ。少し休めば……大丈夫、だ……」

そう言うと、静かな寝息を零児は立て始めた。
零児は「夢想転生」を奥義だと言っていた。人の記憶を他人に投影する。そんな荒業なら、術者である零児にも大きな負担がかかっても不思議ではない気がする。

「零児……」

ありがとう、ゆっくり休んでくれ……簡単な気遣いの言葉だ。しかし……どういう訳か、俺は言うことができなかった。この簡単な感謝の言葉を、だ。
理由はすぐに分かった。
俺は……零児を逆恨みしていた……。
俺の過去は地獄だった。零児がいなければ、俺は自身の凄惨な過去を見ることはなかっただろう。零児さえいなければ、過去の罪を知ることもなく、呑気に毎日を過ごすこともできていたかもしれない。
それどころか……零児が、小牟（シャオムウ）がエリアに来なければ、俺は何も

知らずに平穏に生きていられたのに……とさえ、思ってしまっていた。

「……最低な男だな、俺は……」

だが俺は、零児を恨まずにはいられなかった。

いや零児ではなく、零児が「夢想転生」という技を持っていなければと、恨まずにはいられなかった。

だって俺は見てしまったから。

俺がこの世で一番見たくないものを、見せられてしまったから……。

「エクセレン……」

俺は見てしまったのだ……愛する女の死に様を。

瓦礫に埋もれ、手首しか残っていなかった。

見たくなかった……知りたくなかった……あんな結末が待っていると知っていれば、俺は過去生を見たりなどしなかった！

零児を殴りたい衝動に駆られる。

お前のせいだと、誰かのせいにできればどれだけ楽だろう。全て零児のせいだと叫んで、殴ってしまいたい。きっと少しは気分が晴れるだろう。しかし、その後に何倍もの罪悪感が俺にのしかかってくるに違いない……俺は、拳を握りしめるだけに留めた。

完全な逆恨みだ。

みっともないこと極まりない。

過去と違って、あまりにも情けなくちっぽけな男……それが今の俺、キョウスケ・ナンブだ。

「♪～～」

キッチンから鼻歌が流れてくる。
気づくと、鼻を香ばしいスープの匂いがくすぐっていて、俺の足はキッチンに自然と吸い寄せられていた。
キッチンでは彼女がスープを作っていた。
鼻歌交じりに白く美しい手でお玉を握り、スープを掻き混ぜている。過去と違い、彼女の指に白銀の婚約指輪ははめられていない。鼻歌と一緒に足でリズムをとっていて、頭で結ばれた美しいブロンドヘアーがリズミカルに揺れている。
見慣れているはずの彼女の後姿……俺は懐かしさと一緒に、なぜか、魂が震えるほどの安堵感を覚えていた。

「エクセレン」
「ん？　どったのキョウスケ？　あー、さてはつまみ食いに来たんでしょ。でもダーメ。もうすぐできるから、ちょっち待って　――」
「――」
「エクセレン！」

俺は彼女の言葉を遮って、強引に抱き寄せていた。
エクセレンがいる。俺の手の中に、間違いなくエクセレンがいる。
こんなに嬉しいことはない……。
だから　――　俺は分からなくなったんだ。

「ど、どうしたのキョウスケ？　いきなりハグなんて、そ、そりゃ嬉しいけど駄目よ。あっちの部屋にオータムちゃんたちがいるのよ……？」

俺の腕から逃げ出そうとする訳ではなく、静かに目と口で訴えてくるエクセレン。
俺と彼女の視線が交錯する。

「いいんだ」
「キョウスケ……？」

エクセレンがいる。
手の中には柔らかくて小さな、エクセレンの肩の感触がある。エクセレンの温かさがある。息遣いが耳に届き、俺に向けられた視線が俺の行動に困惑していることを物語っている。
それら全てがエクセレンだった。
エクセレンが生きている……だから、俺は分からなくなったのだ。

「しばらく、このままでいさせてくれ……」
「キョウスケ……うん」

エクセレンは小さく頷き、俺たちは静かに抱き合ったまま互いの温もりを確かめ合った。

そして、思う。
本当にこの世界 ―― エリアは歪んでいるのか？
エリアは間違っているのか？
エクセレンの生きているこの世界が……？
エリアを否定することが、果たして俺にできるだろうか？
俺には分からない……答えを出すことが俺にはできなかった ――
――……

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』
個性豊かな人間たちがいる、笑顔の絶えない閉じた世界
正しい世界なのか、間違った世界なのか……答えは誰も知らない
だがこれだけは言える
俺たちの生きるエリア……その破界と再世まで残された時間は

――

――あと3日……

To be continued――……

鋼鉄の駄狼Ｒ２　～ベーオウルフ　３～（後書き）

＜次回予告＞

なぜか高校が密集する地域「エリア」
俺はこの地域で暮らしている平凡な貧乏学生だった
恋人や友人と過ごす何気ない日常と言う名前の幸せ
俺は幸せだった
ずっとこのまま皆と生きていければいいと思っていた
しかし俺は知ってしまったんだ
この平穏や幸せは……最初から破綻していたことを……

次回、スパロボ学院　シリアス編Ｒ「最終章　俺たちの未来」
真実を知ったとき、俺はすべてを捨てて逃げだした……

以下、第２章後書き。
スパロボ学院シリアス編の第２章「鋼鉄の孤狼」はこの話で終了です。
駄文ではありますが楽しんでいただけたなら幸いです。
次回から最終章「俺たちの未来」編に突入します。
ちなみに鋼鉄の駄狼Ｒ２から、鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＩＮＡＬに進化する予定（？）
冒頭で２章までのあらすじと登場キャラ紹介をする予定ですので、よかったら読んでみてくださいね。
ただ、次回のシリアス編更新がいつごろになるか分かりません。
感想でネタもらったし、シリアス書き過ぎでコメディ書きたい病気

が発症しそうなもので（苦笑）。
コメディ編のネタは随時募集中だよ！（宣伝）
ただし全部書ける保障はないよ！（オイ

以下、第２章のどうでもいい話。

元々第２章は「エリア」の秘密の核心を書く話の予定で、２万文字ぐらいでさらっと終わらせるつもりでした。（要するにエクセレンが亡くなる下り以降）
そんな時、私の悪い病気が勃発。
第２次スパロボＺをプレイし、私は奴の毒に冒されました。
その名はボトムズ。
最低野郎とキリコの毒が回った私は、せっかくだからボトムズっぽい、むせるロボバトルものを書いてやれ！　と思いました。
当初考えていなかったホワイトスター戦を付けたし、冒頭からバーコフ分隊ばりの死亡フラグを乱立、つかの間平和と、オータムとリバースを少しずつ書き書きしていたら、２万文字のつもりが計算すると第２章全部で１３万文字オーバーしていた……（汗）
異能生存体恐るべし！（関係ないし）
第３章をスパロボＯＧ？発売までに完結させる自信がなくなってきた今日この頃です。

最後に質問をば（気の向いた方は感想かメッセージで教えてください）

この小説には色々なＯＧｓのキャラが登場していますが、１人だけ完全作者オリジナルの奴がいます。
そう、リバースです。
そこで質問なのですが、リバースと他のキャラの絡みを変だと思ったりしませんか？

なにせモトネタのないキャラなもので、キャラが立っているかやや心配なのです。

ではでは、よろしければ第3章「俺たちの未来」でまたお会いしましょう。

ここまでのあらすじ（前書き）

第1章、第2章の内容をあらすじとしてまとめました。
登場キャラの紹介や、用語の説明などもこのページで行っていきます。

＜注意＞
1章、2章のネタバレありです。
まだ読んでいない方は読まないことを推奨します。

ここまでのあらすじ

スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～　シリアス編
ここまでのあらすじ＆登場キャラ・用語紹介など

【第１章のあらすじ】

なぜか高校の密集する地域「エリア」。
キョウスケ・ナンブは「エリア」のＯＧ高等学院　――　通称ジェネ高に通うわりと平凡な高校３年生だった。
恋人や友人と送る平穏な生活に満足していたキョウスケ。
しかしある日、彼の身に異変が起こる。普段からよく見ては、朝になると忘れていた悪夢をその日に限ってキョウスケは覚えていた。
さらにその日、彼は空から降ってきた少女「小牟」と出会う。
なんと小牟は異世界から「エリア」にやってきたと言う。成り行き上、小牟が元の世界に帰る手伝いをキョウスケはすることになる。

――　全ては　静寂なる世界のために　――

小牟の帰還方法を探しに出た「エリア」の住宅街で、キョウスケの頭に聞き慣れない声が響く。
平穏な日常に異変の影が忍び寄っていた。
体に違和感を覚えながらも、小牟と共に探索を続け、とある公園にたどり着く。
そこでキョウスケは、何者かに憑依された悪友アクセルに襲われる。

「全ては、平穏なる世界のために」

何かに取りつかれたアクセルの声に、キョウスケの中で何かが暴走する。
何かに体を操られたキョウスケの体は、アクセルを圧倒し、さらに小牟をその手で殺しかける。

「待てぃ！！」

その時、天空から男の声が響く。
小牟の相方「有栖　零児」の活躍で、ベーオウルフと呼ばれた何かはキョウスケの体に封印され、キョウスケは体の自由を取り戻す。
しかしその隙に、アクセルに取りついていた何かは小牟の体に取りつき、どこかへ去ってしまう。
茫然と立ち尽くすキョウスケと零児の前に、元エリアの神を名乗る少女「オータム・フォー」が現れれ鵜。

「久しぶりですね、キョウスケ」

面識のないオータムはキョウスケの事を知っていた。
オータムからキョウスケたちは「エリア」の秘密と敵の名前を聞くことになる。
敵の名前は「リバース」、そして「エリア」はリバースの作り出した世界であり、「エリア」は数年周期で満る歪みを修正するため破界と再世を繰り返している……キョウスケたちは耳を疑った。
しかし小牟を探す手がかりを得るために、オータムの言葉に従い「カイメラ医院」の「アサキム・ドーウィン」に会うことにしたキョウスケたち。
アサキムは言った。

「神を殺せるのは君しかいない」

リバースは誰にも殺せない。
殺せるとすれば、酷似した存在であるベーオウルフだけ。
キョウスケの中に眠るベーオウルフ……その力を使いこなすことはできるのか？
可能性は、オータムの中に眠るキョウスケの過去生にあるかもしれない。

――　全ては　静寂なる世界のために　――

そのアサキムの言葉に望みを託し、零児の奥義「夢想転生」で自分の過去の世界へとキョウスケは旅立っていくことになる　――……

【第2章のあらすじ】

これは既に終わった物語。
変えられない残酷を、彼は見ることになる。

新西暦187年、地球は異星人インスペクターの侵略を受けていた。
インスペクターの攻勢に団結した地球側は劣勢を押し返し、戦局は「ホワイトスター」での最終決戦へと流れ込んでいた。
この最終決戦に、キョウスケ・ナンブ率いる不死の部隊「ベーオウルブズ」も参加していた。
キョウスケは決戦前夜にある男と出会う。

「初めましてだな、ベーオウルフ」

「アクセル・アルマー」との初めての出会いだった。
アクセルは言う。戦争は必要だと……しかし、エクセレンと生きる平和とのために戦うキョウスケに、アクセルの言葉を受け入れることはできなかった。
キョウスケ率いるベーオウルブズ、アクセルの部隊の活躍で、ホワイトスターの防衛兵器は無力化され戦局は地球側に大きく傾き、戦争は地球の勝利という形で終わることになる。
祝勝会ムードの酒場で、キョウスケはアクセルと杯を交わす。
だが……

「戦争はすぐに起こるさ。なんなら俺が起こしてやってもいい……これがな」

キョウスケとアクセルは決別し、世界は平和のまま時間が過ぎていく。
5年後、新西暦１９３年。
世界は長く続いた平和のために腐敗し始めていた。
キョウスケは日本の駐屯地に駐留し、エクセレンとの間にもうけた子「アルフィミィ」と一緒に幸せな生活を送っていた。
しかし幸せは長く続かない……

【ＴＩＭＥ　ＴＯ　ＣＯＭＥ】

アルフィミィの誕生パーティーの時、玄関口に置かれていた手紙にはそう書かれていた。
時は来た……その言葉の通り、「シャドウミラー」が地球連邦に反旗を翻す。
シャドウミラーの蜂起の場に選ばれたのは、エクセレンたちのいる町「絵里阿町」だった。

5年越しの出撃をすることになるキョウスケ率いるベーオウルブズは、アクセル率いるシャドウミラーと対峙することになる。
キョウスケは敗北し、絵里阿町は廃墟と化す。
戦場と化した町で、エクセレンとアルフィミィは死んでいた。
全てを失い、世界に絶望するキョウスケの頭に「あの声」が響いてくる。

――　全ては　平穏なる世界のために　――

キョウスケの体は声に乗っ取られ豹変する。
声の正体はベーオウルフ。
ベーオウルフは悲劇のない平穏な世界を実現するため、世界中の人間を根絶を目指していた。
圧倒的な力の前に、キョウスケの仲間たちは全て殺される。
人類全滅も時間の問題……そんなある日。

「狼というより、外道にすぎるぞ、ベーオウルフ」

キョウスケはアクセルと再会した。
ベーオウルフの力の前にアクセルも敗北する。
しかし最後の最後で、次元転移装置リュケイオスを爆破し、巻き込まれたキョウスケの体は燃え尽きて消滅する。
憑代となる体を失ったベーオウルフの力が暴走しかけるが、

――　そうはさせませんよ　――

この瞬間を待っていたリバースに力を制御され、惑星エリアのある並行世界へと転移させられる。
惑星エリアは暴発したベーオウルフの破界の力で消滅し、リバースの再世の力で再誕する。

永遠に平穏の続く閉じた世界「エリア」として　――……

【第3章　俺たちの未来】

過去生の世界から「エリア」へと戻ってきたキョウスケ。
過去と違い、生きて目の前にいるエクセレンを見て、キョウスケは迷う。
この作られた世界「エリア」は……本当に間違っているのか、と
――……

第3章に続く。

≪登場キャラクター紹介≫

【キョウスケ・ナンブ】

「エリア」のOG高等学院に通う貧乏学生。
高校3年だが、リバースの認識操作の影響で実年齢や両親の顔、「エリア」の外の世界の事は知らない（これはエリア中の人間に当てはまる）。
趣味はバイクいじり、ツーリング、そして本人は認めようとしないがギャンブルである。分の悪い賭けを好み、ここ一番の大勝負には強いがそれ以外は非常に弱い。
表面にあまり出さないが、恋人のエクセレンの事を深く愛してい

る。彼女や友人と過ごす生活を何よりも大切に思っている。

体にはベーオウルフが封印されている。体がベーオウルフに支配されると、目元に紅いタトゥーが浮かぶ。本人は別に戦闘能力が高い訳ではなく、良くも悪くも凡人。

【エクセレン・ブロウニング】

「エリア」にあるOG高等学院に通う高校3年生。

キョウスケの彼女で、よく一緒にツーリングに行ったり、料理を作って彼に届けてあげたりしている（原作と違い家事はできる）。

得意料理はスープ。

意外と嫉妬深い一面もあり、小牟とキョウスケが一緒にいるところを見て勘違いしたりしていた。

【有栖　零児】

「ゆらぎ」に巻き込まれてはぐれた小牟を探して「エリア」に来た森羅のエージェント。

左こめかみ辺りが白髪化している、何処かキョウスケに雰囲気の似ている男。しかしキョウスケと違い退魔術や格闘技の達人、さらに封印術にも長けており様々な有栖流奥義を使うことができる。しかし愛用していた武器はベーオウルフに破壊されてしまう。

キョウスケと違い分の悪い賭けを嫌うが、相方の小牟を大切に思っているあたりはキョウスケに似ている。

リバースにさらわれた小牟の手がかりを探す為、キョウスケと行動を共にしている。

【小牟】

「ゆらぎ」に巻き込まれて「エリア」に降って来た金髪仙狐。
外見はロリ少女だが、実年齢は７６５歳のため使う言葉はどこかババ臭い。たった１人で「エリア」に来たため、最初に出会ったキョウスケの協力を得て、帰る方法を探していた。
仙術や銃を使って戦闘もこなせる。
零児には少なからず好意はあるようである。
リバースに体を乗っ取られたため、現在消息不明。

【アクセル・アルマー】

「エリア」にある不良の巣窟で有名な影鏡高校に通う、高校３年生。
キョウスケの幼馴染だが、昔の因縁からよくケンカを吹っかけてきている。頭は良くなく、アホセルに近い。
体得している「蒼髭流格闘術」は免許皆伝の腕前で、気を使いこなすことができたりと非常に戦闘能力が高く、巨大暴走族「シャドウミラー」で特攻隊長を務めていたりする。
リバースに体を乗っ取られた後に、ベーオウルフに倒され、現在昏睡中。
どうでもいいが、アルフィミィとレモンに二股中。

【オータム・フォー】

「エリア」の神様……リバースが眠っている間は、その力を行使することを許された実質「エリア」の監視者。

元々アンドロイドだったが、リバースの影響を最も受けるため「エリア」の歪みを反映して成長する肉体に変化している。彼女の頭の中には、「エリア」の元になった世界の記録や住民の過去生などが記憶されている。

歪みが小さいときは体は小さく2頭身。「にょ」を語尾に着ける（´・ω・、）顔した変な生き物に見える。

歪みが大きくなってきた現在では、１０歳前後の少女の姿をしている。

【アサキム・ドーウィン】

「エリア」のカイメラ医院で務める腕の良い医者。

中二病的言動や意味不明な言葉が多いが、オータム以外に「エリア」の過去を知っている人物。

死ねない体らしい。

【ベーオウルフ】

キョウスケの体に眠る未知の力を持つ超存在。

その正体は、太極の涙から生まれてしまった精神寄生体で、力をフルに使おうとするなら憑代が必要となる。

本来の力は全てを消滅させる破界の力だが、超強力な念動力を使うことができ、過去の世界で念動力を使用しすぎたためにキョウスケと魂が癒着し、容易に引きはがせなくなっている。

それを逆手に取られリバースに封印され、エリアの破界と再世に良いように使われているのが現状。

【リバース】

ベーオウルフの破界と対になる再世の力を持つ超存在。
その正体は、太極の涙から生まれてしまった精神寄生体で、力をフルに使おうとするなら憑代が必要となる。
惑星エリアを母体に「エリア」を再誕させ、永遠に繰り返される平穏な世界を作り出した。平穏な世界を維持するため、およそ数年単位で「エリア」の歪みをベーオウルフの破界で矯正し、自らの再世で再生させてしばらくは休眠し、歪みが強くなると覚醒するを繰り返す。
本来の力は再世だが、「ゆらぎ」を生み出したり、ベーオウルフよりは弱いが念動力も使える。
現在は小牟の体に憑依し、行方知れず。
どうでもいいが、作者のオリキャラです。

《用語紹介》

【エリア】

本作の舞台。
何故か高校が密集する地域で、キョウスケたちはこの地域で生活している。なぜ高校が密集しているのかは、第2章で微妙に伏線張っていたりして……（大した理由ではないが）。
（ＡＣＥシリーズをプレイした人は知っているかもしれないけど）
「エリア」の元ネタは「ＡＣＥ．Ｒ」の舞台である惑星エリア。
惑星エリアが「エリア」になった理由は第2章を読んでみてください。
あと「ＡＣＥ．Ｒ」もよろしく！

【ゆらぎ】
元ネタは「ナムコクロスカプコン」のゆらぎ。
異世界との間をつなぐ次元の穴のようなもの。
本作では自然発生するものと別に、リバースが作り出すことができる。

【破界】
ベーオウルフの持っている能力。
……を操作し、世界の存在その物をなかったことにする能力。
発動すれば、即死どころかその次元の宇宙そのものが消滅する程の能力である。

【再世】
リバースの持っている能力。
……を操作し、過去にあったものを再生することができる能力。
発動すれば、死者だろうが滅んだ世界だろうがなんでも甦らせることができる。

【並行世界など】
全次元に存在する自分たち似たような存在の生きる世界　――
俗に言う、パラレルワールド。
言うまでもない、スパロボの常識である。

【同位体】

次元を別とした微妙に違う同一存在。

【霊力】
霊なる力らしい。分かる人には分かる。

【気】
ＤＧ的な力？　アクセルあたりがノリで使っていたりする。

【念動力】
俗に言う超能力。
原作と違い、ベーオウルフの使うものは化け物じみている。

【太極】
ベーオウルフやリバースを生み出した、謎の存在。
作者的にはＴプロデューサーあたりでいいのでは？　と思ってい
――――うわ！　なんだ！　誰だお前た――――！？

用語紹介やキャラ紹介は、ストーリーの進行とともこのページに
付け加えていきます。

ここまでのあらすじ（後書き）

これから少しずつ、地味にこのページは更新していく予定です。

鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＩＮＡＬ　～そして、俺は逃げだした～（前書き）

この小説は2次創作です。
本作のキョウスケは、原作のキョウスケとは大分雰囲気が違います。
ご了承ください。
シリアス編はこの章が最終章です。
よろしければ最後までお付き合い下さい。

鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＩＮＡＬ　～そして、俺は逃げだした～

紅い月が空からエリアを見下ろしていた。

暗闇の空の中、まばらに浮かんでいる雲片を赤く照らしながら漂う紅い月。

その月を彼女は見上げていた。エリアにある繁華街のビルの屋上で、金髪の小柄な少女が1人きりで立ち尽くしている。

長い金髪の先は黒く、何本かに分けて髪を結わえている。まるで9¥尾のキツネの尾を連想させそうな髪型をした、深めのスリットのチャイナ服を着た少女だった。

目の下には紅い水玉のタトゥーが浮かんでいる。

「……また、歪みが増した。そうですか、オータム。見せたのですね、キョウスケ・ナンブに……彼の過去を」

金髪の少女――小牟（シャオムウ）の声で何者か――リバースが一人ごちする。

「知ったところでどうすることもできない。それが過去なら尚更なのに、何故、人は知ろうとするのでしょう？」

小牟の顔に影が差す。

その表情は小牟が浮かべたものなのか、それとも精神寄生体であるリバースが浮かべさせたものなのか、それは誰にも分からない。

ただ、小牟の声でリバースはこう続けていた。

「悲惨な過去を知れば、人はそれに抗おうとする。例え今、平穏でなに不自由ない生活を送れているとしても、多くの人間は何かを変えようとやっきになります……理解できません。

私には理解できない。

変化は今の平穏を壊す。何も知らずに、平穏を享受することが究極の世界の筈なのに……オータム、貴女も望んでいた世界こそが今のエリアそのものの筈なのに……何故、キョウスケ・ナンブに過去を見せたりしたのですか？」

リバースの問に答える者は誰もいない。

時間帯は既に深夜だった。薙いでいくビル風だけが小牟の体を刺激し、リバースの言葉に応えているようにすら錯覚する。

リバースの眼下にはエリアが広がっている。

惑星エリアを変質させて手に入れた、オータムが望み彼女も望んだ究極の世界……それがエリアだった。

しかしエリアは歪んでいた。

リバースの力で構成されたエリアには無理があったのだろう。年月と共に歪みは増大していき、リバースはそれを矯正するために、破界と再世を繰り返してきた。

繰り返される破界と再世たびに、エリアの住人達の記憶はリセットされる。

知らない方が幸せなこともある、エリアには住人たちの笑顔に満ちていた。

凄惨な悲劇のない、平穏なる世界がリバースの眼下には広がっていた。

「全ては、悲劇のない、平穏なる世界のために　――」

エリアの神　――　リバースは今日もエリアを見守っている。

やがてエリアに訪れる破界と再世の瞬間まで……あと約４８時間
――……

●

俺には分からなくなっていた。

俺の名前はキョウスケ・ナンブ。

何故か高校の密集する地域「エリア」に住んでいる平凡な貧乏学生だ。

職業は高校生、学年は3年、通っている高校はエリア一のマンモス高校「ＯＧ（オリジナル）高等学院」――通称ジェネ高だ。

充実した楽しい生活を送っていた。

恋人であるエクセレンや悪友であるアクセル、タスクやアラドたちや多くの友人たち……みんなとの楽しい日々は、きっと俺が高校を卒業してからも続いていくに違いないと、疑う事すらしなかった。

それが俺の日常。

俺が愛していたただの日常。

しかし俺の愛した日常の本質は非現実的なまでの非日常だった。

俺はオータムの中に記憶された俺の過去生を垣間見た。

俺の過去は地獄だった。
俺は、愛する女 ―― エクセレン・ブロニングを失い、絶望し、ベーオウルフを身に宿して世界を滅ぼそうとしていた。
エクセレンがいない世界……そんな世界なんて必要ないと思っていたから。

だから、俺には分からなくなった。
エリアの秘密はオータムから教えてもらった。このままでは歪みが増大し、歪みの矯正のため、リバースが俺の中のベーオウルフの力を暴走させてエリアを破界するという事。
そして、その後にリバースによってエリアは再世され、俺たちはまだ全てを忘れるだろう、という事。
これは１００００回以上も永遠と繰り返されてきたサイクルなのだと、いう事を。
俺はオータムに教わり、過去生を見て理解していた。

だから分からなくなった。
過去生の中でエクセレンは死んでいた。
しかしエリアでは生きている。
エリアがある限り、エクセレンは生き続けていることができる。
いや、本当は既に全員死んでいるのかもしれない。しかし俺の知っているエクセレンは生きている。
……だからだ。
だから分からなくなった。
リバースを殺すことができるのは、俺の中に眠るベーオウルフの力だけらしい……。
リバースというエリアの神を俺が殺せたとして、神を失った世界

の結末はどうなるのだろか？
本当に俺はリバースを殺せるのか？
いや、リバースを殺すべきなのか？
このまま破界と再世を迎え、エリアでエクセレンと一緒に生きていくべきではないのか？

……分からない。
俺には答えが見えなかった。
誰か答えを知っているなら教えてくれ――……

●

まだ日も上がり切っていない早朝、俺は愛用のせんべい布団の中で目を覚ました。

見慣れた染みのある天井を見上げながら、昨日の出来事を思い出す。
過去生を見終えた俺は何も語らずエクセレンを抱きしめ、直後に猛烈な疲労感に襲われて布団についたはずだ……。

「……オータム、零児……」

隣の布団には青髪の少女オータム・フォーが、壁には掛け布団を被せられた有栖（ありす）　零児（れいじ）が背を預けて寝息をたてている。
俺が布団から抜け出すが、２人が目を覚ます気配はない。
エクセレンの姿は見当たらなかった。キッチンには普段使わない

調理用の鍋が出されており、食卓には1枚の紙きれが置かれていた。
丸っこい女の子の文字……エクセレンの置手紙のようだった。

『疲れているみたいだから私は帰るね。スープはお鍋に沢山作っているから、お腹が空いたら温めて食べてね？
キョウスケの愛しの超ビューティホーな彼女　エクセレン・ブロウニングよりキラ☆』

エクセレンらしい文章だと思った。
スープという文字を見ただけで腹の虫が鳴き始める。
しかしスープに手を付ける気にはなれなかった。

「……すまない」

エクセレン、オータム、そして零児。
無性に申し訳ない気持ちになり、俺は居間の壁で寝ている零児を見た。
異世界からやって来た頼りになる男……どこか俺に似ているが、俺と違って強い男……有栖　零児。
俺は零児に謝っていた。

「俺は弱い……許してくれ、零児」

知りたくなかった。
知らなければ良かった。
俺の愛した日常は最初から破綻していた。

靴を履き、家を出る。

赤錆びた階段を下り、まだ薄暗い早朝の住宅街へ……俺はゆっくりと歩き出す。1歩ずつ少しずつ……しかし確実に俺は直面している現実から逃げ出していた。

誰でもいい……だから誰か教えて欲しい……俺は、これからどうすればいい――……

鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＩＮＡＬ　～そして、俺は逃げだした～（後書き）

＜次回予告＞

長いプロローグは終わった
終わりの時が刻一刻と近づいてきている
分かっている
だがどうすればいいのか、俺には分からなかった
俺はさまよう、霧のように実態を掴めない答えを探して

次回、鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＩＮＡＬ第１話「傷だらけの男」
答えが決まっていれば、苦しまずに済むのだろうか……？

シリアス編最終章を再開しました。
今回はプロローグのようなもの。
次回から１話を分割して更新していくと思います。
スパロボＯＧ？が発売されるまでに何とか形にしていきたいと思います！
並行してコメディー編を更新するかもしれませんが、こちらに力を注いでいきたのでコメディの更新速度は遅くなると思います。
よろしければ、読んでみてください！

【キョウスケ・ナンブ、独白】

逃げ場なんか存在しない。それは分かっているつもりだった。

逃げ場……つまりは避難所（ヘイブン）のことだ。

俺にとっての避難所とは何なのか？　過去を見た今だから思う……俺にとっての避難所はきっと「エリア」だ……。

エクセレンがいて、仲間いて、生きている……俺にとって、これ以上に理想的な避難所は存在しないだろう。

知らなければ良かった。

知らなければ「エリア」を避難所と認識することはなく、ただただ平穏に過ごすこともできたはずなのに……「エリア」の成り立ちを知ってしまった俺は、もう「エリア」を避難所と考えることができないでいる。

――無限獄――

カイメラ医院でアサキムが言っていた言葉が蘇る。

破界と再世を繰り返し、生きている人間の人生が何度もリセットされていると言うのなら、「エリア」はまさしく無限に続く監獄のような世界に違いない。

住民の記憶はリセットを繰り返されるらしいから、知らなければ

どうと言うことは無い。
しかし知っていれば堪える事実であるのも確か。
知ったことを後悔しているのか、知ろうとしたことを後悔しているのか……俺は直面した事実から逃れたい一心で、「エリア」という避難所の中でさらに逃げ場を探している。
先の見えない暗闇の中で、明確な一歩を踏み出せずに俺は喘ぐ。
身に絡みつく不安を振り払おうとして、足だけは前に進んでいた
――……

その一歩一歩が何も解決しないことを知りながらも、俺は歩くのを停めることができなかった……できなかったんだ……

●

まだ早朝、太陽が顔を出したばかりの住宅街を俺　――　キョウスケ・ナンブは歩いていた。

愛用の赤いジャケットを羽織り、1人侘しく歩いている。朝の散歩をしているお年寄り方とすれ違って気のない挨拶しながら、俺は住宅街の風景を眺めていた。
俺の住んでいるエリアの住宅街は、これといって「特徴が無いのが特徴」といって良いぐらいに地味で平凡で、何の変哲もない場所だった。
コンビニも近くになく、あると言えばあの人気のない公園だけ。
エリアに住む人たちが寝起きして生活するための場所　――　そ

れが俺の住む住宅街だ。

それは今も変わらない。外観も同じ……俺がジェネ高への通学に使っている道も、曲がり角にある品揃えの悪い自動販売機も、俺が長年見続けたままの姿でそこにあった。

……だが、違う。

俺の日常の場である住宅街に俺は違和感を感じていた。

その正体を、俺はすぐに理解することができた。

「……そうか……絵里阿町なのだな、ここは……」

絵里阿町――俺の過去生で、キョウスケとエクセレンが生活していた町の名前だ。

過去生の中のキョウスケは「インスペクター事件」後に、日本の絵里阿町に一軒家を建て、妻のエクセレンと娘のアルフィミィと一緒に生活していた。

キョウスケが休暇のたびに足を運んで体を休め、アルフィミィの誕生日をタスクたちと祝っていた。近くには繁華街もあり、行きつけの店などもあり、彼らにとって平穏な日常の場となっていたのが絵里阿町だった。

シャドウミラーの蜂起によって廃墟となったあの町が……俺の目の前に広がっている。

俺の住んでいる住宅街は、戦火に焼かれる前の絵里阿町に瓜二つだった。キョウスケたちの住んでいた一軒家こそない。しかしそれ以外の部分は、まるで街並みを鏡に映し取ったように酷似している。

過去生を見た今だから理解できる。

俺の住んでいるエリアの住宅街は、キョウスケの生きた絵里阿町を模したものだった。

「……確か、キョウスケの家の場所はこっちだったな」

俺は記憶を頼りに住宅街を歩く。

絵里阿町の生き写しの住宅街で、キョウスケの家だけが切り抜かれたように消えている。

他の民家からは人の気配が感じられ始めていた。今日は平日なので、奥様方が朝食の準備でもしているのか、食欲を誘う香ばしい匂いや食卓を囲む家族の笑い声が聞こえてくる家もあった。

幸せそうに過ごす家族の姿が目に浮かぶ……それはキョウスケが望んでいたもののはずだった。平穏で、平和な暮らしがこの住宅街では約束されているように思える。

しばらく歩き続け、俺はキョウスケの自宅があった場所に辿りついた。

「ここは……？」

俺の行き着いた先にキョウスケの自宅はなかった。

もう見慣れてしまった人気のない小さな公園が広がっていて、キョウスケがエクセレンたちと過ごした家の名残は欠片も残っていない。

キョウスケの自宅は、俺がリバースと出会った公園になっていた。不自然なまでの静寂さで、目の前の公園だけが世界から隔絶された場所のようにさえ感じる。ほんの数日前まで感じることのできなかった異質さが公園にはある……俺の脳裏には、あの時の小牟（シャオムウ）の言葉が蘇っていた。

「特異点……小牟は確かそう言っていたな。俺がこの公園に感じている違和感……それがそうだと言うのか？」

それに俺は何度も公園に来たことがあるのだろう。

破界と再世され続けるエリアで記憶をリセットされ続けた……だ

から、足を運んだこのある公園の事も忘れてしまっていた。
きっと、この公園のことだけではない。他にも忘れてしまっていることが俺には……いやエリアに住んでいる者にはあるに違いない。

「思い出したいのかな、俺は？　知ることや思い出すことが幸福とは限らない……だが、知らずに生きることが果たして幸せなのだろうか……？」

自問自答　――　答えの出ない独り言を残して、俺は公園を後にした。
ただただ歩き、住宅街を抜け、繁華街を素通りする。
俺の通うジェネ高やアクセルの通う影鏡高校など、高校が密集している地域にも足を運んだ。
歩くうちに時間は立っていたがまだ朝早いため、学生たちの姿を見ることはできない。
俺は見慣れた母校の校舎を見上げた。

「……やはり、そうか……」

ジェネ高もまた瓜二つだった。過去のキョウスケが、愛娘アルフィミィが成長した時に通わせようと思っていた学校に、だ。
その高校に俺が通い、成長したアルフィミィも在学している。何処か皮肉めいたものを感じる境遇に苦笑いを零さずにはいられなかった。

「この世界は、キョウスケの願望や理想がモデルにされている……俺にとって居心地がいいのは当たり前なのだな」

エリアは破界された惑星エリアをリバースが再世させた世界だ。
しかし再生させるに当たって、モデルとなるものが必要だったの

かもしれない。だから手直にいた、ベーオウルフと癒着したキョウスケの記憶を参考に、エリアを作り上げた……きっと、そうに違いない。

俺には……もういつもと同じように、ジェネ高の校舎を見ることができなかった。

作られた楽園 ―― 閉じた世界エリア ―― 出口のない袋小路の中を俺は彷徨う。

避難所（ヘイブン）の中でさらに逃げ場を探す。

無意味な放浪の果てに、俺はある場所に到着していた。白塗りの建物が俺を迎えるように見下ろしている。

「カイメラ医院……」

俺に過去生をみることをすすめた人物「アサキム・ドーウィン」。

彼の務める小さな病院に、俺の足は自然と向かっていた。

●○

【有栖（ありす） 零児（れいじ）、独白】

辟易している、それが正直な感想だ。

もう何度目だ？　異世界の厄介事に巻き込まれるのは？

少なくとも過去に3回は異世界に飛ばされて、その世界で冒険を繰り広げたことはある。

初めは森羅のエージェントとして責務と自分の運命に抗うため、後の2つは自分の世界に戻るために戦った。
今回の騒動は後者に分類されるだろう。
そう、俺 ――― 俺、有栖 零児は厄介事や荒事には慣れている。
辟易するぐらいには、な……。

俺は小牟を追って、この世界「エリア」に来た。
そしてキョウスケに出会った……既視感を覚える、俺に良く似た男だった。俺は小牟をリバースの手から取り返し、元の世界に戻る手段を探すためキョウスケに協力することになる。

――― 夢想転生 ―――

俺の使える有栖流の奥義の1つだ。
他人の記憶を投影させることのできる技だが、オータムの中に眠っていたキョウスケの過去生を彼に見せたことを今は後悔している。
術者である俺も当然見ることはできる……キョウスケの過去生は壮絶だった。
過去生を見せたこと自体に正否は無いだろうが、俺がキョウスケに対して負い目を感じていることだけは確かだ。

だが俺は止まっている訳にはいかない。
もうすぐ「エリア」は破界される。
世界の消滅だ、俺のような人間など一たまりもないだろう。そしてこれは推測だが、破界に巻き込まれれば、リバースによって記憶を消されて再生され偽りの立場を与えられて「エリア」に取り込まれる……あくまで推測だ。
しかし悠長に構えている訳にはいかない。

小牟を取り戻し、元の世界に戻ってみせる。
これだけは、譲ることはできない俺の使命だ　――……

○

……目覚めると、見慣れない部屋が俺の目に飛び込んできた。

「寝てしまっていたようだな」

畳敷きの古びた和室で、俺は壁に背を預けて眠っていた。
俺の眠っているのは居間らしくスペースを確保するためにちゃぶ台が壁に立てかけられ、そこに布団が2つ敷かれている。居間以外には、キッチン兼食卓らしきスペースと玄関ぐらいしかない。清潔感が感じられない古びた室内は、日本によくありそうな格安のボロアパートを連想させる。
敷かれた布団の1つで、青い髪の少女　――　オータム・フォーが寝ていた。彼女を見て、俺はこの部屋がキョウスケ・ナンブの自宅であることを思い出す。

俺の名前は有栖　零児、「ゆらぎ」に巻き込まれてエリアにやって来た森羅のエージェントだ。
いや訂正しよう。
俺は「ゆらぎ」に巻き込まれてエリアに飛ばされた相棒　――　小牟（シャオムウ）を追ってこの世界にやって来た。だから当然、俺の目的はエリアから元の世界に戻ることになる。

しかし俺は厄介事に巻き込まれやすい体質らしい……異世界に転移するのは初めてではないし、飛ばされるたびにその世界の敵との戦いに巻き込まれる。

もっとも、今回は敵――リバースに小牟をさらわれてしまっただけで、今までのように激しい戦闘があった訳ではないのだが……兎に角、小牟を取り戻し元の世界に帰るための方法を、俺は探らなければならなくなった。

カイメラ医院のアサキムという男の助言に従い、俺は有栖流奥義「夢想転生」を使うことになったのだが……

「キョウスケ……？」

オータムの隣で横になっていた筈のキョウスケの姿がなかった。掛布団が剥がれ、キョウスケが寝ていた筈のせんべい布団が残されている。壁から身を起こし、布団に触れてみる。布団は冷たく、ひと肌の温もりは残っていなかった。

狭い室内にもキョウスケの姿はない。

「……まさか」

俺は嫌な予感に苛まれ、今からキッチン、玄関へと移動した。やはりキョウスケの姿はなく、彼が昨日はいていた靴が下足場から消えていた。

食卓の上に置き手紙が1枚だけ残されていた。

女の書いたと思われる丸い文字で、スープを作ってあるから食べてという内容が書かれていたが、その隅に小さく「すまない」と書き残されていた。角ばった丁寧な文字だ。おそらく丸い文字の方はエクセレンで、角ばっているのはキョウスケだと思われる。

「キョウスケ……まさか本当に逃げ出したのか？」

思わず、俺は呟いてしまっていた。

逃げる ――― 現状から逃げ出す、つまり目を背けること。何の解決策にもならない、無為に時間を浪費するだけの行為だ。まさか、流石にそれは無いとは思うが……いや、あり得るかもしれない……キョウスケは自分の過去生を見た直後だ。

夢想転生の影響で俺もキョウスケの過去を見ることができたが、それは凄惨なモノだった。

過去のキョウスケは歴戦の戦士だったが、エリアで生きてきた彼は平凡な学生としての生活を送ってきた。エリアの裏と誕生の真実を一度に見て、ショックに耐えきれなかった可能性だってある。

真実はいつも残酷だ。

キョウスケがそれから目を背けたくなる気持ちは分からなくもない。

だが現実も同様に残酷だ。

現実世界では、真実はいずれ受け入れなければならないモノだ。逃げたり、目を背けるのは自由だ。だがいつかは受け入れなければならない。

遅いか、早いか、違いはそれだけしかない。

それは俺がこれまでの戦いで、仲間たちから学んだことの1つだ。

「キョウスケ、早く戻ってこい。時間はないぞ」

昨日の時点でエリアの破界まであと3日だったはず……ならば、残された時間は長くてもあと48時間程度ということになる。

破界に巻き込まれれば、おそらく俺もエリアの住民として取り込まれるだろう。これまでも、同様にして取り込まれてきた住民も少なくはないはずだ。

俺は動かねばならなかった ―――

「おっはーー！」

――玄関が勢いよく開かれ、金髪の女性が元気よく挨拶をしてきた。

訪問者と目が合う。キョウスケの恋人のエクセレン・ブロウニングだった。

「あら、キョウスケのそっくりさんじゃない。おっはー！　ねぇ、キョウスケはどったの？」

「ああ、おはよう。キョウスケなら今は少し席を外している」

「ふーん、まぁいいわ。戻ってくるまでに朝ごはんでも作っといてあげよーかな♪」

食材が入っていると思しき袋を持ってエクセレンはキッチンへと入ってきた。

エクセレン・ブロウニング。

キョウスケの過去の世界で彼の生きる目的であった女性。

戦争で彼女を失ってしまったことでキョウスケは発狂した。キョウスケにとって最も大切な存在だが、悪く表現すれば、世界崩壊の引き金となった女とも言える。

「待っててねそっくりさん。そっくりさんの分も作るからね」

袋から食材を出し朝食の準備に取り掛かろうとするエクセレンを見て、俺は思っていた。

彼女には真実を話しておくべきではないのか、と　――……

鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＩＮＡＬ　～傷らだけの男たち～（後書き）

傷だらけの男たち　その2に続く。
執筆が滞っているため、1回の更新量・速度ともに遅くなります。
ご容赦ください。
第1話「傷だらけの男たち」が終わったら次回予告を書く予定です。

無知は罪だと誰かが言った。

しかし俺はそうは思わない。

無知自体は悪いことではない。知らなければ幸せでいられることが世の中には山のようにありすぎると思うから。

きっとエリアもそうだ。

エリアの破界と再世、そして成り立ちを知らなければ、エリアの住民は平穏な毎日を謳歌することができる。リバースの認識操作でエリアの外を意識することなく、破界で命を失くし、再生での蘇りを繰り返す。

知らなければ、エリアの住民は永遠に平穏な世界で生きていける。

だから無知は罪じゃない。

もし罪があるとするのなら、きっとそれは真実を知ろうとしないことが罪なのだ……全てを知った今だから、俺は確信をもってそう思うことができた……まったく、皮肉な話だがな。

●

俺はカイメラ医院の一室に足を運んでいた。

「……アクセル」

俺はベッドの上で寝息をたてている赤髪の男の名前を呼んでいた。
各病棟に数部屋しかない個室で赤髪の男 ―― アクセル・アルマーは寝かされている。アクセル用のベッドの他には、荷物を納めるためのロッカーやプリオペイドカード式のテレビなど置かれているが、使用された形跡は見られなかった。
俺がアクセルをカイメラ医院に運んだのはつい先日のことだ。
たった1日。たった1日しか経っていないのに、アクセルを担いでカイメラ医院に来たのが遠い昔のことのように感じられる。
一日千秋とでも言おうか……そう感じるのも、俺自身が、見た過去生に影響受けているからに違いなかった。
そして今、俺がアクセルに抱いている暗い感情 ―― これも俺の見た過去生の影響だと思いたい。

「アクセル……俺はお前が憎い」

アクセルは答えない。いつもの騒々しさが嘘のように眠り続けている。
アクセル・アルマー……俺の過去生で地球連邦に反旗を翻したシャドウミラー、その隊長格だった男。アクセルが蜂起に選んだ場所は、おそらくエリアのモデルになったと思われる絵里阿町……絵里阿町はエクセレンが暮らしていた町だった。
シャドウミラーの武装蜂起によりエクセレンは命を落とした。
その蜂起で機動部隊を率いていたのがアクセルで、エクセレンの殺した張本人と言ってもいい男だ……いや、男だった。
それらは全て過去の話。
目の前で眠っているアクセル・アルマーは、いつも俺に喧嘩を吹っかけたり、いらぬちょっかいを出してくる幼馴染として互いによく知る仲のいわば悪友だ。
エクセレンを殺したのは過去のアクセル。目の前で無防備に寝て

いるアクセルじゃあない。
分かっている。頭では理解できていても、溢れてくる黒い感情を抑えることができなかった。

「なぁ、アクセル。俺は分からなくなった。過去のお前も俺も言っていたな。戦場で出会わなければ俺たちは友人になれたかもしれない……確かにその通りになった。しかしそれは真実を知らないからこそ築くことができた、虚構の関係かもしれないな」

俺の言葉にアクセルが答えるはずもない。
恋人を殺した男との友情は成立するものだろうか？
分からない。確かなのは、俺がアクセルに憎しみを感じていること。そして無防備な彼の姿に助長された殺意を、俺が必死に抑え込んでいるという事実だけ。

「……アクセル」

俺がアクセルの名を呟いたその時、

「やはりここだったか、キョウスケ・ナンブ」

背後にある部屋の入り口から、聞き覚えのある声が俺の耳に届いた。
振り返ると、白衣ならぬ黒衣に身を包んだ医師 ―― アサキム・ドーウィンが入口に立ち、俺を見ていた。

「人を訪ねてくるときは、前もってアポを取るのが常識だ。そんなことも知らないのかな、君は？」

アサキムが皮肉を言ってくる。

彼と会うのはまだ2回と数えるほどだが、物言いだけでわかる位には皮肉屋で、また妄想めいた発言の多い男だった。以前に出会った時も、「無限獄」や「リセットボタンを押す」などの理解に苦しむ言動を見せていたのを思い出す。

しかしアサキムの言葉は真実だった。常人には理解しがたい言い方だったが、彼は彼なりに真実を口にしていたのだと今でこそ理解できる。

「すまなかったな。モノを知らない男で」

「構わないさ。君だけじゃない、エリアの住民は僕を除いてみんな無知なんだからね」

酷く上から目線の物言いだ。賢者にでもなったつもりかと口が動きそうになるが、アサキムの言っていることは事実だった。

エリアの住人は、リバースの認識操作でエリアに疑問を持たないようにされている。数日前までの俺のようにだ。

「ところで、結果はどうなったのかな？」

アサキムが俺に訊いてくる。

「僕にもう一度会いに来たということは、君は過去生を見ることができたのだろう？　エリアの監視者の中に記録されていた君の過去生だよ。長い間エリアを見続けてきた僕でさえ知らない秘密が、君の過去生には隠されていそうでならないよ」

「……そうだな。俺はお前の助言に従って過去生を見てきた」

オータムの中に埋没していた俺の過去　――　エリアが生まれる原因となった俺の罪。

思い出すだけで反吐が出そうになる。殺し、殺され、殺し尽くす……戦争の果てにあの化け物が生まれた記憶こそ俺の過去生と言ってもいい。

多くのエリアの秘密を知っているであろうアサキムも、俺の過去については詳しくないようで。

「へぇ、聞きたいな。一体、どんな過去だったんだい？」

「聞きたいか？」

苛立つと声が自然に低くなる。アサキムは「もちろん」と即答していた。

「過去の俺は戦争の中にいた。俺は軍人だった。地球外知的生命体との戦争に勝利し、平和と未来を勝ち取ったにも関わらず、結局は人間同士で殺し合いを始め、そしてベーオウルフに滅ぼされかけた。俺はそんな世界にいた……いわば世界崩壊の引き金を引いた男だった。俺の体はベーオウルフに乗っ取られ、仲間と罪のない人々を虐殺していったのだからな……」

あの時の光景が脳裏にフラッシュバックする。

辺り一面の血、血、血 ―― 紅く染まった現場には、ベーオウルフの念動力で五体不満足にされた人体が横たわっている。タスクやアラドもその中にいた。ベーオウルフが、いや俺は愛すべき友人たちを手にかけていた。

生き地獄。

それが過去生の終末を表すのに適切な表現だろう。

「最後こそベーオウルフによる虐殺だったが、最初から最後まで戦いの絶えないすさんだ世界……それが俺の過去生だった」

「ははっ、今の君は悲壮感にあふれているね。まったく、エリアの

破界者の憑代に相応しい、実に暗い表情だよ」

過去生のことを話している際、俺の表情が曇っていたのだろう、アサキムに鼻で笑われた。

「人同士で争い、戦争が続いている世界ね。君は大層不幸な世界のように説明しているけど、そんなもの別に珍しくもない、ただのありふれた世界だよ。

僕はこれまでいくつもの次元の壁を超え、様々な世界を見てきた。全ては太極に至るためだ。その過程で見てきた世界の中に、戦争のない世界なんて1つもなかったよ」

「そう、なのか？」

次元の壁、様々な世界……やはりアサキムの言葉は現実味を帯びていない。

以前の俺なら失笑して聞き流してしまっていただろう。しかしエリアの秘密を知った今では、アサキムの言葉に信憑性があるように思えてならなかった。

アサキムが言っているのは並行世界（パラレルワールド）のことだろう。何らかの方法で、それぞれの世界を行き来する方法を彼は持っていたのかもしれない。

「世界によって戦争の規模に大小の差はあったけど、多くの命が無意味に散っていくのはどの世界も変わらなかったね。

君の過去世界もそんな世界のうちの1つに過ぎないってことさ。そう悲観する必要はない」

「なんだ？　俺を慰めているつもりか？」

「まさか！　僕がそんな善人にみえるかい？」

いいや、と心の中で応える俺。アサキムは贔屓目に見ても悪人に

しか見えない。

「まぁぶっちゃけるとね、僕は君の過去世界自体には興味がないんだよ。過去の世界は過去の世界、知ったところでどうなる訳でもなし……僕が興味を持っているのはエリアと過去世界の繋がり、関係性だね。

エリアを脱出する手がかりがそこから見つかるかもしれない。だから僕に話して欲しいんだ、キョウスケ・ナンブ。

僕では知ることのできない、君が見てきた、エリアと君の過去生の関係を僕に教えてくれ」

「……ああ、いいだろう　――」

そんなに知りたいのなら教えてやる。

俺は自分が過去生で見てきた、エリアと俺の過去世界の関係をアサキムに伝えた。

ベーオウルフによって過去世界が滅ぼされかけたこと。リバースの奸計によりオータムが再世人間を作り続けていたこと。過去世界で死んだ人間の魂を再世人間に注入し、エリアの住民ができたこと。

俺は過去生で知ったことを伝えた、包み隠さずに全てだ。

「――　そしてベーオウルフの破界が暴走、惑星エリアが消滅し、リバースの再世によって生み出された世界……それがエリアだ」

「そのエリアは今も破界と再世を繰り返している。無理やりに作られた世界故の歪みを矯正するため……そしてその時はもうすぐやってくるというわけだね」

アサキムは俺の言葉をあっさりと受けていた。

はっきり言おう。俺の説明には現実味はなかったと思う。中〇病的な妄想だと一蹴されてもおかしくない説明だった。

しかしアサキムは受け入れ、肯定する。

「ありがとう、キョウスケ。君のおかげで、エリアの始まりについては把握することができた。
そしてエリアの神――リバースと、その対になる破界者ベーオウルフの関係性も分かった。両者とも太極より生まれし、スフィアよりも上位に属するモノだ。神殺しには、君の中に眠る狼の力が必要だという僕の推測は正しかったようだね」

アサキムは笑みを浮かべて室内を歩き回りながら考えを述べていくが、

「……良かったな」

その様子に俺は苛立ちを覚えていた。

「どうしたんだい？　ベーオウルフの力があれば神は殺せるんだ、なのに君は嬉しくないのか？」
「……お前はベーオウルフの恐ろしさを知らないから、呑気に構えていられるのだ」

確かにベーオウルフは俺の中に眠っている。いや、俺の魂に癒着しているとリバースは言っていた。
俺の中のベーオウルフの力ならリバースを殺すことも可能だろう。だが必ずしもベーオウルフの力を俺が使うことができる保障はどこにもない。それどころか、過去生の二の舞になる絵が俺には容易に想像できた。

「俺に……奴の力を扱えるはずがない。現に俺は、過去生の中だけでなくエリアでも奴に体の自由を奪われている……力を扱おうとして、また体の自由を奪われるのだけはごめんだ……過去の二の舞だ

けは何としても避けたい」

顔見知りが自分の姿をした別人に殺されていく、そんな様を俺はもう二度と見たくなかった。

しかしアサキムは、

「ふっ、どうした？　臆病風に吹かれているのかい？」

あざ笑うように俺を見てきた。

「何のために過去生を見てきたと思っているんだ。エリアの破界者の力を操るヒントを探すためだろう？　破界者の行動理由はなんだ？　何が目的だ？」

「ベーオウルフの目的？」

「そうさ。過去生を見てきて、その身に破界者を宿す君にしか分からないことだ。破界者の目的が分かれば、それを逆手に力を使うことができるかもしれない」

アサキムが馬鹿なことを言う。ベーオウルフはそんな生易しい相手ではない。しかし奴の力なしで、リバースを倒す方法は今の所見つかっていない。

――全ての人間を根絶し……

あのときのベーオウルフの声が頭の中で再生されていた。

――悲劇のない　静寂なる世界を創るために！！

惑星エリアの最後の瞬間、ベーオウルフが念じていた言葉だった。
何度も耳にしてきた「全ては静寂なる世界のために」というキーワード。ベーオウルフが何度も口にしていた言葉だが、元々の目的は悲劇のない世界を創ることで、目指していた静寂な世界は目的のための手段だったのだろう。
ベーオウルフが何を見て、何を考え、何を思っていたのかは分からない。
だが奴は悲劇のない世界を実現するために、悲劇を起こし悲劇を感じる者――人間の存在しない世界を実現しようとしていた。
人間のいない世界こそ、奴の目指した静寂なる世界なのだと、今更ながらに気付く。

「……悲劇か」

悲劇を失くすことができるのか、ちっぽけな人間の俺には分からない。

「なあ、アサキム」
「なんだい、キョウスケ？」
「お前は沢山の世界を見てきたと言っていたな？　そしてそのどの世界でも戦争は無くならなかったと」
「ああ、言ったね。でもそれがどうしたんだい？」
「やはり……悲劇のない世界は存在しなかったのか？」

純粋に疑問に思って訊いた。
アサキムが本当に次元の壁を超えることができて、多くの世界を見たことがあるというのなら、その中に1つぐらい悲劇のない世界があっていいんじゃないだろうか？

だから俺は訊いた。アサキムの答えは予想できていたけれど。

「はっ、そんな世界なかったね」

予想通りの答えだった。

「悲劇なんて大仰な言い方は止めなよ。悲劇の捉え方なんて人それぞれなんだから、世界から完全に悲劇を取り除くことなんて不可能に近いさ。特に戦争で人同士が争っている世界ではね」

「……そう、だろうな」

「だがあえて言うなら、このエリアが僕の見てきた世界の中では、1番悲劇の少ない世界のように思えるよ。エリアの神の認識操作が効いているし、大きな悲劇が起こる前に破界と再世を繰り返しているからね」

アサキムの言葉にエリアを創造したのはリバースだということを再認識する。リバースとベーオウルフは互いに対の存在だ。ならリバースの目的も奴と同じで、悲劇のない世界を創り、維持し続けることなのかもしれない。

悲劇のない世界を実現するためにリバースが出した結論は、一定サイクル毎に世界も住民もリセットされて永遠に生き続ける世界……エリアなのかもしれない。

推測しかできない自分が憎らしいな……

「とにかく、破界者の目的が分かれば少しは手の打ちようが――」

アサキムが俺に声をかけてきたが、入り口の扉がノックされる音で遮られた。

ノックの後、アクセルの部屋の扉が開かれ、俺とアサキムは視線をそちらに向けた。健康的な小麦色に日焼けした体格のいい男が立

っていた。

「久しぶりだな、アサキム！　がはは！」
「やぁ、久しぶりだねランド」

非常に暑苦しい笑顔を浮かべた大男はランドと呼ばれていた。

「そうだった。今日はメールちゃんの受診の日だったのを忘れていたよ」
「気にするな。俺も昨日思い出したところさ。メールは診察室に待たせてあるから　――　っと、悪い。先客がいたみてぇだな、ははは！！」

ランドが俺に気付いて声をかけてきた。やはり笑顔が暑苦しい上に、リアクションがオーバーだ。

「い、いや、俺のことは気にしないでくれ」
「すまないなキョウスケ。元々、今日はランドとの約束が先約でね」
「そういうことだ。アサキムを少し借りていくぜ、兄さん！」

ランドは暑苦しい笑みを浮かべながら部屋を去って行った。
アサキムも後を追って部屋を出ようとし、

「あぁ、そうだ」

と手を叩いて振り返る。

「キョウスケ、君も来るといい」
「……俺が、か？　しかしそういう訳には……」
「構わないさ。それに君は見ておいた方がいい。このエリアの終末

の時に、スフィアの所持者がどういう結末を迎えるのかをね」

何か含んだような物言いのアサキム。

スフィアと言えば、彼の言っていた太極から生まれたというナニかのはずだ。リバースやベーオウルフと似た存在だが、その存在は奴らの下位に属するという……だが。

「……どういうことだ？　俺とスフィアを引き合わせて、お前は何を望んでいる？」

「行けば分かるさ」

アント○オ猪木か？

しょうもないことを心の中でツッコみながら、俺はアサキムの後について部屋を後にした。

アクセルの寝息とドアの閉まる音に見送られ、俺はまた状況に流されていく　――……

●○

人には真実を知る権利があると、俺は思う。

知らなければ認識することも難しいことが世の中には多い。

まずは知ることだ。

知ることで初めて認識できる。知って理解してから全てが始まる。

全てを知り、準備し、対処する。そうすることで全てが順調で、問題なく、うまく立ち回ることができる。
そいつが重畳。
俺の好きな言葉だ。

奇跡は他力本願では起こらない。
全力で何かをし続けた者にのみ奇跡は起こるのだ。
だから俺は自分にできる、自分が正しいと思う事をやっておくことにした。

俺はエクセレンに、エリアの秘密をゆっくりと話して聞かせたのだった……

○

エクセレンの用意してくれた朝食を終えた食卓にて。
俺の話は正直まゆつば、失笑されてドブに捨てられても文句は言えない、一般人には信憑性の無い話だった……

「ふーん、そうなんだ。分かったわ、そっくりさんの話を信じるわね」

……しかしエクセレンの返答は俺の予想を簡単に裏切る。
彼女はあまりにあっさりと俺の話を信じると言い切った。彼女がにこにこと浮かべている笑みは、やはりどこか小牟に似ている。小牟なら俺の話を二つ返事で受け入れてくれただろうが、エクセレン

はエリアで生きている一般人だ。
俺が話した内容は、エリアはリバースによって作られた世界で、住民は過去に一度死んでいて魂をエリア内に囚われているということ。エクセレンが過去の世界で惨たらしい死に方をしたということ……など、かなり重い内容の話だ。
だがエクセレンはけろりとしている。
オータムも説明していたエリアの破界と再世なら分かるが……いや、それすらも受け入れるのは難しいだろうが、自分が死んでいたという事実を受け止めるには、彼女の態度がさっぱりしすぎているように感じた。

「信じるのか？　俺の話を？」

気づけば、自分の話を否定するような質問を口走っていた。

「この話を証明するものは何もないんだぞ？　もちろん嘘ではないが、それにしても簡単に信じすぎじゃないのか？」
「ワオ！　中々鋭いツッコミね？　話の内容をよく聞いていなかったのがバレタのかしらん？」
「おい……」

コロコロと声を上げて笑うエクセレン。その言葉に俺の眉尻は自然と上がる。
信じると言っても理解してくれなければ、俺が話した真実に意味はなくなる。目の前で笑っているエクセレンは、森羅本部でネットサーフィンをしながら笑っている小牟（シャオムウ）と同じぐらいには、能天気で何も考えていなさそうに見える。だが俺はエクセレンの笑顔に違和感を覚えていた。
場を和ませるためか、わざと話を茶化して笑っているようにも見える……俺には彼女の笑みがポーズに見えた。

「うふふ、もちろん冗談よん♪」

エクセレンが言った。

「そっくりさんの話には確かに証拠がないわ。でも否定する理由もないもの。オータムちゃんが言っていた話もそう。確実に間違いだと言えること以外は、頭ごなしに否定するものじゃないと思うわ。もち、オータムちゃんやそっくりさんが言っていた破界と再世って言葉だけど、私には実感はないし、それを否定する理由にするのは簡単なんだけどね」

「……では、なぜそうしない？」

「うふふ、分からない？　そんなのあなたがイイ男だからに決まってるじゃない？」

ウィンクし俺を見つめてくるエクセレン……本気で言っているのだろうか？

「もち、冗談よ♪」

だろうな。

しかし冗談なのは俺がイイ男だから信じるという部分なのか、それとも俺がイイ男だという部分なのか、後者でなければいいがと思いながら話を聞き続ける。

「そうねー、そっくりさんの話を信じた理由をあえて挙げるなら女の勘かしら？」

「女の勘？」

「そうよ。なぜかしら、あなたの話を信じなきゃいけないような気がしたの。オータムちゃんの話もそう。信じてあげなくちゃ……い

いえ、信じなきゃいけない、そんな気がしたの」

エクセレンは不思議そうに指を頬に当て、首を捻っていた。

彼女がそう感じる理由は俺にも分からない。過去の世界でキョウスケに最も近しい人物だったことが関係しているのだろうか？　……まぁ、いい。話を受け入れてもらえることに不利益はないからな。

「あ、そうか！」

何か思い出したのか、エクセレンが手拍子を1回打って俺を見た。

「そっくりさんがキョウスケにそっくりだからよ！」

「……何の話だ？」

「だから私がそっくりさんの話を信じなきゃいけないと思った理由よ！

そっくりさんがキョウスケにそっくりだから、私はそっくりさんの話を信じなきゃいけないと思ったのよ。そっくりさんを信じないのは、キョウスケを信じてないみたいで気分が悪いもの！　きっとそうに違いないわ！」

そっくりさんと連呼するエクセレン。俺は彼女の出した結論を無言で聞いていた。

確かに俺の外見はキョウスケ・ナンブに良く似ている。しかしそれが理由だと思うのはどうだろう？　俺はともかく、オータムを信じる気になった説明にはならないと思うのだが……。

エクセレンの言動に演技臭さは感じられず、嘘は言ってなさそうに見えた。

だがいい加減にそっくり呼ばわりされるのにも嫌気がさしてきた。

「なぁ、エクセレン」

「なぁに、そっくりさん？」

彼女はやはり俺をキョウスケ・ナンブのそっくり扱いする。無理もないかとは思うのだが、偽物扱いされているようでどこか気分が悪い。

「そろそろ、そっくりと呼ぶのは止めてくれないか？　俺の名は有栖　零児。零児と呼んでもらって構わない」

「分かったわ。じゃあ零児も私のことを、尊敬と信愛の情をこめてエクセ姐さんと呼んでね？」

「……分かったよ、エクセレン」

「あぁん、もう零児のいけず～」

身をくねらせてエクセレンが反論する。キョウスケの過去生を覗いた俺には、その様子が過去生の中の彼女にダブって見えた。

目の前の彼女は生きている。明るく、活き活きとしている。

しかし過去の彼女は死んだ。惨たらしく、手だけを残してキョウスケの前から消えた。

……なるほど、これはキツイ。

愛する人の顔を見るたびに、その人の死に様が頭に蘇る。

それがキョウスケがこの家から逃げた理由だろう。理解はできたし、共感もできた。俺だって小牟が……いや、止めよう。

キョウスケの逃避理由に共感はできても、認める訳にはいかなかった。

「さて……これからどうするか？」

「食後のお茶にしましょう♪」

「……そうだな、ご馳走になろう」

独り言を伴った俺の思考は、エクセレンの一言によって出鼻をく

じかれた。
食卓をたってキッチンのヤカンに水を注ぎ、コンロの火にかける彼女を見て俺は思う。エクセレンは話の腰を折る天才なのではないか、と。
エクセレンは戸棚から急須と湯呑みを取り出し、茶葉の用意をしていた。彼女が戻ってくるとまた思考の邪魔をされそうだ。俺は今のうちにこれからの予定を考えておくことにした。
昨日の時点で、エリアに残された時間はあと3日とオータムは言っていた。
つまり残された時間はもう48時間以下……早く、小牟の体を乗っ取ったリバースを探す必要がある。
しかし手がかりはない。過去生を見ても、今のリバースの居場所は分からなかった。
湯が沸き、ヤカンが甲高い声で鳴き始める。エクセレンが火を止め、急須に湯を注ぐと、お茶の良い匂いが鼻をくすぐるような気がした。
考えはまとまらない……と ――

「ん……」

―― 居間の方から声が聞こえてきた。
女の子の声。居間で寝ているのはオータムだけなので、きっと今の声は彼女のものだろう。
俺は視線を居間に向け、そして言葉を失った。
オータムが寝床から起き上がり、こちらを見ていたのだ。だが別に彼女が起きたことに驚いているわけではない。

「オ、オータムちゃん……？」

湯呑みを持って振り返ったエクセレン、彼女も今のオータムの姿

を見て驚きの表情を浮かべている。
オータム・フォー……彼女の姿が昨日までの幼い少女ではなくなっていた。
髪型は変わらないが、背丈が伸びて17，8歳の女の子と同じ位の身長になっている。身長以外の発育は遅れているのか女性らしさに少しかけた体つきではあったが、この際それはどうでもいい。
オータムはエリアで初めて見かけた姿から、過去生の中で見た彼女の姿へと成長していた。いや、アンドロイドだった頃の彼女の姿に戻っている。

「オータム……お前は一体……？」
「……ごめんなさい」

オータムは涙を流して謝る。エリアの真実を知っているから彼女の涙の意味が理解できる……俺は何も言えずに、ただ彼女が頬を濡らすのを見ているしかできなかった……――

鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＩＮＡＬ　～傷だらけの男たち　２～（後書き）

その３に続きます。

この小説では獅子のスフィアをメールが持っているような表現をしていくと思います。ご了承ください。

鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＩＮＡＬ　～傷だらけの男たち　３～

もし、人間以上の力を手に入れてしまったら、君ならどうする？

振るえば世界だって左右することができる、圧倒的で、絶対的な力――神にだって楯突ける程の力を手に入れたとしたら……。

分かりにくければ、君たちの好きな小説や漫画で例えてみるといい。作品中の世界観や原作の流れをぶち壊して、すべて自分の好きに変えることができるだけの力が、もしある日唐突に手に入ったとしたなら……？

もし君がそんな力を持っていたら、君は一体どんな風に力を使う？

腐った世界を修正するために力を振るうのか、それとも正義のために力を使い悪を倒すのか、はたまた愛する人を守るために力を行使するのか。願望はなんだっていい。なんだってできる。それだけの力を、ある日急に手に入れたなら、君はどうする？

答えは各自の頭の中にあるのだろう。

俺にもある……答えはこうだ。

俺は、なにもしたくない。

俺は日常が好きだ。エクセレンや友人たちとバカ騒ぎして過ごす、ただの平穏な日常が好きなのだ。

非日常なんてクソ喰らえ。

そんなものは小説や漫画の中だけで十分で、みんなとの生活に満足している俺にとっては、まさに余計な刺激としか言いようのないものだ。

だから仮に力を持ったとしても、俺はなにもしないだろう。

俺の愛する日常を脅かす者が現れない限り……。

残念なことに、俺の中には力が眠っていた。
ベーオウルフという名の化け物だ。
そして俺の愛する日常が既に破綻していることも知ってしまった。
ベーオウルフの力があればリバースは殺せるだろう。
リバースはエリアを創った神のような存在だ。リバースが死ねば、エリアは神のいない世界になるのか、それとも世界そのものを維持できなくなってしまうのか、その結末は誰も知らない。
それでも俺はリバースを殺そうと思っていた。
リバースがエクセレンや仲間たちとの日々を邪魔するのなら、奴は俺にとって敵以外の何者でもない。
彼女は俺の全てだ。彼女を傷つける者は誰であろうと容赦はしない。例えそれが神であったとしても、だ。
しかし……今になって、俺は迷っている。

是非は抜きにして、俺はリバースを殺してもいいだろうか？
過去生の中でエクセレンは死んだ。
だかエクセレンはエリアの中で生きている。
リバースが彼女の魂を回収し、俺同様にエリアに転生させたからに他ならない。リバースが死んだとき彼女はどうなる？　未来のことなんて誰にも分からない……だから、俺は怖い……。

もし人間以上の力を手に入れてしまったら、君ならどうする？
俺はどうするべきなんだ？
ぬかるんだ闇の中で手探りもできず立ちすくんでいる。そんな錯覚を覚えた。誰か、俺に答えを教えてくれ……――

●

カイメラ医院、アサキムの診察室前で。

「スフィアはね、太極から生まれたものなんだ」

ランドとメールの待つアサキムの診察室に移動しがてら、彼は俺に教えてくれた。

「太極とは無数に存在する並行世界の始祖、とある宇宙の真理そのもの。太極から全ての宇宙が始まり、宇宙はその長い命が尽きれば太極へと還る。人智を超えた究極の力の源こそが太極であり、スフィアは太極から生み出された12の力の結晶と言っていい」

「12か……多いな」

「ああ。だから僕もすべてのスフィアを把握できてるわけじゃないんだ」

白塗りの廊下を先行するアサキムが振り返りもせずに淡々と答える。

スフィアは12個存在するらしい。太極から生まれたもの……その部分だけ聞くと、リバースやベーオウルフも同様に危険な存在に思えて仕方ない。奴らも太極から生まれた異能の塊であるからだ。

しかし俺はアサキムの説明に違和感を覚えた。

「スフィアの所有者……」

アクセルの病室でアサキムが言っていた言葉だ。

所有と言うのなら、スフィアは物質なのだろうか？　もしかすると奴らとは違って、目に見えたり触ったりできるのかもしれない。

「スフィアは物じゃないよ」

やはり振り返らず、まるで俺の心を読んだみたくアサキムが言った。

「スフィアはエリアの神と同じだよ。いわば精神寄生体、僕がスフィアに寄生された宿主のことを所有者と呼んでいるだけで、別に物として存在しているわけではないんだ」

「では……リバースと同じように宿主を変えたりするのか？」

「それはない。スフィアには人格はないからね、宿主の命が尽きるまでは同じ個体に寄生し続ける。宿主が死ねば、それぞれのスフィアに適合する個体を見つけるまで多次元を放浪する。放っておけば憑依、死別、放浪を機械的に繰り返す力の結晶 ―― それがスフィアさ。

スフィアの所有者は特定の感情や感覚を与えられ続けながら、スフィアに覚醒を促される。その感覚と引き換えに、スフィアから大きな力を引き出すことが可能になるんだ」

奴らに比べると微々たる力だけどね、とアサキムは語尾に付け加えた。

スフィアは人間に憑依して、その個体を憑代に力を発現させている。……つまりはそういうことだろう。

なるほど、性質はリバースやベーオウルフによく似ている。人格や思考がない分、奴らよりは大分可愛げがあるもののように感じられた。

「ランドは『傷だらけの獅子』のスフィアの所有者だ」

ランド……先ほどアサキムを訪ねてきた褐色の大男のことだ。

目立つ外見はしてたが、分厚い筋肉の鎧と暑苦しい笑顔以外に、

特に変なところは見受けられなかったと思うが……

「ま、エリアの神の影響下にあるからね。スフィアの力が抑えられて、覚醒できないんだよ」

「ではただの人間ということか？」

疑問に思って訊くとアサキムは、そうさ、と答えた。

「ただしエリアの歪みの影響をモロにうけるから、覚醒できないにも関わらず体に変調をきたしているはずだ。セツコの場合は身体機能の喪失、ランドの場合は定期的に襲ってくる激痛といった具合にね。笑ってはいたけど、今も相当の痛みを感じているはずだよ」

「あの男がか……？」

俄かには信じがたい。明朗に笑っていたあの男が、耐えがたい痛みに苛まれていたというのか？

だとすれば相当の胆力を持った男だと思う。

「メールも同様にエリアの歪みの影響が出ているんだ」

「メール……診察室で待っているという患者のことか？　しかし所有者はランドで、そのメールという子はただの一般人のはずだろう？」

「それがね、彼女の場合は少々事情が異なっているんだ」

かっかっと靴音を鳴らし話をしている内に、俺たちは診察室の前に到着した。

アサキムが診察室をノックしようとする。しかし軽く握った拳が扉に触れる直前に手を止め、振り返って俺を見てきた。

「彼女　――　メールは元の世界で一度死んでいるんだよ」

「なん、だって……？」

アサキムの言葉に驚くのはこれで何度目だろうか。数えるのは正直おっくうなので、俺は黙って話の続きを聞く。

「一度は死んだメールを、ランドのスフィア『傷だらけの獅子』が蘇らせたのさ。成長しない不完全な体になってしまったけれどね。もちろん、エリアの住民になってから、彼らはその事実を忘れてしまっている」

「……だがスフィアの影響はメールにも及んでいた。だからエリアの歪みの影響も受けてしまうということか？」

「ご名答。もっとも、彼女の場合は体調不良程度ですんでいるけどね」

過去の世界で死んで、蘇る……俺はメールという子の顔を知らないが、なぜかエクセレンの顔が脳裏に浮かびダブって見えた。

エクセレンは過去生の中で死に、エリアの中で生きている。そのメールという子の境遇が、なんだかエクセレンに似ているように思えてしょうがなかった。冷静に考えると、過去での蘇りとエリアでの蘇りは意味がまったく違うし、エリアの住民は過去世界で亡くなった者たちばかりというのを思い出す。

アサキムは診察室のドアをノックしていた。待ってたぜ、と室内からランドの大声が返ってくる。

ドアノブを捻りながら、俺に向けてアサキムは、

「入りなよ。診察時は席を外してもらうけど、顔を合わせるぐらいは構わないだろう」

促されるまま、俺はアサキムの開けたドアを潜った。

診察室内では、ランドとメールがアサキムを待っていた。

メールは桃色の髪をした小柄な女の子だった。過去の世界で一度亡くなり、スフィアの力で復活したときには成長しない体になっていたという……彼女の小さな体は過去の名残ではないかと思わずにはいられなかった。

メールは丸椅子に腰かけ、青白い顔を伏せている。

「遅いぞアサキム。早くメールを診てやってくれ」

彼女に寄り添っていたランドが声を上げた。声はやはり大きく、豪快で暑苦しい笑顔を浮かべている。歪みの影響で、激痛に襲われているようにはどうしても見えない。

「すまなかったね、すぐに診察を始めよう」

アサキムはメールの対面の椅子に腰かける。

「おはようメール。どうだい気分は？　やはり、良くないのかな？」

「……うん。熱が出るし、血の気が引いて吐き気もするの……」

彼女は弱々しく自覚症状をアサキムに告げる。俺は診察室の入り口付近に立って様子を見ているのだが、彼女は俺に気付いたようなそぶりを見せていなかった。余裕がないのかもしれない。

問診が始まると、メールの傍にいたランドが俺に近づいてきた。

「よう兄さん。悪かったな、話の途中だったろうにアサキムの奴を借りちまってよ」

「いや、こちらこそ申し訳ない。診察室にまで邪魔してしまって…」
「いいってことよ。お互い様さ」
ランドがウィンクし、親指を立てて白い歯をのぞかせてきた。しつこいようだが、ランドの笑顔は何度見ても暑苦しい。
顔を思わず背けたくなるぐらいには、だ。
しかし何度かランドの笑顔を見るうちに、俺はあることに気付いた。彼の額にはうっすらと汗がにじんでいる。診察室内だけではなくカイメラ医院はしっかりと空調が効いていて、病院全体が快適な温度と湿度に保たれていた。
「実はメールは持病持ちでよ」
俺の内心を流すようにランドが言う。
「普段は元気なもんなんだが、時々調子が悪くなるんだよ。だから定期的にアサキムに診てもらってんだ。今日はたまたま診察日と調子の悪さがぶつかっちまったけどよ」
「そうか。娘のためとは言え、あんたも大変なんだな」
「娘？　なんのことだ？」
ランドが不思議そうに声を上げた。
「メールのことだ。あんたの娘なんだろ？」
「ぷっ、おいおい、冗談きついぜ兄さん！」
豪快な笑顔を浮かべながらランドが俺の肩を叩いてきた。ばちーん、と俺の肩から診察室内に音が木霊する。かなり痛い。服の上からでも、肌に赤い手形が残っているだろうと確信できるぐらいには、

ランドは馬鹿力だと思った。
診察室内では静かに、とアサキムにさらりとやんちゃを叱責され、おっとすまねぇ、とランドが大声で謝罪していた。

「こう見えても俺はまだ２０代だぜ。メールみたいな大きな子がいるような歳じゃねえよ。メールは俺が世話になった親方の娘でな、親方が旅に出ている間は俺が預かってんだ」
「そうか。失礼なことを言ってすまなかったな」
「はっはっは、細かいことは気にすんなって！」

ばちこーん、とランドが俺の肩を叩く音が再び響き渡る。痛い、これで俺の両肩には赤い手形の翼が出来上がっていることだろう。
アサキムは、うるさい、と短く叱責し、おおっとすまねえ、とランドはやはり大声で返していた。
そうこうしている内に問診を終えたのか、聴診器を取り出すアサキム。グリップを耳に沿わせながら、俺たちの方を見てきた。

「ジェントルメン諸君、レディーの花園に男の目は不要だよ。しばしの間、席を外してもらっても構わないかな？」
「オッケー牧場！」
「ガッ〇か？」

……反射的に口が動いてしまった。だが俺に罪はないと主張しよう。妙に気取った言動をとるアサキムと、某元ボクシングチャンピオンの迷セリフを暑苦しいスマイルで口にしたランド（外見もどこかゴリラっぽいし）が全て悪い。俺無罪、奴ら有罪、再審はなしだ。
聴診などのためにメールの服をはだけさせるから出て行け。アサキムの言いたいことはそれだろう。彼女は申し訳なさそうに青白い顔で振り向いていた。

「ごめんね、ダーリン……すぐ終わるから」
「ははっ、気にするなメール。外にいるから、終わったら呼んでくれ」
ドアを開け診察室の外に出るランド。俺も彼のあとに続いて診察室をあとにした。

診察室前の待合用のソファー――零児と一緒に座っていたそれに腰かけ、俺とランドは診察が終わるのを待つことにした。
「ふぅ……」
腰かけた途端、ランドは深いため息をついていた。快適なはずの病院の中で、ランドの額からにじんでいた汗は消えていない。ランドの上着はタンクトップのみと軽装で、対する俺はジャケットまで着込んでいるのに汗一つかいていなかった。
ランドの汗の理由を俺は確信した。
「なぁ、ランド」
「なんだい、兄さん？」
俺の声かけにランドは淀みない笑顔で応える。しかし汗は消えない。
「あんた……痛みは大丈夫なのか？」
「……なんだ兄さん、知ってたのかい。見かけによらず人が悪いねぇ」

俺の考えは間違っていなかったようだ。ランドは本気の笑顔を振りまきながら、耐えていた。彼の痛みは想像するしか方法がないのだが、同じ境遇に置かれて俺が笑顔を浮かべることができるかは分からない。

「辛くないのか？」

俺は思わず訊いてしまっていた。

「痛いのだろう？　痛みに耐え、なぜ笑顔を浮かべていられる？　なにがあんたにそうさせるんだ？」

「まぁ、落ち着きな兄さん。そんな一度に質問されても答えられねえよ」

ランドの言い分はもっともだ。俺も急かずに彼の言葉を待つことにした。

「まぁ、痛みだが、あるぜ。正直痛いし、辛い。アサキムの話だと俺の中にあるスフィアってのが悪さをしていて、痛みを生んでいるらしい」

「スフィア……知っているのか？」

アサキムがスフィアの話をランドにしていたことに驚いたが、

「ん？　ああ、まぁ、新種のガンみたいなもんだろう。今のところ治療法は見つかってねえみたいだな、アサキムの話だと」

正確に事実を伝えている訳ではなさそうだった。

エリアにいる以上、スフィアは覚醒できない。同じ太極から生ま

れたリバースが覚醒を抑え込んでいるからだ。しかしそれは裏を返せば、スフィアは覚醒すればリバースにとって脅威になり得るということではないだろうか。

だが覚醒できなければ用はなさない。

だからあえてアサキムは真実を伝えていないのだろう。知ってどうこうできないのなら、知らずにスフィアを病気の類と思っている方がいい……ということかもしれない。

「どうしようもねえさ。俺の体だ。一生付き合っていくしかねえんだ」

ランドが達観した意見を述べた。

その通りだと俺も思う。自分の体の機能は現実として受け入れないといけない。しかしエリアにいる限り破界と再世からは逃れられない。繰り返す世界の中で、ランドは永遠に痛みに苛まれる続けるのだと思うと、知らない方が幸せかとさえ思えた。

「だがよ、俺は負けねえぜ。俺は痛みに屈しねえ。俺の体は俺の物だ、痛みなんかに支配されてたまるものか、ってな。

だから俺は笑うのさ。痛みなんか感じてねえぜ、ってな具合にだ。それに俺が笑ってないと、不安がるガキんちょが傍にいるもんでよ」

「……メールのことか？」

ランドが言っているのは彼女のことに違いない。彼は黙って首を縦に振っていた。

「大人がガキの前で泣きわめけるかよ。メールの前でだけじゃねえ、どんな場所でも俺は笑う。どんな痛みが襲ってきても俺は笑ってやる。

誰かに強要されたわけじゃねえ、俺がそうしたいから俺は笑って

いるのさ」

にっと歯を見せながら、拳を突き出してランドは暑苦しく笑っていた。……いや、もう俺には暑苦しくなんか見えなかった。熱い思いがこもった漢の笑顔がそこにあったからだ。

俺にはランドの笑顔が輝いて見えた。

「……強いな、あんたは」

「おいおい兄さん、買い被るのはよしてくれ。俺は強くなんかねえよ。俺は俺のしたいようにしているだけさ」

「……自分のしたいように、か……」

ランドの言葉が身に染みた。

彼は自分のしたいように、痛みに耐えて笑い続けている。痛みに屈しないという強靭な意志。迷いなくまっすぐに伸びる強い意志――彼の豪快で熱い笑顔の中にはそれが内在されているのだ。

それは強さと言っていい。

ふと思う。俺の中にそんな強さがあるのだろうか、と。

俺の中にはベーオウルフという名の暴力が眠っている。上手く使えれば、神様だって殺せる圧倒的で、絶対的な暴力だ。そう、暴力だ。奴の力の中に俺の意志は内在していない。

今の俺には、奴の力を扱えるだけの思いの強さというか、なんというか……そんなものが決定的に足りていない気がした。

俺の中に力は眠っている。その力を使うために俺はなにをするべきなのか？　力を扱えるようになったとして、俺はなにをするべきなのか？

俺には分からなかった。

「兄さん、なにか迷ってんのかい？」

どうやら、俺の鉄面皮にも深刻さがにじみでていたらしく、ランドが声をかけてきた。

「俺は兄さんがなにを迷ってんのか知らねえし、言いたくねえことを無理やり聞きだしたりなんかはしたくない。だからこれは、ただの年長者の戯言と思って聞き流してもらっても構わない」

ランドらしくない前置きに少々戸惑う。大岩だって素手で叩き割りそうなイメージを俺が彼に持っていたからだ。

ランドがあの熱い笑顔を俺に向けて、言った。

「やっちまえよ！」

「え……？」

「兄さんがやりたいことを、やりたいようにやればいいんだ！　なにをやるべきかじゃない！　やりたいことをやればいい！　そうすりゃ、迷いの答えなんて案外あっちから歩いてくるもんだ！」

がははは、とランドは大笑いしていた。声は廊下に響き渡り、看護師たちが酷く迷惑そうな顔をしている。ランドの言葉は廊下の声と同じぐらい、俺の心に響き込んでいた。

成すべきことではなく、成したいことをしろ、か。

自分のしたいこと、護りたいもの、譲れないもの……それなら、バカでちっぽけな俺にだって分かる。

俺はエクセレンやみんなとの生活を失いたくない。

住む場所なんかはどうでもいい、俺は俺の人生をエクセレンと共に歩いていきたい。みんなと歩いていきたい。

――俺はエクセレンやみんなと生きていく、俺たちの未来を守りたい。

この思いに偽りはない。
心に絡みついていたねばねばと粘着質で暗いもや。綺麗さっぱりと拭いきれたわけじゃないが、心が幾分か軽くなったような気がした。

「ありがとう、ランド」
「よせよ、俺は礼を言われるようなこと言ってねぇぜ！　それより、そろそろ診察が終わりそうな頃だな」

ランドの言う通りすぐに診察室の扉が開き、中からアサキムとメールが姿を見せた。

「やぁ、お待たせ。これで診察は終了だよ」

アサキムが言う。

「薬を出しておく。会計を済ませて受け取ってくれ」
「いつも悪いなアサキム。恩に着るぜ」
「気にしないでくれ。君と僕の仲じゃないか」

ランドの言葉にアサキムが笑顔で応える。なにかを企むような表情ではなく素の笑顔。この男にもこんな風に笑うことができたのだなと思う。

「じゃあな兄さん、邪魔して悪かったな。帰るぞ、メール」
「うん、ダーリン」

ランドはメールを連れて会計所の方へ去って行った。

俺はランドの背中に感謝しながら彼らを見送った。

「どうだい？　ランドと話した感想は？」

気づくと、アサキムが俺を見ていた。

「中々気持ちのいい男だろう？」

「ああ。強い……本当の意味で強い男だな、彼は」

「ふっ、その顔、どうやら少しは踏ん切りがついたと見える」

アサキムが俺の顔を見てほくそ笑んでいた。嫌な笑顔をいつも向けてくるが、俺の顔になにかついたりしているのだろうか？　どうでもいいが、どうせ笑うならランドに見えた素の笑顔にした方がいいぞ、アサキムの普段の笑いは不必要なほど悪そうに見える。

「で、どうかな？　エリアの破界者の力を扱う方法、思いついたかい？」

「いや……そちらの方は手詰まりだ。なにか切っ掛けがあればいいのだが……」

「まぁ、急いでも仕方ないさ、時間はないけどね」

ゆっくり急げというのか？　いちいち注文の多い男だ。

「とにかく、現段階で僕から話せることはもうないよ。あと僕にできるのは、君が力を扱えるようになってくれることを祈るぐらいだね」

「そうか。世話になった。ありがとう、アサキム」

「よしてくれ、僕がそんな善人に　――　のくだりはもういいか。とにかく、僕が君にしてやれることはもうないよ。破界者は君の中に眠っているわけだし、君も自分のことを一度見つめ直してみたら

どうだい？　案外、手がかりなんて近くに転がっているものさ」
「灯台もと暗し、というやつか」
「そうなのかな？　僕はどこぞの諺フェチのセーブ担当者じゃないから、正確な意味なんて知らないよ」

俺だって知らないさ。しかし足元に転がっているものは案外気づかない、とかいう意味だったように思う。
アサキムの意見は案外的を得ているのかもしれないな。現にこれ以上カイメラ医院に長居する意味はなさそうだ。ここでアサキム以上の情報源をは見つけるのが難しそうに思えた。

「なにか掴んだら教えてくれ。僕はずっとここにいるから」
「ああ。またな、アサキム」
「キョウスケ・ナンブ、また会おう」

そう言い残すと、アサキムは自分の研究室に引っ込んでしまった。
俺が残された廊下は、徐々に診察待ちをするご年配の姿が増え始めている。このままここに居ても邪魔になるだけだ。
自分を見つめ直せ、と彼は言った。
俺が自分を見つめ直せる場所……俺にとって日常を繰り広げていた場所　――

「……学校に行くか」

――　俺の母校、ＯＧ（オリジナルネレーション）高等学院がもっとも適切な場所のように思えた。
今日は平日。既に授業は始まっている時間帯だから、俺は完全に遅刻していることになる。遅刻確定で登校するのも癪だしめんどうなので普段はサボタージュするのが常なのだが、帰宅するのも零児と顔を合わせるのでバツが悪いし、他に行くべき場所が思いつかな

かった。
　ＯＧ高等学院　――　通称ジェネ高に向けて、俺は歩き出す。
――　全ては　静寂なる　世界のために
　小さく、空耳と勘違いしそうな奴の声が頭に響く……俺に残された時間は少なそうだ。
　俺はカイメラ医院を出て、ジェネ高へと急ぐのだった　――……

●○

　俺には昔から力があった。
　俗に言う、霊能力と言うやつだ。
　親父の名前は有栖　正護、超常現象に対処する日本の特務機関「森羅」でも指折りの実力者だった。俺はそんな親父の血を濃く受け継いでいたようで、幼い頃から霊や物の怪の類を見ることができた。
　物心ついた頃から霊が見えるのが当たり前の世界。
　しかし同年代の子たちの中で、霊が見えていたのは俺１人だけだ

った。

俺の見える当たり前の世界があの子たちには見えていなかった。

俺が霊のことを話すと、初めうちは興味津々で寄ってくるが、時間が経つにつれて気味悪がられ、やがて村八分状態に追い込まれる。

転校しても、学年が上がっても最終的にはそうなる……あの頃の俺は自分の力が憎くて仕方なかったものだ……。

そんな時だ。アイツと――小牟（シャオムウ）と出会ったのは。

「なんじゃあ、その面は！　スレた顔しおって！」

親父が自分の相棒として紹介してくれた。あいつには出会っていきなり頭を叩かれたのを今でも覚えている。

「子どもは子どもらしく楽しそうに笑っとればいいんじゃ！　笑って、楽しく思い出を作りながら学んでいく、それがぬしら子どもの仕事じゃぞ！」

「……お姉ちゃん、僕のこと怖がらないの？」

この頃、俺の能力は既に除霊ができる程には開花していた。浮遊霊や動物霊も俺の力を恐れて寄ってこなくなっていた。

小牟が妖だとは一目で気づいていたが、彼女が俺を恐れず叩いてきたことは大きなカルチャーショックになったのを覚えている。

「怖いじゃと？　ハッ、わしを誰じゃと思うとる？　永遠の７６５歳、仙狐小牟さまとはわしのことよ、わははは――！！」

この日、俺と小牟は友達になった。上辺だけではない、心の底から信頼し合える友達に、だ。

時が経ち、親父が死に、俺が森羅のエージェントになった頃。

力があることに生まれて初めて感謝したのを覚えている。

俺には力がある。
この力で、俺の大切な人たちを守ることができる。こんなに嬉しいことはない。
シャオ……俺の大切な人を守るためなら、俺は喜んで力を使おう。
俺の決意は揺るがない。必ず助ける。彼女は俺が戦い続ける意味そのものだから。

○

エリアの住宅街、キョウスケ宅にて。

「ごめんなさい……」

オータム・フォーが涙を流し、俺たちに頭を下げていた。
少女は成長して大人になっていた。比喩表現などではなく、俺が起きた時には少女だったオータムの外見は、今では17，8歳の女性のものに変わっている。
キツネにつままれた……とはまた違うか。まぁ、エリアは俺の故郷物質界の日本ではない。なにが起こっても不思議ではない。自分を無理やり納得させ、茶を入れた湯呑みを持ったまま開いた口が塞がらない状態のエクセレンを無視し、俺はオータムに声をかける。

「なぜ……お前が謝る？」
「ごめんなさい……ごめんなさい。私がリバースに頼らなければ…

…人類再生を諦めていれば……こんなことには……」

オータムが涙を流して謝罪し続けている。

俺がキョウスケの過去生の中で見た彼女はアンドロイドだった。体が機械だったため涙を流すこともできなかったはずだ。涙を流せているということは、機械の体ではないなにかに変わったということだろう。

「もういい、泣くな」

彼女の涙の意味が、キョウスケの過去生を見た俺には理解できた。罪悪感だ。オータムの目指した人類再生計画は、リバースに目を付けられ、エリアを生み出す原因の1つになってしまった。キョウスケの過去生の人々だけではなく、俺のように迷い込んだ人間も取り込み、延々と破界と再生を繰り返す世界……それがエリア。

そんな世界を創りだしてしまう原因となったこと、なにも知らずに生きているエリアの住民たちに対して彼女は罪の意識を抱いている。

「悪いのはリバースだ。お前が謝る必要はない」

「でも……」

「そうよぉ、オータムちゃん。泣く必要なんて全然ないわよぉ」

エクセレンは開いた口が塞がったのか、湯呑みをテーブルの上に置き、陽気な声で横やりを入れてきた。

「胸が小さいことならまだ諦めることないわ。なんてったって成長期ですものね、オータムちゃんは？　ね？」

「おい、ちょっと待て」

子どもをあやすような声を上げるエクセレンに、俺は思わず声を荒げた。

「成長期じゃないだろう。どう考えても」

「えー？　だって一晩でこーんなに大きくなったのよ。成長期に決まってるわ。ホント、零児ちゃんはモノを知らないわねぇ」

エクセレンが俺を無知呼ばわりしてくる。

それにしても……ちゃん、だと？　零児ちゃん？　俺はちゃん付けで呼ばれたのか。第一、大人の男を捕まえてちゃん付けはないだろう、ちゃん付けは。確かに零児と呼べと言いはしたが、ちゃん付けで呼べとは一言も　――

「あ、でも小さい胸にも需要はあるのよね。貧乳は希少価値だ！　ステータスだ！　って格言もあるぐらいだし」

「それは格言じゃない、迷言だ」

「じゃあ『乳こそがこの世の理、貧乳は人にあらず！』は？　確かクラークって博士の　――」

「一文字も当たってないし、そんな理の世は俺が許さん。あとクラーク博士に謝れ　――」

「え？　零児ちゃんって貧乳派だったの!?　いっがーい!!」

「……おい、誰かこいつをどうにかしてくれ」

辺りを見渡すが、目を赤くしたオータムしか人はいない。視線が合った時点で首を傾げていた。オータムがツッコミ業界で戦力外通知をいただけるのは想像に難くない。

……少し話が脱線したか。なにか重要なことを忘れている気がするが……まぁ、いい。

オータムが起きたことは重畳（ちょうじょう）と言える。彼女からリバースの居場所を　――

「ほらほら、オータムちゃんもこっち来なさいよ。零児ちゃんに淹れたお茶あげるから」
「は、はぁ……」
――エクセレンが戸惑うオータムの手を引っ張り寄せ、テーブルに座らせていた。ちょこんと椅子に座るオータムと差し出される湯気立つ緑茶と湯呑み。彼女には罪はないのだが、自分のではなく俺の茶を出すあたりがエクセレンクオリティなのかもしれない。
まったく、エクセレンは話の腰どころか思考の腰も折る天才だな。正直、手におえん。キョウスケ、早く帰ってきてくれ……。
「お茶菓子ないのよ、キョウスケって貧乏だから。ごめんなさいね、オータムちゃん」
「はぁ……」
馬鹿にされているぞキョウスケ。申し訳なさそうに言っているが、怒涛のエクセレン節にオータムも圧倒されていた。
エクセレンは安い茶葉で煮だしたそれを一口する。
「あー、美味しいわ。安物でこれだけの味を出せるって……私、天才かしら？」
自画自賛するエクセレン。
「それにしてもオータムちゃん、一晩で本当に大きくなっちゃったわねー」
「……私の体はエリアの歪みが進行するほど、元の体に近づくんです。けれど、もうこれ以上変化はしないでしょう。それ程までにエリアの歪みは進行している……」

「……要するに、もう成長期は終わったってこと？」

エクセレンが真面目な顔をして言った。眉尻が上がり深刻そうにも見て取れる。しかし俺が成長期じゃないといったのに、人の話を聞かない女だ。本当に。

これ以上成長しないのは事実だからか、オータムは首を縦に振って肯定していた。

「じゃあ、もうおっぱいも成長しないわけね？」

「はい」

「良かったわね、零児ちゃん？」

「なぜそこで俺に振る？　しかも疑問形」

まったく、この女はなにを考えて生きているのだろうか？　理解できない言動を続けるエクセレンに半ば呆れつつも、彼女に付き合い続けるキョウスケの忍耐強さに俺は感心していた。

雰囲気は似ている小牟だって、彼女ほどは酷くない……と思いたい。

あと一つ知っていて欲しいのは、俺は一般的な常識人の1人であり、貧乳を嫌悪しているわけでも嗜好しているわけでもないということだ。周りが変人だらけなだけで、俺はあくまでも常識人。そこは主張してもいい部分だと思っている。

癖で組んでいた腕を解くと、茶を飲もうと湯呑みに手を伸ばし、ふと気づいた。

俺の茶がない。いや、それは些細なことなので置いておく。視界の端に入ってくるオータムが、泣き止んでいることに気がついたからだ。

「ほらほら、女の子は笑ってなきゃ。折角の美人さんが台無しよん♪」

「え？　美人？　……私が？」

エクセレンの言葉にやはり戸惑いを隠しきれないオータム。

「なに？　オータムちゃん可愛いのに、もしかして褒められたことないの？」

「え……はい」

「うっそー！　意外ねー、こんなに可愛いのにー」

「エ、エクセレン、そんなに頭を撫でないで……」

オータムはエクセレンに頭を撫でまわ、というよりは捏ねくり回されている。ぬいぐるみが愛でられている時のような対応にオータムの目は白黒としていた。

涙はもう流れていない。

エクセレンのペースに引き込まれることで、感じていた罪悪感を一時忘れることができたのだろうか。とにかく、オータムはもう泣いていない。俺ではこうも上手く彼女を泣き止ますことはできなかっただろう。

オータムの涙を止めるためだったと仮定すると、エクセレンの言動にも意味があると思えるから不思議なものだ。エクセレンは一見ただの陽気な楽天家のように思えるが、本質は知的で思慮深い優しい女性なのかもしれない。

買い被りすぎか？　まぁ、些細な事だから捨て置いてくれ。

「さて、本題に戻ろうか」

俺が仕切り直しのため咳払い１つすると、

「え？　本題ってなーに？」

さっそくエクセレンが話の腰をへし折りにやって来た。そうそう何度も相手にすると思うなよ。俺が無視して話を進めようとすると、やぁねー放置プレイー、と彼女はケラケラと笑っていた。捨て置く。

「オータム、単刀直入に訊きたい。リバースの居場所は何処だ？」

「……」

「正確な場所は知らなくても、君なら大体の目星はつくはずだ。教えてくれ」

俺は小牟をリバースの手から取り戻さなければならない。

リバースは小牟の体を奪い逃走した。キョウスケの過去生を見た俺だったが、それは現在の居場所を示すものではなく、エリアとリバースの関係性を示すものに過ぎなかった。リバースの居場所の手がかりは何一つ入手できていないのが現状だ。

そんな状況で、オータムが目覚めてくれたのは僥倖と言えた。

姿が変貌していて、エリアのタイムリミットが近い事を示してもいたが、それでも彼女は最高の情報源だ。

「俺にはもう時間がない。君の言うように、あの時点で残り時間が３日しかなかったのなら、もう残されている時間は４８時間未満ということになる。いや、もっと短いかもしれない。

俺はタイムリミットまでにリバースを見つけ、小牟を取り戻し、元の世界に帰らなければならないんだ」

「ええ、それは知っています」

オータムが答えた。真剣味のある話だからだろうか、彼女の雰囲気が変わった。まるで冷たく血の通わない機械のようにさえ思える無表情だ。

「だから教えて欲しい」

「なにを？」
「リバースの居場所」
「構いませんが、どうせ聞くだけ後悔しますよ」

それがどうした。後悔なんて後からいくらでもしてやるさ。問題なのは今だ。なんの情報もなく手も足も出せない今を打破することなのだ。

俺が無言で頷くと、オータムはゆっくりと口を開いた。

「いいですか。エリアの終末が近いこの時期、おそらくリバースは〇〇〇〇にいるでしょう」
「なんだって？」

俺は耳を疑って聞き返した。

「ですから〇〇〇〇です。エリアに住む者なら一度は目にしたことがある、あれです。〇〇〇〇ですよ」
「……すまない。よく聞こえないのだが……」
「私も聞こえないわね」

俺の声にエクセレンが同意する。

オータムの声が聞こえないわけではない。彼女の言葉は澄んでいて良く聞こえる。しかし彼女がリバースがいると思われる場所の名を口にしようとすると、その部分だけがまったく聞き取れなくなるのだ。

まるでアニメでよく見るチーズに開いた穴のよう。実質はしっかりと存在するのだが、穴の部分だけが空虚に抜け落ちている。それも向こう側が見えるぐらいにしっかりと、だ。

「ああ、やはりプロテクトがかかっているようですね」

俺たちの反応はオータムの予想の範疇だったらしい。

「私からはリバースの居場所は話せないようです。私が喋っても、お2人の頭に認識できないようにされているようですね。もし聞こえても、攪乱するための無意味な言葉が聞こえてくることでしょう」

「らりるれろ、とかかしらん？」

エクセレンの呟きこそがまさに無意味なものだった。素で情報をかく乱するのは止めてもらいたい。頼むから。

しかし認識できないとは厄介だ。エリア住民に施したという認識操作の応用かもしれない。

「言ったでしょう。聞くだけ後悔すると」

「聞けてすらいないがな……だが、これで本当に手詰まりだ」

オータムから情報を引き出せないとなると、あとは地道に探し続けるしか方法がなくなる。限られた時間の中で、しっぽも見せない敵の居場所を発見する……かなり無理難題に近いと言わざるえない……。

これからどうしたものか。頭を悩ませていると、頭上から声が響いてきた。

――ふふ　仲が良さそうでなによりです

聞いたことのある女性の声だった。

俺は慌てて天井を見上げるが、見えたのは電燈と蜘蛛の巣ぐらいのもので、人影は見つけられなかった。

最初にオータムが声を上げる。

「リバース……あなたなのですね？」

――そうですよ　オータム　この名は貴女がつけてくれた　私たちの絆そのもの

私の名は　リバース　この世界　エリアの神です

鼓膜でなく、脳に直接響いて来るこの感じ……間違いない。

リバースだ。間違いない、奴が近くに来ている。俺は反射的に椅子から立ち上がり、拳を構えてもう1度辺りを確認した。エクセレンとオータム以外に人影はない。

「どこだ！　出てこい、卑怯者め！」

――ふふ　酷い慌てようですね　招かれざる　異分子よ

「黙れ！　大人しく小牟を返すんだ！」

俺の怒声にリバースからすぐに返答はなかった。

数秒の沈黙のあと、

――ああ　あの体のことですか

と、俺を挑発するように、今思い出したかのような呟きを漏らす。

あの、とはどういう意味だ？　今、リバースは小牟の体に憑依しているはずだ。

「貴様……小牟になにかしたのか！？」

――ふふふ　冗談です　この体は　今も大事に使わせてもらっていますよ
この念話も　この体を触媒に　行っているのですからね

リバースの嘲笑が頭に響く。
リバースに操られ、苦しんでいる小牟の姿が頭に浮かんで沸騰しそうになる。しかし奴は怒る俺を見て楽しんでいる。遊んでいる。怒れば怒るほど奴の思うつぼだ、そう思うことで頭が灼熱しそうになるのを押さえつけた。

――オータム　初めてですね　貴女がエリアの秘密を　住民に口外するのは

「ええ……もう、見ていられなかったから」

リバースの声かけにオータムが答える。

「顔見知りがなにも知らずに生き死にを繰り返している。見て見ぬふりをするのに、もう疲れたんです……」

――だからあれほど言ったのに　情が移るから　住民に接触するなと
管理する者は　管理物に情を持ってはいけない　入れ込んではいけない
静かに　誰にも知られることもなく　世界を管理しなければならない

「全ては……悲劇のない、平穏なる世界のために……ですか？」

――そうです　そしてそれは　貴女が望んだ世界でもあるのです

リバースの答えに、オータムの表情が苦虫をかみつぶしたように歪んだ。

「……違う」

――なにが違うのです？　平和な世界で　住民たちは笑顔に溢れ
幸せに生活している　それが永遠に続くのです

「違う……私の夢見たのは……」

オータムが顔を伏せる。しかしリバースの舌は止まらない。言葉尻にまるでいじめっ子のような嗜虐性を感じさせる。

――全ては　悲劇のない　平穏なる世界のため
これ以上の世界など　存在しない　完璧な世界　それがエリア
ねぇ　オータム　貴方もそう思うでしょう？

「違うな。そんなものは詭弁だ」

俺の口は自然に動いていた。

「作られた世界、捻じ曲げられた記憶、押し付けられる死と再生――それだけじゃない。エリアにはまだまだボロが幾らでもあるぞ。それこそ叩けば出てくる埃の数ぐらいはな。
はっきり言っておいてやる。リバース、貴様は間違っている。確かに貴様はエリアの住民に今を与え続けている。それ自体は確かに

素晴らしいことなのかもしれない……だが同時に貴様は未来を奪っているんだぞ」

――間違っている？　私が？　そんなことはあり得ない
なんて馬鹿なことをいうのでしょうか　この愚かで　みすぼらしい　異分子は

リバースは俺の言葉を一蹴した。
聞く耳を持っていない。おそらく自分の行いこそが正義、それを邪魔するものはすべて悪と断定しているのだろう。俺の経験上、この手の輩にはなにを言っても無駄だ。

――悲劇をなくし　太極の涙をぬぐう　それが私の使命
しかし私の力は　太極に比べて　はるかに小さい
私は私の成しうるすべてを使い　エリアを創り　維持しています
誤りなどあるはずがない　私は正しい　太極こそが正義です

「……絶対的な正義などあると思っているのか？」

――あります　太極こそが究極にして至高　絶対の善です

リバースは即答していた。

――異分子よ　貴方は大人しく破界によって消滅し
私の再世によって　エリアの住民になればいいのです
それが寛容です　待っているのは　永遠に続く平穏　楽園なのですから

誇らしげにさえ聞こえるリバースの声。ある側面だけみればエリ

アは正しいだろう。ある側面だけ見れば、だ……しかし俺はそれを認めるわけにはいかなかった。

「冗談じゃない。俺の命は俺のものだ。俺はあいつと生きていく。この命が尽きる、その時までだ」

――理解できない　やはり貴方は異分子です
目の前の幸福を捨て　荒れ狂う苦難の道を　あえて選ぶ
正気の沙汰とは　思えない

「結構だ。好きに思っていればいい。どの道、貴様は俺が追い詰めるのだからな」

――ふふふ　哀れですね　どうせ　貴方にはどうすることもできない
私は殺せない　それを今から分からせてあげましょう

嫌な気配が俺の肌をちりちりと震わせた。
リバースがなにをする気なのか、俺にはまるで予想がつかない。分の悪い賭けは嫌いだが、俺が主導権を持たず後手に回っているのは事実。出たとこ勝負しかない、と気を高めて臨戦態勢に入ろうとする　――と。
突然、鈍い音を立ててオータムがテーブルに突っ伏した。湯呑みを倒し、茶をこぼしながら。

「オータムちゃん！」

エクセレンが彼女の肩を揺するが反応がない。電池が切れたみたいにぴくりとも動かない。無反応なオータムにエクセレンは顔をしかめていた。

――　さぁ　私の可愛い可愛い　オータム・フォー
　　そろそろ帰ってきてください　私の元へ

「貴様、オータムに何をした！」

霊気や妖気の類は感じられなかった。起こった現象が把握できない。俺の問に、リバースはいつもの笑い声を漏らし、なにも、と答えていた。

――　オータムを返してもらう　ただ　それだけですよ

淡々と声を紡ぐリバース。教えてやる義理はないのだぞ、そう言わんがばかりの冷たさを感じさせる声だった。

奴が言葉を終えると同時に、オータムの周囲の空間がゆらいだ。俺の知っている「ゆらぎ」と違い、拡散ではなく収束し、オータムの体に薄皮一枚の厚さで張り付いていく。リバースめ、そういうことか。

「転送などさせん！」

俺は渾身の霊力を込め、オータムの体から「ゆらぎ」を引き剥がそうと手を伸ばした。リバースの「ゆらぎ」が俺の知るものと同質なら、鬼門封印の応用でどうにかできるはず。

そう踏んでいたが、俺の手は掴まれて止められた。俺の手を掴んでいたのは他ならないオータムだった。華奢な外見からは想像できない強力で俺の手首を締め上げ、机からゆっくりと起き上がる。

「くっ、オータム、手を離すんだ！」

「……」

返事はなかった。彼女と目が合った。視線が定まっていない虚ろな瞳だ。今の彼女の状態を推察するのには十分すぎた。

――　オータム

リバースの声が聞こえる。と同時、俺の視界は反転した。背中から体を貫通するような衝撃が俺を襲う。肺から空気が押し出され、再び膨らむのに時間がかかった。逆さまに山のようにそびえるオータムを見て、俺は力任せに床に投げつけられたのだと気付く。

既に俺の手はオータムから離れていた。慌てて手を伸ばすが届かない。

彼女は薄い「ゆらぎ」に同化し、体が徐々に透けて、やがて消えてしまった……くそっ、やられた。

――　オータムは返してもらいました　　さぁ　異分子よ
　　次は　　貴方にはなにもできない　その現実を突き付けてあげましょう

頭に響く奴の笑い声をバックコーラスに俺は立ち上がった。日頃の鍛錬の成果か、反射的に受け身は取れたので痛みは大したことはなかった。

リバースが言う。

――　私は　貴方たちが言うところの　ジェネ高にいます

「なんだと?」

「ジェネ高って、私の高校じゃない」

エクセレンが驚きの声を上げたが、リバースは気にもとめない。

――貴方という異分子の存在　過去生を知られた影響
　そしてベーオウルフの不用意な目覚め
　予定外が多すぎる　少し　プロセスを修正する必要が出てきました

「貴様！　ジェネ高でなにをするつもりだ！？」

――なにを？　ふふふ　さて　なにをでしょうね？

語尾が頭の中でエコーし、徐々に小さくフェードアウトしていく。
残ったのは沈黙。あれだけ頭に直接響いていたリバースの声はもう聞こえず、奴の気配を感じ取ることが俺にはできなくなっていた。
リバースが念話を切ったようだ。奴の念はもうこの家には存在していない。それが現状だった。ちなみエクセレンは、オータムちゃん消えちゃった、と呆けていたが無理もないだろう。一般人には少々酷な超常現象のオンパレードだったからな。
……ジェネ高に来い、ということか。
リバースはオータムにプロテクトをかけていた。そうまでして漏洩を防いでいた情報なのに簡単に俺にに教えた。十中八九、ほぼ確実に罠と考えて間違いはないだろう。

「エクセレン」
「え？　な、なに、零児ちゃん？」

エクセレンはまだ軽く混乱しているようだったが、今は彼女に配慮しているほど時間に余裕がない。

「俺をジェネ高に案内してくれ」

「わ、分かったわ！　すぐに準備するわね！」

慌てるエクセレンと一緒に俺も出発の準備を整える。

リバースはまだ小牟の体を使っている様子だった。まだ小牟を取り戻すチャンスは残されている。今度は仕損じたりはしない……必ず、今度こそ小牟を救ってみせる！

「分の悪い賭けだが、やるしかない」

準備を整えた俺たちは、ジェネ高を目指してキョウスケの家をあとにした――……

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ――……

鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＩＮＡＬ　～傷だらけの男たち　3～（後書き）

＜次回予告＞

ＯＧ高等学院、通称ジェネ高
エリア一の学生数を誇る、地域一のマンモス高校だ
今日も個性あふれる学生たちが、アホな事件を巻き起こす
明日はなにが起こるのだろう？
分からない。先が読めないからドキドキするしわくわくする
しかし終わりはいつも唐突で理不尽だ
そして終わりを手引きするのはいつも神様　――　リバース
与えられた生、魂……本当の意味で魂を獲得できる者が、はたしてエリアにいるのだろうか？
答えは、神様にだって分からない

次回、鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＩＮＡＬ　第2話「ソウル　ゲイナー」
勝ち取れ　掴め　生き残るために

書きたいことを書いたら1話だけで3万文字近くになってしまいました（汗）
2章と違い、第3章は基本的に1人称で展開させるつもりです。
キョウスケ、零児の視点をメインに、時々他キャラの視点を織り交ぜて書いていきます。
違和感があればご指摘下されば幸いです。
感想・誤字脱字報告・意見も絶賛募集中！
頑張るので、よろしければ最後までお付き合いくださいノシ

鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＩＮＡＬ　～ソウル　ゲイナー～（前書き）

今回は第2話のさわり部分の更新です。
第2話はこの話を入れて、3，4回ぐらいに分割し、書きあがりしだい更新する予定です。よろしくお願いします。

鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＩＮＡＬ　～ソウル　ゲイナー～

非現実感が嵐のように吹き荒れていた。

なにも分からない。なにも感じない。体の輪郭も、自分が誰であったのかさえも分からなくなって、地平線すら見えないこの白い空間を漂い、どれだけの時間が経ったのかも、俺には分からなかった。

俺は誰だ？

俺はどこにいる？

なぜ、こんな目にあっている？　考えれば考えるほど分からなくなる。この思考は本当に俺のものなのか、とさえ感じる。

酷く、非現実的だった。

だが同時に思い出すこともあった。遠い昔、俺が鋼の巨人に乗って戦っていた頃のことだ。俺の存在が白い空間に溶けていく……そんな感覚を味わいながらも、なぜか、俺はその記憶を受け入れていた。

酷く、酷く非現実的な殺し合いの記憶を。

――キョウスケ・ナンブ……

俺は償わなければならない。彼に。なぜか、そう思えた……

◇

なぜか高校の密集する地域エリア。

そこに堂々と校舎を構えるＯＧ高等学院、通称ジェネ高はエリア一の生徒数を誇るマンモス高校だ。

所属している生徒数に比例してジェネ高の校舎は巨大だ。何棟かに校舎は分かれて作られているし、体育館やプールも一度に使う生徒の数を考慮してからかなり大きかった。

登校風景が見れる時間帯は既に過ぎていた。授業中なのか校舎内をうろつく生徒の姿は見えないしザワメキも聞こえてこなかった。当然、屋上に姿を見せるようなもの好きはいないだろう、たったの１人を除いては。

複数ある校舎の１つの屋上、雨水を貯めておく貯水タンクの上に小さな人影が見えた。

スリットの深いチャイナドレスを着た小柄な女性で、複数に枝分かれしてまとめられたポニーテールがさながら九尾のキツネの尾を思わせる。有栖　零児の相方、小牟が貯水タンクの上に立ち地上を見下ろしていた。目元には紅い水玉のタトゥーが浮かんでいた。

眼下の床……要するに校舎の屋上には気絶したオータムが寝かされていた。小牟の体を操るリバースは、ゆっくりと眼下を見まわした。学生たちの学び舎、端正な住宅街、活気に溢れた繁華街……今日もエリアは平穏だった。

悲劇はなく、平穏に、エリアの住民たちは今日も生を享受している。

「この世界が間違っている？　まさか、そんなはずはありません」

リバースが小牟の口を借りて一人ごちする。

「すべての住民に平等に、生命と平穏と幸福を私は与えている。私は正しい。そのことを、あの愚かな異分子に理解させてあげましょ

う、ふふふ」

リバースが静かに笑う。同時に小牟の近くの空間がゆらぎ始めた。オータムの周りもだ。２人の体は徐々に透けていき、背景に同化していく。見えなくなっていく。

音もなく、数秒後には人っ子１人いない屋上だけが残された。

鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＩＮＡＬ　～ソウル　ゲイナー～

エリアの破界まで、あと約３６時間　――……

非現実感が嵐のように吹き荒れている。

日常には現実感（リアリティ）が伴う。

別に変にかしこまる必要ない。その日を過ごすうえで必要なことをやっていれば、いつの間にか大概1日が終わっていたりする、それが日常だ。毎日に大きな変化は訪れないし、なかばルーチンワークのように決められたことを繰り返すだけの日もあるだろう。だが日常とはそういうものだと俺は思っていた。

日常を送る場所も大概変わらない。自宅、学校、職場でもなんでもいい。日常とよべる生活では、活動する場所はだいたい決まっていて、日頃見ている物や場所に、違和感や非現実感をうけることは普通はあまりない。

だが俺の心には非現実感が巻き起こっていた。それこそ、嵐のようにだ。

「……」

過去を知り、アサキムの話を聞き、ジェネ高へと急ぐ俺。しかしもう俺は、通り過ぎていくエリアの街並みにリアリティを感じることはできなかった。今も手を伸ばせば触れる距離に民家の塀がある。見えるし、触れるし、日に焼けた熱さも感じることはできた。

しかし、やはりどこか現実味がなかった。

エリアが過去生の絵里阿町に酷似していることも、俺の中に芽づく非現実感を増大させる。

エリアはリバースによって創られた世界だ。そのことを再認識さ

せられた。
箱庭とも言えるこの世界で、俺が過ごした日常にいったいどれだけの価値があるだろうか？　最も日常を過ごした場所で、自分を振り返ろうとしている俺自身にも……意味はあるのだろうか？
……分からない。
答えを探している。時間はないが、今はできることを少しずつやっていくしかない。まるで努力家が言いそうな言葉を思い浮かべながら走り、俺はジェネ高に到着した。

「……やれやれ、いつもと変わらないのというのに……」

見慣れた正門、校舎に校庭……それらすべてが非現実的に見えた。ジェネ高は過去生の中で、アルフィミィをいつか通わせようとしていた学校に酷似していた。エリアのアルフィミィはジェネ高に通っている。その事実も、俺の中の非現実感を引き立てるスパイスにしか、今はならない。
奇妙な話だ。
とにかく、俺は校舎の中に足を運ぶことにした。

●

時刻は既に正午前になっていた。
俺は校舎に足をふみれたが、下足場を含め校内を出歩く生徒の姿はなかった。おそらく授業中なのだろう。クラスごとに割り振られた教室から、教鞭を取る講師の声が聞こえてくる。窓ごしに中の様子を確認してもよかったが、授業中に出歩く生徒として認識される

のが面倒だったのでやめておいた。
それに今更、残された時間を使ってまで授業を受けようとは思えない。
俺はそれなりに真面目な方ではあったが、とりわけ勉強好きというわけではないし、授業まっさいちゅうの教室に入って奇異の視線を集めるのはご免こうむりたい。
俺は教室があるフロアの方に近づかないことにした。職員室はもちろん、美術室や音楽室など特別授業が行われていそうなフロアも避けた。食堂や売店に向かうことも考えたが、授業中に生徒が現れれば目立つし、まだ正午前ということで開店もしていないだろう。
気づけば、俺の足は自然と屋上に向かっていた。
行き場がなかった。それもあるが、屋上が俺にとってなじみの場所であったのも関係しているかもしれない。
階段を上り、軋む金属製の重い扉を開ける。
屋上には先客がいた。広い青空の下、貯水タンクで影ができているスペースに見覚えのある男が2人座っていた。

「あ、キョウスケさん。チース！」

紫髪の少年、スクールに通うアラド・バランガが笑顔を向けてきた。
例の如くスクールを抜け出してきたアラドの正面には、緑色のバンダナを巻いた少年タスク・シングウジが座っていた。手には年季の入った愛用のトランプが束で持たれている。

「どうしたんです？　キョウスケさんもサボりっすか？」
「まぁ、そんなところだ」

タスクの質問に生返事をする俺。
今日の俺、というかこれからの時間、俺は授業に出るつもりは当

然ない。俺の当面の目的（時間は限られているが）は、自分を見つめ直し、ベーオウルフの力を扱うヒントを見つけることだ。

タスクたちが手招きしていた。

タスク、アラド、そして俺……この3人は時々集まっては、屋上で賭けポーカーをしている。学生の身分でギャンブル好きという博打仲間というか悪友だった。俺は招かれるまま2人に近づくが、やはり、非現実感がハンパない。

2人の死に様がフラッシュバックした。

腕が千切れ飛び、頭が爆ぜ、血を噴きだしてやがて動かなくなった2人。ベーオウルフに操られ、過去に手をかけた部下の2人が、今俺の目の前にいる。

「いやー、ゼオラの奴の機嫌が悪くってさー、こえーからこっちに逃げてきちゃいましたよ」

アラドが能天気に笑っている。

「どうせまたデリカシーないこと言ったんだろ？　アラド、バカだからな」

タスクがアラドに訊いた。

「そんなことねーよ。実はゼオラの奴が弁当作りに凝ってるんだけどさ、いつも弁当の中にパインサラダ入れてくんだ。得意らしくて。でも毎日毎日パインサラダ入ってるから、たまには他のものがいいなって言ったらキレちゃってさ」

「パインケーキとかか？」

「おう、それそれ」

「ははは、アラドは本当にバカだなぁ」

「バカとはなんだ、バカとは。こう見えても、体育の評定はAなん

だぜ、俺」

平和な会話をタスクとアラドが繰り返している。

俺は声少なめに2人の会話を聞き、ときどき話に混じる。それがエリアにおける、俺とこいつらの日常だった。違和感のない、普通の日常の風景。過去生を知った今では、それすら異質に感じてしまう俺がいた。

「あれ？　キョウスケさん、どうしたんすか？　元気ないですね」

「……そうか？　気のせいじゃないか」

2人の死に様が頭に過っていたからとは、口が裂けても言えない。

「そうですか？　じゃあ折角3人そろったわけですし、賭けポーカーしましょうよ。賭けポーカー」

「もうすぐ昼休みだから昼飯かけて一勝負しようぜ！　昨日の負けを取り返さねえとな！」

「昨日？」

タスク、アラドとのりのりで声を上げるが、俺には2人の言っている昨日のことが思い出せなかった。

「ちょっと、忘れたとは言わせませんよ。キョウスケさん、昨日、1人勝ちしたじゃないですか！」

「そっすよ！　昨日は俺がボロ負け……あぁ、俺の飯代……」

この世の終わりみたいにしょ気ているアラドを見て、思い出した。

俺は昨日も、2人と屋上で賭けポーカーをしていたのだったな。

結果は俺の1人勝ち。今まで2人にカモられていた分を、全てノシを付けて返してやった。俺は分の悪い賭けには滅法強い。裏を返せ

ば、勝負運の良い時はなにかしらトラブルに巻き込まれやすかったりする。
2人と賭けポーカーをした昨日、俺は小牟（シャオムゥ）と出会い、エリアの秘密を知った。
まだ、たった1日しか経っていないのだ。信じがたいことに。
過去生を見た影響もあって、2人と勝負したのは、遠い過去のことのように思えて仕方なかった。

「どうします、キョウスケさん？」
「まさか、逃げるんですか！？」

2人がズズイと顔を近づけて答えを迫ってきた。

「分かった分かった。その勝負、受けようじゃないか」
「へへ、そうこなくっちゃ！」

タスクが意気揚々とトランプをシャッフルし始め、

「よっしゃ、昨日のリベンジだぜ！」

アラドが頬を叩いて気合いを入れていた。
気合でギャンブルに勝てれば世話はない。駆け引きは賭け事で重要な要素だが、それでもその日の運がもっともモノをいうのは変わらない。
シャッフルし終えたカードをタスクが配布した。各自の手元に5枚ずつ配り終えると、残りのカードの山を3人の中央に置く。

「じゃあ賭けるのは昼飯ってことでいいか？」
「もちろんだぜ！」
「俺は構わん」

「よし。じゃあ恨みっこなしの1回勝負だからな」

タスクの言葉に俺とアラドは頷いた。

ポーカーは手持ちの5枚のカードで完成した役で勝負する。最初に配布されたカードから不要なカードがあれば破棄し、破棄した数だけ中央のカードの山から引いていく。このとき、良い手札が入ってくるかは完全に運次第なので、自分に必要なカードを引けるかどうかが勝負の分かれ目になってくる。

ポーカーフェイス……無表情も重要だ。例え良い役が完成しても相手に気取られてはいけない。俺はもちろん、2人も感情を顔に出さずに配られた手札を確認する。

「……」

俺の手札は「ハートの7」「ダイヤの7」「スペードの7」「クラブの7」、そして俺たちの賭けポーカーでは採用されているワイルドカード ――ジョーカーが、カードを交換する前から顔を揃えていた。

完成する役は5カード。俺たちの賭けポーカーでは最強の役であり、役が完成した時点で、俺の勝利は確定した。

初っ端からこれである。はっきり言って勝負運が良すぎる。……嫌な予感しかしないが、この結果は俺が置かれている状況を暗示しているのではないだろうか？　詰んでいる今の俺とエリアの現状を反映している……そのようにしか俺には思えなかった。

タスクもアラドも黙々とカードを交換していく。負けが確定していると知らず、懸命に役を作ろうとしている様はなんだか滑稽で平和だった。

しばらくして2人の手が止まった。

「もういいのか？」

「あ、キョウスケさん、俺かつ丼が食べたいです」
「なに言ってんだタスク。キョウスケさんは、俺に特盛牛丼トン汁付きを奢ってくれるんだぞ？」
「お前たち……俺が負ける前提の話はよしてくれないか？」

普段の負けっぷりからか、俺は2人に相当侮られているようだ。
しかし俺の手札の役は5カード。必勝だ。手札を明かしたときの2人の悔しがる顔を想像すると、こんな状況に追い込まれているにも関わらず、少し楽しくなってしまうから不思議なものだ。

「いいだろう、格の違いを見せてやる。さぁ、幕引（ショーダウン）きだ」

俺が最初に手札を開示した。役はもちろん5カード。

「げげぇ、マジかよ！？」
「また5カード！？　一体どうなってんだよキョウスケさん！！」

勝ち誇っていた2人の顔色が豹変した。手札を放り投げて負けを認める。中央のカードの山と混ざって、2人の役がなにだったのかは分からなくなるが、これで俺の勝ちは確定した。
キョウスケさんハンパねぇ、とタスク、2日連続で奢りかよ、とアラドが負け惜しみを言い続けていたが、午前の授業の終了を告げる鐘の音が響き、掻き消された。
勝利の報酬は昼食だ。家を飛び出してきたため、朝食を取っていない事を思い出す。現金なもので、俺の腹は猛烈な勢いで鳴き始めた。

「さて2人とも、食堂にでも行こうか？」
「ぎぎぎ、ちくしょー。おいタスク、お前が奢れよ」
「嫌だぜ。ドベが奢るルールだろ？　じゃんけんで決めるぞ、じゃ

んけんで」

腹を空かせた俺の前で、じゃんけんによる最下位決定戦が開幕した。

平和だな、と思った。エリアでは過去で死んだ人たちが生きていて、こうして平和に毎日を過ごしているのだろう。人が集団を作って生活している以上、完全に衝突を避けることはできないが、それでも戦争や殺し合いのような悲劇は生まれていない。

アサキムの言葉を思い出す。

『エリアが僕の見てきた世界の中では、１番悲劇の少ない世界のように思える――』

その通りだと、切に思えてしまった。楽しそうに手を繰り出しているタスクとアラドを見ていると、本当にそう思えてしまう。

悲劇のない、平穏なる世界……繰り返しによる永遠を獲得した、ある意味での楽園……リバースの出した悲劇のない世界の結論……しかし完全に悲劇が起こらないわけでもない。

完璧な世界なんてきっと存在しない。

だから、きっと、ベーオウルフは破滅を選んだのだろう。悲劇を失くすために、生み出し感じる者をすべて抹消する……奴にはそれを行うだけの力があったし、長年求め続けた方法の答えだったのかもしれない。

永遠に続く世界で飼い殺しにする。いっそ世界のために皆殺しにする。どちらも極論だ。例え、ある意味でその行為が正しいのだとしても、俺は認めるわけにはいかなかった。

「よっしゃー、俺の勝ちだ！」

「げぇ、マジかよ！」

じゃんけん勝負の軍配はタスクに上がっていた。

「ひぃー、こんなことあっていいのかよ。まるで悲劇だぜ」

勝負に負けたアラドが、財布の中身を確認して嘆いていた。

悲劇……キーワードはやはりそれだろう。ベーオウルフもリバースも、悲劇のない世界の実現が行動原理になっているのは間違いない。だからどうした？　目的が分かっても解決策にはまだ至っていない。

答えは出なかった。悩んだ。まるで袋小路に囚われているようだった。

「さぁキョウスケさん、食堂へ行きましょう」

「あぁ、そうだな」

「アイムビーバー！　次こそは勝ってやるからな！」

「ははは、アラドは本当にバカだなぁ」

どうやらアラドはアイルビーバックと言いたかったらしい。愛嬌のあるスペルミスをタスクが笑い、俺もつられて頬が緩んでいた。

アラドはぎゃいぎゃいと反論していた。

あぁ、これが俺の日常なのだ。

幸せで、平穏な、破綻してしまっている俺の日常なのだ。

酷い……酷い非現実感だった。

……俺はタスクたちに促されるまま食堂へと向かう　――……

●○

回る2輪が、空気を切り裂き俺たちを運んでいく。

「急ぐわよ、ゲッシーちゃん！」

『Ｙｅｓ、Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ！』

エクセレンの運転する黒いバイクが返事をし、エリアの住宅街を疾走していく。

俺はどこか既視感を覚える黒いバイクの後部座席にまたがり、体の安定感を得るためにエクセレンの腰に手を回していた。キョウスケに見られたくない光景だし、ヘルメットもせず、「法定速度？なにそれ？　美味しいの？」と言わんがばかりの体感速度と風ではあったが、できれば今は見逃してもらいたい。

なぜバイクが喋るのか？　そんなツッコミも今回はなしだ。エリアは異世界だ。この世界でなにが起きようと、俺はもう驚かないだろう。

そんな俺もビックリの速度で「僕の名はＬ字路、たんていさ――」と主張しだしそうな曲がりの急カーブに、エクセレンは横転寸前まで車体を傾けて進入し、神がかったコーナリングで直線へと脱出する。ジャケットの端が地面に擦れた。俺でなければ投げ出されかねない荒々しい運転で、エクセレンは次のカーブもあっさり抜けた。

直線に道が開けた先、巨大な学校らしい建造物が俺の視界に飛び込んできた。

「零児ちゃん、あれがジェネ高よ！」

「あそこか……」

エリア一と言われる生徒数を誇るマンモス高校、通称ジェネ高。リバースが俺を待ちかまえている。小牟の体も必ず来ているはずだ。

「待っていろよ、小牟」

外観に比例して大きな正門は開け放たれていた。

まるで、来るなら来いと誘っているようにさえ思える。

俺とエクセレンと喋る黒いバイクは、リバースの待ち構えているだろうジェネ高へと、フルスロットルで突入していった。

○

湧き出してくる俺の闘志とは裏腹に、ジェネ高の敷地内は閑散としていた。

「まぁ、まだ授業中だしね。人がいないのはしょうがないわよ」

「そういうものか？」

エクセレンの言葉に俺は不信感を覚えていた。

敷地内に到着してから、エクセレンはバイクを徐行させ、構内を巡回してくれた。時刻はもうすぐ正午を回る。ジェネ高の授業時間の配分が、俺の世界のそれと同じだと仮定するなら、あと少しで昼休みを告げる鐘が鳴ると予想された。

昼休みになり生徒が動き出せば、教室内から校舎外に出てくる者も現れ、自然と活気が溢れてくるだろう。

しかしその裏返しか、今のジェネ高構内は静まり返っている。

やはり妙だ。いくら授業中とはいえ、あまり静かすぎると逆に違和感を覚えずにはいられない。

「エクセレン、校庭に向かってくれ」
「りょーかい、っと」

バイクの進路が校庭に変わった。
しばらくすると、アスファルトではない土色の地面が見えてきた。
学生が運動するために整備された校庭だ。やはりというか、在校生の数に合わせてかなり大きめの校庭の隅には、野球部が使用するのだろう、お約束のようにバッティングスペースが用意されていたり、体操用の高めの鉄棒や大きめの倉庫があったりと設備は充実していた。
しかし人影は見当たらなかった。
これだけ巨大な高校だ。どこか1クラスぐらい、体育の授業で校庭を使用していてもおかしくない。というより、使っていなければ不自然にも関わらず、人っ子一人いなかった。

「おっかしいわねー。日焼けが嫌だから、みんな授業ボイコットしてるのかしら？」

青空を見上げてつぶやくエアクセレン。そんなわけがない。

「エクセレンではあるまいに……」
「あら、ありがと」
「褒めてないぞ？」
「でも、美肌のことを褒めてくれたんでしょう？」

相変わらず、頭が痛くなるほどポジティブだな、この女は。
太い車輪が校庭に土埃をまきあげる。校庭は隅々まで見て回ったが、無駄にタイヤの跡を土に残すだけに終わった。

「むぅ……この感じ、どこかで……」

ジェネ高全体を包んでいる静寂感に、俺は覚えがあった。
思い出そうと後部座席で俺が唸っていると、
「あら、どったの？　○ンコ？」
「違う。あと女の子が下品な言葉を使っちゃいけません」
反射的に口が動いてしまったのはさておき、やはりこの静寂さを俺は体験したことがあった。それもごく最近……そうだ、思い出した。
まるで、世界からそこだけ切り取られたかのような、不自然な静寂さ。
俺がエリアに転移し、キョウスケと初めて出会ったあの公園に様子が似ていた。
「なぁ、エクセレン」
「なぁに、零児ちゃん？」
「確認したい。普段のジェネ高はもっと活気があるのだな？」
「もちのろんよ。それはもう毎日がお祭りのようで楽しいの。授業中でもサボって、遊んだりしている人もいっぱいいるのよ？」
毎日がお祭りか。実に楽しそうで結構だ。
だがなおさら、ジェネ高を包む静けさに説明がつかなった。人１人ともすれ違っていない。やはり異常だ。
「……考えられるとすれば、リバースだな」
「あ、やっぱり？　流れ的にそうなるわよね」
「覚えているか？　昨日、オータムが俺たちに言っていたリバースの能力の１つを」
「認識操作、ね。もしかして、校舎外に認識が向かないようにして

るのかしら？　まぁ、それだけじゃ、この状況を説明できないけど」

エクセレンが俺の言いたいことを代弁していた。ボケているように見えて、やはり彼女は頭がきれる。

認識操作だけでは校庭に人がいない説明ができない。リバースが他になんらかの力を使ったと考えるのが妥当か……と　――

『Ｈｅｙ！　Ｍｒ．！』

――突然、俺たちの乗っていたバイクが文法のオカシイ片言の英語で、大声を上げた。

『Ｌｏｏｋ　Ｕｐ！！』

「なんだ？　上を見ろというのか？」

アップ、と言うからにはそうなのだろう。そうあたりをつけた俺は、バイクに言われるまま空を見上げた。

小牟が空中から俺たちを見下ろしていた。

小牟はまるで見えない地面でもあるかのように、空中にしっかり足をつけて立っていた。人間の死角になりがちな、頭上よりもやや後方、目算で４ｍほどの高さだった。いつから頭上に現れたのか分からない。

霊気はおろか、妖怪である小牟の持つ妖気すら感じられなかった。ただバイクだけが小牟の体の存在に気づいていた。

「ふふふ、案外、鈍い方ですね」

小牟の口端が吊り上っていた。普段の小牟とは違う異質な笑み、そして目元に浮かぶ紅い水玉タトゥー。小牟の体がリバースに操られているのは明白だ。

俺とエクセレンはバイクから降りた。もう二度と見失わない様に、リバースをしっかりと見据えた。

「降りてこい。そして小牟の体を返すんだ」

「いやです……と、言ったら？」

「力ずくでも引きずり下ろすまでだ」

俺の恫喝にリバースは、まぁ怖い、と笑い返すだけ。完全になめられて、いや、見下されていた。格下の人間がなにを言う、そんな蔑んだまなざしが俺に降り注ぐ。

上等。俺とて特務組織「森羅」のエージェントの端くれだ。生身で化け物とやり合った経験はそれこそ星の数ほどあり、むしろ相手が油断してくれていることに感謝したい気持ちだった。

護業を失おうと、俺が十二分に戦えることを見せてやる。

『Ｇｅｔ　Ａｗａｙ！！』

しかし俺より先に例の喋るバイクが吠えていた。

バイクはまるで雄叫びをあげているみたいにアクセルを噴かせ、排気塔から熱風を吐き出していた。運転手が乗っていないのにハンドルが独りでに切れ、タイヤを唸らせて砂を巻き上げる。俺の直線状に浮いているリバースに向けられたヘッドライトが、昼間なのに思わず目を覆いそうになるぐらい強い光を放っていた。

なぜか見覚えのある白い光。バイクの発した言葉のせいもあり、ライトに収束していく光が危険なものだと俺は直感した。

傍で立っていたエクセレンの腰に手を回し、

「ちょっ、零児ちゃ　――　！！」

俺が地面を蹴り、バイクの直線上から飛び出した直後。

『Ｎｅｕｔｒｏｎ　Ｂｌａｓｔｅｒ！　Ｆｉｒｅ！！』

ヘッドライトから白い極太の光線が発射された。

目の前を白く染める光線の熱で肌がちりちりする。人が直撃すれば蒸発しかねない熱エネルギーをもった光線兵器を喋るバイクが放っていた。

ニュートロンブラスター。俺の記憶に新しい名前の光線が、リバースの操る小牟の体に直撃する。

「シャ、シャオム　――ッ！！」

俺は反射的に彼女の名前を呼ぼうとした。しかし俺の口の動きは、バイクが放った図太い光線よりも、展開する目を疑う光景に邪魔されていた。

「ふふ、変わった異分子もいたものです」

直撃を受け、リバースは笑っていた。

光線は小牟の体が突き出した手によって防がれている。手に触れた光線は、水鉄砲の弾が壁に当たって散ってしまう時のように拡散し、小牟の体に欠片も触れることはかなわない。

いや、よく見れば、光線を防いでいるのは小牟の手ではないと分かった。

小牟の１０ｃｍほど手前に、光線が弾かれる軌跡に沿って壁のようなものが見えた。防御障壁だ。原理は分からないが、リバースは

強力な結界のようなものを生み出すことができるようだ。
仮にベーオウルフが使っていた念力――念動力をリバースが使えたとするなら、おおかた障壁の正体は念動力による結界……さしずめ念動フィールドと言ったところか。

「貴方は……そうですか。ふふ、面白い。エリアに転移し、私の力に当てられ、無機物に自我が芽生えたようですね」
『Ｆｕｃｋ！！』

光線を弾いたリバースがゆっくりと地面に降り立ち、バイクは対照的に下品な言葉で毒づいていた。
異分子、転移……リバースの言葉から推測するに、バイクも俺と同じくエリアに迷い込んだ転移者らしい。そしてニュートロンブラスターという光線兵器。これは俺がかつて迷い込んだ「エンドレス・フロンティア」と呼ばれる世界で、共に戦った機動兵器の所有する武装の名称だった。
その機動兵器――ＰＴと呼ばれる全高３ｍ級の人型兵器の名前は「ゲシュペンスト・ファントム」。もちろん、バイクではない。

「そのような片言では話しにくいでしょう？」

バイクに小牟の掌がかざされた。

「戯れです。元の姿に戻してさしあげましょう」
『Ｆｕｃ――Ｎ、Ｎｏ――――？！』

車体に一瞬火花が奔り、続けてバイクが機械音声で悲鳴を上げ始めた。

「ゲ、ゲッシーちゃん！」

「くっ、なんだというのだ？」

目まぐるしい状況の変化。目の前ではまた見慣れない光景が展開される。

いきなりバイクが発光し始めたかと思うと、その光は徐々に膨れ、大きな球状の光体を形成した。光球の成長は止まらなかった。みるみるうちに直径３ｍ程の大きさに巨大化した光の球。しかし今度は、光球の表面から、人の手足のようなものが生えてきた。

だが人の手足と違い、武骨で太く、金属質でメカニカルな四肢だった。残っていた球体部分も光が収束していき、やはり鋭角的なフォルムを持つ機人を形作る。

発光が収まった時、そこにはバイクではなく、黒い、俺にとって見覚えのあるロボットが立っていた。

「ゲ、ゲシュペンスト・ファントム……本物、なのか？」

『くっ、なんだ？　また、機体（からだ）が元に戻っている？』

自分の手足を見て、驚きの声をファントムが上げていた。バイクがロボットに変貌したのだ。驚いて当然だろう。

しかし俺の度肝を抜いていたのはそこではなかった。

ファントムが喋っている。機械音声ではあったが、人間のような身振り手振り、そして口調を見せるファントムに俺は驚きを隠せなかった。なぜなら「エンドレス・フロンティア」での冒険で、ファントムが口をきいたことは一度もなかったからだ。

命令を忠実に実行する戦闘機械。まさにロボット。俺がファントムに抱いていたイメージはそれだったからだ。

「ふふ、お気に召しましたか？」

リバースが笑いながら視線を向けてくる。

「手足がないと不便でしょう？　私に跪(ひざまづ)くためには、やはり手足は必要です。例えそれが人形であっても」
『俺はもう人形ではない！』
３ｍと、見上げる高さになったファントムが大声で反論していた。
『昔、俺は確かに人形だった。命令のままに敵を倒す戦闘機械だった。だが今は違う！　エリアに来て、俺は俺の意志を手に入れた！　俺は俺だ！　ゲシュペンスト・ファントムだ！！』
「それが私の力による幻影だとしても？」
『黙れ！　貴様は危険だ、俺の勘(センサー)がそう告げている！』
ファントムが左腕部に装備された３本の棒の１つを引き抜いた。丁度ファントムの掌大だった棒の先端が展開され、幅広なビームの刃が形成される。蛮刀のようなビームの大剣を構えて、ファントムはリバースに正対した。
『ヘイ、ミスター！』
ファントムが俺に声をかけてきた。
『アンタ、ミスター零児だな？　エンドレス・フロンティアに転移してきたミスター零児、アンタに間違いないな？』
「ああ。まさか、こんな形で再会する羽目になるとは、夢にも思っていなかったがな」
『ＯＫ！　ならば、改めて自己紹介といこうじゃないか！』
無口だった昔とは打って変わって、どこかハーケンにも似たキザな口調でファントムが言う。

『俺の名前はゲシュペンスト・ファントム！　俺は強くてカッコいい、最高のロボット、そこに異論は認めない！　無論、俺の手にした幸せを、邪魔する輩にも容赦はしない！』
「了解だ、ファントム。昔とずいぶん雰囲気が変わってしまったが、俺とお前の目的は同じようだな」
『ここは１つ共闘といこう！　ＯＫかい、兄弟？』

答えるまでもない。俺の答えはＹＥＳだった。
ファントムは命令に従っていただけのあの頃とは違う。以心伝心とまではいかないだろうが、互いの動きは体と頭が覚えているはずだ。ファントムという強力な助っ人の登場で俺の気分は高揚する。
俺は拳を構え、体内で霊力を高めた。己が身の霊力を高め、波紋に変えて敵に打ち込み魔を滅する。有栖流徒手空拳の奥義「霊波紋」の構えだ。

「あらあら、分をわきまえない異分子たちですね」

臨戦態勢の俺たちと違い、余裕綽々といった態度のリバース。
奴の自信の源は、先ほどニュートロンブラスターを防いだ念動フィールドがあるからに違いない。強力な結界だった。そう易々と破れるとは思っていないが、永遠に張り続けられる結界障壁など聞いたことがない。
俺とファントムの波状攻撃なら、いずれ念動フィールドを破壊できる。俺はそう踏んでいた。
すり足で徐々に距離を詰める。いきなり飛びかかり、返り討ちにあっては身も蓋もない。隙を見つけ、同時攻撃で一気にケリをつける。
俺たちの様子を見たリバースは。

「まぁ、いいでしょう。もう、私の目的は達せられているも同然ですしね。遊んであげましょう」

どういうことだ？　俺がジェネ高に来た時点で、リバースの目的が達せられたとでも言うのか？　ならば、それが思い上がりだと、今からその身に教えてやることにしよう。

リバースが、俺とファントムから視線を逸らす。挑発しているのか、それとも他のなにかを見ているのか。どちらにせよ、敵に付け入る隙が皆無なわけではなかった。

「行くぞ、ファントム！」

『ＯＫだ！　兄弟！』

昼休みを告げる大きな鐘の音が響いてきた。

それをゴングに、俺たちの戦いは幕をあける　――……

鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＩＮＡＬ　～ソウル　ゲイナー　２～（後書き）

その3に続きます。

ゲシュペンスト・ファントムはゲーム「無限のフロンティア」に登場するロボットです。

コメディ編の「ゲシュの奇妙な冒険」で主役をやっているので、興味のある方は読んでみてください。

鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＩＮＡＬ　～ソウル　ゲイナー　３～

漂っている白い空間が、慈愛をもって俺を溶かしていく……

過去の罪。
すべて忘れて。
溶け去り、自分が自分でなくなっていく……白い空間が体の輪郭をぼやかしていく。
それは忘却。それは逃走。なぜか、俺に最も似つかわしくない言葉のように思えた。
人は、忘却を苦痛から逃れるために使ってはいけない。
忘れることは逃げで、逃げている限り、望んだ結果を手にすることはできない。
だから戦う。
戦って、戦って、足掻いて抗って、闘争の世界を戦い抜く。
そして罪を償い、俺は死ぬ。
俺は死ぬべきだ。
戦って、死ぬべきだ。
時間も感覚も自分の体さえあやふやな、こんな場所で、いつまでも燻っているべきではない。

俺は戦う。
俺の罪を償うために。
不思議と、ぼやけていた体の輪郭が戻っていく。手足の感触や、今まで忘れていたことを少しずつ思い出す。

そうだ。思い出した。
俺は……俺の名は　――……

◇○

「エクセレン、離れていろ！」

俺はジェネ高の校庭で喉を震わせる。

俺が檄を飛ばした相手、エクセレン・ブロウニングは俺の背後で呆けて突っ立っていた。

愛車が彼女の目の前で姿を変えるという、文字通りの変貌……そして異常事態なのだから、彼女が我を失って見入ってしまうのを、誰が責められるだろうか？

だが、それも時と場合による。

「エクセレン！」

『ミスタ、先にいくぜ！』

エクセレンの元愛車 ―― 身の丈３ｍの黒い鋼の巨人 ―― ゲシュペンスト・ファントムが敵の前に躍り出る。

校庭の土に足形を残すほどの踏込みだ。巨体ならではの間合いの長さで、ファントムは自身が斬撃可能な距離にまで敵に肉薄した。

ファントムが蛮刀に似た幅広なビーム剣「グラン・プラズマカッター」を振り上げた。柄を両手で持ち、敵の頭に向けて振り下ろす。俗に言う「脳天唐竹割り」が、敵 ―― 小牟の体を操るリバースに襲いかかった。

「ふふ」

リバースが笑う。ビームの切っ先を眼前に迎えて、口の端を釣り上げていた。刹那、周囲の空間が「ゆらぐ」。

「気をつけろ、ファントム！」

俺が声を上げ終えたとき、ファントムは剣風で砂を巻き上げながら、カッターを振り下ろし終えていた。

しばらくして砂煙が収まる。

校庭の土には、まるでナイフで入刀されたスポンジケーキように、一本線の傷口が奔っていた。グラン・プラズマカッターが地面を切り裂き、ビームの熱で土を焦がしている。ぷすぷすとなんとも言えない臭いが鼻を突いた。

だが、そこにリバースの姿はない。

『どこだ！？』

ファントムがカッターを引き抜き、毒づく。

斬撃が肌に触れる直前に、リバースは「ゆらい」で消えていた。微動だにせず、一瞬の「ゆらぎ」の後、リバースは見えなくなった。まるで瞬間移動。瞬き一つの間に、俺とファントムの前から姿を消していた。

どこにいる？　まさか、永遠に姿を消せるわけではあるまい。

俺は上空を見渡すが、雲一つない青空が広がっているだけ。霊感のある俺にも奴の気配は読めない。体を振って周囲を確認したが、遠巻きに俺たちを見ているエクセレンの姿が見えただけだった。

ファントムの方を向き直る。ファントムの頭部バイザーが明滅していた。彼は機械だから、センサー類を使ってリバースの場所を特定しているのだろう。

「どうだ、ファントム？」
『答えはＮｏだ、ミスタ。バイオセンサー、サーモグラフィー、ソリトンレーダー……どれにも捉まらない。……まさか、逃げたか？』
「いや、それはないだろう」
リバースはわざわざ俺をジェネ高に呼び出したのだ。
なら、逃げる理由は思いつかない。仮に時間稼ぎが目的なのだとしたら、俺に居場所を教えたことも説明できなくなる。
「奴は必ずどこかにいるはずだ」
『ＯＫだ、ミスタ。ならば、今度は消え去る前にかたをつける』
「……手加減はしろよ、ファントム」
相手はリバースとは言え、使われているのは小牟の肉体だ。
小牟は妖怪だから多少の傷で死ぬことはないし、人間にとっての致命傷でも、時間さえあれば回復することができる。しかしそれも、ニュートロンブラスターなどで消し炭にされなければの話だ。
もっとも、リバースに例の瞬間移動がある以上、ニュートロンブラスターのような貯めの大きな攻撃はもう通用しないだろう。直撃しても、来ると分かっていれば念動フィールドで防御される。残る手は、隙を突いて、斬撃で行動不能にすることぐらいか。
あるいは、俺の奥義「五行封印」を叩き込むか、だ。
どちらにせよ、こちらの手数は少な　――
「きゃ！？」
――　エクセレンの小さな悲鳴が聞こえた。
『センサーに反応！』
「まさか！　エクセレン！」

振り返ると、リバースに肩を押さえられたエクセレンの姿が目に飛び込んできた。
拘束はされていない。少しぐらい抵抗できそうなものだが、

「お、おろろ……か、体が動かない……？」

どうやら、リバースがなんらかの力で、エクセレンの体の自由を奪っているようだ。
動けず、体を震わせているエクセレンの隣に、彼女に良く似た小牟の体が並んでいた。やはり良く似ている。捉え方によっては、小牟とエクセレンは姉妹にだって見えるだろう。

「ねぇねぇ、小牟ちゃん。なぜかしら、体が動かないの。良かったら、手、離してもらえないかしらん？」
「ふふふ、ダメですよエクセレン。お楽しみは、これからなんですから」

上唇を舌で湿らせるリバース。その仕草も、エクセレンに向けられた視線も妙に艶っぽい。

「え？　え？　なになに？　小牟ちゃんって実はレズレズちゃん？　やぁねー、私にそんな趣味なんてないわよー。だから離して、ね？」

ころころと笑いながら説得を試みるエクセレン。能天気に見えるが、逃げ出すために頭を巡らせている最中だろう。あるいは、時間を稼ぐためか。彼女はバカのように見えて意外としたたかなのだ。
エクセレンの言葉にリバースは、

「貴女の趣味は関係ありません」
「いや〝あああぁぁ！！　助けてーー！！　キョウスケーー！！」
身の危険を感じたのか、すぐさまエクセレンが絶叫する。
彼女の大声に俺はおもわず耳を押さえてしまった。もし至近距離だったら、鼓膜が破れていたかもしれない。とっさに防御しても耳鳴りを覚える程の大声だったから、おそらく校舎の中まで聞こえているだろう。
「ふふ、無駄ですよ」
リバースがエクセレンの首に指を這わせながら言った。
「誰も助けに来ませんよ。私の認識操作が効いている限り、ここへ意識は向かないよう仕向けてますから」
「あら、そう。残念」
途端に叫ぶのやめるエクセレン。
「先ほどの悲鳴は、ここに人を呼ぶためですか。エクセレン、やはり貴女は喰えない女ですね」
「どういたしまして。でも半分は本気だったんだけどな」
嫌悪感の表れか、エクセレンの体はぷるぷると小刻みに震えていたが、まぁ、気持ちは分からんでもない。
もし、自分に似た外見の同性に色目を向けられたら……想像するだけで寒気が奔る。俺とキョウスケが、欲情し合って見つめ合う構図など、誰も見たくはないだろう。いや、もしかしたらいるのかもしれないが……。
第一、リバースが本当に女性である確証はない。

人間をそういう対象に見ているかどうかも、定かではない。
おそらくはポーズ。俺たちをかく乱するためか、ただ単に遊んでいるだけか、どちらにせよ相手にする必要はない。

「リバース。エクセレンを離せ」
「あら、言いませんでしたか？　お断りです、と」

リバースは、小牟の指先をエクセレンの腹に沿わせた。んっ、とエクセレンから吐息が漏れる。どうやら、リバースは反応を楽しんでいるようだ。

「ふざけるなよ、貴様」
『マスターを……エクセレンを離せ！　貴様の相手は俺とミスターのはずだ！』
「ふふ、元の姿に戻っても、木偶は木偶ですね。私は遊んであげると言ったのです。正々堂々戦ってあげるとは、一言も言っていません」
『なっ……貴様ァ！！』

ファントムの電子音声が怒りに震えていた。リバースからは乾いた笑い声。こちらを見下した、あからさまな嘲笑だった。
その手には乗らんぞ。
神経を逆なでし、俺たちが安易な行動に出るのを奴は待っている。単純な心理戦だ。念動フィールドや「ゆらぎ」による瞬間移動を持っているリバースが、あえて俺たちの前に姿をさらし、挑発してくる。
言葉通り、奴は遊んでいる。そうとしか、俺には思えなかった。
しかしエクセレンを盾に取られて、俺たちは安易に動けない。

「ああ、そうそう」

リバースが誰にではなく言った。

「キョウスケ・ナンブの過去生を見た貴方なら分かると思いますが、私は他人の体を自由に使うことができます」

「……それがどうした？」

既に周知の事実だ。

「筋肉も能力も自在に使うことができます。それも普段、生物がリミッターをかけてセーブしている力も自由にできる。これがどういうことか、貴方がたには分かりますか？」

人間はもちろん、どんな生物も、肉体の能力を普段は脳によって抑制されている。特に人間は、日常生活で最大筋力値の２０％ほどしか使用していない。１００％の能力を使えれば、人間の筋力は爆発的な力を引き出せるのだ。

理論上は、だ。

もし常時１００％の能力で筋肉を使い続ければ、酷使された筋細胞は大ダメージを負い、回復が間に合わなくなる。だから常時は使えない……リミッターをかけられセーブされている。

能力も同じだ。

１００％の力を酷使すれば、代償は必ず使用者に跳ね返ってくる。だがリバースは自分の肉体がない ――― 精神寄生体だ。リバースがリミッターを自在に外せる、ということは……

「いつでも、火事場の馬鹿力がだせる……ということか」

「しかも、私はこの体が壊れても、別に痛くも痒くもありません」

俺の脳裏に悲鳴を上げる小牟の姿が浮かんだ。限界以上の力を引

き出し続ければ、いつか器は壊れる。例え生きて小牟を取り返せたとしても、下手をすれば二度と戦えない、最悪廃人になりかねない。

「……ゲスが」

「いいえ、私は神です」

『シット！　もう我慢できないぜ！』

ファントムが動いた。グラン・プラズマカッターの切っ先を、真っ直ぐにリバースへ向け、地面を蹴って突撃を敢行した。

エクセレンの傍に立つリバースだけを突くつもりだ。斬撃の線よりも突きの点の方が、攻撃面積も狭く、威力も高い。

グラン・プラズマカッターの出力と、ファントムの重量と加速が合わされば、念動フィールドだって突き抜けるだろう。

『幕引（ショーダウン）きだ！』

数秒も経たない内に決着はつく。カッターをリバースに突き立てて終焉……そんな安易な期待は、小牟の体の動きによって頓挫した。

小牟の体が、空いていた手を、ファントムに向けていたからだ。

手のひらに膨大な妖力が集まっているのが瞬時に分かる。

念動フィールドではない。

あれは、小牟の得意技　――

「いかん！　避けろ、ファントム！」

『なにっ！？』

――　俺の声でファントムが制動をかける。

それが良くなかった。

小牟の掌から妖力が開放され、一瞬足を止めたファントムが、大きな球状の結界が覆われた。

「ふふ、鬼門封印！」

小牟の開かれていた掌が、グッと握り締められる。と、同時――

『ぐあああああああぁぁぁぁぁぁぁっ！！』

――ファントムを覆っていた結界が圧縮された。小牟の握った拳の形に、結界がまるで握り締められたゴムボールのように歪み、中のファントムを圧殺しようとする。

３ｍはあるファントムの巨体が結界に持ち上げられた。鋼鉄製の骨格がひしゃげていく音が耳に届く。カメラアイを保護しているゴーグルが砕け、中の双眸が剥き出しになった。ファントムが、まるで子どもに握り締められ動けない人形のように見えた。

「鬼門封印」は本来相手の動きを封じるだけの術だ。殺傷能力は少なく、小牟が相手の動きを止め、俺が留めを刺す。必殺、そのための始動の術でしかない。

『ミ、ミスタ！　な、なんとかしてくれ……！』

「ファントム！　くっ、止めろリバース！」

ゴキンッ、とファントムの左腕があり得ない方向に曲がる。信じられない出力だった。

明らかに「鬼門封印」の威力が常軌を逸している。それもそのはず。小牟の顔には数本血管が浮き上がり、額から滝のように汗が噴き出していた。目が吊りあがり、血走っている。明らかに限界を超えた能力の行使……オーバーロードだ。

「もう、我慢できん！」

小牟とファントム、2人が倒れるのは時間の問題だ。放置するわけにはいかない。多少強引でも、リバースの操る小牟に「五行封印」を叩き込み、動きを止めなければ！

分の悪い賭けは嫌いだが、ここは動くしかなかった。

俺はリバースに向かい駆け出しながら、腹で大きく息を吐き、吸い込んだ。丹田に集めていた霊気を増幅させる特殊な呼吸法だ。さらに増幅させた霊力を振るわせるイメージで、経絡を通じて末端――俺の拳へと送る。

増幅させた霊力を、体内を網の目のように走る経絡を通じて振動させ、波紋に変えて敵に打ち込む。単純に塊として霊力をぶつけるよりも、微細な波紋の方がより早く深く広く、敵に霊力を浸透させることができる。

要するに、通常の打撃よりも威力が高く、全身に霊的威力を発揮する打撃法――それが有栖流奥義「霊波紋」だ。

右拳に震わせた霊力を込め、リバースに向かった。

「霊波紋、金気、山吹き色の霊波紋疾走（サンライト・イエロー・オーバードライブ）……！」

さらに五行の1つ、金気へ霊気を変換した。他の火、水、土、木と合わせて5つの気を敵に叩き込み、相乗効果をもって敵を封印する。それが裏奥義「五行封印」だった。

リバースの操る小牟の体は「鬼門封印」を行っている最中だ。隙だらけ。やるなら今しかない。後で小牟に謝罪することを心に決め、拳を振るう。

「ふふ、あまい」

「え？　きゃ……っ！」

だが突如リバースが、肩を掴んで捕まえていたエクセレンを突き

飛ばした。
束縛から解放されたエクセレンが、たたらを踏んで俺の方に飛び込んでくる。いかん！
リバースとの間の壁になったエクセレンを抱きとめる。霊波紋は一時中止にせざるを得なかった。
『は、早く……！　ミスターッ！！』
ファントムの鋼鉄製のシャフトが、連続してへし折れる音が響いた。声も緊迫していて、振り返らなくても時間に余裕がないことを伝えていた。急がなければいけない。
「ちょっ、零児ちゃん！」
悪いとは思いながら、エクセレンを乱暴に押しのける。彼女が尻もちをつく音が聞こえたが、今は小牟の「鬼門封印」を止める方が先決だった。
俺は再び霊波紋を拳に宿し、リバースに向かう。
「おっと、それ以上動かないでください」
が、リバースの言葉と、彼女が手に持っていた金属物を見て、俺の足が止まった。
エクセレンを突き飛ばし、空いた小牟の手に拳銃が握られていた。退魔の性質を持つ銀のペインティングした、平均サイズの自動拳銃だった。
「これがなにか、流石にお分かりになりますね？」
当然だ。行動を共にする小牟の愛用武器、名前は……

「シルバー」

退魔用の銀の銃弾を撃ち出す「森羅」特製の特殊自動拳銃だ。人間相手にはただの拳銃と銃弾でしかないが、退魔の波長を持つ銀の銃弾は、妖怪にとっては傷の回復も遅延する劇物と化す。

一撃必殺とはいかない。しかし威力は十分で、敵の動きを止め、次の攻撃への繋ぎなどに小牟が多用していた武器……それが退魔用自動拳銃「シルバー」だった。

それを、リバースはトリガーに指をかけて揺らして見せる。

「貴様、そんなものをどうする気だ？」

「分かりませんか？　異分子よ。やはり、貴方は案外鈍い人間のようですね」

猛烈に嫌な予感が全身を駆け抜ける。

「こうするのですよ」

リバースはシルバーの銃口を小牟の頭……こめかみ部分に押し付けた。

「なっ……！？　貴様、正気か！？」

「正気？　貴方は誰に向かって、その言葉を投げかけているか理解しているのですか？　私はリバース。このエリアの神です。正気もなにも、私の行いは、エリアでは絶対的に正しいのですよ？」

あまりに傲慢なリバースの答え。だが言葉とは裏腹に、小牟の表情は引きつっていて汗が大量に噴き出している。リバースはそんな小牟に容赦なく銃口を向け、トリガーに指をかけさせていた。

「言ったはずです。こんな体の1つや2つ失っても、私は痛くも痒くもありません。それになんのために、オータムを返してもらったと思っているのですか？」

「貴様……初めから、こうするつもりだったのか？」

歯がゆい……罠はあると思っていたが、予想の斜め上をいかれた感じだった。

リバースは一瞬だけ俺から視線を外した。その先には尻もちをついたままのエクセレン。しかし、リバースはすぐに俺を見据えて言った。

「それに……ふふ、まぁ、貴方がここに来た時点で、私の勝ちは揺るがないものだった。そういうことです。あの木偶がダメになるのも時間の問題でしょうし……」

『くっ……こ、このビッチめ……！』

堅牢な装甲にヒビが入る。いかん！　限界が近い！

「ファントム！」

「そして、この体が限界を迎えるのも時間の問題……」

小牟のこめかみに銃口を捻じり当て、リバースがいけしゃあしゃあと言った。

額に浮き上がっていただけの血管が、「鬼門封印」をかけている腕全体に出現している。まるで限界まで張りつめられた弓のようだった……なにか余計な力が1つでも加われば、それだけで折れて、砕けてしまう。そんな印象を小牟から受けた。

おそらく小牟の限界はそれほど遠くない。

「さらに、貴方もこうすれば動けない」
銃口をぐりぐりを嬲るように押し当てる。
「詰みです」
「貴様……卑怯だぞ……ッ！」
「卑怯？　これは妙な事を言う。私は最初に言ったはずです。遊んであげる、と……ふふふ、貴方は無力、結局なにもできはしないのですよ」
ばんっ、と響く銃声の音まねをして、リバースが口元を歪ませた。
反射的に肩が震えてしまった。情けない事に心臓が跳ね上がり、冷や汗が噴き出す。動けない俺を見て笑うリバース……言葉通り、奴は俺の反応を見て楽しんでいた。攻撃できず、噛みしめた奥歯の軋む音が頭に響いた。
「ほら、もう時間がありませんよ？」
リバースの言葉に呼応して、
『ぐっ……あ、あああぁっぁぁぁぁっ！！』
ファントムの装甲が割れた。装甲で保護していた、電気信号を伝えるためのケーブルや関節駆動部のアポジモーター……それらの脆弱な部分が、「鬼門封印」による圧力で大きく潰れ、凹む。見えない巨大な手で握りつぶされているように、ファントム腕部と胴体部分が小さく圧縮されていく。
まだ持つ。今、止めればだ。
「やめろぉ！」

反射的に体が動き、

「はい、動かない」

「くっ……！」

ぎらつく銀の光に体がすくむ。

俺が動けば小牟が……！　しかし動かなければファントムが……！

「言ったでしょう？　詰みです。貴方の負けです、異分子よ」

……悔しいが、手を出せない。

俺にある選択肢は2つ。このまま何もせずにいるか、それとも危険を承知で反撃に転じるか、だ……しかし前者を選べば確実にファントムが、後者なら小牟が助からないだろう。いや、どちらを選んでも2人とも犠牲になる可能性が非常に高かった。

「どうですか？」

俺の眼光など眼中にない。リバースはただ笑いながら訊いてくる。

「今、貴方の心には、私に対する憎しみが沸いていますか？　それとも、自分の不甲斐なさに、悔しさに焼かれているのでしょうか？　怒り、悲しみ、なんにせよ、今の貴方は負の感情に支配されかかっている。

当然ですね。貴方は人間なのだから、大切なモノを奪われそうになれば、そう反応するのが普通でしょう」

「……」

「いいですか？　戦いの果てには、必ずそういった感情が生まれるものです。得てして、そういう感情が悲劇の引き金になったりする

ことが多いのです。
だから、人は忘れなければいけない。そういった負の感情を。ただ、毎日の平穏と幸せを、享受し続けていればそれでいいのです」

リバースは俺に答えなど求めていなかった。
奴の中には既に絶対的な答えがあり、エリアも破界も再世も、そのための単なる手段に過ぎないのだろう。なら初めから訊くな、と言いたい気分だった。
奴に絶対的なものがあるように、俺にだって譲れないものがある。

「黙れ。小牟は返してもらう。ファントムも助ける。貴様も倒す。それで終わりだ」
「あら、貴方は見かけによらず熱い人なのですね。ですが、もう、遅い」

リバースの声が届いた途端、

『が、ガァ ――― ガガガピアァァァッ ――――― ッ！？！』

ファントムの声に壊れたラジオのようなノイズが走る。
瞬間、小牟の握り拳の形と同じに、ファントムの胴体が押しつぶされた。頭部と脚部を残して、胴体が超圧縮されたスクラップと化す。
直後、ファントムの体は、空中で轟音と共に大爆発を起こした。

「ファ、ファントム ――― ッ！！」

目を開けているのも辛い。それほどの爆風が俺の体を襲った。
次いでファントムの体を成していた破片が校庭に深々と突き刺さっていく。爆炎も火の粉となって飛び散るが、それが俺の体を焼く

ことはなかった。
リバースが「鬼門封印」で熱のほとんどを押さえつけ、相殺して消していたからだ。自身の宿る小牟の体に被害が及ぶことを避けるためか、熱を相殺し終えたとき、「鬼門封印」の結界は消え去っていた。そして、空中から何か黒い塊が降ってきた。
角ばった塊は校庭に落ちると、鈍い音を立てながら転がっていく。徐々に勢いを失った塊は、小牟の体のそばで止まった。
塊は、ファントムの頭部だった。

『ミ……ミスタ……』

砕けたゴーグルの下に覗く、人の目のような2つ目のカメラアイ。それを明滅させながら、ファントムが弱々しく声を上げていた。

『たのむ……まもって、くれ……彼女を……』
「彼女？　エクセレンのことか！」
『初めて……温もり……くれた……』
「うるさいですね」

リバースがファントムの頭を踏みつけた。その瞬間、俺の中で、音を立ててなにかが切れた。

「リバァァァスッ！！！」

頭が灼熱し、地面を蹴る。

「あら、そんなに大切ですか？　この木偶が？」

リバースがファントムの頭部を蹴り飛ばした。バスケットボールより少し大きいファントムの頭部が、がんっごんっ、と音を立てな

がら地面に落ちる。
もう、許せない。リバースの使っている体が小牟のモノだとしても、もう、許せなかった。
俺はリバースを倒す。
拳を固め、滾る熱さに背中を押され、俺は駆け出した。

「はぁ　――――ッ！」

奴だけは俺が倒す。その一念を込めて、霊力を練り、波紋に変える。
波紋を拳だけではなく、足にも伝達させ、放出した。足底が地面を蹴る瞬間に霊波紋を出力し、反動で擬似的な脚力を得る。
シルバーの銃口は、ぴったりと、小牟のこめかみに当てられている。トリガーが引かれるよりも早く、霊波紋をリバースに叩きつける。
それだけを考え、俺はしゃにむに走った。
ぴくりと、小牟の指先が動いた。

「させるか！」

走れ！　リバースが、小牟に引き金を引かせるよりも、速く！
間に合え！　俺は全身全霊の霊波紋を拳に乗せ、リバースに向け真っ直ぐに突き出した。
小牟の指の動きより、俺の拳の方が一瞬早い。

「取ったぞ！」

勝利を確信した俺の拳は　――

「ふふ、何度言わせれば気がすむのです？」

「っ！？」

――なにもない空中を、虚しくまっすぐに突き抜いていた。

「貴方は私には勝てない。この小牟という異分子の体が、私の手にある限り」

リバースの声が背後から聞こえた。

無我夢中で突いて、拳に隠れていたが、さっきの一瞬、小牟の体が「ゆらい」でいたように思う。……やられた。例の瞬間移動で、俺はリバースに背後を取られていた。

急いで小牟の体を視界に収めると、

「ひーん、また捕まっちゃった……！」

エクセレンが尻もちをついたまま、リバースに頭を掴まれていた。先ほどと同じ力を使われているのか、エクセレンは身動きが取れない様子だ。リバースに操られている小牟の体は、「鬼門封印」を解いた影響か、浮き出ていた血管はもう見えない。だが汗は相変わらず噴き出していて、限界を超えた負荷が体に影響を残していることを物語っていた。

リバースは意に介さず、シルバーをこめかみに押し付けたまま言う。

「異分子よ、諦めなさい。エリアの破界はもう間もなくです。例え、このエリアの消滅に巻き込まれ肉体を失っても、私が魂を回収し肉体を与え、新たな命をさずけましょう。そして生き続けるのです。この永遠に続くエリアで、繰り返し、何度でも」

「それは……生きているとは言えない！」

俺はリバースとの距離を詰めるため、霊波紋を足から噴出させて地面を蹴り、加速した。

「はぁ……つくづく、往生際が悪いですね」

リバースが小牟の手を、疾走する俺に向けて突き出させた。

すると、全速力で壁にぶつかったような衝撃が俺の体を襲う。衝撃は真正面 ――リバースからだ。見えない壁に俺の全速力は相殺され、弾き飛ばされた。

それがリバースの念動力だと気づいたのは、１０m以上離れた位置に飛ばされ、着地した後だった。

「では、諦めがつくよう、私が協力してさしあげましょう」

リバースが言うが早いか、小牟は口を大きく広げ、シルバーの銃口を喉へと向けた。

銃口を口にくわえて引き金を引けば、確実に脊椎や生命活動を担う脳幹が確実に破壊される。頭蓋骨の婉曲で弾が偶然それることもあるこめかみと違い、ほぼ１００%、撃てば、即死だ。

「や、やめろ！」

――悲しみ　絶望　すべてを抱えて　エリアの最後をみるのです

すべてが終わった時　異分子よ　すべてを忘れ　貴方もエリアの一員となる

リバースの念話が頭に響く。

――安心なさい　この体も　次のエリアで　再生させてあげますよ

俺は走った。

１０ｍ……たったの１０ｍ……俺と小牟の距離はたった１０ｍだ。

走ればすぐの距離なのに、風景の動きがやけにスローモーションに見えた。俺の動きもだ。たった１０ｍなのに、橋が壊れ、絶対に渡ることのできない川で隔てられている。そんな気分だった。

ゆっくりと、小牟の指が動くのが見えた。

――すべては　平穏なる　世界のために

「やめろおおおおぉぉぉぉっ！！！」

平和な昼下がり、なんの変哲もない学校で、１発の銃声が響き渡った　――……

鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＩＮＡＬ　～ソウル　ゲイナー　３～（後書き）

次で第２話は終了の予定です。

鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＡＮＡＬ　～ソウル　ゲイナー　４～

昼休みに突入し、学生の空腹とおばちゃんたちの匠の技がぶつかり合う、都会の通勤電車の中のように人で溢れ返っているジェネ高の食堂で。

俺は、確かに、校舎の外でなにかが爆発する音を聞いた。

「なんだ？」

「どうしたんすか？　俺の、奢りのキツネうどんが冷めちゃいますよ」

麺をつかんだ箸を止めた俺に、何気にうどんの出所を強調しつつ、アラドが怪訝な表情を向けてきた。

俺、タスク、そしてアラドは昼食を取るため、ジェネ高の食堂の長机の端に陣取り、値段以上の味を叩きだしているおばちゃんたちの料理に舌鼓を打っていた。

俺は賭けポーカーに負けたアラドが奢ってくれた大盛りキツネうどん、ジューシーな油揚げの汁がカツオで出汁を取ったつゆと混じり、絶妙な甘辛さを堪能し。

タスクはカツカレーにサラダとオレンジジュースのセットで、スパイシーな香りが見ているだけで、カレーにすれば良かったかと思わせるほど美味そうに食し。

アラドは麺３玉入り（おばちゃんのご厚意）のかけそばを既に平らげ、満腹にならない腹を水で膨らませていた。

そんな時だった。

俺の耳に、なにかが爆発したような音が届いたのは。それだけで

なく、校舎そのものが少し揺れたようにさえ、俺には感じられた。

「2人とも、外から大きな音が聞こえなかったか？」

「音？　いいえ、ちっとも」

「大方、他の生徒が大声あげただけじゃないですか？　食堂って騒がしいし」

なぁ、と顔を見合わせて応えるタスクとアラド。俺はその答えに違和感を感じずにはいられなかった。

今の音は間違いなく爆発音だ。映画の中で自動車が横転し、大爆発するときのような音……いや、どちらかと言えば過去生の中で見た、ＰＴが爆散したときの音に近い気がする。

食堂は喧騒の真っただ中にあるが、その中で俺に聞こえた爆発音に、誰１人として反応しないのは絶対におかしい。生徒たちは平然と会話を交わし、食事を続けている。それはジェネ高における、昼休みの食堂のごく一般的な光景だった。

ジェネ高の日常風景……しかし異様にしか感じることができない。

「それよりキョウスケさん、うどん、いらないんだったら俺にくださいよ。かけそばだけじゃ俺腹いっぱいにならなくって……」

「たくっ、アラド、お前は喰いすぎなんだよ。麺３玉だぞ、麺３玉。普通は腹いっぱいどころか完食だってできねえよ」

「だってよう……普段は、ゼオラが弁当持ってきてくれるんだぜ？　重箱で」

タスクもアラドも呑気に雑談していた。

俺の気のせい……なのか？　いや、そんなはずはない。

「あれ？」

水をがぶ飲みする手を止めて、アラドが俺の顔を見た。

「キョウスケさん。キョウスケさんって、目元にタトゥーなんていれてましたっけ？」

既視感が俺の頭を揺さぶった。

「なん、だと？」

「あぁ、本当だ。気づかなかった」

アラドの言葉にタスクが続く。

「新しいファッションか、なにかですか？　失礼だけど、全然似合ってないですよそれ。アシメみたく、右の目元にしかいれてないし――」

「おい！」

「え？　もしかして怒っちゃいました？」

もはや食事どころではなかった。

俺はうどんを器に戻すと箸を置く。懐からスマートフォンではなく、2，3世代前の折り畳み式の携帯電話を取り出して、タスクに押し付けた。

「タスク、俺の顔写真を撮ってくれ」

「え？　いいですよ。ファッションチェックですか？」

微笑を浮かべてタスクが携帯を操作すると、フラッシュが俺に向けてたかれ、盗撮防止用の撮影音が鳴る。

はい、とタスクに渡された携帯の写真を見た。

右の目元に、くっきりと、紅い水玉のタトゥーが写真には写って

いた……ベーオウルフが操っていた俺に浮かんでいたそれが、半分だけだが、確かに現れている。
ふと、

――……奴か……

頭に声が響いた
奴の……ベーオウルフのだ。

――すべては　静寂なる　世界のために……

居ても経ってもいられず、俺は席から立ち上がった。
勢い余ったせいで、座っていたパイプ椅子が倒れ、鉄製の支柱が金属音を響かせる。

「なんだなんだ？」
「うるせえなぁ、静かにしろよ」

食堂内から俺に顰蹙の声が上がっていた。
さっきの爆発音には反応せず、俺の起こした些細な雑音に反応していた。やはり妙だ。不可思議すぎる。
奇行にでも見えたのか、タスクもアラドも目を白黒させていた。

「ど、どうしたんですか？　腹でも痛いんですか、それなら言ってくれれば　――」
「タスク、アラド、食事は終いだ」

俺はタスクの声を遮り、半分ほど残ったうどんの器をトレイに乗せて持ち上げる。

「校舎の外を見に行くぞ。急げ」

「え？　でも、俺、まだカツ喰ってねぇ……」

「そんなもの、後でいくらでも食わせてやる！」

「は、はい！」

俺の怒号に肩を震わせ、食い残したカツカレーと空いた食器をトレイに乗せ、席を立った。アラドも首を傾げながらもタスクに続く。俺もカツカレー食わせてもらえるの？　なんて戯言を言っていたが、もうこの際だ、２つ返事で了承してやると、現金にも足を弾ませながら俺に付いてきた。

俺たちは急いで下膳して、食堂を後にした。

ジェネ高でなにかが起こっている。それだけは間違いない。

手に滲んだ汗を服で拭い取ると、俺は２人を引き連れて校舎の外を目指した。

●◇

病院内に慌ただしい足音が響き渡る。

「先生！　アサキム先生！　大変です！」

「なんだい？　騒々しいね」

大声を上げて診察室に飛び込んできた看護師に、診察を言えて休憩時間に入っていたアサキム・ドーウィンは、眉を上げて応えていた。

若い女性の看護師が息を切らし、椅子に座っているアサキムに言う。

「大変です！　患者が！　患者さんがいなくなりました！」

「なんだって？　まったく、何号室の誰だい？　せっかくの休憩時間に、余計な手間をかけさせてくれるね」

「そ、それが……」

億劫そうに腰を上げるアサキム。対して若い看護師は、目を泳がせて言い淀んでいた。自分が受け持っていた患者が姿を消し、少々パニックに陥っているのだろう。

若い内は、想定外の事態に見舞われると、すぐに混乱に陥ってしまいがちだ。イベントがあった時、冷静でいられるかどうかで、器の大小は見極めることができるが、目の前の看護師はまだ若く、そこまで求めるのは酷というモノだ。

どうせ、家が恋しくなって抜け出したのだろう。

アサキムがタカをくくって聞くと、

「あ、あの部屋の患者さんです！　意識不明だった……あの患者さんです！」

「なんだって……？」

若い看護師からは予想もしなかった答えが返ってきた。

「あの部屋、というと……あの部屋かい？」

「は、はい！　あの部屋です！」

「ふむ……妙だな。分かった。すぐに向かうとしよう」

アサキムは黒衣を翻して診察室を出る。若い看護師をなだめながら、彼女の言った「あの部屋」へと足を運んだ。

スライド式のドアを開け、大部屋ではない、個室の中でへと入っていく。

部屋の窓が全開きにされ、風でカーテンがはためいていた。

患者が寝ていたはずのベットはもぬけの殻。掛布団はベットから落ち、傍に点滴棒が倒れて、点滴の中身が床にぶちまけられている。患者が点滴用に確保していたルートを引き抜いたのだろう。白いベットシーツには小さな血痕と、血管内に入っていた点滴ルートの先が残っていた。

「せ、先生！　ど、どうしましょう！」

「落ち着いて。まず院内を探すんだ。まだいるかもしれない」

「は、はい……！」

アサキムの指示に従って若い看護師が部屋を飛び出して行った。

ナースステーションに向かい、手の空いている者で患者を探すことになるだろう。

だが……おそらく、いや、絶対に患者は見つからない。アサキムには理解できていた。この病室のベットで寝ていた男は、絶対に動くことはないはずだった。

動くはずのない人間が動き、姿を消した。

アサキムの口が三日月のように吊り上る。

「まさか……これは予想外だよ。今回のエリアは一味違うね」

これは、もしかすると、もしかするかもしれない。
アサキムは悪そうに見える笑顔を浮かべながら、患者が寝ていたベットに手を当てた。
冷たく、ひと肌の温もりは感じられない。つまり、患者が姿を消してから、相当に時間が経過している証拠だった。

「さてはて、一体どうなることやら？」

アサキムはその部屋を後にした。
部屋の入り口には部屋番号と、寝ているはずだった患者の名前が書かれている。

【アクセル・アルマー】

窓から差し込む強い風で、カーテンが身を捩じられながらばたばたと揺れていた。

◇○

ジェネ高の校庭に1発の銃声が冷たく響き渡り、シルバーの口から硝煙とともに吐き出された凶弾が、小牟の頭部を撃ち抜く。
脳を守る骨がザクロのように砕け、血と肉が安い花火のように飛び散る。力を失う小牟の腕。鈍い音を立てて、体は崩れ落ちる ――
――そんな絶望的なヴィジョンが、彼女に向かって走る俺の脳裏をかすめていた。
既に小牟の指は動き、シルバーは発砲されていた。銃口は小牟の

口にくわえられ、確実に自殺できる体勢で、引き金は引かれたのだ……

「……馬鹿な」

リバースが小牟の口を動かして驚愕していた。

銃弾は確実に撃ち出された。ただし小牟の頭にではない。強くなってきた風に薄雲が流されていく青空に向かって、彼女の手はまっすぐに突き出され、トリガーを引いていた。

1人の男が、小牟の細い手首を空へと捻じり上げている。パーマネントのかかった赤い髪の下、少し眠そうに垂れがちな目の中で、意志の強そうな瞳がリバースを見下ろしている。

赤髪の男が、エクセレンの傍に立つ小牟の手を取り、寸前のところで射線を逸らしたようだった。

嬉しい誤算。もろ手を上げて歓迎せざるを得ない。

「なぜ……なぜ、貴方が動けるのです？　貴方の魂は私が既に回収したはず……」

魂？　回収？　知らんな、そんなものは」

俺同様、驚きを隠せないリバースの声に、男 ―― アクセル・アルマーは淡々と返していた。

「難しい御託など必要ない。俺は借りを返しに来た。ただそれだけだ、これがな」

「ア、アクセル？　本当にアクセルなのか？」

俺の声に対しアクセルは一瞥し、

「……誰だ、貴様は？　似ているがベーオウルフではないな」

すぐに視線をリバースに戻した。
男は、先日リバースに体を操られ、意識不明で病院に担ぎ込まれたはずのアクセル・アルマーだった。見間違えるはずもない。かつて、俺がエンドレスフロンティアで共に戦ったことのある仲間だ。
だがアクセルは俺のことを覚えてないと言う。
ただ単に忘れているだけなのか、それとも目の前のアクセルは、俺の知るアクセルとは似ているだけの別人なのか……あるいは、別次元の同一人物という線も着せない可能性だ。
だが、まぁいい。
今、あえてアクセルの出自を確かめる必要性は低い。
問題なのは、最初のリバースとの遭遇戦後、感じることのできなかったアクセルの魂の波長が戻ってきていることだった。

「ありえない」

リバースの声が揺れている。

「確かに、私は魂を回収しました。
一度回収された魂は、次のエリアまで戻ることは決してないはず……なのに、なぜ、貴方から魂の力を感じるのです？　なぜ、動くことができるのです？　おかしい。理解不能です。今まで、このようなことは一度もなかった」
「だが、目の前で起きている」
「生意気ですよ、貴方」

リバースの語気が荒くなる。
肉体は魂の器、「森羅」のエージェントにとっての常識だ。肉体と魂の間には命綱のようなものが存在し、もし魂が肉体を離れ、命綱が完全に切れてしまえば、肉体が生きていても死を意味するし蘇

ることもできない。
昨日のアクセルは、魂の波長が消え、肉体と魂の線が完全に切れていた。つまり、霊的な意味で死んでいた。
ゾンビという魂を持たない動く死体は存在するが、今のアクセルは生気に満ち満ちている。それは魂が肉体に戻っている証拠だった。
「魂を獲得（ソウル ゲイナー）せし者……か」
自分の呟きに、俺は失笑していた。
普通はありえない。だがありえないことが目の前で起きている。認めなければいけない。
「貴様、リバースと言ったか？」
小牟の腕をつかんだまま、アクセルが言う。
「貴様に体を乗っ取られて思い出したぞ。俺がベーオウルフにこだわる理由、そして俺が生きていた過去の世界のことを、な」
「過去生を？」
「このエリアに比べて、俺の過去はあまりにも凄惨な世界だった。地球への異星人の侵略、人類同士の戦争、その殺しあいの引き金を引いたのが俺の組織シャドウミラー。まるでテレビゲームのような非現実的な戦いの繰り返し。だが戦いの中でこそ兵士は輝き、人類は腐敗することなく存続することができる。
ヴィンデルという男の思想に賛同した俺は、戦って、戦って戦って戦い抜いて……あの化け物が生まれる原因を作ってしまった」
「あのー、私のことも忘れないで欲しいんですけどー？」
リバースに拘束されたエクセレンがおずおずと自己主張していたが、リバースも俺も相手にしない。

「ベーオウルフの女、か」

ただアクセルだけが彼女に反応していた。

「あのとき、貴様が死んでいなければ、ベーオウルフは変貌することはなかったのかもしれんな……いや、過ぎたことを仮定しても意味はないか……」

「ア、アーちゃん？　どったの？　今日のアーちゃんなんだか変よ……」

「なに、気にするな」

困惑するエクセレンを置いてアクセルが続ける。

「お前たちへの贖罪。エリアでの俺の命は、きっとそのためにある。そういうことなのさ、これがな」

「愚かな、そして理解不能です。アクセル・アルマーよ」

リバースがアクセルの言葉に口を挟む。

「貴方の命は、過去生の中で死んだ貴方の魂を私が回収し、人工子宮ウームで生み出した再生人間をベースに蘇らせたものです。いわば作り物。貴方、いえ、エリアの住民はすべて、私が再生させた作り物の命なのですよ。その命を使って罪滅ぼしですか？　無意味です。理解不能です。本物の貴方は既に亡くなっているのですから」

「なんとでも言うがいい。これは俺なりのけじめなのさ」

「……ふふ、すべてを忘れ、ただ平穏を享受していればいいものを……」

語気を強めるリバース。同時に小牟の体が陽炎のように「ゆらぐ」。腕を掴んでいるアクセルには影響を与えず、操っている小牟の体だけを「ゆらが」せ始める。

まずい、リバースの「ゆらぎ」は瞬間移動の前兆だ。おそらく、もっと早く跳ぶことはできるはず。しかしリバースはあえて姿を「ゆらが」せ、俺たちに見せていた。

「魂を回収したはずの貴方が、どうして動いているのかは私には分かりません。ですが、もういいでしょう。もう一度、魂を回収すれば済む話です。ふふ　――」

笑い声の残渣を残し、小牟の体が消えた。

アクセルの手の中から小牟の腕はすり抜け、体の自由の戻ったエクセレンはよろけて、尻もちをついたまま地面に手をついて座っていた。

「気を付けろ、アクセル！　リバースは何処から出てくるか分からんぞ！」

次のリバースの手はなんだ？

小牟の「鬼門封印」かシルバーによる銃撃か、それともリバース自身の念動力を使って攻撃してくるか……前からか後ろからか、空からか……敵の手が読めない。小牟が消えた時点で、俺たちは後手に回っていた。

敵の姿が視界に入らない。これはやはり圧倒的に不利と言えた。

「ふん、しゃらくさい」

アクセルが拳を握りしめ、手の皮製のグローブが擦れる音が聞こえた。

拳を構えたまま深い呼吸を始めるアクセル。息を吸えば腹がへこみ、吐けば膨らんでいる。空手の息吹や俺が霊波紋を練る際の呼吸に似ていた。呼吸をつづけるうちに、アクセルの中で気が強くなっていくのが俺には分かる。

あまりに強い気が体表面に滲み出し、薄ぼんやりとした青いモヤが体から立ち上っているように見えた。

「俺がエリアでも力を求め続けた理由……今なら、それも理解できる」

闘気。そう表現しても差し支えないほどの気迫が、アクセルから放たれ、周囲の空気を震わせる。

アクセルは闘気を爆発させず、体に留めたまま、すぅと目を閉じた。

「俺は償わなければいけない。ベーオウルフ……いや、キョウスケ・ナンブに。だから力を求めた、奴を止めるための力を」

閉眼したアクセルが静かに息を吐くと、彼に停滞していた青い闘気が体の表面を伝って、右腕へと収束していった。

右腕に集まった闘気が大きく青い炎のように揺らめいている。アクセルが数回、深く息を吸い吐く。彼の動作でさらに気が練られたのか、青い闘気の揺れ幅は徐々に小さくなり、右腕に薄皮一枚で張り付く金色の闘気へと昇華していた。

「蒼髭流格闘術（ソウシリュウ）、奥義、玄武金剛弾 ――」

カッと、アクセルが目を見開く。だが同時、俺は彼の背後に音もなく小牟の姿が現れるのを見た。

アクセルの背後１ｍ以内という至近距離で、小牟の構えたシルバ

ーの銃口が彼に向けられていた。小牟の口から小さく、リバースの笑い声が漏れ、引き金の指が動こうとする。

「アクセ　――」

口が動く。アクセルに危機を告げようと。

小牟の指が動く。引かれるトリガー　――　しかし、リバースの操る小牟の動きよりも速く、アクセルは腰を軸にして背後へと振り返り、金色に輝く右腕を弾丸のような疾さで動かしていた。

「でぃやあぁぁぁぁ！！」

「な　――　ッ！？」

アクセルの拳が小牟の腹に深々と突き刺さる。

小牟の小さな体が浮き、威力が腹から背中へと突き抜けて、空気を揺らす金色の衝撃波となって体の外へ出るのが見えた。一拍おいて、小牟の体が、アクセルの拳からバネで弾かれたパチンコ球のように撃ち出され、釘ではなく地面にぶつかって跳ねながら飛ばされる。

チャイナドレスを傷と砂まみれにして、１０ｍ程飛ばされて小牟の体は止まった。

手を付き、体を震わせながら起き上がる。少量の血を吐き、小牟の顔は苦痛に歪んでいた。

「よ、予想外です」

小牟の口を通じてリバースの声が漏れる。

「まさか転移先を読まれるとは……いえ、私に攻撃が届くなんて……ただのエリアの住民が神に手を上げるなんて……理解できない。

私の再生させた命の分際で……まさか、私が体を操った影響が、アクセル・アルマーに残っているとでも……？」
「知らんな。そんなことは」
拳を構えたまま、アクセルが言った。
「他の何者でもない。俺は俺だ、これがな」
「ふ……ふふふ、我を通すために、神にすら手を上げますか。いいでしょう。後悔させてあげますよ。この私に手を上げたことをね」
リバースの言葉と裏腹に、小牟の体は立ち上がることができなかった。
膝が震えている。膝に手をついて勢いをつけて立ち上がろうとすればできたが、保持できず膝をすぐに付いてしまう。
アクセルの一撃で、リバースに酷使された小牟の肉体は、限界を迎えたように見えた。
「まったく、役に立たない体ですね」
リバースは冷たく吐き捨てる。
「まぁ、いいでしょう。どの道、この体の役目はもう終わりです……」
「なんだと!?　どういう意味だ!!」
聞き捨てならないセリフに、俺は反射的に声を荒げていた。
用済み。まさかそれは、小牟の体がもう使い物にならなくなった、という意味ではないだろうな？

「ふふ、異分子よ。慌てる必要はありません」

リバースが俺の心を読んだように返事をした。

酷使され、アクセルの攻撃を受け満身創痍の小牟の体。早く助けて治療しなくてはならない。

そんな俺の焦りを裏切って、リバースは無理やり小牟を立ち上がらせ、両手を突き上げていた。

「貴方たちがいかに無力か、今から教えて差し上げましょう」

リバースの乾いた笑いが木霊する。天をあおぎ、追い詰められてなお奴は俺たちを見下していた。

自分の優位は揺るがない。とばかりに笑みを浮かべ……

「すべては、平穏なる世界のために　――」

直後、まるで糸を切った人形のように、小牟の体は崩れ落ちた

――……

鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＡＮＡＬ　～ソウル　ゲイナー　４～（後書き）

＜次回予告＞

悪夢は繰り返される
彼の目の前で1人、また1人と友人が倒れていく
息はしている。生きている。眠っているだけ？
しかし彼の脳裏には、血の紅で染められた記憶が蘇る
それは過去、今ではない
現在と過去は違う
変わっていく
過去から現在へかけて、色々なものが、さまざまに変わっていく
そして彼は、変わった彼女を見てなにを思う……？

次回、鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＩＮＡＬ　第3話「白銀の堕天、狼の目覚め」

声は言う。すべては、静寂なる世界のためにと……

この話で第2話は終わりです。

鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＩＮＡＬ　～白銀の堕天、狼の目覚め～

奇妙な既視感（デジャヴ）が、俺を静かに苛んでいた。

なにかがジェネ高で起こっていた。

食堂で聞こえた爆発音。それが異変を裏付けていた。なにかが、ジェネ高で起こっている。疑いようのない事実、にも関わらず、誰も異変に気づいていない。

――ＴＩＭＥ　ＴＯ　ＣＯＭＥ

過去生の中、アルフィミィの誕生パーティーのときに拾った紙切れに書かれていた文句が、廊下を走り、酸欠気味になっている俺の頭をよぎる。

誰も気づかない。

嵐の前の静けさのような。

違うような。

違和感と既視感がない交ぜになった漠然とした不安が、ただただ俺の足を動かしていた。

「ちょ……キョウスケさん、待ってくださいよ！」

「危ないですって！　ねぇ！」

追走するタスクとアラドが叫んでいた。

すれ違う生徒たちから奇異の視線が、俺と追従する２人に向けられる。教員に呼び止められもしたが、振り切って走り抜けた。

目指すは爆発音のした校舎の外だ。
それも、おそらくは校庭の方角……――

――すべては　静寂なる世界のために

奴の声が頭に響いた。頭痛を覚えながらも、俺は下足場で靴を履き変えて、校庭を目指し外に飛び出した。

俺は校庭の入り口の土を蹴って走る。視線の遠い先には、見知った顔が揃っていた。非凡な外見をした人影が４つ、遠目に相対しているのが分かる。

４つの人影の１つは有栖　零児だ。

俺に似た外見と雰囲気を持ち、しかし正反対の性分を持つ男。異世界で冒険を繰り広げてきたという零児が、険しい表情で拳を握っている。

拳の先は、俺の恋人エクセレン・ブロニングに良く似た雰囲気を持つ少女――小牟（シャオムゥ）に向けられていた。

リバースに連れ去られたはずの小牟が視線の先にいる。表情は見えなかったが、腹を押さえて前かがみに立っていた。背中が小刻みに震えているように思えた。

「あ、あれ！　キョウスケさん、あれ、エクセ姐さんじゃないすか！」

タスクの指さした先に俺の恋人エクセレンを見つけた。校庭の土に手をつき腰砕けになり、零児と小牟の方を呆然と眺めていた。

急いで駆け寄る俺たちだが、４つの人影との距離はまだ離れてい

る。
まだ遠い。小牟や零児が口を動かしていたが、なにを言っているのか分からなかった。零児、小牟、エクセレン……遠目に映った残る1つの人影に驚きを覚える。
「アクセル……？」
今朝方、俺が見舞ったはずのアクセルが小牟と対峙していた。悪友が、よく俺に絡む際に見せる拳法の構えを取り、右手を突き出していた。
察するに、アクセルが突きを放った直後のようだ。
「すべては、平穏なる世界のために……」
小牟の声が聞こえる程度に近づいた、そのとき。
まだ遠目だが、糸が切れた人形のように、小さな小牟の体が崩れ落ちるのを見たのだった。

鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＩＮＡＬ　～白銀の堕天、狼の目覚め～

倒れる小牟。なにが起こっている？　それが俺の第一印象だった。
零児が小牟に駆け寄り、小さな肩を抱き起す。彼女の口元や首筋に手を運び、すぐに深く息を吐き出した。心なしか表情から険しさが減ったように思える。

「零児！」
「キョウスケ？　お前もジェネ高に来ていたのか」
零児が俺の声に反応した。
「零児、それはこちらのセリフだぞ。なぜ、お前がジェネ高にいる？　それに小牟や病院で寝ていたはずのアクセルまで……そのうえエクセレンも一緒にいる……なにが起こっているんだ？」
構えを解くアクセル、腰を抜かしたままへたり込んでいるエクセレンと目を移し、最後に零児の抱く小牟を見る。
息はしている。目を瞑っている小牟だが、表情は安らかな寝顔には程遠く、荒い息をしていて酷く憔悴している印象を受けた。
「待ってくれ、俺もすべてを把握しているわけじゃない」
零児が言った。
「お前が家を出て行った後の事だ。リバースが念話で挑発してきた。ジェネ高に来い、俺がいかに無力か教えてやる、とな」
「では、それでジェネ高に……？」
「ああ。苦戦をしたが、ファントムとアクセルの助力のおかげで、リバースから小牟を取り返すことができた」
小牟を優しく抱いたまま零児が答えた。
零児と小牟は「物質界」という異世界からエリアに来た異邦者だ。
零児は小牟とコンビを組み、「森羅」という組織でエージェントとして活躍していたと聞く。零児にとって小牟はパートナー、もしくはそれ以上の　――　とにかく、リバースに憑依された彼女の体を

取り戻すことが、零児の大きな目的だったことには違いない。
小牟は憔悴しているが五体満足だ。零児はやり遂げたのだと、すぐに理解できた。

「やったな」
「ああ……しかし、問題は残っている」
「その通りだ」

アクセルが話に割って入ってきた。

「久しぶりだな、ベーオウルフ……いや、エリアではベーちゃんと呼ぶべきか？」
「……アクセル？」

アクセルの呼びかけに、俺が感じていた違和感と既視感がさらに強くなる。エリア……だけでなく、エリアの住民に感じていたそれだ。
原因は分かり切っているから言及はしない。

「お前は……本当にアクセルか……？」

しかしアクセルの話し方は、俺がタスクやアラド、ジェネ高の面々に感じていたそれとは少し違っていた。
まるで人が変わったような。
そんな印象をアクセルに受ける。

「一度、リバースに体を使われた影響だろう。思い出したのさ。過去における俺と貴様の関係性を、俺の成してきたこともすべて。思い出す……奇妙な感覚だ。まるで生まれ変わったような気分だ、これがな」

「……本当なのか？」
「おそらく、アクセルの言っていることは事実だ」
零児が付けくわえる。
「俺たちがアクセルを病院に運んだとき、彼からは魂の波長が感じられなかった。リバースの言葉を借りるなら、あのときのアクセルは『魂を回収された』状態だった。だが、今は違う。アクセルからは、以前より強い魂の力を感じることができる」
「……どうやったんだ？」
「さぁな？　俺には見当もつかない」
アクセルの目覚めは、零児には説明できない超常現象ということだろうか？　俺が疑問の視線をアクセルに向けると、彼は肩をすかしておどけて見せた。
「オレっち頭わりぃからよぉ、見当もつかないぜ、これが……なんてな。方法や手段はこの際どうでもいいだろう。深く訊かれても、俺にも分からんし」
「妙に適当なのは、俺の悪友アクセルのままだな」
「ほっとけ、これがな」
口癖の語尾をつけ悪戯に微笑むアクセルは、確かに俺の知るエリアの悪友アクセル・アルマーだった。しかし直後　――
「それより、今はリバースの居場所だ」
――冷静に、小牟に憑りついていたはずのリバースの存在を示唆するアクセル。俺の知る悪友とは違う、情報を分析する知的さが、今のアクセルからは感じられた。

アクセルの言うことは正しい。
零児が小牟の体を取り戻したのなら、憑りついていたはずのリバースは何処にいる？　俺も、零児もアクセルも周囲を警戒した。無暗に広い校庭に、俺たち以外の人影はない。俺に付いてきたタスクとアラド、そして地面に座っているエクセレンの他には、人型ロボットの頭部らしきものが転がっているだけ。

「エクセレン、お前は大丈夫か？」
「うん。でも腰が抜けちゃって……立てそうにないの。ねえキョウスケ、お姫様抱っこして？」

もう慣れたエクセレンの悪ふざけ。彼女は問題なさそうだ。

「ああ。後でな」
「え？　い、いいの……？」
「ああ」
「でも、そ、それはそれで恥ずかしいというか、なんというか……」

ごにょごにょと呟くので語尾の方の言葉は聞き取れなかったが、まぁ、いい。エクセレンは問題なさそうだ。
タスクとアラドの2人は、俺に付いてきたは良いが状況を理解できていないようで、ぽかんと棒立ちで俺たちを見ていた。普通はそうだろう。2人とも特に問題はないように思える。
もう一度エクセレンに目をやる。なぜか頬を染めて照れていた。
無問題（モーマンタイ）。

「リバースがあのまま逃げ帰るとは思えないが……」

零児が言った。

「最後の言葉は、逃げ際の捨て台詞にしては攻撃的すぎる」
「では、奴はなにか狙っていると？」
「こちらの隙を窺っている……そう考えるのが妥当だろう、これがな」

アクセルの推測と俺の意見が符合した。
相手は、過去生でベーオウルフを俺の中に封印したあのリバースだ。それも武力による封印ではなく、機をうかがって、ベーオウルフが弱ったところを狙ってくる狡猾な相手。
策もなく、ただ零児をジェネ高に呼んだりするとは考えにくい。
周囲を警戒する。が、霊感のある零児ですら感じ取れないものを、俺が感じ取れるはずもなく、

『――――ミ――――スタ……』
「む……なんだ？」

擦れた電子音声が耳に届いただけだった。
俺たちが集まっている場所から１０ｍ程離れた場所に、バスケットボールの倍ほどの大きさをした黒い金属の塊が転がっていた。まるで打ち首にされた人の頭部のような……いや、金属製の人の頭など存在するはずがない。
物体は、俺が過去生の中で見た「ゲシュペンストシリーズ」と呼ばれる二足歩行型ロボットの頭部だった。防護カバーが砕け、剥き出しなった双眸を明滅させてゲシュペンストの頭部が喋る。

『ミスタ……気を付けろ……』
「ファントム！　良かった、生きていたか」

頭部の声に零児が反応する。
頭だけになったロボットの名前はファントムと言うらしい。零児

がファントムの元に駆け寄って行き、俺とアクセルは彼の後に続いた。
表面装甲に無数の傷を負い、熱も持っていそうなファントムの頭部を零児は躊躇せず抱き起す。
『手も足も……出ないが、意識は残っている……体もジェネレーターも無くなったのにな……不思議な話だ……』
意識はあっても朦朧としているのか、ファントムの電子音声に元気は感じられない。
『ミスタ……彼女は……？』
「ああ。やったよファントム。小牟はリバースから取り戻せたよ」
零児は地面に寝かせた小牟を指さして答えた。
ファントム……いや「ゲシュペンストシリーズ」は、過去生で見た限りでは、人が乗り込んで操縦するタイプのロボットだ。無人機ではなく、ＰＴという種類に分類されていた。
サイズは約２０ｍ程……ファントムの全高は頭部から推測しても１０ｍを超えることはなさそうだ。さらに頭だけで零児と会話している。
短いやり取りだが、おそらく俺が知らない間に零児とファントムは、小牟の体を使ったリバースと戦っていたのだろう。
俺が食堂で聞いた爆発音も、きっとそのときの……
「小牟は無事だ。すべてお前が体を張ってくれたおかげだ。全てが終わったら、必ずお前の体も元通りにしてやるからな」
『……ち、がう……』
「なに？」

ファントムは途切れ途切れの音声で、零児の言葉を否定していた。
彼女が小牟のことではないのなら、この場に残っている女性はあと1人しかいない。
エクセレンは腰を抜かしたまま地面に座り込んだままだ。頬を桃色に染めて、いやんいやん、と首を振っていたが、どうせチープな昼ドラが脳内で展開されていたりするのだろう。
彼女は特に問題なさそうだ。
タスクとアラドはというと、俺たちを眺めながら2人で言葉を交わしていた。状況に付いてこれないのだろう。
俺はファントムの方に視線を戻した。

『エクセ……レン……』

ファントムが電子音声を捻りだす。

『おい……ベーオウルフ……このクソッタレの狼野郎……』
「なんだ？　俺のことか？」

言葉の矛先がなぜか俺に向けられた。
ファントムが俺のことをベーオウルフと呼んだ理由は分からない。しかし彼の話し方が、エクセレンの持っていた下品な英語を話す黒いバイクに似ているように思えた。

『いいか……彼女の傍を……はな、れるな……』

次第にファントムの声は弱くなり、途切れた。

「おい、ファントム！　しっかりしろ！」
「止めろ、無暗に揺らすんじゃない。見るからに傷は深い。が、修理する設備がない以上、俺たちにできるのは天に祈ることだけだ、

これがな」

声の途絶えたファントム。彼を刺激する零児をアクセルが止めていた。

彼らがファントムの心配している姿を余所に、俺はただそれをボンヤリと眺めながら、別のことに考えを巡らせていた。

ファントムが言っていた。

エクセレンから離れるな、と。

なぜ、エクセレンはジェネ高の、それも校庭にいるのか？　ただ登校しただけ。それなら普通は校舎の教室の中にいるはずだ。彼女が校庭で腰を抜かして動けなくなっていることを説明できない。

なにか見たのだ。もしくは体験したのだ。

それは、おそらく零児たちとリバースの戦いに間違いないだろう。リバースの使う念動力に、日常生活でお目にかかることはまずありえない。ファントムが頭部だけにされるような戦いだったのなら、なおさらビックリして腰を抜かしても不思議じゃあない。

だが妙だ。なにか引っかかる。

……そうだ。

――なぜ、リバースは零児の前に姿を現した

あと2日でエリアは終わる。

破界と再世だ。それに巻き込まれて俺たちは死ぬ……そうさ、リバースは放置してもよかったはずだ。

わざわざ、零児の前に姿を曝さなくも良かったはずだ。現に小牟の体からリバースは追い出されたようだった。

……だが妙じゃないか？

あのリバースが意味もなく危険な行動に出るなんて……変じゃな

いか？　考えば考えるほど、安心できる結論から遠ざかっていく。
額や手に脂汗がにじんできたいた。
　これは……あくまで推測なのだが、なにか必要性があったのかもしれない。あるいはリバースにとってのメリットが　――――

「きゃっ」
「ッ！？　エクセレン！！」

　エクセレンの小さな悲鳴に、俺は投げ出されたコマのように振り返る。
　彼女はいた。同じ場所に前のめりに倒れている。

「エクセレン！」

　俺はエクセレンの元へと駆けた。
　遠目にも彼女に外傷はなさそうで、ただ立ち上がろうとして転倒しただけのようにも見える。それなら、いい。ただの取り越し苦労ならそれでいい。
　だが俺の頭にべったり張り付いた不安は、彼女の顔を見るまでは払拭できそうになかった。

――　……邪魔するか

　頭痛と共にベーオウルフの声が響いた。
　その直後、全身に強い衝撃。巨大な手で全身を叩かれたと言えばいいのか。まるで見えない壁に全速力で突撃してしまった衝撃に、俺は弾かれ、膝をついた。
　零児とアクセルが俺の名を呼び近寄ってくるが、それより早く立

ち上がった。

「っぅ……エクセレン！」

「ふふ、なぁにぃ、キョウスケ」

既にエクセレンは立っていた。

普段のようにお茶らけた口調で応えてくる。声もエクセレンの声だ。……しかし、違和感が残った。大きなしこりのような違和感だ。

エクセレンの目元には、紅い水玉のタトゥーが浮かび上がっていた。

まさか……まさか……！

「エクセレン！　エクセレン、お前だな！　頼む、返事をしろ！」

「ふふ、うるさいですよ。少し黙ってください、ベーオウルフ」

彼女の返事が、疑念を確信へと変えた。彼女の声で話しているのは、彼女ではなかった。

「リバァース！　貴様！」

零児の咆哮が響き、

「異分子よ、言ったでしょう。私の目的はすでに達せられているも同然、とね」

リバースに操られたエクセレンは、妖艶な笑みを浮かべていた

――……

1996

鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＩＮＡＬ　～白銀の堕天、狼の目覚め　２～

俺は彼女の笑顔が好きだった。

太陽に明るく、屈託のない彼女の笑み。周囲に笑顔を振りまき、周りも巻き込んで笑わせてしまう彼女は、俺たちにとってまさにムードメーカーと言っていい。

俺はどちらかというとポーカーフェイスというか、感情を表に出すのが苦手なタイプだったので、心のどこかで彼女のようになりたいと思っていたのかもしれない。

俺は、そんな彼女の笑顔が好きだった……。

彼女は今も笑っている。

ただし目元に紅い水玉のタトゥーが浮かび上がっている。笑顔の質がいつもと違っていたのだ。

彼女の笑顔からいつもの温かさが感じられない。

俺は地面に足を突いたまま、俺は恐る恐る彼女に尋ねた。

「っぅ……エクセレン！」

「ふふ、なぁにぃ、キョウスケ」

彼女の顔、彼女の声……しかし目の前の彼女は、エクセレン・ブロウニングではなかった。

エクセレンの体はリバースに乗っ取られていたのだ……。

――すべては　悲劇のない　静寂なる　世界のために

体の奥底で奴が蠢くのを、俺は確かに感じていた……

●

ジェネ高、校庭。

「言ったでしょう？　私の目的は既に達せられているも同然、とね」

エクセレンの声で、リバースが俺たちに向かって言った。

校庭には俺　――　キョウスケ・ナンブ、有栖　零児、アクセル・アルマーがおり、俺が連れてきた後輩のタスクとアラドもいた。無残に頭部だけになったゲシュペンスト・ファントムは既に沈黙し、同じく気絶している小牟も地面に寝かされている。

広い校庭の一か所に６人と１機が集結していて、その内の実に１０の瞳がエクセレン・ブロウニングに注がれていた。

「……目的は初めからエクセレンだったということか？」

零児が呟いた。

「その通りです。異分子有栖　零児、貴方がここに来た時点で、既に私の目的は達成されていた。この体　――　エクセレン・ブロウニングを、貴方はここまで運んできてくれた。私の安い挑発に乗って、ね」

「くっ……！」

苦い表情を見せる零児。

「ふふ、悔しいのですか？　なぜ悔しがるのです？　貴方の目的だった、私の以前の体はあそこにあるではありませんか」

リバースが横たわる小牟を指さして言った。

零児の目的はリバースからの小牟奪還だった。奴の言う通り、零児の目的は達成されたとも言える。だが行きがけの駄賃とばかりにリバースはエクセレンの体を乗っ取った。

それはさながら隠し持っていた手札でポーカーの役を完成させ、勝利を気取るかの如き行為にさ俺にはえ思えた。

リバース……サマ師が、やってくれる。

「いつも裏でコソコソと。イカサマはばれぬようにするものだ。それを自分でばらすとは……ノーゲーム、いや、罰金を支払ってもらうぞ」

「ふふ、ベーオウルフの憑代……たしかキョウスケ・ナンブと言いましたか」

リバースが言う。

「貴方はエリアの秘密を知らず、ただただ平和に過ごすべきでした。なにも知る必要はない。喩えるとすれば、まるで貴方は時限爆弾のようなもの。エリアの日常に貴方の中の危険物は必要ないのです。体の中の爆弾を起爆するそのときまで、貴方は平穏を享受し、この体との愛を育んでいればそれで良かった。

……ふぅ、まったく、それがエリアにおける貴方の使命だったと言うのに」

「お生憎だな……爆弾持ちなぞ俺の趣味ではない……ッ」

リバースを認める訳にはいかない。俺は頭痛を覚えながら、奴が操るエクセレンの体を睨みつけた。目元の水玉タトゥー以外はいつものエクセレンに見える。

リバースは得体が知れない。

エクセレンになにかされる前に、彼女の体を取り戻さなければならない……！

――破壊せよ

だが声が頭に響く。ガンガンとハンマーで頭をブツような痛みが襲ってくる。俺はたまらず頭を押さえ、膝をついていた。

「ぐ、ぅ……！」

「キョウスケ、大丈夫か？」心配してくれる零児。

「戦えないのなら退がっていろ、ベーオウルフ」

対照的にアクセルは冷たく俺に言い放った。

拳を鳴らしながら、視線をエクセレンに向けたまま前進していく。

「俺は過去を清算するためにここにいる。かつてあの女を奪い貴様を変えたのが俺ならば……この世界で彼女を助けるのも俺に課せられた役目だ、これがな」

「アクセル……ぐぅ！」

い、痛い。頭が割れそうだ。まるで俺の中の奴が頭蓋骨を中から叩き割り、飛び出そうとしているような。そんな痛み。

とてもじゃないが戦えない。それ以前に動けない。

「エクセレンをここに連れてきたのは俺だ。彼女は俺が責任を持って取り返す」

「零児……」

零児が言い、彼もリバースに向かって行く。

異世界を渡り歩いた猛者の零児と、蒼髭流格闘術免許皆伝のアクセルが、リバースに操られたエクセレンと睨み合う。

俺は戦いに詳しくない。だが2人が格闘技を使うことは見ていたので知っている。打撃でリバースをエクセレンから引き剥がすことができるのか……分からないが、自分が動けない以上は2人に期待するしかなかった。

「ふふ」

リバースが小さく笑い声を漏らした。

「冗談ではありません。貴方たちの相手をしている暇はないのです……オータムが傍にいない今、ここに長居すれば私の存在そのものも危ういのでね」

「なんだと、どういう意味だ?」

零児が訊き返した。

リバースはあざ笑うように答える。

「異分子よ。すべて貴方が悪いのです。貴方たちが来なければ、ベーオウルフの目覚めが早まることもなかった。キョウスケ・ナンブが過去生を知ることもなかった」

事実だ。零児たちに出会わなければ、俺がリバースやベーオウルフの存在に気づくことはなかっただろう。

「今だから言いますが、私の認識操作は一度解けると二度と使えないのですよ。破界と再世で蘇るまではね。おかげで、私はキョウスケ・ナンブの行動を無意識下で促すことができなくなりました」

つい先ほど俺が食堂で聞いた爆発音。

リバースと零児たちの戦いで生じたものだ。しかし食堂にいた俺以外の面々がその音に気付く様子はなかった。リバースの認識操作で気づけなかったのだと思われる。

リバースの存在に気づいていなければ、認識操作の影響で、俺にも見えるべきもの聞こえるべきものが分からなかったに違いない。正直、ゾッとする。

知らず知らずのうちに、数えきれぬほど気づけなかったことがあったのだ。きっとこの世界（エリア）には。

「破界と再世にもちょっとした工程があるのです。それは認識操作が効いていれば、なんの問題もなく終了する程度のもの。

異分子よ。貴方がすべての原因です。

貴方のせいで、工程を完了させるため、わざわざ私が動く羽目になったのですから」

工程……？

ベーオウルフの破界に準備が必要だとでも言うのだろうか？

俺が過去生の中で見た破界は、突如発動し、オータムの世界「惑星エリア」を消し飛ばしていた。

理不尽で圧倒的な力、それが破界だろう。

下準備を行うことは、巨大な力を扱うための絶対条件なのかもしれない。

――破界せよ　すべてを

頭の中で奴の声が聞こえてくる……駄目だ。この声に耳を傾けては。

ベーオウルフの囁きを例えるなら、一度でも足を踏み入れれば抜け出せない底なし沼のようなもの。

かつて奴の声に飲まれ、過去生で俺は取り返しのつかないことをしてしまった。タスクやアラド、多くの仲間たちを皆殺しにした悪夢。絶対に2度と繰り返してはいけない……！

「良く聞きなさい、キョウスケ・ナンブ」

耳を押さえる俺に向かってリバースが言った。

「この体を取り返したければ、明日の晩　――　２４時に例の公園まで来なさい」

「こ、公園だと……？」

リバースが言うのは、住宅街の中にポツリと佇むあの公園のことか？

人気がまったくなく、子ども連れの母親の集合場所になりそうなのに、一切誰も近づかないあの妙な公園。俺と零児、そしてオータムが出会った場所だ。

リバースが続ける。

「特異点。それこそ、破界と再世に必要な唯一の工程。あの場でなければ、破界と再世は行えず、いずれエリアは歪みにより崩壊して

しまうでしょう」
「……ペラペラと……良いのか、そんなことを俺に教えても？」
リバースの言葉が確かなら、あの公園は儀式場のようなものだということか。
なら俺が……ベーオウルフが、あの公園に近づかなければエリアの破界は起こらない。
そういうことにならないか？
「ふふ、妙な考えはよしなさい。なんのために、私がこの体を手に入れたと思っているのです？」
「くっ……！」
「貴方のこの女性は見捨てられない。結局、貴方は来るしかないのですよ、特異点にね」
「ならここで倒すまでだ、これがな！」
アクセルが地面を蹴ってリバースに跳びかかった。右手には青い闘気が燃えて見える。あれは練った闘気を拳に込めて威力を飛躍的に上昇させる、俺にとっては見慣れたアクセルの得意技だ。
「玄武剛弾（げんぶごうだん）！」
青く燃える右手を槍のように鋭く突きだすアクセル。
しかしそれはエクセレンを包む不可視の壁 —— 念動フィールドによって阻まれ、弾かれた。
アクセルが舌打ちし、リバースは口元を歪める。
「不意もつかず、そんなものが通用するとでも？」
念動力……過去生でベーオウルフが使用した不可視の攻撃力だ。

昨日の公園での一件から、リバースも同様の力を持っていても不思議ではない。
　不意にエクセレンの足が地面から離れた。見えない糸で釣り上げられるみたいに、彼女の体は上昇していく。リバースが念動力でエクセレンの体を浮かせていると考えるのが妥当だろう。

「教えてあげましょう。貴方たちがいかに無力かを。悲劇を避けるためには、忘却と永劫の平穏が必要だということを ――― キョウスケ・ナンブ、貴方は思い知るといい」
「ぐぅ……な、なにをするつもりだ……？」

　エクセレンを見上げ、頭痛に耐えながら俺は訊いた。
　するとリバースは、こうするのですよ、と指を鳴らして答えた。
　パチン、と小気味のいい音が聞こえた。
　それが契機だった。

「う……！」「あぅ……！」

　突然、俺が連れてきた後輩のタスクとアラドが苦しみだしたのだ。
　息が荒い。２人とも首を押さえて喘鳴が強くなる。呼吸苦からなのか、顔はくしゃくしゃに歪んでいる。

「キョ……スケ……さん」「たすけ……て」
「お……お前たち……」
「これは……沢山の魂がリバースに集まっていく……！　まさか『魂を回収』するのか！？」

　零児が大声で叫んでいた。
　異常事態がタスクたちに起こっている。それだけは理解できたが俺は動けない。強烈な頭痛とベーオウルフの声が邪魔で動けない。

――　太極の涙を　ぬぐえ　それが我の使命

五月蠅い！　黙れ！　動けない。俺は動けない。
動けない俺の前で、タスクとアラドが白目を剥いて、崩れ落ちる。
地面とぶつかり、鈍い音が俺の鼓膜を刺激する。

「あ……」

奴の声が聞こえる。

――　破界せよ　すべてを　悲劇を生み出す者を　すべて　破壊せよ

「あぁ……」

奴の声。既視感（デジャヴ）。フラッシュバックする風景。
戦場になり焼け崩れる街……瓦礫……それを掘り起こす俺。
出てきたのは愛した女の手首……彼女が死んだという事実……絶叫。
憎しみ……怒り……絶望……自暴自棄。
そして紅く染まる俺の眼前。
血の海に沈んでいたのは、首のなくなったタスクとアラド　――

――　すべては　静寂なる　世界のために

「ウワアアァァ　――――――ッ！！」

2人が倒れていく様子がスローモーションに見える。
同時になにかが俺の中で弾けた。
体が引き裂かれるような痛みと浮遊感が俺を襲う。

体からなにかが抜けるような錯覚を味わった後、俺は立ち上がっていた。
俺の視界の中で、俺は立ち上がり呆けている。

目元には紅い水玉タトゥーが浮かび上がっていた。

「孤独の世界で絶望なさい。そして救いを私に求めるのです」

リバースの声だけがやけに遠くに聞こえ、エクセレンの姿は空中から消えていくのだった。

鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＩＮＡＬ　ＥＮＤ　１　～Ｒ－Ｒｅｖｅｎｇｅｒ～（前書き）

＜注意事項＞

エンディングその１　鬱注意です。

2008

鋼鉄の駄狼R　FINAL　END　1　～R－Revenger～

いつもいつでも、それは唐突に訪れる。

アポも取らずに押しかけて、喉元にギラつくナイフを押し付けてくる。

しかしナイフが俺の喉に突き立てられることは、まぁまずない。

俺は答えざるを得ないからだ。選択せざるを得ないからだ。

過去生の中でもそうだった……それは　――　人生の分岐点というものは、どうしてこうも、いつも突然に訪れるのだろうか？

？　抗う

？　受け入れる

分岐点が俺に付きつけたナイフは2種類。

俺は選ばなければならなかった。

だがそれは唐突すぎた。

俺の目の前で倒れる後輩2人。リバースに取りつかれた俺の恋人。

頭の中で獰猛に咆哮する狼。

いきなりすぎた。突然すぎた。状況が俺に考える間を与えなかった……。

……タイムアップ。

そうして、分岐点の握り締めたナイフは俺の喉元に突き立てられたのだった……　――

ジェネ高の校庭を静寂が支配していた。

人はいる。だが倒れている。そして動かない……立っているのは俺――キョウスケ・ナンブ1人だけだった。

その様子を、過去生のときのように俺は少し高い所から見下ろしている。

既にリバースに憑依されたエクセレンの姿は見えない。

校庭の一角に佇む俺の周りには5つの人影が横たわっていた。

うち2つは俺の後輩であるタスク・シングウジとアラド・バランガ……息はしているが、ぜいぜいと器官が狭窄したような呼吸で表情は苦痛に歪み、ピクリとも動かない。

1つは俺に良く似た異邦者――有栖(ありす)零児(れいじ)……彼は全身をずたずたに引き裂かれ、圧し折られ、茶色いグラウンドに紅い水たまりを作っていた。息をしている気配はない。指先一つ動かない……。

もう1つは零児の相方――小牟(シャオムウ)……横たえられていた彼女は綺麗なものだ。しかし息はしていない。今の俺になら分かるが、彼女は既に死んでいた。念で脳を栄養する大血管を切断されたのだ。閉じた瞳をこじ開けて見れば、きっと瞳孔が散大し、死んだ魚の目をしていることだろう。

最後の1つは俺の悪友――アクセル・アルマー……彼はまだ生きていた。しかし左腕がない。つい先ほどまで左肩だった部分からおびただしい量の血液が流出している……素人目に見てももう助

からない……そんな出血だった。
すべて俺がやった……俺の中の化け物 ――― ベーオウルフがやったことだった……。

――― なんという……ことだ……！

俺の意識は、ベーオウルフの目覚めと共に体の外へと追いやられていた。体の外に意識があるから、俺の全体像も良く見える。目元には紅い水玉のタトゥーが浮かぶ上がっていた。
止められなかった……奴の目覚めを、そして虐殺を。止めろと願おうと、いくら命令しようとベーオウルフは止まらず、立ち向かってきた零児とアクセルを念動力で嬲った。
結果は血の海だ。
唯一生きているアクセルも地面に突っ伏したまま動かない。
いや渾身の力を振り絞ったのか、首を持ち上げ、俺の体を見上げてきた。

「……すまん……ベーちゃん……」

それが俺の悪友の最後の言葉だった。
力なく首を下ろしたアクセルが動くことは二度となかった。
アクセルはリバースに体を乗っ取られ、過去生での罪を思い出したと言っていた。それを償うために目覚め、俺たちの所に戻ってきた。
それなのに……結果はこれだ……

――― ……いっそ、なにも思い出さなければ楽だったのに……

アクセルも、俺も……。

しばらくして、ベーオウルフはゆっくり歩き出した。

ぴちゃりとアクセルから流れ出た血だまりを踏み越え、俺の体は校舎の傍を通り、郊外を目指す。俺の意識は体に縫い付けられているのか、引きずられるようにして、仲間たちの元を去らざるを得なくなった。

俺の体が校舎の傍を通り過ぎる。

時刻は昼。ちょうど昼休みで、学生たちは昼食を交えて歓談しているはずの時間帯であるのに、笑い声はおろか人が動いている気配も感じられなかった。窓ガラスから校舎内を覗き込むと、タスクたちと同じように荒い息をした生徒たちが倒れていた。

『――　まさか「魂を回収」するのか　――』

零児の言葉が思い出された。

先日、アクセルが意識不明になった時にも、零児はアクセルに「魂の波長」が感じられない、と言っていた。

エリアはリバースが作った世界だ。

無理やりに変質させて作られたエリアは、時間と共に歪みが生じ、放っておけば自壊する。それを予防するため、リバースは定期的にベーオウルフの力でエリアを「破界」し、自身の力で「再世」させている。

過去生での「破界」を見た限りでは、発動すれば俺たちの肉体ごとエリアは一度消滅するだろう。つまり、俺たちは死ぬ。

しかし「再世」で再びエリアに再誕することになる。同じ魂を持ち、記憶をリセットされた同一人物として……「破界」と「再世」というサイクルの中で、俺たちはもう既に何千回と蘇っているのだ。

そしてリバースが俺たちを再生させるためには、俺たちの魂が必

要になってくる。
……つまり、リバースはエリアの住民の魂を自在に回収できるのだ。
本来は「破界」の際に行う「魂の回収」を、前倒しで行ったのだ。
俺に対する当てつけなのか、それともベーオウルフに魂を消滅させられるのを防ぐためなのかは分からない。
だが人が動かなくなったエリアは静寂に包みこまれていた。
音がなく、誰もいない、そんな風に変わり果てていた。
「すべては、悲劇のない静寂なる世界のために」
ベーオウルフが俺の口でつぶやく。
奴の言う静寂なる世界とは、今、俺の目の前に広がっているのではないだろうか？
誰も喋らない、動かない……なにも感じない。辛いことを悲劇だと感じる人間がいなくなる。感じる者がいなければ悲劇はなくなる。まるで中学生が思いつくような子どもの理屈だ。
それは、自然を破壊する人間も自然の生み出した一部だと忘れ、人間を滅ぼそうとしているような……そんな理屈。
結果的に悲劇がなくなったとしても、ベーオウルフのやり方の過程は酷いほどに悲劇に溢れている。
――許せない……！
対してリバースのやり方も狂っている。
延々に続く世界で、すべてを忘れてただ日常を過ごす世界。世界に疑問を持たず、時が来ればリセットを繰り返される。戦争という

名の大きな悲劇が起こらなければいい、そう考えているのかもしれない。

しかしリバースの行為は、永遠に朽ちることのないブリキの小鳥を鳥籠に入れて愛でているようなもの……進化の対極――無変化の極まった世界……それがエリアだ。

――許せない！　リバースもベーオウルフも！　絶対！

一体、どれだけ繰り返してきた？

一体、どれだけ俺たちを殺し、蘇らせてきた？

こんなことが許されるはずがない。許さない！　絶対にだ！

しかし俺の意志とは裏腹に、俺の意識は体から離れることは出来ずにただ引きずられ、命令しようとも全く体は自由にならない。

「どこだ？　我が半身？　我を囲うこの箱庭を終焉させてやろう」

ベーオウルフはリバースを気配を辿っているのか、ゆっくりとエリア内を徘徊する。

やはり、エリア内で動いている人間は1人もいなかった。「魂を回収」されたということらしい。

――くそ……！　くそ！　くそくそぉ！！

ベーオウルフ、これが奴の目指した世界なのか？

俺はこんな世界を望んでいない。

みんなで楽しく、一緒に平和な毎日を送っていたかっただけだ。

エクセレンの手を握り締め、彼女と過ごしたかっただけだ……

――エクセレン……せめて、お前だけでも……

自由にならない体、しかし俺はそんなことを考えていた……。

翌日、深夜２４時。

リバースの気配を辿ったベーオウルフは例の公園へと辿りついていた。

夜の公園。昼間でエリアが活気に溢れていた時間帯でさえ、痛いほどに静まり返っていた公園だったが、エリアで動く人が俺だけになった今となっては、沈黙になんの違和感も感じられなかった。

誰もいない公園に、俺の体が足を踏み入れる。

「来たぞ、我が半身よ。姿を現すがいい」

「ふふ、待っていましたよ。ベーオウルフ……いえ破界の権化、私の半身」

ベーオウルフの声に応えるようにリバースの声が聞こえ、闇の中から人影が出現した。しかし声はリバースが憑依しているはずのエクセレンのものではなかった。

姿も違う。

見覚えのある青い髪の毛の少女が公園に立っている。

――オータム……エクセレンではない……？

リバースが操って現れた体は、俺にエリアの秘密を教えてくれたオータム・フォーの者だった。リバースに連れ去られた筈のエクセレンの体は、公園内のどこにも見当たらない。

――エクセレン……！　エクセレンはどこだ！？

「ふふ、滑稽ですね、キョウスケ・ナンブ」

リバースがオータムの声で言う。

「私の半身を特異点に連れてきた時点で、もう貴方の役目は終わったというのに。この期に及んでまだ恋人に固執し、諦められない。そこが貴方の良いところでもあり、弱みでもある」

――黙れ！　エクセレンを何処にやった！　吐くんだ、リバース！

俺の思考がリバースには読めるらしく、オータムの口元を歪ませて奴は笑う。

「分かりませんか？　私がオータムの体でここに居る。それが答えですよ」

奴の言葉が耳に届いた途端、俺の意識が重くなる。まるでブラッ

クホールに飲み込まれたような絶望感が、俺の意識に重苦しく圧し掛かってきた。
危惧はしていた。予感はしていた。しかし信じないようにしていた。
リバースがオータムの体で現れたとき、既に予感は確信に変わっていたが、俺はそれを信じたくはなかったのだ。

「彼女の魂は回収し、肉体は廃棄しました。どうせ肉体は『破界』で失われるのです。次のエリアで再び再誕するのでうから、まったく問題はないでしょう？」

現実という名の言葉の凶器が、深々と俺の心に突き刺さる。
エクセレンはいない……もういないんだ。
もし俺の体が自由になっていたなら、膝をつき、声を上げて泣いただろう。あの過去生のように。俺は2度も彼女を失ってしまったのだ――……

……

……

……許さない。
絶対に許さないぞ、リバース！

「話は終いか？」

ベーオウルフが俺の声で訊いた。

「あら？　わざわざ話が終わるの待っていてくれたのですか？　意外と優しい所もあるのですね」
「我とこの体の魂は癒着している。貴様も知っていることだろう、我が半身よ」

憎い。

「我が望むと望まざると関係なく、この体の感情は我の中に流れ込んでくるのだ。
そう。この体の感情はこう言っているぞ」

憎い！

「憎いとな」

殺してやる！

「殺意も抱いているな」

絶対に許さない！　殺してやる！

「そして貴様を許さんそうだ。この部分だけは、我とこの体の意志は一致している。我が半身よ、貴様が太極に還るべきときは来た」
「ふふ、封印され続けてきた貴方に、長い時をかけて力を蓄えた私を倒せるとでも？
私はまだまだ太極の涙を拭い続けなければなりません。
すべては、悲劇のない、平穏なる世界のために」

リバースの憑依するオータムから念の力が開放されるのを感じる。
対するベーオウルフも念動力を発動し、それを打ち消す。

俺の口が三日月のように吊り上る。

「すべては、悲劇のない、静寂なる世界のために」

こうして、エリアの存亡をかけた神と悪魔の戦いが始まった。

だが、もう、どうでもいい……！

俺はすべてを失ったのだから！

平穏な生活も！

友や仲間も！

恋人も！

もはや愛も勇気も正義もありはしない。怒りも悲しみも憎悪もすべて交じり合った。

俺の中に残っているのは、たった１つの純粋で大きな復讐心。

もはや俺はキョウスケ・ナンブなどではない……！

俺はちっぽけで名も無きただのＲｅｖｅｎｇｅｒ（リベンジャー）――もうなにもいらない！　リバースさえ殺せればそれでいい！　絶対に、絶対に殺してやる！

ベーオウルフの放ったオータムの体を弾き飛ばし、その余波で周囲の住宅が跡形もなく吹き飛ぶ。

リバースは念を刃のような形に変え、伸ばし、俺の体を斬る。

俺の右腕が血しぶきで弧を描きながら撥ね飛ばされる。

だが、痛みはない。

俺の目にはもうリバースを宿すオータムの姿しか見えない……感情が爆発し、最後の最後で、俺の口が俺の意のままに動く……

「地獄で俺にわび続けろおおぉぉっ、リバアァァァス――――

2020

――　……

……

……　――　PiPiPiPiピ――

鼓膜を破らんばかり唸りを挙げる目覚まし時計の音に、

「……んん？　もう、朝か……！」

俺は霞む目をこすりながら布団から起き上がった。

木製の天井に雨漏りの跡、隅には子蜘蛛が張った巣が見える。日焼けした畳敷きの居間にせんべい布団を敷いて俺は寝ていた。カーテン越しに朝日が差し込んで来ていて、起きたての目にしみ、轟音を上げる目覚まし時計の主張は正当なものだと理解できた。

俺は目覚ましを止めると、伸びをして、眠気覚ましコーヒーを入れることにした。ヤカンに水を入れ、コンロで火にかける。カップに注ぐのは安物のインスタントだが、豆から煎るなんて贅沢をする金はない。

「ふぅ、朝はやはりブラックに限るな」

2021

一息ついた俺は玄関ドアに設置された投函から競馬新聞を引き抜き、チェックする。やはり一番人気は「レーツェル・ファインシュメッカー」の「トロンベ号」のようだ。

レースの配当を考えただけでうずうずするが、今日は馬の動物園には出かけられない。

なぜなら、金はないし、今日は学校があるからだ。

止めた目覚まし時計を拾うと、短針は8の文字を指していた。正直遅刻ギリギリだ。しかしもう少しゆっくりしたい、と ――

―― ピンポーン

俺の家の呼び鈴が押された。

時刻は8時。……ふぅ、まったく律儀な奴だ。俺なんて放っておいて登校すればいいものを……俺は観念して、愛用の赤いジャケット羽織り玄関のドアを開けた。

「遅いぞ、キョウスケ。遅刻するぞ」

「いつも悪いな零児。だが別に置いて行ってもいいんだぞ？」

玄関には俺に良く似た男 ―― 有栖 零児が立っていた。彼は近所に住む俺の従妹で、不規則な生活の俺を気にかけてよく迎えに来てくれる優等生だ。

「とっころがどっこい！　お人よしの零児には、ナンちゃんを見捨てることはできないのであった！」

零児の寄り添っている金髪の少女がにししと笑いながら言った。

「うるさいぞ、黙れ小牟」
「そうだ。それにウっちゃんは何処にいる？　ウっちゃんは？」
「むぅ、このダブルムッツリめ！　この超絶プリチー美少女小牟ちゃんへの態度がなっておらんぞ！　ワシに接するときは『お嬢様』と執事ように接さんかい！」

玄関口でギャーギャー吼える零児の恋人。
正直、喧しいし近所迷惑だ。俺には零児がなぜこんなチンチクリンと付き合っているのか理解できんが、タデ食う虫も好き好きだ。
追及はしない。

「では、行くか？」
「ああ」
「あ！　ちょっと、ワシを置いて行かんくれい！」

ボロアパートを出て、ジェネ高へ登校する俺たち。
朝の陽ざしは心地よい。たまには早起きするのもいいものだ……
最も、最近は零児のおかげで毎日早起きしているのだが。
これが俺の日常の投稿風景。
まぁ、もっとも平時と同じであれば、もうすぐイベントが起こるに違いないのだが。
そんな俺たちがジェネ高向かって歩いていると、

「くっくっく、ここで会ったが百年め」

赤いモジャモジャヘアーをした男が、通学路の壁に寄り添って笑っていた。妙に悪そうに作り笑いし、俺の方をチラッチラッと視線を送ってくる。

「今日こそ決着をつけようじゃないか、べーちゃん」

慣れ慣れしく俺を呼んでくるのは、俺の幼馴染にして悪友アクセル・アルマーだ。

不良の巣窟「影鏡高校　――（以下略）

とにかく、いつものことなのでスルーする。零児たちも慣れたもので、まるでアクセルが見えないような態度で、俺と歓談しながら一緒に通り過ぎた。

アクセルに背中を向けて数秒で、奴は、

「なーなー、無視はねーじゃんよ。無視は。俺っち泣いちゃうよー、これがな」

「知るか」

どうぞ存分に泣いてください。どうでもいいし。

「ククク、そんな態度をしていられるのも今のうちだけだぜ、べーちゃん」

「なんだと？」

「じゃーん！　なんと、今日は人質がいるんだぜ、これがな！」

アクセルは背後にでも隠していたのか、人質をいう人物を俺の前にさらけ出してきた。　１００円均一で売っていそうなビニールロープで、胴体をグルグル巻きにされた女性だった。

まぁ、当然、アホのアクセルが用意してくる人質なので見覚えがある訳なのだが……

「あーん、キョウスケー。助けに来てくれたのねー、私嬉ピー？」

「……エクセレン」

俺の恋人　――　エクセレン・ブロウニングが体をくねくねさせて喜んでいた。

どうやら、アクセルが俺を逃げないようにエクセレンを捕まえたらしい。しかしよく見ると、彼女へのロープの締め方は緩々だ。なんだか、エクセレンが協力的に捕まったような気がしてならない。

「この女を返して欲しけりゃ、俺と勝負しろ！　でなきゃ、○○○なことや××××なことをしちゃうんだぜ、これがな！」

「いやーん、キョウスケー、助けてー」

エクセレン、とっても棒読みです。本当にありがとうございました。

アクセルもエクセレンも、俺を困らせて状況を楽しんでいるようにしか見えない。別に珍しくもない、俺の日常の1風景だった。

アホは相手すると付けあがるからな。放置するのが本当は得策なのだろうけど、エクセレンになにかあっても気分が悪い。

「分かった分かった、すぐ相手してやるからな。ちょっと待ってろ」

結局、俺はいつものように、アクセルにおびき寄せられてやるのだった　――……

これが俺の日常。

平穏な毎日を、くだらないことをして、仲間やエクセレンと一緒に過ごす。

俺の毎日に非日常なんていらない。

エクセレンや仲間たちと一緒に居られればそれでいい。

今日も、これからも俺たちの生活は続いていくのだ。
しかし気になることが1つあった。
時どき、頭の中で知らない奴の声がする。

――すべては　静寂なる　世界のために……

……まぁ、いいさ。
仲間とエクセレンが傍にいる。
俺はたったこれだけで満足なのだから　――……

ここは高校がなぜか密集する土地『エリア』。
『エリア』には個性豊かな人間が沢山いる。
今日も、楽しく愉快な仲間達がアホな事件を巻き起こす。
次はどんな事件が起こるのだろう……それは誰も知らない

2027

鋼鉄の駄狼Ｒ　ＦＩＮＡＬ　ＥＮＤ　１　～Ｒ－Ｒｅｖｅｎｇｅｒ～（後書き）

スパロボ学院　シリアス編　エンディングその１（ＢＡＤ　ＥＮＤ）です。
これにてシリアス編は一度完結扱いにいたします。
今までご愛読いただきありがとうございました。
ＧＯＯＤ　ＥＮＤにしなかった理由は、活動報告のチラシの裏にでも書きたいと思います。

今後もコメディ編およびしっかりＧＯＯＤ　ＥＮＤを描ける自信が付いたら、シリアス編も少しずつ更新していきます。
よろしくお願いします。

2028

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5261o/

スパロボ学院　～ＯＧだよ、全員集合！～

2011年10月9日00時00分発行